ひとりぼっちのキミに

ターンA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひとりぼっちのキミに

【Ｎコード】
Ｎ０４７４Ｌ

【作者名】
ターンＡ

【あらすじ】
女性のような風貌の天才少年、サクライ・ケースケは、生まれながらに多くのものを搾取された少年だった。
生まれながらに崩壊した家族からの虐待――天才といえど、未成年という肩書きの前には、彼はまだ脆弱な少年に過ぎなかった。彼はそんな屈辱的な半生と、自分を慰めるかのように、より強い力を求める。笑顔も、人間らしい感情も次第に失いながらも。
彼を慕う二人の親友も、まるで眼に入らずに。
そうして求めた力で彼が成すものは、自らの幸せか、それとも過去

への復讐か。

主要人物紹介

この話も割と長くなったので、初めての方が読みやすいように、主なキャラクターの紹介ページでも作ろうと思います。第３部に突入したら、そのうち新キャラクターもここに載せます。

ネタバレにならない程度の自己紹介なので、初めての方もキャラの名前を覚えてやってください。はっきり言って、めちゃくちゃ長い話ですが、基本的に主要人物は４人しかいません。この４人の名前さえ覚えていただければ、この話は読めます。なのであまり気後れせずに読んでくださいね。

・サクライ・ケースケ
身長…１６５センチ（第１部）→１７２センチ（第２部）→１７５センチ（第３部）
体重…５０キロ（第１部）→５２キロ（第２部）→６０キロ（第３部）
生年月日…１０月３１日
血液型…ＡＢ型

本作品の主人公。風貌は女性のようだが、頭脳明晰、運動神経抜群。将棋や麻雀、絵画など、才能は多岐に渡り、行動力も抜群。寡黙で必要以外の時はあまり口を開かないが、内面は感情的で、強い感情を理性で抑え込んでいる。行動力もあるが、時に自己の感情に任せた行動から、余計な重荷を背負ってしまうことが多い。
自分から他人と関わることはまずないが、困っている人には無条件で手を差し伸べる優しさを持つ。そのため周囲の評価は高いのだが、

本人は全く気付いていない。愛犬のリュートにだけ、多少心を許しており、リードなしで散歩ができるほどの信頼関係を構築している。怒りが頂点に達すると、一人称が「僕」から「俺」に変化し、攻撃的な一面が現れる。
恋愛感情にも疎く、女性を異性としてはあまり意識していない。
サッカー部では副主将、背番号１０を背負う。ポジションはボランチ。プレースキッカーも担当する。類稀な俊足とスタミナの持ち主。普段は手足共に左利きだが、字を書く時、箸を持つ時だけは右利きである。野球のスイッチヒッターでもある。

・ヒラヤマ・ユータ
身長…１８５センチ
体重…７８キロ
生年月日…４月１８日
血液型…Ｏ型

サッカー部の主将。世代別日本代表にも選ばれたことのある、大型フォワード。
端正な顔立ちで女性にもてるが、進学校である埼玉高校では、成績は最低ランク。恋愛に関してオープンで、１週間彼女がいなかったことがない。基本的に恋愛は長続きしないが、別れた相手と揉めたことはない、フェミニストである。
女好きの印象だが、実際はサッカー馬鹿で、あまり自分のルックスを不必要に脚色しない、女性よりサッカー優先の男。
女性とばかり仲良くしていたため、男子に好かれず、中学まではサッカーチームでずば抜けた実力を持ちながら、孤立していた。そのせいか、当初はクールな性格だったが、ケースケとジュンイチに出会うと、次第に男友達と馬鹿をやる楽しみに目覚め、積極的にボケ

やツッコミを行うようになる。

・エンドウ・ジュンイチ
身長…１８０センチ
体重…７５キロ
生年月日…５月２１日
血液型…Ｂ型

ケースケとサッカー部でダブルボランチを組む、ケースケの一番の理解者。自称「ケースケ研究家」
非常に人懐っこく、賑やかな性格で、誰とでも仲良くなれる特技を持つ。非常に世話焼きな性格で、他人のフォローをよく入れる、割といい奴。
快楽主義者の一面を持ち、面白いことが大好きで、よくケースケをからかっているが、逆にケースケに痛い目にあわされることが多い。
ケースケ、ユータと「３バカトリオ」と呼ばれている。
サッカー部では、攻撃的なケースケとは真逆の、守備専門タイプ。
マンマークに優れ、中盤でボールをむしりとる番犬タイプ。
黙っていれば美少年だが、道化を演じすぎる点と、友達を優先しすぎるせいで、女性からの評価はあまり高くない。
実家は酒屋で、小さい頃から酒を飲んでいる。
成績は、得意科目と苦手科目の差が激しく、世界史は常に満点だが、数学は毎回赤点を取る。結果あまり頭がよくないと思われている。

・マツオカ・シオリ

身長…１５４センチ
体重…３８キロ
生年月日…２月１０日
血液型…Ａ型

本作のヒロイン。吹奏楽部でフルートを担当するが、ピアノとバイオリンも弾くことができる。
ケースケが高校で唯一成績で後塵を拝す人物。しかし彼女自身はケースケの能力を認めており、ケースケを尊敬している。
アイドル以上の可憐な容姿と、優しく女らしい性格で、学校中の男子を虜にするアイドル的存在だが、本人は目立ったことがあまり好きではなく、引っ込み思案な性格。そうやって持ち上げられるのも、内心苦痛に感じている。まだ男性と付き合った経験もなく、免疫もないため、男性からの告白を断り続けている。
普段は大人しいが、頑固な一面もあり、こうと決めたことには一途に努力を重ねる努力家。常に一生懸命何かに取り組む姿に、誰もが力を貸してあげたくなる雰囲気があり、多くの人が彼女を慕っている。
花が好きで、特に竜胆の花が好き。家族想いで、小さな頃から家の家事を担当し、弟や妹の面倒を見ている。ただし味音痴のため、料理を作らせると、大体酷い味付けになってしまう。

第一部序章　１ｓｔ－ｐｅｒｓｏｎ（前書き）

別サイトで投稿したものと、基本的に同じものです。作者も同じです。

批評を求めてここに来ました。作者はこの作品が処女作なので、色々感想を通じて学ばせていただきたいので。

しかし正直、とても長い話です…

第一部序章　1st－person

考えはまるでスローモーションのように、視界の中をゆっくりと流れた後に、また次なる教室の情景へと思いをはせながら消えていく――

さながら僕の思考は、樹液を求めて木から木へ飛び移る蝉のようだっただろう。紙芝居のように、脳内でページがゆっくりめくられて――僕はただ、時間の消化に努めていた。それは穏やかな時間だった。

秋風はまるで、天使の矢が通った軌跡を描く銀色の糸のように、僕の袖を撫でている。小開けの教室の窓から、一枚フィルターを通した、くすんだような日光を入れて、埃をちらちらと光らせていた。

僕は机に頬杖をついて、溜息と疲労が3対1でブレンドされた教室の空気に同調するように、自分の番を待ちながら、瞼にのしかかる重力に抗っていた。

教卓に引っかかりそうなくらい腹の出っ張った小柄な中年教師が、いかにも私は県立高校教師でござい、とばかりに半機械的にプリントを配っている。

ここ、埼玉県川越市にある県立埼玉高校は、8倍という有名大学顔負けの受験倍率、合格者平均偏差値は73、県内のみならず全国有数の進学校で、全国東大合格者輩出者別ランキングで常に全国トップテンに名を挙げ、県立としては7年連続の東大合格者数日本一を記録する、名門中の名門進学校。

そして今、はげ鼠みたいな担任が配っているのは、中間テストの結果用紙。

自分の番が来たのを確認すると、僕は席を立つ。既に僕の前に配られた連中は、お決まりの悲鳴を上げている。中には赤点を取ったのもいるだろう。

「よくやったな」

担任はおざなりのように、僕の用紙を差し出しながらそう言い、軽く微笑んで見せた。僕自身はそれに対して何も変わることはない。黙って用紙を受け取ると、もう結果を知っている結果用紙などは四つ折にしながら踵を返し、席に戻り、またさっきと同じポーズでクラスメイトのリアクションを見つめていた。

慰めあっている女子、もはや笑うしかないという男子。リアクションはさまざま、悲喜こもごも。

池に石を投げれば、泥が舞い上がるように、きっかけがあれば動かざるを得ない。高校生にとってテストなんてのは、そうやって強制的に人を動かす石みたいなものなんだろう。それとも、僕達という池が、波が立ちやすいということだろうか。

クラス一の落ちこぼれは、赤点を7つとったことを公表なんかして、結果用紙を勝訴よろしく振り回していた。それはヤケになっているのか、皆をほっとさせて人気者を気取りたいのか、僕にはわからない。

「退屈そうだな。お相手しようか？」

僕の前に、一人の大柄な男が立っていた。がっちりした肉体に、電話帳にだって突き立ちそうなくらいの八重歯をむき出しにした笑顔、ユーモラスなどんぐり眼に、無造作にワックスで動きを出した、薄く茶色に染まった髪。

男は紳士を気取ったつもりか、胸に右手を当てる。

「……」

僕は返事もしないで、その勝訴男の空騒ぎに目を向けていた。

「参った！　参ったよ」

僕の前にいた男が声を上げた。

「カラみ待ちは俺の方でした。悪かったよ」

それを聞いて僕は男に視線を移して、四つ折りにした結果用紙を彼に差し出した。

「まったくあそこでシカトなんて、お前、ツンデレカフェで働けるぞ」

なんて言いながら、怒ったような顔をして、男は自分の結果用紙を差し出した。僕もそれを受け取り、お互いにそれに目をやる。

「――相変わらず、イチャモンのつけようもないな」

「つける気でいたのか？」

僕がそう言ってやると、男は少し困ったような、僕に呆れたのか、そんな複雑な表情を見せて、掌を上に向け、肩をいからせるジェスチャーをした。

「ったく。そういう台詞、お前だから言えるんだろうけどさ、もうちょっと何か……」

「また数学が赤点か」

「無視かよ！」

男は芸人みたいに声を上げる。ひったくるように、僕の手にある用紙を奪った。

「まあ――想定の範囲内だろ？」

鼻の頭を掻きながら、男は聞き返した。

「今回の科学を落とすのも、予想の範疇だ」

「うん……そう」

そこで男は肩を落とす。どうやらこれが奴の本題だったんだろう。こいつだってはじめから数学は捨てていたはずだ。だからこその落ち込みようだ。

「2つか。毎度毎度懲りないな」

「あぁ……また一週間、ご教授頼むよ」

僕はひとつ溜息をついて、ああ、と返事した。

「でもよ」

男はカメレオンみたいに表情を見事に変えて、僕の後ろに眼をやった。さっきの落ち込みようは、嘘だったのかよ。

「やっぱ今回も、彼女は落とせないか？」

その話題を振られ、僕は体を雑巾みたいにひねって、教室の後ろに目を向ける。

教室の後ろで、一人の少女が数人の女子に羨望の視線を向けられ

ながら絡まれ、困った顔をしている。色の白く、華奢で可憐な少女だった。

「……」

「悪い。チャチャを入れるつもりはないんだ。ただ改めて、あんな美人なのにお前に勝ったってことに感心しただけ」

「――あの子がすごいことは認めるよ」

「ま、この学校じゃあの子とお前の戦いに誰もついていけてないんだ。もう孔明と仲達の知能戦だな」

「またそれか。そんなすごい二人に例えるのはやめろって言っただろ」

こいつは赤点を三つとっているが、それは単に奴の弱点であるに過ぎない。

彼は今回も、日本史、世界史、地理と、三科目は学年トップだった。彼の正体は、相当の歴史マニア、三国志や日本の戦国時代の大フリークで、生まれる時代の遅すぎた歴史家を自称している。そしてこうして時たま僕の前では、こうした故事を例に用いるのを好むのだ。

こいつは三国志などの歴史小説が好きで、中国に留まらず、世界史では右に出る者はいない。高一の世界史のテストで、『三国時代、魏、蜀、呉の三国の創建者を述べよ』という問題を、魏＝曹操孟徳、蜀＝劉備玄徳、呉＝孫権仲謀、と書いて、全てハネられ、「これ、字ですよ！　間違いじゃないでしょう！」と、世界史の教師に抗議に行ったという伝説がある（正確には字で本名を書く場合にはこれは間違いだ。劉備玄徳なら、実際は『劉玄徳』と書くべきだ））。

「でも、恋愛感情はないわけ？」

その質問をされた時、僕は二秒だけ沈黙した後、自分の腕時計を覗き込んだ。

「5、4、3……」

僕は秒針が動くごとに刻を読み上げる。

「ん？」

「2、1……」

――キーンコーンカーンコーン――

「さあ、部活だ」

僕は立ち上がり、机の隣に置いていた自分のスポーツバッグを担ぎ上げ、耳横に逆手でスリングを持ち、背中から吊り下げる形で男に踵を返して背を向け、教室出口へ向かった。

「おい！　待てよ！」

男が声を上げた時、僕は今日、テスト結果で唯一負けた少女と目が合った。僕は敗者の姿を見られたくなくて、ぷいと目を背け、ドア横にあったゴミ箱に、四つ折りの結果用紙を丸めて捨て、教室を出た。

何でこんなに今日はイラついているのか……テストに負けたからじゃないな。あの紙に書いてあった、あのはげ鼠のコメントが気に食わなかったんだろう。

「大変素晴らしい成績ですが、まだ詰めが甘いようです。東大に行ける力を持っています。頑張ってください」

あんなの、結果見せればそこらの主婦だって同じことを書く。二番ってだけで、詰めが甘い、か。大体僕がいつお前に、東大に行く、なんて言った？

2nd－person

僕はさっきの男と共に、サッカー部の部室で着替えを済ませ、グラウンドへ向かう。ユニホームはマリンブルーに、白地でＳＡＩＴＡＭＡと横に書かれた、なんとも日本代表のユニフォームをセンスのない人間が真似たという感じのデザインだ。

校舎の西、体育館の隣に運動部の部室がある。部室の後ろは土手になっていて、部室から正門方面へ行くと、右手に土手を上る階段がある。この学校は河川敷に隣接していて、その河川敷をグラウンドとして学校が一部を国から借りて、ここで野球部やラグビー部は練習をしている。

前はサッカー部もそのうちのひとつであったが、僕達は校門途中のＴ字路、河川敷への階段がある右ではなく、校門方面の左へ。

埼玉高校のシンボルである、巨大な楠の木漏れ日が照らす道を抜け、校門を出る。

校門から外も学校の敷地内だ。２００メートルほど一本道で、その道の左右にグラウンドがある。左のグラウンドはそれだけでひとつだが、右のグラウンドはほぼ同面積ではあるのに、フェンスでそれを二つに区分けしてある。つまりこの学校は、正門が二重になっており、この一本道の先の門を超えると、学校の敷地外となる。

僕達は左のグラウンドへと入る。このグラウンドは、最近の埼玉高校の話題となった。春の大会で、準優勝という成績を残した功績により、グラウンドに芝を張ってくれたのだ。工事と芝の成長を待つため、夏は殆ど右のグラウンドでハンドボール部やテニス部と場所の折り合いをつけながらの練習だった。今日がこのグラウンドのこけら落としだった。

そこには既に一人の人影があった。前屈をして一人で体をほぐしている

「よお、テストはどうだったよ」

男は僕達が来るのを確認すると手を上げて訊いて来た。
この男、身長は１８５センチの長身に均整の取れた筋肉質の体、切れ長の目に無造作な黒髪。肌は燃えるような褐色。
僕は親指で後ろにいた同伴の男をさした。そのジェスチャーで、男は答える。
「こいつは相変わらずさ。俺は科学も落とした」
「マジか？　ジュンが数学以外を落とすなんて珍しいな。じゃあ俺と一緒で三つか」
「そっちは１つ減ったな。お前が３つなんて、いつ以来だ？」
二人が状況説明をしている間に、僕はもうサイドライン外のベンチに自分の荷物を置いたところだった。
「低レベルな会話はそこまでにしろ」
僕はスパイクの紐をしっかり結び直してから、言った。
「気が重いな――また軍曹に怒られるぜ」
僕と同伴した男がそれを言うと、一気に二人は表情を曇らせた。
「あぁ、いつものことだけど慣れないなぁ」
褐色肌の男が切れ長の目をつぶり、天を仰ぐ。
「心配ないさ」
僕はベンチから立ち上がる。
「今日は試合で、これから相手が来る。まさか相手の前で、部員を三角座りさせて怒鳴り散らすわけにもいかないだろう」
「そうか？　あいつならやりかねないぜ？」
大柄の男は首をかしげた。
「あいつだって馬鹿じゃない。ここは進学校だから、他の教師達に、校外の恥をさらすなって言われているさ。僕は今日は怒られることはないと読むね」
僕は大きく伸びをする。他の二人も荷物を置いて僕に近づき、体をほぐしはじめた。
「いや、だけど結局は怒られるんだろ？　だったら早い方がいい」
同伴の男が言った。

「僕が言いたいのは、この試合で大勝ちして機嫌をよくしておけ、ってことさ。それで間が空けば、脳味噌まで筋肉みたいなあいつのことだ。流れで何とかなる」
「ははははっ！」
二人はそれを聞いて、手を叩いて微笑んだ。
「そうか。お前が言うならそうなんだろうな」
同伴の男は僕の横腹を軽く小突いた。
「お前が今日何点取れるかで結果が変わる希望的観測だがな」
僕は褐色肌の男を見た。
「頼むぜ、ユータさん」
同伴した男は、褐色肌の男の肩を小突いた。
5分も経てば部員が集まってくる。だけどどの部員も表情は冴えなかった。それは部員の殆どが、赤点ゼロで今回のテストを乗り切れなかったことを物語っていた。
やれやれ、揃ってああシケた顔してるんじゃ、今日怒られないと読んだのも怪しいな。
普段は赤点を取った連中は、練習前に顧問である鬼軍曹ことイイジマに三角座りさせられて、まるで取調室の尋問みたいに怒鳴り散らされる。我がサッカー部は、野球部と並ぶ赤点常習犯の集まりで、今回も赤点セーフは、僕を含めて5人くらいだろう。僕達はそれが終わるまで、グラウンドのランニングを命じられる。
僕だって高校生にもなって、同じ部活の連中が背中を小さくして、膝抱えて三角座りさせられて怒鳴られているのなんて、見ていてやるせない。それにランニングを命じられても、イイジマのでかい声は僕達にも聞こえるわけで……自分が怒られるのと大して変わらない気分を味わうわけだ。
そういうわけで、僕は連中に協力するつもりではある。
一年生がボールかごを持ってきた。まだ全員集まってないので、僕は時間つぶしにそこからひとつボールを出し、リフティングを始めた。

すると褐色肌の男が、リフティング中の僕に声をかけた。
「試合が終われば、また俺も一週間世話になるぜ」
「世話になるぜ、じゃない」
僕はちらと男の顔を一瞥し、また視線をボールに戻した。
「お前は部長なんだから、出場停止ラインからはせめて脱出しろよ」
「まあまあ、その分副部長がしっかりしてるから、部内はうまくいってるじゃないか」
「……」
この協調性のない僕が、いまやサッカー部の副部長だ。
この埼玉高校の部活動は特殊で、受験に専念するために運動部の部員は大抵2年生の夏、遅くても年末で引退してしまう。5年ほど前までは、学校の方針による顧問の退部勧告に過ぎなかったが、受験を奨励するＰＴＡの賛同を得て、今ではその制度を学校が認めたため、部員達は自分達から部活を辞めるようになった。
だから3年生のいない今や、僕が副部長。この褐色肌の男、ヒラヤマ・ユータが部長。
僕はユータに軽くボールを蹴ってから言う。
「お前のハットトリック、無失点くらいが今日の最低ラインだな」
ユータはそのパスを胸で受け、鮮やかに上げた右足の腹でキープしてみせる。
「で、お前とジュンが中心で守るか」
そういうとユータは、ボールの乗った右足をひょいと上げ、僕と同伴の男にパスを出す。
「うちの自慢のダブルボランチでな」
同伴の男は、浮いた球を左の土踏まずで一度叩いて、左右の足でリフティングを始めた。
僕は背番号１０。ポジションはボランチ。ダブルボランチの布陣を組むこのチームで僕とダブルボランチを組む相棒が、さっきから僕と一緒にいるこいつ、背番号6、エンドウ・ジュンイチ。
やがて部員が集まり、僕達は軽くグラウンドを走り、その後スト

レッチを始めた。

Relegate

顧問のイイジマが現れた時、僕達はストレッチの途中だった。皆は立ち上がり、やがて部員が集まり、僕達は軽くグラウンドを走り、その後ストレッチを始めた。でかい声で挨拶をする。まったく猿芝居だ。

イイジマは集合をかけた。部員の行動は迅速だった。万が一今日怒るのであれば、ここで怠惰な動きをすれば、火に油を注ぐだけだからだ。もう既に僕の読みは部員全員に伝わっており、皆が一致団結して芝居をしていた。

部員達はベンチに座ったイイジマの前に半円型に組み、その中心に部長のユータと副部長の僕が入った。

もう４０代だが、白シャツ短パンをトレードマーク。白シャツは小麦色の肌に映え、短パンからのぞくふくらはぎは、現役の僕達よりも逞しい筋肉をつけている。ぎょろりとしたどんぐり眼に、蛙みたいに両方の頬が膨れている。

イイジマはそのどんぐり眼で部員達の顔をそれぞれ一瞥し、沈黙を決め込んでいた。部員達はそのイイジマの第一声を今か今かと待っていた。まさに部員達にとっては針のムシロだっただろう。

そしてイイジマが重い口を開いた。

「もうすぐ相手が来ると連絡があった。今日は全員を出来れば使う気でいるから、気合入れてけよ」

「はい！」と、部員達は返事をした。僕は笑いをこらえるのに必死だった。皆が各々、ほっとしたような、今までの緊迫した表情が一気に緩んだからだ。

イイジマは短パンの知りポケットから、一枚のメモ用紙を取り出した。

「先発を発表する。まずフォワードはユータと……」

先発は４―４―２の布陣で、僕もジュンイチとのダブルボランチ

で先発だった。
「よし、アップをしておけ。解散」
「うっす！」
その一言で皆踵を返し、サイドラインを超えて芝の生えたグラウンドへ向かおうとする。
「あ、ちょっといいか？」
踵を返しかけた僕を、イイジマが呼び止めた。イイジマは僕を見て手招きしている。僕はベンチに座るイイジマの真正面に立った。
「今日もテストの結果はよかったな」
イイジマは僕を見上げて、上機嫌に笑う。
「いえ、別に」
「まったくお前のおかげでサッカー部の面目は保たれてるよ。お前の成績がなかったら、サッカー部は赤点続出で保護者が問題にして、すぐに廃部だ。お前にはいつも感謝してる」
「……」
そんな話は、僕にはまったく関係ない話だ。別にサッカー部の面目を保つために僕は勉強をしているわけじゃないし、イイジマに来る保護者の文句も僕には関係ない。それとも僕がいるためにサッカー部の練習が減らないことで、部内で確執でも起きてると思っているんだろうか。それも僕自身が決めたことじゃないから、それも関係ない。成績は悪くても、空気を読めと僕に悪い成績を取るように強いるほど、皆馬鹿じゃない。
「用件というのは、それだけですか」
「まあ待て待て、相変わらずだなお前は」
イイジマは右手を広げて見せ、僕を制した。僕はさっさと要件を済ませてしまいたいけれど、イイジマはいつもこういう前置きを好むんだ。何で教師って人種は、自分が生徒だった頃、教師に個別に呼び出される生徒の気持ちを忘れてしまうんだろう。
「うちのチーム状況を考えると、お前、ディフェンダーをやる気はないか？」

「……」

「あれ？　いきなり言ったんで驚くと思ったが……」

イイジマは肩透かしを食らったように首をかしげた。

「いえ、チーム状況を考えれば、予想できないことではありません」

「まったく、頭のいい奴ってのは……」

イイジマは肩をすくめる。

このチームは僕達が入学するまでは、県立の進学校らしく、万年初戦敗退常連の弱小チームだった。それがたった二年で県内予選の対抗馬に出世したのは、全てユータの力による。先月準優勝だった大会では、ユータは６試合１０得点で、ぶっちぎりの得点王だった。

今日はフォワードが二人だけど、イイジマのユータへの信頼度を考えれば、ユータ一人で点を取り、あとの者は守れ、という戦術を考えることは予想できていた。

そして僕の予想の根拠を、イイジマがそっくりそのまま言った。

「３年生が抜けて半年近く経つが、うちにはディフェンダーのリーダーシップを取れる強力な選手がいないんだ。お前は頭もいいし、視野もあるし、いいと思ったんだが」

「……」

僕は黙っていた。と言うか、黙るしかなかった、って感じ。ここで嫌だ、というのは簡単だけど、その根拠をうまく説明できそうになかった。ひどく抽象的だったから。

「先に言っておくが、お前のボランチに不満があるわけじゃないぞ。今じゃお前の後ろからのパスとフリーキックは、ユータへのいいホットラインになっているし、足腰が強いから、フィジカルの強さも持っているしな」

先に言っておくが、って、もう用件言ってるし、なんて心の中で思う。

そう言ってからイイジマは僕の体を一通り見て、少し顔を俯けて笑った。

「まあ贅沢を言えば、お前が浮き球に競り合う度、あと五センチで

も身長があれば、と思うが……そんな女の子みたいな顔じゃ、迫力もないしな」

「……」

そう、僕は身長が１６５センチ、体重は５０キロしかない。

そして、僕はサッカーをはじめたのは、高校に入ってから――僕は初心者だったのだ。

僕は中学時代、野球をやっていた。ポジションはセカンドを守っていた。

しかし僕は、中学は私立のボンボン学校に通っていて、野球部なんて名ばかり、実際はキャッチボールも出来ないような温室育ちの集まりだった。

元々スポーツ向けの体ではなく、ホームランなどの目立ったプレーもなかった僕は、打率は６割を越えていたのに、前にランナーがいれば、いつでも送りバントを命じられた。僕が送りバントをしても、後続が点を取ったことなんて殆どなかった。自分がヒットを打っても、後続が僕を帰してくれたことなんて皆無と言ってもよかった。ひどい時など、１０点差で負けており、この回で一点でも取れなければコールド負けが決まる試合、ワンアウト三塁でスクイズのサインを出された。

そんなストレスのたまる試合が続き、この弱小チームで勝つためには、監督の消極的采配に従っていては駄目だ、と悟り、やがて僕は監督と衝突を繰り返すようになった。

しかし、監督にはそれを生意気だとか自己中心的だとか批判され、僕もコールド負けを免れるだけで満足して、勝つ気のまったくない監督に文句を言った。

それから僕の野球部生活は無残だった。監督造反で当然試合には出させてはもらえない。たまに出してもらえた代打では、当て付けみたいに必ずバントのサインが出た。

そんな中学時代だったので、高校では別のスポーツをすることに決めており、サッカーを選んだ。

僕はチーム唯一の初心者だった。しかし中学時代に野球をやっていたことが、この部でののし上がるチャンスを僕につかませることとなった。

イイジマは野球からサッカーにリクルートする人間に偏見を持っていたのだ。

坊主頭が嫌だとか、女の子にもてないとか、そんな理由で野球を捨てるような浮ついた気持ちではない精神を俺に示せ、とか何とか言われ、僕に命じられたのは、イイジマが赴任してから一度も成功者が出ていない、グラウンド百周だった。

保険の先生まで、僕がぶっ倒れた時のためにスタンバイしていたほどだったが、中学時代は守備範囲の広いセカンド、１００メートルを１１秒台前半で走れる上、試合に出られない分、基礎練習を積む時間は腐るほどあった僕は、初の成功者となり、一年で即レギュラーだったユータとはまた別の意味で、話題のルーキーと呼ばれるようになった。

それから僕はイイジマに目をつけられ、３ヶ月みっちりマンツーマンで技術を磨いた。そして僕はなんと、一年生ではユータ、ジュンイチとともに、一年３人だけのベンチ入り選手に選ばれた。そしてなんと出番をもらった。

足だけは速いので、それで相手を撹乱するだけでいい、と言われていたが、当時は精度のかけらもない僕の上げた球が、ユータに偶然合ってしまった。それをユータは見事に決めて、試合に勝ってしまった。そんな偶然が重なって、イイジマは大会後、僕を当時埼玉高校で一番手薄なボランチに任命した。

それ以降、僕はユータ、ジュンイチからアドバイスをもらったり、世界の有名なボランチプレイヤーの動きを研究したり、二人が貸してくれたビデオを見たり、色々勉強した。ジュンイチが中盤でボールをむしりとる、守備的タイプの選手だったので、それとコンビを組む僕は、自動的にパスを散らす、攻撃タイプの選手となった。

だから僕のサッカーは、ボランチ以外の世界をまったく組み入れ

ていない。僕はボランチ以外のサッカーを知らないのだ。
部活でサッカーをやる機会はあと3ヶ月。しかもチーム状況を考えれば、ボランチに不満がない、というのは建前だろう。ジュンイチ一人でもボランチは出来るのだから、必ずディフェンダー以外では使われなくなるに決まっている。そんな短期間に自分の構築したサッカーを転換させろというのは、僕にとって左遷を言い渡されるようなものだった。
ただ――
こんな感情論をわざわざ説明するのは面倒だった。こんなことを言ったって、はいそうですか、と言うとは思えない。そもそもこう愛想のない僕が愛着だとかこだわりだとか語っても方便だと思われるだろう。
何故こんなすぐ諦めているか、それは僕のボキャブラリーの問題なのか。
――そうじゃないなきっと。
余計なことを考えたくない、その所作がひどく面倒臭い……と思えるのだ。その感情さえ説明は困難だ。説明する気さえ起こらない。誰かにそれをわかってもらうやり方を、僕は知らないし、他人にわからせようとするものでもない。
だから結局今の僕が出来ることなんて、生返事をすることぐらいだろう。
2、3回、はあ、とか、はい、とか言っているうちに、いつの間にか要件は済んでいたらしい。殆どがつまらない社交辞令が織り交ぜられていたような気がするが、もう会話の内容は思い出せない。そもそも聞いていたかも疑問だ。
「じゃあお前もアップして来い」と言われ、一度生返事をした後に踵を返すと、ユータとジュンイチの二人が僕を手招きしている。僕はもう皆がボール回しをしている間をすり抜け、二人の下へ走った。

「待たせたな」
僕は二人に会釈する。
「いえいえ」
ジュンイチは自分の足でキープしていたボールを僕に蹴り出した。
「ヒラヤマくーん」「ユータくーん」
そんな声が所々からした。僕はボールを足の裏で止めながら当たりを見回すと、グラウンド外の金網に、女子高生が鈴なりになって黄色い歓声を上げていた。他校の制服も見えている。それに隠れるように、もう相手チームもベンチに荷物を置いているところだった。
ユータはこのとおりの長身と端正なルックス、そして何より抜群のサッカーセンスから、このとおり校内外問わず多くのファンがいる。一年生で県大会得点王、そして、元々弱小高だった埼玉高校を、県内優勝候補の対抗馬にまでのし上げた原動力でもあるから、雑誌や県内テレビの取材も多い。
「相変わらず、すごい人気だな」
僕はインステップでボールをユータに蹴り出す。
「何言ってんだよ。お前にだってファンはいっぱいいるだろうが」
ユータはそう言いながら、ボールをジュンイチに蹴り出す。同時に歓声が上がる。
よく言うよ、一週間彼女がいなかったことはないってくらいの奴なのに。それとも僕達に気を遣ったのか。大きなお世話だよ、と思う。
「お前、一週間前後輩に告白されたんだろ？　また断ったのか？」
ジュンイチはそう言いながら、僕にボールを強めに蹴った。
「――ああ」
僕は若干逸れたボールを拾い、遠目からふわりとした浮き球を蹴る。
「――っと」

ジュンイチはボールを胸で止める。
「もてるのに、付き合わないなぁお前」
「お前もしかして、フケ専なのか？」
ユータが白い歯を見せている。
「――考えたこともない」
ジュンイチはユータにボールを返す。
「しかし、勇気あるよなその子」
「ああ、夏休み前の『下駄箱事件』以来だからな」
「……」
下駄箱事件――ある後輩が僕の学校の下駄箱にラブレターを入れるという、きわめて古典的な告白方法を試みた。しかし僕の下駄箱は、一番下段にあったので、引き戸を開けて無造作に突っ込む習慣がついていた。勿論中身を見たことなどない。なので僕はラブレターの存在に気づかずに、そのまま一月が経過してしまった。
そして一月くらい経った後、昼休みにその後輩が僕に返事を聞きに来たことで、僕はラブレターの存在をはじめて知った。しかしそれを取りに行った時、中身を気にせず靴を突っ込んでいたため、綺麗な便箋にしたためた筈の手紙は、泥だらけの上、ぐちゃぐちゃになって所々破れていて、とても情報伝達機能を満たす原形を留めていなかった。
それに怒った後輩は、最低だと言って僕の頬を叩き、僕の事を睨みながら泣いていた。昼休みの教室で皆に見られていたため、その話はその日のうちに学校中に広がったのだ。先輩達にも広がって色々世話を焼かれたり、文句を言われたり、醜態をさらした。
「いやぁあれはなかったよなぁ。今思い出しても笑える。天然にも程があるぞ」
ジュンイチはその瞬間を思い出したらしく、本当に可笑しそうにケタケタ笑っている。
「でも俺はあれで、ある意味ケースケの人気が上がったと見るね」
ユータはボールを一度止めながら言った。

「あぁ、あの時女の子に言った台詞だろ」
ジュンイチがそう言うと二人はボール回しをやめ、互いに近付き、僕の前でそのシーンを再現して見せた。ユータが僕で、ジュンイチが後輩のようだ。
「サイテー！　バシッ！」
平手を振るジェスチャーを自画擬音付きで演じるジュンイチ。
「……」
ユータは頬を張られ、首が横を向いた状態で、ジュンイチを見ている。そしてゆっくりと正面を向き、僕を真似ているのか、静かなゆっくりとした口調で言った。
「――軽蔑してくれて構わない。どうしようもない奴だって思ってくれてもいい――だけど、僕がこんな人間であることは、すぐには変えられない。僕は君が貴重な高校時代の時間を浪費して追いかける価値のある人間じゃないんだ。それはまだ、今は変えられない」
そう言った後、ユータはジュンイチの横を通り過ぎ、背中越しで止まって、言った。
「ただ、こんな僕のことを想ってくれたことは、すごく、すごく嬉しかった。それだけは、一人の人間としては、とても嬉しかったよ――ありがとう」
そこで二人は演技を止め「く～っ！」と腹の奥から甲高い声を上げた。
「――何だよその声は」
今まで二人の猿芝居をただ見ていた僕は言った。ジュンイチがこちらを向く。
「いやいや、お前あのまま教室出て行った後、女子も男子もみんな、キャーッ！　とか言ってたんだぜ」
「……」
ユータが軽くはにかんで言った。
「あの時のお前、カッコよすぎたからなぁ。俺はこんなだから、お前と同じこと言っても決まらないだろうからな。とても真似出来な

い」
「……」
何てコメントしていいのかわからない。僕にとってはただ自分の忘れかけた醜態を蒸し返されただけだ。ただこの二人がやると、全てパロディ化して、嫌味に感じないだけまだマシか。付き合いが長くなって、こいつらのこういう僕を茶化したがる癖にも慣れてきた。
「まあとにかく、お前はたまにはあんなドジをした方がいいと思うけどな」
ジュンイチが今度は多少真面目っぽい顔で言った。
「浮いちゃわないようにか？」
「そういうこと」
ジュンイチが僕の顔を、銃の形にした指で差した。
「お前はちょっとスキがなさすぎるよ。イメージが先行し過ぎてる」
「……」
そうだ、そのとおりだ。そんなことは自分だってわかっている。その一例が、さっきのテストの結果用紙。担任のコメントは、まさに僕の幸せを勝手に判断している感が見え見えだった。僕は東大に行くなんて、一度も言ったことはないのに、まるで「お前は東大に行って勉強するのが一番の幸せなんだよ」とばかりに。
「それにそろそろ、彼女の一人も作れよ。カタブツ過ぎるのもどうかと思うぜ」
モテモテ男のユータが僕に言った。言いながらジュンイチにパスを出す。
「適当に付き合ってみろよ、こうやって高校生と普通に出会えて付き合えるチャンスもあとわずかだしさ。３０過ぎて女子高生に憧れても、世間が冷たいぜ？　ケースケはもてるんだし、適当でいいんだよ。適当に付き合ってみればいいじゃん」
「――いや、今は他にしなくちゃいけないことがあるんだ」
「へぇぇ、あれだけ授業サボって、ギターやピアノばかり弾いてる奴がか？」

ジュンイチがチャチャを入れる。それを訊いて、ユータが子供をなだめるような口調で、僕に言う。

「俺が見るに、お前は考え過ぎだよ。やった後も優しくするのが、うまく行く秘訣だぜ」

「お前――それ、何のアドバイスだよ」

ジュンイチはユータにボールを強めに蹴りながら、的確に突っ込んだ。二人は笑った。

「……」

僕だって今まで適当に彼女を作ったことはあるし、女性経験だって一度だけある。丁度一年位前のことだ。

僕は付き合って半年で、彼女を抱いた。理由は、二人の関係を存続させるのに、それが必要っぽい気がしたからだ。別に存続させなきゃいけない義務に基づいているわけじゃないけれど、それを彼女は望んでいるようでもあったし、それを見ると僕に反対する理由はなかった。その程度の理由だった。少なくとも、激しい感情に促された行動ではなかった。

彼女はベッドの上で、小動物のように愛らしかったように思う。息を切迫させ、肢体は艶かしかった。僕のことを何度も好きだとも言って抱きしめてくれたし、僕にすべてを委ねて甘えてくれていただろう。

だけど当の僕はいっぱいいっぱいで、彼女に対しての愛しさだとか、自分の脳を刺激する快楽感とか、何も感じられなかった。その時の彼女の顔さえ覚えていない。

それでも彼女が、僕のすべてを受け入れてくれた。そしてそれは感謝すべきことであることくらいはわかっている。その自覚はないわけじゃないけれど……

どうしても盛り上がれなかった。彼女の終わった後の嬉しそうな顔を見ると、自分との大きな温度差を感じずにはいられなかった。

その時初めて色々なことがわかった。彼女は僕に抱かれるということに、覚悟があったこと。そして僕にその覚悟が足りなさすぎた

こと。

僕は彼女の肢体や、親にも見せないような羞恥的な姿、そしてそれをも厭わない覚悟、そんなものを受け止め切れなかった。彼女の最も美しいところと、最も醜いところを同時に見たような感覚が、彼女のアイデンティティを老朽化したシャフトみたいに両者からの力を受けてねじり切ってしまった。

次の日からもう、彼女のことを今までと同じ目で見ることが出来なくなっていた。覚悟が足りないのに結果的に弄んだ罪悪感ばかりが、僕を押し潰しそうだった。

関係を終わらせようと決意したのは、彼女を抱いて3日も経たない頃だった。僕は彼女に別れを告げた。彼女は僕のことを、体目当てで付き合ったと誤解しても無理はなかった。でも否定はしなかった。結果的にそうなってしまったのかもしれないと、自分の中で納得が出来ていたから。

何度も頬を張られても、甘んじて受けた。別に痛くはなかったが、鉛のような重さが僕の中に沈殿していくのを感じていた。それは今でも忘れられない、心の中に残る棘だ。

「テストでいい点を取るより、人を喜ばせる方がずっと難しい気がするよ」

ポツリとそう言うと、奇特な人間だ、といわんばかりの顔で、二人は顔を見合わせ大爆笑した。僕はいつでも本気でものを言っているけれど、そんなに可笑しかっただろうか。

Failed

――試合が始まった。相手ははっきり言って、同じ川越にある格下校。あくまで練習試合。だからこそ僕達は大差で勝たなければいけない試合だった。キックオフに、ユータがボールを蹴った。それだけで、ギャラリーの女の子が黄色い歓声を上げた。

すぐに僕にボールが下がり、僕は前に出る。一人をフェイントで抜き去る。まだサッカーをはじめて1年半――ボールが完全に足についているわけじゃないけれど、足の速さには自信があるから、スピードを頼りに突き進む。僕は百メートルを11秒前半で走れる。これはサッカー部内では、ユータに続くタイムだ。

相手のフォワードが近づいてくる。ギリギリまで引きつけ、僕はヒールで後ろにいたジュンイチにパスをする。そしてそのまま前に走った。

ジュンイチは駆け上がって、ノートラップで近くにいた右サイドの選手に浮き球でパスを出した。ジュンイチの得意とする、ロングフィードだ。右インサイドキックで蹴られたボールは、僕の頭上を越えて右サイドの選手のやや前方にボールが落ちた。すぐに味方が追いつきボールキープ。ここまでは予定通り。ジュンイチのパスも絶妙。

試合前に打ち合わせた流れだったので、味方の右サイド選手の反応は早かった。僕が相手を引きつけたので、サイドはがら空きだ。相手のサイドディフェンダーが近づく前に、右サイドの選手は上がりはじめ、すぐにクロスを上げた。僕とジュンイチも前に走った。

クロスが上がると、予定通りユータはゴール前に俊足を飛ばしていた。長身の体は、相手ディフェンダーより、頭一つ突き出て、手を上げてボールを呼んでいる。

ペナルティーエリア内、ゴール前15メートルのところで前のめりにジャンプして、ヘッドでそのボールに合わせようとしたが、キ

ーパーが前に飛び出していて、ボールはキーパーのパンチングで跳ね除けられた。

ギャラリーがブーイング。キーパーの厚い胸板に跳ね返され、ユータが空中でバランスを崩し、吹っ飛ばされたからだ。ユータは背中から、ペナルティーエリア内に倒れた。

過保護過ぎだって。サッカーってそういうスポーツなんだから。

実際ユータはちょっと痛かっただろうけど、勿論ホイッスルなどあるはずもなかった。跳ね返ったボールは、高く上がり、放物線を描いて、ペナルティーエリアの手前に落ちてくる。

相手ディフェンスは、キーパーのヘルプに出ていて、僕はフリーだった。既にそこまで上がっていた僕は、落下地点を合わせ、右足を回し蹴りの要領で振り抜き、強烈なボレーシュートを放った。

シュートは、スクリュー状の回転を帯びて、ゴールに向かっていく。しかし、僕のシュートは、飛びついたキーパーの指先を掠めたが、左上のバーに直撃し、大きく跳ね返った。

こぼれ球は、起き上がったユータが拾って、倒れているキーパーの逆にそのまま流し込んだ。先取点だ。

ユータが、両手を広げて、戻ってくる。ジュンイチが、ユータの背中に飛びついた。ユータは、ジュンイチを背負って、ギャラリーの方へ走り、ガッツポーズをした。

まったくうまくない。あと五センチ中なら僕のシュートは完璧だったのに・・・・・画龍点睛を欠き、バーに当たったせいで、僕にはアシストの記録も付かない。完全にユータのシュートを引き立てた、しがない前座に成り下がった。

ギャラリーは満足したようで、ユータコールが起こっていた。僕は黙々と自分のポジションに戻っていった。

試合は、５‐１で、僕達の完勝だった。相手は格下だったといっても、新チームの初陣にしては、悪くない滑り出しだった。

しかし1点取られたことは予想外だった。後半になってイイジマ

は、新チームのレギュラーを決めるテストのため、レギュラー確定の僕達トリオ以外の選手を総入れ替えした。僕がディフェンダーまでボールを下げた時、相手のフォワードがディフェンダーの前へ走った。それに慌てたディフェンダーが、僕に戻そうとして出した不用意なパスを、相手フォワードにカットされたのだ。僕とジュンイチはヘルプに走ったけれど、もう間に合わず、フリーでのシュートを献上してしまった。まったくつまらない失点だった。

イイジマの目に映った今日の失点シーンは、ディフェンダー陣の改革の必要性を際立たせたことだろう。となると試合前の予告通り、僕をディフェンダーに引き込んで最終ラインの統率を、火急的速やかに行おうとするはずだ。僕のバックパスから起こった失点でもあり、あのパスは、不本意なディフェンダー転向を言い渡された僕にとって、自分で自分の首を絞めたプレーと言ってよかった。

結局ユータはこの試合でハットトリックを決め、ジュンイチもアシストを決めた。僕はシュートが全てバーに嫌われ、全体的にキレの無い結果に終わった。これ程悪かった試合も、僕にしては珍しい。イイジマの言葉に、僕は無意識にモチベーションを落としていたのだろうか。１０番をつけると嫌でもミスが目立つから、今までは気をつけていたのに。

試合の後、軽くイイジマが反省点を述べ、今日は解散となった。既に夕焼けが美しかった。一年生が用具を片付けてくれるので、僕達はそのまま部室に向かった。

部室に3人で向かおうとした時、グラウンドの外にいたユータファンの女の子が寄ってきて、もみくちゃにされた。僕とジュンイチは、その場をはずしてやる。

女の子達の中心で両手を挙げて、まいったなぁ、と言いたそうな顔をしているユータを見て、ジュンイチはしかめっ面をした。

「これがハットトリックと、一アシストの差か」

ジュンイチは気だるそうに吐いた。

「もっと本質的な差だよ」

「何だよ本質的って」
「――説明するのが面倒臭い」
「またそれか……ケースケの口癖だなそれ」
ユータを置いて、僕達は部室へ帰ることにした。すぐに着替えをする。ユータを待っている間に、他の二年生部員は、ほとんどが着替え終わっていた。僕達に声をかけて、半分くらいがもう出て行った。元々泥臭く、汗臭い部室に、すぐに新しい汗の臭いが充満した。
着替え終わった頃にユータが帰ってきた。ちょっと精力を奪われたような顔をしていた。
「お勤めご苦労様」
ジュンイチが軽く頭を下げた。僕も会釈を返す。
「二人とも、着替えたらちょっとツラ貸してくれ」
そう言われたため、僕達はユータが着替え終わるのを待って、部室を出ると、そこに制服姿の女の子が待っていた。
小麦色の肌にエクステンションのついた、背中にまでかかる蜂蜜色の髪に、コテで生み出したウエーブ。スカートの丈は短く、紺のハイソックスは軽く泥がついている。ブレザーだけどその中の白いワイシャツはアイロンをかけていないのだろう、若干シワが目立っていた。化粧は手馴れているようだけれど、マスカラ塗り過ぎ。まつげが重苦しい。アイシャドウもいかにもギャル雑誌のモデルを真似ましたって感じ。
ひときわ目を引いたのは、ひとつボタンを開けたワイシャツとリボンの奥に潜む、小柄な体に似合わない程貫禄のある胸だった。高校生らしからぬ迫力で、でんと鎮座ましましているといった感じ。古代神話に出る、男を誘惑する悪魔みたいだと思った。
ユータが付き合う典型的なタイプの女の子だ。こういう小柄なちょっと頭の弱そうなギャルか、モデルみたいにスレンダーな女の子、大体そんなタイプが多い。
僕とジュンイチの姿を確認するや、彼女は恥ずかしそうに会釈をした。意外と見た目よりも、こういう子はしっかりしているものだ。

「紹介するよ」
「モエっていいます」
彼女はもう一度僕達に頭を下げた。
「よろしくね」
ジュンイチはにこっと笑って言った。いい笑顔だな。こいつが3人の中では一番人当たりがいい。それに続いてジュンイチは自分のズボンの腰回りで軽く掌を拭って彼女に差し出すという、20世紀中盤の洋画俳優みたいなことをした。彼女はにこっと笑って手を握り返した。
「俺はエンドウ・ジュンイチ。サッカー部の3バカトリオの一人だ」
「……」
おい、3バカってのは、僕も入ってるんじゃないだろうな。
「知ってるよ」
彼女は手を離してから言った。
「そしてあなたが……ふぅん」
彼女はジュンイチの後ろ3メートル先にいる僕の方を向き、僕の顔をじろじろ見た。
「本当にユータの言う通り、女の子みたいに綺麗な顔ね」
彼女がそう言ったので、僕はユータの目を見た。一種のアイコンタクトだ。
「いや、お前らの話をよくするからさ、会いたいって言うもんだから」
「……」
僕はそれを聞いて溜め息をついた。やれやれ。何を言われてるかわかったもんじゃない。
「ユータも入学したての頃、僕をナンパしたことがあるよ」
「え?」
彼女は目を大きくして固まった。そんなに目を見開いたら、マスカラが蝶の羽根についている鱗粉みたいにぽろぽろ落ちそうだ。それからユータを睨む。

ジュンイチはその一言に、彼女の傍らで、くくく、と笑いをこらえている。
「いや、嘘だから、ありえないから。ゲイじゃないから」
ユータはあたふたしながら自己弁明した。
「あれ？　嘘なのか？」
ジュンイチがニコニコ顔で言った。
「オイ！　お前までかぶせるな！」
「そうさ、あれは入学した翌日、春になって桜が咲いて間もないうららかな日だった。机に頬杖をついていた僕に、お前は声をかけてきたんだ。君がこの学校で一番可愛いね、って。そしてその日の放課後、いきなりお前は僕の唇を奪うと、俺はサッカーで必ず君を幸せにする、だから俺の女になれ、って言ったんだよな。はじめ僕は、お前をそっち系の奴だって勘違いしていたんだけど、そのうち両方いける奴なんだってことがわかったよ」
「それっぽい嘘つくなよ！」
ユータが僕の方を向いて、目を見開く。
「お前ならそれくらいやるだろ」
ジュンイチがかぶせてくる。
「勘弁してくれよ。俺達まだ付き合いたてなんだぜぇ」
「お互いまだ知らないことを知って、分かり合えるチャンスかと思ってな」
僕は皮肉っぽい笑みを一瞬作る。
「いや、だからってゲイ疑惑持たせてどうするんだよ……」
「あはは！」
僕達だけで勝手に楽しんでいた合間に、彼女が急に笑い出した。
「面白いね、３人とも」
彼女はユータを見上げた。
僕達は彼女の笑い声に、一瞬フリーズしたが、ユータが「いい奴等だろ」と言って笑うと、彼女も笑顔を返した。
ユータは、いつもの女の子を夢中にさせるスマイルで返した。

「じゃあ俺、今日は彼女と帰るから」
「へいへい、それはようござんした」
ジュンイチがしかめ面をする。
　ユータは部室からすぐ見える校舎に面した駐輪所から、自分の自転車を引っ張り出して、彼女を後部に座らせた。こんな大男が貧弱なフレームの自転車に乗っていることにいつも違和感を覚える。

僕とジュンイチは並んで、ユータの自転車が見えなくなるのを見送った。ジュンイチはご丁寧に手まで振っている。

「……」

やがて見えなくなると、僕はふっと力が抜けた。

恐らく僕と彼女が会うことは、もう、ないだろう。

だから僕自身、進んで挨拶はしなかった。彼女が僕の名前を知らなかったら、名前すら名乗らなかったかもしれない。

「いやぁ、女顔って言われたからって、ユータにナンパされたって……ツボだったぞ」

ジュンイチは手を一通り振り終わると、本当に面白そうな顔で僕の顔を覗き込んだ。

「いや、でも入学当時はよく女と間違えられたんだ」

何故これだけ女性に間違われるか、それはひとえに僕の格好のせいである。

この学校はとても自由な校風で、制服はなく生徒は私服で通っている。制服でスカートをはいているのであれば見分けもつこうが、私服では僕の場合、男か女かを判断するのは難しいようだ。今でも僕は白い長袖のインナーに薄手の黒いジャケットを羽織り、ジーンズという格好だ。髪は耳が隠れ、前髪も目にかかるくらい長い。襟足はジャケットの袖に触れているし、女の子でもこれくらいの髪の長さをしている子はいる。

「どれくらい持つと思う？」

ジュンイチはニヤニヤしながら聞いた。既にジュンイチももう彼女と会うことはないと踏んでいるのだろうか。

「一週間」

僕はユータ達が去った先を見つめたまま答えた。

「えぇ？　あの子結構感じいいし、顔も……」

「お前が気になっていたのは、胸だろ」
「――うん、まぁ……な」
ジュンイチは頭をかいた。
「でも、だからこそ3ヶ月は持つだろ。ユータとしては久々に」
「――あいつはあれでモラリストだからな」
「どういう意味だ？」
「彼女と握手したなら、その手の匂いを嗅いでみろ」
僕が言うとジュンイチは怪訝そうな顔で、頬袋に向日葵の種でもつめるハムスターみたいに、口元を手で覆うようにして匂いを嗅いだ。大柄な男のその仕草は何処かユーモラスだ。
「――なるほどね」
ジュンイチは呆れ顔で首を横に振った。
「でも何でわかった？」
「彼女の歯の色さ」
「初対面で近くで見てないのに、よくそこまで見えるな！　シャーロックホームズかお前」
「初歩的なことだよ。お前は見るだけで観察をしなさ過ぎるんだよ」
僕はホームズの名言のひとつをそらんじてやったが、何のことはない。僕は女性の煙草は嫌いだし、何より僕の嫌いな奴も、彼女よりもっとひどいが、同系統の歯と歯茎の色をしている。
「まあどうせ早く終わるなら、早い方がいいがな」
ジュンイチが遠い目をして、二人が去った道を見ていた。もうこいつにも、二人の恋がすぐに終わってしまうことがわかっている。
その根拠はユータが女好きのプレイボーイだとか、過去の実績とか、そういう根拠ではないこともわかっている。
ユータは悪く言えば能天気だが、よく言えば大空を舞う鳥のような性分で、羽を休める安らぎをどこかで強烈に求めながらも、ひとところにとどまることの出来ない男だ。
それはきっと本人もわかっているだろう。だけど奴は、女性と付き合うことをやめようとはしない。わかっていながらも、女性を側

に置きたがるのだ。
だからさっきの彼女は、そんな側に置いておくことの出来ないユータを追いかけ続けて、でも届かなくて、やがてそれを悟った時に、二人はすれ違うだろう。僕達はそうして泣いている女の子を沢山見てきた。
あの場で彼女のことを止めてやることも出来た。しかも僕は、ユータが嫌う煙草を彼女が吸っていたのを知っていた。止めるべきだったこと、僕は見抜けていた。
でも、それをしなかったのは……
僕自身が、彼女のことを可哀想だとか思っていなかったからだ。
僕が名を名乗る気はなかった。よろしく、とも言わなかった理由——彼女にもう僕が会うことはないことも、僕はわかっていたんだ。だから僕は、彼女に記憶されない程度で、友人の彼女として、二人を軽く立ててやれればそれでよかった。
そう、むげに二人を今裂くよりも、ひと時だけでも彼女に幸せな思いをさせてやる。それが僕に出来る精一杯の優しさだ。
その優しさが正しいか間違いかなんて、考えるだけ無駄だ。だってもう僕は、彼女と会うことはないんだから。僕がそれで納得できていればいい。あとは当事者が決めればいい。世の中の多くのことは、当事者以外の人間ではどうしようもないことなんだ。
「じゃあ、いつやると思う?」
ジュンイチは一転、面白い玩具でも見つけたような顔をして、僕の方を見た。
「——お前、そういうの好きだな」
ひとつ溜息をつく。
「いつだっていいじゃないか」
「まあまあ。高校生として、分相応なトコの会話だろ」
「……」
分相応って、当事者が決めることなんだろうか。第三者が見てはじめて決めるようなことだと思うけれど。とはいっても、別に僕に

そこまでして拒絶する理由はなかった。むしろ普段、高校生としての『分相応』な会話をしていないのは僕の方だった。こいつはきっと僕とそういう会話をしたいんだろう、と思った。こいつにはそういう、いわば歳相応のところがある。

もう答えは出ていたが、僕もちょっと考えてやるフリをしてやった。そして言った。

「今夜だろうな」

「いや、今日はないな。まさか早すぎるだろう。賭けるか？　５００円で」

僕は少し笑ってやる。

「こういう賭けでは僕の４３連勝中だってのに、お前も懲りないな」

僕は既に飛ぶ鳥の献立を考える所作に取り掛かった。

電車登校のジュンイチと別れて、家路に自転車を走らせながら、僕はユータとさっきの彼女のことを考えていた。

今日の試合を見て、さっきのユータの彼女も惚れ直したことだろう。今日はさぞ彼女も機嫌がいいだろうから、今日勝負のはずだ。ああいうタイプはきっとそういうことに関して開放的だろう。今頃ユータはどこぞのラブホテルで、ヤッホー、とか声をあげて、あの子のでかい胸にダイブしているかもしれない。

だけど僕は、すぐにその興味からは離れた。僕はそういう想像力は豊かだと思う。ユータの百戦錬磨の性器が、さっきの彼女をヒイヒイ言わせる姿を想像すると、あまりにリアルに構成できて、軽い罪悪感を覚える。

僕はどうも、そういう体裁を大事にしたがるタイプのようだ。それが友であるユータにとって失礼なことなのか、卑しくも女性である彼女にとって失礼なことなのか、そういうことは分からないけれど。

でも、彼女に対して、酷いとか可哀想だとかいう感情は抱かなかった。

きっと彼女だって、ユータと別れた後にまた新しい彼氏を作る。そういう味気ない恋を繰り返すんだ。相手が唯一無二の存在になり得ないこと、そんなこと、ユータだって知っている。

それでも恋人を見つけるのは、きっと退屈しのぎだろう。ユータにとって女は退屈しのぎで、体のつながりは気晴らしなんだ。つまり彼女はゲーム。

最近、この無機質な時代に、やたら、ゲーム、という言葉を耳にするが、その意味は、英語のｇａｍｅ――獲物、という意味に近いかもしれない。ゲームと名のつく全てのものに、獲物という完結がある。恋愛とは、相手という獲物――『ゲーム』を手にすること。援助交際の場合の『ゲーム』はヴィトンのバッグ。受験の場合の『ゲーム』は肩書きといった具合に、全てに目指すべき獲物がいる。ユータは、彼女を抱くという『ゲーム』に向けて、ｔａｃｔｉｃｓ――戦略を練っている。

全ての遊び――ゲームとは、いわばｔａｃｔｉｃｓなんだ。戦略を練って、獲物がそこに落ちるのも見て楽しみ快感を得る。単純で懐古的な遊び。

だから、ユータが彼女を獲物として自分のものにしてしまうのは、猟師が罠を仕掛けて鹿を捕らえ、その肉をもらうのと同じ。そう考えれば恋愛は、単なる戦略ゲーム。

はじめから愛情なんてどうでもいいのかもしれない。単に自分の戦略を巡らす対象、情熱を向けられる対象が、そこにしかないってだけなんじゃないだろうか。

人工授精が一般化すれば、ますますその行為はレジャー感覚になるだろう。そもそも子を宿すために行う営みだが、その意味が薄れるからだ。残りは快楽目当てでしかない。近未来、人間は自力では、子供を産めない体に退化したりして。

そんな無益なことを考えていた。

町並みが瓦屋根の商店街へと変わる。家までもう少し。

Depression

僕が都内の私立付属高校から県立の高校に移った最大の理由はこの近さだった。中学も進学校だったけれど、地元に同じように実績のある学校はあった。それが埼玉高校。

私立に比べて学校の設備はひどいが、夏場教室にクーラーがなくても僕は耐えられるし、交通費はかからないし、落ちこぼれずにも済んだ。サッカー部だって全国を目指せなくはないし、平均よりちょっといいくらいの高校生活を送れていることは確かだ。

そのはずなのに……

川越は昔、北条氏康の川越夜戦で有名な川越城の城下町で、この辺りにはその名残が残り、今でも小江戸なんて異名も持つ。さっきから続くこの商店街の石瓦の家作りは蔵作りといわれ、江戸時代の大火で木造の長屋は焼け、この造りの家だけは耐火に優れ残ったという。現在ではこの蔵作りは重要文化財として認定されているし、電柱を地中に埋め、観光地としての景観を守っている。

そして僕の家は、川越で有名なさつまいも菓子の店。親父で４代目。幸い平均的なサラリーマンより若干多い程度の年収を得ている。

商店街の路地を右に入り、二つの家が両手に伸びる。僕の家はその左、路地奥左のガレージに、二台入っている車の横をすり抜けて、脇に自転車を滑り込ませる。ガレージは家を吹き抜けにして、僕が自転車を止めた目の前には、店で雇っているパートさんのロッカー兼更衣室。

自転車は小学校の頃から乗っているマウンテンバイク。背の低い僕でもサドルをいっぱいに上げて、それでも小さい代物だ。だけどしっかり鍵をかけておく。

色んな人に、ものを大切にする、と言われる。ものを大切に出来る人は、友達や彼女も大事にするんだよ、なんて、誰かが言ってたっけ。確かにものを擬人化すれば、その理屈はわからなくもないけ

れど……

友達や彼女を大切にするって、一体どういうことなんだろう。

例えば消しゴムのように、使えるだけ利用して、小さくなっても う消しゴムとしての用途をなさなくなったら、冥福を祈って新しいものに変えざるを得なくなるまで使用する関係のことだろうか。

それなら結婚したら、女の人は旦那が給料を運ぶまで大事にして、定年になってそれを果たさなくなったら離婚してしまうようなのが、人を大切にするってことなんだろうか。ボクシングジムのオーナーがジムの名を上げるために、将来有望な選手を廃人にするまで試合をさせて、もうボクシングが出来なくなったら、感謝の言葉のひとつもかけて首を切るようなのが、人を大切にするってことだろうか。

『モノ』を大切にするって考えは、ほとんどが一律の答えがあるけれど、人に優しくするのは難しい。ただ、対象が生きているってだけで、優しさっていうのはその定義が難しくなる。

それでもそんな考えが残るのは、きっと、年々人と『モノ』の境界線がぼやけているからだろう。サラリーマンは会社に、『モノ』のように使われ、人は友や恋人を、退屈しのぎの道具として扱う。人が人を「使える」「使えない」の物差しで見ている何よりの証拠だ。

人間は、『モノ』化しているのだ。

そう、この僕も、この家では……

我が家は店だけは数年前に改装したが、居住区は地区四十年を数える。一回は風呂場と工場しかない。

玄関の華奢な門扉を開け、長年の風雨で色が落ちかけている、茶色の重苦しい木製のドア。蝶番は数年油をさしていないから、開けると怪獣の欠伸みたいな音がする。

薄暗い玄関に入ると、二階から、二人の女の怒鳴り声が聞こえてきた。

「何？　私のすることに文句があるの？」

「何なのよ！　ただ、私も鍋が食べたいなぁって、言っただけじゃ

ないの！」

溜息が漏れる。

黙ってスニーカーを脱ぎ、自転車のキーを、玄関のコルクボードに刺してある画鋲にストラップでつるして、二階へ上がっていく。

言い合っているのは、僕の母とその姑だ。僕が生まれる前から、僕達家族は、祖母と家庭内別居をしている。それでも、一緒に住んでいる以上、こうやって、毎日のように、些細なことで大騒ぎになる。よくある話だが、あの二人の仲の悪さは異常だ。まあ諸々の理由があるからなのだが、長い話だし、考えると憂鬱になってくるから、なるべく思い出さないようにしている。そんなことをさかのぼったって、解決の糸口はありそうにない。

二階に上り、リビングに入る。入って右側が、畳二畳分ほどしかない、狭いキッチンで、左側が二十畳ほどのリビングルームだ。

母と祖母がはっと静かになり、そこに立ちつくし、目を血走らせている。リビングにある、重みのある木造のテーブルにガスコンロが乗って、その上に野菜の残骸が浮いているだけの土鍋がある。

あまりに仲が悪いため、僕達は祖母と家庭内別居している。だから、祖母は一人で、鍋料理など食べる機会が無い。母と妹が鍋を食べているのを見て、何かぽろっと口走ったせいで、母はその言葉を、皮肉と受け取ったのだろうと、僕は状況を整理する。

ガスボンベが、もう半月は掃除機をかけていないだろう床に転がっている。恐らく、母が投げたのだろう。転がっている場所から、ぶつかっただろう壁を見ると、木製の壁に、彫刻刀で彫ったようなへこみ傷が出来ている。

僕はバッグを置き、その場にかがみこんで、ガスボンベを拾い上げ、手近にあった棚の上に置いた。

一瞬、二人の目は僕に向けられたが、僕はバッグを担ぎ上げ、視線を合わせないようにして、その場を退散した。

リビングの奥にあるドアを開け、すぐに閉める。その先は廊下で、右手の障子を開け、中に入る。中は日本間だ。僕の部屋にはテレビが無いので、この部屋にあるテレビを使っている。バイトは八時からだ。それまでしばらくここで休むことにする。

8畳間の部屋にあるのは、姑専用の冷蔵庫と、マッサージチェア、そして、仏壇である。

ワインレッドのマッサージチェアに腰を下ろしてテレビをつける。今日は日本対アルゼンチンのサッカー親善試合がある。既に後半だった。

今日の朝に、録画セットをしておいた。とはいえ、既に四-〇だ。日本も欧州組を召集しなかったこともあるが、さすがアルゼンチンは主力メンバーを揃えただけある。圧倒的な攻撃力を誇るアルゼンチンに、点を取られるのは仕方がないが、日本もせめて一太刀は浴びせてほしいものだ。

二人の喧嘩は第二ラウンドとばかりに再開されていた。僕はテレビのボリュームを上げて聞こえないようにしたが、音がミックスされ、余計に騒がしくなったので、すぐにボリュームを落とした。やがて何かを叩きつけるような音がし出す。僕は椅子にどさっと身を倒した。

がらっと、台所の方の引き戸が開いた。振り向かなくても、開ける音の癖でわかる。祖母だ。僕は、反射的にテレビを消し、目を閉じる。

マッサージチェアの隣に来て、僕の肩を掴み、そこに崩れ落ちて、泣くフリをする。

「ねえ、ケーちゃん、聞いておくれよ。おばあちゃん、もう死にたいよ・・・・・私は、鍋が美味しそうだって、言っただけなのに……」

それだけ言いかけると、すごい足音を立てて、母がやってくる。

「ちょっと！　何でそういうこと言うのよ！」

「……」

僕が、物心ついた頃からやっている役目、それが、二人の喧嘩の尻拭い――仲裁だった。

自分で言うのも何だが、僕は子供の頃から頭の発達が早かった。三歳くらいの頃は、喧嘩が起こると、いつも妹と一緒に布団をかぶって震えていた記憶だけが鮮明に残っている。しかし、僕が幼稚園に入った頃になると、僕はいつも喧嘩の話に引きずり出された。場合によっては手が出た。

僕はいつの間にか、家族のパイプ役になっていた。喧嘩に引きずり出されて、一方的に責め立てられた。愚痴を聞けと言われれば、黙って何時間でも訊き、気に入らなければ黙って叩かれた。しかし僕は抵抗しなかった。僕は子供心に、荒れる家族が見ていられなかっただけで、家族がこんなに荒れるのは、互いにストレスがたまっているからなんだ。だから、僕が皆の話を訊いて、家族がピリピリしないように、ストレスを取り除いてやろう――と、幼い僕は信じていた。

しかし、僕はやがて、家庭の複雑さを理解できるくらい大きくなり、色んなことを悟った。この喧嘩に意味などない。修復することは不可能だと知り――僕は全てを諦めた。

しかし、その時にはもう遅かった。話を拒絶すると、祖母は泣きながら仏壇の前にひざまづき、死にたい、と言う。母を拒絶した場合、激昂して僕を罵る。それに反論すると、二言目には平手の応酬だ。家のシステムが既に出来上がってしまっていて、僕はそこから抜け出せなくなってしまっていたのだ。

「昔のケーちゃんは、もっと聞き分けのいい、優しい子だったのに……」

お決まりの一言だが、こう言われてしまっては堪らない。その度僕は幼すぎた過去の自分を呪う。

「じゃあ私はどうすればいいの！」

「嫌だったら老人ホームでも、どこでも行ったらどうなのよ！　金はあるんでしょ？」

母が怒鳴ると、祖母が日本間を出て行く。引き戸を勢いよくびしっと閉める。母はそれを追いかける。祖母の部屋は階段の前、妹の部屋の隣だ。そして、祖母の部屋には鍵がついている。

何かを噛むような、鍵をかける金属音が、開けっ放しの引き戸から聞こえてきた。母がその戸を、壊れるんじゃないかというくらい強く叩いている。音が廊下に反響して、雷鳴のようだった。何かプラスチックみたいなものがドアに当たる音がすると、バキッと、何かが折れる音がした。

不本意ながら立ち上がり、僕がそこに駆けつけた時には、母の足元に、絆創膏やら、包帯やらがぶちまけられていた。消毒液が、廊下に飛び散って、匂いが充満していた。どうやらプラスチックの薬箱をドアに投げつけたらしい。蓋の蝶番が、落下の衝撃で折れ、蓋が真っ二つに折れて、中身をぶちまけ転がっていた。

それでも奇声を上げて扉を叩き続ける母。我が親のこんな姿は、疲労と目を覆いたくなるような脱力が、なんとも言えない心境に身を落とさせる。テストの結果が悪くて、目を抑えてベッドに倒れこむような、そんな気分に似ている。

「逃げないでよ！」

怒り狂って戸を叩く母の声を聞きながら、僕は深く俯き、額を覆った。母も祖母もキンキンした声の持ち主で、試合で疲労した僕の大脳辺縁系を収縮させたような感じ。

しかし、不本意ではあるが、近所迷惑になる前に僕は二人を止めないといけない。

Satisfy

別に今日がとびきりひどいわけじゃないけれど、いつだってリアクションが決まっている。僕は母親の肩を後ろから引っ張った。母親は血走った顔を僕に向ける。

「いい加減にしろ」

僕は怒気を含んで言った。怒鳴ったって止まるわけじゃないことはわかっているから、エネルギー温存のために、静かな口調で。案の定、母はドアを叩く手を止めて、僕を睨む。

「五月蠅いんだよ。二十年も似たような言い合いばかりしやがって」

「ほっといてよ！」

空いている手で僕の頬を張った。別に痛くはない。だけど、気分が悪くなった。

この女も、ドアの向こうにいる婆も、自覚がない。だから、この喧嘩は解決に向かうことはない。

僕がそれに気がついたのは最近だった。それまでは、家族のストレスを取り除くことが大切だと思っていたけれど、答えがそんな根本的なところにあるなんて。

気がつくのが遅すぎた。今まで素直に話を訊き過ぎていた僕は、既に家族から、話を訊くのは当然、という観念を植え付けてしまったのだろう。それが未来の僕を、家族の掃き溜めに追いやると、幼い僕は気付きもせずに。

僕は受身に徹しすぎた。怒鳴られても、殴られても耐えていたから、今でも皆、僕には躊躇なく手を出せる。そして僕は、絶望的な暴力を、昔の愚かさを思い知らされるように饗されるのだ。この痛みが、何度も僕に訴える。弱かった昔の自分への後悔を。

「犬かお前らは。２０年もギャンギャン吼え続けやがって」

それでも僕は諭す。せめて自分の論の絶対的な正しさだけは主張しておきたい。

「アンタ、私に指図するの？　一人涼しい顔して、何様のつもり？」
「……」
僕は黙って母親をにらんでいた。自分の積もり積もった憎しみをぶつけるように。
母親はそれを見てびびったのか、舌打ちをして、そそくさと退散した。
きっと祖母は、もう今日は部屋から出ないだろうから、母もすぐに部屋に戻った。これで今日、これ以上ひどくなることは当面免れそうだけど、明日になれば、何もかも忘れて、また同じようなことが起こる。
「アンタももう部屋から出るんじゃねえよ！　五月蠅いんだよ！」
僕はドア越しに、祖母に向かって怒鳴った。恐らく祖母は、僕が止めてくれることを期待して、部屋に閉じこもったんだと思う。きっと、僕の性格を見越して、喧嘩をそのままにしておかないことを知っているから。自分の中で『需要と供給がマッチした』くらい思っているかもしれない。
冗談じゃない。
バイトまでのわずかな時間は、疲れた体を休めるつもりが、くだらない喧嘩を止めるだけで終わってしまった。ぶちまけられた消毒液を、雑巾で拭いていると、消毒液の匂いが、鼻を刺した。
――腐っていやがる。この『汚点』共のせいで、僕には平穏さえままならない。
その後、部活帰りだったので、シャワーを浴び、僕は玄関に出る。玄関にあるスペースにある柵に、愛犬のリュートがいる。犬種はシェットランドシープドッグで、御歳3歳を迎える。
元々この犬は、妹が飼いたいと言い出して、買った犬だった。妹は幼稚園の時から、犬が飼いたい、と言っていたからだ。しかし無責任な妹は、飼ってすぐ、面倒見に飽き、同時にあれだけ五月蠅く主張した、犬への愛情も失せたらしい。保健所に連れて行くのも、寝覚めが悪かったので、今では僕が、全ての面倒を見ている。

妹はこうやって、色んな物を簡単に捨ててきた。物も、命も、全て塵芥のように。

何様のつもりだろう？　と、初めは思ったが、今ではこいつだけが、僕の家族だ。ユータ達と同様、こいつにも奇縁があったのだろう。

こいつの世話をいつまでもしているのは、そういう縁を大事にしたいからなんだろう。こういう奇縁なんてのは、本当に貴重で、滅多に出会えるものじゃない。無機質な僕の生活の中で拾ったレアアイテムなのだ。下手な人間の出会いよりも、当たりだったと言える。

「リュート、行こう」

僕は、リュートの頭を軽く撫で、つないでいる鎖をはずし、リードをはめた。

バイト先のコンビニは、家から徒歩3分。店長は昔この商店街で酒屋を開いていたが、数年前にコンビニに職変えした。

だから僕とも顔見知りで、だからこそ無理を言ってお願いして、高校生なのに深夜まで働かせてもらっているのだ。

３０分ほど前に行って、バイト先の控え室で、賞味期限の切れた弁当をもらって食べた。これが僕の晩御飯。あんな家庭なので、夕食は僕の分など用意されてはいない。だから僕はこうして、自分にかかる食費を浮かせている。

「じゃあケースケくん、２時までよろしく頼む」

店長はそう言って、僕の上がる2時から勤務のために仮眠を取りに、２階の自宅に行ってしまった。

この商店街は観光地なので、昼間はやたら人通りが多く、このコンビニも平日は４人、土日は６人で回しているが、夜７時を過ぎるとぱったりと人通りがなくなってしまうの特徴で、深夜は僕と店長の二人か、またはどちらか一人だけだ。

今日も暇だ。

もう雑誌の並べ替えや、督促品の作成だとか、商品の前出し棚卸しも、お客が大して来ないから、一人でだって一時間もあれば終わってしまう。だって夕方以降この通りは客が少なくなるから、店長だって物を仕入れない。一人でもそういうのを片付けられてしまうんだ。おざなりにポリッシャーで掃除なんかしてたって、時間つぶしは３０分が限界。

こんな楽なバイトは、部活もやっている僕にはおあつらえ向きだ。おまけに弁当はもらえるし、それに他のバイトと違って、ノルマの仕事さえやっておけば、仕事以外のことをしていたって怒られない。ちょくちょくリュートの様子も見に行ける。それでも飯をもらうんだから、暇な時にやる仕事は全部やるけど。

だから今日も暇つぶし用に、自作の単語帳を持ってきた。今日は簡単な動詞を揃えたものを２００個。もう覚えてしまったものが大半だろうが、今の疲労具合を考えると、これを全て頭に入れるくらいがちょうどいいだろう。

Ｑｕｏｔｅ――ａｒｒｅｓｔ――ｓｕｐｐｒｅｓｓ――Ｓａｔｉｓｆｙ――

「……」

Ｓａｔｉｓｆｙ――満足する、か……

長年満たされたことのない感情だ。

やや気もそぞろだったけれど、自動ドアが開いた後に鳴った電子音で、反射的に我に返る。ユニホームのポケットに、とっさに単語帳を隠し、ドアの先を向きながら、機械的に、いらっしゃいませ、と言いかけたが、途中で声が詰まった。

「……」

そこに立っていたのは、小柄で、とても美しい女の子だった。僕のクラスメイト。そして、僕がテストで学年唯一負けた女の子。

彼女も面食らったような顔で、入ったところで立ち尽くしていた。

沈黙。

「マツオカ」

沈黙にじれたように、僕の喉から漏れた。
　すると彼女はくすっとはにかんで、右肩にかけていた鞄を肩にかけなおした。
「今年はじめてかも知れないね。サクライくんが私の名前呼んだの」
「そう――だったっけ」
僕は後頭部に手をやりながら記憶を反芻するが、なるほど、彼女の名前を呼んだ記憶は、ここ最近なかった。
「というか、君以外の女子の名前も、最近呼んだ記憶がないな」
　自分としてはジョークのつもりだったんだけど、彼女はそこでにこやかにはにかんでから「ありがと」と言った。
「……」
　何がありがとうなのかは聞かないでいた。きっとそれに意味はないのだと思ったから。

Margin

「サクライくん、髪がちょっと濡れてるね」
「あぁ……」
僕は前髪を指でつまんで見た。
「ここへ来る前にシャワーを浴びたんだけど、乾かす時間がなかったから」
「最近少しずつ寒くなってるから、風邪をひかないようにね」
その会話で安心したように、彼女は店の中へ歩を進め、そこでやっと自動ドアが閉まった。彼女は軽く店内を見回すと、お菓子コーナーへ歩を進めた。
「サクライくん、バイトしてるって私の友達から聞いていたけど、ここだったのね」
僕がここでバイトをしているのは結構有名な話だ。サッカー部の先輩も来ては、僕に奢らせようとしたが、勿論断った。後輩などは、何度かここに通いつめた後に告白してきた、という強者もいた。
だけど僕は全校生徒の顔すべてを記憶しているわけじゃない。クラスメイトの顔が半分近く曖昧なくらいなので、来た客がうちの学校の生徒だということがわからないまま接客していることも多いだろうと思われた。うちの学校には制服がないので、うちの学校の生徒かどうかを判断するのは、僕の性別じゃないが、ぱっと見での判断は難しい。
「こんな夜遅くに、女一人でコンビニなのか？」
僕は肩にかかっていた疑問をぶつけてみた。他に客はいないから、レジカウンターから5メートル程の距離があっても普通に会話している。
「塾の帰りなの。サクライくんみたいに、行かなくてもできるわけじゃないから」
「……」

これは皮肉だろうか。自分はテストで僕に勝ったっていうことの。それがちょっと気に触ったけれど、僕は黙っていた。酷く疲れていて、そんな気分じゃなかった。

彼女がお菓子のパッケージに目を移らせているのが、僕にも見えた。

「……」

改めて見ると、アイドルも彼女のために道を掃き清めそうなくらい可愛い子だ。白い薄手のセーターに、茶色、赤、白のチェックのスカート、黒い細身のブーツ。華奢な体に、柔らかな色を使ったコーディネートがよく似合っている。そんな格好よりも、学校よりも開放された彼女の表情の方が新鮮だった。夜だから女性ホルモンの分泌量が違うのかもしれない、そんな影響かもわからないけれど、とにかく彼女の今の美しさは、学校で見た時とは明らかに違った。

僕は腕組みをしながら、後ろの棚の上に丁度尻を乗せるように寄りかかっていた。背中には煙草が陳列されているラックがある。ボックスタイプの硬い角が、僕の背中に触れる。

「今日のサッカーの試合、勝ててよかったね」

彼女はお菓子に目をやったまま言った。

「見てたのか？」

「うん、音楽室からだと、テレビと同じアングルでよく見えるの。特等席なんだよ」

「――そうか、君は吹奏楽部だったな」

僕はちょっとほっとした。彼女が他の女の子達みたいに、ユータを見にキャーキャー言っている姿は、ちょっと想像できなかったし、何よりそんな姿が見られたら、学校中のニュースになってしまう。

彼女は左手に黒いケースを持っていた。彼女の楽器はフルートだと聞いたことがあった。それを本人から聞いたのは、一年近く前のことだった。

敢えて試合のことは触れなかった。あれだけ自分が恥をさらした試合はここ半年なかったし、出来ればすぐ忘れたかった。だから彼

女がもうその話をしてこないように、何か他のことを先に言ってしまえ、と、何か言うことを考えていたけれど……

「……」

何も思いつかなかった。だからすぐに考えるのをやめた。

僕は腕組みをして唯一の客である彼女を見るでもなく、レジから見て店の奥、ドリンクケースの上の時計を見ていた。11時37分。

沈黙。

やがて彼女がゆっくりお菓子を取って立ち上がると、彼女は僕の方を見ずに言った。

「こうやって普通に会話するの、久しぶりだよね」

「……」

僕は彼女の方を見た。顔を俯かせ、疲れたような、悲しそうな表情をしている。

「ああ、そうだな」

五秒ほど遅れて僕が返事。何を以って普通かはわかってなかったけど。

「本当。最後に話したのがいつだったか、思い出せないくらい……」

吐息のように彼女は静かに呟いた。

「……」

僕達はここ半年、まったく会話を交わしていない。今日話したのがあまりにも久しぶり。

だからといって、まったく面識のないクラスメイトというわけではない。1年前は、ユータ、ジュンイチの次によく個人的な話をしていたクラスメイトだった。

彼女――マツオカ・シオリはこんなに綺麗だけれど、処女で、男と一度も付き合ったことがないという確定情報が、一年の時から流れていて、先輩から同学年まで、誰が彼女を口説き落とせるかということが共通の話題だった。彼女を口説くために、彼女を研究してる奴から、それが昂じ過ぎて、半ばストーカーになってしまった奴もいると聞く。

それがもっと盛り上がって、ファンクラブが作った「マツオカ・シオリオッズ」というものを作った。彼女と付き合うのは誰かを当てるオッズだ。

しかし、このオッズには本当の狙いがあった。まだ誰にも汚されていない彼女に、最も近い男を洗い出し、釘を刺しておくという目的だ。

そして、そのオッズでの本命は、僕だった。

僕と彼女は学年テストで1、2点の差で競い合っているが、僕達二人と3位では、平均点で１０点弱、１０科目で言えば１００点近く差がついている状態で、彼女には僕以外、まったく相手になっていない。

つまり、彼女には僕以外目に入っていない、と判断されたのだ。毎回名前が貼り出されれば、嫌でも僕のことが気になるだろうと思われたらしい。

それに二年になって、英語R、英語W、現代文、古文、数学?、数学Bの6科目が、成績ごとにクラス分けをされている。僕と彼女のいる二年E組は、クラス別の平均点は学年最低で、クラスで彼女と全ての授業を受けているのは僕しかいない。

つまり僕は、男女で分かれる体育以外は、学年で唯一、全ての授業を彼女と共に受けているのだ。この学校で一番彼女と一緒にいる空間が長い、という理由だけで、僕のオッズでの下馬評は上昇した。僕のオッズは三冠馬ばりに高騰し、オッズが2倍を切ってしまったのだった。

このままじゃ賭けが全然面白くない、ということで、そのオッズを考えた連中が２０人くらいで僕のところにやってきて、言った。

「彼女はうちの学校のアイドルで、高嶺の花の奴も多い。お前はそんな奴等から鑑賞の権利も奪うのか。あまり彼女に近付きすぎないでくれないか」

鑑賞というか、単に俗っぽい下品な目で見ているだけだろう、とか、だったら賭け自体をやめればいいんだ、と思った。だけど僕は

それ以上に、自分がそんなことに巻き込まれることの煩わしさから、そのオッズを運営する奴等に、連中の要望を遵守するという誓約書を書いた。今年の春のことだ。

だから2年になって、彼女とこうして話をすること自体が初めてかもしれなかった。1年の時はちょっとした会話や、テスト範囲の確認などの会話も交わしていたが、最近ではそれさえもなくなってしまった。よく授業をサボる僕に、彼女は善意でプリントを届けたり、評価対象の小テストがあるなどと教えてくれるが、僕はつっけんどんに「そうか」と答えるか、返事もしないようになっていた。おかげでその裏のオッズは僕の名前も残っているものの、僕は本命の座からはずれ、賭けとしての様相を保つようになった。

だから、彼女と会話すること自体が久しぶりで、僕はさっきから彼女に何を言っていいのかわからなかった。

あのオッズのことを彼女は知らない。だから彼女は僕に突然避けられた、と思っていても不思議はない。だけどオッズの存在を知らせたところで、彼女の心労が増えるだけだ。何度かストーカーまがいの被害も受けている彼女にそんなことを教えるのは、あまりに不憫だ。かといって自分が何故彼女を避けたのか、オッズの存在なしでそれっぽい嘘が思いつかない。

「やっと普通にサクライくんと喋れた……」

震えるような声が、沈黙を破った。

「え？」

「だって私、サクライくんに嫌われたんだと思ったから。こうして会話できて、今、ちょっとほっとしてるの」

彼女は本当に、ある種恐怖から解放された時のような、強張った笑顔を見せた。

Umbrella

「……」

そうか、そういうものか。僕なんか人と喋らなくてもいられてしまうけれど、人はそうじゃないんだ。僕が一方的に彼女を避けたけど、それを彼女がどう捉えたかということを、今まで考えたことがなかったから、そういう気持ちに気付かなかった。

ただ人と話すのが苦手な僕でも、彼女がこうして久々に僕と話したということを覚えてくれた、そしてこの曇った表情――それだけで彼女に対して、不憫な気持ちが胸を満たした。それは普段あからさまに彼女を避けている僕自身の罪悪感も含まれていたのかも知れないけれど、こんな時くらい彼女に気の効いた台詞のひとつでもかけてやりたかった。

だけど、考えているうちに彼女はレジカウンターに商品を置いていた。冬限定のムースチョコのポッキーだ。彼女は限定版を試すということは、かなりの甘党であると思った。

「これ奢るよ」

「え？」

鞄から財布を出しかけていた彼女は目を丸くした。

「テープでいいだろ」

僕はセロテープをバーコードに貼って、彼女の前に差し出した。

彼女は少し迷ったようにそれを受け取った。

「そんな顔するなよ。いつもプリント届けてくれたりしてくれてるし、たまにはな」

何言ってるんだか。これが彼女への思いやりだとしたら、１５０円出すのが思いやりか。押し付けがましいにも程がある。

案の定、彼女は怪訝な表情で僕を見ている。しかし、嫌悪感を表しているというよりは、戸惑っている顔だ。彼女だって僕と話すのが久しぶりで、若干困惑しているようだ。

「……」
沈黙。
「別に僕は君の事を嫌いなわけじゃないさ」
慣れないことをして招いた沈黙にじれて、わけのわからない言葉が口から漏れた。どうしよう、立て直さねばならない。
「その、僕は単に気分屋なだけでさ。あの、人と話すのも得意じゃないし……」
後半の声は、消えるようにか細くなった。普段ほとんど人と話さないため、僕の語彙ではアドリブで話すには、ワン・センテンスが限界なのだ。
「とにかく、僕のことを気にするのは時間の無駄ってこと」
人と話すのが苦手な僕は、強制的に話を完結させる術を身につけた。僕はよくこの手を使う。そしてこの手を使うと、慣れないことを無理にやった反動が心を覆うのだ。
自然と伏目がちになる僕を、彼女の安心した笑顔が見つめていた。
沈黙。
「あ、雨……」
「え？」
彼女に言われ僕は外を見る。いきなりの大雨だ。店の横、ガラス越しに見える雨樋の端から、既に水がじゃぶじゃぶと水道をひねったように溢れ出ている。このあたりの瓦屋根を模倣したと言っても、サッシ製の瓦屋根には雨の打ちつける音はぱらぱらとよく響いた。
「――雨か」
「……」
五秒。
僕は黙って店の裏へ行き、傘立ての、客の忘れ物として大量にストックしてある中で、一番状態のよさそうなビニール傘を引っ張り出して来る。そしてまた店に戻り、カウンターを出て、レジの前で立ち尽くす彼女に差し出した。
「持っていきな」

「え？　いいの」
彼女は目を少し見開くように、そして僕の顔を見る。
「あぁ、裏にいっぱいあるんだ。このままあっても埃かぶって使えなくなるだけだ」
「でも……コンビニって傘も売るんでしょ？　タダであげたりなんかしたら、店長さんとかに怒られるんじゃ……」
「風邪をひくな、と僕に言ったのは君だろ」
僕は彼女の言葉を遮った。
「じゃあもし君が金を持っていなかったら、この雨の中、僕は持たせる傘があるのにそれを渡さずに君を外に放り出すことになるだろ。その時僕はなんて言って君を見送ればいい」
「……」
「それに君に風邪をひかせて治療費を払うよりも、傘を奢った方が安いからな」
「……」
彼女も僕の目をじっと見ていた。
また沈黙。
「――すまない。こんな言い方しか出来なくて」
あぁ、何でこんな――言いたいことは、こんなことじゃないはずなのに。
はぁ、と、僕は反射的に左手で後頭部をかいた。
「……」
ざぁぁぁぁぁ、と、屋根を叩く雨音。僕は傘を差し出したまま、コンビニ内にエンドレスに流れるＤＪ放送と、雨音に包まれて、僕達はまるで世界に取り残されたように固まっていた。
「――ありがとう」
柔らかな女の子の声がした。僕は顔を上げる。
差し出した傘の柄を、マツオカ・シオリが握り、笑顔を見せていた……
けど――

眦から、ぽろぽろと涙がこぼれていた。安堵したように微笑みながら。

「おい……」

目の前の光景が理解できず、僕はただ、声を漏らすしかできなかった。

「……ごめんなさい。なんか、安心したら急に……えへへ」

「……」

そうか、僕は彼女を拒絶したことに理由があって、その理由に彼女は関係のないままで。でも彼女はその理由がわからないまま僕に拒絶されていたんだ。

そんなことをされた気分はどんなものだろう。今まで考えたこともなかった。

もしかしたら、彼女はコンビニに入ってきた時点で、不安でいっぱいだったのだろう。僕の存在に気付いて、逃げ出したかったかもしれないが、彼女の性格だから、僕を拒絶したら、僕が傷つくと思ってしなかったのだろう。学校で「ああ」か「何か用か？」しか言わないクラスメイトと、こんな店で二人きりなんて、本当なら逃げたくてしょうがなかっただろうに。

例えば僕が、理由もわからないままユータ達から拒絶を受けたら……

――ダメだ。僕は一人でいることがあまり苦痛じゃないから、そんな苦しみはリアルに想像できない。

でも……

嫌な気分になることは確かだ。自分が何をしたか、疑心暗鬼に陥るだろう。謝ろうにも、そんなチャンスすら与えられず、いつまでも心に痛みが残るんだ。それくらいのことは、僕にだってわかる。

僕は彼女の泣き顔をみて、息をつきながら、不思議と穏やかな気持ちを感じていた。

「――僕には君がわからないよ」

「え？」

彼女は涙を手で拭って、顔を上げた。
「そんな泣き虫なのに、何で成績学年トップだなんてタフなことができるのかってな」
そう言って、僕は自分のポケットからポケットティッシュを取り出し、一枚出して彼女に渡す。
「ハンカチなんて気の利いたもの、持ってないからな」
僕が言うと、シオリは本当に可笑しそうに、まだ目に涙を残したまま笑うのだった。

Snoring

雨のせいもあって、シオリ以後の客は、片手で数えられるほどしか来なかった。天気予報が見事に外れ、僕はずぶぬれになって家に帰り、リュートを檻に入れ、服を洗濯機にそのまま放り込んで、スイッチを入れた。風呂に入ろうと思ったが、母親がさっきのことでの腹いせか、ご丁寧にお湯を抜いていたので、もう一度シャワーを浴びて、冷えた体を温めた。僕はトレーナーに短パンをはいた。これが僕の寝具だ。

台所でコップ一杯の麦茶を一気に飲んでから、リビングの奥の廊下を抜ける。そこからはドア一枚隔て、増改築した空間だ。細長い廊下に入ってすぐ右がトイレと洗面所、奥は父と母の部屋、そして左が僕の部屋兼、家の物置だ。

廊下には、加齢臭と安酒の臭いがかすかに残っている。両親の寝室から、ドアを隔てて父のいびきが聞こえてくる。まるで地鳴りのようだ。恐らく僕の部屋にも響くことだろう。

そして、今父がいびきを掻いているという事は、つい最近のご帰還だったということだ。父がいびきを掻くのは、眠りについてから、約一時間の間だ。

別に珍しいことじゃない。むしろ、家にいる方が珍しい。父は自営業のくせに、週に五回は、夜、家にいない。そして、いつも決まって夜中のとんでもない時間に帰ってくる。

父は、友達と飲んでいる、と言っている。その上、この商店街の会合やら、地域のクラブの会員などを引き受けているから、忙しい、と言っている。

僕にとっては、別に理由なんかどうでもよかった。これだけ家を空けていれば、どう繕っても、明らかに不自然だ。浮気をしていたって不思議ではないだろう。あの出っ張った腹に、薄い頭、油の浮いた顔、月に片手で数えられるほどしか風呂に入らない体質を考え

れば、考えにくいが。

だからと言って、僕は親父が浮気をしていようがしていまいが、あまりそういうことに興味はない。むしろ、浮気が原因でこの家が離散すれば、僕にとっては決して悪い話じゃない。この店の経済状況と、僕の成績を考慮して、裁判の場で僕の学費保障とか、僕にとって有利な条件が提示されるかもしれないし、浮気だろうが不倫だろうが婦女暴行だろうが、好きにすればいい。

まあ浮気をしてるかはともかく、親父が何かと理由をつけて、家を出るのには理由がある。自分の母と妻の喧嘩に巻き込まれたくないのだ。一家の大黒柱は、僕達の大黒柱だということを、既に放棄しているのだ。

それが僕が小さな頃から続いている。親父が家を出れば、必然的に母と祖母の泥仕合は、僕の所へとやってくる。親父は難なく、責任問題を逃れられるわけだ。

「俺は、お前達みたいなバカのやる事に巻き込まれて、自分のところまで被害が来るのなんか、まっぴらなんだよ！」

たまに家にいる時、親父はよく、こう言う。こんなことを言う時点で、自分がこの家の大黒柱であることを放棄していると、自分で公表しているようなものだ。その後、手近にあるものを投げつけては、自分も喧嘩に割り込み、泥仕合を更に泥沼化させる。僕の被害は、更に大きくなる。

そんなこと、誰だってそう思っている。僕だってそう思っている。子供を残して、親父は真っ先に家から逃げた。そんな男が、平気で家族を、バカ、と言う。

母親が親父と別れない理由は、おそらく金の問題だ。この家は重要文化財、及び老舗というだけで、テレビや雑誌の取材も来る。大量の観光客が押し寄せる。家に金が流れ込む。

母はギターを習っている（今ではギターにも飽きて、せっかくのギターは僕の娯楽用になってしまったが）。ゴルフだってする。ジムにも通う。月に何度か横浜や六本木にショッピングにだって行け

る。罵られ、親父と祖母に牛馬のように働かされても、金によるガス抜きをしている。罵られる代わりに、普通の主婦よりもいい生活を約束されている。目先の快楽を追っている母は、それに単純に踊らされているわけだ。

どいつもこいつもハイエナみたいだ。全員、現実を突き詰めるのが嫌だから、家族はお互いの利害を一致させて、それを誤魔化しながら、小ずるく、自分勝手に生きようとする。

親父は金を運ぶ代わりに、家族の責任を放棄する権利を主張する。母は働かされ、虐げられている代わりに、金によるガス抜きの権利を得ている。祖母は、6畳間の狭い部屋に、ペスト患者のように隔離政策を布いている代わりに、家から金を要求する権利を得る。

金は、冷めた家庭をいやがおうにも運営させるのだ。たとえそれがどんな臭気を撒き散らしても。

父親が母親の料理を、一度も手をつけず、ゴミ箱に捨てた時は、幼心に悲しかった。そして親父が荒れ狂う姿は恐怖だった。外に憂さ晴らしに出て行く親父の姿を見送ると、親父にメチャクチャに蔑まれた母は、僕に血走った顔で八つ当たりした。僕は首を振って泣くだけしかできなかった。

祖母が幼稚園児だった僕に、何度も、死にたい、死にたい、と言っていた。祖母の部屋は二階で、ベランダに面している。僕の部屋の窓からベランダが見える。僕は幼心に、いつかおばあちゃんが、ベランダから飛び降りるんじゃないか、と思って、夜中眠れずに、何度も窓から外を窺っていた。しかし、翌日には祖母はけろっとして、僕にふてぶてしく話しかけてくる。

親父のいびきを、憎い、以外の感情で聞いたことは、中学生以来、ないだろう。

まさに白川夜船。あのクソ野郎は、今日の夜も、母と祖母が荒れたことを知らない。店を閉め、何かと理由を付けて、外に飲みに出かける。帰ってくるのは夜中のとんでもない時間で、皆が寝静まった頃を見計らうように帰ってくる。この男は、何も考えずに、眠りに

つくことができるわけだ。
　部屋に戻った。丈夫な木製の扉に、自分でボルトを締めたラッチ錠をかけた。
木造の部屋で、２０畳はあるが、ほとんどが一家のガラクタと、衣服の入った箱が、部屋の大半を占めている。映画で、ハリーナントカが住んでいた、物置みたいな部屋に似ている。
僕の私物といえば、僕の衣服の入ったタンスと、僕が小学校に入学した時に、親戚のおばあちゃんに買ってもらった、正面にポスターを貼るタイプの学習机、木製のベッド、そして僕がバイトをして、こつこつと貯めた金で買った中古のノートパソコンと、小型の冷蔵庫だ。
　だけど今日も部屋にパソコンはなかった。バイトから帰ってくる時に、妹の部屋の電気がついているのが見えた。
いつものことだ。僕がバイトに行っている間に、僕のパソコンを勝手に持ち出したのだ。チャットで徹夜ができる女だ。今年高校受験のくせして。
そして、先ほど確かめた、日本対アルゼンチンのサッカーの試合を撮っていたビデオには、試合の後にやっていた、今クールの人気ドラマが上に被せられていた。妹の、僕に対するあてつけだろう。自分が偉いなんて、勘違いするな、とでも言いたいのか。
　妹は、僕よりはるかに頭が悪い。ＩＱでは完全に僕の方が勝っている。それは妹に限ったことじゃない。二流大学を出ている親父なんか、僕は既に超えている、と思っている。世の中学歴だけではない、学歴社会は終わった、とは言うが、学生の身から見れば、学歴は重要だ。中卒に職業選択の自由があるとは言いがたく、高卒だって一般企業の就職率は絶望的な数字だ。大企業の就職試験を受けるにも、一定以上の学歴がなければ、門前払いだ。これが学歴社会じゃなくて、一体何だというんだ。最終学歴は、門に立つための切符ではないか。
　もう夜の三時前だった。明日も学校はある。僕はさっさと眠りに

つくことにした。ベッドにすぐにもぐりこみ、部屋の電気を落とした。

部屋に沈黙が流れると、外に降りしきる雨の美しいアンサンブルが、部屋の外から聞こえる、親父のいびきの音にかき消された。それだけで不快な気持ちになってくる。

布団の中で、僕は、体の中にどす黒い怒りを感じていた。

夜は、僕を暗闇に閉じ込める牢獄だ。ゆっくりと僕を締め付ける。毎日家から逃げて、事なかれ主義を決め込んでいる、外面がいいだけの内弁慶の父。くだらないことで激昂し、僕の飯さえ用意しない、愛情のかけらもない母。自分の姉や、息子にも疎まれ、あの狭い部屋に閉じこもり、金で私欲を満たす祖母。勝手放題の言動をしている割に、深夜までパソコンの前に座って、１５の身空で、人生を消化しているだけの妹――

僕の利害だけが一致していない。僕は、この家の掃き溜め。こんなはずじゃないのに。

何で僕が、こんなクソ野郎どものために、こんなに我慢しなければならないんだろう。何で僕はこんなクソ野郎どものために不愉快な思いをしなくてはいけないのだろうか。僕は、父よりも、母よりも、祖母よりも、妹よりも、高く飛べる力を持っているはずなのに。

こんなクソ野郎が『大人』で、どうして僕は『子供』なんだろう。強くなりたかった。何もかも凌駕して、目の前の気に入らないものを全て消したかった。誰にも頼れないから、そうして生きるしかなかった。そのための努力はしたつもりだった。

しかし実際はどうだ。成績ではあんな女の子に負け、サッカーだって自分の中では左遷に等しい、ディフェンダー転向を言い渡された。僕の気持ちなど、何も考えもせずに。

不快ないびきを子守唄に、僕はいつまでも怒りを抑えられなかった。

ちくしょう、ちくしょう。

このままでいいのかよ、サクライ・ケースケ。お前はこんな生き

方をしている場合じゃないだろう。
悔しかったら、もっと力振り絞ってみろよ。

Early morning

ベッドの中にいたのは2時間半程度で、寝ているのか起きているのかもよくわからないような状態だった。何度も寝返りを打っているうちに、起きる時間が来てしまった感じだ。

最近はどんなに疲れていても、目覚ましよりも早く起きる習慣がついた。目覚ましの電子ベルで起きるとどっと疲れが出るから、それに先回りするように体が出来上がってきた。

そろそろ布団を出ることが辛い季節だ。ベッドから出て、まだ誰もいないリビングへ。冷蔵庫に入れておいた、昨日バイト先でもらった弁当を引っ張り出して、レンジにかける。

別に料理が出来ないわけじゃないし、朝食を作る時間がないわけじゃない。親に逆らい過ぎた僕が家の食材を使い続ければ、いずれは金銭が発生する。それが煩わしいだけ。

だから僕の食事は、ほとんど毎日毎食が期限の切れたコンビニ弁当に、自分で作ったタダ同然の麦茶だ。不思議なもので、毎日同じ時間に同じものを同じ量食べていると、これ以上の食事を望まなくなってしまった。

親から養ってもらっているなんて死んでも思われたくないから、一番辛い食費の問題も、こんな悪条件でもクリアできた。毎日コンビニ弁当を食べるよりも、あの親に頭を下げる方が嫌だった。

家族がいる時は絶対に座らないリビングの椅子に座り、朝食を取る。朝からチキンタツタ弁当なんかを食べて、重いとか、もうそんなものはお構いなしだ。味覚を殺して、単に腹を膨らませるためだけに食事をする感覚が出来上がると、食べ合わせとかがまったく気にならなくなる。味が悪くたって、空腹なら何だって食える。

玄関から新聞を取ってきて、新聞を読みながらテレビをつける。6時頃のニュースってのは、余計な情報が少なくて都合がいい。7時過ぎの民放のニュースは僕にとって不必要な情報ばかりだ。

新聞で昨日のニュース、とりわけミャンマーでのクーデター問題の記事に目を通しながら、テレビのアナウンサーの声が聞こえてくる。

「高校教諭のわいせつ事件に、スカートを短くするなど色気づく女子高生も問題、だという〇〇議員の発言に、女性議員が団結し、国会での質疑が昨日行われました。昨日の国会の模様です』

『あなたのその発言は、女に対する侮辱です！』

『そのような語弊があったことには、深く反省し、発言を取り消させていただきます』

『政治家として、道義的責任をどう取るおつもりですか！』

『それにつきましては、後日、別の場を借りて、謝罪させていただきます・・・・・・』

『このように、発言取り消しを申し出ていますが、永田町に、また舌禍問題が起こりそうですね。この問題について、今日は□□大学の××教授と話し合っていきたいと思います――』

「・・・・・・」

――何でこんな連中が、国のトップなんだろう。

何でこんな奴等が「大人」で、僕は「子供」何だろう。

僕は冷蔵庫から昼用の弁当を取り出し、鞄に入れる。母が僕の弁当を作ることはない。僕と母の二人しか夜に家にいない場合は、母は絶対に僕の飯を作らない。僕を軽んじているので作るのを面倒くさがるからだ。大体友達とレストランに行ってしまうが、ひどい時は、僕が母の飯を作らされるくらいだ。

何故僕があいつら以下まで見下されねばならないのだろう。親父と僕を比べたら、僕の方が明らかに親父よりも勝っているはずなのに。

しかし親子間で、喧嘩の腕力と、それ以外の能力というのは、刀と鞘のようなものだ。どんなに鞘の装飾が豪華でも、刀に力がなければ鞘は単なる付属品に過ぎない。

基礎体力の差は歴然でも、肝心の体格で、僕は圧倒的に劣ってい

る。身長１８０センチ、体重１１０キロという親父が暴れだせば、僕には止める力はない。僕が弱いから、親父が、家庭から逃げているのは誰が見ても明らかなのに、認めさせることが出来ないのだ。

中学に上がった頃から、僕は夜中に飲んだくれて帰る親父に文句を言い始めた。

「あんたがしっかりしないから、この家はメチャクチャなんだ！家がメチャクチャなのに、あんたはとんでもない時間まで、外遊び歩きやがって！」

酒の席で自分を責められ、不快を覚えたのだろう。その度僕は家のフローリングに這いつくばされ、血反吐を吐いた。僕は何度やっても、親父の腕に捕らえられ、人間サンドバッグの憂き目を見た。僕は親父に敵わなかった。他のことでは全ての面であいつに勝っているはずなのに。

元々そういう男なのだ。僕が小さかった頃から、何か気に入らないことがあるたびに、僕に八つ当たりして、憂さを晴らしてきた。母と祖母が喧嘩する度、新しい傷が増えた。

小さい時の僕は、よく親父といた記憶がある。親父に七十年代のレコードとか映画のビデオを見せられて、焼酎を飲みながら饒舌に語っていた記憶ばかりだ。僕はそれが不快で仕方がなかった。親父の気に障れば、生意気だと叩かれるから、必死に親父のご機嫌を取って、ただ頷いていた。機嫌が悪い時の親父とも、いつも一緒にいた。血走った顔をして、ウーロン茶で割った焼酎をかっくらって、大きな音を立ててグラスを置いて、不機嫌そうに溜息をつく。僕は体をぐっと緊張させるが、その場から逃げられない。逃げると親父はそれを察して、更に不機嫌になる。ここでじっとしている方が安全だと知っていたが、いつ殴られるかわからず、一挙手一投足に気を配るのは、身の毛もよだつような恐怖だった。

パートを何人も雇っている店は、親父一人いなくても、運営できる。親父は、昼間からパチンコに行く日もある。パチンコの情報誌が、リビングに山積みになっている。

ふざけやがって。

県立ながら、私服が許されているから、僕は赤いインナーの上に茶色いレザーブルゾン、リーバイスのデニムを履き、適当にウォレットチェーンやクロスのシルバーネックレス、指輪をつける。

結構お洒落だと勘違いされるが、着こなしはほとんどユータやジュンイチから教わったものだし、所持している服はユータ達からのもらいものか、季節の変わり目に一回古着屋に行ってチョイスしただけだ。今日の格好だって、トータルコーディネートは2万円かかっていないだろう。

アクセサリーだって、つい最近まで自分は一生しないだろうと思っていたくらい思い入れがない。彼女がいた時に、なんとなくペアリングなんてもんをしていたくらいだ。

ただ学校では、望まずとも僕はそこそこ有名人だ。服装の場合、適当に選ぶことが適当ではないのだとわかった。なまじ有名な分、いい加減な格好をしているだけで、「もっといい格好をしろ」だの「センスがない」だの色々と干渉される。

入学して一年もして、ようやく自分のポジションというのがわかってきて、それ以来、服装で『崩す』ってことを覚えた。この家庭環境を心配されなくてもいい隠れ蓑にもなるし、それっぽい格好で、自分が本質的には普通の学生っぽく、歳相応っぽく見せようと考えるようになった。

腹を膨らますため、牛乳をゆっくりと飲む。麦茶やコーヒーより、家にいる時は牛乳を好む。背が高くなりたいというよりは、腹持ちがいいというのと、ほぼ三食コンビニ弁当の生活なので、不足しがちな栄養を補うためだ。大体二日に一度はサラダか野菜ジュースをコンビニで買う。

朝食を食べ終わり、歯を磨く。いくら腹が減っていても、歯を磨いてしまうと、しばらくは食う気が収まってしまう。少ない食生活の中で僕が覚えた知識の一つだ。

教科書はほとんど学校に置きっぱなしなので、鞄が非常に軽い。弁

当箱と、運動用のシャツとスウェットだけを鞄に放り込んだ。僕は階段を下りる。

玄関の檻に入っているリュートにもドッグフードとミルクを与えた。自分の右手にドッグフードを少し乗せて、リュートの前に出す。リュートは喜んで、僕の掌を嘗める。僕も左手でリュートの頭を撫でてやる。

犬だってしつければこうやってきちんとするのに。うちの家族はまったく犬以下だ。

愛用のナイキのスニーカーを履く。今ではレアなアメリカ製だが、もう履き潰したので、値はつかないだろう。履きながら左腕に巻かれた愛用のＧ－ｓｈｏｃｋの液晶デジタル画面を覗くと、６時４３分を指していた。このＧ－ｓｈｏｃｋは、買い替えてもいいのだが、僕が買ったブーム全盛の小５の冬以来、一度も止まったことがない代物だ。度々腕から落ちてしまうが、正確に動いているため、替えるに替えられないのだ。僕の周りで、デジタル表示の腕時計を使っている連中は少ないので、さすがに僕も買い替えたい。

リュートにリードをつけて、シャベルとビニール袋を持って散歩に出る。近所を適当に回り、便が出たら終了。リュートは賢いから、わざわざ散歩に連れて行かなくても便くらい自分でするが、散歩に連れて行かなければ体がなまって太ってしまうし、家族がリュートの檻を掃除することはないので、自分で排泄した便を、犬の本能で食べてしまう。

リュートは既に家族には厄介者扱いだ。檻の中で便をしても片付けもしない。自分達の方がそれ以上の汚物だってことも知らないで。

駅から埼玉高校までは、歩くと２０分弱かかるが、県立なのでスクールバスは出ていない。部活動をしている人間が自転車通学を許され、それ以外の生徒は、自宅、または駅から徒歩か公共バスで学校へ通う。

僕は鼻から大きく深呼吸をする。この時期の朝は朝もやがかかってノスタルジックだ。この軽く新鮮に濡れた空気が僕は好きだ。早

朝と呼ばれるこの時間はどこか寝ぼけた雰囲気を残していて、人の気配が少ない。冷たい風を受けると眠気も冴えてくる。

路地に入ると街の方針でデザインされた、白地に街の名所のプリントされた石畳が続く。昨日の雨が乾ききらず、湿った空気の匂いが香り、軽くかかった朝もやが石畳とマッチして、郷愁を誘う。

路地のパン屋がもう開いていて、何人かカウンターに並んでサンドイッチを選んでいた。焼きたてのパンの香りがする。僕は昔ここのチーズ入りチキンカツサンドが好きだったが、最後に食べたのはいつだっただろう。

カウンターの前に、長年の侵食を受け、額のせり上がったおじさんが、サンドイッチを真剣な顔立ちで吟味している。コンビニのバイトをしている時もそうだが、こういう人を見ると、酷く物悲しい気分になる。あの年になって場末のサンドイッチを真剣に悩むような人種もいるのだ。それは時間に余裕があるのか、それとも手持ち無沙汰なのか。

そんな景色を通り過ぎて、十字路を渡りしばらく行くと、右手に市民会館、左に小学校が見えてくる。ここが僕の母校だ。嫌な思い出しかないが、幸いこの小学校を出た僕の同窓は、誰も埼玉高校には来なかった。しかしマツオカ・シオリは、僕が中学受験をしなければ、僕が進学するはずだった公立中学に通っていたらしい。

その先――長い坂をブレーキをかけずに下り降りる。昔の戦では、源義経が一の谷の合戦でやったように、崖からの急襲で攻めた戦には有名なものが多い。僕はこの坂を滑走するたびに、逆落としをかける昔の戦に思いを馳せる。

坂の終わりが埼玉高校だった。僕は坂での加速を殺さないように、ブレーキを踏まず、そのまま校門前のT字路の信号のない横断歩道を突っ切り、そのまま校内へ滑り込むと、7時ジャストだった。駐輪場に自転車をバーでしっかり固定して、僕はそのままサッカー部の部室に向かった。

埼玉高校の運動部は、二年生で引退が主だ。だから部室は先日先

輩が引退し、僕達が引き継いだ。部室は一階と二階に一つずつあり、二階の部室を一年が使い、二年は一階の部室を使う決まりだった。

男子しかいないサッカー部の部室は、富士の樹海状態だ。先輩が汚したのだが、掃除する時間がないし、重たい用具が積み重なっているため、とても一人で全て掃除できる状態ではない。不潔で不衛生な部室——共学なのに、女子のマネージャーがいないわけだ（顧問のイイジマが募集を許さないせいもあるんだけど）。

ボロボロのドアを開けると、昨日の僕達の汗と夜の雨の混ざった、じめっとした臭いがした。ひんやりとした鉄筋コンクリート製の部屋は、空気の抜けかけたボールやらの用具が雑然と詰まれ、周りには壊れたスパイクがいくつも転がっている。かび臭く、湿気に満たされた、古い裸電球が一つぶら下がっているだけの薄暗い部屋は、橋の下のボクシングジムか、世界史の教科書に写真が載っているアヘン窟のようだった。

Morning gathering

「オス」

部長のヒラヤマ・ユータが一人、既に部室にいた。背もたれのビニールがはがれ、中の黄色い綿が飛び出し、今にも足が折れそうな、さび付いたパイプ椅子に座って、スパイクを履いているところだった。こんな部屋に一人溶け込んでいるユータの姿は、本当にアヘン中毒者のようにも見える。

僕も、オス、と言った。空いている椅子に鞄を置いて、シャツとスウェットを取り出し、着替える。

「お前もマメだよな。バイトもして、朝練にも出るんだから」

「……」

マメだとか、サッカーが好きだとか、そんなことを思ったことは一度もない。家にいる時間を極力減らしたいだけだ。

自分のことは自分でやっている。掃除も洗濯も、料理だって自分でやる。勉強だって県立に入って、自分で出すようになった。あの家族に養われている、という現実が嫌なんだ。向こうにも、養ってやってる、と思われたくないし。

僕の家族のことは、家の外では誰にも話したことはない。理由は二つある。

一つは面倒だから。何が面倒かって、口に出すだけでも忌々しいのにわざわざあんなものを家の外で思い出す僕の所作と、話した相手が取るリアクションを見届けるのが。

特に問題なのは後者。甘ったれるな、と言ったり、同情するフリをしたり。解決の助けにもならないくせに、返答が癇に障る場合が多い。

もう一つは、僕自身いまだに家庭から抜け出せないなんて、そんなガキっぽい悩みを溜め込む自分に呆れているからだ。わざわざ話して、惨めの上塗りを公表することもない。高校生にもなって、親

がどうとか言い訳しているような奴になりたくなかったからだ。そのせいもあって、僕は随分と強くなれたような気がする。

これは僕自身の問題だってことは自分でもわかっていた。それを決めた時に、僕の人格は既に完成していたのだろう。無駄なことを話さずにいることで、口数も減った。

その分頭の中での自問自答が増えた。外に吐き出さない分、自分の中で怒りをやっつけなくてはいけなくなった僕の感情は、悪魔の大鍋みたいな感情のるつぼと化している。

呑気な同級生に呪いの言葉を吐いている時間が増えた。それを言わないのは、そういうことを言って自分を使い減らしたくないから。僕の性格では、言わないでいいことを決めると他のこともろくに喋らなくなる。それが一番楽だから。

僕は皆の前でいつも黙っているが、懐にいつもナイフを隠している。憎悪という名のナイフ。暴力の象徴。そして、ナイフを封じる鞘のタガが、少しずつ外れていくのを最近よく感じている。

「生活のリズムを崩したくないんだ」

我ながら心にもないことを言った。最近、言い訳をよく考えるようになったと思う。

朝練と言っても、ユータが作り出した、有志が好きな時にやるもので、強制ではない。進学校のこの学校で朝連を強制すると、成績偏重気味の教師連が渋い顔をする。基本的に強制の朝練があるのは、野球部だけだ。

結局僕とユータしか来なかった。というか、大体この二人しか集まらない。それだけ僕とユータが暇で、他の連中が人生においてサッカーより楽しいか、大事なことを知っているのだろう。それはきっと幸せな人生だと思う。サッカーなんて、やれば絶対疲れるわけだし、楽して楽しめるものがあるなら、それをやるのが一番いい。僕だって暇じゃなかったら、練習なんて来ないだろう。

「そういえば」

僕は思い出した。ユータにも、女という退屈しのぎがあった。

「ユータ、昨日彼女抱いたか？」
ユータはそれを訊いて少し沈黙したが、少し照れ笑いしながら答える。
「ああ、部活帰り、流れでそうなっちゃった・・・・・・」
照れくさそうに舌を出した。
やっぱり。
でも僕は、もう彼女の名前も覚えていない。
固有名詞を僕は進んで覚えない。クラスメイトの半分の名前が曖昧なくらいだ。あのでかい胸を持っている時点で、ユータをそそらせる女の子であったことは確かだ。彼女の情報は、名前より胸が優先された。僕はあの時それを峻別したのだろう。それだけわかれば十分だと。
昨日の活躍をそのままいい流れにして、彼女に考える暇も与えずに、ベッドに誘い込んだユータの姿を思うと、ユータはうまく女を抱いていると思う。僕が同じ立場でも、絶対彼女をベッドには運べないだろう。そういう、流れ――さりげなさが、僕には明らかに不足している。
賭けに負けたジュンイチの悔しがる顔が目に浮かぶ。こんな簡単に金をもらっていいのかと思う。
高校生にとって５００円は、リーズナブル且つユーズフルな額だ。一食飯を食うことも可能だし、カラオケなんかで十分遊べる。賭け金が札になると、途端切実になる。五百円はそういう意味でも絶妙な遊びの額だ。それ以上の額の賭けだったら、途端に後処理が面倒臭くなる。高校生の大部分はそれくらいの金銭感覚は持っている。
「しかし参ったよ。彼女、煙草吸ってたんだなぁ。ずっと気がつかなかった」
「今度から、付き合う女を注意深く見ることだな」
僕は心ばかりの忠告を餞別した。僕は一目でそれに気がついたけれど。
人生というのは手品ショーに似ていて、タネを見抜く眼力に優れ

ている程面白くないものだ。まさに今のユータと僕はそういう感じかも知れない。簡単な手品のタネにも気付かず、え〜！　とか言っていられる奴の方が、きっと人生は楽しいのだろう。別に手品のタネを見切れたって、自分の益になる事なんて何もないんだから。

グラウンドに行くまで、ユータは昨日の彼女のことをつぶさに語っていたが、僕はそれに、へえ、と、どこぞのテレビ風の反応を続けていた。話の内容も、僕にまったく関係ないものだったと思う。だから聞き流していた。

しかし、アップ代わりに軽く走りだしてからは、女の話はぷっつりと途絶えた。遊び人のユータに僕達が文句も言わず部長として従っているのは、その技術以上に、サッカー一筋のこのスタイルによるものなのだ。

別にこいつのフォローをする気はないが、ユータはカッコつけない。自分の素のカッコよさを自覚して、必要以上に脚色しない。ボサボサ頭は酷く無造作だし、服のセンスも奇を衒わず。体力が落ちる煙草は勿論やらない。ピュアというよりはナチュラル——静かなること林の如く。自然体に佇んで、本能の赴くまま、感じるままに動く男。単純で軽い奴だが、付き合ってみると深みが見えてくる男。まるで野生の動物のよう。

こいつがフォワード向きなのが、何となくわかる気がする。ユータは野性の勘のようなものがずば抜けている。あの三国志の乱世の奸雄、曹操の長所もその勘の鋭さだったと言われている。サッカーのような瞬時の判断を問う戦いに向いている。こいつは野球だったらここまでの選手にはならなかっただろう。

適当に二人でボール回しをする。さすが芝生。もう水を吸い込んで、虎刈りの芝生は毛先に雫を持って、僕達が動く度、それを飛ばしている。こんなグラウンドが毎朝二人の貸切なんだから、こんな贅沢なことはない。

二人でいつもする練習は、大抵決まっている。僕がクロスを上げ、ユータがシュートを決める、至極単純なものだ。このチームでプレ

ースキックを蹴るのは全て僕なので、それから始まった練習だ。色々な角度、高度のクロス、センタリングを僕が上げて、ユータがそれに合わせる、という練習を繰り返す。

この朝練以外で、僕がプレースキックの練習をする機会は、極めて少ない。しかしこの朝連で、ユータが的確に注文をしてくれるおかげで、僕のキックの精度は上がった。フリーキックは既に超高校級と、イイジマからも太鼓判を押されている。

約１５０本、ボールを上げた。何度も蹴ってはまた次を蹴る。それを二人でやるのだから、練習時間の半分はボール拾いで終わる。片付けに時間をかけないためには、僕が決めやすいクロスを上げ、ユータがゴールに決めればボールが散らばらないで済む。その意識も僕達の上達を早めた。

８時を過ぎると、登校してきた生徒がぞろぞろとグラウンドの横を通る。通るというか、暇な女子生徒は昨日の試合同様、外の金網越しにユータを見物するのだ。確かにこうやって見ると、私生活はどうあれ、いかにもサッカー一直線のスポーツマンだ。僕はここでは引き立て役。如何にカッコよくゴールを決めさせてやるかを重視したボールを蹴る。

朝のＨＲ１５分前になると、２００球近いサッカーボールが、グラウンドのここかしこに散らばる。これを二人で全て片付けてから部室に運び、着替えて教室に戻らなくてはいけないが、最近では両方の精度が上がり、半分以上はゴールの中だ。

部室で急いで着替え終わった時には既に八時二十八分だった。部室を弾丸のように出た僕達は学校一、二の俊足コンビ、マラソン大会では陸上部も相手にならない。去年はラスト５００メートルのデッドヒートでユータに五秒引き離されて二位だった。

正門前はもう人はほとんどいなかった。もうこの時間で間に合わなかった奴は、わざとゆっくり来るだろう。下駄箱で靴を乱暴に入れて、上履きを出す。

「大丈夫か？　ラブレター入ってなかったか？」

なんてユータは言う。
「入ってたら、またぶたれればいい」
僕は適当にとって返す。
ははっ、とユータが笑った時に、チャイムが鳴った。僕達二人は三階に向かう。ユータは大きなストライドで階段を二段飛ばしで駆け上がる。
教室の後ろの戸を開けると、ちょうど担任のスズキが出席を取っているところだった。クラスメイトは全員揃っていて、視線が僕達の方へすべて向けられる。教室の真ん中より奥の三番目に座るジュンイチが笑顔で軽く手を上げた。僕に五百円取られるとも知らずに。
「すいません、遅刻しました」
ユータは頭をかく。その影から僕は顔を出して会釈。
「練習してたのが見えてたからいいよ」
スズキはハンカチで侵食された額を拭った。
「あ、どうも」
「しかしヒラヤマ」
スズキは間を置かずに口を開いた。
「お前赤点3つも取ってるの見た翌日だろう？　少しは勉強しろよ……サクライみたいに朝連やれる身分じゃないぞ」
席に向かいかけたユータは足を止めて、オーバーに教室を見回した。
「えぇーっ！　ちょっ……こんなところで赤点の数公表はないでしょ先生」
そこでクラスから、くすくすっと笑いが漏れた。
「もはやお前の赤点数に、誰もリアクション示してないじゃないか」
まだ教室の引き戸から一歩踏み入れたところで止まっていた僕は、鞄を肩に吊ったままそうつぶやいた。
クラス中が爆笑。その中心でユータはしかめ面をした。
「お前が赤点3つも取るってのが、こんなに皆の日常として受け止められてるんだな」

「ほっとけよ」
ユータは怒ったような声を出した。
「いつも追試期間中はいっぱいいっぱいなんだぜ。少しは同情でもしてもらわなくちゃ合わないってもんだ」
またクラス中が笑いに包まれた。僕は若干胸をいかめしく張る仕草をした。
「少なくとも僕が赤点を3つ取ったら、お前みたいにシケた反応を皆にさせない自信があるよ」
それを言った僕を見て、ユータはわざとらしく後ろにのけぞるリアクションをした。
「――何も言い返せねぇ」
ここで今日イチの笑い。そういう勝ち誇り方があるか？　ということ。僕の成績による裏打ちと、聞く人間の最低限の知識があって成立するジョークだ。
「お前が赤点3つも取ったら、もうニュースだよ」
自分の席から、ジュンイチが合いの手を入れた。僕はジュンイチの方を首だけ向けて、皮肉っぽい笑みを作る。
「当たり前だ。僕の場合、成績をとってるのが一番目立たないんだ。僕は目立ちたくないから、テストで点を取っておくのさ」
「まったく、あれだけ授業サボってるくせに、ふざけやがって」
ジュンイチはニコニコ顔で親指を突き出し、それを自分の首の前で横に引いた。
僕達がこうしてHRを遅刻すると、いつからか、フリさえあれば二人でアドリブコントをやるのが常になっていた。
一番の問題発言としていまだに残っているのは、ユータが皆の前でスベった時に、僕が後ろから肩を叩いて「大丈夫、お前がスベっても、いざとなったら僕がキスでもして笑いに変えてやるよ」と言ったことだろう。その時ユータは「ここでスベるより、そっちの方が大事故だわ」と言った。結果クラス中の空気がそれで持ち直したからいいじゃないか。

「お前たち、毎度毎度いい加減にしろ」
スズキは困惑したように言った。
「何だ。先生、俺に話をフッたんじゃないんっすか？」
ユータが悪びれずに言うものだから、スズキはもうその後に二の句も付けられなかった。クラスメイトが、どちらかと言うと軽蔑の対象である担任に一泡吹かせたことで、声を殺したような笑いをあちこちで漏らした。
「サクライ」そしてスズキは僕に目を向ける。
「お前がサッカー部に勉強させないでどうする？　副部長なんだろ？」
「……」
僕はその言葉に、条件反射みたいな速さで、怒りが脳天を突き抜けた。
些細なことかもしれない。この男だって、悪気があって言ったわけでないことくらい知っている。
僕はこの男を尊敬もしていない。そんな奴にさえ僕は見下されている。僕の気持ちなんか無視しても厭わず、当然の如く押し付け仕事を任せてくるような、その言葉の意味を理解したのだ。いや、理解、というより、感知、という速さのレベルで。
気がつくと、僕はスズキに歩み寄り、黒板に追い詰め、スズキの顔のすぐ横に手を伸ばす。黒板が僕の掌で、バン、と音を立てる。
「成り行きで副部長をしているが、僕は部員の世話係じゃない。サッカー部の成績を、僕が引き受けたつもりも、引き受ける義理も義務もない。僕を便利屋扱いするな」
僕の舌鋒に、クラスが凍りついた。担任の顔は、呆然とした表情になる。
しまった、と思い、僕はクラスメイトを、横目で少し伺う。
恐怖を感じた顔だ。暴力に対して身構えながら、腰が引けている顔だった。僕の姿が、それほど鋭い殺気を放っていたのか。
「ケースケ、どうしたんだよ」

ユータが二人の中に割って入る。僕の言い方がよっぽど冷たかったのか、何かを察したらしい。僕はユータの諫めを受け入れて、スズキの目を一瞥すると、目をそむけて踵を返し、もうどうとでもなれ、と思い、今までの不満を叩きつけるように、無造作に自分の机にスポーツバッグを叩きつけた。

「・・・・・・」

ガン、という音が反響すると共に席に着いたが、僕の剣幕にクラス中が退きまくっている。居心地の悪い空気の中、ユータも怪訝そうな顔をして、すごすご自分の席に向かっていくのが見えた。

スズキはなんとか持ち直して、一つ唾を飲んでから声を出した。

「マツオカ、それと・・・・・・」

スズキは、シオリの名前を言った後に、おずおずと、頬杖をつく僕の方を見た。

「サクライ。今日、事務所に奨学生の手続きに行け」

「はい」

「……」

シオリは返事をしたが、僕は何も言わなかった。

僕とシオリは、学年で二名選ばれる奨学生だ。奨学生とは、月に一万円の奨学金が、無償で生徒のところに届けられる。それだけのものだ。強いて付け加えるなら――学校内で、少し名前が売れるくらいだろう。

その金は、僕の場合、親に没収されているのだが――

Basketball

一時間目は体育だった。元々今日は土手のグラウンドでマラソンの予定だったが、昨日の雨でグラウンドが使えないので、バスケットボールに変更になった。土手のグラウンドは水はけが最悪で、雨が降れば3日は使えない。僕達は喜んで、すぐに服を着替えて、体育館に向かった。

隣のコートでは、女子がバレーボールを持ったり、女子の体育委員がネットを取り付けたりしていた。ネット一枚隔てて、奥のコートで僕達は、出席番号順にチームを決めた。ユータとも、ジュンイチとも別チームだ。E組を受け持つ体育教師は、間の悪いことに、サッカー部顧問のイイジマだった。

「ごめんな、今日は女子もバレーで、一面しかコート取れなかったんだ。見学時間が多くなるけれど、我慢してくれ」

僕はバスケットボールを持っていた。イイジマに促され、僕はボールをイイジマに上手投げでパスした。これでも元名セカンド。伸びのあるパスがイイジマの胸にストライクで決まった。とかく下半身ばかり強くなって、体のバランスの取れなくなるサッカーだが、中学での野球の経験は、僕の上半身の発育に、そこそこ生きたと言えるだろう。

「丁度いいや、ユータとサクライのチームでやるか？　お前ら、体育は学年一位二位だし」

皆が賛成の拍手をした。

僕はチャンスだと思った。

昨日誓った、自分の進化。まずは自分の力を確かめなくてはならない。それについては、ユータは絶好の物差しになる相手だった。

僕とユータはじゃんけんをした。僕が負け、僕らのチームは各自で用意したジャージの上に、赤いビブスをつけた。僕は１０番のゼッケンを着た。

ユータと僕のチームの一人がジャンプボールをする。僕はやや自軍寄りにポジションをとった。

イイジマのトスが高く上がる。長身の二人はジャンプするが、ユータが勝つに決まっている。ユータが叩いたボールは、僕のチームの陣地に飛ばされた。

自軍寄りにポジションを取って、正解だった。僕は飛んできたボールを手を伸ばしてインターセプトして、そのまま自分で敵陣に切り込んだ。

サッカー部でも僕の持ち味は運動量と加速力だ。既に前にいた二人を振り切っていた。着地したユータも、大きく引き離され、僕のスピードにはついて来れない。僕はゴール下まで潜り込み、センターに立っている一人をわずかにかけたフェイクで惑わせてかわし、レイアップシュートを決めた。

イイジマのホイッスル。得点係についた男子が僕のチームの得点を2枚めくった。僕はすぐに自軍に戻る。勿論僕はユータをマークする。

「ケースケ、今の速攻、マジ速かったぜ」

ユータは僕を振り切ろうとしながら、笑って言ったが、僕は答えなかった。

ユータのチームの一人が投げたスローインは、ロングスローでユータの所に来た。それはある程度読めていたので、僕は前に出て、ボールをジャンプしてインターセプトした。すぐに僕の前にユータが回りこむ。僕は間髪入れずに素早くターンし、ユータをかわした。

あっ、という、ユータの感嘆の声が後ろでした。ゴール下には二人がいたので、僕はスリーポイントを打った。ボールは高く――ディフェンスの頭を超え、すぱっ、という、快い音がした。ギャラリーがどよめいた。

今度はユータはスローインをもらいに行った。ボールを受け取ると僕が前につく。

「ケースケ、ずいぶん飛ばしてるじゃん」

ユータは半見でドリブルしながら僕に言った。
しかし僕は間髪入れずに前かがみになって、ユータの体で隠れるようになって弾んでいるボールに手を入れた。
「おっと！」
今度はユータが背中方向にターンし、僕の手をかわした。僕を尻目に、すぐにユータは速攻する。僕は半回転して、右足で踏ん張って体を止めて、全力で追いかける。
僕とユータでは、身長は２５センチも違う。足の速さもユータが若干上だ。しかし、ユータは今、不慣れなバスケットボールを操っている。追いつける。
ボールを扱っていない分、僕は素早くユータの前に回り込み、体を入れる。基本的に所作はサッカーと同じだ。軽量だけど足腰の強さには自信がある。僕はチーム内の誰にも、競り合って負けたことはなかった。ユータも体勢を崩したが、僕が軽すぎるせいか、ユータはびくともしない。
ボールを持ったまま、ジャンプを強行した。僕も同時にジャンプして、手を伸ばした。ボールには届かなかったが、お互い無理な体勢でのジャンプで、空中でバランスを崩した。ユータは手首だけでボールを投げたが、足首よりは不器用で、当然入るわけもない。バランスを崩したユータは、僕と一緒にエンドラインへ倒れこんだ。ホイッスルが響く。
「ディフェンスファウル！　ユータのフリースローな」
僕とユータは重なり合って倒れ、まだ起き上がらないまま、その判定を聞いた。
ユータは先に起き上がり、僕に手を差し伸べて僕を起こすと、僕の肩を叩いた。
「いてて……今のはイエローカードものだぞ」

Enemy

試合は２０対１４で、僕のチームが勝利した。コート外に戻る僕は既に精魂尽き、体育館の壁に寄りかかり、そのままぐったりと足を伸ばして座り込んだ。頭に持参していたアディダスのスポーツタオルをかける。２０点全て僕が取り、相手の得点も全てユータがあげたもの。結局、僕とユータ、二人だけの試合だった。

タオルを頭にかけて見えなかったけれど、ギャラリーが僕を見ているのがわかった。普段は感情を表に出すことも珍しい僕が、これだけエキサイトする姿など、誰にも見せたことがない。

皆、僕がユータに勝つことなど予想していなかったのだろう。そういう認識を、クラスメイトは僕に持っていたのだ。『決して一番にならない男』――僕はそういう評価をされていたんだ。それは前から僕自身もわかっていた。

次の試合が始まっていた。呼吸が落ち着くと、体育館を出て、上のジャージを脱ぎ、近くにあった水飲み場の蛇口をひねる。静かに流れる柔らかな水流で、軽く手を濡らしてから、手桶で顔を洗い、蛇口を最大にひねり、激しい水流の下に、湯気を出しそうなくらい火照った頭を無造作に突っ込んだ。

秋の水は冷たい。頭が一気に冷めていく感じが好きで、僕は汗をかいた後よくこうする。

頭を上げ、振ってみる。飛沫が僕の髪の毛から飛び散った。それでもまだ、髪の毛の先や、顎から水が滴っていた。僕は両手で前髪をかきあげて、水を落とした。裸の上半身に、水滴がついた。

頭が冷めると考えがしっかりしてきた。僕は水飲み場近くの石畳に座り先ほどの試合を反芻する。

しかし思い返してみると、ユータに勝ったのに、気持ちはまったく晴れやかではなかった。湧き上がるのは、怒気にも似た、焼け付くような感情だけだ。アドレナリンが体の中で、伝達する場所を間

違えた感じ――僕の精神は酷く掻き乱れていた。

恐らく、僕は心のどこかでユータを憎悪しているんだろう。いつも僕の上にいて、どうしても追い抜けない存在だった彼のことを。

あいつさえいなければ僕は一番だった。幼い感情だ。そして、心のどこかでもうわかっている。この小さな体では、僕は絶対にユータには敵わないことを。

わかっているが、それを認めると、自分はこれ以上、先に進めないような気がして……

「……」

水飲み場に手を突っ伏して、深く息を吸い、気持ちの浄化に勤めた。目を閉じて、思考をなるべく空っぽにしようと心がけ、深い深呼吸を繰り返していた。

「サクライくん」

背中から女子の声がした。僕は目を開けて、気持ちの落ち着かないまま、声の方向を向くと、ジャージ姿のマツオカ・シオリがいた。隣のコートであの試合を見ていたのだ。前で手を組んで、少しもじもじしている。恐らく僕の格好のせいだろう。

「こんな格好で、失礼」

「ううん、いいの」

僕は急いでまだ汗だくのジャージを着た。本当はしばらくここに置いて、髪がもう少し乾いた頃に着たかったのだけれど、女の子の前で裸でいるわけにもいくまい。

ジャージに袖を通している時に、シオリが言った。

「驚いちゃった。サクライくんって、何でも上手なんだね」

僕はジャージから頭を出す。

「わざわざそんなことを言いに来たのか」

言ってから、明らかに言葉の選択ミスだと気付いた。まだ気持ちの整理が終わっていなかったので、いくら平静を装ったつもりでも、心の奥のものまでは隠しきれていない。自分の口から出た言葉が、ぬるま湯の中の氷柱のように、後から冷たさを感じさせていた。

しかし、シオリのさっきの言葉も、次に言いたいことの枕詞のようなニュアンスだった。僕をおだてに来たわけではないだろう。それはこういう駆け引きに苦手な僕でもわかった。

「どうしたの？　今日」

シオリがおずおずと僕に訊いた。

この切り出し方は、きっと僕にとって、あまりいい話ではないだろう、と、僕は悟ったが、だからと言って、無視するわけにもいくまい。

「――どうしたって？」

袖を通しながら、僕は訊き返す。

「その……」

彼女は、懸命に言葉を捜そうとしている。

「いつもの……サクライくんらしく、ないなぁ、って、思って……」

「――僕らしい？」

喉から押し出すように発したシオリの言葉に、ジャージを着た僕の手の力は消失した。

「うん、今日のサクライくん、何かおかしい。変にイライラしてる感じ」

「……」

悪意のない顔だったのはわかっていた。

しかし――

今までの惨めな自分を、僕のアイデンティティ扱いされたような気がしたのは勿論だが、自分の抱える焦燥感を、彼女の聡明な明鏡止水の瞳が、あまりに見透かしてしまうので、僕は彼女に対して、何とはなしに五月蠅い気持ちを覚えた。

「君が僕の何を知っているんだ……」

「え……」

僕の呟いた言葉に、シオリは何かを感じ取ったのか、僕を恐れるような顔をする。そんな女の子に、僕は詰め寄った。

「僕らしいって何だ？　君が僕の何を知っている？」

胸にどす黒いものがこみ上げてくる。それを吐き出したくて、早口でまくし立てる。自然と口調がきつくなる。下手をしたら、胸倉を掴んでしまいそうになった。それをこらえようと、本能的に悟ったのか、僕の手は自然と大きなジェスチャーで、空を切り続けた。

「僕だってどうでもよくなる時だってあるんだ。僕はいい奴でも、優しい奴でもない。君の中で作った固定観念を、僕に押し付けないでくれないか。そういうの迷惑……」

ぶちまけられる言葉に、必死に急ブレーキをかけ、後半の方で、言葉が尻込みした。

シオリが、華奢な肩を震わせ、仔犬のように悲しげな表情をしたからだった。その表情で、一気に頭が冷却された。

「――ごめん……」

そう言って、茫然と立ち尽くすシオリから、僕は目をそらす。血の気が引いた。これが僕の本性――それを、他人にさらしてしまった。胸のナイフに手がかかってしまった。

何てことをしてしまったんだろう、と、思ったが、もう遅かった。

「ううん……」

シオリが小さく首を横に振った。

「そうだよね。私達、お互いのこと、よく知らないのに、意見するなんて、でしゃばったことして」

言いかけて彼女は言葉を切った。自分が何気なく恥ずかしい台詞を口にしたことに、気がついたのだろう。恥ずかしさをごまかすように、赤面した顔を隠そうとする。もしかしたら、涙を隠しているのかもしれない。

どうしよう、と思った。彼女とは、もっとうまくやりたいのに。彼女には、何も悪いところはないのに。

「その――」

何でもいいから、謝罪の言葉を言おうとしたが、その上にシオリが言葉を被せた。

「ごめんね、気にしないで。じゃあ、また」

何度も頭を下げながら逃げるように体育館の中に消えていく華奢な体を見送って、僕はその場に立ち尽くしてしまった。

「……」

何をやっているんだろう、僕は。あんないい娘を悲しませ、傷つけるようなことして。

昨日は優しくして、今日は突っぱねて――

1年近く、無視していたんだ。昨日、彼女はちゃんと僕と話せるようになったと思って、喜んでいたじゃないか。その翌日に、こんな酷い事を……

これもいつからかわかっていたこと。

ほぼ同じ能力でしのぎを削っていた中で、自分と似ている、自分に近しい存在だと、友情じみたものを分かち合ったと思った時もあったけれど、避けるようになってしまった今では、二人の距離感はもう変わってしまったんだ。

避けたことで、ただの競い合うだけの仲になって、負け続けるうちに、僕にとって彼女は『敵』になってしまった。

どうしても勝てない、彼女さえいなければ、という、ユータと同じ、羨望が変質した憎しみの気持ちをぶつける対象に。

こんな時に涙も出ない自分に腹が立った。僕の『悲しい』という感情は、一体どこに行ってしまったんだ。そんな喪失感とともに、怒りが込み上げた。悲しいとか、自分に腹が立つとか、そういう感情だけは妙にリアルなくせに。

Accomplishments

２時間目の英語Ｗの授業。英語教師のイワムラは、教え方は丁寧なのだけれど、顔がヤクザのようなのが、玉に瑕である。あまりボリュームのない髪が、リーゼント状になって、眼鏡は金縁。このいでたちは、笑いを取りたくて、わざとやってるのか。

「ｅｖｅｒは最上級、比較級を強調する用法もあるから注意しろ。普段肯定文では用いんからよく出る」

頬杖をついて、イワムラ教諭の英語の説明を聞いては、頭はどんどん夢の世界に誘われていた。

僕はサポートの少ない県立の進学校で、３％に満たない人口である、塾、通信添削、その他一切の学習施設を使っていない部族で、それでこの成績は奇跡だと言われている。マツオカ・シオリも塾に行っているらしいし、ユータもジュンイチも部活が厳しく塾に行く時間はないが、通信添削を一応使っている。

僕はほとんど授業を聞いていない。授業中ずっと寝ていることも多い。と言うか、授業に参加する方が珍しいくらいだ。

僕は中学時代、全国有数の中高一貫私立進学校に通っていた。その学校では、中学で高校２年までの課程を全て終了させ、高校３年間で実戦練習や、文系、理系に分かれ、数?、数Ｃなどの、特別な必要科目を学習するスタイルだった。

だから、この学校でやっている高校課程は、僕はもう中学校で全て終わっている。

１年の時は、僕が中１でやったような内容を繰り返すものだから、授業が退屈で仕方なかった。バイトもしていたし、授業は専ら昼寝タイムと化していたが、教師に注意されたのをきっかけに、僕は授業をサボるようになった。

サボる場所はたいてい音楽室か屋上、図書室のどれかだ。音楽室でピアノやギターを弾いたり、図書室で自主的な勉強をしたり、屋

上は昼寝もできて気に入っている。
　音楽室での授業中での生演奏は、授業ボイコットだと、今でも教師からの苦情が絶えないが、生徒達からは、固めのクラシックからアニソンまでを弾きこなし、「うまいからもっと聴きたい」という声が殺到し、今では音楽室に私設私書箱のようなものが出来、僕に弾いてほしい曲のリクエストコーナーとなっている。
　まったく、僕をジュークボックスか何かと勘違いしてないか。とにかくその生演奏が、一年生の五月には学校内で秘かな話題となっていた。あれを弾いている人は誰だ、と、まるで幻のＣＭタレントのような騒ぎとなり、それが僕だと知られた頃には、ファンレターのようなものが僕に殺到した。
　それによって僕の名は徐々に広まっていったが、一年の一学期からそんな生活だったから、皆が「あいつは落ちこぼれ」と揶揄していた。しかし僕は一年一学期の中間テストで学年で１位と１点差、３位と８７点差の２位となった。
　次に僕が名を売ったのは６月の体育祭。
部活別の２０００メートル対抗リレーの選手に選ばれた僕は、アンカー手前走者となり、トップと２０メートル差の６位だったサッカー部を、２００メートル区間で一気にぶっちぎり、トップになってしまった。それをアンカーのユータが更にぶっちぎって、結局ダントツトップでゴールしてしまった。
　そしてそれを学年別リレーでも再現してしまった。下位にいた当時の一年Ｅ組を、僕だけでトップに押し上げ、ユータで逃げ切った。そんな奇跡が二度もあったものだから、午後に行われた１００メートル走の決勝戦は当然のように僕とユータの一騎打ちとなった。僕は写真判定も必要な程の差でユータに負けてしまったが、二度の神風を起こした、と、僕の名前は強烈に先輩にも印象付けられた。
　サッカー部でもド素人が持ち前のセンスだけでレギュラーになり、生徒の応援している前でアシストなんか決めたりするから、一躍有名人になった。決勝に行った頃には、僕はド素人だという触れ込み

で、ボール奪取率県内2位、3ゴール3アシスト。その時点で7ゴールを決め、一年生で既に県内得点王だったユータ、同じ一年生で、ボール奪取率1位を記録したジュンイチとともに、台風の目となったルーキー三羽烏として、スポーツ雑誌や県内の新聞記者のインタビューも受けた。

その風評がどんなものだったのかは、僕自身はよく知らない。今でもよくわかっていない。だから、自分の評判はよく知らないが、それがきっかけだろう。去年の秋に、ひとつ上の先輩3人に呼び出され、生意気だと集団で制裁を受けた。

しかし、相手が弱かったのか、僕が強かったのか、僕は一人でその3人をボコボコにのしてしまい、三人とも全治一週間の怪我を負わせた。僕自身もかなりのダメージを負った。相手の一方的な呼び出しに正当防衛ということが認められたものの、僕も3日の謹慎処分が下された。

3日後、僕は頭やら腕やらに包帯を巻いて登校した。優等生の多いこの学校で、それを見て、僕に話し掛ける者は誰もいなかった。ただ、ユータとジュンイチが大笑いして僕を迎えただけだ。

入学当時からそんな調子だったから、僕は今でも学校一の問題児扱いをされている。ただ、成績だけはいいので、教師達も怒るに怒れない。僕はその立場を使って、いまだに授業をサボるなど、好き勝手に過ごしている。

「なんだ、誰もわからないのか？」

退屈な授業だ。大体何で今日は珍しく、授業に出ようなんて思ったんだろう。

――あぁそうか、昨日バイトの帰り、勉強するはずが、疲れていたから寝てしまって、すぐには眠れそうにないからだ。この退屈な授業を聞いて、適当に眠気を誘っておいて、次の時間からはいつも通りフケて、屋上で放課後まで一気に昼寝する予定だったのだ。

「……」

こんな学生生活、早く終わればいい。

僕は自分の頭脳を過大評価も過小評価もしない。僕はこの自分の頭脳を無駄にしたくない。僕は大学に行き、勉学を極めた上で将来仕事をしてみたい。自分の頭脳をもっと大きなステージで試したかった。高校はその通過点に過ぎず、僕にとっては、大学受験資格を得るための、永遠のように長い怠惰な時間に過ぎなかった。

それが僕の生き方を迷わせている。生きるだけであれば、身の振り方はどうにでも出来るが、僕にはそれだけで満足出来なかった。すぐにでも働いて金を稼ぎ、家を出たいところだが、この力を無駄に使うことも、あの家族の言いなりになるのと同じくらい許せなかった。

現状に満足するわけでもないし、まだ伸びしろはあると思う。僕が大人になり、大学に行き、この力が正当に評価されるようになれば……

そうしたらあの家族から抜け出せる——屈辱的人生から解放されるんだ……

「サクライ」

そうは言っても、実際の僕はどうだ。いつも心の奥底にある敗北感。

いくらやっても状況は改善されない。文句さえ誰にも言えない。親の批判なんて、誰が真剣に訊いてくれるというんだ。まだ僕には、正当に他人を批判するだけの力も名声もない。お前はそれほど偉いのか、で片付けられるのがオチだ。僕はそれもよくわかっている。『子供』という肩書きの脆弱さは、子供の本分を全うするだけで補うことは出来なかった。

もっと有意義なものに身を投じたい。そもそもこんなことで僕が悩むこと自体、馬鹿げてる。このクラスにいる同窓どもは、両親の起こした追い風を受けて、未成年の帆船を海原に走らせているというのに。何で家族が荒れているというだけで、僕がこんな目にあわなくてはいけないのだろう。

「サクライくん」

隣の席の女子が、僕の肩を叩いた。
「え？」
そこでやっと現実に戻る。僕は思わず声が出た。クラス中の視線が僕に向く。誰も笑わなかった。朝から僕の様子がおかしいことが、もう噂になっているのだろう。
どうやら僕は、さっきからイワムラに当てられていたようだった。僕の上の空の様子に、イワムラはうっすら笑った。
「こらサクライ、たまに授業に出たからには、しっかり授業を聞いていけ。お前Wは学年トップだけど、油断するなよ。お前は全国を相手にしなきゃいけないんだからな」
「……」
僕は英語Wの成績は、マツオカ・シオリを抜いて、学年トップだった。他にも、数学B、現代文、古典が学年トップだった。今回の失敗は科学で、９５点を割ってしまい、また1点差で彼女に負けていた。
軽く会釈しながら、内心はざわついた。僕は全国を視野に入れて戦うなんて、一度だって宣言した事がないのに、どうしてそれが決まっていることのように言われるのだろう。
いつだってこうなんだ。頑張っている目的は別の所にあったのに、いつの間にかそれがすり返られ、取り違えられて、僕は何もかもが有耶無耶にされたレールをいつの間にか走っている。自分の部屋に帰ると、誰かに部屋を掃除されて家具の配置が変わっていたような感じ――僕がその部屋に入ると居心地が悪く、不愉快な気持ちを覚える感じに似ている。
「目的語に不定詞、動名詞の両方を取るが、意味が違ってしまう動詞、全部わかるか？」
イワムラは僕に問い直した。
「Ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｆｏｒｇｅｔ　ｔｒｙ　ｒｅｇｒｅｔ　ｍｅａｎの５つ」
僕はぶっきらぼうに答える。

「ほほう」
イワムラは怖い顔を緩めた。
「正解だ。即答とは、さすがに芸が細かいな。さっきまでずっと、上の空だったことは、これで見逃してやろう」
「……」
クラス中から、すげー、というささやきが起こる。僕はその羨望の目の中心にいる。
芸……
正確に言えば、勉強で培ったものだから、そう遠くはない形容かもしれない。
だが——僕はどれだけつまらない人間なのだろう。どれだけつまらない人間に思われているのだろう。
僕は他の高校生とは違う生き方を強制された。だからこんな生き方を選ぶしかなかった。一人で生きるためには、力がいる。勉強はそのための手段だった。だったはずなのに。
それが今はどうだ。こんな動詞の意味を知っている——それが、僕の芸……
言っていることは立派だが、結局僕はこの先の存在価値が見出されていない。生きるための手段だった勉強が、いつしか僕の全財産になってしまった。周りからもそう見なされてしまった。これだけ必死になって掴んだものが、こんなつまらなくて、『芸』なんて陳腐な言葉でまとめられて。
「いいか。このクラスにいるお前達はこの学校のエース達なんだからな。もうこれくらいのこと、二年のうちからやっておかなきゃ来年受験に負けるぞ。サクライやマツオカにはもう届かないと思ったら負けだぞ」
イワムラ教諭の、僕達を鼓舞しているつもりなんだろう檄が飛んだ。
大きなお世話だよ。

Prison

部活が終わり、家に戻る。普段のバイトがない日は、家に閉じ込められて、まるで絶海の孤島の刑務所だ。しかし僕の今日の足取りは軽かった。

僕は家に帰り部屋に閉じこもり、ラッチ錠をかける。昨日妹の部屋から奪還したパソコンを立ち上げて、ロックを解除し、メールを見る。

いくつかのくだらないメールマガジンに、中学の同級生からのメール。

友達とは中学を卒業してから、会ってもいない。

都内私立の付属中学から県立高校へ移ったのは僕だけだ。理由は中学時代から、親に私立の高い学費について恩を着せられるようなことを言われてきたのにうんざりしたからだ。

僕は自分の意志で中学受験の道を志したわけではない。小学3年からジュケン塾なるものに通わされたが、僕は当時、受験という言葉の意味も知らなかった。ただ当時は、親の機嫌を損ねないように、いがみ合う家族が見ていられなくて、いい子でいるよう努めていた。小学校の時は、天才と呼ばれていた。保護者会で母親が僕のことで誇らしげにいる姿を見て、その時僕は、心の底からほっとしていたっけ。

小3で週6回の塾。休みの日も僕は塾の宿題に追われた。両親は僕の成績以外に興味を示さなかった。優秀な成績を取って、両親を喜ばせる。それが僕のアイデンティティの全てとなった。

小学校でも一人の友達も出来なかった。忙しくて家に呼んだり放課後にサッカーをしたりする友達は一人も出来なかった。

そしていつの間にか、僕は典型的ないじめられっ子になっていた。誰もが僕を無視する。物を隠されたり、サッカー大会の練習で、僕をシュートの的にしたり。

だけど僕は頭はいいという自覚があったし、その力を持っていることがささやかな誇りだった。将来出世して、こいつらを足蹴にしてやる、とか思っていた。我ながら嫌なガキだったと思う。でもそいつらの嫌がらせにも潰れなかったのは、その誇りのお陰だったし、よかったか悪かったかは、相対的な損得勘定では、今でもよくわからない。

中学受験に合格し、都内の一流私立に行った僕。そこには、幼い頃から親から投資を受け続けていた、自分と全く境遇の違う次代のエリートの、生活水準の低い僕を見下す目が待っていた。

保護者も同じだった。保護者会の日の駐車場は高級車の品評会状態だった。ベンツ、ＢＭＷ、ポルシェ、フェラーリ――そしてその中から、奇怪な化粧をし、ブランドに身を包み、異様な香を発する俗社会的な女達が、貴婦人でございと出てきて、僕のような育ちの悪い者を忌み嫌い、侮蔑の目を向けた。

成績はいつもトップだったけど、ここにいて自分が周りとどれだけ違う人間なのか、そしてここは僕の居場所じゃないということも次第にわかってきた。

ここは僕が選んだ道じゃない。中３にもなると、親に反発しだしたのも手伝って、この親の顔色をうかがって選び、親の施しで歩く道が、耐え難いほどに重くのしかかった。

中学は進学校だったが、他にも実績のある学校はいくらでもあった。幸い近くにそういう学校があったので、県立受験に踏み切った。そしてめでたく埼玉高校に合格。バイトをし、学費を出すことになった。それはもう中学時代から決めていた。だから県立か国立の高校に通うために、これでも学校のランクを下げた安全策を取った。

入学式の次の日から、新しい学校での親睦を深めるためのオリエンテーション旅行があったが、僕は学年唯一、金がないという理由で辞退。皆に３日遅れて、クラスで自己紹介をすることになった。

「桜井蛍介。ホタルって書いてけいって読むんだ。だから二度と僕の名前の読み方を聞かないでくれ」

サッカー部に入部して、ジュンイチやユータと知り合った。それ以来三者三様の性格だが、僕達は妙に気が合った。

『今日の放課後に、聖蘭女子の女の子と合コンがあるぜ。お前共学なんだから、女の子紹介しろよ』

メールの内容はこんなものだった。多分このメールの相手も、連絡不精の自分と今でも連絡を取るのは、僕がしばしば全国模試上位者として雑誌に名前が載るからと、共学にいる数少ないネットワークで、あわよくば女を紹介してもらえるかもという思惑だろう。

どうやら僕は女の子と交流したくて、付属に上がらず共学校に行ったと思われているらしい。実際は合コンも未経験。対人関係の苦手さから、女の子どころか、野郎と話すこともままなっていない。

そして――そんな僕の高校生活で構築したものは、本当にちっぽけなものだった。

今日のスズキにしても、イワムラにしても、そして、マツオカ・シオリだって悪気はなかったのだろうけど、僕は自分のキャラクターを、既に他人に定められてしまっている。当然の如く、という顔をして、僕の意志を無視し、誰もが僕の存在を都合のいいように解釈されている。

サッカー部の背番号１０、万能型ミッドフィルダー。成績トップクラス、問題児だが、素行はよく問題もない。飼い慣らされたトラブル調停役……

これが僕の一年半で築いた、高校でのポジション――何てちっぽけなんだろう。

どうしてそれに疑問も持たずに、今まで生きてきたんだろう……志は高かったはずなのに、誰もが僕の気持ちを突き詰めない。何でも言うことを聞く犬に成り下がっていた。

服を着替える。適当な荷物を、合宿用のスポーツバッグに詰め込む。メモ用紙に書いた書置きをリビングの机の上に置いた。

――しばらく、友達の家に泊まる。

Elementary

電車に乗り、流れる景色を眺めながら、僕はあることを思い出していた。

小学校の文化祭――僕のクラスは被服室を借りきって、そこに迷路を作ることになっていた。ダンボールを貼り合わせて、関門を作り、そこをほふく前進で進むのだ。他愛も無い行事だったと思う。皆はダンボールを切り取ったり、貼り合わせたり、その中に行き止まりを作ったり、関門のクイズを考えたり、楽しい放課後を過ごしていた。

当時の僕は中学受験のため、学校が終わればすぐに塾という生活を繰り返していた。放課後、彼らと遊ぶ時間もなかった僕は、学校に居場所はなかった。勉強が飛び抜けてでき、地元の有名な菓子屋の御曹司――明らかに僕は、浮いていた。

勉強の虫で体は小さく、スポーツはまだそこそこのレベルだったが、勉強だけはどれも群を抜いていた。典型的な中学受験生だった。夏休みの自由研究やら、感想文をはじめ、書道や絵画やらでも優秀な成績を残し、僕は明らかに同級生とは違った。僕に勝てる奴は、まわりには誰もいなかった。

僕はあの小さな城で特別だった。頂点を極めてしまった者が感じる退屈みたいな感情を、いつも抱いていた気がする。家庭のこともあって、呑気に生きているだけの級友達に対して、おかしな優越感を抱いていた。こいつらはただ無意味に生きているだけの存在に過ぎない。だけど僕は違う。ただ呑気に生きているお前達とは格が違うんだよ。そんな周りの世界を超越したような、虚しさと同時に伴う誇りを抱いていた。

いつも孤独だった。人に、怖い、とか、気持ち悪い、とか言われながら生きてきた。少し目が合っただけで、じろじろ見ないで、とか、色気づきはじめた女子に言われたりして、僕と皆の溝はどんど

ん深まった。言っていることも理解してもらえなかった。それが僕を更に超越させた。周りの愚物の理解を超えた自分、その図式が好きだった。

誰も僕を理解できなかった。僕は孤独な時間を消化し続けながら、同時に誇らしくもあった。そいつらに理解されたくもなかったからだ。理解されないという快感は、そこに達してみないことには、絶対に理解できないものだろう。

――放課後、僕は塾のため、いつもその製作に参加せずに帰っていた。担任は僕の成績優秀振りを知っていたので、理解を示してくれたが、級友達は発展途上国からの留学生でも見るような、日本人特有の卑屈な目で僕を睨んでいた。教師にゴマを擦っているように見えたのだろう。小学校の担任とコネを作る奴なんて、普通いるはずない。ガキのいじめとは、世の中の仕組みがわかっていない。全てが幼い感情論。

作業に参加したいと思ったこともなく、特別扱いが好きだった。皆と違うということ、それが僕の小さな胸を、孤独という爪が毎日抉り、皆と違うことを、僕一人がやっている、その痛みが特別な痛みとして、僕にまた新たな誇りを訴えていた。

そんな時塾が休みの日があった。作業をサボる建前もないので僕はその作業に参加した。

僕はクラスメイトにはじかれていたのだろう。迷路の設計図も見せてもらっていなかったので、被服室に行っても何をすべきかわからず、隅で立ち尽くしているだけだった。

皆が楽しそうに笑いながら、僕の知らない他愛もない何かを作ったり組み合わせたりする姿を眺めていた時だった。

一人の女子が何人かを引き連れて、僕に歩み寄ってきた。成績も悪く、顔だっていいわけじゃないが、こういう行事になるとしゃしゃり出て皆に指図をする、腰掛ＯＬにでもなって、上司に媚を売り、お局になるような将来が容易に想像できそうな、いわゆる、『仕切り屋』な女だった。

「やることもやる気もないなら、どいてくれない？　邪魔なんだよね。大好きなベンキョーでもしてたら？」

僕を一段下に見て、優越感がニカワみたいに粘りを持って、嫌らしくその女の顔に貼り付いていた。取り巻きも腰巾着みたいにその女の意見に賛同し、僕に畳みかけた。

滅多に勝てるチャンスのない僕をいたぶって優越感に浸りたかったんだろう。だけど、僕は内心鼻で笑っていた。低俗ないじめに屈するほど、打たれ弱いわけでもなかった。

数日後――偶然僕の参加した放課後に、一つ問題が起こった。あまりに長く入り組んで作ってしまい、破綻を恐れてガムテープで密閉してしまったため、中は真っ暗で、迷路どころではないことがわかったのだった。子供の稚拙な設計の穴だった。

級友達は二日後に控えた文化祭を控え、焦るばかりで考えがまとまらない。組み立て直すとか、上にたくさん穴を開けて光を入れるとか、案が出たが、一番多かったのが、ほっといてこれで完成にしてしまう、というものだった。

あれだけ雁首そろえて、何ひとついい案が浮かばないのか。被服室の隅で、腕組みしながら、その滑稽な井戸端会議を眺めていた。

僕に偉そうなことをほざいた『仕切り屋』の女子の顔が強張り、紅潮している。恐らくあと３０分もすれば、この工事の指揮をとっていたこの女子に、クラス中のバッシングが集中することだろう。その光景を想像し、下卑た快感を覚えながらも、僕は理科室に一人向かい、作業にかかった。

しばらくして僕は被服室に戻った。額をこすり合わせて、馬鹿みたいにまだ議論をしていたらしい級友達が、僕の入って来る引き戸の音を聞いて、僕の方に顔を向けた。僕は乾電池やら、実験に使う豆電球やらコード、変圧器やら簡易スイッチやらを抱えていた。適当な場所に座り込み、コードをつなぎ直した。

今まで何もしていなかったガリ勉が、変なものを持ってきたぞ、とでも言いたそうな顔をして、級友達は僕の作業を覗き込んでいた。

僕は乾電池とコードの接続を繰り返した。数を理科室で揃えることは出来なかったので、豆電球の周期は長めにしてあった。同じ長さのコードを二つつなぎ終えると、僕は迷路のスタート地点から入り、ガムテープでコードを左右の壁に貼り付けながら、最後を錐で壁に穴を開け、外にコードの一端を出し、スイッチと乾電池につないだ。

級友達は、自分たちの作った迷路の中が、僕のつないだコードによって照らされ、大はしゃぎしたことは言うまでもない。秘密基地みたいー、と、僕の目をはばからず、無恥にはしゃいでいた。

その顔を見て、僕は酷く虚しくなった。張り合いがない。もっと恥を知る奴等だったら、僕もニコラ・テスラにでもなったかのような気分のままでいられたのに。

僕はそれを見て失望した。僕を蔑んで、薄ら笑いを浮かべていた、あの『仕切り屋』も、はしゃいでいた。いじめようとした奴に助けられて、喜ぶなんて、興醒めもいいところだ。

僕はさっさとそこを出た。『仕切り屋』をすれ違い際、冷酷に一瞥すると、クラス中が凍りついた。そのまま一人被服室を出、二日後の文化祭もサボった。級友の面を見る気にはなれなかった。きっと誰もが、この迷路の大成功を誇るだろう。そんな反吐が出るような交遊録など、胸焼けがするだけだ。

文化祭の翌日から、僕に対しての嫌がらせがはじまった。無視からはじまりそこから次第にエスカレートした。机の落書きや、朝教室に入ると僕の机がなくなっていたことからはじまり、ランドセルは彫刻刀でズタズタにされたりした。それが肉体への苦痛を伴ういじめへエスカレートするのに、それほど時間はかからなかった。

そしてその首謀者が『仕切り屋』の女だということを知った。その女がある日、昼休みに徒党を組んで出てきて、理科室に僕を呼び出し、クラスメイト全員の見ている中、取り巻き全員で僕を押さえつけた。『仕切り屋』は僕を押さえ込んでいる奴等の一人に僕の腕の服をまくらせ、別の奴がマッチを取り出して火をつけた。

「お前、でかいこと言うんだったら、これも我慢してみろよー」

クラスでも癇に障っていた、ただ空元気だけが取り得の頭の悪い男子が煽ると、クラス中が合いの手と手拍子に包まれた。恐らく誰かがテレビか何かで見た『根性焼き』を真似たのだろう。

体からとんでもない力が湧きあがった。僕は男女１０人くらいで押さえ込まれていたけれど、それを自分でも驚くほどの力で振り払うと、男も女も関係なく、僕を押さえつけていた奴等を叩きのめし、床を舐めさせた。

僕を押さえつけていなかったクラスメイトが、僕と『仕切り屋』を取り囲んだ。僕に殴られて、立ち上がったクラスメイトも、僕を怖がって一歩引いてそこに混ざった。僕が睨んでいると『仕切り屋』はまだ余裕を見せたいのか、引きつった顔を無理に薄ら笑いの形に歪めて、こう言った。

「最低だね、女の子を殴るなんて」

次は自分の番だ、とわかっていても、それでも自分を正当化したかったのだろう。

「もしお前が男を殺したら、女だからって理由で無罪になるか？」

僕はそう答えると、『仕切り屋』に近づいて、右腕を首にかけ、足を払って体を倒した。うつぶせになった『仕切り屋』の首を右腕で鍵締めのように持ち上げ、僕は腰の上に座り、アシカのようなポーズにする。『仕切り屋』は、息が出来ずにばたばたしている。

「勘違いするなよ。男は女に優しくしなきゃいけない。それは、男の方が力があるんだから、重い物を持ったりくらいはしてやらなきゃ、って意味だ。悪いことに男も女も関係ない。そんな理由で、人にマッチ押し付けようとしたことを、正当化できると思ってるのか？　あまり人をなめるな」

教室中に声が響くように、ゆっくりと、徐々に声を大きくしながら、僕は言った。もう一度首をぐいっと押し上げる。無理な体勢の上、呼吸もできず、相当の苦しさだったことだろう。やめて、と、気道の締まった喉の隙間を通すように、『仕切り屋』は声を押し出した。その無様な姿を見て、僕は心の底からの嘲笑が湧きあがった。

「いいか、俺はここでお前にマッチ押し付けたりすることも簡単だが、そんなことはしない。お前等みたいな連中相手にして、俺の価値を下げたくないんだ。お前等が俺が気に入らないなら、それで構わない。だがな、俺の邪魔はするな。俺がお前等の上を行く形で、少し待ってりゃ俺が確実に縁を切ってやる。黙ってたって俺がお前等の前から消えてやるから、それまで大人しくしていろ。いちいち手間をかけさせるな」

僕は声高らかに吐いた。初めて自分の本性を周りにも、そして自分にもさらした。

その時からクラスの連中は僕を怖がった。実力行使の恐怖による統制の威力を、僕は家庭で嫌というほど味わっていたから、それを連中に実践すれば級友どもも黙るだろうと考えた。

しかしそれで止むと考えていたいじめは、愚鈍な同級生達の数にものを言わせて恐怖を紛らわす手によって変わりなく続いた。しかしいじめのスタイルは明らかに変わった。僕と向き合う連中を見て、きっとインターネットで、音楽や小説を批評するレビューに、糞のような言葉で作品や作者を汚し、それが暴力であることにも気がつかない奴が、パソコンの前で、こういう醜い顔をしているんだろうな、と、子供心に思った。

「最低だな。散々人をコケにしやがって。友達もいないんだろ？可哀相な奴だなぁ」

「ふふ、正義面しても、お前等のしていることは集団リンチだろ。お前等卑怯者には似合いの卑屈さじゃないか」

痣の上に痣を重ねるような毎日だったが、殴られるよりも奴等に屈服する方が嫌だった。

考え方が変わったのはその時——殴られることを恐れずに、家族にも立ち向かう勇気が出た。僕は誇りを持っていたから、それを守るために戦う決意をした。

そこからの僕は、一体何だったんだろう——僕の正しさを頑なに信じて、だから誰にも屈服したくなかったから、心が揺れないよう

に、必死で勉強して、体も鍛えて、力をつけてきた。力があれば、卑屈にならずに済むから。そう信じて。

名前を聞いて誰もが驚くような私立の名門中学に合格して、僕は旧友と同じ屋根の下にいた日々を去った。ボロボロに殴られても屈せずに、僕は一人でも負けなかったことを証明できた。それは僕の誇りであった。

それから先は、常に自分がそういう位置にいられるように、努力を惜しまなかった。

この時からだ。僕が家族に反発し、人を憎みはじめたのが、きっとこの時……

いつから、僕はこんな卑屈な人間になってしまったんだ？

今日ユータやシオリに向けて発した、怒気にも似た焦燥感――どうして忘れていたのかわからないけれど、小学校の時、僕はあんな気分をいつも味わっていた気がする。

あの頃の僕は、勉強が出来てもまだ十歳の子供だった。幼かった。大人ぶっても、怒りをコントロールできなかった。小学校の級友達のような愚物の蠢動にも、怒りの焔を燃え上がらせ、それをぶつけ続けた――今日の気持ちは、あの時の気持ちの再現なんだ。

僕の絶え間ない憎しみが、僕の周り全てを敵にした。力で全てをねじ伏せて進む以外の生き方を、出来なくしてしまった。

だからいくらやっても敵が消えるはずもない。そして僕は、戦い続けた。麻薬中毒で幻覚に向かって暴れだすように、本当はいるはずもないその敵の幻影に、拳を振るい続けた。

小学校の時から今でも、僕は怒りを払拭できずに愚行を繰り返しているんだ。

邪魔をするものを一掃しようと、僕は今も愚かに戦い続けてしまっているんだ。

Seventeen

「――だから、この途中式で何でこの答えになるんだよ。これじゃ答えは17になるだろ」
「でも俺の答えは4だ。正解じゃないか」
「だからこれで答えが合うのがおかしいんだって。たまたま答えが合っただけなんだ」
「ケースケェ……」
「何だ？　何々……お前、Q＝IVtって公式くらい覚えてろよ」
赤点対策勉強会――略して「赤勉」。テスト後の僕達3人の日課だ。もっとも僕はユータ、ジュンイチの教師兼見張り。
ユータの家は、川越から電車で20分程のところにある所沢市の輸入家具屋だ。自宅もそのセンスが光り、芸能人の御宅訪問と見間違うようなほどのお洒落で広々した空間だ。大抵勉強会はここで開かれている。
いつものことだが、初日の二人の手ごたえというのは、ザルで水を汲むような感覚だ。もう理解しているのかもわからない、という以前に、何がわからないのかもわからない、といった具合だ。自分の病状を自分で把握できず、わかっていても説明できない子供を相手する小児科の医者なんかは、診察中にこんな気分だろうか。
二人とも数学B、数学?を落とし、ジュンイチはそれに化学、ユータは物理と古文を落としていた。二人の落とす教科というのは大体想像がついていて、何を教えるべきかも、20点も取れていないテストの答案を見れば大体わかる。だから僕は事前にそれを見て、簡単な勉強計画を既に考え、簡単な問題をあらかじめ作って実践的に教えている。
ユータの部屋は10畳もあるが、それでも3人が入って勉強するには机がないので、借りているリビングに、二人の重苦しいうなり声が響く。北欧風のごつい外観だけど、きめ細かい細工の光る木製

のテーブルに、二人は並んで座っている。僕はその向かいで本を読んでいて、声がかかるまで待っているスタイル。

「出来た」

ユータはあくびをしながら僕に指定された古典の全訳を見せる。

「助動詞は無視するなって言ってるだろ。ぞ、って係助詞があったら、係り結びで反語になるとか考えなきゃ」

僕は自分の赤ペンの尻で本文を指す。

「全然ダメだ。出来た、って言うのは、文の大意をつかめて初めて言え。やり直し」

僕はそう言いながら赤ペンで添削した答案を突き返す。

「はぁー？　もう嫌だ……もう何でこんなものやんなくちゃいけないんだよ」

「……」

僕は鼻から息を吐く。

「あぁ……俺、この先大学とか行けるのかなぁ」

「お前じゃ親を説得して、プロに行った方が簡単だな」

ジュンイチが横から口を挟んだ。

「そうなんだよなぁ。俺勉強なんかしなくてもいいんだよなぁ」

「せめて卒業はしろよ。留年した挙句、中退してのプロじゃカッコ悪いだろ」

「う……」

一瞬調子に乗ったユータの表情が曇った。

「まったく……ケースケ、もうちょっと優しい言葉をかけてくれても……」

「テストで１００点取れたら、ほっぺたにチューしてやろうか？」

「――お前に何かを期待した俺が馬鹿だったよ」

大体始めて3日間は、こんな感じ。開いた口がふさがらないような説明に、二人の厭戦気分も甚だしい。大体3時間もすればダウンしてしまうが、この後やるサッカーゲームで、今度は僕がメチャクチャにやられてガス抜きされる――というのが、いつもの行動パタ

ーンだった。
「てか、何で授業サボりまくってる奴に、俺達はこんなボロクソ言われてるんだ」
「何であんな学生らしからぬ生活の奴が優秀なんだ。不公平だ」
「ったく、あんなグータラ学生に、神様は無駄な才能与えやがって」
二人は答案に向き合いながら、まだぶうぶう言っている。
「ごちゃごちゃ言ってないで、問題に集中しろ」
僕は赤ペンで受け取った古文の全訳を添削して、もう一度ユータに突き返す。何処かの通信教育じゃないが、赤ペンで既に訳は真っ赤になっている。
しばらく受け取っては添削し、問題箇所の復習をさせる、その繰り返しだった。
「……」
二人とも、僕の添削した問題をもう一度やり直している。額に手を当てて難しい顔をする。こいつらのこんな顔、学校じゃまず見られないだろう。僕が携帯を持っていたら、きっと写真を撮っていただろう。
あぁ、平和だな。
小学校時代のことを思い出した直後にこいつらを見ていると――妙に和んでしまう。もしかしたら、こんな奴らが小学校にいてくれたら、僕は今とはまったく別の生き方をしていたかもしれない、なんて、そんな想像をしてしまう。
「そういえばさ」
数学の問題を前にしていたジュンイチが、椅子に座ったまま伸びをした。
「俺達、このままじゃ大学は、一緒になることは、まずないな……」
その言葉に、僕達も一瞬ショックを受けて固まった。
「――まあ、そうだろうね」
僕はやや遅れて同意する。
考えないようにしていた、というよりも、今まで話題にもならな

かった未来の話。こいつらはこうして明日のテストの結果もわからない、根無し草のような性分だから、まだそういうことまで考えていないだろう、と、勝手に解釈していたから。

「俺は大学に行くかどうかさえ決めてないけど」

ユータは頭をかく。

「俺は大学希望だけど、今から血ヘド吐くほど勉強しても、ケースケと同じ大学は行けそうにないしな」

ジュンイチは若干自嘲気味に、力なく笑った。

「お前もサッカーで来ればいい」

「無理無理。だってお前、東大か何処か知らないけど、学費の安い国立志望だろ？」

「――そうか、お前はもう国立は諦めてるのか。数学やらなきゃいけないもんな」

へえ、こいつもこいつなりに、将来のこととか、自分の進路とか、考えてるんだ。ユータはいつだって、プロに行く、って言っていて、実際それが可能な力を持っているからそんな心配はしていないんだと思っていた。それに対してジュンイチは、自分の将来とか、そういうことを考えるのは苦手だと思っていた。何も考えなくても、生活力だけはありそうな奴だから。

というか、僕だってただ漠然と大学に行きたいって思っているだけで、将来どころか志望大学、志望学部だってよく考えていない。具体的な人生プランがまったく見えてこない。

とりあえず考えているのは、学費の安い国立の文系で、就職しやすい法学部を受けるだろう。それで司法試験か国家?種を目指す、なんて程度だ。志望大学とか、職業のディティールは、下書きの域にさえ達していない。

進路にしたって、目指そうと思えば医学や工学を学ぶことだって出来るが、それは既に諦めている。学費が高いからだ。頭はあっても金がなくて進路が後手後手になるっていうのが歯がゆくて、考えると気が滅入ってくるから、今はあまり考えないようにしている。

「ユータは今親が反対してるから、大学に行ってからプロか？」
ジュンイチが訊いた。
「いや、サッカーの寿命は短い。卒業したらすぐプロに行くさ。そして二十二歳までに海外に行って、ワールドカップに出る」
「へぇ……ワールドカップに出るなんて、庶民にゃ想像できないな」
「ジュンは？」
ユータは訊き返す。
「俺か？　俺は世界を回るジャーナリストになりたいと思ってる。ルポライターっての？　外国とか、史跡とか回りたいしな。現地の人とか、そういう人に触れるのは好きだし、それに外国の文化にも興味あるし。色んな所に行って、生のそれに触れてみたいんだよ」
「……」
意外だな、こいつもこいつなりに色々考えてるんだ。こいつは確かに語学力さえあれば、世界中の人とでも仲良くなれそうな気がする。
多分3人の中で、一番こいつがまともな大人になれるだろう。観察眼は僕よりも劣るけれど、こいつは何か、僕には見えない大事なものが見えているような気がする。だから、ものを見る、それを伝えるという仕事には向いていると、初めて聞いた夢の話も、すんなり受け入れることが出来た。
「へえ、じゃあ俺がヨーロッパに行ったら、お前が取材とかもありえるのか」
「そうだといいな」
ジュンイチは歯をむき出して笑った。
「……」
何も言えなかった。
「ケースケはどうなんだよ？」
ジュンイチが訊いた。
「――僕は……」
二の句に詰まった。

僕はただ、人並みに過ごしたいっていうだけで、一日をただ何となく生きてきただけだったんだ。やりたいことなどない、考える余裕も今はない。

大学を目指したいというのも、漠然と、知力を生かすためには高卒では駄目だ、自分の思考力には自信があるから、腐らせるのが勿体無いというだけのものだし、学部も学費負担をするため、バイトが出来る文系であればどこでもいい。おそらく文系の最高峰である裁判官や弁護士を目指すかもしれないが、それにも取り立ててなりたいとも思っていない。

おそらく僕の人生の起承転結のうち、前の3つはもう終わってしまったんだろう。

大学に入って、何となく学費を稼ぎながら、大変だけど通って、卒業したら法曹の仕事でも何でも就いて家を出て、それでもう親とは一生会わないだろう。そして上司から勧められた見合いか何かで結婚して、子供が出来て、家庭のために金を稼ぐ。週末は草サッカーでもゴルフでも何かして、子供が成人して留学をねだったり、愛のない妻が旅行費用をねだる。それを叶えているうちにリタイアして、七十七歳くらいで清浄な炎に弔われる。

そう、僕はもう、何かを待っているだけの存在だ。もうその人生プランで僕の人生が終わっても、もういいじゃないか。考えることも面倒臭い。ただ、死ぬ瞬間、大学を出て、家を出る瞬間——そういう、自分が楽になれる瞬間を待っている。

そう、ただ待っているだけ、時間を消化しているだけだ。

「まだお前達みたいに、ちゃんと考えてない」

僕の人生とは、一体何なんだろう——勝ってもいないし、負けてもいない。引き分けですらない。僕の生き方とは、評価の対象にさえなっていないんだ。

今までの僕は、意地のために勉強をしていた。僕は周りにいつも敵がいて、敵に勝つための一番適当なアドバンテージを得る方法に勉強を選んだ。学生の本分と言われるわけだし、頭が回れば身を守

る術ともなるし、誰も学生としての僕を淘汰できない。だから僕は勉強をした。

だけど、そんなに簡単なものじゃなかった。僕が得た力は、一方的な暴力や、未成年の境遇をひっくり返せるほどの力はなく、あまりに無力だった。残ったのは、目的のなかった勉強を繰り返して、今自分が何をしたいか、何のために勉強をしているのか、何もわかっていない、一人の惨めな人間の姿だった。

僕自身がそうなのだから、周りからも、僕の意味を見出されることはない。勉強の本質を見抜けずに勉強していた僕は、勉強の先にあるものを見出せない。だらだらと、体を持て余して、つまらないことに身を投じているだけ。僕はどんどん腐り始めている。

僕の尊敬する中国三国時代一の英雄である諸葛亮孔明は、幼年時代、後漢を破綻させた黄巾の乱の中、戦乱の世を家族と共に逃げながら過ごした。彼はそこで、諸葛一家と共に野山に悲鳴をこだまさせながら逃げ回る民の姿を見て、世を憂い、自らで民の平和に暮らせる世に導く事を決意し、今の僕と同じ17歳で大学に進学し、20歳にはそこで学ぶこともなくなる程の天才だった。

大学在学中の彼は、勉学のための勉学をし、世間に気に入られるために持論を曲げ、媚を売るために議論する同窓に絶望し、その歳で雌伏してしまった。そして孔明は、後の蜀初代皇帝、劉備玄徳の『三顧の礼』に心動かされ、乱世に苦しむ民のために立ち上がる。その後数々の偉業、伝説を残し――志半ばで倒れたが、神格化されるほどの天才として、今に語り継がれている。

僕の歳で、孔明は既に大志に向かって動き出していた。それに比べて僕は一体何をやっているのか。他人への憎悪だけで、僕には一欠けらの意志も見当たらない。毎日を消化しているだけの、時代に張り付いている、背骨のないナメクジみたいな男だ。僕と孔明を同列にすること自体がおこがましいが、孔明が見たら、僕も大学の同窓と同じ、興ざめな人間と嘲笑されることだろう。

ユータやジュンイチとは違う。僕の持つ、語る気にならない自分

の人生は、一体何のためにあるのだろう。
僕は一体、どう生きたいのだろう。そもそも僕は、それほど生きたがっているだろうか。

Cool

「さあさあ、少し休憩して、ご飯にしましょう」
折節、ユータの母が、山盛りの鶏の空揚げを持ってきた。
一年前に始まったこの勉強会――それはこの肝っ玉母さんのおかげではじまった。一年生の夏、僕がズブの素人でサッカー部に入部し、素人用のイイジマ特製地獄メニューの走り込みを平然とこなし、話題の新人として、次のメニューを命じられ、ジュンイチ、ユータとの三人練習が始まり、このトリオでつるむことが多くなった頃の事だった。
学校で、成績上位者が貼りだされるのを見て、ユータが話しかけてきたのだ。
「ケースケって、勉強できるんだな。俺に勉強教えてくれよ。俺赤点取っちゃってさぁ」
その言葉をきっかけに、僕はユータが赤点を取った数学や物理の勉強を教えるために、初めてユータの家へ行ったのだった。それを聞いて翌日、数学で赤点をとっていたジュンイチが話を聞きつけ、その合宿に参加し出したのだった。その様子を見て、息子を大学へ行かせたがっているユータの母は、僕に、毎日でも来て、とこの合宿を制度化し、息子を勉学へ引き込もうとしたのだった。僕はそれを、無駄だと知っているんだけど。
正直言うと、僕は友達の家に遊びに行くのは、これが生まれて初めてのことだった。しかも初めて行った家に泊まった時は、何だか気分が悪かったけれど、次第に二人に慣れ親しむうちに、気持ちのざわつきも和らいで来た。去年ダブってもおかしくない成績だった二人は、僕のおかげで無事に2年に進級し、今では教師役の僕は、ユータの母から食事代はおろか、通学に使う往復の電車賃、更にヒラヤマ家、エンドウ家からで、5日間で5万円の報酬までが出されている待遇付きだ。

「すいません。いつもながら5日間も……お金までもらっちゃって」
「いいのよケースケくん。うちのバカ息子の赤点が免れるなら、安いもんだわ。ケースケくんだって、バイト休んで来てるんでしょ？その分の穴埋めはしなきゃって、ジュンイチくんのお母さんと話してたのよ」
そう言って、ユータの母は、息子の後頭部を叩いた。いい音がいた。
「オフクロ、いつもケースケが来ると、喜ぶんだぜ。あれでケースケファンなんだよ」
「あら、ケースケくんを嫌いになる親は、きっといないと思うけど。うちの人も、ケースケくんくらいしか将棋の相手がいないから、来ると毎回喜ぶしね」
「……」
ユータの父は今ここにはいないが、大企業に勤める営業サラリーマンで、収入はこの家具屋を上回るほどだろう。そんな人だから、要するに堅実なんだろう。ユータのプロに行く進路に賛成するはずがなかった。
だけどやはり親子というべきか、ユータと同じ子供っぽいところがある。将棋の腕はなかなかのもので、僕ぐらいしか対等に戦える人間がいないらしく、息子の赤点の危機であっても、家にいると僕との勝負をせがむ人だ。次の日に会社も学校もない日には、僕達３人と朝まで麻雀を打っていることもある。おかげでいつもこの赤点勉強会は、僕のペースで進めば赤点回避は確実なのに、そんな誘惑のせいもあって、なかなか効率が上がらない。
僕達は勉強道具をテーブルの脇に退けた。たれを漬け込んでから揚げる空揚げは、とても美味で、僕の箸は次々と伸びた。１２個も平らげて、ご飯もお代わりした。
「相変わらずうまそうに食うなぁ」
ユータが僕を見て、愉快そうに笑う。
こうしてこの家で食事をご馳走になる時に、いつも心の奥に棘が

残る。僕は友人のためにこうして勉強を手伝っているのではなく、食事と金のために来ているのだということを思い知るから。きっと飯や金が出なければ、ここには親友のためでも来ないだろう。僕はそういう人間だから。

なんて自分は冷たく、友達甲斐のない人間なんだろう、と。目の前にいる二人や、ユータの母の、僕を歓迎する微笑が心に痛かった。

――11時からはサッカーゲームをする。僕の操作するイタリアは、ユータの操作するアイルランドに完敗した。サッカーを知らない人のために言っておくが、一般的にゲームでは、イタリアとアイルランドでは、かなり力の差がある。イタリアを操作する僕にとってはアドバンテージだったのだが。

ユータの操作するアイルランドが放つフリーキックが、僕のチームのイタリア代表ゴールキーパーの手を掠めて、ゴールネット右隅に突き刺さった。

「あ」

画面のゴールにボールが吸い込まれるのを見送りながら、間抜けな声が漏れた。

「よっしゃ！」

僕の隣でユータは声を上げる。

「ケースケ、2-0だから、俺に200円な」

「くそっ」

僕は財布から、100円2枚を取り出し、テーブルに叩きつけた。さっきは、僕の操作するアルゼンチンが、ジュンイチのオランダに（こっちは実力に大きな差はない）両サイドをズタズタにされ、3-0で負けてしまった。これで500円の散財だ。世界屈指の強国を、ここまで下手に扱っては、国家から告訴されそうなくらいの僕の散漫な試合運びだった。

ユータは笑って、缶の開いたチューハイに口をつけた。既にビー

ルを缶2本飲み干し、チューハイはこれが3本目だった。ジュンイチはつまみに買ったポテトチップスを、リスのように前歯で音を立てて食べている。

僕もチューハイを一口飲んだ。既に二人は酒が空いて、絶好調になっていた。

これはジュンイチが持ってきたものだ。酒屋の息子であるジュンイチは、いつも父親の晩酌に中学生から付き合っていたらしい。だから僕達にもこうして酒を流すことに口うるさい人ではない。前回の赤弁はジュンイチの家でやった。だからジュンイチの家族とも、僕達は面識がある。

未成年の癖に酒を飲んでいる、と揶揄されていても、フランスでは16歳から酒が合法となり、それでいて平均身長、体重が、20歳まで合法化していない日本人を上回っている。だからデータだけを見れば、15歳以上なら、飲酒が体の発育に悪影響だというデータはあまり当てにならない。

こういう理詰めで酒を語るなんて、つまらない奴だと思われそうだけれど、僕は酒が好きじゃない。酒を毎日飲んでは、白川夜船になるだけの親父を反面教師にしているというのもあるが、酔えないのだ。

美味しいと思ったことは一度もないが、アルコールを飲むことで、何かを忘れ、すっきりすることが出来れば、決して悪いことではないと思う。僕はそういう時間に期待して、何度も酒を飲んだ。

しかし、飲んでも酔えないのだ。理性がしっかりしているから、酔う前に体がブレーキをかけているのがわかる。それは酒のせいでも周りのせいでもない。僕が本当に楽しもうとする気がないのがいけないこともよくわかっている。

でも、僕は何をしても心から楽しめないのだ。酒も女も、勉強もサッカーも、暇潰しのためだけに存在するテレビゲームや、ゲームセンターですら楽しめない。この時代、人間が宇宙に行ける時代に、娯楽の一つもないことなんてありえないのだけど。

どこか、ものすごく冷めている。僕は今サッカーゲームに負けて、５００円もとられてしまったわけだけど、あまり悔しくない。散財が痛くないわけじゃない。『悔しい』と思おうとする感情すら、ものすごく冷めている。酒を飲むってことに対しても、楽しいとか、美味いとか、そういうことを考えない。期待すらしていない。ただ喉が潤うだけだ。

僕の感情は理屈での想像の上に作り出されたバーチャルだ。だから当然、想像では経験したことのないものは補えない。特定の場合以外、感情が発動しないのだ。

僕の感情が本当に発動するなんて、最近では、怒りと苛立ちだけだ。負の感情だけが、僕の真実――激情と呼べるものだった。サッカーゲームに負けて五百円も取られたってことは、さざ波みたいに微々たるもので、いつも押し寄せている、怒りの濁流にかき消されてしまう感じだ。

いつだって心はここにないんだ。いつだって怒りと憎しみが頭から離れなくて。

「もうやめよう。勝てないよ」

こんな言葉を言ってみても、頭はあまり悔しがっていない。むしろ頭に浮かぶのは、散財の心配だけだ。こうやって、悔しがるフリをして、何とか普通に見られる演技をする。

いつだって、その場に応じて、悔しがってみせたり、謙遜してみせたりして見せる。そうじゃないと、自分の醜さが、外に滲み出てしまいそうで……

「あはは、これで俺達、ケースケに２７連勝だな」

「ほっとけ」

後ろからジュンイチが僕に軽いヘッドロックをかける。既に息が酒臭い。

「だけど、いいことさぁ。俺達がケースケに勝てることとっていったら、もうこんなことしかないからなぁ」

「ケースケも、そんな奴等と一緒じゃ、張り合いないだろうな」

赤ら顔のユータが相槌。
「――別に、そんなことはないけど」
というより、僕が二人の得意分野で勝負してやらないと、暇つぶしが成立しない。ユータの父が得意な将棋やチェスをユータ達とやると、僕は後手の上に、将棋なら飛車角抜き、チェスならクイーン抜きでも圧勝だし、しまいには僕が後手で、僕の一手ごとに、ユータ達が二手動かしていいというルールにして、それでも僕が勝った。麻雀だって、ユータ父はともかく、二人はまだ相手の手を読むのが甘くて、簡単に振り込んでしまう。
そんな中に、ユータの母が入ってきた。僕はヘッドロックをかけられたまま、見上げる。
「わ、酒臭いし、男臭い――酔いが覚めたなら、誰かお風呂に入っちゃいなさいよ」
「あ、僕、入ります」
僕は手を上げた。
「あら、ケースケくんは、飲んでなかったの？」
飲んでないわけではない。僕だって相当飲んだが、酔っていないのだ。

Comprehend

ユータの家の風呂は、石造りのゆったりした浴槽で、風呂が好きな僕は、この家に来ると、この風呂に入るのが、一番の楽しみだった。

体を洗い終わり、僕は大きな浴槽に体を下ろした。僕の小さな体では、この浴槽で足が伸ばせる。昔銭湯に行った時に、広い風呂ではしゃいだ感覚を思い出す。

高い天井を見上げる。湯煙で曇った先――そこには西洋風の、炎のような形を模った電灯が一つ、こうこうと輝いているだけ。僕は目を閉じた――

静かだ。

家族に神経を尖らせることもなく、自分の心配をすることもない。そして、色んな思案に耽ることもない。僕にとって、とても不思議で穏やかな感覚だった。

家族がいない世界は、こうして確かに存在する。だけど、僕はそのことを知らない方がよかったのかも知れない。あの二人とつるんで、いつしか二人の家に泊まったりして、僕は知ってしまった。知ってしまったからこそ、今の現状に怒りが込み上げる。

知らなければ、あれを当然の世界として、受け入れられたかもしれないのに……

脱衣所のドアが開く音がした。優しそうな女性の声がする。

「ケースケくん、バスタオル置いておくわね」

「あ、はい。ありがとうございます」

扉越しに母親に向けた僕の声は、風呂場に反響した。

バスタオルを置く音がした。僕は、手桶で浴槽のお湯をすくい、顔を洗う。

「ケースケくん」

扉越しに声がした。その声はいつもよりも神妙な響きだった。

「ケースケくんみたいな子が、うちの息子の友達だなんて、嬉しいわ」
「いえ……別に」
僕はのぼせたのも手伝って、急に体が火照りだす。
「あの子って軽いでしょ？　だからずっと、あの学校に行くのは、私達反対したのよ。あんな真面目な学校じゃ、あの子は絶対馴染めないに決まってる。半端者になって終わるのがオチだって。でも、ケースケくんがいるから、こうしてギリギリだけど進級も出来てるし、サッカーも張り合いがあって楽しいみたい。ケースケくんには、本当に感謝してるわ」
「……」
ユータの母が、最後のフレーズで思い出し笑いをするような声が聞こえていた。
これは、『親心』というやつなのか。親心という感情を、僕は知らないし、受けたこともないけれど。心配してくれる人がいるってことは、幸せだろうか、それとも重荷なのか。
「あの子、中学までは友達って呼べる子がいなかったのよ。あの子軽いから、どうしても回りの理解を得られなくてね。だからケースケくんとジュンくんが初めてなのよ。こんなに男の子同士で、あの子が楽しそうにしてるのは。高校に入って、よくユータが言うのよ。ケースケはすごい奴だ、って。あれで結構、ケースケくんから刺激受けてるみたい。ユータが友達のことを話すことなんて、今までほとんどなかったから」
「……」
僕はユータの過去を知らない。過去にあまり興味がない。
だけど、あいつにも結構繊細なところがあるんだな。確かに、男は寄り付かないタイプかもしれない。クラスでもユータのことを誤解している奴が結構いる。真面目な女子は、浮気っぽいイメージからか、ユータのことを敬遠するし、男はもてるユータを僻んでいる。
だけど、確かにユータは入学当時よりも変わった。前は自分から

進んで人と関わる人間ではなかった。黙っていても女の子が寄ってくるから、それを相手にしているだけで、好きな奴意外と進んで関わることはなく、時には寄り付きがたい空気を出している時もあった。そんな奴が、今ではチームで部長をやれるくらいの人望は手にするようになった。ジュンイチに比べると、若干ぼけーっとしていて、おおらか過ぎる部分はあるけど、それでも昔の冷たい感じは随分消えている。

「ごめんね、お風呂中に変なこと言って」

「……」

脱衣所のドアが開く音がした。

「ゆっくりしていってね、服は、洗濯しておこうか？」

「いえ、家に持って帰って、自分で洗います」

「そう、別に遠慮してくれなくてもいいのに。じゃあ背中流してあげようか？」

「――いいです……恥ずかしいので」

「あら、ケースケくんの体は、誰に見せても恥ずかしくないわよ。まあ、ゆっくりしていってね」

明るい声を残して、ドアの閉まる音がした。また、浴室に、静寂が流れた。

「……」

ここでは、僕は『肯定』されている。

家では『否定』され続け、いつも殺気めいて、周りに憎悪をぶつけている、この僕が……

『理解』――僕とジュンイチは、それをユータに与えた、初めての人間だったのか。

何となく気持ちはわかる気がする。僕も異端視され、省かれるタイプの人間だったから。ユータの過去を詳しく訊いたことはないけど、確かに男友達は出来にくいタイプだ。難しい奴であることはわかる。

そういう奴は一人になってしまい、予定調和というか、自分を繕

いがちになってしまうものだ。きっと、僕達の前に見せるユータが、素のユータなんだろう。ユータが他の奴と、僕達と接する時は、明らかに違う表情や仕草がある。

いいな。僕もそんなものが欲しかった。そして僕は、それをいまだ手に入れられないでいる。あいつらの前でさえ、どこか繕いがちで、いつでも本当の気持ちも曖昧なままで、佇んでいるだけだ。

体をいっぱいに伸ばす。浴槽に体が滑り、僕はずるずると、顔を湯の中に沈めていった。

ぶくぶくぶく……ぶくぶくぶく……

――「君が、僕の何を知っているんだ?」

ああ――あの時、マツオカは、泣いていたんだ。

なんてことをしてしまったんだろう。彼女には、何の罪もないのに。僕自身でさえ、自分のことなんて、よくわかってなんかいないのに。

僕にない、平穏を持っている彼女。彼女なんかに、僕の気持ちがわかってたまるか。何で彼女は幸せで、僕はこんな惨めに生きなくちゃいけないんだ。

幸せな姿を見せ付けられたような気がして、彼女に見下されたような屈辱を覚えた。

そう思っていたけれど――

少なくとも、わかろうとしてくれたんじゃないか。こんな僕のことを。

僕は、彼女に、なんて謝れば……僕を『肯定』してくれようとした、彼女に・・・・・・

――風呂から出て、先ほどの部屋に行くと、酒に酔ったユータとジュンイチが、泥のようないびきをかいて、床に臥して眠っていた。

こいつらだって――そうなんだろう。

こんな自分を、『肯定』してくれた――そんなこと、生まれて初めてだったから、とても嬉しかったんだ。長く一緒にいて、その時の気持ちをつい忘れがちになってしまうけど。

呆れることも多いけれど、僕はこの二人に何度も癒され、何度も感謝している。

僕に初めて出来た『友達』――対人関係が苦手な僕を気遣って、こいつらが、他のみんなに、僕のことでフォローしてくれているのも知っている。

きっとこの二人が側にいなかったら、僕は高校でいまだに一人ぼっちだっただろう。またいじめを受けたかもしれない。学校で、時間の重さが今以上に僕にのしかかってくる。家にも帰りたいわけでもないのに、時間が早く経つことだけを望んでいるような毎日を送っていたと思う。一寸の居場所も見出せずに、僕は自分で築いた地下室の奥底で、膝を抱え、更に卑屈になっていたかもしれない。

この二人が、僕を地下室から連れ出して、日の光を浴びせてくれる――二人のお陰で僕は、人間としてあるべき姿を、なんとか首の皮一枚とどめているんだ。

でも――僕はそれだけじゃ抑えられないところまで来てしまっている。望んでいるものは、こんなものじゃない。欲しいものは、最悪を免れただけの生き方じゃないんだ。

こんな生き方じゃない。もっと自分の生きる道は、自分の力で切り開けるはず。

僕は二人を背負って、引きずるように寝床に運んだ。気がつくと、もう1時を過ぎていた。自分の鞄から、歯ブラシと、歯磨き粉を取り出す。洗面所を借りて、綺麗に歯を磨く。歯医者に教わった通りに、一磨きで一本ずつ、時間のある夜は、丁寧に。でも今日は、アルコールの臭いが消えなかったから、いつもの倍、歯磨き粉を使った。

鏡を見ると、歯ブラシを咥えた僕の顔は、酷くやつれていた。目にはどろんとした死相が出ている。ぶすっとした顔には、何のそっけもなく、輪郭からはがらんどうみたいに空虚な雰囲気だけが滲み出ていた。

笑顔を作ってみる。ぎこちなく、醜く歪んだ顔は、石膏像のよう

に冷え切っていて、深いシワが刻まれただけだった。
こんな顔を、皆に見られているのか・・・・・・僕の17年は、一体何を生み出したのだろう。
これが僕の姿か？　ここまで身も心も痛めつけてきた、努力の結果が、これか？
変えなければ、変わらなければ。このままじゃいけない。勝ち取らなきゃいけないんだ。
ずっとこのままでいるつもりはない。見てろ、やってやるさ。

Anger

やがて勉強会が終わり、二人は再試を何とかクリアした。だけど再試の合格とは、赤点ギリギリの点数をもらう権利が出来るだけで、期末でまた赤点を取れば、赤点が決定する。

その後僕達は、冬の大会に向けて練習に励み、顧問のイイジマは、僕達を実に楽しそうにしごき続け、その疲れから、部員は僕以外にも、授業中、昼寝をかます奴が続出した。

秋――僕の好きな、キンモクセイの香りが消えはじめ、静かな冬がやってくる。緑が徐々に茶色に変わって、萎れていく姿。青々しい香りの消えた季節の空気には、生命の香りがしない。まじりっ気なしの冬の空気の正体は『澄んでいる』という形容がぴったりだ。

そんな冬の、肌を刺す木枯らしの吹きつける中で始まったサッカーの県予選、僕達は順調に勝ち進み、決勝戦まで上り詰めた。これで勝てば、全国大会の切符を手に出来る。決勝の相手は、全国大会の常連、武栄高校だった。少し風が出てきて、まさに、ここに風雲急を告げていた。

あの決意から、ここまで僕は、６試合に出場し、４ゴール５アシストという結果を残してきている。ユータも絶好調で、８ゴールと爆発している。武栄高校は、準決勝をＰＫ戦を制して辛くも勝利しているので、勢いは僕達の方にあったと言っていい。

味方ピッチ中央で円陣を組み、中央にいたユータが号令をかけ、僕達は、おお、と叫ぶ。スタンドでは既に両校の応援合戦が始まっている。マツオカ・シオリもいるだろう吹奏楽部の金管音が、大きなスタジアムの銀傘にこだまして、ピッチ内を巨大なオーディオルームに変えていた。

決勝戦ということで、県知事の挨拶とか、いつにも増して長く、無駄なセレモニーを受け流しながら、キックオフとなった。

相手チームからのキックオフだった。武栄高校の、シマウマのよ

うな白黒のストライプのユニフォームは、セリエAの強豪チーム、ユベントスを彷彿とさせた。まずは僕達の出方を窺っているのだろう。さすが百戦錬磨。ゆっくりと中盤でボールを回しながら、僕達の隙を探している。

しかし違うな、様子見は王者の貫禄っぽく見えるが、余裕ぶると怪我をする。

じりじりとラインが侵入してくる。僕は相手フォワードの一人についた。僕とコンビのジュンイチも、相手ツートップの片割れをきっちりマークした。

ユータが少し戻って、ボールをキープしている相手の中盤選手にプレスをかけに走った。味方のサイドの選手がユータのヘルプに駆けつけたので、相手選手は二人に挟まれる前に、前にいた選手に前へパスを出した。

だけど、僕は二人で囲もうとする前に、そこにパスを出すことを読みきっていた。

僕はマークの選手を振り切ってダッシュし、パスを受ける態勢の選手の前をすり抜ける。右インサイドキックで軽くトラップした後、加速力を殺さずに一気に強行突破した。センターサークルを超え、バイタルエリアへ侵入。埼玉高校ギャラリーの、せり上がるような右肩上がりの歓声が響く。僕の背中を押す。僕は風を切る。誰もついてこれない。

しかし、さすが決勝に来ているチームだけあって、ディフェンダーの戻りも早い。ユータは相手のプレスをすり抜けるようにして、どんどん前に上がっていく。反撃開始のジャンが、僕の頭の中で鳴り響いた。

さっきまで、ユータにプレスをかけられていた選手が僕の前に立ちふさがる。僕も一度止まり、軽く足先でボールを撫でるように転がした。体を左に素早く倒すフリをして、右に体を向けて、一気に抜き去った。次の瞬間には、初歩的なフェイントに引っかかったことを後悔させる暇もないくらい、相手選手を引き離し、更に加速し

て、ゴールに突き進んでいた。ほとんどの生徒が応援に来ている味方スタンドからは、大歓声が上がった。

スリーバックの陣形を布く相手ディフェンダーは、がっちりとペナルティーエリアを固めている。僕から見て左側で、ユータが相手のマークを振り切ろうとして、手を上げて押し合っているのが見えた。僕はこのまま突っ込むのも下策と思い、ドリブルのスピードを緩めた。

そこでディフェンダーは一瞬気を抜いたのか、僕を意識しすぎたのか、ユータのマークがおろそかになった。ユータはマークを振り切って、僕の方へ体を向け、走ってくる。僕はユータにパスを出した。ショートパスを出すのと同時に、僕は前へ走り出していた。ユータも狙いを察したのだろう。ノートラップで僕にワンツーパスを出した。

ユータにパスを出したことで、相手ディフェンダーは県内屈指のフォワードであるユータを警戒した。ワンツーパスを出された僕は、がら空きの状態でペナルティーエリアに進入し、思い切り右足を振り抜いた。

ボールは無回転のまま、磁力に引き寄せられるように、ゴールへ突き進み、キーパーの手をはじいて、そのままゴールネットへ突き刺さった。主審のホイッスルが、高くなった冬空に響いた。

開始直後に貴重な先制点。相手の虚を突いた奇襲作戦が功を奏した。狙い通りだ。

埼玉高校のスタンドから、吹奏楽部のファンファーレをかき消すような歓声が上がる。

ユータが僕に抱きついてきた。僕は、自分の顔が引きつりながら、いつかユータとバスケットボールをして、勝った時と同じ、あの怒気のような感情が、胸の中を駆け巡るのを感じていた。

後半に僕は、最後のスルーパスをユータに回して、ユータもゴールを決めた。あとは高校ルールの８０分を必死に守って、２‐０で

僕達は優勝した。

その日はイイジマのおごりで、ベンチ入り選手は全員、川越市内の回転寿司をご馳走になった。校長やら他の先生も集まり、祝辞を述べながら、場は無礼講となった。

そんな中で僕は一人黙々と寿司を食べていた。僕の前にはおもちゃみたいな柄の、安い皿ばかりが積みあがっている。奢りでも日頃の癖で、安い皿しか頼めない、僕の貧乏性を表している。皿山の大部分を占める、一番安い空色の皿に乗るネギトロを取った。

皆は店の中を走り回ったり、クラッカーを飛ばしたり、何度もジュースで乾杯をしたり、大声で笑ったりしている。

ネギトロの海苔巻きを口に放り込む。味気ない寿司をお茶で流し込んだ。

僕には食べ物の好き嫌いがない。人と飯を食べるのが苦手な僕が頼るのは、ただ何でも口に詰めることしかなかった。

きっと居心地が悪いのは、皆と一緒に食事をすることに、慣れていないからだろう。

僕はいつも、誰かの虫に火をつけないように、身構えていた。体はいつも緊張していて、口を開くのも気を遣った。

でも、いくら気をつけても、些細なことで火がついてしまう。僕はそこから逃げ出したいような気持ちに駆られるが、逃げられない。黙っていても、止めに入っても、僕はその度責められ、叩かれた。

殴られ、責められ続けた少年時代——僕はいつも、八つ当たりの的だった。

そんな幼年時代を送ったせいか、体の大きくなった今でも、家族は僕の恐怖の象徴だった。小さい頃には、家族を止める力もなかった。だからいつも、周りの怒りの濁流に巻き込まれていた。その時に味わった恐怖は今でも、僕の心から離れることなく、心の奥底に巣食っていた。

僕にとって親はもう親ではない。パトロンに過ぎない。しかし、親としての親に見捨てられるのは構わないが僕のやっていることは、

結局、パトロンに見捨てられない程度の反発に過ぎない。グレたりしてもいいが、それが根本的な解決にはならないことくらい判断する頭はある。そんな小賢しい頭を持つせいで、僕の生き方はどんどんと複雑化していく。

そういうちっぽけで、ヤワな覚悟での反発――それが僕についている、足枷なんだ。相手も世間体を守るため、僕も大学を出て自立するため、そんな関係が拮抗して、僕達は泥仕合を続けているだけなんだ。

大学に行きたい。大学に行って、企業に就職したり、司法試験を目指したりする――そういう生き方以外は、僕には考えられなかった。頭脳を資本に生きる方が向いていることは自分でわかっているし、それで金を稼げるつもりだ。そんな生き方をするためには、僕は大学に行って、そういう生き方コースを選んだ、ということを世間に証明しなければいけない。だから僕は大学に行くんだ。

翻せば、僕は高校を出るまでは、パトロンである親に絶対に過剰に逆らえないし、意見もできない。この胸に巣食う恐怖からも、絶対に逃れられない。

幼年時代から、その弱みを親に突かれ続けた。僕は金を持っていないことが辛かった。自力で金を稼いで生活していない僕は、詭弁を並べても、まだ社会を知らない、と断定される。いくら真剣に叫んでも、世の中を甘く見ているガキの戯言にしか訊いてもらえない。

子供が主張しても、言葉は届かない。それを僕は嫌というほど思い知らされた。

周りにいる、散々色んなことに文句を垂れながら、それでも笑っていられる皆がうらやましかった。家族や教師を平然と批判して、何食わぬ顔をしていられる彼らが。何で僕だけが、こんな言葉も否定されるようになってしまったんだ、と、どうしても考えてしまう。

何で正しいことが、僕の言葉だけ届かないんだろう。

何で同級生達は、あんなに普通に、学校へ通えているんだろう・・・・・

僕は僕の言葉に耳を傾けてもらえるくらいの評価が欲しい。正しいことを主張している自負はある。主張が通れば、僕の周りはスムーズに流れるはずだから。

僕は自分のバイト代で、自分の必要なものを全て買っているし、塾にも行かず、私立の付属高校への進級を蹴って、学費の安い県立高校へ進学した。全国の切符を掴むまで砕身したサッカーだって、親に負担を一切かけていないどころか、自分の力で勝ち取った奨学金まで、親に寄付している。

でも結局、子供一人で完全に自活することなど、出来るはずもない。頑張ったって、見返りは気休め程度のものしかない。未成年には、いつだって親の同意が付きまとう。身を切るような努力をしたって、いつも馬鹿を見ているのは僕だけだ。

ちょっとくらいわがままを言ってもいいじゃないか。これだけ我慢しているんだから。

今までの我慢を解き、最近の僕は、自分の力だけを頼りに突き進んだ。

自己主張がしたくなった。どいつもこいつも自分の都合ばかり吐いているのに、僕だけがそれを出来ない、なんてことはありえないだろう。だったら僕が主導権を握ってやろう。

僕の心の叫びが、行動に呼応して、僕の自己主張は功を奏したようだ。今日の試合だって、僕に誰も文句は言わないだろう。

やはり僕は間違っていなかった。やっと行けるのかもしれない。自分の求めた花道へ。

今日の自分の結果に満足しながら、寿司をほおばっているところに、イイジマが隣に腰を下ろした。既に祝杯で、前後不覚になっていた。彼が酒を飲むところは見たことがなかったが、どうやら悪い酒を飲む男ではないようだ。

僕は、イカを口に運びながら、横目でイイジマを見た。イイジマは僕の前に積みあがった皿の山を見て、僕の肩を叩いた。

「サクライ！　今日のヒーローが、そんな湿気た安い皿ばかり食う

な！　何でも注文しろ」

Downfall

その様子を見ていた回転寿司の板前が、待ってましたとばかりに僕の前に来る。注文を催促するには、割と的確なジェスチャーだった。

「私に日本酒を。ほら、何でも注文しろ」

「――じゃあヒラメを」

「はい、ヒラメー」

板前はお櫃からシャリを掴む。僕は寿司の握りの奥深さはよく知らないけど、板前はシャリを右手で転がしながら、綺麗というより、器用に整形していく。これは寿司というより、贋作なのだ。目の前にいるのは、器用な贋作師。

「お前、若いうちはトロとか食えよ。爺さんじゃあるまいし、白身を頼むなんて通がやることだぞ」

「・・・・・・」

僕だってトロが嫌いなわけじゃない。ただ、こんな落ち着かない時は、心が重いものを受け付けない――あっさりしたものを食べたいだけだ。どれだけ活躍しようと、人の中に身を置くことが出来ない。僕の長年の積み重ねによって培われてしまった恐怖の名残だ。

いくら気持ちを一新しようとも、結局僕は、毎日同じ穴に帰り、毎日僕を蔑む連中と、顔を合わせる運命にある。その中で、過去を捨て、新たな決意を見出す術が、どうしても見つからない。

心では、楽しみたい、と思っている。皆が楽しんでいるのに、自分は全然楽しくない。そんな場に、未練がましくしがみついている。惨めだ。そして帰ればあの家族が待っているのだ。

でもどうにもならない。だから、皆の喧騒の中で、気持ちの整理をつけようとするんだ。それが段々心の中がざわざわしてくる。静かなままで留まっていたいため、土に根を下ろす草原の草達に、つむじ風が吹き付けるように――風が吹いたら、嫌でも揺れるしかな

い、青草のような、不安定な気持ちなんだ。
やがて、僕の築いた皿山の中には一枚もない、黒い漆もどきの皿に乗って、ヒラメが二つ乗ってきた。イイジマにも小さい日本酒の瓶が出され、グラスも用意された。
「お前は飲むなよ。ここで飲酒で出場停止なんてシャレにもならない」
言われなくたって飲んだりしない。僕はあんたと違って、酒があまり好きじゃない。
イイジマが瓶のオレンジジュースを頼んで、僕の前に出した。僕はネタのヒラメに少し醤油を付けて、口に放り込んだ。本当だったら美味しいはずなのに、何だかヒラメもイカも、味に差がないように思えてしまう。『好き』も『嫌い』もない。僕は味覚さえも、この通り冷めている。ものを味わって食べる余裕もなかったからだろう。
鷹揚な顔をして、イイジマはグラスに口をつけ、諭すような口調で僕に話しかけた。
「なあサクライ。お前は副部長として、これ以上ない仕事をした。ボランチという大事なポジションで、チーム一のアシストも記録したし、今日の試合、ニ得点ともお前の功績が大きかった。守備に不安のあるうちのチームを、予選二失点に抑えたのも、お前の奮闘があった。俺はお前がサッカーをはじめてまだ一年だから、多少過小評価はしていたが、ここまでの個人技をもっていることは知らなかった。汗顔の至りだ」
普段聞き慣れない、この男のベタベタな賛辞に、僕は少し気恥ずかしくなった。ただ、褒めてもらうのは、不覚だけれど気分はいい。今まで皆になめられていた僕の評価が変わった、というように聞こえたから。
「ただ――」
イイジマが一度グラスに口につけ、今度は途端神妙な顔をして、僕の目を見据えた。

「お前のスタイルが、予選がはじまって少し変わった気がする。個人プレーが目立ったな。チームプレーが功を成すサッカーでは、今までのお前のようなチームを統率する、リーダーシップが大事なんだ。ユータよりもそれはお前に適している。俺はお前にそれを求めていた。今日のようなプレーじゃない。もう出過ぎた真似はするな。それ次第では俺はお前をレギュラーから外さなくちゃならなくなる」

「・・・・・・」

さっきの褒め言葉は、この叱咤への枕詞だったのだ。

何を言ったのだろうこの人は。これだけ活躍した僕を、レギュラーから外すだって？

前置きで盛り上がった僕の気持ちは、一気に突き落とされた。

「お前はサッカーをはじめて日が浅いから、いつもチームメイトに敬意を失わなかった。ひたむきさがあった。だからチームも頑張るお前を信じた。頭も良かったし、それによってチームがお前を軸にまとまったんだ。それはあの軽いユータには出来ん。しかしあのワンマンプレーでは、チームの足並みが乱れ、内部からほころんでしまう。頭のいいお前なら、それがわかるだろ？」

僕をなだめるように言った。一応、大会の活躍という実績を考慮してのことなのだろう。

「まあ、頭を冷やせってことだ。焦らず今までのままでいい。Ｔａｋｅ　ｉｔ　ｅａｓｙってやつだな」

慣れない横文字を使ったのは、恐らく最近覚えた言葉だったのだろう。だけど、その場には相応しい言葉だったのかもしれない。僕は、その言葉の日本語訳を、呪文のように唱えていたのだから。それで気持ちを鎮めるしかなかった。

「――すみませんでした」

「そうか、わかってくれたか」

イイジマは僕の肩を叩く。

「それならいいんだ。これからも期待しているからな」

「・・・・・・」

イイジマは日本酒の瓶とグラスを持って、教師達の待つ席へ戻って行った。僕はうなだれる。目の前の皿にはまだヒラメが一カン皿に乗っているが、もう食べたくなかった。

綺麗に術中にはまって、浮いたところを一気に突き落とされた。僕はこういう事態に万能に対応して、回避するために、見聞を深めたつもりだったのに、何故それがうまくいかないのだろう。どうして僕は、他人の掌に転がされてしまうのだろう。酒中の席で、薄ら笑い混じりに慰められる程、軽く見られなくてはいけないんだろう。

それ以上に腹正しいのは、何で僕は、すみません、などと言ってしまったのだろう。

謝る必要なんかないじゃないか。何故自分の主張を通せなかったのか。人と話し慣れていないせいか、咄嗟に出た一言に対して、いつもこうして後悔してしまうんだ。後からじわじわ来るから、『後悔』と書くのだけど、何度も同じようなことを、馬鹿みたいに繰り返してしまう。

確かに、祝賀会というめでたい席で、監督と副主将が喧嘩するのは、イイジマではないが、チームのためによくないだろう。だけど、自分の必死のもがきを否定されても、すいません、などと、謝って引き下がるなんて・・・・・何て肝が小さいんだろう。これも対人の場で蘇ってくる、心に染み付いたもののせいなのか。幼い頃から染み付いた、逃げの精神のせいなのか。

何をやっているんだろう。あれだけ頑張ったのに、抗うことも出来ず、簡単に引き下がって――

自分の尊厳も守れないのか？　僕がしっかりしなくちゃ、いくら主張しても、意味はないのに。

僕は自分の中で、何かが崩れていくのを感じながら、心の平穏を保とうとして、体の中の衝動を、歯を食いしばって押さえ込み、必死に平静を装っていた。

「ケースケ、これからみんなでカラオケに行くことになったんだ。

応援してくれた吹奏楽の子とか、チア部の子とかも来るって。お前も来るよな」

そんな時に、ユータからの誘いがあった。彼の顔は僕とは対照的に明るかった。じわじわと売れ出してきたインディーズバンドのヴォーカルが、雑誌に掲載された時のような顔をしていた。

「いや、悪いけど」

そんな気分にはなれなかった。とても騒ぐ気にはなれなかった。

「ケースケ――一回くらい俺とカラオケ行こうぜー？　俺のラルク聴いてくれよ」

「いや、明日から期末だから、勉強する」

「あ・・・・・」

「忘れてたのか」

それを端で聞いていたジュンイチも寄ってくる。

「今日勉強しなくたって、ケースケはテストに何の心配もないだろ？」

僕は席を立つ。

「でも、今度はマツオカに勝ちたいんだ」

「マジで？　お前どうしてそんなに頑張るんだよ」

「悪いな。先に帰るよ」

話を寸断し、僕はスポーツバッグを担いで、イイジマに挨拶して、寿司屋を出た。

Homerun

駅前の裏通りは賑っている。人の群れ、酒の匂い、車のエンジン音、笑い声。それを包括するたくさんの居酒屋がしのぎを削っていて、演歌調の歌が雑音混じりに聴こえて来る。

正直言って、このまま自分の力を試すことを止める気はない。今度の期末テストだってそうだ。

今回は大会の中、必死に勉強した。マツオカ・シオリに勝つために。

彼女に勝つことが、正当に評価されることにつながり、こんな惨めな敗北感から開放されることにつながる、と、僕は勝手に思い込んでいた。

相当自分は追い詰められている。それが自分でわかっている。だから動くしかないんだ。今まで自分は、それによって勝ち進んで、ここまで生きてきた。

自分の力には、まだ満足はしていないが、大抵の面では信頼していた。うまく働けば、僕は今の局面を絶対に打開できる。今日のサッカーの試合だって、イイジマの見る目がなかっただけで、試合を打開したのは、明らかに僕の力だ。

横断歩道に引っかかった。僕はブレーキをかけて、信号の変わるのを待っていると、僕の隣に、小太りで赤ら顔の中年の集団が隣に立った。相当酒が入っている様子で、体がよたよたしている。５人くらいのグループが、お互いにお互いを支え合うようにして立っている。

「うーもう一軒いこぉー！」

「ウェーイ！」

そのうち、この中で一番のリーダー格だろう。綿の毛玉のついた、こげ茶色のコートを着た、頭のハゲた男が、千鳥足を踏んだ。その右足が強烈に僕の自転車の前輪にヒットし、ハンドルを持つ僕の手

は滑り、自転車は横倒しになった。カゴからスポーツバッグがこぼれ落ちる。僕もそのまま横へよろめいた。

何するんだよ、と思いながら、黙ってスポーツバッグを拾おうとすると、ぶつかった男はよろよろと僕の方へ体を向け、舌打ちをし、ろれつが回らない舌で、こう吐き捨てた。

「コラァ坊主！　私に何するんだー私は繊細な、ガラスのエースなんだぞー」

それはギャグだったのか、後ろにいる取り巻きが口を大きく開けて、大口で笑い出した。

「イヤァ課長、うまい！　座布団一枚！」

癇に障る大笑いに見下され、僕は怒りを抑えながら自転車を起こした。スポーツバッグをカゴに入れ直していると、ぶつかった男は、僕の前に顔を出して、落ち窪んだ目をして、変に子供じみた口調を作って、僕ににじり寄った。

「君はボクチンにぶつかって、謝りもしないのかぁ。謝れぇ」

課長とか言われているけど、中間管理職にしがみつく、うだつのあがらなそうな男だ。スーツはくたびれて、ネクタイも曲がっている。贅肉をつけて、顔には脂が浮いている。

僕は、軽蔑の念を込めて、その男を睨んでいた。目で挨拶した。そして黙ってここを立ち去ろうと、自転車にまたがろうとすると、男がよろよろと飛び掛ってきた。

「謝れぇ！」

声を上げながら、僕の胸倉を掴んできた。咄嗟に自転車を離すと、自転車はその勢いでまた倒れた。僕も男に胸倉を掴まれたまま、男に押されて、そのままアスファルトに倒された。背骨に痛みが走った。馬乗りの状態で、男が僕の上に立った。掴んだ手を上下に揺らして、体を何度も上下に揺らされた。人間シェイク状態だ。次第に平衡感覚が侵され、少し気分が悪くなってきた。

そこで、ピッピー、という音がした。繁華街ということで巡回していた警備員が、警笛を鳴らしながらやってきたのだ。

「何をしているんだ！」

声がすると、男も僕の胸倉から手を離し、取り巻きと一緒に、既に青になった横断歩道を渡って、よたよたと逃げていく。

既に立ち止まっていたカップルやら、おばさんやらに、今の醜態を見られていた。周りを見回すと、珍獣でも見るような目で、誰もが僕の顔をうかがっている。

憮然としながら、自転車をもう一度起こそうとすると、警備員が近づいてきて、僕に、大丈夫ですか？　と問う。しかし僕は答えなかった。答える気も失せていた。カゴにスポーツバッグを詰め込むと、そのまま自転車に乗って、ギャラリーの嘲笑の視線を背負って、その場を去った。

醜態だ。気分が更に悪くなった。

この行き場のない屈辱と怒りは、一体どうすればいいのだろう。僕にはそんな怒りの向け場もなかったから、せめてその怒りを享受しようとしていた。

僕はいつだってそうやって生きてきた。怒りの向け場は、自分しかなかったからだ。

僕より力のない奴は、他にいっぱいいるのに、どうして僕が、自分より力のない連中もしないような愚を演じてしまうのだろう。どうして、家族にしても、さっきの酔っ払いにしても、あんなクソ野郎どもの蹂躙が許されて、僕がその立場に立てば、戒められるんだろう。

何が正しいかなんて、まだ僕にはわからない。それでもやれることをやり、必死に生きる僕を、どうしてあんなクソ野郎どもが汚していくのだろう。

駅前の大通りを抜け、岐路を外れて左の未知に入る。そのまま進むと国道に入る。その手前、暗い夜道の向こうに、人工的な濃緑の光に照らされた、工事現場と間違えそうな、ナイロン網に覆われた建物があった。僕は自転車を建物の方へ向ける。

無骨な入り口の押し戸を開けると、乾いた金属音が中に置いてあるゲーム機の喧しい音にかき消されている。狭く薄暗い道を進むと、センターのオヤジが昼寝している受付の隣に両替所があった。僕は千円札を一枚突っ込み、１００円玉１０枚に崩した。

小銭をスタジャンのポケットに入れて、２枚だけを右手に持つ。振り向くと、十のガラス戸の中はどこも盛況だが、中にいる人は、どれも皆不自然な構えをして、滑稽なきりきり舞いダンスを繰り返している。ドン、ドン、という、ボールがマットを叩く音ばかりが響く。

その中で、入り口から5番目の引き戸から、金髪の男が出てきた。僕は入れ違いにそこに入る。ガラス戸には、黄色のガムテープの上に『快速・１２５～１３０』と書いてあった。

立てかけてあった、藍色のバットを手に取る。スポーツバッグを入り口の脇に置いて、スタジャンを脱いで、バッグの上にかけた。バットを一度、軽く振って、僕はコイン投入口に１００円玉２枚を押し込んだ。

快速のゲージだけ、マシンだけではなく、グラフィックで見せるプロ投手の投球モーションから、ボールが繰り出されるタイプだった。これだとボールのリリースポイントがわかりづらくて、タイミングが取りにくいのだけれど、やっていれば、じきに慣れるだろう。

何球か、バントで目を慣らした。それから構え直す。

中学時代は、俊足巧打のセカンド。バットの握りを拳一つ分余して、小学校時代、イチローに憧れて、真似から入った、振り子打法。

「センター返し」

足を後ろに引くと、ボールがうなりをあげて、低目を抉ってくる。僕は脇を締め、腰の回転に逆らわずに、バットを出した。ガシッという音がして、磨り減った軟式ボールは、プロ投手の顔面に向かって飛んで行ったが、その前に貼ってあった、ナイロン網に受け止められて、ぽとりと落ちた。

「流し打ち」

僕は軸足を後ろに引いて構えた。飛んできたボールに対して、ライト側に前足を踏み出し、鋭くスイングすると、ボールはラインドライブがかかって、ぐぐっと右に曲がって落ちていく。跳ねたボールは、鋭いスピンで、僕の視界の右隅に消えて行った。試合だったら、一塁ベースを掠めて、ライト線に転がるツーベース――いや、僕の足ならスリーベースはいけるだろう。

「引っ張り」

続けて来たボールを、左足を思い切り外に開いて踏み出し、ボールを手前で捕らえた。球足の速い打球が、あっという間に左側を破って行った。試合なら、三遊間をライナーで抜けていたろう。

ふう、と一息ついて、僕は投手のグラフィックの上を見ると、その奥にもナイロン網が張り巡らされていて、そこには、二つの黄色く丸い、ビニールの的があり、上下にサッカーボール三つ分ほどの間を空けて、並んでいた。どちらも赤い字で、上には、『ホームラン』、下には、『ツーベース』と書かれていた。

「・・・・・・」

僕は握りを変えて、いっぱいにバットを持った。振り子打法の小刻みな構えを崩し、大きく足の開きを取り、バットを大上段に構えた。一発を狙う打者の構えだ。

プロ投手の、少し荒れたグラフィックを睨んだ。しかしそこからは無機質な速球が繰り出される。

僕は目をくわっと見開いて、ボールに背中を見せるくらい大きく体を引いて、思い切り溜めを作り、先ほどよりも前に足を踏み出した。腰の回転は、溜めによってさらに加速し、自慢の視力は、しっかりとボールを芯に捉え、長く持ったバットの遠心力でボールを巻き込んだ。

グシャ、という音がして、ボールはグラフィックの上を越える大飛球となった。ホームラン角度の４５度に上がったボールは、一直線に、ホームランの的へ向かって行ったが、打球に伸びがなく、下に落ちて行き、ツーベースの的に命中して、網を滑り落ちた。ぽと

ん、という音が聞こえた。
「・・・・・・」
スイング後のフォロースルーのまま、僕はそこに硬直していたが、ボールの末路を見ると、すぐに構え直した。
この後の僕は、残りの球に対して、メチャクチャにバットを振り続けた。全てのボールを捉えたが、全てがツーベースの的近辺に集中し、ホームランの的には届かない。
「くそっ！」
最後のボールも、ツーベースの的の、僅かに上の網に受け止められて、ボールが落ちると、目の前のプロ投手のグラフィックは、まるで停電したかのように、何の前触れもなく消え去った。
「・・・・・・」
呼吸は荒く、汗をかいていた。両手を開いて見ると、スイングの摩擦と、百三十キロのボールの衝撃で、手は真っ赤になっていた。
僕はスタジャンを拾って羽織り、バッグを肩に担いで、バットを立てかけ、ガラス戸を開けた。もう、中に客は誰もいなかったが、ガラス戸の外で、さっきまで受付で寝ていたオヤジがそこに立っていた。僕の打球音で目が覚めたらしい。僕が中に入ると、オヤジは微笑んで僕の肩を叩いた。
「いやぁお兄さん。小さくて細いのに、やるねえ。見ない顔だが、中学生かい？　もっと速い球を投げるバネが入荷したんだが、挑戦するかい？　お兄さんを運転初の客にするよ」
「・・・・・・」
僕はオヤジを黙ってかわし、センターを出て自転車にまたがり、暗い家路にペダルを回した。
あのスイングは、僕の中では最高のものだった。溜めも、腰の回転も、脇の閉まりも、フォロースルーも完璧で、ボールも完璧にバットの芯で捉えた。
それなのに僕の打球は、一本もホームランにはならなかった。バットを一握り余して、しっかり振れば、あれだけヒットが打てるの

に、一本のホームランが出ない。
どうして僕は、何もかもの上を越えていくことが出来ないんだろう――
僕が今手にしたいのは、ヒットの量産じゃない。どんな障害も関係ない、ホームランが打てる力なのに。
力が欲しい。誰にも文句を言わせないような、全てを超越した力が。
段々僕は、自分の力のなさに、可笑しさまで伴ってきた。
ふふ。憂さ晴らしがバッティングセンターしかないってだけでもそうなのに、そこに来ておいて、余計に落ち込んでいるなんて、本当に不器用な男だ。
途端に笑い出したくなった。ふふ、あははは。

Infringement

ガレージに自転車を置いて、僕は玄関のドアを開けた。玄関には親父のローファーがある。こんな日に家にいやがる。それだけで憂鬱な気分になった。

階段とは逆の方向に風呂場がある。そこに行って、脱衣所に置いてある洗濯機に、今日使った試合用のユニフォームを入れて、水を溜める。洗剤を入れて、僕は蓋を閉めた。

2階に上ると、上ってすぐ前には二つのドアがある。左が祖母の部屋、右が妹の部屋だ。祖母の部屋から、NHKのニュースだろう、単調なアナウンサーの声が聞こえてくる。

リビングに入ると、今日は珍しく家族3人が食事をしていた。祖母とは家庭内別居中。飯も別だ。

家族3人は、僕の方を揃って見たが、すぐにご飯に視線を戻した。テレビのバラエティー番組の喧しい音だけが響いていて、会話は全くない。顔は石膏像のように凝り固まっていて、誰もが顔さえ上げようとしない。よく見ると、親父の眉間に皺が寄っていて、目は不機嫌そうに血走っている。何だか気味が悪くなってくる。『団欒』なんて言葉のかけらもない、食事も凍りそうな、あまりに悲惨な食事。長年続いたいつもの光景。

そこで妹が食べ終わり、すぐに立ち上がった。そこに立ち尽くす僕を一瞥に睨んで、わざとぶつかって押しのけて、祖母の部屋の隣にある、自分の部屋へ帰って行く。

「その皿、片付けてよ」

母が今まで隣に座っていた妹の、食い散らかしてほったらかした皿を指差した。

「何で俺が・・・・・」

言いかけると、僕の文句をかき消すように、親父が不機嫌そうに口を開いた。

「グダグダ言わずにやれよ、グズ」
「・・・・・・」
僕はしばらく親父を睨んだが、一直線に歩を進め、妹の食い散らかした皿を勢いよくまとめて掴み、流しに投げ入れた。ガチャン、という大きな音がした。
「そういえば」
また親父が、台所から出てきた僕を嘲笑して言う。
「お前、月初めだから、奨学金貰っただろ？　出せよ」
「・・・・・・」
僕は親父の嘲笑を見た。明らかに僕の尊厳を蹂躙することを愉しんでいる顔だ。
こいつは、僕が奨学生だということを、どう認識しているんだろう。息子なんて認識はほとんどない。ただ頭の上げられない、カツアゲの標的くらいに思っているんじゃないか？
「――嫌だ。渡せない」
僕は断った。たった一万円と言うかもしれないけれど、これは僕の努力の証明だ。お前達に屈服する僕ではないことを、自らの力で証明したという、僕の誇りだ。そこまで蹂躙されてたまるか。
「あぁ？　何だとこのクソガキが」
親父の声は、部屋に反響した。酒を含んだまま、よろめきながら立ち上がり、僕の胸倉を掴んだ。
僕も親父の目を睨み返した。酒の脂で緩んだ顔を血走らせているこの豚野郎が、異常に憎かった。
この豚野郎は、自分の家族から逃げて、散々外で遊び歩いて、家庭内での憂さを晴らしていた。そして僕は幼い頃から、この豚野郎が家に残したものに散々苦しめられた。腕力が強いってだけて、この豚野郎は僕を支配した気になっている。暴力という調教で、幼い僕をこき使い、外へと逃げ続けた、この臆病で卑屈な豚野郎が、また僕を暴力で踏みにじろうとしている。
駄目だ。ここで引いちゃ駄目だ。引いたら今までと同じだ。

僕は憎しみを闘争心へと変えて、胸倉を掴む親父の手を、勢いよく払いのける。

「奨学金は、大学に行くために貯金するんだ。一人暮らしのための生活費にするんだ」

襟のシワを、反射的に手をやって直す。目を背ける僕に、親父は不機嫌そうに言った。

「生活費だぁ？　こっちは仕事して、テメエは遊んでられるんだろうが。生言ってんじゃねえよ。今日もタマ遊びしてたんだろうが。いいご身分だなぁ、オイ」

「・・・・・・」

よく言う。自分は昼間からパチンコに行くことだって珍しくないくせに。

しかしこれは最終兵器だ。これに立ち向かうことは、絶対に出来ない。僕がこの家に住む限り、トランプのジョーカーは、常に相手に握られているんだ。

県予選の決勝戦でＭＶＰの活躍した僕が、さっきからどうしてこんな蔑みを受けなくてはいけないのか。どうしてこんな豚野郎に、この僕が主導権を握られっぱなしでいるのか。

「これは俺が必死に勉強して、学校に認められてもらったお金だ。これは、あんた達のお金じゃない。だからこの金は、俺が自由に使う」

僕は毅然と言ったが、親父はそれを鼻で笑い下げた。

「その高校に通わしてやってるのは、俺らだろうが？　その金を高校の授業料に回して何が悪い？」

その言葉を聞くなり、親父は僕の胸倉を掴む腕に力を入れ、僕の体は少し浮き上がった。

「まだ自分の立場がわからないらしいな。金を出してもらってるガキが、親に逆らうな！」

言うなり、親父の裏拳が僕の頬に入った。腕力だけは強い親父の一撃に、僕は首筋に強い衝撃が走り、筋がゴムみたいに引き伸ばさ

れた感じがした。鼻の奥から血が伝ってくるのがわかった。
目がちかちかし、頬骨がまだじんじんしているうちに、親父は胸倉を掴む手を離し、今度は僕の肩を左でつかんで、ショートアッパーの要領で、僕の腹に右拳を入れた。不覚にも、先程の一撃で記憶が飛んでいた僕には、受身の体勢を取るなど当然出来るわけもなく、拳は深く腹にめり込み、僕は息を漏らして、腹を押さえながらその場に膝をついた。
何度か咳き込みながら、僕はちかちかした目で親父の顔を見上げた。
親父の目は、酔っているのも手伝って、奇妙に血走っていた。煙草の脂で汚れた黄色い歯を見せて、口元は狂的に歪んでいる。
思った。こいつに論理的な話なんか、意味がない。
こいつはもう、イカレかけてるんだ。
この家は、はじめからどうしようもない状況にあった。金欲、世間体、一族――色んなものが入り混じったこの家は、もはや常識や理論など、存在する余地はなかった。
この家に、思考を働かせること自体が存在しないのだ。考えれば、耐えられなくなるから。それでも住むためには、開き直り、狂うことを享受するしかないんだ。
この豚みたいな男は、開き直って、まともに暮らすことを放棄したんだ。
恐らく外では、家から逃げるために、友人に媚を売る人間なのだろう。僕と同じ、結局同じ穴のムジナに過ぎないこの男は、友人からも見捨てられると、この家しか居場所が残らなくなってしまう。だから他人に媚を売るしかない。そんな自分が惨めで仕方ないんだ。
だから家では、僕のような下手の人間を、暴力で飼い慣らし、屈辱的な自分を忘れようとしている。目下の人間をいたぶる、このような暴力を心の底から愉しんで、自分より目下の人間がいることを確認し、惨めな自分から目をそらし、ほっと一安心している
――そうして形成したものが、この男の『居場所』なのだ。

母親もそうだ。我が子が暴力を受けているのを見て、もはや助けようともしない。

この家で、自分よりも酷い目にあっている人間がいる――それがあの女の、心の支えであり、『居場所』なのだ。

この暴力が、いつか自分に飛び火するかも知れない。そんなこと、考えたくもない。自分の近くにその問題を感じたくないから、現在、その役を担っているのが、自分ではない他の家族だということだけでそれを処理し、自己を確立しようとする。

母親が僕をつなぎとめているのは、もはや愛情でも母性でもない。親父と同じ、憂さ晴らしのための道具――そして、自分より下の立場にいる人間としての存在価値でしかない。

幼い頃から、そのための道具として、育てられてしまった。気が付いた時には、もうそこから逃げられなかった。愚痴を訊いて当然、気に入らなければ叩いて当然。逆らっても、学費を握る限り、大怪我はない――僕はこの女狐に、物心ついた頃からそういう家畜みたいな存在に『形成』されてしまった。

親父から蹂躙を受ける役目は、自分に飛び火してもおかしくない。『やられ役』としての僕の立場が一転すれば、自分はこの家庭内で、身を守るものを失う。僕という『盾』の存在がなくなれば、無防備となった自分は、今の僕のように、酷い仕打ちを受けることになるかもしれない――

母親は、そう考えている。

それを恐れている。

だからいつも目下の人間――自分が長年かけて育て上げた下僕――僕の存在を確認し、安心して自己を確立する――それがこの女の『居場所』だ。

母親が僕に望むのは、憂さ晴らしのための『やられ役』。親父の暴力から身を守る『盾』――そんな役割。

それだけだ。

もう『息子』なんて思われていないだろう。僕は『道具』に過ぎ

ないのだ。
　僕は違う。狂ったり、開き直ることも選択できなかった。親父のように、外に逃げ場もなかったし、子供だったから、力もなかった。周りで弱者を作ることも出来ず、現実を受け止めねばならなかった。狂うことも出来なかった。それを愚かなことだと判断できる頭を持っているということもあったが、それ以上に、僕の人生をこいつらに握られていることを、どうしても忘れることが出来なかったからだ。その現実は、いつでもリアルで、僕に狂うことを選択する余地を与えなかった。
　咳き込むと、口のどこかを切ったらしく、血が僅かに飛び散った。親父はそれを見て、狂的な笑い声を、かすかに漏らしていた。僕は顔を上げると、親父の影にいる母は、僕の姿を見て、ただそれを見ているだけ。哀れみも何もない。目に浮かんでいるのは、ただ、自分より下の存在の再確認と、自分が面倒から逃れたことへの、安堵の感情だけ。
　こいつらは、自分より立場の低い人間を作らなければ、生きていけなくなってしまったんだ。自分より立場の低い人間を蹂躙して、憂さを晴らさなければ、自己処理が出来なくなっているんだ。
　僕は口元を手で拭い、立ち上がった。しかし、もはやそれが虚勢であることは、自分でわかっていた。今の僕は、親父に殴りかかりたい衝動より、もう殴られたくない、と思う気持ちの方が強かった。
「……っ」
　我慢していたのに、それは来た。
　足が……震えている。
　いや、足だけじゃない。全身が震えているのだと認識するのに数秒かかった。震えが段々大きくなる。僕は俯いて、腕を組むようにして両腕を必死に押さえた。だけど震えが止まらなかった。
　正直に言う。僕は親父が怖い。
　腕力では僕は絶対に勝てない。小さな時から、親父の腕力による鉄拳に、何度も地べたを舐めさせられた僕は、心に染み付いて恐怖

が蘇ってきて、それを隠しきれなくなる。今なら勝てるかもしれないが、子供の頃の恐怖が強すぎて、もはやそれがトラウマになってしまった。小さい頃からの条件反射で、一発殴られると、体が震えてしまうのだ。

親父はそんな僕の内に隠した恐怖の存在を見抜いたらしい。一発入れておけば、あとは潰すのは簡単、とでも思ったのだろう、酷薄な笑みを顔に浮かべて、こう吐き捨てた。

「いいさ、お前が親のいうことも聞けないんだったらそうしろよ。その代わりこっちもお前を見限るからな。その時は学費も出さねぇから、退学して、とっとと出て行けよ」

「・・・・・・！」

力が湧き上がるように、それが僕の肉体という溶媒から飽和して、ほどばしるような武者震いが、僕の体を駆け抜けた。

無責任な他人――外様の親族は言う。いくら親が気に入らない人間であろうと、自分を養うお金を出してもらっている以上、親には『感謝』すべきである、と。

『感謝』だと？　ここまで辱められて、そんなことできるはずがない。

喉に引っかかった言葉を飲み込もうとしたが、次々言葉が湧き上がって、踏みとどまれなかった。僕は鼻を押さえた手を外し、まるで嘔吐するように叫んだ。それは怒りの嘔吐だった。胸にくすぶる、染み付いた恐怖を払拭するように、僕は鼻を押さえる手を離し、腹の底から声を絞り出した。

「馬鹿にしやがって！」

きっ、と顔を上げ、久し振りに喉の奥から怒鳴った。もう鼻血は止まっていた。

「今まで家族をほったらかして勝手にしてたのは、あんたじゃないか！　だけどこっちはテメエの人生は勝手にしろって言われても、自分ひとりじゃどうしようも出来ないんだ！　だから・・・・・・嫌でもあんたに頼るしかないんだ！　必死に努力して、高校で結果を出しても、他に住むところなんかないから、殴られてもあんたに頼るしかないんだ！」

もう限界だ。だけど――こんなみっともないことしか言えない、今の自分の無力さに腹が立つ。

この豚野郎を殺してやりたい。八つ裂きにして、肥溜めに叩き込んでやりたい・・・・・・

目の前の親父は、僕の言葉の裏に潜む恐怖心を見抜いているのだろう。気をよくしたらしく、狂的な目のまま、うすら笑っている。その親父の顔が、僕の怒りを更に加速させる。

「俺は普通に暮らしたいんだ！　俺が生まれる前から、この家はメチャクチャなのに　何で俺が、生まれる前からこじれてるもので苦労しなくちゃいけないんだ！　どいつもこいつも誰かがどうにかしてくれるみたいなツラしやがって！　俺はもう１７なんだ！　自分のことで精一杯なんだ！　俺を巻き込むな！　俺には俺の人生があるんだ！」

一通り怒鳴り終わると、背中から、扉の開く音がした。僕の怒声を聞いて、小太りの妹が部屋の扉を開けて、リビングに戻ってきた。
「あのさぁ、うるさいんだけど」
不満げにそう言った。
「黙ってろ雑魚！　お前みたいな馬鹿、相手にしてないんだ。すっこんでろ！」
人生に何一つ苦労のない妹。頭も悪く、行動力もゼロ、ただ胡坐をかいて、周りを批判するだけの古狸。この古狸は何も考えずに生きているんだ。自分の平穏は当然のことだと、わがまま放題に生き、僕という『盾』の陰に隠れて、どんどん増長して、肥え太るだけの古狸だ。
この古狸女の、五月蠅い、という意見だけで、僕の怒りは止まらなかった。
しかし、睨みつけた先の妹の目は、本当の軽蔑の念を僕に送りながら、こう吐き捨てた。
「バカみたいだね。一人でヒステリー起こしちゃってさ、あーみっともない。こんなのが兄貴なんて恥ずかしいよ。お願いだから、早く家出て行ってよ。ウザいし、イタいんだよねーあんた見てて」
妹は声を作って嘲笑し、もと来た道を引き返して行った。自分の部屋に入る時、勢いよくドアを閉める音がした。今度僕のパソコンを持ち出した時、妹は全国の人間に僕の悪口をネタにして、他の甘ったるい幻想から抜け出せない小市民と、下卑た笑いを貪る姿を想像した。
妹の言葉が棘のように深く突き刺さって、抜けない。歯噛みをして、地団駄を踏みたい衝動を必死で抑えようとしていると、いつの間にか母親が、僕の前に立っていた。
「妹にまでああ言われるとはねぇ。頭のいい子だと思ってたけど、どうしてこんなになっちゃったんだろ？　小さい頃から高い金を払って損したよ。私もアンタのことなんか、もううんざりだよ。疲れた」

――黙れ、黙れ黙れ。

金でいいように飼い慣らされて、自分のストレスを、僕にぶつけることで、憂さを晴らしてきた上、愛情や人間らしさはこれっぽっちもなかった女狐が、聞いた風な口を叩くな。

静かに激昂する僕に、母親は、僕に嘲笑しながら、とどめの一言を吐き捨てた。

「アンタっていつも私達のことを批判してるけど、アンタだって十分クズじゃない？　アンタが正しいって言うなら、どうしてアンタには、一人の味方もいないわけ？　アンタがクズだからでしょ」

その言葉を母親が切ると、親父が一歩乗り出して、波状攻撃とばかりに吐き捨てた。

「親に逆らうなら、こっちもお前潰すぜ？　自分の力の身の程を知れ、クズがよぉ」

その言葉を聞くと、僕は鞄を担ぎ上げ、逃げるように部屋に帰っていった。後ろで親父の高笑いを背負いながら、部屋に入り、電気もつけずに、鞄を床に叩き付け、そのままベッドに倒れこんだ。仰向けに倒れ、右腕で目頭を抑えた。もう、何も見たくなかった。

本当は涙を流したかった。でも、ああ、という、震えた声が漏れただけで、涙が流れなかった。もう慣れてしまったのだろう。それとも、こんな時でさえ、僕の心は冷め切っているのか。

泣けないって、すごく辛い。吐き出したいものがいつまでも胸に残るから。

殴られることは、もう慣れている。だけど、その後に家族から順繰りに浴びせられた一言は、親父の裏拳なんかよりも、はるかに堪えた。

そうだ、その通りだ。僕は、あの家族を正面から否定できるほど、立派な人間なのか。

そうじゃないだろう。奴等がいくらクズでも、僕はそれ以前の問題だ。誰からも好かれてはいない。誰一人の味方もいない。社会に貢献しているわけでもない、ただの『穀潰し』だ。ただ、金を喰っ

て生きているだけの『穀潰し』に過ぎない。
言わずにはいられなかったけれど、そんなこと、もっと先にわかっていたことなのに。
何で言葉が殺されてしまうのだろう。間違ったことをしているわけではないはずなのに、どうして誰も僕の言葉に耳を傾けてくれないのだろう。どうして僕は、発言権さえ奪われてしまったのだろう。叫べば叫ぶほど、滑稽になってしまうのだろう。
そして、僕は全てを踏みにじられ、なすがままに殴られた。抵抗も出来ずに。
抵抗できなかった。僕の人生は、あいつらに握られていることを、あれだけ訊かされてしまっては。自分の反抗の無力さに、ただ立ち尽くすことしか出来なかった。
「ちくしょう・・・・・ちくしょうちくしょう」
自分の無力さに腹が立った。世界で一番嫌いな奴の掌の中で生きなきゃならない運命が憎かった。
こんな夜は、無性に人恋しくて、ユータ達のことが頭に浮かんだ。ああ、きっと奴らは今頃カラオケで皆と盛り上がってるんだろうな。今日くらいは僕も気分よくいたかったのに——あの時僕も行くと言っていれば、こんな気分にはならずに済んだかもしれないのに。こんなすさんだ気持ちのままでいなくて済んだのに。
こんな気持ちは、花火大会の帰り道みたいだ。真昼のように夜空を、音と共に彩った花火に、心躍らされても、それが終われば、すぐに暗黒と静寂の暗闇が待っている。帰る頃には、その暗闇の中を、とぼとぼ一人ぼっち・・・・・
栄光が見えかけた今日くらいは、いい気持ちのままでいたかったのに、監督からは自分勝手と言われ、親からは、クズの烙印を押され、妹からは、バカみたい、と嘲笑された。
そうだ、その通りだ。僕は、馬鹿みたいだ。あれだけ頑張って、それでも叩き潰されて。
イイジマにも、妹にも、母にも、僕は反論できなかった。そして

最後は、親父に殴られ、思い知らされた。絶対に僕の力では、覆せないものがあること。

そして、僕はクズだったんだ――何だかんだ言っても、僕が認められないのは、全て自分のせい。この、乱れきった、醜く汚い心のせいだ。

わかっていたんだ。自分がクズだということは。それを認められなかっただけで。

僕はこの家の人間以下だというのか。あいつらに虐げられて当然のクズなのか・・・・・・

――Ｒｅｇｒｅｓｓ　ｏｒ　ｐｒｏｇｒｅｓｓ？

僕は、進化しているのか、退化しているのか――サッカーでのあのプレーも、進化だと思ったものは、退化だったのか？　それだけじゃない。僕の人生そのものが、退化へ向かっているのか？　あの努力は無駄だったのか？　小学校の級友に吐き捨てた言葉のように、僕も、クズに過ぎないのか？

前に進んでいるのか、それともただ追い詰められているのか、答えが出ないまま、夜の牢獄が、幸せを取り逃がした僕の無能振りをあざ笑うかのように、孤独の傷を抉った。

過去の後悔や、全ての憎しみが煮えたぎっていると、精神が、殺伐な心から逃れたかったのか、心と体が相当疲れていたのか、その日はそのまま眠ってしまった。

Scream

翌日、学校は今日から期末テストだった。いつもよりも準備期間は早かったし、バイトもしばらく休んで勉強した。6時に朝食をとり、家族が起きる前に家を出、部室で1時間ほど時間を潰した。

朝のニュースの占いで、僕の星座は最下位だった。僕はテレビの占いが悪かった日に、いいことが起こるジンクスがあるから、幸先が良かったが、今の僕には、薄暗い部室しか居場所がなかった。

僕には、あんな家族でも持っている『居場所』もないんだ。母親の言う通り、僕は本当に最低だ。皆にない力を持っていると信じていながら、僕は何もかもを失っていた。発言権も、自分の意志も、居場所も、そして理解者も。

滑稽で、誰からも相手にされない――僕は裸の王様だったのだ。だから――僕は勝ち取らなきゃいけないんだ。こんな最低な僕を救えるのは、僕しかいないんだから。僕の力――これだけが、こんな最低な僕に残された、最後の剣だ。

登校時間になり、何食わぬ顔を装い教室に戻ると、サッカー部の主力選手3人がクラスにいるだけに、テスト当日だというのに、話題は昨日の試合のことでもちきりだった。僕が教室に入ると、既にユータが、全校から押し寄せる女の子約20人に取り囲まれていた。昨日のゴール、よかったね、という声が聞こえた。

そんな声を尻目に席に向かうと、その前でジュンイチが待っていた。挨拶を交わし、僕は席につき、鞄から参考書を取り出し、最後の確認をする。ジュンイチは僕の席の前の机に腰を下ろした。

「お前が来なかったから、応援してくれたみんな、すごいがっかりしてたぞ。テストで一番取るのも結構だけど、ケースケは、今はそこから離れてみてもいいんじゃないの？」

「――ああ。すまない」

ジュンイチはそれだけ伝えると、僕に今日のテストのヤマを訊い

て来た。適当な応対をして、席に帰すと、もう僕の意志は参考書に向けられていなかった。

ジュンイチの言うこともわかる。だけど――立ち止まってはいられないんだ。

家族も、小学校の時の同級生だってそうだ。僕の進む道を邪魔する線路の石ころだ。それを弾き飛ばせなかったのは、ひとえに僕の馬力不足だったんだ。

だから僕は力が欲しいんだ。どんな石ころでも弾き飛ばせる、強い馬力が。たとえどんなに不利な状況に陥っても、それを一瞬でひっくり返せる、何もかもを凌駕した力が。

ホームランを打たなくちゃいけない。守備もシフトも、高いフェンスも、向かい風も全て関係ない。打った瞬間、野手の足も止まり、流星のように場外へ消えるホームランを。

――悪いなジュンイチ。僕はお前の意見を素直に聞き入れることも出来ない人間なんだ。

――雲ひとつない快晴に、このテストの手応えがきっちり相まって、僕の気持ちは晴れやかだった。ユータもジュンイチも、大会で更に勉強に集中していなかったのだろう。机に突っ伏して、頭を抱えている。僕はジュンイチと一緒に、ユータの机の所へ行ってみた。

「うぐぅ・・・・・三ついった――絶対」

ユータがうなだれている。もしユータが出場できなくなったら、全国になんか出る意味がない。わざわざ恥をかきに行くようなものだ。それに、そんな不名誉なことになれば、そこは全国屈指の進学校――教師が出場を許さないだろう。

「お前、キャプテンが赤点で出場停止なんて、体張ったギャグ全国にかましてる場合かよ」

『県内随一の偏差値を誇る埼玉高校サッカー部、全国大会に赤点者

続出で出場辞退！』なんて、現実になったら、県内ではＡクラスのＢ級珍事件だ。新聞の地方欄に間違いなくトップで載るね。この学校の来年の受験倍率はガタ落ちだろう。下手したらサッカー部は廃部だ。クラブ活動より、進学率重視のこの学校では。

僕が揶揄すると、ジュンイチも僕の横で、ユータの机に両手を突き、大きな体を萎れさせている。

「俺もヤバイ・・・・・ケースケは？　って訊くまでもないか・・・・・ケースケだもんな」

随分と落ち込んでいる。でも二人とも、テストの結果で本気で落ち込むような性格じゃないことは知っているし、僕は二人に借りがあるから、それを返すのにはいい機会か、と思っていた。

「元気出せよ。テストの打ち上げでも行くか？」

するとユータは、机に突っ伏したまま、肘を上げて、手を横に振った。

「いや、そんな気分にはなれない・・・・・」「俺も」

この世の終わりくらい落ち込んでいる。だけど、こいつらはテストの点なんかで、そんなに長く思いつめる人種でないことは知っていた。飄々としてるよりはまだいいだろう。

「そうか。でも今度は僕も一緒に打ち上げに行くよ。その時はラルク歌ってくれよ」

今日はもう学校は終わりだった。というか、期末テストの場合、テストが終わっても、赤点が毎回続出のサッカー部は、テスト後一週間も、再試の勉強に専念させるため、事実上部活は休みになる。僕は鞄を肩にかけて、じゃあな、と二人に言ってから、教室を出た。

「ケースケ」

下駄箱で呼び止められたので、振り向くと、二人が僕を追いかけてきていた。

「どうした？　勉強の相談か？」

訊くと、ジュンイチが頭を掻きながら答えた。

「いや、ケースケも昨日、こんな気分だったのかな、って。何か悩

みがあったんじゃないのか？　最近ケースケ、様子変だったし。悩みがあれば俺達に言えよ。遠慮するなよ」

ジュンイチの言葉に、横でユータが頷いた。

「・・・・・・」

傍目八目とは、よく言ったものだ。他人の姿を見て、初めて自分の姿が見えてくる――

そうか。今日の二人の姿は、まさに昨日の僕の鏡だったんだ。自分は他人に、あんな顔をしているのを見られてしまっていたのか。

知らず知らずのうちに、内から何かが滲み出している。それは血だろうか、涙だろうか。

「平気だよ。昨日はそんな気分じゃなかっただけだ。赤点取ったらまた勉強見てやるから、それ終わったら、一緒に遊ぼう」

「お！　ケースケからお誘いなんて、初めてかもしれないな」ジュンイチが微笑む。

「安心したよ。最近ケースケ、何か悩んでる感じだったから」

「――別に、そんなのはない。じゃあな」

僕は下駄箱から、スニーカーを出し、足を通すと、二人に軽く別れを告げて、昇降口を出て、自転車置き場から自転車を引っ張り出して、校門を出た。

「……」

あいつらに気を配られてしまった。

もし自分が赤点なんか取ったら、自分のことで手一杯で、周りの人間が落ち込んでいても、絶対に気が付かなかっただろう。

何であいつ等は、こんな切羽詰った状況で、僕の心配なんかするんだろう。そんなこと、出来るんだろう。

僕自身は、勝手に苦しみを抱え込み、あいつらのことなんて、何一つ気を回していないと言うのに。

僕は――僕は弱い。あいつ等は馬鹿だけど、僕なんかより、ずっと強い。

誰のせいでもない。僕個人の問題だから、と、自分に言い聞かせ

ながら、痛みも堪えて、答えが出ることを信じて、必死で突き進んできたつもりだったけれど……

堪えているはずが、僕の心はこんなにも、見る影もなく弱くなってしまったんだ。

何故か、酷く人恋しい。誰か、この苦しみを理解して欲しい。

心が、そう叫んでる。

もう、一人では生きていけないんだ。誰かにこの苦しみを理解してほしい。

誰かが側にいないと、僕は自分の心の平静も保てないことに。

僕は気付いてしまったんだ。

――翌日、テストの結果が二階の進路指導室の前に貼り出された。

２学期期末テスト成績上位者（第２学年）

順位	氏名	クラス	平均点	所属部活
１位	サクライ・ケースケ	Ｅ	９８・８	サッカー部
２位	マツオカ・シオリ	Ｅ	９４・３	吹奏楽部
３位	サナダ・ケンジ	Ｂ	８８・１	無所属

――

僕はジュンイチに結果を知らされ、二人でそれを見に行った。うちの学年は、入学当初から、トップと二位はずっと不動で、僕とシオリの二人が、コンマ数点の差でしのぎを削っていた。だから、遂にサクライが、マツオカの牙城を崩した、と、掲示板の前の生徒は噂し合っていた。そして二人の間に、ここまで点差が開いたのも初めてのことだった。

そして放課後、赤点の発表があった。
中間期末総合の成績で、赤点3つ以上を取ったサッカー部員は、ユータ、ジュンイチをはじめ、16人にのぼった。ベンチ入り選手の4分の3が出場停止ラインだった。赤点2つ以下の部員は12人。その12人は再試に落ちても大会には出られるが、ほとんどがまだ高校での実戦経験のない一年生だった。部員29人中、赤点ゼロは、僕一人だけという惨たる結果だった。
「・・・・・・」
テストで学年ダントツでの1位を取り、イイジマの僕への評価は、数日で挽回できたようだった。職員室に呼び出された僕は、イイジマと共にこの結果を見て目を覆った。確かにテスト前に全国の切符を賭けての試合があり、テスト期間中も遅くまで練習し、元々赤点常習犯の集まりであるサッカー部が、更に勉強をする時間を削ったことは考慮すべきだが、あまりに酷すぎる。
「サクライ・・・・・お前キャプテン代わるか?」
イイジマもそう言い出すほどの結果だった。僕がここに呼ばれたのは、イイジマは、この状況の打開策を、僕に頼ったのだ。確かにこの男のあまり丈夫じゃない脳では、助け舟が必要なのだろう。
「仕方ない。勉強合宿を組んで、誰かが管理しないと、全員受かるのは無理でしょうね」
僕の提案にイイジマは、学校の3階建ての格技棟にある、3階の合宿場を借りよう、と提案した。
しかし、言ってから後悔した。
イイジマはその教師役を、僕に一任したからだ。
無計画な一言で、面倒な仕事を増やしてしまった。勿論部に携わっているし、副キャプテンの肩書きもあるので、断りきれなかったが、短時間で16人を僕一人で見るのは無理なので、有志の教師をイイジマが募る条件を出すことにした。勿論イイジマはそれを承諾した。

しかし、言ってから後悔した。

イイジマはその教師役を、僕に一任したからだ。

無計画な一言で、面倒な仕事を増やしてしまった。勿論部に携わっているし、副キャプテンの肩書きもあるので、断りきれなかったが、短時間で16人を僕一人で見るのは無理なので、有志の教師をイイジマが募る条件を出すことにした。勿論イイジマはそれを承諾した。

そして僕とイイジマは、放課後即座に行動開始した。

まず僕達は、職員室で多くの教師に頭を下げ、寛大な追試をお願いした。

その後イイジマはすぐに僕以外の部員を招集し、勉強合宿の計画を発表した。勿論出席は強制だ。正座させた部員達に放ったイイジマの勉強合宿宣言は、部屋のガラスを震わせるほどの怒声だった。それは初めからわかっていたから、イイジマの隣にいた僕は、あらかじめ耳栓を突っ込んでいたけれど。

その後僕は、一人で校舎を駆け回り、教師連に頭を下げながら有志を募った。

気が乗らない仕事だった。元々頭を下げるのは大嫌いだし。

そしてすぐに僕は、自分の考えの甘さを悟った。

師走の忙しい時、冬休みに入るので、教師の有志はなかなか集まらなかった。赤点多数の、数学、物理の教師は一人も捕まらない。考えてみれば当たり前だった。一公務員として、給料に何の関係もない、ノーギャラの仕事を受け持つメリットはないのだから。おまけに教師達は、授業にまともに出ない僕を嫌っていると来ている。

「くそっ、どいつもこいつも・・・・・・」

夕方まで学校中を走り回って、まったく成果なく、僕は少し苛立っていた。

大体、そんな協力者がホイホイ出るなら、別に僕があいつらの教師役なんてすることないじゃないか……初めから協力者がいないこと、イイジマもわかっていやがったのか。

どいつもこいつも、肝心な時に役に立たない。だから人付き合いは嫌なんだ。こっちがいくら尽くしてやっても、相手は肝心な時に自分を助けてはくれない。その不平等さが嫌いなんだ。

何が愛校心だ。集会なんかで生徒に言うテーゼを、教師達はあっさり裏切っている。

嫌だ嫌だ、で、何でも嫌なことが回避できるのなら、僕もそうしたいんだ。僕だって見返りゼロのこんな面倒な合宿なんか、出来れば参加したくない。何で僕だけこんな損な役回りなんだ？　これで勉強に失敗したら、学校の不名誉の責任を、僕が負わされるのか？

思考が憎悪を呼び、胸が焼けるようになると、僕は次第に、怒りが他人へのものから、自分の今の最低さへとすり替わってきた。

僕は次第に疲れて、廊下に座り込んだ。

廊下の窓から、梢の揺れる音がする。さっきから走り回って、じっとり汗をかいていたことに気がついた。呼吸も荒い。

落ち着かないから、こういう気持ちになってしまうんだ。そう思って、梢のざわめきを聴きながら、何度も深呼吸し、呼吸が落ち着き出すのを待った。

そうして気持ちを整理しては、また立ち上がり、一般生徒が誰もいなくなるまで、校内を走り回ったけれど、一人として教師は捕まらなかった。

諦めて職員室に顔を出すと、もうほとんどの教師がいなかった。

イイジマの席を見ると、イイジマの横に、一人の女の子が立っている。何か二人で話しているみたいだった。手には何か黒いケースを持っている。

その小さな体は、マツオカ・シオリのものだった。

イイジマは僕の姿を確認して、手招きする。

「……」

だけど僕は、あのバスケットボールの試合以来、気まずいままのシオリと、あまり顔を合わせたくなかった。一瞬躊躇したが、なるようになれと思い、イイジマの横に立った。シオリが、僕に会釈した。僕もそれに合わせて、反射的に会釈を返した。

「おおサクライ。喜べ。マツオカが合宿の教師役を手伝ってくれるって言うんだ。学年1位2位が組めば、なんとかなるだろう?」

「え?」

僕は目を点にしてしまった。協力要請に生徒を使うのは盲点だったが――いや、そんなことより、気まずさも吹っ飛んで、僕は横にいる彼女にその場で即問い質した。

「何考えてるんだよ。男だらけの合宿だぞ。危ないよ」

20人近くの男の中に、こんな女の子を放つなんて、イイジマの無神経にも程がある。この子が学年中の目を惹く女の子だってこと、見てわからないのだろうか。

「お前が守れば問題なかろう。もちろん一緒には泊まってもらうわけじゃないさ」

「・・・・・・」

イイジマがあんまりさらっと言うから、僕はもう口を開けて、反論する気も失せてしまった。と言うか、自分のクソ真面目さがアホらしくなって、二の句も付けられなくなった。

「じゃあ二人、俺は学がないから、勉強は二人に任せる。二人で計画立てて、仲良くやってくれ」

イイジマに背中を叩かれ、僕はまだ釈然としなかったけど、その場は解散となった。

仲良くやってくれ、なんて、ふざけてやがる。

一緒に職員室を出て、既に薄暗くなった廊下を歩く。僕が少し前を歩いた。女の子の後姿を見て歩くのは、あまり好きじゃない。

だからと言って僕が前を歩いても、二人きりになると、また今までの気まずい空気に戻ってしまった。さっきはタナボタで話しかけ

ることが出来たのに。いい空気をそのまま持ち越せないのも、僕の悪いところだろう。

そうだ、とりあえずこの前のことを謝らなくちゃ。ずっと気になって、後悔してきたんじゃないか――

と思って、それをきっかけに声をかけようとしたが、その前に後ろからシオリが、僕の名前を呼んだ。

「優勝おめでとう。ちょっと遅れたんだけど……おめでとうって言わせてね」

「あ、ああ。ありがとう……」

僕は振り向かずに答えた。彼女の柔らかい響きの声が、僕の心を暖かく包んだ。

『ありがとう』なんて、久し振りに口にして、照れくさい。悪意のない、彼女の声につられて出てしまった言葉だ。『感謝』なんて、久し振りに思い出した単語だった。

いいんだよそんなこと。祝辞が遅れたといっても、僕の謝罪はそれよりもっと遅れているんだ。

自分から仕掛けようとして、綺麗に先手をとられた形だ。こうなってしまうと、途端に謝りにくくなってしまう。彼女への返事だって上の空だった。

「決勝戦、サクライくん、大活躍だったね」

そんな僕に気を遣うように、彼女は言った。

「……」

イイジマにあのプレーは不評だったが、どこが悪かったのか――それはいまだに釈然としていない。そんな疑惑のプレーだったけど、自分が正しいと言ってくれたように感じて、嬉しかった。

――ところで、僕は何で彼女に褒められただけで、こんな喜んでいるんだろう。ガキじゃあるまいし。

「あのさ」

僕はシオリの方を見て提案する。

「手伝ってくれるなら、君の予定とか、ちゃんと合わせないといけ

ないから、これから打ち合わせしないか？　もう学校は閉まるから、ファミレスにでも行って。僕が奢るよ」

自分でも予想していなかった言葉が出た。ファミレスなんか、行ったこともないくせに。

しかし、普段金に対してケチな僕が奢る気になったのは、上手く謝れない僕の、無意識な良心の呵責だったと思う。こんな時、ごめんなさい、と、素直に言えない性格は、いまだに意地を張っているらしい。

しかし、シオリはそんな僕を理解したのか、嫌な顔一つせずに、うん、と頷いた。

Base

――ファミレスで、僕達はドリンクバーとピザを注文し、僕はサラダバーも注文した。

向かい合って座るシオリに、僕はドリンクバーのオレンジジュースを汲んで、僕もアイスコーヒーを汲んで、持ってきた。普段からコンビニ弁当ばかりで、野菜が不足しがちな僕は、サラダを山に盛りつけた。彼女にオレンジジュースを渡し、ピザが来ると、僕がローラーナイフで六つに切って、シオリの分も皿に取り分けた。

「……」

何だか変な感じだ。学年中の男を魅了している女の子と、今こうやって、ファミレスなんかで二人きりになっているのが。望んだわけでもないのに、変にうまい話めいていて。しかもジュースやピザを取り分けてやったりして、その子の目の前で、僕は山盛りの生野菜を馬みたいに食べている。

僕は何をやってるんだろう。

しかも、バイトはまだ続けてる？　とか、全国大会に行くってどんな気分？　とか、ピザを食べながら、シオリは僕のことをしきりに訊きたがっている。

まるでここ一年間、ろくに話せなかった分をまとめて話しているといった感じ。彼女だってそんなに話すのが上手でも、好きというわけでもなさそうなのに、そんなに無理して話して大丈夫かと思うほどだった。

ピザを食べながら、ほとんどのスケジュールは決まってしまった。僕が作ったメモがテーブルの脇に置いてある。雑談をするには差し支えないけれど……

どうして僕のことを訊きたがるのか、そして、ただ競い合っていた仲であったはずの彼女と、こうして他愛もない会話を交わすという……

まったく歯車が狂っている。

「でも今回のテストは、私、サクライくんに圧倒的に負けちゃってたね」

ふとテストの話題になった。溜息をついて、彼女は失笑する。それはきっと自嘲だったのだろう。

「どうして笑ってるんだ」？」

僕はシオリに訊く。率直な質問だった。僕から質問を投げかけたのは、今日これが初めてだった。

「え？」

シオリは質問の意味がわからなかったらしく、目を丸くして、持っていたピザを取り皿へ置いて、口元をナプキンで拭った。

「だって、君は今までずっと一番だったのに、僕に初めて追い抜かれたんだし、あまりめでたいことじゃないだろ」

さりげない皮肉のつもりだった。貧乏っちくなるのが嫌だったから自重したけれど、言葉の後に、無理にお世辞言わないでいいよ、くらい言いそうだった。それを言わなくても、僕の一言は、それを案じさせる言い方をしていた。それが絶妙さをかもしだした、最高の皮肉だったと思う。

しかし、シオリはそんなことに気がつかなかったのか、笑顔を含んで、さらりと言った。

「しょうがないよ。元々潜在能力は、サクライくんの方が上だと思っていたし――それにサクライくんの方が、大変な部活やってるんだし、バイトもして時間がないのに。だから、今まで私はそういう有利な条件で上にいられただけで、ちょっと悪いと思っていたくらいなの。いつかはこうなることくらい、わかっていたから」

「……」

もっと悔しがれよ。

僕は君を超えたかったから頑張ったんだ。僕を押し退け、上座に座っていた君の座布団を引っ張って、君が転げ落ちる姿に指を差して笑いたかった――そんな奴なんだよ僕は。

それなのに……そんな僕を前にして、そんな裏表のない目で僕を見ないでくれよ。

彼女も、ユータやジュンイチと同じだ。勝ち負けじゃない価値観で生きていて、ちゃんと他人を認める素直さを持っている。

それが、今まで勝ち負けの中でしか生きていけなかった僕には、理解できない。

どうして――どうして悔しがってくれないんだろう……

「……」

その時、わかった。

僕が何故今回のテストで、彼女に是が非でも勝とうと思った理由。

僕ももはや、弱者をいたぶることを、求め出しているんだ。

僕も家族と同じ、疲れ切った心の憂さ晴らしに、弱者を蹂躙することを求め出している。弱者の悔しがる姿に愉悦を覚えるような――そして、悶えている奴に更に追い討ちをかけて愉しむような、残酷で卑屈な心が、いつの間にか、僕の心にも……

だから、彼女が悔しがってくれないことに、こんなにもイライラしてしまうんだろう。

知らず知らずのうちに、僕は自分より下の人間を、必死で探し出している。

弱者が欲しいんだ。自分より上にいる人間を引き摺り下ろして、そいつを馬鹿にして、蔑んで、いい気分になりたがっている。自分が優れた人間で、自分は正しいのだと、思い込もうとしている。

「……」

もしかして、僕が今まで努力し続けてきたのは、自分が蔑まれるのが嫌だったからじゃなく、弱者が欲しくて、自分で作り出そうとしていただけに過ぎなかったんじゃないだろうか――

自分が強くなりたかったのではなく、相手を引き摺り下ろして、いい気分になろうとしただけだったんじゃないだろうか――

これが僕の欲しいもの――勝ち取ろうとしたものだったんだろうか……

自分がどんどん、嫌な奴に捻じ曲がっていくような気がした――あの家族と同じ、弱者をいたぶることで居場所を見出そうとする心が、僕の心にも……

立場が逆だ。赤点を取って、大会に出られるかの瀬戸際にいるユータ達に、僕は心配されているし、テストでいつも負けていた僕は、彼女の努力なんか、一度だって考えたこともないのに、彼女に僕が勝てば、彼女は僕の努力をすんなり讃えてくれるなんて。

「悪かったね。変なこと訊いて」

僕はそうフォローした。しかし、もう雰囲気は変わっていた。オレンジジュースを飲みながら、シオリの怪訝そうな瞳は、僕のしがらみを凝視しているように感じた。

その、聡明さを併せ持つ、明鏡止水の瞳を見て、太陽を恐れる吸血鬼のように憔悴し、背中に冷や汗が流れるのを感じた。懐に凶器のナイフを隠し持ったまま、警察の尋問を受けているような気分だった。

その気持ちを誤魔化そうと、僕はピザなど頬張って、表情と心を殺していたけれど……

――僕は――あの家族と同じなのか？

そんな自己嫌悪が、頭からいつまでも離れなかった。

心が叫んでる。悲鳴を上げている。彼女の目を見て、それが分かった。

何でだろう。自らで道を切り開いてみせると、決意したはずなのに……

彼女の目を見ていると、この頑なな気持ちを解きほぐしてほしいと思う、この気持ちは。

Camp

僕とシオリが基本的なところを作り、イイジマが最後にアレンジを加えて完成した合宿メニューは、自分では絶対にやりたくない、とんでもないスケジュールになってしまった。

この勉強合宿はいわば全国大会への通過点、直前に体力を落とすことも出来ない。勉強だけに専念できれば、再試を通過するくらいのことは簡単だが、両立が必要となれば、少しでも効率的に勉強させるために、多くの協力者を募る必要があった。それが僕達が協力者を積極的に募った理由であり、協力者がいないことに僕が苛立った理由だった。

朝５時半起床。ラジオ体操とランニングで一日の幕開けとなる（これはイイジマ指定。しかし高校生がラジオ体操で迎える朝って、一体どんなセンスしてるんだ）。部費から食費を削って、７時に学食での朝食。食べ終わるとイイジマが学校に来て、昼まで勉強。昼食を取って、午後から練習を挟み、４時から夕飯まで勉強、ミーティングを挟んで、イイジマは家に帰り、僕達は１２時まで勉強して消灯というものだった。

イイジマの命令で、ゲーム機器やＭＰプレーヤーも禁止は勿論、トランプまで一切の娯楽器具の持ち込み禁止、携帯電話も入寮と同時に没収。外出も禁止。トイレ以外の休憩もなしという徹底ぶりだった。練習も全て勉強にすれば、東大受験を控えた受験生が、予備校に高い金を払って山にこもるためのスケジュールだ。実際うちの学校には、そういうのに行く奴もいるんだろうけど、少なくとも模試で東大合格圏を取る僕が見ても身の毛がよだつ代物なのに、勉強嫌いの連中がクリアするノルマとしては、厳しすぎると言っていい。しかも全国大会用の練習もこなすのだから、元々勉強嫌いの連中の精神的疲労に、肉体的疲労がダブルで襲う。東大受験生の山ごもりよりはるかにハードだ。

昨日パソコンで僕が仕上げて、プリントアウトしたスケジュールを、チームメイトやイイジマに配ると、イイジマは喜んだが、皆の反応は悲鳴を上げるか、未知の領域にこの紙切れだけではハードさを理解できず、怪訝な表情をするかのどちらかに分かれた。

その後、僕とシオリはイイジマに職員室で詳細を伝えた。洗濯や風呂の掃除などの分担は、ちょうど皆一年生だったので、赤点三つ以下の部員がやることに決定した。彼等は自宅学習だが、主力は皆出場停止ラインにいるので、最悪の場合を考え、イイジマが一週間、彼等を何とか使える形までしごくことになった。肝心のマツオカ・シオリは吹奏楽部の部長も務める身だし、そちらの練習を優先し、その合間を縫って余裕のある時だけ協力することを、吹奏学部の顧問と話し合って承諾してもらった。どんなに遅くても、シオリは午後9時には家に帰すことに決定した。

合宿の2日前、そんな取り決めを僕とマツオカ・シオリ、イイジマの3人で職員室で取り決め、大筋で流れが決まった。

「サクライ、マツオカはお前が送れ。夜道は危ないし、同じ地元だろう」

「え？」

「え？　じゃない。失礼だろう？　こちらの都合に付き合わせるんだ」

「いや、そうじゃなくて。送ることに別に文句はないですが」

僕はイイジマを見据える。

「監督が送るべきだと思って。生徒指導は夜間の男女下校を禁止しているはずですが」

そう。生徒指導の教師連は、時たま地元の繁華街を、夜、巡回しているらしい。ゲーセンなんかにいれば、警告だけで済むが、男女生徒同士の繁華街の徘徊は、不純異性交遊だ、と、色々と五月蠅く追求するらしい。そしてイイジマは、性格から見ての通り、その生徒指導の代表なのだ。

「ああ、いや……うん。まあそうなんだが」

明らかにイイジマの顔色が変わった。何かを誤魔化そうとしている顔だ。

「今回は特別に……ってことでどうだ？　これは学校云々より、部活での合宿だし」

「部活はクラブ活動ですから、学校の一環でしょう？」

さっきから何を言っているんだろう、この男は。そもそも彼女みたいな生徒をこんな合宿に駆り出す時点でおかしいんだ。挙句この子を僕に送らせるとか、元々支離滅裂な理屈を使う馬鹿だが、何か違和感を感じるんだ。何だろう、これは。

「その、じゃあ……ほら、最近よくあるだろ？　教師と女子生徒が問題になってるじゃないか。学校だけの付き合いの俺より、クラスメイトのお前の方が、マツオカも面識ある分、安心だろ？　俺も公私混同すると、教師としてやりにくくなるしな」

「……」

何だそれ。自分が言う『不純異性交遊』ってやつを、自分もしてしまうかも知れないと宣言しているようなものじゃないか。全然理屈になってない。

というか、イイジマだけじゃない。学校の奴等が皆誤解しているけど――

僕だって彼女と特に仲がいいわけじゃないんだけど。むしろ一緒にいて気まずい部類の人間だ。先日から彼女を勝手に罵倒していた自分を思うと、どうにもいたたまれない。

「でも、僕が彼女に何かした場合、監督が責任追及されたら、同じことでしょう？　僕に任せる方が、リスクがでかいんじゃ……」

「それはないっ！」

イイジマが即答した。

「お前に任せて問題ないのは、間違いないっ！」

「いや、そんな力いっぱい言わなくても……」

そんな僕とイイジマがコントやってるのを見て、マツオカ・シオリはくすっと笑った。

「いや、別に君を送るのが嫌とか、面倒ってわけじゃなくて……何言ってるんだ、僕は」

本人の前で拒絶するのもいかがなものかと思い、僕はドナドナの仔牛のように、引きずり込まれたのであった。元々僕は赤点セーフだし、僕だけは外出の許可が下りていた。たまには一人になりたい。

それに、彼女の前でイイジマと、彼女に淫らなことをすることを前提のように喋っていた自分が、何だかとても陳腐に思えてきたからだ。僕ははじめから、彼女にそんなことする気はないんだし、それだったら堂々としていればいいのだ。言い訳を考え、下手に拒むより、ずっと体裁がいい。

その代わりに、僕はイイジマに許可をとって、犬のリュートを合宿に連れて行った。一週間もあの家族が、まともに世話をするとは思えないからだ。それに、まさか犬を連れて、外で不純な行為をしたり、危ない所に入ったりするとは誰も思うまい――彼女の帰り道に散歩をさせると言うと、イイジマも同じことを思ったらしく、許可はすんなり下りた。

１２月１４日の日曜日、終業式の翌日に部員１６人は、大荷物で引っ越してきた。

この合宿場は、サッカー部の練習でレギュラー組がたまに使う。風呂は部室の一階の片隅にある古いつくりで、長い間放置していると蛆やナメクジなどの虫が湧き、タイルの割れ目から草が生えるという代物だ。僕も去年、一番下っ端の新入部員として、吐き気と戦いながらここを掃除した覚えがある。

格技棟の一階は、剣道や卓球をするための部屋、二階は視聴覚室、三階は階段を上れば、すぐに教員室。目の前にトイレと洗面所、奥には２０畳の部屋が二つ――それだけのものだった。教員室には古いテレビがあるが、僕達が泊まる部屋には、格子付きの窓がある以外、安物の畳が敷き詰められているだけの部屋で、机さえない。江

戸時代の座敷牢みたいなところである。
入り口のドアに、スケジュール表を貼った。午後2時だったので、今日は初日ということで、予定を変更し、すぐに勉強が始まった。
荷物を置いて、校舎に移動する。図書室を夕飯までは借りて、夜は合宿での勉強だった。
ユータ、ジュンイチを含め、初めの皆のテンションは高かった。後輩までデレーッとした顔をしている。埼玉高校のアイドル、マツオカ・シオリが、自分達のために、手取り足取り勉強を教えてくれるというのだから、健康な男子たる者、大サービスに妄想を膨らませている。男って単純だな。まさか彼女が水着着てくるわけでもあるまいに。
しかしまだシオリは来ていない。吹奏楽部の練習を終えてから来るので、予定では4時間は間がある。サッカー部員は、彼女の登場を、一日千秋の思いで待ち続け、結局勉強に手が付いていない状況だ。
「なあケースケ。シオリさんはまだ来ないのか？」
ユータは、赤点を3つ取ったという危機感さえない、ニコニコ顔だ。
「これが聴こえるうちは、来ないよ」
一人窓際に立つ僕は親指で窓を指す。吹奏楽部の練習で、重厚な合奏が聴こえてくる。
「えー長いな、男だけの勉強会かよー。テンション下がるんですけどぉ」
「ごあいさつだな。教えるこっちの身にもなれ」
まったく、こいつらは自分の現状が理解出来ていないのか。
そんなことよりユータは、命の次に大切という携帯電話を没収されたことで、かなりフラストレーションが溜まっているようだ。変にオーバーアクションになって、そのうち女に飢えた禁断症状でも出てきそうだ。酒を絶って二日、女を絶って三日が一番きついと、ある落語家が言ってたっけ。

「センパーイ」
後輩の消え入るような呼び声に、僕はすぐに飛んでいく。
「ここに、しかし、って書いてあるってことは、この段落は前の段落と逆のことを言いたいわけだ。話題が転換しているんだから、ここからは、今までの内容をいったん無視しろ。現代文はそう読めば、ミスリードを誘う設問のひっかけに惑わされづらくなる」
他愛のない時間だった。これくらいのことで一週間家に帰らないでいいなんて、埃臭い図書室が天国に感じる。金を取れないことを除けば、僕に久々に訪れた安穏の時間だった。
吹奏楽のアンサンブルが止まって久しくなった頃には、既に皆、心ここにあらず、といった具合に、自分に出ている課題を前に、上の空になっていた。誰も眠っていない。しかし誰も手を動かしていない。図書室の引き戸を凝視している。
そして、皆の待ち焦がれた、想い人がやってきた。
戸を開けて、シオリが入ってくると、皆が奇声をあげて、席から立ち上がり、手を叩き、飛び上がり、すごい騒ぎだった。何だか女教師もののアダルトビデオみたいだ。
シオリは、吹奏楽部の仲間を5人近く連れてきた。皆成績優秀で、僕とも多少面識があった。勉強を手伝ってくれる、と、僕に挨拶に来た。
彼女達が、差し入れ、と言って、ポテトチップスとか、飴を沢山持って来てくれた。サッカー部員は声を上げて喜んだ。本来図書室には、飲食物持ち込みは禁止だが、この状況でそんなことを言うのも、まったく気が効かないと思い、僕は黙っていた。
「サクライくん、お疲れ様」
シオリは微笑みながら、肩の所で軽く手を振った。
「ああ」
僕は会釈を返す。
「ケースケだけかよー」
ユータが野次る。奴がこんなに僕に絡む姿を初めて見た。普段よ

りオーバーアクションになっている。まさか憧れの人を前に、舞い上がっているとでもいうのか。あのユータが。

しかし、さすがに男だらけで禁欲中の中に、女性を解き放つと、当然のことながら、男達は勉強などには集中しない。差し入れのお菓子を食べ、女の子とおしゃべりをしたがった。

だけど、彼女達の教え方は、僕も意外なくらい厳しかった。僕達の全国出場を危ぶんで、心を鬼にしてくれたのだろう。彼女達にとっては、全国大会なんて、二度とないステージになるわけだし、他人事じゃないか。まったく、県立高校の教師どもより、よっぽど頼もしい。

しかしシオリを除く女の子達は、イイジマの承諾を取っていないし、禁欲生活中の男の集団の中、女の子が遅い時間までいるのも、イイジマの言う『不純異性交遊』じゃないが、よくないと思って、明るいうちに家に帰させた。

日が沈み、図書室が静かになり出した頃、赤点2つ以下の部員を絞っていたイイジマが図書室の視察に来た。

「やってるな。じゃあこれから飯の支度をするから、食堂に集合だ。サクライ、お前は飯の前にマツオカを家に送って行ってやれ」

それだけ言い残して、イイジマは図書室から出て行った。皆が勉強道具を、傍らに置いていた鞄にまとめ出す。僕もシオリに荷物をまとめるよう指示し、背中に髑髏のプリントのされた黒のスタジャンを着込む。

「ケースケ、変なことするなよー」

ユータが不満そうな顔をする。

「安心しろ。僕が何もしないのは、監督のお墨付きだ」

変なことなんて、僕が彼女に何をすると思っているのだろう。僕が彼女に迫ることを危惧しているのか。僕の性格を知っているくせに。

言い残して、僕は図書室を出た。校舎は既に、全ての電気が落ちていた。階段の前で僕は手探りで電気スイッチを探し、電気をつけ

てから、彼女に声をかけた。
「悪かったな。ぶしつけな連中で」
僕はシオリに頭を下げる。
「不愉快だっただろう」
「ふふ、大変だね。サクライくんって、意外と面倒見がいいのね」
彼女は、思ったより軽いノリで、マフラーで隠れた口元を軽く歪めた。
「……」
面倒見がいい――それはちょっと違う。僕は一種の潔癖症なのか、アバウトに生きられない。周りの環境も、自分の精神、思考も、ごちゃごちゃいい加減になっているのが嫌いで、完璧に整理しようとするし、後回しにしていくと、自己処理能力が追いつかなくなって、破綻してしまう。
処理できるものは、できるうちに処理しないと、僕は前に進めない。僕には、捨てなくちゃいけないもの、忘れなくちゃいけないものが多過ぎるんだ。
今だって、全てのことに追いついていない。そんなこと自分にだってわかっている。だから、より綺麗に部屋を片付けようとしてはいるんだけど、結局掃除にばかり気が行って、他のことがおろそかになっている感じ。

「ちょっと待っててくれないか」
僕は格技棟に走って、リュートを連れてきた。
「わ、可愛い。この子、サクライくんが飼ってるの？」
彼女の顔がほころんだ。
「実際は妹の犬だけど、僕以外世話しないから、可哀想なんで、連れてきたんだ」
シオリはしゃがみこんで、抱きしめるようにリュートの頭を撫でた。お利口だねー、と、弾んだ声で言いながら、甘えるリュートを抱きしめる彼女は、とても愛らしかった。
リュートも、彼女が悪い人間ではないことを察したのか。彼女の手や顔を、ペロペロ舐めている。普段家族には、決してなつかない犬なのに。
「悪いが散歩に同行させてもらってもいいか？　僕達は走って君を追いかけるから」
彼女も自転車通学だから、そう断った。
「いいよ、私の家、歩いてでも遠くないし、私も歩く」
「……」
「それに、私もリュートくんと、一緒に歩きたいし」
「――そうか」
彼女が自転車を駐輪場から出す前に、僕は黙ってフルートの箱をシオリの手から奪った。
「そんな、いいよ悪いよ」
「いいから持たせてくれ」
僕は彼女の手から、少し強引にフルートの箱をひったくった。
「荷物運びでもしないと、女の子を家に送るなんて、どうにもやりきれない」
「……」

彼女は自転車を引きながら、僕と轡を並べて校門を出た。
目の前には心臓破りの坂だ。
「……」
何を話すべきかわからない。
彼女と二人でいると、どうも調子が狂う――
つい先日から、それをずっと感じている。
きっと、僕は彼女との間に、大きな落差を感じているのだろう。
一緒にいて、初めてわかった。同じくらいのアビリティ、キャパシティを持ちながら、歩む道があまりに対照的過ぎて。
彼女が持つ、爽やかで、朗らかな雰囲気――
僕も出来れば、そう生きたかった。
僕もそれが欲しかった。
欲しかったはずなのに……
現実の僕は、そんな彼女を勝手に罵倒して、醜さをさらしている。
勝手にこの娘を、嵐のように罵倒して、それが終わると、今度は自分を蔑み出す。いつも　嫌悪感が伴う、荒れすさんだ心――
彼女といると、自分が不安定になるのがわかるんだ。まるで溶鉱炉のように、色々な熱い感情が溶け合って。
「迷惑？」
歩きながら、唐突に彼女が質問した。
「え？」
「私を送るのって。イイジマ先生に強引にやらされてるみたいで、嫌なのかな、って」
「――別にいいさ。送るくらい」
思いに反した言葉が出た。非情になろうとしても、いつもブレーキがかかる。『こんなこと言われたら、彼女は傷つくだろうな』、とか、そんな考えが頭にちらついて。かと言って、いい人にもなれず、僕は中途半端なところから抜け出せずにいる。
何かを変えたいはずなのに、中途半端なことばかり繰り返すんだ。
「むしろ逆だろ？　君は僕達を手伝ってくれてるんだから、僕は文

句を言える立場じゃない。君こそ、嫌なら嫌って言ってくれて構わないんだ。別に」

何言ってるんだろう、僕は。嫌なら嫌って言いたい――そう望んでいるのは、自分だろうが。何で自分がしたいことを、彼女に勧めてるんだ？　馬鹿か僕は。

隣で、彼女がさっきから、くすくす笑っていた。僕は横を向く。

「サクライくんって、見ていて飽きない人だよね」

「は？」

僕は訊き返す。

「だって、冷たいように見えて、とても優しいもの。何か変……」

「……」

「私は、こうしてサクライくんと話せて、嬉しいけど」

「……」

何だ――今の。さりげなくすごいこと言ってないか？

「私は――」

言いかけて、彼女は言葉を一度飲み込んだ。

「何でかな……私はサクライくんと一緒にいると、何となく――やりとりしたくなるんだ」

「やりとり？」

意味がわからず、僕は彼女の顔を覗き込みながら、訊き返した。

「うん。上手く言えないけど……」

彼女は言いかけて、言葉を捜すように、数秒天を仰ぐ。

「私達って、入学からずっと比較されてたよね。私、入学式の代表の話も聞いてるの。本当は私達、二人でやるはずだったんだよね」

「あぁ――そんなこともあったな」

入学式――入試を満点でパスした僕は、総代として、新入生代表の挨拶を務めることになっていた。僕の学年は満点が二人いて、新入生代表を二人で務めることになっていた。

「あなたは、入学前に電話がかかってきたけど、『そんなものに興味はないので、もう一人に全部お任せします』って言って、電話を

切ったと、先生から聞いているわ。その後も、あなたは授業に出なかったり、先輩と喧嘩したり……」

「……」

僕は黙っているしかない。彼女があまりに真剣に話していて、言葉を挟む余地もない。

彼女はさっきから上手く言えないことを、一生懸命伝えようとしている。僕にそれは全ては伝わってはいないけれど、言っていることは彼女の真実なのだろう。彼女は俯いたまま、自分を傷つけるように話している。

不思議だな。この娘が何か頑張っている姿は、こっちも頑張ってやらなくちゃ、って気にさせる。

彼女は、そんな魅力を持っている。

「周りは私達を比べてはいるけど、それは違う……私はサクライくんとは、違い過ぎる。私はただの優等生なだけ。成績がよくても、まったくそれを他に生かしていない。あなたは私と違って、学んできたことを、テスト以外でも形に出来る人だと思う。それが私にはうらやましくて……」

「……」

「私、自分が悩んだり、苦しい時、将棋とかチェスで、名人の打ち方を真似るのと同じで、サクライくんならこんな時、どんな一手を打つんだろう、って、そういう視点で物事を考えることがあるんだ。そうやって考えると、予想以上に物事がうまくいったりして。サクライくんなら、こういう時、どうやって行動するのか、知りたくもなる時がある」

「……」

「何だろう。私はもっとサクライくんの、そういう一手を見たいのかもしれない」

「――つまり、その一手を、僕から引き出そうと、今もこうしてやり取りしている――と？」

「うん。私にとっては、すごく困難なことでも、サクライくんは辛

い顔一つせずに、やり遂げてしまうような――私から見て、サクライくんは、そんな力を持っているように見えて。言い方悪いけど、私はサクライくんから、何か盗みたいのかもしれない。自分の人生を切り開く、きっかけみたいなもの」

「――買い被り過ぎだろ」

照れを隠すように自嘲する僕。

その一方で、僕は彼女の話に聞き入っていた。

彼女が僕を羨み、僕も彼女を羨んでいた。僕と同じ、比較されてはいても、両者の決定的な差を感じている……

羨み、憎み……多くの感情が入り混じり、僕達はお互いの生き方に惹かれ合う……

彼女の想いは、僕と同じだろうか。この世で自分と同じ考えの人がいる。それを聞いて、彼女の言葉、声に惹かれている自分の存在に気付く。

「……」

そこで言葉が途切れた。話しているうちに、お互いが、これ以上は危険だ、と察したのだろう。

少なくとも僕は、彼女のその言葉を聞いて、彼女の思いに惹かれて行く自分を感じた。その感情は、ひどく照れくさくて、彼女の目を覗き込むこともはばかられるほどの。

この娘は僕のことを、無敵のヒーローみたいに思っているなんて、想像もしていなかった。彼女が誰かを尊敬するなんて、周りにそんな対象がいないと思っていたから。

でも――

そうだったな、彼女はこういう娘だ。自分が上に立っているからって、誰かを見下したり出来る娘じゃない。それよりかは、自分に自信がなくて、いつも遠慮がちに立っている女の子だ。

長いこと話していなくて、そんなことも忘れていた。彼女の本質を見失っていたのは、僕の方だ。

それがわかって、ますます僕は彼女に対しての関係がわからなく

なる。

僕達はお互いに、お互いを羨んでいて、僕はそんな彼女を、敵だと思っていて……彼女は僕を、理解しようとして……そして、今は。

僕が、彼女を『敵』だと思っていたのは、僕の感情がそうさせたことで。

僕は本当は、彼女をどう思っていたんだろう。

彼女を無視する、ずっと前は……

「……」

思い出そうとしたが、もう、思い出せなかった。

「どうしてこの合宿に協力する気になったの？」

坂を上り、リュートのリードを引きながら、取り合えず僕は横にいる彼女に、別の話をフッた。

その質問も、さっきから僕の肩に、ずっとのしかかっていた。本来、イイジマがどんな筋肉馬鹿でも、教師であれば彼女の合宿参加を許すはずがないからだ。まして、僕が家までエスコートするなんて、おかしな展開になっているし。

「さあ、どうしてだろう……」

隣を歩くシオリは、自転車を押しながら、別の話題をフッた僕の心中を察してか、茶化すように答えた。

きっと彼女も、この話題を長引かせたかったのだろう。彼女も自分の思いを語りすぎて、ちょっと照れているみたいだ。

「……」

しばらく沈黙すると、吐く息がお互い震え、街路灯が白い息を写しだした。リュートも吐息が白く染まった。

彼女が空を見上げたので、僕も暗い空を仰ぐと、真冬の空に氷のような星が白く光っている。子供の頃、本で読んだ星の探し方を思い出して、オリオン座を発見。カシオペア座を確認。冬の星座はそれしか知らないけれど。ペンダントのような三日月が、澄んだ空にこうこうと光って昇っていた。

空を見上げ、言い訳を考えるポーズをとっていると、逆に質問を投げかけられた。

「じゃあサクライくんは、何で私を心配してくれたの？」

これは話をはぐらかされたのだろうか。彼女の正確な真意は読み取れなかったが、少なくとも、閑話休題を提案していることは確かだ。僕はそれに乗ってやることにした。他愛もない会話なんだ。問い詰めるほど焦った質問でもない。

「そりゃ、誰だって心配するよ。まして君みたいな……」
そこで言葉を止めた。クラスメイトに、冗談でも言えることじゃないことが口から出そうだった。
「君みたいな？」
シオリは、俯く僕の顔を覗き込む。
「いや、なんでもない」
僕は目線をそらすように、空を仰いだ。
でも――君みたいな女の子だから、僕はこんな心配するのだろう。他の誰に対してでもない、彼女の鏡のような瞳は、僕に色んな、懺悔にも似た感情を抱かせるから。
まるで、汚い自分が、綺麗なものに触れたような……憧れだったり、嫉妬だったり、そんな感情が、僕の胸でせめぎ合う。
坂を上ると、右手に僕の出た小学校がある。丸裸になっている、骸骨みたいに細い桜の木の枝が、柵の上から外に乗り出して、ざわざわと音を立てて、漆黒の闇に揺れている。
「寒いのか？」
十字路の横断歩道に差し掛かると、少し風が出てきたようで、シオリの吐息が少し震えているようだった。僕達は赤信号に足を止めた。
「これ着ろよ」
僕は自分のスタジャンを脱いだ。僕も体の大きい方じゃないけど、シオリもそんなに背の高い方じゃない。シオリは僕に背を向けて、少し腕を開いたので、僕は着せてやると、スタジャンからはシオリの手が出なかった。薄着になった僕は、すぐに頸椎から冷気が染み渡った。
振り向くと、シオリは微笑んでいた。ありがとう、と言った。
それからしばらく信号が青になるのを、僕はジーパンのポケットに手を入れて待った。
何をやってるんだ僕は。彼女に自分のスタジャンを貸すなんて、何十年前のドラマだ？

自分にダメ出ししてるうちに、彼女が僕の目を覗き込んで、何を思ったか、話し始めた。
「あのね、白状するね」
そう前置きしたシオリは、僕の目を避けるように、目の前の歩行者用赤信号を見ながら呟いた。
「私――この合宿に参加したのは、頼まれたからなの」
「――そりゃそうだろう。イイジマが頼んだんだろ」
「あ、違うの。イイジマ先生じゃなくて・・・・・・」
彼女は僕の方を一瞬向いて、かぶりを振ってから、僅かに沈黙した。すると信号が青になって、僕達は歩きはじめた。足を進め出すと、彼女は前を向いたまま口を開いた。
「エンドウくんと、ヒラヤマくんに」
「は？」
反射的に、僕の喉から、怪訝な響きを纏った息が漏れた。
「どういうこと？」
僕は足を止めて、彼女の目を覗き込んで、率直に訊いた。彼女も足を止めた。
「サクライくん、最近ちょっと悩んでるみたいだけど、あいつは天才だから、あいつの悩みはわからない、って。それで私に、サクライくんの話を聞いてやってくれって。それから二人はイイジマ先生に頼みに……」
「……」
ユータと、ジュンイチが？
――でも、思い当たるフシもなくはない。
ユータの普段は見せないオーバーアクションとか。変に僕と彼女がお似合いであることを強調しようとしていた。そしてイイジマの言動も――変に上ずって、しどろもどろさが露骨に表れていた。
そうか。ユータの奴、だからあんなにはしゃいでいたのか。イイジマがさも思いついたように言った、彼女のエスコートも、初めから裏で定められた出来レースだったのか。

僕は短い溜息をついて、額に手をやった。
「あいつら――大丈夫だって言ったのに・・・・・・」
「そう言うサクライくんが、一番大丈夫じゃない」
間髪入れずに彼女が僕の目をきっと睨んで、言葉を遮った。声が普段より厳しかった。
「一緒にいてわかった。エンドウくん達が心配する気持ちが、少しわかった気がする」
「……」
僕は呆然と立ち尽くして、その言葉の持つ重みを受け止めた。
だからって、心配されると何だか戸惑ってしまう。
心配されてるって、背中をドジョウに舐められたみたいに気持ちが悪い。心配されたところで、家庭内のことだし、誰かがどうにかできる問題じゃないからだ。僕はそれをよく知っている。
だけど、そういうものを排除しようとした、今の生き方が、苦しいなんて――
僕は他人に何を望んでいるだろう。自分の人生に影響することについて、何を望んでいるだろう。
きっと、そういうことを考えたくなかったのだ。そんな不確かなものに期待するほど、悠長な状況に、自分はいなかったし、将来より、現在の状況で手一杯だったから。
勿論他人のことなど考えられなかった。能力がある分、他人任せより自分で動く方が、何をするにせよ、手っ取り早かった。むしろ他人が足手まといになることの方が多かった。小学校の時のように。
でも、歴史小説でも、項羽、関羽、呂布といった、尋常でない強さを持った武将達でも、その勇には限界があった。追い詰められた彼らは例外なく、敵の術中にはまり、最期を遂げた。いわんやそれほど力のない僕は、当然追い詰められている。この考えも、他の選択肢はなかった。ディフェンスに阻まれて、無理なシュートを打つしかなくなったように、僕はそこに導かれたのだ。
道の果ては見えているのに、僕は自ら、自滅の道を掴まされてい

る・・・・・・
「あ、ここなの。私の家」
「え」
僕はシオリの指差す方へ顔を上げる。
「ここ？」
いつの間にか、僕の家を通り過ぎて、目的地に到着していた。

そこは、小学校の学区は違えど、僕の家から5分という、目と鼻の先の場所だった。

家の前に、路地のように続く、砂利の敷かれた細長い駐車場は、彼女の家の所有だろう。その奥に、可愛らしい2階建ての家が建っている。スウェーデンあたりにありそうなログハウスだ。暗くてよく見えなかったけど、二階にテラスがあって、チェスのポーンの頭を横水平に切ったような、白いテーブルみたいなものが見えた。1階の窓から明かりがこうこうと漏れている。そろそろ晩御飯も済んで、後片付けをしている時分だろう。

「こんな近かったんだ。て言うか、僕、この家、小さな頃からよく見ていたし」

「サクライくんの家は、地元じゃ有名な名家だもんね。うちは貧乏だから、全然ちっちゃいけど――」

「……」

僕は肩に背負った彼女の荷物を、そのまま手渡した。シオリはスタジャンを脱いで、後ろ向いて、と言われたけれど、それは辞退した。彼女の手からスタジャンを受け取って、自分の手でそれを羽織った。

僕はリュートの頭を撫でると、踵を返して、じゃあ、とだけ言って、立ち去ろうとした。彼女にこれ以上、してやることが思い浮かばなかったから、僕はそこから退散しようとしたのだ。

「サクライくん」

シオリが僕を呼び止めた。振り向くと、彼女の目は、力強く僕の視線を見つめて、離さなかった。僕は彼女の目力に、体が止まった。

「今日、私が言ったことは、頼まれて言った嘘じゃないから。あなたのこと、知りたい、やりとりしたい思って参加したのも本当」

「……」

「サクライくん……あなたに私が言うこと、私が出来ることは、ほんのわずかの助けにもならないかもしれない。でも、私に合宿の先生を頼んだエンドウくん達は、こう言ってたわ。あなたのこと、大事な友達だから、そう思ってるから、俺達が本当は救ってやりたい。でも、俺達はあいつが何に苦しんでいるのかわからないんだ、って」

「……」

「あなたが二人を友達と思っていなくても、あなたに何もできずにもどかしい思いをしている人がいるの。それに気付いてあげて。力にならなくても、その思いだけは、考えてあげて」

「……」

その時僕は、その言葉の意味を深く考えずにいた。ユータ達がイイジマを通じて、何の悪巧みをしていたのか、彼女の言葉より、その事の方が気になっていたからだ。

「おやすみ」

僕はシオリにじゃれようとするリュートを呼んで、元来た道を引き返して行った。シオリは、まだ何か言いたそうな顔をしたまま、そこに立ち尽くしていた。

「――あ」

そこで足を止めた。リュートも一緒に止まり、同時に踵を返した。

「さっき、君が僕と話して、色々引き出したいとか、そんなことを言ってたけど……」

言いかけて、後頭部を掻きつつ、息を吸った。

「それくらいでいいなら、いつでも付き合うよ。その、君と久し振りに話して、面白いと思うことも、あったし」

「……」

沈黙。

「また明日」

そう言って、踵を返しつつ手を上げてみた。もう振り返らなかった。

「くそっ――地元じゃ有名な名家か」
帰り道で、僕はリュートのリードを引きながら、憂鬱を夜空へと向けた。
うちは名家か――彼女の一言が、僕の心に引っかかっていた。
お金のかかるお坊ちゃんと思われたくなくて、言われるのも嫌で、県立の埼玉高校に来たのに、私立中学にいたという過去は消せない。
結局僕は、両親に高い金を出してもらって、私立中学に通わせてもらった、すねかじりのお坊ちゃんだ。
でも、それを真っ向から否定できないことも確かだ。
そしてそれは金銭的な意味だけに留まらない。僕は結局、精神的にも甘ったれたお坊ちゃんなんだ。
本当に親が嫌なら、奨学金を得、借金をし、住み込みで朝から晩まで働いて学費を出して、勉強する――そういう高校の通い方があるのも事実だけど、疲労した心は、いくら喝を入れても、それに納得してくれない。こんな時に疲れた心は、僕に本気で力を振り絞って生きる気力さえも奪っていた。甘ったれている証拠だ。
きっと、もう心はとっくの昔に死んでいるのだろう。
夢もない、目標もない。将来のためでもなく、まして愛する人のためでもない。ただ、つまらないプライドを抱えて、そこから抜け出したい、ということしか考えられていない、一歩も前に進むことの出来ない、僕の心のせい――何に向かって走っているのかもわからない、僕の疲弊し、萎えきった心のせい。
暗い夜道を、僕とリュートは、黙って歩く。
僕は、リュートのリードを、離さないようにしっかりと右手に絡めていた。僕は、リードをしっかりと握っている自分の右手を、ずっと凝視していた。
「なあ、リュート――」
僕は独り言のようにつぶやいた。
「もし僕が、この手を離したら――お前はどうやって生きていくん

だ？」

僕が、リードを握る、この手を離しただけで――ただそれだけで、こいつは明日の飯の保障もなくし、地獄を見ることになる――そんなことを考えていた。それを自分の姿とダブらせていた。

僕が犬だったら、飼い主に捨てられて、食べるものがなくなっても、他の野良犬やカラスと争いながら、ゴミ漁りをし続ける生活も、保健所に捕らえられて、握りつぶされるように、命を刈られる運命も、それなりに享受して、生きていけてしまうのだろうか……

「いや！」

思いをかき消すように、一人かぶりを振った。

「獣のように生きる必要はない。僕は人間だ。誇りを持つべき人間じゃないか」

学校に戻ると、寒い中を歩いて体が冷え、尿意を催し、僕は食堂のドアを開けると、トイレへ向かった。もう食堂には、片付けをしている数人の部員しかいなかった。男性用トイレの前でチャックを下ろす。

「おう、ケースケ、お帰り」

トイレに入ってきて声をかけてきたのは、僕の姿を見て追いかけてきたジュンイチだった。僕の隣に一つ隔てて立って、ズボンのチャックを外した。

「ジュンイチ――」

「ん？」

ジュンイチは振り向いた。だけどすぐに興味は、僕の下半身に移ったようだ。

「いや、なんでもない」

考え直して、訊くのをやめた。

ダメだ……こいつはユータと比べると冗談を好む。機転もある。問い詰めたところで大した成果はない。

ジュンイチは、僕達といつも一緒にいるが、実際は社交術に長け

ていて、クラスの連中誰とでも仲がよくなれる。ユータと比べると本質的に楽天家で、悪く言えばいい加減。冗談で相手のガードを緩めて、話術を自分に有利に持っていくことに長けている。こうして赤点を取りまくってはいるが、苦手科目がずば抜けて悪いだけで、本質的に文系科目の成績はいい。人の考えを読み、気を利かせる程度の頭がある、腹に一物あるタイプだ。

そんなクラスの人気者タイプが、何でいつも僕達3人という殻に閉じこもっているのかは、ユータが何故こんなガリ勉高校に入学したかというのと同じくらい、僕の中で謎だったけど、とにかく現状で問い詰めるには、相手が悪い。

横を見ると、ジュンイチは、ふふふ、と、気味が悪いほどニコニコしていた。

そこで僕は終わって、ジュンイチに見せないように、チャックを上げて、流すと、入り口手前の手洗い場の蛇口をひねって、蛇口にかかっている石鹸を泡立てた。ジュンイチは、あまり出なかったようだ、すぐに手を洗いに僕の横にやってくると、僕に話しかけてきた。

「どうだったよ？　麗しき姫のエスコートは」

「は？」

ジュンイチは、石鹸を泡立てながら、低い天井を見上げて、ニコニコ顔をしていた。

「女の子が苦手なケースケでも、送るとなれば、何か話したんだろ？」

「――別に」

ネタがわかって、改めて態度が臭い事に気付く。

しかし、放っておくことにした。奴等がどんな悪巧みをしたか、しばらく様子を見ることにした。こんな時、笑いをこらえたりしないでいい仏頂面は便利だ。

Trace

肌を刺すような冷たい水で手をすすぎ、食堂に向かう。席に着いている者は、誰もいない。カウンター奥で、一年生数人が、後片付けをしているだけだ。

カウンター近くのテーブルに、僕の分のハンバーグ定食が置かれていた。今まで合宿があると毎日のように食べてきた、レトルト風のクズ肉の寄せ集めだ。

この学校は、偏差値と学食の不味さだけは全国レベルだろう。この合宿次第でそれにサッカーが付くのかも知れないけれど、全然実感がない。

きっとそれは、僕の心にサッカーの居場所がないからだ。

僕はサッカーをやっているけど、別にサッカーはそれほど好きではない。

ただ、勉強だけしている奴、特に僕のようなチビはとかくナメられるし、言葉も机上の空論に見なされやすい。理論だけを並べ、実行を伴わない青書生というのは駄目なものだ。小学校の時の経験で、それを学んだ。

だからと言って、生徒会とか役員とか、人に頭を下げる仕事は大嫌いなので、適当に体力、行動力を示せる部活——運動部を選んだ。

別にやるものは、野球でもバスケでも卓球でも、何でも良かった。有象無象の中で、サッカーを選んだのは、将来に向けて体力をつけるためと、用具に大したお金をかけなくてもいいから——

僕がサッカーをしている理由は、それだけなのだ。

そんな僕が全国大会に行くのだ。県内にごまんといるだろう、プロ志望のスペシャリスト達を押し退けて。こういうことを許せない人間も多いのだろう。イイジマはその典型だ。

この合宿の前、協力者が見つからなくて、イラついたのも、何でたかがサッカーのためにこんな苦労をしなくてはいけないのか、と

いう思いがあった。僕にとっては全国大会などどうでもいい。サッカー自体にも、ほとんど情熱を失っている。

こんな思いでサッカーをやっているから、イイジマにも注意されてしまうのだろう。要は僕からは、何においてもやる気が感じられないのだろう。

でも『やる気』って何だろう。やる気があるとかないとか、そんなこと、問題なんだろうか。社会に出れば、やる気があっても結果が出なければ、首を切られてしまう。違うだろうか？

僕は結果にしか執着できるものがなかった。事実、それで結果を出してきた。『結果』が、世の中で一番シンプルな概念だからだ。これ以上ないほど具体的で、勝ち、と、負け、しか表さない。

ずっとその二元論の中で生きてきた。子供だった僕は、それに疑いも持たなかった。

だけど――今は勝ち続けているはずの僕は、現実ではまったく満たされない。

いくつもの抽象的概念が、一気に僕に降り積もって、一つの二元論の中で処理しきれていない。大量の情報が流れ込んで、フリーズしてしまったパソコンのように、僕の脳は停滞している。もはやパンク寸前といったくらいに。

ジュンイチは急いで僕を追いかけて、ジーパンで手を拭きながら、僕に駆け寄ってくる。隣に座って、ハンバーグを割り箸で細かく切る僕の顔を覗き込んだ。

「お前、わかんないかよ？　あの娘、お前に憧れとか、そういうの通り越して、もはや恋する瞳になってるじゃねえか」

手振り付きで語るジュンイチとは対照的に、僕は冷静にハンバーグを一切れ口に含んだ。

「あの娘はちょっと一緒にいたくらいで、僕を好きとか勘違いするほど単純じゃないよ」

それが僕の率直なところだった。彼女も彼女なりの悩みがあって、その疑念はすぐには解決しそうにないと感じた。僕にはそれがわか

った。彼女の深淵はもっと深く、僕はまだそれに触れてもいない。
彼女は、無理をしている。人の期待に応えたがっているのか、必要以上に自分を型にはめようとしている。そんな自分に、自分の意志を求めている。
「……」
その姿が、ガキの頃に親の機嫌をよくするために、自分の意志を殺してでも、いい子を演じていた自分とダブっていた。僕のガキの頃の感情は、彼女のそれと同じだろうか。
ジュンイチは僕の向いの席の椅子を引いて、腰を下ろし、僕の目を覗き込む。
「お前って、人の気持ちを知るために、誰かに一から教えてもらえないとダメなの？」
「僕は勝つとわかっている戦いしか、基本やりたくないだけ」
味噌汁に口をつける。
「孔明も上杉謙信も、無敗の奥義はそれだって言っている」
「……」
ジュンイチは、何か伝えたそうだったけど、上手い言葉が見つからないようで、席を立ってしまった。
食堂には、カウンターの外には誰もいなくなり、広々とした部屋の静寂が、僕を包み込んだ。
粘土細工のように不味いハンバーグが、鉛のように僕の心に沈殿した。
「不味……」
彼女の微笑と、自分の甘い考えが溶け合って、心に今まで感じたことのない痛みを与えるんだ。このような気持ちを『煩悩』と呼ぶのなら、何故僕がそんな気持ちにならなくてはいけないのか。
さっきから、彼女のことばかり頭に浮かぶ。
過去の僕と同じ感情を抱いている、そんな気がして、僕は過去の自分の思いを正確に思い出そうとしている。
彼女の力になりたいかとか、そういうことはよくわからない。た

だ、当時の僕を再現して、彼女の今の葛藤を出来る限り自分にトレースしようとしていた。その所作が、意志に関係なく、頭に浮かんでくる。

合点の行かない感情――思い通りに安定しない自分に、僕は少し苛立った。

僕はハンバーグを無理矢理詰め込んで、リュートを柵に入れて、餌と水をあげ、部屋の引き戸を開けると、皆に各自用意した四脚テーブルに、全員が突っ伏していた。

「起きろ！」

僕はユータの脇から手を入れて、机から引き剥がそうと、無理に体を起こそうとすると、明らかに寝ているには不自然な力がかかっている。ユータは机にかじりついて、離れようとしない。

「起きろ！　狸寝入りなのはわかってるんだよ」

ジュンイチ手伝ってくれよ、と思って、ジュンイチの方を見ると、ジュンイチも皆に乗って、同じポーズを決め込んでいた。さながら保護色を纏ったカメレオンだ。ジュンイチはどんな場所にも順応出来てしまう。ちょっとそれがうらやましい。

「ジュンイチ、くだらないことはいいから起きろ！」

僕は皆を引っ張り起こした。そしてまた勉強に向かわせた。

「……」

だけど、漂っているのは、彼女の残した甘酸っぱい雰囲気だけだ。皆の心の中は、それに冬の冷気と、男だらけのシチュエーションも手伝って、満目蕭条としている。

彼女は、散り行く桜の花のように、去った後に一抹の郷愁、移ろいを残す女性なんだということを、僕は初めて知った。

僕もそうだった。彼女の色々な表情が、陽炎のように頭の中でもやもやしながら、離れなかった。頭の中のビジョンが、酷く馬鹿馬鹿しかったけど、全然気が振るい立たなくなっているのも事実だった。彼女の存在をこれだけ強く感じたのも、これが初めてだった。

「初日だし、もう終わりにしようか」
皆が上の空で、成果も上がらなかったので、消灯の一時間前に僕が口にした。皆はその場に倒れこんだ。机を片付け、共同で布団を敷き、二年と一年で部屋を分けて、その場で就寝した。格技棟の鍵を預かる僕が戸締りチェックをし、こうして、成果の曖昧なまま、合宿初日が終わった。
布団を敷いて、電気を消すと、すぐに暗闇と静寂が走った。皆はすぐ、泥のように眠ったが、僕は勉強を教えているだけで、まったく疲れていないし、元々、吸血鬼並に夜型人間だ。だからと言って、他の部員が外出禁止なのに、外に出てコンビニにでも、ってわけにもいかない。
大体こんな沢山の人間と雑魚寝なんて経験は、人嫌いの僕にとってはまったく特別だ。そのうち複数のいびきが響いてきた。僕はそのいびきが、親父のそれと重なって、布団に潜り込み耳を塞いだ。
1時間くらい目を閉じて、眠くなるのを布団の中でもぞもぞしながら待った。
「……」
こういう時間が一番嫌いだ。暗い中、眠れず、動き出すことも出来ない。
することとなると、『考える』ことしかない。
だけど、僕は考え出すと、頭の中がぐるぐるしてくるんだ。経験からそのぐるぐるが起こると、長い間気持ちを支配してしまって、気持ちが酷く陰になる。
僕は、ぐるぐるしたくないから――こういう時間を極力作らないようにしたいから、スケジュールに縛られる団体生活が嫌いだ。他人にペースを乱される――僕が対人関係を拒む理由の一つ。
「ケースケ」
いびきの中で、僕の名を呼ぶ声がした。
僕の右隣で横になっているユータだった。僕は目を開けたが、カーテンを閉めた部屋の暗闇の中で、表情はまったく窺えない。

「ん？　お前起きてたのか――一番最初にくたばると思ったけど」
「いや、毎日日課のメール返信をやらないと落ち着かなくて――あー……」
「貴重な経験だな。さっさと寝て忘れるんだな」
「冗談じゃねえよ。ケータイ一週間使えないのが、こんなきついと思ってなかった」
二人同時に深い溜息をついた。ユータは欲求不満、僕は眠れない気の重さからの。

「ユータ」
僕は首だけを、暗闇の先にあるのだろうユータの方へ向ける。
「ジュンイチと一緒に、僕のこと、マツオカに頼んだ、って、本当か？」
それを訊いて、ユータは一瞬沈黙したが、失笑しながら、あっけらかんと答えた。
「シオリさんに聞いたのか？　意外とお喋りなんだな――あの娘」
やっぱり本当だったんだ。勿論、彼女が嘘をついたなんてことは考えてはいなかったが、あの子は嫌とは言えないタイプだ。二人に口裏を合わせただけという可能性もあったから確かめた。
「でも、相手がお前だったから、彼女は話しちゃったのかな」
「――どういう意味だ？」
「本当に好きな人の前だと、嘘がつけなくなるものじゃないか？」
「……」
何でそこに帰着するんだ。何で皆、僕と彼女をくっつけようとするんだ。
でも、あまりに彼女のことが話題に上るので、僕は不覚にも、彼女の微笑を、また脳裏に蘇らせてしまった。
顔は陽炎がかかったようでうまくイメージできなかったけれど、彼女の微笑が蘇ると、不思議な気持ちが湧きあがってきた。胸の中で、綿菓子ができていくように、もやもやしたものが、胸を満たしてくる。僕は思わず溜息をついた。
「お前、気になってたんだろ？」
急に横からユータの声がした。
「え？」
「シオリさんのことさ。恐らく何らかの心の変化があったと俺は見るね。だからクソ真面目なケースケが勉強を早く切り上げようと言

った。違うか？」
「……」
もうここまで読まれていたら、白状するしかなかった。相手がユータであれば、まあいいような気がした。僕にとっては恥部をさらけ出すような話でも。
「なあ――マツオカって、いい娘だよな。可愛いって意味じゃなくて――すごくいい娘だよな」
「今頃？」
ユータの笑い交じりの声が、暗闇の先でした。
「そんなこと、学校中のみんなが知ってるぜ」
「……」
「で、どうなんだよ。のろけ話でもあるのか？」
「そうじゃなくて」
僕は、ユータに今の気持ちを、的確に伝えられる言葉を模索した。改めて言うことじゃないが、僕は話をするのが苦手だ。自分の中途半端な言葉で、混沌とした自分の気持ちを言い表すことが出来ないことを知って、いつしかそれを他人に伝えることを諦めた。
今回も、言葉を捜しても上手く言えそうにない。だから僕はユータに、率直に要点だけを述べることに切り替えた。
「調子が狂うんだよ。あの娘といると……」
ジュンイチではなくユータに話したのは、ユータの方が考えが思想的にシビアな面があることを、僕は知っていたからだ。
ジュンイチはきっと僕を慰めるだろうが、僕は今、それを望んでいない。シビアな意見の方が望ましい。女の酸いも甘いも噛み分けたユータだ。この質問をするのは、彼の方が適している、と思ったから、さっきジュンイチに訊こうと思って、考え直してやめたのだった。
「……」
布団ががさがさとこすれる音がした。ユータが寝返りを打ったのだろう、

「お前、一度ジュンに殴られた時があっただろ。覚えてるか？」
「……」
ジュンイチのパンチ――親父のパンチ程じゃないけど、あれは効いた。
「あぁ――」
僕は暗闇の中で頬をさする。
「あいつ、本気で殴りやがって……殴られてなくても、あの時既に怪我人だったのに」
「でも、シオリさんがこの合宿に協力してくれるって言った時、あの娘、あの時のジュンと同じ目をしてたなぁ」
「ん？」
「何て言うの？　辛そうなお前を見ているのが、辛くて、苦しくて――って感じ？」
「……」
またか、また誰かに心配される。
だけど……彼女に対しては、心配させるようなことばかりしてるのも確かだな。じゃあ、僕はユータ達に対しても、心配されるようなことをしていたのか？
――ダメだ。こういう考え方をする自体、性に合ってない。調子が狂う。
「でもよ」
ユータの声がした。
「お前、ジュンがあの時殴ってなかったら、今頃もう学校辞めてたかもしれないよな。何だかんだ言って、あの頃のケースケ、おかしかったもんな」
「おかしい？」
「ま、今のお前はあの時よりも、ずっとおかしいけどな」
「……」
沈黙。
「僕って今、そんなにおかしいかな」

その僕の問いに、ユータが一度噴出した。
「あぁ、おかしいね」
即答。
「お前って、無口で無愛想だけど、長く付き合ってると、案外わかりやすいんだよな」
「……」
本当にばれている。だけど、バスケの試合の後に、心の中を見抜かれて、マツオカ・シオリに激昂した時の感覚とは違う。ため息を付きたくなるような、心の脱力感が、今の僕を支配していた。
もう怒る気力もない——というよりは、自分でも、今の自分をおかしいと思っていることの裏返しだと、僕は思う。
「……」
「俺の読みだけど、今のお前って、あの時ジュンに殴られて立ち直ったみたいな、荒療治が必要だと思うし、お前も心のどこかで、それを求め出してる気がするんだよな」
「——それで、彼女を僕にあてがったって訳か？」
「そうだよ」
自らの企てたシナリオを、あっけらかんとユータは暴露した。
「だって、俺達は馬鹿だから、お前の悩みなんて、身をもった助けなんて出来そうにないしさ……結構、複雑なんだろ？　何があるかは、無理には聞かないけどさ……」
「……」
「はじめは、単に頭のいい彼女なら、俺達の知らないお前の考えを聞き出せるかも、程度の気持ちだったんだ。だけど、話しているうちに、あの娘もあの娘なりに悩みがあったんだなって。それに悩む姿が、お前にダブったんだよ。だから、お前の気持ち、わかってくれそうな気がしてさ……無理言って頼んだんだ。どうやらあの娘もケースケも、お互いまんざらじゃないみたいだしな」
「……」
「どうだ？　心が弱ってる時に、あの娘の笑顔は、結構効くだろ？」

僕は彼女に近付かないように、彼女のファンと盟約を交わした。
だけど、そんなものはもうどうでも良くなりはじめていた。ユータの思惑通り、僕は同じ痛みを抱える彼女に惹かれだしたって訳だ。
こんなにも、彼女の笑顔を思い出すのも、あの笑顔を見ていると、汚く汚れた僕の心が洗われるような、救われるような――無意識にそう考えていたのかも。
だけど……
「僕と彼女は、付き合うとか、そういう関係じゃないよ」
そう、人の気持ちもわからない僕、彼女もある意味虚構の自分に疲れを見せている。そんな二人が、明日から手をつないで、愛だ恋だと語り合うなんて、想像もできない。
そんな僕達が一緒にいるのは、傷を舐めあうだけの、ただの堕落だろうか。
そんな悩みを、ユータがまるで鍛え抜かれた日本刀の、青く光る一閃のように切り裂いた。
「これから変わっていけばいいんだよ。お前も、シオリさんも。勿論、俺達もな。付き合うなんて限定をするから、先がないのさ」
「……」
「ケースケは、いつも目標を持って何かをやってるみたいだけどさ。先の見えないゴールに向かって走ることを無駄だって考えるなよ。なかなかひとつの道を真っ直ぐには進めないさ。時には回り道もして、何かを学ぶものだろ。人間なんて」
「――随分詩的な表現だな」
「はは。まあ、ここまでは建前だ。実際お前とシオリさんがくっつかれちゃ俺が困るぜ。俺だってあんな可愛い娘、お前でもすんなり譲るなんて出来ないからな」
「はは」
よく言うよ。実際はそんなこと、もうどうだっていいんだろ。
「はぁ……何か話に頭使ってたら、眠くなってきちゃったよ。おやすみ」

そう言うと、ユータが布団をかぶり直す音がした。その後、一切の音が聞こえなくなった。

「……」

最後、不覚にも僕はこうして笑ってしまって。小学校の頃、笑顔を忘れた、もう二度と笑えないと思っていた僕が、ほんの僅かだけど、ユータの前で笑えた。

こうやって、変われるんだろうか。僕も。彼女も。

一人じゃ出来ないことも、二人でだったら頑張れる。それは決して負けじゃない。

なかなかそれを全て受け入れることは、まだ出来そうにないけれど……

とにかく、頑張ってみよう。頑張ってみたい。

それだけは、素直に思えた夜だった。

Dream

夢の中で、僕はジュンイチに殴られた日のことを、思い出していた。

――僕は入学当時から、特別な存在だった。

４月――入学式後のオリエンテーションを、学年唯一不参加。サッカー部では、学年唯一の野球部出身者として、課せられた地獄のマラソンをクリア。月の後半には、早くも教師と衝突。アルバイトで疲れていた体を休めるため、昼寝していたのを、教師に首根っこ掴まれて叩き起こされ、その時に揉めたことがきっかけで、授業をサボるように。優等生の多いこの学校で『世捨て人』などと囁かれる。

５月――授業をサボって、音楽室で戯れに弾いたギターやピアノが全校生徒の間に浸透。文化祭で、正門を飾る門の作成が遅れていたが、一晩徹夜で作業を受け持ち、１人で門を完成させる。文化祭は個人でやったギターがウケて、僕は文化祭の後、新聞部発行の新聞で、授業中の音楽室の音楽の正体だと、写真付きでばらされる。

６月――高校初の中間テストで、１位と１点差の２位に輝く。『世捨て人』の僕が優等生達の間に与えた衝撃は、計り知れなかった。

７月――期末テストも中間テストと同じ結果に。初の全国模試で、全国２１位という、学年トップの成績を挙げる。体育祭で、部活別対抗リレーで先輩をごぼう抜き、クラス別リレーでも同じことをして、僕は学年のみならず、全校に名前を売る。

８月――サッカー部でベンチ入り選手に選ばれ、サブとして３得点３アシストを記録。ユータが入ったことで、埼玉高校史上初の、埼玉県大会決勝へ進出。ユータ、ジュンイチとともに、彗星のように現れたルーキーとして、雑誌にも特集される。

９月――夏休みの宿題で出した絵画、読書感想文、英語論文が全て好成績を残す。絵画は全国金賞、英語論文は、アメリカでの弁論

大会での発表も薦められたが、興味がないこと、バイトを休むメリットのないことを理由に辞退。

僕は半年で、校内に知らない人はいないという程の有名人になっていた。だけど、僕にその自覚はまるでなかった。

ただ、あの頃は――

高校入学に伴い、自分で学費を稼ぐという決断をしたことと、親に反抗したことで、自分の生活が大きく変動した。心が揺れたり、迷ったりする時間を作りたくなくて、ただひたすらに生きるしかなくて、ただ、漠然と、だけど純粋にがむしゃらだった。

あの時の自分が、美しかったか、醜かったか。それは僕にはわからない。

だけど、あまりにがむしゃらなことは、時には愚だったのか――

僕は１０月の半ば、紅葉や銀杏が色づく頃、体育館裏に呼び出された。

呼び出したのは３人の３年生で、僕より皆体が大きかった。

小学校の旧友に、暴力に対して向かっていけたのは、単にそいつらが嫌いで、憎しみを燃やした。

しかし、その時は違う。

憎しみもなくて、僕はただ、がむしゃらに生きる糧もそろそろ燃え尽きて、燃やした消し炭が、砂塵のように僕の心に積もっていて、生きるたびに心に沈殿物がたまる感覚が、ただ辛くて。

僕は勝手に溜め込んだストレスを、正当防衛の名の下にぶつけていた。そして、気がついたら、僕の足元で、先輩３人が痛んでいて、立っている僕自身も、頭から血を流して、体中痛んでいた。

それを見つけた教師に、体の力の全て抜けていた僕は、引きずられるように生徒指導室に連行され、そのまま３日間の停学処分を受けた。これでも正当防衛で、多勢に無勢だという条件もあり、随分と減刑されたのだけど。僕の倒した先輩は、全て一週間の停学だった。

停学中の３日間は、高校に入って初めての休養だった。茫漠とし

た時間や、家族のいる家から出られない決まり、傷の痛みが、がむしゃらに生きた僕を完全な燃えカスに変えてしまった。

3日後、僕が登校した際には、もう事情は大体の人が知っていて、頭や腕に包帯を巻き、絆創膏だらけの顔で、ひどい顔をしていたと思う。その頃の僕は、完全に燃えカスとなっていて、夢遊病者みたいな足取りだった。

あんまり虚ろだったので、その時はユータ、ジュンイチが大爆笑して寄ってきた以外は、誰も僕に近付かなかった。

そして、その4日後だった。

僕のクラスに、三人の男子生徒がやってきた。皆僕よりも顔を腫らして、一週間経っても青痣が消えていなかった。

3人はためらいなく下級生の教室にずかずか入り込み、まだ包帯の取れない僕の座る席を囲んだ。クラス中が息を呑み、僕等から離れた。

「けっ、運のいい野郎だ。俺らに罪を擦り付けて、早々出てきやがって」

「だがな、今度はこうはいかねぇぞ」

「痛い目に合いたくなかったら、二度と粋がるんじゃねぇぞ」

3人は口々にそう言った。

「……」

僕はこの時、1週間前には感じなかった怒りが、初めてこの3人に向けられていることを感じた。

僕は両親を憎んだが、人に逆らうことは、自分にそれなりの覚悟が必要であることを学んだ。

僕はその、両親と言う存在に意地を通すために、ただがむしゃらだった。だからこいつらの今やっている、中途半端な粋がり方が許せなかった。

僕はゆっくり立ち上がり、一人の目を見て言った。

「なんだ。まだ俺とやる気なのか」

自分の舌鋒は、驚くほど冷たく、静かだった。教室中が凍りつく。

今まで家族以外に、自分の呼称が『俺』になったことがなかった。
僕はゆっくり3人を見定める。
「お前達は3人がかりで、俺に負けたんだ。あの一敗で、俺との力の差がわからないようじゃ、何度やっても結果は同じだ」
「なんだと！」
一人が僕の胸倉を掴む。しかし、細い腕だ。僕は相手の手首を掴んで逆方向にひねり上げる。僕の胸倉から手が外れ、その手は高く掲げられる。
「痛い痛い痛い！」
腕を締め上げられる先輩は声を上げる。
このやろう、と、あとの2人が言うと同時に、僕はその手を離した。3人は一歩下がり、僕と3メートルの距離を空けて正対する。
「ひとつ言っておいてやる。俺はこの学校の停学や退学なんて、なんとも思っていない。俺にとって高校は、大学受験資格さえ取れれば何でもよくて、ここを辞めても大検を受けて大学に行けばいいだけの話だからな。その意味がわかるか？　お前等を今以上に痛めつけることにも、俺は何の感情も抱かないってことだ」
僕は一歩前に進む。3人は後ずさる。
「俺を恐がっているな。そんな程度の覚悟で、俺に喧嘩を売るんじゃねぇ！」
怒鳴るなり、僕は自分の机を蹴り飛ばす。クラスメイトの女子の悲鳴。派手な音が残響する。
「失せろ」
「――」
3人はすごすごと教室を出て行った。
「……」
教室の空気が凍りついた。僕は自分の蹴り飛ばした机を引き上げようと、机に手をかけた。
その時だった。
「ケースケ……」

誰かが僕の肩に手を置いた。僕はゆっくりと振り向く……

次の瞬間、頬に重い何かが当たったと思うと、僕の体は吹っ飛んでいた。体に巻き込まれ、教室の椅子や机が数台巻き添えになって倒れた。

口の中を切って、口の中に鉄っぽい味がした。体にのしかかる机や椅子をどけながら、上半身だけ起き上がった時に、初めて僕が殴られたのだとわかった。頬がじんじんする。

目の前に、拳を前に突き出し、殴ったままのポーズで固まっているジュンイチがいた。

「――おい」

僕はしりもちをつくポーズのまま、ジュンイチの顔を見て、彫像と化した。

どこぞの髪の毛が蛇だったりする妖怪女の視線じゃないが、それを見たら、固まるしかない。

ジュンイチの眼光は、きらきら光っていた。それが涙だとわかるまで、僕は3秒ほど時間を要した。

やがてジュンイチは拳をおろし、僕の目と正対する。

「ケースケ。そんな悲しいこと、言うなよ……」

消えるような、哀願するような、震えたような声だった。

「確かに、お前みたいな天才にとっては、俺みたいな凡人といたって退屈だろう。この学校にだって、何の価値もないのかもしれない……だけど……俺はお前の、そんなひねくれてるけど一直線なところが好きなんだ。功利主義者みたいな顔して、困った奴をほっとけないような、不器用なお人好し加減が好きなんだ。俺やユータのおふざけに、涼しい顔してぶっ飛んだボケをかますお前の独特の間が好きなんだ。冷静にパスを出すくせに、うちのチームが弱いから、押し込まれているポジションのカバーに、いつも走っていく、お前の素人丸出しのサッカーが好きなんだ。お前がいる、この高校生活が好きなんだ」

「……」

もう僕も、周りのクラスメイトも、このジュンイチのこっぱずかしい告白に、口も挟めなかった。いつも冗談めかしたジュンイチが、こうして大真面目に何かを語るなんて、僕達でも見たことがなかった。

「俺はこの学校に入って、お前と出会えて、いつもユータとお前と3人でつるんでバカやって、すげぇ楽しかったよ。俺は、お前やユータのこと、親友だと思ってる。だから頼むから、そんな時間を無駄だなんて言わないでくれよ」

「……」

訳がわからなかった。訳もわからずぶっ飛ばされて、殴ったのは僕といつも一緒にいる奴で、僕を殴ってそいつは泣いてて……頬がじんじんしている以外、確かにわかっていることなんて、何もなかった。

ただ……段々と僕も、何故かわからないけれど、こいつに対してあまりに無思慮なことを言った、ということを、驚くほど素直に納得している自分がいた。いつもなら顔にワンパン入れられたら、きっと喧嘩腰になっていただろうに……

そう考えると――

僕は入学以来、こいつらと一緒にいた時間が、そんなに嫌いじゃなかった。

そんな気がした。

いや、それを思い出した、と言った方が正しいかもしれない。

そうだ。僕だって、何の目標もなかった高校で、こいつらに出会えたことは、決していらないものなんかじゃないじゃないか。好きだ嫌いだなんて、照れくさくて言えないけど、僕だってこの二人と一緒にいる時間は、もはや生活の一部となっていた。

ただ、そんなことを口に出して言うほど、僕は詩人でもなければ、ワインのソムリエばりの表現力もなかった。僕はそのまま立ち上がって、いつもの授業サボりを決め込むために、教室を出ようとした。すれ違い越しにジュンイチに、「ごめん」って言ったっけ。

そこで目が覚めた。
まだ部屋は薄暗い。カーテン越しに光が差してないところを見ると、まだおそらく外は真っ暗だ。
枕元に置いてある目覚まし時計に目をやると、5時7分だった。冬場の合宿所は、県立で暖房器具もなく、嫌味なほど寒かった。イイジマは一台ガスストーブを持ってきてはいたけれど、寝ている時にストーブを焚くわけにはいかない。僕は起き上がって、寒さに震えながら、部屋の隅にあるストーブを熾した。
部員達は、初日の勉強が相当堪えたのか、ほとんどの奴が苦悶の表情で惰眠をむさぼっていた。
ユータとジュンイチは、普段のどこ吹く風て、気持ちよさそうな寝顔を見せている。
「……」
何だか、この二人のアホ面が、今の僕には心強かった。
こいつらは、今から僕がとてつもない馬鹿な挑戦をしても、きっと笑わないだろう。そして、失敗して僕が壊れそうになったら、きっとまた殴ってでも、僕を止めてくれるだろう。
だから、今は先のことを考えず、彼女ともっと話をしてみようかと思う。

Curry_rice

１０日後の１２月２３日、サッカー部の赤点取得者は、正午から始まる追試に挑んでいた。

僕は教師にとことん信用がないらしい。僕も教室で、連中の結果を見守っても良かったのだが、策士である僕のことだ。不正に答えを教える秘策でも仕込んでいると思われたのか、教室に立ち入ることはできなかった。

そして、今僕は、一人で食堂にいる。既に指はシワシワになっている。

今日は試験のため、サッカー部にしっかり睡眠を取らせたので、僕は朝食を取ってから、ずっとこうして、手持ち無沙汰な時間を過ごすしかなかった。

昨日の時点で、吹奏楽部に話は通してある。

やがて追試の終わった連中が、ぞろぞろと教室から出てくる。赤点数は個人差があり、終わる時間もばらばらだ。早く終わった連中は、今日で引き払う合宿上の掃除をして時間をつぶさせる。

「６時に食堂に集まってくれ」

僕は合宿場にそう張り紙をした。サッカー部の連中は、合宿に持ってきたバッグを担ぎ、食堂に入ってくる。

それと同じ時間に、吹奏楽部の部員達も次々と入ってくる。うちの学校の吹奏楽部も、関東では割と好成績を残していて、部員も５０人ほどいる大所帯だ。うちの学校は進学校らしく、自慢ができる部活は、そういう文科系クラブばかりだった。僕達の代になってサッカーが強くなっただけで、サッカー部以外のチームはいまだに万年初戦敗退のレベルだ。

サッカー部はサッカー部、吹奏楽部は吹奏楽部で、それぞれ食堂

の長椅子に座っていく。全員がそろうまで時間があって、早くに集まったものは、席に着きながら、同じ部員同士、おしゃべりをしている。

やがて全員が揃う。皆が席に着き、料理を配膳するカウンターの前に僕が立つ。

まだ、この場で何が始まるのか、誰も知らない。

「ケースケ、お前が人を呼び出すなんて、珍しいな」

サッカー部の部員が言った。

「何をする気なの？」

吹奏楽部の部員も、前にいる僕に聞く。

「……」

僕は頭を一掻きする。

「あー、サッカー部の連中は、作った僕が言うことじゃないが、あのしんどいスケジュール、よく頑張ってくれた。今日の結果はまだ出てないが、お前らは最善を尽くしてくれたと思う。ご苦労だったな」

なんともたどたどしく、僕はそう言った。そして、吹奏楽部の方を向く。

「そして、吹奏楽部の皆も、僕と一緒に教師役をやってくれたマツオカをはじめ、他の部員も、空き時間に内の部員に勉強を教えてくれたり、差し入れをくれたり、サポートをしてくれて、とても助かった。この場で感謝を述べたいと思う。ありがとう」

僕は頭を下げる。

「まあ、そういうことだ。そこで、サッカー部の慰労と、吹奏楽部への感謝も兼ねて、ささやかだけど、晩飯を用意した。良かったら、食べていってくれ」

「マジ？　ケースケが作ったのか？」

ジュンイチが声を上げる。

「あぁ、といっても、カレーとサラダだ。たいしたものじゃない」

そういって、僕はカウンターの中へ入る。

何人かの生徒がついてきて、カウンターの外から、体を少し乗り出して、中を見つめる。

でかい寸胴にいっぱいのカレーが二つ。学食で使っている業務用の炊飯器に黄色いご飯と、白いご飯が、これでもかというほどに炊かれている。既に木のボウルに盛り付けてあるサラダが、それがいくつもキッチンの作業台を埋め尽くしている。それだけで１０品目は入っている、色とりどりのサラダだ。

「これ、全部ケースケが、一人で作ったのか？」

誰かが聞いた。

「あぁ、僕は朝から暇だったからな」

あの、ユータに諭されてしまった日から、僕は自分に何ができるか考えた。だけど、何をしていいかなんてよくわからなかった。だから、自分がとりあえず何かを作って人に振舞ってみる、という、僕が人にあまりしたことのなかったことを試してみることにした。

まずイイジマに「これだけ吹奏楽部に世話になっている。御礼をしなければ、礼を欠く」という口実で、微々たるものだが部費を徴収。

僕の家は商店街にあって、当然八百屋や肉屋、魚屋もある。小さい頃からの顔馴染みだから、大量発注で安くしてもらった上に、トラックで昨日、朝から学校まで運んでもらいもした。勿論誰にも内緒で。

肉は１００グラム５０円くらいの、そのままでは硬くて食べられないようなスジ肉。それを一気に弱火で火にかけておいた。コンソメスープが取れるほど煮込んだ肉は柔らかく、煮こぼしも行ったから、臭みもない。

今日は朝から、箱いっぱいの人参、玉葱、ジャガイモと格闘していた。ジャガイモの皮剥きで、手の皮はシワシワになった。玉葱を切りすぎて、目が痛くて、途中から水泳用のゴーグルをかけて切った。

その作業だけで3時間もかかった。下ごしらえした野菜に、マッ

シュルームやニンニク、生姜を加え、肉と合わせて、市販で売っているティーパッグ型のブーケガルニと一緒にまた半日煮る。その間にサラダを用意する。レタスをはじめ、緑、黄、赤のピーマン、コーン、水菜、トマト、山芋、キュウリ、人参、玉葱をバランスよく盛り付け、とても彩りの良いサラダだ。それとは別に、箱のトマトがあまったので、トマトと玉葱をオリーブオイルで食べる、シンプルなサラダも作った。

材料で一番お金のかかったルゥは、必要量の7割に抑えて、残りは炒った小麦粉や、ソースや味噌、コーヒーなどで深みを出してごまかした。スジ肉の脂のなさは、肉屋で無料でもらえる、サイコロ型の牛の脂身を入れてカバーする。最後に、これも原価を抑えるための、傷のついた林檎を十個、まるまる摩り下ろして、それを投入し、出来上がり。

「辛いのと、辛いのが苦手な人用があるから、盛りつける時に、各自言ってくれ」

「すげぇ、あの黄色い飯はなんだよ」

ユータが空腹を顔に表して聞く。

「ターメリックライスだ。カレーに合うんだ。苦手な人もいるだろうし、白いご飯もある。それも各自盛る前に言ってくれ」

僕はトレンチを使って、１１種サラダと、トマトサラダを各々の席に置いていく。大体長机に座る６人で一皿だ。

その後僕はカウンターに入り、カレーの盛り付けにかける。サッカー部と吹奏楽部の、総勢８０人が、学食で使うお盆を持って、カウンター前に一列に並ぶ。

しかし、ルーの好み、ご飯の好みを全員に聞きながらの盛り付けは、僕一人ではかなり時間がかかってしまう。僕はその長い、自分がいくらやっても途絶えない人の列に、更にピッチを上げる。

すると、僕の隣に、すっと一人割り込んできた。

「手伝うよ」

にこりと笑ってそう言ったのは、マツオカ・シオリだった。

「え……」
言葉に詰まった僕に、彼女は間を入れず、問答無用で僕からルゥをかけるおたまをひったくる。
「いいの。私も吹奏楽部の部長だし、お世話になりっぱなしじゃ悪いから」
「……」
１０日間、ほとんど一緒にいて、わかったことがある。こういう時の彼女は、本当に強いんだ。こうして人を心配して、自分が動くときは、問答無用になっちゃうような娘なんだ。それがわかった。
正直僕は、この合宿がはじまるまで、彼女とほぼ1年、まともに会話をしていなかったから、ただのクラスメイトにもなれていない、お互いのことをほとんどよく知らなかった。
だけど、今なら少し彼女のことがわかるようになってきた。
彼女は、僕とやり方は違うけど、基本世話焼きで、困ってる奴を放っておけない、普段引っ込み事案なんだけど、変なところ行動派で、落ち込んだり、笑ったり、いつもころころ表情が変わる。時には僕でさえ、彼女のペースに引き込まれるくらい積極的になったりする。そんな時、彼女はいつもこうやって、なんだか安心したように笑っているんだ。
僕とシオリの共同作業で、あっという間に皆にカレーが行き渡る。最後、シオリの分を僕が盛り付けてやる。
「ありがとな」
僕はカレーの皿を渡す。
「うん」
彼女はその皿を両手で受け取ると、小さく頷いた。
彼女が席に戻ると、高校生にもなって、皆で「いただきます」なんて言うのは恥ずかしいし、誰かが号令かけるでもなく、各自それを言って、カレーにスプーンを伸ばした。
「うおっ！　超旨いぞ！　このカレー！」
「何だこれ！　今まで食べたことない複雑な味が……」

「うんうん、でもこれ、とっても美味しい！」
すぐに口々に、僕のカレーに対して感嘆の声が上がる。
「大袈裟だろ…一人頭、２００円もかかってないぞ、そのカレー…」
僕はその時、一人食べずに、一日こもって散らかしたキッチンの掃除を行っていた。野菜の皮やらがゴミ袋に満載だし、床にも細かいゴミが落ちている。キッチン常備の箒とデッキブラシで、広いキッチンと格闘していた。
「このサラダのドレッシングも、美味しい。あ、このゴマドレッシング、味噌が入ってるんだ」
「マヨネーズも、これ、手作りだよ！　アボガドが入ってるもん」
「このトマトサラダも、盛り付け綺麗でとってもお洒落だね」
カウンターの外から、そんな声が聞こえてくる。外ががやがやと、人の声でにぎわう。どうやら料理で皆の会話も弾んでいるようだ。はじめは同じ部活だけで固まっていたのに、席を立って、サッカー部と吹奏楽部で、交流している者も出ている。
「……」
こんなのも悪くないよな。
今まで、誰かに何かを施してやるなんて、したことがなかった。
今でも、少し照れ臭いけれど……
でも、誰かにやらされていると思わず、自分で、やらなくちゃ、と思って、誰かのために動いたことなんて、今まで無かった。ユータ達に勉強を教えるのだって、世話してやってるなんて、多少恩着せがましい気持ちがあった気がする。
さっきから腕が痛いけど、皆がそれなりに喜んでくれる――人付き合いは苦手で、あまり人と関わるのは好きじゃないけど――
でも、だけど……どうして今の僕は……
「――ふう」
ホースで水をまいたキッチンを、デッキブラシで擦って、一度僕は腕で額の汗をぬぐった。

「サクライくん」
その時、カウンター越しに声がした。僕は振り向いた。
「……」
そこには、吹奏楽部の同級生の女の子が、6、7人で固まって、立っていた。どの娘もシオリと一緒に、たまに合宿で勉強を教えに来てくれた娘達だった。

「サクライくんは、カレー、食べないの？」
そのうちの一人に聞かれる。
「あぁ……一日これ作ってて、ずっと食材と一緒にいたから……見てるだけで腹いっぱいだよ」
人に食べさせる料理って、念入りに味見をするから、人に出す頃には、自分は料理の味を知ってて、食べる気がなくなっちゃうんだよな。
さすがに疲れた。丸一日包丁を握っていたから、両手、特に指先の感覚がほとんど無い。さっきからデッキブラシを握る両手は、もう握力も出ない。肩から先は、けだるい疲労でコーティングされていて、スプーンを持つのもだるかった。
「でもすごいな」
他の女子が言った。
「サクライくんって、料理もできるんだ。何だか憧れちゃうな」
「――大袈裟だな。ただのカレーとサラダだぞ」
「でも、一人で作ったんでしょ？　これだけの量」
「それに、どれにも一工夫あって、手間がかかってる」
彼女達は各々、口々に言った。
「……」
何だこれ。何で僕は、一度も話したことのない同級生に囲まれている？
土嚢を背負ったように、僕の体が重くなる。
こういう『理由』だとか、『体裁』だとか、そういう僕にとってのいらないものを、できる限り遠ざけて生きていきたいと願って、今までやってきたんだ。
そんな僕が、こんなことをやったんだ。改めて考えると、意味がわからない。そんな『理由』を求めるごとに、僕の求める身軽さか

らはどんどん遠ざかっていく。
参った――どうやってこの場から逃げるかな。僕の意識は、自動的にその方向へ向く。
「そんなつもりはないよ。単に暇だったから、作っただけ」
ぶっきらぼうに僕は答える。
彼女達への返答に困る前に、目をそらそうと思って、もう一度デッキブラシの柄を握り直し、背を向けた。
背中越しに、彼女達が、ふふふ、と笑うのが聞こえた。
「そんな風に、悪ぶったって、ダメだよ」
背中越しに、彼女達のうちの一人に呼び止められる。僕は背を向けたまま、手を止める。
「本当のサクライくんは優しい人だって、みんな知ってるわ」
「……」
「そうそう、すごく落ち着いているけれど、本当は意外と子供っぽいんでしょ」
背を向けたまま、僕の思考は切れ切れに、その言葉達を咀嚼する。
本当の自分――確かマツオカ・シオリにも、同じようなことを言われたっけ。僕はその時、妙に不機嫌になったけれど……
なんだろう、僕のことを知らない人に、自分のことを判ったように言われて、腹も立たず、気持ち悪さも感じないのは、僕自身が、今の自分を本当じゃないって、わかっているからだろうか。
「どうしてサクライくんは、本当の自分を、そんなに隠すの？」
「……」
答えられない。
それどころか、言われて自覚する。
――あれ。本当の僕って、何だ？
やりたいことなんて、何一つできていない。生きるたびに、自分に矛盾やら疑念やらが積もって、自分がどんどん捻じ曲がっていく。
息継ぎのないクロールみたいにただもがいているだけ。苦しい上に、独りよがり。

そして僕は、こんな掻き乱れた心で、ユータやシオリのことを恨んだり、憎んだりなんて、もうしたくないと、本気で思っている。

そのループから抜け出したくて、手探りだけど、今日はこうして皆に食事を作ってみた。

それは――『本当の自分』の本意なんだろうか。

こんなに真剣に、ものを思ったことなんて、今までなかった。それは僕の心の底も、それを望んだからだろうか。

「このカレーも、辛いのが苦手な人のための気遣いもちゃんとしてある。それでいいのに、絶対にサクライくんは、そういうことを認めない。自分はこうなんだ、って、無理に本当の自分じゃない自分を作ってる感じがする」

「……」

「うん、サクライくんは、自分のことを常に否定してる。本当はそんな人じゃないのに、無理に自分を、自分はこうなんだって、無理して作ってる気がする」

「……」

僕が――無理している？　僕が――優しい？

優しい――自分が優しいかなんて、考えたことは一度も無い。

本当の僕って、何だ？

デッキブラシから手を離し、頭を抱える。

久しぶりに、わからない問題に出会って、頭に酸素が欠乏する感じになる。思考整理力が低下して、ロジックが展開されていかない。熱放出するモーターみたいに過剰回転で悲鳴を上げるように、軽く頭痛が起こり出す。ここ最近、わからない問題などに出会っていなかった僕にとって、こんな状態になるのは久しぶりのことだった。

僕は振り向いて、カウンター越しにいる、吹奏楽部の同級生。そして、その後ろにいるサッカー部と吹奏楽部の連中を見回す。

「……」

――遠い。

こうして、みんなと笑い合って、喋りながら飯を食べたり、大騒

ぎしたりして、楽しく過ごす時間、雰囲気が、自分には不釣合いで、自分には行けない場所だって、感じてしまう。見ているだけで、取り残されたようで。

よく考えたら、居心地は悪くて当たり前だ。

だって、こんなこと、やったことないんだから。

よく考えれば、明日からあの家族が急に仲良くなって、こうやって一緒に飯を食べてる場所に行ったって、それは僕が求めているものじゃないし、こういう気分を味わうに決まってるんだ。

元々自分には苦手で、そんなものは必要ないと思っていて、今だって、居心地だってよくはないけど。

何でだ？　そういう場所に自分も行きたい、なんて、そういう場所に入れる人間になりたい、なんて、思うなんて。

僕が求めているものは、一体、何だ？

「……」

頭がズキズキ痛む。

何でだ……居心地が悪い場所を、こんなに求める。

僕は一度天井を仰いで、深く息をつく。デッキブラシを脇に置いて、カウンターを出ようとする。

「あ……ちょっと待って」

カウンター越しにいた同級生が、僕を追いかけてくる。

「ごめん、ちょっと一人になって、考えてみる」

僕は入り口横に置いていた自分の荷物から、スタジャンを出して、肩に羽織る。

背中越しに、同級生に言った。

「これからは、もっと気をつけるから」

僕はスタジャンを羽織って、食堂を出る。

食堂は、正門から入って右側に曲がると見える。中庭に面していて、校舎から雨よけの屋根付き廊下が伸びている。校舎からしばらく進んで、右に食堂、まっすぐ行けば体育館、左に行けば合宿場の

ある格技棟がある。
僕は廊下に出て、食堂から右、体育館へ歩く。体育館は鍵がかかっていて入れない。
体育館の左の壁越しに、バレーボールのコートが1面取れそうなくらいの、小さな裏庭がある。大体来賓の駐車場や、雨で土手のグラウンドが使えなくなった野球部が、トスバッティングとかノックとかをしたり、昼休みに一部の生徒が遊ぶ程度の広さだ。
僕はその裏庭に出て、体育館の側面の壁に付いている扉に寄りかかる。そこには、2、3段段差があって、僕はそのコンクリートの階段に腰をおろした。
まだ7時前なのに、空はもう2時間前から黒く染まっている。少し風を感じる。マフラーをしていない首筋が冷えて、僕は亀みたいに、少し首を引っ込める。
「……」
何なんだろう、この気持ちは。
どうにかしたい、でも、どうしていいかわからない。
家族に疎まれ、どんどん自分が悪い方向へ向かっている。だけどどうしていいかわからない。そんな、無力感をただ味わう、というのとは、また違う感じ。
なんだろう、これは。胸がざわざわして、何だか、その空間に、どう入ればいいかわからなくて、居心地が悪い。だからといって、一人になることが根本的解決になるわけじゃないこと、僕は既にわかっていて……
変な感じだ。不安、孤独、焦燥、自己嫌悪、どれも違う。今まで感じたことも無かった感じ。
誰かと一緒にいたい。だけど、誰とも一緒にいたくない。誰かと話したいけど、話すことが特に無い。そんな色々なパラドックスが、僕の心を綱引きしてる感じだ。
「……」
僕の――心だって？

馬鹿馬鹿しい。自分でも笑える。僕に心なんて概念が、そもそもあったのか？

何だか変だな。本当、調子が狂っている。ここ半年の僕は少し変だ。

きっとこれは、潜在意識の警告なんだ。今のままじゃいけないことがわかってる。だから、何とかしなくちゃいけないって。

でも、何を、どうすれば……

「質問攻めから、避難してきたの？」

そう声がした。僕は顔を上げる。

そこには、ペットボトルを二つ持った、マツオカ・シオリが立っていた。

Logic

彼女は白のダッフルコートに、薄ピンク色のマフラーを巻いている。

ここ最近、毎日彼女を家に送っていたんだ。もうこの格好も、見慣れている。

なのに……いつだって、彼女の姿に、一瞬だけど、目を奪われる。

自分の中に、マツオカ・シオリという存在が、日ごと深く刻まれていくような感じを、僕は日に日に強く感じるようになっていた。別にそれが、常に一緒にいたいだとか、胸が高鳴るだとか、そういうものではないことも、僕は知っている。

激しい感情に心動かされるわけじゃない。明確な理屈も根拠もない。ただ、長い間、ただの『敵』として認識していた相手と、話をする機会をもらって、彼女もまた、一人の人間であることを思い出した。それを思い出して、彼女の一人の人間としての、混沌とした中身を知ってみたい、と思うようになっていた。彼女の、その華奢な体に、どんな重荷があるのか、ただ、知りたくなった。

「そんな格好じゃ、寒いでしょ？　中に入りなよ」

僕は一日料理をしていたから、腕まくりした長袖のTシャツにスタジャンを羽織り、チノパンという薄手の格好だった。確かに多少寒いけど、一日煮えたぎる鍋の前にいたから、今はこの冷気が少し気持ちよかった。

「いや、頭と体冷やして、考え事してるんだ」

「……」

会話が途切れる。

彼女は一歩前に出て、右手に持つスポーツドリンクのペットボトルを僕に差し出した。

「お疲れ様」

彼女は穏やかな微笑を湛える。

僕は黙ってそのペットボトルを受け取る。正直朝からほとんど休まずに働いていて、喉も渇いていた。

僕はペットボトルの蓋に手をかける。

「――あれ？」

両手に全く握力が入らないため、ペットボトルさえ開けられない。僕は彼女の前で、手を蓋の側面につるつる滑らせるばかりだった。

「……」

彼女は、少しおかしそうに、少し複雑そうに、それを見ていた。

「あぁ、力が入らないのね。よかったら、私が……」

彼女がそう言いかけると、僕は開封前のペットボトルを口に突っ込み、右の奥歯で蓋をしっかり噛むと、そのまま手でペットボトルを回転させ、強引に蓋を開けた。口の中で、ペットボトルが開く時の、パキッという音がして、僕は口からペットボトルを取り出して、残りを手で開ける。そしてスポーツドリンクを構わず喉に流し込む。渇いた喉に染みて、美味かった。

彼女はその姿をはじめ、呆気にとられて見ていたけど、やがてこらえきれずにくすくす笑い出した。

「ん？」

「――ごめん」

笑いながら彼女は掌を広げて謝る。

「意地っ張りだなぁ、と思って」

「……」

「サクライくん、いつも真面目な顔で、いつも私が想像出来ないことするんだもん。いつも笑っちゃう」

「……」

まだ、彼女がどうしてここに現れたのか、僕にはよくわからない。空気を探ろうと、僕はもう一口、スポーツドリンクに口をつける。

一呼吸置いて、彼女が言った。

「サクライくんは、誰かに何かをしてもらいたいと思うことは、ないの？」

「……」
彼女の一言で、また思考が鈍る。
「……」
沈黙。
「他の皆は？」
沈黙にじれて、僕は訊く。
「みんなカレーのお代わりしてる。相当作ったみたいなのに、きっとそれでも足りなくなりそうなくらい……」
「そうか、余ったら明日、教師連に食ってもらおうと思ったんだが」
それを聞いて、シオリはいたずらっぽく微笑む。
「味に自信がなかったの？」
「人に飯を作るなんて、普段しないからな」
この娘は、まだ僕のことを、何でも出来る、無敵のスーパーマンみたいに思っているんだろうか。
いや、それは僕も同じだな……僕も彼女の本質を見ようともしないで、彼女を勝手なイメージで、『敵』に仕立て上げていたのだから。
僕達はここ数日で、それを大いに反省した。
反省したからこそ、これからは自分の判断で、彼女のことを知らなければならない、と思った。それだけで彼女は、今や僕にとって、意識してしまう、特別な存在となってしまった。
そんな関係を、愛だ恋だと言ってみたりするには早計で——まともな友人を作ったことのない僕には、彼女との間に流れる、この妙な連帯感を、『友情』と呼べるのかもわからなかった。
彼女も、僕のことを知りたがっているようだった。だけど、現状は僕も彼女も、相手から話を引き出して、打ち解けるにはあまりに対人スキルが拙すぎる。
相変わらず、僕達はお互いをうらやみながら、自分には手が届かない存在だなんて思いながら、向き合って、ただ足踏みしている。
「……」

また沈黙。お互いがお互いを繊細なものと思って、気を遣いすぎている結果だ。
「なあ。ひとつ聞いていいか？」
僕は口を開く。
「え？」
「あ……いいんだ。ここ、寒いし」
僕は一瞬ためらう。
「ううん、それはいいけど」
彼女はかぶりを振る。
「……」
簡単に話が途切れる。多分それはお互いもう諦めているんだろう。
「あ、あの」
今度は意を決したように、彼女が裏返りそうな声で声をかける。
「と、隣、いいかな……」
暗がりでそう言った彼女の表情は、よくは見えなかったけれど、恥ずかしそうに俯いていた。僕にもっと、相応の高校生らしい感情があれば、こんな彼女を愛しく思うんだろうか。
好きだとか、簡単に言える関係って、意外と楽なんだって思った。ユータが言うように、いっそ「君を愛してる」とでも言っちゃえば、どんなに楽だろう。だけど生憎、僕も彼女もそういう分野は悲しいほどに不器用なんだ。
「ああ、どうぞ」
僕はチノパンのポケットから、汗を拭くのに使っていたハンドタオルを取り出して、隣に敷いた。彼女は僕に軽く頭を下げて、隣に座った。肩が触れそうな程近くて、離れていても、彼女の体温が伝わるようだった。
「何を考えていたの？」
シオリは僕の横顔を窺う。
「――本当の僕自身について」
口にしてみると、あまりに陳腐で、アホな言葉だ。こんなことに

なんで僕は真剣に悩んでるんだ？
　調子が狂っているのか。それとも、狂っていた調子が元に戻ろうとしているのか。
「さっき吹奏楽部の女の子達に言われたんだ。あなたは本当は優しくて、子供みたいな人だって。なのに、どうして本当の自分をそんなに隠すの？　って、言われてさ――」
「……」
「でもさ、正直言って、僕は自分がどんな奴か、考えてみると、全然知らないんだな、って思ってさ。こうして考えてた」
　そう、僕は大抵のことは、人よりもよく知っていると思っていた。だけど、最近になって、自分は何もわかっていなかったのだと、思うようになった。
　彼女に全く目を向けず、彼女を勝手に誤解していたことに気付いたことで、自分が今まで目を反らしていたものが、彼女の他にも沢山あるのだと、改めて気付いた。
　自分自身のこととさえも。
「僕って、他の人から見たら、どんな奴なのかな。皆が言う、本当の僕って、一体何なんだろう」
「……」
　彼女は黙っている。そのまま１０秒ほどの沈黙は、肌を刺すように刺々しい。スポンジを突っ込んだみたいに喉がカラカラになった。僕はその時間がとても嫌で、俯いた顔を上げられなかった。
「私の意見でも、いいのかな？」
　やがて彼女は口を開く。僕はまだ、顔を上げられない。
「そのままでもいいから、聞いてて」
　そう言うと、彼女は滔々と話し始めた。
「きっと、私もだけど、サクライくんと、あの二人に、学校の人はみんな、憧れてると思うの」
　僕はその言葉に顔を上げる。
「あの二人って、ユータと、ジュンイチのことか？」

「うん、そう」
彼女はこっくりと頷くのが、横目にちょっと見えた。
「きっとね、うちの学校の人達は、一度は大切なものを失ったことがある人達ばかりなのよ。ほとんどの人が、受験戦争や偏差値にしか価値観の示せない競争を一度は経験して、隣にいる人がみんなライバルだと思うような経験を必ずしているの。これからその競争が、大学受験がはじまると、もっと激しくなる。表向きでは仲良い振りをしていても、実際心の底まで信頼しあっている友達は、誰もいない」
「……」
そうかも知れない。僕が行った私立中学なんてところは、小さな頃から勉強漬けにされ、中学生の癖にもう精気を使い果たして、年齢の倍近く、一気に老けてしまったような奴等ばかりだった。大体の奴が人格的に何かが欠落していたけれど、そんなものは学校が教える価値観の中では、形骸に過ぎなかった。人付き合いも、どこか感情を外を滑り落ちているだけで、真に友人になりたいという程にエネルギーに溢れた奴というのは、まるでいなかった。ただ同じ環境で勉強をさせてもらえる権利を得た、という程度の付き合いのみだった。
この高校にしても、日本トップクラスの偏差値を誇っている。実際血反吐吐くほど勉強して、合格通知が届けば胴上げが始まるような難関校だ。
高度な技術を要して、間違えさせることが目的の引っ掛け問題、ギャラリーフェイクを見分ける練習だけを積んで、僕達は偏差値という評価点を上げてきたけれど、それが万物を計れる物差しなんかじゃないなんて、僕達は考える余裕もなかった。
「だから、サクライくん達3人みたいに、いつも3人でバカなことをしていられる関係って、心のどこかで、みんなの憧れなんだと思う。とても美しいって、思う」
「……」

一緒にいるとわからないものだけど……何だ？　僕達3人がいつもつるんでいるのは、他の奴等にはそんな風に見えているのか？

でも、今でさえ、卒業証書のためだけに通っている高校に、ひとつ意味があるとすれば、きっとあの二人に出会えたことだと、僕は答えるだろう。あいつらがいなかったら、僕はただ、学校で昼寝をして、夜にアルバイトして、家に帰って家族に神経をすり減らす三択しかなかっただろうから。

よく考えれば、受けた時はありがた迷惑に感じたけれど、やばい時に、ぶん殴って僕を止めてくれたり、やり方はどうあれ、僕の現状を考えて、助け舟を出そうとしてくれる。

生涯、あいつらと付き合えそうな気がする。そんな気がする連中は、あの二人以外、いなかった。

「サクライくん、あの二人の前だと、少しだけ表情が緩んでいるの。気がついてた？」

「え？」

僕は自分の頬をさする。

「穏やかな、優しい顔をしてる。私達は、それを見て思うのよ。サクライくんは、本当は優しい人なんだって」

「……」

「そしてね。ちょっと思うの。あなた達3人の仲のよさが、羨ましいって」

「……」

一度会話が途切れる。隣で彼女の息遣いが聞こえそうなくらい、彼女は恥ずかしさに息苦しそうに、呼吸を早めていた。

「私、この合宿を手伝ってみて、思ったの。サクライくんは、自分で自分を否定しているんだって」

「否定？」

「うん。自分は最低で、どうしようもない人間だと、自分を恥じて、責め続けているんだって。あなたの言葉の端々に、それは感じたわ」

「……」
彼女は、僕と『やりとり』をしたい、と言っていた。そうすることで、僕の考えを学びたいと――
そうしているうちに、彼女はそれに気付いたんだ。僕の言葉を、それだけ熱心に聞いてくれていたから。
「でも、私はサクライくんは、あなたが思う程、悪い人じゃないと思う。上手く言えないけど……エンドウくん達の前で、穏やかな顔をするあなたが、一番自然なあなただと思う。あの顔は、悪い人には見えないもの」
「……」
「ごめん、私、こんなに一人でぺらぺら喋っちゃって……」
「いや、いいんだ」
お互い少し照れながら、意味も無く軽く会釈を返し合う。
何を言いたいのか、まだ僕には見えていないし、彼女が何を見ているのかもわからない。
ただ、彼女の言うことは、過剰なまでに僕を褒めているのがむずがゆいけれど、少なくとも彼女が真剣に伝えたいことであることは、もうわかっていたから。
「私が言いたいのは……」
言いかけて、彼女は僕の方を向く。月明かりに照らされた彼女の顔は、神秘的にさえ見えた。
「私は、あなたがあの二人にいつもしているような表情を、もっとみんなにもして欲しい、と、思う。ああやって穏やかにしているあなたが、本当のあなたなんだと思うから」
「……」
「きっと、他のみんなもそう思っているはずよ。サクライくんの、笑った顔を、私達も見たいって。私だって……」
言いかけて、彼女は言葉を止めた。

「……」

沈黙。

――心地よい沈黙だった。彼女のと息のような、静かだけど暖かな声が、僕の心を柔らかく包み込んでいた。

どうして、どうして彼女の言葉は、いつもこんなに優しいんだろう――

どうして彼女の言葉は、僕にこんなに聞き入らせるのだろう――

「……」

ズクン。

「……」

あれ？　何だ？　今の……心臓が、一度大きく鳴った感じ……

顔を上げて、彼女の方を見た。

次の瞬間、色々なイメージが僕の脳内の大脳辺縁系に、津波のように流れ込んだ。一度に多くの脳内イメージで、頭の中に軽い混乱、高揚状態が起こる。

気がつくと、僕は彼女から反射的に目を背けていた。

彼女の視線が痛い。何かに頭を打ち付けたいような衝動に駆られる。

僕は――今までこんなに、誰かに優しい言葉をかけてもらえたのは、生まれて初めてだったから。

彼女に、僕の心の内全てをぶちまけてしまいたかった。彼女の優しさを、下品な妄想の中で、もっともっとと求め出す。それをぶつければ、彼女さえも壊してしまいそうなほど……

「……」

あ……駄目だ、頭の中に、今まで抑えていた心の声が、一気に流れだす――

嫌だ……嫌だ……聞きたくない……

まるで壊れたラジオのように、今まで自分を否定してきた言葉が重なって、幾重にも、まるで雑音のように流れ込む。両親や妹、旧友に、今まで僕が作り上げた敵の声……

『お高く止まった、可愛げのないガキ』

『自分じゃ何もできないくせに』

『自分の無能を親のせいにしているだけの、甘ったれが』

外部から聞こえてくるわけじゃないのに、僕は耳を塞いでいた。

やがて、嵐のようなその声が止まると、一切の音が消えて――

胸の奥から、クレッシェンドな自分の声が、静かに、だんだん大きくなって聞こえてくる。

『一人にしないでよ……もう一人は嫌なんだ。もう、これ以上どうしようもないんだ。お願いだ、誰かわかってよ。誰か、誰か……ぼくを、助けて……』

「……」

やめてくれ、やめてくれ……もう、こんなの、聞きたくない。

誰かのことを、ここまで必要としても、僕は相手のことを、どう思っていいのか、わからないんだ。今の僕は、ユータもジュンイチも、マツオカ・シオリも、とっても大切だけど、その思いに答えられる触れ方、接し方がわからないんだ……

その半面で、それを力づくでも奪いたいと、自分はこんなにも苦しいから、もう他の人がどう思っても構わないと……そんな歪んだ思いが、僕の心の蓋を破って、溢れ出した。

この日、僕の心は、自らの生み出した闇に捕まった……

僕はその後、ずっと黙っていたから、彼女は3分待っていてくれたけど、やがて何も言わずに席を立った。彼女は俯く僕に何か言ってくれたけれど、正直よく覚えていない。

それから僕も１０分くらいそのままでいた。だけどそれ以上そのままでいるのも何の解決にもならないとわかった。体が冷えて、何だかそのまま冷凍保存して、時間や思考を止めてほしいと思いかけて、僕も立ち上がる。

食堂に戻ると、数人の注目を浴びたけれど、僕は軽く無視をして、カウンターに入る。

炊飯器を開ける。白米もターメリックライスも空っぽ。２つの寸胴も綺麗にさらわれていた。

「……」

僕の顔に影が差す。顔を上げると、高層マンションみたいなユータとジュンイチがカウンター越しに立っていた。

「みんなお代わりして、もう全部なくなっちまったんだ。ただのカレーでも、お前のストイックさがうかがえるぜ」

ジュンイチが言った。

「しかし、酒のない打ち上げってのは、何とも不自由なものだな」

ユータが言う。

「……」

さっき言われたけれど、僕達三人はそれほど特異な存在なのか。こうしているとわからない。普段は飄々としてるのに、感情をストレートに現す激情家のジュンイチと、自然体でいながら少し冷めているユータに、僕。

長年連れ立ったって、その人間が自分にどんな影響をもたらすかなんてわからない。きっと僕はこの関係が終わるまで、こいつらとの関係を完全にわかりきることはないだろう。

ただ…

感情の変質が、少し……

こいつらがいなくなったら、僕は、本当にひとりぼっちだ。

そう思うと、今は胸が痛い……

何でこんな事を思うのだろう。シオリの話を聞いてから、少し変だ。

「酒がないと、こんなに飯が完結しないものか。ケースケ、何か他に食い物はないのか？」

実際あのカレーも、一人一合の米を食う計算で作ったんだけど。まだ足りなかったか。

「あのカレーでももらった部費ギリギリだったんだ。まだ足りないなら、コンビニにでも行ってくるんだな」

「いいのか？」

ジュンイチが聞く。

「いいも何も、もう合宿も終わってる。ものを買い込んで、学校閉まるまで騒いだって、誰も文句言わないさ」

「さすがケースケ！　話せるぜ！」

ジュンイチが指を鳴らす。

ジュンイチは振り返って、後ろにいる他の生徒達に大声をかける。皆がこのまま騒ぎたいと考えていたようだったので、行く行く、という声がいくつか聞こえた。

まだ時計は８時を過ぎたばかりだ。僕がここでカレーを振る舞ってから、まだ一時間しか経っていなかった。

門限とか、合宿後だから家族に帰ってこいと急かされた連中が何人か帰って、残りは半分くらい。

遠目にマツオカ・シオリが見えた。吹奏楽部の同級生に囲まれて、少し考える素振りをしている。きっと、まだ一緒にいようとか、引き止められてるんだろう。少し困惑している。

結局ほとんどの連中がコンビニについていくことにしたらしい。皆が持参の上着を着込む。

「ケースケも来いよ」

ユータが言った。

「いや、僕はいい」

僕は背を向けて、カウンターに寄り掛かる。

「……」

二人が背中越しに少し沈黙した。僕が無理に誘っても、ついてく

る奴でないことを既に知っていたので、少しして、そうか、と聞こえた。
「何か欲しいものがあったら言えよ」
ジュンイチの声。
「そうだな……じゃあムースタイプのポッキーを」
「はぁ？」
ユータが吹き出す。
「女子かお前」
「僕が食べるんじゃない」
「……まぁいいや。わかったよ」
「奢ってくれ」
「アホか」
そんなやりとりをして、二人は皆を連れて出ていった。食堂には僕一人残された。
「……」
僕は小さな鍋に水を張り、火にかける。食堂の冷蔵庫から豆腐と油揚げを取り出し、適当な大きさに切る。
だしの素を入れて、具を入れ、味噌を入れてひと煮立ちさせたら、火を止める。
「味噌汁？」
誰かに聞かれ、僕は顔を上げる。
カウンターの外に、背の高いグラマラスな女の子が立っていた。

Sudden

マツオカ・シオリのような、華奢で女性的な印象とはまた違い、元気さや無邪気さを花開かせたような魅力を持っていた。シオリがフルートなら、彼女はアルトサックスといった感じ。

見覚えがないから、多分別クラスの女の子だと思う。といっても僕はクラスメイトの顔と名前もよく覚えていないけど。

「いい香りね」

カウンター越しの彼女は、遠慮はないが、しかし下品とは感じさせない笑みを見せた。身長は小柄な僕と同じくらいで、正対していると視線が嫌でも合うのが少しプレッシャーだった。一人前のつもりだったが、味噌汁を一人前作るのは難しい。かなり量が増えてしまった。

学校の茶碗を一つ手に取り、おたまで味噌汁を掬って、彼女に差し出す。

「飲む？」

「いいの？」

彼女は僕の目を覗き込んだ。

「あぁ、余ってるし、飲んでくれたらありがたい」

「じゃあお言葉に甘えて」

彼女は白い歯を見せ、差し出す茶碗を受け取った。

「一緒にどう？　私も一人残って、暇だからさ……」

「……」

どうしてだろう。普段は知らない人と飯を食うなんて、慣れないから嫌なはずなのに……

今夜は、いや、今は、どうしてこんなに人恋しいのか。何かを期待しているかもわからない。ただ、誰かと一緒にいたかった。

僕もカウンターを出て、長椅子に座って、彼女と向かい合って味噌汁に口を付けた。体が冷えていたから、体が温まる感じがありが

たかった。
彼女は味噌汁を飲む僕を、頬杖をついて、少し上目遣いで見ている。彼女の視線は妙に扇情的だった。
「何？」
僕は聞く。
「あ、ごめん」
彼女は視線を一気にごまかすような笑顔を返す。
「料理ができる男の子って、いいなぁって。よく考えたら私、同世代の男の子の作った料理を食べたの、初めてだった」
「……」
僕は悟られないように、鼻で深くため息を吐く。
「ごめん。失礼だが僕はまだ、君の名前もわからなくて、何を話していいかわからないんだが…」
「あ、わからないかな。一年の時は同じクラスだった、タカハシ・ミズキ」
「あぁ……」
記憶の断片に、そんな娘がいたのを思い出す。僕はほとんど授業に出てないから、特別な記憶はほとんどないけれど……
年齢よりも大人びていて、高校生の男子が憧れそうなタイプだ。化粧を少ししている。ハリウッド女優みたいにボリュームのあるアヒル口が、ピンク色のルージュに彩られて、少しセクシーだ。
「ごめん、名前、覚えてなくて」
僕は長机に手を付き、頭を下げる。
それを見て、彼女はくすくす笑う。
「何？」
「いや、シオリの言うとおり、意外に優しいんだなって」
「……」
彼女の名前に思考が反れる。彼女が僕のことを第三者にどう話しているのか、少し気になった。
「やっぱサクライくん、あの奥手なシオリが惚れるわけだわ」

「……」

——彼女が、僕に惚れてる？　はは、僕もヤキが回ったな。こんなよく知らない娘にもからかわれるなんて。

「それ、誰かが言ってたの？」

僕は聞く。

すると彼女は少し顔をしかめたけど、やがて呆れたように笑った。

「なるほど、二人とも激ニブ同士の似た者同士なのね」

「……」

やっぱり変だ。今の僕は。

彼女が僕を好きでいてくれてる、と聞いて、割り切ろうとする気持ちに、何かを期待する思いが負けている。彼女のことが頭から離れない。

僕はその思いをじっと抱えるのが嫌で、席を立つ。カウンターに入って、ダンベル型の二つ凹みのある容器の片方に、冷蔵庫から出した牛乳を注ぎ、もう片方には、タッパーに別にとっておいた白米に、味噌汁の残りをかける。その容器を持って、外に出る。

食堂からさっきの裏庭に出て、左へ進むと、各部活の部室の並ぶ部室棟がある。部室の柱に括り付けてある、網付きの白熱灯を点ける。

明るくなった部室周り、一階のサッカー部の部室近くに、柱にリードを括り付けられたリュートが待っていた。

「悪いな、飯が遅れて……ほら」

僕は持っていた犬用の飯皿を、リュートの前に置く。リュートはすごい勢いで、粗末な飯にむしゃぶりついた。

その間に、僕はリュートのリードを外す。リュートは賢いから、リードがなくても勝手に走り回ったりはしないけど、外してしまうと僕の後をついてきてしまって、なかなか離れない。だから可哀相だけど、こういう処置を取る。

僕はしゃがみ込み、しばらくリュートが美味そうに飯を食うのを見守っていた。

「へぇ、その子が噂のワンちゃんね」
後ろからタカハシ・ミズキの声がした。
「シオリが話していたわ。この合宿中、いつもその子があなたと一緒にいるって」
「後ろから声をかけないでくれ。びっくりするだろ」
僕は彼女の方を振り返らずに言った。
「……」
沈黙。
今僕は完全に背中を取られている。居心地は悪いけど、振り返ったら負けたような気がして、そのまましゃがみ込んでいた。それでも勝手に身構える自分が少し馬鹿馬鹿しかった。このままブッスリやられたら死ぬかな、なんて考えながら。
「……」
やがてミズキの靴が、地面に擦れる音がした。近づいてくる。
僕の肩の上から、細い腕が伸びてきて、その腕は胸の前で、僕の体を包み込んだ。
「……」
ミズキの体が僕の背中に密着する。僕の肩甲骨あたりに彼女の胸が触っている。コートを着ているから、感触はよくわからないけれど、その胸のあたりから、急ピッチを打つ心臓の鼓動を感じた。体温と、僕の右耳近くにあるミズキの口元から、息遣いまでも感じる。
「……」
――ズクン。
あれ？　まただ、またこの胸の疼きが……
正直女の子に告白されたことは何度か会って、そのどさくさでこうやって抱きつかれたり、キスをされたりしたことはある。
その時は何も思わなかったのに……
何で今は、胸が疼くんだろう。この誰かのぬくもりを、こんなに心地よく感じるなんて……
「どうして……」

突然のことに気もそぞろなまま、それを聞きながら、ミズキの方を僕は振り向く――

「！」

その時、胸をハンマーで叩かれたような強い衝撃波を発して、痛いくらいに僕の心臓が鳴った。

「……」

視線の先――部室横の、生徒用の駐輪場。

その横に一人、華奢な手にコンビニの袋を持つ、マツオカ・シオリが立っていた。

Dilemma

「……」

こういうの、修羅場っていうのかな。

ドラマとかだとこういう時、彼女は手持ちの袋を落としたりするのかな。

僕もこんな時、違うとかなんとか、弁解じみたことをやるのかな。

そんなことを考えていた。

だけど……僕はこんな時、彼女に何と言ってやればいいんだ？

僕達はまだ、相手が誰と付き合ったって、どうこう言える関係じゃない。別に浮気現場を見られたなんてわけじゃない。

しかも今の僕は彼女に対して、御し難い欲望を抱きはじめていることを、僕は知っていた。

彼女の優しさに依存して、現実から逃避したい。救いを求めたい。

彼女を支配、制圧して思い通りにして、彼女までも壊してしまいそうなくらい、僕の深い闇……

こんな不細工な感情を抱く僕が、彼女に言う言葉なんて、何も持ち合わせていない。

だけど……

ここで何もしなければ、僕と彼女の関係は、つい最近までの、ろくに会話すらしなかったあの頃に逆戻りしてしまう気がして……

「……」

嫌だな、それだけは嫌だ。

彼女の声や言葉、触れなくても伝わるその温もりに、僕の心は何度も浮上した。いつだって先が見えない時に、まだはっきりとは見えないけど、おぼろげに『希望』を見せてくれた。

彼女は、本当の僕の姿を見てくれた。僕にありのままに生きていいと言ってくれた。生きてほしいと願ってくれた。

まだどこにも行けない僕と、同じような悩みを彼女も抱えていた。

彼女は僕を理解してくれようとしてくれた。
彼女が僕にとって今や、どんな存在になったかなんて、定義化も言語化もできない。できないけれど……
今、この瞬間、彼女と一瞬でも通じ合えた気持ちを消してしまいたくないと、切実に願う僕が、確かにここにいる。
もう、彼女を傷つけるのも、失うのも嫌だった。まだ形にはなっていないけど、彼女ともっと話したいことはいっぱいあるんだ。
カッコ悪いけど、今はあがかなくちゃいけない時なんだ。
「あの」
話すことなんか、何も頭には浮かんでこない。だけど僕はミズキに抱かれたまま、彼女を呼び止めた。
その言葉にシオリの体が少し反応した。１０メートルくらいの距離があったけれど、彼女は少しびっくりした反応から、喜怒哀楽、どの感情とも取れない曖昧な笑みを浮かべると、すごい勢いで踵を返して、その勢いで持っていた袋を落とすと、一目散に逆方向へ走り去ってしまった。
「待って！」
僕はミズキの腕の中から立ち上がる。その勢いで腕が解け、まだ後ろ姿の見えるシオリに向かって走りだしていた。
だけど、最初の一歩を踏み出した瞬間、遅れた左腕をはっしと掴まれた。バランスを崩した僕はがくりと前につんのめった。
後ろを見ると、ミズキがしゃがんだ態勢のまま、僕の腕を掴み、弱々しい目で見上げていた。
「くっ」
言葉にならない声が出た。そしてもう一度前を向いた時、シオリは左の校門方面に曲がり、見えなくなった。
「……」
体の力が抜け、腕を掴まれたまま、喉の手前に焼けるような感情が集まった。僕の稚拙なボキャブラリーでは、それが何なのか言葉にならない。頭と喉の二ヶ所でジレンマが起こっている感じだ。

僕の考えがまとまらないうちに、後ろのミズキがぽつりと言った。
「シオリ、泣いちゃったかもね。あの娘、多分初恋だから」
「――気付いていたのか？　彼女が見てたこと」
僕は後ろを振り返らず、うまく言葉がまとまらない中で、それだけ言った。
「うん」
すぐに彼女は返事をした。
その言葉を聞いて、怒りとも憤りとも取れない感情が僕を覆った。
左腕を掴む手を強引に振り払うと、僕はミズキの方を振り向いた。
「どういうつもりだ！　君は！」
荒い声が出てしまう。
さっきからずっと、この娘のペースだ。それに巻き込まれて、僕はいらない誤解をシオリにされた。人付き合いに慣れない僕は、こういう誰かのとばっちりを嫌う。
しかし、冷静な思考を鈍らせている僕とは対照的に、眼下のミズキは眉一つ動かさなかった。
5秒くらい、その大きい漆黒の瞳で、僕という人間を観察してるみたいだった。そして、言った。
「怒ってるの？」
「……」
――あれ。僕は何でこんなに頭沸かしてるんだろう。
さっき自分でそれに蹴りを付けてなかったか？　僕と彼女は恋人でも、それ以前に好き合っているわけでもないはずだと。
彼女は僕の何なのか、明確な解答はない。
――あれ？　不明瞭な関係とは、結局はその程度の関係ということなのか？　無関心と大して変わらないということだろうか。
仮に僕が彼女を好きだとして、その濃度はどのくらいだろう。僕という溶媒に、彼女は何%溶けているのか。それが何%溶けたら、それを恋というのだろう。もし飽和しているのであれば、その飽和分の彼女は僕にとっての何なのか、意味がわかっていない。そもそ

もそういう例えが正しいかさえわからない。
人間関係に、明確なロジックを形成できないくせに、彼女に誤解されたことをこんなに嫌がる……
――ここでもジレンマか。
「シオリのこと、好きなの？」
ミズキは聞いた。
「……」
恋愛感情……それは僕には必要のないものではなかったか。少なくとも僕は今でも、生きるために力を求めているし、人に頼ったり、従ったら負けのような感覚を強く抱いている。
大体恋愛感情を僕なんかが持っていてどうする。人の愛し方もろくに知らないじゃないか。彼女に何をしてやるべきかもわからない。しっかりしろ。彼女への依存心が強まる分、それは心が負けている証拠だ。
「別に。そんなわけないだろ」
僕はミズキに背を向け、そう言った。言うと同時に、頭に上る血が次第に引いていくのを感じた。
「……」
沈黙。
「デート、しようよ」
沈黙を破るミズキの声。
「は？」
僕は振り返る。ミズキはまだしゃがみ込んだままだ。
「明日、クリスマスイブだよ。サッカー部だって合宿翌日で休みでしょ？　サクライくん、シオリと付き合ってるわけじゃないし、好きでもないならいいじゃない」
「……」
さっきからどういうつもりだ？　この娘。さっき急に抱き締められて、何食わぬ顔でデートまで申し込んできた。
知り合ってすぐなのに……なんて、つまらない理屈を言う気もな

い。実際ユータは付き合った初日にホテルにだって行くんだし。

しかし、何て言うかな。つまらない理屈じゃこの娘は僕を見抜いてる分、納得しそうにない。でも、僕はこの娘と一緒にいたくなかった。さっきからずっと、後ろめたい。それが自分にとってなのか、マツオカ・シオリにとってなのか、僕にはわからないけれど。

俯いて僕は頭を掻く。

背中越しに、ミズキの可笑しそうな笑い声がした。僕は振り向く。

「何がそんな可笑しいの？」

「いや、何だか本当に人間臭い人だなぁ、って思って」

「え？」

「あなたのこと、みんながすごいって言うし、頭がよすぎて、何を考えているかわからない。いつも冷静に損得を考えて、飄々とした、曲者って感じだけど、本当はものすごく真っ直ぐで、正直者なのね。おまけに本心の隠し方が子供っぽいし。嘘や隠し事が、意外に下手なのね」

「……」

ミズキはそこで笑みを浮かべながら、腕を前にのばして立ち上がる。白いブーツに黒いロングコート。少し茶色い髪が腰の近くまで伸びて、細身の長身と調和している。

「退屈な男なんだよ。ご期待に添えなくて悪いけど」

「でもあのシオリがあなたに惹かれたのは、今まで自分より優れた頭にだと思ってた。でも違ったわ。多分あの娘は、あなたのその純粋なところ、子供みたいな無垢な目に惹かれたのね」

「……」

「私はいいと思うな。今時そういう純粋な男の人、貴重だし。ガキっぽいと、子供っぽいは微妙に違うわよ。サクライくんは、いい意味で子供っぽいわね」

「……」

僕が優しいとか、純粋だとか、子供っぽいとか、そんなこと、今はどうでもいい。

けど、確かにさっきマツオカ・シオリは僕に、ユータ達といる時の目がいいと言っていた。私にもその目を向けてほしいと……

もし、シオリがミズキと同じ視点で僕を見ていたとしたら……

考えが、頬に触れたものにより断ち切れる。

ミズキは立ち尽くす僕の両頬に掌を当てて、僕に少し顔を寄せた。

「な……」

「でも、そういうの見ちゃうと、私もあなたに惹かれちゃうな」

「からかってるのか？」

僕は体が動かない。これが男なら強引に振り払ってもいいが、女性に手を上げるのはためらわれたからだ。いまだかつてない状況に、正解がわからないまま立ち尽くすしかなかった。

するとミズキは、何かすべてを受け入れたような、柔らかな笑みを見せた。まるでそれは聖女のような笑みだった。

「……」

ミズキは僕の顔を抱え、首を傾け、僕の目をその笑みのまま、覗き込んでいる。

「あなたの目、今は少し怯えたような色があるけど、とても澄んでいるわ。そしていつも、悲しそうな色がある」

「――人相占いか？　そういうのを僕は信じないよ」

僕は顔を押さえられたまま、言った。

「そうかな？」

ミズキは言う。そしてもう一度笑顔を見せると、頬に置いていた掌を、耳の後ろ――僕の後頭部で組み、僕の頭を抱き寄せた。彼女の額に僕の額が触れる。零距離になって、彼女の香水の香りまで強くなった。

「……」

「女はね、影を持つ男がボロボロになった時、支えてあげられることに喜びを感じる生き物なのよ」

「……」

今にも唇が触れそうな距離だけど、もう近過ぎてミズキの顔はよくわからない。

「あなたは？　寂しい？」

「……」

ズクン。

まるでミズキの体温や、その香りに惑わされるように、またシオリに抱いた、性的欲求に襲われた。

この娘は、僕の止まり木になってくれるというのか。

なら、彼女を少し利用しても……

そう思ったら、僕の脳は、急速に退廃的な願望に満たされていった。

もう疲れた。とめどなく続く、この毎日に。耐えることのない悩み、苦しみに。

もう、堕ちてしまえば、思考は止まるだろうか――一度、落ちる事を受け入れてしまえばーー

「……ああ。寂しい……」

気が付いたら、それを口に出していた。

……ズクン、ズクン、ズクン。

その一言を口にして、あの胸の疼きが体さえ支配する。

初めて女の体を本能的に求めた。母親にも抱き締められたことのない僕は、初めて味わう女性の温もりに、全てを狂わされていた。

５センチも離れていない、ミズキのふくよかな唇を奪ってやろう。

どちらからとなく、二人の唇が近付く……

そこで人の声がした。

我に返り、僕はミズキの腕から外れ、声の方向を向く。

コンビニに行ったユータ達が帰ってきたのだ。２０人以上の大所帯が喋りながら歩いてくる。やがて姿が見えるまでになる。

「……」

呼吸は荒く、汗を掻いていた。

「邪魔が入っちゃったね。続きは明日……ね？」

そう言い残し、背中越しに、ミズキが立ち去るのがわかった。

「……」

寂しさの暴走を止められなかった。産まれて初めての人の温もり

に惑わされて……

ユータ達が来なかったら、僕は……

最低だ。こんなのが本当の僕なんて……僕は心の中に、いつの間にあんな怪物を作り出していたんだろう。

こんなにも醜いのか、僕の本性は。破滅的で、他人にぶつけることでしか、自分の感情を整理できず、慰みに女を求める。

何でこんなことに――

結果、本当の自分になることを望んでくれた、マツオカ・シオリをまた傷つけた。

何で……何で僕はいつもこんな……

はっと思い立つ。

「リュート？」

さっきからずっと、リュートの姿が見えないことに気付く。周りを見回してもいない。僕が出した餌とミルクは全て平らげられていた。短時間の間に消えてしまった。

「リュート……」

体からがっくりと力が抜ける。

だけど、これでよかったのかもしれない。あいつは賢いから、飼い主のこんな姿、見たらきっと軽蔑するだろう。あいつには、僕のこんな姿、見せたくなかったから。

「ケースケ」

僕を呼ぶ、ジュンイチの声がした。

ユータ、ジュンイチを先頭に、僕の方に集団がぞろぞろ近づく。

「こんなところで何してるんだ？」

ジュンイチが聞いた。

「あぁ、リュートに餌をな」

「ふぅん、ところで彼は？」

「あぁ――リードを外したら、どこかに行ってしまって……」

「そいつは心配だな」

「私達も探そうか？」

後ろにいた集団の中の女の子が言った。
「――いや、いい。あいつは賢いから。一人でも大丈夫。家くらいなら一人で帰れるよ」
「へぇ……」
ジュンイチが皮肉めいて笑う。
「この合宿で初めてお目にかかったが、ケースケがそこまで信頼する相手なんて、滅多にお目にはかかれないぜ」
「ほんとほんと」
ユータが言う。
「あのワンコの方が俺達より頭がいいと思ってるみたいだ」
「――今日赤点合宿終えた奴の台詞か？」
「ぐっ、むぅ……」
ユータの言葉が尻切れになると、後ろにいた吹奏楽部の連中は大笑いし、サッカー部の連中は苦笑いするのみだった。
「……」
リュートのことは大丈夫。心配ない。
だけど、マツオカ・シオリは……
しかし、彼女も、ユータ達も、同じコンビニの袋を持っていた。
何故彼女だけ単独行動をしたんだ？
そうだ、彼女は確か、袋を落としていった。
「なぁ、さっきそこに、袋が落ちてなかったか？」
「あぁ、これか？」
集団の中の、サッカー部の一人がそれを拾っていた。僕にそれを差し出す。
中を見ると、そこには鮭とシーチキンのおにぎりに、お茶のペットボトル、それにムースタイプのポッキー、プリンが入っていた。
「……」
……何だこれ。カレーを食べたはずなのに、彼女はこれを食べるつもりだったのか？　あの線の細い子が、そんなに飯を食うようには思えないが。

「さぁ、お前の分もあるから、食堂でぱーっとやり直そうぜ」
ジュンイチに肩を叩かれ、僕も食堂に連れていかれる。

Daily

食堂には、マツオカ・シオリも、タカハシ・ミズキもいなかった。ミズキはともかく、シオリはどこに行ったのだろう。もう家に帰ったのか。

コップにコーラやジュースを注ぎ、ポテトチップスやポップコーンなんかをつまみながら、もう一度無礼講が始まった。

僕は乾杯だけ参加し、また一人カウンターの中へ。食堂のでかいシンクに温水を蓄め、皆の食べたカレーの皿をその中に放り込んだ。ジャンパーを脱ぎ、僕は腕まくりをする。

少し休んだから、もう握力が戻りかけている。僕は温水の中に洗剤を撒く。シンクの中に泡が発ちはじめる。

「あぁ……腹が減ったな」

腹がグーッと鳴った。カレーを作っているうちは考えていなかったが、よく考えたら、僕は昨日の夜から一日半、味見以外で何も食べていなかったんだ。

「サクライくん」

声がした方向を向くと、僕とマツオカ・シオリ、共通のクラスメイトの吹奏楽部員が立っていた。この子の顔は覚えてる。名前はよく覚えてないが。

僕の顔を見ると、彼女は口元を押さえて笑った。

「サクライくん、顔が泡だらけじゃない。鼻の頭にも……」

僕は指で鼻の頭を拭うと指先に少し泡がついた。

「子供みたい」

「……」

彼女は、口元から手を外す。

「サクライくん、シオリに会わなかった？」
「……」
何て言おう。まさか別の女の子にハグされたのを見られました、なんて説明するわけにはいくまい。
「――いや、見てないけど」
ミズキは僕のことを、隠し事が下手だと言った。だけど今はその下手糞な嘘にすがるしかなかった。
「おかしいなぁ。あの娘にハッパかけたのに……頑張れなかったのかな」彼女は首をかしげる。
「え？」
「あの娘、あなたが朝から何も食べてなかったみたいだったから、心配してたのよ。そう言って、またあなたのことで悩んでたから、私達みんなであの娘にハッパかけて、あの娘に食事を買って、届けるように言ったんだけど……」
「……」
あれ？　じゃああの食べ物はまさか、彼女が僕のために？　そのために一人で戻ってきたのか？
確かにあの、奥手を絵に書いたような少女だ。それだけのことでも、彼女にとってはかなり悩んだことだったんだろう。その上、あんなところを見せられたんじゃ、逃げ出しても無理はない……
ミズキの言うとおり、また泣かせたかも。
――くそっ。なんてこと……
「ケースケ」
男の声がして、思考が引き戻される。
今まで話していた女の子の後ろに、ユータが立っていた。
「あ……邪魔かな？　ごめん。私は、それが聞きたかっただけだから」
そう言って、女の子は去っていく。
「別に大した要件じゃないのに……」

ユータは頭をかく。
「洗い物なんか、後でみんな手伝うからよ。ほら」
そう言って、ユータはオレンジジュースの入った紙コップを僕に差し出した。僕はそれを受け取る。
ユータは持っていたコップのジュースに口を付け、キッチンの作業台に寄り掛かった。
「お前にしては、今日、頑張ったじゃないか。これがお前の、変わろうとした結果か？」
「――さぁ、どうかな」
僕もユータの隣に寄り掛かる。
「お前に言われてやってみたが結局、人はそう簡単には変われないって認識しただけかも知れない」
こうした会を開いたのはいいが、人の輪に入り込むのには、まだ時間がかかりそうだ。
基本的に一人に慣れ過ぎているし、人に頼らなくても、大抵のことは自分で出来る。だから人とどうやって接したらいいか、いざやってみると何も知らないのだということがわかっただけだ。
「……」
あれ？　じゃあ僕って、どうしてユータ達とはいつもこうして一緒にいられるのだろうか。シオリがいうように、あの二人の前でだけ、僕はどこか違う一面があるのだろうか。自分ではまるで自覚がないけれど。
「少なくとも、俺はお前やジュンのおかげで、少し変わることが出来た。お前だってこれからさ」
ユータは言った。
「誰かのために気張るのも、悪くないだろ？」
「どうかな……まだよくわからない」
僕がそう言うと、ユータは僕の方を見て、にこりと笑った。
「あぁ、そうだ。これ」
ユータは左手に持つムースタイプのポッキーを差し出した。

「金が無いからって、甘いものなんかめったに食わないお前らしくないな」
僕はポッキーを受け取る。
「……」
本当はこれを、マツオカ・シオリにあげようと思っていたのだ。
彼女は今日、僕の話を聞いてくれたから、そのお礼にと思って。
彼女に礼を言って、今日一日、少しは前に進めたと思いながら、いい気分で一気に寝てしまう予定だった。
なのに……僕達は後一歩、分かり合うことが出来ずにすれ違い続ける。また今日も、同じ過ちを繰り返してしまった。
そして、今日垣間見た、僕の本性は……寂しさや怒り、憎しみが暴走して生まれた、あれがある限り……
僕はこれからも彼女を傷つけてしまうのだろうか。僕は変わることが出来るのだろうか。
僕はこれから、どこへ向かえばいいのだろう。

家に帰ったのは、１０時を過ぎていた。一週間ぶりの家の門は、錆付いた蝶番の
音が実に不快だった。
――くそっ。どうしてこんなところにしか、僕は居場所が無いんだ。
鍵が開いてなかったから、リュートがいるとしたら玄関先にいて、僕を待っていると思ったが、リュートはいなかった。もう帰っているかもと思ったから、皿
洗いを終えて、皆より先に帰って来たのだが。
玄関で靴を脱ぐと、肩に持つ大きな鞄がずしりと重くなった。少しでもそれを軽くしたくて、スパイクを玄関横に置き、すぐに玄関から左の風呂場に行く。
風呂場のノブを回すと、鍵が掛かっていた。

「……」

風呂のノブからゆっくり手を離すと、内側から勢い良くドアが開いた。

バスタオルを撒き、髪の毛の濡れそぼる妹が立っていた。

「……」

アニメとかでよくある、ドキドキな展開なんて感情は微塵も沸かない。ただ、こんなのに会ってしまったと思うだけだ。

妹はあからさまに嫌な顔をした。まるで汚物でも見るような目で僕を見ている。

「げぇーっ、帰ってきたの？　せっかくギャーギャーうるさいのがいなくて、気持ち良くやってたのに……」

「……」

それだけ言うと、妹は隣を抜け、階段を上っていく。

「……」

いつも思う。なぜあんな愚物に、僕は主導権を握られっぱなしなのか。

あいつにとりあえず取り柄があるとすれば、きっと暴力を回避する才能だろう。

口でわかるような奴じゃないから、暴力に訴えれば黙らせるのは簡単だけど、それをしたら自分は、今よりももっと惨めになることが予想できる。その僕の思惑を見抜いているんだろう。一方的に挑発をするんだけど、正当防衛の口実を与えないように、自分から手を出してくることは決してないんだ。

だから、あいつのしていることに対しては、危害がない分、黙殺しても取るに足らない。

ただ、頭の出来に大きな差がある以上、妹に最終的に暴力を振るって、自分の品位を下げたくない、と言う僕の思惑も、妹は、自分が優位に立っていると思っているのだろう。そういう勘違い、思い上がりだけは何とか修正してやりたい。

僕は風呂場の脱衣所にある洗濯機に、合宿一週間分の洗濯物を、

鞄から出してはそのまま放り込んでいく。それだけでずいぶん鞄が軽くなったけれど、体感的なだけで、心に付いた枷は取れやしない。

階段を登る。リビングのドアを開けると、パジャマを着た母親が一人、テレビを見ているところだった。バラエティ番組の、いつも同じような笑い声が聞こえる。

僕の姿を見ると、母親も妹と同じ、明らかな嫌悪感を示した。僕もリビング入り口で立ち止まり、母親を睨む。

すると母親はぷっと吹き出して、髪をかき上げる。

「あーぁ、折角ゆっくりしてたのに、あんたの顔見たらしらけちゃった。寝よ寝よ」

そう言ってテレビを消し、リビングの奥の自分の部屋へと帰っていく。

「……」

母親も嫁に来る前はいい子だった、なんて、母方の親族が小さい頃言ってたっけ。僕を受験にはめ込んで、教育ママになって、お前が成績を上げ続けるから、親として、その優越感に力に取り付かれた、とも言われたっけ。

でも実際、歪んだらそんなの関係ない。事情はどうあれ、それはその人のせいだ。

僕も家族のせいで歪んだなんて、言い訳できるうちはいいけど、実際は自分の責任だ。

僕も母親のように、いつか取り返しの付かない歪み方をするのだろうか。そうしたら、きっとユータや、マツオカ・シオリとも、一緒にはいられなくなる……

その考えが浮かんだ時、ひとつの疑問が解けた。

――そうか。僕はそうなって、一人になることの寂しさ、恐ろしさを味わいたくないって、深層心理でわかっていたのか。

その不安を、ずっと今まで隠していたんだ。いや、というより、いつの間にかあいつらと長い付き合いになって、一人でいる時間が減ったから、僕が弱くなっているのかもしれない。

だから、僕の止まり木になってくれる、と言った、タカハシ・ミズキの言葉に、僕の心はあれだけ動かされたのか……

そんな事を考えるのが嫌になって、とりあえず僕は部屋に戻って荷物を置き、シャワーを浴びた。冬のシャワーはすぐに体が冷えるけれど、寒さにばかり気が行って、余計なことを考えなくていいので、今は都合がよかった。

シャワーから出て、一週間ぶりの部屋に戻る。

たまに久々に家に戻ると、家族に部屋を荒らされたり、物がなくなっていたりするんだけど、今日はそんなでもない。だけど僕のパソコンを勝手に使った上に、ご丁寧にそこで飲み食いまでしたらしい。キーボードの隙間にスナック菓子のカスが入り込んでいるし、ゴミ箱を漁った形跡さえある。以前それで給与明細を見られたことがあるから、もう給与明細は見たらすぐに学校の図書室の簡易シュレッダーにかけている。

僕はスウェットを下にだけ着て、上半身裸でベッドに倒れこむ。部屋にはほとんど寝る時にしかいないから、もはやこれが僕のルーティーンなのだ。部屋にいるとそれが一番しっくり来る。

「……」

結局帰ってくる。この気分の悪い日常に。

「……」

疲れた。

さすがに勉強する側ではないにしても、一週間の合宿は骨だ。勉強だけじゃなく、全国大会に行くから、練習のきつさも尋常じゃなかったし。何より教える側は、教えられる側みたいに昼寝もできやしない。

それに――さっきから腹も減っている。

僕はふと思い出して、ベッドから起き上がり、合宿の鞄を漁って白いビニール袋を取り出した。中から鮭のおにぎりを取り出す。

「……」

おにぎりを見て、僕は久しぶりに自分の部屋で少し笑った。

彼女、ご丁寧にポッキーだけじゃなく、プリンまで付けて、僕の差し入れを持ってきてくれた。

僕が言うことじゃないが、律儀と言うか、しっかり者と言うか……

そんな彼女のことを、心のどこかで、暖かな人だ、と思う。

僕も何だか、穏やかな気持ちになってしまう。

一緒にいるうちに、彼女に優しくしたい、彼女の不安もひっくるめて、僕が力になってやりたい。彼女の微笑を、いつも見ていたい。

そんな馬鹿な考えが、心の奥底のどこかにある。

「――ありがたく、食べさせてもらうか」

ベッドに腰掛け、久しぶりに手を合わせてからおにぎりにかぶりつく。

「――いつもの味だな」

さぞ美味いと思ったけれど、よく考えれば毎日のようにコンビニ弁当を食べているんだ。別にものめずらしいものじゃない。いつもの味がした。

「……」

だけど、優しい味がした。そんな気がする。そう思うと、胸の中がじんわりと暖かくなる。乾いてひび割れた大地に、雨水がしみこむように、心が精気を取り戻す。

袋からプリンとプラスチックのスプーンを取り出して、口に運ぶ。プリンなんて数年振りに食べるほど、普段甘いものを食べないので、とても甘く感じる。だけど体が疲れを感じているので、心地よい甘さだった。

「……」

僕は、今の彼女に対する感情が『愛情』だとか、そういうことはわからない。

でも、僕は――

今まで押し殺して、心の奥底に溜め込んでいた、僕の負の感情――狂気の化身が、僕の中に確かに存在している。

タカハシ・ミズキに抱きしめられた時、それに確かに気付いた。

この気持ちが、彼女を身勝手な願いで、あっという間に食いつくし、ボロボロにしてしまうような危険性も、僕はすぐわかった。

ミズキに、寂しい？　と聞かれ、その思いが顔を出してしまった。だれでもいいから、今はそばにいてほしいと。自分が本当は、寂しさを抱えていたことにさえ、今まで気がついてもいなかったのに、とてつもない不安や孤独から、一瞬でも誰かと繋がっていたいと、そう、願ってしまった。

そして僕は、残酷なことに、シオリにこの感情をぶつける事をためらい、それを誰かにぶつけることで、引け目なくシオリと向き合おうと考えてしまった。そのために、丁度寄ってきたミズキを利用してしまおうと――この感情の掃き溜めにしてしまおうと、そんな身勝手なことを考えてしまった。

ざまあない。あの律儀な娘に応えてあげたくて、一途でいようと思えば思うほど、ミズキの一言を魅力的に感じてしまう自分がいた。

これはチャンスなんじゃないのか？　僕がこの心のしこりを取り払う上での。

しかし、彼女は僕に誠意を持って接してくれた。いくら理由があろうと、彼女には礼を尽くしたい。大体、今日だってミズキに抱きしめられたのを見られて、良心が痛んだじゃないか。その上別の女の子と、そんな考えが堂々巡りしていた。

「……」

考えが止まることなく、シオリへの信念と、ミズキへの期待の間で揺れ動く。体と頭の疲れが、思考を止めたがる。

僕は部屋の専用冷蔵庫から、フォアローゼスを取り出す。酒屋の息子のジュンイチが、僕に横流ししてくれたものだ。たまにこういう思考を止めたい時に効果的だから、一気に寝たい時、僕はたまにこの手を使う。

僕は半分以上入っているフォアローゼスの瓶を持ち、リビングのキッチンへ向かう。もう12時近いから、家族は皆寝静まって誰もおらず、電気も点いていない。ロックグラスを探して取り出し、僕はフォアローゼスに水道で直接水を入れて、水割りにする。

リビングの椅子に座って、人差し指を突っ込んでかき回し、軽く口を付ける。

不味い。

――当たり前か。適当に割っただけだから。

ただ、数回口を付けただけで、疲れに呼応し、すぐに頭がくらくらしてくる。これならすぐに眠れそうだ。

その時、我が家の玄関の錆びた蝶番の軋む音が、静寂の中、かすかに聞こえた。

――来る。

リビングに電気が点いているのをふしんがったのか、階段を上る音の後、すぐに扉が開くと、赤ら顔をした親父が入ってきた。僕を血走った目で見つめる。

酔いがさめて、体が一気に緊張するのがわかった。僕はグラスを置いて、立ち上がる。まるで野良猫のように腰を落として身構える。

親父はテーブルに置かれているフォアローゼスに、ロックグラスに目をやると、酷薄に笑った。まるで馬鹿にするように。
「フン、お前みたいな穀潰しが、一丁前に酒とはな。いいご身分だ」
「……」
思い知る。酒で現実から逃げたとしても、こうしてまた引き戻される。だから、現実を放棄することに、大した意味はないのだと。
だけど――理屈よりも本能が、それでもいいから、何かを変えたいと叫ぶ。一時的でもいい、やり方が間違っていてもいい。ただ、何か安らぎを見出さないと、もう心を自分で支え続けることも出来ない。
プロセスよりも結果――この最悪な状態を変えられれば、その方程式は以下に滅茶苦茶でも、些末な問題だと。
「どいつもこいつも、死んだ魚みたいな目しやがって！」
自分の力で今の状況を変えられるか。最後にそれを知りたくて、僕は夜中だけど親父に怒鳴りつけていた。
「お前等、人の顔を見ると、そんなことしか言えないのか！」
「あぁ？」
親父が管を巻く。
その3秒後、親父のかかと蹴りが僕の腹に入り、僕は後ろのドアに体を強く叩きつけられると、そのまま胸倉をつかまれ、僕の爪先が宙に浮いた。
「……」
僕はもう、親父から目を背けるのみ、歯を食いしばって、筋肉に力を入れ、防御するのみだった。条件反射の震えが、もう始まっている。体がもう、動かなかった。
上段から、親父の拳が僕の腹に入る。傷を見られて変な噂を立てられないように、親父はまず本気の一撃は顔には入れない。僕の体は親父の腕に被さるようにぐったりとした。僕は咳き込む。
親父の左手、僕をつかむ腕が、僕をゴミのように投げ捨てる。僕はそのままフローリングにうつぶせになると、親父は僕の顔を踏み

つけた。
「俺は弱いものいじめはしたくねぇんだ。弱ぇ奴は黙って俺の言うことを聞いてりゃいいのによ」
へへへ、と笑い、親父は元来た道に戻り、自分の部屋に戻っていく。
「……」
そんなに憎いか？　この家のあり方に異を唱え、いち早くこの家に反発した僕が、そんなに憎いか？
拳を握り締め、立ち上がる。最大限の防御を取ったから、まともに入った腹への拳も、少しじんじんするだけ。一発目の蹴りも、後ろに飛んで衝撃を緩和したから、大した痛みはない。体勢を整えておいてよかった。
「……」
――殴られて軽傷で済んでよかった、という考えが、もう間違っている。
人並みの幸せ――いつか僕も、皆の前で笑えるように生きてみたい。
そう願うのは、間違っているのか？
僕は殴られるために生きているわけでも、頑張っているわけでもない。
親父に殴られる度に、自分が一体何のために生きているのか迷う。こうしてはいつくばって、自分には手を差し伸べる人なんて誰もいない、孤独なのだと実感する。
そうだ――僕は一人だ。
そして、一人は怖い。こうして殴られて、誰も手を差し伸べてくれないのが辛い。
そんなのは、もう終わりにしたい。
誰かに、こうして這いつくばらされる僕に、手を差し伸べて欲しかった。誰でもいいから、今だけでも、僕のこの心を支えて欲しいと。

利用という、利己的で残酷な手段を使うことに、ためらいを感じてはいても、結局救いを求める切実な気持ちに負けた。

僕はこの時、タカハシ・ミズキにもう一度会うことを決心したんだ。

Poison

目が覚めた時には、８時半を過ぎていた。部屋は寒いけど、カーテンの隙間から外を見ると、青空が広がっていた。

僕がこんな時間に起きるのは珍しい。昨日まで合宿で５時起床という、規則正しい生活を送っていたので、アルバイトで夜型にしている僕のリズムはかなり狂っていた。

「……」

――しまった、バイトをしていないから、合宿が終わったら、家に飯が無いんだ。

別に今は平気だけど、長く続くと死活問題になってくる。早くバイトに復帰しないと。

洗面所に行き、染みるように冷たい水で顔を洗い、歯を磨く。普段はあまり使わないワックスを髪に付ける。

部屋に戻り、昨日合宿で使った鞄から、メモ用紙大の掛線入りのピンクの便箋に、女性らしい丸文字で、こう書いてあった。

『明日１０時に○○公園で待ってます。タカハシ・ミズキ』

この手紙は昨日僕が学校から帰る時、僕の下駄箱に入っていたものだ。僕が携帯を持っていないのは割と知られているから、こんな伝達方法をとるしかない。

「……」

情けないことに、まだ僕はミズキの下に行くのを迷っていた。

彼女に会って、時の流れに身を任せていれば、もしかしたら僕の心のしこりを取り除いてくれるかもしれない、なんて。

この考えは間違っているのか……

誰かに自分を助けてほしいなんて、最近まで思ったことが無かったから、どうやって人に頼っていいかわからない。心が重いのは、今日、僕が愚を演じることが、何となく想定されるからかな。それとも、はじめからミズキを利用する気で会うことがうしろめたいの

か。

「……」

馬鹿馬鹿しい。昨日、自分を優しい人だとか言われたから、良心が痛んでいるのか。

もう、関係ないじゃないか。このままじゃ僕は先へは進めない。もう長い間、僕はこうして、この場から抜け出せずにいる。

考えたら、こうして誰も傷つけずにきたことで、自分が傷ついてきたのかもしれない。人が僕を傷つけるのに、何故僕は人を傷つけるのが嫌だと思う？

変わるために毒を飲まなくちゃ。僕に今必要なのは、傷つくことを恐れず、毒を飲む覚悟。

指定の公園は、家から自転車で２０分はかかるほどの町外れの国立公園だ。まだ9時前だけど、どこかで朝飯を食べていこうと思い、僕はダッフルコートを羽織り、もらい物のブーツを履く。

リビングに母親がいたけれど、スルーして玄関に降りる。

「……」

リュート――遂に一日帰ってこなかった。いつも玄関に降りると、僕を出迎えてくれるのに。

だけど、あいつが家からいなくなったのに、この家は何も変わらない。悲しむのは僕だけだ。

あいつがいなくなったら、僕のことを心配する奴はもういない。だから、もう自分がどうなっても構わない。どこまで堕ちていってもいい、いつ死んでもいい。

手袋とマフラーをして、冬の街に自転車を発進させる。

１週間、外界から隔離されていたから、今になって今日がクリスマスなのだと実感する。繁華街を外れていくのに、今は一般家庭でも家をライトアップしている。そんな家を何件か見ることができた。

別に僕はクリスマスに思い出があるわけではない。家ではツリーも飾ったことはないし、プレゼントももらったことが無い。

だから、いまだにクリスマスという日は、隣家の騒音のような感

覚を味わう。自分には場違いで、何を求めればいいかわからない。どんな日なのかも正確にはよくわかっていない。

僕はコンビニでカロリーメイトと缶コーヒーの朝食を買い、店の前で腹におさめ、また公園へ向かう。

公園は、川沿いにだだっ広い芝生が広がって、その真ん中をマラソン、サイクリング用に一本の道が通っている。金網で区画されたテニスコートや、ラグビー場があり、広い芝生の向こうには、多分２００メートルは離れているだろう。野球用のバックネットが見える。土手が舗装され、川原沿いはごろごろした石が残る、自然のままの姿を残している。

家族連れがフリスビーをしたり、大学生の集団がテニスをしたり、女の人まで混ざる草野球チームがキャッチボールをしたり、おじさんが長靴を履いて、釣り竿をキャストしている。

その中で、ベンチで愛を語らうカップルがいたりする。これだけ色んな人がいると、クリスマスってのがどんな日なのかわからなくなりそうだ。

僕は木枯らしに吹かれ、もう黄色くなった芝生に腰を下ろす。愛用のＧショックに目を通すと、９時４７分だった。

早く着きすぎてしまった。僕は芝生にそのまま上半身を倒す。

「……」

普段屋上で昼寝している時も、空を仰いで雲が流れていくのを見ている。屋上よりも空が遠ざかったような感じだ。校舎の高さは雲が浮かんでいる高さの百分の一も近づいていないだろうに。

青臭い臭いが鼻孔を突く。子供達の笑い声……雲はさっきから同じスピードで、僕の視界の左から右へ……

その単調なリズムを眺めていると、何だか瞼が重くなってくる……

僕は目を閉じる。

「……」

しばらくそうしていたけれど、目を開け、上半身を起こして後頭部を掻く。

「やっと起きた！」
後ろから声がしたので振り返る。蜂蜜色の長い髪の細身の女性、タカハシ・ミズキがいた。
「――やっと？」
僕は目を擦りながら、時計に目をやる。
時計は１１時１３分を示していた。
「あっ……あれ？」
一気に寝呆けた思考がクリアになる。いつの間にか僕は眠ってしまったのか。
「――いつから来てたの？」
僕は重くなった頭を軽く振ってみてから聞く。
「待ち合わせは１０時でしょ？」
ミズキは僕の横にしゃがみ込む。
「……」
ということは、彼女は一時間以上、僕が起きるのを待っていたのか？
「起こしてくれてよかったのに……」
僕が言うと、ミズキはいたずらっぽく僕の顔を覗き込む。
「寝顔、可愛かったから」
「……」
何なんだ一体。この娘は僕の事を、昨日から子供みたいとか純粋だとか……
「でも本当によく寝てたね。鼻を塞いでもまだ寝てたもん」
ミズキは鼻をつまむ仕草をしながらくすくす笑う。
「そんなことしてたのか？」
僕は自分の鼻を触る。
それを見てまたミズキは笑う。
「どこまで可愛い生き物なの？　面白過ぎ！」
「え？　今の嘘だったの？」
「本当はキスした、って言ったらどうする？」

「……」

やりにくい……でもそれは想定して僕はここにいるのだし、実際僕は寝ていたのだから、実際キスされていても気付いていなかったかも知れない。

「……」

ミズキにキスされたことを想像して、マツオカ・シオリの顔が思い浮かんだ。

どうしてこうなっちゃったのかな。シオリ――彼女に今触れる自信がなくて。

じゃあミズキなら傷ついても構わないなんて、僕は考えていたのかな。だから僕は今ここにいるんだろう。

これが毒の味か……僕は早くも自己嫌悪に陥った。

「でも良かった。本当は私でも、あなたが来ないんじゃないかと思って、不安がなかったわけじゃないから」

「……」

そう言うことを言わないでくれ。僕だって、なぜ君の下に来たのか、今でもよくわかってないんだ。

僕は顔を上げて、ミズキの姿を一瞥する。

こういうのを、妖艶というのだろうか。自分と同い年とは思えないほど色っぽい。僕と同じくらいの背丈にセーター、黒のロングコートに、冬には短すぎるんじゃないかというほどのスカート、ブーツの高さが控えめなのは、僕の身長を考慮されたのかな。とにかく大人びている。そう見せるように、多少の無理はしているのかもしれないけれど。

何でこんな娘が、クリスマスに彼氏も放り出して、僕と一緒にいるなんて言ったんだろう。

「君こそ、彼氏はいいの？」

僕はその疑問をぶつけてみた。

「僕は去年のクリスマスも、バイトしてからジュンイチと、家で鍋とかやってたんだ。こんな日に、君が望むものなんてあげられないよ」

僕は去年のクリスマスを思い出していた。僕はコンビニのバイトをやって、廃棄処分の食べ物を持って、自転車で３０分かけて、隣の狭山市にあるジュンイチの家に行った。酒を飲んで二人で鍋をつついて、ジュンイチは彼女と一緒にいるだろうユータに対する愚痴を、朝までぶうぶう言っていた。僕はそれをただ聞いて、ジュンイチを寝かしつけて、僕もジュンイチの横で寝た。そんな死んだ方がマシなクリスマスだったんだ。

こんな娘を、どうやってデートにエスコートしろって言うんだ？

しかし、僕がそう言うと、ミズキはあっけらかんと言った。
「私にとっては、今日は結構スペシャルな日なんだけどなぁ。クリスマスにあなたが一緒にいるなんて、学校の娘が聞いたらきっとみんなうらやましがるわ。だから目に付かないように、待ち合わせにこんな遠くの公園を指定したんだから」
なるほど、ずっとこんな駅や繁華街からも遠い場所を指定したことを、疑問に思っていたんだけど、そういう事情か。確かに僕が女子と一緒に歩いているなんて、今までないし、僕だって誰かに見られたくもない。そういう意味では都合がよかった。
「サクライくん、自転車でしょ？　後ろに乗せてよ」
「は？」
「いいでしょ？　私今日は、そういう学生っぽいデートがしたいの」
「……」
学生っぽいって……十分今だって学生じゃないか。
まあいいか、要望を出してくれるならありがたい。僕はデートのやり方も、人を喜ばせる方法も知らないのだから。

――公園のサイクリングコースを一周しただけだけど、彼女は妙にはしゃいでいた。こんな大人っぽい子が、こんなことでこういうリアクションを取るなんて思っていなかったから、意外だ。確かにサイクリングコースは、並木道もあったり、坂道もあったり、噴水があったり、綺麗な景色はいくつかあった。僕は後輪の軸に足を引っ掛けて、僕の肩に手を乗せるミズキを落とさないように気をつけていて、それどころではなかったけれど。
「あー面白かったぁ」
僕はミズキをおろした後、彼女にホットココアを買って持ってきた。それを飲みながら、ミズキはもうご機嫌だった。
「ひとつ、希望を出してもいいかな？」
「え？」

「サクライくんって、学校では天才ってことになってるけど、すごいところって、苦手なものが何もないってことだと思うの」
「……」
「だから、あなたと一緒に、色々なことをやりたいな。お金はかけないでいいから」
「……」
——それで僕が自転車にミズキを乗せてやってきたのは、市内のスケートリンクだ。スケートを選んだのは、ミズキが僕のやったことのないものをやりたいと言い、スケートは僕が一度もやったことがなかったからだ。
スケートリンクはほとんど客がいなかった。そりゃこんな日にスケートに男だけじゃ来ないし、デートならもっとしゃれたスケート場がある。わざわざこんな古びたリンクに来る理由がない。
靴を借りて、僕は年季の入った紐締め式の靴を履く。ミズキは小さな頃からよくやっていたらしいから、すぐに慣れてリンクに行ってしまったが、僕は靴を履いてからも、ブレードで歩くのがこんなに歩きにくいとは思わなかったから、随分もたもたした。
「うわっ！」
しかも、ミズキに手を引かれ、リンクに一歩入ると、ここまで滑るものなのか、僕は派手にしりもちをついて転んだ。かなり痛い。
「あはははは！」
僕が転んだのを見て、ミズキは嬉しそうに笑った。ここまでは自分のシナリオ通りなのだろう。僕はあまりに無様で、心の中で今日の厄日振りを呪っていた。
「大丈夫？」
ミズキは僕に手を伸ばす。
「くそ」
僕はその手を取らず、リンク脇のバーを掴んで立ち上がる。
「意地を張るなぁ」
ミズキの呆れる声がした。

そしてそのバーから手を離し、少しだけ足を浮かせずに前に体を倒すと、ゆっくりと体が前に進んだ。
「よし。摩擦の感じを覚えた。ちょっと待っていてくれないかな」
僕はミズキを待たせて、ひとりで先に行く。もう僕は摩擦を体で覚えたので、次には一度も転ばずに一周出来るようになっていた。
1分でミズキの下へ帰ると、ミズキは少ししかめ面をした。
「うーん、はじめはサクライくん、これはかなり苦戦する様が見れると思ったんだけどなぁ」
しかし、苦戦するなんてものじゃなかった。
30分もすれば、僕は後ろ向きでも自由に滑れるようになったし、1時間でジャンプして転ばずに着地までマスターしていた。
僕の無様な姿を見ることはないとわかって、そこまですると僕達はリンク外へ引き上げていた。慣れない靴でジャンプまでして、何度も衝撃を受けた僕は、足がちょっと痛かった。靴を脱ぐと、自分の戒めが解かれたような開放感があった。
「もう3時間もあったら、4回転サルコウまで出来ちゃうんじゃないの？」
「そうだな。オリンピックに行きたくなったら、練習する」
僕は答えた。勿論ジョークで、そこまでやれる自信はなかった。
それをやるために毎日スケート漬けの人だっているんだ。その人達に対する最低限の分別くらいはあるつもりだ。
「でも、あなた、すごく注目されてたわ。あなたと一緒にいる私も目立っちゃって……」
「そうだった？　ごめんね」
「ううん」
首を振ると、ミズキはいきなり僕の腕にしがみついてきた。
「女からすれば、連れの男が目立つのは気持ちいいものよ」
「……」
また、女は……か。僕は女というものがよくわからない。
女は本能的に、子孫繁栄のために、よりよい遺伝子を求めるから、

才能のある男に惹かれる習性が、どの動物の雌にもあるらしい。僕がミズキの気持ちをわかろうとするなら、僕の中で一番近い解釈がそれだと思われた。

だけど、僕は黙っていた。人間と動物を同列に考えることは、家で家畜扱いされる僕が最も嫌う行為だからだった。

Gap

市街地に戻り、自転車を駅前の駐輪場に置くと、近くのオフピークの喫茶店で、僕達はパニーニを昼食に取った。

僕は初めてパニーニを食べた。どうしてこれをサンドイッチと言わないか、ずっと疑問に思っていた。一人で「パニーニひとつ」と注文するのはちょっとどきどきしそうだ。多分こんな機会でもなければ、これを注文する機会はなかっただろう。僕は喫茶店で「トール」さえ慣れないんだから。

ミズキは僕がパニーニにかぶりつくのを、じっと見ていた。

「何？」

「いや、ゆっくりものを食べる人なんだな、と思って」

「そうかな……」

「学校だと、サクライくんは知らないかもしれないけど、みんな2時間目が終わる頃には、男子はみんなお弁当を食べちゃってるわ。もうお腹が減って、何かお腹に入れたいって、必死に食べてるもの。それに比べたら、あなたの食べ方はどこか品があるわ。意識はしていないかもしれないけど」

「品？」

僕は少し笑う。

「こんなかぶりつく食べ物に、品も何もないと思うけれど」

「ううん、食べ物だけじゃないわ」

ミズキはナプキンで、口紅が落ちないように軽く口を拭う。

「あなたは言動もいい加減で、喧嘩だってするし、授業にも出ないような無頼漢だわ。でも、実際のあなたは物腰も涼やかで、仕草も丁寧で、どこか品がいい。育ちがいいのか、余程の教育を受けたのかわからないけれど」

「……」

育ちがいい？　はは――この娘が僕の家庭を見たら、何て言うか

な。

ミズキはホットコーヒーに口を付ける。

「学校中の女の子が、みんなあなたに憧れるのは、きっとあなたが、そんなギャップをいっぱい持っているからじゃないかしら」

「ギャップ？」

「例えば――そんな女の子みたいな風貌で、大乱闘もしちゃうし、しっかり者に見えて、実は意外と抜けていたり、大人っぽくて冷たい印象なのに、たまにすごく子供っぽい顔をするし」

「……」

「さっきスケートをして、一度転んだ時も、負けず嫌いの子供みたいな顔をしていたわ」

「そう……だったかな」

僕は回顧する。

「うん、あなたみたいな目をする人のことを、青春っていうのかな」

「……」

マツオカ・シオリも僕のことを、理想の青春像だと言っていた。

解釈は違うけれど。

僕は、別の女と一緒にいても、マツオカ・シオリのことを一度思うと、それがいつまでも残る。

もう一度パニーニにかぶりつき、彼女が今、何をしているのかを考えた。

食事を終え、繁華街を歩くと、ミズキは僕をゲームセンターに連れてきた。クリスマスなのに、カップルで満員だ。ユーフォーキャッチャーは順番待ちまで出来ている。正気の沙汰とは思えないな。

「これ、やってみて」

指を指したのは、オンラインで全国の人と対戦できるクイズゲームだ。

「あなたがこういうのやっているところ、すごく興味があるな」

僕とミズキは、空いた台の二人がけの椅子に座る。肩が触れるほどの距離になって、ミズキの香水の香りが鮮烈になる。華のような、いい香りがした。

『問題、初夏にアフリカからイタリアへと吹く南風は○○○○？答えをタイピングせよ』

「４文字だよね？　フェーン、じゃない？」

「違う、きっとこれだな」

僕は、『シロッコ』と解答した。１６人ほどで対戦していたが、僕一人の正解だった。

「すごい！　何で知ってるの？」

ミズキは僕の肩をさする。こんなのは、地理をかじっていれば簡単だ。

「ちょっと待って。次の問題が出る。ビールの小瓶の容量は○○○ｃｃ？　あぁ、これは簡単。３３４ｃｃ」

「また正解！　すごいすごい！」

「赤毛のアンの舞台となった島の名前は――確か、プリンスエドワード島だったか？　インカ帝国で、言語として使われていた言葉は――ケチュア語だったか」

２回やったけれど、当然のように僕はどちらも優勝した。勝負なら負けるのは大嫌いだから、僕も思わず興奮した。

「これ、楽しいな。こんなにレベルが高いとは思わなかったよ」

「このゲーム、間違えた問題をメモして家で解いている人もいるくらいなんだよ？　そんな人達にも勝っちゃうなんて」

「そこまでするのかい？　すごいな……」

その後ゲームセンターで時間をつぶしていると、時間はもう４時を回っていた。

「しかし、いいのか？　さっきから僕に何かやらせたがっているだけで、君のしたいこと、まだ何もしてない」

僕は繁華街を歩きながら、少しミズキに悪くなって、聞く。
「え？」
ミズキは振り向く。もう既に上の空だった。
「どうしたの？　どこか悪いの？」
「う、ううん、そうじゃないの」
「……」
何か、変だ。
だけど、僕が何かをやるだけでいいのだったら、僕は気が楽だ。
女の子を喜ばせる術なんて心得ていないから。
僕はどうやら、愛をささやくよりも、行動派らしい。ただ動いているだけで、はじめは口車でミズキのペースに乗せられ、調子が狂っていたけれど、体や頭を動かしているうちに、ミズキと一緒にいる気まずさは消えかけていた。
「君は友達と、どんなことして遊ぶの？」
僕はデートらしく、適当な話題を振ってみる。それと同時に、友達とろくに遊んだことのない僕が、次はどこに行こうか、選択肢を増やそうとした。
「――え？」
ミズキは僕が聞いて、3秒後に振り向く。
やれやれ――はじめはあんなに元気だったのに。
「カラオケでも行くか？」
「――」
「実は僕、一度も行ったことないんだよね」
「そ、そうなんだ」
ミズキは返事に困っている。
「引いたか？　友達もいない奴だって」
「う、ううん、そんな事はないの」
何で僕は、一度も行ったことのないカラオケなんか勧めてるんだろう。女の子がなんとなく行きそうで、例外なく好きそうだからかな。僕の女の子に対する知識なんてこんなものだ。なのに僕はこう

してデートもどきをして、何をやっているんだろう。
——カラオケの部屋の取り方なんて知らないけど、ミズキがさっきからずっと上の空だったので、僕がやるしかなかった。店員に声をかけられたので、おかげで恥をかかずに済んだ。
でも、こんな感じで済むなら、デートって、簡単だな。ミズキを傷つけやしないか、朝は結構嫌な気分で出かけたけれど——これなら何てことないじゃないか。
「へぇ。この機械で曲を入れるのか。あ、マイクがある。あー、あー」
部屋につくなり僕はそんな事をしていた。
ミズキの方を振り向くと、ミズキは僕の姿を滑稽ととったのか、にこりと微笑んだ。
「よかったよ。笑ってもらえて」
僕はミズキの目を覗き込む。
「僕があんまり世間知らずだから、呆れてるのかと心配してたんだ」
「……」
ミズキはもう一度微笑む。
「サクライくん、いつもギターやピアノ弾いているもんね。きっと歌も上手いんだろうね」
「どうかな……何を歌っていいかわからないから、リクエストくれたら歌うけど」
「え？　いいの？」
「もういいよ。今日はもうついでだ。君の頼みは聞ける限り聞くよ」
それからミズキ、僕の順で交代で歌を歌う。ミズキは僕に曲のリクエストを贈る。
ミズキは僕にラブソングを歌わせたがった。それはきっと、恋愛を毛嫌いするような僕に、甘い歌詞を歌わせて、どんな反応をするのか見たかったかもしれない。確かに僕は、歯の浮く寝言みたいな言葉を、ずらずらと歌っていた。
僕の、歌詞を追うような曲を、さっきからミズキは、歌も上手い

なんて言ってくれた。光栄だけど、僕は普段声をあまり出さないので、４曲歌っただけで、喉が潰れそうだった。

このこっ恥ずかしい曲が終わる。僕はマイクを持つ右手を下げる。次はミズキの曲が入る。

だけど、テレビ画面には次の曲のタイトルではなく、カラオケボックスの新着曲紹介が映し出される。

「どうしたの？　君の番じゃないか」

僕はテーブルに置かれている、曲の予約機を持ち、ミズキに差し出す。

「……」

だけど、ミズキは僕のことを、射るような目で見据えている。何かを決意したような目だった。そう、カラオケの曲を入れろ、なんていう、そんな事を言おうとした僕の喉が、その言葉を飲み込んだ。

「……」

沈黙。

ミズキは僕の伸ばす手の横――をすり抜け、僕の横にくると、座っている僕に顔を近づけ、唇を僕の唇に押し付けた。

二秒。

ミズキは唇をゆっくりと離す。僕は雪女にでもキスされたように体も思考もフリーズした。

また沈黙。

カラオケのテレビからの音が、アーティスト自身の曲紹介に変わった。

顔を赤らめ、うつむくミズキが、やがて口を開いた。

「ホテル、行こっか」

「……」

「私も、あなたのそのギャップに、やられちゃったみたい……」

――ズクン。

僕の心臓が一度、痛みを残して強く高鳴った。

Hesitate

「本気で言ってるのか？」
僕は一度止まった思考を精一杯動かして、何とかそれだけ言った。
ミズキは潤んだような目で、こくりと頷いた。
「……」
ど――どうすればいいんだ、こんな時。
真意はわからないけれど、女の子が恥をかいてまで、僕に全て好きにしていいと言っている。
でも――
実際の僕はミズキが思うような男じゃない。しかも僕は、彼女をはじめから利用する気で一緒にいたんだ。彼女が望んでも、それに僕が応えてやる資格もない時は？
「……」
あれ？　この、さっきまで僕を子供扱いしていたこの娘のことだから、なーんちゃって、とか言うのかと思ったけど……
「……」
――これ、マジなのか。喋れよ。何だこの空気。
だけど情けない。体がそれを求めているのがわかる。
そりゃ僕だってまだ17だし、性欲とかがあるのは自然だろう。個人差はあっても、ミズキみたいな胸の大きい、色っぽいタイプに性欲を覚えたって……
はじめはそう思っていたはずだ。彼女を利用して、2人メチャクチャして、僕の心を支配しはじめた孤独を埋めようとした。そこまで堕ちてしまえば、辛い事を全て忘れられそうな気がして。
図らずも、ミズキは僕の思い通りになりかけたんだ。
だから――嬉しいはずなのに。
後味が悪くて、何だかわからなくなってくる。
やっぱり僕は、人を利用するには非情にはなりきれないのかもし

れない。マツオカ・シオリを敵だと思いながらも、いつまでも非常になりきれなかったことから、わかっていたことなのに……甘さを捨てきれない。これでも非情になりきろうと頑張っているんだけど。

「……」

更に情けないことに、僕はもうミズキと共に、市内のラブホテルの前にいる。

ミズキは女性なのに、恥をかいてまで僕を頼ったんだ。それを傷つけないように断る術を考えているうちに、ホテルの前まで来てしまった。

考えたって僕にわかる訳ないのに。僕が人を傷つけずに生きられたことなんか、今までないじゃないか。

「……」

僕の女性経験は一人、しかも一度だけ。どうしていいかわからなくて、ほとんど何も覚えていない。しかも、その後になって、彼女のことを以前と同じようには見られなくなって、すぐに別れを言って、何度も平手打ちされた。彼女の愛の重さに、僕の脆い覚悟が押し潰されたんだ。

僕はまた、同じことを繰り返すのか。女を抱く覚悟が足りないくせに、都合のいいことばかり考えて。ミズキを抱いたって、僕は彼女に何も報いるものが無い。ここまでしてくれる女の子に。

「……」

ここに来るまで、ミズキは一言も喋らなかった。僕の手を握って、不安そうな顔をするのみだ。

「えっと、ここでいいのかな」

僕はミズキに聞いた。言いながら自己批判が言葉に追い付いた。

僕は一体何を聞いているんだ？

今僕は、誰にも見せたくないような醜い顔をしているのかな。性

欲むき出しで、あまりに粗野で無神経な姿だ。今日、自分が愚を演じることは予想の範囲だけど、こういうのはなかなか受け入れられない。

ミズキはこっくり頷いた。

川越でもロビーが無人のホテルはいくつかある。入ったことはないけど、比較的新しいホテルを選んだ。

予想どおりロビーが無人で、僕は少しホッとする。こんな姿、誰にも見せたくなかった。

部屋に入ると、割と綺麗な部屋で驚いた。変な照明とか、演出はないシンプルな部屋だ。一人がけのソファーが二つ、冷蔵庫にテレビ。風呂はジャグジーがついているって書いてあったけど、見に行く気にはなれなかった。

僕は荷物を置き、着ていたダッフルコートを脱ぎ、ソファーにかけた。そしてそのまま一人分の椅子に深く腰掛ける。

「何か、ちょっと照れるな」

ミズキが言った。僕が顔を上げると、ミズキは僕の座る椅子の右側にあるベッドに、コートを脱いで座っていた。薄手のセーター姿になって、胸元はミズキのふくよかな胸の谷間が見えるか見えないかまで開いている。下はミニスカートだし、体の線がリアルになって、妙に艶めかしい。思わず目を逸らす。

「緊張してるの？」

ミズキは聞く。

「……」

緊張？　確かに体はガチガチだけど、それはちょっと違う。

サッカーでもフェイントにかかった時に、一瞬こんな軽い金縛りに似た感覚に襲われる時がある。

まさか僕はミズキからキスされた挙句、ホテルに誘われるなんて考えてなかった。

そう、あのキスや言葉はフェイントだったんだ。僕はミズキのフェイントにかかって、それがまだ続いているんだろう。サッカーの

フェイントは、抜かれたら完結するけど、今の状況はまだ完結していないのだから。
でも実際、男がこの状況に来たら、早く理性を捨てた方が楽だろう。
だけど――
僕は理性の捨て方がわからない。
それができるくらいなら、僕はあの家で既に狂う事を選択している。それができないから、今の僕の苦しみがあるのだ。
メチャクチャになって、何もかも忘れてしまいたいが、それをするには僕は少し甘過ぎる。ミズキに対する罪悪感が、僕を常に理性的に保つ。楽な道を選べない自分がつくづく嫌になる。
ざまあない。今日限りは、ミズキと一緒に狂う事を選択してしまおうと思っていたのに、今更僕は、狂うことの出来ない性分だと気がつくなんて――
「変な日だ――昨日は学校の食堂で、一日中カレー作ってた僕が、今じゃ昨日まで一度も話したことのなかった君とこうしてる」
僕は俯いたまま言う。
言葉にして、また僕は昨日のマツオカ・シオリのことを思い出す。
なぜ彼女のことを思うと、ミズキと一緒にいるのが後ろめたいんだろう……
はじめは、彼女と向き合いたいがために、ミズキを利用しようとしたはずなのに。
きっと、寂しさや辛さを表に出すと、それは自分を食い殺す。やり方を間違えていたのだろう。
辛いけど、大人になるってのは、きっとそういうことだから。
「聞きたいことがあるんだけど、いいかな」
ミズキが言った。
「僕も君に聞きたいことがあるけど……」
僕は顔を上げる。
「いいよ、先に言って」

ミズキが手を差し出す仕草をする。
「先に聞いたのはこっちだから」
「何故だ？」
僕はそれだけ聞いた。
「何故って？」
「昨日から、今に至るまでのことさ」
僕は手を組む。
「こんなことを言うのは自惚れだけど、ここに誘ったっていうのは――その、そういうこととしてもいいってことなのかも知れないが…
…何故なんだ？　君が僕に、そこまでする理由が、僕にはわからない」
この気持ちの完全な言語化は出来ないけど、それだけ言った。

それを聞いて、ミズキはまるで呆れるような力ない笑顔を見せた。
「困ってるんでしょ？　私がこんなこと言って」
「え？」
「大丈夫。自覚してるから。今の私は、あなたを困らせてるって」
「……」
見つめ合うと、ミズキは目を逸らす。
「あぁ――そのあなたの目――何て言うのかなぁ」
「え？」
「あなたの目、情熱的で温かくて、それでいた沈んだ輝きを秘めていて。深い悲しみに満ちた目なのに、何でだろう……見ていると、何だかほっとする」
「……」
「今日一緒にいて、段々あなたのその目の輝きに惹かれる自分がいて……落とすように笑うあなたの笑顔を見たら、胸が痛くなって、気がついたらあなたのことが……」
「……」
自分ではわからないけど、この理屈は筋が通っているのか？
するとミズキは立ち上がり、僕に背を向ける。
「私、今まで付き合った人って、みんな年上だったの。大学生とか社会人とか。私はこんなだからさ、同い年の男の子のウケが悪くて……」
自嘲するような声。
確かに、ミズキには恋愛音痴の僕でもわかるほど、大人の女の雰囲気がある。男性経験も少なくなさそうで、こういうタイプは確かに僕達の世代では乗りこなす自信がなくて、ユータくらいじゃなければ敬遠してしまうだろう。
「だからかな、学校ではお姉さん役になってて……他の娘の恋の相

談なんか受け持っているわけ」
そう言って、ミズキはこちらを振り向く。優しい笑顔で僕を見下ろしながら。
「あなたを好きだって娘の話は、高校に入って数えきれない程聞いたわ。まぁ、あなたはその娘達を全員振ってきたんだけど」
「……」
まるで僕が非情な人みたいだ。ここでそのことを責められるのかな。まぁ事実だから何とも言えないが。
「確かに、あなたは勉強もスポーツも、何でも出来て、ルックスも、ちょっと背が低い以外は完璧だわ。優等生ばかりの学校で、ちょっと不良っぽいところもあって、真面目な女の子だらけの埼玉高校じゃ、もてるのは当然だって、はじめはそう思った」
「……」
逆に言えば、僕の価値はそこで止まっている。僕は親にさえ、それ以外の価値を見いだしてもらえなかった。それを失った時、僕はゴミになり、虐げられる立場となった。
「でも、あなたのことが好きな娘はみんな、あなたの頭や運動神経を、好きになった一番の理由に挙げなかったわ」
「……」
「みんな言ってたの。あなたのその、悲しげな、深い色をした目が好きだって。あなたの、寂しげに落とすような、澄んだ笑顔が好きだって。あの目を自分に向けさせたいって」
「……」
「私は意外だったの。私のまったく予想してなかった答えをみんな言うのよ。そんな話を聞いているうちに、私も何だかあなたに興味がわいてきちゃって……」
そう言うと、ミズキは自嘲する。
「だからあなたのことを知りたいと思って、こうして近付いた。そしたらまさか気が付いたらあなたにこんなに惚れちゃったなんて……そういうことよ。馬鹿みたいでしょ？」

「……」

自分の魅力なんてわからないし、僕以外の人が僕のことをどう思っているかなんて、僕に関係ない。

だから、僕が分かったのは、ミズキが僕を好きになったということだけだった。

「ごめん、シャワー、浴びてくるね」

沈黙に耐えられなくなったようにミズキは部屋を出ていった。

「……」

部屋に、僕一人が残された。

頭が重くなったので、僕はベッドに倒れこむ。まだ新しい、ホテルの天井を仰ぐ。

「……」

あまり経験はないけど、女の子がシャワー浴びてるのを待つ時間って、色んなことが頭に浮かぶな――

そりゃ、彼女とだったら、いよいよだと思って、彼女の肢体を想像したり、ベッドの立ち回りをシミュレートする、何とも嬉しくももどかしく時間だろう。

だけど僕は、シャワーの音がこんな卑猥なものに感じたことはなかった。微かに水の落ちる音が、僕の神経を欹にする。

あぁ、シャワー浴びると、これから僕達がそうなるってのが、俄然リアルになってくる。

逃げたい。出来れば地球の裏側にでも――

１０分ほどで、ホテルのバスローブに身を包み、タオルで髪を拭くミズキが来た。

「また寝てる！」

ミズキの声が、ここに来る前のフランクな感じに戻っていた。

「あなたもシャワー、浴びてきたら？」

「……」

僕までシャワー浴びたら、フラグが鉄板になりそうでためらわれたが、拒否したところでもはやあまり差はなく、一瞬でも彼女と離

れ、一人になれることを優先した。
一人になって、考えを整理する自信はない。ただ、これでいいのかという問い掛けは、もうずっと前から始まっている。その問いを少しでも綺麗にするための時間稼ぎだった。
ミズキが使ったばかりだから、シャワールームは若干温かかった。
「……」
ここまで来るともう体が期待しているのか、下半身が少し覚醒している。
今程自分を情けないと思ったことはなかった。女の子があそこまでしてくれて、何も気を遣ってやれない。こうして考えるだけの自分の無力さに腹が立った。その反面で、体はその気になりかけているんだから。
「……」
ミズキも言っていたな。僕の目には、自分への怒りの色が深いと。そんな目にいつのまにか恋に落ちて、馬鹿みたいだと言っていたな。
「……」
馬鹿は僕だ。
僕ははじめから、ミズキの前で今日、愚を演じる予感があった。自分の都合だけで、たまたま寄ってきた女の子を凌辱し、憂さ晴らしのように、色々なものを彼女にぶつけ、吐き出そうとしていた。覚悟していたつもりだった。だけど、それがいざその場に立つと、その行為の醜さが想像以上だった。
それに気付いているのに、僕はミズキになんて言えばいいかわからない上に、ずるずると闇に引き込まれ、タダで女を抱くことに、期待さえ抱く……
僕は世界一の馬鹿者なんだ。
流水を頭に被って頭を冷やしても、マツオカ・シオリの顔が、思考から消えない。
こんなヘタレな結果になる前に、彼女に一言謝りたかった。この

数か月、何度も彼女を傷つけたことを。
僕がこんな最低野郎になる前に、一度お礼が言いたかった。この数か月、彼女の言葉に支えてもらい、心にぬくもりを灯してくれたことを。
彼女といられた合宿は、本当に楽しかった。
もっと彼女と話したかったけれど――きっと、今日、これから僕は、二度と彼女の前に姿を現わすことの出来ない汚物に成り下がるのだろう。
そう思うと、頭の中で、本人に届くわけでもないのに、僕は何度も彼女に、ありがとう、と、ごめんなさい、を繰り返していた。
いつまでも、いつまでも――

バスローブを着て、ベッドルームに戻ると、ミズキが水筒に入れていたミルクティーをご馳走してくれた。ほんのり温かく、少しシナモンの香りがした。

はじめは変な娘だと思ったけど、彼女の印象は少し変わりはじめていた。

ちょっとした気配りもあり、少し視点が大人っぽい。きっと成績もそこそこだろう。少しの派手さの中に、花嫁修業を積んだようなつつましさを感じる。

きっと僕にいきなりキスをしたりしたのだって、普段からこんなことをしているわけではないだろう。彼女だってもはや自分が何をしたかわかってないのかもしれない。

精神状態はミルクティーで回復するレベルを超えていたけれど、甘くて温かいミルクティーは、一瞬でも僕の心をホッとさせてくれた。

「……」

ミズキはずっと僕の目を見ていた。余程気に入ったのかな。僕自身、鏡を見る機会もほとんどないので、自分の容姿を殆ど覚えていない位なんだけど。

もうベッドに入る前の手続きを全て終え、お互い言葉少なになる。

「そうだ」

僕が口を開く。

「君も僕に聞きたいことがあるんだったな。それを聞かなくちゃ」

沈黙に焦れたからもあるけれど、これ以上ミズキの気持ちを踏み躙ることはできなかった。だからこそミズキの気持ちを知る努力くらいはしたかった。

情けない。相手に気を遣っているようで、結局は自己の正当化をしたいだけなんだ。建前を振りかざして。

「……」
ミズキはしばらく黙っていた。5秒くらい考えて、意を決しソファーから立ち上がる。
「ベッドに入らない？　そこで話すから」
「……」
まずい、それはまずい。
「お願い。傍にいてほしいの」
ミズキは僕のバスローブの袖を掴む。
「……」
その目があまりに真剣で、僕のことを信用しきっているような目だったので、僕はミズキの言うとおりにした。ミズキのその熱いまなざしに、気圧されたのかもしれない。
ベッドに入ると、僕は自分を如何に冷静に保つかを意識した。だけど、僕はマツオカ・シオリを襲うことはまずないと思われ、合宿中の送り迎えさえも任されたんだ。実際如何にミズキが魅力的でも、僕が手を出すことは考えにくいと思い直す。残念ながら僕は女性に力ずくで迫るには、思考が倫理的過ぎる。
ミズキも僕の隣に入る。ラブホテルのゆったりしたベッドでも、体が少し触れる。
「腕枕とか、頼んでもいい？」
「は？」
「あなたの腕、すごく引き締まってるし」
「……」
もうこの状況だと、してもしなくてもあまり差はなかった。どうとでもなれと思い、半ばヤケクソで僕は水平に左腕を伸ばす。
まだ頭は正常に働いているつもりだったが、僕はもう既に寂しさや性欲に支配されているのか？　もうそれさえもわからなかった。
ミズキが嬉しそうに僕の上腕に、右向きで頭を乗せる。耳の感触。シャンプーの香りが強くなる。顔が近過ぎて、僕はもう左を向けなかった。

頭を置くと、ミズキは伸ばしたままの僕の左手をとり、肘を曲げさせ、僕の腕で自分の頭を抱かせた。

「何か……落ち着くなぁ」

ミズキは目を閉じ、呟いた。

「……」

自分が、もはやまな板の鯉のようになった気がする。さっきから、流されっぱなしだ。感情も、いくらか捨て鉢になっている。

こういう時に、他人と関わると、大概ろくなことにならないんだ。僕の場合。

「なぁ、そろそろ答えてくれないか？　君が僕に聞きたいことは、そんなことか？」

僕が言うと、ミズキが僕の耳の傍で笑う。吐息の温度さえ感じた。

「あ、怒った？　ちょっと甘えてみちゃったけど、こんなの、男の子にはずるいよね……えへへ」

照れるように笑う。さっきまでの大人っぽさとは打って変わり、子供みたいな笑い方だった。

「……君の聞きたいこと、何となく想像がつくよ」

僕は天井を見上げながら言った。

「マツオカのことだろ」

「何でわかったの？」

ミズキは驚いた声を出す。

「ん？　何となく」

それは直観的なものだったが、強いて理由を挙げれば、ミズキはマツオカ・シオリを意識しているのを、昨日の時点で何となく感じだ。仮に僕に惚れているのだとすれば、最近頻繁に一緒にいた彼女のことを聞かれるだろうと、僕の拙い知識で女性心理を考えた結果だ。

だけどそれを説明はしなかった。こんな腕枕までしていても、君は僕に惚れている、なんてサブいことを言う程僕はナルシストでもなかった。

「別に僕と彼女は何でもないよ。昨日のことも気にすることはない」
言いながら良心が痛む。何故だろう。
彼女の笑顔が頭に浮かぶ。その笑顔が遠ざかるイメージ。それが僕を理由もわからずに陰に落とす。
「そう――意外に冷たいのね」
「……」
僕はこの時、何を思ったんだろう。
結果がどうであれ、僕はマツオカ・シオリをこれ以上傷つけなくない。そう思うあまり、少し饒舌になっていたのかもしれない。
「あの娘はいい娘だから、僕なんかと一緒にいちゃいけないんだ。僕にいつまでも付き合わせるのは可哀想だ」
こうして思うより先に言葉が出る。彼女を突き放したりしたくないのに、それをしている今の自分を必死で正当化して、流れを止めようとしている。
「じゃあ、シオリのこと、どう思う？」
「え……」
どう思うって――彼女のことがこんなに頭に浮かぶのに、僕の中での彼女という存在の定義は、世界一曖昧なものだ。元々感情を言語化するのは苦手だし、うまく説明できない。
でも――
こうして彼女のことを考え続けるのは、何だかイライラする。頑張って言語化すれば、僕にとってマツオカ・シオリがどんな存在か、答えが具体化されるかもしれない。
「あの娘は……泣き虫で、自分に自信がなくて、いつも迷ってる。だけど本当はとても強い娘なんだ。僕に夜食を買ってきて、ご丁寧にプリンを付けちゃうくらい律儀で、何よりいつも感情が馬鹿正直で、一生懸命なんだ。そんな彼女の存在や言葉は、ただそこにいるだけで、心が穏やかになる。そんな柔らかな光に包まれていて……」
そこまで語ると、僕は一度言葉を止める。これ以上語ると、僕は取り返しのつかないことになりそうだった。

「……」
沈黙。
「幸せだなぁ、シオリは」
ミズキは溜め息を漏らす。
「好きな人にそんなに想われて」
「……」
彼女が僕を好きだって？　ミズキは多くの女の子の話を聞いたと言っていたけれど、あの娘が僕の名を出して恋の相談をしているとは考えにくい。
そんなこと、あるわけない。
「あの娘、男子に人気があるでしょ？　だけどあの娘を好きな男子は、みんなあの娘の顔や、うわべだけを見てる奴ばかりだもん。あなたはちゃんと、シオリの心に触れてあげてるのね」
「そうかな……男の中にも、彼女の優しさや健気さに惚れてる奴はいるけど」
「そういうのとは次元が違う」
ミズキは少し強い口調で、僕の言葉を遮る。
「結局そういう人も、シオリのことをアイドルみたいに見ているのよ。それが偏見だってこともわからずにね。でもあなたは違う。あなただけはあの娘を普通の女の子として見てあげてる」
「……」
否定はしない。事実僕が彼女に近付かないように言った連中がそうだから。彼女を愛でているようで、実際は自分のイメージにはめ込む行為だ。
でも、僕の場合、彼女は敵だったんだ。だから他の連中より彼女を偶像化してないと言うよりは、違う視点で差別していただけなんだが。
「あなたって不思議な人よね。あまり他人と接点を作りたがらないのに、その目は、人を外見や貴賤での差別をしない。だから、みんなあなたの隣にいたいって言うんでしょうね。あなたといると、何

だか肩の力が抜けてほっとするもの」
「……」
「だからかな……」
と言うと、ミズキは僕の首筋に両手を伸ばし、僕の体を抱き寄せた。僕も腕を回しているから、二人抱き合う形になって、ミズキは僕の胸に顔を押しつけた。
「あなたの目を見ると、私の心に触れてほしくなる……」
僕の胸の中、くぐもった声でミズキが言った。

歴史小説にお決まりのパターンがある。

後世に悪名を残した人間は、大体酒か女に狂っているものだ。殷の紂王や、唐の玄宗など、優秀な人でさえ、女の色香に惑わされる。

僕は酒はともかく、女にはあまり隙を見せたくない。だから高校でも、女子とは距離を置いた付き合いをした。

そして、僕は初めて女を抱いた時、ゲシュタルト崩壊を起こした。僕と彼女のアイデンティティを歪められ、結果僕は相手を傷つけた。

だから同世代よりは、女性の体に対する興味や好奇心を失っている。

と、思っていた。

だけど僕の体は、ミズキと密着する。バスローブ一枚隔てて、僕の腹辺りに、ミズキの豊満な胸が触っている。シャンプーの香がまた強くなって、脳内が刺激され、下半身がまた覚醒する。

「……」

恥ずかしい。僕は自分の性欲さえ、上手く定義していなくて、人に性欲を晒すことが、どういうことなのかよくわかっていない。まだ僕は、激しい恋に心を焼いたことがないし、女性を前に、どうやってそれをわかってもらえばいいんだろう。

「な、なあ、昨日から僕にくっつき過ぎじゃないか？」

顔は僕の胸の中だから、ちゃんと聞こえているかもわからないけれど、僕はそう聞く。

「……」

ミズキは答えない。バスローブで開いた僕の胸元に、ミズキの熱い吐息がかかる。ゆっくりとしたペースで、もう眠ってしまったのかも、と思ったくらいだ。

「お願い、少しだけ、このままでいて……」

そう言われ、僕はどうしていいかわからず、体を硬直させる。

「……」

しかし、彼女は一体どういうつもりだろう。

同じ部活なんだから、マツオカ・シオリとは友達なのだろうか。

それにしてはミズキは、シオリが僕のことを好きだと思っている。

なのに今、僕とこうしているということは、本当はシオリのことが嫌いで、復讐か何かのつもりなのだろうか。

――いや、それなら僕を惑わせる方法なんていくらでもある。こんな回りくどい方法を取ることはない。ただの陰婦という感じでもないし、異常性癖があるようでもない。

彼女の目的は、一体――

そんなことを考えながら、僕達はそのままでいて――

1分くらいそうしていただろうか。やがてミズキが話し始めた。

「私、年上の人としか、恋をしたこと、ないの」

「……」

僕は黙っていた。この状況で話すことだ。きっとこれが彼女の一番僕に伝えたいことなのだろう。それが何となく、わかったから。

「私はいつも相手のことを追いかけていた。だけどいつも相手には子供扱いをされてた。そんな時、たまに男の人がボロボロになっている時があった。そんな時だけは、相手も私の支えを必要としてくれた。私はそんな時だけ、自分が愛されているんだって、実感することができた」

「……」

「私はそれから、男の人の支えが出来るような女になれるように頑張った。でも、頑張っても、傷が癒えた男の人は、みんな私の前から去っていった。私は故意をするたびに、疲れきってボロボロになってしまうの」

「……」

「私は相手の心を支えられるように頑張ったのに、男は誰も私の心に触れてくれなかった……」

僕の胸でくぐもる声は、震えるようにか細くなった。

「……」

昨日ミズキは言っていた。女は男がボロボロな時、それを支えてやれることに至福の喜びを感じると。

それは彼女の真実なのだろう。しかし、自分の隙を見せてくれない男が、その時だけ見せてくれる隙――その時だけ、両者のつながりを感じた彼女は、やがてそんな時以外では、愛情を実感できなくなってしまったんだ。

だから僕に、寂しい？　と聞いたのだろうか。

「寂しいのか？　それが」

僕は聞いた。

彼女は僕の胸の中で、一度首を縦に振った。僕に見えるのは頭だけで、表情はわからないけれど……

「……」

僕と同じくらいの背の高さの彼女が、こうして見ると妙に小さく儚く見えた。

若干、いやらしい気持ちが消えた。体の覚醒も一時引く。僕はもう少し、彼女の話を聞いてみようと思い返す。

「でも、何で僕なんだ？」

僕がそう聞くと、ミズキは僕の胸から少し顔を話す。そして、先程よりはちゃんと通る声で、少し自嘲気味に話し始めた。

「クリスマス前に、また同じことを繰り返して、失恋した……馬鹿みたいだよね。結局遊ばれてたのよ。その人は二股していて、もう一人の人のところへ行っちゃった」

「……」

二股なんて、したこともされたこともないから、僕は何て言っていいのかわからない。あのユータだって二股はしないし、そういうことする奴は、どこか僕とは違う世界の生き物のように感じてしまう。

「傷心のまま、私はあなたの開いた合宿の打ち上げに参加したの。私にとって、あなたの作ったカレーは、とても優しい味がした。悲

しかった心が生き返るような、そんな味がしたの」

「……」

そんな大層なものじゃないけどな。それは、手間をかけた料理が作れることを、優しい男だっていうこととイコールで結ぶのは、途中式のない方程式みたいに危険な判断である。

「それで私、あなたの事を昨日、目で追っていたんだけど……改めて思ったのよ。あなたは、辛い時に、誰かを欲したりすることはないのかって。いつもひとりぼっちでいて、大丈夫なのかな、って。それとも、ただ単に、人の中に踏み込むのが恐いのかな、って。あなたを見て、そう思って」

「……」

そうか……この娘は、カウンターにいた僕を見ていたのか。確かにあの時の僕は、人の中に入ろうと思っていても、どうやっていいかわからず、立ち尽くしていた。

そうだ……あの時僕は、自分の孤独や寂しさを感じ始めたんだ。そして、その後その蓋が開いた……

「君は、僕の寂しさを、今までの男と同じように埋めてあげたい、と、考えたのか？」

僕は聞いた。

するとミズキはふるふると、首を振りづらそうに横に動かす。僕の顎が、ミズキの頭で少しゴリゴリされた。

「はじめはそうだと思った。でも、今は違う……」

「……」

「あなたが、あのワンちゃんにご飯をあげるのを見る目が、とても優しいと思ったから。あなたの目には、人を利用するとか、差別するとか、そういう雰囲気がまったく感じられなかった。人を利用し、利用されて、自分を安定させてきた私にとって、あなたのその濁りのない目は、とても眩しかった。私はあなたの、純粋で、それでいて寂しさを抱いた沈んだ瞳に、一瞬で惹かれてしまったの。あなたなら、私の心に触れてくれるんじゃないか、って、思ったの」

「……」

言いながら、彼女の肩や体が震えているのがわかった。

泣いている。声を上げずに、感情が零れ落ちるように、静かに。

僕はやっとわかった。彼女は泣く場所を探していたんだ。泣いてもいいと思える人を探していたんだ。

「……」

僕は、この時初めて自分の腕に力を入れて、彼女を抱きしめた。

もう何が正しいかなんて、そんな思考は吹き飛んでいた。人として、彼女が泣くのが見ていられなくて、泣く場所に自分を選んでくれたこと——僕はただ、彼女に泣き止んでほしいと思って、でもどうしていいかわからなくて、いじらしさのあまり、そうしていた。

——ズクン。

心臓が高鳴る。壁が崩れた。

あぁ、僕と同じ孤独を、形は違えど、この娘は感じていたんだ。

そして、彼女は僕に依存することで、今はその孤独を埋めようとしている……

もう、いいじゃないか。僕だって、もう心を支えるには、孤独を一度吐き出してしまった。このままでは心を食い潰されてしまう。

彼女だってそれを望んでいる。僕だって内心、そうしたいと考えている。

それに、ここまで僕みたいな奴を必要としてくれるなんて……今まで、虐げられ続けて、自分はクズだと思っていた僕を、こんなに必要としてくれるなら、本望じゃないか。

その思いと呼応するように、僕の体は引き寄せられ——

ミズキは、仰向けになる僕の上に重なって、強くキスをした。舌が絡まる、本当のキスだった。

頭の中が真っ白になりそうだった。唇を離された時、僕自身も夢中になって舌を絡めていたことがわかった。

「あなたが辛い時は、私が寂しさを埋めてあげる。だから、このまま二人で、堕ちちゃおっか」

「……」

「私をどんな風にしてもいいから、悲しみを忘れてもいいよ。あなたの住んだ瞳が、私を包んでくれるのなら……」

「……」

僕の中の心が、彼女の一言一言に誘惑される。幼過ぎた地獄が、大人の遊びを知って、快楽に溺れる。

もういやらしさとか、体目当てとか、そんな感情はなかった。ただ、誰かのぬくもりを、貪るように欲しくなって、それが物欲なのか、性欲なのか、僕の知る限りの煩悩では名づけられないような感情に心が染められた。

ただ、僕は欲しくなって……目の見えないそれに触れたくて。

僕の感情が、真っ白になっていく……

くらくらする程、ミズキとのキスは、僕の空っぽの部分に入り込んでくる。

今自分は完全に余裕を失っていて——誰にもこの姿を見られたくない程だったけど……

そんなこと、どうでもいいと思うくらい、気持ち良くなってきた……脳内麻薬を口移しされてるみたいに、すればする程欲しくなる……

唇を離すと、ミズキは僕のバスローブにゆっくりと手をかけ、上半身をはだけさせる。僕の上半身は裸になる。

僕はもう一度ミズキを抱き寄せ、キスをする。ミズキのことを強く抱いて、少しでもミズキの孤独を埋めてやりたくて……同時にこうしていても自分の孤独が埋まらなくて……

唇を離した時、僕の手はミズキのバスローブの肩口にかかっていた。

既にミズキの胸元は更に開いていて、胸の谷間がかなり開けている。

「……」

今、電気はベッドの横にある間接照明だけ点いている。一度僕は

止まる。
僕が上になって、体が重なり合う。間接照明に照らされるミズキの顔が眼下にある。
ミズキのうっすら浮かべる微笑が、僕の中の利己的な感情を全て許してくれるように見えた。
ミズキの目は、僕を信じきっている目だった。言葉の通り、本当に自分のことを好きにしていいというような目だった。
「ありがとう……」
不意にミズキは言った。
「……」
――ズクン。
記憶が過去に遡る。
一年くらい前にも、僕の腕の中で、同じ目をした人がいた――

Resolution

一年前、僕には彼女がいた。

もう、どういう経緯で付き合ったのかも覚えていない。

僕は入学して二ヵ月で、授業のサボり常習犯をはじめ、同級生の軽蔑を一手に集めていたのが、定期テストや体育祭、文化祭などを経て、女子の告白が殺到する対象となり……その度に断り続けた。

当時の僕は、親に逆らって高校に入り、バイトをして部活をして……そんな生活が始まったばかりだったから、見た目よりも生きることに必死で、人に気を配る余裕が今以上になかった。ちなみに金もなかった。

だからユータ、ジュンイチにさえろくに関わっていなかった。

だけど……そうして告白を断るにも、僕は人を傷つけずにはいられない。

断る度に、相手は泣いたり怒ったり、僕に罵声を浴びせたり……その度に僕の中に、煩わしい思いが積もっていった。人のためにイライラするのはもうごめんで……

そう思ったタイミングで告白してきた娘と付き合った。彼女を選んだことに理由はなかった。ただ単に、自分が楽になりたかっただけだ。

付き合っても、僕の余裕のない生活は変わらなくて……自分は人と一年間会わなくても平気なタイプだったから、自分の想像以上に彼女が僕に会いたがることに悪戦苦闘して……

ただ余計な荷物を背負っただけのような、そんな逢引きを繰り返した。

何もかもが面倒だった。彼女を思いきり傷つけて、愛想を尽かせてもらおうとも思ったが、それを見るのも面倒で、僕はだらだらと、会うだけの関係を繰り返した。

キスもしなければ、手だって握らなかった。自分にその資格がな

いことはわかっていたし、それで彼女に何かを悟ってほしかったのかもしれない。

そんな状態で半年が過ぎて……

彼女は勇気を出したのだろう。お互いの家にも行ったことのない僕達。

図書委員だった彼女が、放課後の図書室で二人きりの時に、僕を抱き締めて……

僕に「私って、魅力ないかな？」と聞いた。

僕の腕の中で、彼女は震えていた。

それを知った時、僕はその彼女の想いに心を不覚にも動かされてしまい。

その後、駅前のホテルで彼女を抱いた。

その時の僕は、僕の都合でこの娘に半年の時を強制したことを、初めて意識して、どうにかしてでもそれを償いたくて、彼女の思うままにした。

彼女は僕のことを抱き締めてくれて、半年も前に進めなかった僕を、まだ聖女みたいな、愛に満ちた目で見ていた。

僕は初めての女性の体に、好奇心と欲望を抱きながら、拷問のような時を送った。

あれだけ彼女に手を出す資格はないとわかっていながら、こうして彼女は、親にも見せないような姿を僕に晒してくれて、僕はそれを欲望のままいただく最低野郎に成り下がった。叫びたい程の胸の痛みに苛まれながら。

彼女が息を切迫させる度に、僕に、好き、とか、愛してる、とか言ってくれて、僕の心にそれが何度も突き刺さっていく。

僕が果てて、二人ベッドの中で彼女が、柔らかな笑みを浮かべて「ありがとう」と言った。

その笑顔を見た時、泣きたくなるくらいの心の痛みに襲われた。

涙もかれた僕は、なくことは出来なかったけれど――

彼女の覚悟がその一言でわかった。それに比べて僕は、何を考え

ていたんだろう……

僕は彼女に礼を言われることなんか、何一つしていない。むしろ傷つけているのに、彼女に礼を言われる始末で……

男同士で話すと、まだ15だったから、セックスをやりたがる奴ばかりで、やるチャンスがあれば離さないような勢いだった。僕はまだ、その興味に至ってはいなかったけれど、そんなものだと思っていた。

でも違うんだ。セックスをするには覚悟がいる。彼女の存在を全て受けとめる覚悟か、相手を傷つけてでも何かを埋めたいという覚悟が。

そして、資格がいる。片一方の気持ちに報いる資格が。

僕はどちらもなかった。ベッドの中で、彼女に僕が与えてしまった寂しさを、埋めることも詫びることも出来なかった。それ以前に、彼女の孤独の埋め方すら真剣に考えられていなかったんだ。

僕はこれ以上、彼女を傷つけることが許せなかった。もっと早くそうすればよかったのに、次の日に別れを告げて……

こんな僕に体を捧げてしまった彼女の優しさに、今までどれだけ甘えていたんだろう……最後の最後にそれに気付いて……

彼女に平手打ちされても、涙をこらえることを覚えていたから、僕はその時、彼女にただ酷薄な表情を向けるしかなかった。

僕はあの時、何も彼女に償えなかった。

「あ……あ……あ……」

僕の手は、ミズキの胸元でバスローブを掴んだまま止まっている。

ミズキの大人っぽい顔が、間接照明で照らされて、僕の顔を見上げている。

「……」

硬直する僕に、ミズキは両手を開いて体を無防備にする。

その姿、表情が、聖母マリアのように見えた。胸が痛くなるよう

な感覚。
　気がつくと僕の体は抱き寄せられ……唇が熱いもので塞がれた。温めた蜂蜜みたいに甘くとろける舌が入り込む……
　でも、僕はもうそれに応えなかった。僕は抱き寄せていた手を解く。ミズキの両耳の脇に手を突き、四つんばいの形になる。
「どう――したの？」
　ミズキも僕の変化に気付いたようだった。僕を不安な表情で見上げる。
「――同じだ。あの時と」
「え？」
「――あの時、あの娘も立ち止まる僕を抱き締めてくれて……ありがとう、と、愛してる、を繰り返して……僕は……僕は……」
　声が震えだす。でもやっぱり僕の目から涙は出なかった。
　ミズキの顔をこれ以上見ていられなくなって、僕は後ろを向き、ベッドにあぐらをかいてしまった。
　ミズキが体を起こす音。
「……私、何かまずいことしたかな」
「……」
　この言葉を言ったら、ミズキはなんて言うだろう。僕をあの娘のように罵るのだろうか。
　今日のはじめ、僕には毒を飲む覚悟がいると思っていた。それがこんな土壇場――もはや手遅れとも言える時に、決意が固まるなんて。
　――言わなくちゃ。
「やめよう。こんなこと、間違っているんだ」
「……」
　部屋の時間が凍った。
「……どうして？」
　ミズキは聞く。

「……」

言葉がまとまらない。ここまで来ても僕は、ミズキを傷つけないようにと考えている。

でも……こんなのじゃ駄目だ。こんなこと続けたら……

「僕は、これ以上は君に傷を残すことしかできないんだ。これ以上君を傷つけるなんて、僕には出来ない」

説明が抽象的だ。だけど、具体的にしようにも、主観の導きだした答えだから、それは出来そうにない。

沈黙は背中越しにミズキの存在を感じさせる。鳴るような静寂だけど、その空間は息づいている。

「僕は……」

沈黙を破る。

「君が言うような奴じゃない。はじめから自分の苦しさを埋めるために、君を利用しようとしていたんだ。君のことなんて、何も考えてやしなかったんだ」

「……」

ミズキは答えない。

「でも、駄目だ……誰かを傷つけて、自分の安定を得るなんて、僕には出来ない。君はこんな奴に体を捧げちゃいけない。君みたいな娘は、幸せにならなくちゃ駄目だ。僕は君に消えない傷なんか残せない」

「……」

沈黙。

「ちくしょう……」

声が漏れた。

「何で涙が出ないんだよ……僕は、僕なんかを頼ってくれた人のために、泣くことも出来ないのか……」

もう感情が乱れきっていた。ただ、ここまでしたミズキに訳もわからず何かを償いたくて、でも何も出来なくて。

せめて彼女の悲しみを抱えて泣いてやりたかったけど、涙が出ない。

僕はやっぱり、誰かを傷つけることしか出来ないのか。

何で、僕は……

僕の裸の肩に、細くて長い指が触れる。
振り向くのが怖い。僕は歯を食い縛って、審判を待つ。
「もう、いいよ……」
ミズキのか細い声がした。泣いているような声だった。
あぁ、また人を泣かせた、という罪悪感で、僕は振り向く。
そこには足を開いた女の子座りで、笑みを浮かべながら涙を流すミズキがいた。
「ありがとう。もう、充分だよ」
「え？」
「あなたは私の心にちゃんと触れてくれたもの。このままじゃいけないって、私を止めてくれたの」
「……」
ミズキは僕の手を取った。
「それだけで胸がいっぱいだから。あなたみたいな人に会いたいと思っていて、あなたがその通りの人だったから」
「……」
沈黙。
「あなたも、何かとても辛いことを抱えているのに、それでも人を傷つけたりは出来ないのね」
「……」
「そんな甘いところも……うふふ。何だか居心地が良かったわ。あなたの前だと、その目とその甘さにつられて、飾りのない自分になれる」
もう涙は流していなかった。ミズキは僕の目を覗き込む。
「……」
沈黙。
そのままで30秒ほどそうしていた。僕はずっと俯いていたが、やがてミズキは僕の手を離して立ち上がった。
「ゲームオーバーね」
そう言って、ミズキはベッドから出る。

「どこへ？」
「今日のデートはここまで。着替えてくるわ」
そう言って、バスルームの前に立つ。
「変な話よね。さっきまであなたに抱かれたいと思っていたのに、今は着替えを隠すなんて」
バスルームの入り口前で立ち止まり、ミズキは自嘲する。
「それでいいんだ。きっと。男を支えるために、君が身を切ることはないと思う……」
言いかけて、言葉が尻すぼみになる。
この僕に、彼女に掛けてやれる言葉なんてあるのか？　彼女が何と言おうと、僕はひどいことを彼女にしたんだ。
ミズキは僕の言葉に笑みを返してバスルームに入る。3分ほどで乱れた髪も直して、さっきまでのコートにミニスカート姿で出てきた。
彼女は僕の前に来て、僕に一切れの紙片を渡す。
それは一万円札だった。
「私が無理に連れてきたから、これであなたが出る時払ってね」
「――え。一緒に出たら、晩飯くらい一緒に……」
「いいの。これ以上あなたといると、あなたの優しさに耐えられなくなる」
「……」
無神経過ぎだ。大体何で今更この状況で飯なんか……
「ごめん」
「謝らないで。これでも結構すっきりした気分なんだから」
ミズキの表情は、ここに来る前の、大人の余裕を感じるものに戻っていた。
「じゃあ、私、行くね」
ミズキは部屋のドアノブに手を掛ける。
「ちょっと待って」
僕は玄関まで彼女を追い掛けていた。

僕が彼女にかける言葉なんてない。だけどこれだけは言わなくちゃ……彼女が少しは前を向けるように。

「し、幸せになってくれ……」

言い慣れない言葉に、僕は出だしにつまずく。

だけどミズキは、僕の言葉を聞くと、静かに微笑んだ。

「あなたも」

ミズキは微笑んだ。そして指を銃の形にして、僕の胸を指す。

「シオリとうまくいかなかったら、またデートしようね」

それが最後の言葉だった。彼女は実に潔く、残り香を残すように部屋を出ていった。

「……」

部屋に一人取り残されて、手にはミズキにもらった一万円札が握られている。

普段は金汚い僕が、今はこの一万円札のごわごわした感触が気に食わなくて、それを握り潰していた。

握り締めた拳に怒りを込めて、僕は壁を叩く。

拳はじんじんするけど、この胸の痛みにかなわない。胸の痛みを別の痛みでかき消そうとして、更に壁を叩く。

「何やってるんだよ！」

僕は叫ぶ。そして一通り壁を打ち付けたら、手を止める。

今日ほど自分を最低だと思ったことはない。何がと聞かれても答えられない。

こんな自分、壊れてしまえと思って壁を打ったが、自分でわかる。知らず知らず僕は壁を打ち付けていても、力をセーブしていることを。

「俺は……」

俺はもう、誰も傷つけたくないのに、心のどこかで人を求めてしまう。そして、触れれば触れるほど、人を傷つける。

人をこれだけ傷つけているのに、自分の身は可愛くて、傷さえ付けられない。

言葉もなく、人の心もわからないから、もう自分も傷を負うしか、俺が傷つけた人に償えなくて……

それしか思い浮かばなくて……

「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺の叫びが誰もいない部屋に残響する。

こんな時、泣けない男は叫ぶしかないんだ。ミズキは泣けないなら、男は女に当たるものだと言っていたけど……

それさえも出来ない時はどうすればいいんだ？　誰か教えてくれ

――

結局俺はミズキのくれた一万円札を使えなかった。

このボロボロの札を見ると、自分のさっきまでの愚行を突き付けられて、無性に憎いけど、これがあれば自分の戒めになる。これを見続けることで、二度とこんなことをしないように、自分に言い聞かせるために、使えなかったんだ。

一人繁華街に出る。

世間がクリスマスだということを、また忘れていた。どこからか「ラスト・クリスマス」が聞こえた。サンタとトナカイの着ぐるみを着た居酒屋だかカラオケの呼び込みが、ホテルに行く前より多くなって、街は賑わいを増していた。

故郷の川越は、高級レストランも、洒落たバーもないから、社会人のデートはあまりいない。カップルは僕と同年代あたりに集中している。

学校の奴にこの姿を見られるかもしれないと思って、一度マフラーで口元を隠したが、すぐに辞めた。

何故隠したがる？　もういいじゃないか。俺はもう、ただの汚物なんだ。

認めてしまえばいい。そもそも俺には自分を繕う対象がいないじゃないか。

「……」

これからどこへ行く？　蝋燭の明かりも、プレゼントも、ご馳走もないあの家――ひとりぼっちのあの部屋か？

足は繁華街へ向く。俺の足が、俺の存在を許容してくれる場を探したがったからだ。

「……」

俺の心はばらまかれたコンペイトウみたいに、無数の棘になって、どこかしこに散らばっている。感情が小さな粒粒になって、一つ一つに棘があって、それが舌に乗る粉薬みたいに苦々しさを残している。

だから、ホテルにいる時のリアルな怒りは、今では何に怒りを抱えていたのかもわからなくなって、何処か曖昧で、何処かリアルな――そんな膨漠とした怒りへと刷り変わっていた。

液体が気体になると、質量は変わらないが、体積は何千倍にもなる。きっとはじめの怒りで沸いた心が蒸発して、もう俺の心で形を拾いきれないくらいに気化してしまったんだ。

あぁ、きっと心って液体なんだな。

そう思った時、自分の体の形が消えて、もう歩いているのか止まっているのかもわからなくなる。

「……」

俺はもう、脳以外、自分が何をしているのかわからなかった。精神のダメージが、体の機能さえ鈍らせている。脊椎のないくらげみたいに、自分が動いているのだとすれば、どういう命令を自分が出しているのかわからない。

まるで自分の肉体と精神が切り離されたみたいだ。

さっきまで目に映っていたカップル――俺はそんな連中が真実の愛を持っているかなんてことには興味がない。

だけど――誰かを側に求めるって意味では、今日の俺と行為自体は同じで……

昔の俺はそれを堕落だと思っていた。小さな頃から誰かが暴力的に俺を淘汰し続けていたから、自分も強くなることを、選択の余地

もなく選んだ。
力だけが全てだと信じていた。それが手に出来なくなる時、その時までただあがきたくて、今までやってきた。人に支えてもらって生きるなど、弱い奴のやることだと。
ただ、自由になりたくて。俺を誰にも踏み躙られたくなくて。それを勝ち取りたくて。
だけど……
俺は何処で道を間違えたんだろう。
そして今日、俺の長年積み重ねた力は、何一つの意味を成さないものであることを知る。
大切なものも失い、勉強もサッカーもただの一芸に堕落させ、心慰みに女を抱くことすら出来ない。
まだ17の俺は、既にこの聖夜を踊るような青春さえない。生きながら死を待つ存在に成り下がった。
俺の前には、生きる意味もないのに、50年の巨大すぎる半生が残っていて。死ぬのを待つにはあまりに長過ぎる時間が、両手にのしかかっていた。
「……」
拷問のように長い時間を、ただ待ち続けて……
俺は一体、何のために生きていけばいいんだ。この先の俺は……
あぁ――こんな気持ちになるなら、ミズキとどこまでも堕ちてやればよかった。
もう二度と、上を見ることのないように……
俺がミズキにすがった理由は、いやらしさなど微塵もなく、それが自分に必要だと、純粋に思ったんだ。
思いが純粋だからって、僕の行為を正当化は出来ないのだけれど……
――「ちょっと待てよ！」
金管楽器みたいに高い声がして、大きな手に肩を捕まれた。
夢遊病者のように歩いていた俺は、そこで一度我に返る。

目の前には、僕よりかなり体の大きい男が三人立っていた。一人は坊主頭、一人は肩口までの長髪をドレッドヘアにして、もう一人が金髪で、細身の変な黒いコートを着て、右腕を押さえている。

「テメエ、人にぶつかっておいて、シカトこくとはいい度胸だなコラ！」

「……」

すごい、これって昭和のカツアゲだ。

Worthless

別に珍しいことじゃない。こういう連中は、自分と喧嘩しても、無傷で済みそうな奴を狙うものだ。俺は女顔で、背も低く、線も細いので、こういうのに声をかけられるのは、何もこれが初めてではない。

ただ、俺は逃げ足は速いから、こういう連中に金を取られたことは一度もない。

「痛ぇ！　痛ぇ！」

ロングコートの金髪が声を上げる。

「おい、兄ちゃん。どうしてくれるんだよ」

隣の強面の坊主頭が、金髪男の代わりと言わんばかりに、俺のコートの胸倉を掴む。

「――どうしろ、とは？」

その言葉に、後ろの金髪男が、カン高い声で叫ぶ。

「ふざけんな！　慰謝料払え！　痛ぇんだよ肩がよぉ。脱臼か、骨が折れたかも知れねぇ」

「慰謝料？」

俺はポケットに入っていた一万円札を取り出した。さっきから手の中で弄んでいたので、既に札はくしゃくしゃになっていた。汚い手段で得た金だから、むしろこいつらに丁度いいし、くれてやってもいいと思えた。自分の愚行をなかったことにしたかった。

「一万円もあれば十分でしょう」

俺は一万円札を差し出す。

「ふざけろよ」

横からドレッドヘアの男が、俺の持つ一万円札を取り上げる。

「バイキンが入って腕が化膿したら、下手すりゃ腕が腐るかも知れねえだろうが。俺の友達がそんな目にあったら可哀想だろ？」

「骨折か脱臼でバイキンが入ったら、それは数日前から感染してた

んでしょうね。ちなみに骨髄炎は脊椎にまず感染しますから、腕を切り落とすまで感染が進んでたら、今歩けてませんよ」

「テメエ、バカにしてんのか」

ロングコートの男が、両手で俺の胸倉を掴んだ。俺はうつろに、男の目を覗き込んだ。

「……」

おかしいな。普段はこんな連中に説教をかますことなんかしない俺だけど……

今の俺は、精神と肉体が切り離されていて、何処か危機感が欠如している。

危険を冒す高揚と、心を蝕む虚無が同居するような――そんな破滅的な思考が俺を駆り立てる。その思考が、俺の感情を既に破壊している。

――俺は、この場で壊れてしまいたがっているのか。

「馬鹿にしてるか――そうかもしれないな」

俺が呟くと、胸倉を掴まれている俺の髪を、ドレッドヘアの男が掴み上げた。

「テメエ！」

ドレッドヘアの男が、激昂する。

「お前の手が腐ろうと、誰も省みやしない」

俺は胸倉を掴まれたまま、男の顔を見上げ、皮肉をたっぷり利かせて笑った。

「このチビ、余裕ぶってんじゃねえぞ！　テメエがどれだけ偉えんだってんだよ。ああ？」

「……」

こんな奴に絡まれていることが、途端にひどく可笑しくなってきた。

そうか、きっとこれは、キリストがクリスマスプレゼントにくれた、俺の同類って事なのか。あれだけ努力したって、俺はこんな頭の悪そうなチンピラと同レベルに過ぎなかったってことなのか。

「ふふ――そうだな。俺もクズになってしまった。あはは……」
胸倉をつかまれたまま、ケタケタと夢遊病者のように大笑いする俺を気味悪がったのか、コートの男は、思わず手を離した。俺はまだ顔が笑っていた。
「だからクズ同士、仲良くしようって言ってるんだ。この金受け取って、俺の前からとっとと消えろ」
「ああ？」
コートの男は、チンピラの本性を現し、声を荒げた。男の虚ろな目が、俺の目と合うと、俺は一刻も早く、この視線を目の前から消したいと思った。
俺は男の、胸倉を掴む手首を取って、それを払いのけると、左拳が男の顔を潰した。
俺は見た目よりも腕力も背筋もあるから、予想以上のダメージだったのだろう。男はあっけなく吹っ飛んだ。悶えながら、倒れて顔を抑えている。俺がチビだから絡んだんだろうけど、あまりに警戒しなさ過ぎ。
悲鳴が聞こえた。繁華街のど真ん中、俺の近くの通行人の足が止まった。
「テメエ！」
金髪の男が突進してきた。その拳が決まる前に、俺の電光石火の蹴りが左の肘に決まった。びきっ、という音が、小さく聞こえると、男は絶叫して、その場に膝を突いて、体を痙攣させた。
ゆらりと踵を返して、残る一人――ドレッドヘアの男を一瞥すると、男の目は既に泳いでいた。どうやらこいつらは、俺より年上だけど、本当の暴力に一度も携わったことのない人間らしい。
いつだって暴力の危険の中にいた俺が、こんな奴等に負けるはずがない・・・・・・
すぐに懐に入った俺は、ドレッドヘアの男の手首をねじ上げて、足を払った。男は拍子抜けするくらい簡単に体を宙に浮かせ、うつ伏せに落下した。俺は男の背中に座り、更に腕をねじ上げる。

「ひぎぃぃぃっ！　折れる折れる！　折れるって！」
男は安い仁侠映画に出てくる下っ端みたいな絶叫を上げた。
男の苦痛に歪んだ顔を見下ろしながら、腕を強くねじ上げ、パンクロックのシャウトみたいに激しくなる悲鳴に、俺は夢中になった。
これだ――俺が欲しかったのは、こうした圧倒的な暴力による搾取。
泣こうが、わめこうが、俺は相手を許さない。そんな自分が受けてきた圧倒的な暴力で、相手に恐怖を植え付けてやりたい。そんな破壊や人を傷つける行為に快感を覚えだす。
ずっと前から俺は、それを求める傾向があったんだ。何故もっと早くこうしなかったんだろうと思って、俺はその決断を出来なかった馬鹿馬鹿しさも手伝って、笑いながら男の腕をねじ上げていた。
「――」
だけど、すぐに俺に向けられた殺気を感じて、視線を上げる。
２０人ほどの強面男が小さな輪を作って、俺を一斉に睨んでいる。特攻服を着た、わかりやすいヤンキー。中には、金属バットや鉄パイプを持っている者もいた。
「……」
俺がそれを見て、腕ひしぎを解除すると、ドレッドヘアは四つんばいになって、グループの奥に消えた。
俺の目の前にいた、おそらくこの中のアタマだろう、赤いモヒカンに、前を少し開いてレスラー体系の上半身を見せる特攻服、琥珀色のレンズをした眼鏡、ユータよりはるかに大きい、悪役ヘビー級レスラーのようなガタイの男が、一歩前へ出た。僕も足が止まる。
「随分上等やってくれるじゃねえか。覚悟はできてんだろうな」
「……」
変な軽蔑の念しか起こらなかった。同時に、どこかで自分と同じつながりを感じる。それが、俺を一層孤独にした。
俺と、こいつら、何の違いがあるだろう。
俺が努力して掴んだと思っていたものは、こいつらのカツアゲほ

ども力がなかったんだ。何か奪う力すら、俺にはなかった。ただ奪われるだけの弱者のままだった。

俺はこうして弱い者いじめをするしかない、チンピラに過ぎなかったんだ。

だとすれば、俺の今までの軌跡は、なんて無価値……

繁華街の人波は、既に俺のまわりを既に避けるように進んでいた。今までは規則正しかった川の流れに、俺という石を置かれたように、人は俺を横目で見つめながら、足早に流れに戻っていく。

しかし子供は違った。血に飢えた子供は、面白そうなことが起こる前兆を敏感に感じて、その場に足を止めていた。繁華街を警備するガードマンに邪魔されないように、彼らはバリケードを張っているのだ。俺をこの中から逃がさないように。

俺はこの時、ヤンキーの円陣と、若者の円陣の、二重の包囲網に囲まれた。逃げ場がない。まるで金網デスマッチのリングだ。

アタマの男は、俺ににじり寄ってくる。俺の肩を掴む。まだ本気じゃないだろうけど、すごい力だ。こうして街で喧嘩している連中でも、強い奴は、筋トレとかして鍛えているのだろうか？　ということを考えた。気持ちは別のところにあって、恐怖もなく、まったく落ち着いていた。

「何落ち着いてんだ？　気にいら・・・・・」

言いかけると、アタマの男は、俺の前に崩れ落ちた。

「ぐあああああああっ！」

男が大型犬みたいな声を上げた時には、俺の左足が大男の股間に入っていた。

股間を押さえてもだえる大男に、特に何の念も抱かなかった。ただ、これだけ思った。

「無駄な啖呵を切る前に、するかしないか即決すべきだ。魏の曹操が、河北の袁紹を破った時、二人の歴然たる差は、そこにあった。決断の遅さが、袁紹を敗北に追い込んだんだ」

ボスを倒したので、俺はそこから出られると思ったが、あまりに

俺はこのグループの威厳を損じてしまったようだ。ヤンキー達は円陣を解いて散開する。

「……」

がらんどうになった心で、そいつらを見回した。

不思議だな。本当だったら、恐怖を感じる場面なのに。

――あぁ、俺、ここで死ぬんだ。

17年か。人を嫌い続けた記憶ばかりしか浮かんでこない。

もう、家にはリュートもいない。

もう俺は、死んで困るようなことは何もないんだ。俺が死んでもあの家は何の変わりもなく、悲しむ人もいない。

俺は自分をこんなゴミにしてしまった。だから俺は、方法はどうあれ、自分を壊さなければいけない。この怒りが殺意になって、誰かを取り返しのつかなくなる程壊してしまう前に。

「テメエ、口の聞き方に気をつけろよ」

俺の正面にいた、体の小さな猿のように身軽そうな男が言った。野球で言う、切り込み隊長風の男だ。

「ここにいる連中を怒らせたら、テメエ、生きて帰れねぇぞ」

「……」

俺の顔が笑みに歪む。この脅し文句、通じない者にはここまで陳腐なものか。

「ふふ――生憎、そんなに無理して生きたくもないと思っていたところでな」

「調子にこいてんじゃねえぞ！」

金属バットを持った一人が叫んだ。俺は、また何故か、可笑しくなって、笑ってしまう。

「そうだ。俺を壊してくれ。それが俺のクリスマスプレゼントになるから」

それを聞いて、20人が怒声一番、一斉に俺に飛び掛ってくる。もみくちゃにされると、俺の体はアスファルトに仰向けに倒され、顔に代わる代わる拳が入った。蹴りが俺の腹を踏み潰す。ダッフル

コートのトッグルが二つに割れた。ボロ雑巾のようにボコボコにされ、俺は路上にうつぶせに倒れた。

Insane

一人がエナメル靴で、俺の頭を踏みつけた。
「……」
目が開いていた。何をされたのかもわからなかった。自分は何故倒れたのかもわからなかった。目の前で花火が割れたような、そんな刹那がいくつかあっただけだ。
「チビがイキがってんじゃねえぞ」
「おい、こいつのコートから、財布を抜き取れ」
俺の頭を踏みつける男が、周りにいた一人にそう指示した。
その時、俺は頭の上にあるエナメル靴の軸足の足首を掴み、ぐい、と力を入れて引っ張ると、男はバランスを崩し、俺の横にどすん、としりもちをついた。
ゆらりと立ち上がる。ごほっと嗚咽すると、腹の奥から血が湧き上がって、口に溜まる。俺はべっとそこに吐き捨てた。びちゃっ、という音がして、血はアスファルトに落ちた。口元を腕で拭う。
正直、痛みはなかった。初めからなかったのかもしれない。痛みなんてものは、もう俺には届かない。痛みはおろか、人間らしい概念さえ、今の俺には空っぽなんだから。
「テメエ……まだやられ足りねえのか？」
「――今から１８００年前……」
俺は夢遊病者のように、ヤンキーどもをねめ回す。
「劉備が流浪の将だった頃、魏の曹操の大群が、彼の元に押し寄せてきた・・・・・」
「こいつ……アタマおかしいんじゃねえか？」
ヤンキー達は、不気味な男に怪訝な表情を向け、虚勢が止まった。
「劉備の旗下に、趙雲という武将がいた。長坂という戦場で、彼はまだ赤ん坊の劉備の子、亜斗を抱きかかえながら、曹操軍の大群の中を、鬼人の如く蹂躙して駆け抜けた……」

唇を切り、口の中を血まみれにして、淡々と俺は話した。
「その趙雲の武勇を考えれば、お前等の拳は、落ち葉が体にかすったのと同じだ」
「んだと？」
ひるみながらも、先頭にいた一人が漏らした。
その虚勢に、俺は途端苛立った。
今日の俺は気が荒い。俺は、さっさとメチャクチャになってしまいたかったから、こいつらを挑発して、舞台を整えているのに、相手がそれに乗ってこないので、それに苛立ったのだ。
お前等だってそれを求めているんだろう。だったらさっさと乗って来い――
「今の俺は、長坂の趙雲と同じ、死地にいる――」
「あ？」
そう言って俺は腰を落とし、一足飛びで攻めも守りも出来る態勢を作り出す。
「死にたいと願っている俺だが、無抵抗でこの命をお前等にくれてやるのも癪だ。少しは抗わせてもらうぜ」
「……」
1対20では、どう考えても相手が勝つに決まっている。だから相手は、如何に自分は無傷でこの喧嘩をおさめるかを既に考えているはずだ。
俺の構えを見て、目の前の連中はまた腰が引ける。先人を切ってかかれば、俺に返り討ちにされると感じたのか……
「どうした？　俺に構えさせておいて、逃げるのか？」
俺はもう待っているのもイライラして来て、もう一度火に油を注いでやった。
20人近いごろつきどもは、一斉に声を上げる。
ここに、大乱闘が始まった。
俺は先頭の一人の懐に入り、相手の間合いを封じ、相手のパンチを封じ込めると、すぐにみぞおちに膝蹴りを入れた。相手はすぐに

足元に崩れた。
「何でこんなに虚しいんだよ・・・・・・」
何の感情も抱けなかった連中の顔を改めて見回すと、空っぽの胸を少しずつ満たしていくものがあった。もう俺の視界は、真っ赤に染まっていた。
「教えてくれよ。俺は一体、何のために生きてるんだよ」
「オラァ！」
連中は、がむしゃらに突進してくる。誰かの拳が頬に入ったことで、俺は覚醒する。
近くにいた頬骨の浮いた男に、飛び上がって蹴りを入れた、男の頬が砕ける感触がしたような気がする。蹴りが入って、その男は吹っ飛んだ。俺は空中で腰をひねって半回転しながら着地すると、すぐに次の相手が向かってくる。一蹴りでごろつきを沈めると、何かの格闘ゲームでコンボを決めた時みたいに、周りから歓声が上がる。
繁華街は修羅場と化した。滅多に見られない、激レアな本物の乱闘を見て、血に飢えた若者達が、野次を浴びせたり、煽ったりしている。中には泣いている女の子もいた。
「助けてくれよ。どうしろっていうんだ、これ以上……」
俺は、得体の知れない感情――それは、痛みでも、憎しみでもない。もっと深いところで沸き上がるもの――それに心が駆り立てられ、何発も、何発も、連中を殴った。感覚でも、感情でもない。ただ、もっと深いどこかで、俺の全ては解き放たれ、目の前のもの全てを壊していった。
暴力によってその鬱屈から少しでも逃げたかった。本能的な暴力の衝動をぶつけることで、考えることを放棄したかった。それを本能的に選択したのかもしれない。
そう、視界まで赤く染める、この真っ赤な感情は、今まで理屈で押さえ込んでいた、俺の本能だった。俺の胸の奥で、怒りと憎しみを元に生成した怪物が、存分に力を解き放ったのだ。俺の胸の奥を、全て殺伐に変えて。

竹刀を横薙ぎに振られた俺は、体を倒してそれをよける。その間隙を縫って、特攻服が俺に飛び掛る。不完全な馬乗りになって、俺に拳を振り下ろす。俺は目の前に一瞬閃光が走ったけど、次の瞬間足で特攻服を蹴り退けていた。

心臓の音と、俺の荒い呼吸の音が、脳の裏に響く、

もう、２０人はいた敵の半数は、そこここに蹲っている。俺が倒したんだろうけど、もうそれを倒した課程が思い出せない。もうそんな余裕もなかった。

俺も、もう自分のだか、連中のなのか、わからないまま鮮血に汚れ――アスファルトも赤黒い染みがいくつも出来ていた。それでも目の前が真っ赤だから、その鮮血さえ識別できなかった。まさに血で血を洗うように、俺は連中を壊し続け、目に映るもの全てを、朱に染めていった。

ぶっと、口の中の血を吐く、奇跡的に、まだ体が動く。

「くそっ、こいつ、身のこなしが速過ぎて、決定打が決まらねぇ」

「下がれ！　もう一度俺がやる！」

三下を押しのけて、もう一度、俺が最初に倒した大男が出てくる。

「よくもやってくれたな！　今度は本気で行くぞ！」

大男の目は本気だ。俺を捕まえたら、殺すまで殴り続ける決意を固めた目だ。

「ふっふっふふふふふ……」

「あ？」

「くくくくくく……」

無性に可笑しくなった。

俺は――もうすぐ死ぬ。

息が荒くなり、血の流れる感覚もある。その実感が少し出てきた。

その感覚が、何だか無性に可笑しくて……馬鹿馬鹿しくて……

悲しいくらいに、笑いたくなった。

「イカれてるぜ、こいつ……」

誰かの声がした。

大男は特攻服を脱ぎ、シャツ一枚で僕と対峙する。
俺も身構える。
大男の突進。腕が伸びる。
それをかわす……
けど、その圧力に押されて、、後ろにのけぞった。
大男は足を止めずに、突進しながら俺の顔に頭突きを入れた。
後ろに飛んでいたからまだましだったが、鼻梁に激しい痛みが走り、鼻血がぼたぼたと溢れた。
その時、ぐらりと視界が回り、俺は肩膝を突いて、鼻を押さえた。
鼻血以外にも、もう出血が多過ぎる。脳味噌が揺れているのかもしれない。
男は好機とばかりにまた突っ込んできて、俺の体を倒して馬乗りになる。
俺は鼻を押さえていた右手を、大男の顔の前で勢いよく振った。
俺の手の中で溢れていた血が、大男の目元にぶちまけられる。
視界を奪われた男は、反射的に両手で眼を押さえる。その時少しだけ腰が浮いた。
俺は大男の馬乗りからするりと抜け出して、大男の顎にアッパーカットを叩き込む。
大男も片膝を突く。だけど僕自体が軽量だから、人体急所といっても決定打ではない。男が態勢を立て直す前に、僕は拳で男の顔に連打を入れた。
男は足を前に押し出すような蹴りで応戦。攻撃一手になっていた俺は、大男の蹴りに体が吹っ飛ばされる。
攻撃を受け流すように転がりながら起き上がり、距離を取る。
「はぁ、はぁ……ふふふふ……」
ダメージを与えるために、今の俺とこの大男は、ギリギリのところまでせめぎ合っている。生死の境が見えるほどに。
そうなると、血を目潰しに使うなんて、一度もしたことがない俺でも、体がそれを最適の判断だと教えてくれた。

よく見ると、大男も荒い息遣いの中、狂的に笑っていた。
お互いが命のやり取りをしている。お互い、形は違えど、世の中に淘汰されてきた命が、最後の輝きを見せる時――それを相手も感じているんだろう。
悪くない。最後の最後に、こうした命のやり取りが出来るまでに暴れられて……
もう、お互い壊れ、気が狂っている。
さぁ、最後だ。最後は正面から――
俺は、だっと駆け出す。
「よせ！」
目の前の大男が叫んだ。
次の瞬間、脳天に強烈な衝撃が走った。
俺の体は静かに倒れて落ちた。
「・・・・・・」
後ろから、竹刀で殴られたんだ。
実際なら、気絶するほど痛いはずなのに、全然痛くない。でも――
もう、起き上がれなかった。だけど、意識は残っていた。
気を失いたかった。眠れば、何も考えなくて済む――全てを忘れられるかもしれない。すがるものは、それしかなかった。
これが長い夢だったらいいと思った。そうじゃなかったら嘘だ。
俺はこれだけ頑張って、ここまで堕ちているなんて、ありえるはずがないんだから。
俺は血反吐にまみれて、そこに倒れていた。薄れ行く意識――なんてものはない。ただ動けないだけだ。体が動かないのに、意識は妙にリアルだった。
目も見え、耳も聞こえていた。倒れて、初めてギャラリーの野次が聞こえた。俺と同じ若者達が、血まみれになってヤンキーを叩きのめしたチビ助を、まるで英雄を見るような目で、見下ろしている。
立てー、という声も聞こえた。もっと見たいのだろう。俺の堕ちていく様を。

警察と救急車のサイレンが、意識の中で、頭に反響していた。俺から金を盗ることも忘れ、傷を負ったヤンキー達が一目散に逃げていく背中が、視界に映っていた。

ケースケ、と、俺の名を呼ぶ声が聞こえ、肩を揺すられた気がすると、意識は遠のいて行った。

Nightmare

誰かに殴られた時に見る夢は、いつも決まっている。
小学校の裏の古い神社。そこの境内の前に少年は立っている。
背が低く、幼い少年を、二十人くらいの子供が囲んで、口汚く少年を罵っている。
やがて弦に弾かれた矢のように、囲んでいる連中が、一斉に僕に飛びかかってくる。少年は掴まれないようにメチャクチャに暴れだす。多勢に無勢、掴まれて倒されたら終わりだ。
つるんで来る奴なんて、肝が据わっていない。少年の暴れ方に相手が怯みだした時に反撃。顔がビビっている奴から片っ端に、少年は渾身のストレートパンチを顔に叩き込む。
でも、夢中になっているうちに、クラスで一番体の大きな男子が、少年を後ろから羽交い絞めにする。少年はじたばたするが、もう抜けられない。じたばたする少年の手足を、他の連中が押さえつけて、体は大の字に開いた。
クラスのガキ大将が、少年のがら空きの腹に渾身の拳を入れる。拳は腹に深くめり込んで、少年は咳き込む。少年が身動き取れない姿を見て、周りの連中は彼を取り囲んで、嘲笑している。もっとやれ、と、暴力を煽っていた。
一通り殴られて、動かなくなると、縄跳びで体を縛られて、口をガムテープで塞がれ、神社に放置され、クラスメイト達は、少年に捨て台詞を吐く。中には唾を吐きかける奴もいた。そうやって、惨めな姿になった少年の姿を愉しんでから、彼等は帰って行く。その顔はとても晴れやかだ。これからドッチボールやろうぜ、という声が聞こえた。笑い声が、どんどん遠くなっていく……
神社の神主が、ボロ雑巾みたいな小さな体を抱き上げる。体を縛っていた縄跳びを解いてくれた。
少年は泣いていた。何で泣いているんだろう。殴られたことが悔

しいんじゃない。復讐の炎が、小さな胸に燃え上がっているんだ。
それを一人で抱えるには、あの少年の胸では小さすぎるから。
その炎が、苦痛となって、自分自身を侵食し、焼き尽くしていくことを、少年は知っていた――

――自分がうなされているのがわかった。そこで目が覚めた。
気がついた時、僕の前にはユータとジュンイチがいて――無精ひげを生やした男に、背の高い白衣の女性が立っていた。
うっすらと目を開けると、天井の白熱灯がまぶしかった。どうやら、どこかで鎮静剤を打たれていたらしい。頭は冷えていたが、気だるい眠気は、いまだうっすらと、僕の思考を支配していた。
「あ、先生、気がつきました」
脈を計るため、僕の手首を掴んでいたスレンダーな看護婦が、無精髭の男に報告した。
「ケースケ」「ケースケ」
僕の視線に、ユータとジュンイチがアップで入ってくる。
「――ここは……」
体を起こしたが、すぐに激痛が走った。僕は何とか持ち直し、ベッドの縁に体を預けて、楽な姿勢を取った。
「病院よ。牛若丸さん」
看護婦が、僕の顔を覗き込む。
「――病院？　――牛若丸？」
おかしな言葉を聞いて、僕は覚束ない頭で、状況を整理しようとした。
看護婦がそんな僕を見て、解説してくれる。
「あなた、繁華街で喧嘩して、ここに運ばれたの。すごく身のこなしが軽いから、あなたを見ていた人が、みんなあなたを、牛若丸、って呼んでたのよ。覚えてない？」
「……」

僕は額に右手をやった。額に包帯が巻かれているのを確認した。
「彼が近くを通りかかって、警察と救急車を呼んだの。随分うなされていたのよ」
看護婦はユータの方に掌を向けた。
「警察……」
「心配ない」
無精髭の男が、気色ばんだ僕を諌める。
「周りの人が言うには、君は金を取られそうになったから、抵抗しただけと言っていた」
「……」
天井を見上げながら、包帯の巻かれている頭を働かせる。
あの僕の醜態を見て、よく警察がそれで納得したものだ。誰が僕を弁護したのだろう。
――金を盗られることなんか、どうでもよかった。
ただ、僕は、怒りのままに感情を解き放っただけだ。
理屈で僕のアイデンティティは崩れかけていたのだから、もはや理屈には頼れなかった。頼るものは本能しかなかった。それがあんな形で爆発したんだ。17年分の憎悪を乗せて。
連中も僕と同じ。理由は違えど、腐った環境に身を置いているのだろう。
お互い、それを理解して生きていた。彼らは荒れ狂うことで、腐った環境を壊し、また、壊せることを信じ、そして僕は、腐った環境を凌駕するために努力することを選択した。
僕がやってきたことは、あいつらのやることよりも、はるかに高尚なものだと思っていた。だけど、大乱闘をやって、その選択に、大した差はないことを知った。
僕もあいつらの仲間になって、全て壊してやればよかった。そうしたら、こんな惨めな思いはしなかっただろうに……
僕は将来だとか、安全だとか、そんなことばかり考えて、何も出来なかった。だったらあいつらみたいに、全て壊してやればよかっ

た。壊す側に立った方が、ずっと楽だったと知った。今までの自分の無力さが、恨めしく、悔しかった。

だけど……

僕は結局、死ねなかったのか――

僕に残ったのは、この体の激痛と、醜態だけか――

――「またひとつ、伝説を残したな」

口を開いたのは、ジュンイチだった。どちらかと言えば熱血漢のジュンイチは、血の気が多い。デパートの屋上で、戦隊ショーを見た後の少年の目をしている。

「この病院に、お前のぶっ倒したヤンキーが、14人も運ばれてるんだぜ」

そう言われて、周りを見回すと、6人入りの部屋の、ベッドで眠っている他の患者は、皆僕がのした記憶のある連中だった。彼等の傷は、僕以上のものだろう。まだ体に感触が残っている。警察が来ていることを考えると、なんてことをしてしまったんだろう、と、今更ながら体が震えた。

「でもさ」

ユータが続く。

「何でそんなことしたんだよ？　ケースケらしくないぞ」

当然の質問だった。でも、先に述べたことを説明しようとしても、きっと理解してもらえない。ひどく身勝手で、抽象的になってしまう。やったことも過剰防衛だったことは、間違いない。どんな自己弁護も無意味だ。

「――わからない。絡まれてるうちに、もう考えるのが嫌になって……」

「つまりキレたわけか」

無精髭の男が、溜息をついた。

「最近の子供は、見境がないな」

「……」

確かに僕はとんでもないことをしたが、そう言われるのは気に食

わない。
　毎日ニュースをにぎわす大人の事件だって、キレたことが原因じゃないか。いかに少年犯罪が増えたといっても、大人の事件の絶対量の方がはるかに多い。たまに少年犯罪が起こって、センセーショナルにマスコミは騒ぐ。子供の事件を、マスコミは無責任に大きくする。子供のキレる傾向を、誇張して押し出す。
　お前等だって感情で動いてるんだ。自分のことを棚にあげて、子供の犯罪が起これば、よってたかって僕達を虐げる。大人の犯罪を軽量化するために、子供の犯罪が利用される。大人も子供も差なんかあるかよ。勝手なこと言いやがって。
　怒り混じりにそんなことを考えていると、既に医者と看護婦は部屋を出て行っていた。
「ケースケ」
「え？」
　ジュンイチの声で、思考が現世に帰ってくる。
「明日か明後日で退院できるってさ。骨も異常なかったから、全国には行けると思う」
「ああ、そうか……」
　小学生の時は、いくら殴られても、病院に行く程じゃなかったのに。ヤンキー相手だと、シャレにならない。でもこの激痛が、2、3日で退いているのか。人間の体って意外と丈夫なんだな。
　何よりも、僕の周りで眠っているヤンキー達は、目が覚めたらどこかに訴えたりするだろうか？　そしたら全国にだって当然行けないし、僕は退学になるかもしれない。あるいは少年院もありえる。
　そう考えると、今更だけど、体が震えた。チンピラに絡まれた時だって、こういう気持ちにはならなかったのに『怖い』という感情を、家以外で久し振りに思い出した。
　ユータが、皮肉な笑いを浮かべる。その笑い方は本当にドライだった。
「合宿が終わって、さぁ、冬休み！　って時、しかもクリスマスに

大怪我とはな」

まるで自分の夢だった全国大会出場など、何も気にしていないような口ぶりだった。僕の心中を察しているのかもしれない。昨日までは、僕がユータ達に、全国大会出場のため、と、口を酸っぱく言っていたのに。それが酷くみっともなく思えた。

僕の目の前にある、食事のお盆を乗せるテーブルに、ジュンイチがビニール袋を置いた。

「ここに来る前に買って来たんだ。せっかくクリスマスだし、食おうぜ」

その中には、厚紙で出来た箱に、４つのケーキが入っていた。ショートケーキ、モンブラン、チーズケーキにチョコレートケーキ。

――それを見て、今日初めて、今がクリスマスなんだって、実感できた気がした。

ジュンイチの並べた紙の皿に、プラスチックのフォークとショートケーキが乗って、僕の前に出された。僕の利き手の左手は、人を殴り過ぎて、さっきから包帯で吊られている。そうじゃなくても体中、ピクリと動かすだけでも痛かった。

ユータはチョコレートケーキ、ジュンイチはチーズケーキを取る。ユータはポケットから、細身の蝋燭を取り出し、１本ずつ、ケーキにそれを刺していった。

そして、持っていた百円ライターで、それに火を点ける。そして、僕以外、まだ眠っている病室の電気を消した。

「……」

暗い部屋に、蝋燭の光だけが、僕達の顔を照らしていた。

それだけで、心が温かくなった。

僕は小さな頃から、誕生日もこうして祝ってもらえたことがなくて……初めてこんなものを見て、少し、わくわくした。

僕の心は、こうして歪み始める前――ずっと子供だった時の心を邂逅し、心地よいほどに、今までの悩みが、少し、ほどけていった。

「これが病室じゃなければ、シャンパンでも開けたかったな」

ジュンイチは紙コップにソーダを注ぐ。シャンパンの代わりのつもりかな。

僕達は目の前のケーキの蝋燭を、各自吹き消す。電気を点けて、3人でケーキを食べた。

「いててて……」

利き腕が使えずに食べにくい上に、散々殴られて、切り傷だらけの口で食べるケーキは、もう味なんかわからず、ただ、痛かった。苺を口に入れると、その果汁が傷に染みて、梅干を食べたような顔になった。

ユータとジュンイチは、そんな僕の顔を見て、大笑いした。

僕も、口の中が血まみれになってるんじゃないかと思うくらい痛いけど、何だかそれがとても可笑しかった。痛みを感じることで、今自分が生き延びられたことを喜んでいるみたいだった。

「……」

あとはもう、いつも通りの3人だった。

それに気付いた時、僕の今日一日抱えた孤独が、光に照らされて消滅していくのがわかった。

そうか。今までは僕は、二人にも僕の本性を見せられず、いつかばれた時のことを恐れていたけれど……

きっと、僕達は大丈夫なんだ。

僕達3人は、いつだってこうして笑い合える。

お互い足りないところはあって、その世話に手を焼く時の方が多いけど……

それをお互い埋め合うことが出来る。

そして、どんなに辛くても、ボコボコに殴られた後でも、こうして笑っていられる。

僕の中に感じていた引け目や憤り、そんなものを取り払って付き合える。誰かが困った時、いつでも側にいてやれる。

僕達は『友達』なんだ。

「あ、そうそう、聞いてくれよ！」

思い出したように、可笑しそうな顔をして、ジュンイチが僕の顔を見る。

「ユータの奴、地獄の合宿と再試が終わって、久し振りに彼女に会って、デートしてたのに、外からすごい声がしたんだとよ。ギャラリーに訊いたら、超イケメンのチビ助が、牛若丸みたいに、次々大きなヤンキーをぶっ倒してるって言うんだ。それでこいつがその中心に行った時には、たくさん人が倒れてて。真ん中で頭から血を流して戦ってたのがケースケで、お前がヤンキーに攻撃を入れる度に、ギャラリーがお前のサポーターみたいに騒いでて。お前がぶっ倒れて、すぐ救急車呼んで、救急車に乗って、病院から俺に電話をかけてきて、俺もここに向かったんだけどな」

そこでユータを見て、親指でユータを笑いながら指差す。

「俺が病院に着いた時には、ユータがさ、病院の前で携帯片手に、誰もいないのに頭を下げてるんだ。合宿が終わって、今の彼女とやっと会うはずだったのに、お前を見つけて、彼女をほっぽり出して救急車に乗っちまったからさ。電話越しなのに、俺にも聞こえるくらいの声で、怒鳴られっぱなしでよ」

言いながらもジュンイチは笑っていたけど、その様は本当に滑稽だったんだろう。言い終わると、歯止めが効かなくなったように、豪快に笑った。

「うるせぇなぁ。しょうがないだろうよ。ダチが血まみれで倒れてて、体が動いちゃったんだからよ」

ユータは自嘲した。ユータは、ついさっき自分が振られたことを、何とも思っていないらしい。

気がついたら、笑っていた。

さっきまで、死にたいと思っていたのに、まだ自分は笑えるんだって、それだけで希望が湧いてくるようだった。

何でこんなことに気がつかなかったんだろう。2年も一緒にいたのに。

「C組のなっちゃん、1週間かけて、口説いたんだろ？　珍しく気

合が入ってたから、僕達、つい最近、おめでとうって言ったばかりだぞ？」

「いいんだよ、付き合う以上、悪者になる覚悟は出来てる。それに、俺はまだ、友情と愛を両立させられるほど大人でもない」

「へっへっへ、とか言って、未練タラタラなんだろ？」

ジュンイチがチャチャを入れる。

「言うなぁ！」

ユータは拳を上げるジェスチャーを見せた。

「……」

こいつらは、いつだってこうだ。僕が一度反省したら、もうそのことには触れずに、ほっといてくれる。

だから、どんなに辛い時でも、僕達はいつもこうやっていられるんだ。

「それに、いつかはシオリさんと付き合うのが、俺の夢だから」

「お前にあのシオリさんがついていくわけないじゃん」

ジュンイチが口を挟む。

「学校一の才女にして、学校一のカタブツだぜ？」

「一番はケースケじゃないのか？」

「――おい、そこで僕の名前を出すな」

そう言って、3人で笑っていると、突然、静かに病室のドアが開いた。

美しい女の子が、息を切らし、頬を赤くして立っていた。白のコーデュロイのセーターに白のPコート、空色のマフラーをしている。

「マツオカ……」

寝耳に水の出来事に、僕は一瞬、頭がショートしたような感覚に襲われる。表情も凍りついた。

今、一番顔を合わせづらい人が、そこにいた――

Place

シオリも、入り口のドアを開けたまま、息を切らせ、怪訝な表情をして立ち尽くしていた。
「どうして……」
僕の声が漏れる。
「おう、シオリさん」
ジュンイチが手招きする。混乱する僕をよそ目に、二人の反応は冷静だった。
「何で……」
僕は、首だけ二人の方へ向ける。
「俺達が呼んだんだ」
「心配するなよ、俺達は席をはずすからよ。ごゆっくり」
「おい、そういう問題じゃ……」
動けずに引き止める姿は、まさに病院コメディードラマのワンシーンみたいだった。ばたん、と、ドアが閉まると、病室に僕と、シオリだけが残された。
「……」
沈黙。
僕は天井を仰いだ。ありがちなパターンなんだけど、実際こんな状態にいると、何を話していいか、途方に暮れる。
くそっ、なんてこと……
この空間は、まるで悪意に満たされたように息苦しく、その重圧が僕の傷を抉るように疼かせた。
何かきっかけを探そうと思って、僕は辺りを見回す。そこで僕は初めて、自分が鮮血に汚れた服ではなく、病院の特徴のないパジャマを着ていることに気がついた。
さっきまで、二人が座っていたパイプ椅子が目に付いたので、僕はシオリに声をかける。

「とりあえず、座れよ」
何となく笑顔を作って、椅子を指差そうとする。
体のことを忘れていたので、筋を伸ばした瞬間に、体に激痛が走った。
「くっ……」
僕は息を漏らす。
「サクライくん――」
心配そうに、シオリが駆け寄ってくる。バッグを椅子に置いて、僕に手を差し伸べた。
「――大丈夫、心配ない」
僕はまだ自由の効く右手でを開いて、彼女を制した。
なんて恥ずかしいシチュエーションなんだろう。
「……」
僕は、痛んだ姿のまま、顔を上げられなかった。
シオリは、黙って椅子に座る。僕もなんとか持ち直し、背中をベッドの縁に預け、溜息を吐く。
本当は、動けるものなら、この場から逃げ出したかった。
なんと言っても、僕はタカハシ・ミズキに抱きしめられた姿を、彼女に見られていて――それで次に会ったのが、こんな状況で……
おまけに僕は、今日一日のことを思い返すと、彼女に何も言えない。
別の女とキスをして、挙句人の心を傷つけて、ヤケになって大喧嘩して、ボコボコになってここに運ばれて。
彼女の心に与えられるものに、いいものが何もない僕は、何も吐き出せない。
どうしよう。何言えばいいんだよ。クソ、二人とも彼女を呼ぶなんて、余計なこと――
あ――3人しかいないのに、ケーキが4つあるのは、おかしいと思ったんだ。
モンブランが一個だけ入った箱は、まだ僕の目の前のテーブルに

置かれている。
——そんな気遣いされても、僕はもう、彼女にかける言葉が……
「どうして……」
彼女の声がした。
その時、馬鹿でかいヤンキーのパンチにもビビらなかった自分の体が、びくっと反応した。冬の薄寒い病室で、包帯を巻かれた僕の体は、汗腺から汗が噴出す感覚までリアルに感じだ。
何故、こんなに恐いのか、僕は何もわからないまま、一度唾を飲み、顔を上げた。
「……」
目を見開いた。
彼女が、泣いていた。
俯いて、肩を震わせ、静かに嗚咽をこらえるような彼女の息遣いがして——それでも目をそらさずに、コートの裾をぎゅっと握り締めていた。
「……」
彼女の目から、大粒の涙が、静かにぽろぽろと落ちた。彼女の小さな拳に、涙が絶えず落ちる。
「あの……」
馬鹿、お前がつまってどうするんだ？　優しい言葉をかけるべきか？　でも——どう言えば……どう言えばいいんだ、こんな時。
「あの——どうしたの？　何で泣くの？」
シオリの潤んだ瞳は、冬の星空のように、弱々しいけれど凛とした光を、冴え冴えと放っていた。曇りのない、明鏡止水の瞳が僕と対峙している。
何て綺麗な女の子だろう、と、一瞬思った。
彼女のその美しさに、心を奪われかけた時。
僕の頬に衝撃が走った。
気を抜いていたので、すぐにはわからなかったのだけれど——
頬がじんじんして、やっとわかった。僕はシオリに叩かれたのだ

と。

別に痛くはなかった。ぺちん、という、気の抜けた音が、僕の耳に残留していた。シオリの紅葉のような手の、柔らかな皮膚の感触が、僕の頬に一瞬だけふわふわした感触を残した。

僕はその一瞬で、その意味をしっかり捉えきれなかった。頬を押さえることもせず、ぽかんとして、視線をシオリに向けたままでいた。

みるみる、シオリの顔が、くしゃくしゃになっていった。その顔は、僕の今までのシオリのイメージを、覆しかねないものだったけれど、僕もどうしていいかわからず、なるべく表情を崩さないように努力した。

「どうして……」

まるで情緒不安定になったシオリに、今度は僕は問う。わけがわからないまま、次に続く言葉を捜した。

「――心配したの……」

シオリは嗚咽でかすれるような声で、でも必死に訴えかけるように言った。彼女の目は悲しそうに僕を見ている。

そして、僕を睨んで、激しくまくし立てた。

「どれだけ心配したと思ってるの？　どれだけあなたが、周りを傷つけたか、わからないの？　エンドウくんもヒラヤマくんも、あなたが目を覚ますまで、ずっと心配してたんだから……」

彼女が怒鳴る姿を初めて見たが、後半の方、彼女の荒げた声は、嗚咽で詰まった。

「……」

僕は、彼女の言葉が痛くて、彼女から目を反らした。

その時、自分のした行為の愚かさが、骨身に染みてわかった。

あぁ……僕はまた、彼女を泣かせたのか。

僕が死んでも、悲しむ人なんかいないと思っていた。死んでも当然の酷いことをしたと思った。

もう、君も、リュートも、ユータもジュンイチも……

僕は全てを失ったと。皆の前に顔を出す資格も奪われたと思ったんだ。

だけど、本当は――

皆に置いて行かれることが、ずっと恐かったんだ。

顔を上げて、僕と彼女の視線がぶつかる。

すると彼女は、僕の手を両手で握り締めて――

また、すがるように泣いた。

「……」

初めて触れた彼女の手に、僕は呆気に取られていたけれど――

彼女の匂い、彼女の体温、彼女の存在に包まれて……

初めて心の底から、彼女の魂の場所を見つけた気がしたんだ。

今まで僕の心に触れ続けてくれた彼女の魂を見つけ出した嬉しさに、震えるような感激と興奮が、平穏へと変わって、僕を優しく包み込む。

「シオリ」

僕は彼女の名前を呼んだ。彼女は顔を上げる。

「……」「……」

僕は――いや、僕達は、まるで数年間、ずっと会えなかったような距離を越えて、ここに辿り着いたように、お互いの存在を確認して……

手を取ったことで、僕達の魂が、こんなにも惹かれ合っていることに驚きながら。

何も言わず、どちらからともなく、ぎこちなく抱き合った。

左腕が死んでいるのがもどかしい。女性の抱きしめ方も知らない僕だけど。

僕の肩で、震えるように泣く彼女の、その壊れそうな温もりがここにある。

不思議だな。もう2年も一緒にいて、今、初めて本当の彼女に会えた気がする。

「……」

あぁ、どうして君のことが、ずっと特別に思えていたのか、やっとわかったよ。

君は――僕に、生きていい、と言ってくれたんだ。

嘘や詭弁のない、真っ直ぐな言葉で。一生懸命に。

君は、悩みを抱えながらも、生きることにとても一生懸命で。

言葉が足りなくても、一生懸命に、僕をいつも励ましてくれて……

泣き虫で、本当は弱い娘なのに、いつだってすぐに、えへへ、と笑って歩き出せる。そんなひたむきに生きる姿が、とても眩しくて……

そんな君が、僕に笑顔でいて欲しい、と言ってくれた。人に虐げられ続けた僕も、笑って生きていい、と、言ってくれたんだ。

君が側にいるだけで、僕は頑張らなきゃ、って思える。言葉にも、その一生懸命な生き方にも、弱さも受け止めて、前に進もうとするその笑顔にも、君の存在全てが僕に力をくれる。

こんなに君の存在が、僕の中で大きくなっていたんだ。

こんなに僕は、君の笑顔や言葉に、励まされていたんだ。

もう、君じゃなくちゃ駄目なんだ。

そんな君を失ったと思って、僕は心が壊れたんだ。

だけどもう大丈夫。君のその涙を、もう二度と流させたりしない。

君だけは、もう絶対に、僕にも、どんな奴にも傷つけさせたりしない。

君の『居場所』を、僕は見つけたから……

「……」

何も出来ないまま、3分ほどそのままでいた。

僕はずっとこうしていたいような気がしていたが、彼女の激情が、少しずつ落ち着いてきたようだった。

肩の震えがおさまりかけて、ゆっくりと僕の胸から顔を離すと、気恥ずかしそうに乱れた髪を直すような仕草をしながら、僕から視線を避けた。

黙っている。その真意は誰にもわからない。恐らく彼女自身でも

処理できていない感情だろう。
「――ごめんなさい」
彼女は目を背け、言った。何が『ごめんなさい』なのか、その真意は僕には掴めなかったけれど。
彼女は自分の鞄をひったくるように取り、病室の出口に歩み寄ろうとした。
「マツオカ」
僕の呼び止めに、彼女は足を止めた。出口のノブに手がかかったまま、僕の方を向いてはくれなかった。
「――ありがとう」
自分でも驚くくらい、優しい声が出た。
何に対して『ありがとう』なのか、大元ではわかっていたけれど、それを説明する言葉は、うまく言葉に出来なかった。
「いつか――君のフルート、聴きに行ってもいいか？」
僕は言った。それでも彼女は振り向かなかった。しばらく俯いていたが、やがて「うん」と、小さく返事をして頷くと、そのまま走り去るように、病室を出て行った。

僕は、自然にゆっくりと閉まっていく引き戸を見つめながら、彼女のことを考えた。

以前も感じた、彼女の去った後に残る、ぽっかりとした空間――その絶妙な陰影に、彼女の面影が残っている。

僕はその面影を掻き分けて、彼女を探した。体に残る、彼女の余韻が消える前に。

「おい、妬けるな」

だけど、野太い声がして、僕の思考は中断された。僕は顔を上げた。

僕の前のベッドに寝ていたヤンキーが、気だるそうに体を起こして、僕の方を見ていたのだった。お互い、ベッドの縁に背を預けて、向かい合う形になった。

よく見ると、その男は、僕がはじめに股間を蹴った、ヘビー級悪役レスラーのようなガタイの大男だった。琥珀色の眼鏡を取って、その目は意外と普通の目だった。頬に湿布を貼っていて、腫れぼった、酷い顔をしている。確かに、アッパー決めた後、ラッシュを顔にぶち込み過ぎたからな。

「――聞いて――見ていたのか？」

「いい女だな。その前にいた奴等も、いい奴等じゃねぇか」

「――あぁ、本当に、そうだな……」

僕は溜息をつく。あの3人への反省と、あの姿を誰かに見られていた不覚を込めて。

こいつの声で、我に返った感じだ。とんだB級少女漫画の世界に、自分がはまっていたことが、今更ながら恥ずかしくなった。

「……」

僕達は向かい合ってお互いの顔を見る。

とても僕がここまで人を殴ったとは思えないほどに、男の顔は腫

れていた。
「お互い、ひでぇ顔だな」
男が無理に笑いの形に顔を歪めて言った。
「――ああ」
僕も何故か笑う。それだけで顔に鈍痛が走る。
「……」
不思議だな。あれだけ生死の境まで殴り合ったのに、相手を恨む気持ちさえない。どんな形でさえ、命を燃やして何かをやったことで、今は気持ちが晴れやかなくらいで……
「へ、へへっ……へへへへへへへ」
男も僕と同じなのか、照れ臭そうに笑っていた。
「ふ、ふふふ……あはははははは」
僕も笑えた。心の底から可笑しくなった。
その時、気付いた。
抑圧され、淘汰され、鬱屈した毎日を送っていた僕が、あれだけ命を燃やすように大暴れしたことで、随分と気分がすっきりしていることに。
僕とこの男は、ここまで大暴れして、そこまで突き抜けることが出来て、同じ気持ちを共有できているんじゃないかって、その笑顔を見て、思った。
「だけど俺はまだ、お前みたいなチビに負けたとは思ってないぜ」
いつの間にか、僕の呼称が、チビ、になっている。確かに乱闘していた時の僕は、ちっぽけな僕を表す言葉には、まあ的確と思われた。
「僕も勝ったとは思っていない。もうあんたとは二度とやりたくないよ」
「ははは！　お前の顎へのパンチは効いたぞ。顎が外れるかと思った」
「あんたの頭突きも効いた。今、歯が折れてないのを確認して、ほっとしたところだ」

僕は自分の鼻を、空いている右手でさすった。
「……」
僕は、自分の目の前に置かれる箱を見る。そして、僕は右手でベッドの縁を掴んで立ち上がる。右足はともかく、人を蹴りすぎた利き足の左は、立つだけで激痛が走った。
大男のベッドの横へ行き、皿がないので、僕は箱ごと大男に差し出す。
「モンブラン、ひとつ、余っちゃったんだ。余りものだが、良かったら、仲直りの印に」
「……」
男は呆れたように笑うと、ヤツデみたいに大きな手で、箱の中のモンブランをわっしと掴み、まわりのセロファンを取って、大きな口でそのままかぶりついた。一口でモンブランの約半分が口に入り、粗野だけど豪快にむしゃむしゃやっていた。
僕はその食べっぷりが、何となく気持ちがよくて、呆れるような笑みが漏れた。僕はベッドに戻り、もう一度、ベッドの縁に背中を預けて座る。
大男は、モンブランの残りを口に放り込み、指についたクリームを無造作に舐めながら、僕に聞いた。
「そういえば、あの女の前にいたのは、ダチか？　全国とか言ってたな」
「ああ」
この男に話しておくのもいいかもしれない。どうせ僕の運命は、この男達が握っていると言ってもいいのだから。まな板の鯉となった僕――この際、洗いざらい話しておこう。
「僕はサッカー部にいて、うちの高校のサッカー部は、来週全国大会に行くんだよ。だけど僕があんたのグループをボコっちゃったから、出場取り消されるかも知れない。僕はもう観念してるけどな」
溜息をついて、天井を見上げた。
今の気持ちは晴れやかだけど――全てが終わったんだ。全国に行

くことは、もう終わった。言葉にして、やっとそれを実感した。
僕は、どうにかしてそれを償わないと……
立ち直ったら、それを考えなくちゃいけない。だけど、それほど落ち込みもなく、どちらかと言えば前向きにそう考えることができた。
だけど、男はそんな僕をたしなめるように言った。
「バカ、こっちから売った喧嘩に負けた挙句、チクるような真似はしねえよ。1対20で負けたってのに、そんなみっともねぇこと、誰かにチクれるか！　グループ解散の危機だぜ」
「ははは」
僕は笑う。
「あんた、顔は怖いけど、なかなかいい奴だな」
「ははは、いい奴か。気持ち悪い」
お互いに笑顔をちぎって交換した。
「チビ、お前、名前は？」
「ああ――サクライ・ケースケだ」
「そうか。俺はミツハシ・エイジってんだ。これでも結構サッカー好きなんでな。国立行ったら、応援してやろう。それまで勝ち進めよ」
僕はその男と、向かい合ったまま、歯をむき出しにして笑い合った。
やっと僕は、悪夢から目が覚めたんだ。

僕はあれから、あの大男、ミツハシ・エイジと朝まで麻雀をしていた。

僕とエイジ以外の同室の患者――エイジの仲間達が目を覚ますと、僕達は体がボロボロだったけれど、誰かが持っていた、おもちゃ屋で売っているような小さな雀卓を囲んだ。

はじめエイジの仲間達は、自分達を壊滅的なまでにぶちのめした僕を仲間に入れるのを嫌がっていて、僕達に負けず劣らずボコボコだったのに、血の気をあらわにしていた。エイジがすっかり僕を気に入ったようで、文句がある奴は俺が許さねぇ、とかなんとか言って、周囲を呆れさせていた。

僕は麻雀はユータやジュンイチの家に勉強合宿とかで行くと、いつも両家の父親に誘われていたし、そこで随分鍛えられた。本当は手先も器用だから、いくつかイカサマもしようと思えば出来たけれど、皆指も満足に動かせないような有様だったんで、そのへんは平等だった。

だからお互いの手の読み合いのみの遊びだったから、僕はそこで連戦連勝だった。

「がぁぁー！　またこいつに振りこんじまったぁ！」

エイジの仲間の一人は、頭を抱えて、僕に点棒を突き出す。

「顔を見れば待ち牌が何か、見え見えだよ」

「ムカつく野郎だぜこのチビ」

８時間以上、夜通しそうしていて、逆に僕が高目を振り込んだ時には、エイジの仲間は大喜びだったけれど、結果的に僕はエイジの仲間達から、万単位のお金を巻き上げるほど大勝ちした。僕達の病室に、エイジの仲間達は全員集まって、がやがやと喧しくたむろしていたものだから、何度も巡回の看護婦さんに怒られた。

僕は小学校から、修学旅行などの行事に参加していないから、修

学旅行って、こんな感じなのかな、と思った。

だから、朝食を食べる頃には疲れも眠気もピークだったけれど、僕達はその頃には、皆で卓を囲んで、看護婦さんのスリーサイズ当てだとか、くだらない話をしながら飯が食える程度にはなっていた。

9時から僕やエイジ達はそれぞれ検査を受けた。

僕の怪我は、医者が舌を巻くほどの軽傷だったらしい。どうやら最後気絶させられた時、僕を殴ったのは竹刀だったらしいが、それが瘤になっている以外は、怪我はほとんどが打撲や打ち身で済んでいた。エイジ達曰く、僕は素早くて、有効打が当たらない上に、決まったという一撃も、身のこなしでダメージを軽減していたらしい。医者に言わせれば、僕のしなやかで柔らかい筋肉が、内部の臓器などの損傷を防いだらしい。一般人でこんな痣が残るほど殴られたら、二週間は最低でも入院らしい。

ただ、僕が寝ている間に、エイジの頭突きでもらった鼻血が止まらず、鼻の中を焼く処置を施したらしい。それも後ろに飛んでダメージを軽減させたが、それがなかったら、鼻骨骨折か、歯が折れていたのは確実だと言っていた。

僕はまだ顔に擦り傷や赤い痣が残っていたけれど、頭に包帯を巻く以外は、昨日に比べて随分軽装になった。鎮痛剤が打たれたからか、昨日は吊られていた左手も、蹴りまくって痺れの残っていた両足も、ある程度は動かせた。正午には退院手続きが取られた。

病院には母親が来ていて、持ち合わせのなかった僕の退院手続きをしに来た。

僕は自分で歩いて帰ろうとしたが、母親が車に乗れ、と命令した。別に親切心じゃなく、こんな顔で街を歩いたら、近所の人に見られて、変な噂が立つってことだ。

「……」

普通、今までこんな大怪我（見た目には）したことない奴が、こんな顔していたら、外で喧嘩でもしただろう、と、誰もが思うに決まっている。誰も家族が殴ったとは思わないに決まっているのに。

やましいことがあるって自覚があるから、そういうことまで心配するんだクズ野郎。

こんな機会でもなければ、家のベンツなんかには乗れやしない。僕は約7年ぶりに母親の運転する車に乗った。小学校の時は、こうしてよく塾への送り迎えをされていたんだけど。

「……」

助手席には乗らず、後部座席に乗った。病院で母親に会って、車内まで、僕は一度も口を開かなかった。

母親は車内で三言だけ、口を開いた。

「治療費を下ろして、私に払いな」

そう言って、銀行の前で車を止められた時。

「……」

「学校から電話があったわ。明日の１０時に、校長室で事情を聞かせろ、って」

「……」

「アンタ、埼玉高校を辞めたなんて近所に知れたら、私達が大恥かくんだからね。あそこを辞めたら、もうアンタに何の価値もないんだから」

「……」

家に帰って、リビングに上がると、親父が不機嫌そうに煙草をふかしていた。

髪の毛を掴まれ、顔に煙草の煙を吐きつけられた。煙草の煙だけでなく、酒と煙草を長年続けた人間の、胃腸の弱った口臭も混ざった強烈な臭いがした。

「お前、どこまでこっちに恥をかかせるんだ！」

そのまま投げ飛ばされた。僕は床に叩き付けられた。

「……」

「ガキが！　今は近所がお前を秀才だって言うから生かしてやって

るのによぉ、学校辞めたら、テメェ養う意味もねぇんだ！　マジでテメェ、追い出すぞ！」

「……」

僕がいつ、お前等に養われたよ。

もう高校の学費だって自分で出している。食事の世話だってなっていない。寝床の分の金だって払わされている。

「……」

あれ？　なら僕は、こいつらの見得のために生きているんじゃないとしたら……

僕が這いつくばっているうちに、親父は部屋を出て行った。

「……」

時間は４時４３分。

母親に何かを言われた時から今まで、二人の声に何かを感じる以上に、一日のうちに色々なことがあり過ぎた上に、眠っていないことで、心身が疲れきっていた。

部屋に戻ると、すぐに着替えて、僕はベッドに入った。

「……」

リュート――やっぱりまだ帰っていなかった。僕はあいつに見捨てられたのかな。

僕があいつに餌をやらなければ、あいつが生きられなくなる。だから、あいつを失った時に、僕の生きる意味もなくなったと思った。

タカハシ・ミズキ。ミツハシ・エイジ――色んな出会いがあって、馬鹿なことをして。

ユータ、ジュンイチ――全国大会に出場辞退になったら、僕を恨むかな。

そして――マツオカ・シオリ。

彼女を泣かせる原因も、二人と向き合うことの出来なかった原因も、この家から持ち出すどす黒い心が原因だとすれば……

僕は学校を辞めることも、選択肢の一つに入れて、彼女達に報いる道を探さなくてはいけない。

元々、大学に行く通過点として通っていただけで――
気付いたんだ。僕達はきっと、この先どんなに離れていても、顔を合わせれば笑い合うことが出来ると。学歴や自分の力なんかよりも、あいつらの方がずっと大事だと。
学校を辞めて、働いて――ちっちゃいアパートでも借りて、家族とのつながりをなくし、もっと自由な気持ちで、あいつらに会えたら。
そうしたら、少しはあいつらに、今までの事を償えるだろうか。
もう、彼女を二度と悲しませないように。
彼女は、僕のために泣いてくれた。その涙に報いるためには、学校なんかよりも、もっと大事なものがある。そう思った。
僕は、何とかして、あの3人に報いなくては……
――そんなことを考えると、両親に汚物扱いされた後だというのに、少しも引きずることもなかった。
親父に殴られた後、僕はいつだって自分の無力さに腹を立て、その度に力を求めた。
だけど、今は違う。
強くならなくちゃ、と思った。
僕のために泣いてくれた、少女の魂の安らぎを。
僕にいつも笑顔をくれた、あの二人の熱い心を。
そんな大切なものを守れる力が欲しい、と願いながら――僕はゆっくりと、安らかな眠りに、誘われていった。

ドンドン、という音に、僕は目を覚ます。
部屋は漆黒の闇に包まれていた。
寝ぼけ眼をぱちぱちさせながら、また部屋に響く、ドンドン、という音。どうやら部屋のドアを叩いているらしい。
ノックをするような礼儀正しい奴は、この家にいないけれど、中学時代、あまりにこちらの都合お構いなしに、僕の部屋に揉め事を

持ってくる家族に嫌気がさして、自分でラッチ錠を取り付けて以来、僕を呼ぶ時は戸を叩くしかないというわけだ。

「何だ……？」

上半身だけ起こし、暗い部屋で、時計を見る。アナログ時計だけど、針には蛍光部分があるから、大まかな時間はわかる。夜の１０時２０分を少し過ぎたくらいだった。

まだ、外にいる者が、部屋のドアをドンドンと叩く。

五月蝿いな……

鍵を外し、ドアを開けると、そこにはパジャマ姿の母親が、渋い顔をして立っていた。

「五月蝿ぇな。何だよ」

僕は頭を掻く。

「アンタ、私達に嫌がらせでもしているつもり？」

母親が、憎しみのこもったような目で僕を見た。

「はぁ……？」

何言いがかりつけてるんだ？　この女。

「うちの前に、バイクに乗った大男達がたむろしてるのよ！　特攻服を着て！　こんなこと今までなかった！　アンタがやったに決まってるわ！」

母親は僕に怒鳴りかかる。

「……」

大男、特攻服。

心当たりはひとつしかなかった。

僕はジーンズにカットソー、スタジャンという格好に着替え、頭の包帯を隠すため、ニット帽をかぶって外に出る。

僕の家は、広い道の路地に入ったところにある。玄関を出ると、目の前には道を隔てて商店街の隣の店がある。

左手の突き当たりに神社兼、神主の経営する、僕の通った幼稚園があり、そこから右に道が伸びている。

その神社の門の前に、数台のバイクを止めて、特攻服の連中が数

人、腰を下ろしている。
誰もが顔に真新しい傷があり、顔にシップを貼っている者もちらほら。
その中で、１９０センチはありそうな大男、誰よりも広い背中の男。
ミツハシ・エイジだった。
「よぉ、大将」
エイジは僕を見つけて、立ち上がる。
「昨日マブになって、家の場所も聞いてたからな。押しかけちまったぜ」
「……」
まぁ、いいけど。こいつらが来て、今更周りにどう思われても、僕には関係ない。
「何の用だ？」
僕はそう聞いた。
するとエイジは、僕に下投げで、バスケットボール大の物を投げてきた。
僕はそれを受け取る。投げた物は、フルフェイスのヘルメットだった。
「ドライブに行かねぇか？　乗っけてくぜ」
「ドライブ？」
「まあ、ちょっとした宴に招待だ」
「……」
宴……麻薬パーティーとかじゃないことは何となく予想できた。
こいつらはそういうタイプじゃない。金よりは、どちらかといえば、血が燃える場面を求めて反骨しているんだ。
既にエイジ達はバイクにまたがり、エンジンをふかしていた。僕はヘルメットを被り、エイジのバイクの後ろに乗った。

Drive

――初めてバイクというものに乗った。

国道に出る前に、エイジ達は途中で仲間と合流する。バイク集団は、３０台以上の編隊となった。

エイジ達は一般道でも８０キロ以下は出さない。信号だって無視しまくる――

と思いきや、そうではなかった。

スピードは出ているが、夜で人通りのない道でも、赤信号ではちゃんと止まった。

「お前等、信号無視とか、蛇行とかしないのか？」

赤信号で止まっている間、僕はエイジに聞いた。

「今日は特別だ。今は俺等のバイクに同乗しただけで、お前まで罪に問われちまう。せめてもの配慮ってやつよ」

「……」

信号が青に変わる。

エイジを先頭に、後ろについてくる連中は、綺麗にダイヤ型の編隊を組んでいた。見事だ、と思う。古の戦でも、陣立ての美しさは将の器量を表わすとされている。

「大丈夫か！」

バイクの音にかき消されて、ほとんど聞こえなかったが、エイジの声がした。

「寒い！」

僕は叫んだ。

冬のバイクは、ここまで過酷なものか。薄手のカットソーの上に、スタジャンだし、手袋もしていないから、バイクの冷気はそんな服を貫通している。

そのまま、２０分くらい走り続けただろうか。

人気のないところで止まる。

暗くてよくわからなかったが、目の前には、多分２００メートルくらいの高さの山が、樹木を茂らせて、目の前には舗装された階段が伸びていた。
「ここは……」
僕はヘルメットを取る。
「ついて来な」
エイジは僕を手招きして促す。
階段を上って、５分ほどすると、倉庫のような建物があった。既に誰かいるのか、建物の古さに比べ、それだけが妙に真新しい白光灯が、赤錆の浮きかけた倉庫を照らしている。雨ざらしにされた鉄クズが、建物の脇に積まれている。
建物の扉は、重い両開きの引き戸で閉ざされている。
「何だ？　ここは」
僕が聞く。
「わからん」
エイジが言った。
「随分前に潰れた工場らしいんだが、今じゃ俺らのたまり場だな」
エイジの取り巻きが二人先行して、一人ずつ両開きの引き戸を引いていく。エイジは悠然と、その中に入っていく。僕もついていく。
中には数人の男女がいて、天井が高い分、実際の面積より広く見える中は、真ん中のドラム缶から上がる炎が一際目を引いた。よく見ると、大きな材木がドラム缶に入っていて、これは彼らの暖房道具のようだった。成程、中はそのせいでとても明るく、暖かい。
中は外見よりも整備されている。工場時代の名残で、クレーンやら、ジャッキやらが残っているが、中にはゴミ捨て場から拾ってきたようなソファーに、雀卓、ダーツ、ビリヤード、卓球台、レトロなピンボールまであり、部屋の隅の棚には、ウイスキーやらブランデーやらがいくつか置かれていて、ボトルに名前が書いてある。
「へぇ……」
声が漏れた。学校じゃ不良扱いの僕だけど、基本優等生だらけの

学校にいた僕の、まったく知らない世界だと思った。
「エイジさん」
中にいた、中学生みたいな無邪気さの残る少年が駆け寄ってくる。
幼い顔にモヒカンがアンバランスだった。
「宴の準備は？」
「バッチリっす！」
「よし、じゃあみんなを集めろ」
元気のいい返事をして、少年は敬礼し、奥へ走っていく。
「……」
「大将、お前はこっちだ」
そう言われ、僕はエイジに手を引かれ、部屋の一番奥にあるソファーに、エイジと並んで座った。位置的に、このソファーが彼等の一番の上座なのだと思われた。普段は、頭のエイジしか座れないというような……
エイジの仲間を集める間、僕の前に二人の女性が来て、グラスを差し出し、ブランデーを注がれた。二人とも、埼玉高校にはいない、世の中の闇を前面に出しながら、妖艶さとたくましさを秘めたような、派手な女性だった。
「へぇ……エイジを倒したって言うから、どんなゴリラかと思ったら、いい男じゃない」
「……」
もう一人の女性が、エイジの差し出すグラスにブランデーを注いだ。
注がれながら、僕の方を向く。
「酒は飲めるんだろ？」
「――少しだけなら」
「そりゃ僥倖」
エイジはグラスを差し出す。
「――難しい言葉を知っているんだな」
エイジは悠々とソファーに座って、僕に自分の持っていたグラス

を差し出す。
「お前と義兄弟の杯を交わしたいと思った。それでここに連れて来た。迷惑か？」
「――いや」
僕もグラスを差し出し、ちぃん、と鳴らす。僕もエイジも、グラスのブランデーを一気に流し込む。それが流れた箇所に、焦げたチョコレートを胃に流し込んだような香と熱さが残った。
周りを囲んでいた男女の集団が、拍手をした。
やがてその倉庫に、７０人近い人間が押し込まれた。手には各々コップを持って。
「今日は、新しい仲間を、ヘッドの権限において紹介する。俺を昨日ここまでボコボコにした男、サクライ・ケースケだ！」
拍手。
エイジのアジテーションに、僕は頭を掻きながら、ぎこちなく頭を下げた。こんな状況に遭遇したことがないから、今はこの流れに身を任せるしかなかった。
「今日はこいつを、みんなに紹介するために連れて来た。俺はこいつを気に入った！　昨日喧嘩を売ったのはこっちだったから、侘びも兼ねての宴だ。失礼のないように」
「うっす！」
統制の取れた、目の前の集団の声。僕より年下みたいな少年や、女の子も数多くいる。
「その前に……」
さっきまで明るかったエイジが、急に目の睨みを効かせた。
「昨日ケースケに、慰謝料とか言って、カツアゲまがいのことをしたのは、誰だ！」
「……」
このビリビリする程空気を震わせる怒声は、うちのサッカー部監督のイイジマ並だ。
すごすごと前に出てきた３人。ドレッドヘアに、金髪に、坊主頭。

綺麗な顔をしていた。こいつら、記憶があいまいだが、あの後僕がのした記憶がない。四つんばいになって後ろに下がったが、あのまま逃げたか……

もう最初から段取りが決まっていたように、3人はエイジの前に歩を進め、正立する。

エイジは平手で思い切り、3人の頬を張る。大きな体に大きな手、3人とも足がぐらつく程のビンタを食らった。

「法度を破れば、ここにいる者みんな、この居場所を奪われるんだ！　罰として一ヶ月、アジトの掃除だ！」

するとエイジは、その大きな手で三人の首の後ろの袖を掴んで、買い物袋でも持つように、僕の前に3人を引っ張り出す。

「ほら、謝るんだ！」

エイジに言われ、3人は僕におずおずと頭を下げた。

それで手打ちってことになったらしい。まあ、僕はもう別に気にしてはいなかったんだけど。

気を取り直して、乾杯の音頭をエイジが取ると、皆が各々に騒ぎ始めた。

「なぁ、さっき言ってた法度って、何だ?」

僕は隣にいたエイジに聞いた。

「あぁ、ちょっと待て……これだよ」

エイジは、ソファーの後ろにある金庫から、レトロな巻物を持って来た。

僕はそれを開く。

「……」

誰が書いたのかは知らないが、それは新撰組の法度そのままだった。

しかも巻物にボールペンで。

あの3人は、士道不覚ってことで、罰せられたのかな。

宴とは、要はエイジの仲間達に、新しい仲間として、僕を紹介す

るというものだった。バーベキューセットをいくつも持ち込み、食事をして、酒を飲みながら、馬鹿騒ぎするという単純なものだ。

エイジに勝ったことで、僕はやたら女の子にはもてるし、男には憧れの的みたいな顔をされるし、引っ張りだこだった。

何でも、暴走族とは、大体がバックにやばい人達がいるらしいが、エイジ達のグループはそうではないらしい。学校の成績も悪く、親に疎まれたり、初めから親がいないような、人生の落伍者のような子供が行き場をなくして、この倉庫のようなたまり場に集まって、いつの間にかこういう大勢力の反骨集団になってしまい、腕っ節のあるエイジがアタマをやることになっていたんだそうだ。

エイジ達のような人間は、秩序がなくなると、悪さしかしないが、集団でいることで、一種の秩序が生まれるらしい。それでも血の気の多い連中だから、世の中に気に入らないことがあると、昨日のように、ああして暴力に訴えたがる奴もいるらしい。

別にそれを否定をするわけじゃない。ここにいる皆、それぞれに陰惨な人生だったんだ。自分を不必要といった世界を壊してやろうと思ってもいいが、昨日のような、集団で罪もない人から何かを奪い取ることは許さない。それが彼等なりの掲げる義、ルールのようだ。

そんな、義を重んじるエイジの琴線に、僕は触れることが出来たようで。

どうやら、皆僕のことを気に入ってくれたらしい。エイジは僕と喧嘩した時の、魂の高揚というやつを饒舌に語っていた。それは、僕があの時感じたテンション、あの時見えた光景と、ほぼ１００％合致していた。

「……」

想像よりも、居心地は良かった。人見知りのうえ、大勢の食事に慣れていないから、あの合宿の打ち上げ同様、ほとんど喋れなかったけど……居心地の良さは感じた。

二時間くらい、僕はダーツやビリヤードに誘われ続けたけど、さ

すがに疲れてきて、僕は酔い覚ましとか口実をつけて、一人、表に出ていた。

倉庫の熱気は想像以上で、外に出た時、現実世界の冷気の存在を知った。

山の中にある倉庫は、外に出るととても静かで、僕は酔って少しふらふらした頭に空気を入れたくて、山を登った。

頂上には、もう5分も階段を登れば着いてしまった。とは言っても、そこも木が生い茂っていて、特に何があるわけでもない。月光が木々の間から入り込んで、樹木の作り出す隙間――スクリーンから、僕達の走ってきた国道や、その奥の町並みが見下ろせるだけだ。

僕は草地に無造作に腰を下ろす。樹木の間のスクリーンは空に向き、そこには星と、白く光る上弦の月があった。

「……」

月明かりは、まるで氷のように白く、冷たい。

さっきから、この先のことを、ずっと考えていた。

僕は、今では馬鹿なことをしたとは思っているけれど、ミツハシ・エイジと戦った時、血の騒ぎを感じたことは確かだった。

だから、親元を離れ、学校を辞めて、このグループに入って、好き勝手に暴れて、ああやって、たまに馬鹿騒ぎする、アウトローな生き方も悪くはないと思う。

家族に心を縛られている今と比べれば、気楽だし、何にも縛られない。

結局僕も、今はこの連中と同じ。秩序を失った状態で……それに、これだけの人数がいれば、結束と知略で、でかいことをしようと思えば出来る。それに失敗しても、死ぬるべくして死ぬだけだ。座して死を待つよりは、僕の性に合う。

だけど――

そうして、たまに喧嘩なんかしているのは、楽しいかもしれないが、シオリや、ユータ、ジュンイチに報いる道だとは思えない。僕は学校を辞めても、あいつらと付き合うのだとすれば、あいつらに

恥じる生き方は出来ないんだ。
マツオカ・シオリは、僕にもっと、自由に笑っていい、と教えてくれたけど、彼女の言う「自由」というのは、こういうことじゃないはずなんだ。
返事は明日の朝に迫っている。それまでに、少しでも考えなくちゃ……
がさっ、という足音がして、僕はびくっと体を反応させ、振り向く。
暗がりに巨大な影……熊かと思ったが、埼玉のこんな小山に熊がいるわけがない。
ミツハシ・エイジだった。
「考え事か？」
「――あぁ。悪い、抜け出して」
「別にいいさ。元々強引に誘ったんだ」

「考え事か？」
「――あぁ。悪い、抜け出して」
「別にいいさ。元々強引に誘ったんだ」
エイジは缶ビールを二つ、手に持っている。そして、僕の隣に座った。
「飲めよ。クソ寒い中のビールも、またいいもんだ」
僕はビールを手に取った。口をつける。
「昨日の女のことか？」
エイジはビールに口をつける。
「可愛い娘だったなぁ。あんな綺麗な娘、初めて見たぜ」
「……」
わからなくなる。もっと彼女と話す時間が欲しい。
僕が彼女のことを、どう思っているか、これからどうやって彼女に接するか。
「なぁ、ひとつ聞いていいか？」
その悩みの相談役として、こいつは不適当かもしれないが、僕は聞く。
「もし僕が、お前らの仲間に入りたい、って言ったら、どうする？」
「……」
僕はもう一度、ビールに口をつけ、月を見上げる。
「はは、お断りだ」
エイジが静かに、吐き捨てるように言った。
「お前みたいな喧嘩が強くて、頭もいい奴が入ったんじゃ、アタマの俺に、関東一体シメてやろうって欲が出ちまう」
「……」
これが、誰に報いる生き方でなければ、僕の知略を暴力に使うのを、面白いと考えたかもしれない。諸葛亮孔明や、太公望の如く用

兵を用いて、修羅の世界で名を上げ、兵を作る。そうして勢力を拡大しているうちに、ある種の高みも見えてくるだろう。

死ぬことを望んでいた時なら、それもいいと思っただろう。

だが――いつまでもそんなことをしてはいられない。そうしているうちに、ヤクザなどの組織に迎合され、時代遅れの思想にいつか淘汰される時が来る。

血を燃やすには不自由しないが、それだけでは駄目だ。

「それは冗談だが……」

エイジもビールに口をつけた。そして、僕達が元来た道の方を見て、言った。

「あそこに溜まってる連中は、俺と同じ、生まれながらに与えられなかったか、それを失った連中だ。親と折り合いが悪かったり、いじめを受けたり、友達に裏切られたり、みんなスネに傷を持っている」

「……」

「かく言う俺も、母親が俺を産んですぐ死んで、飲んだくれの親父と一緒に過ごして、家がつまんねぇし、成績だってよくなかった。母親がいないってことで、ダチを家にも呼べなかった。俺は何もかもが気に入らなくなって、そのうち自分の腕っ節が人より優れていることを知った。気がついたら、こうなってた。他の連中も似たようなもんだ。幸せになる方法がわからないまま、ああしてるんだ」

「……」

「だから俺は、あいつらを守ってるのさ。あいつらには、今のあの場所が全部なんだ。あそこがなくなったら、どこにも居場所がねぇ。だから、組織になって、あいつらの居場所を奪う奴とは、俺達が間違っていたとしても、戦わなくちゃならねぇ」

「……」

そうか。だからあの時、僕はこいつらと、共通点を感じたんだ。

こいつらは、与えられるものを与えられなかった。だから、自分でそれを勝ち取るか、奪うかしなければならず、力が必要だった。

あの倉庫は、自分達が勝ち取った居場所として、奴等の誇りだったはずだ。
やり方は違っても、その根っこは僕と同じだったんだ。陰惨な運命を認められず、必死に抗っている。
「だけどお前は、もう守るものがあるじゃねぇか。だったら、俺達の仲間になるのには相応しくねぇ」
「……」
「あの二人のダチも、あの娘も、いい連中じゃねぇか。見てて羨ましいぜ」
「……」
こいつは全てわかっているんだ。僕の中にある守るべき存在も。そしてそれが何なのかということも。
「同級生なんだ。僕の」
だから、少し今の悩みを話したくなった。僕を理解してくれたこの男に。
「でも、僕はお前等相手に、あんな大暴れしちゃったから、明日学校に行ったら、退学を宣告されるかも知れない。いや、間違いなくされるだろう。そしたらあいつらとも離れなくちゃいけないから、何とかそれでも僕の道を見つけなくちゃ……」
「……」
エイジは少し考えていた。
そして、一度月を仰いで、一度大きく頷いた。
「ついてこい。お前に見せたいものがある」

僕達は、さっきの倉庫に戻ってきた。
引き戸を開けると、轟々と炊かれている火のせいで、中はとても暖かい。中の者達はそれぞれ酒を飲むなり、隅に座って話し込むなり、煙草を吸うなり、自分の時間を過ごしていた。
「……」
思った。あぁ、ここはここにいる全ての者達の家なのだと。

ここには心がある。血がつながってなくても、分かり合える仲間がいる。ずっとここにはいられないけど、ここには安らぎがある。

昔はこういうのを見たら、弱者の傷の舐め間と思って、鼻にもかけなかっただろう。

だけど、今ならわかる。ここにいる者達も、これを本当に、自分達の守りたいもの、場所として、一生懸命もがいているのだということも。

「みんな、聞いてくれ」

エイジはよく通る声で号令をかけた。団員の各々の手が止まる。

「大事な話があるんだ」

エイジの顔は、喧嘩の時とは別の意味で、鬼気迫る感じだった。

団員達は、怪訝な顔をしながらも、エイジのただならぬ雰囲気を感じたようだ。座っている者は立ち上がり、背を正してエイジに注目する。

「……」

僕はこの中で、唯一こういう時、どうしていいかわからなかったので、入り口の引き戸を閉め、そこに寄りかかり、腕組みをして、奥のソファーの前に立つエイジを見ていた。新入りだから、一番後ろだ。

一度、倉庫がシーンと静まったのを確認して、エイジはひとつ咳払いをした。

そして、言った。

「俺は、このグループのボスを降りる」

――その言葉の後、倉庫内がどよめきに包まれるのに、2秒もかからなかった。

僕自身、それを聞いて、「んっ？」と、体が反応した。部外者の僕が聞いていていい話なのか、少し首を傾げた。

一番後ろにいるから、団員の動揺が一瞥できる。もう喧々諤々と言った感じ。相変わらず火も燃えているし、このままだと錯乱して、誰か火に突っ込みやしないかと思うほどだ。新撰組じゃないが、古

には、不安な時に火というのは、恐怖を煽るものとされてるしね。
でもこの団員達は、エイジの脱退が、この居場所の根底を揺るがすと本気で思っている。それが部外者の僕にもわかるほど、目が不安に脅えていた。
「エイジさん！　何で！　何でですか？」
血の気の多そうな、若い団員が聞いた。
「はいはいはい、お前らの話は後で聞くから、静かに！」
エイジは両手を開いて、小刻みに下に振る。
動揺していても、エイジの言うことはよく聞くようだ。３０秒ほどで、ざわめきが収まった。
もう一度、ざわめきが収まったのを確認して、エイジが話し始める。
「勘違いするな、何もお前達を見捨てるというわけじゃないんだ」
その前置きひとつでも、少しは団員が考えを知ろうと、耳を傾けやすくなる。動揺が和らいだ。
「知っての通り、俺達は世間の吹き溜まりだ。力も金もなく、こうして身を寄せ合って生きて、邪魔をする奴がいたら、ぶちのめすしかなかった」
「……」
「だが、俺は昨日ケースケに負けた。あれから俺は、どうも今までの毒気が抜けてしまってな……腕っ節しか取り得のない俺だが、もう喧嘩をする気力が湧かなくなっちまった」
その一言で、団員が一斉に踵を返し、僕を見た。皆、僕を睨んでいた。
僕自身は寝耳に水だから、え？　僕のせい？　という顔をするしかなかった。
「別にケースケに倒されて、プライドに触ったわけじゃないんだ」
エイジの一言で、団員はまたエイジの方を向き直す。
「俺は昨日、ケースケと同じ病室にいたんだ。そしたら、ケースケが気を失っている間、ダチが来て、そのダチはケースケが目を覚ま

すまで、付きっきりでいてな。あいつのために涙を流す奴もいたんだ」

「……」

「拳をつき合わせた時は、ケースケも俺と同じ、人からクズだと言われ続けて来た奴で、同類だと思ってたからな。改めて興味が湧いて、病室でケースケに話しかけてた」

「……」

「ケースケと俺は、ボコボコの顔だったけど、一緒にいたらすげぇ笑えた。一日中麻雀やって、笑えているうちに思えた。今まで人に不必要だとレッテル貼られて、クソみたいな世の中を呪っていた俺が、幸せな人間を僻みの目で見ていた俺が、こうして人と笑い合えるんだって、思ったんだ」

「……」

「俺達は、世の中で幸せに生きてる連中に反骨してた。でもよ、俺達だって、そんな奴等と笑うことは出来るんだって、わかったんだ。俺達は、頑なになっていたか、それを諦めていただけだったんだよ。まだ間に合うんじゃないか、って、思ったんだよ」

「……」

誰もが、そんな話に耳を傾けていた。

自分達の諦めた幸せを、鼻で笑いながら――それはポーズで、彼らは必死で求めている。そんな感情が痛いほど伝わる沈黙が、皆の顔も見えない僕にまで伝わった。

そして、僕も――

まだ間に合う。エイジが気付いたことは、僕にも言えることだ。

やったことは悔やんでも仕方ない。ただ、それを取り戻すことは出来る。

守りたいものがあるのなら、そのために戦い続ける。それだけだ。

「俺はボスからは降りる。けど、お前等を見捨てやしない。もし俺と、そんな人並みの幸せに向けて頑張りたいって奴がいたら、何もわからねぇ同士、頑張っていける『同志』になる。もう上も下もね

ぇし、もう俺は、世の中を壊そうなんて思わねぇ。勿論この倉庫は、俺達のホームのままだ。その上で俺達は、この倉庫以外にも、世界を広げなきゃいけねぇ」

「……」

とは言っても、誰もその幸せの求め方を知らず、この倉庫の居心地はすこぶるいい。そこから新しい一歩を踏み出すのは、結構な勇気がいる。

そう言っても、ここから動けない奴はいるだろう。

「一度、考えてみてくれ。俺達にも、幸せになる権利があるっていうことを」

そう言うと、エイジは団員の間を縫って、一人倉庫を出て行く。

「……」

残された連中は、神妙な面持ちのまま考えている。狼狽するように、キョロキョロ辺りを見回したり、隣の人に話し掛ける奴もいた。

「考えろ」

混乱するのが予想できたので、気がついたら僕が口を開いていた。団員は僕の方を向く。

「僕もまだ、エイジが言うような幸せは手にしたわけじゃない。正直僕自身も、エイジと殴り合って、友達が来て、笑ったり、僕のために泣いてくれたりして——自分にはいらないものだと思ってたものの大事さに、昨日気づいたばかりだ」

「……」

新参者の部外者の言葉だけど、エイジが認めた男というお墨付きのせいか、割と耳を傾けてもらえている。

「僕が君達の大好きな団長を変えてしまったのなら謝る。だけど、君達にも幸せを求める力も権利もあるってのは、本当だし、エイジは君達にも幸せを掴んでほしいと今は思ってる。別にグループを分裂させたいわけじゃない。今まで通り君達は仲間で、もっと広い世界を見たい奴は、エイジが力を貸すが、無理強いはしないってだけのことだ」

「……」

「僕もエイジと同じ、まだ見ぬ未来を掴みたいと願う仲間だ。だから、君達とも仲間だ。だから、一緒に頑張れる。皆側にいるんだから、頑張れるんだよ」

もう自分でも、何を言っているのか、何を言いたいのか、よくわからなかった。

たまらなくなって、一人外に出る。

エイジは倉庫を出てすぐのところで、背を向けて、煙草をふかしていた。

「名演説だったぜ。リーダー」

僕は背中越しに声をかける。

「……」

沈黙。

でも――

僕のこの先の道、まず何をすべきか見えてきたな……

エイジ達も新しい道を進み始めた。

それは、エイジが僕へ見せたかった、『辛いことがあっても頑張れ』、という、僕へのエールなのだと思ったから。

僕もここから、新たな一歩を踏み出す――

Prostrate

次の日は、朝から雪が降った。
朝、校長室で僕は校長と対峙している。
頭にまだ包帯の巻かれている僕は、左右に顧問のイイジマや、担任のスズキ、教頭、生徒主任など、多くの教師が固め、まるで法廷みたいな位置関係となった。学校のストーブの効いた部屋で、校長室は、中においてある観葉植物が気の毒な程暑い。
「幸い、1対20での君の正当防衛ということと、和解が成立していることで、今回の騒動は不問となった。サッカー部の全国大会出場も問題はなかった」
校長が椅子に座ったまま、腕を前で組んで、言った。
正立している僕は一度、息をつく。本当に良かった、と思う。
「しかし、君は入学当時から、素行が悪過ぎる。度重なる授業ボイコットや、乱闘騒ぎも何度もあるね。職員会議で毎回素行に問題ありだと名が挙がっていた。それで今回は、学校外でこの騒ぎだ。これが他校の生徒だったら、栄光の埼玉高校の名に傷がついていたところだ」
「……」
校長は、机に置いてある書類を、バシッと叩き付ける。
「これだけ我が校で、度々これ程馬鹿げた問題を重ねてきた生徒というのは、前代未聞なのだよ！　サクライ・ケースケくん！」
「……」
ここまで誰かに、馬鹿扱いされたのは、生まれて初めてだ。僕は拳を握り締めて、悔しさを堪える。
自分が、成績の面では劣等生となることはなかったから、人間性を否定されるのはともかく、馬鹿者扱いをここまで受けるのは初めてで、この責められ方に僕は打たれ弱かった。
「今までは君の成績があまりに優秀だったので、黙認を取っていた

のだが、今回は被害が大き過ぎる。目撃者もいる。全国大会に出て、君がテレビにでも映れば、現場にいた人間が気付いて、暴力高校と騒ぐ連中が出るかも知れん。二度とこのようなことが起こらないよう、今回は職員会議でも、君に厳しく退学を勧める声も上がったのだがね」

「……」

やはり、退学勧告か……前例も多すぎるし、それ以外の可能性はまずないとわかっていたけれど、やっぱり実際言われると、ちょっときつい。

「何か言うことはあるかね？」

「……」

だけど、この時の僕は、一点の迷いすらなく、心は驚くほど穏やかだった。絶体絶命のピンチだというのに。

昨日、ミツハシ・エイジに教わったこと――運命は変えられる。まだ諦める時じゃない。

だとすれば、僕は……

「――返す言葉はありません」

そう言った。しっかりと校長の顔を見て。

「確かに僕は、この学校で数々の問題を起こしてきました。授業にだってまともに出ていません。生意気な態度も多かったと思いますし、先生方には、さぞかし不愉快な思いをさせたと思います」

僕は、「申し訳ありませんでした」と、頭を下げる。

僕は初めて教師連に謝罪した。今まで生意気な態度ばかり取った僕の口から出る謝罪に、左右を固める教師からは、意外そうな顔をする者や、嬉しそうに含み笑いを浮かべる者など、反応は様々だった。

「その末に、この騒ぎで――弁解のしようもありません。所属のサッカー部の、全国大会出場を不意にするような軽薄な行動を取って、大変ご迷惑をおかけしたと思っています」

そう言うと、僕はゆっくりと、校長の机の前に歩を進める。そし

て、机の前まで来て、立ち止まる。
「な、何だね？」
校長が狼狽する。普段の素行から、殴られるとでも思ったのか。
「……」
僕はポケットから二つの封筒を取り出し、校長の机に置いた。
封筒にはそれぞれ『退部届』『退学届』と書かれていた。
それを出すと、僕は踵を返し、元いた場所に戻り、また校長と正対する。
「――責任を取る、ということかね？」
校長は、二つの封筒をかざしながら言う。
「最悪、それもやむなし、と考えています」
「……」
一同の沈黙。
「だけど、まだ可能性があるなら、僕はそれに賭けてみたい。それを裏切った時のために、僕はその二つの届出を、先生方に預けておこうと考えました」
「はぁ？　何を言ってるんだお前は」
教師の一人が、そう吐き捨てる。
「僕は、沢山の人の世話になって生きているということを、今の今まで忘れていました。今回のことで、それに気がつくことが出来て――この学校には、僕がその借りを返さなくちゃいけない人がいるんです。もしチャンスがあるのなら、僕はここに残って、その人達に受けた恩を少しでも返せるように生きていきたい」
「……」
普段仏頂面の僕が、教師相手にここまで必死に訴えたことはなく、部屋中が僕の訴えに飲まれていた。
僕はその場で膝を折り、手を床に付く。
「お願いします。僕は、まだこの学校でやるべきことがあるんです。どうか、この学校にもう少しいさせてください」
僕は深々と、地にこすり付けるくらい深く頭を下げた。

これが僕の答えだった。

別に、家族とのわだかまりが消えたわけじゃない。自分の境遇を、家族のせいにしたい、という感情がなくなったわけでもない。

学校に残るということは、あの家にも残るということだから、僕はこれからも、あの家族に悩まされ、心にストレスを溜め込む日々は続くだろう。

この選択で、また皆を傷つけるんじゃないかって不安は、きっと、ずっと残る。学校を辞めた方が、僕の平穏な生活は訪れるだろう。

だけど、僕はそれよりも、あいつらと一緒にいたい。

もうカッコつけるのも、我慢するのもやめて、辛くても精一杯、あいつらと向き合う道を探したい。今なら、それが出来る気がするから。

それが僕が昨日、ミツハシ・エイジ達と出会って決めた答えだった。

「へぇぇ、あのサクライが土下座してらぁ。落ちたものだな」
また誰か教師の声。だけど僕は動かない。
土下座なんて、生まれて初めてした。
だけど、不思議と嫌な気分ではなかった。初めて自分が、自分のために必死で考えて、前に進めている実感があった。その決断に価値があると、素直に思えるから。
「サクライ、顔を上げろよ」
頭上で声がした。顔を上げると、イイジマが僕に手を差し伸べていた。
僕はイイジマの手を取り、立ち上がる。するとイイジマは、僕の小さな体を自分の影に隠すようにして、こう言った。
「先生方、あのプライドの高いサクライが土下座までして頼みごとをしてるんです。もう一度くらいチャンスをやってもいいんじゃないですかね」
「イイジマ先生！　しかし彼には前科があります！」
「こいつは今まで甘やかし過ぎたんですよ！　他の生徒に示しがつきません！」
「学校の汚点を作り出したんですよ！　そいつは！　また同じことを繰り返す！」
口々に周りの教師連は、僕を批判する。
しかしイイジマは、一度それを制してから、言った。
「学校の恥と言いますが、サクライはうちの部が、赤点続出で出場辞退の危機に追い込まれたのを、合宿で部員の再試の面倒を見て、全員合格に導いてくれました。それに比べて、他の先生方は、年末は忙しい、と言って、誰も協力をしてくれなかったではないですか。あなた方は、サッカー部が全国大会に行くことを、学校の誇りだと思っていらっしゃいましたか？」

「ぐっ……」

痛いところを突かれ、教師連は苦い顔をする。

「そんな我々が、サクライに、学校の恥、なんて言える資格はどこにもないですよ。サクライがあの時頑張ってくれなければ、我々は出場辞退をする他なく、既に学校の恥を晒していたでしょう。私は、どうせ一度はかいた恥であれば、サクライが土下座までした心意気を買いたいと考えています」

「監督……」

あのイイジマが、僕のことをここまで考えてくれたのは初めてだった。ユータ中心のチームで、いつも僕を便利屋扱いして、僕の考えなど一度も考慮してくれなかった男が。

イイジマは校長に歩み寄り、校長から退部届の方を受け取ると、その場でそれを二つに破った。

「何だかんだ言って、色んな意味で全国には、お前のおかげで出られるようなものだからな。俺はサービスで目をつぶってやる」

イイジマのこの行動がターニングポイントとなり、結果僕は、もう一度だけ猶予を与えられ、退学届は預けられたまま、結論を保留されることとなった。

嫌々やったサッカー部の勉強合宿だったが、教師があれに協力しなかったこと、僕が結果を残したことで、他の教師の反論効果は決定的に弱まった。イイジマになし崩しにされるような形で、今日のところは収まった。

まさか、こんな形で交渉の決定打を手にするとは。人生ってわからないものだ。

僕は教師連に一度頭を下げ、イイジマと一緒に校長室を出る。

雪の降る日の廊下はとても寒く、誰もいないから、その寒さが更に際立った。廊下の窓から、牡丹雪が庭の木々に積もっているのが見えた。

「はっははは、いやぁ、他の先生がサッカー部に誰も協力してくれなかった、いい腹いせになったよ。久々に面白い会議だった」

イイジマは校長室を出ると、からからと、痛快そうに笑った。
「……」
僕はこの時、退学阻止に成功した安堵感に、胸を撫で下ろしていた。
「監督」
僕は頭を下げる。
「ありがとうございました」
「よせ、気持ち悪い。お前が素直に人のいうことを聞くなんて、似合ってない」
「……」
それでも僕は、しばらく頭を上げられなかった。初めて世の中の大人の親切が、身に染みた気がしたからだった。
「俺は、雪でグラウンド使えないから、屋内で練習してる部員のところに行く」
イイジマはそう言ったので、僕は顔を上げる。
「あ、じゃあ僕も」
「いや、いい」
そう言うと、イイジマはポケットから、小さな封筒を一枚取り出した。
「お前が来たら、これを渡すように、吹奏楽部から言われてるんだ。招待状だって」
「招待状？」
イイジマから、女の子らしい、白のレースのようなデザインの封筒を渡された。僕はそれを開いて、そこに書かれる、女の子らしい丸文字の文に目を通した。
合宿の打ち上げで振舞ったカレーのお礼に、僕個人のための演奏を、部員全員で披露したい、というものだった。
確かにさっきから、校内には吹奏楽部の木管楽器の音が響き渡っている。吹奏楽部の引退も年明けだから、最後の追い込みだろう。
でも、吹奏楽部ということは――

タカハシ・ミズキも、マツオカ・シオリもいるということか……
心拍数が少し上がった。あの二人にどういう顔をして会えばいいか、こういう向こうからの誘いなんて、想定の中に入れておらず、ちょっと焦る。
「全国大会まで、もう3日だが、サービスで休みをやる。前日まで気分転換に行って来い」
気分転換――これを提案したのも、ジュンイチ達だろうか。
でも、お膳立てなどどうでもよかった。やっと僕は奴等に対し、無条件に感謝しはじめたらしい。
笑っているようで、僕のことを心配してくれている奴等の事を。

吹奏楽部顧問のタカヤマは、進学校では重点を置かれない、肩身の狭い、学校唯一の音楽教諭だが、彼女が吹奏楽部の指導を受け持ってから、吹奏学部は県大会優勝候補の常連となった。
女性教師のほとんどいない埼玉高校で、若く、繊細な印象のタカヤマは、学校のマドンナ的存在だ。昼休みに、女子限定の悩み相談室を、音楽室で開いているらしい。
僕自身、授業中や暇な時間に、音楽室でピアノやギターを弾いているので、タカヤマとも面識がある。授業中だというのに、僕とギターと彼女のピアノでセッションしたことさえある。ある意味この学校で僕が一番懐いている教師かもしれない。
イイジマに言われ、校長室に僕がいるということで、職員室でタカヤマが僕を待っていた。軽い挨拶を交わした後、音楽室に向かった。タカヤマが音楽室の引き戸を開けて、僕はそれに続いた。タカヤマは、手を二回叩いて、声楽で鍛えた、よく通る声を発した。
「みんなー、今日は、特別ゲストがやってきましたー」
子供向け教育番組の、歌のおねえさんみたいなノリで、僕を一瞥し、手を差し伸べる。
「サクライ・ケースケくんでーす」
僕の入場で手を止めていた部員達は、そこで大拍手。誰もが、一

度は僕の頭に巻かれた包帯に目をやった。どうやらそのことで学校が大揉めになっていたのを、もうほとんどの生徒は知っているようだった。多分サッカー部の誰かから漏れた情報だろう。

僕はどんな状況かまだ判別できずに、頭にクエスチョンマークを点灯させていた。

まず、音楽室を見渡す。

先に見つけたのは、タカハシ・ミズキだった。クラリネットを持っている。僕と目が合うと、口元に立てた人差し指を当て、動揺するな、とサインを出した。

音楽室の奥、窓際の席に、マツオカ・シオリが、細い銀色のフルートを華奢な両手に握り、僕に向かって拍手していたのが見えた。

僕と目が合うと、微笑みかけてくれた。

「……」

何なんだ、この胸のドキドキは。

その笑顔が、ここまで僕の中で、存在を大きくしていたんだ。

これは、恋だろうか。

その、飾らない、素朴な笑顔が好きだった。

何も信じられないような僕の周りで、その笑顔だけは全て信じられるような気がした。

だけど僕は、人の愛し方も、好意を囁く方法も知らない。

彼女を抱きしめたって、僕は彼女の魂を壊さないように気を遣うだけで精一杯で。

彼女とどうなりたいか、どうしてあげたいか、僕には一片の答えもない。

この歯痒さを、愛と呼ぶのなら、僕はその愛に身を焼いているってところだな。

だけど、愛だ恋だと言うことに慣れてない僕は、まだこの感情を、歯痒さってことにしておこう。

いつかわかる時が来るまで、その言葉は取っておくんだ。

僕が、曇りなく彼女を愛した時まで。

目が合ったのが、気まずく、気恥ずかしかった。
何といっても、あの、病室での出来事――思い出すだけで照れ臭い。そんな自分が気持ち悪くて、それを隠す。
「はーい静かにー。今日はサクライくんに、今までの練習の成果を披露したいと思います」
ピアノが置かれているのは、段差のある、一段高いところ。一段高いその上座に座らされ、皆が楽器のスタンバイをする。何だかどこぞの国の総統やら、大将軍と呼ばれている人物になったような気分だった。僕一人のために、こんな沢山の女の子が歌を披露してくれるなんて、何だかむずがゆい展開だ。
拍手が止んで、僕はタカヤマに、されるがままに、パイプ椅子に座らされた。部員達は、ピアノの前に、扇形（僕に言わせれば、鶴翼の陣形）に並べられた、各々の席について、タカヤマの持つタクトに、真剣に目を注いでいる。
タクトが艶やかな線を、テンポよく描き、その先に、全員の神経が向けられる。
奏でられた曲は、Ｍｒ．ｃｈｉｌｄｒｅｎのＨＥＲＯだった。いつも窓から聞こえる吹奏楽部の演奏で、僕はこの曲を聞いた覚えがない。いつ練習したのだろう。
――そういえば、シオリが僕を無敵のヒーローみたいに扱っていた時があったな。そういうことで、この曲なのかな。
僕は譜面は読めるが、楽器は我流で覚えたから、校内で弾いている曲も適当だ。だから、音楽に造詣があるわけでもないし、弾くジャンルも、クラシックからアニソンまで、分け隔てない。そんな僕だけれど、荘厳かつ重厚な、多くの金管楽器の音は、僕に吹きつける突風のように、心を揺さぶってくる。
心地よい余韻を残して、タカヤマのタクトが止まった。皆がそれぞれの楽器から唇を離した。トランペットだとか、ホルンなんてものは、操るのにとんでもない肺活量が必要なのだろう。女の子の細身のどこに、あんな肺活量が宿っているんだろう。ユータがボール

を自在に操る姿に、僕は初め魅せられたものだが、彼女達が楽器を自在に操る姿に、次第に僕は魅せられ、のめり込んでいた。

僕は椅子から立ち上がり、スタンディングオベーションしていた。

「うまいこと言えませんけど――素晴しいです。感動しました」

しかしその感情とは裏腹に、言葉が圧倒的に足りなかった。何も感じなかったと勘違いされるかもしれない。でも、心は感動していた。久し振りの感情だ。

気もそぞろなまま、おもむろに肩を叩かれ、我に帰る。振り返ると、同級生の女の子の一人が、音楽室に立てかけてある、アコースティックギターの一つを、僕に差し出していた。

「何？」

「サクライくんって、授業中、よく楽器弾いてるよね。生で聞きたいなぁ、なんて」

「……」

いつの間にか、僕は吹奏楽部の女の子に囲まれていた。皆きらきらした目をして。

「――というか、はじめからこれが目的で、招待しただろ」

そう言うと、目の前の女の子は舌を出して照れ笑いした。

「……」

少し黙っているうちに、女の子独特のテンションで、もう断ることはできない雰囲気になっていた。ご丁寧に、既にチューニングまで完了しているギターを強引に持たされると、他の娘が譜面台、脚台まで用意してくれた。

「……」

もう逃げ場はない。観念して僕もギターを構えた。

「リクエストは？」

僕はギターを軽く鳴らして、チューニングを確かめながら、誰に聞くでもなく言った。

「サクライくんの好きな曲で」

「好きな曲？」

「私達、サクライくんが今、何を考えているか、何が好きなのか、知りたいもん」

「知りたい？」

僕は首を傾げる。

僕が何を考えているか――か。

それを今、一番伝えたい人は――

「聞くまでもないが……これ、歌も歌うんだよな？」

僕がそう聞くと、あたぼうよ、とでも言いたそうな顔で、皆が揃って頷いた。

「はぁ、歌は得意じゃないんだけど……」

僕はふぅ、と溜息をつく。そして、ギターをかき鳴らす――

「寒いのが嫌いなの」と君が言ってた

「早くこの季節なんて終わればいいのに……」

そう僕も思う
君を悩ますモノなんてこの世から消えればいい

「人込みが苦手なの」と君が言ってた
「なんだか上手く息ができないの」と
じゃあ何が出来る？　僕何が出来る？
そればかり考えてました

あの頃叶わぬ想いなどないように思えたんです
著しく日々は流れ出して止まってはくれないが

笑って泣いて二人描いた未来が見えてますか？
届くと信じて歩けていますか？
大人になってハルを探して
流れる涙の中で聞こえてくるのは
「あなたはいつでもそのままでいいの」――

歌もギターも拙かったが、次第に歌うことに迷いがなくなり、僕は更に続けた。
もはやヤケクソだった。まだ、僕は彼女への思いを、恋だの愛だの言えないから、想いの暴走を、調子外れな歌でごまかしていた。
最後のフレーズを鳴らし終えて、目を開けると、吹奏楽部の部員の顔が、とても真剣だった。
ギターを膝の上に置きながら、僕は拍手の嵐の中、ただ唖然としていた。自分の歌なんかで感動してくれるなんて、思ってもみなかった。
そうだ、彼女は――
シオリの方を見ると、僕と目が合った。彼女は顔を上気させて、そのまま照れ臭そうに笑みを浮かべては、俯いてしまう。

一瞬複雑な思いが去来するけれど、今はそれでいいと僕は思う。
何であれ、彼女が少しでも、微笑んだから。
「なんか、心にずしっと来た……」
「初めて、サクライくんの本当の声を、聞いた気がするよ」
誰かがそう言った。
きっとそうなのだろう。僕には力があった。だけど、心がなかった。
そんな心で生成した言葉は、外に出ても、決して相手に響くことはなかった。
言葉だけじゃない。僕のやること全て——全ては僕に心がなかったから。結果は出ても、誰の心も響かせることはなかったんだ。
だけど、今日、歌った声——彼女に喜んでもらいたい、という気持ちは、確かに存在したから。
エイジの言ったように、こんな僕でも、心を取り戻せるのかな。

その後も吹奏楽部のリクエストは絶えず、僕はギターやピアノを、何度も何度も弾いていた。怪我明けで握力も弱っていたから、普段よりも指が上手く動かなかったが。
ある意味、部活よりしんどい。誰かに見られているってだけで、楽器を弾くのはこれだけ緊張するものか。
——いや、違う。
まだ、マツオカ・シオリと話せていない。
まだ、伝えたいことが伝えきれていない。そのせいか。
「ごほっ、ごほっ」
もう喉が潰れかけている。さっきから咳に痰が絡む。
そんな時に、ちょうど昼食時になった。皆は音楽室で、手持ちの昼食を食べる。
「サクライくんは、お昼は？」
吹奏楽部の同級生の一人が聞いた。
「あぁ……持って来てないな。校長室の後、招待されるなんて、思

ってなかったから」
そう言った僕の声は、早くもちょっといがらっぽかった。
「あ、じゃあ私達のお弁当、ちょっと分けてあげるよ。だから、一緒に食べない？」
「……」
女の子が５０人近く、男は僕一人……
おまけに、マツオカ・シオリもいるし……
気まずくて、逆に疲れそうだ。
「いいよ、悪いから」
「ていうか、サクライくんがものを食べてるの、見たことないや」
「普段、何食べてるの？　ダイエットの観点からも、興味あるな」
「……食堂で、コーヒーでも飲んでくるよ。うがいもしたいし」
そう言い残して、僕は一度音楽室を出る。
「そっとしといてあげなさい。彼も色々戸惑いがあるのよ」
扉を閉めると、顧問のタカヤマが僕をフォローする声が聞こえた。

――食堂は閉まっているが、自販機はある。温かい缶コーヒーを買って、外に出て、食堂の入り口にドアに体をもたれて、そこから見える裏庭を眺める。
今朝から降る雪は、早くも積もりかけて、食堂の外から見える針葉樹には、うっすら雪が積もっている。
ホットコーヒーで温まった吐息が、白く染まる。ドライアイスが口に張り付いてるみたいに
「……」
僕って奴は、どうしてこう……
人といることに慣れてないから、どれだけ人といることを望んでも、たまにはこうして一人にならないと、気持ちの整理が出来ない。
基本的に一人が好きなんだろう。それはもう、一生治らないかもしれない。

そんな僕が、どうして今は、誰かのために一生懸命に生きたいと思うのだろうか。僕はいまだにそれは自分の中で、理由が見つからないでいる。

でも……

少しずつでも頑張ろうなんて、昔は思わなかったのに、今は素直に思える。

それだけでも進歩だと、思うことにしよう。

あのミツハシ・エイジだって、困難な道を自分で選んだのだから。

もう一度缶コーヒーに口をつける。

「……」

「たそがれてるわね」

そう声がした。僕は声のした方向を向く。

校舎の方から、渡り廊下を歩いて、タカハシ・ミズキがやってくる。

「……」

僕の横をすり抜け、ミズキも食堂の自販機でジュースを買ってくる。

「随分殴られたらしいわね。大丈夫?」

ミズキは、そう声をかけてきた。

「……」

僕の顔からは、絆創膏や包帯は取れたが、まだ若干痣や傷が残っているし、額のあたりに包帯が巻かれている。

「あの状況で、よく抜け出せたな」

「教室に、忘れ物を取りに行くって言ったの。だから、長くはいられないわ」

彼女は舌を出す。

「――ごめんなさい」

ミズキは僕の前で、頭を深々と下げた。

「何で?」

僕は突然のことに少し動揺しながらも、聞いた。

「私が、あなたに無理を言いすぎて、苦しめたから、あの後すぐ、こんなこと……」
「……」
彼女のせいじゃない。あのままでは遅かれ早かれ、僕はこうなっていただろう。
自分の命や存在を、無意味だと思っていた、あのままでは。
そして、これくらいまで痛めつけられて、初めてわかることもある。
でも――それでも。
「いや、謝るのは僕の方だ。君を――傷つけて」
僕も頭を下げる。まるで親戚の新年の挨拶みたいに。
「でも驚いた。あなた、前だったら、みんなが歌え、なんて言っても、絶対に歌うような人じゃなかったから」
「……」
確かに。そう言われれば、自分でも、何やってるんだろう、って感じ。
ちょっと前は、自分でもわけのわからないことはやらないのが、僕、サクライ・ケースケという人間だった。
ただ、そんな生き方も、案外悪くないって、ちょっと思えただけ。
「色々あって。それがちょっとすっきりしたんだよ」
「そっか。やっぱり」
「え？」
「私は、どうやらシオリの代わりにはなれなかったか、と思って」
「……」
「シオリと、何かあったんでしょー？」
ミズキは、僕が最初に会ったときに見せた、あの遠慮のない笑顔を見せて、僕の目を覗き込む。僕を子供扱いするように。
「……」
何でだろう。この娘だって、別にシオリとの仲を引き裂こうってわけでもない、悪い娘じゃない。むしろとても魅力的な女性だと思

う。それは、勿論性的な意味を除外してだ。
なのに、何でこの娘じゃ駄目なんだろう。何で、マツオカ・シオリが特別なんだろう。
――きっと、あの娘は、僕の生きる意味になってくれるからなんだろう。
家を出る瞬間、死ねる瞬間。そんな、楽になれる時を待つのみだった僕が、少しでも、前を向こうと思える。
状況は何一つよくなっていないのに、今の僕は、彼女のそんな思いや言葉だけで、生きていけた。生まれて初めて、自分が生きていると実感できた。
まだ、自分の生きる理由なんてわからないけれど。
一人だと、目の前が暗くて何も見えない道も、彼女と一緒なら、前を向ける。
彼女と一緒に、未来を探したい。
そして、出来ることなら……
僕も、彼女の力になることができたら……同じ未来を見れたら、最高だ。
「お互い、自分の道を見失っていただけなんだ……彼女は、その道を否定しないでいいと、僕に気付かせてくれたんだ」
僕は缶コーヒーを握り締め、雪を見つめたまま、言った。
「君も……寂しさを埋めるために、自分を犠牲にしたり、自分を否定することはないんだ。君は君だ。誰かの安らぎのために生きているわけじゃない」
「……」
「僕も君も、その道を探すんだ。昨日、その間違いに気付いたってことに出来れば、決して遅くないし、怪我しても、悪いものじゃない。僕と君が昨日したことも、きっと無駄じゃない」
「……」
沈黙。
「はは、駄目だ、僕は」

僕は右手で後頭部を掻く。
「どうも上手くない言い方だな。もうちょっと、前向きになれる言葉が出ればいいのに」
そう言って、ミズキの方を見た。
「――そうね」
その返事が、何に対してなのか、よくわからなかったけど、ミズキはそう言った。
そして、ふぅ、と呆れたようなため息。
「あなたの眼、相変わらず隠し事が出来ないんだから」
「え？」
「もう、シオリに夢中っていうの、まるわかりすぎて、笑っちゃうくらい」
「え？」
僕はかあっと、顔が熱くなる。
そんな僕を見て、ミズキはまたため息。
「何だか、馬鹿馬鹿しくなっちゃうわ。あなたを好きでいても、もう駄目だってわかったから」
「……」
「でも――」
言いかけて、ミズキは僕の目をじっと見据える。
「あなたの眼、嘘や裏切りなんて微塵もない、一途過ぎるほど真っ直ぐな瞳は、とても魅力的だわ。私を見てくれなくてもね。私から最後にお願い。これからも、ずっとその眼を忘れないでね」
「……」
「ていうか、早く好きなら好きって言っちゃいなさいよ！　シオリだって、あなたのこと、ずうっと好きなんだから！」
最後、ヤケになったようにそう激励された。
――ありがとう。
聞こえないように、僕はそう呟いた。

Ｒｅａｓｏｎ（後書き）

この話でケースケが歌った曲は、アンダーグラフというバンドの、「君の声」という曲です。まだケースケは自分の気持ちを恋愛感情かは自覚できていないので、今はただ、その人の力になりたい、っていう、今のケースケの心情にぴったりかな、と思ってこの曲を選びました。

Snow

長居をして、既に時計は6時を回っていた。
喉がいがらっぽい。あれからリクエストが多くて、別の曲も歌わされたり、吹奏楽部の演奏とセッションしたり、ピアノも弾かされたし、体には気だるい疲れが溜まった。
音楽室を出て、一人――一度部室に行って、サッカー部の連中に迷惑をかけた挨拶をしておこうと思ったが、もう誰もいなくなっていた。
外はまだ雪が降っていて、靴が埋まりそうなくらい積もっている、今日はリハビリがてら、歩いて学校に来たから、僕は校門へ歩を進める。
ざくっ、ざくっと、僕が雪を踏む音だけが静かにこだまする。静寂に包まれた世界は、雪だけが息をしていた。
学校を照らす、僅かな街路灯が道を照らして、世界は闇に包まれていた。
傘も差さずに、僕は着ているジャンパーのポケットに手を入れて、校門をくぐる。
暗闇で、先があまり見えない校門から、もうひとつの校門までの一本道――ふと僕は立ち止まって、左手のサッカー部のグラウンドを見る。
広いグラウンドは、雪に覆われて、一面の銀世界だった。グラウンドの四隅にある街灯が、ぼんやりとそれを照らしている。その光の外側は、何も見えなくて……
僕はグラウンドに入る。真ん中にひとつ、誰かが片付け忘れたのか、ひとつだけサッカーボールがあった。
僕はそこに歩を進め、つま先でひょいとボールを上げ、リフティングを始めた。
怪我の後のボールの感触と、またここでサッカーが出来るという

ことを噛み締めながら。
ジーンズの先がビショビショになっても、それが嬉しくて、僕はボールを蹴り続けた。
だけど、怪我をしていることを忘れて、ヘディングでボールを受けたら、頭に痛みが走った。ボールはコントロールを失い、雪の中に、ぼとりと埋まった。
「……」
空からは、雪が降り続く。
傘を差すことも忘れて、僕はまるで、初めてサッカーを覚えたばかりのように、楽しい気持ちでいっぱいだった。
ボールを拾おうと、そこに歩を進める。
そこでふと、目に入る。
金網の外、片手に傘を差し、白のコートにマフラー、美しい黒髪が伸びて、雪に埋まってしまいそうなくらいの華奢な体の少女。
マツオカ・シオリがそこに立っていた。
「……」
「……」
吐く息はお互い白く染まり、だけどこの瞬間、息も出来ないような感情の濁流に飲み込まれる。
それは、この前ああして抱きあったことへの気まずさとか、今までのことの贖罪の気持ちとか、そういうものではなく、もっと単一的——シンプルなものだ。それ故に、気がつくと、彼女の視線に、僕は確かに心を奪われている。
だから、今は彼女の前で、ぎこちないけれど、苦手な笑顔が浮かぶ。
そんな僕に、彼女は笑顔を返してくれる。
それだけで、僕は幸せな気持ちになれる。
今はそれで十分だった。
「よお」
僕は軽く手を上げる。

シオリは、グラウンドに入ってきて、僕に傘を差し出す。
「こんなに雪が降ってるのに、風邪をひくわ」
彼女は僕を少し見上げる。キスをせがむようで、少しドキッとする。
僕はその距離に恥ずかしさを覚えて、一歩外に出て、踵を返す。
「雪ってさ、雨と違って、傘を差さずに歩きたくならないか？」
「……」
照れてしまって、何アホなことを言ってるんだろう、僕。
「そうね……」
背中越しに、傘を閉じる音。彼女のブーツが雪を踏む音がして、僕の隣に立つ。
「私も、少しあなたと、こうしてこの雪を見ていたいな……」
「え？」
隣に立つシオリは、傘も差さず、だけども顔を赤らめながら、空から降る雪を見つめていた。
「埼玉じゃ珍しいもの。こんな雪」
「……」
僕も空を見上げる。
雪は、白く、冷たい。
だから僕達は、お互いの温かさを感じる。
二人きりのこの世界に、一切の嘘も虚飾もはびこることは出来なかった。
「退学、しないで済んだよ」
僕は、空を見上げたまま、言った。
シオリは僕の方を向く。僕もシオリの目を見つける。
「はは、土下座までしちゃったよ。カッコ悪ぃ」
僕は頭を掻く。頭にはもう水滴がついていて、積もった雪が、軽く落ちた。
「……」
それからは、お互い照れ笑いを浮かべるしかなかった。

僕達は、まだ大袈裟な想いを語るには、あまりに幼過ぎて……その伝え方も知らなかった。勉強が恐ろしく出来る二人だけど、僕達には、まだまだ学ばなければならないことが沢山あるのだと、この歯痒さの中で思い知る。

シオリはやがて、沈黙にじれたように、頭を下げた。

「ごめんなさい」

「え？」

「あの、私、あなたのこと、ぶったりして、その……」

彼女は気色ばむ。ぶったことよりも、その後僕達が抱き合ったことの方が問題だと思っているのが見え見えだった。

この娘は本当に恋愛経験がないのだろう。そうやって、男と女が触れ合うのが、卑猥だとか不潔だとか思っている感じだ。

だけど……そうなっても仕方ないよな。彼女は綺麗だから、今まで彼女を見ていた男は、彼女を下心や偶像で見るだけの奴ばかりで、男なんて下心の塊みたいに思っても仕方ない。

「そんなこと」

僕はとっさに言葉を出した。

「僕の方こそ……君を傷つけて、何度も泣かせて……」

その後言う言葉に、一瞬迷いが生じるけど、それを振り払う。

僕は彼女への誤解やすれ違いを、ひとつでも埋めていかなければいけない。

「その、別の女の子と、その……」

言いかけて、何を言っていいかわからなくなった。

何故それを弁解するのか、僕達はまだ付き合っていないのだから。ただ、彼女がそれを見て逃げ出したことは、その行為が彼女を傷つけたのかもしれない。僕はそれに対しても、謝らなくては……

というか、その後はともかく、彼女が見たシーンまでは、僕はやられた側で、僕自身は特に何もしてないんだよな……だから、弁解しようにも、言う事が思い浮かばない。

「その事なんだけど……」

彼女がそう呟いて、僕は顔を上げる。
「ちょっと、ここで待っていてくれないかな？」
そう言って、すぐ戻るから、と言いながら、シオリはグラウンドを出て行く。
一人、取り残される。
「……」
何だろう。でも、彼女のことだ、何か考えがあるのだろう、と思って、僕はそのまま雪を見つめていた。
3分位して、足音が聞こえ出す。僕は振り返る。
マツオカ・シオリは、右手に何かを持っていた。
それは、一本の皮の紐だった。
その紐の先には、一匹の犬が繋がれていた。
「リュート？」
その狐のような耳に、つぶらな瞳、白、黒、茶の三色の毛並みのシェットランドシープドッグは、元々寒冷地方の犬だ。その厚い毛並みは、この雪の日にとても調和していた。

シオリは少し微笑みながらリードを離すと、リュートは一直線に、僕の下へ駆けて来る。

「リュート！」

僕もしゃがみこんで、飛び込んでくるリュートを抱きしめた。リュートは僕の顔を舐めてくる。

「うわっ！　ちょっと、やめろって！」

僕はリュートの勢いで、仰向けに雪の中に倒された。ジャンパーは水を通さなかったけれど、ジーンズには冷たい水が染み込んで来た。

リュートはまだ、僕の顔を舐めてくる。

メチャクチャ冷たいけど、僕はもう、嬉しくて——半ばヤケクソになったように笑っていた。

もう会えないと思っていた友に再会したような——こんな嬉しい気持ちは初めてだと思う。

「あっははははははは！　ははっ！　ははははははっ！」

雪に体を預けたまま、リュートと重なって、僕は本当に可笑しくて、笑った。

静かな雪の夜に、僕の笑い声はよく響いた。

笑い終えて、一度ため息をつく。

僕の眼前には、降りしきる雪と——僕を見下ろすマツオカ・シオリがいた。

僕はむくりと体を起こし、立ち上がる。ジーンズが既に少し水を吸って、重かった。

「そんなに嬉しいの？」

シオリは前かがみになって、僕の顔を覗き込む。

「そりゃ嬉しいさ。だって、もう二度と会えないかも、とも思ってたから……」

言いながら、僕は立ち上がる。
「でも、何で君がリュートと一緒に……」
言いかけて、はっと思い当たる。
僕はあの合宿で、皆がコンビニに行っている間に、リュートに飯をやって……背後に回られたタカハシ・ミズキに後ろから抱きしめられて……それを彼女に見られて、彼女は逃げ出して——僕はミズキとなんだかんだとやり取りをしていて、気がついたらリュートは姿を消していた。
リュートが消えた時、確かに彼女がいたんだ。でも、何故彼女と？疑問が点灯している時、シオリが腫れ物を触るように話し始めた。
「私、見ちゃったんだ。ミズキとあなたが……その、抱き合ってるの」
彼女は頬を赤らめながら言った。
「……」
この娘、本当に恋愛経験がないんだな。男と女がそういうことをするのは不潔だって思っているような反応だ。
ついでに言えば、あの時僕は後ろから抱きしめられていただけで、別に抱き『合って』はいないんだけど。そこは結構重要だと思うけど、言ってもあまり意味はないんだろうな、やっぱり。
シオリは、早くも恥ずかしさに耐えられなくなったようで、僕に背を向ける。
「私は、それを見て——その、あなたが誰かに、その、そういうことをされているのが、見ていられなかった。見ているのが辛くて……あなたに声をかけられるのも辛くて——私、気がついたら逃げ出してた」
「……」
彼女の華奢な背中が、更に心細く見えた。
「私はわけもわからず走って——気がついたら、胸が痛くて、道の真ん中で、うずくまっちゃって……」
そう言うと、シオリは振り向きかけてしゃがみこみ、リュートの

頭を撫でた。
「そこにね、この子が来てくれたの」
リュートは彼女に撫でられるのが、本当に気持ちよさそうだ。普段、母親が手を伸ばしただけでも敵意を表すのに。
こいつは彼女が気に入ったのか。僕にとって敵じゃないと認識したのか。
「この子、何も言わずに、私の側にいてくれたの。そしたらね、なんか少しだけ、心強くなった。私が抱きしめたら、顔を舐めて、励ましてくれた」
「……」
そうなんだ。こいつは誰よりも優しいんだ。
いつだって家族に殴られ、罵倒されてボロボロの僕について来て、側にいてくれる奴なんだ。そんな、悲しんでいる人を放っておけない奴なんだ。
「でも、この子、私が家に向かっているのに、あなたの元へ帰ろうとしないで、私についてきたの。家の前に来て、この子はうちの門の前で止まって、ずっとお座りしてて……」
「え？」
「次の日の朝、目が覚めたら、ずっとその格好をしてた。私は、何だか気になって、朝、その子を散歩に連れて行ったけど、私について来てくれた。でも、家に帰ると、また門の前で何も言わずに座り込んでたの」
「……」
彼女は、リュートを愛しげに見つけて、少し自信なさげに言う。
「そんなこの子を見て、思ったの。この子は、ご主人様の気持ちを、何か私に伝えようとしているんじゃないかって。私があなたに持ったのは誤解で、それが晴れるまで、こうして座り込んでいる気なんだって」
「……」
夢みたいな話だ。

「笑うかもしれないし、信じられないかもしれない。でも、私はそう思った」
「――笑わないさ。こいつはとっても優しい奴だから」
「……」
雪が僕達に降り注ぐ。
「だ、だから、こんなにあなたのことを伝えようとするこの子を見て――胸のつかえが取れていった。私、あまり恋愛したことないから、その、抱き合ってるのとか、ど、どう自分で処理していいのかわからなかったのね。だから、あの、その……」
「……」
「だ、だからね。私、そう思ったら、またちゃんと、あなたと、その、話したいなぁ……って……」
彼女はさっきから、いっぱいいっぱいだ。後半、話し方が急に早口になって、今は恥ずかしそうに俯いている。
――かく言う僕も、彼女につられて、何だか照れてきた……
何か伝えなくちゃ。
犬のリュートまで、こうしてもう一度、彼女と話をするお膳立てを整えてくれたんだ。
だけど――
頭を巡る言葉は、どれもこれもこっ恥ずかしい、青臭い台詞ばかりで……いざ言おうとすると、赤面で鼻血を出してしまいそうなものばかりで……
それでも、その恥ずかしいような台詞は、どれも僕が言いたいことを伝えるものじゃなくて。現代文の成績は、偏差値70を軽く超える僕が、単純な思いを伝える言葉を、何も持っていないことがもどかしかった。まるでどうしても解けないテスト問題にぶつかったようなもどかしさだった。
彼女はリュートの頭から手を離し、しゃがみこんだまま、もじもじしている。
「あの……何か言ってくれないと、私、もう、何だか……」

「あ、あぁ、ごめん……」
自分の発した声が、緊張をはらんでいるのがわかった。
「ただ、今日はなんか、すごい日だな、と思ってさ」
「え？」
彼女は顔を上げる。その顔は、林檎みたいに真っ赤だった。
僕はしゃがんでいるシオリの目を見つめる。緊張に強張る顔で、ぎこちなく笑顔を作って。
「退学にもならないで済んで、おまけにリュートとも会えて、それに……」
僕の顔もどんどん熱くなる。
「君と……もう一度、こうして話せた」
やばい、この時点で僕、結構キテる。頭が沸いている。
素直になるってのは、こんなに恥ずかしいものなのか。僕は目を背ける。
僕はしゃがみこんで、リュートの頭を撫でる。
「お前のおかげかな……ありがとうな」
「……」
僕達は、リュートを見つめる。
沈黙は、まるで互いのもどかしさを伝えるように雄弁で、静かに舞う雪は、砂時計みたいに、募る思いを形にして積もらせているようだった。
だけど、今日は今まで、奇跡みたいなことが、ずっと起き続けている。
今なら、ここで僕が望むことも、叶う気がするから。

「ありがとう」
僕の声が沈黙を破る。彼女は、僕の目を覗き込む。
「君のおかげで、暗闇の中から、少し這い上がることができた。側にあった、大切なもの、僕が守りたいものに、君が気付かせてくれたんだ」
「……うん」
シオリは優しく微笑んで、一度小さく頷いた。
「……」
僕は立ち上がり、彼女に背を向ける。
「君ともう一度話せて――その――良かったよ。あの、まだ何がよかったのか、上手く言えないけれど……君がいなければ、僕は、今もひとりぼっちで……」
「……」
沈黙。
あまりに感情が溢れ過ぎて、僕は声が出ない。
こんな気持ち、初めてだ。
何か言いたい。何も言えない。苦しくて、でもそれが満たされたような気持ちでもある。
「あぁあ――何でだ？」
僕は雪のかかった頭に手をやり、その流れを一度切ろうとする。
「君に、何かお礼とか、伝えたいことが沢山あるのに……まだ、その方法がわからなくて。言葉がこんなに出てこないなんて……」
もどかしい。伝えたいのは、こんなことじゃなくて……礼とか、償いとかじゃなくて。
「はは、でも僕達って、変だよな。合宿を手伝ってもらって、その礼に、僕は君達にカレーをご馳走して、その礼に、今日は君達の演奏を僕がもらって、またすぐに僕は君に、何か礼がしたいとか思っ

てる。きりがないっての……」
　このままじゃ、気持ちが重過ぎて、引かれるのが嫌で、無理に笑った。
　気持ちが重過ぎて、らしくない。元々こういう気持ちになるのが嫌で、心を殺していたから、こういう時の感情の対処法を知らない。
　――話せば話すほど、ドツボで……この先彼女が言う言葉は、死刑宣告を待つように恐い。
　それでも、その恐怖よりも、その先にある未来を見たい、という気持ちが勝っていた。
「――いいじゃない。それでも」
　後ろから、彼女の優しい声がした。
「私も、あなたに伝えたいことがいっぱいあるの。でも、今のままじゃ、それを伝えきれない……無理に伝えようとすると、何かが壊れてしまいそうで」
　背中越しに聞く彼女の声は、さっきまでのおどおどした感じが消えていた。
　彼女の顔が見たくて、僕は振り向く。
「だから今は、こうしてあなたと、同じ場所で、同じ時を過ごせる――それだけで十分」
　そう言うと、シオリは立ち上がって、右手を広げて、胸の前で雪を受け止めている。
「雪、綺麗でしょう」
「……」
　彼女は右手を下ろして、僕に微笑む。
「お互い口下手だし、あなたとこうして、何かを見て、同じ時間を共有して、何か伝えたいと努力する……その繰り返しで、少しでも、分かり合えたら、とっても嬉しい――」
「……」
「はじめから上手くやる必要はないわ。こうして雪を見たり、そんな時間を積み重ねて、ほんの僅かでも、隣にいるあなたと私の想い

が重なっているって実感できる一瞬があれば、それでいいわ」
「……」
彼女は一度空を見上げて――それから、僕に向き合った。
「雪が溶けたら、春が来るから……春になったら、こうして二人で、桜を見に行かない？　あなたの名前の、桜の花を……」
「……」
桜――
あの忌まわしい家庭の象徴である、僕の名前……名前を嫌うあまり、その美しさから眼を背け続けた花。
だけど、彼女の言葉は、そんな忌まわしい思いを波のようにさらっていき――僕の心を桜舞う春の陽気へと誘っていった。
嫌いな花でも、好きになれそうな……嫌っていた花を見る勇気をもらえそうな気がしたんだ。
「――そうだね。君と、一緒に……」
僕の声は、もうすべての感覚が消えて、勝手に喉から押し出されていた。
そして、僕は彼女に歩み寄り、細い肩に手を伸ばして。
気がつくと、彼女の体を、強く抱きしめていた。
もう言葉が邪魔で――伝える方法は、それしかなかった。
死んだ心が生き返って、心を感情が満たして、溢れてきて、どうしようもなかった。
今、僕と彼女の心は、この同じく浮かんで、確かに同じものを共有している。その確信が、僕と彼女との距離を近づけさせた。
彼女の心臓の鼓動を確かめたかった。彼女が今、どんな気持ちなのか、こうして確かめたいと、僕の中の熱い固まりが、そう思わせた。
この感情の名前を僕は知らないけれど……
「――明日、どこかへ行かないか？」
呆然と立ち尽くすままの彼女に、声をかける。
「……」

「桜はないと思うけど、何かを見に行かないか。二人で……」
「――うん」
僕の胸の中、くぐもった彼女の声。
僕は腕を回したまま、体を離す。
僕の顔を見上げる彼女の顔。
そこには、顔を真っ赤にして、それでも僕に微笑を返す彼女がいて。
僕の肩から先に、変な力がかかって。
両手で、彼女の肩に手を置いて……
あの恥ずかしがり屋のシオリも、もう頭がトランスしているのかもしれない。
そっと、目を閉じた。
僕の顔が、まるで引き寄せる磁石のように、シオリに近づく――
――はっと脳裏を、何かが掠める。僕の動きが止まる。
僕は彼女の後ろ――背中越し、グラウンドの外に見える校門の方を見る。
僕が動きを止めて、シオリも3秒後に目を開けた。
僕は腕を解く。
「どうしたの？」
彼女は聞いた。
「見られてる」
「えっ？」
「あの校門の裏に、何人か隠れてる。多分、ユータ達もいるな」
「えっ！　えっ！　な、ちょっと、うぅ……」
彼女は一瞬で顔を赤くする。確かに、僕達の今までの馬鹿なやり取りを、声は聞こえないにしても、全部見られていたんだ。奥手な彼女がこうなるのは当然だ。
だけど、僕達はちょっとどうかしていた。一体何なんだ。あの抗いようもないような力は。僕も、あの奥手の彼女でさえ、その空気に飲まれて、とんでもないことを……

「この野郎。ちょっと脅かしてやるか……」
僕の集中力が高まる。そこには、彼女への照れ隠しも含まれていたけれど。
「何をする気なの？」
シオリが聞いた。
手近に一つ、さっきまで蹴っていたサッカーボールがあった。
僕はボールをセットする。ピッチは雪だから、狙いのイメージを入念に練る。
軽く助走して、４０メートルほど距離の離れた校門の壁へ向かって、自慢のフリーキックを蹴った。
ボールはグラウンドの鉄柵を越え、そこからカーブして落ちた。
レンガで出来た校門の上を越えたあたりで急降下し、ボールは校門の影に消えた。
うわっ、という声がいくつかして、影からユータ、ジュンイチ、サッカー部のチームメイト、そして何人かの吹奏楽部の女の子達が、倒れ込むように飛び出してきた。
「スナイパーかお前は！」
ジュンイチが叫んだ。
「僕をからかうと、高くつくのは知ってるだろう」
「いい感じだったのに、邪魔したな」
ユータが皮肉に笑った。
「シオリさんの唇も、狙撃するところだったみたいだったがな」
「……」
見られてた。もっと早く気付けばよかった。
この醜態は、これから2ヶ月は、僕達3人の酒の肴になるだろう。
その度に僕は、上手い弁解を考えなくてはならないし、正月明けの学校に行きたくなくなるくらいの汚点だった。
――と思ったけれど、その考えはすぐに消えた。
気付かなかったおかげで、この機会に、彼女に出来る限りのことは言えたから。

それでも、彼女は吹奏楽部の女の子に合わせる顔がない、と、顔を赤くして、マフラーで顔を隠していたけれど。

僕の隣で、シオリが少し笑っていた。

僕達3人のやり取りを見て、少し安心したように。

隠れていた連中は、僕達の方へ駆け寄ってきた。

その時、僕の腕に、ばさっという音と、軽い衝撃が伝わった。

何だ？　と思って見てみると、ジュンイチが右手に雪玉を持っていた。

「コノヤロー！　ダチにボール蹴りつけやがって！　お返しだ！」

ジュンイチはまた雪玉を投げるけど、僕はそれを避ける。

だけど、避けたところを狙って、別に雪玉が飛んできて、僕の腰に当たる。

それを投げたのはユータだった。ユータは歯を剥き出しにして、いたずらに笑う。

「上等だ！　誰に喧嘩売ってるんだお前等！」

僕も手近の雪を拾って固め、雪玉をユータに投げ返す。

それに釣られて、サッカー部のチームメイトも、吹奏楽部の子達も、各々に雪玉を作って……

僕達はグラウンドで、チームも作らずに、雪合戦を始めていた。

リュートもつられてグラウンドを逃げ回り、僕も笑いながら、シオリやジュンイチに雪玉を投げつけていて……

シオリも、ユータも、ジュンイチも、僕に向かって雪玉を投げてきた。

可笑しかった。そして、この学校に残ってよかった、と思った。

こうしてくだらないことでも、こいつらとだったらこんなに笑えるのか、って、思った。

僕達は、そうして長い間、狂ったように雪合戦を続けた。

まるで、今まで抑えていた、楽しもうとする気持ちを爆発させるように。そして、彼女に対しての、照れを隠すように。

こんな日々を繰り返して、ひとつずつ、失ったものを取り戻せれ

ばいい。

明日もこうして、彼女と笑えたらいいな、と、僕は強く思った。

Ｃｏｒｎ－ｐｏｐｐｙ

部活のない日――大抵僕は昼まで寝ている。普段の睡眠時間が極めて少ないので、これくらいは愛敬だろう。すっかり夜行性になってしまった。

しかし昨日は１２時に寝て、６時に起きるという、近年にない早寝早起きサイクルで睡眠を取り、朝食を作って食べ、おまけにシャワーまで浴びてやった。朝のシャワーなんて浴びたこともないくせに。

恐らく、僕は舞い上がっているのだろう。楽しい一日にしたかった。僕にとって朝は、気だるい一日の始まりに過ぎなかったのに、今日みたいに朝の準備をしたのは、生まれて初めてだった。

「へっくしゅん」

くしゃみをひとつ。

昨日、雪に転がるようにして、ずぶぬれになった服で、アホみたいに雪合戦なんかして、その後も僕は二人に拉致られて、ファミレスでシオリとの馴れ初めから何やら色々詮索された。

とは言っても、僕はほとんど何も喋れなかったけれど。まだ馴れ初めなんて、話せるものじゃないし、それ以上に僕への二人の愚痴の方が多かったから。

そしてその帰り、二人に、彼女を落とせ、と言われた。

「……」

僕なんかでいいのかな。彼女の横にいる男は。

おかげで昨日は濡れたまま着替えられなくて、少し鼻がぐしゅぐしゅしている。

顔の痣はほとんど消えていたけれど、頭にはまだ包帯が巻かれている。全国大会が始まる前に、頭の傷が治ればいいのだけれど。

もはや定番のリーバイスに、フード付きのコートを着込んだ。肩に下げるバッグに、黒のコンバットブーツを履いて、家を出た。

空は筋書き通りのスカイブルーで、僕は思わず空を見て、微笑んだ。

街は雪かきに追われ、道の隅には既に雪が硬い氷になって片付けられていた。

近くの駐輪場に自転車を止めて、駅の改札に向かった。年末だから人通りが少なく、9時だっていうのに、まだ少し眠っているようだった。

川越駅は、近くに松屋とかローソンとかマクドナルドとかがあって、元々便利な場所だったが、最近になって駅を改築し、色々な店が入っていた。一階のパン屋から、パンを焼く香ばしいにおいがした。駅に入って階段を上ると、二階にあるスターバックスから、コーヒーの匂いがしてきた。これだけで何だか朝食を食べたような気分になった。

二つある改札の、奥の方の切符売り場に、シオリが立っていた。後姿だったけれど、あんな細い体の、綺麗な漆黒の髪の少女は、彼女以外にはいない。

「ごめん、待った?」

声をかけると、シオリが振り向いた。

初めて見るミニスカートとレギンス姿に、落ち着いた薄茶色のコート。一番上のトッグルが開いていて、そこから白のニットのセーターが見えた。首には小さな十字架のついたチョーカーをしている。靴は黒のブーツで、細い右腕に、小ぶりのトートバッグを下げていた。

何より驚いたのは、学校では見た事のない化粧をしていることだった。唇に薄く光沢があり、睫毛がくるんとカールしている。頬は薄いピンク色に染まっていて、滑らかな白い肌に映えていた。

「・・・・・」

相当呆気に取られていたのだと思う。僕はつい彼女をねめ回してしまった。

「どうしたの?」

「いや、何か見慣れない格好だな、と思って」
「あぁあ……」
彼女は両手を広げ、自分の格好を見る。
「あの後ね、吹奏楽部の友達が、うちに来て……化粧のやり方とか、着ていく服とか、選んで……こんな、ミニスカートなんて穿くことに……」
「――それはそれは」
「……」
彼女は恥ずかしそうに縮こまる。そんな彼女をフォローする言葉を探したけど、生憎僕はそんな言葉を持ち合わせていない。
それにしても、足細いな――背は１５５センチくらいで小柄だけど、足は長すぎず短すぎず、体型のバランスがいい。これならそこらでミニスカート穿いてる女の子よりは、ずっと穿きこなしていると思うけど。
「まあ、僕も似たようなものだ。あれからサッカー部の連中に、色々詮索されたからな」
「え？」
「あぁあ――」
違うな。早くもドツボだ。こんなこと言ったって、彼女が昨日の醜態を思い出すだけで、空気が悪くなるだけだ。
「ありがとう。来てくれて」
僕は何を言っていいかわからず、それをまず伝えた。自分から誘っておいて、遅れて来た上に、つかみでスベっている。それを何とか誤魔化そうとした。
そう言うと、シオリも照れを隠すように微笑む。今までの話を忘れようとするジェスチャーとしては的確だ。僕もそれに応えることにした。
「とは言っても、いつまでもここにいてもな……」
「うん、どうしよっか」
シオリがズバッと単刀直入に切り出して、僕を見る。

早速手持ち無沙汰に――

まだ僕達は付き合っていない。テレビで芸能人同士が一日限りのデートをするって企画モノがあるけど、気持ち的にはあれと似たようなものかもしれない。

つまり、予想外の展開がないのだ。いわゆる出来レース。そのまま愛が芽生えるとか、ちょっとエッチな展開とか、そんなうまい話がない前提で、今日、僕は彼女と一緒にいるわけだ。恐らく、それは彼女も割り切って、僕と一緒にいる。

でも、そんなことはどうでもいいんだ。むしろそういうことがない方が望ましい。僕は彼女と一緒にいたいだけなんだから。そこに濁った感情を介したくない。

「一人に慣れ過ぎて、何していいかわからないな。一人でいる時間は、潰しやすいくせに」

「私もそうかな。でも、あんまり何かに縛られるのもね。私、デートなんて初めてだし……」

『デート』という単語を口にして数秒後に、彼女は何かを後悔したような顔になった。

でも、そう考えるのが楽なのかもしれなかった。テレビのデート企画と同じ――今だけは疑似恋愛に浸っていよう、と開き直った方が楽だ。

「二人で何するか決めようか？　行き当たりばったりだけど」

「うん」

僕の提案に、彼女は同意した。

「東京に出よう。知り合いにその格好、見られたくないんだろ？」

僕のその提案で、川越駅から通っている東武東上線に乗り込んで、池袋に向かった。

急行列車に乗ったが、ラッシュの時間も過ぎていて、空席がひとつあった。僕はシオリに空席を譲った。シオリは席に座って、手袋を取った。僕はシオリの前の手すりを掴んだ。二つ目の駅で、シオリの左隣のおばさんが降りたので、僕は隣に座った。

「私、東京なんて、模試以外で行ったことない――」
「僕も中学東京だったけど、高校行ってからは、模試以外で行ってないな」
「部活忙しいもんね、お互い」
「暇よりいいけどな」
「暇なの嫌いなの？」
「もっと嫌いなものは、いっぱいあるよ」
「例えば？」
「そうだな――玄米茶とか」
「玄米茶？」
「あのお茶は許せないんだ。飲むと何だかイライラするんだ」
本当にくだらない話をした。大したオチもなく、だらだらと鬱蒼とした言葉を取っては捨てて行った。そんな言葉でも、彼女は受け止めててくれた。
そのまま３０分ほど電車に揺られていた。池袋に出て山手線に乗り換え、原宿へ向かった。
「サクライくん、中学が東京だったんじゃ、ちょっと案内してよ」
「いや、でも金がなかったから、特に色んな所に行ったわけでもないけど」
とは言っても、東京にほとんど出たことのないシオリが相手だと、僕が彼女をリード、エスコートするしかないんだよな。
デートなんてあまりした経験がないけど、こうなりゃヤケで頑張ってみるか。
原宿駅を出れば、すぐに竹下通りがある。二人とも自然に、そこに足が向いていた。クリスマスも終わって、どのカップルも金を使いきったのだろう。普段の日曜と比べれば、ずっと空いていた。
しかしそれでも僕達と同じくらいの歳の女の子が沢山いた。他の女の子のラフな格好を見ると、シオリの、普段より着崩した格好は、むしろ丁度良かった。だけど、顔立ちや雰囲気では、ここにいる女の子の誰にも負けないだろう。

それくらい彼女は、アイドルでも道を掃き清めてお辞儀するくらい美しかった。

その美しさは外見だけのものではない。作られたものではなく、まして化粧のせいなんかじゃない。彼女の周りに流れる、一輪の花のような、涼やかで、凛とした彼女の心そのものだ。

そんな彼女を見て、僕が思い浮かべたのは――美しく咲く虞美人草だ。

虞美人草――夏目漱石の小説にもあるその花の名の由来は、２２００年もの昔に遡る。

楚の項羽は、宿敵である漢との最後の決戦である垓下の戦いの際、大群を率いたが、漢の名将韓信の計略により、戦場におびき出され壊滅的打撃を被った上、漢の功臣張良の策である、今に伝わる『四面楚歌』の作戦により、僅かに残った兵をも離散させてしまった。

わずかな将と兵しか残らなかった項羽は、戦場での玉砕を決意した。その時、項羽の妻である絶世の美女虞姫は、漢への投降をするように項羽に言い渡される。虞姫を死地へは連れてはいけない、という項羽の考えだった。

しかし、二夫にまみえることを死に勝る恥と思った虞姫は、手ずから項羽の剣を奪って、その場で自刃してしまった。項羽は悲しみに暮れながら、追手のかかる前に垓下の戦場である寂しげな平原に虞姫の遺体を埋め、弔った。

その後、漢の追手がかかる前に、出発の準備を整えていたところ、虞姫の墓の前に、一輪のひなげしの花が咲いたと言う。ひなげしの花はそれ以来、現在でも虞姫の美しさを讃えて、虞美人草と呼ばれているのだ（ちなみに項羽に勝利した、漢の劉邦の妻呂后は、唐の則天武后、清の西太后と共に、中国三大悪女に数えられている）。

そんな一輪の花のような彼女を見ていると、良い花の甘い香りがかすかにするような気さえしてきた。実際は、単なるコロンか何かの香りに過ぎないかもしれないけれど。

Aquarium

最初に目に付いたのは、原宿名物らしいクレープ屋だった。シオリが食べたそうな顔をしていたので、苺と生クリームとチョコのトッピングのものを買ってあげた。僕はバナナチョコを買って食べた。生クリームとバナナがずっしり重い。

人ごみを掻き分けて、歩きながらクレープを食べ続けた。

しかし僕は、普段甘いものを食べないせいか、クレープを半分くらい食べたあたりで、少し気分が悪くなってしまった。シオリは食べるのは遅いが、美味しそうにクレープに口を運んでいる。

「結構食べるんだな」

僕は半ば、クレープを美味そうに食べることに感心してした。

「甘いものは別腹なの。でも太っちゃう」

「……」

そうは言っても、シオリは十分に細い。きっと代謝が高い体質なんだろう。意外とこういう娘が大食いだったりするんだ。

「僕も小学校の時は太ってたよ」

「本当？」

「ああ、典型的ないじめられっ子」

「……」

僕は自嘲すると、アクセサリーや小物を売っている店を見つけた。

ここに入ってみようよ、と僕が提案して、中に入った。シオリは僕の最後のフレーズを気にしてか、思い出話を聞きたがっていたようだったが、しばらくして背中越しに、うん、という返事が聞こえた。

カウンターのガラスケースの中に、指輪や、チョーカーや、ピアスがたくさん入っている。ガラスケースの上には、ピアッサーを売っている。校則ではノータッチだが、生憎、僕もシオリも穴を開けていない。ユータは安全ピンを、消毒代わりに火であぶってから穴

を開けたらしいが。
「これなんか、結構学生さんに人気ですが……これシルバーですけど、値段もお安くなってますし」
店員はカウンターのシルバーアクセサリーをしきりに勧めてくる。
お互いチョーカーをしていたので、お互い興味は指輪に移った。
「指のサイズ、何号かわかる？」
僕はシオリに訊いた。
「8号だったかな」
それを訊いて、僕は店員に声をかけた。ガラスケースの上から、指輪を指定する。
「これの8号、下さい」
細身の指輪は二重になっていて、二重の輪の先がねじれて、その上に銀板の星が乗っている。
「これ、取っといてくれよ」
そう言って、箱をシオリに渡した。店員の目には、さぞウブなカップルの姿に見えたことだろう。
しかしシオリは、その箱を受け取ると、すぐに店員の前に出して、こう言った。
「あの、同じ値段で、ペアリングがあれば、それにしたいんですけど」

薄暗い空間の中、プールの青い光が反射して、外にゆらゆらした虚像を作り出している。
あれから僕達は品川に行き、水族館を回っている。まだ左手の薬指にはめる手続きのないペアリングを、お互いに右手で遠慮がちに光らせて。
「あ、マンボウだって。目が可愛いね」
「マンボウって灰色っぽいんだな。僕が小さい時見たアニメでは、マンボウは黄色だった気がする」

「うーん、私の記憶では、マンボウは水色で、お腹が白かったよ」
「マンボウって、一度に3億も卵を産む動物なんだよな」
「たくさん卵産むのに、どうして普通のお寿司とかでないんだろうね……」
「寄生虫をいっぱい飼っていて、消化器が未成熟ですぐ腐るからだよ。海がない埼玉じゃまず食えないな」
僕達は、本当にくだらない話をした。大したオチもない、幼稚な話を繰り返しては、笑い合った。シーラカンスとピラニアで勝負したら、どっちが勝つか、とか、イカスミスパゲティはあるけど、タコスミスパゲティも実在する、とか、、そんなくだらないことを話し合った。お互い真面目な性格だから、そういうお題が出ると、真剣に考えてしまうのが、何だか可笑しかった。
「問題、鮫が海の生き物で唯一、恐れて食べない生き物とは、何でしょう？」
「え？　うーん……」
「5、4、3、2、1……」
「鯨！」
「ハズレ……あ、でもある意味正解かな」
「うーん……それで、答えは？」
「答えは亀」
「亀？　何で？」
「一度腹の中に入ると、亀は甲羅から身を出して、腹の中を食い破っちゃうんだ」
「へえぇ、勉強になったなぁ。サクライくんって、すごく物知りなんだね」
「……」
本当にくだらない話をした。ユーモアのかけらもない、僕の引き出しを総動員して。
その後ショーステージで、イルカのショーを見た。欲張って前の席に座りすぎて、イルカのジャンプの度に、二人とも冷たい水を被

って、その様を見て、お互い笑い合った。
そのショーの後、ステージに少し残っていると、入れ違いに女性の飼育員が出てきた。
「はーい、良い子のみんな、元気かなぁー」
子供向けテレビの、歌のお姉さん風に微笑んでいる、ツナギを着た若い女の子の司会で始まった。
「さあ、現在我が水族館は、お魚のことをもっと知ろうキャンペーン実施中につき、現在さまざまなイベントを行っています。現在のイベントは、魚の漢字書き取りチャンピオン決定戦でーす！」
イルカショーの後なので、しゃばしゃばと、お茶漬けを食べる音のような拍手が起こった。席を立つ人もいる。
「ありがちなイベントだな」
僕は自分の腿に肘をつけて、頬杖をついていた。
「でも、結構難しいよ？　私、あんまり自信ない」
「魚ヘンがついてるのを、手当たり次第書けばいいんだから」
客席の１００人ほどの観客は、結構盛り上がっていた。魚ヘンの漢字は沢山あるから、やってみれば結構無難に面白いはずだと思う。静かな拍手が、ばしゃばしゃと起こった。
「ただいま参加者を募集していますーどなたかいませんかー？」
すると、僕の手が上がった。
「え？」
よく見ると、僕の肘の下、上腕二等筋を、隣にいたシオリが掴んでいるじゃないか。
「はいそこの包帯を巻いた、素敵なお兄さん、ステージへどうぞ！」
司会のお姉さんが手招きしている。僕はシオリに押されて、ステージに向かう。背中越しの彼女は、恐らくニコニコ顔だろうけれど、このやろう、とかアドリブが取れない自分に腹が立つ。
出場したのは、僕以外には、どれも冴えない顔をしたカップルの男とか、子連れの中年とかだった。テレビに問題の感じが出て、フリップに答えを書いて、最後まで残ったら優勝というものだったが、

当然僕よりも漢字を知っている奴はここにはいない。
「おめでとうございます！　優勝は、この方です！」
まるでＫＯ勝利後のボクサーみたいに、司会のお姉さんに右手を掲げられる。頼むからやめてくれ。１００人くらいしかいない客席は、しらけきっているじゃないか。
救いを求めたかったのか、シオリの方を向くと、満面の笑顔で拍手を送っている。彼女の視線が自分に注がれていることを感じる。妙に気恥ずかしい気持ちになった。
「優勝商品は、等身大オーシャン君人形と、帽子、そして、オーシャン君まんじゅうでーす！」
僕は水族館マスコットらしい、白と青と黄色の鱗の、つぶらな目の変な魚のぬいぐるみの綿帽子を被せられ、袋に入った、寒ブリ大の大きな人形を持って、シオリの元へ帰った。観客はぞろぞろと客席を立って出て行く。
「サクライくん。その帽子、すごく可愛い」
水族館の順路を回りながら、彼女は、全身タイツを着たお笑い芸人を見るような顔で笑っていた。
「進む道を間違えたアイドルみたい」
「――喜んで頂けまして、光栄の至りだよ」
僕はしかめっ面をしてやった。
「昔こんな帽子を被った、魚にすごく詳しい人がいた気がするよ」
シオリはそう言った僕を見て、本当に可笑しそうに笑っていた。何だか僕も笑いたくなってしまった。自嘲であることは間違いなかったけれど、こんなくだらないことが、今までの僕にはまったく縁がなくて。それが何となく可笑しかったのかもしれない。
「どうでもいいけど、これ……かさばるなぁもう」
等身大オーシャン君人形は綿製だから、あまり重くはなかったが、これを持ちながら、一日歩くとは。この可愛らしい顔も、でかい図体のせいで、忌々しささえ感じた。
それでもステージを出るとき、係の人に呼び止められた。

「優勝商品の副賞として、粗品です」
と言われ、渡されたのは、この水族館の無料入場券2枚だった。
「むしろこっちの方が、メインでいいよね」
シオリは僕の持つ人形の影からそれを覗き込み、いたずらに笑った。
「……」
ここでも違和感。
彼女が、こうして僕をからかうなんて、されたことも、その予測もしていなかったから。
思ったより、明るい娘なんだ。学校では、才媛扱いされて、なかなかそんな本当の自分を出せないだけ。
彼女も歳相応の、普通の女の子なのだと、僕は知る。
「――また、一緒に来る？」
「え？」
「全国大会が終わったら、部活も引退だし、暇になったら、また……」
まったくスマートな誘い方じゃない。まるで暇潰しの相手みたいな言い方。
彼女に伝えたいのは、こんなことじゃなくて……
だけどシオリは、可笑しそうに笑って言った。
「その帽子被って、真剣な顔されても……」

Museum

「今日は、僕が弁当作ってきたんだ。食べてくれるかな？」
「え！」
シオリは目を丸くして、感嘆の声を上げた。
「――そんなに驚くことないだろ」
「あ、ごめん。サクライくんにそこまでしてもらって、いいのかなぁ、って思って」
駅の近くの公園のベンチで、二人並んで座った。時間は1時を少し過ぎたくらい。
僕は自分の鞄から、タッパーと、風呂敷状に包んだナプキンを取り出し、シオリに渡した。
ナプキンの中は梅ゆかりや海苔、ふりかけなどで飾った小振りのおにぎり。タッパーには2つに分けて、小さなオムライスとグラタン、肉じゃが、きんぴらごぼう、豚肉にアスパラを巻いて焼いたものに果物が入っている。
「弁当箱がなかったから、タッパーで色気ないけど」
「これ、サクライくんが全部自分で作ったの？」
「冷凍じゃないよ。おにぎりもラップ越しに握ったから、安心して」
「さすがに魚はないね」
シオリが茶化す。そんなジョークを言う子だとは思わなかった。
「魚から離れてくれ」
相変わらずありきたりなツッコミしかできない僕だけど、彼女が喜んでくれれば、作りがいが合ったというものだ。昨日、弁当を作ろうと、雪合戦で騒いだ後に、スーパーに寄って、下ごしらえだけして朝に仕上げた。
「嫌いな食べ物ある？」
彼女が定番の質問をした。
「ないな。僕は何でも食べられて、どこでも眠れるくらいしか取り

得がない」
「サクライくんがそんなこと言っても、謙遜にもならないね――じゃあ、いただきます」
僕はシオリに割り箸を渡す。肉じゃがの小ぶりのジャガイモを箸でつまんで、シオリは口に放り込んだ。何度か口を動かした。
「どう？」
「美味しいよ、とっても」
シオリは口元を手で押さえて、微笑んでくれた。
「・・・・・・」
僕は、微笑む彼女の顔を見て、少し考え込んでしまった。
「どうしたの？」
飲み込んでからシオリが、不審そうに訊いた。
「いや、美味しい、って言葉を久しぶりに聞いた気がして」
「カレーの時も、みんな言ってたじゃない。サクライくんのカレー、美味しいって」
「いや、カレーなんか、不味く作る方が難しいからな」
僕は、飯を、不味い、と言う人間なら知っているが、美味い、と言う人間は、お目にかかったことがなかった。小さい頃、親父が母親の作った料理を、不味い、と行って、そのままゴミ箱に捨てるのを眺めていた。そうなると、僕ももうご飯を食べられなかった。
不味い、と言って、食べ物を家族の目の前でゴミ箱にぶち込む人間もいれば、美味しい、と言って、笑顔をこぼしてくれる人もいる。
こんな世界もあるんだ。そこには僕の知らない、心がある。
僕は一体、何を求めて生きてきたのか。きっと、こういうものを求めていたのだろうけど、こういう気持ちを、今の今まで知らなかったのだ。
この気持ちは何だろう。理由なんてない。だけど、彼女に対して、嬉しさがこみ上げるのは。

弁当を食べ終え、僕達は近くの美術館に来ている。
何年か振りに、ルネッサンス時期の名画や彫刻が、東京の美術館に来ている、ということで、それを覗いてみることにしたのだった。最近の大掛かりな美術展は、新聞社なんかが共催で行っているものも多くて、割と安価に入場できる。クリスマス期間ということで、結構話題になった美術展らしかった。
安価な上に、有名な絵画も多いときて、美術館は静かではあるが、かなり混んでいた。
エル＝グレコ、ラファエロ、デューラーなど、世界史で習う名画達も数多く出展している。
誰かに、ダ＝ヴィンチに似ている、と言われたことがあったな。一年生の時、夏休みの絵画や書道で表彰が続いたから。
そういうことを言う奴は、ダ＝ヴィンチの本当の天才振りを知らないのだろう。僕は天才どころか、世の中の真理も知らない道化に過ぎないと言うのに。
「あ！　あれ！」
シオリが僕の袖を引っ張る。僕は釣られて歩き出す。
既にシオリの目当ての絵は、多くの人だかりが出来ていた。
そこには、天使が女性に布をかけ、もう一人の天使が花を撒く――ボッティチェリの『ヴィーナスの誕生』が展示されていた。
「これ、資料で見たことあるわ。何か、色使いが可愛くて、私、好きだな」
「……」
男が一緒なら、ボッティチェリがこの絵を描くためのモデルになった女性の名前が「シモネッタ」だ、とかいう、下品なうんちくが使えるが、僕は黙っていた。いくら何でも、相手が相手だ。笑うポイントも理解されないかもしれないし。
この絵は今回の美術展の目玉だったらしい。さすがにガードマンも付いて、厳重に警備されていた。確かに有名だからね。
「サクライくんは、好きな芸術家とかいるの？」

美術館を歩きながら、シオリが僕に聞いた。それは別に深い意味はなく、互いの芸術論をぶつけようとかいうものではないのだろう。お互い、偏差値を上げるための勉強で培った程度の知識しかないのだから。

「僕は、ミケランジェロかな」

「ミケランジェロ？　『最後の審判』とかの？」

「うん、それ」

歩を進める。奥は、ルネサンス時代の建築でも、ステンドグラスを展示していた。

ステンドグラスの展示される、光の差し込む道を歩きながら話す。黒い床に光が反射し、僕達のブーツも、足音が、コツコツと響いた。

「ミケランジェロは、、天井画や壁画が有名だけど、その時に天井から落ちてくる絵の具に目をやられて、晩年はほとんど眼が見えなかったらしいんだ」

「……」

「既に天才だって評価されてたのに、歳を取って、そこまでして絵を書き上げた時、ミケランジェロは何を思ったんだろうって、思うんだ」

彼女は立ち止まる。僕も歩を止め、彼女の方を振り向く。

黙っている。きっと、学校じゃ教えてくれないような知識を持っていたことで、彼女よりもはるかに僕が芸術にうるさい人に見えたのだろう。実際そんなことはないのだけれど。

「はは……女の子にはわからないかな？　男のロマンってやつかも」

「ううん」

シオリは首を振る。

「――何か、わかる気がする。サクライくんって、そういうストイックさを求めてる感じ、するから。今の場所じゃない、遠くへ行きたいって顔を、よくしてる」

「……」

僕は目の前のステンドグラスを見つめて、言う。

「それに――ミケランジェロは、バチカンにある聖ピエトロ大聖堂の設計に、3人目の責任者として指名されたんだけど、ルネサンス時代の芸術品は、貴族の庇護にあったから、大きくて派手なものが好まれる風潮があって、聖ピエトロ大聖堂も、ミケランジェロの前任者は、当時のローマ教皇の力を示すために、かなり大きな設計をしたらしいんだ。だけどミケランジェロは周りに反対されても、そうした方が美しい、という個人的な理由で、以前の設計を縮小したらしい」

「……」

「多分ミケランジェロは、本当に美しいものが何なのかわかっていたんだろう。ルネサンスは、貴族に依頼されて、その貴族の流星振りを現すために、絢爛豪華なものが求められたけれど、それでもミケランジェロは自分の美を貫き通したんだ。それはすごいことだと思うんだ」

「……」

僕は、喋りながら、自分の言葉で胸を刺していた。

――あぁ、僕は、わかっていたんじゃないか。

いつの間にか、僕はただ、より大きな力を求め過ぎる愚物に成り下がっていた。この小さな体で、大きな相手に力押しの一点張りで、地に足が着いていなかった。

体の作りもまったく違うユータと張り合って、それに負けてユータを恨んだり。体のでかい親父に力で踏み潰されて、それよりもでかい力でそれを跳ね返すことばかりを求めていた。

いつの間にか、僕は『力』の意味さえ見失ったんだ。自分の手に余る力かどうかさえ判断できずに、ただ、盲目的に力を求めて、その姿が愚であることにも気がつかなかった。

それでは駄目だ。僕がでかい奴とまともに戦っても、勝ち目はない。僕は、僕なりの強さを見つけていかなくてはいけなかったのに。

「……」

――どうして、僕はこんなことに気付けなかったんだろう。僕は、

どこで道を間違えたんだろう。
悔しくて、拳を握り締めていた。
――だけど、しこりのように硬くなったその拳は、小さく、暖かいものに包まれて。
見ると、シオリが恥ずかしそうに、僕の握る拳に手を添えていてくれた。顔を真っ赤にして、僕から眼を背けて。
「……」
シオリは答えない。
「何で、何でわかっているのに、僕はそこへ行けなかったのかな」
僕は誰に言うでもなく、呟く。
でも――力に取り付かれた僕に、今みたいに救いの手を差し伸べてくれたのは、君なんだ。そして、この美術館に君と来て、僕はここでそれをはっきりと知ることができた。
彼女の差し伸べてくれた手を、もう絶対に離したくなかった。
そう思ったから、僕は握り拳をゆっくりと解いて、シオリの、紅葉のように小さな白い手を取った。
彼女は恐る恐る顔を上げた。
「さぁ、次に行こうか」
安心させようと、一瞬笑って見せたけど、すぐに自分の言った言葉の恥ずかしさに耐え切れなくなった。
僕は彼女の手を引き、歩き出す。
光に包まれた、その道を――

Ant－lion

「お台場に行ってみないか」
お互い行った事もなかったし、近かったので、そんな僕の提案はすぐ通った。
美術館を出て、品川から山手線で新橋はすぐ近くだった。新橋のＳＬ広場を抜け、ゆりかもめに乗り換え、台場駅に向かった。
まるでロープウェーのようなゆりかもめの進行に、僕達は少しはしゃぎ気味だった。海が見えて、船が見えると、田舎者丸出しに喜んだ。
「綺麗な夕日だ」
ゆりかもめから、海の向こうに沈んでいく夕日が見えた。
台場駅で降りると、すぐ前にアクアシティがあった。その隣に、５メートルほどの、小さな自由の女神があった。
「写真撮ろうよ」
シオリは自分のトートバッグから、デジカメを取り出した。
何で女の子は、プリクラとか、こういう静止画の記録が好きなのだろう、と思う。きっと、女の子は忘れっぽいからなのだろう。だから思い出を形で残そうとする。男がそれをしないのは、きっと思い出から、すぐに覚めてしまうからだからだろう。。男は現実――生きることの苦痛が、女よりも多いことを、例外なく知っている。
僕はカメラを使ったことがない。家族がカメラを持っていないからだ。我が家は一度も家族旅行へ行ったことはなかったし、運動会にも親は参加しなかった。だからこれは僕の生まれて初めて撮る、学校の集合写真以外の写真かも知れなかった。
シオリは、細い腕をいっぱいに伸ばして、さっき買ったペアリングを光らせて、デジカメのシャッターを構えた。これでは自由の女神はバックにならないだろうけれど、まあいいか、と僕は思う。こうして写真に残すことで、思い出を作る作業なんて、僕が今まで路

傍の石ころのように関心のなかったことも、今は少しずつ経験していこうと思うから。

「……」

不思議だ。生きるために意味を見出そうと、躍起になって動いていた時より、何も考えてない、こんなとりとめもないことばかりの今の方が、自分が安定している。

この頃になると、僕はシオリと自然に会話が出来るようになっていた。どんな流れではじめたのか、もう忘れたけれど、既に手もつないでいたし、歩きながら色々な話をした。

アクアシティを散策した後、フジテレビの前へやってきた頃には、もう空は暗くなっていた。イベントで、テレビで芸能人が作った創作料理を再現して売る屋台があった。小腹が空いていたので、僕達はそこで売っていた、マンゴープリンをモチーフにしたらしい、パパイヤプリンなるものだけを食べた。これならハズレがなさそうだと思って買ったのだが、とんでもなく不味かった。後で聞いたら、番組史上一番の不評スイーツだったのだそうだ。

その後、海浜公園をひと歩きして、パレットタウンでお台場名物の観覧車に乗った。３０分も待ったのだが、お互いそろそろ普通に話せるようになったので、機関銃のように話し続けていたら、割とすぐに時間が過ぎた。

ようやく番が回ってきて、僕達は係員の促されるままに、オレンジのゴンドラに乗り込んだ。

どんどん上に上っていく――ちょっと前だったら、お互いガチガチになって何も話せなかったかもしれないけれど、今は密室でも、彼女はそれほど緊張した表情を見せなくなっていた。

ただ、それでも僕達には、自然な流れっていうのがあまりにも不足していて、隣に座ることが出来ず、向かい合って座ったんだけど。

半分も上ると、シオリは夜景に声を上げはじめた。僕も窓から外を見たが、海は真っ暗で、レインボーブリッジが見える以外は、真っ暗な海が広がっていて、何が何だかよくわからなかった。埼玉に

は海がない。僕は海水浴にも行ったことがない。一度浜辺の海に行ってみたい。海の水はどんな味がするんだろう。

「すごいすごい！　わぁ～」

彼女は、これまで見たことがないほど表情を幼くして、無邪気にはしゃいでいた。普段学校のアイドルとして、どこか自分を繕いがちだった彼女が、初めて普通の１７歳の少女に見えた。いや、それよりも幼い彼女を見たかもしれない。

僕はそれを、少し傍観者的な立ち位置で見ていた。

「あ……」

彼女が自分の姿を省みたのは、観覧車の頂上を少し過ぎたくらいだった。

「ごめん……はしたない――かな？」

今更恥ずかしそうにする。

「いや、はじめて君のそんな姿を見たからさ――その、新鮮というか、見惚れたというか」

可愛い、とか言えばいいのだろうか。だけど今度はそれが僕のキャラじゃない。だから、何かフォローするにも、その後の言葉が思いつかなかった・

「……ごめん」

「いや、謝るのは僕の方だ」

僕は彼女の目を覗き込む。そして、笑った。

「僕は君の事を、本当にうわべしか見ていなかったんだな。君も無理してたんだろ？　教師とか、周りから随分持ち上げられて、自分を抑える癖がついてるんだろ」

「……」

「その――僕の前では、そんなに無理するなよ。別にはしたなかったり、恥ずかしい事をしても、誰にも言わないしさ。それが本当の君なんだろ。だったらそれでいいと思う」

「……」

それだけ言う頃には、観覧車はもう、地上に戻りかけていた。僕

は立ち上がり、降りる準備をすると、僕は立ち上がろうとする彼女に手を差し伸べた。

近くにゲームセンターがある。

ゲームセンターを練り歩く。緊張をほぐすために体を動かしたくて、エアホッケーをやろうと提案した。

結果は僕のストレート勝ちだった。中学時代、僕は野球で打率６割を誇った。動体視力なら自信がある。ワンポイントくらい取らせてあげてもよかったのだけど、わざと点を取られる演技がひどく稚拙になりそうだったので、それは諦めた。

シオリは少し膨れたが、仕方のないことだった。性に合わないことは出来ないタイプなんだ。思っても、理性が邪魔をする。人前で笑ってやったり、わざと花を持たせたり、そういうことが苦手なんだ。いつでも本気なのが、一番楽なんだ。いつでも一定に保てるから。

その後ゲームセンターで、フリースローだとか、レースゲームだとか、ジャンクのような遊びをはしごした。

上の階にあるボーリングを一ゲームやった。お互い話し過ぎて、ここらで閑話休題を望んだのだろう。友達も少ない僕は、ボーリングなんてするのも五年ぶりくらいだったが、ここでも１８２対６５で、僕の圧勝だった。

「ほぼトリプルスコア……サクライくんって、何でも上手なんだね」

「その台詞、前も君から聞いた気がするよ」

その台詞を前に聞いた時、その後僕は激昂したっけ。

その後はビーナスフォートで少し買い物をした。お互いに服を選んだり、それを見立てたり、おもちゃ箱をひっくり返したような、色んな雑貨屋を回って、それを見ながら楽しんだりしていた。昼にクレープなどを食べ過ぎたので、夕食は少し時間を遅らせて、ラッシュアワーを避けた。ビーナスフォートの中にあったイタリアンレ

ストランで、僕はボンゴレパスタを食べた。シオリはクラムチャウダー風のクリームパスタを食べた。半分食べて交換したが、どちらも美味だった。

最後、お互いの服を見立てたりしているうちに、もう時計は１０時を回ろうとしていた。条例で高校生はもうゲームセンターにも、カラオケにも入れてもらえない。

そうしているうちに、いくらか買ったものがある。シオリの荷物も僕が持っていた。

手持ち無沙汰になって、僕達はビーナスフォートの噴水の近くにあったベンチに腰を下ろした。

僕は近くの自販機で、紙コップの温かいカフェオレとミルクティーを買ってきた。シオリがミルクティーを取ったので、僕はカフェオレに口をつけた。

「あー、運動不足だ。足が痛いな……」

シオリが自分のふくらはぎを軽く揉んだ。ミニスカートだから、彼女の細い足が艶かしい。彼女も女子の中では運動神経がいい方だけど、基本文化系だ。

僕はさほどではなかったが、いいリハビリだと思った。でも、さすがにちょっと歩き過ぎたのか、ベンチに深く座ると、反射的に大きな溜息が出た。

「ゆっくり休みなよ。まだ時間はあるから」

ここから池袋まで約４０分。地元に帰る終電は、１２時過ぎにもある。

ビーナスフォートの中は暖かく、噴水の音が心地よい。ＢＧＭとカップルの話し声が飽和して、こんな喧騒の中を、今までの僕は嫌っていたはずなのに。

「色々連れ回して、悪かったね」

「え？　ううん、すごく楽しかったよ。ちょっとはしゃぎすぎただけだから」

「……」

ざまあない。初めての東京だっていうのに、特別なことは何も出来ない自分が。

こうやって立ち止まると、沈黙が襲ってくるから、二人とも意味もなく飲み物に口をつけた。まだまだ不器用な僕は、重い沈黙を恐れて、無理に意味のないことを言って沈黙を埋めようとする。

「終電までに帰ればいいんだから」

周りのカップルも、既に帰り支度をしている。入った時よりも、ずっと人数が減っていた。クリスマスも終わったことだし、ここで別れを宣告されたカップルもいるだろう。そう考えると、僕達は今日、何故一緒にいたのか、それさえも不思議なことに思えてくる。

愛情自体が、不毛なものであるのかもしれないんだ。愛情なんかにこだわらずに生きて行ければ、一人でいる時間は、実に容易いものだったかもしれないのに。

「・・・・・・」

意味もなく口から出た『終電』という言葉――

現実へ僕を引き戻す夜汽車の時間が迫っている。それを僕に意識――実感させる言葉だった。

僕は、思考が日常の状態に戻るのを感じながら、夢心地からゆっくり覚めるような感覚におそわれた。あの家に帰る現実を思い出して、彼女が側にいた、この時間が凍りつくような感じがした。

嫌な時間だった。現実はいつもリアルで、蟻地獄みたいだ。

Confession

こういう嫌な時間を、僕は何度も味わった気がする。
散々抗って、結局は奈落へ突っ込む。
何も考えたくないけど、何も感じないように、心をいっぱいにしたがる。
全国大会を決めた日の夜も、カレーを振舞った合宿の日も、日常に戻ってすぐ、家族に順繰りに罵倒され、親父に殴られ……
僕の現実はここだと思い知らされた。いくら外で足掻いても、僕に希望などないのだ。こうして淘汰されるだけが、僕の存在価値なのだと。
12時に解けてしまう魔法をかけられたシンデレラは、きっと王子の前から逃げ出す時、こういう気分だっただろう。叶わぬ一夜の夢と気が付かされ、また明日からは継母に虐げられる冴えない現実が待っている。だとしたらこの一夜に何の意味があったのか――
「……」
普段は、それは仕方のないことだと、諦め、半ばと歌や暴力を教授できていたのに――
今日は――今だけは、あの家に帰るのが恐かった。
今、あの家に戻ったら、僕はまた、この芽生えかけた思いを見失いそうで――
家に戻れば、またあの繰り返しだ。僕はもう二度と、希望を見出せず、ここに戻れない気がして……
重い気持ちで、僕は両手で持っていた紙コップを軽く握り潰して、じっとそれを見ていた。
そんな素振りが、きっと何か考え事をしているように見えたのだろう。シオリが気を効かせるように、僕に話を振った。
「もし……」
「ん？」

僕は彼女の声に引き戻される。シオリは俯いていた。僕の目を避けているのがわかった。
「終電が終わっちゃったら、どうする？」
「え？」
僕は少し体を緊張させた。
「あ――た、例えば。例えばの話――」
「……」
例えばの話でも、これはかなりデリケートな事項だと言っていい。ただ、彼女にはそれを訊く権利があると思った。男と一緒にいて、そういうことを心配するのは、女の子なんだから、当然な気もした。それに、彼女から訊かれたことは、出来る限り正直に答えたかったから。嘘偽りなく。
「そうだな……とりあえず、今思いついた選択肢は3つだな。野宿を入れれば4つだけど、こんな冬の夜に、女の子を冬空にさらすわけにいかないからな」
「その3つって？」
「1、24時間開いてる喫茶店か何かで時間を潰す。2、ホテルを探す。3、タクシーで帰る。でも、よほどのことがない限り、3は勘弁してくれ。破産しちゃうから」
僕は指を折りながら苦笑する。しかし、シオリの浮かない表情を見ていると、あまりに正直すぎたかも知れない。確かに事実でも、ホテルを探す、なんて言うべきじゃなかったんだ。相変わらず僕は対人関係が苦手で、空気が読めない。
「漫画とかだと、終電なくなると間違いなくホテルだけど、今の時代、他にも選択肢はあるから安心しなよ」
何となくそんな彼女を安心させなくては、と思って、わけもわからず変な事を口走る僕。
でも、もう本当は、もうどうしていいかわからない。僕は今、心のどこかで、終電なんか来なければいい、と思っている。けど、それは、一人になりたいから？　それとも、彼女と――

その答えも、自分の中では既に出ている。だけど、僕はそうなったとき、彼女と一体どうなりたいんだろう。それだけは、分からなかった。

「……」

ビーナスフォートの中は、１０時を過ぎて店も閉まりはじめ、飲食店のラストオーダーも終わる。噴水広場も、もう掃除の係員と、数人の客がいるだけだった。残りは足早に、出口へと向かっている。

係員に声をかけられる。

「すみません、そろそろ閉館ですので……」

「……」

そう言われては仕方がない。僕はベンチから立ち上がる。

だけど――内心では、もうこの時点から、僕はあの家に向かって歩を進めるという現実に、心が気だるいような深淵に落ちる感覚を味わっていた。

今日一日、色々なことがあったけれど、それさえも不毛に思えるほどの倦怠感。

「じゃあ、行こうか」

僕は肩に鞄を掛け直して、踵を返した。

すると、僕の左腕が何かに引っ張られた。

振り向くと、シオリが座ったまま僕のコートの袖を掴んでいた。

「どうしたの？」

僕は聞く。

「……」

シオリは、真っ直ぐに僕の目を見つめていた。緊迫感はあっても、病院の時のような、怒りを含んだ目ではない。彼女の明鏡止水の輝きが際立つような、切実な思いに縛られたような目だ。

その表情には、彼女特有の緊張の気があって……

「なんか、顔、強張ってるよ？」

僕は自分の頬を右手で触る。

「疲れてるなら、もう少し休むか？」

「ううん、すぐに済むことだから、ここで聞いてもらいたいことがあるの……」
「……」
もう、広場に残っているのは、僕達だけになっていた。
僕はもう一度ベンチに座り、彼女の目と正対する。
「どうしたの？　聞いてほしいことって？」
僕は彼女の目を覗き込むが、彼女は俯いて、僕から目を一度外す。
「わ、私……その、あの、サ、サクライくんのことが……」
「……」
ま、まさか。
「サ、サクライくんの、ことが……」
もう一度言って、深呼吸。もう彼女は、顔を耳まで真っ赤にしている。
それでも、ゆっくりと僕の方へと視線を戻し、しっかりと僕の目を見て、言った。
「す、好き、みたいです……」
「……」
その言葉を待っていたように、広場の噴水が水を噴き上げた。ザーッ、という音。
その時には、彼女は重力に引きずられるように、首ごと視線を落としていた。
「……」
その言葉を聞いた瞬間に、体の底から煮えたぎるような衝動が湧き出て、わめき出しそうになった。震えているのかと思うほど、体の平衡感覚が薄れて、地に足がついていないような浮遊感を味わう。
ただ、じっとしていられないような感情は、脳からあっという間に全身に伝わって、体中がぽかぽかする感覚に包まれた。
僕は、歓喜だとか、興奮だとかっていう感情に縁がなかったけれど、これがそういう名前の感情なのだろうと思う。
だけど――

好き『みたい』って、なんだろう。
そのフレーズに、一抹の不安を覚える。まるで虫眼鏡で紙を焼いたくらいの小さな点だけど、放って置くとそれが広がりそうな感じの不安だ。
「……」
沈黙。
かなり長い沈黙だったけれど、彼女も僕も視線を外せない。別にその感覚が嫌だっていうわけじゃない。お互い、その先に何て言っていいのかわからないのだ。
その言葉の後、普通、何か彼女がそれを言った目的を話すだろうから、僕はそれを待つしかない。
「す、好き、です……」
僕が意味がわからないと思ったのか、彼女は言い直した。
「……」
しかし、また沈黙。
「えっと――」
僕が口を開いた頃には、噴水の水がおさまっていた。それ位長い沈黙だった。
だけど、僕が次の一句を述べる前に、シオリがそれをきっかけに、話し始めた。
「あ、あの、みたい、って言うのは、その……私、恋愛とか、あんまりしたことないから、まだ上手く実感できてなくて……」
「……」
「私、ずっとあなたの事を見ていたの。入学してから、あなたのこと、すごいな、って。最初はあなたのこと、あまりに頭がよすぎて、何を考えているかわからない、恐い人だと思ってた。でも、その反面でずっと憧れていたの。私はどんなに成績がよくても、自分の力を現状維持にしか使えないけれど、あなたの力には、何かを変えようとする意志も、激しさも感じたから。そんなあなたが、羨ましかったの。それで、こうして話してみると、無口だけど、優しくて、

繊細で、ちょっと抜けてて――」

シオリは俯きながら、くすっと笑う。

「私、男子とあまり上手くやれる方じゃないけど、そんなあなたと話してると、本当に楽しくて。2年になって、あまり話せなくなったけど、またこうして話せるようになって、私、何だか、本当に嬉しくて……」

「……」

「話せなくなった頃は、何で急に態度が変わったのか、あなたのことばかり考えている自分がいて――それからもあなたの、一途で純粋で、激しくて、でもたまに見せる優しい目が、いつも気になって……あなたのその、凛とした、張り詰めた空気の中にいると、胸が苦しくなる。いつも教室にいないと、何をしてるんだろう、と思うし、放課後にあなたが教室に戻ってくると、元気そうだな、って、安心する。その繰り返しだった」

「……」

「はじめはそれを認めることが、恐いような、恥ずかしいような感じだったけれど……あなたとこうして、また話せることが嬉しいと思った時に、思ったの。あぁ、これがきっと、恋なんだな、って」

「……」

何とも不器用だけど、彼女の真面目な想いが、他人の心情に疎い僕にも伝わってくるようだった。

恐らく彼女は、この答えに辿り着くために、沢山自分と向き合ったのだろう。未知の世界を手探りで進み、今も手探りのまま、勇気を出して、この答えを見つけたのだ。

きっとそれは、今まで僕に告白して来た女の子も、同じだったかもしれないけれど……

彼女が僕を選んでくれたことが、とても嬉しかった。

他の誰でもない、ここまで誰かを特別に思えるのは何故なのか、まだ僕は答えがわからない。

分かっているのは、僕の体中が温かいものに満たされていくよう

な、遅れてきた歓喜にゆっくりと支配されていくような、
「でも、あなたは今、学校でよく見る、捨てられた子犬みたいな、不安でしょうがないって顔をしてる……」
そんなシオリの呟くか細い声が、沸き立つ歓喜から、僕を現実に引き戻す。
「え？」
「何か、どこか遠くへ行きたい、今いる場所から逃げたいって、そんな顔……」
「……」
すると、シオリは今日一番の、強い視線で、僕を見た。
「サクライくん、さっき私に、観覧車で言ってくれたでしょ？　僕に遠慮しないでいい、って」
「あぁ……」
「私、とっても嬉しかった。だから、サクライくんも、私の前で無理しないで。言いたいことがあるなら、何でも言って、いいからね」
「……」
「私に何ができるかわからないけれど――サクライくんは今まで、その力を持っていたから、誰にも寄りかかることが出来なかったんじゃないかって。私に何ができるかわからないけれど……私はもう、あなたにばかり辛い思いをさせたくないから……」
そこで彼女は一度言葉を止めた。まだ告白ＯＫの返事をされたわけでもないのに、一方的に何を言っているのだろうと、少し気色ばんでしまう素振りを見せた。
「……」
この時の僕は、性欲とも、支配欲とも違う感情で、彼女を求め始めていた。
ただ、帰ってから、ひとりぼっちになることが恐くて……
今帰って、次の日、家族と顔を合わせたら、僕はきっと、彼女がいても、心の平穏が訪れないという絶望に叩き落される。予感などではなく、そう、確信していた。

でも――まだ、それが真実だと認めたくない自分がいた。時間稼ぎでもいいから、少しでも彼女がくれた今の気持ちを信じていたいと……

どこかで気だるいような諦めを抱いて生きてきたけれど、もうそこには戻りたくなくて、だけど今のままでは、もう少しでつかめそうな希望に手が届かずに終わってしまいそうで……

今、目の前にある彼女の笑顔、僕を見つめる瞳が、あまりに優しくて。

堪えきれなかった。体が本能的に、彼女に救いを求めていた。

僕は、気がつくと、隣にあった彼女の左手に手を添えて……

彼女に、こう告げていた。

「君の時間を、今夜は、僕にくれないか」

その言葉は、彼女を今夜帰さない、ということを意味していた。

Wander

自分は本当につまらない人間だと思った。

今日のデートは、思い返してみれば、当然のことしかできていない。雑誌のデートマニュアルを参照したかのような、当たり障りのない、あまりに平坦なプランだ。

観覧車に乗ってしまえば、キスのひとつも迫れればいいものを、それも出来ないくせして。全然ハラハラドキドキ感がない。もうちょい斬新な切り口はなかったのか。浮かれるだけ浮かれて、何をやっていたんだろう。

しかも、クライマックスが、これまたお決まりの、終電逃しだなんて……考えてみると、ちっとも面白くない。まるで僕の面白くなさを、一日で見れた気がした。頭の中で、自己嫌悪のエンドレスリピートがかかっていた。

電車の中で二人は、何の会話もできなかった。お台場から川越までは、電車で二時間弱かかる。そんな長い時間を無言で過ごすのは、実に不安な時間だったので、今日は川越に帰ることは諦めた。

僕達はお互いの手を、強く握っていた。

高校生の僕達にとって、東京の夜はひどく心細くさせる何かがあった。雑踏の流れが早過ぎて、手を離したら、今にも飲み込まれてしまいそうなくらい、自分達が弱い存在だと認識させられて。僕の場合はその感情に、家族からの救いを求める感情も入り込んでいたけれど。

新橋に戻って乗った山手線の中で、シオリは、この一日、ずっと告白しようかと、気を張っていたのか、それともはしゃぎ過ぎて疲れていたのか、僕の肩に寄りかかって、眠ってしまった。沈黙から逃げてしまって、ずるいな、とも思ったけれど、お返しに寝顔を観賞してやる余裕もなかった。

彼女の存在が、その手、体温を伝って僕を侵食する。それは怒り

でもないのに、僕を今、強く、熱く、重く侵食している。幸せなのか、そうでないのか、複雑な気分だった。

今、ルーレットのように環状線の山手線をぐるぐる回っている。シオリはまだ、僕の肩に頭を預けて、目を閉じていた。僕はそんな彼女を見て、彼女が目を覚ました時に当たった駅で降りよう、と、投げやりな計画を立てた。投げやりになってしまったのは、きっと、時間を無駄遣いしたかったのだろう。

そして、シオリが目を覚ました時の駅は、間の悪いことに、渋谷だった。お世辞にも治安がいいとは言えない街だ。外にいたのでは、僕はともかく、彼女が危険な目に遭った時に、彼女を守れる自信がない。そうでなくても僕はチビだし、彼女は美少女なのだから、声をかけられる可能性は高い。

夜の放浪者になったことを、彼女はすぐに察知し、渋谷で降りることをあっさり承認した。夜の渋谷を、二人黙って歩いた。勿論、来たことがないから、行き当たりばったりに。

坂を上っていくと、街並みに、いやにラブホテルが諸所に目立つようになって来た。僕達は、いつの間にかホテル街に迷い込んでしまったのだ。

最後の最後で厄日だ。どんどん二人の空気が悪くなって行くのを感じた。

だけど、あのまま帰ったら、僕は一体どんな気持ちになったんだろう。

それは今の状況と照らし合わせた結果論に過ぎないけれど——どっちが良かったなんてことは、今の僕にはわからない。考えたくもなかった。

最後の最後で、今日彼女からもらった気持ちが、台無しにしてしまったような気がした。

僕はもうこれ以上、何かを失う感覚を味わうのが恐くて、何だか妙に焦っていて、普通のホテルを躍起になって探していた。

「もういいよ」

やがて彼女はそう言った。ラブホテルばかりが目に付くが、普通のホテルを探そうと、必死に街並みに目を配っていた僕に。もう普通のホテルじゃなくていい、という意味だ。

「ちょっと待って」

と言って、シオリはトートバッグから、今日初めて携帯電話を取り出し、自宅に電話を入れていた。

プライベートな会話を間近で聞くのも憚られて、少し離れたけれど、友達の家に泊まる、という内容が少し聞こえた。元々、今日は友達と遊びに行く、と言って、家を出たらしい。今までの優等生の実績上、それはすぐに信用されたことだろう。そして、電話を僕の前で入れたのは、もう後戻りしない、という彼女の覚悟を、僕に見せてくれたのかもしれない。

携帯を切って、彼女は無理に笑った。

「家に電話した」

「……」

「私、門限がないの。門限がなくても、普段から寄り道しないで帰りが早いから。門限なんて必要ないんだって。おかしいでしょ？えへへ……」

「……」

それは彼女の、照れ隠しの精一杯のジョークだったんだろう。僕に責任を感じさせないための。

「じゃあ、ここでいい？」

僕は目の前にあったホテルに目を向けた。彼女は、一度唾を飲み込んでから、うん、と、力なく答えた。僕も訊きながら、ここでいい、なんて、何だかすごいこと訊いているな、と思った。何だかギラギラしているみたいな物言いに自己嫌悪する。

入ったホテルは、中に入ると、少し薄暗かった。ロビーにいた老婆が虚ろな目で、僕達二人の顔を覗き込んだ。シオリが恥ずかしがっているのはわかっていたので、僕は自分の体で、シオリの体を隠していた。薄暗い中、梅干しみたいに面の皮の緩んだ老婆は、まる

で妖怪のようにも思えた。
　ハズレだ、と僕は思った。こういう時、ロビーには誰もいない方がありがたかったのに。ていうか、普通そうなんじゃないのか？今時のホテルはこんなシステムの方が珍しいぞ。
「一泊お願いします」
　出直すのもカッコ悪くて、観念して僕は一万円札を老婆に差し出した。先程コンビニのＡＴＭで引き出した金だった。普段はケチな僕が、今日はずいぶんと気前がいい。老婆がお釣りを取りに、一度奥に引っ込むと、僕は後ろに下がっているシオリの隣にある機械を指差した。
「じゃあそこ、好きな部屋のボタンを押して」
　老婆は既にシオリが見入っている、部屋の鍵の自動販売機を指差した。シオリはこういうシステムであることを、初めて知ったらしい。
「部屋、どこでもいいから選んでいいよ」
　シオリに小声で声をかけた。僕は早く部屋に行きたかった。ラブホテルに入った後ろめたさ、目の前にいる老婆は、僕達がラブホテルに入った、という生き証人なんだ。早くこの場から逃げたかった。老婆の邪推するような目が、心に痛かった。
「――サクライくんが決めて」
　シオリはやはり尻込みしているらしい。余裕なく言った。僕もそう言われて、譲り合っているわけにもいかない。適当にボタンを押すと、数字の書かれたプラスチック板が落ちてきた。ロビーの老婆に渡すと、それと鍵を交換してくれた。部屋は沢山あったが、部屋が演出するムードに僕は何も期待していなかったので、何でもよかったのだ。
　部屋は３０６号室で、３階だった。奥の、鉄格子のようなデザインのドアのエレベーターにそそくさと向かおうとした時、老婆が、ごゆっくり、と言った。
　大きなお世話だ、と思った。

Hotel

エレベーターに乗っている時間は、ほんの２０秒程だったが、密室に入ると、シオリの緊張が伝わってくるようだった。横にいるシオリは、小さく俯いて、顔を強張らせていた。握っている手も、皮が厚くなったようにしゃちほこばっている。

エレベーターを降りて、３０６号室の前へ行く。鍵を僕が開け、シオリを入れてから僕が入り、鍵を閉めた。

部屋は本当に簡素なものだった。クローゼット、シャワールームにテレビがあるだけで、ひときわ目を引くのが、シーツの整えられた、大きなダブルベッド。その横にはピンク色の照明。テレビの前には小さなテーブルがあり、その上に、配信しているアダルトビデオのチャンネル欄――ベッドの横にはティッシュの箱とコンドームが置かれている。

僕は真っ先に、チャンネル欄をテレビの横に押し込み、ベッドの横のコンドームを、自分のコートのポケットに隠した。自分がエッチな目的でここに彼女を連れ込んだと思われたくない。僕の、誠意というよりは、自己の正当化から出た行為だったといっていい。

「……」

いけない――僕はさっきから、何を考えているんだ……

彼女と一緒にいる時間が延びただけ。それだけのことなのに。僕もこの、ラブホテルという空間と、彼女の緊張した空気に飲まれているのだろうか。エッチな気分というか、何とも彼女を、一人の女性として、意識してしまう。

考えないようにするのは、考えているのと同じことで――この思いを払拭しようとすればする程、僕の気持ちはドツボにはまる――彼女を執拗に求めてしまう。

その中で救いを求めるとすれば、彼女の可憐さだろう。

まるで花のようにあどけなく、頼りないほどたおやかな彼女の雰

囲気は、男から卑猥な心を取り去ってしまうような雰囲気がある。押し倒すとか、姿態を想像するとか、そういう目で汚すことが、何だか悪い気がしてくる程、彼女の美しさには、そんな凛とした気品があった。

とりあえず、僕はその場に荷物を置き、ブルペンピッチャーみたいに肩を回してみせた。ガチガチになった体をほぐすと同時に、それで、シオリの次の行動を待っていた。

シオリもそれを見て、自分の鞄を置いて、小さく伸びをした。お互いの行動を待っていても、埒が開かない。やっぱり僕が率先して動くべきだ。ここに連れ込んでしまった自分の責任は、自分で処理せねばなるまい。例えそれがどんな結果になろうとも。

僕はきっかけを見つけようと、入ってすぐにあったクローゼットを開けてみた。バスローブが2着、ハンガーにかかって、バスタオル、ハンドタオルが2枚入っているだけだった。ソファーがあるわけでも、夜景の見える窓があるわけでもない、全然お洒落な部屋じゃなかった。入ってすぐ、ベッドへなだれ込む手続きを踏んだカップル用の部屋だ。

クローゼットを閉めて、僕はエアコンのスイッチを、ベッドの横の小さな棚の上に見つけた。冬の街を歩き通して、体は冷えきっていた。エアコンのスイッチを入れると、埃っぽい匂いが漂った。冷えた頬に暖かい風を感じて、そして、二人同時に溜息をついた。

僕はもう、取るべき道は二つしか思い浮かばなかった。シャワーを譲るか、ベッドに行くかのどちらかだった。そしてその選択肢の、どちらも気が引けた。

彼女に側にいて欲しい——僕をゆっくりと締め付ける、夜の牢獄から、今日だけでいいから逃れたかった。そう願う心には、いやらしい気持ちはなかったはずなのに、何故、その半面で、こんな形で彼女を求めてしまうのだろう。僕の思考は、ここに入って一層、収拾がつかなくなっている。

今はこんな気持ちは必要ない。彼女の存在が近くにいるだけでよ

かったのに――

何であそこで諦めなかったんだろう。あそこまでは十分うまくいっていた。こんなことをしていても、いずれはあの家に戻らなくちゃいけない。遅かれ早かれ、この夢からは覚めるのに。最後の最後で、らしくもなく駄々をこねて、彼女を困らせてしまった。

こんな時、一番楽な方法は、開き直ることだろう。彼女だって、それなりに覚悟していることは間違いない。遅かれ早かれシャワーくらい浴びるんだ。さりげなく言えればいいのに、僕はその一言を言えない。

彼女の反応が怖かった。彼女からも『否定』されそうな気がして。そんなことを考えている矢先に、シオリが顔を上げて、震えているような瞳で、僕を見た。

「サクライくんは……」

言いかけて、一度さし俯いて、言葉を止めた。

「こういうところ、来たこと――あるの？」

質問して、すぐに僕から目をそむけたシオリの耳は、真っ赤だった。

「……」

嫌な質問だった。だけど、それを聞くということは、僕がタカハシ・ミズキとホテルに行ったことを、まだ彼女は知らないということだ。

答えれば、ますます雰囲気を重くしそうだったが、ここで立ち尽くしているわけにもいくまい。とにかく二人とも、取っ掛かりを開く血路を見出そうと必死だった。

「正直に言うと、1、2回、ある」

「そうなんだ……」

ない、とか、清廉潔白を装うのも気が引けて、正直に言ったが、予想通り、嫌な沈黙がやってきた。でも、彼女の前では素直なままでいたいんだ。この思いを無駄にしたくない。だから僕は、この気

持ちだけは裏切れない。
だけど、この今の気持ちだけは、例外だ。この気持ちをさらす勇気が、僕には出なかった。今度こそ歯止めが効かなくなって、彼女のことも、全てのものが壊れてしまうような気がして……
僕だって、レイプをする性格じゃないけど――こんな可愛い子と、これから一晩っていう時なのに、欲も持たずに無難に過ごすのも、男として野暮ってものじゃないか？　彼女は、僕を好きだって言ったんだし、ＯＫかも知れないし。
そうやって、物事を軽く考えようとしてみた。だけど出来なかった。
それは、僕が彼女に恋をしたからか……
まさか――この僕が……
「あの――とんでもないことをさせてしまったと思ってる。自分で誘ったのに、わけわからないけど、やっぱり君に嫌な思いはさせたくないんだ。だから、もし怖いなら、帰っても……」
僕は後ろめたさに潰されて、思わず声が出た。何でこんなに後ろめたいのかもわからないまま。
「ううん、いいの」
シオリは首を横に振った。
「怖くはないの。ただ、こんな所、来たことないから、緊張してるだけ……」
彼女の、ひなげしの花みたいな笑顔も、ここに来ては、随分とぎこちない。やがて彼女もそれを自覚してか、無理に笑うことを諦めたように、大きく息をついた。
「それに、もう帰れないよ」
彼女は言った。
「もう終電ないもん」
「……」
さっきまで終電なんか来なけりゃいいと思っていたのに、いざなくなってしまうと、急に心細くなった。

僕達は退路を塞がれてしまったのだ。まさに背水の陣。
ここで死中に活を見出すしかない。

「疲れてるなら、シャワー浴びてきなよ。僕は君の後、借りるから」
「うん……」
しかしシャワールームは、ベッドルームの隣にあって、それを隔てているのは、擦りガラスではなく、普通のガラスだった。ベッドルームから、シャワールームの中は丸見えだった。
「……」
かなり無理のあるシャワールームだった。明らかに『一緒に入るカップル用』だった。
「見たりしないよ。見たら退学に訴えられても、文句は言えないし」
「うん」
彼女はぎこちなく微笑んだ。ジョークのつもりだったが、僕の言葉は完璧にスベった。あまりに場の空気が重過ぎて。
「別に、サクライくんが覗きとかする人とは思ってないの」
「……」
どうして、彼女は僕のことを、こんなに信じてくれるんだろう。何度も泣かせて、傷つけて、挙句初デートでこんな所に連れ込んだ男を。
抱くことが、彼女を傷つけることで、抱かないことが、彼女を思いやっていることなんて、誰が決めたわけでもないくせに――こういうのを、固定観念って言うんだろう。僕はいつまでも、ここから抜け出せないでいる。自分の意志で、善悪、好悪、真偽――何一つ判断できない。
今もそうなんだ。どうしていいかわからないのは、僕の意志で正解をいつまでも選べないから。
クローゼットから、小さい方のバスローブをハンガーごと引っ張り出し、自分の着ているダッフルコートを脱いだ。首からクロスのチョーカーをはずし、ダッフルコートのポケットに入れて、持って

いたハンガーに、ダッフルコートをかけた。
「サクライくんのコートもかけておいてあげる。貸して」
「ああ……」
変に積極的なシオリに疑念を抱きながら、僕もマフラーを外して、羽織っているコートを脱ぎ、シオリに手渡した。
シオリは僕のコートをかけてくれた後、僕の目を避けるように脱衣所に入って行った。やっぱり彼女ももう余裕がなかったんだ。僕と対峙しているのが、よっぽど苦痛だったに違いない。
一人部屋に残され、のぞきの疑いがかかる前にベッドに倒れこんだ。大の字に寝転がり、疲労したふくらはぎに血の巡るような感覚を感じながら、大きく深呼吸した。
「……」
病院で、彼女の涙を見た時、もう二度と、彼女を絶対に傷つけたりしないと誓ったはずなのに――
彼女を思いやろうとするなら、こんな所に入らなきゃ良かった。今日の夢心地を、自分から壊してしまったような気がして。全て諦めて、家に帰れば、彼女には何の心配も与えないで済んだのに。
前にラブホテルに入った時――あの時は、どうだったっけ……
あの時も、確かにタカハシ・ミズキに対する罪悪感はあった。だけど、あの時は、自己を正当化する思いがそれに勝っていたのかも知れない。
今回の想いは、あの時とは全然違う。
こうして息苦しい空間で時間を共有することで、彼女に対する色々な想いが募る。胸の奥が、少し苦しくなる。
あの時と、誰かに救いを求める気持ちも状況も、まったく同じなのに。ただ相手が違うだけで、嫌われないかと、とても恐くなる。
彼女は、僕に抱かれれば傷つくだろう。僕だって、もう自分の欲望だけで、彼女のことを抱いたりなんか出来ない。
もう誰も傷つけたくなかった。特に彼女のことは、絶対に。　今日一日、この温もりをくれた、彼女のことは……

「……」

どうして彼女に対して、こんなことを考えてしまうんだろう。

どうしてこんなに胸が締め付けられるのだろう――どうしてこんな気持ちになってしまったのか。

抱いてしまったら、今の二人の形さえも壊れてしまいそうな気がするからか。夢心地のような一日の最後に、そんなことになりたくないのか。彼女に対して、何か生理的嫌悪があるからか……

濡れそぼった髪をタオルで拭きながら、バスローブ姿でシオリは出てきた。僕は脱衣所のドアが開く音を聞いて、ベッドから体を起こしていた。

「シャワー、空いたから……」

彼女は、何て言えばわからないといった様子で、それだけ言った。

「ああ……」

お互い、言葉が尻込みしていた。15分近くシャワーを浴びていたが、その間シオリは何を考えていたのだろう。

「服、まとめておきなよ」

「あ、そうだね……」

シオリはトートバッグを持って、また脱衣所に入って行った。すぐに出てきたところを見ると、今まで着ていた服を、急いでバッグに押し込んだのだろう。彼女の動きも、何とも頼りなく、しどろもどろになっていた。

シャワー上がりのシオリを見て、僕の心拍数はどんどん上がっている。彼女の顔を、しっかり見ることも出来ない。顔もきっと紅潮しているだろう。体が熱くなってくる。

「……」

やっぱり、僕は恋をしてしまったんだろう。この僕が、今、ラブホテルの中で、初めて恋をした。

認めざるを得ない状況だった。事実、さっきの彼女の姿が、『女の子』じゃない。『女の人』にしか意識できなかった。彼女はとても美しい女性だというのはわかっていたけれど、それに対して何か

特別に思うことなんて、なかったのに……

皮肉なものだ。恋の存在に気がついた時が、この最悪の状況――次の瞬間には、それが一気に壊れてしまいそうな。

わざとらしく視線をはずして、大きく息を吐いた。顔を見られる前に僕は、脱衣所に入った。

桃色のスケルトンで、海賊の持つ棍棒みたいに、小さなイボイボのついた、玩具みたいな形のシャワーを浴びたが、気が気じゃなかった。嫌らしい気持ちというよりは、彼女とこの後、どう向き合えばいいか、という不安、緊張、憤りが、まとめて胸に溢れた。

本当は彼女にすがりたいのだろう。こんなに僕は、心の中で、叫んでる……

彼女が優しかったから、それに甘えてしまおうと思ったんだろう。それで何かを忘れたかった。彼女は優しいから、余程のことがなければ、ある程度のことは受け入れてくれるだろうという確信もあって、それが僕の心をひどく身勝手な思いで満たしている。

だけど抱くのがためらわれた。ほんの3日前、そうして女を抱こうとした僕が。

シャワールームは凍えるように寒かったが、体が火照っていて、今が12月であることも忘れていた。最後に冷たいシャワーを頭にかぶって、僕はシャワー室を出た。

シャワー室を出ると、シオリがベッドの上で、女の子にしか出来ない、足を横に曲げて、そこに尻をつける座り方をしていた。キングサイズの大きなベッドに、小さな身体というコントラストは、まるで睡蓮の葉の上に座る親指姫のように愛らしかった。

髪を拭くフリをしながら、僕はバスタオルで視線を隠した。しかし、この時間稼ぎにも限界がある。僕は試合後のボクサーみたいにタオルを肩にかけて、彼女を見た。

彼女もベッドに座ることに、少なからず恥じらいを覚えたのかもしれない。その時にはベッドから立ち上がり、どうしようかと立ち尽くしていた。

「……」

二人、立ち尽くしたまま、時間が止まったように見つめあった。

彼女の顔は若干引きつっているけれど、それでも屈託のない、澄んだ目が僕を見ていた。

どうする――何食わぬ顔をして、ベッドに入るか？　いや、僕にそんな演技は無理だ。この際押し倒してしまおうか――駄目だ。それだけは何ていうか……最低だ。せめて彼女と話をして、和姦に持っていかないと……って何考えてるんだ僕は。

僕はしばらく思考が暴走していたが、やがてシオリが、沈黙にじれたように、僕に尋ねた。

「緊張してる？」

彼女の屈託のない声で、馬鹿な考えは中断され、僕は無理に苦笑した。

「そりゃもう、今だって……」

それだけ言って、視線を落とす。もう、話すことがなかった。右の掌を額に押し当て、前髪を掻き毟って、下の方に視線を向けていた。

そこで、リモコンがベッドの上、シオリからかなり離れた場所に置いてあるのに気がついた。僕は、顔を上げた。

「もしかして、テレビ――つけたのか？」

僕は聞いた。

「――うん……」

今度はシオリが視線を落とした。

恐らくそこには、彼女の今までの生き方では、理解できないものが映っていたのだろう。

みるみる彼女の耳が赤くなっていく……恥ずかしさを隠そうとしても、隠し切れていない。

「……」

それを見て僕は、思わず噴出してしまった。

くくく、と小さく声を上げ、額に手を当てて、彼女から目を隠し

たら、こらえきれなくて、声を出してしまった。
本当に可笑しかった。彼女のうろたえる姿が、あまりに可愛らしく、あまりに筋書き通りだった。気を紛らわすために、テレビを点けてみて、そこに移る、男女のあられもない姿を見て、あわててリモコンを手に取ってテレビを消し、そのままリモコンを取り落とす彼女のあたふたした様子が目に浮かぶようだった。

Laugh

軽く息を吸って、笑い声を噛み殺した。顔から手を離し、僕はシオリの顔を見る。

不思議そうな――呆気にとられたような顔をしていた。自分の顔が、まだ少し緩んでいるのがわかる。人前で笑うのが恥ずかしくて、僕は反射的に顔を手で隠した。

だけど本当は、上手く笑えたことに感謝したかった。

お陰で変な考えが吹っ飛んだ。元々の、彼女と一緒にいたい、という想いだけが残り、彼女をこんな所へ連れ込んだことで生まれる変な感情が振り払われた。

「――悪いね、笑ったりして」

僕は軽く謝った。彼女を揶揄するつもりで笑ったのではないことは、信じて欲しかったから。

しかし、シオリはまっすぐ僕を見ている。そして、彼女も柔らかく微笑んだ。

「今日――初めて見た。サクライくんが笑ってる姿。いっぱい見た」

彼女も、朝からの彼女に戻っていた。もう不安はないようだった。そこには、朝からずっと一緒にいた、僕の心をほのかに暖める、彼女の微笑があった。

「ああ――」

些細なことで、重苦しい空気が中和された。僕の脳はまた柔軟に動き始めた。

「サクライくんも、そうやって笑うんだね。そんな笑顔が見れて、嬉しかったな、今日は」

「そうかな……」

僕はまだ軽く濡れている髪の毛を触る。

「そう言われると、ちょっと照れるな……あまり人前で笑ったことないから、変な笑い方してなかったか、心配になるよ」

「ううん、大丈夫。自然に笑えてたと思うよ」
彼女ははにかんで、肩をすくめながら言った。
そこでお互い、照れてしまって、少し言葉を詰まらせた。僕は照れ隠しに彼女から目をそらしながら、部屋をぐるりと一瞥した。
「その……ごめん。ろくな説明もなしに、君をこんな所に連れ込んで……さっきまでそのことで君がどう思ってるか考えてて、少し焦っちゃってたんだ」
「うん……」
「ごめん。僕のエゴに付き合わせて——嫌じゃないか？」
そう訊くと、彼女は、僕に対して、軽く微笑んで、言った。
「大丈夫。少しびっくりしたけど……」
と、そこで彼女は視線を落とした。
「電車の中で、私も色々なことを考えてたの。どうしていいかわからなかったから……ちょっと変なことも考えてたの。エッチなことになっちゃうのかな、とか……」
言ってから、彼女は目を背ける。部屋の薄暗い照明の中でも、彼女が赤面しているのがはっきりと見える。バスローブからわずかにのぞく白い素肌まで、ほんのり赤く染まっている。
沈黙。
「で、でもね、サクライくんもいっぱいいっぱいみたいだったし、悪意のないのはわかったから」
「……」
「今、ここでこうしている理由を、無理に訊く必要ないかな、って、思ったんだ。ホテルを探してる、サクライくんの焦った顔を見てたら」
「……」
沈黙。
「僕、君ともっと、話がしたいな」
「うん、私も」
自然とそういう気持ちになっていた。お互いの気持ちが共通して

出た行動だった。
と言うか、彼女をここに誘ったのも、ただ彼女ともうちょっと、話がしたかったからだけなのかもしれない。僕達はやっと話の本線に戻ったという感じ。
僕は布団を半分めくって、シオリを中に入れた。ベッドの隣にあったスタンドをつけ、部屋の電気を落とす。そして僕もベッドに入る。ベッドの頭の方の縁を背もたれにして、下半身を布団に滑り込ませ、足を伸ばして座った。お互い小柄が野で、このベッドなら二人とも寝返りしても大丈夫そうだった。
彼女の顔を見つめると、彼女も僕を見ていた。まだ少し濡れたストレートの黒髪が艶めいていた。目は綺麗に濡れていて、瞳が彼女の清廉さを現しているようだった。
「――その、これを言うことに大した差があるかわからないけれど……」
「え？」
シオリは首を傾げる。
「君ともっと、話がしたかったんだ。お台場で君を引き止めた時、僕の正直な気持ちは多分、それだけだったんだ。引き止めちゃってから、こんな所に来てしまって、状況に流されて、考えがおかしくなってただけで……」
「……」
「いけないね。そんなことで道を見失ってしまって」
「でも……時々は仕方ないよ」
「……」
彼女は、そこでいつも僕をほっとさせる、あの微笑を浮かべ、少しいたずらっぽく言った。
「お互い、まだ高校生なんだし。そんなに何もかも器用には出来ないよ」
「……」
観覧車で、僕が言った「まだ高校生」という発言を、そのまま返

された形だ。
　この娘、本当に彼氏がいたことがないのだろうか。男とベッドに入っているのに、少しも不安めいた素振りを見せていない。むしろ、ここまで僕を信じきった目をされることに、こっちが罪悪感を覚えるくらいだ。
「さて、どんな話をしようか？」
　僕は、隣のシオリの顔を見た。
「僕の話はつまらないから、すぐ眠くなるよ」
「じゃあ三国志のお話をして」
「え？」
　僕は首を傾げる。
「エンドウくんが言ってたの。ケースケと話す時、煮詰まった時は、三国志の話をフッてやれって。サクライくんって、諸葛孔明を尊敬してるって言ってたから」
「……」
　ジュンイチの奴。何でも見透かしている。今日、僕が彼女と話が煮詰まって、困ることも奴は想定していたんだ。当の本人は今頃、全国大会前の練習に疲れて、今頃は寝くたばっているだろうけれど。
「そんな話訊いて楽しいのか？」
「何でもいいの、サクライくんの話が聞きたい」
「――ならいいけど」
　調子を取り直すように、一つ咳払い。
　僕は、機関銃のように話し続けた。自分の好きな武将や、好きな武勇伝の話。　恐らく、テレビで放送されたら、早送りで飛ばされてしまうような話を繰り返した。
「三国志で一番好きな武将は、蜀では姜維かな。関羽、張飛、趙雲も捨て難いんだけど。て言うか皆、姜維を過小評価し過ぎなんだよ。姜維は、日本で言えば土方歳三みたいな扱いされたっていいはずなのに。あ、姜維って言うのは、僕の好きな孔明の弟子なんだけど……」

僕は何の脈略もなく、話を強引に取り付けながら、早口で言葉をまくし立てたが、そこで僕は、呆気にとられたようなシオリの顔を見て、我に帰り、言葉を止める。

「ごめん、なんか、僕ばかり喋っちゃって……」

あまりに普段とキャラが違いすぎる。身振り手振りなんかして、何熱く語ってるんだ？　しかもなんてつまらない話をしているんだろう。デートで、しかもベッドインしてする会話ではない。

だけど彼女は、今日何度も僕に見せてくれた、僕を優しい気持ちにさせてくれる笑顔を返した。

「サクライくんがそんなたくさんお話してくれるとは思わなかった」

「そうかな……」

「うん……」

沈黙。

僕は少し喉がいがらっぽかった。さっきの喋り過ぎが原因だろう。

「……」

僕が黙ると、部屋は水を打ったような静寂に包まれる。

外からは、車が轍を残す音も聞こえない。まるでこの部屋は、宇宙の浮島みたいに静かで、二人だけの空間になっていた。深々とした静寂が、彼女の存在をより際立たせた。

「今度は君の番だ」

「え？」

「話」

僕は彼女の目を見た。

「そういえば僕、君の話をちゃんと聞いたことって、あまりなかったな」

「……」

彼女は一瞬ためらうような、そんな表情をして、一つ溜息を吐く。

「きっとうまく話せないよ。気持ちがぐるぐるしていて、言葉がまとまらないもん。それでも――いいかな？」

「お金を取るわけじゃない。僕が好んで話を訊くんだ。この場合、

君は僕の返答を訊いて、何かを感じる役だ。何も感じなかったら、それは僕の責任だから。それくらいの気持ちで僕に話してくれればいい。僕は何でも訊くから」

なんてうまくない言い方だろう。せっかく僕を信頼して相談をしてくれる女の子に対して、あまりに冷たすぎる。僕の言葉って固いっていうか、優しくないよな。今日何度も思ったことだけど。

「ありがとう」

それでも彼女は僕に礼を述べた。僕は少しほっとした。

「どうぞ」

僕は彼女の顔を覗き込む。

彼女は少し強張った表情のまま、5秒ほど俯いていたが、僕の顔を見上げて、すぐに切り出した。

Myself

「サクライくんって、慶徳中学にいたんだよね？」
「え？」
僕は一瞬固まる。
「そうだけど……」
慶徳中学は、僕が通っていた私立中学だ。
中高一貫で、慶徳高校は東大進学者数で常に日本の高校のトップ３に入っている、トップ１０常連の埼玉高校よりも、更にワンランク上の高校だ。
しかし、慶徳高校に上がれるのは、慶徳中学のトップ４割のみで、それ以下は、一般入試を受けさせられる。高校から入った外部生は、中学から上がった付属組に勉強でついていけず、１年生での退学者も２０人は出るという、恐ろしい高校だ。
修学旅行さえ成績順で待遇が変わる。トップ１０は修学旅行先までの飛行機は、ビジネスクラスで行け、お小遣いまで学校支給といった具合だ。教師達はそれくらい、僕達の成績にしか興味がなかった。そんな優遇をするため、成績下位者はただの学校の金づるとなってしまい、馬鹿高い学費の割に、ろくに面倒を見てもらえなくなる。
僕はその中学で、学年トップを３年間張っていて、成績トップのみに与えられる、学費半額権を守り抜いた。正直きつかったけれど、僕は学校の中で最も生活水準が低い家の生まれだったことで、同世代の友人に、環境の差で負けたくはなかった。それに、中学に入ると、自分達の見得のために、僕に勉強を強制したくせに、親には毎日のように、高い学費の事を何だかんだと言われたし、それから逃れるために勉強した。
他の特典も全て受けた。だけど僕は修学旅行などに参加しない分、特例で、学食１年間タダ券に変えてもらった。

そんなだったから、僕が慶徳高校の進学を拒否した時は、かなり教師に慰留された。しまいには、ドロドロになって、教師達に、落伍者、腰抜けなんて言われた。

「じゃあ、小学校の頃は、すごい勉強したのね」

「――まあ、そうなるかな」

週6回塾に行っていた上、学校が終わると、親が塾へ連れて行くために車をつけていた。そんなだったから、友達なんて一人もいなかった。

その頃には小学校でいじめにあっていて、僕は既に力に取り付かれていた。中学に上がっても、更なる力を求めて、勉強漬けだった体を鍛え抜いた。

「じゃあ、昔はサクライくんも、授業もサボらずに、真面目に勉強してた時期があったの？」

「――想像出来ないか？」

「うん、全然……」

彼女は少し笑みを浮かべる。僕の学校での素行では、そう思われても仕方ないけれど。

「悪いけど、僕には語れるような過去なんかない」

「うん、わかってる。誰にも話してないみたいだし……無理には聞かない」

「……」

あれ？　でも、何で彼女は、僕が慶徳中学に行っていることを知っているんだ？　誰にも――ユータ達でさえ、中学は私立だった、というだけで、話したことはなかったのに。

そんな疑問が聞こえたかのように、シオリは話す。僕達のつなぎ合う手を見つめて。

「私、あなたを知ったのは、あなたがサッカー部に入る時に、イイジマ先生に走らされていた時だったの。学校中で、あの恐いイイジマ先生に真っ向勝負を挑んだって、吹奏楽部の部室で、先輩達が注目してたから」

「……」

前にも話したが、僕は中学時代、サッカーではなく、野球をやっていた。サッカー部顧問のイイジマは、野球からサッカーに転向するのは、坊主頭が嫌だとか、サッカーの方が女の子にもてそうだとか、そんな不順な理屈であることを許さなかったため、僕に決意を示せ、ということで、グラウンド１００周を命じた。毎年そんなことを続けていて、ぶっ倒れる１年生が出ているため、もはや学校の名物の一つとして、確かに見物客が山のようにいた。

そうか――彼女は音楽室から、あれを見ていたんだ。

「あなたがそれをクリアしてすぐに、うちの顧問のタカヤマ先生が、あなたのことを、噂の問題児、って教えてくれたの。放課後、あなたは彼とこの３年間、比較されることになるって、あなたの事を教えてもらったの。入学式の新入生代表挨拶を断った経緯も」

「……」

そういえば、彼女は僕にも新入生代表の話が来ていたのを知っているんだったな。その時に聞いたのか。合宿の帰り道に、同じ事を彼女から聞いていた気がする。

「はじめ、私は、その、比較される、って言葉の意味を、成績のことだと思ってた」

「……」

「サクライくんも、そういう勉強付けの毎日があったのなら、私と似てるのかな、って。同じ悩みを持っていたりしないかな、って、はじめ、思ってた。でも違った。私達は成績じゃなくて、その素行で比べられていたのよね。クソ真面目な私と、教師に逆らって、自由に振舞うあなたと」

「……」

「私ね、妹と弟がいるの。中２と、小５」

急に話が飛んだ。

「３人も子供がいて、両親は共働きだから、私は、ずっとお姉さん役だったの。でも、それが嫌だと思ったことはないの。お父さんも

お母さんも、私には優しかったし、だから、私はお母さん達の負担をちょっとでも減らしたくて、一生懸命勉強して、私の心配をしなくてもいいようにしよう、って思った」

「――優しいんだな」

「……」

彼女は、そういうタイプの娘だ。彼女からは、幸せな家庭でのびのび育った、そんな日向の縁側みたいな、あたたかでのんびりした雰囲気がある。　だから、彼女が次に考えることも、大体想像がつく。

「そうしているうちに、いつの間にか高校生になってしまった。でも、高校生になって、ずっと家族のために頑張ってきたから、この先、自分がどう生きたいか、っていうビジョンが浮かんでこない……自分の価値がどこにあるのかわからない……ってところか？」

「何でわかったの？」

シオリは目を見開いて、僕の横顔を見る。

「僕も昔、同じ事を考えたからさ」

「……」

僕の場合は、小学校の旧友や、家族への復讐のためだ。復讐心にとらわれて、目的のないまま力を求め続け、今でもその力の向け場や意味を見出せていない。　だけどそれ以前に、荒れる家庭の中に、少しでも光を与えたくて、自分の意志とは関係なく勉強をしていた時期があった。ただ単に、家族があれ以上荒れるネタを作りたくなかったんだ。

彼女は、僕と自分が似ていると思ったのは、無理もない。

僕達は、過去と現在で、同じ思いを抱えた経験があるんだ。

「私は……」

シオリは一度溜め息をついた。

「何だろう。今までは、家族のこと、大好きだから、それでもいいと思っていた。今でも、家族が私のこと、誉めてくれたり、私を自慢してくれるのは嬉しいの。だけど――その反面で、自分の意志が

ひどく薄弱になっていることも知っているの」
「……」
「まるで……自分自身が、何のために生きているのかも、わからなくなってくる……私は、私を形作るものを何も持っていない。そう、まるで、意志を持たない人形みたいだって……」
「……」
彼女は、僕の手を強く握る。
きっと、自分が消えてしまうのではないかという感覚と、戦っているのだろう。
彼女は、自分の生きる意味を、自分ひとりでは証明できないのだ。
家族の事を愛しているという思いと、それだけの自分でいいのか、という思いの狭間で葛藤している。だからアイデンティティが揺らいでいる。このつないでいる手で、誰かにつなぎとめてもらわないと、消えてしまいそうなくらいの存在価値しかないと思っている。
長年自分を抑える生き方をしていたことで、わがままに振舞うことも出来ない。つまり、自分を表現できない。彼女は自分を殺してでも、誰かに喜んでもらえる喜びを取ってしまったのだ。
「自分が、嫌いなのか？」
僕は聞いた。
「大嫌い」
シオリは呟く。
「嫌いというより、無価値かな……いてもいなくても、どっちでもいい、みたいな」
「……」
そう言い直す彼女の顔は、とても悲しげだった。その顔を上げ、僕を見る。
「サクライくんは、そういうことはないの？」
「……」
そういうこと——つまり自分の存在価値がわからなくて、生きていても死んでいてもどうでも良くなる。消えてしまってもいいとさ

え思う時。
「あるよ。誰だってあるんじゃない？」
「それって、どんな時？」
「多分、君と同じだよ」
「そうかな」
「一緒に言ってみるか」
一呼吸置き、せーの、と号令をかける。
「自分に見切りをつけたい時」
見事にハモる。
「お」
僕は声を出す。
「同じだったね」
と言っても、お互いニコリともしない。自分の絶望を味わう瞬間が合っても仕方がない。
「本当、自分の弱さに嫌になるわ……」
「……」
「だから、私はサクライくんが、ずっと羨ましかった。学校や先生にも平気で逆らうし、その反骨を貫けるだけの意志の強さも、行動力も、向上心もある。それは、私にはないものだったから」
「――随分誉められたな」
僕はふっと息をつく。
でも――でもね――
「でもね、僕はちっとも人として正しくなんかないんだ。他の誰よりも、ずっと」
そんな言葉が、僕の口を突く。
彼女のような、清い心を持った人が、僕なんかにそんな事を思ってはいけないと思ったからだ。
僕の心は、いまだどす黒い絶望と怨念に支配されている。周りの人間に憤りを振りまいて、世界を呪うだけが僕の本質だ。僕なんかの真似をさせて、彼女の今の笑顔を曇らせたくはなかった。

「……」
沈黙。
その沈黙の間、ベッドの縁に背を預けるシオリの目は、ずっと僕の目を捉えていた。
まるで、僕の心の奥までをのぞくように。
「どうしたの？」
僕は聞く。半ば彼女の真剣な目の迫力に気圧されて。
「でも――そんな私の認識が間違っていたって、最近、考えるようになったの」
「え？」
「あなたは、自由なんかじゃない。自分が間違っているを自分で思っていても、そうして生きるしかないだけ……間違った道と分かっていながら、その道を進むことで、あなたも苦しんでいるんじゃないか、って。最近、思うようになって……」
「……」
一瞬、心がズキッと激しく痛んだ。

「何を言ってるんだ？　君は」
「ほら、そうやってまた、自分を隠す」
「……」
逃がさない。彼女は、僕を逃がしてはくれない。
「たまにあなたといると、私は誰と話しているのかわからなくなる。もうわかってるの。あなたには、本当のあなたと、嘘のあなたがいる」
「……」
僕は、彼女の死角になっている左手で、ベッドのシーツを握り締めていた。
まずい。まずいまずい。
そんな単純な言葉が生成されて、反射的に体に警告を発令する。
「あなたも、苦しんでいるんでしょ？　それを、嘘で隠してる。心を殺しても」
「違う」
僕は即座に声を上げていた。
「君の、勘違いだ」
目を背ける。
「私の話を聞いて」
彼女は言う。
「……」
僕は知っている。彼女は自分の意見をあまり言わない。
だから、こうして自発的に動いた時の彼女の意思は、誰にも覆せない事を。
だけど……
彼女は、僕の本性なんかを見ちゃ、いけない人なんだ。
見せたら、きっと僕は、彼女を……

「――また、次の機会じゃ駄目かな」
僕は逃げた。彼女がここまで僕の本性に気付いていたなんて、考えていなかった。必死で隠していたはずなのに。
だから、心の整理をつけたかった。
「今じゃなくちゃ駄目なの」
シオリの、戒めるような声がした。
「今日のあなたじゃなくちゃ、届かない……感情を殺していたサクライくんが、やっと今日は少しだけ、本当の姿を見せてくれた。だから、今じゃないと、また元に戻ってしまう」
「……」
「あなたも、元に戻りたくないんでしょ？　一人になったら、元に戻ってしまう。だから、私なんかとこうして、終電も超えて一緒にいる――そうでしょ？」
「……」
駄目だ。逃げられない。
もう、聡明な彼女は全て見抜いているんだ。僕の中の闇の存在に。
だけど……
「何でもないんだ！」
声が荒くなった。
僕の本性――怒りや憎しみが作り出した攻撃性。
本当の僕はこうなんだ。弱くて、卑屈で――人をいたぶって、いい気分になりたがる。
僕は、あの家族と同じなんだ。暴力で人から搾取する事を、求め出している――
「……」
僕は彼女の顔を見れない。何もしていないのに、息が上がっていた。
「別に責めているわけじゃないの。ただ、辛いなら……」
「何でもないって言ってるだろ！」
彼女の言葉を待たずに、怒声で声を掻き消していた。

次の瞬間、憤りをぶつける場所を探して、僕は開いていた左手を振り上げていた。

だけど……

怒気をはらみ始めた僕の体を、そのままシオリは両手で抱きしめた。

「……」

その瞬間に、僕は振り上げた腕にかかる力の全てが消失して……

そのまま、体の全ての邪気が消えてしまった。それだけでなく、体にかかる、余計な思いや力も……

残るのは、彼女の心地よい体温と、洗ったばかりの髪から香る、シャンプーの香りだけだった。

僕の体の力が全て消えたのを確認して、彼女は腕を解く。

そして、見つめ合うまま、僕の右手をもう一度握った。

「私は、あなたが今何に苦しんでいるか、まだわからない。でも……今はあなたのそばにいるから。今の私は、そんなことしか出来ないけど……」

「……」

恐かった。彼女に危害を加えそうな自分の本性が怖かった。

彼女が僕の姿に気付いていても、これを、はいそうですか、と見せるわけにはいかなかった。

僕は、彼女のことが好きだ。

そんな僕が、彼女をこの手で切り裂き、メチャクチャにしてしまうなんて……

そんな悲しいことはない。

彼女を失いたくない。

だから嘘を突き通すしかなかった。

そうして、彼女が諦めてくれるのを待つしか……

嘘を突き通してまで、彼女と愛を語るつもりはない。僕はこのままでは、彼女を幸せには出来ない。

だから、彼女に真実は見せられなかったのに……

「――落ち着いた？」
彼女は、気丈に笑った。大胆な事をしたことに、えへへ、と笑っていた。
「――ああ」
抜け殻のような声が出た。
「……」
僕はどこへ向かうのだろう。
今までだって一人で何とかやれてきた。今だって、やろうと思えば一人でなんだって出来る。
だけど今は……
彼女がいないと、僕はどこへも行けない気がしている。
僕は、弱くなっているのだろうか……
彼女の温もりを感じると、いつだって、その思いが去来する。
僕は、彼女の温もりを……知って、よかったのだろうか。
いつか、一人で立てなくなったら、どうすればいいのだろう。
僕は、彼女に合わせる顔に困って、目を背ける。
「何で……」
僕の弱々しい声。
何でここまでしてくれるんだろう。僕なんかのために。
家族でさえ、僕に対しては、何も与えてくれず、ユータやジュンイチのような友達にさえ、何かを与えてもらう事を僕が拒否しているせいで、そんな経験はない。
誰かが、僕に何かを与えてくれるなんて、考えたこともなかった。
「どうして僕に、ここまでしてくれるの？」
素直に、それを聞いていた。
すると彼女は、これだけ言った。
「あなたが、好きだからよ」

「……」

沈黙。

「最初は憧れだった。あなたは私とは違って、自分ひとりで全てを変えられる力を持っているように見えて、羨ましかった。ただの優等生でしかない私も、あなたみたいに、強くなりたい、って。あなたのその強さに憧れたの」

「……」

「でも、段々その思いが変わってきた。あなたのぎこちない優しさや、落とすように笑う笑顔、沈んだ真っ直ぐな瞳――私は、あなたの持つ、何でも完璧にこなすところじゃなく、そんなあなたの人間らしさ、不完全さがとても愛しいと思った。だから……」

「……」

僕は今、世界一幸せな男かもしれない。

すぐ隣に、今僕が一番愛しいと思う人がいて、その人も僕を、こんなにも好きだと言ってくれている。

だけど……

僕はまだ、彼女を好きだと言えない。

僕はまだ、嘘をついているから。本当の自分を、彼女に受け入れてもらえていない。

このままでは、いずれ彼女を傷つけてしまうんだ。

それでも……

「――何でそんな、心境の変化があったんだ？」

それだけ聞いた。

後ろから、彼女の声がした。

「私は、はじめサクライくんもそういう勉強漬けの時代を何らかの形で経験して、私と同じ苦しみを抱えたんじゃないか、って、はじめ、思っていたの。高校に入学した頃、あなたと私は今後比較され

るだろう、って、色んな人に言われたし。何となく私とサクライくんは、同類と言うか――近い考えの持ち主なのかな、って」

「……」

「でも、時が経つにつれて、わかったの。サクライくんは私とは全然違う……」

「……」

「何が違うのか、サクライくんはモラルに縛られない自由さを持っているからだ、と思った。私も、周りを気にせず、サクライくんみたいに、自由になりたいと思った。そんな生き方に、私は憧れたんだと思った。でも、それも違った」

「……」

「こんな事を言うと、怒るかもしれないけれど……サクライくん、あなたは自由なんかじゃない。何かにすごく縛り付けられている。周りの皆は、授業をサボって、自由気ままだなんて言っているけど、本当は、縛られているものから、少しでも遠くへ行きたいと、もがいている――そんな気がして」

「……」

見抜かれている。彼女の一言一言が、僕の行為、思考を反芻させる。

自由や、目的――僕にそんなものはひとかけらだってない。心は既にがらんどうのようになっていて、負の感情以外の行動は、何となく見様見真似で演じていただけ。

心が空っぽなのに、燃えているように見えるのは、僕の胸の奥にある、怒りや憎しみがあるから。燃やすものも既にないのに、灯油だけで無理に心を燃やし、日に日に心は焦げ付き、痛み、後には今まで燃やし続けたものが、灰となって心の底に絶えず沈殿していくのみ。

そうだ。学校では、他人の干渉を避けて、授業にも顔を出さず、自由人を気取っているのは、せめてそのくらいの自由が欲しいと、足掻いているだけ。実際はそれで、ギター弾いたり本を読んだり、

無益に時間を潰しているだけ……

「あなたは、空っぽで、もう心で燃やすものなんか、何もないの。私と同じ――なのにあなたからは、とても強い意志の力を感じる。無理をしている。辛いはずなのに、他人にその素振りをまるで見せない。心の中がボロボロなのを、普段の無口や無愛想で隠してる……」

「……」

「そして、本当は優しい人なのに、変に悪ぶって……でも、それが苦しそうで」

「……」

「おかしいよ。矛盾だらけで、もうあなたは、本当の自分さえわからないはず」

「……」

優しい――か。

それだけは、自覚がないんだよな。僕は他人に優しくされたことが、あまりないから、どうすれば人が優しいと感じるのか、よく知らない。

だけど――彼女は僕の心のバランスが、ずっと前から崩壊していた事を、見抜いている。幸い、僕の本性までは気がついていないだろうけど……

もはや色々な方向から歪められて、本当の自分がどんな奴かなんて、彼女の言うとおり、今の僕はそれを見失ってしまった。

ただ、本当の自分を曝け出すことの恐怖は、いつも心に抱いているんだ。あまりに歪められた僕の本性は、本当に醜く、最低な人格なのではないかと思ってしまって……

「そんなあなたが、いつも人に優しいと……まるで自分が満足に与えてもらえなかったものを、身を切ってまで与えるようで……何だか、とても痛々しい」

そう言って、彼女は僕の右手に、自分の右手を添えて――そっと包み込んだ。

「あなたがもし、何かに縛られていて、自分を見失いそうなら、その正体を教えて欲しい」

「……」

その言葉を聞いて、胸の中に愛しさが溢れてくる。

この感覚を、前にも味わった気がする。

まるで乾いた土に雨が染み込むように、ゆっくりと、だけど確かに、喚起の重いが血管を通して循環していく……自分の心がどこにあるのかわかるほど、心臓が暑く高鳴り、震えるような感動に支配される。

僕は彼女の顔を見たくなって、振り向いた。

「あ……」

彼女は、僕の顔を見て、小さく声を上げた。

「え？」

僕は彼女が、何故そんな顔をするのか、理解できなかった。

だけど、彼女は右手を伸ばして、僕の顔に手を伸ばした。

そして、僕の頬に軽く手を触れて……

違和感を感じて、僕も逆の頬に手を伸ばした。

「あ……あれ……？」

僕の頬が濡れていた。

僕が、涙を流している。

「え？　へ、変だな……止まらない……」

僕は泣いている姿を彼女に見られるのが恥ずかしくて、照れ笑いを浮かべながら、また目を背ける。

昔から、泣いて何かを吐き出したかった。そう求めても、心が死んでいて——悲しみに慣れ過ぎていて……

求めても、一滴も流れなかった涙。

自分が、嬉しくて、嬉しくて、たまらなくて、涙を流せるなんて……

僕に、こんな日が来るなんて……考えたこともなかった。

吹雪に閉ざされていたような僕の心が、急に静かになって……

まだ冷たい銀世界だけど、少しだけ、太陽が覗いた気がした。
涙を流せたことで、少しだけ心が楽になれた気がした。心の固くなった部分が、少しずつ溶けていく――、
自分の中に差す、太陽の存在に気付くことも出来た。
「……」
――いいのかな。僕。
彼女にすがっても。
彼女を傷つけてしまいそうで、とても恐いけれど……
でも、彼女は、僕にとって太陽のような、あたたかで、希望に満ちた存在で……
僕はもしかしたら、今の今まで、彼女の事を信じていなかったのかもしれない。
大好きな人が、側にいてくれる、と言ってくれたのに。
僕は、それを信じきれていなかった。
「――ごめん」
僕は、涙で少し震える声で、何とかそう言った。
「話す――全然つまらない話だけど……僕の懺悔を、聞いてくれるかな」
僕の声は、嗚咽で途切れ途切れになったけれど、何とか言い切った。

すると彼女は、僕達の腰までかかっている掛け布団に手をかけて、少しだけめくり上げる。
「横になって」
シオリは自分の体を布団に潜り込ませる。そして、自分の体をベッドに横たえ、言う。
「落ち着くまで、待ってるから。横になって」
「……」
僕は少し照れたが、彼女の言うとおりにした。布団の中に体を入れる。
だけど、彼女の体からは、少し避けるような位置に。これは多分、僕がまだ彼女に対して自信が持てなかったからだと思う。
僕は目を閉じて、深呼吸を繰り返す。涙なんか随分流していないから、止め方を僕は知らなかった。正解かどうかもわからないけれど、とにかくそうしていた。
それでも、僕の呼吸はすぐに落ち着いた。
布団の中で、隣に大好きな人がいるのは、慣れないけれど、居心地が良かった。
何だか、小さな子供が、親に寝かしつけられているみたいだ。
僕は小さい頃から、頭の発育が早かったから、親にさえ子供扱いされたことはなかった。家族は殺伐としていたし、甘えたくても甘えられるような雰囲気でもなかった。
だから、まるで彼女が隣にいてくれるのは——胸の奥がじんわり暖かくなるような、布団を被ってしまいたい程照れ臭いような、そんな未知の感覚だった。
「何だか……照れるな……」
僕は掛け布団で、口元を隠す。
僕は無条件で何かを与えてもらったことがない。誰かの優しさを

こうして受け取ることに、少し当惑した。
それでも、彼女は黙って僕の手を握っていてくれた。
そのまましばらく、そうしていた……
――「落ち着いた？」
目を閉じた中で、シオリの甘く、優しい声が聞こえた。
「――ああ」
僕の心からは、不安と迷いは消えはしないけれど、彼女に対する嘘が全て消えていた。
これから、僕が話すことで、僕や彼女がどうなるか、まだわからない。
だけど……
今、何を置いても彼女に伝えたいことがあった。
それを伝えた先に待つのが絶望だとしても、自分の今世紀最大のエゴイズムを。
「――マツオカ」
目を閉じて、仰向けのまま、言った。
「僕も――君が好きだ。大好きだ」
「……」
目を見ないでこんな事を言うのは、男としては反則だろうか。
彼女も当惑しているのか、返事はまだない。
お互いの不安に、直接胸を殴られるように、沈黙が痛かった。
「……」
無骨な僕が、彼女のその優しさに、初めて嘘の鎧を脱いだ。そうすることで、僕は今、こんな状況でようやく、彼女の事をこんなにも好きだと分かる自分がいた。
でも、僕は、愛しいと思う感情を、上手くコントロールする術を知らなかった。ここまでの思いに、心を全て支配されたことがないから、それをどうやって自分の中に留めればいいのか、わからなかった。
僕の中には、狂的なまでの感情が確かに存在している。そのせい

で僕は、好きでもない女を抱こうとしたり、暴力に夢中になってしまった経験をしているだけに、感情の種類は違えど、それをコントロールできなくなる状況が、とても不安だった。

もう、彼女を傷つけたくなかった。泣かせたくなかった。その重いが、彼女への想いよりも先に出ていて、僕は男として情けないくらい、次の一歩に躊躇していた。

「……」「……」

視界を封じていて、今、僕が彼女の動きを読み取るのは、繋いでいる右手だけだった。

彼女は、一度だけ僕の手の中で、指先を動かした。まるで心臓の鼓動のようだった。

その指の動きが、彼女の衝撃を表しているようで……

やっと自分に、恥ずかしさが返って来た。

大真面目な感情を、大真面目に言ったから、言った時は、むしろ冷静なくらいだったけど……

僕も彼女と同じで、人に惚れたのなんだの言うのを、不純だとか思う自分がいるのかな。自分の顔が、今更少し赤くなっていくのがわかった。

「……」

だけど……

僕はこの先、好きな人に言うには、あまりに辛い一言を言わなければならない。

だから、あまりの悲しみを堪えようとするように。

僕は、彼女の小さな手を握る右手に力を入れていた。

「けど……ついこの間まで、僕は君のことが、大嫌いだった……」

「……」

胸が痛い。彼女の涙を見た時の比じゃないほど痛い。

大好きな人に、嫌い、って言わなくちゃいけないことが、こんなに辛いなんて知らなかった。

言葉も、勝手に尻込みする。痛みに耐え切れずに。

「僕は君を避けた時期があった。そうしているうちに、僕は君の事を、『敵』だと思ってしまった時期があったんだ」

「……」

僕は深呼吸する。

そして、目を閉じたまま……彼女の手を握る力も全て抜けて……絶望的な事情を口にした。

「僕は、家で毎日のように、親に殴られてるんだよ」

「え……？」

シオリの、吐息の混ざるような声が聞こえた。

「君の言うとおり、僕も昔は君と同じ、家族のために心を殺しても、優等生をやっているような人間だった。だけど僕はそれを、僕の手で壊してしまったんだ」

そう切り出して、僕はそれから、目を閉じたまま、たどたどしくも話し続けた。

家庭が最初から崩壊していること、小さい頃からその仲裁に追われていたこと、親から身を守るため、荒れる家が見ていられないために、勉強していた日々。大きくなって、それに反発したことで、今では家族の最下層として、日常的に虐げられていること。

そして、小学校の時、勉強ばかりのためにいじめられて、その時から、巨大な力を欲したこと。その後中学で親父に何度も屈辱的に負け、僕は更なる力を求め、やがて力に取り付かれたこと。

「力が欲しい僕にとって、君はユータは、僕にとって、邪魔な存在だと……そう、思っていた時があったんだ。何故勝てないのか、あいつさえいなければ、とか思っていた。僕はもう、力に取り付かれていて……君やユータに嫉妬して、憎しみを生んで、でも君も、ユータ達もいい奴だってわかっているから、それをぶつけるのが嫌で、僕は人付き合いを避けた」

「……」

「でも、そうしているのが、君や、ユータ達の暖かみに触れて、辛くなってきて……でも家に帰れば、いつだって惨めに押さえつけら

れて……家に帰れば、その思いが潰されて、力への執着から抜け出せなかった。そうして、どんどん歪められていく心に押しつぶされて……自分がまるで、どんなに頑張っても、人の暴力にしいたげられるしか価値のない人間だと思えてきて……それで……」

今思えば、僕は一体何をしていたのだろう。

あの時の僕は、足掻いても、足掻いても、結局最後にはあの家に戻って殴られるという環境から抜け出せなくて――

それが僕の存在価値だと思った。自分をそんなにした世の中や、僕の目に入るもの全てを憎んだ。

それ以外の存在価値しかないのであれば、早く楽になりたくて……落ちること、壊れてしまう事を望んで……それに僕の心の奥の闇が呼応した。僕の精神はあの時、確かに崩壊していたんだ。

そして、ボロボロになって、体も停止して、悪夢に苛まれていた時に……

目を覚ましたら、大切な親友と――

君がいたんだ。

「君が……そのまま堕ちていきそうな僕を拾い上げて、止めてくれた。君は、その気はなかったかもしれないけれど、虐げられるだけだったはずの僕に、生きる事を祝福してくれて、励ましてくれたんだ。とても嬉しかった……」

「……」

「だから、君のことが大好きなんだ。君を心から、大切だと思えるんだ。でも……」

言いかけて、僕の体の力は全て消失し――

シオリの手を握る力も失った。

その手を離すと、僕はごろりと寝返って、シオリに背を向けた。

顔の方に、じわっと熱いものがこみ上げてきた。それがまなじりを伝った――

伝う？

僕は、目を開けて、指で目を撫でると、しっとりと指が濡れた。

涙だ。あれだけ流してみたい、と思っていた涙が、今、また僕の頬を伝っている。

涙を流すって、大切なことだと思った。胸が痛い。鼓動が早い。体が熱い。焼け付くような息が、胸の奥から押し出される。肩が震えた。

これが17年の重みなのか――初めて誰かにこの心を解き放って、胸は切り裂かれるように痛くて、歪んだ思いは見るのも辛かった。

「だい――じょうぶ？」

「――ああ……」

「だったら、こっちを向いて」

彼女の、震えるように切ない声が、耳に痛い。好きになった人に、僕の胸の内をさらした後味の悪さ――

気持ち悪い。

たまらなくなって、僕は布団の中で、大きく慟哭した。僕の泣き声が、静かな部屋に反響した。

「もうわからないんだ。自分が努力してきたのは、自分が幸せになりたいからだと思ってた。だけど、段々僕は人の上に立って、下に引き摺り下ろした人間を馬鹿にして、憂さ晴らしをしたいだけみたいに思えてくる――君にテストで勝った時も、僕は君が悔しがるのを望んでた――まるで、誰かの不幸を必死で探しているようで――どんどん自分があの家族と同じ薄汚い人間みたいに思えてくるんだ。あの家族のように、弱い者いじめをして、憂さを晴らそうとする心が、僕の心にも……」

語れば語るほど、涙が溢れた。

こんな汚い自分を晒すことの怖さや、愛する人に憎しみをぶつけた自分の懺悔や愚かさが、僕の心に激しい痛みを訴える。

「こんな奴のために、手を差し伸べてくれる君や――あいつらに嘘をついているのが辛くて、何かを償いたくて……何も出来ない自分が無力で……そんな思いを抱えながら、家族に自分を否定されると、自分がどんどん嫌な奴に思えて来るんだ。どうしていいかわからず

に、もう全てが嫌になってしまって……また人を悲しませて……自分はそんなことしか出来ない、最低の人間だって思えてくるんだ……」

僕は布団で、嗚咽の声を殺しながら言った。小さく体を丸め、彼女から、こんな自分の姿を隠すように。

「……」

しばらく、沈黙が流れた。

その後、僕の後ろから、彼女の声がした。

「あなたはそんな人じゃないわ」

「心にもないことを言うのならやめてくれ。僕は・・・・・」
「もしあなたが、あなたの言うとおり、最低の人間だったとしたら」
彼女の声が、気丈に僕の言葉を遮った。
「サクライくんは、きっともうとっくに、誰かを壊していたんじゃないかな?」
そう言った彼女の声は、とても優しい響きを帯びていた。
「そういう事を考えていたあなたは、必死に私や、皆を傷つけないように、守ってくれていたのよ。あなたが私達を憎んで、既にそんな人間になっていたのなら、そんなことはしないでしょう」
「……」
「辛いことばかりだったあなたが、どうして、他人の気持ちなんかどうでもいい、って、考えなかったのかな?」
「……」
――何故だ? 何故僕は、他の人間に、あそこまでして、本心を隠した?
タカハシ・ミズキに、自分の思いをぶつけるのをためらった?
今、こうして、彼女に僕の思いをぶつけるのに怯えるのは……
その時、僕の耳に、僕自身とは別の嗚咽が聞こえた。
僕は目を開けて――寝返りをうって、彼女を見る。
彼女は、僕の方へ首を向けて、涙をこぼしていた。
「あなたは、優しい人。人を傷つけようと思っても、傷つけられない人。それを、本当に感情を放棄するまで捨てられなかったの。だから、辛かったのよ」
「……」
「あなたは、優しいの。そうしているのは、あなたも誰かの優しさを求めていたの。でも、それでもあなたに優しくしてくれる人が、長い間、現れなかった。あなたはそれでも、自分の欲しがった優し

さを、人に与え続けたのね。だから、あなたの優しさは、とても痛い……冷たい顔で、冷たい手で、いつも人にあたたかな心を渡していたの。自分が求めている者を、人に渡していたの」

「……」

「でも、あなたはそれを捨てることはないの。いくら人から冷たくされても、あなたも人から何かを奪う力を持つことはないの。あなたはそんな生き方をすることはないの」

「……」

僕が優しいかどうかなんて、わからない。

だけど……

誰かのぬくもりを、病的に求めていた。それは彼女の言うとおりだと思う。

タカハシ・ミズキに抱きしめられた時も、そのぬくもりがいけないこととわかっていても、抵抗出来ずに……ミツハシ・エイジに殴られて、気絶した時も、夢の中で誰かに救いを求めていた。

そして、今も……

彼女の優しさを求めている。実に余裕もなく、実にカッコ悪いけれど。

「偽善だよ。最低の自分を隠そうとして、嘘を突き通したんだ」

「ううん、違う」

彼女は僕の弱い思いを否定する。

「サクライくんは、海のような人」

「――海？」

「そう、深海」

「深海……」

「知ってる？　海の底は、日の光も届かない。真っ暗な世界。暗闇に閉ざされた、、死の世界――なのに、命はそこで生まれたの」

「……」

「一見真っ暗な世界でも、そこには光が届かないだけ。あなたと同

じ。光が届かなかっただけで、あなた自身がもう死んでいるなんて、考えないで。あなたの真っ暗な心も、ちゃんと何かは生きているの。まだ、あなたは生きているの」

「……」

それを言うと、僕の背中に、こつりと何かが当たった。滑らかな曲線を感じて、それが彼女の額だと認識する。

「そして、あなたはもう、光を手にしているの。あなたの優しさに惹かれた人――親友」

「……」

ユータ――

ジュンイチ――

――話したい。

あいつらにも、言わなくちゃいけないこと、これからしたいこと……いっぱいある。

もし、こんな最低な僕とでも、まだ一緒にいてくれるなら……

また一緒に、サッカーをしたい。くだらない事を、喉が潰れるまで話したい。どこかに出かけて、一緒に酒を飲んで……それから……もっともっと。

あいつらと、笑い合いたい。

今までは無理だったけど……頑張りたい。頑張ってみたい。

「そして……あなたはもう、暗い海の底から出る力を持っているわ。あなたはもう、暗い家――ひとりぼっちの部屋にしか居場所がない人じゃないの」

「……」

僕の『居場所』――

「あなたが、家族に否定され続けても、あなたの事を、肯定してくれる。それももう、あなたは持っているの」

「……」

「私は……」

背中越しの声が、一度沈黙する。緊張を飲み込むように、彼女の

深呼吸が聞こえた。
そして――
「私は……こんなちっぽけだけど、あなたのこと、大好きだから。あなたがもし、誰かに否定され続けても、あなたが言葉で安心するまで、ずっとあなたを肯定する。それだけは出来るよ」
「……」
そう言うと、彼女は僕の背中に手を当てて、くっついてくれた。
「言葉でも、何でも、あなたが目を覚ますまで、あなたが最低な人間じゃないって、伝え続けるわ。あなたが信じられないなら、あなたが安心するまで……」
「……！」

その言葉を聞くと、胸の底から震えが込み上げてきた。
朝日で黄金色に照らされた、大河のうねりが、僕の心の川底に絡み付いていた、黒い藻を押し流すように。
まさに深海のように、暗闇に閉ざされた世界に、朝日が登り、命が産まれる。
「――なぁ、僕は――君の側にいて、いいの？　君といると、僕は君を……」
君は僕の大切な人。
だからこそ、傷つけるのが自分だなんて、そんな悲しいことはしたくない。
君のことは好きだけど――
君には誰よりも、幸せになってほしいから。
その不安に、彼女は答えた。
「私も……あなたの側にいたい。あなたと一緒に、強くなりたいの」
「……」
「だから、あなたも生きて。私は、あなたがこれから、笑顔で生きていってほしい」
「……」
その言葉で、僕の中に、何かが生まれた気がした。
僕は――生きていいのか。君の側に、いていいのか。
僕は布団の中で、彼女を強く抱きしめた。
彼女の胸の中で、感情の濁流となった涙をこぼし、何度も嗚咽した。
シオリは、僕を抱きしめ返した。僕の首筋と、脊髄に、柔らかく、暖かなものを感じる。それは、彼女の体温とか、触感とか、そんなものじゃない。彼女の存在そのものだ。まるで、彼女が温い液体になってしまったようだ。もっと強く抱きしめたら、彼女は僕の体の

中へ、ゆっくりと入ってきそうな気持ちになる。
「僕……僕……」
言葉がまとまらない、まとまっていても、嗚咽に溺れて喋れない。
だけど……
僕は、彼女を愛している。彼女も、僕を愛してくれている。
君が僕の『居場所』――真っ暗な深海から浮上するための、道標の『光』――
それを手に入れて……
生きていいと、言ってくれた。
だけど、こんなにも、彼女を求めてしまう気持ちは、愛情だけでは語れないだろう。
Ｓｙｍｐａｔｈｙ――
僕達は、同じものを感じ取っていた。
甘えられない孤独、誰かに期待しなくなった虚無感、自己を縛った虚しさ、空っぽの自分への絶望。
それらは二人、同じものだから、僕は彼女の痛みに触れることが出来るのかもしれない。
彼女が僕の心の傷を癒してくれた。
なら、僕も同じことが出来るかも知れない。同じ事をしてあげたい。
傷を舐め合うような、そんな惨めな堕落かもしれない。ドロドロの甘えかもしれない。僕達は、どんどん堕ちていっているのかも知れない。
しかし、二人は、それも享受出来るくらい、お互いを感じ取っていた。
元々、堕ちていきたかったのかも知れない。
どこからでもいい、どこへでもいい。
きっと、今の状況から、連れ出してほしかった二人だったのだろう。

電話の音で目が覚める。
僕は芋虫のように這って、ベッドの中で受話器を取った。
「そろそろ時間です」
寝ぼけた頭を動かして、状況を整理した。
横を見ると、マツオカ・シオリが僕の横で、小さな寝息を立てていた。まなじりがまだ、かすかに濡れたままで。
そうだ。僕は昨日、彼女に全てを吐き出して――彼女は僕を受け止めて、愛してくれた。
「……」
彼女の寝顔を見つめながら、僕は、自分の右手を胸にやった。
軽い。
長年の呪いが解け、罪人の手足についた、重い枷が外れたように――迷い、憤り、そして、憎しみ――全て昨日の彼女の言葉が、一つ、一つ、取り除いてくれた。僕の心の迷いを、希望の光で照らしてくれた――
こんなにも違うものなのか、魂の宿った心というのは。それが動かす体というのは。
僕は先に着替えを済ませて、深い眠りにつく、シオリの頬に触れた。
「起きて」
「ん……」
小さな唸り声を上げると、目をゆっくりと開ける。隣でベッドに座っている僕の顔を見ている。
「おはよう」
その声――自分の声はこんなだったかと、自分でもびっくりする。もう人の肌を刺すようなトゲはどこにもない――声帯も、頬の筋肉も、今までのように、言葉を閉ざしていた重々しさは、どこにもない。
「……」

彼女も、今の状況が整理できないようだった。寝起きの覚束ない顔のまま――ただ、目を細め、僕の目を見つめていた。

「――なんか――照れるな・・・・・・」

僕は思わず笑みがこぼれた。今までのような、単なる筋肉の歪みによるものじゃない。笑顔の形に顔が緩むのを抑制できなくて、いっぱいになった気持ちがこぼれたように、落ちた笑顔だった。

――僕達はホテルを出て、近くにあったファミレスで、モーニングを取った。昨日買った指輪を、お互い左手の薬指に光らせて。

まだ朝の8時前――師走のこの時期、客は僕達を含め、5組ほどしかいない。

モーニングを待つ間、僕達はコーヒーの香りに包まれながら、ただ笑い合っていた。

僕は、絶えず湧き出る水のように、ただ笑顔が止まらなかった。ただ、心と体が、あまりに軽すぎて、自分の体じゃないみたいで、それをコントロールも出来ず、その気持ちを彼女に表現することも出来ず――ただ笑みだけが、心の奥からふつふつ湧き出ている感じだ。

「たった一日で、何だか別人みたい」

シオリが言った。

「そうかな……」

「うん。すごく素敵な顔をしてる」

「……」

僕は照れながら、コーヒーに口を付けて、俯いたまま、呟いた。

「ドサクサまぎれみたいになっちゃったけど――僕達って、これから、どうなるのかな？」

「え？」

「その――付き合う、ってことになるんだろうか……」

「……」

「あ、いや。僕は、付き合う、って、あまり上手く定義できないし、言葉が好きじゃないんだ。彼女って言葉も、好きじゃない。何だか

契約みたいだし、一人の人間を、まるで自分の『もの』みたいに扱う言い方が好きじゃない」
実に感覚的なことなのだけれど、僕はそれを彼女に伝えようとしてみる。
「うん」
彼女はそれを、ちゃんと真摯に聞いてくれている。それが何だか、嬉しかった。
「君のことは……大好きだけど、君を支配も契約もしたくない。一人の人間として、君と側にいたい。一人の人間として好きだから、僕の所有物なんかにしたくない」
「・・・・・・」
シオリは、グラスに入っている氷を、カランと鳴らした。
「だから――まだ呼び名はないけれど……」
僕は恥ずかしさに少し俯いて……
深呼吸して、顔を上げた。
「その、僕の、大切な人に……なって、くれない、かなぁ――って いうのが、今、僕の感情の、一番近いところなんだと、思う……」
「……」
何だ、このプロポーズは。
ムードもありがたみもない。遠まわしでわかりづらい。
こんなことしか、一番大好きな人に言えないなんて。
だけど、彼女を一人の人間として尊重したいから。
僕は、彼女がいつもひたむきで、真っ直ぐで、弱くて泣き虫だけど、だから人の思いを一緒に抱えて、考えて、寄り添ってくれる。
そんなところが大好きだから。
だから、まだこの思いは『約束』にしておきたいんだ。
そばにいる。それだけの約束。
まだ名もない関係の二人には、それだけで十分だから。
「うん。私でよければ、喜んで」
シオリは、僕の大好きな、心を包み込むような優しい笑顔で頷い

た。

第一部最終章　３ｒｄ－ｐｅｒｓｏｎ

それから僕達は電車に乗って、川越に戻った。
行きは僕は駅まで自転車、彼女はバスだった。
僕は彼女を自転車の後ろに乗せて、家に送った。
街を走る間、僕は初めて彼女を家に送った時の事を、思い出していた。
僕はあの時、彼女を『敵』でなく、一人の女の子として見ることができた。
あの帰り道は、僕の再生の始まりだった。
だから、これからもこうして、彼女を家に送ってあげたいと思う。
彼女を送る役目を、誰にも渡さない、なんて、馬鹿な事を考えていた。
彼女を家の前でおろすと、両親に怒られるかも、と言っていた。
それでも、彼女の顔には、不安は微塵もなく、晴れやかな表情だった。
僕も同じだった。
「サクライくん」
別れ際に、彼女が言ってくれた。
「家に戻っても、あなたは今なら、きっと大丈夫。信じて」
その言葉を、僕は一度目を閉じて、心に刻み込んだ。
きっと大丈夫。僕は、今の自分、支えてくれる人を信じてる。
「ありがとう」
その言葉を最後のお土産にして、僕達の夜を挟んだデートは終わった。

自転車を家のガレージに止めた。時計を見ると、朝の８時２１分だった。

居間へのドアを開けると、両親が二人、トーストとスクランブルエッグの朝食を取っていた。冬休みだし、妹はまだ寝ているのだろう。

ドアを開ける音に、親父は早速朝の憂さ晴らしとばかり、僕にイチャモンをつけてきた。

「朝帰りとは、いい身分だな」

「……」

僕は答えない。

答えられない。もう今の僕の肉体に、心が宿っていない。

この家は、心の居場所じゃないから。

この家で、僕は最下層の人間だと思われている。そんな人間に無視されて、親父のお気に召さないらしい。親父は聞くや否や、すごい剣幕で立ち上がり、僕の胸倉を掴んで言った。

「テメエ、まだ自分の立場がわかってないようだな」

「……」

この時の僕は、何を根拠にこんなことを思ったんだろう。それは、自分でもわからない。

だけど――その時僕は、親父の顔を見て、思ったんだ。

「不思議だな。あんた達のお陰でこの先、どんなことにも負ける気がしない」

「あ？」

「ヤケになっているわけでもないのに、あんたに殴られてもいいと思うなんてな」

「ナメんじゃねぇ！」

その言葉が磁石でひきつけたように、反射的に僕の頬に、親父の大きな拳が入った。

僕はそのまま後ろに吹っ飛び、背中が応接間にあるタンスに叩きつけられた。

「……？」

僕はそのまま、ゆっくりと立ち上がり、つい一週間前切ったばか

りの口元の傷を指でなぞった。その指先を見ると、軽く開いた切り傷から、血が出ていた。

そして、それを見て、初めて自分が殴られたんだ、ってことがわかった。

「……」

親父の拳は、確かに痛い。と言うより、痛みは前より更に強くなった。

心が生き返ったからか、生きる上で重要な感覚の一つの痛覚さえも、こうして僕に、蘇生のシグナルを発してくれる。

あぁ――今の僕は、ちゃんと生きているんだ。

彼女が僕を蘇らせてくれた。僕はやっと、一人の人間になれたのだと実感できたのが、何だかとても嬉しかった。

そして――その痛みは、まるで粉薬みたいにすぐに溶けて、軽くほろ苦さだけを残して消えた。

親父に殴られていた後、今までは憎しみと、自分の無力さに怒りを募らせていたのに。

不思議だ。心の居場所を見つけていると、もう殴られ、蹴られても、自分の存在がまるで揺らがない。

もうこの家族達に、僕の存在を何人たりとも犯させることは出来ない。

もう僕の心は、何にも縛られることはない。

僕は、生きているんだ。

――その後学校に向かうと、部室では、僕の快気祝いとして、皆が僕を笑顔で迎えてくれた。ユータ、ジュンイチもいて、僕に声をかけてくれた。

グラウンドに出ると、イイジマが、一言述べるようにと、僕に指示をした。僕は円陣の中心に立った。

「心配をかけた。皆の全国大会をふいにしそうにした。馬鹿な事を

したと思っている」
素直に僕は謝った。
「もう、皆に迷惑かけることはないと思う。それは、これから僕が、自分で証明して行く」
「……」
皆が黙って僕の顔を見ていた。僕が今までと様子が違うのは、もう表に出ているのか。
僕はこの時、うずうずしていた。この魂の精度、この枷の取れた身の軽さ、まっさらな状態での、サクライ・ケースケという男が出せる力の可能性――それを早く試したくて、気が急いていた。。
「監督」
もうその気持ちが、一気にはじけた。
「迷惑ついでといったらなんですが、僕を控えチームのトップ下で、一回実戦練習をお願いしたいのですが」
「何？」
イイジマは顔をしかめた。
「怪我上がりの男が、随分大きく出たな。しかも大会は明日からだぞ」
「もう大会まで時間がありませんから、ユータとジュンイチを相手にしてみたいんです」
「……」
「２０分でいいです。それで僕は全てを出しきりますから」
誰も口を挟まなかった。鬼軍曹イイジマに、こうも意見する奴なんて、今までいなかったからだ。変に積極的になっている僕と、過去のギャップに誰も付いて来ていないといった感じだ。
「ふむ、いいだろう」
イイジマは首を縦に振った。
「お前は口が固い。半端な決意は口にしない奴だ。それにお前には、合宿での借りもある」
僕は、心の中で、よし！　と叫んだ。僕はまるで、スタートの準

備を待つ陸上選手のように、全身にブーストがかかっていた。とにかく早く動きたくて、体がわめきだしそうな歓喜を抑えつけていた。
「よし、じゃあその前に、アップを始めろ」
「はい！」
イイジマの号令で、皆がピッチへ散っていく。僕も走り出した。
「サクライ」
その瞬間、僕はイイジマに呼びとめられた。僕は振り向く。
「お前、いい顔になったな。まあ、元々顔はよかったが……」
「……」
「まあいいや。お前のトップ下のテストをしたいから、アップ終わったら、すぐミニゲームだ」
返事をして、すぐに列を組み、ジョグをはじめる。その列の中、隣にいるユータが声をかけてきた。
「いきなり意欲十分だな。お前、昨日いいことあったのか？」
「いいことか――お前らとサッカーやることも、決して悪いことじゃないけどな」
「はぁ？」
後ろにいたジュンイチが割って入った。
「ケースケらしくない発言だな、それ」
「ふふふ……」
思わず笑みがこぼれた。この気持ちで、こいつらと話すのも、またひとしお、何か感慨めいたものが加わったような気がする。
「何だこいつ。変にニコニコして」
ユータが首を傾げる。
「ユータ、ジュンイチ」
「ん？」「ん？」
「今まで堪ってた分、一気に行くからな。全力で来てくれ」
「……」「……」
僕は走りながら、頭に巻かれていた包帯を外した。

――ミニゲームは、僕の独壇場と化した。
一年生を主体とした僕のチームだったが、その中で僕は圧倒的な力を発揮した。
僕は『躍動』していた。今までの迷い――枷の外れた体は、恐ろしいほど軽かった。鉄壁の守りを誇るジュンイチを、鮮やかに抜き去った。
そして、重かった心は、今、自分の全てをプラスのエネルギーとして、怒涛の攻撃力を誇るユータに立ち向かい、それを跳ね返し続けた。
「何だあいつ？」
敵味方関係なく、僕の動き、声、そして表情に、目を丸くして――僕はその中で、無尽蔵に魂を燃やし続けた。そこには憎悪も怒気もない。ただ純粋な魂の鼓動だけを残して。
やがて試合は終わった。僕はユータを完全に押さえ込み、ジュンイチをまったく寄せ付けなかった。試合は僕の４ゴールという結果で幕を閉じた。
「……」
ベンチに戻ると、イイジマは、ただ口を開けて、肩をぶるぶる震わせていた。
「監督」
僕はイイジマの前に立った。
「テストは、合格ですか？」
「・・・・・」
「――監督？」
「うおおおおおおおおおおお！」
突然、イイジマが叫んだ。まるきり野生児のように。そして、それに気圧された僕の手を、痛い程強く握って、大きく上下に振った。
僕はその勢いで、前後に軽くステップを踏んだ。
「サクライ――いける、いけるぞ！　ちくしょう！　俺のこのチー

ムで優勝できる！」
グラウンドには、僕の躍動の熱気が残っていた。イイジマは、まるで凱旋とばかりのノリで、大手を振ってグラウンドから上がって行った。

明日には即試合なので、その後イイジマは、僕をトップ下に置くフォーメーションをしきりに試した。それでも明日に疲れを残さないために、昼過ぎには徹底的にミーティングを行った。一回戦で当たる相手のビデオを見たり、フォーメーションの確認をした。
それが終わると、僕、ユータ、ジュンイチの、主力3人で、イイジマと最後の意見交換をした。
もう時計は4時を過ぎていて、空が茜色に染まっていた。
僕はユータ、ジュンイチと一緒に、部室に戻っていた。もう他の部員は帰ってしまって、部室には、僕達3人しかいない。
二人は、僕の一日の躍動振りに、まだ納得が出来ていないらしく、終始戸惑った顔をしていた。
「お前、キャラ変わってないか？」
ジュンイチが着替えの服に袖を通しながら、言った。
「二人とも、着替えが終わったら、少しだけ、ツラ貸してくれないか？」
「ん？」
ユータが首をかしげた。それは普段、ユータの口癖だったからだ。
僕は先に部室を出る。
後から部室をのそのそと出てくる二人。
そこには僕と――
隣に、一人の女の子が立っていた。
つややかな黒髪に、華奢な体、宇宙を凝縮したように、深くよどみない瞳、先が丸くなった、愛らしい鼻梁、ふっくらした唇、華奢な手に持つ、黒のケース……

二人はそれを見て、変に色めき立った。
多分、もう、僕の言いたいことは想像がついている。
その言葉を待ってくれている。
僕が――その言葉を言うのを。
ずっと、昔から……
「紹介するよ。僕の――」
言葉が詰まった。
何て言えばいいんだろう。彼女の事を、なんて定義づければ……
「えっと」
「ん？」
「んんー？」
二人はもう既に顔をにやけさせて、からかい半分で僕を急かす。
この野郎。と思うけれど、僕も笑顔になる。
そんなに僕をからかうか。聞きたいなら、聞かせてやるさ。
「紹介するよ。僕の、今、とても大切な人の、マツオカ・シオリさんだ」
どもったけれど、そう言った。
彼女は、ぺこりと頭を下げる。
「……」
二人はお互い顔を見合わせ、ぽかんと口を開けている。
もう、お互いどんな顔をしていいかわからない、といった感じ。
きっと、ずっと彼氏がいないと思っていた娘に、結婚の報告をされた親は、きっとこんな顔をするだろうと思う。
だけど……
その顔は、まるでスロービデオ再生みたいにゆっくりとほころんで……
「うおおおおおおおおおおおお！」
二人の雄叫びが、夕焼け空にこだました。

第一部　完

Another story ～ 1－1

俺は本当に恵まれた子供だと思う。
親の愛をいっぱい受け、親は俺への投資を惜しまなかった。
親は俺の幸せを心から望んでいた。そのために勉強して、地道な積み重ねが俺を救うと教えた。
だけど――
残念ながら、俺には親の期待に応えられる適性がなかった。この道で両親を喜ばせる道は、もうないのだとわかっていた。
だから俺は、どこかで人に認められる事を、強烈に欲していたのかもしれない。
期待はずれの自分を慰めるために。
そんな自分を親に償うために。
あいつに出会ったのは、俺がそんな思いを抱え、くすぶっている時だった……

中学3年の夏――
俺の家には毎日のように来客があった。
実家でオフクロはインテリアショップを営んでいるため、仕事中にその対応をしなければならず、その分人件費を割く羽目になったと、いつも俺に愚痴っている。
部活を引退した俺は、まだ4時前に学校から家に帰るというサイクルに違和感を感じていた。
普通の公立中学――退屈だが、穏やかな日々。下校前の連絡事項を話す担任を見る俺。
教室を出ようと立ち上がると、クラスの女子に声をかけられた。
「ねえねえ、これからみんなとカラオケに行かない？」
「ん、悪い。多分今日も家に客が来てるから、顔出さないと」

「またぁ？　さすが埼玉県の怪物フォワードね」
「……」
「でも、他県からの誘いの方が多いんでしょ？」
「うん、北は青森、南は鹿児島まで来てるよ」
「そっかぁ……」
「……」
俺の前にいる女の子達は、一様に表情を曇らせる。
「おいおい、そんなしんみりしないでくれよ。まだどこに行くかなんて、決まってないんだから」
「あ、ごめん……」
一人の女の子が謝る。
「だけど、何だか、部活を引退してから、元気ないよね」
「別にそんなことねえって。ただ、部活引退しての生活に、まだ慣れてないだけ」
俺は否定しておく。女の子用の特別スマイルを乗せて。
「誘ってくれてありがとな。受験勉強が始まる前に、俺もみんなと遊びたいな。じゃあな」
そう言って一人、家路へと向かう。
俺の事を知る人は、俺が他県の高校やチームに行くかもしれないという事を聞くと、途端しんみりした顔をする。
だけど、その表情を、本当に俺の事を思ってのものか、上手く受け止められない自分がいた。
家に帰ると、店にオフクロの姿がない。パートのお姉さんに聞くと、奥の応接間でお客の相手をしているらしい。
応接間に行くと、ゆったりしたソファーに二人の中年の男が座っていた。
一人は白髪の混じる頭に、太陽光で焼けた肌の、小柄な筋肉質の男で、白のポロシャツという、いかにも肉体系な男。
もう一人はクールビズを着る、痩せ型の男。神経質にさえ思える細さの中に、精力的な部分が僅かに窺えるような男だった。

そんな対照的な二人。
「おぉ、君が……なるほど、大きいなぁ」
筋肉質の男が立ち上がり、僕を見上げた。
オフクロは俺を向かいのソファーに座らせ、自分はその隣に座る。
名刺を渡される。筋肉質の男は、大阪にある有名スポーツ高校のサッカー部の部長。クールビズの男は、千葉にあるJリーグ一部リーグのユースチームのスカウト部長だった。
「うちは全寮制で、全国に4年連続で出場している。高校をサッカーに打ち込みたいなら、日本最大級、最高の設備が揃ってる」
「うちは早ければ君を1年後にはトップチームでプロデビューさせたいと考えている。チームには2つ年上だが、その世代の日本代表フォワードがいる。君には彼と将来的に、うちのトップチームの二枚看板になってもらいたい。ライバルもいて、刺激はある」
両者は資料を広げつつ、俺に自分を売り込んでいた。
だけどそんなことに意味がないことは、もう俺はわかっているんだ。
「すみません、主人も交えて一度よく考えたいと思いますので、今日のところは……」
オフクロがいつもそう言って、話を切って、スカウトを帰しちゃうからね。
今日もオフクロはそう言って、強引にスカウトを帰してしまった。
俺はほとんど何も話さないまま、玄関まで二人を見送りに出た。
その後、二人の残した、応接間のテーブルに広げっぱなしの資料を手に取り、ソファーに腰掛けた。
ユースチームの誘いには、少し心が揺れた。俺よりもすごい、代表フォワード。一体どんな奴なのか、同じチームじゃ対戦は出来ないけれど、近くで見てみたい。
「ふーっ、まったく、こう毎日だと、もう来た客の顔も覚えきれないわ」
応接間に出した、茶を入れた湯飲みを片付けに、オフクロが戻っ

てくる。
　俺は客のことは、全部覚えている。高校のスカウトは、これで27校目、うち学費優遇を約束したのは4校。ユースのスカウトはこれで8チーム目。他にもJ2でいきなりプロ契約を持ってきたチームが3チーム。
「オフクロ」
　俺は資料を見たまま呼び止める。
「俺、サッカーで生きていくのは、やっぱ駄目なのかな」
「……」
　オフクロは、湯飲みをお盆に乗せ、立ち上がりかけたところだった。だけどそのままお盆をテーブルに置き、俺の向かいのソファーに腰掛けた。
「あのね、ユータ。部活や趣味でサッカーをやるのは私もいいと思う。でもサッカー選手は寿命も短い上に、給料もそれほど良くないし、引退後の就職制度がほとんどないわ。だから将来のためにも、せめて高校くらいは出て欲しいのよ」
「……」
「まだ将来を固めるには、あんたはもう少し世の中っていうのを知った方がいいわ。今のサッカー部では学べなかった事を、高校で学んでからでもプロは遅くないじゃないの」
「……」
　オフクロの言うことはあまりに正論だ。確かにサッカーで食い扶持を稼ぐためには、日本はあまりに制度に乏しい。給料は日本にいる限り、プロ野球の5分の1だし、J1にいない限り、給料はサラリーマンより安いような現状だ。
　俺にだって、もしサッカー選手として通用しなければ……という不安はある。
　だけど……
「俺、部活を引退してわかったけど、サッカーがなくなると、抜け殻になっちゃうんだ。それに俺はもう、勉強ではオフクロ達の期待

に応えられない。ならせめて、早く社会に出て金を稼いで、俺に二人が投資した分くらい、返したいんだよ」

これは口実ではなく、本気だった。

でも、俺はかなりマジなのに、オフクロはそれでも考え直すよう薦める。

「バカ。あんたまだ15なんだから、くだらない事を考えるんじゃないの。とりあえず私ももっと色々考えてみるから、あなたも一度頭を冷やしなさい。そしてお父さんとも色々話してみましょう」

「……」

俺は本当に、親に恵まれていると思う。

オフクロは俺に考え直してほしいと思っているけれど、それでも頭ごなしの否定はせずに、愚痴を言いながらも、俺の事をちゃんと考えてくれている。

確かに今のままじゃ議論は平行線だ。中断した方が無難だろう。

だけど、部屋に戻ろうと、応接間を出ようとした時だった。

「あんたにこれだけは言っておくわ」

オフクロが背中越しに俺を呼び止めた。

「あんたは人間ってものを知らない。サッカーをやるにも、今のままじゃあんたはダメ。もう少し、チームプレーとか、仲間を作る事を学ばないと、あんたはいつかサッカーをやるのが辛くなるわよ」

「……」

俺は部屋に戻って、今日の資料を、部屋に置いてあるクリアファイル――ユース用、高校用と二冊に分けてある中に、ちゃんとアイウエオ順になる場所にファイリングして、そのままベッドに倒れこむ。

「……」

あぁ、ただサッカーを与えられた環境の中でやっているだけなら、とても楽なのに。

どうしてサッカーを引退してしまうと、こんなに退屈なんだろう。
こんなに駄目になってしまうんだろう。
オフクロに自分の気持ちを伝えたいのに、自分が幼すぎて、思いを上手く表せない。
そんなやるせないような無力感が、俺をどうしようもなく駄目な奴にさせる。
そして……
オフクロも見抜いている。
俺がサッカーをやることが、日に日に辛くなっている事に。
俺の心に芽生えている、この魚の骨のような違和感に。

Another story ～ 1－2

朝、学校に向かう。

身長１８２センチの俺は、中学校というところがあまり好きじゃない。

このでかさだと中学生の制服でサイズがないから、服が窮屈だし、机や椅子も低くて、前かがみになるから授業は寝てしまう。姿勢を良く保った方が寝にくいのは知っているんだけど、それが上手くいかないし。勉強するにも窮屈な場所だ。

それでも通うのだから、出来ればモラトリアムを楽しもうと思ってはいるのだけど……

シャッター商店街を抜け、人もまばらになり始め、コンクリートで舗装された小道の下には、力なく川が流れている。

目の前の坂道の先――電信柱の横で、女の子が俺に手を振っている。

今の彼女だ。名前はナミ。

真面目な女の子で、結構美人と来ている。部活を引退して、高校という人生初の岐路に佇む俺にとって、彼女の大人っぽさに随分救われている。人見知りで、腹を割れる男友達のいない俺とすれば、相談なんかしちゃう弱みも見せられる。最高の女の子。

女たらしだと、男はおろか、一部の女の子まで思われている俺だけど、ナミのことは本当に好きだ。付き合ったのはまだ２ヶ月だけど、出来れば、もっと一緒にいたいと思っている。

だけど……

「……」

お互い、それが無理である可能性の方が高いことが、何となくわかっている。

ナミは頭がいい。夢は弁護士とか言っちゃうような子で、俺よりもずっと自立している。もう９月。半年俺が必死に勉強しても、と

ても入れないような高校を目指しているみたいだ。
おまけに俺は、他県の高校から、サッカーのスカウトを受けている始末。少なくとも、サッカー強豪校の寮にでも入るだろうという可能性を、ナミはもう見抜いていて……
こうして一緒にいても、いつかは分かつ道を進む矛盾。
中学生にとって、巨大過ぎるほどの互いの道の隔たりが、俺達を無口にさせた。
「なんか、変だな」
俺は好きな人の前で黙りこくる沈黙に耐えられなくなる。
それが、俺の情けなさを強く感じさせるんだ。

俺はまだ、女性に告白したことがない。
黙っていたって女性は来るし、断るよりは、付き合って自分の相性を見ようという考えがあった。
それが自分を好きになってくれた女性に対する礼儀だと考えるきらいがあった。勿論二股なんかしない。自分を好きになってくれた人を傷つけたくはないから。
だから俺は、相当な寂しがり屋な面があったんだと思う。
自分を好きだと言ってくれた人を、俺もとても大事だと思う。どこかで誰かに必要にされたいという思いがあったからなのだろう。
ナミも俺に告白した。学校で真面目な娘という印象があるナミが、俺みたいな低脳な男なんかに告白するなんて、かなり意外だった。
何で俺なんかを好きになったの？　と聞いた。
「夢を追っている目をしていた。サッカーをやっている時の目を見て、自分も頑張らなきゃって思えるような、そんな目が好きだ」と言ってくれた。
彼女自身、難関である司法試験を目指したいと考えていて、両親の心配や、数字の壁に何度もくじけそうな時があるらしい。そんな時、俺のサッカーの試合を見て、自分も頑張らなきゃ、という心を

取り戻したらしい。
付き合ったばかりの俺達は、それぞれの夢に燃えていた。

だけど……
「ごめんな。サッカーを引退したら、こんな情けない男になっちゃって」
歩きながら、その思いが爆発した。
部活を引退してからの俺は、自分でも情けなくなるくらい、アイデンティティが歪んでいた。まして、好きな女に気の効いた事もできない。
サッカーを失った俺は、完全に自信や自己の存在意義までも奪われていた。
ナミは、サッカーをしている時の、夢を追う俺の目が好きだと言っていた。だとすれば、今の俺は、その目の輝きを失っている。
だから……その期待を裏切る後ろめたさも、俺を不安にさせるんだ。
「……」
ナミは黙ったまま、前を見て、歩いていく。
その背を伸ばし、真っ直ぐな視線を向ける、同い年の女の子が、とても眩しかった。
俺は、それに比べて――
「放課後、悩みを聞こうか？」
ナミは微笑んで、僕を見てくれた。
周りはナミの事を、地味だというけれど、それでも俺はこの笑顔が大好きだ。
でも、この娘――こうして、真っ直ぐな瞳を持った女の子が、俺の悩みを聞いて、何て言ってくれるのか。
――話したい。この娘は、サッカーをやっていた頃の、俺の心を持っている。

取り戻したい。行きたい。君と同じ、夢を追う道を。
「じゃあ、メールするよ。多分今日も客が来てるから、その後に、いつもの公園で」

ナミは別クラスなので、一人でクラスに入る。自分の机に鞄を置く。
「あ、ユータ。おっはー」
「おっはー」
こうして話しかけてくれるのは、女の子ばかり……
それに不満はないけれど……
クラスの男達は、俺の事を別次元の生き物みたいな目で見るか、関わり合いになりたくないと目をそむける奴が多かった。もうこういう人となりを、5年以上続けているから、女をとっかえひっかえ回していると思っているのだろう。
俺を見る、その目はとてもネガティブで……俺も進んで、友達になりたいなんて思う奴はいないけれど。
それでも、何か虚しい……
授業中は、携帯をいじったり、お喋りをしたり、授業に目標もない連中の集まりで……
心は、モラトリアムという緩やかな堕落に支配される。
――放課後、俺は金網越しに、サッカー部の練習場へ行く。
後輩は俺を見つけて、一礼を返す。だけど監督は、俺に何の興味も示さなかった。
「……」
俺がいた3年間、このチームは全ての大会で、県を制した。だけどほとんど俺のワンマンチームで、チーム全体で言えば、弱小の部類だったと思う。
俺とチームメイトは、スキル以上に、サッカーに対する価値観が違っていて――ちょっと強い相手にチンチンにやられると、帰りに

愚痴を言い出すような感じだった。
監督は俺を優遇はしたけれど、技術面でのアドバイスは、もう監督の手に余っていたのだろう。次第に俺は放任され、ほとんど一人で自主連という形だった。
そんな状態だったから、チームワークもバラバラで、強豪相手に、意志の疎通の時点で負けていたことも多かった。
一見、とても充実していた中学サッカーだけど、全てにおいて満たされない日々だった。
だから――今、多くのスカウトが来て、最新の設備や、レベルの高いチームメイトなんて話は、とても魅力的に感じている。
そういう連中なら、俺の相手をしてくれるかもしれない。ただ自分がゴールを決めるだけの、機械的なサッカーから、俺を変えてくれるかもしれない。
そんな淡い期待が、俺を惑わせていた。

今日も広島と仙台から、強豪スポーツ高校の推薦が来た。
昨日とまったく同じ手順で、オフクロが追い返したんだけど。
その後俺は学生服からトレーニングウェアに着替え、ナミにメールを入れて、ランニングに出る。
わざと遠回りをして、２０分くらい走って、家から徒歩５分の公園へ。
ジャングルジムにブランコ、パトカー、救急車、バスのオブジェ、砂場のあるだけの公園で、まだナミは来ていない。きっと図書館で勉強してから来るのだろう。
俺は、１８０センチオーバーの俺には、もう若干小さめのジャングルジムに登る。そしてててっぺんに腰を下ろし、ランニング後の荒い息を落ち着けた。
９月の今、時間は5時半くらい。ジャングルジムのてっぺんから、俺の故郷、埼玉県所沢市の、背の低い建物のすぐ上に、夕日がかか

っているのが見える。
しばらくその夕日を眺めていると、ナミが現れた。
「ごめんね。ちょっと図書館帰りだったの」
ナミは中学のブレザーにスクールバッグのままだった。そしてそのまま、俺の足元――ジャングルジムの淵に背を預ける。
「……」
ナミは、あまり体の接触を求めない。まだ手をつなぐくらいで、キスだってしていない。俺は中1の初体験以来、もう両手で数えるほど、女性を抱いているが、それでも物足りないとは思わない。それがきっと、彼女の人との接し方なのだろう。
「どうしたの？　最近ずっと元気ないけれど」
「……」
俺は、女の子の友達は、結構いるけれど……
真面目に何かを相談できる人は、学校でナミしかいない。
ナミの考え方、生き方に、少しだけ救われた自分がいた。この娘だけが、今、自分を取り戻す力をくれる、そんな気がしたんだ。
俺は自分の思いを、悪い頭で出来る限りナミに伝えた。サッカーを失ってからの虚脱感や、親と進路で平行線をたどる議論からのジレンマ、中学サッカーで得られなかったものを、強いチームで叶えたい、という思い、勉強で自分は一流になりきれないという考え。
話し終わる頃には、夕日が沈みかけて、街は群青色に染まり始めていた。
「……」
ナミは少し考え込んでいた。
そして、言った。
「ユータくん、私と一緒に高校受験しない？」
「え？」
俺はジャングルジムから、下を見る。
「きっと、それがいいと思う」

Another story ～ 1－3

「ちょっと待って」
俺は顔も見えないナミの言葉を遮る。
「今から頑張っても、俺は君と同じ高校には行けないよ」
その言葉を聞くと、ナミは一度前に歩きだし、顔が見える位置で踵を返し、僕を見上げた。
「でも、今のあなた、サッカーが出来なくなって、エネルギーがくすぶってるんでしょ？　それなら、その力、無理だっていう前に、何かにぶつけてみたらいいんじゃないかな？」
「……」
その言葉に、今までの情けなさが悲鳴を上げた。
「私はあなたがそこまでサッカーがやりたいなら、やればいいと思う。だけど、勉強がもうダメだ、っていうのを決めるには、まだユータくんは勉強と向き合ってないと思う。勉強をやめるなら、最後自分が真剣に勉強と向き合って、それでダメだった、ってわかってやめなきゃダメよ。お母様の言うように、せめて高校って考えは間違ってはいないし、それに応えるなら、あなたは勉強から逃げちゃダメ。それで受験がダメで、今のスカウトされている場所に行っても、全然遅くないし、今どこかを選ぶよりも、ずっと成長できていると思う」
「……」
その通りだ。俺はサッカーを失って、全てのことから逃げていた。
厳しい環境で自分を磨きたい――その俺の考えは、実は楽な道で、俺の現状にかかる多くの問題を無視して、その道を歩むということだった。
それに、ここでその道を選んだら、俺はもう二度と、勉強をする機会がないかもしれない。
なら、最後だと思って、半年くらい、勉強と真剣に向き合って、

最後の結論を出すのが一番いい、と思えた。どうせこの先、卒業まで特にすることもないのだから。

「私もお手伝いするから、修行だと思って、一緒に勉強してみない？　別に私と同じ高校に行こうとか、そういうわけじゃないの。ただお互い、励みになるものがあるのは、いいことでしょ？」

ナミのその言葉で、俺はこの日、高校受験を志したんだ。

「でも、受けるといっても、どこを受けようか……」

俺とナミは、ジャングルジムから公園のベンチに場所を移し、並んで腰を下ろしていた。

「受験でも、俺、結局サッカーの強い高校を受けるんだろうな」

俺の偏差値は現在５２。端的に言って、あまりよくはない。

これでも夏休みから夏期講習とかに行き始めたばかりなんだけどね。

「それならいい学校があるわ」

隣のナミが、いたずらっぽく笑った。俺のリアクションを期待しているのか？

「埼玉高校よ」

「埼玉高校！？」

俺は大声でオウム返しした。

埼玉高校といえば、県トップの進学校で、倍率は８倍、合格者平均偏差値７３、東大合格者数は、県立高校では日本一の超有名校だった。

「冗談はやめてくれ。君はともかく、俺なんかがあんな学校に入れるわけないじゃないか」

これは逃げとかそういう問題ではなく、現実的に考えて無茶苦茶だ。俺は元々、リアクションに長けているわけでもないので、そんな当たり前の反応をした。

今から親に「俺、埼玉高校を受ける」といったら、きっとオフクロは「目を覚ませ」と言って、俺の頬を往復ビンタでもしそうな勢いだろう。オヤジは「通信教育の漫画の読みすぎだ」とでも言って、

取り合ってもくれないだろう。
しかしナミは、真面目な表情で、こう言った。
「いい？　別に埼玉高校に入れ、とは言わないわ。でも、目標をそれくらいにしなくちゃ、勉強と真剣には向き合えないでしょ？」
「……」
「大丈夫！　ユータくん、体力と短時間の爆発力はサッカーでお墨付きだし、偏差値１０くらいなら、すぐに上がるわ」
「……」
いや、１０上がっても、それでも埼玉高校じゃ、勝負にならないんだが。２０上がっても、まだ足りない。
だけど……
考え方を変えてみた。
この俺が埼玉高校を受けるなんて、ギャグとしては最高級に面白い。怒られるかもしれないけど、つまらない中学生活の、最後の最後でそんなギャグをかますのも悪くない。
それでもし埼玉高校に受かっちゃったとしたら、それはそれで笑えるじゃないか。その時の俺は、もしかしたら新たな世界観が開けているかもしれない。埼玉高校だって、サッカー部はあるだろうし。
よく考えたら、目標、埼玉高校ってのは決して悪くない。ダメでも得るものはあるだろう。目標が低ければ、それは真に勉強と向き合ったことにはならない。
だけど……
「ていうか、君も埼玉高校受けるから、対策手伝う手間が省けるからだろ？」
「あ、バレた？」
ナミは舌を出した。

両親に言った時の反応は、ほぼ予想通りだった。
「埼玉高校！？」と、二人でシンクロした後、オフクロは往復ビン

タでなく、俺の頬を力いっぱいつねってかなり痛かったし、仕事帰りのオヤジは「何かの本の影響か?」と、新聞を読みながら、そう言った。

「いや、本気だよ。これからサッカーやるにしても、一般受験するにしても、勉強と付き合うか別れるかの選択は絶対ある以上、この残り半年で、勉強と真剣に向き合ってみたいんだ。俺もこのままじゃダメだって、薄々わかっているから」

その思いは、その時点では伝わり、俺は善は急げで、本屋で片っ端から参考書を買いまくった。

そしてこれから、両親に毎日のように志望校のランクダウンを促され、俺自身は毎日15時間勉強の日々が始まった。

元々勉強は好きではないから、はじめは拷問みたいだったが、1週間くらいすると、部活を引退して、目標もなく、進路もお先真っ暗でくすぶっていた時のうじうじした悩みが、綺麗に消えていて、勉強に力を入れることで、眠っていた魂が蘇り始めた。

ナミと同じ塾に行き、塾のない日は毎日図書館で一緒に勉強した。学校でも、仲のいい女子達と休み時間に勉強した。

ナミの言うとおり、体力だけはあった俺は、連日長時間の勉強もこなすことも出来、最後の模試を受ける頃には、偏差値は67までは上げることができた。

「う〜ん、71かぁ……努力圏だわ」

俺よりはるかに頭のいいナミでさえ、今年一度も模試で埼玉高校の合格圏が出なかった。

「俺は要検討だ……だけど、この俺がここまで偏差値を上げただけでも奇跡だけどね」

――そして、埼玉高校の入試の日がやってきた。

入試の日は雪で、俺はこの時、サッカーの県大会決勝戦なんかよりも、はるかに緊張していた。

半年前まで、もう勉強なんて出来ないと思っていた俺が、実力はまだまだでも、ここまでやることが出来た。どんな結果になっても後悔はしないが、ナミや、後半に毎日夜食を差し入れてくれた両親に報いる程度には頑張りたいと気負っていた。

ナミとは教室が別で、最後「頑張ろうね」と言って、別れた。

しかし……

一人になって、自分の受験番号の教室に入った時、俺の思いがまるで水割りのブランデーのように混沌と混ざり合った。

そこにいたのは、中学のクラスではまずお目にかかれないような、神経質なまでに勉強や偏差値を追及しているような連中ばかりだった。全ての人間が、物音一つ立てずに、びっしりと赤ペンで書き込まれた参考書に目を通している。

「……」

この半年、自分と向き合うためだけに勉強をしてきた俺は、周りの環境にまったく目を向けていなかった。

この時、わかった。

この学校は、俺の居場所じゃない。

俺はやっぱり、サッカーボールだけを追いかけているような生活をするのがいいのかも知れない。こんな勉強ばかりしているような連中と、自分は明らかに別次元の生き物だと思い知らされた。

よく考えれば、初めからわかっていたことだったけど……

俺も必死で勉強はして、それなりに偏差値は上がったけれど、周りにいる連中のような境地には辿り着いていない。これからもきっと、そうなのだろう。

だとすれば、この高校に入ったら、俺は一体どうなってしまうんだ……

半端者として、落ちこぼれを演じるのか？　毎回退学ラインギリギリで、教師にお小言を言われるばかりの生活か？

俺は……何のためにこの高校を受けるんだろう。そもそも、この学校でサッカーは出来るのだろうか。

俺が着いたのは、集合時間のおよそ３０分前で、席は一番後ろの、入り口の引き戸から2列目だった。その頃には、俺の右の席の人間以外はみんな来ていて、皆、物音一つ立てずに、参考書とにらめっこしていた。教室はまるで圧縮布団みたいに息苦しく、参考書をめくる紙の擦れる音だけで、皆が会話をしていた。

どうか簡単な問題が出ますように、とか、この教室、俺以外みんな落ちろ、とか。

そうしているうちに、試験監督の人間が3人入ってきた。

「えっと、欠席は一人かな」

真ん中の、５０代くらいの男がそう言った。

俺の方を見ている。俺は自分の右側を見る。俺の右の席はまだ空席だ。

受験料を払ったのに、休んだりするなんて、不運な人だな。なんて思った。

「えーっと、今日は皆さん、埼玉高校の受験を受けるということで……試験問題は、国語、数学、英語、理科、社会の５科目で、試験時間は各６０分を予定しています。面接試験はありません。受験者は応募だけで言えば、今年も２５００人を超え、今年も難関といわざるを得ませんが、それでも頑張って……」

試験監督が言葉を言いかけた時、教室の後ろの引き戸がガラガラと開いた。

俺も、他の受験生も、突然の音に、ドアの方向を振り向く……

「……」

視線の先のものに、男女問わず、一瞬見惚れた。

引き戸に手をかけているのは、１６０センチもないだろう小柄な痩せ型の体に、肩に当たるくらいまで伸びた黒髪、小さな顔に、冷たい印象を与えるが、整った各パーツ、それらは全て丸みを帯びて、一瞬、なんて綺麗な女の子だ、と思うような、花のような美少年だった。

Another story ～ 1－4

実際に女の子だと言われても、誰も疑わなかったと思う。
しかし、その格好は異様だった。
俺も含めて他の受験生が皆学生服なのに対して、彼はジーパンに髑髏付きのスタジャンといういでたちだった。まるで冬場にコンビニにでも行こう、というような格好である。
そんなラフな格好の中、首筋や、服の中に見える足の感じから、無駄がない程そぎ落とされた筋肉が覗けていた。それがなければ、きっと女性だと言われてもわからなかっただろう。白のワンピースを着せたいと思ったくらいだ。
その少年は、右腕に持つ受験票を一瞥して、試験監督の方へ視線を向ける。
「遅刻かね？　時間がないから早く用意しなさい」
試験監督に促され、少年はポケットに手を入れて、俺の隣の席に座る……
――ん？
この少年、鞄を持っていない。
見るとスタジャンのポケットから、シャープペン2本に芯、消しゴムを取り出した。
最後の見直しで、参考書などを一冊も持って来ていなかった。
余裕なのか、馬鹿なのか、明らかに他の受験生とは様子が違っていた。
この学校の試験問題は、明日の新聞の朝刊に載って、それで自己採点をする。だから今日の試験の問題用紙は持って帰れるはずだけど、それもいらないということか。
色々考えたが、すぐにやめた。
せっかく半年頑張ってきたのだから、居場所ではない学校の試験でも、全力を出し切らなければ。後のことはそれから考えればいい。

それを教えてくれたナミのためにも頑張りたい。
試験問題が裏返しで自分の前に置かれる。一時間目は英語だ。
開始前の、しばしの沈黙……５０人近く人がいるのに、息遣いさえ聞こえない。
そして、チャイムと同時に、皆一斉に問題用紙を開いた。沈黙の間に集中力を高めていたのか、皆まさに怒涛の勢いで、問題に突撃したといった感じ。
しかし……
俺の隣の少年は、腕組みをしたまま、まだ動かない。
腕組みをして、目を閉じて、その姿は落ち着き払っている。
当の俺も問題に突撃した。多分俺の偏差値では、この高校は記念受験にしかならないだろうけれど……
「……」
１０分でわからない問題に多数遭遇する。
英語の長文がまったく読めない。見たことのない単語が多過ぎる。
訳せない。
声にならない声で、俺は嘆息する。
やっぱり無理だ。俺とはレベルが違う。
この高校に、俺の力では入れない。
頭をかきむしりながら、早くも焦げ付きそうな思考を無理に回す。
その時。
隣の少年の姿を捉えた。
さっきまで目を閉じていた少年は、目を開けて、一番後ろから、教室の他の受験生を見物していた。
「……」
ぞっとするほど、澄んだ目だった。
まるでマウスを観察する科学者みたいに温度がなく、自分の今の行動に一毛の迷いもない。子供がカエルの腹に爆竹を入れる時みたいな、純粋な無邪気さと、その行為の不毛さ、虚しさを共存させたような、深い色の目だった。

体は小さいが、その目を持つ少年には、不思議な凄みがあった。まるで池の中で身を潜める龍の、爆発前の静寂といった迫力があった。

ふと、少年はこちらに目を向ける。俺と目が合った。

「……」

穏やかなのに、まるで射られるような瞳。氷のような冷たさに、ちろちろと種火が燃えている激しさ、世の中の汚い部分を知っているといったような、濁りきったような中に、山河の清流のような爽やかさ、清々しさがあった。

その多くの複雑な感情が絡み合い、相反する多くの事象がせめぎ合い、えも言えぬバランスでギリギリ立っているといった目は、儚げでもあれば、逞しくもあった。そんな不思議な美しさに溢れていた。

「……」

自分より２０センチは体の小さいこの少年が、異様に大きく見える。

サッカーをやっていて、時には強豪と当たることもあった。だけど、ここまでの戦慄を与えるような迫力を感じるのは、これが初めてのことだった。

「……」

試験監督の手前もある。少年と目が合っていたのは、ほんの2秒ほどのことだったけれど、俺はその2秒間で、少年の存在を強く印象付けられた。

少年は俺の目を見て、ふっと一度小さく息をつくと、目線を真っ直ぐ前に戻した。

「……」

そのまま、１５秒くらい静止していたが、彼は突然問題用紙を広げ、左手にシャープペンを取り、やっと問題に取り掛かり始めた。試験開始から、約１５分後のことだった。

隣でしっかり見たわけではないが、彼の問題との格闘は、とてつ

もない速さで行われていた。常に問題用紙に何かが書き込まれ、その作業が恐ろしく早かった。

そしてまた15分もすれば、俺がまだ半分も終わっていない問題を、全問解き終えて、シャープペンを置いていた。まだ問題を解き終わった者は、教室中見渡しても、一人もいない。

しかしこのテストは、途中退室が認められていないので、横目で見る少年は、椅子に深く腰掛けて腕組みをし、退屈そうな素振りで、教室の前の黒板を正視していた。

「……」

自分が苦戦している問題を、隣の人間がこんなに余裕綽々に解かれたという状況は、焦りを生むのと同時に、本当に解き終わっているのか確かめたくなるものだ。

俺は焦りから問題への集中が完全に切れてしまい、我慢できなくなって、横目で少年の方を窺った。

少年はさっきのように腕組みをして、ボーっと物思いにふけるような表情をしていた。

しかし……

机には、全ての解答欄を埋めた解答用紙が、まったく無防備な状態で広げられていた。

まるで、カンニングしてください、とでも言っているように。

「……」

ん？

誰に見せるんだ？

俺と少年のいる列は教室の後ろ。後ろから覗く奴はいない。

だとすれば、誘っているとしたら……

――相手は俺だ。俺しかいない。

俺の視線に気付いたのか、その時少年が、横目で俺を窺った。

「……」

その視線に、俺は戦慄した。

見抜いている。

俺がこの高校、記念受験くらいのレベルで受けていること、俺の学力を、彼はもう見抜いている。

俺だけじゃない。この教室内の他の受験生の実力も、多分彼は全て見抜いているんだ。

そして、悟った。彼はもう、自分の合格を確信している。

そして、この学校の合格に、大した価値を感じていない。

もう、彼は遊んでいるのだ。

よく見ると彼の答案は、ご丁寧に濃い筆圧で、大きな文字で書かれている。おまけに字が綺麗だから、一文字一文字が良く見える。

ここまでして、俺を挑発している。

だけど――

人を見下したり、馬鹿にしたような嫌味な光を、彼の目からは微塵も感じなかった。わざとカンニングをさせて、試験監督に言いつけてやろうと考えているわけでもなさそうだ。

ただ、カンニングをさせることで、一人の人間がどう変化するか、結末はどうなるか――そんな実験を楽しんでいるといった感じ。

見ても見なくてもどっちでもいい。退屈な試験でどうやって暇を潰すか、それだけの遊び――戯れなんだ。

ただ、その時の俺は。

まるで世界最高峰のパサーから、最高のパスが飛んできたような、そんな気分に襲われた。

「このパスに、追いついてみろよ。追いつけたら、ゴールを保障するぜ」

まるでそう言わんばかりの、追いつけるかどうかのギリギリを狙ったキラーパス。

でも、このパスにはちゃんとスピンをかけて、受け手の足下に収まりやすいように調節してある。厳しさの中に、しっかりと優しさと、何よりパスの出しての石が込められたパスだ。

こんなパスをゴールに決められたら、フォワードとして、なんて幸福だろう。

こんな奴が、サッカーのチームメイトにいたら……

彼のそのパスを確認して、俺は試験中だというのに、そんな事を考えていた。

初めて俺に、パスを出してくれた。今まで俺が受けてきたような、ボールを預けるだけじゃない、しっかりと意志を込めたパスを。

血が燃えた。こんな感覚を、同い年の男に感じたのは、初めてだった。

俺が欲しかったものは、こんな、走らないと届かない。だけど、走れば絶対に追いついて、受け取った時にはゴール確実なチャンスが生まれているようなパス。そんなわくわくするような意志の疎通。それなんだと思った。

今までサッカーをしていて、そんなパスがほしい、そんなパスをくれる仲間と、しっかり意志を疎通させたいと、強く願っていたのだと分かった。

俺は、このパスの結末をみたい。人生最初のパスを、忘れないためにも。

俺はその誘惑に耐え切れずに、少年の答案を丸写ししていた。

少年が、その結末を見たいだけの遊び――

しかし今は、俺の方がその結末を見たいという思いでいっぱいだった。

休み時間の間、参考書のない少年は目を閉じて眠っていて、カンニングをさせたのに、俺に何の興味も示さなかった、

だけど彼は、テストが始まれば、5分静止した後に問題に取り掛かり、全ての科目を15分で解いた。そしていつもご丁寧に、俺のよく見える位置に答案を置いた。

テストが終わるまで、それ以上少年は、俺に一度も目が合わなかった。その純粋なまでに透明で、退屈そうな瞳を、俺は時たま横目で眺めるのみだった。

テストが終わると、少年は脇目も振らずに帰ってしまい、人ごみ

に紛れ、小柄な体はすぐに見えなくなった。
埼玉高校の校門で、ナミと待ち合わせていた。
駅に着き、帰りの電車を待つ時、ナミに聞かれた。
「テスト、どうだった？」
「……」
あの少年の、愚直なまでに澄み切った目が、俺の目を捉えて、いまだに離さなかった。
「――変な奴がいたよ」
気もそぞろなまま、俺は答えた。
あまりに心奪われて、その帰り道、ナミと何を話したかも、よく覚えていない。

――俺に埼玉高校の合格通知、ナミに不合格通知が届いたのは、その一週間後のことだった。

Another story ～ 1－5

俺の家に合格通知が届いた時、両親は顎が外れるんじゃないかというくらい、口をぽかんと開けて驚いた。何かの詐欺だと思って、埼玉高校に確認の電話までしたくらいだった。それで確認が終わった次の瞬間大爆笑だった。

俺はもう、喜ぶとか、それ以前に、テストの日に出会った、あの少年の事を考えていた。

マジで合格していた……

てことは、あいつもまず合格だろう。

あいつ、俺のこと覚えてるのかな。人を人とも見ないような冷たい目をしてたけど。

何であんな冷たい目に惹かれたんだろう。

あの「受け取ってみろよ」とでも言うようなパスを出すストイックさだろうか。だけどあのパスには、俺が受け取りやすいような細工もしてあった。冷たさと暖かさが共存したようなパスだった。

――そんな事を考えていたけれど。

両親はその日、赤飯まで炊いて祝賀会をやった。今更カンニングで入ったとは言えないようなノリである。これは墓の下まで持っていかなければ……

だけど、この日から、ナミとの連絡が途絶えた。

別れを切り出されたのは、その3日後だった。

夕方に呼び出され、いつもの公園で……

ナミは泣いていた。

「あなたが埼玉高校に受かって、私が落ちた。その嫉妬であなたに嫌なところを見せるのが恐い。嫌われるのが恐い」

彼女はそう言った。

「……」
何も言ってやれなかった。
俺は彼女が好きだ。
この俺が、半年以上も一人の人と、こうして仲良くやってくれたことなんてなかった。受験中、お互い励ましあった日々、どれだけ心強かったか。
だからこそ……
彼女の求めた高校の合格を、カンニングという行為で掴んだ俺の醜さが耐え切れなくて。
俺も彼女とのこの先の未来に限界を感じてしまった。
そして、俺達の道は完全に途切れた。
この先、彼女以上の女性は現れるだろうか。そんな諦めも抱きつつ。

もう一つ結論を出さなければならなかった。
この時点で俺のサッカー推薦は、高校が43校、ユースチームが11チームとなっていた。
「まさかお前が埼玉高校に受かるなんて、思っていなかったけれど……」
「ホント、喜んでいる場合じゃなかったわね」
「……」
両親も浮かれ気分から冷めて、真剣に将来を話し合う段階に入った。
「お前は埼玉高校に入ったんだ。どの道を選ぼうと後悔はないと思う。お前の考えを俺達は尊重するから。何でも言ってくれ」
オヤジはこう言った。本当、俺は親には恵まれていると思う。
「……」
不思議だな。もっと悩むものかと思っていた。
「俺、埼玉高校に行ってみたい」

そう告げた。
理由は二つだけ。
一つは、あの少年の存在だ。
まるでホステスにはまったかのようだが、少年の、あの冷たいような、温かいような瞳が、どうしても忘れられなかった。
あの少年と一度話してみたい。何を考えているか、知りたいと思った。
サッカーじゃなくてもいい。俺はあいつから、パスをもらえるようになりたい。
あの少年が俺にくれたパスが、忘れられなかったんだ。
だけど……
あいつの事を考えているうちに、自分に足りないものがわかった。
「俺、わかったんだよ。もっと人付き合いとか、仲間を作るとか、そういう事をもっと勉強してからじゃないと、サッカーをやっていても、いつかダメになる。埼玉高校には、友達になりたいって思わせる奴がほんのちょっとだけど、いたんだ。俺、今まで男友達を進んで作ろうと思ったこと、なかった。だけど今回はマジなんだ。俺が今ぶつからなきゃいけないのは、サッカーよりも、人なんだって、思ったんだ」
そう、今ならわかる。
俺はあいつからパスをもらえるようになりたい。そう思ったのは初めてだ。
だけど——今の自分では無理だ、ということもわかった。
俺は今まで、人をわかる努力をしていなかった。
パスをもらう努力をしたことがない。
それはサッカー選手として——人間としての俺の、最大で致命的な弱点だとわかった。
友達になりたい、と思う奴がいても、今の俺じゃ、友達にはなれない。
きっと俺も、あいつと同じ、サッカーをやる時に、味方を味方と

思わないような、虚脱な目をしていたんだと思う。
そんな目が、初めて自分に向けられた時、初めて俺を見る周りの目が、わかった気がする。
あぁ、パスをやる気もないって目を受けるのは、こんなにも辛いものなんだな。
中学の時、みんなが俺に萎縮して出してくれたパスだって、ありがたいものだったんじゃないか。
このままじゃ俺、やがてあんなパスさえ出してもらえなくなる。
そしたら、俺は——ひとりだ。
俺の生きる意味だと思った、サッカーさえも奪われる。
あの少年の、がらんどうのガラス細工みたいな目は、俺にそれを見せてくれた。
俺はあいつに「味方」だと思われたい。
あいつにもう二度と、あんな目を向けさせてやるもんか。
そんな負けん気が沸いてきたんだ。
あいつが気まぐれで一度出したパスは、偶然だったかもしれないけれど、俺の価値観も一気に変えてしまった。
まるで激しい恋のようだったんだ。
そして、もう一つの理由は、別れてくれたナミに報いるため。
彼女がいなければ、俺はこんな思いを知らなかった。
彼女は俺に、逃げない事を教えてくれた人だ。そして、チャンスをくれた人だ。
だから、ナミがくれたチャンスを、埼玉高校で形にしてみたい。
それが、惚れた女に対する唯一の報いだと思ったんだ。

そして俺は、埼玉高校の入学式に来ている。
あの少年の姿は見えない。まだどこにいるかわからない。
もしかしたら、あの少年のことだ。もっといい学校に行っているのかも知れない。

もしそうだとしたら、俺は今世紀最大の大馬鹿者だけど……
そんな事を考えていた。
「……」
この学校には、もうナミも、誰もいない。
俺は、一人で道を切り開くしかないんだ。
信頼し合い、俺にパスをくれる「仲間」を探すために。
「――新入生挨拶。新入生代表、マツオカ・シオリ」
「――はい」
入学式はお決まりの手順で進んだ。
新入生代表は女の名前だ。こういうの、入試トップがやるんだろう。俺はてっきり、天才を絵に描いたような、あの少年だと思っていた。カンニングで俺が受かったくらいだ。あの少年は、全科目満点だっておかしくないんだ。
だけど……
壇上に上がる少女に、会場中が嘆息した。
「え――ナミ？」
だけど俺の驚きは、まったく別のところにあった。
壇上で挨拶をする少女は、儚げだが、底光りする美しさが、凛とした気品さえ漂わせ、会場中を甘く爽やかな香りで包み込むような、そんな慈愛に満ちた少女だった。
その雰囲気が、ナミの持つ空気に似ていて――
小柄で華奢な感じも良く似ていて、一瞬見間違うほどだった。
だけど……
次の瞬間、俺の思いは、会場を包み込む嘆息の感情へと変質する。
ナミも美しい少女だったが、彼女の、その更に上をいく美しさに、心を奪われた。
誰も知っている人のいないこの高校に、希望を見出すには、最高の滑り出しだった。
この学校に、ナミと同じ空気を持った人は絶対にいる。それがわかっただけで、俺は希望が沸いてきたんだ。

そして、この感情は、この会場にいる俺だけじゃないだろう。
会場にいる多くの男が――彼女にこの時一目惚れしてしまったんだ。

次の日、入学式後、新入生の親睦を深めるためと言って、千葉の勝浦へオリエンテーション旅行があった。
旅行用の荷物を持って、体育館に集合……
バスに乗る前に、担任の点呼とか、煩わしいものがいっぱいあった。
おまけに、ここでも違和感……
周りの連中を見渡すと、受験の時に感じた違和感が蘇ってくる。
どいつもこいつも小柄でひょろひょろで、今までの人生、勉強しかしていません、といったような雰囲気の奴ばかりだった。とてもサッカーの話を出来そうな雰囲気などなく、皆、3年後の大学受験に早くも照準絞ってます、と言いたげな視線だった。
そして、俺の所属する1年E組は、担任を囲んで座った。
初めてクラスの連中の顔をしっかりと見たが……
やはりあの少年はいない。
はぁ、確かにクラスが一緒になるなんて、そんなことあったら奇跡だとは思うけどね。
だけど……
それとは別に、嬉しいことが。
新入生代表で、挨拶をしていた、あの美少女――名前はもう覚えている。マツオカ・シオリが同じクラスにいた。
彼女はクラスの女子に、代表を務めた事をいろいろ突っ込まれていて、いわゆるガールズトークに巻き込まれていた。控えめそうな顔のとおり、色々おだてられて、少し気恥ずかしそうに構えている様が、とても愛らしかった。
まあ、今のところ、同性の相手で手一杯で、ナンパとかがある気

配はなさそうだな。
「――以上がこれからの予定だ。何か質問はあるか？」
「センセセンセー」
俺の隣で、間の抜けた声がした。
手を上げたのは、俺と同じくらいの大柄な男だった。
笑う度に八重歯を見せる、どんぐり眼に茶髪の髪をワックスできっちりセットして、もう顔が元々笑顔の形に出来上がっているかのように、自然な笑顔を見せる男だった。
「俺、このとおり体でかいんで、バスとか足がつかえて困るんですよ。何で、一番後ろに座らせてくれませんか？」
そう言った。
まあ、理由としては通っている。俺もそうだが、大柄な男にとっては、バスほど窮屈なものはない。座席に座っても、足がつかえて上手く座れない。血行が鈍ってエコノミー症候群に似た症状を併発させることもあるし、何より酔いも早く、眠れない。
「あぁ、まあそうだろうな。許可してやろう」
中学の時は、一番後ろの席を取ることで「え～」とか言う奴がいたが、この学校では一人もいなかった。そんなクラスの人気者タイプは、見渡す限り、あの大柄の男以外、誰もいなかったし、この旅行自体にも、あまり興味はなさそうだったから。
「へへっ、ラッキー」
その少年は、そう呟いた。
そして、俺の方を向いて、にかっと笑った。
「お前もその体じゃ、そんなクチだろ？　一緒に座ろうぜ」
「え……」
俺は困惑した。
今まで俺に、こんなフランクに話しかけてくるような男はいなかった。体もでかく、女の子に囲まれがちなせいで、男との交流自体、部活引退後、初めてだったのかもしれない。
「何だ何だ。旅は道連れ、ってやつだよ。どうせ参加するなら、こ

ういうきっかけで仲良くなってもいいと思わないか？」
本当にフランクな奴だった。
「あぁ、まだ名乗ってなかったな」
その少年は一人で会話を進めた。
「俺はエンドウ・ジュンイチ。よろしくな、ヒラヤマ」
そう言って、座ったまま俺に会釈した。
「……」
――あれ？　何でこいつ、俺の名前を知ってるんだ？

Another story ～ 1－6

――エンドウ・ジュンイチは、ポジティブを絵に描いたような男だった。

バスガイドさんがある程度の走行予定を言い終えると、ジュンイチは早速ガイドさんからマイクを借りて、こう言った。

「することもないし、見ず知らずの連中同士、これから泊まりの旅行なんだ。ならここでみんな自己紹介やろうぜ。ホテルに着いてから、みんな話しやすくなるだろ」

そんなジュンイチの扇動で、バスの中で自己紹介大会が始まった。

「俺はエンドウ・ジュンイチ。ま、この学校じゃ成績は下位かも知れないけど、歴史だったら誰にも負けないぜ？　趣味は三国志とか、軍紀ものだ。よろしく頼むぜ」

軍紀ものが好きな割に、武士道と随分かけ離れた明るさだった。

それから、皆次々に前に出て、自己紹介を進めていった。

「あ、あの、マツオカ・シオリです。音楽が好きで、吹奏楽部に入ろうと思っています。仲良くしてください」

マツオカ・シオリの自己紹介は、言っている事は普通だったけど、クラスの男子のメモリーには、そのデータは瞬時に刻まれた。少し気弱そうで、男子にあまり免疫がないタイプに見える。

一番後ろに座っていたから、よくわかる。男子の中で、半数以上の男子は、マツオカ・シオリの美しい顔に釘付けだった。

そんな余韻を残しつつ、自己紹介は続く。

だけど……

皆、人生で勉強ばかりの連中だったので、自己紹介がすこぶる特徴がない。

バスの中で自己紹介をやって、クラスの親睦を深めるなんて、学年で一番恵まれた環境のバスに乗ったのに、皆がそれを生かせない。

頭がいいくせに、勉強以外の事をしていないために、名前を言っ

ておしまい、なんて連中も多かった。せっかく皆と親睦を深めるチャンスを、エンドウ・ジュンイチが作ったのに、ほとんどが無個性な自己紹介で、名前を覚えられない。

「……」

中学にいる怠惰な連中とは、別の意味で、友達甲斐のある人間というのは貴重だった。

それでも隣にいたジュンイチは、率先して声を出して、盛り上げに徹していた。

「おい」

ぼけーっと皆の自己紹介を見ていた俺に、ジュンイチが声をかけた。

「お前の番だぜ」

ジュンイチは俺にマイクを手渡す。俺はそれを取って、立ち上がった。

女子の何人かが、ほぉ、という顔をした。

自分で言うのもなんだけど、俺はこのとおり、キャラはそれほど強くはないけど、背が高く、腹筋だって割れているような肉体系だ。顔もそれなりだし、黙っていてもある程度女の子の目を引く存在であることは、もう長年の経験でわかっている。

それに比べて、勉強ばかりのもやしっ子の男子は、俺の体があまりにこの高校に不釣合いで、早くも珍獣でも見るような目で俺を見ている。俺が他の連中に感じるように、連中も俺を、別世界の生き物みたいに思っているんだろう。

「……」

あぁ……この学校でも俺は、周りは女子だらけ、男には相手にされない生活を送るのか。

だけど、マツオカ・シオリと仲良くなれるなら、それも悪くないかな。むふふふ。

まぁ、この学校に来ちゃったからには仕方がない。まだ初日だし——判断するにはまだ早いか。

とりあえず、目の前の事を頑張らないとね。
「俺はヒラヤマ・ユータ。小さい頃からサッカーばっかりやってた。目標にしている選手は、今はスウェーデンのイブラヒモビッチだ。よろしく頼む」
「……」
想像以上にサッカーに対するリアクションが薄い。
スウェーデン？　イブラ……何？　って言いたそうな顔だ。彼らにとってスウェーデンは、フィヨルドだとか、グスタフ・アドルフだとか、バイキングだとかの方が有名みたいだ。
「イェーイ！　イブラー！」
ジュンイチの賑やかな合いの手で、少し救われた。

ホテルに着いてからは、学年全員が大部屋に揃っての交流会があった。
だけど、そこにもあの少年の姿は見受けられなかった。
「……」
男でも見惚れるほどの美貌の少年だ。いれば目立たないわけはないのだけれど。
――あぁ、あいつ、やっぱり他校に行っちまったのか。
だとしたら、俺……何のためにこんな学校に来たんだろう。
そんな事を思っていたから、俺はクラス男子の大部屋で、トランプで大貧民なんかやっていたけれど、まったく上の空だった。
中にはもうグループを作っている連中もいたけれど、会話はまだ受験のことばかりで、話も固く、どうにも俺には打ち解けがたい雰囲気だった。
部屋を出て、ホテルのロビーに、ジュースを買いに行った。プルタブを開けて、ロビーのソファーの一つに腰掛ける。別のクラスの奴もちらほらいたけれど、まだ他のクラスの連中も部屋で皆とお喋りだろう。基本的に空いている。

「退屈そうだな」
背中越しに声がした。座ったまま首だけを振り向けると、エンドウ・ジュンイチがジュースを持って、そこに立っていた。
「……」
向かいのソファーに座って、あの人懐っこい笑顔で話しかけてくる。
「そりゃそうか。中学サッカー界の有名人が来る学校じゃないよな。ここ」
俺はその言葉に、顔を上げる。
「俺の事を、知ってるのか？」
その言葉に、ジュンイチはジュースに口を付けながら、軽く笑った。
「埼玉の中学でサッカーやってりゃ、お前、結構有名人だぜ」
「お前も……サッカーをやってたのか？」
「あぁ、ポジションはボランチ。目標の選手は、イタリアのガットゥーゾだ」
「へえぇ」
こいつ、サッカーをやるのか。そうか、なら俺に近付いてきたのも頷ける。
そう言えば、聞いたことがある。俺の地元、所沢から程近い狭山に、とんでもなく守備の上手い長身ボランチがいると。
まさか、こいつのことか？
「じゃあ、お前もサッカー部に？」
「ああ、入部希望だ」
「……」
「何だよ。あからさまに嬉しそうな顔しやがって」
ジュンイチは呆れたように笑った。
だって、こんな奴と一緒にサッカーをやるなんてなったら、これから3年間、サッカーやるのも楽しくなりそうじゃないか。
中学の時、サッカー部にはこんなフレンドリーに俺に話しかけて

くれる奴はいなかったし。
「さぁ、シケた面してねぇで、風呂にでも行こうぜ。裸の付き合いってやつだ」
「え……でもまだ俺達のクラスの番じゃ……」
「いいんだよ。優等生ばかりで、チクる奴もいないって」

「おほ、この発言でホモだと疑われたら心外だが、さすがにいい体してるな」
ジュンイチは俺の裸をしげしげと見た。俺はあまり男との団体生活は得意じゃないが、小さい頃からサッカーの合宿をやってるから、団体の風呂にはあまり抵抗はない。
大浴場は、顔も知らない他クラスの連中がいっぱいいたが、クラスの連中と特に大差はない。
俺達は風呂に入る前に、並んでシャワーで頭を洗う。
「しかし、聞きしに勝る埼玉高校だよな」
シャンプーをしながら、ジュンイチが言った。
「みんな勉強ばかりで、特徴に乏しいよな。人間的には中学の方が、まだマシだぜ。今も部屋じゃ、受験の思い出だけを延々語ってるよ」
「……そうか。俺、少し不安になってきたところだ」
何故だろう。こいつには、ちょっとだけ心を開ける。ナミみたいな信頼とはまた違うけれど、どこかで安心するんだ。
「で、他の奴は大丈夫そうだったから、お前のところに来たってわけ」
そう言ったジュンイチを、俺はシャンプーをしながらの細めた目で見た。同じように目を細めて、頭を泡だらけにしているジュンイチが、どこかユーモラスだった。
シャンプーを流して、リンスをしてから体を洗う。
「しかしお前、噂に聞いてるイメージと、随分違ったな。よくチームプレーのサッカーが出来たもんだな」

「……」
こいつも、俺の事を見抜いている。
「まあ、フォワードは点を取るために、そう言う個人プレーが出来る奴の方が貴重なのかもしれないな」
「……」
こういう、ちょっとしたフォローを入れるあたり、こいつの人当たりのよさの上手さを垣間見た。
「……なあ、俺の話を聞いてくれないか」
そんなところに少しほだされて、俺は一緒に湯船につかり、ジュンイチに本音を吐露した。
受験の時の出来事や、その時の少年を追って、俺は埼玉高校に来たこと。そして、サッカーよりも、仲間を作る事を学ぶために、多くの勧誘を蹴ったことなど。
「……」
ジュンイチはしばらく黙っていた。
「カンニングでここに入ったなんて、軽蔑するか？」
「いや」
ジュンイチはにこっと笑った。
「話を聞いていたら、俺もその女顔のこと、面白いと思ったぜ。それに、お前の仲間を作ろうって決意も、嫌いじゃない」
「……」
「少なくとも、クラスの他のガリ勉よりは、血の通った話が聞けてよかったと思ったし、仲間を作るって意味じゃ、お前を応援してやろうとも思ったぜ」
そう言って、湯船から手を出して、俺に差し出した。
「ま、その女顔はいないみたいだけど、俺達もここで上手くやっていけそうじゃないか？　サッカー部でも3年間、よろしく頼むぜ。ユータ」
「……」
初めて、男から手を差し伸べられた。

嬉しいとか、そういうことよりも先に。
今まで少し腐っていた気持ちが復活して、清々しい気持ちになった。
俺はその手を取る。
そうだ、あいつはもういないけれど、きっと俺の求めるものが、この学校にはあるんだ。
――だけど、この清々しい思いは、ほんのプロローグに過ぎなかったんだ。
旅行はずっとジュンイチと一緒にいて、そうすると他のガリ勉達とも、ちょっとはまともな話もできて、少しは皆と打ち解けることが出来たと思う。
帰りのバスでは、もう話し疲れて、俺とジュンイチは爆睡していた。
次の日に、俺達に運命の出会いがあるとは知らずに……

――次の日、初の通常授業となる日の朝礼。
俺はジュンイチと教室の後ろで、サッカー部の入部届の話をしていたけれど、教室に担任が入ってきて、すぐに席に戻った。
担任は朝礼を始める前に、こう言った。
「えー、朝礼を始める前に。このクラスは一人、諸事情で先日の旅行に不参加の生徒が一人いてな。それを紹介しようと思う」
クラス中がざわめく。もう旅行中にグループが出来上がっていて、今更一人入ってこられても……という、困惑した反応だった。
「君、入りなさい」
担任がそう号令すると、教室前の引き戸が開いた。
俺はその時、デジャブのような感覚に襲われる。
次の瞬間、俺は「ああっ」と声を出していた。
クラス中が俺の方を向いて、笑いが漏れる。
そして、開いた引き戸から、教室に入ってきたのは……

とても見目麗しい少年だった。
体も小さく、女性のような顔立ちなのに、刺すような迫力に包まれ、瞳は宇宙のように深く、ラピスラズリのように魔力を秘めた光を放っていた。
この学校には制服がないから、春服になって、ジャケットにカットソーという格好からは、彼の絞られた肉体のラインがはっきりとわかる。
クラスの女子が、ほぉ……と、溜息交じりに頬を赤らめ、彼のそのしなやかな体、仕草に見惚れていた。
教壇で、担任の隣に立って、自己紹介を促される。
「サクライ・ケースケだ」
元々の高い声質を、喋り方で低く聞こえさせる、落ち着いた声だった。
「ホタルと書いて、ケーと読む。説明したから二度と名前の呼び方を聞かないでくれ」
それが彼の自己紹介だった。一風変わってはいるが、印象的だった。
「……」
俺はこの時、思い人に会えた上に、同じクラスになった奇跡に、神様というものを信じようかと思うほど、歓喜に打ち震えていた。
これが俺と、後の大親友、サクライ・ケースケとの再会だった。

Another story ～ 1－7

朝礼後の教室は、美貌の新入生、サクライ・ケースケの話題で持ちきりだった。

当の本人は、自分の席に突っ伏して眠っているけれど、周りはそんな彼を見て、色々な噂を飛び交わせていた。

「あいつか？　例の女顔って」

俺は教室の後ろにジュンイチと並んで立っていた。

「なるほど、確かに不思議な奴だな。死んだような目の癖して、どこかで野心みたいのが、メラメラ燃えてるような目だ」

ジュンイチも、サクライ・ケースケに何らかの興味を持ったようだ。

「女子に聞いたが、お前、旅行中のガールズトークでは、クラスで彼氏にしたい男子ナンバーワンだったらしいぜ。それがあいつの登場で揺らぐかもな」

ジュンイチはそう茶化した。

サクライ・ケースケは、とにかく、良く『寝る』少年だった。

一時間目は英語だったけど、授業が始まると同時に寝ていた。

それを睨まれて、英語の教師はケースケを起こして、英文の即訳を命じた。

「ん、えっと、自動販売機は、使う。電力を沢山。しかし、あるのだろうか、必要が、電力、これだけのを、使うのは、常に」

彼はたどたどしくも、一度も止まらずにこう答えた。

まるで片言のような訳に、教師も、何だそれは、と揶揄した。

「出来もしないくせに、授業で寝るんじゃない」

教師はそう叱った。

しかし彼はその言葉など歯牙にもかけずに、そのまま寝てしまっ

た。
そしてまた起こされ、彼はまた訳文をすることとなった。そしてまた片言のような訳を披露した。
「……」
教室にいた人間の全ての考えが一致したはずだ。
こいつは、大したことがない。一年の一学期で脱落すると。
この時のケースケの実力を正確に把握したのは、教室でただ一人。
マツオカ・シオリだけだったんだ。

休み時間も、寝顔も見せず、机に突っ伏し眠っている彼をよそに、クラスメイトは早くも『脱落者一号』、サクライ・ケースケの陰口を始めた。
幸せな顔だ、一月半後、その顔が一気に青ざめる結果をケースケが中間テストで出すとも知らずに。
そして、俺とジュンイチも一月半後、大量の赤点に青ざめることになるのだが、この頃はまだそれを知る由もなかった。
そんな未来は露知らず、俺達は現状、サクライ・ケースケの攻略法の作戦会議に夢中だった。
昼休み、俺は食堂にパンを買いに行って、そのまま裏庭でジュンイチと、コロッケパン、焼きそばパンの昼食を取っていた。
「どうだったよ。思い人の姿を垣間見て」
ジュンイチが焼きそばパンを頬張って聞く。
「……」
確かに怠惰な面はあったけれど、俺にはあれが、あいつの本当の姿だとは思えない。
だって、この学校のテストを、全て１５分で解いて、余裕で合格しているような奴だ。それを知っているのは、俺しかいない。
「はは、お前もわかりやすいな。まだ気になるって、顔に書いてあるぜ」

ジュンイチの言葉が、俺の思考を寸断する。
「しかし、わかってはいたが、あいつと話すのは、俺にはハードルが高いかもな」
俺は決して人付き合いが上手くない。
そんな俺にケースケがパスを出してくれるようになるなんて、俺には想像もできなかった。それほどにケースケは今のところ、取り付く島もなかった。
そして……中学時代、俺はサッカー部の仲間を、あんな目で見ていたのかもしれなかった。
悔しい。人から無関心に取られることが、こんなに辛いなんて知らなかった。
俺はあいつを追っていれば、きっと人の心がわかる人間になれると思うんだ。
そんな俺を横目に、ジュンイチは立ち上がって、こう言った。
「孫子って軍略家を知ってるか？　その人の名言に、彼を知りて、己を知らば、百戦して危うからず、っていうのがあるんだ」
「――は？」
「要するに、あいつに何かを仕掛ける前に、まずあいつの事を知ることからはじめようぜってこと。さ、教室に戻るぞ」
ジュンイチのその言葉で、俺達はまず、あいつを観察して、作戦を練ることにした。
とは言っても、サクライ・ケースケのすることといえば、寝てることしかないので、外部的観察では、どんな奴なのか、掴みようもない。
たまに授業で当たると、適当にお茶を濁すような解答しかせず、寝る事を優先するような奴だった。
授業の間も、俺はその事を考えていた。
あいつ、人を人とも思ってないような目をしているから、とりあえず俺っていう人間を認知させなくちゃいけないよな。
どうせ俺がこの学校で、一番だって誇れるものはサッカーしかな

いから、あいつをサッカー部に勧誘できる方法はないものか……それが一番の手だとは思うが……

放課後に、ジュンイチと作戦を練った。

「ま、俺達もこれからサッカー部の仮入部に行くんだ。そこにあいつが来ている事を祈ろうぜ」

俺達は仮入部として、サッカー部の練習をしているグラウンドに向かった。

今は新入生に与えられた、2週間の仮入部期間である。この間に新入生は部活を回って、自分の入りたい部活を決めることができる。

しかし、ジュンイチの口から衝撃の事実が語られた。

「この学校、受験効率優先で、2年生で部活引退しちゃう上に、勉強が忙しくて、生徒の半数は部活に入らないみたいだからな。どんなチームか、お寒いもんだぜ」

「そうなのか？」

「――知らないで埼玉高校に来たのか。だから言ったろ、お前がいる学校じゃないって」

「……」

――俺、3年生から1年も、サッカーが出来ないのか。この学校に来たことで、卒業時、あれだけいたスカウトがゼロだったりして。

はぁ……この学校、選択したのは間違いだったかなぁ。

しかし……

この学校のサッカー部の顧問だけは、無駄に経歴が立派だった。

顧問の名はイイジマ。現役時代、東都の大学で、元Jリーガーと互角に渡り合い、社会人サッカーを経て教師となった男。残念ながら彼が大学を出る頃に、まだJリーグは発足しておらず、プロにはなれなかったらしい。

俺とジュンイチは、仮入部届をイイジマに出した。

イイジマは俺とジュンイチの経歴を聞いて、手を取って喜んだ。

「お前らみたいな部員を待っていたよ。最近の部員はどうにもサッカーを軟派に考えている奴が多くてな。野球部出身者が、坊主が嫌だとか、女の子にもてたいからといって、サッカーに鞍替えする奴が毎年出る有様なんだ。そんな軟派な根性で入部されても困るからな」

とにかく最高級の歓待ぶりだった。

一ヵ月半後、この気のいいオッサンに、赤点取りまくって、三角座りさせられ、全校生徒の下校中、思いっきり怒鳴られるなんて、思ってもみなかった。

結局、一年生で仮入部届を出したのは7人で、今日は私服のまま、グラウンド外で先輩の練習を見学した。

「……」

一年後、このグラウンドには、俺達の功績で芝が貼られるんだけど、今はボールを追う度に土埃が舞う、西部劇でも撮れそうな、赤茶色の土のグラウンドだった。

そして、先輩達の動きも、予想通り、大したことない。

フォーメーションとか、動きがどうとかいう以前に、一人一人のスキルが圧倒的に足りなかった。

「……」

30分で幻滅して、俺はジュンイチと一緒に、帰るために駐輪場へ引き返してしまった。

「いやはや、システマチックと言うか、脳味噌が筋肉と精神論でできたような顧問に、あのレベルの部員か」

ジュンイチは歩きながらそう吐き捨てる。

「――まぁ、お前からすりゃ、物足りない環境だったかも知れねぇよ。ただ、住めば都ってこともあるだろうよ」

「……」

ジュンイチは、サッカー部で一緒に頑張ろう、と言ってくれた。

だけど、あのサッカー部で、俺は頑張れるのか？　いくらジュンイチがいたって……

埼玉高校で何かを見つけようという思いが、少し折れかけたのかもしれない。

「あれ？　何だあの人だかり」

ジュンイチの声に、俺も顔を上げる。

サッカー部のグラウンドは、この学校の二つある門のうち、一つ出たところにある。一度校門をくぐりなおし、駐輪場に向かう間、目の前に土手がある。隣接している国営の河川敷のグラウンドを埼玉高校が借りているのだけれど……

土手の上に、２０人ほどの生徒の人だかりが出来ているのが見えた。

「何だろう？　行ってみないか？」

ジュンイチに促され、俺は土手を駆け上がる。

土手の先から見下ろすグラウンドには、野球部とラグビー部、陸上部が練習をしていた。野球のバックネットと、ラグビーのポールが河川敷に常備され、陸上部はラグビーグラウンド周りにトラックを作っている。サッカーの競技場と同じつくりだった。

「あ、ヒラヤマくん、エンドウくん」

ギャラリーの中に、俺達と同じクラスの女子がいた。休み時間の間、目立つ俺とジュンイチは、女子とも少し話をしていた。さすがに中学時代は女の子しか周りにいなかったから、すぐに打ち解けた。

「何を見てるの？」

俺はその女の子に聞いた。

すると、その娘は野球部のグラウンドを指差した。

「うちのクラスの、サクライくん。寝てるだけの人じゃないんだね」

俺はその指の先を見る……

野球部のグラウンドには、センターの位置に一人の少年――サクライ・ケースケがいた。

ホームベース上から、監督らしき人がノックを打つ。

痛烈なゴロがセカンドベース上を抜けて飛ぶ。ケースケはボールに突進して、走りながらボールを捕り、素早いモーションでホーム

ベースに向けて硬球を投擲した。
彼の左腕が放つそのレーザービームは、本当に光を放つような速さで、ホームのキャッチャーのミットにストライクで収まる。
おぉ……と、ギャラリーから声が漏れる。
「次！　セカンドの守備につけ！」
ケースケは、セカンドでノックを受ける。
「……」
その守備は、センターでのそれよりも、圧巻だった。
まるで女性が舞を踊るように華麗で無駄がなく、一つ一つの身のこなしがとても綺麗だった。内野手に左利きは不利だと言われているが、彼の技量ではそんなこと、お構いなしだった。
「じゃあ次は打撃だ！」
次に打撃も披露したが、さすがに小柄だからか、長打は少ないが、そのバットコントロールと鋭い振りで、ほとんどが内野の頭を越えるヒットだった。おまけにスイッチヒッターときている。
俺やジュンイチ、他の者も、彼のその華麗なボール捌きや、強い肩、流れるような動き、センス抜群の打撃に夢中になっていた。
「しかし、なんだってあいつ、1年なのにあんなに色々やらせてもらってんの？」
ジュンイチが疑問に感じたらしく、近くにいたクラスメイトに聞いた。
「バイトがあって、早く帰りたいから、手っ取り早く入部テストだけしてくれって言ったんだとさ。一年のくせに、度胸あるよな」
その理由を聞いた時、ジュンイチが大爆笑した。
「くくく……元々バイトは校則で禁止なのに、それを言うかぁ？面白ぇ」
「……」
すごかった。
これだけの野球センスがあって、野球を諦める可能性は低いかもしれないが。

こいつがサッカーをやったら、一体どんなプレイヤーになるんだろう。

こいつなら、俺の動きについてこられるかもしれない。

こいつとサッカーをやってみたい。

その欲望が抑えられなくなりそうだった。

あのサッカー部で、俺がいて、ジュンイチがいて、そして、あいつがいて……

それは、俺が高校で手にしたい、と望んだ、「仲間」の姿、そのものだったから……

今は無理でも、俺はあいつから、もう一度パスをもらえるようになりたい。

俺が先に進むための鍵を、あいつは持っているんだ。

途端、ジュンイチの顔が、いたずらを考えた子供というか、おもちゃを与えられた子供というか、とにかくそんないたずらっ子の目になった。

「野球か……どうやら作戦になりそうだな」

ジュンイチが目を見開いた。

「作戦？　何の？」

「決まってるだろ。あいつをサッカー部に勧誘するための作戦だよ」

Another story ～ 1－8

次の日の朝、学校に行くと、既に学校にいたサクライ・ケースケが、眠そうな目をしながら、多くの人に囲まれていた。
「サクライくん、野球上手なんだね」
「中学とか、どこだったの？」
やはりクラスメイトも、何だかんだで皆気になっていたんだ。旅行に参加していない分、この謎のクラスメイトの正体を、少しでも見極めたいということか。
確かにサクライ・ケースケには、授業でどんな失態を見せようとも、どこか隅に置けないような雰囲気があった。
教室にはジュンイチがもういて、鞄を机に置く俺の所へ寄って来た。
「作戦通りにやるぞ」
ジュンイチにそう囁かれて、俺達もケースケの机の方へ向かった。
「はいはい、ちょっとごめんな」
俺達はクラスメイトを書き分けて、席に着くケースケの前に立つ。
「……」
初めてこいつの目を、こんなに近くで見た。
相変わらず眠そうな目だったけれど、初めてこいつの目から、僅かだが変化を感じた気がした。
今まで囲まれていた、勉強ばかりの大人しい連中と、俺達二人が別物の存在だと、一目で見抜いたのがわかった。ケースケの澱んだような目の流れが、少し変わったように感じたからだった。
「……」
だけど、ケースケはもう、受験で俺との間にあった事を、まったく覚えていないようだった。覚えていたら、もう少し何かあってもよさそうなものだが、それがまったくない。
昨日ジュンイチが台本を作ったのを、俺は今日、朝の電車で何度

も読み返し、イメトレまで完璧に繰り返してきた。
だから大丈夫……のはずだけど。
「なぁ、お前、鬼退治に興味ないか？」
「……は？」
初めて俺に向けられた、ケースケの言葉だった。
オイオイ、マジで大丈夫なのかよ。
「昨日の野球見てたんだけどよ。お前、その野球の腕があるなら、うちの弱小野球部で野球をやるのは勿体無いぜ。刺激が欲しくないか？」
俺は意味もわからないまま、台本の台詞を喋り続けていた。
「うちの野球部じゃ、甲子園にもまずいけないだろうし、お前のその腕でも、名が上がらないぜ。だから、この話に乗って欲しいんだ」
「……」
俺も大根芝居もいいところだけど、ケースケは、目こそ合わせてくれないものの、席で頬杖を突いて、その話をじっと聞いていた。
こう、無視しているようで、実はちゃんと話を聞いてくれるあたり、こいつの目の色の深さを裏付けている気がする。
「サッカー部の鬼顧問、イイジマっていうんだけど。そいつ、中学時代野球やってたのが、高校でサッカーやるってのが、許せないタチなんだと。坊主が嫌だとか、女にもてないとかでサッカーにうつられちゃたまらん、ってことらしい」
「……」
「それで毎年、そういうリクルーターに、入部したいなら、グラウンド１００周走って、本気度を見せろって、肝試しをやってるんだとよ。グラウンド１００周といったら、えらい距離だ。毎年新入生がぶっ倒れて、問題になっている」
サッカーのグラウンドは、うちのグラウンドがどれだけのものか知らないが、縦１０５メートル、横６８メートルだ。一周３４６メートルだから、１００周だと３４・６キロだ。確かに１５歳のガキが走る距離じゃない。

「お前、その鬼の角、へし折ってみないか？」
「……」
なんとも子供っぽい誘いだ。
ジュンイチの観察では、あいつは甲子園とか何とか、そういうものにはまるで興味がないように見えたんだそうだ。
それにあいつは負けず嫌いだろうという推測があった。こうして、他のクラスメイトが聞いている中で、こんな誘いをしたら、こいつはまず断らない。
「……」
ケースケは、顎に手をやった。
――嘘だろ。考えてるぜ。中学生が走る距離じゃない。死ぬぞ。
そして一度立ち上がり、教室の窓から体を乗り出した。外から見えるサッカー部のグラウンドの広さを目算しているのだろう。
そして、すぐに目算を終えると、ケースケは、俺の方を向いて、言った。
「報酬は？」
「え？」
「鬼退治をすることで、報酬はあるのか？　と聞いている」
「……」
報酬……？　ど、どうしよう。そこまで台本に書いてなかった。
ここで何か報酬が出せれば、きっとこいつは乗ってくれるはずだ。
しかし……台本になかった流れ……な、何かアドリブで報酬を考えないと――
「あるぜ。報酬」
テンパってしまう俺に助け舟を出したのは、隣にいたジュンイチだった。ジュンイチは一歩前に出る。
「俺達が、お前が成功するかどうか、オッズを開く。毎年体罰まがいのスパルタで、見物客も出るくらいらしいから、今年も多分、お前がぶっ倒れるのを見たがる物好きが見物に沢山来る。そこで、お前が成功するか失敗するか、賭けさせるんだ。お前は体も小さいし、

多分成功にはほとんど賭けないだろう。オッズ5倍でも、多くのハズレが出るから、きっと俺達に利益が出る。その利益分を、成功したら、お前が総取り――ってのはどうだ？」

「……」

その誘いに、ケースケは少し考え込んだ。

おいおい、そんな、オッズ5倍なんて……

こいつを過大評価してるんじゃないのか？　もしこいつが失敗したら、俺達、自腹切ること確実だぞ。

しかも5万――10万自腹でもおかしくないぞ

そんなこと……

「物好きだな」

ケースケが言った。

「お前等、そのオッズで僕が失敗したら、相当な額の自腹を切ることになるぞ」

ケースケも、俺と同じ事を考えたらしい。ジュンイチに忠告した。

しかし、この仏頂面のサクライ・ケースケの一人称を初めて聞いた。

僕だって……妙に大人びた落ち着きを見せる奴の一人称の割に、妙に子供っぽい。

その時、ジュンイチがフフフ、と笑った。

「鬼退治というからには、お前だけにリスクを背負わせるわけにはいかないだろ？　俺達もお前と同じ、高校生活に刺激を求めるクチでね。楽しいハイスクールライフのしょっぱなに、そんな刺激があっても悪くないだろ？」

「……」

そして最後に、こう言った。

「それに、お前を信じてなきゃ、そんな条件、吹っかけないさ。俺達は、お前がゲロ吐くまで走って、ぶっ倒れる姿が想像できなかった。俺はお前の負けん気に賭けたんだ」

「――！」

そのジュンイチの言葉に、俺ははっとした。
そうだ……俺に足りなかったもの。
それは、仲間を信じること。
俺は――こいつを仲間にしたい、と思っていたのに、こいつの事を信じきれていなかった。
それじゃ駄目なんだ。俺は、仲間からパスをもらえるようになるために、ここに来たんだ。
よく考えたら、俺は今、こいつにパスを出しているんだ。
パスを出すっていうのは、本当に信頼していないと、こうして恐くて出せなくなるものなんだ。
はじめて、俺が欲しがったパスを出す人の気持ちが分かった。
そして、思った。
俺は、本気で仲間になりたいと思っているこいつの事を、俺が信じないでどうする。

俺達二人は、サッカー部のグラウンド外で、オッズ勧誘をした。
俺が賭け金を預かって、今日の授業中、内職でせっせと作った、俺の落書き入りの、成功、失敗の割符を渡し、ジュンイチが名前と賭けたものを、ノートに控える。
賭ける奴を増やすために、当初の予定のオッズを5倍から１０倍に引き上げた。両方ともオッズ１０倍で、いまだかつて成功者が出ない、とあれば、誰だって失敗の方に賭ける。これが、賭けた人に応じてオッズを変動させると、総取りを狙って賭ける奴が増えてしまう。成功も失敗も一律の倍率にして、いかにも「安全なギャンブル」という名目で、お金を稼いでやろうと思わせる馬鹿者を釣るのが目的だ。
サマージャンボとか、一般の宝くじと同じ原理だ。一等が３億でものすごい大金に見えるけれど、結果的に胴元はそれ以上のハズレを出して、結果的に儲かっている。これが賭けた人に応じて、一等

の値段を上げてしまえば、俺達はケースケに、報酬を払えなくなってしまう。

だからジュンイチは、こういう悪知恵をアドリブで考えるにしては、天才的だったといっていい。とにかく俺達は、馬鹿者に出来るだけ多く、失敗に賭けてもらわなければならないのだ。

俺達は、昼休みのうちにのぼりまで作って、校門前、メガホンで精一杯勧誘した。

ジュンイチの狙い通り、失敗に賭けるおバカさんは後を絶たなかった。失敗にかけた人の掛け金総額は、２０万以上にのぼった。成功に賭けた人間は、２万円にも満たなかった。

「……」

こ、これ……

もし失敗したら、俺達二人、２００万の借金だ。

いくらなんでも、高校生の俺達からすれば、見たこともないような額だ。

下手したら今後の高校生活3年間、サッカーどころか、金を返すために必死でバイト三昧の日々を送る羽目になるぞ。

なのに……

不思議と、恐さはなかった。

サクライ・ケースケならやってくれる。

ここまで土壇場に追い込まれて、俺はやっと、人を――仲間を信頼することを覚えたようだった。

――あれ？

今の俺、メチャクチャ楽しいぞ。

入学早々、こんな命がけとはいえないけれど、人生を変えるくらいの出会いがあって、そのために必死になって、こんな馬鹿なことをやって……

こんな、自分がリスクを負ってまで、何かに打ち込めたことなんて、今までなかった。サッカー以外、まったく流されるように生きてきた俺が、初めて何かを人との間で掴めそうな気がしているんだ。

ケースケと、ジュンイチという、高校で出会った二人の存在によって。

いつか二人に、俺も何かを返せるように。

仲間になってくれて、「ありがとう」と言えるように。

そんな事を考えていると、ジュンイチに、丸めたノートで頭を叩かれた。

「そんな、もう何かを為したような顔するな。まだ俺達には、賭けの後の大仕事があるぜ」

それを言うジュンイチの顔も、２００万の借金を負うという不安は微塵もなかった。

むしろ、高校でここまで信頼を置ける人間と出会え、そいつとこうして同じ舞台で馬鹿をやれるということの楽しさ、嬉しさ、未来への希望でいっぱいの顔だった。

Another story ～ 1－9

グラウンド外、既にサッカー部のグラウンド外には、多くの生徒が鈴なりだった。それどころか、校舎からは、窓の外からその様子を眺めている者も多かった。

俺達はグラウンド外の最前列に、教室から机を持ってきて、オッズ本部として、賭け金の集計、受付を行っていた。

一度、教師連がやってきて、「こんなことで賭けなんかやめろ！」と怒鳴られたけれど、ギャラリーは皆、こんな簡単なことでお金が稼げると思っている。数人の教師達で止められるものでもなかった。

そこへ、今日の主役、サクライ・ケースケが、ジャージに白のＴシャツという、なんとも特徴のない格好でやってきた。

「え？　ホント？　あんな子が挑戦者？」

「女の子じゃないの？　あんな子が１００周なんて、走れるわけないじゃない」

「何だ、ヒョロヒョロのチビじゃないか。俺も賭けるぜ」

ケースケの姿を見ただけで、直前の滑り込みベットが殺到し、失敗の賭け金が１０万分プラスされた。

なめられたものだ。サクライ・ケースケも。

でも仕方がない、クラスの連中でさえ、ほぼ全員が失敗に賭けているのだ。

だけど、唯一クラスで成功に賭けたのは、意外なことに、学年一の美少女にして、入試トップの才媛、マツオカ・シオリだった。

「二人がそこまで推すには、何か勝算があるからでしょう。私はそれに乗る。それに何となく、成功する気がする」

彼女の成功に賭けた理由はそれだった。その言葉を裏付けるように、大枚５０００円を賭けたのだった。

ジュンイチは、才媛であるシオリが失敗に賭けてくれたら、より失敗の信憑性が増して、失敗に賭ける奴が増えるという計算で、シ

オリに声をかけたので、そんな返答をされるのは、大いに意外だったようだった。

既に保険の先生までスタンバイしている。毎年何人もぶっ倒している恒例行事だ、保険の先生も心得ているんだろう。

グラウンド外からも、イイジマがケースケに、野球からサッカーに切り替えることの軽薄さを説く声が聞こえた。本人は蛙の面に小便といった仏頂面のままだが。

このギャラリー満載の状態で、それでも普段どおり、グラウンド１００周を命じるイイジマもイイジマだが、ケースケもこれからどんな過酷なレースが待っているかも無頓着に、入念に柔軟をはじめた。

その柔軟だけでも、ケースケが強く、しなやかで、柔らかな筋肉を持っていることは、俺にはすぐわかった。

先輩のサッカー部員が、グラウンド内で練習を始めたと同時に、ケースケもスタートした。その時は、ギャラリーもケースケに声援を送った。

ギャラリーは現金なもので、誰かが体育館からバスケの試合に使う得点盤を持ってきて、周回を数えようとしていた。それをめくる役は、ジュンイチの仕事となった。

そんな注目の中、ケースケは一人静かにスタートする。

ギャラリーは、しばらく動きがないとみて、おのおの、長丁場の見物に備えてコンビニに行くなり、地元のものは着替えに一度家に戻ったりして、一度グラウンド外は閑散となった。

「現金な奴等だぜ。ぶっ倒れる様だけ見たいってか」

俺自身は基本スポーツマン体質だから、このガリ勉どもの功利主義には辟易する。

とはいえ俺も、スポーツの敵とされる、賭けスポーツの片棒担いでるんだ。人のことは言えない。

ギャラリーが続々戻ってきたのは、一時間もした頃で――

その時には、衝撃の光景が展開されていた。

一時間でケースケは、ノルマの半分以上である６０周をクリアしていたのだった。

「どう？　そろそろぶっ倒れそう？」と、仲間に聞きながら戻ってきた連中は、めくられた得点盤の数を見て、唖然とした。

しかもケースケの足取りはまだ軽く、きつそうではあるものの、スピードはまったく落ちていない。

俺自身、正直なめていた。

昨日のプレーをみて、ケースケはどう見ても野手だった。投手に比べて走り込みが少ない野球で、ここまで足腰が強いとは思わなかった。

元々マラソン選手のように軽量そうな体つきなので、足にかかる負担も軽いのだろう。

本職のサッカー選手でも、ここまで走れるものじゃない。俺だって、自信がない。

グラウンド外のベンチに座るイイジマも、もう部員の練習など目には言っておらず、この快走に息を呑んでいた。

この頃になると、保険の先生が、ケースケの安全を配慮するために、スポーツドリンクや、クールダウン用の水をケースケに渡し始める姿が見受けられるようになった。

ケースケは既に汗まみれで重くなったＴシャツを脱ぎ捨て、上半身裸になって、ペットボトルの水を、走りながら頭に被った。

その絞られた体は、女顔に似合わず男性的で、ギャラリーの女性も釘付けになった。キャー、という声も聞こえた。

８０周をクリアした頃には、さすがのケースケもペースを落とし始めたが、ギャラリーの精神状態も気が気ではなかった。

楽にお金がもらえると思っていたのに、これでは話が違う、と、今まで冗談半分だったギャラリーが、途端ヒートアップしていた。

誰もが、サクライ・ケースケという男の可能性に飲まれていた。

俺も、ジュンイチも、胸にこもる熱いものに気付き、椅子から立ち上がり、固唾を呑んで、それを見守っていた。

あんな冗談半分なふっかけに、ここまでひたむきにやってくれる。
このサクライ・ケースケという男の、愚直なまでのひたむきさに。
澱んだ流れの奥にある、宝石より輝く光に。
ガリ勉達は屈折しているのか、「もう頑張らないでいいよ」と、愚痴や、ひどいのになると野次を飛ばすのもいた。
しかし、それでももう、ケースケの頑張りに心打たれて、失敗に賭けているのに、ケースケを応援しているような、そんな奴もいるのは救いだった。
ケースケは辛そうだが、それでも普段の仏頂面を崩さないように努力しているように見えた。野次も歓声も全てお構いなしに、周回を重ねていく。
そして、ケースケが遂に１００周のゴールに達した時、グラウンドのギャラリー、および校舎の窓から窺っていた生徒全員が、スタンディングオベーションした。
俺とジュンイチも、手を取り合った。
ケースケは、赤土のグラウンドに裸で倒れこんだ。
その時俺達は、同じ思いを感じていた。
途端に体の力がへなへなと抜け、俺達はグラウンド外のアスファルトにへたり込んだ。
「こ……恐かったぁ……これで負けたら、３００万の借金だったからなぁ」
「あ、あぁ……ダメだ俺、腰が抜けた……」
そうしてへたり込んだ相手の姿がとても可笑しくて……
気がつくと俺とジュンイチは、大笑いしていた。
恐いような、狂的な遊びを経て、俺達は狂ったように笑ったんだ。
男友達と、こんなに笑い合ったのは、初めてだった。
こんなに誰かと、沢山の人を巻き込んで、馬鹿な事をやったのも初めてだった。
この瞬間だけで、俺はもう、何年も昔から、こいつの事を知っているような――心のつながりを感じた。

本当に楽しくて、可笑しくて、心の底が震えるような心の高揚を確かに感じた。

そして、俺達はおのおのにメガホンを取って、揃って叫んだ。

「えー、ご覧のとおり、結果は、成功でーす！」

Another story ～1－10（最終話）

成功に賭けた人間は、１０人にも満たなかったので、ギャラリーが多くても、換金はすぐに済んだ。

むしろ、「俺は成功に賭けた！」と、言いがかりをつける連中の対応の方が大変だった。割符は、俺のへたくそな絵の他に、クラスの女の子から借りた、おもちゃのスタンプを押していたから、一つも偽装は通らなかったけれど。

そんな喧騒もどこ吹く風で、体中泥まみれになったケースケが校舎内に引き上げてくる。

グラウンドを出る際に、保険の先生に問診されたり、拍手を受けたりと、一日でヒーロー扱いだった。

俺達は、誰もいない駐輪場に二人立って、ケースケを待っていた。あいつももう帰るだろうから、必ずここを通るはずだった。

「いいか、ここからも台本通りやれよ」

ジュンイチにそう忠告された。

夕焼けに照らされた、ケースケの姿を見つけた時、俺とジュンイチは、拍手でケースケを迎え入れた。

「……」

上半身裸のまま、姿は泥人形みたいだが、ケースケの目はまだ死んではいなかった。

「お疲れ！　大漁だぜ。ほら」

ジュンイチはずっしりお金の入った巾着袋を天に差し上げる。中には現金が２０万円以上入っている。

だけど……

ケースケはすれ違いざま、その巾着袋を掴んで強引に剥ぎ取ると、そのまま俺達を通り過ぎてしまう。

「……」

俺達に背を向け、３歩くらい歩いたところで立ち止まり、踵を返

す。
「この金、僕の総取りでいいんだよな」
まるで金のためなら何でも出来る、といわんばかりの目をしていた。
「まあ待てよ」
だけどジュンイチの台本は、この展開を前提に入れていた。
「お前はどうかわからないけど、俺達だってお前の鬼退治、結構感動してるんだぜ。そりゃ、しんどかったのはお前かもしれないけど、俺達も、１００万以上の借金するところだったんだ。結構ドキドキしたぜ」
「……」
「だから――ほら」
俺は持っていた、コーラの缶を、下投げでひょいっと投げた。左利きのケースケは野球のボールを捕るように、グローブをつける右手でワンハンドキャッチした。
「……」
「祝杯だよ。俺達の感謝もこめてな」
「……」
ケースケは、しばし怪訝な表情をしていた。
だけど、５秒後に、プルタブに指をかける。
ぱきょ。
ぶっしゅーっ。
「……」
ぴちゃ……ぴちゃ……
「……」
ケースケの空けたコーラは、火山のマグマのように噴出し、ケースケの顔から腕から、勢いよく濡らした。
「……」
ケースケは、缶を持ったまま、腕にかかったコーラをアスファルトに滴らせながら、固まっていた。

「あっははははははは」「あはははははは」
俺とジュンイチはその時、腹を抱えて笑った。
台本に、笑え、と書いてあったのだけど、間抜けな事をしたまま固まるケースケの姿が、とても可笑しかったから、本気で笑ってしまった。
その時。
ケースケは持っていた缶を勢いよく投げ捨て、俺に突進し、２０センチは身長差のある俺の服の胸倉を右腕で掴んでいた。あまりに喧嘩慣れしているようなその動きと、女性のように優しそうな顔のギャップに、はじめは状況が理解できなかった。
しかし、その時にジュンイチが隠し持っていたコーラの冷たい缶を、ケースケの死角から、背中にぴたりと当てた。
その突然の背中に走る冷たさに、ケースケは一度俺の胸倉を掴む手を離し、後ろに後ずさった。
「ははは、ごめんごめん」
ジュンイチは笑顔でそう謝った。
「いや、あんたはこれくらいしないと、俺達に心を開かないだろうと思ってな」
そう言って、今度はジュンイチが持っていたコーラの缶を開ける。ぷしゅ、と普通にあいたのを確認させ、そのままケースケに差し出す。
俺は自分のジーパンの知りポケットに仕込んでいたスポーツタオルを差し出した。
「ごめんな。お前と、少し話がしたくて、小細工したんだ」
「……」
そう、今までの大仰な芝居は全て、ケースケにガツンと一発パンチをかまして、心に入り込もうという、ジュンイチの策だったのだ。
そして、今の行為が仕上げ。
これでケースケが、俺達に悪意がない事をわかってくれれば、この作戦は大成功というわけだ。

そして……
ケースケは俺達から顔を背け、少し俯いて……
ほんの僅かだけど、ふっと、落とすように笑った。
「やられたよ」
そう言った。
「……」
それを聞いて、俺とジュンイチは、また大笑いした。
色々な嬉しさが、頭を駆け巡って……
それから、こんな芝居までして、人一人を引きとめようとした、
入学から今までのことが、とても楽しい思い出として、一生覚えていられそうな確信が芽生えた。
「俺達と、サッカー部で頑張らないか？」
気がつくと、自然にそう告げていた。俺は前に手を差し出す。
「俺達、これからもこうして、この学校でバカやっていこうぜ」
ジュンイチも割って入り、差し伸べた俺の手に、自分の手を乗せる。
「こいつ、俺達の世代では、日本代表クラスのサッカー選手なんだぜ。この学校じゃ、甲子園より国立の方が近い。お前が退屈しない環境は、野球部よりあると思うけどな」
「……」
この時、ケースケが何を思ったか、俺にはわからない。
だけど……
ケースケは、まだ泥とコーラのこびりついた、その手をジュンイチの手の上に乗せた。
――これが、俺達3人が、まだまだ未熟な『仲間』として、スタートした瞬間だった。
「よし、じゃあめでたく知遇を得られたということで、新入りに飯でも奢りますか」

その後俺達3人は、川越の駅近くにある焼肉やに行って、まるで画廊のごとく焼肉を頬張った。

ケースケは、俺達が賭け金から奢るということからか、小さな体に似合わず、実によく食べた。おかげでこっちの財布は、ケースケ一人の注文ですっからかんになり、俺とジュンイチは、帰り道ケースケに対し、ずっとぶうぶう言っていた。

次の日学校に行くと、俺達三人は朝から生徒指導室に呼び出され、校内で大規模な賭博を行い、金銭の取り扱いをしたということで、午前中の授業に出してもらえずに、反省レポートをしこたま書かされた上に、学校のグラウンドの草むしりを命じられた。

「――何で僕まで……」

賭けの対象と言うだけで、お金の取り扱いには参加していないケースケは、教師の見張りの下、軍手をはめてサッカー部のグラウンドの草をむしりながら、実に不満そうだった。

さすがにケースケでも、あれだけの距離を走らされたことで、体中がひどい筋肉痛で、草むしりがとても辛そうだった。

「文句言うな。俺達の集めた賭け金、お前の懐に全部入ってるんだ。ノーギャラでこんなことやってる俺達の方が大損だぜ」

そんなケースケの横で草をむしるジュンイチは言った。

「こっちは筋肉痛でまともに動けないんだよ。これで草むしりとか……いてて」

「……」

中学の時は、反省文を書かされたことも、教師から罰を受けたこともなかった。そんなバカをやれる友達もいなかったし、バカな事を考える才能も、俺にはなかった。

でも、今はそんな仲間がいる。

これからの高校生活、このバカどもと一緒にバカをやってみよう。

こんな面白い奴等と、バカな事をやり続けられる。それが何だかとても嬉しくて、俺は一人、影でニコニコしながら、草をむしっていた。

その2年後、俺たちの所属するサッカー部は、全国大会に出場し、見事準優勝を飾る。
その時に撮った写真を同封して、俺はナミに手紙を送った。
あれから一度も会えていない、やり直そうとも言えない。
俺はあれから、ナミ以上の女性を探すために、漂うように女性と付き合ってしまったけれど……
何人の女性を経ても、ナミの教えてくれたことを忘れてはいない。
そして、ナミに伝えたかった。
君と別れたその道で、俺が精一杯向き合って、見つけた、あの時は知らなかったもの。
『仲間』ということを。
そんな仲間達と今も、俺は笑っている。

そして、俺の実家に、ナミが夢をかなえ、弁護士になったと便りが届いたのは、それから10年後のことだった。

another story 完

An

第一部あとがき

この作品をごらんの皆さん、お初にお目にかかります。
この作品の作者、ターンＡです。
別にこの名前に意味はありません。だけどお気づきの方もいるかもしれませんが、ガンダムが好きだったりします。

はじめに書いたのですが、この話は、他の携帯小説サイトで好評（？）だった、作者の処女作を、少しだけ手直しして載せているものなのですが、そちらも読んだ方はどれだけいるのか…

処女作なんで、ご感想やご指摘は真摯に受け止めたいので、もしご意見があったら、色々とご指導ください。

この話は、作者が高校生の頃に書いて、受験などで一時中断したのを、大学に入学して少しずつ完成させたものです。作者は学費をバイトでまかなう貧乏学生で、お金のかからない片手間の暇つぶしとして書いていたもので、とてもプロの小説家のように、練りに練って書いた作品とも言えませんが。

しかもこの話、初めは男同士の友情を描いた、ヒューマンストーリーチックなものとして当初は書いていたのですが、どうも男だけだと話が展開しなくなり、女性をアクセントとして出してみたら、あれよあれよと話が恋愛方向に行ってしまったというものでして…恋愛ものとしても、ヒューマンストーリーとしてもどっちつかずな状態になってしまったかもしれないです。まあ、それで小説を書く難しさを痛感して、色んな人に読んでもらい、その感想から何かを学ぼうと、こうして大きなサイトにこの話を載せようと思ったわけですが。

さて、一応、この作品の登場人物の製作秘話を、ここで一部だけ紹介してみます。

・サクライ・ケースケ

モチーフは自分なんですが、基本的には「少年」です。天才だけど、まだ幼く、純粋な面を書きたい、と思って書いたキャラです。それゆえの不器用さで、不幸を招いた、っていう面が、読んでくれた方に伝わっているのやら…

名前の由来は、掲示板に書いたのですが、伸ばす棒を入れることで、少し名前に子供っぽさを出したい、ということでカタカナにして、伸ばす棒を入れられる名前、ということで、ケースケ、を採用しました。

サクライは、誰かが昔テレビで、ミスチルの桜井さんの事を「音楽が大好きな少年が、そのまま大人になったって感じ」と称していたのを聞いて、これだ、と思って、サクライ、を使いました。偶然ですが、冬にいたけれど、春を自分の中に持っていた、という意味でも、いい名前だな、と思って。

少年っぽさを出そうと思って、一人称を「僕」にしたり、色々どうでもいい小細工を…ただ、キレた時に、一人称が「俺」になるのは、一部の人に、某人斬りのようだと言われました。

はじめは名前を漢字にする案もあって、「桜井蛍介」という名前も考えたのですが、これを当時はやっていた「脳内メーカー」にかけたら、かなり悲惨な結果だったので、漢字案は頓挫して、名前をカタカナにしてしまった、という……

天才という設定にしたのは、小説初心者の作者がスキルもないの

に書くとしたら、主人公が何でもありな奴の方が、制約がなく書けると思ったからですね。それでも彼は力に取り付かれる設定に繋がって、誇り高い性格も後からついてきました。主人公が馬鹿だったら、この話は書けなかったので、結果的にはラッキーな設定でした。

この主人公、自分の中では「底抜けにいい奴」を書きたかったんですが、それが皆さんに伝わったか、と言われれば、ごめんなさい、といった感じです。

屈折してはいるけれど、根は真っ直ぐで、冷めているけれど、心は熱くて、天才なんだけど、どこか抜けてて、器用に見えて、実は不器用で…みたいな、全ての「ギャップ」を兼ね備えた人物として書こうと思ったんですが、作者の文才だとこれが限界だったようで…

加えて、人に翻弄され続ける、一種のヘタレとしても書いています。

もう少し彼の人間性を際立たせるなら、もっと破滅型か、内向的に徹しきった方がよかったかな、とも思います。冷酷にもなれず、優しくもなれずで、どっちつかずだったかな、と。皆さんには理解されがたいキャラに成り下がったかもしれません…自分の能力を信じてはいるものの、過信にならないように書いてあげたかったのですが、皆さんには、ただのナルシストに映ったかもしれません。そういう加減は難しいです。

ヒロインを無視して、別の女の子に走ったりするところも、好か

れない主人公にしてしまったかも知れません。自分の中では、あの時は救いを闇雲に求めて、あれ以外の選択肢がなかった、ってことで納得できているんですが…その後病室で、ヒロインを抱きしめたりしたのは、作者も書きながら「これって、節操がないのかなぁ」という自問自答をしながら書きましたが、主人公が救われるためには、一度どん底まで落ちて、負の暴走を止めなくちゃいけなかったので、仕方がなかった、と、自分では納得させています。

高校生の作者が書くには、少しハードルが高すぎたキャラかもしれません。生きるとか、愛するとか、作者はこの歳になってもまだまだわからないことだらけなのでね…

・ヒラヤマ・ユータ

サッカーが好きな人は一瞬でわかったかもしれませんが、これは現在、ＦＣ東京に所属している某フォワードから名前を取りました。
作者が初めて高校サッカーを見た大会で、長崎の国見高校に二年生でエースとして出場していた時に、「うお、こいつすげぇ」と思ったのがきっかけで、そのインパクトを借りて使いました。
その後、まさかこんなに有名人になるとは思わず、名前を変えることも考えましたが、その頃にはもう話が１００ページを超えてい

て…

直すのが面倒臭くて、そのまま使っちゃえ、ということで、この名前という黒歴史…

作者は基本的に、キャラの名前を考えるのがものすごく苦手です。カッコいい名前とか思いつかないし…カッコいい名前を考えるコツとかあったら、教えて欲しいものです。

一番困ったのが、ジュンイチとのキャラ分けをすることでした。多分一部ではそれはかなり不完全だったと思います。

ジュンイチが陽気な奴だったのに対して、ユータはプレイボーイゆえに、男に好かれなった過去があり、どこかクールになってしまった、というキャラだったのが、二人と出会って何気にいじられキャラもこなせるようにはなった、みたいなのを書きたかったんですが…

マツオカ・シオリの登場で、肝心の親友コンビが脇に追いやられるという、予想外の展開に…

なのでアナザーストーリーを作って、二人の性格を補完したわけです。しかしユータがケースケに抱く思いは、決してＢＬではありません。

・エンドウ・ジュンイチ

これもサッカー好きは気付いたかもしれませんが、モチーフは主人公との「ダブルボランチの相方」というのが思い浮かんでいたので。そのコンビを書きたいということで、元が出来ました。

たまたまやってた日本代表の試合で、その試合に出ていた代表ボランチの名前を合体させただけ…

どちらかというと、人と距離を置くユータよりも、ケースケに近い存在として書きたかったキャラです。ユータと比べ人情に厚く、考えが少し楽観的にしてみたかったんですが…それも不完全だったかもしれません。

ケースケを殴ったエピソードは、ジュンイチの人間性を現していて、結構自分では気に入ってはいるんです。そんな、「普通の高校生」のジュンイチを出すことで、ケースケとユータの特異性を出そうかと思ったんですが、それをやるとあまりにページが多くなってしまうので、第一部では頓挫しました。

序盤のケースケとジュンイチの会話は、普通の高校生をやってい

るジュンイチと、もう普通の高校生を出来なくなったケースケの対比として書きました。

良くも悪くも「普通の奴」です。

・マツオカ・シオリ

作者にとって諸悪の根源…元々男の友情重視の話が、男だけだと上手く話が展開しなかったため、アクセントで出した女性が、いつの間にかヒロインになってしまったという…

名前は、個人的にですが、松田とか、松岡とか、松浦とか、「松」がつく名前って、いい人が多いイメージがあって。ビジュアル的にも。その中で。女性的な感じがあった、松岡、を選びました。

女性を出すなら、話が男だらけだったので、女性らしい子を出したい、と思って、女性らしい名前を考えたら、「詩」という漢字を入れると、ちょっと女性らしいかな、と思い、詩織という名前をつけました。

しかしこの名前、某伝説的ギャルゲーヒロインの名前だったり、作者が高校時代、通っていた男子校ではやった、ジャンプでやってた某ラブコメ漫画のヒロインと名前が似てたり…こてこて過ぎた事

を今では後悔している作者です。

正直作者は今まで、大恋愛をしてきたわけでもないです。女性を本質的に求めたことも、女性に救われた経験も、まだありません。これを書き始めた高校生時から、今でもそうです。

なので、彼女の言動は全て自分の「妄想」と言ってもいいです。なので、この娘を書く、第一部ラスト当たりは拷問のようでした。もう恥ずかしくてたまらないというか…

公共の場で妄想だけの女性キャラを書いて、何をやっているんだ…という恥ずかしさに勝てず、時には酔ったままこのキャラを書いたこともあります。なので相当キャラが崩壊していたり、好き嫌いが別れても、作者は何も言えないキャラですね…

正直このキャラの感想が、作者は一番気になるところですね。

…と、まあこんな感じです。

これから第2部が始まります。仕事の関係で更新は遅いかもしれませんが、今後もよろしくお願いいたします。

第二部序章　Ｒａｄｉｏ

「はあ、はあ、はあ……」

鼓動が早い。生ぬるい風が、ひどくべとついた体にまとわりついて、体温は上昇している。

３月の夜はまだ寒いが、この上昇した体温を冷ますのには丁度よかった。地元川越は、夜になると人通りがめっきり少なくなる街だ。走りやすいように人気の少ない道を選んでいる。静かな住宅地を抜けて、橋を渡り、川に沿うようにして走っている。

もう７キロは走っただろうか。普段なら７キロくらい、適度な負荷をかける程度の走り込みだが、今は手足には各５キロの負荷をかけるパワーリスト、アンクルが付けられている。さっきからこの負荷が効き始めている。体が勝手に、足をすり足状に運んで、楽をしたがっているのがわかる。

おまけにここ一週間、ろくに運動しなかった分のツケは、確実に体に残っている。

『韓国の右サイド、イ・ミンス。今日日本は、この選手に右サイドを大きく侵略されています。さあ、仕掛けた！　ディフェンダー、抜かれた！　センタリング！　おっと！　ここに戻っていました、背番号６番のボランチ、エンドウ！　ペナルティエリアでフォワードを背にして仕事をさせません！　キーパーがクロスボールをキャッチ！　さあここから日本のカウンターだ！』

耳に突っ込んだイヤホンから、サッカーの実況中継が聞こえている。

野球帽を被り直し、腕時計を見る。走りはじめてから４０分が経っていた。横断歩道を渡り、左手に目標地点の公園が、川の対岸に見えていた。

僕は公園につながる橋を渡り、足を引きずるように公園に入る。幼稚園児用のジャングルジムや、ころっと丸い、パンダや熊のオブ

ジェのある、小さな公園だった。
僕はその遊具のひとつのブランコに腰を下ろした。
荒い息を整えつつ、僕は首に巻いていたスポーツタオルで汗を拭く。腕時計のタイマーを作動。サッカーのハーフタイムと同じ15分で体力を回復させる。
『あっと、ここでもいいディフェンスを見せますボランチのエンドウ！　センターサークル付近でボールを取られましたが、ファールを覚悟してのスライディングでペナルティエリアギリギリで韓国の攻撃を防ぎました！　起き上がってすぐに自ら仕掛けて、おっとロングボール！　あっとフォワードの11番ヒラヤマが走り出している！　いいトラップだ！　オフサイドはない！　ディフェンダーが体を入れてくるが、高速ドリブル、シュートッ！　――あぁ、キーパーのファインセーブに阻まれました。依然試合は2-2、ヒラヤマの2ゴールも、日本は韓国に苦戦を強いられています』
ブランコに深く腰掛け、ラジオを聴いていた。
ふと、頬の横に冷たい感覚が走った。
僕は顔を上げる。
野球帽のひさしの先に、黒い髪に、優しげな二重の瞳、小柄で華奢な体。
マツオカ・シオリが立っていた。
僕の頬に、持っているスポーツドリンクのペットボトルを当てたのだった。
僕はふっと息をついて顔をしかめる。
「ずっと追いかけてきたのか？」
そう言って、スポーツドリンクを手に取り、口に流し込んだ。美味かった。
彼女は僕の横のブランコに腰を下ろした。
「きっとテレビで見ていたら、あなたはきっと、じっとしていられないと思って」
「……」

「まさかこの試合中に、あなたが家を出るとは思わなかったんでしょうね。あなたを追ってくる人、誰もいなかったわ」
わかっている。彼女は、僕の立場も、自分の立場も。
「――君をあまり夜道に出したくないんだけどな。ご両親に心配をかけるだろ」
「試合、今どうなってる？」
彼女は自分の耳を指差す。
「……」
僕は黙って自分のジャージのポケットに入っていたポケットラジオから、イヤホンを抜いた。音が夜の公園に漏れる。
『しかし今日は、６番のエンドウが積極的な守備が、攻撃の起点となっていますね』
『そうですねぇ。だけどエンドウくんは基本ボールを前に運ぶ選手ではないですからねぇ。せっかくヒラヤマくんといういいフォワードがいるのに、中盤がそれを生かしきれていませんねぇ。中盤であれだけボールを取っているのに、攻めに回れませんねぇ』
『確かに今までの日本の得点は、ほとんどヒラヤマの個人技でしたが、やはり、『あの選手』がいないことが大きいでしょうか』
『そうですねぇ、そう考えると、『あの選手』は二人の力をより引き出していたんでしょうねぇ。彼のパスはヒラヤマくんを最大限に生かすし、彼の守備はエンドウくんの負担を軽くして、攻撃力も引き出していたと評価せざるを得ませんね。何より彼のドリブルは、それだけでチームを攻撃的に勢いづけますから』
「……」
「ふふ、いきなり言われてるね」
シオリは皮肉っぽくはにかんだ。
「――この大会が始まってから、針の筵とはこのことだよ。まったく……」
『とにかく、現在日本は、ヒラヤマ、エンドウの高校生コンビが奮闘しています。既に韓国と日本は、ここまで勝ち点１０で並び、決

勝リーグ出場を両国ともに決めております。今日は絶対に負けられない、首位攻防戦！』

「試合はこのまま進みそうだな。ジュンイチも頑張っているが、この試合は普段の高校サッカーより、試合時間が１０分長い。もう体力的に限界だろう。向こうは気温３５度、湿度８０％らしいからな」

「でもいい試合だよね。ヒラヤマくんも２ゴールも決めてるし」

「ああ、もしかしたらこの活躍で、ユータの海外進出が早まるかもしれないな」

「……」

ユータとジュンイチは今、サウジアラビアにいる。

３ヶ月前、僕達埼玉高校サッカー部は、正月の高校サッカーの全国大会で準優勝し、二人は大会ベストイレブン、ユータはそれに加えて得点王にも選ばれ、一大会最多ゴール記録を余裕で更新、そのままＵ－２０日本代表に招集され、今、その世代の世界大会アジア予選が行われている。いわばこの世代のワールドカップ予選である。

「ケースケくんも行けばよかったのに。二人がいなくて、今ちょっと寂しいんでしょ？」

「……」

僕は視線を落とす。

そして今僕は、日本で渦中の人となっている。

僕は全国大会で８ゴール７アシストを記録、ベストイレブンは勿論、大会最優秀選手に選ばれた。

当然僕のところにも代表の招集がかかったが、僕は学業優先を理由にそれを辞退。

埼玉高校自体が僕達の活躍で、今年早々彗星のように全国で名を知られる学校になった直後の、僕の辞退理由に世間が賛否両論を浴びせている。

そんな僕をよそに、若い日本代表はライバル韓国に苦戦している。

このまま負けてしまえば、僕のところにも非難が集中するのはまず確実だ。

「――寂しいかどうかはともかく、あいつらって娯楽がないのは退屈だな」
僕は何気なく冗談めかしてそう言った。
「素直でよろしい」
シオリはそう言って、舌を出す。
「……」
お互いが気丈に振舞っていたけれど……
誰も見ていないことで、感情が静かに爆発する。
自分達の寂しさを、あの二人がいないことにすげかえていたけれど。
それは、僕達がお互い、寂しいと、相手に素直に言うのが照れ臭くて……
そんな、まだ未完成な二人の関係が、気持ちをこじれさせる。
「あと……それに……」
それから僕は、野球帽で視線を隠したまま、少し痰の絡んだ喉に咳払いをした。
「君とも会えなかったから、すごく退屈だったよ」
「……」
シオリは黙って顔を赤らめる。
「あの――素直でよろしい、って、言うところなんだけど……」
「あ、ああ――うん……」
「……」
お互い上がってしまって、会話が続かなくなる。
久しぶりに会う彼女は、とても小さく見えた。
埋めきれない時間や距離が、僕をとてつもなく衝動的にさせた。
僕はブランコから立ち上がる。そして、野球帽を取る。
彼女の許へ歩を進める。
「……」
シオリはまるで、ドキドキを抑えるように、小さな両手を胸に当てている。

僕は彼女の意思も介さずに、強引に、強く抱きしめた。
「……」
シオリの体は、だらりとしていたけれど、体が少し硬直していた。
「――ごめん。汗臭いかな」
まだ汗も乾ききっていないまま、彼女を抱きしめたまま、言った。
「――う、ううん、大丈夫……」
そう言った。
彼女は全ての力を僕に預けたまま、立ち尽くす。
「――少し、痩せた？」
抱きしめたまま、僕は胸の中の彼女に聞く。
「――わからない……何で？」
シオリは胸の中で、僕に聞き返す。
「いや……前、ユータが、「女の子は『痩せた？』って言うと、喜んでくれる」って言ってたから。少しでも、喜んでくれるかな、と、思って」
「……」
「ごめん。こんな急にだったから、何も君にあげられるものがなくて……随分合えなかったから、少しでも喜ばせたくて」
「……もう」
彼女の、少しふてくされるような声が、かすかに聞こえた。
そして、彼女も僕の背中に両腕を回し、僕の体を包み込む。
「――あなたは、また背が伸びたわ」
そう言った。
「こうした時、あなたの心臓の音が、また近くなったから……」
「……」
あとはもう、言葉はいらなかった。
お互いが、お互いの鼓動を聞いて、すぐに心の場所を見つけ出す。
そして、半人前の心を互いに補完する。
それだけを、求めていた。
「――お帰りなさい」

彼女は僕の胸の中で、それだけ言った。
僕も彼女の小さな体を、強く抱きしめる。
「――ただいま」
それだけ言った。
ラジオが、韓国に決勝ゴールを決められた日本の敗戦を伝えていた。

Ｒｅｔｉｒｅ

次の日、スポーツ新聞は各紙、Ｕ‐２０日本代表の惜敗を押しのけて、一面をこの記事が飾った。

『サクライ・ケースケ、国内トップで国際数学オリンピック出場者に内定。フィールズ賞候補にも――

サッカーＵ‐２０日本代表を辞退した、埼玉高校の天才ＭＦ、サクライ・ケースケ（１７）が、丹沢で行われた日本数学オリンピック決勝トーナメント合宿で、満点の成績を収め、他の上位者６名と、国際数学オリンピックに出場することになった。来月には日本代表の主将として、デンマーク、コペンハーゲンで行われる国際大会に出場する。歴代含めてトップの成績で日本の予選を通過したことで、数学のノーベル賞とも呼ばれるフィールズ賞の国内候補者から、チームに勧誘も受けており、大学進学後、史上初、前人未到の十代でのフィールズ賞受賞も射程圏内におさめている。今後も彼の動向の注目度は増す一方だ』

――その日の学校は、事実上の休校状態だった。朝から学校に報道陣が殺到し、学校の正門から半径１０メートルは車と記者と報道セットで埋め尽くされ、事務の教師達は正門前でその応対に追われた。登校する生徒の安全のため、機動隊まで出動した。

早朝に学校からの連絡で僕は起こされた。パニックになる恐れがあるので、学校には来ないように、と言われたが、そういうわけにもいかなかった。

だって、既に僕の自宅の周りにも報道陣がいたのだから。近所迷惑だし、騒ぎを沈静化させるためにも、僕は記者会見を学校で行うことにした。

職員室に顔を出す頃には、僕も自宅の報道陣にもみくちゃにされ

てきたので、髪の毛も一張羅のスーツもしわくちゃだった。
「まったく、お前の人気は正気の沙汰とは思えないぞ。今年に入って、機動隊を呼ぶなんて体験を、三度もするとは思わなかった。事務の先生たちも、お前に対する電話やファンレターの応対に追われてるんだ。学校は芸能事務所じゃないんだぞ、まったく……」
職員室の、来賓用のソファーに座って、会見の準備が整うのを待つ僕。
「僕だって何とかしてほしいですよ。昨日帰ってきたばかりだっていうのに……うちの学校、制服がないから、無理して記者会見用にスーツまで下ろしたんですから」
昨日の朝、僕は丹沢から報道陣の目をくらますため、始発の鈍行でひっそりと帰宅し、約一週間勉強漬けの脳を癒すように、帰るなり爆睡した。
そして目が覚めた時には、ユータ達の試合が始まる頃だったけど、しばらくテレビで見ていたら、あの二人がいるピッチに僕がいない、僕が二人の試合を観戦する、という、僕がサッカーをはじめて初めての経験に、どうにも気持ちの悪いものを感じて、テレビ越しに二人の血の躍動を感じたのか、僕までじっとしてはいられなくなり、途中でラジオを耳に、家を飛び出してしまったというわけだ。
だから、昨日マツオカ・シオリに会ったのも、１０日ぶりくらいのことだった。

視聴覚室で、記者会見は行われた。
「何故、数学オリンピックに出場されたんですか？」
「年齢制限的に、ラストチャンスで、中学から少し興味があったんです」
「サッカーの代表を蹴ったための便宜上仕方なくではないのですか？」
「ご想像にお任せします」

「数学日本代表の主将としての意気込みは？」
「ヒラヤマくん、エンドウくんが頑張っているのだから、僕も二人に恥じないように頑張ろうと思います」
当たり障りのない、丁寧な会見を心掛けた。
僕を取材するのは、お堅い社会系から、既に芸能人扱いしている芸能レポーターなど、様々だ。だからたまに挑発的な質問も飛んでくる。

――最初の記者会見は、僕達が全国大会で準優勝した3日後だった。
何故3日も間が空いたかというと、僕が決勝戦で足を負傷し、治療など、色々とドタバタがあったからだった。
全治2週間の怪我を負い、松葉杖をついての記者会見で、僕とユータ、ジュンイチの3人での記者会見に臨んだ。
この頃には、全国大会で5戦12ゴールという大会記録まで作ったユータは、既にユースの誘いが昔からあった、地元、浦和レッズトップチームへの入団がほぼ内定していた。
全国大会の出場、そしてその活躍を交渉材料に、大学に進学させたがっていた両親を説得したのだった。僕達もそれを手伝い、ユータの母も遂に兜を脱いだのだった。
しかし世間的には本登録ではなく、まだ高校の大会に参加資格の残る、特別指定選手としての登録が濃厚であるだろうという憶測が飛び交っていた。
特別指定選手という制度が、プロサッカーにはある。
プロは高校生と両立できるが、プロになって、高校生の夢である、大会に出られないのは可哀想ということで、プロをやりながら、高校の大会にも出られ、将来性豊かな選手に、より高いレベルでのサッカーをやらせたい、というのが目的の制度だった。
しかしユータはその記者会見で、その世間の憶測をあっさり打ち

破った。
「僕は現在、浦和レッズと本契約での交渉を進めています」
会見の場が一瞬どよめきに包まれ、「では、来年の大会は？」という質問が飛んだ。
これにはジュンイチが答える。
「いえ、今日で終わりです。埼玉高校は受験に専念させるために、元々2年生で大多数の生徒が部活を辞めますから」
「え？　じゃあ今年の全国選手権には？」
間髪入れずの記者の質問。
「多分、3人とも出場しないと思いますけど」
僕が答えた。
「じゃあヒラヤマ選手も、高校サッカーには未練がないということですか？」
「そうですね」
迷わずにユータは答えた。
「この二人とサッカーをやれた二年間は、本当に楽しかったし、最後にあんなにすごい試合が出来た。試合の時間は一瞬だったけれど、多分一生忘れませんよ。あの試合が出来たってだけで、僕の高校サッカー人生に、一片の悔いなしです」
「――北斗の拳か」
ジュンイチがツッコミを入れる。
「ちょ、ネタバレ！」
ユータはジュンイチを見る。
「俺、今いいこと言っただろ？」
「――まったく、公共の電波で著作権を侵すなよ」
僕も一呼吸ツッコミを入れる。
「自分の言葉で言えないお前の語彙の貧弱さは承知してるが――高校サッカーに悔いがないってところは同感だな」
僕があまりにさらりと、決意を口にしたから、質問の対象が僕に移る。

「サクライ選手は、もう高校サッカーに挑戦できなくても良いとお考えですか？」

「いいか悪いかはともかく……僕ももう、この二人と全てを出しきれたので、もう高校サッカーに悔いはないですし……ＰＴＡの大多数がそれを認めてから、学校中で定着してしまっているシステムなんで、僕達が突然部に残ったら、後輩の代が来るはずだったのを壊すことになって、申し訳ないですし。進学希望の僕は、受験に早く専念出来るなら、別に悪い話じゃないですし。だから、もうこの決まりに、特別抗う理由がないんです」

「……」

特に抗う理由がない――こう言われては反論の余地もない。初めて記者達が沈黙した。

「結局僕達高校生は、大人の談合の下で生きるしかない、脆弱な存在なんですから」

このインタビューによって、大会後も僕達埼玉高校の動向は、世間の注目となった。

このインタビューが流れた翌日に、学校に僕達のファンが押し寄せて、２年生で部活を引退させる風習は悪だという抗議が起こり、今年はじめて機動隊が学校に出動する羽目になった。埼玉高校は教育の場としての学校のあり方を問う前衛的な問題としてクローズアップされ、受験効率にしか興味のない体制が大きく批判をされることとなった。

教師やＰＴＡの父兄は、マスコミにこの体制への回答を求められ、実際年明け一週間の埼玉高校は、まともに授業が行われなかったほどだった。足を負傷していた僕は、その間にゆっくりと静養した。

そして、元々僕達３人は、大会中から仲がいいということを取りただされていた。

弱小高校で、全国大会初戦敗退だと誰もが疑わなかった埼玉高校が、僕達３人の息を合わせた攻撃で、あれよあれよと勝ち進んだ。その強さの最大の秘密として、僕とユータの息の合った攻撃と、僕

とジュンイチの鉄壁の守備のコンビネーションが挙げられ、取材も相当受けた。

そして、この記者会見で、ユータが「二人のいない高校サッカーに悔いはない」と言い、僕とジュンイチもそれに同調したことで、僕達の好感度はうなぎのぼりとなった。

「あんな友達が欲しい」

「あの仲の良さ、息ぴったりな感じが微笑ましい」

「3人とも実にさわやかで気持ちがいい。青春って感じ！」

などと巷は評価し、僕達は日本中の青春のシンボル的存在となった。

埼玉高校随一の3人組は、名実ともに日本一の友情で結ばれていると評価された瞬間だった。

Dragon

――全国大会から明けて一ヵ月後、僕は全国模試でトップを獲得。１位を取ったことで、また世間から注目される。

２週間後、僕達３人は、U‐２２代表の合宿に、１７歳で飛び級選出される。U‐１８、U‐２０を飛び越えての選出だった。ユータとジュンイチは参加をしたが、僕は学業優先を銘打って辞退した。

その時の記者会見でも、学校に機動隊が出動する。その頃には、僕達３人は、日本中で最もホットな存在となっていたのだった。

「僕は臆病者なんですよ。キャリア２年以下のサッカーで、国の看板を賭けて、まして批判を矢面に立って受ける自信がないんです」

この「僕は○○なんですよ」というフレーズは、この記者会見から、サクライ・ケースケの口癖として浸透し、一種の流行語扱いとなっている。

まだサッカーキャリア２年で、高校最高の選手まで上り詰めた僕の才能は、まだ伸びしろが十分あると期待する声が多い。しかし、小さな体であること、既に全国模試で一位を取っているということから、学業優先という僕の選択を肯定する人もおり、肯定派、否定派それぞれの意見に根拠があった。大学教授やスポーツの専門家などまで参戦して、僕の将来選択の、高度な証明が繰り返されている。

「サクライ・ケースケに向いているのは学問か、はたまたサッカーか？」

この無限ループのような議論が、この頃から今まで、ずっと続いているのであった。

「代表辞退とか、日本って国をなめてるとしか思えない！　あいつは非国民」

「調子乗ってるんじゃないの？」

「でもあの体ではもう伸びしろは少ないと言ったサクライくんの意

見は本音だと思う」
「サッカーは国内トップ選手でも年収一億、あの小さな体で全国模試一位取っているなら、一生は食えないサッカーを選ぶわけがない」
「実際キャリア2年で日本代表になったら迷うと思う。俺ならビビるね」
「自分が代表になるなんて、マジで考えていなかったんじゃね？　埼玉高校なんて、サクライ世代の入学前は、超弱小校だよ」
「そもそも代表って、なる気のない奴が選ばれちゃダメなところでしょ」
「確かに、ネットの掲示板とか、本人が見たら心が折れると思う。まだ17歳の少年に日本サッカーの全てを預けるようなのは、さすがに酷かも知れない」
「サクライは諸葛孔明が好きらしい。孔明の真似をして、しばらくは雌伏をしているんじゃないのか？」
「プロの契約金を吊り上げるための戦術なら、引くなぁ。純朴そうな顔して」
「サクライくんに限って、そんなことはないでしょ！」
「やる気がないならいらない、以上」
「サッカー選手になるより、日本を変えてほしい」
「大体サクライって、プロで通用するかも証明されてないよね」
「今の代表はサクライみたいなボールキープのうまい司令塔が必要」
「ヒラヤマとコンビ組ませれば、日本の得点力不足は解消しそう」
「サクライは速くて正確なパスと高度なトラップ技術を持っている。それだけで日本人が世界と戦えるヒントを持つ選手だと思う。A代表に呼んでも他の選手のいい刺激になる」
「埼玉高校が浦和レッズと練習試合したけど、サクライの上手さは際立っていた」
「てか、マスコミが騒いでる天才ぶりって、あくまで模試の一位でしょ？　騒ぎすぎ」
「まぐれで全国模試一位が取れると思っているゆとりは死ね」

――などなど、連日ネットの掲示板やテレビの討論番組などで、僕の進路は取り立たされている。日本サッカーの名選手達と、教育委員会、果ては東大教授や世界的数学者まで集まっての議論は、日本を飛び越え、世界的な注目を集めていた。

大会中、僕がインタビューで、尊敬する人を、諸葛孔明だと言ったことで、次第に僕は『平成の臥龍』と呼ばれるようになっていた。

諸葛孔明は、大学を飛び級で卒業した後、仕事に就かず、晴耕雨読の気ままな日々を送った。天才として、世の中を動かす龍の如き力を持つのに、自分の力を振るうに足る君主を待つため、山野に雌伏しているので、孔明は、臥したる龍、『臥龍』のあだ名を持っていた。

全国模試1位や、高校サッカー最優秀選手などの力はあるものの、大きなオファーに腰を上げない――そんな僕の姿を、孔明のそれになぞらえたのだ。

そんな高度な議論は、海外メディアさえ注目した。面白い問題だと取り上げたことで、ハーバードだとか、エールだとか、ケンブリッジだとかの有名教授まで意見をを出すほどの大騒ぎとなった。

そして、ここまでサッカーの技術を惜しまれる、サクライ・ケースケとはどれほどの選手なのか、ということで、僕は噂が噂を呼び、キャリア2年のサッカーで、スペインやらイタリアやらのプロサッカークラブからの視察さえ受けるようになった。

そうやって、僕の介さぬところでの議論によって名前が売れ、次第に日本の著名人や芸能人も、「天才と呼ばれるサクライ・ケースケと話してみたい」など、そんな依頼が殺到した。

僕は高校生で、テレビ出演には高校の許可がいるため、僕の出演の依頼は高校の事務室に届く。

事務の先生は毎日そのオファーの処理に追われているというわけだ。教育委員会が特別に人を埼玉高校に追加派遣したくらいだからね。

――とまあ、僕がマツオカ・シオリと一緒に過ごすようになって、3ヶ月が経ったけれど、今の生活はこんな感じ。

マツオカ・シオリと心を通い合わせたあの夜から、僕の人生は大きく動き始めた。

ひとりぼっちで鬱屈した日々を送っていた僕にとって、実に有意義な時間のように思える。

今の僕は、実に満ち足りているのだけれど。

ただ、あまりに騒がれすぎることが、時にひどく自分を縛り付けるように感じられる時があるのも事実だった。

受験も控え、人生の岐路に佇む僕は、平穏の中で、これからの事をじっくり考える時間も取れない。

そんな、目も回るように忙しい時間は、今も続いている。

Spring

――春になった。

コペンハーゲンで行われた国際数学オリンピックは、日本は団体では5位だったが、僕は満点で金メダリストにも輝いた。

帰国すると、僕の周りの慌しさは、その勢いを増すばかりだった。数学オリンピックを制し、今後フィールズ賞を狙うだろうと報道は伝えたが、僕はその可能性は大学まで保留することにしていた。

僕は進学するとしたら、学費の安い文系志望だから、大学で数学を専門にする気はなかったからだ。

ただ、選択肢の一つとしては考えてみようとは思う。とりあえず今は、長丁場も終わり、少しゆっくりしたかった。

――「ふあぁ……いい天気だなぁ」

ジュンイチは大欠伸をして、空を見上げた。雲がゆっくりと右から左へと流れていく。

「春になって、やっとこうして弁当が食えるようになったな。これから毎日こうして食おうぜ」

ユータが弁当の卵焼きに箸を伸ばす。

「誰も花粉症にならなければな……」

僕が冷静に突っ込みを入れる。

「あ……私、ちょっと自信ない」

一人の女の子が手を上げた。

「まあ、そうなったらそうなったで、また考えようよ」

シオリがうまく場をまとめた。

僕達は屋上にシートを敷いて、そこに弁当を並べ、各々におかずを取って食べていた。弁当は全て、ユータに送られた差し入れだ。元々弁当をよくもらっていたユータだが、最近では常に１０個以上

の弁当が来る。だからみんなこうして処理を手伝うという口実の下、食費を浮かせているというわけだ。

そして、シオリの隣にいる女の子――彼女は、ジュンイチの今の恋人である、チアリーディング部の部長である。名前をナカガワ・マイといった。

全国大会の決勝戦、僕達は敗れはしたものの、延長戦までもつれ込んだ。

決勝戦は雨で、相手は長崎県の優勝候補、三國高校だった。

僕達にとって、強豪校相手に雨というコンディションは、経験の差が激しく出るために、序盤から押されっぱなしだった。前半で2点ビハインドをもらってしまったのだった。

しかし、後半は壮絶な打ち合いとなった。守りもそっちのけで攻めたことで、いつの間にか5‐4という、すさまじい乱戦となった。

1点負けている試合で、ロスタイムに僕のコーナーキックをヘディングでゴールに押し込んだのが、ジュンイチだった。ゴールを決めて、埼玉高校スタンドに向けて歓喜するジュンイチを見て、彼女は一瞬で恋に落ちてしまったらしい。でも今ではどちらかと言うと、ジュンイチの方が彼女にべったりで、両想いの仲むつまじいカップルである。

「ふあぁ……」

僕はさっきから、涙で目をしょぼしょぼさせていた。

僕は今日の早朝、デンマークから帰国したばかりで、家にも帰らずに、羽田から埼玉高校に登校した。教師達は、「今日くらい休んでもいい」と言ってくれたのだけれど。

今日も学校で、帰国後初の記者会見があった。だから、一人だけワイシャツにネクタイを締めていた。

「眠そうだな、ケースケ」

ユータが言った。

「時差ボケだ……」

今にも寝そうだった。帰って早々、催眠術みたいな授業を受けて

きたばかりだ。
デンマークの時差は8時間。今は午後1時だけど、昨日までこの時間は、早朝の5時だ。
「……いっそ殺してくれってくらい眠い」
「わかるなぁ……俺達もサウジから帰ってきて、まず苦しんだのは、時差だったな」
ユータがしみじみ頷く。
「ははは、しかし、前のお前なら、昼休みに眠ければ、お構いなしに寝てたのにな」
ジュンイチが口に飯を含みながら、快活に笑う。
「どんな心境の変化だ？　頑張るじゃないか」
「……」
僕も弁当の一つのミートボールに箸を伸ばし、口に放り込む。
「んまい……」
10日ぶりの日本の飯は、懐かしい味がした。デンマークの飯も美味かったけど、やっぱり故郷の飯は最高だ。
「なんかサクライくんって、眠そうにしてると、癒し系だよね」
マイが言った。
「なんか、縁側でひなたぼっこしてる猫みたい」
「……」
僕以外の4人が、くすくす笑った。
「でも、半年前ならもっと猫っぽかったかもな」
ユータが言った。
「ケースケくん、急激に背が伸びたもんね」
シオリが僕の体をざっと見て、言った。
そう、身長165センチだった僕は、年が明けてから急激に背が伸び、今では172センチまで伸びた。
前は、シオリを抱きしめると、シオリの頭は肩くらいの位置に収まったけど、今は胸の中に納まるようになった。
中国に、纏足というものがある。中国では、女性は小さな足が美

しいとされ、決行を抑制することで、足の成長を止めるというやり方だ。
僕もそうだったのかもしれない。心の枷が外れたことで、体までも再生をはじめたという感じだ。
「おかげで常に体痛い……関節ギシギシする」
「4ヶ月で7センチも伸びたら、そりゃ体痛いだろうなぁ」
ユータは185センチある。経験則から痛みをわかってくれたようだ。
「ま、よく寝たら、デンマークの思い出でも語ってくれよ」
ジュンイチが言った。
「うん」
ジュンイチ達も、サウジの思い出を語れるようになったのは、帰国して3日後だった。試合の疲れと時差ボケのダブルパンチで、帰国してからは、昼寝に定評がある僕のお株を奪うほど寝ていたし。
「ここからなら、学校だけじゃなく、街中の桜が見られるんだね」
マイは鉄柵越しに外の景色を見渡す。
「まったく、お前、普段こんないい場所で授業サボってたなんて知らなかったぞ」
「しかも合鍵まで作って持ってたとはな。屋上はどの生徒も入れないのに、さすがケースケ、抜け目ないぜ」
「昼寝用の布団と枕もあるよ」
「マジかよ!」
「嘘に決まってるだろう……」
そんなやり取りを見て、マイとシオリは微笑んでいる。本当に幸せそうな顔で。ジュンイチはそんな彼女を見て、また微笑むのであった。
「……」
正直なところ、僕はこの二人を見るたびに、心底幸せになってほしいと思う半面で、焦りさえ覚える。
僕とジュンイチが彼女を持ったのはほぼ同時期だけど、僕はまだ

シオリと満足にデートさえ出来ていなかった。
付き合ってすぐ全国大会があって、僕は大会後に怪我で満足に動けない上、二月になると僕の周りはマスコミの取材攻勢で、満足に外へも出られなかったし、数学オリンピック関係で外に出張ることも多かった。
やがてテストが始まり、それが終わって春休みには、僕はほとんどコペンハーゲンという、カッコいい名前の街にいた。昨日帰国した僕は、いまだに報道陣に囲まれ、学校と家の往復さえもしんどい生活を送っている。
二人きりになれる時間が少なく、あったとしても見つかれば、彼女を週刊誌に載せてしまう。まだ未成年として、僕は彼女に被害が及ばない付き合い方を模索している。
こんな僕でも、携帯電話を買った。
それで、彼女と夜に電話で連絡を取るだけが、二人きりの時間——一線を越えるなんて勿論、キスだってしていない。お互い、人に横たわって生きたことがなく、甘えるのが下手で——不器用故に、なかなか上手くいかない。
それだけでもう3ヶ月が過ぎているのだ。

「今日は新入部員が来るんだよな。お前、挨拶は考えたのか？」
ユータが僕に訊く。
「あ、そうだっけ……そうか、僕が挨拶をするんだったな」
本来なら部長のユータの仕事だが、これからユータは浦和レッズと二足のわらじでの選手となる。常に部活にいられるわけではないので、事実上、副部長の僕がサッカー部をまとめることとなっていたのを忘れていた。
「まあいいさ、午後の授業、ギターでも弾きながら考えるよ」
「ダメ」
シオリが遮る。
「ちゃんと授業に出るって約束でしょ」
「……」
僕は溜息をつく。
「まったく――君が言うから授業にもちゃんと出るようになったんだから、たまには僕と一緒に授業サボってくれてもいいだろうに」
「当たり前のように授業をサボらないの」
「ふぅ」
僕は鼻から息を噴出す。
「授業には出るさ」
僕はシオリに背を向ける。
「これでも君と一緒にいられる時間は貴重だし、大切にしたいって思っているんだ」
「……」
「――だから、眠くても、今日だって……」
沈黙。
5秒くらいして、ジュンイチが、ぷっ、と噴出すと、ユータとジュンイチが、堰を切ったように大笑いした。屋上の冷たいコンクリ

ートに倒れ込み、腹を抱えて笑い転げている。
「にっ、似合わねぇー！　ケースケがそんな台詞を吐くなんて、最高だぜ！　ぎゃははは」
「も、もういっぺん言ってみてくれよ！　あはははは」
ユータが人差し指を立てて頼む。
「――嫌だ」
そう言いながら、僕はシオリの顔を窺う。
彼女は白い頬を赤らめて、僕と視線が合うと、照れたように俯く。その横でマイは僕と彼女の顔を見返しながら、僕に微笑を返す。仲がいいのね、とでも言いたそうに。
僕達3人の関係も、ちょっとだけ変わった。今までは二人のボケを、僕が突っ込むか、僕がボケて、二人がリアクションという形だったけれど、最近は二人が僕をからかうというバリエーションが増えた。
20秒ほど笑い転げてたユータ達も、少しずつ息を整えながら、笑い疲れたように息を吐いている。
「いい気持ちだろ」
僕は自分の尻の後ろに手を付いて座り直し、横で倒れこむ二人に言う。
「あぁ……」
ユータは吐息のように返事をする。
「雲がこんな速く流れて、空が近い……風も気持ちいいし、何だか宙に浮いてるみたいだ」
「だろう？　ここでの昼寝は最高なんだ」
そう言って、僕もユータの横に、頭を揃えて大の字に倒れこむ。
「二人もちょっと寝っ転がってみないか？」
僕は首だけシオリとマイの方へ向け、下を指差した。
はじめは戸惑いを見せた二人だったが、二人はシートに置かれている弁当箱を脇にのけて、マイはジュンイチの隣、シオリは僕の隣に頭を並べて横になった。まるで僕達は5枚の花びらを持つ花のよ

うに、真ん中から放射状に足を伸ばしている形になる。
「あ……本当に宙に浮いてるみたい」
マイが呟く。
「風が、すごく気持ちいい……」
シオリの前髪が、そよぐ春風に揺れた。
僕は、そう言って目を閉じる彼女の横顔を見ていた。風に誘われて、かすかに彼女の髪の香りがした。
「ケースケが今まで、授業をサボってた理由がわかったよ」
ユータが言う。
「こんないいことを知っていたら、そりゃサボっちまうよなぁ」
「……」
しばらく皆押し黙る。誰もが誰かが次に切り出す言葉を待つように。
その役は、やっぱり僕だ。
「どうだ？　たまには皆でこうしてサボってみるか？」
僕の視界の端で、ユータとジュンイチが少し笑ったのが見えた。
「いっちまうかぁ」
「みんなでサボれば恐くないってね」
ジュンイチとユータがそれぞれ口にするが、声が笑っているのがわかった。
きっと、僕がシオリをどう言いくるめるか、面白がってるんだな。
「マイも一緒にサボっちゃわないか？」
ジュンイチは彼女にそう聞く。
「――そうだね、それもいいかも」
一瞬迷ったようだが、結局そう言った。
「……」
さて、あと一人の説得は手間取りそうだ。
だけど、言葉で言うと何だか失敗しそうだし、また怒られそうだ。
だから……
彼女の手を握った。

「……」

これは、奥の手だ。

僕達二人は、3ヶ月一緒にいて、わかったことがある。

こうして片一方から抱きしめられたり、手をつながれたりすると、僕達はそれを拒めなくなる。

お互いがお互いを好きで、おまけにお人好しときている性格のせいだ。

だから、こうしちゃえば、きっと彼女も何も言えなくなって、僕の昼寝に付き合っちゃうはずなんだ。

――ま、そうすると夜の電話で怒られちゃうだろうけどね。

僕は、自分が出来る限りの笑顔を作る。

シオリももう諦めたらしい。目を閉じて、溜め息を一度ついた。

「やれやれ……結局部活にも残留してるし。夏の総体で引退ってわけにもいかなさそうだな」

ジュンイチの声がした。僕達は全員、目を開ける。

「これからどうなるんだろうな。俺達も、俺達の周りも」

「俺は嬉しいぞ？　お前らともう一年サッカーが出来るからな」

ユータの陽気な声。

「お前は進学しないからいいよ。俺も基本進学希望だし、どうなることやら」

そう言って、ジュンイチが溜息をつく。

「ねえ」

口を開いたのは、シオリだった。

「ずっと気になってたんだけれど……エンドウくんはどうしてプロを辞めたの？　代表なんだし、プロでやる手もあったと思うけれど」

「ん？」

ジュンイチの声。

そうだ。それが僕もずっと気になっていた。

世代別代表でも、ジュンイチは攻撃力はまだイマイチだけど、守備の安定感は抜群で、レギュラーを掴みかけていた。プロに入って

も、それなりに活躍は出来るはずだった。
それが何故、数学で四苦八苦しているのに、大学なのか……
「俺はさ……」
ジュンイチは、静かな口調で喋り始めた。
「これでも中学時代は、二枚目で通ってた。スポーツも出来て、勉強も、この学校には入れるくらいには出来た。いわゆる、学校に一人はいる、何でも出来ちゃうスーパーボーイってやつ？」
僕はそれを聞いて、笑いを堪えたけど、二人だけそれを堪えられない奴がいた。
ユータと、彼女のナカガワ・マイだ。
「ジュンくん、スーパーボーイなんて、なんか表現オッサン臭いよ？」
僕はいまだに、ジュンくん、というマイの呼び方に、笑いそうになる。
「そこはツッコむところじゃないの」
ジュンイチはそれを制す。
「まぁ、とにかく、そんな奴だったけどさ……この高校じゃ、そんなポジションじゃいられないって、はじめからわかってたんだよ。入学式で、ユータを見た時には、それを確信した。勉強じゃ、ここにいる奴に敵わないのは、初めからわかってたし、スポーツで一番になるってのも、ユータを見た時、諦めた。だからよ、高校はどうせ脇役なら、最高に楽しんでやろうと思ったんだよ」
「……」
一同、黙ってそのジュンイチの思いを、自分に置き換えながら、聞いていた。
この学校に来た連中は、誰もが勉強で、上には上がいると、一度は経験する。だけど、中学時代は主席クラスばかりが集まるから、自分がこの学校で下位に沈んでも、今まで構築したプライドで、それを受け入れられない場合が多い。
僕もそうだった。シオリに敗北した事を、受け入れられない時期

があった。
だから、そういう考え方が出来たジュンイチと、それが出来なかった僕……ジュンイチは僕よりも、ずっと大人だったのかもしれない。
僕は2年かけて、やっとジュンイチと同じ考えが出来るようになれたのかも知れない。
「それで、この学校で、一番面白そうだと思ったのが、ユータとケースケを仲間にして、化学反応させることだって、思ったんだよ」
「え？」「え？」
僕とユータが、同時に声を上げた。
確か……
僕とユータが、最初に話したのは……
鬼退治とか言って、イイジマがやらせる、グラウンド１００周に挑戦した時で。
あの時、僕はまるで、ジュンイチのシナリオに踊らされたようで……
噴出すコーラ。あんなくだらない手に、あっさりかかって。
タオルと、新しいコーラを差し出されて、あっさり引っかかった自分が情けないやらで。
気がついたら、こいつらと一緒にいた。
でも、今考えると、あれは全てジュンイチが仕組んでいたんだと思える。
ユータも、鬼退治だとか、そんな人を乗せるようなこと、言うタイプじゃなかったし。
「こいつら二人をくっつけて、一緒にサッカーやったら、きっと面白いもんが見れると思ったんだ。案の定、二人とは妙に気が合って、何をやっても面白かったし、全国大会なんてところまで行って、こうして日本一のトリオになって、俺なんかが日本代表なんかになっちまった」
「……」

「でもよ。正直俺は日本代表なんてガラじゃないって、やってみてわかったんだよ。俺はたまたま学校にいた、二人のすげぇ奴についてきただけだもん。自分で掴んだ結果とはいいがたいよ」
「そんなことはないと思うけど……」
僕は言う。
「それでも、俺はトリオの中じゃ、3番手だろ？　このままじゃ、お前やユータの金魚のフンだ。男として、それじゃいけないって思ったんだよ。俺も、大学に行って、もう少し修行してみたいって、思ったんだよ。お前やユータがいなくても、自分自身の道を見つけなきゃって、思ったんだよ」
「……」
ジュンイチがこの高校で、何をしたいのか、どうやって生きたいと願ったのか。
いつも冗談めかして気付かなかったけれど、この時、初めてわかった気がした。
「ケースケ」
ジュンイチが、僕の名を呼んだ。
「お前だって、サッカーよりも、もっと大切な何かを学びたいと思ってるんだろ？　まあ、今の状況じゃそれも難しそうだけどさ……自分と向き合う時間を欲しがってるんだろ？」
「……」
「お前は随分変わったよ。それを見て、俺も、俺の道を探したいって、本気で思ったんだ。ダチが本気で頑張ってるのみて、俺もそう思えたんだ。俺はお前らについてきただけだけど、これからは対等な仲間になるために、お前らに恥じない生き方を、10年後も、20年後も、爺さんになってもしてるのが、今の目標だ」
「――ああ」
この時、少し自分から眠気が消えていた。
僕達は、一緒にいると、どこまでも行ける。
だけど、そこから僕達は、新たな一歩を踏み出したんだ。

もっと強くなりたい。
こんな素晴らしい奴らと、進む道が変わったとしても、会うことが出来れば、今みたいに楽しく過ごせるように。
こいつらと、更なる高みを目指すために。
プロになって、僕達から離れ、新たなステージに立ったユータ。
僕達についてきただけだったけど、それだけでなく、自分自身の道を探し始めたジュンイチ。
そして、僕は……
この気持ちに気付けて、世界が少し綺麗なものに見えた。
もっとそれを見たいと思った。
自分が長年気付けなかった、ささやかな幸せに触れて……
自分が長年積み重ねた、この力……
それをどう使おうか。自分はどう生きようか。どう生きたいか。
それを僕は、今、探している。考えている。
「ケースケって、周りは無責任に騒いでるけど、俺達からすりゃ、進路に迷ってる、普通の高校生だもんな」
ユータの声がした。
「あぁ、俺達も、この先、どう変わっていくか、不安になる時もあるけど……」
ジュンイチの声がした。
「心配ないさ」
僕は言った。どうしても言いたかった。
「確かに僕達の周りは変わった。だけど、変わらないものはあるだろ」
空を仰ぐ。
「入学してからずっとお前等と一緒にいるし、今日だって一緒に飯を食えりゃ美味いし、学校でくだらない話をして、笑ってる——多分卒業までこの絵は変わらないさ」
シオリとマイは、目を閉じて、心地よさげにそれを聞いていた。
僕は、握り締めているシオリの手に、少し力をこめる。

「どんなに離れても、忙しくても、僕達はここに戻ってくる。どんなに僕達が、自分の道を進もうと、僕達はまた会えるんだ」

「……」

もう、誰も何も言わなかった。

皆、心地よい空気と、これからの未来を夢見て、僕達は眠った。

Defend

――「ねえ、ねえ、起きて」
女性の声で、目を覚ます。
目を開けると、そこには長い髪を頭の上で結び、小麦色の肌がとても健康的な、痩せ型の少女が立っていた。
ジュンイチの彼女の、ナカガワ・マイだった。
「ん……」
僕は上半身だけを起こす。そして腕時計を見ると、2時3分だった。もうとっくに午後の授業は始まっている。
周りを見ると、ユータ、ジュンイチは間抜け面をして眠っている。
そして、隣を見ると――
僕の手を軽く握ったままで、マツオカ・シオリが静かな寝息を立てて、愛らしい寝顔で眠っていた。
「……」
僕達が結ばれた日にも見たから、寝顔を拝むのは初めてのことではないのだけれど。
――可愛い。
不覚にも、そう思ってしまった。
僕はそこではっと我に返る。
彼女の寝顔に見惚れているのを、マイに呆然と見られていたのだった。
「やっぱ、シオリ、可愛い？」
マイは僕に訊いた。
「……」
照れてしまって、答えられない。いっそ殺してってくらい、恥ずかしい。
「どうしたの？」
僕は、自分を起こした理由を訊くことで、ごまかした。

「ちょっと、いいかな？」
「……」
僕達は、３人が起きないように立ち上がり、離れた場所で屋上の景色を見ながら話した。
マイも僕の隣に立つ。そして、言った。
「この前は、水族館のチケット、ありがとうね」
「あぁ……ジュンイチと行ったんだろ？」
「うん。それで、これ、つまんないけど、お土産」
マイは角ばったタイプのビニール袋を差し出した。
中には、海の絵が書かれたボールペンと、それぞれヒトデとシャチのマスコットのついたストラップが、２本ずつ入っていた。
「ありがとう。ちょうど携帯を買ったし、このストラップ、付けさせてもらうよ」
僕はマイに軽く会釈した。
「……」
だけどマイは、僕の顔を心配そうに窺っていた。
「――良かったのかな？　私達、チケットをもらっちゃって」
「いや、仕方ないんだ。あのチケット、期限切れが迫っていたし、僕はこの３ヶ月、とても外に出られる状況じゃなかった。だから、君達のデートに使ってもらえれば……さ」
「でも……二人はどうするの？」
「……」
僕はジュンイチとマイに、ペアの水族館の無料チケットをあげた。
これは、僕とシオリが初めてデートをした時に行った水族館で、イベントに参加してもらったものだった。
あの時、また一緒に行こう、と言ったはずだったんだけど……
あのデートの３日後に始まったサッカーの全国大会から、僕の生活は一変し、怪我や会見などで自由に動けず、有効期限が過ぎようとしていた。
だから、せめて友達に使ってもらいたい、ということで、二人に

それを譲ったというわけだ。
「……」
「あなたがいない間、ジュンくんから聞いた。シオリと一緒にいられない事を、気に病んでいるって」
「……」
「シオリのこと、もっとちゃんと守ってやらないとって、悩んでいるって」
「……」
僕は全国大会以来、望まずとも全国にファンを持ってしまった。
模試で1位を取った頃から、文武両道の見本として、今では子供からお年寄りにまで憧れの存在とされている。テレビなんかの「息子にしたい有名人」とか「なってみたい有名人」なんかのランキングでも、1位を総なめにしている。
勿論「恋人にしたい有名人」でも1位だ。
サッカーをしている時の熱さと、普段の物腰の柔らかさのギャップが好きとか、まだ人付き合いが下手な、不器用な感じが可愛いとか、あんな優しそうな顔をしながらも、刺激もありそうだとか、ユータ達との絡みから、大切な人にはとことん尽くす感じがいい、浮気とか、絶対しなさそうとか、理由はそんなものだ。
バレンタインのチョコは、ダンボール10箱を優に超えて学校に届き、現在も家に山積みになっている。
埼玉高校のサッカー部のグラウンドは、連日メディアに出ない僕を見ようと、見物客が殺到している。
インターネットでもファンクラブのようなものができているが、そこはもうほとんど無法地帯に近いものであった。
とても彼女がいるなんて、カミングアウトできる状態ではない。
最悪の場合、彼女に危害が及びそうなほど、過激なファンまで出来てしまったのだった。
「……」
それ以来、人に見つからないように極力気をつけて、一緒にいるの

だけれど……
彼女には、いつも寂しい思いをさせている。
それでも、いつも笑顔で僕に接する彼女が。
あんなことがあっても、僕に気を使って、いつも優しい彼女が切なくて。
会っても、会わなくても彼女を傷つける自分が悔しくて。
どうしようもなく、彼女を不憫に思う……
「――僕は勝手だな。自分の都合に、彼女を縛り付けてばかりで」
悔しくて、唇を噛む。
僕は、彼女に謝罪も償いも出来ていない。守りきれてさえいない。
だから、まだ彼女の事を愛する資格はないから、キスだって出来ていない。
世間では『臥龍』なんて呼ばれている僕も、実際はこんなザマだ。
一人の女の子さえ、ちゃんと幸せに出来ていない。
「シオリは、そんなこと思ってない」
マイは僕に諭した。
「あの娘は、あなたが思うほど、弱い娘じゃないわ。あなたが今いる状況が、しかたのないものだっていうことも、理解できないほどコドモじゃない」
「……」
「私、ジュンくんと付き合って、あなた達とも一緒にいるようになって、シオリとも随分接する機会が増えているんだけどね。あなたが日本にいない間、あの娘もあの娘で頑張っていたのよ。あなたが頑張っているのに、私も負けられない、って」
「……」
「シオリは、そうしてあなたをずっと追いかけているんだと思う。一番恐いのは、あなたが心配しているようなことじゃないわ。あなたが人気者になることで、自分よりもっといい人が現れて、いつかいなくなっちゃうんじゃないかとか、そんなことよ」
「……」

「もしかしたら、あなたが遠くにいるような感じを、今も感じて、寂しかったり、不安だったりするんじゃないかな。あの娘、恥ずかしがりで、自分の感情を抑えちゃうところあるから、口には出さないけれど……」

「……」

僕達は、既にマイとも随分仲良くなった。ジュンイチの彼女にしては、しっかりしすぎというくらいだし、頭もいい。

彼女は世話焼きで、子供っぽいジュンイチを、お姉さんみたいにたしなめる面もあれば、チアをやっているからか、感情表現が豊かで、感情を表に出すジュンイチと、本当に息が合っている。

本当は僕とシオリよりも、二人の方がいいカップルなんだろう。

そんな焦りを感じて、僕はシオリにどうしてやりたいか、考え続けている。

「すまないな。君やユータ達は、恋愛オンチ同士の僕達に、随分やきもきするんだろうな」

僕は照れ臭くなって、自嘲する。

「そんな不器用に優しいのが、あなたを人気者にさせてるのよ」

「そうかな……」

「そうだよ。むしろあなたはちょっと完璧すぎるもの。そうして苦戦することがあることで、ジュンくん達も、いい傾向だって言っていたわ」

「……」

沈黙。

「サクライくん」

マイは、僕の目を覗き込む。

「私、あなたにはとても感謝しているわ。私とジュンくんを取り持ってくれたのは、あなただったから」

「え？」

「ほら、あの全国大会の後。あなたは……」

「……」

全国大会で、延長戦の末、惜しくも敗れ去った僕達埼玉高校サッカー部は、ＯＢやＰＴＡが用意してくれた祝勝会を、ちくしょう会に変えて、体育館での慰労歓待を受けていた。

この時僕は既に車椅子に乗り、歩けもしない状態だった。試合後、全ての力を使い果たしてつかれていた僕達３人は、体育館の隅で静かにチビチビやっていた。

そこにやってきたのが、マイだった。

彼女は、まるで荒ぶる魂を抑えきれないといった具合に、僕達のいる前でジュンイチに告白した。

その時のジュンイチの驚いた顔は、今でも鮮烈に覚えている。僕達はそんなジュンイチを見て、二人で大笑いしてしまったほどだ。

「あの後、あなたはヒラヤマくんと、体育館のステージで、ギターを弾いて、歌を歌ってくれたわ。私達、その歌を聴いて、最初に同じ気持ちを共有できた気がするの。あんなに嬉しくて、楽しい気持ちになれた。その余韻に浸れているから、今も付き合えているような、そんな気がするの」

「――大袈裟だな。ただあの時は、パーティーで騒ぎたくなっただけだよ」

僕はそう言った。

「……」

沈黙。

「――この前、初めてキスをしたんだろ」

「え！」

マイは突然顔を赤らめる。僕も笑う。

「今日聞いた。ジュンイチの奴、感激してたよ」

「……」

怒ったように、馬鹿面で眠るジュンイチを見るマイ。

「でもさ」

僕は屋上から見える桜を見下ろしながら、言う。

「あいつが、自分の道を探したい、って思ったのは、きっと君のた

めでもあると思う」
「え？」
「あいつは、君を幸せに出来るように、今頑張ってるんだと思うな、僕は」
「……」
何でそんな事を思うかって？
それは、今の僕がそうだからさ。
シオリの教えてくれた――彼女が僕にくれたささやかな幸せを、少しでも返せるような男になりたいと、僕が願っているからさ。
「マイさん」
僕は体ごと、視線をマイの方へ向ける。
「君は、とてもいい娘だと思う。そんな君が、あいつといてくれるのは、とてもいいことだと思う。あいつも少しだけど、君と一緒にいることで、男の顔になってきたと思う」
「……」
「ジュンイチといれば、君は幸せになれると思う。だから――僕が頼むのはお門違いだろうけれど――あいつと、できたらずっと、そばにいてやって欲しい」
それを告げた。
彼女と、親友の幸せを、心から願った。

Ｄｅｆｅｎｄ（後書き）

第一部が終わった頃から、この作品のＰＶ数が、以前の３倍以上になりました。とても励みになっています。読んでくれた方、ありがとうございます。

活動履歴を書きはじめました。読んでくれた方と、出来る限り交流したいと思っているので、これからもよろしくお願いいたします。

Greeting

放課後の埼玉高校の前には、ガードマンが出動する。

埼玉高校の正門は二つあり、その二つの門の間の一本道の両端に、サッカー部のグラウンドがある。

その一本道には、連日多数のマスコミや、近隣の学校の生徒が押し寄せる。一般の生徒の下校もままならないほど、決して広くはない道に、多くの人間がごった返す。

そして先日、あまりの混雑に、人が将棋倒しになり、多くの怪我人が出る事態が起こった。ほとんどが外部の生徒だったが、中にはうちの生徒もいた。

学校が生徒の安全のために、雇わざるを得なかったのだ。

「サクライくーん」「ケースケくーん」「ユーター」「ジューンー」

当然火元は、僕達サッカー部の三馬鹿――もとい、三羽烏だ。

そして、その道を通らなければ、グラウンドにたどり着けない僕達は、自ら中に飛び込む、火の輪くぐりみたいなことを、最近毎日繰り返している。

学校の敷地内に当たる二つ目の正門を、学校の関係者以外はくぐれない。ギャラリーは二つ目の正門前で、僕達を待っている。

僕達が部室で着替えを終え、正門前に姿を現すと、耳をつんざく黄色い声援が響く。

「うお、今日は一段とすげぇな」

ジュンイチがどんぐり眼を見開く。

ほんの5メートル先のグラウンドが、全く見えない。狭い通路は僕の慎重で見る限り、どこまでも人がごった返していた。

「そりゃ、ケースケが久し振りに帰国した日だからな。おまけに数学オリンピック金メダルのプレミアつけてきたし」

ユータが言う。

しかし、今日のギャラリーの数の多さは異常だ。マスコミの多さか

ら、僕が新入生に何かを言うことを期待しているのだろう。
僕達は警棒を握っているガードマン数十人が、押し寄せる人並みをガードして作った細い道を、足早に通り過ぎる。以前ガードマンがおらずにここを通った時は、着ていたウインドブレーカーの袖をちぎられたり、引っかかれたり、すごいことになった。悪意のある奴がいたら、通り魔だって成立しそうな、前後不覚の人込みである。
僕はこの騒ぎを見て、シオリを絶対に人前に晒さないようにしようと決めた。
僕達がグラウンド入りを遅くしなければ、その分部員や一般の生徒への被害が増す。観客に顔をはたかれたり、鬼の形相でギャラリーを止めるガードマンを尻目に、僕達がグラウンドに入ると、そこには新一年生も、他の三年生も、顧問のイイジマも、既に全員集合していた。
「全員集合だ。キャプテンが新一年に挨拶するからな」
イイジマの号令で、横一列に一年生が並ぶ。
すごい数だ。５０人はいる。
埼玉高校の受験倍率も、例年の８倍前後から、２０倍まで上がったという。僕達の効果で。
上級生は、僕を先頭に、金網を背負うようにして、それと向かい合う。
「邪魔！　ケースケくん達が見えないじゃない！」
ギャラリーの声がする。金網越しに立つ部員は気の毒だな。
さっきまで金切り声を上げていたギャラリーは、金網越しに、僕の背中を見ているのを感じる。静かになった分、視線が強くなった。
「新入生の諸君、埼玉高校サッカー部へようこそ。僕は副部長のサクライ・ケースケだ」
僕は自己紹介もそこそこに、横のユータと視線を合わせずに、親指で指す。
「部長のヒラヤマ・ユータは、知っている者もいると思うが、既に浦和レッズと契約しているから、不在の時もある。だから負担にな

らないように、実質僕がこの部をまとめる役となってしまった。プロの後を継ぐわけだから、至らない面もあるだろうが、宜しく頼む」

軽く頭を下げる。背中越しにフラッシュの焚かれる音が無数に聞こえ出す。

「さて、僕からひとつ、新入部員に挨拶させていただく」

咳払いをひとつはさむ。

「知っての通り、この高校は進学校だ。去年まで受験に専念させるために、部活は二年生で引退していた。僕達三年生も、一月で引退するつもりだったが、今でもこうして部に残っている。正直ここにいる者も、サッカーよりも進学が大事だという者も多いだろう。僕自身もそうだった。いや、もしかしたら現在進行形を使うべきかも知れない。だからこんな僕が、君達に先輩面して、偉そうに練習を強制することは出来ないし、する気もない」

まず、こうして前置きをする。

「ただ、これでも僕達は、本当ならもう引退して、二年生に席を譲るはずだった。二年生とすれば、主力として試合に出られる機会を狙っていた矢先に、こんなことになって、悪いとは思っているんだ」

そのことが、まだ二年生といまだわだかまっている。それに一度触れる。

「そして、チームにはプロもいて、ギャラリーもこんなにいて、連日プロと、ただの高校生が比べられるという現実がある。劣等感を感じることもあるかもしれない。すなわち、このチームがチームとして成立するための条件は、決してよくはない。多くの不満の火種を抱えているんだ。一年生も含め、全ての部員がそれを認識してもらいたい」

上級生にも状況を認識させるため、敢えてこの場で言う。こんな機会でもないと、こんな大真面目なこと、喋れないからね。

「まず、皆でサッカーを楽しくやれる環境を作る事を目指そう。お互いが気持ちよくサッカーができれば、コミュニケーションもとれて、サッカーの質は上がっていくと思う。とりあえず、部全体で、

サッカーを楽しんでやれる環境が夏までに出来れば、僕は最高だと思っている。そのために力を尽くせる奴なら、入部は広く大歓迎だ」

そうやって、1年生の緊張をほぐしておく。

「僕自身、二年で辞めるはずだったサッカーを今も続けるからには、サッカーを楽しみたいとは思っている。だから君達もサッカーを楽しんでくれ。精一杯楽しんだ上での結果なら、全国大会優勝だろうが、初戦敗退だろうが、結果は何でもいい。基本的にこの部内で僕達は、君達下級生の決定を尊重する。だが、いい加減にやる奴には厳しいぞ。試合でも、そんな奴に僕は、パスを出す気はないからな」

「……」

一年生達の顔が途端真剣になり、後ろでがやがやと声を上げていた金網の後ろのギャラリー達も、一瞬息を飲んだ。

「――とまあ、そんなことを言ってはみたが」

僕はふっと笑顔を作ってみる。

「これでも僕達は本当は引退して、二年生に席を譲るはずが、こうして居座っていることで、後輩達にも悪いと思っているんだ。本来このチームでチームワークを乱す要因は僕達三年生ともいえるから、せめて上下関係を振りかざすつもりもあまりない。だから、サッカーだけを楽しむにはそこそこいい環境だと思う。これからの一年生の働きに大いに期待させてもらう。これが僕からの挨拶だ」

聞いている一年生よりも、後ろのギャラリーからの拍手の方が早かった。ギャラリーの拍手に釣られて一年生も拍手をし出したという感じだったが、それでも一年生の顔には、早くも闘志がみなぎっているようにも見えた。

「さて、ここで一年生及び上級生に残念なニュースがある」

拍手の流れを僕が断ち切る。

「今年は部員が増員する見込みだったので、女子マネージャーの募集もしたんだが、あまりに希望者が多すぎて、全員を入部させたのでは、僕達がボールじゃなく、女の子の尻ばかり追いかけかねないとの監督の考えで、今年は結局マネージャー入部者はゼロだ」

上級生から、えぇーっという、怒気をはらんだ声が次々に漏れた。
イイジマが発表するのでは角が立つという考えらしく、今日の部活前に、僕だけに知らされた情報だった。
「あぁ……足かけ三年、ようやく手にしたマネさんとの下校チャンスが……」
ジュンイチは芝に膝をついてそう呟く。
「彼女に言ってやろ」
ユータは、しししし、と笑いながら言う。
「わぁぁ、やめてくれぇ！」
お決まりのリアクションを取るジュンイチ。
「おい、一年の前だ。おふざけは後にしろ」
「へえいへい」
ユータが手を振る。
でも、こうやってフランクな感じをアピールしておいた方が、新入生がプロであるユータを前に萎縮しないで済む。その計算も少し入っていたのかな。
ユータも少し変わった。昔はこうして、自分から人に歩み寄る感じではない、サッカーでも、ただパスを待つだけの存在だったのに、プロになって、随分私生活もプレーも大人になった。自分から他者に歩み寄る姿勢が強く出ている。
「あ、そうだ。ひとつだけ注文をさせてくれ」
僕は真面目な顔を作る。
「いいか！　赤点だけは取るな！　特に二学期だ！　去年の冬は部員が全員赤点を取って、僕が面倒を見たが、今年は僕も受験を控えていて、助けられそうにない。とにかくプラス一点でもいいから赤点だけは回避しろ！　男だらけの勉強会をやりたいか？」

演説の後、イイジマに「お前、人を引っ張るのは苦手だって言ってたけど、十分やってるじゃないか」と言われた。

その後イイジマは、一年生も含め、いきなり１０キロのマラソンを命じてきた。先輩の威厳を見せるためには、マラソンが一番いいんだとか。何か狙いがありそうだ。

一年生に、いきなり１０キロも走らせるのは可哀想だけど、僕はその３倍以上を初日に走らされたからな。

「サクライ。そのバンドを外せ」

イイジマに言われ、僕は日常生活で、最近常につけている、周りには『ドラゴンボールの真似』と呼ばれている、両手両足の重りを外す。

「ペースを上げろ」

そうイイジマに指示され、部員全員でスタートする。

僕はユータと並んで、ハイペースでグラウンドを回る。

しかし、今年の一年生はなかなか脱落しない。僕とユータのぶっちぎりは変わらないが、それでも一年生の半分以上が、他の上級生と互角に走っている。

それは、僕に関しての報道が、大いに影響していると思われる。

僕達が全国大会で準優勝した後、ド素人からたった二年で日本代表候補にまでになった僕の取材が殺到し、僕のサクセスストーリーは至るところで語られていた。

その中で有名なのが、入部初日にグラウンドを１００周したことで、最初のチャンスをつかんだという話である。今年の一年生は、この学校では走れればチャンスがもらえるということを学習して、高校受験後、必死に足腰を強化してきたのだと思われた。

しかし、それでも僕が集団を引っ張っているので、次第に一年生はペースをがくりと落とす。

驚いたことに、ユータも次第に僕のペースについて来れなくなっていた。

全国大会で、僕は最後まで足のスタミナが持たずに、最後の最後の力が及ばなかった。なので大会後は徹底的にスタミナと足腰を強化した。その成果が出ているのだろう。

その後はへばった一年生に、高校レベルのサッカーを勉強しろと見学させ、僕達は紅白戦を行うと、グラウンド外は大騒ぎとなった。

イイジマの作戦が読めた。基礎体力の差を実践で実感させて、いきなり僕やユータを目指すんじゃない、と釘を刺すために、こんな事を命じたのだ。今年の部員は、僕達に憧れて入部した奴等ばかりだ。そんな連中に、早く目を覚まさせるために、僕達と最初に戦わせたんだ。

Ｄｅａｄｌｙ－ｓｋｉｌｌ

急にサッカーが上手くなった、と言われる。
でも、実際は違う。身体能力にはまるで変わりはない。
僕は今まで、サッカーをやっていても、心ここにあらずで、ただ身体能力とセンスに任せてやっていただけだった。
だけど……
心が呪縛から解放されて、枷が外れて、まるで翼が生えたように体が軽くなった。
そして何より――
怒りや憎しみにとらわれていた心が完全に空になると、今までは一点しか見えなかったのに、ピッチ全体が見渡せるようになった。
心と体が完全にシンクロして、思ったとおりに体を動かせる。そして、相手の動きも、体の癖、視線の向きまでもよく見え始めると、動きの先読みもかなり出来るようになった。
常にすごい速さで頭が動いてくれて、選手全ての動きがわかる。
だから、相手をかわすことも、パスを出すことも、動きに反応することも、すごい早さで思ったとおりに出来る。
まるで、天才軍師になったかのように、状況がよく見えるんだ。
そんな僕には、必殺技？　が３つある。
ドラゴンダイブと、ドラゴンスター、そして、春風ターン。
「……」
まあ、勝手に名前をつけられたんだけどね。
ドラゴンダイブとは、僕のフリーキックのこと。
僕は全国大会で８ゴールをあげたけど、そのうち５得点がフリーキックのゴールだった。「サクライにゴール３０メートル以内の距離でフリーキックをあげたら、もう１点取られたも同じ」と、相手チームを恐怖に陥れた。集中力が高まっていたから、イメージ通りに蹴れて、面白いようにゴールが決まった。

僕に『臥龍』というあだ名がつき始めた頃、ユータが僕のフリーキックをそう命名した。ユータは『臥龍』という言葉の意味も知らなかったんだけど。

僕のフリーキックは、カーブや無回転など、多くの球種があるが、どれも一度宙を舞ってから、鋭く落ちてくる球が多かった。それがまるで体の長い龍が悠然と空を舞ってから急降下して、ゴールにダイブするような軌道だから、『ドラゴンダイブ』なんだそうだ。

ドラゴンスターは、僕のパスのこと。

心に余裕があることで、グラウンド全体がよく見えていた僕は、敵陣の隙がよく見えた。それをパス一本で切り裂き、ユータへのアシストを量産した。

そのパスが、まるで空を流れる流れ星のようだから、『ドラゴンスター』とユータが名づけた。『流星』って言葉があるけど『龍星』とかけたダジャレだ。

そして、春風は、僕のドリブルのこと。

体が軽くなり、集中力も高まった僕は、思ったとおりにボールが足について、軽くなった体は、一瞬で相手を抜き去るほどに早く動いた。

特に「ルーレット」と呼ばれる技術を多用して、相手を抜くことが多かった。

これはジュンイチが名づけたんだけど、あまりにさらりと相手をかわし、残るは風だけ——僕の名前がサクライだから、まるで桜の花を揺らす春風の如く、相手に一瞬のそよ風だけを残す華麗さから、『春風』だそうだ。そのうちでルーレットは、春風ターンと呼ばれる。

僕の蹴ったフリーキックが見事にゴールに突き刺さると、耳を劈くような歓声が上がった。

『キャー！　ドラゴンダイブだわ！』って声が聞こえた。

——定着してたのか、その名前。

そもそも、僕達埼玉高校が有名になるきっかけを作ったのも、僕

のフリーキックからであった。

全国大会初戦、僕達の相手は優勝候補だった、長崎県代表、三國高校の対抗馬として名前が挙がっていた、東京代表の帝徳学園だった。

押されっぱなしだったのだが、何とか0点に抑えていると、後半25分に僕のフリーキックで先制すると、残り15分であれよあれよと4点を奪ってしまった。

その後の監督インタビューで、この試合運びが僕の事前の作戦だったことをイイジマが暴露。

埼玉高校は、僕達3人以外の実力は、県内の中堅程度の実力しかない。

まともに行っても勝ち目はないから、僕は相手の焦りや怒りを誘うということを考え、こちらがわざと劣勢に見せるようにし、実はボールを上手く回して自軍はスタミナを温存し、わざと相手に追いかけさせてスタミナを削る作戦を提唱した。

相手を挑発し、そして試合中盤まで僕をボランチで起用し、ジュンイチと守備を徹底すれば、相手はまず点を取れないことはわかっていた。格上だから後半まで膠着状態が続けば焦りを増し、そしてディフェンダーもほとんど守備をしていなかった油断を誘ってのカウンターで簡単に一点を取れるという計算だった。

後半開始後、気付かれないように、僕はポジションをトップ下に変更。このフォーメーションは予選では一度もしていなかったから、相手も調査不足で対応できていなかった。攻めのスピードを変え、僕のドリブルを無理やりファールで止めさせ、フリーキックで1点を取った。

1点取ってしまえば追加点を奪うのは簡単だった。平常心、苛立ちに支配されたチームは優勝候補でももろくも崩れ、大差での勝利となった。

「優勝候補に勝つには、如何に油断をさせるかしか、道はないと思った」

このインタビューが話題となり、注目された二回戦で、今度は僕とユータの二人で、開始１４秒で先制点を取るという電光石火の攻撃を披露したのをはじめ、怒涛の攻撃で８‐０という、野球のスコア並みの点差で勝利。一試合５ゴールのユータと、２ゴール３アシストの僕、そして一試合で１６回も中盤でボールを奪った鉄壁のボランチ、ジュンイチは一気に注目度を増し、決勝に行く頃には既にユータの大会得点王新記録は更新されており、決勝までの５試合で得点２５を誇る超ダークホースとして大会の目玉となっていた。

プレイが再開され、センターサークルでボールを受ける。ドリブルで切り込んだ僕はディフェンスを抜き去る。

一人、二人。

ピッチの外の金網越しに、歓声が聞こえる。

「ははっ、来やがれ、ケースケェ！」

僕の視線の先に、ジュンイチがいる。現在高校ナンバーワンボランチ。こいつとのマッチアップが、今のチームで一番テンションが上がる。知らないうちに顔がにやけてしまう。今の僕には、周りの耳を劈くような女の子の甲高い歓声も聞こえない。

腰を落とすジュンイチは、目で僕の動きを捉えようとしている。その大きなどんぐり眼が僕を見据える。

頭がすごい早さでジュンイチの隙を見つけ出す。ジュンイチと僕のフィジカルデータが何パターンも同時にシミュレートされる。

春風ターンを警戒しているな。それを素振りに出さないと、必死に隠しているが。

ワクワクしている。ジュンイチとやれるこのワクワクが、僕の集中力を最大限に高める。

甘いな、お前に使うのは、ただのルーレットとは違うんだよ。

走りながら、体を回転させ、ボールを優しく踏み込んだ軸足からもう片方の足で持ち変える。そしてジュンイチの体を背中で背負う。

ジュンイチはブロックをかわそうと、大きなストライドで僕の正面へ回りこもうとする。

僕は、ふっと笑い、かかとでボールを、とん、と蹴った。
ジュンイチの、あっ、という声を背中で聞きながら、僕はジュンイチの横をするりと通り過ぎていた。ボールはジュンイチの股間を潜り抜けて、ペナルティエリアに向かって、ジュンイチをあざ笑うようにコロコロと転がっている。
「はははははは！」
にやけが止まらない。僕はトップスピードに乗りながら、そう叫んでいた。
僕はボールに追いつくと、ディフェンダーの間の空気を切り裂くようなミドルシュートを放つ。キーパーはほとんど反応できないまま、ボールはゴールネットに突き刺さった。
「見たかジュンイチ！　これが『春風ターン・改』だ！」
僕は振り向きざま、ジュンイチに向かって指をさす仕草をして、アホな言葉を吐いていた。
ジュンイチは、満面の笑みだ。ちっきしょう、と声を上げている。
それを見て、僕も大笑いした。
マスコミやネットでは、僕がサッカーをやる姿が、とても楽しそうに映るのだそうだ。サッカーに興味のない人が、僕達の姿を見てサッカーに興味を持った子供や御年寄りも多いのだそうで、それが僕の、そして僕達の動向を見守る人が増える結果となっている。
昔なら、こんな『必殺技』とか、ガキっぽくて、やる余裕もなく、興味もなかっただろう。
だけど今は、こうして子供みたいに、サッカーを楽しめる瞬間が、とても愛しい。
代表とか、国のメンツとかよりも、僕はこうやってサッカーを楽しんでいる方が、何か大切なものを得ていると思えるんだ。
ただ、それは世間にはわかってもらえないんだけどね。

Tomorrow

部活の時間はあっという間に過ぎた。
仲間の存在に気付けて、今はサッカーがとても楽しい。
「全く、下級生を差し置いて、お前が一番サッカーを楽しんでるじゃねえか」
僕に抜かれたジュンイチは、練習の合間に、僕にそう言った。
だけど、練習後は地獄だった。
ギャラリーのサイン攻めや、マスコミのインタビュー、テレビ出演や雑誌対談のオファーなど、人ごみに押しつぶされそうになる。
「ごめん、僕、サインなんて書けないから、絵でもいいかな？」
これでも数々の入選経験があるし、絵なら得意だった。３０秒くらいで色紙を出してくれた人の似顔絵をざっと書く。
こうして僕に似顔絵を描いて欲しい、という人が殺到して、それをねだる人も殺到しているのだけど……
これだと時間がかかりすぎて、沢山は書けないから、途中で逃げてしまう。結果的に僕の似顔絵はレアものになってしまい、それを欲しがるファンが増えていくと言う悪循環になっていた。
校門の中まで逃げてしまえば、ガードマンが後の騒ぎをガードしてくれるので、僕達は足早に校門内に逃げ出す。
「きっつい……」
何しろ昨日までデンマークにいて、久しくこんな人込みに囲まれていなかったので、少し酔った。
昔ほど他人に拒絶反応は出ないけれど、やっぱりまだ沢山の人は苦手だ。
「全く、ケースケ、ガキみたいにはしゃぎすぎなんだよ」
「はは、どうやらデンマークで勉強漬けだった分、体を動かすのが楽しかったようだな」
ユータにそう言われた。

部室で服を着替えると、部室前に、マイとシオリがいた。
「――今更だけどさ」
僕が口を開く。
「僕とジュンイチに、待ち人がいて、ユータが今フリーなんて、変な感じだな」
「――ホントに今更だな」
ユータは呆れ顔でいう。
ユータは今、サッカーが恋人らしいけれど。
それよりも、全国大会以来、ユータは昔の彼女を思い出しているみたいだった。
その女は、ユータがこの学校に来るきっかけになった人らしいけど。
だから、しばらくユータは恋をしないかもしれない。そんな気がした。
その時、けたたましい爆音が聞こえた。
「な、何？」
マイが左右を見回した。
すると、部室の右方向になだらかに広がる土手を、数台のバイクが走ってくる。
「エイジ？」
土手の上でバイクは全て止まり、先頭にいた男がヘルメットを脱ぐ。
男は１９０センチはありそうな大男で、プロレスラーのように筋肉質だった。
僕は土手の上から僕が見える位置に移動し、声をかける。
「エイジ」
「ケースケ！」
男は土手を駆け下りてくる。取り巻きは、土手の上でそれを待っている。どうやら僕に用があるようだった。
「ケースケ！　俺、やったんだよ！　高認に受かったんだよ！」

「本当か？　やったな！　やったじゃないか！」
僕は驚く。男は僕の手を取って、豪快に笑っている。
この男は、ミツハシ・エイジ。
僕が失意のどん底だった、去年のクリスマスに、些細なことで、両者血まみれになるまで大乱闘した男だ。
元々世の中のならず者を取りまとめ、一定の秩序を保つ組織を取りまとめていた。その連中は、生まれや環境により、自分達の存在を呪い、僕と同じ、世の中に反骨することで、自己の存在を安定させていたような奴等だった。
そんなならず者だったが、僕に負けたことで、すっかり改心し、「俺みたいなクズでも、こうして笑えるんだ」ということに気付いたことで、自分達の、人並みの幸せを探すために、新たな一歩を踏み出した男だ。
こいつは、今まで憎んでいた世の中に歩み寄るために、人のためになるところからはじめた。
同じように、世の中を避けて生きてきた仲間を率いて、川原のゴミ拾いとか、慈善活動をはじめた。そうしているうちに、人から「ありがとう」と言われたり、物を差し入れてもらったりすることで、初めて世の中の暖かさを知れた。
しまいには先月、自分達の敵だった警察から、その集団全体が、行為を認められ、表彰までされることになった。今まで誰かに誉められたことがなかった連中は、それでかなり自信をつけたらしい。
そうして活動するうちに、次第に、更に高い志を持つようになる者が出始めた。
その一人であるエイジが、こうして今日、高認に合格したと報告に来た。高認とは、高卒認定試験――一昔前でいう、大検のことだ。
エイジは、今まで学がなかったために、世の中の事を知らなかったため、ずっとならず者をしていた事を後悔するまでになった。大学に行って、まともに人と交流して、もっと勉強して、もっと色々な事を学ばなければいけない、という考えるまでに至った。

そして、その新たな人生の第一歩を踏み出したというわけだ。
「先月、警察署長から表彰を受けたらしいな。おめでとう」
「いやいや、お前も国際ナントカで金メダルだろ？　世界一じゃん」
お互いの健闘を讃え合った。
４人が僕達のところに歩み寄ってくる。僕はエイジの手を離す。
「あ……会うのは初めてだよな」
僕が言った。
「大会で、でかい声で旗を振ってた人だろ？」
ユータが言った。
エイジは全国大会、僕達の応援に毎試合駆けつけた。自分達の団旗を振って、いつも大声で応援していた。
特に決勝戦、大雨の中、２点負けている僕達――ハーフタイムを終え、ピッチに戻ってくる僕達に、大声でエールを送っていた。学校中の応援団がそれをあっけに取られてみていた。ヤンキーのような連中が、僕達優等生学校を応援しているのだから。
エイジはマイ以外は皆知っている。
「ケースケ。他にもうちから４人受かった奴がいるんだ。これからいつもの場所で、祝いの宴だ。よかったら顔を出してくれよ。お前に勉強教わった奴もいるし、皆喜ぶから」
エイジ達は、市外にある国道沿いの廃倉庫を、ホームとしている。僕も大会後、怪我が治ってからは、よくそこに遊びに行っていた。
エイジの主導で、そこにいる、ただ社会的弱者が肩を寄せ合って、何とか生きているだけのホームが、とても活気付いていて、それが僕も励みになったからだ。
最近はホームの仲間達と、バイトをはじめて、未来のためにお金を稼ぐ奴や、エイジのように、勉強を教え合ったり、世の中を知るために、図書館で借りた本を熱心に読む奴もいた。それでも備え付けのダーツやビリヤードをやって遊んだりしながら、ゆっくりとでも、前に進もうという意志が、廃倉庫のホームに溢れていたからだ。
「――ああ、ギターでも弾いてやるよ」

「本当か？　ありがてぇ。お前に久々に会いたいって、皆言ってたからな」
エイジはいかつい顔を破顔させる。
「――へぇぇ、宴でギターか。皆考えることは変わらないな」
「やっぱ宴には、ケースケの音楽がなきゃな」
ユータとジュンイチが言った。
僕は４人の方を振り向く。
「お前らも、よかったら来ないか？」
そう言って、横にいるエイジに、いいか？　と訊く。
エイジは、酒は出せないが、それでいいなら構わないぜ、と言った。
「へぇぇ、楽しそうだな。ケースケの帰国祝いも兼ねて、騒ぎたい気分なんだ」
「俺も行こう。マイ、一緒に行かないか？」
「ジュンくんが行くなら……」
３人はすぐに承知した。
「シオリさん」
僕はシオリに声をかける。
「……」
シオリは、真っ直ぐ僕を見る。
マイがさっき言っていたけれど……
彼女だって、こうして窮屈な会い方しか出来ないことに、寂しさはあるのだろう。
だけど、今の僕は、こんなザマだ。
男友達とこうして会うくせに、彼女をないがしろにしてるみたいに思われてるのかな。
「ごめん。でも、君と一緒にいるためには、誰かと一緒の方がいいから」
「――うん」

Ｔｏｍｏｒｒｏｗ（後書き）

今更なんですが、この作品の独特な読み方をひとつ…

「あの娘」と書いてあるのは、この場合、「あのこ」と読み、「あの女」と書いてあるのは、「あのひと」と読みます。まあ、後者は場合によっては、そのまま「あのおんな」と読むこともあると思いますが、そのあたりは読者の方々の裁量に任せるということで（適当）

以上、一応の説明でした。

Gift

バイクのエイジと別れ、自転車でも行ける距離だから、僕はシオリを、ジュンイチはマイを自転車の後ろに乗せて、廃倉庫へ向かった。僕が先頭を走り、道案内を兼ねる。

学校からは、土手を迂回して、かなり遠回りして帰る。正門や裏門は、しばらく人がごった返していて、そうしないと自転車が進まない。

――廃倉庫に着くと、４人は、僕が初めてここへ来た時と同じ、見たこともない世界に、当たりを見回していた。僕が初めて来た時は、真冬だったから、真ん中のドラム缶で、キャンプファイヤーみたいな炎が暖房代わりに燃えていたけれど、今は燃えていない。

「あ、ケースケ！」「ケースケ！」「ケースケだ！」

グループの小さな子供達が、僕のところへ駆け寄ってくる。このグループは、最年長は二十歳に近いが、最年少は、１０歳程度の子供から、それ以下までいる。皆、私生児だったり、育児施設に入れられていて、孤独と戦っていた子供達だ。

「元気だった？」

そのうちの一人に聞かれる。

「――ああ、お前達も、賞をもらったり、頑張ってるみたいだな」

「へへっ」

子供達は照れるように笑う。

「今、食べ物を買い出しているところなんだ。椅子があるから、座って待ってて」

子供達に手を引かれ、僕達は椅子を用意され、会場のセッティングを待った。

「人気があるのね、子供達に」

横でシオリが言った。さっきよりも、笑顔が戻っていた。

――宴が始まった。

僕を仲間と迎え入れた時のように、バーベキューセットを持ち込んで、肉や野菜を焼いたり、グループの年上の女の子達が包んだ餃子を焼いたり、そんな食べ物をつつきながら、お祝いの芸を一人ひとり披露したりして、場は大いに盛り上がった。。

ユータ達も、ここの皆とすぐに打ち解けて、すぐに砕けた表情をするようになった。シオリなんか、僕の恋人と聞いて、大いに皆の興味を引いたようで、絶えず人に囲まれていた。

相変わらず、ここの連中は仲がいい。

バイトをはじめたり、勉強をはじめたりで、毎日全員揃うことは、前ほどはなくなったのに、顔を合わせれば、こうやって笑い合えるんだ。

そして何より、ここの連中は皆、自分の価値を見出し始めていて、それが彼等の生きる力となっている。そんなエネルギーが、今、この廃倉庫には溢れている、

そんな事を思っているうちに、僕が出し物をする番になった。ステージもないけれど、僕は前に出る。。

「いよっ！　ケースケ！　ケースケのギターが始まるぜ！」

今日の主賓席にいるエイジの拍手で、皆が僕に注目する。倉庫内に置いてあった、エレキギターを僕は背負っていた。

僕は今日、デンマーク帰りで記者会見を行ったので、スーツ姿のギターという、アンバランスな格好をしているんだけど。

「あの歌にしてくれよ」

エイジがリクエストをした。

「ああ」

そうして僕はギターをかき鳴らし、倉庫内の人間の歓声の中で、大声で歌った。

生まれながらの才能の事を　神様からのギフトと人は呼ぶらしいけれど

僕のはちっちゃい箱だな
リボンもなくて　色だって地味で　みすぼらしいその箱が
何か恥ずかしく　後ろ手に隠していた
最初に空を飛んだ鳥は　翼を広げた格好で
どのくらい助走をつけて　地面を蹴ったんだろう

自問自答　きっとそこには答えがないこと
意外と前に気付いてたかも　悩んでる自分に酔っていた
明日にかかる橋は脆くも崩れそうで
今行かなくちゃ　駆け抜けなくちゃ
心さえ軽やかに行けたら――

明日を生きるために、僕達は皆で歌った。
この歌を、昔ここで歌った。世間から疎まれていたこいつ等にとって、始まりの一歩になると思って。
それ以来、彼等がよく、この歌を歌ってくれとせがむようになった曲だ。
突然演奏に、別の音が乱入する。
見ると、横でユータが、倉庫にあったアコースティックギターで合いの手を入れていた。
また別方向で、音がする。
ジュンイチが、エレキベースを持ち出していた。
いつの間にか演奏は人になっていた。
僕と、新入り二人のセッションに、アンコールのコールが沸いた。
今度は僕がアコギ、ユータがエレキに持ち替えて、別の曲を歌った。
シオリの姿が見えた。
弾けるような笑顔で、僕達に拍手を送っていた。
演奏を終え、僕達がトリだったので、皆は各々、立食のフリータイムに突入した。

「あはは、初めて俺達、こんなところで演奏したなぁ」
「あぁ、昔、いつかライブハウスに行こうとか、言ってたこともあったもんな」
僕が授業をサボって、音楽室でギターを弾き始めた頃。
最初の赤店対策勉強会で、ユータの家に行って……
ユータも、ギターを弾けると言って、自分の持っていたエレキを弾いてくれた。
それを聞いて、ジュンイチが言った。
「俺がベース弾けるようになったら、バンド組めるかな？」
それは冗談だと思っていたが、二人とも、片手間に練習していたんだ。
「ケースケ、ありがとう。最高のお祝いだった」
エイジは演奏を終えた僕と握手を交わす。
「あんたらも、どうもありがとうな」
エイジは後ろのユータ、ジュンイチにも会釈した。二人は笑顔を返す。
「――エイジ、ちょっと抜けるけど、いいかな？」
僕はエイジに断りを入れた。
「どうした？　もう腹いっぱいか？」
「いや……」
僕はかぶりを振る。
「ちょっと、急いでやっておきたいことがあるんだ」

僕は倉庫の中で、シオリを探した。
シオリは、マイと一緒に、まだ小学生の子供達と、同世代の女の子に囲まれていた。
その表情は、少し当惑しているようにも、照れているようにも見える。
「あ、ケースケくん」
女の子のひとりが僕に手を振った。

「ちょっと、彼女と二人きりにさせてほしいんだ。いいかな」
僕は奥にいるシオリに目配せする。シオリは怪訝な表情のまま、立ち上がる。
「ケースケくん、シオリさんって、すっごいいい人だね！」
小学生くらいの女の子が言った。
「優しくて、頭がよくて、色々私達に教えてくれたの」
そういう女の子の頭を撫でる。
「それはよかったな」
「さっきまで、ケースケのどこが好きなの？　とか、皆で聞いてたの」
「……」
なるほど。彼女が当惑するわけだ。
とは言っても、僕もそうやって皆にからかわれるのは、今は御免蒙りたい。
シオリへの助け舟半分、僕が早く離脱したいという思い半分で、僕はシオリの手を取る。
「聞いてほしいことがあるんだ。ちょっと、来てくれ」
そう言って、彼女と倉庫の外に出た。
がやがやした倉庫の喧騒が、重い引き戸を閉めると、山の中の夜の静寂に包まれる。
「こういう雰囲気、嫌いだったかな？」
僕は首を傾げ、彼女の目を覗き込む。
「ううん、何かみんな仲良くて、いいなって思う」
そう言って、笑う。
「それに――子供は好きなの。私、小さい頃から妹や弟の面倒を見ていたし」
「そうか」
僕は空を見上げる。ここに来た頃は夕焼けが空の向こうに沈み始めていたが、もう2時間は経っているのか、空は闇に包まれていた。
三日月が、西の空に浮かんでいる。

「5分くらいでこの山の頂上だから、二人で話さないか？」
僕は彼女に、手を差し伸べる。
「うん」
そう言って、差し伸べる僕の手を取った。お互い、やっと二人きりになれた、と、内心心で歓喜していたと思う。ここなら雑誌などの記者がいればすぐにわかる。気配がないから、今は大丈夫だ。
頂上に着いて、僕は草地に腰を下ろす。僕はタオルを横に敷いて、彼女を隣に座らせた。
座ると、木々の間がぽっかりと空いて、目の前が空を映すスクリーンになって、三日月がそのスクリーンに入っている。
「……」
二人で月を見上げる。
こうして二人きりになれるのも、随分と久しぶりだ、
「ケースケくん、帰国早々、疲れたでしょ？」
こんな時でも、彼女は自分の感情を吐き出したりせず、僕の体を案じるんだ。
「いや、大丈夫だよ」
僕は横の彼女に、笑顔を見せる。
「……」
沈黙。
いつも久し振りに会うとこうだ。お互い、口数が多い方でもないし、どうしたって言葉を捜すのに間ができてしまう。
「いつか、君をここに連れてこようと思っていたんだ」
月を見ながら、僕は口を開く。
そして僕は、三日月を見上げながら、昔話をした。
「ここに初めて来た時――僕はエイジと大乱闘した後、病院に運ばれた。そんな時に、君は言った。どれだけみんなが心配したか、わからないの、と。その言葉を聞いてから、僕はずっと、君やユータ達に報いる方法を考えていた。そんな時に、エイジに誘われて、僕は初めてここに来たんだ。そして、あの時もこうして月を見上げな

がら、自分の望の振り方を考えていた」
「……」
「僕も、ここの連中の結束の強さが羨ましく見えてな、学校を辞めて、あの仲間に入りたいと、エイジに言ってみたことがあるんだ。だが、断られた」
「どうして？」
「ここは、居場所がない者、守るべき者がない奴同士が、身を寄せ合って暮らす場所だ。だけどお前には、まだ守るべきものがある、と言われたよ」
「……」
「僕はその言葉で、この先の身の振り方を決めたんだ。学校を辞めずに、一緒にいることで、君やユータやジュンイチに、今までの事を報いる道を探すと」
「……」
「そしてそれは、今も変わらない」
そう言ってから、僕は淡い月明かりに照らされた、シオリの顔を見る。
「確かに最近、僕の周りは何かと騒がしくなってしまった。君といられる時間も減ってしまった。テレビや雑誌なんかにも出るようになってしまったし、君は僕を、芸能人か何かみたいに、遠くに感じてしまうこともあるかもしれない。でも――僕は、多分君が思う程、そんなには変わってないよ。まだ、ここに初めて来た時から、今でも君やユータ達に報いる道をずっと探している――君に救ってもらった頃のままだよ」
そう言いながら、僕はぎこちなくなってもいいから、何とか彼女を安心させられるような笑顔を何とか作ってみようと務める。
今日の昼休み、マイに言われたように、シオリが僕を、遠くにいる人間のように思っているのだとしたら、そんな事を思う必要はないのだと、彼女を安心させなくてはいけない。そう、思ったからだ。
そんな話をするのは、この場所は相応しいと思えた。ここは、僕

が彼女と始めて向き合おうと決めた、初志を固めた場所だったからだ。

「まだちょっと、時間ある？」

僕は聞いた。

「もうひとつ、急いで君を連れて行かなきゃいけないところがあるんだ」

Ｇｉｆｔ（後書き）

作中でケースケが歌った曲は、ポルノグラフィティのギフトという曲です。作者の個人的に好きな曲です。特に歌詞が…

Cherry-Blossom

山を降り、僕はシオリを自転車の後ろに乗せ、自転車を走らせる。
「どこへ行くの？」
後ろで僕にしがみついたまま、シオリは僕に訊いた。
「行ってからのお楽しみだ」
あの廃倉庫のある小山も、町の郊外にあったけれど、自転車は、更に郊外へ向かう。人気がどんどん少なくなり、街灯だけが照らす道は、車も人も全然通っていない。
閑静な街を抜け、大きな神社を横切って……
僕は自転車を止めた。
「はい、到着」
「わぁ……」
シオリは息を呑む。
そこは、川原だった。
川べりは舗装されてなく、幅４、５メートルほどの川の両端には、川に沿うように桜並木が続いている。桜は満開で、木に沿ってくくりつけられた、色とりどりの提灯が、夜桜と川を照らして、川の水面にも、桃色の桜が反射する。そして川べりには、春の菜の花が一面に黄色く咲き誇り、川べりを彩っている。
桜の淡い桃色と、菜の花の鮮やかな黄色、そして何色にもなる提灯の色とりどりの光が、全て川面に反射して、あたりは昼のように明るく、また、幻想的な美しさに溢れていた。
「すごい……」
シオリは呆然としながら、そこに立ち尽くす。
それは、大袈裟に言えば、世界の春の名画のいいところを全て集めたような、そんな春の美しさに溢れた景色だった。
僕は呆然とするシオリの頭に、ぽんと手を乗せる。シオリは頭に乗る手を見上げる。

「約束しただろ？」
僕は軽く頭を撫でる。
「春になれば、二人で桜を見に行くって」
「あ……」
シオリは思い出したようだ。
雪の降る日に、そう約束した。僕達は、そうした時間を重ね、共有しながら、少しでもお互いの事を、わかり合えたらいいね、と。
「しかし、咲いていてよかった――今日海外から帰ってきて、まだ日本で桜が咲いているか自信なかったんだけれど」
僕は苦笑いを浮かべる。それを見て、シオリは少し安心したように微笑む。
こんなに綺麗な夜桜なのに、川べりにはほとんど人がいない。ここは駅からも遠いし、車を近くに止められる場所もない。何よりこんな郊外の寂しい場所に、こんな桜があること自体が知られていない。だから人目を気にしないで、一緒にいるには都合のいい場所だった。
僕達は、空いている場所を探して、川べりの草の上に腰掛ける。
「何もないけれど、倉庫からくすねてきたんだ」
僕は自分の学校用の鞄から、紙コップ二つと、ソーダを取り出し、紙コップに注いで、シオリに手渡した。
色気もないけど、紙コップに桜の花びらを浮かべて、乾杯した。
「はぁ」
僕はソーダを軽くあおると、息をつく。
「さすがに長丁場が終わって疲れたな――連日数字や数式とにらめっこしてたし」
こんなきれいな景色を見ながら、僕はようやく帰国して、自由のみになれた開放感にどっぷりと浸っていた。
「……」
まるで桃源郷のように、綺麗な景色だ。まるで景色に溶け込むように、彼女の華奢な体が、桜の桃色と、菜の花の黄色、草花の緑が、

提灯の光で川面に幾重にも反射され、彼女の姿も色とりどりに照らす。

僕は、そんな彼女のあでやかな姿に、しばらく目を奪われていたように思う。

ぼうっとしていて、目の前の彼女が、そんな僕を見つめている時がつくまでに、数秒かかった。

「あなたは……」

そして、シオリが口を開いた。

「最近、言葉や表情が、本当に穏やかになったね。屋上でお弁当を食べていた時、サッカーをしている時、あの倉庫でギターを弾いて、歌っていた時、そして今も――」

「……」

「きっと――エンドウくん達はずっと前から、あなたは本当は、そんな人なんだって、見抜いていたんじゃないかな。あの二人が慕っていたのは、昔のあなたが心の奥底に封じ込めていた、今のあなただったんじゃないかって、最近、よく思うの」

「……」

沈黙。

僕は紙コップを脇に置いて、座ったまま後ろに手をついて、桜を見上げた。

「まだ17歳なのに、人生知ったような事を言うと思うかもしれないけれど」

これから言うことが、地に足がついていないものになるかもしれなかったので、僕は先にそう言って、保険をかけておく。

「君とこうして一緒にいられるようになって3ヶ月、僕は初めて幸せと言うものがどんなものなのか、何となく分かったような気がしたよ。そしてその気持ちを知ってから、僕は他にも色々なことが――まだ完全に分かるとは言えないかも知れないけれど、少しだけ感じ取ることは出来るようになったと思う。心の余裕も出来たし、色々な事を考えた。君のことや、他の回りにいる人のこと、自分のこ

と、将来のこと――」

僕は自分の左手の掌を体の前で開き、それを見つめる。

「ずっと昔から、自分は大抵のことはなんでも出来る力があると思っていた。でも、こうして君と一緒にいて、こんなささやかな時間を守ることが、なんて難しいことなんだと痛感した。君とのこんな暮らしも満足に守れやしない。それが僕の精一杯のところだったんだと。そして、誰もがそんなささやかな幸せを守るために、必死で戦っている人が沢山いるんだということも、思い知った」

「……」

「それを痛感して、思ったんだ。僕が今持っている力は、勝ち取ったり、誰かから奪い取ったり、そんな一部分にだけ特化した力だったんだということ。これから僕は、この力を、何かから奪うんじゃなく、守る力に変えなくちゃいけないんだ、と。そのために、もっと他人と接することや、自分が今まで見向きもしなかったことに目を向けて、それを通じて何かを学ぶことが必要だと思った。だから、大学に行こうと、はっきり決めたし、数学オリンピックなんてものに挑戦もして、触れたことのなかったものに挑戦してみたり、海外の風を感じてみたり、経験したことのないことにチャレンジしてみたんだ」

「うん……」

僕の隣に座るシオリは、視線を川面に移す。

「あなたは――さっき、自分の将来のことも考えたと言ったけれど、その決断は、自分の将来を見越してのことなの？」

しばらくして、シオリは僕の横顔を覗き込んだ。

「ああ」

僕は頭上の桜を見上げる。

「僕はこれから、この力を、人を守れる力に変えていくために、もっと色んな事を学んだり、沢山の人に会ったり、色んなものを見て回ったりしてみたい。そしてそれができるようになったら、どこまで出来るか、何ができるか今はわからないけれど――できれば多く

の人の幸せを守るために頑張っていきたいと思っている。君がそうして、僕を救ってくれたみたいに。同じ事を僕も誰かにしてあげたいと思う。そう強く思うようになった」

「……」

「そうすることが出来れば、今まで憎しみだけで磨き上げたこの力も、少しは救われる――それに、それができれば、今まで散々迷惑をかけた君や、ユータやジュンイチ達に報いることができると思うんだ」

そう、それがこの3ヶ月、自分や、色々なものと向き合って出した、僕なりの答えだった。

周りは今の僕の事を、「天才」とか「臥龍」とか騒ぎ立てているけれど、僕自身はこの3ヶ月、自分の未熟さ、そして、自分が今まで力にばかり固執して、見向きもしなかったことの大切さを、何度も思い知らされていた。

プロや日本代表のオファーを蹴り続けているのも、メディアにあまり露出をしないのも、そんな未熟な自分が、表舞台にに経って何かをするのは滑稽で、まだ時期尚早のように思えてならなかったからだ。まだ僕は、人前で何かを言うには、もっと色んな事を学ばなければならない。そんな思いが、常に僕の心の中にあったからだ。

未熟な僕は、とりあえず今までの人生で培った力はあるけれど、これは僕の怒りや憎しみが生み出してしまった、呪われたものだ。

僕自身は、そんな自分を変えてみたかった。

こんな呪われた力しか持っていない僕だけれど――

そんな僕が、誰かのために、この力を使えるのなら――

そんな考えが、最近、ひどく僕を駆り立てるようになった。

それが最近、今まで無意味な人生を送ってきた僕の、生まれて初めての、生きる意味になり始めていた。

生きる意味が見つかったことで、僕の力の理論に凝り固まった世界観は、一気に変貌したし、毎日が充実した、実のあるものへと変わっていった。

「そんな――もうそんなこと考えなくていいのに。私も、多分エンドウくん達も、あなたにそんな、報いるとか、そういうことは考えてないわ。そんなに無理しなくても……」
「いや、それだけじゃないんだ」
僕は視線を戻し、隣のシオリの目をしっかりと見る。
「もし僕が、そうして多くの人の幸せを守り、笑顔にすることができたのだとしたら、その時僕は、君に相応しい男になれているような、そんな気がするんだ」
「……」
「そして、その時には、僕は君を心から笑顔にさせることが出来ていると思うから――」

あまりにクサい台詞に最後は照れて、僕は笑ってしまう。
「……」
シオリもそんな僕の言うことに照れて、しばらくは気色ばむように視線を泳がせていた。
「はは……ご、ごめん、ちょっとクサかった、かな……」
沈黙に耐えかねて、僕は頭を掻きながら、苦笑いを浮かべる。
「う、ううん、大丈夫だけど……」
とは言っても、シオリも少し照れているようだ。もじもじと所在なさそうに、視線を動かしている。
「……」
沈黙。
「――ねえ、ケースケくん」
やがて、シオリが視線を目の前の川に向けながら、口を開いた。
「私は、あなたがそうやって誰かを救いたい、って思うことは、とてもいいことだと思うわ。きっとあなたの助けを求める人は、これから沢山いると思うし」
そうシオリは前置きする。
「でも、あなたは――必要以上に私やエンドウくん達に、恩を感じていない？」
「え？」
「私――この数ヶ月、あなたと一緒にいて、思ったの。あなたは無条件に人から優しくされると、いつも戸惑って、困ったような、照れたような表情をする――あなたは他人から優しくされることに慣れていないんじゃないかな、って」
「……」
「だから、私やエンドウくん達がしたことに、必要以上に恩を感じているんじゃないか、って」

「……」

その通りかもしれない、と、僕も思う。

彼女の言う通り、僕は他人から優しくしてもらったことがなかった。そんな僕に、彼女は初めて優しくしてくれた。僕を肯定してくれる言葉をくれた。

とても嬉しかった。それが暗闇で一人もがき続けていた僕を救ってくれた。

だからこそ、強く思う。シオリやユータ、ジュンイチ――僕を救ってくれたあいつらに、何とかして恩返しがしたい。僕の今の充実は、今までふてくされた態度を取っていた僕を見捨てないでくれた、皆のおかげなのだから。

僕と出会えてよかったと、あいつらが誇りに思えるような奴になりたい。僕があいつらを、笑顔にしてやりたい。そうして今まで僕が気付きもしなかったのに、ずっと優しくしてくれたあいつらに、その恩を何とかして返したかった。

彼女は僕のそんな心の奥を見抜いていた。

「――そうかも知れない」

僕はそれを認める。

「――悲しいね。あなたは随分明るくなったけれど、まだ過去と完全には決別できていないのね。過去の悲しみが、あなたをどこまでも私達に優しくする……まだ、自分は呪われた、醜い人間だと、自分を卑下してしまう感覚が残っているのかもしれない。他人が恐いのかもしれない。だから、嫌われないように、人にとことん尽くそうとする――」

「……」

彼女は、全て見抜いている。

彼女の言うことが、今の僕の真実だ。僕はまだ、他人との接し方がわからない。優しくされても、相手にどう報いればいいかもわからない。

理解できないから、僕は他人が恐い。

そうして他人に怯えながら、とことん優しくなってしまう臆病な男――それが今の僕だ。

「でも、僕がこれからの生き方を決めたのは、別に君やあいつらのためだけじゃないよ。考えてみたら、今僕がやりたい、やらなくちゃいけないと思えることが、それだったってだけ」

「……」

「まあ、僕がまだ、君やユータ達を含めて、人とどう接したらいいか、分かってないのは事実だけどね――僕はまだ、他人とどう接していいのか、その答えがまだ出ていないんだ。ずっとろくな感情も持ち合わせずに、空っぽのまま生きてきたから――」

「……」

「君やあいつらにも、これからどうやって接すればいいかも、まだよくわからない。ただ、君やユータ達に、少しでも何かしたいと、気持ちだけはあって――まだ、何をしてあげればいいか、よくわからないのだけれど――」

そう、僕とシオリは、付き合って3ヶ月も経つと言うのに、まだあまり関係が進展していない。

本末転倒な話だが、僕はシオリを好きだと思うまで、全く恋愛には興味もなかったし、付き合うということが具体的にどういうことなのか、何をすればいいのか、全くわからないまま、こうして一緒にいるのだった。

今でも、その答えは出ていない。何も出来ないからこそ、ただ、どこまでも優しくするしかないのかも知れない。

ただ、果てない優しさと尊重が、相手の心の奥に踏み込む事をためらわせるのも事実だ。多分関係が進展しないのは、僕がどうやってシオリの奥底に入り込んでいいかわからずに、ただわけもわからず優しく接しているだけだからだろう。

「……」

僕は考えを巡らせ、また黙ってしまう。

すると、彼女は僕の右手を両手で包み込むように握り締めて、体

ごと僕の方を向いた。
「あなたが、側にいてくれるだけで、私は嬉しいの」
「え……」
「だって私、あなたと1年間、ほとんど話せない時期もあったから。こうして話したり、一緒に桜を見たり――そうやってあなたが笑っているのを見ているだけで、十分だから」
「……」
「私も、エンドウくん達も、あなたのそんな楽しそうにしている姿を見ているだけで、十分幸せな気持ちになっているし、あなたの笑顔が大好きだよ。今でも十分、私も、エンドウくん達も、あなたと出会えてよかったと、思っているから……だから、あなたはもう、ひとりで何もかも背負い込まなくていいんだよ。もう、恩とか、借りとか、そう言うのじゃないんだよ。私達は」
「……」
僕の目から、ぽろぽろと、涙がこぼれた。
あまり人に優しくされたことがないから、些細なことに、過敏に反応してしまうだけなのかもしれない。
それでも、僕はとても嬉しかった。
こうして今は、こんな自分を肯定してくれる人がいる。こんなに優しい言葉をかけてくれる人がいる。
それがどんなに幸せなことなのか、今はしっかりと感じることが出来る。
「あ、また泣いた。私も泣き虫だけど、最近あなたも涙もろくなったね」
シオリはくすっと、いたずらっぽく僕にそう言った。
「べ、別に――き、君の泣き虫がうつっただけだよ、きっと」
僕は目の周りをごしごしとこすりながら、何かを誤魔化すように、ふてくされた声が出る。
「……」
そして、しばらく二人、黙り込んだ。お互いが今の気持ちを綺麗

にするのに、時間を要したからだ。
僕は沈黙に焦れたけれど、何となく、肩の荷が少し下りたような気持ちがして、座ったまま、体をうんと伸ばし、そのまま川べりの草の上に、どさりと体を倒した。
目の前には、眼前を覆う桃色の雲のような桜が広がる。
「昔は、桜が綺麗なんて、思えなかった。自分の苗字が、嫌いだったから」
そうだ。桜は、僕がサクライの性を背負う以上、あの家族との消せない絆を思い知らされるようで、それを突きつけられるようで、大嫌いな花だった。
花自体を、愛でる心の余裕もなかった。
「でも――今なら、こんなに綺麗に咲き誇る花の美しさを、ちゃんと感じることができるよ」
僕は寝転びながら、眼前を覆う桃色の雲のような桜の花を見ていた。
「それもこれも、全部君が与えてくれたものだ。僕は、言葉では言い表せない蔵に、君に感謝している」
「……」
「でも、だから僕は、一人、焦っていたのかな……一人で、何かをしたいと息まきすぎていたのかな」
ため息をひとつ。
「ケースケくん」
そうしてシオリの言葉を噛み締めている矢先に、シオリが僕を呼んだ。
「今のあなたに、私の好きな花の、花言葉を送るわ」
「……」
シオリは、少し照れ臭そうにもじもじして、やがて少し息を吸い、目を閉じて、まるで詩の一説を読むように、ゆっくりとした口調で、それを言った。
「私は――あなたの悲しみ、苦しみに寄り添う。いつまでも……」

「……」

その言葉が、何よりも心強く、何よりも僕の今の迷いを消してくれた。

きっと、僕もその言葉と同じ事をしたいのだろう。

彼女の事を、もう二度と泣かせない。彼女の事を、どんな奴にも傷つけさせたりしない。彼女が泣きそうになったら、誰よりも早く彼女の元に駆けつけて、そばにいてやりたい。

それだけでいい。

きっと——お互いが、そんな思いを抱いていれば、僕達はきっと大丈夫。

その言葉は、僕にどんな言葉よりも確かに、それを信じさせてくれた。

「ねぇ、その、君の好きな花の名前を、教えてよ」

僕はすぐ、それを訊いていた。きっと、彼女のその言葉を、いつまでも忘れないために、それを訊こうと思ったのだろう。

彼女は、自分の照れを押さえ込むのに数秒要してから、答えた。

「り、竜胆……」

「リンドウ……」

「うん、あ、秋に咲く花なの。最近はあまり咲かない花なんだけど……」

「……」

秋——

その頃には、僕は彼女を、もう少しまともに愛しているだろうか。

そうであればいい。それまで、一緒にいたい。

「雪も見た。桜も見れた。じゃあ次は、秋になったら、二人で、竜胆を見に行こうか」

そう口に出していた。

そう、僕達は、きっとこの先、上手くやれると思う。

僕がまだ、人間としての心を取り戻せるまで——誰かを救える力を身につけるまで、まだまだ時間はかかるだろうけど。

今の僕は、ひとりぼっちじゃない。
何もかも、一人で抱えなくてもいい。
それだけで、僕はとても心強い。
今はまだ、シオリとの関係も、ままごとみたいな関係だけど。
乾いて、ひび割れたような僕の心は、少しずつ再生しているのを、
確かに感じている。
やっと僕は、前に進めるようになったんだ。
背中を押してくれる、大切な人のおかげで。

Walk

僕は今、とても幸せな毎日を送れている。
大学に行くまでの通過点だった学校も、行けば大切な人に会えるし、ものすごく好きな女もいて、その女も、僕を好きでいてくれる。
これ以上の幸せがあるだろうかってくらい、僕は今、満ち足りている。
だけど、僕には一つ、悩みがある。
相対的に考えて、この悩みが世の中で、1ナノほどの問題として認知してもらえるか、僕にはわからない。
だけど、高校生の僕にとっては、それなりに大問題だった。

ドサッ。
「……」
音と衝撃で、僕は目を覚ます。
「――いて」
目を開けると、くすんだ色の天井が見えた。
視線のすぐ横に、ソファーがあって、そこで自分は、ソファーから落ちたのだと気がついた。
「……」
頭に手をやる。その時の袖の感じで、自分がワイシャツを着ているのがわかった。
首がちょっと苦しい。ネクタイを締めているんだ。左手で、ネクタイを緩める。
上半身だけ起こす。
寝ぼけていた頭がしっかりしてきて、耳がやっといびきを感じ出す。
横を見ると、大男がベッドで豪快にいびきをかいて、眠っている。

「……」

――そうだ。あの後、僕はシオリと倉庫に戻って、またバカ騒ぎして、シオリや、ユータ達を駅まで送った後、エイジの住んでいるアパートに行って、ゲームやっているうちに寝ちゃったんだ。

ちょっと酒も飲んだんだっけ。元々弱いけど、まさかカルアミルクで酔うなんて……

エイジは僕より2つ年上の、今年20歳。今はアルバイトをして、一人暮らしもはじめている。部屋は汚いけれど、相当試験勉強をしたんだろう。参考書とかが雑然と部屋にばら撒かれている。

「……」

部屋の時計を見ると、5時半を少し過ぎた頃。

――ヤバイ。早く行かないと……

携帯電話を取り出して、メールを入れてから、荷物をまとめる。

――しかし、一泊寝床を用意してもらって、黙って出て行くのは忍びない。

「――朝飯でも作っておこう」

冷蔵庫も、いかにも男の一人暮らしといった感じで、ろくなものが買い置かれてなかったが、卵と牛乳とハム、乾きかけの食パンがあったので、ハムエッグとフレンチトーストを作ることにした。

リビングに作り置いて、置き手紙を残しておく。

「……」

――僕は一体、どこの若奥様なんだ。

男のくせに……

アパートを出て、自転車を飛ばす。

ワイシャツがしわくちゃだ。着替えたいけれど、その前に、行かなくちゃいけないところが……

目的地の家に辿り着き、僕は自転車を止める。

駐車場を隔てた先に、可愛いログハウスがあって……家の門の前で、パーカーを着た、学校ではあまり見ないジーンズ姿のマツオカ・シオリと、彼女の手の持つリードの先に、犬のリュートが待ってい

た。
リュートは僕の姿を確認すると、シオリが手を離した瞬間はしゃぐように擦り寄ってきた。僕はしゃがみこんで、リュートの頭を撫でる。
「こら、ちょっと落ち着け」
そう言って、鼻を摺り寄せてくるリュートを制すると、シオリの方を見た。
シオリは、僕のしわだらけのワイシャツ姿を、怒ったような顔で言った。
「朝帰り？」
「……」
――ヤバイ……怒ってる？
やっぱ、女の子がいなくても、男は彼女を帰して、その後も遊んでちゃダメなのかな。
「別に女の子といたわけじゃないよ」
僕はそう言った。
「いや、そういう心配はしていないんだけど……」
「え？」
僕はその言葉に、声を上げる。
それを見て、シオリはくすくす笑った。その笑顔を見て、自分がいかに的外れで、独りよがりの考えを持っていたのかを理解する。
そんな、頭の悪い会話を冗談半分にして、一日が始まった。
――朝6時に、リュートの散歩をするというのは、全国大会が終わってしばらくしてからできた、僕達二人の日課だ。
そして、僕は数学オリンピックでデンマークに行っている間、リュートをシオリの家に預かってもらっていたのだ。
飼い主として、朝帰りしていても、ちゃんと取りに戻らないとね。
僕は持っている鞄から、野球帽を取り出して、目深にかぶる。ワイシャツに野球帽という珍妙な格好だけど、顔を少し隠さないと、早朝でも目立ち過ぎてしまう。変装道具として常備しているという

わけだ。
　散歩をしながら、シオリと話をする。
「ありがとう。でも、迷惑じゃなかったかな？」
「ううん、うち、弟も妹も、犬を飼いたいって言っていたから、リュートくんの散歩に行きたがって行きたがって……むしろそっちの方が大変だったわ。リュートくんはいい子だから、全然手がかからなくてね――お父さん達も、いつでも預かるって言ってくれてたわ」
「――そうか、よかった。本当に助かったよ」
　――まさか自分がこんな海外とか行っちゃうようになるとは思わなかったからな。リュートが賢くて、手がかからない分、預かる人が嫌な顔をしないのは、今後も助かる。
「――でも、いいのかな。僕、君の家族に、お礼を言ってないし」
　そう、リュートが世話になっているのに、僕はシオリの両親にお礼を言っていない。
「私の親に、会いたいの？」
「……」
　年頃の娘の親に会いたがる高校生の男なんて、そうはいないだろう。
　娘をキズものにしているかもしれない男なわけだ。まあ、僕達はキズどころか、まだキスだってしてないんだけど……そう弁解しても、大体が無意味なんだろう。こう言う場合の両親とは、妄想が被害妄想に変わっている手合いもいる。つまり真実なんて無意味。
　彼女だって、東大に十分合格できる才媛の上に、親の贔屓目を抜いても、美少女であることは、両親も認識しているだろう。男に対しては、さぞかし心配が絶えないだろう。
　おまけに僕は、彼女とおおっぴらに交際しているとは言えず、こうして早朝にこそこそ会っているという体たらくの上、彼女を置いて長いこと遠くにいたというザマだ。好きであれば堂々としていろ、という意見ももっともで、本当に彼女が好きなのか、疑われても仕方がない。

むしろ会ったら謝罪モノである。いつか僕は、シオリの親に殴られても仕方ないという心の準備さえ、固まりかけているくらいだ。

会うなら、もっと頼りがいのある男になって、会いたいと思ってるんだけど。

「確かに、ペットホテルとかに預けるつもりだったから、すごく助かったし、飼い主として、お礼は言うのが礼儀だと思うけれど……恐いなぁ」

「でも、うちの家族は、新聞とかテレビとかで、みんなあなたのこと知っているよ」

「……」

「妹なんか、この人が私の彼だとか、信じないくらいなの」

「そうなの？」

「そりゃそうよ。あなた、いまや、日本で一番人気なんだから。そんなのが、自分の姉と一緒にいるなんて……」

「……」

「むしろ私の家は、あなたのこと、家に連れて来て！　って言うくらい。私も、妹をぎゃふんと言わせてあげたいからね」

「あはは。君でもそういうこと考えるのか」

ちょっと意外だった。家族の前で、シオリは僕にも見せない本当の姿があるのかもしれない。

僕もいつか、シオリのそんな笑顔や一面を引き出せる男になりたいな。

「お母さんは、食事くらい、食べに来なさい、って、よく言っているわ。だから、もしよかったら、今度、食事でも来ない？」

「――うん。そうだね。いつか……」

そんな話をしていた。

――30分くらい、そうしていつものコースを散歩する。

常に人に囲まれがちな僕にとって、この朝の散歩の時間は、学校外で僕達が唯一二人きりになれる場所と言ってもよかった。そんな時間はとても貴重で、かけがえのない時間のように思えた。

これでシオリが僕と一緒に、週刊誌なんかに載ってしまったら、それこそ僕はシオリの父親に殴られることは確定だろうと思う。しかしこういう場合、それを覚悟してでも交際をおおっぴらにした方が正解なのだろうか、ともたまに考える。

結局、状況が難しいというのもあるけれど、人付き合いの上手くない僕は、そんな中でも上手くやれる方法を選択できないでいる。実に男として、情けないと思うし、シオリにはいつも我慢ばかりを強いてしまっている。

彼女との、こんなちっぽけな時間でさえも、守りきることがいかに難しいか、彼女といるといつも痛感する。

だけど、それが、人一人の幸せが、軽いものではないという真理に僕を到達させた。難しい問題にこそ、意欲が沸く負けず嫌いな性分もあり、それにより、いつからか、誰かのこんな幸せを守れる人間になりたいと、僕に思わせるようになったわけだ。

シオリと別れて、また学校で、と言って、手を振る。

「……」

本当は高校生カップルなら、別れ際のキスでもするものかな。もう付き合って随分経っているし。

でも、覚悟が足りずに女の子を抱こうとして、気分の悪い思いをした経験が、二度もしているからかな。

そんなつまらない過ちで、彼女を失いたくなくて、手を出す度胸が出ないのだろう。

でも僕は、そんな自己抑制を強くかけた今の関係に、特に不満があるわけではない。元々僕もシオリも、強い自己抑制をかけた生活を送っていたから、お互いが感情のままに恋愛をするにはまだまだ時間がかかることは、僕も、シオリもおそらくは理解していた。

感情のギアをトップに入れることが出来ない。僕もシオリも基本理性的な面が強いから、感情より理性が先に立つ。それを外した時、お互いがどうなるか、よくわからないのだと思う。だから恐い。お互いがお互いを傷つけてしまいそうで。

それにお互い、恋愛に対しての造詣がゼロに等しいので、触れ合うことが僕達にとってどんな意味を持つ行為なのか、少なくとも僕にはよく分からなかった。勿論、彼女と手をつないだり、抱きしめたりすると、もっと彼女に触れたい、と思うことはあるけれど、その感情と、その先の行為は何だか少し違うような気もした。

だから、きっと僕達の、こんなプラトニックで、ちょっとおバカな恋愛の形は、きっとこれからもしばらく続くのだろう。

まだ、僕も、シオリも、人の愛し方を学びはじめたばかりだ。

僕も、多分シオリも、自己抑制の強い人生だった。恋愛を通じて、人間には、思い通りにコントロールできる感情と、出来ない感情がある、ということも知った。それが恐くて、ギアをいつもニュートラルに保つのがやっとというのが、今の僕達の精一杯のところだった。

第三者が見ればもどかしいかもしれないけれど、それでも僕は今のその関係が、性欲を抜きとしても、少し気に入っている。

それでも日に日に、僕の感情が研ぎ澄まされ、次第にそれを抑えられなくなっている感覚を、わずかに感じるようになったからだ。

恋愛を通じて、僕は自分の死んだはずの感情が、蘇ってきているように思う。それを抑えられなくなったら、もう過去の僕は負け。過去を凌駕して、シオリをしっかりと愛せているように思える。

だから、今はこのままでいい。耐えに耐え忍び、この想いが、彼女への依存や、甘えでないとしっかり思える日まで――

家に向かう道で、リュートが一度僕の顔を見た。

――シオリさんとなら、ご主人は幸せになれる気がするよ。頑張れ！

そう言いたげな顔に見えた。

まあ、遅かれ早かれ、僕はシオリの両親に会って、この先の事を色々話さなければならない。

その時に、きっと僕はシオリの父親から、ぶっ飛ばされることも覚悟しなければならない。

――それは、ちょっと気が重かったりもするんだけど……

今のところの悩みは、それではない。

Shame

シオリと結ばれて、３ヶ月が過ぎた。
確かに僕の生活は一変したんだけれど……
それ以上に生活を一変させている人がいる。
そして、１０日ぶりに、僕は家に帰ってくる。
相変わらず、化け物の大欠伸みたいな音のするドアを開けて、リュートを柵に入れる。
階段を上る。
リビングへ繋がるドアを開ける。
「……」
「……」
リビングでは、両親と妹が丁度朝食を取っているところだった。
つい最近まで、荒れた家を象徴するかのように汚かったリビングは、１０日前よりも綺麗に掃除されていて、塵一つない。
テレビのニュースの音が聞こえる。
『次のニュースです。埼玉高校の天才高校生、サクライ・ケースケくんが、昨日数学オリンピック国際大会金メダルを持って、母校に凱旋しま……』
そこまで言った途端、母親はすぐにチャンネルを変えた。
『――クライ・ケースケくんが……』
しかし、回した先のニュースでも、僕に関する報道と鉢合わせる。
「くくく……」
僕は思わず笑ってしまう。声を殺し、顔を背けて。
「テレビを消せ」
親父の不機嫌そうな声で、母親はそそくさとテレビを消す。
「……」
静寂の食卓。
――あれ以来、当然僕と家族の力関係も一変した。

僕達はあの全国大会から、優勝校を押しのけて話題をかっさらい、翌日から報道陣の取材攻勢に巻き込まれた。

大会が終わった後も、僕の全国模試一位獲得をはじめとして、僕の評価は日に日に高まっていった。

サッカーのプロクラブからの勧誘は後を絶たず、両親や妹は、この家で最下層の人間だった僕の来客を最大限もてなすという状況を生み出した。

そんな日々の中、次第に僕は、「時代の寵児」扱いされる。

僕の名声が高まることに比例して、この家出の僕と他の家族の地位も逆転していった。

それがあるひとつのうねりを作り出す。

ある雑誌で行われた、『息子にしたい有名人』ランキングで、僕はぶっちぎりのトップを獲得。

今まで汚物扱いしていた僕が、『理想の息子』扱いされる――

家族にとって、こんな屈辱的なことはないだろう。シンデレラがお城で王子様と躍っていたのを見た、意地悪な姉くらいの屈辱だろう。

だが、その屈辱に追い討ちを更にかけるうねりに、家族は飲み込まれていく。

中学時代、慶徳中学という、超エリート校に通っていたのに、県立高校に進学したり、中学時代、野球をしていたのに、サッカーに転向したり、異色の経歴を多く持つ僕の生い立ち――ルーツに多くの関心が寄せられた。

次第に『サクライ・ケースケの育て方』なんて特集が組まれ、どんな子育てをしたのか、そんなものを取材する人間も現れ出す。

勿論、そんなものがあるわけもない。と言うより、家族と僕はここ数年、ろくに会話も交わしてはいない。一緒に住んでいるとはいえ、家族は僕の事を何も知らないのだ。

小さい頃の写真を貸してくれ、という依頼も多いのだけれど、この家族が僕の写真など持っているわけもない。僕達が不幸な家庭だ

と世間にばれないように、初めてその依頼が来た時、両親は恥をかかないように、家中ひっくり返して、うちにあるわけでもないアルバムを探していた。

我が家の教育方針を聞かれ、うちの両親が写真付きで雑誌に掲載されたことがあった。

両親は「やりたいようにやらせて、自由に育てたら、伸び伸び育ってくれた」とか、もっともらしい事を言っていた。

実際は見捨てて、放置して、自由どころか、憂さ晴らしのオモチャにしていたのに。

それを見た時は、笑いを通り越して、もはや呆れた。家族が、ひどく滑稽で、卑屈に見えた。

そんな家族を見た頃から、僕はもう、家族のことなど、どうでも良くなっていた。僕の環境にいいように翻弄される姿を見て、もう僕は気が済んでしまったのだった。

もう、僕はここにいる理由が何一つなかった。

この家自体に興味がなくなり、最近では国内にいても、ほとんど家にいない。エイジのアパートに泊めてもらったり、勉強を見るという名目で、ジュンイチの家にもよく泊めてもらっている。

家に戻るのは、着替えるか、寝るか、リュートに会うか、まるで渋谷あたりの家出少女のごとく、それだけの場所となった。

――僕は笑いを堪えながらも、軽蔑の表情に、自然になっていただろう。食卓を囲む家族を、汚物を見るように一瞥した。

そして、ふっと目をそらして、自分の部屋に戻ろうとした。

「待ちなさいよ！」

キーンとする程の金切り声。母親の怒鳴り声に、足を止める。

「アンタ、外国から帰ってきたその日くらい、家に帰ってきなさいよ！　アンタにようのある客人が、うちに山のように来たんだからね！」

「……」

僕はその状況をシミュレートする。

すると、途端可笑しくなって、口が笑いの形に歪んだ。僕はそのまま踵を返す。

「――それで、客人に待ってもらったわけか」

僕は母親の血走った目を、挑発的に覗き込む。

「そりゃそうだ。あんた、僕の携帯の番号、知らないからな。呼び出したくても呼び出せないわけだ。親として、息子も呼び出せないんじゃ、そりゃ恥ずかしいよな」

「ぐっ……」

母親は声を漏らす。どうやら図星のようだ。

「表向きには円満な家庭だと、あんた達は思わせたいみたいだからな。大方あんたは、電話番号を知らないとは言えないものだから、電話をかける振りでもしたんだろ。だけど連絡を取れている気配がなくて、客人から「本当に電話しているんですか?」と疑われて、大恥をかいたんだ。だからそうして必要以上に僕に怒っている――そうだろ?」

「……」

どうやらそれが真実のようだ。恥をかいたのでなければ、この家族は僕が家に帰ってこようがこまいが、どうでもいいのだから。

僕はにっこりと、アイドルのようにわざとらしく微笑んで見せる。そしてそのまま、母親と、その近くで座っている妹の肩をぽんぽんと叩いた。

「いつもいつも僕のために、お茶汲みご苦労さん」

そう、僕が言った時だった。

妹が、僕のその肩を叩く手を振り払い、僕を睨みつけ、激昂した。

「お前、調子に乗るんじゃねぇよ! 何様のつもりだよ!」

「……」

妹の目は、僕への憎しみに溢れていた。

だが、僕はそんな目を軽く受け流し、酷薄に笑って見せる。

「お前の学校の連中、皆僕がお前の兄貴だって、知っているんだろ? お前の学校の生徒から、ファンレターが届いてるんだ。お前の

ことも色々書いてある」
「な……」
「可哀想に――随分僕と比較されている上に、友達から僕のサインをもらってきてくれと頼まれても、それに応えてやれないみたいだな。昨日あたり、数学の先生から「数学世界一のお兄さんに、もっと勉強を教えてもらえ」とか言われたんじゃないのか？」
「……」
どうやら、これも全て図星のようだ。妹も、もう返す言葉がない。
「お前は今僕に、調子に乗るな、と言ったな。僕に言わせれば、今まで僕を自分より下位の人間だと思っていたお前の思い上がりに、その言葉をそっくりそのまま返してやろう。お前が今抱いている劣等感は、お前が今まで目を背けてきた現実だ。それを僕に八つ当たりしても、現実は何も変わらない。お前もそろそろそれを自覚――」
バシッ。
僕の言葉は、鈍痛に遮られた。
妹は、僕の頬を叩くと、そのままどすどすと、大きなストライドで自分の部屋に向かって、踵を返してしまう。バタンと、八つ当たりするように、ドアが大きな音で閉まる。
「……」
僕は妹に張られた左頬を左手でさすりながら、薄く笑う。
「ったく、自分が都合が悪くなれば、すぐに暴力か――」
別に痛くもないが、そう呟く。この場にいる両親に聞こえるように、わざと声に出して。
「おいおい、おいたが過ぎるぜ、ガキが」
それを聞いた親父が、椅子から立ち上がり、僕に手近の茶碗を投げ付ける。
茶碗は僕の肩口に当たってから、床に落ち、ガチャンと僕の足下で割れた。破片と一緒に、茶碗に残っていた白米が床に落ちる。
「ちょっとばかり周りからちやほやされて、王様にでもなったつもりか？　未成年で、一人じゃ何も出来ないくせに、俺達より偉くな

ったつもりか？　そうして俺達相手に優越感に浸るのが、そんなに楽しいか？」

親父はまるで僕を、小さい男とでも言いたそうに僕に吐き捨てる。

「……」

深い溜息が出た。

「楽しいわけないだろう」

僕は親父を逆に睨みつける。

「実に不快だ。お前等みたいなクズ相手にこんな不毛な事をやっているのがな。叩かれた場所の鈍痛、お前等の獣同然の不満の叫び声、知性のない言葉、全てが癇に障る」

「あぁ？」

「お前等はもう何年も、僕を相手にこんな事をしていたんだな。何故お前等はこんな胸糞の悪い事を、何年も、何も感じられずに続けられるのか、理解に苦しむよ」

「テメエ！」

親父は僕の胸倉を掴み、僕の体を自分に引き寄せた。

「……」

以前ならこうされると、僕の体は幼い頃からのトラウマで震え出し、動けなくなってしまったんだ。そうなると、もう家族のサンドバッグ状態だった。

だけど――

「殴れよ。殴りたければ殴れ。一発ごとにお前を取り巻く状況はどんどん悪くなる。僕は殴られても痛みはいずれ消えるが、お前等の痛みは死ぬまで消えない。僕がこれからも名を上げることで、その痛みはこれからますます強くなるんだ」

「……！」

親父の鉄拳が、僕の腹に入った。僕はその衝撃で後ずさる。

何度か咳き込むが、腹に来る事は分かっていた。あらかじめ力を入れていたから、体重１００キロ超の親父の拳も、何とか持ちこたえる。

「そうだ。そうやって暴力を振るっていることがばれるのが恐いから、もう目立たない場所しか殴れないんだ。お前等はもう、この家の中でも好き勝手することが出来なくなった。お前達の憂さを完全に晴らせる場なんて、もうどこにもない。お前等は、今の痛みを和らげる術すら失ったんだ」

僕はゆっくりとした口調で、そう言い捨てながら、立ち上がる。

「挙句、あれだけ汚物扱いしていた僕の名前に便乗して、取材で心にもない事を言い続ける。他人の褌で相撲を取るのは結構だが、もう少し恥を知ったらどうだ？　いつかそんな虚栄は、刃になってお前達に返っていくぞ」

「黙れ！」

親父は叫ぶ。

親父の顔は、怒りと屈辱にまみれた顔をしていた。だが、その顔を見て、優越感などを覚えることもない。

僕は自分の気を落ち着けるためにも、ひとつ溜息をつく。

「僕はもう、腐りたくないんだ。貴様等をからかって優越感に浸るなんて事を覚えたら、僕も貴様等と同じゴミになってしまう」

「……」

「安心しろ。この数ヶ月の、貴様らのみっともない姿を見て、もう僕の気は済んだ。貴様等が僕にしてきたこと、誰も言わないでやるから、もうこれからはひっそりと生きていくがいい。僕はお前等から何も奪う気も、干渉する気もない。だからもう僕から何も奪うな。あと1年で関係は終わる。今回の数学オリンピック金メダル受賞で、僕は国からの奨学金審査に合格することは確実になったんだ。僕はその金で国立に通いながら、安い下宿で1人暮らしをする。そうしたら僕と貴様らの道は二度と交わることはないんだ。それでいいだろう」

そう僕は言った。けれど。

「言ったな？　じゃあ出て行け！　大学と言わず、今すぐ荷物をまとめて、ここから出て行け！」

親父はその言葉尻を取って、僕を少しでも困らせたいのか、そう言った。

僕はふっと、含み笑いを浮かべる。

「わかってないね。お前、僕をこの家から追い出したら、マスコミになんて説明する気だ？　世間体を気にするお前等が、僕を勘当した、と言えるとは思えないし、納得できる理由もなく追い出したら、お前等、日本中の批判の的になるぞ」

「くっ……」

「勿論貴様等がどんな形でもいい、アパートでもあてがってくれれば格好もつくが、それをしたら、貴様らが僕を自慢の息子だと方々で言っている以上、このタイミングで家から追い出したとしたら、マスコミは僕達の関係を不審がる。いずれ貴様等の正体もばれるぜ」

「……」

「言っておくが、僕は譲歩してやっているんだ。お互い今は嫌でも一緒に住んでいる方が、お互いの、特にそっちのメリットがでかいんだよ。僕も自分の周りが騒がしくなるのは好ましくないしな」

「……」

譲歩してやっている――

それはそうなのだ。家族は、今更ながら、今の自分達を取り巻く環境が最悪なことは分かっているだろうし、その気になれば僕の一言で、この家族の人生を全て終わらせられることも、理解しているだろう。

だが、それでも僕が甘いからか、状況判断ができない馬鹿なのかはわからないが、こうしていまだに僕に対して不遜な態度を取ろうとする。今更僕に頭を下げるなんてことは出来ないのだ。

こういう態度を取られると、自分にも多少の被害が来ても、こいつ等に実力行使をしてやろうかとも思う。

でも、もうそんな事をしても仕方がない。

もう、この家族、この家は、僕の中では既に通り過ぎた場所だ。

それでいいじゃないか、と思う。

それに、僕はもう、そうして今までの恨みを晴らすべく、この家族を痛めつけ、また昔の、負の螺旋に戻る事を心から拒んでいた。

それに立ち戻りそうな時、いつも僕の脳裏に、シオリや、ユータ、ジュンイチ達の顔が浮かぶ。

僕はあいつらに恥じない男にならなくてはいけない。そのためにすべきことは、こんなことではないのだと思うと、あいつらの顔が浮かぶ度に、自制が効くようになった。

「ケーちゃん」

ふと背後から、僕を呼ぶ猫なで声がした。

後ろを振り返ると、茶封筒を持った祖母が立っていた。

「何だ？」

一応僕は訊く。

「ケーちゃん、海外で随分頑張ってきたのね。全く、おばあちゃんも鼻が高いわ。だからこれ、ご褒美のお小遣いよ」

そう言って、茶封筒を僕の前に差し出した。

「……」

これだけ見れば、実によいお婆さんのように見えるかもしれない。だが、本来この婆さんはとんでもなくケチな人間で、僕は生まれてこの方、一度もこの婆さんからお小遣いなるものをもらったことがなかった。お年玉さえくれない婆さんなのだ。

そんな婆さんが、今更僕に小遣いをくれると言うのだ――

僕は婆さんの手から、茶封筒を払いのけていた。僕に払われた茶封筒は、ひらひらと空を舞って、脇に落ちた。

「あ……」

「そうして僕に恩を売って、これから僕が稼ぐであろう金のおこぼれに預かろうって腹か？　なめられたものだな、僕を金で飼いならせると思ったのか？」

僕は目の前の老婆を、軽蔑の念を込めて睨む。そして脇に落ちた茶封筒をかがんで掴むと、そのまま老婆の胸に投げ付けた。

「こんな金を受け取れるか！　これを持って、僕の前から消えろ！」

僕は今日、初めて家族に大喝した。

「ひぃぃ……」

老婆は封筒を握り締め、そそくさと自分の部屋に戻ってしまう。

この状況で本当に封筒を大事そうに抱えて去るあたり、性根の底からケチだと思う。

「……」

老婆の去っていく後姿を見つめながら、僕は思う。

この家は腐っている。

僕も以前はその一部だった。

だが、もう今は違う。それに、もう僕自身、この家族を立て直してやろうなんて殊勝な考えも持っていない。

もう、全て終わった。

もう、この家族と僕との関係も、完全に終わった。

今ではこの家族のやること、なすことが、蠢動としか感じられない。

だからもう、それでいいと思う。叩き潰しても、何の意味もないと思えた。。

残り1年、我慢の日々は残っているけれど――

僕の悩みは、今では家族のことではない。

Buffoonery

僕は家族を尻目に、一度シャワーを浴びて、デンマークから送った荷物が家に届いているかを確認し、その中の衣類を洗濯機にかけて、ベランダに干し、それから学校に向かった。

下駄箱で靴を履き替え、教室へ向かう途中に通る生徒指導室近くの掲示板に、多くの生徒達が集まっているのが見えた。

僕はそれを尻目に教室に行くと、もうシオリ、ユータ、ジュンイチ、マイの4人とも登校していた。どうやら僕を待っていたらしい。

僕は鞄を教室に置いて、5人で掲示板に向かった。僕達の姿を見て、それまで鈴なりだった生徒達は、さっと僕達の前を開けた。

一学期実力テスト成績上位者（第三学年）

順位	氏名	クラス	平均点	所属部活
一位	マツオカ・シオリ	E	九十四・二	吹奏楽部
二位	サクライ・ケースケ	E	九十三・七	サッカー部
三位	オガタ・ヒナ	B	八十七・一	無所属

「――今回は負けちゃったか」

僕は顔を覆う。

昨日は、春休みの成果を見るために、新学期早々の実力テストが行われていたのだった。その結果が、一日置いて今日、掲示板で発表されていた。

「しかしお前、昨日は帰国早々で疲れがピークの上、ろくに寝てなかったみたいだし、コンディション最悪だったんだろ？　なのにこ

れかよ――」
ジュンイチが苦笑いする。
「実に可愛げがないな。少しはドジをしておかないと、女にもてないぞ」
プレイボーイのユータに言われる。
「……」
「シオリ、サクライくんが海外で頑張ってるんだから、帰国したら、自分も頑張ってたところを見せなくちゃって、このテストに向けて、すごい勉強してたもんねー」
ジュンイチの横で、彼女のナカガワ・マイがそう茶化した。
「え？　あ、う……」
それは内緒の予定だったんだろう。突然カミングアウトされてしまい、シオリは少し狼狽する。
「で――でも、あんなに疲れてヘロヘロだったケースケくんと、たった5点しか変わらないし……」
照れを隠す時特有の、彼女の早口が出る。
「……」
ユータやジュンイチがニヤニヤして僕を見る。何だか僕も照れ臭くなってくる。

3年生になると、授業の半分は受験用の実習になる。問題を配られて、一時間で解き、次の一時間で解説、というのが続く。
3年生になって、クラスが文理で完全に分かれる。結局僕は文系を選んで、シオリ達と全員同じクラスで授業を受けている。
ジュンイチの彼女の、ナカガワ・マイは、チアリーディング部の部長であると共に、学年でもトップ30には必ず入る、成績上位者だ。国立の東京外語大を本命に、上智、青学、立教あたりを志望しているらしい。
ジュンイチは、文系になって、得意分野だけで勝負が出来るよう

になり、成績が上がった。ただ国立を目指す以上、天中殺の数学とはいまだに付き合っている。でも、マイと同じ大学に行きたいジュンイチは、それに追いつこうと、今がむしゃらに勉強している。

受験生に恋は禁物とも言われるけど、ジュンイチには今のところ上手く作用しているみたいだ。

そして、僕とシオリは――

僕は東大でも１００％合格確実だと言われているし、全国１００番以内のシオリも、よほどのことがなければ合格できるとされている。埼玉高校は、本来東大合格者を毎年３０人は出す進学校だ。中でもそこで3年間しのぎを削っていた僕とシオリは、誰もがまず合格は固いと思っているだろう。

――休み時間になると、ジュンイチは僕に、数学を見てもらいにやってくる。最近いつも休み時間は、こいつの勉強を見るだけで終わってしまう。

「だからな、ｃｏｓθっていうのを、ここに代入して……」

「んがぁー！　だから何でそうなるんだぁ！」

ジュンイチは頭をバリバリとかきむしる。

「――と言うか、お前はまず、微積分がわかってないからな……ごめん、僕が悪かった」

僕はシャープペンをくるりと回す。

「しかし、俺達は今まで、数学世界一の高校生に勉強を教えてもらっていたと思うと、空恐ろしいぜ」

脇でそれを見物していたユータが言った。もうプロサッカーチームに所属するユータは、進学の意志がない事を早々に発表していて、今はこうして高みの見物というわけだ。

「く、くそぅ――じゃあケースケ、この問題はどうやって解くんだ？」

ジュンイチはくじけずに訊いてくる。

「……」

今まで数学から逃げ回ってばかりだったジュンイチが、今はこう

して数学に食い下がろうとする意志をしっかりと見せている、
――変わったな、こいつも。
受験に挑み始めるジュンイチ、プロでのサッカー人生が始まったユータ。
形は違えど、二人とも、自分自身の戦いに挑んでいる。
全国大会が終わって数ヶ月で、こいつらの顔は、それぞれの世界で厳しく戦おうとする、男の雰囲気が染み付くようになった。二人とも、とてもいい顔になったと思う。
今の僕も、同じ顔ができているだろうか、と思う。
まだ僕は、自分の戦う場が見えていても、何をすればいいか、よくわからない。怒りや憎しみでしか戦う事をしなかった僕は、そんな感情以外の動機でする戦いがある事を、最近知ったばかりだ。
今の僕は、戦う前に、学ばなくてはいけないものが多すぎる。
だけど、いつまでもそんなことは言っていられない。もう18になるのだから、すぐに僕も、戦いの地へ赴かなければいけない。
ただ、もうしばらくは、こうしてこいつ等と――
「――ケースケ？」
そんな考えが、ジュンイチの呼びかけで中断する。
「何だ？　ケースケでも春だから、気が抜けてるのか？」
ユータが皮肉った。
「あぁ……悪い、えっと、次の問題だったな……」
「サクライ」
ジュンイチの参考書に目を落としかけた時、後ろから誰かに呼び止められる。
振り返ると、そこにはノートや参考書を持ったクラスメイトの男子達が数人立っていた。
「なあ、俺達にも、数学、教えてくれないかな？」
「……」
クラスメイトは、どこか僕を恐がるように、おずおずと僕に話しかける。

それはそうだ。僕は入学した頃から授業をサボりまくっていたし、学校行事のクラス打ち上げにも、金がないからと言って、一度も参加したことがない。同様の理由で修学旅行さえ行っていないのだ。この二人以外のクラスメイトとは、男女関係なく、ほとんど接点がない。

そうやって僕は、色んなものを、自分には必要ないからと決め付けて、はじめから見もしないで捨ててきたんだ。

このクラスメイトもそう。ユータやジュンイチ、シオリだってそうやって――

「――ああ、勿論。遠慮しないで何でも訊いてくれよ」

僕はまだぎこちないけれど、今の自分の精一杯の笑顔でいるように努めた。

僕は、後悔しているんだ。

そんな、「どうでもいいもの」と決め付けていたシオリやユータ達に救われたことで気付いた。自分がこれまで、沢山の可能性を捨ててきた事を。

それに気付いた瞬間、僕の価値観は少し変わった。

僕は後悔によって、生きることに少し前向きになれたのだと思う。はじめは、今まで捨ててきたものを、ちゃんと拾い集めていたら、僕はあんな過ちを犯さずに済んだのでは、と、酷く後悔した。

だけど、まだ間に合うかもしれないと思った。時間がかかっても、自分が今まで捨ててしまったものを、もう一度拾い集めてみたい。そう強く思った。

今僕が探しているものは、そうやってずっと、ほとんど無意味に捨ててきたものだ。自分の感情や、人を愛すること、守ること――一度捨てたものを、もう一度拾い上げることが、こんなに難しいのかと実感した僕は、もう二度とそうして、目の前にあるものを簡単に捨てたくはないと、思うようになった。

「じゃあ、みんなで机集めて、ゆっくりやろうか」

そうして、僕の席の周りで、数学講義が始まる。

ユータやジュンイチがフォローを入れてくれるのも手伝って、人付き合いの苦手な僕でも、あまり話したことのないクラスメイトとも、何とかちゃんと交流しながら、勉強を教えることができた。

今まで、人付き合いが上手くいったためしはほとんどなくて、それを避けてきたけれど、今は少しずつ、こうして勉強している。

僕は皆に勉強を教えるけれど、皆は僕に人付き合いとか、笑い方とか、色々なものを教えてくれる。

東大に入る学力がある僕は、今はこういうことを少しずつ勉強している。

まあ、そんな人付き合いは、色々と発見もあって楽しいんだけど……

「お前等、志望校聞く限りだと、センターで数学１５０は絶対切れないんだからな。もうちょっと頑張れ」

そうやって僕が叱ると……

「確かに教え方は丁寧なんだが――さ、流石にあれだけ授業サボっていた奴が、こんなに勉強ができるとなると、嫌になってくるな……」

周りの男達が、そんな空気になってくる。

「だろう？　お前等もそれわかってもらえて嬉しいよ。そうなんだよ。こんな怠惰な学生が成績がいいなんて、あまりに不条理だと思うだろ？」

ユータがその気持ちを共有する。

そこにジュンイチが地雷を置く。

「おまけに、学校一の美少女と付き合ってる――一度は、付き合わないと誓ったのに……」

「お、おい、ジュンイチ……」

途中で完全に形骸化してしまったが、僕は2年の始まりに、マツオカ・シオリと付き合わないように、ファンクラブのような奴等と約束して、ずっと避ける日々が続いていた。

だから、僕がシオリと、恋人関係になって、僕に校内の男子の苦

情が殺到した。
「サクライ、お前、マツオカさんとどこまでいってんの？」
クラスメイトの一人に聞かれる。
「は？」
僕は横目で教室を一瞥する。
教室にはシオリもいる。僕同様、女子に囲まれて、勉強を教えているところだ。
「まさか、もう既にあんなことやこんな事をしてるんじゃないだろうな！」
「馬、馬鹿、声がでかい。本人がいるんだぞ……」
僕は声を殺して言う。
「あんなことやこんなことはともかく、シオリさんが恋する乙女の顔になってたのは事実だな」
ユータがにやついて僕を見る。
「今日なんて、『ケースケくんも外国で頑張ってたんだから、私も頑張っているところを見せなくちゃ』ってことで、シオリさん、実力テストで学年トップだとよ。健気だよなぁ……」
シオリの台詞の所は、彼女を真似たつもりか、声をか細くした演技つきで説明した。
「だぁ！　許せねぇ！」
クラスメイトは僕を睨む。
「みんなでこの幸せ者をシメてやろうぜ」
そう言ったジュンイチは椅子から立ち上がって、僕の背後からクビをチョークして、僕を立ち上がらせる。
「な、ちょっ、ジュンイチ、やめろ！　苦しいって！」
そうして椅子から立ち上がらされると、ジュンイチは僕を教室の床に倒して、左腕をがっちり掴む。
「ユータ！」
「おう！」
ジュンイチの合図で、ユータは逆に僕の右手をがっちり掴む。腕

を決めに来ているわけじゃないけれど、僕は大の字に寝転がらされる。

「今だ！　お前等、こいつをくすぐってやれ！　いつもクールなこいつが笑い悶える恥ずかしい格好を、衆目に晒してやるんだ！」

そのジュンイチの発言に、今まで勉強を教わっていたクラスメイトの目の色が変わった。

「このやろ！　こーしてやる！　こーしてやる！」

「わ、何するんだ！」

男どもは、僕の体を押さえつけて、上着や靴を脱がせ、僕の脇や足の裏をくすぐりにかかるのだった。

「く、くくっ……ちょ、ちょっとやめろ……くっ、あははっ」

僕は笑いを堪えて悶え苦しんだ。

そんな僕の姿に、女子も集まってくる。女子は今までシオリを中心として、僕達同様、勉強を教えあっていたのだけれど。

身悶えている僕の前に、シオリがやってくる。

「シ……シオリさ……た、助け、く、くひひ……」

僕は笑いを堪えながら、苦しい息で何とかそう声を絞り出す。何たる醜態だろう。

だけど……

パシャ。

「……」

笑い過ぎて涙まで出てきた僕の目に映っていたのは、携帯電話を構えてシャッターを切ったシオリの姿だった。

いつも真面目なシオリが、そんな行動を取るのが意外で、くすぐっていた男子達の手も思わず止まってしまう。

「ごめんなさい。でもたまには私も、あなたの恥ずかしい過去を握らないと――えへへ」

シオリは舌を出す。

「……」

僕は目を閉じて、頭をがっくりと床に預ける。

その仕草に、教室中が笑いに包まれた。ユータも、ジュンイチも笑っている。

「流石シオリさん。ケースケも呆れるオチをつけてくれたぜ」

ユータが呆れたように笑う。

「サクライくん、カッコ悪―い」

クラスの女子が口々にそう言う。

「……」

確かに今の僕は、すごくカッコ悪い。皆にとって当たり前の事をシラなすぎて、自分ひとりでは何も出来ない。

でも、今の僕の周りは、こうして笑顔、笑い声が溢れている。

僕一人の存在が、皆を笑顔にさせているわけではないけれど。

今までこんなに、誰かの笑い声に包まれた世界を見たことはなかった。

それに触れた時、こういうのも悪くない、と思えた。昔はこんなものに、何も価値などないと思っていたのに。

それに気付かせてくれたのは、他でもない、僕を優しく包んでくれた、シオリのあの笑顔だった。

シオリの笑顔を見て、自分は誰かの笑顔を見るのが好きなのだと思った。誰かを笑顔にさせるためなら、少しくらいカッコ悪くてもいい。それが大切な人なら、僕は道化になったっていいと、そう思えるようになった。

だから今は、この笑顔を守り抜ける力が欲しい。

それが僕のこれからの闘いだということもわかっていた。あとはそれを、どう形にすればいいかを詰めていければ……

「いててててて！」

そんな思いが、両腕に走る痛みにかき消される。

「この野郎！　受験生が学校のヒロインとラブコメってんじゃねぇ！」

「公約違反の罰だ！　受け取れぇ！」

僕はユータとジュンイチから、腕ひしぎをかけられる。

「いててて！　ギブギブギブギブ！」

そんなわけで、僕は今でも個とあるごとに、シオリには手を出さないという公約違反を、学校の男子から突っ込まれては、肩身の狭い思いをしている。

それも悩みの種だけど、今回の悩みはそんなことではない。

Tender

ユータは目の前で、フェイントをかけて僕を抜き去りにかかる。しかし僕はその動きを読んでいる。足を出して、逆にボールを奪取する。

くっ、というユータの息を漏らす声が聞こえたが、その頃には僕はボールを前に向かって蹴り出して、僕自身も前に走り出していた。

「中央はジュンイチがいる！　サイドに送れ！」

僕は走りながら指示をする。相手選手はカウンターを喰らって、焦りながら、自陣へと戻っていく。

僕のボールを受けた選手は、指示通りサイドにボールを回す。僕はセンターラインを超えて、バイタルエリアに突入するが、そこでジュンイチが僕にぴったりマークにつく。結局最後は僕にまたボールが回ると読んだのだろう。これはいい判断と言えた。

サイドの選手が、ペナルティエリア近くでサイドバックとの1対1に挑んだ。ボールを持った選手は抜き去りながらクロスをあげにかかるが、サイドバックの選手が体をいれたので、ボールはこぼれ玉になる。

フォローに走っていた僕がそのボールに追いつくが、ボールを持った後、ジュンイチが後ろからプレスをかけてくる。

だけど僕は、ワンタッチでボールを右に出し、そのまま反転し、ジュンイチをかわした。

ペナルティエリアに進入し、飛び出してきたキーパーを見て、僕は横にボールを蹴りだすと、そこにフリーのフォワードがいる。キーパーが飛び出して、無人のゴールにフォワードは軽く流し込む。

「おいユータ。そんな露骨なフェイントはあまり使うな。お前が前線で不用意に取られたら、こっちはカウンター喰らうんだ。ジュンイチも、プレスをかけて動きを止めようって判断は正しいけど、動きを止めたら何とかなると思って、ワンタッチで抜かれる選択肢が

頭から飛んでいたぞ」
僕はセンターサークルに戻りながら、声を出す。
「あれが露骨か？　あれを止められるのなんて、お前くらいのもんだぜ」
ユータは天を仰ぐ。
金網の外から歓声が響く。僕はそちらを見る。
今日も沢山来ている。と言うか5月になって、ただの練習でも随分とギャラリーが着くようになった。ギャラリーのそうも、ちょっと前までは女の子ばかりだったのに、最近は男が増えている。
報道陣も練習にまで来ている。でかいカメラをわざわざこんなところまでご苦労なことだ。

37――この数字が何を意味するか分かるだろうか。
これは、1月の全国大会で、全治2週間の怪我を負った僕が部活に復帰した2月から、4月までの3ヶ月間で、僕が出場した埼玉高校サッカー部の練習試合の無敗記録だ（34勝3分け）。
全国大会で、大会最優秀選手に選ばれた僕だったが、僕は高校からサッカーをはじめたため、当然全国大会以前のキャリアはゼロだった。全国大会以後も、代表を辞退したり、キャリアが増えていない。
しかし、無名の埼玉高校が、全国の強豪を圧倒的な力でなぎ倒し続けたインパクトは、優勝校を差し置いて僕達を一気に人気者にしてしまった。それが一部では、人気先行でサクライやヒラヤマの実力は大したことはない、と陰口を叩く手合いを増やしてしまう結果を招いた。全国大会準優勝も、まぐれだと言う人間も多い。
そんな僕達を倒したいと言う強豪チームは跡を絶たず、僕が復帰した2月頃から、埼玉高校に全国から練習試合の申込みが殺到した。高校だけではなく、プロクラブのサテライトチームからの試合申込みも多数ある。

埼玉高校は県立高校だから、当然遠征費など学校から出ない。だから試合をするには、県内の高校以外は、相手に埼玉高校まで来てもらうしかないのだけれど、それでも試合申し込みが減ることはなかった。すごいのになると、九州からわざわざ遠征でここまで来たツワモノもいた。

僕は埼玉高校で唯一、３７試合全試合に出場していた。だけど、週３、４回ペースで試合をしているのでは、全試合フル出場はとても出来ない。僕もフル出場は４試合しかない。それ以外は全て後半からの出場だった。

ユータはプロと契約したため、不在の中試合をすることも増えた。だからユータ不在時には、１７２センチしかない僕が、ワントップのフォワードをやることもあった。

――次の日、サッカー雑誌にこんな記事が載っていた。

『サクライ・ケースケの、『第４の能力』

強豪校との練習試合を３日と空けずに行っている埼玉高校。強敵ぞろいのチーム相手に、エースフォワード、ヒラヤマ・ユータが浦和レッズ帯同のため、不在時も多いのにもかかわらず、２月から３７戦無敗という記録を現在も更新している。

その原動力はやはり、１７２センチの小さなエース、サクライ・ケースケである。

サクライは、フル出場こそ４試合だが、３７試合全てに出場。丁度２０試合フル出場分の出場時間で、１７ゴール、２１アシストと言う驚異的な数字をたたき出しているのだ。３７試合のほとんどを後半から出場し、負け試合を勝ちに変え続けている。

更にデータ的なものを言えば、８割が一流選手の水準と言われるパス成功率は、３７試合で９割２分、２５メートル以内のフリーキックが得点になる確率は、７７％。ドリブルで相手を抜いた回数は、６２回。１対１のマッチアップでは、まだ一度も止められていない。

サクライの３つの必殺技、ドラゴンダイブ、ドラゴンスター、春風ドリブルの威力は、このデータが十分に示してくれているだろう。

しかし、この３つの必殺技以外に、サクライには『第４の能力』が目覚めている可能性がある。

練習試合で当たった相手チームの選手にインタビューすると、毎回同じような言葉を異口同音に言うのだ。

「こっちが攻めている時、いつも嫌な場所にいる。まるでこちらの攻撃パターンを読んでいるみたいに」

「１対１でマッチアップした時、もう既に考えが盗まれているみたいだった。どんなフェイントにも引っかかってくれる気がしない。抜けるイメージが全く出来なかった」

埼玉高校はスポーツ推薦がない。失礼だが、サクライ、ヒラヤマと、ボランチのエンドウ・ジュンイチを除けば、チーム力はいまだに弱小校の部類にいる。いくら個人技に優れた選手がいても、それだけでピッチ全体をカバーすることはできない。

しかしサクライは、それを自身の『先読み』の早さでピッチ全体に指示を出し、それに対応する術を身につけている。

サクライの頭は、試合中、ずっとフル回転し、状況を判断する。その計算が速く、迅速な指示で、埼玉高校の軍配を取り、陣形を流水のように臨機応変に変え、相手に対応する。恐らく１対１の時は、相手の視線の動きや筋肉の弛緩具合、ボールと足の角度まで見て、ボールが物理的にどちらに出るかを読むのだと推測する。

まさに龍が天より地上を見下ろすように、よく見える目――『竜眼』が、彼の中に芽生え始めている。相手もそれは強く感じているらしく、サクライのその先読み能力の高さに翻弄され、攻め手を失い、敗れるチームが今も跡を絶たない。

サッカーにも昔から、クレバーと呼ばれる選手はいるが、サクライは、活で総称されたタイプのクレバーさとは、一種違った頭のよさを見せている。恐らくサクライは、実際のＩＱをそのままサッカーの能力値に還元させた、世界初のサッカー選手と言えるかもしれ

ない』

僕達3人は、無敗記録を４０に更新した後の部室でそれを見ていた。

「――へえ、竜眼だって。カッコいいじゃん」

ジュンイチはサッカー雑誌を覗き込みながら、ユニホームを脱ぎ、シャツを羽織った。。

「しかし、この記事には同感だな」

ユータは僕を見る。

「お前とマッチアップした時、完全に動きを読まれているって感覚は、俺も最近よく感じるんだよな。お前は、露骨なフェイントとか言うけどさ」

「……」

僕はジーンズに足を通す。背が伸びたから、買い替えたばかりなのに、最近足に筋肉がついてきたのか、買ったばかりのジーンズが少しきつくなった。

「お前、もしかして、ニュータイプとかナントカに覚醒したんじゃねぇの？」

ジュンイチに言われた。

「今の高校生で、ニュータイプって何だか知ってる奴が、どのくらいいるんだ？」

僕はベルトを締める。

「お気に召さないようだな」

ユータは着替えを終え、部室の軋む椅子にその大柄な体を預け、僕達を待っていた。

今日は試合があった。他の部員は先に帰っている。僕達は試合後はこうして3人、しばらく待つのがお約束になっている。そうでないと、２～３０００人入る、試合を見に来た観客に押しつぶされてしまうからだ。

僕は腕時計を見る。時間は8時を少し過ぎた頃。家が近い僕はともかく、これから電車で帰る二人が気の毒に思う。

「この記事、まるで僕ひとりの力で埼玉高校が勝っているみたいな書き方じゃないか。おまけに僕達以外の選手は、弱小扱いだ。これじゃ部内に僕達への依存心や、劣等感が生まれちまうだろ」

「あぁ……確かにそうだな」

「だろう。他の部員に見せられないよ。その記事」

2月以来、キャリアのない僕をもっと下調べしようと、プロクラブのスカウトが埼玉高校のグラウンドに連日集まるようになった。

そのタイミングで、強豪校とのゲームでの経験を尊ぶ監督のイイジマは、練習試合のオファーを片っ端から受け始めた。

ゲームを重ねるごとに、僕の評価は上昇し、雑誌やテレビでこのように大々的に報道された。それがまた噂を呼び、最近では練習試合でも、埼玉高校のサッカーグラウンドの金網の外は、２０００人近いギャラリーで埋め尽くされる。当然埼玉高校のグラウンドには、観客収容スペースなどないから、全員立ち見で、後列はとても見にくそうなのに、それでも観客が集まる。

観客層に男が増えたのは、その噂を聞きつけ、本当に僕にそんな実力があるのか見極めに来た、サッカー好き、サッカー玄人の連中だ。未だ世界のトップと戦う実力のない日本代表の今後の将来を憂いているファンと言ってもいい。

最近はそんなファンの観戦マナーの悪さが目立っていた。連日の試合で皆疲れが溜まっている上に、そんなギャラリーにいつも見られていることが、ストレスになっている部員も多い。先月入部した５０人以上の1年生部員が数人、そのせいで早くも退部届を出してしまった。

連勝記録を伸ばしているものの、僕は最近の勝ち方には不満があった。

その雑誌に書いてあることは事実で、埼玉高校は、僕達以外の部員はまだ弱い。練習試合で当たった相手は皆強豪だ、。だから、後

半で僕達が出る頃には、８割がたこちらはビハインドを背負っている。

それを僕達がひっくり返して勝つのが、４０戦無敗の基本戦術だったけれど、これでは前半に出ていた部員があまりに惨めだ。僕達が出ていないことで、観客からも野次が飛んだりする。

連勝しているとは言え、チームの状態が決してよい方向に行っているわけではないのだ。

「ふふっ」

ジュンイチがそんな僕を見て、急に笑い出した。

「何だよ」

「いや、お前、そうやって他の部員のこととか、お前なりに色々考えてるんだな、と思ってな」

「……」

「他人に無関心だったお前が、そうやって誰かの事をちゃんと思いやれるのは、いい傾向だよ」

「……」

言われてから気がついた。

僕は今、他人を思いやれることが、出来ているのだろうか――

「最近のケースケ、実に楽しそうにサッカーをやるけど、それもいい傾向だな。チームはともかく、お前がいい傾向に向かっていることは、間違いない」

ユータにも言われた。

「でもケースケ、俺がお前に出来る数少ないアドバイスのひとつだが、大切に思うことと、大切にすることは、また違ったことだぞ。こと女性に関してはな」

「――大切にすることと、大切に思うこと……」

その言葉が何を意味するか、よくは分からなかった。だけどそのユータの言葉は、とても強く印象に残った。

「しかしお前、そう気を張ってると、夏までにつぶれちまうぞ」

ユータがそう言って、僕とジュンイチを一瞥する。

「お前等、今度の週末、イイジマに言って休みをもらえよ。それで、シオリさんも誘って、ホームでやる俺の試合を見に来いよ。気分転換にはなるだろ」

『行きたいな。私、実は生でプロのサッカー、見に行ったこと、ないんだ』

「僕もないよ。とりあえずユータは、人目につかないいい席を用意するって言ってたから、君と行くことも大丈夫そうなんだけど――何だかひとつ条件があるらしいんだ」

『条件？』

「その条件ってのが、行ってからのお楽しみなんだそうだ」

『ふふ、何だか恐いね』

僕はジュンイチとユータが帰ってからも、ひとり学校に残り、学校の裏にある土手に来て、そこに腰を下ろし、携帯電話を耳に当てていた。

土手には街路灯もなく、周りは真っ暗。土手の向こうに見える大きな橋を、車のテールランプが何度もすれ違っている。周りには民家もなく、風がよく通る。５月の暖かくなった風に、土手の青草の香りがかすかに運ばれてくる。

こうして、一日数分でもシオリと電話をするのが、一応の夜の日課だ。受験もあるし、お互い話下手だから、話すのは長くてもせいぜい１５分くらいだけど。

家に帰らずに、こうして外の静かなところで電話をするのは、少しいい気分だ。人当たりが少しはマシになったとは言え、自分は基本的には静寂を尊ぶタイプなのだろう。

『……』

ある程度の話をすると、シオリが沈黙した。

『ケースケくん、最近すごく疲れているみたいね』

やがてシオリにそう言われる。

「……」

そう言われても仕方のない状態だった。フル出場していないとは言え、４０試合全てにチーム唯一出場しているし、数学オリンピック関係も含めて、年が明けて４ヶ月、ろくに休みが取れていない。名前が上がる毎に、試合中の僕のマークはハードになるし、当たりも激しくなる。体にもかなりのダメージが蓄積され、正直体が今も痛い。

最近では、シオリとの電話中に、僕がうとうととしてしまい、受話器を握ったまま寝てしまうこともあった。二人の時間がどんどん少なくなっていて、そのほとんどの原因が僕にあるのだけれど、それをシオリは気に病んでいるみたいだった。こうして電話をするのも、僕に無理をさせていると思っているらしい。

『体は大丈夫？　あまり無理しないでね』

「君が気にすることないよ。それより、週末は久し振りに外に出られるんだ。試合が終わったら、たまには二人でどこかに食事に行こうか？　と言っても、そんな高いものはご馳走できないんだけど……」

話せば話すほど、彼女の申し訳なさが、受話器から伝わってくるようで、僕は明るく振舞わないと、何だか弱音を吐いてしまいそうだった。

彼女はきっと心細い思いをしているのに、優しい言葉が上手く出てこない自分。自分の都合で、彼女に我慢を強いている自分に、酷く腹が立った。

そして――

それでもこうして電話すると、彼女に会いたい、声が聞きたいと、懲りもせず彼女を欲しがってしまう自分の感情の馬鹿馬鹿しさを、どうやって取り扱えばいいか、僕にはよくわからなかった。

大切にしたいという思いはあるが、大切にするというのがどういうことなのか、僕にはよくわからない。

ユータがさっき僕に言った言葉は、僕の今の現状を、明確に表し

ていると言えた。
　いや、女性に関してだけじゃない。ジュンイチの言うとおり、僕はある程度他人にも目を向けられるようにはなったけれど、他人にどうやって自分をわかってもらえるか、どうしたらもっと他人の役に立つことが出来るのか、疲労困憊になるまで動いては見ても、今の僕にはまだ見えなかった。

Ｔｅｎｄｅｒ（後書き）

一応の用語説明…

サテライトチーム…いわゆる下部組織。１５～１８歳くらいの選手で構成されているプロ卵達のチームで、そこで成績を残すと、トップチームに昇格して、本当にプロになることもある。

バイタルエリア…ペナルティエリアの更にもう少し手前一体の空間のこと。

ニュータイプ…「機動戦士ガンダム」に出てくる、宇宙で暮らす人間の進化の可能性のひとつとされる定義。相手の存在や思念を直感的に感じ取ったりすることが出来、思念で動かす兵器を使えたりできる。

Stadium

ユータの所属する浦和レッズのホームスタジアム、埼玉スタジアムは、僕とシオリの住む川越からは、川越駅から埼京線に乗って大宮に行き、そこで電車を乗り換えて、最寄の浦和美園駅へと向かう、一時間弱の道のりだった。

僕は自転車を、川越駅近くの無料駐輪所に置いて、駅まで歩く。駅のホーム前に、妙に真っ赤な服を着た3人が待っていた。シオリに、ジュンイチ、マイだ。

「地元のくせに、遅いぞ」

黒のニットを被ったジュンイチに言われる。僕は目立たないように人気のない道を選んで遠回りしてきたのだ。

「……」

その横にいたシオリは、僕の姿をじっと見ていた。

「何か、いつもユニフォームが青だから、二人が赤いユニフォームを着てるの、新鮮だね」

そう言われる。

「いや、僕は君がそういう格好している方が新鮮なんだが……」

「――今日、家族にも同じ事を言われたわ。えへへ……」

僕達が着ているのは、浦和レッズのサポーターが着ているレプリカユニフォームだ。昨日ユータがそれぞれのサイズに合わせてくれたものだ。この時間帯、大宮駅より先は、このユニフォームを着た人が沢山いるから、かえってこれを着ている方が、人ごみに紛れて目立たない、ということで着ている。勿論僕とジュンイチは、ニットを被って顔を分かりづらくしているけれど。

普段綺麗めで、白とか、淡い色の格好を好むシオリが、こんな暖色を通り越した真っ赤な服、しかもユニフォームを着ているのは、何だか変な感じだった。

「しかし、このユニフォーム着てたら、レッズの応援をしないと目

立っちゃうな。だが、僕も応援の仕方、全然わからないんだが」
「あ、私、一応パソコンで調べてみたんだ。これ」
そう言って、シオリはプリントした紙を、僕達に各自配る。それを広げると、応援歌やら、肩を組んだり、手を上げたりするタイミングなどが書かれていた。
「……」
一緒にいるようになる前から、少し予感はあったのだけれど、シオリはサッカーへの造詣が、並みの女の子より数段深い。海外サッカーにも精通していて、戦術に対する知識もある。どうやらサッカー自体がかなり好きなようだった。一朝一夕のはまりようではない。
「ま、ここで立っているのもなんだ。埼京線は本数もそんな多くないし、早めに行こうぜ」
ジュンイチの号令で、僕達は早速切符を買った。
川越は埼京線の始発なので、席も空いている。シオリとマイを椅子に座らせ、僕とジュンイチはその前に立った。目の前に座るシオリの姿を見て、こうしてシオリと電車でどこかに行くのが、４ヶ月振りだと思い出す。初めてのデートの時も、こうして僕がシオリを座らせて、僕が前に立ち、東京へ行ったのだ。
電車は動き始める。
「でも、私達ヒラヤマくんから、このユニフォームはもらったけど、チケットの類は何も持ってないのよね。本当に入れるのかな？」
走行中に、マイがそう言った。
「あぁ、一応スタジアムに着いたら、関係者用駐車場の警備員にこれを見せろって言われてるんだ。それで観戦するために、簡単な条件をクリアすれば、タダで試合が見られるってよ」
そう言ってジュンイチは、どうやらスタッフＩＤのような、ポストカード大のカードをポケットから出した。
「その条件って、一体何だと思う？」
マイが僕に聞いた。最近先読みの精度が上がっていると言われる僕なら、何でもわかると思われているのか。

「さあな、少なくとも、僕かジュンイチでないと駄目な条件だろう。二人はそれが終わるのを待っていればいい」

今の僕はそれくらいしかわからない。生憎僕は仙人じゃない。

「それより、今日のユータ、多分かなりいい試合すると思うぞ。それに期待してろよ」

ユータはもう、浦和レッズに合流して、練習を終えて、スタジアム入りをしている頃だろう。だから僕達とは別行動。

ユータは今日の試合、先発が濃厚らしい。Ｊリーグは今日で９節目、ユータはそのうち交代で既に５試合に出場しているけれど、いずれも後半３０分過ぎからの出場で、上手くボールと絡めないまま試合が終わっている。正確な記録を用いれば、出場時間３７分で、無得点だ。

これからリーグ戦も始まって、日程もタイトになる。だから今日は、レギュラーフォワードを休ませる布陣で挑むのだろう。

あいつは数日前から気合が入っていた。二日前、埼玉高校の練習試合に３０分だけ出場した時、僕に、パスをどんどん回してくれ、と頼んだ。その結果、ユータは前半３０分でハットトリックを達成してしまった。

いいイメージで試合に臨めそうだ、と昨日ユータは言っていた。僕自身もこの試合、ユータの爆発に大いに期待していた。ユータがこの試合活躍すれば、一気にレギュラーの道も開けてくるだろう。

大宮駅に着くと、僕達と同じ、赤いユニフォームを着た人を、ホームで沢山見かけた。僕達はその人が進む流れについていき、簡単に人ごみに埋没することができた。

浦和美園駅に着くと、開場時間を過ぎたばかりなのに、多くのサポーターが既に入場口で列を作っていた。

「すごい人だね」

僕達の前を歩くマイもプロサッカーを身に来るのは初めてみたいだ。目を丸くして、その光景を見る。

「はぐれるなよ」

ジュンイチはそんな彼女の手を握る。
「ほら、お前等も手をつなげよ。人ごみではぐれたら、面倒だろ」
「あ、ああ……」
そう言われ、僕は何ともぎこちなく、シオリの手を握る。
「……」
僕はいまだに人前だと、シオリとこうして手をつなぐのに照れてしまう。今まで誰かに甘えるということをしたことがない僕は、意外に羞恥心が人一倍強い人間だということを知った。
いい加減慣れなくてはいけないと思う。僕が照れると、それはシオリにも伝染する。案の定、シオリも僕に手を握られて、手がしゃちほこばっているのがわかるし。
「さて――ユータの奴、スタジアム裏の駐車場の入り口で、これを見せろ、って言っていたけど」
僕達は、人込みの中、はぐれないように、この中で一番背の高いジュンイチを先頭に、スタジアムの外周を時計回りに歩く。
やがてスタジアムの突き当たりに行き着く。関係者用の駐車場入り口は、柵が置かれて封鎖されていて、その前に中年の警備員が立っている。
「あの、すみません。ヒラヤマ・ユータ選手に、これをここで見せるように言われたんですが」
ジュンイチが持っていたＩＤパスを警備員に見せた。
「ん？　失礼だが、君達は？」
警備員は僕達をしげしげと見つめる。すごい、ニットで髪型を隠していると、ここまで気付かないものか。
僕とジュンイチはお互い顔を見合わせ、それからニット帽を取った。
「あ――こ、これは、し、失礼しました！　どうぞこちらへ」
警備員は敬礼して、僕達を柵の中へと迎え入れる。
いつから僕は、自分よりはるかに年上の人に敬礼される程偉くなったのだろう、と思う。

柵の奥の駐車場は、もうスタジアムの中だ。天井は遮られ、中は暗い。電灯の光が中を照らしている。

僕達を通してくれた警備員が、持っている電話でどこかに連絡を取っていた。それを切った後、少々お待ちください、と言われる。

そして、2、3分程して、僕達の前に、スーツ姿の男性がやってきた。背が高く、体ががっしりしている30代後半の男性――間違いない、この人、元サッカー選手だ、と僕は思った。

「やあ、お待ちしておりました」

簡単に挨拶をされ、その男性はまず、僕達を一瞥した後、もう一度、ちらりとシオリを見てから、何故か僕に名刺を渡してきた。この中で僕が代表っぽく見えたのか。それよりも高校生相手に名刺渡しても仕方ないだろう、という疑問を抱きつつも、それでこの人が、浦和レッズの広報担当者であることがわかった。

その人に案内されて、僕達はスタジアムの中へ入る。

「うわぁ……スタジアムの中って、こんなになってるんだ」

マイは声を上げて周りを見回す。シオリも声を出さずにキョロキョロしている。さながら社会科見学だ。

しかし、ここは僕達がいつも試合をする時に入る、選手通用口じゃない。会議室やレセプションルームといった、関係者用の通路だ。勿論僕達もスタジアムのこんな所を通るのは初めてだった。

歴代のユニフォームや、過去に取ったタイトルの盾などが展示されている廊下を通り過ぎて、後方の人が僕達をその奥のエレベーターに乗せた。IDを通さないと動かないエレベーターだった。カードをスキャンするとエレベーターが閉まり、上昇する。

エレベーターが再び開くと、まるで一流ホテルのワンフロアのように、絨毯のしかれた静かなフロアになった。広報の男性がその目の前の、どれだけヤスリをかけたのだろうと言うほどに滑らかな光沢のある木製のドアを開け、僕達を中へ招き入れた。

「うお」

ジュンイチが感嘆のを上げた。

そこは8畳程の部屋だが、目の前が大きな強化ガラスになっていて、その前に机が据え置きになっている。そしてガラスの先には、35000人は収容できるこのスタジアムの大パノラマが広がっていた。照明に照らされたスタンドは、サポーターがスタンドを真っ赤に染めていて、その赤には、サポーターの力強さが宿っているように見えた。

「すげえ！　もしかしてここってＶＩＰ席？　代表監督とか、負傷して欠場してる選手が見てるところで、たまにニュースで映っているところですよね？」

ジュンイチが広報の人を振り返る。広報の男性は頷く。

「……」

選手の知り合いだからって、わざわざＶＩＰ席で試合を観戦させてくれる？

ははは――マジかよ。

それだけでユータの言う条件というのが何であるか推し量れるというものだった。

とは言っても、流石に僕も、その席には度肝を抜かれていたけれど。マイもシオリも物珍しそうに、その眼下の真っ赤なスタジアムを見渡していた。確かに庶民じゃ二度と出来ない経験だろう。

その時、僕達の後ろのドアが開く。

実に麗しい外見をした、スーツを着た大人びた女性が、子供をあやすような柔らかい笑顔を向けて入ってくる。

ご丁寧なことに、軽食に飲み物までタダでつけてくれると言う。

女性はその注文をわざわざ訊きに来たのだった。

「……」

それよりも僕は、さっきから会う人会う人が、さりげなくだが、僕の横にいるシオリをちらちらと窺っているのが、ひどく気になっていた。事情を察しているのか、追及する人はいないのだけれど、何とも弱みを握られているような感じだ。

「それで、ここに連れてきて頂く条件というのは、一体何なのでし

ょうか」
僕はそんな視線にも焦れたのもあって、先にそう切り出していた。あまりにもてなされすぎると、その後その条件を飲む際に、色々不都合があっても嫌だし、面倒ごとは早々に片付けたい性分なのだ。
「……」
広報の男性が僕を見る。
「いえ、条件と言いますか、我がクラブのＧＭと会長が、あなたに是非お会いしたいと申しておりまして。もしよろしければ、お会いしていただけないかと思いまして」
「……」
やっぱり。そうだと思ったんだ。僕は天井を仰ぐ。
「僕だけですか？」
「ええ。恐らく、込み入った話になると思いますので」
「……」
その『込み入った話』とやらの内容も、大体想像がつく。
「――分かりました。試合後でいいですか」
僕は頷いた。
「え？　会うのかよ、ケースケ」
ジュンイチが意外そうな顔をした。ジュンイチも、その『込み入った話』とやらの内容を、既に理解しているのだろう。
「あぁ。多分会っておいた方がいいと思うからな」

Ｓｔａｄｉｕｍ（後書き）

この話に出てくる浦和レッズというチームも、埼玉スタジアムも実在するものですが、名前を借りただけで、実際のものとは異なります。背景描写も、作者自身一度行ったことがあるだけなので…

ちなみに作者は実際のＪリーグではＦＣ東京が好きなので、味の素スタジアムの方が埼玉スタジアムよりもよく行ってます。

Ａｄｖｉｃｅ

僕達はその後、ＶＩＰルームで試合開始を待っていた。

僕達４人が座るテーブルの上には、フライドポテトやホットチキンといったジャンクフードに飲み物が、さながらホームパーティーのように盛りだくさんに置かれている。これが全部タダだというんだから、どこまでも気前がいい。

浦和レッズは現在８戦して、５勝２分け１敗のリーグ６位、リーグははじまったばかりとは言え、ここで負けると下位に落ちてしまうし、勝てば首位争いに参戦できる。序盤の大事な意味を持った試合といえるだろう。相手は現在３位のチーム。勝てばこのチームと順位が入れ替わる。

広報の男性は、この部屋に１人、スタッフを残した。このクラブに勤めている人間で、一番歳が若いと思われる、まだ子供っぽさを残す女性だった。

用がある時は、この女性に何でも言え、とのことだ。ドリンクのお代わりも受け付けると。別にそれだけなら、ここにずっといる必要はないと思うのだが、これがＶＩＰ席の決まりなのだろうか。

だけどその女性も、やはりサッカークラブに勤めている以上、サッカーが好きだし、何よりこっちには、人懐っこさなら天下一のジュンイチがいる。僕達ともすぐに打ち解け、一緒に観戦することに、別に嫌悪感を抱くことはなかったけれど。

やがて先発発表になると、シオリとマイは、広報の男性が持ってきてくれたオペラグラスを覗き込んだ。

「フォワード、ヒラヤマ・ユータ！　背番号９！」

大音量で名前が呼ばれると、スタジアムのビジョンにユータの満面の微笑を浮かべた写真が映された。浦和には日本代表選手もいるのに、この試合一番の歓声がユータに送られた。

「ヒラヤマくん、サポーターからすごく期待されてるんですよ。顔

もいいから、うちに新たな女性ファンがつくよう、彼中心のキャンペーンを企画中なんです」

クラブの女性がそう説明してくれた。

日本で１８５センチもあるフォワードはそうはいない。それだけでも期待されて当然だ。おまけにこの半年でユータは高校の全国大会で、大会得点記録を大幅に塗り替えた上に、Ｕ‐２０ワールドカップアジア予選の得点王まで獲得したのだ。僕と違って、この半年で最高の実績を積み上げたのだ。

選手入場シーンでユータを見た時は、さすがに少しテンションが上がった。いつも学校で僕達と一緒にいる奴が、こんな大観衆の中、プロとしてこの舞台に挑んでいるのだ。

「よかったら、サクライさんとエンドウさん、この試合を解説してくれませんか？」

試合開始前、両チームが自陣で円陣を組んでいる時に、クラブの女性が言った。

「世代別日本代表クラスのお二人の解説なら、お連れ様もサッカーを見やすくなると思いますが」

「……」

「ま、素人視点でいいなら、そうしようぜ。女性陣のためにも、さ」

「――ああ」

僕はジュンイチに促されるように返事をする。まったくマメな奴だ。彼女のマイのエスコートも、僕と違ってちゃんとやる男なのだ。

「浦和はツートップにスリーバック。相手は――４‐３‐３か。フォワードを3枚置いて、サイドバックが攻撃を仕掛ける、超攻撃的布陣だな」

僕もご丁寧に解説してやる。サッカー歴僅か2年の男が、偉そうに他人にサッカーを語る滑稽さに、腹の奥で自嘲しながら。

序盤は全くの互角。一度ユータもセンタリングを前に落として、もう1人のフォワードに決定的な場面を作ったが、その選手がボールを上手く捉えられず、ゴールにならず。その直後、相手のゴール

キックからサイドに回され、中盤はサイドにパスを選択、相手は浦和のサイド深いところまで切り込んでくるが、残念ながらボールが長すぎて相手も触れず、ゴールキックになる。
「いい試合だね」
マイが言った。
「ああ。両方とも序盤はいい形で試合に入っている。特に浦和は、相手の攻撃を守り通す守備の意識がいい方向に出ているな」
ジュンイチがそれに賛同する。
「――どうかな」
僕は呟く。
「え？」
「僕は浦和は前半のうちに失点すると思うぞ。多分、ミドルシュートか何かで」
「何で、そう思うの？」
隣にいるシオリが、僕の横顔を見た。
「浦和の左ボランチだよ」
僕は視線を注目の選手に向ける。
「ああ、あの選手はまだ２０歳で、まだ2年目ですけど、期待の大きい選手なんですよ」
クラブの女性が説明してくれた。
「あの選手が、何か？」
「あの選手、相手の中盤がサイドにボールをはたくと、それをカバーしに、1、2歩ボールを追いかける癖がある。スリーバックを敷いている以上、相手のサイド攻撃をしのぐには、最終ラインの人数が足りない。中央の選手がサイドをある程度カバーする必要があるが、少しその意識が強すぎるようだな。度々中央に大きなスペースができるんだ。本の一瞬だけどな」
「ええ？　そうか？　俺はあまり気にならないが」
ジュンイチも賛同しかねるようだ。確かにそれだけ僅かな隙だった。

「まあな、だがあの隙にそのうち選手か相手の監督が気付くさ。あのボランチがサイドにつり出された時、サイドの選手が素早く中央にパスを入れたら一気に……」

僕がそう言いかけた時、場内がどよめいた。

相手のトップ下の選手がボールを受けると、すぐにボールをサイドに送り、そのボールをボランチが2、3歩追いかけた時、もうサイドバックはそのボランチの眼前にいて、そのまま前にスルーパスを出した。

浦和のボランチとディフェンダーの間には大きなスペースができてしまい、パスを出した瞬間に、そのスペースに向けて走り出していたトップ下の選手がそのワンツーパスを受け取ると、ディフェンダーがシュートコースをふさぐ前に、シュートを打った。無回転のシュートは不規則な軌道を辿って、ゴールキーパーにほとんど反応をさせずに、ゴールに突き刺さった。

「……」

VIPルームの僕以外の4人は、悲鳴にも似た歓声に包まれたスタジアムを呆然と眺めてから、また僕を見る。

だが、僕を見られても困る。クラブ関係者がいる場で、そのクラブチームが失点する事を予言し、それを的中させてしまったのだ。僕だって、出来ればそうなってほしくはなかったのだ。

「1点決められたくらいで、皆そんな顔をするな。まだ前半20分だし、立て直しをするにはいい時間だ」

僕はそう言って、僕に向けられる視線をはぐらかした。

前半、それ以降は浦和もよく守り、相手に点を与えなかったものの、現状は先制点を取った相手の勢いを停滞させるので手一杯だった。前半のシュートはたったの3本だった。

「いやはや、まるで強豪相手の埼玉高校みたいな展開だな」

ジュンイチは皮肉めいてそう言った。埼玉高校は弱小ゆえに、強

豪と当たると試合当初は様子を窺いすぎて、後手に回る展開が多い。ジュンイチはそういうゲームを落ち着かせるために、守りに徹することに慣れているのだ。

結局浦和は失点以降、攻勢に回る事は一度もなかった。ユータもセンターサークル付近で守りに入る場面が増え、なかなかいい位置でボールに絡むことが出来なかった。

「これが埼玉高校のサッカーなら、守らないでいいから前で待っていろ、と言うところなんだがな。生憎まだ、守りを免除される程の信頼を、監督から得ていないようだな」

僕は言った。

「じゃあケー……サクライくんは、ヒラヤマくんを本当に信頼しているのね」

僕の言葉を聞いて、隣のシオリがそう訊いた。クラブの女性がいる手前か、名前を呼び直したのがちょっと寂しかったが。

「……」

何だか彼女が、最近ジュンイチの影響を受けてきた気がしてならないー嫌、それとも僕の影響か？　相手に恥ずかしい事を言わせたがる。

「――ああ、僕は勉強以外では、あいつを信頼してるよ。特にサッカーはな」

「……」

ほら、僕がこういうことを言うと、沈黙の後に失笑がくるんだ。

「なんか、いいですね」

だけど、失笑が来る前に、僕の言葉に素直に感動したクラブの女性が呟いた。

「サクライさんだったら、この試合に出場すれば、ヒラヤマくんの能力を引き出してあげられるんですかね……」

女性はそう続けた。

「……」

「サクライくんなら、前半見て、相手の弱点とか、ヒラヤマくんが

狙うところとか、見えた部分があるんじゃない？」
マイに訊かれる。
「――ないこともないけど、監督がその前に指示するだろう。現場を知らない外部から出す指示は、逆にあいつを混乱させかねない。それに、僕は素人だからな」
「でも、一応言うくらいならいいんじゃない？　参考にするかしないかは、ヒラヤマくんに任せちゃえば……」
シオリが言った。
「……」
僕は携帯を手に取り、要点を簡潔にまとめ、メールを送信した。
「へへへ、後で俺もあいつに、ケースケがお前のこと、心の友と書いて「しんゆう」と呼ばせてくれ、って言ってたってメール知るぜ」
ジュンイチが僕を見てにやついた。
「悪い、信頼はしているが、友達とは思ってないや」
「何で？　信頼しているのに、友達じゃないって、何で？」
ジュンイチが間の抜けた声がした。

後半になると、浦和はハーフタイムで戦術を立て直したのか、連動性の増したサッカーを展開するようになった。中盤でボールが上手く落ち着くようになり、ボールキープ率が相手を勝り始めた。
「ここからだな。ボランチがどうやって前にボールを運ぶか」
浦和のボランチがボールを持った時、同ポジションのジュンイチが呟いた。
「ああ、だが、ここでサイドに流すようじゃ、点は取れないな。もうユータのポストプレーからの攻撃は、相手が警戒しすぎてる」
僕が呟く。
その僕の言葉が通じたのか、ボランチはそのまま前線のユータに速いパスを出した。ユータは相手ボランチの前で走りながらボールを受ける。トラップが最高に良かったから、その一歩で相手ボラン

チを振り切ることができた。
スタジアムの大歓声につられるように、僕達４人も揃って、声にならない声が出た。
「よし、そのままぶっちぎれ！」
ユータが二人のディフェンダーの真ん中を抜こうとする。ディフェンダーは二人とも真ん中に足を出す。
しかしユータはスピードとパワーを併せ持った選手だ。少し態勢を崩したが、ボールも勢いは止まったものの、ディフェンダーの前を抜けて、かすかに前に転がった。
「今だ、打て！」
ユータは二人のディフェンダーを押しのけるように相手をすり抜け、、ゴール左隅にボールを蹴り込んだ。フリーで打ったすごいシュートが、１秒後、ゴール右墨に突き刺さっていた。
「うおおおお！」
大歓声とともに、ジュンイチが声を上げた。僕も、シオリも、舞いも思わず椅子から立ち上がってガッツポーズした。
ユタはそのまま、ゴール後ろのサポーターに向かって走っていく。
「やりやがった！　あいつ、やりやがった！」
ジュンイチが興奮覚めやらぬまま、僕の方を見た。僕達はそのまま二人、ハイタッチした。

結局ユータは、その後ヘディングでもう1点決め、浦和は2‐1で勝利した。
試合後のホイッスルが鳴ると、僕達も席を立ち、ＶＩＰ席から拍手を送った。いい試合だったと思う。シオリもマイも十分楽しんだようだ。シオリなんてユータが逆転ゴールを決めた時、一番喜んでいた。後半は終始ニコニコして試合を見ていたのが印象的だった。
勿論ユータははＭＯＭに選ばれ、お立ち台に立った。インタビュアーがクラブのマスコットキャラと一緒に、隣にやってくる。

「ヒラヤマ選手、プロ初先発で、初得点、初Ｖゴールとなりました！　今の気持ちは同でしょうか？」
「ありがとうございます！」
まだ興奮がおさまらないみたいだ。ユータの声は普段よりも上気していた。
「実は後半、この試合を見ていたケースケが、メールでアドバイスをくれて。ポストプレーは読まれているから、いくつか試してみるべき攻撃法を教えてくれたんですよ。まさかこんなに上手くいくとは思ってませんでしたけど」
ニコニコ顔でユータはそう言った。
「あの馬鹿――余計な事を言わないでいいのに。自分の手柄にしちまえばよかったじゃないか」
僕は手で顔を被った。
「ヒラヤマくん、あんまり嬉しくて、黙っていられなかったのね」
シオリが言った。
「……」
僕が沈黙した折節、ＶＩＰ室のドアがノックされ、ここに案内してくれた、後方の男性が入ってきた。
「ではサクライさん、これから１５分後に、社長とＧＭに会っていただきます。準備ができましたら、またここに来ますので、それまで待っていていただけますか？」
「はい」
僕はそう返事をする。
「他の皆さんには、この近くのレストランの予約を取っておりますので、サクライさんのお話が終わるまで、そちらでお待ちください」
広報の男性は、そういい残して、試合中ずっと僕達と一緒にいたクラブに勤める女性と共に、シオリ達を連れてＶＩＰルームを出て行き、その部屋には僕一人だけが残された。
スタジアムではインタビューを終えたユータが、味方サポーターの声援にこたえ、手を振っているところだった。

――そして１５分後、もう一度広報の男性が僕を迎に来る。そのころには選手はとっくに奥に引っ込み、サポーターが勝利の歌を高らかに歌っているところだった。

どうやら話をするのは、セキュリティーＩＤがないと入れないこのフロアの別室のようだ。

そのフロアの、分厚い絨毯の廊下を進んでいき、突き当りの部屋で広報の男性が立ち止まり、男性がドアをノックした。入ります、と断ってから、ドアを開け、僕を先に導きいれる。

とても明るく、２０畳はありそうな広い部屋だが、真ん中にテーブルと、向かい合うように二人掛けのソファーがある以外は、簡素な観葉植物が置かれているだけの殺風景な部屋だった。内輪だけの会議室といった感じ。

部屋で待っていたのは、僕の目の前、向かい合う形でソファーの前で立っている二人の５０代くらいの男性。

そして、僕に背を向ける形で、半見になって振り向いていたのは、まだシャワーも浴びずに、試合が終わって急いで着替えたばかりという様子のユータだった。

Ａｄｖｉｃｅ（後書き）

一応用語説明を追加…

ポストプレー…サッカーでフォワードが、ゴール前最前線でディフェンダーを背負ってボールを受けたり、センタリングをヘディングや胸で落として、走り込んでくる他の選手にアシストをしたり、ボールをキープして攻撃の起点を作るなど、前線に集めたボールをさばくプレーのこと。主に長身の選手が有利とされる。

ＭＯＭ…Ｍａｎ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｍａｔｃｈの略。その試合の最優秀選手で、プロ野球で言う、ヒーローインタビューを受ける選手のこと。

Ｎｅｇｏｔｉａｔｉｏｎ

「ケースケ」
部屋に入ると、ユータの笑顔が僕を出迎えた。
「どうだ！　今日のゴールは。なかなかだっただろう」
「ああ、そうだな。ナイスゴールだったよ」
随分とテンションが上がっている。それはそうだ。高校では練習試合を含めれば、２年で通産１００ゴールは決めているユータだが、プロになってからの得点は初――しかも、プロ入りしてから2ヶ月かかっているのだ。こんなに苦労して奪ったゴールも、こいつにとっては久し振りなのだろう。
「では、私はこれで」
広報の男性は、部屋を出て行く。
「サクライさん。お忙しい中時間を割いていただき、非常に感謝しております」
僕はユータの隣に立つと、前にいる男性の一人に、そう挨拶される。
その男性は、いかにも実業家然とした、小太りで、面の皮の厚そうな男で、営業スマイルが染み付いているといった感じ。その隣にいる男性は、それに比べるとずっと精悍な印象を持たせる、長身の男性だ。イイジマに雰囲気が似ている。
名刺を渡される。どうやら実業家風の男が、このクラブのスポンサー社長で、精悍な印象の男性は、このクラブのＧＭのようだ。この顔つきを見るに、恐らくこのＧＭも、元サッカー選手だろう。
握手を交わし、ソファーに座るように促され、僕はソファーに腰掛けた。ユータも僕の隣に座る。
その時、部屋の横の扉が開いて、お盆を持った女性が入ってくる。
その女性は、僕達とさっきまでＶＩＰ席で試合を見ていた女性だった。

「粗茶ですが、どうぞ」
女性は僕達の前に、お茶を置いていく。
「彼女は私の秘書です」
社長がそう言った。
「……」
なるほど。
「どうやら、私は監視されていたみたいですね」
僕は座ったまま、顔を上げる。
「……」
その言葉を聞いて、二人とも僕の考えを理解したようだ。
「どうやら、我々の用件がわかっているようですね」
「はい」
返事をしてから、僕は背を正す。
「高校生の私が言うのも口幅ったいですが、変に期待をさせても悪いので、あらかじめ言っておきます。私が今日、この場に来た理由は、ユータの顔を立ててのことです。勿論お話は誠心誠意拝聴致しますが、私の返事に、過度の期待はしないでください」
「はは――それで十分ですよ。我々も、あなたという人がどんな人なのか興味がありましてね。ヒラヤマに頼んで呼んでもらったのですから」
GMが言う。それを聞いて、僕はユータの顔を見ると、ユータは困ったような顔をした。
「じゃあ、単刀直入に、簡潔にお話しましょう」
社長が咳払いをする。
「サクライさん、もしあなたがよろしければ、是非我がクラブに入団していただきたいのです。勿論指定強化選手で構いません。あなたが進学して勉学に励みたいという意思があるのであれば、それを尊重します」
「……」
予想通りの話の展開だった。

「私もクラブに携わる人間として、社長にあなたの獲得を熱望しました。あなたはもう名実ともに、現在高校生ナンバーワンのプレイヤーでしょう。スカウトからの情報と、スカウトが撮ったビデオを何本も確認して、私はそれを確信しています」

GMがそう言った後、一冊の雑誌を出し、僕の前に出した。

それは一冊のサッカー雑誌だった。開かれたページには、僕とユータのことが書かれていた。

『サッカーは連携のスポーツとされる。どんなに突出した能力があっても、1人だけで得点をすることは難しい。何よりそれは力押しで、観客は美しいと感じてくれないだろう。洗練されたチームプレイが織り成す華麗なパス回しで、相手チームを翻弄しながらゴールを奪う様は、見る者を惹き付け、美しいと感じさせる。そのようなプレーこそ、サッカーの醍醐味ではないだろうか。

ヒラヤマ・ユータとサクライ・ケースケは、現在プロも含めて、日本で今一番美しいゴールを量産するコンビである。

大の親友同士の上、高校入学から朝練習で何百万本もサクライの上げたボールをシュートする練習を繰り返してきたヒラヤマ。加えて、サクライの頭脳はヒラヤマの動きの癖も頭に入っている。ヒラヤマのように、前線で自由に動きたがるタイプのフォワードには、打ち合わせはあまり役には立たない。この癖を知っていることで、ヒラヤマは前線で自由に動くことが出来、ゴールを奪うことに専念できるのである。

埼玉高校の今年の試合で、サクライとヒラヤマが同時にピッチに立った試合時間は４８２分で、約１０試合分、ヒラヤマだけが出て、サクライが不在の試合が３５３分で６試合分だが、サクライが出ている時のヒラヤマの得点が、２１ゴールなのに対し、サクライが不在になるとヒラヤマのゴールは7ゴールに激減してしまう。勿論埼玉高校には、サクライを除けば、パサーがゼロになってしまう影響もあるが、このデータは興味深い。

ヒラヤマは個人技でも十分ゴールが狙えるフォワードだが、その

真価は、後ろに控えるサクライとの、息の合ったコンビプレーにある』

「……」

「これから我々は、ヒラヤマをどんどん公式戦で使っていこうと考えています。その力を、あなたに引き出していただきたいのです。あなたはもう日本のプロで十分通用します。それに今日、うちの失点を予言し、ヒラヤマへの少しのアドバイスで、2得点へと結び付けてくれたじゃないですか。私はその、最近『竜眼』と呼ばれだしたあなたの先読み能力も、このチームの大きなプラスになると考えました。対応できるポジションも多く、うちに不足するフリーキッカーでもある」

「……」

僕がその記事に目を落としていると、隣の社長がその横に、もう一冊、雑誌を置いた。サッカーマガジンに比べると、挿絵もない、活字ばかりの雑誌だ。

「私があなたの獲得に興味を持つ理由は、サッカーの技量も勿論ですが、何と言ってもこれです」

雑誌を指差しながら言う。どうやらこの雑誌は、経済書のようだ。

『普段は物静かな性格だが、ピッチに立つと、その大人しい外見とは裏腹に、炎のような闘争心を見せ、ゴールが決まれば、まるで子供のように大喜び。スポーツマンである反面、勉強家でもあり、天才にありがちのひねた感じもない――』

そんな若干17歳の少年、サクライ・ケースケに、各業界が注目している。

現在、『恋人にしたい有名人』『息子にしたい有名人』ランキングで第一位に輝くサクライ。その最大の魅力は、普段あまり表情を変えない彼が、サッカーで味方がゴールを決めた時に見せる、あの笑顔にある。彼の無邪気なまでに澄んだ笑顔は、世の女性の心を癒す雰囲気を持っている。事実、その笑顔見たさに、埼玉高校のグラウンドは、練習でも多くのギャラリーが集まっている。

現在、彼の笑顔の魅力は、同世代のアイドルを優に凌ぐとされている。そんな彼をCMに起用すれば、その経済効果は数億、数十億になるといわれている。しかも高校生で、事務所もないため、起用にはほとんどお金がかからない。各企業にとっては、サクライはCM起用の垂涎の的の存在になっている。

各媒体も、ほとんどメディアに顔を出さないサクライの交渉に必死だ。あの天才児のルーツや、考えていること、それは現在国民の関心の的であり、潜在視聴率はナンバーワンだ。彼を取り上げたドキュメンタリーや、スポーツ、クイズ等、使えるジャンルも幅拾い上に、どれをやっても高視聴率が間違いない。

しかし、当の本人はどうしたことか、スポーツニュースのインタビューに少し答える以外のメディア露出はゼロに等しい。ブログやツィッターもやっておらず、彼の考えは全く配信されていない。それが彼の無口で謎めいた魅力をさらに高めている側面があるのも事実だが、彼も天才であるならば、現在の自分の市場価値を理解しているだろう。

何故彼がメディアに顔を出そうとしないのか。筆者としては、市場価値が上がり続けている今だからこそ、大々的に表に出るべきであると思うのだが……』

「……」

「あなたはサッカー界に突如現れた、高いカリスマ性を持った選手です。君の舞を踊るような華麗なプレーもそうですが、あなたとヒラヤマが親友同士なのは、周りも周知の事実ですし、二人のコンビはチームの目玉になります。何よりあなたの笑顔はお客を呼べる。今日もヒラヤマがゴールを決めた時、あなたはその笑顔を見せていたと秘書から聞いています。私はそのあなたの笑顔に、チーム浮上のきっかけを見たのです」

「……」

客を呼べる、か――ストレートに、金になる、と言わないのは、僕が高校生だからか。

確かに僕は未成年だけど、それくらいの大人の事情は理解しているつもりだ。生きるためにバイトをしていたから、金銭感覚は他の高校生よりはあるつもりだ。

それに、僕がプロでどの程度通用するかしないかは、正確な数値化は出来ないけれど、言っていることは、基本線は間違ってはいない。ユータをチームに抱え込んだ以上、埼玉高校サッカー部がこれだけ世間の注目を集めている今、僕も揃えてコンビとして売り出すことに魅力を感じないわけがない。日本のサッカークラブはその大半が赤字クラブなのだ。チームの目玉を何か作りたいのは当然だ。恐らく僕がこの社長の立場でも、そうすると思う。

「もしうちに来てくれたら、うちはこれだけ契約金をご用意いたしますが」

そう言って、社長は上等そうな万年筆で、手近なメモ用紙にさらさらと数字を書いて、僕に二つ折りで手渡した。

「……」

紙を開くと、そこには僕のバイト代30年分を優に越す額が書き込まれていた。トップ選手でも年俸がプロ野球の5分の1しかない日本のプロサッカー界では破格である。

さすがに隣のユータも最低限のエチケットは心得ている。隣にいてもその額までは覗き込んでこない。だけど、もじもじして、その額が知りたい、という素振りが見え見えだった。

「私などに、こんな契約を持ちかけるなど、過ぎたことです」

僕は紙を自分のソファーの肘掛に置く。

「ですが、このクラブの、私に対する熱意は、今日一日で十分理解したつもりです。だからこそ、私はこの契約を今お受けすることは出来ません」

「何故？　やはり勉学を優先したいからですか？」

GMが少しソファーから身を乗り出して訊いた。

「いえ、私個人の問題です」

僕はもう一度、背を正す。

「私はまだサッカーキャリアが2年しかありません。本来ならもう部活もとっくに引退しているはずで、大学でサッカーをすること、ましてや自分がサッカーでプロになるなんて事を、今まで考えたこともありませんでした。なので、今自分が置かれている現状に、戸惑っているというのが、正直なところなのです」

「……」

「勉学を優先したいとは言っても、私自身、大学に行って何をすべきなのか、具体的なことはまだ決まっていません。こう見えても私は、狭量な人生経験しかしてこなかった男でして……今は世の見識を深めるための勉強をしているといった段階なのです。ですから、こうして学生の傍ら、サッカーのプロになって、自分の今まで見たことのない世界を見て、経験することに、魅力がないわけではありません」

「でしたら……」

「ですが、私はこう考えております。プロというのは、職業なのだと。この世界で一生やっていこうとする覚悟があって、初めて立つべき資格がある場であると」

「……」

「残念ながら私には、まだその覚悟がありません。そんな人間がこのクラブのこのスタジアムのピッチに立つのは場違いでしょう。こうして熱意を持って私を誘ってくれる皆様や、他の選手、応援してくれるサポーターにも慇懃無礼極まりない行為だと、私は考えています。ましてこんな大金をもらうのであれば、尚更です。小遣い稼ぎや、学業のついでとして参加すべき場所ではありません」

「……」

沈黙。

僕の家には最近、プロサッカークラブの誘いも多数来ているが、こうしてそれを辞退する理由を話すのは初めてだった。だから、これを聞いて、相手がどんな反応をするかは、僕にはわからない。

だけど。

社長、ＧＭ共々、ほぼ同時にふっと笑顔を見せた。
「何とも、若いのにしっかりとしたお方だ」
「女性のような顔立ちをしながら、男気のある、豪胆なお答え、お見事」
そうして二人は僕に賛辞を送った。
「……」
「いや、実は我々も興味があったのですよ。ろくにメディアにも顔を出さないが、これだけ多くの人の心を捉える、サクライ・ケースケという少年は、どんな人物なのかと。是非お会いしてみたくて、ヒラヤマに言ってこうして無理に連れてきてもらいまして」
「ヒラヤマは、あなたの事を、会えばどんな人物か分かる、と言っていましたが、この短時間で、あなたのことが少し分かった気がします」
ＧＭがそう言ったので、僕は隣のユータを見る。だけどユータは空くに目をそらし、白々しそうな顔をしていた。
「あなたはまだ若いが、正義感と誇り高さを持った素晴らしい方です。龍の名に相応しい」
「……」
いくらなんでも誉めすぎだ。同じ龍の異名を持った孔明や上杉謙信と、僕が同等の人物になれたとはとても思えない。気恥ずかしくなった。
「ヒラヤマも、中学時代から高い評価を受けた選手でした。それがサッカーの弱小、埼玉高校などに行って、一時期評価が急落したのですが、今では他の同世代に敵なしといわれたフォワードになって、今年の冬、我々の前に再び姿を現しました。ヒラヤマの高校生活での急成長は、あなたのような気高い選手がいたおかげのようですね」
ＧＭが不意に、ユータの話を振った。
「そうですね。卒業までの間、うちのヒラヤマをもっと成長させてやってください」
社長もそう言った。

「……」
僕はもう一度、息を吐く。
「若輩者の戯言ですが、ひとつだけ間違いを指摘させてください」
僕は一瞬迷ったが、それを口にする。
「先ほど仰いました。ユータの力を私に引き出してほしいと」
「ああ……」
「ユータはその程度の男ではありません。こいつは将来、日本代表のエースになる男です。将来イタリアや、スペインやイングランドといったサッカーの強豪国のリーグで、世界のトップフォワードになる男ですよ」
「……」
「ユータはもう、私とばかり練習をすべきではありません。こいつのためにも今は私がこのチームに入るべきではないと考えます。私がいると、ユータの真の力が目覚めない可能性があるので」
「……」
日本人がイタリアやスペインでトップ選手になるなんて、まだまだ前人未到、夢のまた夢だ。それを、頭のいい僕があまりに自信たっぷりに言うので、目の前の人間は、面食らったようだ。
「はははは！」
目の前の二人が笑った。呆れたのか、それとも僕の言葉に何かをかんじたのか、それはわからないけれど、豪快に笑った。
「一理ある。私達とてヒラヤマにはもっとやってもらいたいと思っていますからね。確かに、あなたがいなければ真の力が出せない、といったのでは困る」
GMが言った。
この短時間で、こんな笑顔を引き出せたことは、大きかった。何とも和やかな雰囲気になり、僕も自分の意見を言いやすくなった。
「卒業までにはある程度の返事をいたしますので、今のところは少しお待ち頂けないでしょうか。勉学優先とは言っても、私もサッカーが嫌いというわけではありませんし、大学でサッカーを辞めると

決めたわけではありません。サッカーをやるべきと考えれば、私はサッカーをやりますし、その時はこのクラブへの入団を前向きに考えさせて頂きます。私としても、ユータと一緒にやれる環境には、魅力がないわけではありませんから。勿論、私が入って、こいつの成長の邪魔にならなければ、ですけど」

今日のところは、これで十分だろうと思い、僕は話をまとめた。

「母は、こりゃヒラヤマ。お前には残り半年で、何段階もレベルアップしてもらわなくちゃなぁ」

ＧＭがユータに皮肉っぽく笑いながらいった。

「サクライさん、その言葉を訊けただけでも、今日は我々には非常に有意義な時間となりましたよ。あなたの考えが少し理解できて、本当によかった」

社長のその言葉が、今日の会合の終結の言葉となった。

Ｍｅａｌ

僕は一礼して、ユータと共に会議室を出た。
僕達は二人、関係者用フロアの長い廊下を横断し、ユータ持参のＩＤパスでエレベーターを作動させて、オフィスフロアに降り、そこから選手通用口に入って、グラウンドに出てみた。
試合終了後のスタジアムは、もう観客は１人もおらず、アルバイトが客席の至る所に散っていて、せわしく掃除をしている。照明は節約のためか、試合中よりはずいぶん落とされているけれど、まだピッチは眩しい程に明るい。
時計を見る。試合開始が夕方５時で、今は７時半。
「シオリさん達は？」
選手通用口からピッチを見渡してから、隣にいるユータに訊いた。
「ああ、多分お前の話が終わるまで、スタジアム見学に案内されてるんだろう。多分最後はこのピッチに出してもらえるんだろうし、ここに来るだろうよ」
「そうか」
僕はピッチに目をやる。ピッチも芝の手入れなど、整備が行われている。同じ芝でも、専門のキーパーのいない埼玉高校の芝とはえらい違いだ。緑が映えている。
僕達は選手通用口の横にあったベンチに二人腰掛けた。
「すまなかったな。だまし討ちみたいな事をしてしまって」
壁に寄りかかって、ユータは僕に謝った。
「気にするな。お前にも立場があるんだろう。それを立ててやるくらいはするさ」
そう、連日僕の家にも、プロサッカークラブのスカウトが来るのだ。ここだけが僕に興味がないということはないと考えるのが普通だ。ましてユータを抱えている以上、是が非でも僕が欲しいと思うのが普通だ。コンタクトを取るなら、使える駒であるユータを使お

うと考えることも想像がつく。ユータだって立場上断れないこともあるだろう。

「それよりも、プロ初ゴール、おめでとう」

僕はユータに言った。

「どうだ？　プロは大変か？」

「そりゃもう。あたりも高校とは比べ物にならないし、何と言ってもコミュニケーションがな……俺の癖を読んでるお前がいないのはでかいよ。なかなかしっくり来るパスってのはもらえないもんだな」

ユータは苦笑いした。

「全く――こんな世界、中学で十分やっていけると思っていた俺は、甘かったよ」

それからしばらく間を置いて、ふっと思いに耽るような顔で言った。

「ケースケ、最近のお前を見ていると、3年前の俺を思い出すよ。俺も3年前の中3、ここよりもっと小さいクラブだけど、プロの誘いもあったんだ。サッカーの強豪校からも沢山誘われて。俺はバカだし、猛勉強もしたくなかったから、その誘いに乗ろうとしたけど、親が高校に行け、って反対して。俺も相当進路に迷った」

「……」

「俺は中学までは、女の子にモテたせいもあるけど、あまり野郎と意思疎通をするのが苦手だった。何より俺のワンマンチームだったし、チームメイトの大切さも分かってなかったし、チームメイトも俺におっかなびっくりパスを出してくれるだけで、パスに信頼関係なんて、全然なかった」

「……」

「きっと、そんな中坊のままプロなんか入っていたら、俺は途中で潰れてたかもしれない」

それからユータは、ほっとしたように笑った。

「本当、埼玉高校で充実したサッカー人生を送れてよかった。ゴール決めた時、埼玉高校を受けると決めた時から今までのことが、い

ろいろ頭をよぎったよ」

「……」

その笑顔の中に、何となく憂いのようなものが混じっているのを、僕は何となく感じた。

それは、何だか初恋を思い出すような表情で――僕にはその表情の意図は読めないけれど。

きっと、ユータが埼玉高校を受験すると決めた経緯に、何か大切な人の存在があるのだろう。または、あった――もう過去形なのかもしれない。

いずれにせよ、3年前のユータが、自分の生きる道を真剣に悩んで、その決断が今の道に続いていたことは確かだ。それは友として、とても喜ばしいことだった。僕も今、自分という人間と向き合う作業を続けているので、そんなユータの姿に、少し勇気をもらえたような、そんな気になった。

「嬉しそうだな、今日のゴール」

それを見て僕は言う。

「ああ、そりゃ、長年追い求めた夢の舞台だからな。ゴールを決めたことで、夢がひとつ叶ったってわけだ」

「……」

夢、か――

僕は生まれて一度も、夢を持ったことがない。生きがいも、希望も、そんなものの存在も知らない。

怒りや憎しみに突き動かされて、その対価に力を手にしたけれど、それはこれっぽっちも、自分の生きる意味になりえなかった。

だけど、心がそんな負の感情から解放されて、最近しきりに思う。

僕も、夢や希望というものを、持ってみたい、と。

「ま、俺は一試合でもいいから、お前とプロとして、同じピッチに立ちたいってのも夢のひとつだったんだけどな。それはちょっと厳しそうだな」

「――すまない」

「いや、いいさ。お前も色々悩むところがあるんだろ」
「……」
「しかし、プロとして生きて行く決意のない人間が、プロのピッチに立つのは失礼、か――全く、ストイックと言うか、武士道精神って言うか」
ユータは呆れるように溜息をついた。
「俺はそれ、お前のいいところだと思うけどよ。恋愛においては、それって短所だよな」
「え？」
「お前がそうして自分に厳しいと、なかなかシオリさんはお前に甘えられないだろ」
「……」
「あ、ユータ、ケースケ」
ふと声がして、僕達は揃って選手通用口の入り口を見る。
クラブの人間に連れられて、ジュンイチ、マイ、そしてシオリがこちらへ歩いてくる。それを確認し、僕達もベンチから立ち上がる。
「ユータ！　やったじゃねぇか！　プロ初ゴール！」
ジュンイチはユータの肩を組む。
「ああ、おかげさんでな」
そんな祝辞もそこそこに、ユータは「後は俺に任せてください」と、クラブの人間をオフィスに帰した。
「さて、じゃあプロ初ゴール祝いだ。どっかでパーッとやろうぜ」
皆で騒ぐことが大好きなジュンイチが言った。
「悪い。俺はこれからクラブハウスに戻って、今日の試合の反省会なんだ。多分皆今頃待ってるだろうし、急いで帰らなくちゃ」
ユータは頭を掻いた。このクラブでユータはおそらく最年少だろう。なのに一人遅れていくのだから、あまりいい気分ではないと思う。
「ま、今日は応援してくれたお礼に、俺からのスペシャルプレゼントだ」

そう言ってユータは、僕とユータにそれぞれ小さな紙切れを渡した。手書きの簡単な地図と、なにやら店の名前が添えられている。
「レストランをそれぞれ個室で予約してるからな。二人とも彼女を連れて、それぞれ水入らずで楽しんでこいよ。もちろん代金はクラブがもう払ってるから、タダだぜ」
「……」

スタジアムから漏れる光が照らしていて、道は夜でも明るいけれど、もう閑散としているスタジアム前で、僕はジュンイチ達と別れ、シオリと二人、地図を頼りに歩き出した。
「しかし、レストランを予約してくれるなら、試合中にあんなに食べ物を出してくれなくてよかったのに」
「ふふ、エンドウくんが特に一杯食べてたもんね。レストランの食事、おなかに入るのかな」
「大丈夫だろ、図体はあるんだ。その分エネルギーも使うしな」
シオリに合わせて歩幅を狭くして、それでも10分も歩けば着いた。看板を見て、地図に書いてある店と確認するけれど、看板だけだとそれが何料理の店だかわからない。
店に案内されると、店員はどうやら僕に気がついていないようだった。予約した名前も、サクライでも、ヒラヤマでも、浦和レッズでもないから、一度気がつかなければ、恐らく最後まで大丈夫だろうと思われた。
個室に通されると、丸いテーブルに、白のテーブルクロスが敷かれて、ナイフとフォークが横に広がるように何本も置かれている。真ん中には、底の浅い小さなガラスボウルに、アートフラワーが生けられていて、その横にガラス管の中で火が灯るキャンドルが置かれていた。間接照明で、少しムーディーな雰囲気。
「コース料理か。食べたことないな」
今まで作法とはまるで縁のない生活を送ってきた僕は、シオリに

恥をかかせたらどうしよう、と、まず思う。
「私もない……緊張するなぁ」
シオリは首を傾げて、困ったような顔をした。
「……」
でも、こういう時のシオリの笑顔を見ると、何だか僕はいい具合に肩の力が抜けてくる。
その後、店員がデキャンタでグラスに注いだものが、グレープジュースだったのを見て、僕は一気に気が抜けた。こんな店でワインでも空けたら格好もつくが、僕達はまだそんな格好もつけられない未成年なのだと思って、マナー云々には開き直ってやろうと思うことにした。
「じゃあ、まあ、乾杯」
「乾杯……」
とは言え、奢りなのだ。それに敬意を表して、僕達はグラスをカチンと鳴らした。
オードブル、スープ、そして魚のメインと料理は続く。
シオリは手は小さいけれど、指は長くすらりとしていて、不安がっていたナイフとフォークの使い方も、そんな手と相まって、とても綺麗に見えた。かちゃかちゃ音も立たなかったし、魚の身のほぐし方も、とても優雅だった。
それに比べると、僕は随分とぎこちなかったと思う。魚なんて、コンビニの幕の内弁当の塩鮭くらいしか食べない生活観がかなり出てしまったと思う。
困惑する僕を見て、シオリはくすくすと笑っていた。
「可笑しいか？」
僕は訊いた。
「ううん、何でもないの」
「……」
彼女がそうやって、朗らかに笑っているのが救いだった。高飛車な女だったら、きっと嫌な顔をしたと思う。

だけど、この笑顔はジュンイチの影響かな。あいつ曰く、僕には少し困らせたくなるオーラが出ているらしい。シオリも僕が困惑する姿を見るのが面白いのかもしれない。

僕もシオリも、そんなに食べるのは早い方じゃないから、コースの進み尾が悪く、その分話す時間が増えた。

こうして二人、外で食事を取るなんて、多分4ヶ月はしていなかったと思う。最近は僕が部活で忙しくて、電話でも話す時間が減っていたし、前にもまして彼女と過ごす時間は大切に思えるようになっていた。恐らくそれを察して、今日気を効かせてくれたユータにも、心の中で感謝した。

「お話って、やっぱりプロ契約のこと？」

ふと僕の、先程の会談の話題になった。

「ああ」

僕はすぐ認める。彼女自身の口の堅さは信頼しているし、彼女に隠すことでもない。

その会談の経緯をつぶさに説明し、一応保留にしてもらった事を、きちんと説明した。

「契約金で、これだけ用意するって」

僕はジーンズのポケットから、先程の会談で渡された、契約金を記した紙を鳥出し、シオリに見せる。

「えぇ……」

すぐに動揺が顔に出るタイプのシオリは嘆息した。

「それで、とりあえず納得してくれた？」

「どうかな――」

僕は首を傾げる。

「自分探しなんて、実に甘ったれた嫌な言葉だ。主観的過ぎて、交渉のカードでは使えないかもな。ユータにも呆れられたよ」

「……」

沈黙。

「ねえ、ケースケくん。私、思うんだけど……いいかな？」

そう訊かれる。
「ん？　ああ」
僕は頷く。
「家族の事を、そろそろ話してみるのも、いいんじゃない？」
「……」
「まだ、エンドウくん達にも、話していないんでしょう？」

僕はまだ、ユータやジュンイチに、家族の事を話していない。
僕が家族から酷い目にあわされてきたことは、シオリ以外は誰も知らないのだ。
だから、それを知るシオリは、僕の一番の理解者だった。そんな生活だったから、今まで自分の事を考えたことがなく、夢や生きがいを見つけていない。そんな僕を知っているから、こうして周りからの誘いを受けず、ただ自分と向き合う作業に没頭する事を肯定し、応援してくれている。
「今まで――その、そういうことがあって――」
一瞬彼女の言葉が澱んだ。幸せな家庭に育った彼女は、僕の育った環境を１００％理解は出来ないということを、誰よりも悟っているのだろう。
そんな自分が軽々しくそこに触れていいのか、それに後ろめたさがあるのだ。自分の意見を言う前に、僕に一言断ったのも、僕に対する配慮だ。そこまで気を遣わなくていいのにと思うが、そこが彼女の奥ゆかしさ、彼女らしさなのだと思う。
「自分の人生を、深く考える余裕がなかった。今はそれが考えることが出来るようになってきたから、少し自分と向き合う時間が欲しい、って。そう言えば、きっと理由として筋が通るし、きっとみんな、あなたの決断を分かってくれるんじゃない？」
「……」
何も知らない人は、僕の力だけを見て、僕を当代の英雄だと思うだろう。でも実際は違う。実際の僕は人前に出るには酷く未成熟で、感情も発達していない。力と感情のバランスの取れていない、とても不安定な人間だ。
そんな未熟な僕を、シオリ以外は誰も知らない。僕が自分の事を表で話していないことで、最もイメージと現実が乖離している部分

はここだ。
「せめて、ヒラヤマくんやエンドウくんには、家族の事を話してもいいんじゃないかな。あの二人なら、そんな生活を送ったと知ったら、今のあなたの決断を応援してくれると思うんだけど……」
「……」
そのバックボーンを語らずに、今の僕の『臥龍』と呼ばれる雌伏生活に理解を求めるのは、とても困難だった。なまじ優れた結果を出しているだけに「今の僕はまだ未熟」という言葉には説得力がない。それ故に、僕のその態度を批判する者も多い。
それを語ってしまえば、僕の雌伏生活にも、一応の筋は通る。シオリの言うことは正しい。
「それも分かるんだけどね。でも、もうあいつらに余計な心配をかけたくないんだよ。あいつらには入学してからずっと、世話を焼かせてしまったからな」
僕は言った。
「卒業すれば、多分僕も家を出るし、今だってもう特に問題はない。もうちょっとの我慢で、きっと解決するし、僕を取り巻くこの騒ぎも、一過性のものだ。そのうち落ち着いてくるよ」
「……」
「それに、そんな事を話したら、きっと大変なことになる」
そう、そんな事を話したら、きっと大スキャンダルになる。僕の家に周りにマスコミやらが押しかけることが目に見えている。
そんなことで家族を刺激したくなかった。今の状態なら、即時解決は無理でも、解決するのは時間の問題なのだから。
「そうか……そうだよね。ごめんなさい」
思慮が足りなかったと、シオリは目を伏せた。
「いや、いいんだ」
僕はなるべく彼女の負担にならないように、優しい口調を意識する。
「もう家族のことは大丈夫だよ。いざという時のために、君にとっ

ておきの隠し玉も預けているしね」
僕はシオリに、一枚のＭＤを預けている。
その中には、家族が僕に暴力を振るい、心を切り裂くような罵声を浴びせ続ける音声が入っている。僕に何かあったら、彼女が警察なりマスコミなりにＭＤをリークするように頼んである。
家に置いておくと、家族に見つかって隠滅される可能性もあるので、証拠は取れるうちに取って、外部の人間に預けておく。それをしておくだけで、交渉のカードが増える。
その隠し玉のおかげもあって、僕は最近家族の行動が、蟷螂の鎌程度のものにしか思えなくなっていた。この音声を外に預けているだけで、自分はもう絶対的に優位にいるのだと、心の余裕が持てるようになった。
――まあ、それでもまだ僕にはひとつ、懸念材料があるんだけど。
それが僕の現在の最大の悩みだった。僕が意地を張らなければ、すぐに解決する問題ではあるのだけれど……
「……」
沈黙。
「――何か、私って、可愛くないよね」
唐突に、シオリがそう言った。
「え？」
「何か、そう思うの。折角、こうして久し振りに二人きりになれて、豪華で美味しい食事が目の前にあって。なのに、楽しい話題にしてないから」
「……」
「あなたも最近、すごく忙しくて疲れているみたいだから、休みの今日くらい、もっと気が休まるような事をしてあげたいんだけど、なかなか上手くいかないね……」
「……」
僕が意地を張っていると、シオリが僕に甘えられない、と、さっきユータが言っていた。それはきっと、今後の僕達が前に進むため

に、乗り越えなくてはいけない部分であることは、僕も薄々感じていた。ユータに改めて言われて、それを明確に認識できた。

それはきっと、シオリも同じように感じているのかもしれない。僕の家族の事を知っているだけに、シオリは自分の前だけでは、僕を普通の子供のように、甘えさせてあげたい、と思っているのかもしれない。

それは、僕の願望に過ぎないかもしれないけれど……

「君はいつもそうやって、僕の体を気遣ってくれるんだな」

僕は笑顔を作る。サッカーでアドレナリンが上がっていると、もっと自然に笑えるんだけど、意識して笑うのは、まだぎこちない。

「君が今、何を思っているのか、僕はちゃんとわかってないかもしれないけれど――もし君が今、僕に何も出来ていないとか、こうして人気が出ちゃった僕と一緒にいていいのかとか、そういうことを思っているのだとしたら、それは違うよ」

僕はナイフとフォークを皿の脇に置いて、テーブルの上で手を組む。

「確かに最近、サッカーの試合が多くて、正直、体きついんだ。連勝もしているし、見に来る客もどんどん増えてる。最近じゃマークもきつくて、もう僕に二人つくのは当たり前だ。結構削られてて、体痛いんだよ」

ユータがいない時なんて、僕に４人がかりでマークがつくこともある。神奈川ナンバーワンプレーヤーに４人マークがつくなんて漫画があったけれど、僕も今ではそう見られる選手になったということか。

そうでなくでも、僕は普段から体にダメージがたまりやすいプレーをしている。

背が伸びたとは言え、僕は１７２センチ５２キロと、女性並みの体格しかない。筋力や体重が不足している上に、成長期にろくなものを食べていなかったせいか、骨もあまり強い方ではない。強いボールを蹴るには、体――特に腰の遠心力を使って威力を作るしかない

ため、ボールを蹴る時、体全体をひねっている。だから体の負担も人一倍大きいのだ。

「疲れも取れないし、周りの期待も日に日に大きくなるくせに、本当の僕に理解を示す人はいない――そんな状況を、正直辛いと思うこともある。でも、最近君と電話をすると、いつも僕に「お疲れ様」とか「無理はしないでね」って、言ってくれるだろ」

「うん……」

「最近、そんな君の些細な一言に、確かに勇気付けられたり、元気をもらっている自分がいる事を実感しているんだ」

「……」

「自分で言うのも変だけど……今までも辛いことは、色々あって。そんな時、僕に声をかけてくれる人は誰もいなかった。たまに自分だけ、不条理に嫌なことばかり巡ってくる運命なのかと、嘆いたり、何かに怒りを感じたりすることばかりだったけれど、今の君みたいに、そんな時に声をかけてくれる人がいるだけで、こんなに救われたような気分になるんだな。そういうことも、最近は少しわかるようになってきたよ」

「……」

「そんな言葉を君はいつもくれるから――そんな気持ちを、君が教えてくれたから、誰かのために頑張ることが、悪くないと思えるようになったんだ。君がいなかったら、僕の人生は無意味なままだった。自分本位で身勝手で、気に入らないものは叩き潰すことしか考えられなかった。そんな人生は無意味だ」

「……」

僕は何が言いたいんだろう。言いたいことが何なのかわからないまま、僕はこうして喋っている。

彼女が、自分の事を否定するのが見ていられなくて、何か声をかけてやらなくちゃいけない、と思って――

「……」

――そうか。僕は彼女が僕にしてくれたことと同じ事を、彼女に

してやりたいのか。
自分の事を、どうしようもなく醜く、薄汚いと思っていた僕を、肯定してくれた彼女のように。
あの時の彼女もこんな気持ちだったのかもしれない。目の前の人を救うことで頭が一杯で、頭より先に口が動いていたのかもしれない。
「どう？　僕、少しはまともになっただろ」
別に勝ち誇って言うことでもない、ありふれた事を通り越して、当たり前の事を語っているだけだけど、僕はわざと威張ってみる。
それを見ると、シオリは何だか安心したように笑った。
「――よかった」
僕は溜息をつく。
「え？」
「この通り僕は、何の面白みもない人間だからな。ジョークも言えなければ、話もひどく現実的で、女の子を笑顔にするキャラには、もっとも遠い場所にいるから。君が僕といて、退屈じゃないか、結構ビクビクすることもあるんだよ」
僕がそう言うと、シオリがくすっと笑った。
「そうかな？」
シオリは呟いた。
「ああ、だからね、君が笑ってくれると、嬉しいんだ」
言っていて思う。僕、何でこんな恥ずかしいこと、すらすらとほざいているんだろう。
お疲れ様、とか、そんなの、ただの社交辞令だと思っていた。笑ったりすることも、相手に対して隙を見せること、気の緩みの証拠だと、軽蔑してきたのに。
今は心から、大切なことだと思える。
彼女といると――彼女のこの笑顔を見ていると、この世界の全てが愛しいもののように思えてくる。
だから――

「身勝手な意見かもしれないけど」
僕はそう前置きしながら、頭を掻いた。
「僕は今まで、人生を楽しんだことがないから、どうしたら誰かを楽しい気持ちにさせられるかとかも、よくわからない。だからきっと、僕と一緒にいて、楽しい空気にならないのは、僕に問題がないわけじゃないんだ。君も、自分の責任みたいに思っているかもしれないけれど、そうさせているのは、僕の生い立ちの問題だからな」
「だけど、僕はせめて残りの高校生活は、思い切り楽しんでやろうと思ってるんだ。楽しんで、楽しんで、楽しみまくって、それで沢山、馬鹿みたいに笑ってやるんだ。今までの人生取り戻すくらいの勢いで」
「うん」
「だから、今はそんなにお互い馬鹿みたいに楽しむってのは無理かもしれないけれど――お互いそういうのが分かってくれれば、これからどんどん楽しいことは待っていると思うんだ。それが分かるまで、待っててくれ、というのも身勝手な話だけど――僕はそうなった時、隣に君がいてくれたら――最高かな、って、思うよ」
これはさすがに言っていて照れた。しかも何だこの理屈は。駄目男が「これからは心を入れ替える」っていうのと同じだ。おまけに将来そうなるって根拠も何もない。
根拠のない事を口にするのは大嫌いだったのに。僕も変わったってことか？
「これからもっとサッカーを見に来たり、夏祭り行ったり、花火したり、泳ぎに行ったり、買い物したり、楽しいこと、いっぱいしよう。これから僕達には、楽しいことがどんどん増えてくると思うよ。それまでは、僕、変な顔でもして、君を笑わせることにするから」
そう言って僕は自分の顔に掌を当てて、思い切り顔を横に引っ張った。
「くすっ、あははは……」
照れ隠しに身を切ったネタをやってみたけれど、シオリは何だか

居を疲れたのか、つぼに入ったように、声を殺しながらも大笑いした。

――そう、この彼女の笑顔を見ていると、思うんだ。

これから僕の人生は、楽しいことが沢山あるんだって。

そして、そんな日々を迎えた時、待っていてくれるのは。

君であってほしい、と。

May

次の日、埼玉高校では全校集会が開かれた。
集会が開かれた原因は、これから行われる文化祭に向けての注意事項や、校長の無駄に長い激励の言葉。
そして、昨日プロチームでプロ初ゴールを決めたユータの報告のためだった。
ステージに立つユータに、万雷の拍手。人一倍大きな体だから、一人ステージに立つ姿は、何とも絵になる。
とは言っても、元々頭の悪い奴だ。突然のことでコメントも考えていないらしいから、喋りが妙にたどたどしい。風格のある体も、喋ってしまうと台無しだ。
「えー、その、まあこれは俺にとっては第一歩、かな。来月にはオランダで行われるU‐２０世界大会の代表発表があるし、そのメンバーになれるように、今は結果を積み重ねていこうと思ってるんで」
そう、ユータとジュンイチが３月にサウジアラビアで戦った、サッカーU‐２０世界選手権アジア予選、そこを突破した日本は、６月末にオランダで行われる世界選手権本大会に出場する。その最終選考が間近に迫っているのだった。
「まあ、俺はそこに、出来たらケースケ、ジュンも選ばれてほしいんだけど……いずれにせよ、今俺がサッカーを楽しくやれているのは、応援してくれる全校生徒と、何よりサッカー部の仲間のおかげだ。だから、世界選手権後の夏の高校大会、俺も全力で頑張って、今度こそ埼玉高校を全国制覇に導くんで。みんな、応援よろしく」
「全く……朝の挨拶、ありゃ何だよ」
昼休み、僕、ユータ、ジュンイチのトリオはいつものように、屋上でユータに差し入れられた弁当を広げていた。

今日はシオリとマイはいない。何でも文化祭に向けて、女子だけで話し合いがあるのだそうだ。まあ、彼女だからと言って、毎日僕と弁当を食べることもないし、彼女にも友達がいるのだ。そういう事を僕は気にするタイプでもない。

埼玉高校は、去年まで部活を二年生で引退させ、勉強に専念させる制度があった程、受験効率に偏重した学校だ。その名残で、受験勉強が本格化する2、3学期を避け、ほとんどの学校行事は1学期に集中している。

だから埼玉高校の生徒は、1学期はずっと忙しい。5月初旬に体育祭、5月末の中間テスト、6月中旬の文化祭、7月中旬の期末テストと、盛りだくさんだ。

3年生になると、それに進路相談が加わる。もうすぐ4月に受けた模試の結果が返ってくるし、中間テストもはじまる。その模試と、中間テストの結果を踏まえて、まず第1回目の進路相談の材料にするので、最近クラスメイトは、中間テストで少しでもいい結果を出そうと必死だった。

「別にいいじゃないか。ユータがお前とサッカーをやりたがっているって言っているのは、今に始まったことじゃないだろ」

ジュンイチが出し巻き卵を噛み締めながら、言った。

「……」

「どうせお前、これから卒業までは、少なくともサッカーの勧誘は減ることはねぇんだ。昨日個別に呼び出されたのだって、プロ契約の話だったんだろ」

「……」

ジュンイチも、もう分かっていたのか。

そうだろうな、ユータを使って、交渉をしようとするチームもあったんだ。これから僕を引き入れたい人間は、色んなアプローチをしてくるのだろう。

「俺達の代表監督も、お前と交渉すると思うぜ。残念ながら俺達の予選でのサッカーは、時自分でいうのもなんだが、誉められたもの

じゃなかったからな」
　自嘲しながらジュンイチは言う。
　サウジアラビアでの日本代表のサッカーは、暑さのせいもあっただろうけど、確かにいいサッカーではなかった。得点はユータの個人技任せだったし、守備はそれに輪をかけて酷かった。予選の後半から、攻撃力に目をつぶって、守備に長けたジュンイチを中盤に入れ、ようやく中盤が安定したが、それでも守備が磐石とはいえなかった。。攻守共に駒不足だった。
「お前、サッカーの代表に、魅力を感じてないのか？」
「シオリさんに聞いたが、お前、予選で俺達の試合の時、じっとしていられなくて、夜、ラジオ耳に突っ込んで走っていたらしいじゃないか。それはお前の中の血が疼いているからだと俺は思ったんだがな。そうじゃなきゃ、俺も無理にお前を誘わないさ」
　ジュンイチ、ユータが口々に言う。
「……」
　そんなことも二人に話していたのか。きっと僕にとって、いい傾向だと思ったのだろうな。
　僕は溜息をついて、空を見上げる。
「最近、よく考えるんだ。お前達とサッカーをやれる時間は、あと僅かなんだって」
「ほお」
「だから、代表でお前達と一緒にサッカーをやるっていうことには、確かに魅力を感じるよ。もう高校では、お前達と組めば、どんな奴にも負ける気がしないまでになっちまった。そんな僕達が、世界から集まる化け物みたいな奴等にどこまで通用するのか、試してみたい気もある。実際、お前達の試合をテレビで見て、僕もその場でサッカーをやりたくなったよ」
　僕は言った。
「でも――僕は今まで、随分わがままを言って、沢山の人の期待を裏切ってきたからな。代表にはならないと言い続けてきたし。そん

な僕が、やってみたくなったからって、自分の意見を都合よく出したり引っ込めたりしていいものなんだろうか」

「……」

「代表なんて、国を背負う立場を私物化して、いいものなんだろうか。しかも予選を突破した時のメンバーを差し置いて、本戦だけ参加するなんて」

「はぁ……律儀すぎるぜ。お前」

ジュンイチが溜息をついた。

ジュンイチが溜息をつくのも分かる。今の自分が、損な生き方をしていることも。

でも、僕はまだ未熟だけれど、生き方に筋は通していきたいんだ。自分の家族はあそこまで無法な人間だ。家族の行動は、さほど気にならなくはなったけれど、僕自身はまだあの家族に屈したくないという思いがある。

無法な人間に、それ以上の無法を以って押さえつけても意味がない。そんな相手に筋を通した上で凌駕してこそ、僕は本当に家族から完全に解放されるのだと、僕は思っている。

あの夜――自分があの家族と同じ、卑屈で残酷な心が芽生え始めていることで、あの家族と同類になろうとしていることに怯えていた僕に、彼女は「あなたはそんな人じゃない」と言ってくれた。

そう言ってくれた彼女のためにも、その言葉を何とか自分の手で証明したいと、僕は心の底で思っているのかもしれない。

結果的に僕はまだ、あの家族から自由になれていないのかもしれない。結局は家族のために意地を張って、自分の身を縛ってしまっている。

本当は、もっとやりたいことは沢山ある。こいつ等ともっとサッカーをできることなら、もっとそうしていたいとも思う。

だけど――

「僕は、自信がないんだよ。今の時点で一度表に出てしまったら、僕はきっと、周りの大人の起こす大きなうねりに巻き込まれていく

だろう。看板広告やプロパガンダにされたり、自分の生き方が何なのかわからないまま、走り続けなくちゃいけなくなる。そうなった時、自分を見失いそうで――だから今のうちに、自分がどういう人間で、何をどうして生きていきたいのか、それを見つけておきたいんだ。今のまま表に出たら、僕は何もできずにしどろもどろしてしまいそうな気がする」

僕は顔を上げた。

「だからさ、今はお前達を、この埼玉高校でサポートするよ。それくらいしか出来ないから」

「その手始めが、今夜のユータのプロ初ゴール記念パーティーってわけか？」

ジュンイチが聞いた。

「ああ、まあそんなところだ」

僕の発案で、今夜はユータの家でプロ初ゴール祝いのパーティーをすることになった。参加者はいつもの5人と、ユータの家族という、ささやかなものだけれど。

「はは、みんなに祝ってもらうのは、俺も嬉しいけどよ」

ユータは軽く笑みを浮かべながら、僕を見た。

「お前、俺の世話だけじゃなく、シオリさんの世話も焼いてやれよ」

「……」

「で？　せっかく俺がお前等と昨日、二人きりにしてやったんだ。昨日、あれから、キスくらいは出来たのか？」

「お？　そりゃ俺も興味あるな」

ユータの問いに、ジュンイチも箸を置いて、体を乗り出してくる。

「いや、別に」

「はぁ？　昨日あれから結局、何もなかったのか？」

ユータが大きな目を見開いて、僕を見た。

「……」

「はぁ、健全と言うか、ヘタレと言うか……」

ユータは青空を仰いだ。

「もう付き合って半年だろ、お前達。これから忙しくなる前に、せっかく二人きりにしてやったんだ。キスくらいしろよ。ヘタレのジュンでさえ、もうマイさんとしてるんだぜ」
「そうそう、俺でもできたんだから――って誰がヘタレじゃ！」
ジュンイチが、コミカルな動きでユータににじり寄る。
「……」
「お前、昨日二人で手をつなぐ時も、少しぎこちなかったぞ」
ジュンイチが横でペットボトルのスポーツドリンクに口をつける。
「彼女がいる俺が言うのもなんだけどよ、お前、よく我慢できるよな」
「何が？」
「だってよぉ、シオリさんの愛くるしさは反則級だぜ？　少し引っ込み思案で地味な印象あるけど、そこらのアイドルよりも全然可愛いしさ」
「そうそう。そんな女の子がお前に惚れてて、いつもお前に優しくて、それでお前、何にもしないのがすげぇよ。よく何ともなくいられるな」
ユータも相槌を打つ。
「……」
「卑陋な話をするつもりはないと先に言っておくけど――お前って、もしかして、もう機能ないわけ？」
ジュンイチに訊かれた。
「あんな可愛い娘と付き合ってて、何もしないなんて、賢者か大魔法使いか、妖精の境地だぜ」
「――あるよ、少しは」
僕は答える。
「はは、言っちまった。昔のお前なら、無視しただろうに」
ユータはくくく、と笑いを噛み殺す。
「……」
僕にだって性欲くらいある。

ただ、それが自分の中で、酷く未発達な部分だと思っているだけだ。

僕は小学校時代、女子に対していい思い出がない。そのまま中学は男子校に進学。中学は、小学校時代にいじめを受けた経験から、勉強と野球を両立させ、力をつけることで頭がいっぱいだったし、都内の中学に、片道2時間かけて通っていたから、他の連中みたいに、女の子と遊ぶ時間もなかった。中学でも女性に興味を持たないまま、高校に来たが、高校では勉強に加えて、生きるためにバイトをし、サッカー部にも所属し、連日疲れ果てていた。夜中に荒ぶる魂を鎮めるなんて事をしなくても、眠りにつくことができた。

自分に性欲があるのかどうかさえ、あまり意識することなく、この歳になってしまった。

性欲だけに限らず、僕にはそういうことが多すぎるんだ。子供の頃に、人が当たり前に手にする感情や、根源的なものを知らずに、18になろうとしている。なまじ力があるだけに、そんな人間としての根源的なものがない自分が、大人と子供が同居しているように、とても不安定なバランスの上にいると、強く感じている。

「……」

だが、そんな事をユータ達は知らない。僕の生い立ちを知らないのだから。

「シオリさんが可哀想だぜ」

ユータが言った。

「お前の周りがあわただしくて、彼女の存在を隠していることも、パニックを避けるためだって、頭じゃシオリさんも理解しているだろうさ。でもさ、だからこそ二人きりの時は、関係をはっきりさせるためにも、そういうスキンシップは必要なんじゃないのか？」

「……」

「あの娘だって、お前と同じ、奥手で恋愛音痴だから、お前の気持ちに自信が持てないところはあると思うぜ。しかも相手が、今女の子からモテまくってるお前ならなおさらだ。いつか他の、もっとい

い人の所へ行っちゃうんじゃないか、って、ずっと不安だと思うぞ」
「……」
確かに。僕だってシオリが今、僕をどう思っているのか、正直よくはわからないのだ。感情に質量はないのは分かっているけれど、彼女が僕を思ってくれる理由も、その気持ちの質量も、僕にはわからない。
彼女も、同じ想いを抱えているのでは――そう考えれば、それは人の心に鈍い僕でも、わからないこともない。
「そう言われても――僕は彼女にどうやって触れたらいいか、わからないよ」
今まで母親にさえ抱きしめてもらったことのない僕は、いわゆるスキンシップと呼ばれるものの重要性や意図がよくわからない。母親と子供のそれさえわからないのに、男と女のスキンシップなんて、もっとわからない。
それに僕は、女の子に2度触れて、2度ともその女の子を傷つけてしまったことがある。
1度目は、僕の初体験の相手になった女の子――その娘に触れた時は、ただ何となく、成り行きでだった。その時僕は、彼女の肢体や恥部を受け止め切れなかった。
2度目は、精神的にどん底だった時に、誰でもいいから側にいてほしい、その思いが暴走して、そうしないとおかしくなってしまいそうな、そんな制御不能の状態で――そのときは直前で歯止めが効いたけれど、結果的に僕は彼女のことも傷つけた。ほんの半年前の話だ。
シオリのことも、そんな触れ方をして、傷つけ、失ってしまうことが恐かった。だから、それ以外のやり方での触れ方を僕は模索していたけれど、それをどうすればいいのか、まだわからなかった。
「はぁ、お前サッカーや他のことなら、これ異常ないほど攻撃的なのになぁ。何で恋愛においてはそんなにヘタレのヘナチョコなんだよ！」

ユータが呆れるように目を覆った。
その時、僕達の背後の屋上のペントハウスの扉が開いた。
「何がヘナチョコなの？」
扉の置くから、シオリとマイが姿を現す、
「シオリさん――い、いや、何でもないよ」
ジュンイチが慌ててかぶりを振る。
「ふぅん」
マイが怪訝そうな視線をジュンイチに向ける。
「それより、二人とも、女子の話し合いは終わったの？」
ユータが話をそらした。
「うん、今年のホタルちゃんのプロデュース方法について。結構話し合っちゃった」
マイが僕をにやついた目で見る。
「……」
僕はシオリの方を見る。
「でも、たまにはいいんじゃない？　ホタルちゃんには年に一度しか、会えないんだから。えへへ……」
そう言って、シオリは僕に、自分のイタズラ心を誤魔化すように微笑むのだった。
「……」
僕は彼女の、この裏表のない、飾らない笑顔に弱い。
僕は、私生活では攻撃性が強く出すぎているきらいがある。去年サッカー部で顧問のイイジマに言い渡されたディフェンダー転向が納得いかなかったのも、単純に僕が、守備より攻撃が好きなためだったし。時にその攻撃性が仇になって、暴走してしまう程、本当の僕は攻撃性が強すぎる人間なのだ。
だけど――目の前のシオリの笑顔は、いつだって僕の攻撃性を消してしまう。その笑顔がいつも穏やかで、見ているこちらの凝り固まった心を浄化し、洗い流してくれるような、そんな気持ちに変えられてしまう。

この笑顔が向けられる限り、僕はヘタレと言われても、彼女に強引に迫ることはできないだろうな、と思う。

彼女の笑顔には、そんな、人の心を穏やかにしてしまう何かがあった。怒りや憎しみで、攻撃性を育てすぎた僕は、その笑顔を見ているだけで、心を捉えられ、何も抵抗できなくなってしまうのだった。

As－a－woman

「うわ、今年も完成度高っ」
「ホタルちゃんキター！」
「……」
ホタルちゃんというのは、僕達3年E組の幻のクラスメイトのこと――
――と言うか、女装したサクライ・ケースケの姿のことだ。
入学当時、１６０センチ４０キロしかなかった僕は、顔立ちが女っぽいのも影響して、２年前の文化祭のクラスの出し物の客寄せに、女装をさせられた。ユータ、ジュンイチが火をつけ、それにクラス中が乗っかった形だ。
それが実物の女の子より可愛いと大好評で、当時の1年E組は、文化祭の最優秀団体に選ばれ、優秀団体の特典である、ディズニーランドのワンデーパスを獲得した。
それに味をしめた女子の勧めで、去年も僕は女装をさせられた。去年はクラスメイトの他に、僕に女装をさせたい有志が集って、衣装やらメイクやら、1年生の時よりも遥かにパワーアップした女装をさせられ、文化祭2日間のうちに、５回も衣装替えをさせられる有様だった。
当然僕はメイクなどしたこともないし、男としての貞操があるので、1年生時は抵抗したが、ユータとジュンイチが、椅子に僕を縛り付けて抵抗できなくし、女子がその上で僕にメイクを施させるという荒業に出た。仕方ないので、僕はクラスの出し物の利益の3割を一人でもらえる条件で、1、2年とも女装を承諾した。
ちなみにホタルちゃんという呼び名は、僕の名前を漢字表記すると「蛍介」なので、そこから取った呼び名だ。
「……」
僕は女子が持ってきた、フリフリのドレスを着させられ、メイク

も施され、ブロンドのロングヘアーのヅラも被って、午後のホームルームで、クラスの面前に立たせられた。
「はは、背が伸びたから、色っぽさが増したな、ホタルちゃん」
ユータが腕組みをして、僕をしげしげと眺める。
「でしょ。今までは清純派美少女とか、ギャルとか、そういうロリっぽい路線だったけど、今のサクライくんの背丈から、今年はモデル風のプロポーションを生かす女装って案になったの」
女装を手がけた女子達が説明する。
「だけどサクライくん、１７２センチあって、５２キロしかないって……毎年のことながら、サクライくんのサイズを聞くと、女としてダイエットに危機感を覚えるな」
「そうそう。地味にショック受けるわ。男なのに、私達より可愛いし、その上、痩せてるって……嫌がらせよね」
女子達が口々に言う。
「――こんな格好させられる僕の意志はどうなるんだ」
僕は口を挟む。唇には勿論口紅にグロスまで纏わされているから、やけにぷっくりしていて気持ち悪い。
「しかもそれで嫌がらせと言われるのもまた心外だな。無理にさせる気はないが、女子をダイエットに啓蒙させるくらいに思われなきゃ割に合わない」
「いやいや、それでもお前が女装することで、女子は楽しそうだぜ」
ジュンイチがにやついて言った。笑いをこらえるように。
「女子と交流も出来て、お前としてもいいことじゃないか」
「女子の目の前で体の毛を剃らされたり、ストッキングを穿いたりする小っ恥ずかしさに耐えてもか？」
「うわぁ……それ、地味に嫌だな。脇まで剃らされるとしたら最悪だ」
ユータが含み笑いを浮かべる。
この女装が女子達の絶大な支持を集めているのはそういうことだ。
僕を女装させることは、学校一愛想のない男、サクライ・ケースケ

を思う存分オモチャに出来るということなのだ。それが女子達には面白くて仕方がないらしい。僕は文化祭の間、そんな女子の悪ノリで、散々あられもない事を公衆の面前でやらされるのである。

「おまけにここ2年、僕、この格好で男から何度もナンパされたんだぞ……軽くトラウマだ」

「そりゃそうだろう。お前の女装は、誰かに自慢できるレベルだと思うぜ。声もそんなに違和感ないし、男だって言わなきゃわかんない。俺だって見た目だけなら好みのタイプだぜ」

ジュンイチが僕を褒め称えた。

「ふ――そこまで言われると、何かお前にサービスをしたくなるな……」

僕ははにかんで見せる。

「よし、じゃあこの女装姿の僕と、ツイスターゲームでもやらせてやるよ。どうだ、嬉しいだろ」

「――やめて、マジでやめて」

ジュンイチは本気で嫌そうな顔をした。

「何だ、サービスが足りないか？　ちょっとくらいならお触りも許可してやろうか」

「だからやめろっての！　お前が言うと冗談に聞こえねえんだよ！　大体お前の柔らかいところがまったくない体触れても嬉しくないわ！」

「――好みのタイプとか言っておいて、気持ちを弄んだのか」

「こんな時だけ女キャラになるな！」

クラス中が笑いに包まれる。

「おお、恐い恐い。こいつをからかうと面白いが、からかい過ぎると俺らの貞操も危なくなる」

ユータが空恐ろしそうに肩をすくめた。

「しかし、今年は俺達が文化祭に客を呼ぶんだ。お前の女装も、学校の一大プロジェクトなんだからな。もうちょっと言葉とか声を可愛くしろよ」

「……」

今年は僕達サッカー部の功績から、文化祭来場者が、例年の数倍になると予想されていた。

文化祭実行委員は、より多くの入場者を集めたいと願っているから、僕達3人は文化祭実行委員に懇願されて、僕達を看板とした様々な企画に協力することになってしまった。学校側も、学校をアピールすることになるならと、その企画に協力的な姿勢を見せている。

僕の女装もそのひとつだ。巷ではクールな天才少年と呼ばれるサクライ・ケースケが、雅やかな女性姿というギャップで登場すれば、確かに話題になるだろう。

僕達を看板とした文化祭の目玉企画は、僕の女装七変化（僕個人はあまりやりたくないけれど）と、ユータのコネで、浦和レッズユースに、プロを数人交えた混合チームと、埼玉高校サッカー部の練習試合。そして、僕達3人に吹奏楽部がコラボレーションした、バンドライブの3つだった。

「そうそう、俺達も文化祭で即席バンドコンサートをやることになったんだからな。ギターやピアノの上手いお前と違って、こっちは素人に毛の生えた演奏しか出来ないんだ。恥をかくのは俺達も一緒さ。恥の種類が違うだけだ」

ジュンイチが言った。

「むしろお前がそういう格好で恥をかいてくれなきゃ、俺達だけ恥のかき損ってもんだ。たまには完璧超人のお前も恥をかけよ」

「……」

いい事を言っているように聞こえるけど、実際は、死なばもろともってところなんだろうな。

「ほら、とりあえずみんな席に戻れ」

担任のスズキがその場を制する。何とも頼りない担任だから、完全に静まるには時間がかかったけれど。

「まあ、手っ取り早くうちの出し物が決まってよかった。じゃあこれからは、お前達の進路調査のために時間を割くからな」

確かにクラスの出し物は、割とすぐに決まった。埼玉高校をここまで有名にした立役者の僕達3人がいれば、何をしても僕達が最優秀団体になることは確定しているのだから。皆受験で、あまり文化祭に対しては手を抜きたい。誰かが適当に言った案を、そのまま満場一致で通してしまった感じだった。

スズキは生徒達に紙切れを配る。「第1回進路希望用紙」と書かれたその紙切れには、志望校、志望学部を書く欄が5つ程。この学校は、大学進学希望者が99%を占めているから、就職希望欄ははじめからない。残りの1%であるユータも、とりあえずの就職先はもう決まっているのだ。

「進路相談室も解放してある。決まらない者はそこで資料を見るなり、担当の先生に相談するのもいいだろう。図書室にも偏差値などを記した資料があるから、そこに行くのもいいだろう。もう決まっている者は自習だ。勉強したい者もいるのだから、あまり騒がしくするなよ」

そう言ってから、スズキは僕の方を見る。

「サクライ、お前はその化粧を早く落とせ。どうもお前がその格好をしていると、教室が落ち着かん」

「……」

僕は1人、先程まで女子達に監禁されていた音楽準備室に戻って、ヅラのピンを外し、そこに置いておいた私服に着替え始める。

「……」

溜息が出る。この格好、いつも気が重い。おまけにドレスというのは、一人だと脱ぎにくい。どうして女性とは、こういう面倒臭い構造の服を着るのだろうと思う。

背中のチャックに手が回らない。僕は自分の背中に手を回して、一人じたばたする。それはまるでひっくり返った亀を髣髴させる動きだったかもしれない。

仕方ないので、頭から脱いでやろうと、ドレスの肩口をつかんで上に引っ張るが、　女物の細い首周りの服は、頭に引っかかってしまい、抜けない。

「あ、あれ？　どうなってるんだ、これ」

着る時も周りの女の子に手伝ってもらって着た服で、脱ぎ方のわからない僕は、やがて頭が抜けず、かといって元に戻すこともできず、服を頭に被ったまま、1人じたばたしていた。

そうして僕が悪戦苦闘している時、こんこん、という音がした。どうやら外のドアをノックしているらしい。

「――あの、私、シオリです」

外からシオリの声がする。授業中だからか、声を殺した、静かな声だ。

「入っても、大丈夫？」

「あ、ああ、ていうか入ってきてくれ。助けてくれ」

僕は頭が隠れたまま声を出すと、引き戸が開く音がした。僕は頭が服の中には言っている。ごわごわしたドレスを、頭が通らずにじたばたしている様は、特撮ヒーローに出てくる怪獣みたいだったかもしれない。

「こ――これ、脱げないんだ」

「ちょ、ちょっと待って。動かないで」

シオリは僕の横で服を掻き分け、ボタンやチャックを探し、それを一つ一つ解いていく。

そこでどうにか腰周りが緩くなる。

「あ、もう大丈夫そうだ」

僕は声でシオリを制し、一度頭を出す。

僕の顔を見て、シオリはくすっと笑った。

「本当に困ってたでしょ」

「……」

こんな事を言うことが、非常に愚かだということは承知しているけれど――

彼女は、とても可愛らしい女の子だと思う。
そんな女の子が、僕の恋人で――
ジュンイチ達の言うように、こんな娘にまだ手を出していない僕は、男としておかしいか、相当のヘタレかのどっちかなんだろう。
今思えば、ラブホテルにも泊まったことあるんだよな、僕達。
それが半年経った今でも、手をつなぐことさえどぎまぎしている関係とは、何ともおかしなものだ。
僕も――男なら少し頑張ってみようかな。

Footstep

しかし――女装したこの格好で、彼女の前に立つのは……

「でも、そんなに着るのが大変な服、脱いじゃうの、勿体無いね」

シオリは僕の目を覗き込んだ。

「は？」

「すごく可愛いよ、あなたの女装」

シオリはにっこりと微笑んだ。

「――それ、誉めてるのか？」

「えへへ……」

彼女は苦笑いを浮かべる。

「――あんまり見ないで。君にこんな格好見られるの、恥ずかしいんだ」

僕は自然と目線が下がる。

僕はシオリにあまりみっともないところを見せたくなかった。あの夜に、ボロボロに泣くところを見せてしまって以来、もうこれ以上、みっともないところは見せられないと思ったから。

「それに――こういう服は――君みたいな娘が着るべきだよ」

照れ隠しをしようして、僕は勝手に喋りだしてしまう。

「きっと――よく似合うと思うよ。それで、皆に、可愛い、って言ってもらうんだ」

「……」

沈黙。

「それって――誉めてる？」

シオリが明鏡止水の瞳を丸くして、首を傾げた。

「……」

正直わからない。わからないけれど……

「――僕も、君にそういう事を、もっと言ってあげた方がいいのかな」

「え？」
「その――か、可愛い、とか、愛らしい、とか……」
「愛らしい？」
シオリが苦笑いを浮かべる。
「あ、いや、それはちょっと違うな……」
「――う、うん、何か、変な感じ……」
シオリも軽く俯いて、声をトーンダウンさせる。
「……」
僕は息をつく。
「やっぱり、女の子は、可愛い、とか言われると、嬉しいものなんだろ」
ヤバイ、本当に慌てていて、わけもわからず考えなしの言葉が出てくる。
「僕――君にそういうこと、全然言ってないから。言わないと、君を不安にさせてるんじゃないかって、思って」
「……」
ユータ達に最近散々、シオリとの関係に進展がない事を揶揄されている。
それは分かっている。その原因が自分にあることも、わかっていたけれど、僕はまだ、具体的にはどうしたらいいのかが、よくわからないでいる。
でも、こんな格好をして、少しは女の子の目線に近付いてみて、思ったんだ。
女の子には、そういう言葉での意思疎通が重要なんじゃないかって。
こんなに、可愛い、とか、男だったら恥ずかしくてなかなか言えない事を、女の子はこんなに口にして伝えるんだ、と、改めて思った。
女の子っていうのは、そうして何かを口にし合って――そうしないと、お互いのことがわからなくなって不安になってしまう。だか

らそうしていつも感情を口にするのかな、と、思ったんだ。
「……」
ど、どうしよう。ここまで言ったら、彼女に、可愛い、って、言うべきなんだろうな。
そう思ったら、心臓の鼓動が耳鳴りみたいに聞こえてきて――体ががちがちになっていくのを感じる。
男が女の子に、本気で、可愛い、とか言うなんて、真顔で出来るものだろうか――
「――でも、私、あなたがそういううそ臭い台詞、言える柄じゃないと思うけれど」
だけど、そんな僕の緊張を見抜いてか、シオリは苦笑いを浮かべて言った。
「……」
「それに、私もあなたからそんなこと言われたら、ちょっとくすぐったい、かな――」
彼女にそう言われて、頭の熱が一気に冷める。
僕は膝から崩れ落ちて、その場に座り込む。変な事を言って恥ずかしい、穴があったら入りたいという心境で、僕は膝を抱えて自分の顔を隠した。
「――ごめん、僕、変なこと言ったな」
「ううん」
シオリの声がした。
「色々、試行錯誤の連続なんだよね……お互い」
「……」
僕は首を傾げる。
「私、ずっと、何でもそつなくこなせるあなたのこと、憧れてたんだ。でも――そうなるまでに、あなたも沢山努力したんだよね。いつも試行錯誤して、目的のために一生懸命で――あなたが人を惹きつけるのは、きっと、そんな真っ直ぐで、思い立ったら誰よりも早く行動するところが、どんな言葉よりも、信じられるからなんだと

思う」
「……」
「私――あなたのそんなところ――す……」
何故かそこで、シオリは一度口ごもった。言葉を捜すように、目を泳がせる。
「す……すごく、いいと思うの……この半年、ずっとそれを近くで見てきて……あの、その……」
「……」
どうやらシオリもいっぱいいっぱいになってしまったみたいだ。
きっと、僕達の中がいつまでも進展しないのは、本音でぶつかり合うには、お互い自立心と羞恥心が強すぎるからなんだろうな。
「ご――ごめんなさい、早く着替えたいんだよね。後ろ向くね」
余裕がなくなったのを振り払うように、シオリは後ろを向いてしまった。
「……」
僕は黙って、厚ぼったい生地のドレスを脱いで、私服のデニムに足を通した。
「あ、あの」
後ろを向いたまま、シオリが沈黙を破った。
「わ、私が言いたいのはね……その、あなたは、変に言葉を並べないで、いいと思うの。いつでも大切なもののために、一生懸命になれる、あなたのままで、いいと思うの」
「……」
今のままで、か……
これだと、僕達が進展するのはいつになるのやら。
「――ああ、もうこっち向いていいよ。まだ上は裸だけど……」
僕がそう断ると、シオリはこちらを振り向く。
「……」
シオリは振り向くなり、目がキョロキョロと覚束無く動いた。
「どうしたの？」

「あ、ううん」
慌ててシオリはかぶりを振る。
「やっぱりあなた、男の人なんだなぁ、と思って」
「……」
どうやら裸を見て、そう思ったらしい。
「別に筋肉は多い方じゃないよ」
僕は元々筋肉が付きづらい体質らしい。体重が軽いから、腕立て伏せやスクワットじゃ筋肉がつかない。それを自覚しているから、体は強さではなく、しなやかさや柔らかさを重視している。
確かに体は筋張っているし、腹筋も割れているけれど、それは体脂肪率が低いから、筋肉が表に出ているだけで、量が多いわけじゃない。
「でも、やっぱり男の人って感じだよ」
「……」
沈黙。
「――ねえ、ケースケくん」
もじもじしながら、シオリが沈黙を破った。
「最近試合続きで、体痛いって言ってたでしょ？　マッサージ、してあげようか？」
「は？」
僕は体から変な汗が出るのを感じる。
「ねえ、座って」
そう言ってシオリは有無を言わさず僕の側に来て、手近な椅子に僕を促した。
そして、裸の僕の肩に、自分の細い指をかけて、ぐっと力を入れた。
僕の体が硬直する。
「あ――ごめん、痛かった？」
「い、いや、平気……」
僕の声が自然にトーンダウンする。

「痛かったら言ってね」
そう言って、シオリはリズムを刻むように、一定の感覚で、僕の肩に力を込め始める。
「……」
僕は、自分の体が汗ばみ、体温が上昇しているのを感じていた。恐らく顔が赤くなっていると思う。
上半身が裸だから、肩にかかるシオリの細い指の滑らかさ、艶かしさがリアルだった。シオリの手は、細くて、小さくて、掌がふんわりと柔らかい。けれど指先の感触がでこぼこしている。きっと指先に日常的にマメを作っているんだ。よっぽどフルートを練習しているんだろう。
女の子に体を触られたことは、ないわけじゃないけれど、好きな女の子から触られるのは初めてだ。手をつないだり、抱きしめたりということはあったけれど、こうしてシオリから僕の体に触れてくることは、今までなかった。
「……」
僕は何を言っていいのかわからず、背中越しに彼女の存在を感じながら、ふわふわした脳を稼動させようとした。
「――ねえ、ケースケくん」
そんな時、シオリのおずおずとした声が、僕のそんな思考を中断させる。
「――な、何？」
動揺が表に出てしまい、僕は少しどもってしまう。
「あ、あの……」
だけどシオリはどうやらそれ以上に動揺しているようだ。
さっきから彼女の様子がおかしい。本来シオリは自分から僕の体に触ろうとするタイプじゃない。慣れない事をして、明らかに自分を見失っている。そんな感じ。
僕の肩を揉む、シオリの手が止まる。
「こ、これだけじゃ、その――サ、サービスが、足りない、かな…

…」

「は？」

――あれ、ついさっき同じような台詞を聞いた気が……

「け、ケースケくん。わ、私と、ツイスターゲーム――したい？」

「……」

そのシオリの言葉に、感嘆の声も出なかった。僕の想像の許容範囲を地平線ごと突き抜けた言葉だった。

「……」

何を言っていいかわからず、僕は沈黙する。

「あ、あの、私、何か言ってくれないと……その……」

「……」

僕は椅子から立ち上がり、シオリから背を向け、準備室の引き戸に歩を進め、勢いよく引き戸を開けた。

しかし、外には誰もいない。

「――あれ？」

僕は首を傾げる。

こんな事をシオリが言うはずがない。恐らくジュンイチ達が彼女を変に焚きつけて、そう言うことを言わせて、僕のリアクションを影から笑うために、聞き耳を立てているのだと思ったのだけれど……

引き戸を閉めて、僕はシオリの方を見る。

シオリは顔を真っ赤にして、俯いて、小さくなってしまっている。

「……」

ジュンイチ達に言われて、言ったのではないとしたら……

あの言葉は、シオリ本人の意志？

「あ、あのさ、誰かから、何か入れ知恵でもされたわけ？」

――んなわけないよな。

「……」

シオリはまだ紅潮した顔を上げる。

「その――吹奏楽部の友達に言われて。あなたは何でも1人でできちゃうから、私の前で強がっちゃう――だからここは、私があなた

に甘えやすい雰囲気を作るなりしてみろって」
「……」
そうか――シオリも恐らく、僕がユータ達に言われていたことと、似たようなことを言われていたんだろうな。
「だからちょっと、いつもと雰囲気を変えてみたんだけど――ごめんなさい。変だった、よね……」
「――かなり」
「……」
シオリは押し黙ってしまう。
「くくく……」
その姿を見て、僕は笑ってしまう。はじめは声を殺していたけれど、段々堪えられなくなって、本気で大笑いしてしまった。
「ど、どうして笑うの？」
「いや――悪い」
笑いながら、手で彼女を制す。
僕が笑ったのは、あの、僕が彼女に救われた夜に、彼女がラブホテルのアダルトビデオを見て、激しく狼狽したのを思い出したからだ。今の彼女のうろたえ振りが、何だか半年前の彼女と全く変わっていなくて、ほっとしたような気分になったのだ。
「……」
僕は、矛盾しているのだろうか。
あなたは、今のままでいいと、さっき彼女に言われた時、僕は少し違和感を覚えた。
今のままじゃ駄目だと、自分では思っていたからだ。
それが、彼女がこうして、無理して変わろうとしてくれたら、彼女には今のままでいてほしい、と思うなんて。
――そうか、そういうことか。
そう思って、僕は上半身裸のまま、シオリの体を抱きしめた。
えっという、シオリの声なき声が、かすかに聞こえた。
「ごめん。ドレス着てたし、女子にコロンも随分やられた。変な臭

い、しないか？」
僕は抱きしめたまま、シオリに聞いた。
「う、ううん。平気……」
そんな消え入りそうなシオリの声と同時に、心臓の鼓動がまた大きくなる。もうそれが、シオリのものなのか、僕のものなのか、わからなくなる。
「さっきさ、君は僕に、あまり変に言葉を並べないでいい、って、言ったけどさ。この際だから、言わせてくれ」
「う、うん……」
「……」
とは言ったものの、いざ言おうとすると、緊張で頭に血が上ってくる。
「い、一度しか言わないから。だ、だから、ちゃんと聞いてくれよ」
うわ、声震えてるし、変に虚勢張ってしまう。今の僕、すごくカッコ悪い。
これ以上ダサいことになる前に、覚悟決めよう。
「――僕は君のことが好きだ。すごく可愛いと思うし、恥ずかしがり屋で泣き虫で、でもいつだって一生懸命で、そんな君と――あんまり一緒にいられてないけど――もっとずっと一緒にいたいんだ。ずっと、そう、思っているんだ」
「……」
沈黙。と言うか硬直。
「ご、ごめん――ちょ、ちょっとまだ、君の顔、見られないから、もう少し、こうしててもいいかな……」
「――うん」
僕の声とは裏腹に、僕の裸の腕の中にいるシオリの声は、もう平静を取り戻していた。
「……」
そのまま、しばらくそのままでいた。
「あ、あのさ」

僕はようやく落ち着いてきて、また口を開く。
「お互い――変わらなきゃいけないと思いながら、相手が急に変わってしまうことが、恐かったんだな。それに合わせようとして、自分も変わらなくちゃと焦ってしまっていた。きっと、お互いの意思を尊重するあまり、自分の思いを相手に伝えることが出来なかったんだな」
そう、矛盾なんかじゃない。それが本音だ。
お互いが変わる事を望んでいた。でも、相手が変わるのは嫌だ。
お互いを尊重しすぎて、あるいは自分の本音が身勝手に思えて、それを見ること、相手に見せることが恐くて、相手に干渉しないでいた。だからお互いを理解できずに、不安だった。不安になったから、何かを劇的に変えようとして、その不安を消そうとした。
「大切に思うことと、大切にすることは、似ているようで違う――つい子の間、ユータに言われたよ。その通りだったんだな」
そう、それは本当に相手を尊重してのことじゃない。わが身可愛さに、最も傷つかない方法を選んでいただけなんだ。
自分のむき出しの本音を、相手に伝えてどう思われるか、それが恐かっただけなんだ。
「僕――これからはもっと君に、自分の気持ちをちゃんと伝えるよ。上手く言葉に出来ないことも多いと思うけれど――それでも、頑張って伝えるよ。だから、君も話したくなったら出いい。君の気持ちを僕に教えてくれ。わがままだって言ってくれ。そうしてお互いの事を理解しあって、目指す未来をいつでも同じ場所に定めておこう。君と僕で、歩く歩幅は違うかもしれないけれど、目指す未来が同じなら、きっと、大丈夫だから」
きっと――僕達に必要なのは、今はそういうことなんだと思うから。
無理に変わる必要もなければ、体のつながりがなくてもいい。
まずは本当の気持ちを確認すること。本当の自分を相手に晒す勇気を持つこと。

あまりに初歩的で、幼稚な段階かもしれないけれど、今はそれでいいんだ。そうやって二人、同じ方向を向いてさえいれば、そのうち深く結びつくことも出来ると思うから。

「――うん」

彼女の頭が、僕の腕の中で、縦に小さく動いた。

僕の体に、彼女の細い腕が回される。

「じゃあ、私のわがままを、ひとつ聞いてくれないかな」

そう言ったシオリの声は、もう心の底から落ち着いていて、まるで僕までほっとさせるような、そんな優しい響きの声になっていた。

「あなたはひとつの場所にじっとしていられない人だって、私、わかっているから、私のことは気にせず、やりたい事をやってきて」

「……」

「でも、怪我はしないで。体に気をつけて、それが終わったら、必ず私のところに帰ってきて欲しい――私は、それだけでいいから」

「……」

シオリは、もう、僕の心の内を見抜いているのだろうか。

ユータやジュンイチ――親友と、もっと大きな世界で、一度並んでは知ってみたい、という、僕の心の内を。

でも――

僕は少し懊悩する。

ユータやジュンイチ達と戦いに出るということは、また僕はシオリを置いて、遠いところに行ってしまうということだ。

本当は彼女は、今も強がっているのだ。マイから聞いているから、僕はそれを知っている。

僕を遠くに感じてしまって、無理して追いかけようと、僕の目に見えないところで頑張って――

そんな素振りをちっとも僕の前で見せないで、僕の前では、いつだって気丈に振舞って、優しい言葉をくれて、体を気遣ってくれて――

僕は、そんなこの娘の側にいたかった。

いてあげたい、じゃない。僕が、ここにいたいんだ。

口には出さないけれど、僕を救ってくれたこの娘に、これ以上、寂しい思いをさせたくなかった。

彼女が、僕を遠い存在に感じなくなる、その時までは――

教室に戻ると、クラスメイトの半分がいなくなっていた。恐らく進路相談室や図書室で、進路について調べに行ったり、自習をしに行ったのだろう。

出席番号順に担任のスズキとの二者面談も始まっている。どうやら出席番号の早いジュンイチは、もう面談を終えたようだった。

ジュンイチは、恐らく面談でもらったであろう資料をにらめっこしながら、溜息をついていた。僕とシオリは、ユータ、マイが横に立つ、ジュンイチの席の前に行く。

「随分しおらしいな、お前らしくもない」

ユータは腕組みをして、うなだれるジュンイチを見下していた。

「覚悟はしてたけど、俺が国立に行くとしたら、相当勉強しなきゃ駄目だって言われたよ」

ジュンイチは僕に、手に持っていた資料を手渡す。受け取ってそれを見てみると、どうやら入学からの、模試と定期テストの成績推移表らしい。

「――ま、そうだろうな」

それを一通り見て、ジュンイチに返す。

「お前、世界史は東大クラスだし、現文古文の成績は、結構いいんだ。私立一本に絞って、英語をもうちょい伸ばせば、ＭＡＲＣＨくらいは十分現役合格狙えるぞ」

「――スズキにも、同じこと言われたよ」

ジュンイチは苦笑いを浮かべた。

ジュンイチは、結果的に赤点を毎回３つ以上取っていて、学年では勉強のできない部類にカテゴライズされてはいるが、決して馬鹿なわけではない。全科目赤点スレスレのユータとは別で、入学当時から得意科目と苦手科目の差が激しすぎるのだ。

世界史は全国模試、定期テスト共に、９５点以下を取ったことがな

いし、日本史や現代文も、世界史には劣るが、偏差値は６０近辺を叩き出している。しかし物理や英語になると、この偏差値が４５に、数学に至っては、最近まで偏差値測定不能に近い程酷い低空飛行になるのだった。結果、赤点ばかりの劣等生扱いを受けていたのだ。

「ま、愛する彼女のためだ。頑張れや」

ユータがジュンイチの肩をぽんぽんと叩いた。

僕は、ジュンイチの横にいるマイの方を見る。

「……」

ジュンイチが最近、僕に相性大殺界の数学の教えを請いに来る原動力は、間違いなく彼女だ。ジュンイチだって、僕や担任のスズキの言うことが合理的な選択であることはわかっているのだ。マイに出会うまでは、ジュンイチだって私立専願で大学に行こうとしたのだ。

全く分かりやすい限りだけれど、僕にはそれがちょっと羨ましい。

そういうことで、苦手なことにもこんなに情熱を傾けられるようになるというのはどんな気持ちなのか、その気持ちは、今までの人生で苦手なもののほとんどなかった僕にはわからないけれど、想像してみると、何だか高揚感に包まれる。

ジュンイチのこの苦手な勉強との向き合い方の変化が、僕だけじゃなく、シオリ達にも多少なりとも変化を促していることは間違いなかった。

「サクライ」

後ろからクラスの男子に呼び止められる。

「二者面、お前の番だ。隣の教室に来いってさ」

「ああ」

僕の返事を聞いて、男子生徒は去っていく。

「じゃあ、ちょっと行って来るよ」

ジュンイチ達に軽く挨拶を交わし、僕は教室を出た。

「早っ！　もう終わりかよ！」
ジュンイチが教室から戻った僕を見て、目を丸くした。
「元々僕の成績なら、面談なんて必要ないからな」
僕の面談は、2分もかからずに終わった。僕には選択肢の制限がないし、能力的に選ぶ選択肢も、僕の周りが騒がしくなったことで、教師達にも伝わっているのだ。
「で、お前の選択肢はやっぱり東大か？」
ユータが聞いた。
「ああ、東大の文？――法学部だな」
模試では成績上位者の名前が載るが、名前の横に、第一志望に定めた大学、学部が記載される。僕が東大文？志望なのは、その模試の結果から、世間にも筒抜けなのだ。
法学部を選んだのは、将来自分の力で、誰かのためになるような生き方を模索している僕にとって、法学部が一番その道に近い気がしたからだった。
「東大か……」
ユータは首を傾げる。
「俺はお前の頭のよさは知っているつもりだけどよ。何か違和感があるんだよな、お前が東大って」
自分でもその理由がわかっていないようだが、ユータはそんな心情を吐露した。
「あ、やっぱり？　私もそんな気がしてたの」
マイが口を開いた。
「東大って、何か大人しい人が多そうなイメージだからかしら」
「一概にそうとは言えないだろ」
中学の連中が、大人しい勉強の虫ばかりだったので、僕にもそのイメージがないわけじゃないけれど、一応否定しておく。
「別にお前が東大に行くことは否定しないさ。お前の実力に一番見合っているのが東大だっていうのは事実だからな。ただ、なーんとなくお前は東大のカラーに染まらない気がするんだよ、俺は」

ユータの言葉に、他の3人も頷く。
「ガリ勉なんて、お前が一番軽蔑しそうな類の輩だもんな」
「……」
僕は天井を仰ぐ。
「ところで、お前、大学に行ったら、何かしたいこととかあるのか？」
ユータに聞かれる。
「さあ――基本勉強とバイトだろうけど、お前等のおかげで高校では野球をやりそこなって、甲子園に行けなかったからな――神宮球場の星でも目指すかな」
「おいおい、東大野球部に入るってか？」
「――ま、それも選択肢の一つかな」
僕は含み笑いを浮かべる。
――確か、去年の秋、ユータの家で赤点勉強会をした時、僕達の間で珍しく、将来の話をしたことがあった。
プロサッカー選手になりたいと語ったユータと、海外を回るジャーナリストやルポライターになりたいと語ったジュンイチの横で、僕は何も言うことができなかった。今を生き抜くことに精一杯で、将来の事を全く考える余裕もなく、やりたいことが何もなかったからだ。
今もまだ、語るに足るようなことは、何もないんだけれど……
「エイジって、覚えているだろ。一ヶ月ちょっと前にお前等もあいつらのホームに連れて行った」
「ああ、覚えてるぜ」
「あのでっかい人のインパクトは、なかなか忘れられんぜ」
ジュンイチが頷き、ユータがそれに同意した。
「とりあえず僕は部活を引退したら、あいつらが今やっている運動に参加したいと思ってる。出来たら大学に行ってからも、参加できたらいいなと思ってる」
半年前、クリスマスに僕と繁華街で大乱闘をしたグループのリー

ダー、ミツハシ・エイジは、現在ではグループを引き連れ、積極的に社会へのアプローチを始めていた。河原のごみ拾いや、町の掃除など、初めは地味な作業ではあったが、その行為が認められ、警察に表彰されるまでになる。

現在では、賛同者が多数出来、グループ以外の若い世代の活動参加者も増えてきているらしい。自治体から仕事を委託され、最近では組織、活動共にどんどん規模を増しているのだった。

エイジもそんな組織のトップに立つ以上、無学ではいられないということで、高卒認定試験にこの春合格し、僕達より2歳年上だが、僕達と同じ年に大学を受験し、より広い視野で社会にアプローチしようとしている。

「あの人達、この前新聞に載ってたぜ。最近話題の若者ボランティア集団だって」

ジュンイチが言った。

最近ではエイジたちは、新聞などにも取り上げられ、知名度を増していた。無力さからあの廃倉庫で寄り添うように生きてきたあの連中は、今では多くの人に応援され、活動規模も増し、毎日が楽しくて仕方ないらしい。

「今まで僕も、自分の事しか考えずに生きてきたからな……しばらくあいつらと一緒に汗水たらして、世の中の外をもっと見てこようと思ってな」

「へえ、いいと思うな、そういうの」

マイが笑顔で頷いた。

「しかし、あの人、お前に男として惚れてるって感じだったからな。お前が手伝ってくれるって聞いたら、リーダーを多分お前に譲ると思うぞ。お前がリーダーなら、多分ミーハーな奴の参加者も増えるだろうし」

ユータが言った。

「あいつらが頑張ったから今の組織があるんだ。それを横取りなんてできないさ」

僕はふっと笑った。
「だが、あいつらのためになるなら、今の知名度を利用して、客寄せパンダになってやることもやぶさかじゃないけどな」
今は立っている場所が違うけれど、きっと、エイジと僕は、目指す未来がよく似た場所なんだろう。そんなところに少しだけ親近感があって、今ではエイジのことは、大切な仲間の一人だと思えるようになっていた。
「――きっと、そういうところなのよ」
そう口を開いたのは、シオリだった。
「え？」
「あなたが、何となく周りから、東大のイメージに当てはまらないように見えるのは」
「……」
「頭がいいくせに、基本体を張って、汗水たらしてばかりなんだもん」
「……」
「あはは！　確かにそうね！　納得しちゃったわ」
マイが笑い出した。
「そうだな、俺の中の秀才って言うと、軍師みたいに後方にいて、周りに指示を出す人間だからな。確かにケースケはそういうタイプじゃないわ」
「要するに頭で考えるより先に体が動いちゃう、単純な奴なんだよな」
「バカなんだよ、要するに」
「ははは！　そうだな、バカなんだな、ケースケは」
「ああ、愛すべき大バカ野郎さ、こいつは」
ユータ、ジュンイチが大笑いし始めると、シオリとマイも僕を見て、くすくすとおかしそうに笑った。
「うるさい。チビで行動力がないとなめられるから、仕方なかったんだよ」

僕は憮然として反論する。
他人から馬鹿扱いされたら、昔ならもっと激高していただろうけれど、今はそれほど悪い気はしなかった。
何となく、自分もそれに納得してしまったからなんだろう。
確かに僕は、頭で考えていても、体が勝手に考えとは別の方向に向かって動いてしまう傾向がある。
きっと僕は、今までは力欲しさに走り続けてきただけで、実際は天才でも秀才でもない、単純な奴なんだろう。
きっと、それでいいのだと思う。
天才とか秀才とか言われることよりも、仲間のために体を張ってやれる奴でいられることの方が、ずっといいと今は思えるから。
あの夜、僕のために一生懸命、僕を肯定してくれた彼女のように、僕もなりたいと思うから。
「ま、僕も大学に入ってからじゃないと、そこには辿り着けないがな」
僕は目の前の4人の笑いを制した。
「そうだ。今日は折角ユータのお祝いもあって、珍しく5人一緒に帰れるんだ。放課後、ユータの家に行く前に、本屋に寄って、赤本買いに行かないか？　志望校の赤本を買って、買った以上、後戻りできないって目標を作っちまうんだよ」
僕はジュンイチを見る。
「お前ももう私立に逃げないって意志を固めるのに、いいと思うぞ」

Ｍｏｖｉｎｇ（後書き）

野球に詳しくない人のために…

東大野球部…野球部は東大、早稲田、慶応、明治、立教、法政の６大学が所属する東京六大学リーグに所属。東大はこの中で唯一の国立大学にして、スポーツ推薦が無いため、万年最下位が指定席になっている。７０年以上続く東京六大学リーグで、唯一優勝経験も無い。

その日のサッカー部の練習には、いつにも増して多くのギャラリーが訪れ、報道陣も多く学校に押し寄せていた。

勿論訪れた人々の目当ては、昨日プロ初先発にして2ゴールを挙げたユータだった。

この2ゴールは、ただの2ゴールとは違い、大きな意味を持つのだ。

ユータ達は3月にサウジアラビアで行われた、U‐20代表世界大会のアジア予選を突破し、7月にオランダで行われる本選への出場切符を手にしている。5月末の今は、その本選に向けてのメンバー選考が佳境に入っている。予選のベンチ入りメンバーは24人だけど、本選になると、これを18人に絞らなくてはいけない。予選のメンバーがそのまま選ばれるとも限らないし、コンディションしだいで予選メンバーを蹴落とし、予選未出場の選手が代表に滑り込むことも大いにありえるのだ。

そうした結果が求められる中、プロに入って日が浅いユータは、アジア予選ではチーム得点王にはなったものの、他の選手に比べて実績が少なく、起用を不安視する声も多かった。

そんなネガティブなイメージを、昨日の日本屈指の強豪プロチーム相手の2ゴールという結果で好転させたユータは、早くもオランダ行きのメンバーに当確したと見られているのだった。報道陣が多いのは、その恵まれた体格と、ゴールへの嗅覚から、将来を嘱望される若き選手の初の国際舞台についての意気込みを押さえたいからだった。

「はぁ、やっと解放されたぜぇ」

ジュンイチが息をついた頃には、既に春の夕日がオレンジ色に染

まってしまっていた。
「なんだかんだで、お前らも期待されている証拠だな」
僕達3人揃って代表に入ることを熱望しているユータはご機嫌そうだ。
結局僕とジュンイチも、ユータと揃って取材を受けた。サッカー部のグラウンドのゴールマウスの後ろ、芝生の上に座ってのインタビューだった。取材をするのは、女性のインタビュアーが6人、後はカメラマンや音声を疲労すタップなど、総勢30人ほどに囲まれての取材で、インタビュアーはスーツではなく、私服のような服で、僕達と一緒に芝生に座ってインタビューをした。
他の部員が練習しているので、ボールが飛んでくる可能性もあったので、校舎の中で取材を受けてもよかったのだけれど、こうして芝生の上に3人座っている方がリラックスムードが出て、僕達の世間のイメージとマッチすると言われたのだった。
アジア予選、初期のメンバーではユータもジュンイチも、チームで最年少の17歳だったためか、どちらもレギュラーではなかった。しかし二人がベンチを暖めている時の日本代表のサッカーは、守備が崩壊し、攻撃陣もたいした働きが出来ず、攻守共にボロボロだった。結局両方どちらも高いレベルでこなせる程のタレントのいなかった日本代表は、予選中盤戦からは、ボランチに守備に安定感のあるジュンイチを起用、同時にユータと、180センチ台のプレーヤーをスタメンに変え、堅実な守備でボールを広い、前線の長身(ユータ)選手を狙ってカウンターという、シンプル且つコンパクトな戦術にシフトし、序盤で乱れたチーム戦術を修正したのだ。それが、素晴らしい出来とはいえないまでも、どうにか日本をアジア2位で予選突破させるくらいのチームに修正したのだった。
攻撃力は、世界レベルでは皆無に等しいジュンイチだが、その堅実な守備で、予選序盤のチームを立て直す縁の下の力持ちになった功績は大きい。これは近くにいる僕の贔屓目というのではなく、世間もそれはある程度認識している。レギュラー確約とはいえないま

でも、チーム屈指の守備力は、スタメンでもサブでも十分チームのオプションに組み込める。ジュンイチもオランダ行きメンバーの有力候補なのだった。

「ま、俺はおまけさ。俺達のあの予選のサッカーじゃ、ヨーロッパや南米の強豪に引き裂かれるのが目に見えているんだろう。誰も期待していないのさ」

ジュンイチはシニカルな笑みで皮肉を効かせた。ジュンイチは芝生に座ったまま手をついて、夕日を見上げた。

「それを変えられるとしたら――今日のマスコミのインタビューは、きっと少しでもそういう希望を与えたかったのかもしれないな」

ジュンイチが僕を見る。

「……」

「ま、その希望とやらが、臥龍、サクライ・ケースケ個人のことなのか、サクライ・ケースケって言うかけたピースの揃った、埼玉高校三バカトリオのことなのかはわからんがな」

「……」

僕は学業優先を理由に、代表選出を辞退してはいたけれど、それでも今年の2月から何度か、代表参加の医師を何度か打診されたことがあった。代表の、予選でのサッカーが国内で罵詈雑言の嵐に晒されてからは、その打診頻度は増し、現在進行形で、僕のＪＦＡ（日本サッカー協会）による代表参加の説得は続いている。

取材をしたインタビュわーの話では、テレビ局の行った該当アンケートでは、僕を代表に呼ぶべき、という声が圧倒的だったらしく、今後の日本代表の中心になるべき選手は、ユータとダブルスコアを付けて僕が選ばれているらしい。

代表チームが予選で連動性を書き、チームとしてのまとまりの欠如を露呈する中、僕の視野の広さや統率力、仲間を引っ張るリーダーシップなどを高く評価する人が多かったらしく、今の日本には、そんな強力なリーダーを求めている人が多い、という切り口から、僕へのインタビューが始まった。

「……」

別に僕が出て、今の代表の現状が劇的に変わるか、それは僕にはわからない。

ただ、辛辣ではあるが、今のままオランダに行けば、ジュンイチの言うとおり、ヨーロッパや南米といった強豪チームにコテンパンにやられてしまうだろう。それだけは、もう確信を持って言えた。

――僕は、視線を僕達が今いるエンドラインの向こう――他の部員がミニゲームをしているピッチの中を見る。

「……」

今のままではこいつらが海外で大恥をかくことは目に見えている。代表にこいつらが選ばれるのは、名誉なことだが、帰国した時、こいつらが日本中から批判を浴びるのだ。

その時僕は一体何をしているだろう。このグラウンドで、他の部員とこうしてサッカーをして、日和見するだけだろうか。

それを思うと、いたたまれなくなる。

まだ僕は、国の威信を賭けて代表選手なんて肩書きを背負うということがどういうことか、よくわからない。今までただなんとなくやっていたサッカーを、こいつらのおかげで楽しいと思えるようになり始めて――

結局僕の今のサッカーは、単純に今を楽しむためのものでしかない。そんなサッカーで、国の看板を背負うのは、必死にそれを応援する人にとっての不義だろう。

そんなサッカーで、代表を戦うなんていうのは、人の道に反していると、僕は思う。

でも――だからと言って、今のままでいいのだろうか。

こいつらが、大会から帰ったら、間違いなく惨敗の責任を追及され、国中から批判の的にされるだろう。

その時僕は、友であるこいつらに、何をしてやれるのだろう。

日没に練習を終え、いつものようにガードマンに押し寄せるファンを抑えてもらい、足早に部室に退散。ファンが解散し、落ち着くまで僕達3人は部室で待機。

事前に部室でメールをして、シオリとマイとは、学校近くにある大型書店の前で待ち合わせする。

「うわ、もう6時近いな。ここでの用件は、早めに済ませようぜ」

僕達はこれから、所沢にあるユータの家に行って、ユータのプロ初ゴールの祝賀会をやる。

ただその前に、これから始まる進路相談のため、モチベーションアップと具体的な指針を求めて、今日ここに、赤本を買いに来たのだった。

「悪いな、お前は今日の主役なのに。一人だけ仲間はずれだな」

僕はユータを見た。ユータはもう大学受験はしないので、赤本は必要ない。僕達に付き合ってついてきただけなのだ。

「いいさ、サッカーマガジンでも立ち読みして待ってるよ」

ユータは言った。

書店に入ると、入り口でユータと別れ、僕達は1階の、参考書関連の本棚を探した。

大型書店は3階建てで、3階がレンタルＤＶＤをやっているようだ。2階はＣＤショップ、1階はコミックや雑誌、小説、専門書など、種類は多いとは言えないから、本好きには不満の残る品揃えだろうが、各方面の本を満遍なく揃えていた。

参考書の本棚は、入り口から見て、奥の方にあった。大学受験用の参考書は流石に種類が多い。赤本と各科目の参考書が、半々くらいの量で揃えられていた。

時間的に書店の中の客は、制服を着た中高生が多い。おそらくマンガや雑誌、ＣＤをチェックしに来ているのだろう。コミックコーナーなどは多くの若者がたむろしているが、まだ5月では、進路を具体的に決めている生徒が少ないからか、か顧問や参考書がほとんど売れていない。僕達のいる本棚の付近はがらがらで、動きやすか

った。

「とりあえず、全員国立志望だし、これは４人とも必須だろうな」

僕はそう言って、センター試験の過去問を取り出す。

「とりあえずこれを今度実際に時間を計って何年分か解いてみよう。その点数を見て、具体的にこの１年、どんな勉強をすればいいか決めるのがいいんじゃないか？」

「賛成。４人で一斉にやれば、隣に人がいる本番の感じも出るもんね」

マイが頷いた。

「国立の問題は癖がないけど、私立の場合は好みが分かれるからな……滑り止めの私立も、いくつか受けるんだろ？　国立は当面センター対策でいいとして、私立の赤本を何校かパラ見しておいたらどうだ？」

僕がそう薦めたことで、４人とも国立大学の赤本の棚の横にある、私立大学の赤本の棚に移動し、各々手近な大学の本を手に取り、中を開く。

僕は中学が、中高一貫で東大合格者を輩出する、私立の超進学校に通っていたため、大学受験に対するノウハウは、中学時代に学校で叩き込まれていた。中学で、大学の過去問を解かせられたこともあった。だから今こうして赤本を見ても、真新しい発見はない。

強いてあるとすれば、問題よりも前――目次後の数ページに記載されている、大学の年間費用などをまとめたデータの方だ。やっぱり思ったとおり、私立は学費が高い。ドイツは大学の学費が無料だと思うと、なぜ日本はたかが学校に、ここまでのお金を毎年払わなければいけないのだろうと思う。文系なんて研究もないんだし、大学が消費するものなんて、紙くらいしかないのに。

中学の頃はそんなお金の事なんか考えもしなかった。３年経って久しぶりに過去問を手にして、自分の視点が変わっていることが、少しだけおかしかった。

「うお、何だよこれ、慶応とか、英語の試験、設問まで英語だぜ。

何聞かれているかがわからねぇ」
近くでジュンイチの感嘆の声がした。
「俺は慶応の問題は合わなさそうだなぁ」
「お前、今相当イタい事言ってるぞ」
「わかってるわ！　問題の相性以前に、慶応入る実力が自分にないことくらい！」
ジュンイチがむくれた。ジュンイチの隣にいたマイはくすくすと笑う。
「そう言えば、ジュンイチ、お前、どこに行く気なんだ？」
僕は聞いた。
「ん？　それは大学？　それとも学部？」
「学部」
僕は横にいるマイを見る。
「マイさんは英語が得意だから、英文科と外国語学部を中心に受験するっていうのは前に聞いていたけれど、お前の志望学部はまだ聞いていなかったからな」
「んー、文学部の史学科とか、俺向きだと思うけれど、男の文学部はかなり少なそうだからな。将来的に世界をまわることを仕事にできたらいいと思っているし、国際環境学部とか、国際社会学部とか、そのあたりだと思う」
ジュンイチはやや答えに曖昧さを持ちながらも、そう答えた。
へえ、こいつなりに色々考えているんだ。彼女と一緒の学部に行きたいというだけで、学部を決めているのだとしたら、忠告してやろうと思っていたのだけれど。
「……」
ふと思い立ち、僕は辺りを見回す。
すると、シオリが今までいた私立の棚から、隣の国立の棚に移動して、本棚の前で一冊の本を手に取り、真剣なまなざしでそれを見ているのが見えた。
「どこの見てるんだ？」

僕はシオリに歩み寄る。
その声に、シオリは急かされるように本を閉じた。
「……」
シオリの小さな手では、装丁が隠れないので、それが何の本なのか、見えてしまう。
シオリが持っていたのは、僕の第一志望校、東大文?の赤本だった。

Ｂｏｏｋｓｔｏｒｅ（後書き）

更新が遅れてしまい、申し訳ありません。パソコンが動かなくなってしまい、書くことが出来なくて…

やれやれ、さっきまでジュンイチがもしマイと同じ学部に行こうとか考えていたら、忠告してやろうと思っていたのに……

しかし、いざ自分がそういう立場になると、シオリが僕と同じ大学、同じ学部に来ることを、拒む理由はない——と言うか、むしろ嬉しいわけで。

僕は自分の現金な感情に、自嘲してしまう。

「どうしたの？」

いきなり笑われて、シオリは怪訝な顔で首を傾げる。

「いや、何でもない」

僕は軽く息を吸って、笑いを飲み込んだ。

「……」

沈黙。

「そういえば、いつも僕の話を聞かせるばかりで、君の進路のこととか、全然聞いてなかったもんな」

僕も本棚から、東大文？の赤本を取る。

「ううん、まだ色々迷っている段階だから。もうちょっと気持ちを整理したら、みんなに話そうと思っていたの。うち、弟と妹がいて、妹も来年高校受験だから、浪人とか、私立とか、そういう親に負担かけるようなことしたくなくて。だからちょっと志望校のランクを落として、確実に手ごろな国立に入ろうとか、そういうことも考えてて」

「……」

家族想いの彼女の考えそうなことだ、と思う。自分の大学のランクを落として、妹には私立高校の選択肢を与えようとしたわけだ。

シオリは隠すように持っていた、東大文？の赤本の装丁を、僕に見せるように持ち替えた。

「でも、そろそろ覚悟決めないとね。そう思って」
そう言って、意を決したような顔をして、シオリは持っていた赤本を目の前にかざした。
「よし、決めた！　私、これを買う！　それで3月まで、頑張ってみる」
「……」
僕は沈黙してしまう。
次に何を彼女に言えばいいか、わからなくなったのだ。
彼女がなぜ、僕と同じ大学、しかも同じ学部に行こうと思ったのか、その理由が知りたかったけれど、もし僕のためだとしたら、それを聞くのも野暮な気もしたし、もしそれで理由が違っていたら、僕は彼女の決意に水を差すことになるからだ。
「君の家庭のことに口を出せる身分でもないけれど、いいことかもしれないな」
僕はとりあえず口を開く。
「前に君が言っていた。家族のことを思いすぎて、家族を優先するあまり、自分自身の存在が薄弱になっていく――自分自身は、何をやりたいかわからない。自分の人生を、どう生きていいかわからない――そう言っていた君が、家族のためじゃなく、自分自身で行きたい場所に行くって決断したことがさ、僕はすごくいいことだと思う」
そう、あの、僕が救われた夜に、彼女はそう言っていたんだ。
僕も小さい頃、家族がこれ以上荒れる理由を作りたくなくて、必死に家族のご機嫌をとるために、わけもわからず勉強して、自分を殺し、いつでも家族の言うことに従っていた時期があった。
その気持ちを知っているだけで、僕達の心は何も言わずとも、微かにシンクロしていたのだと思う。だからかもしれない。彼女といると、ひねくれた僕が、少し素直になれるのは。
「大学に入って、やりたいことが見つかったのか？」
僕はそう訊いてみた。何故彼女が僕と同じ大学、同じ学部を目指

すか、それを遠回しに聞くのには、なかなかいい訊き方じゃないか、と、我ながら思った。

「うん、一応ね」

そう言って、彼女は左手で赤本を持ちながら、足元にある自分の荷物——学校用の鞄と、彼女の吹奏楽部のパートである、フルートの入った箱に目を落とした。

「私、大学でも音楽を続けようと思う」

「そうか。大学でもフルートを続けるのか」

「ううん、大学では楽器はわからない。私、ピアノとバイオリンもできるから」

「……」

「でも、大学に入っても、音楽を続ける」

「——そうか」

僕がそう言うと、シオリはこくりと頷く。

「調べてみたんだけれど、大学に入ったら、入ってみたい楽団があるの。学生主体のインカレで、みんなアマチュアなんだけど、そんな人達が音楽を通じて、色んな人達と交流したりしてるの。老人ホームとか、小学校とかに出向いて演奏したり、妊婦さんの胎教のためのミニコンサートとかを開いたり、とにかく音楽で、誰かを楽しませたり、笑顔にさせたりするための音楽をやっているんだって」

「へえ、いいな、そういうの」

「でしょう？」

得意げに、シオリは僕に微笑む。

「——私、音楽を始めたのは、正直、小さい頃に、親に習い事で、ピアノとバイオリンを薦められたからなの。自分から進んでやりたいって思ったものじゃなかったけれど、コンクールとかでいい成績をとると、家族が喜んでくれたし、私のために家族がパーティー開いてくれたりして——それだけでずっと続けてきちゃったんだけど……やっぱり私、音楽が好きだって、好きだから続けられたんだって、最近思えるようになって来たの」

「……」

「まあ、だからって、音大に通ってプロになるとか、そういうわけにもいかないから、結局は趣味にしかならないかな、って思っていたんだけれど――でも、そんな私の素人音楽でも、誰かを楽しませたり、喜ばせたりできたら、嬉しいな、って思って。大学に入ったら、自分だけが楽しむんじゃなくて、そんな音楽をやりたい、って、思ったの」

「いいじゃないか。すごくいいと思うぞ、それ」

心からそう思った。僕もそんな彼女の心のこもった演奏を聴きたいと思った。

そんな思いで彼女の横顔を見ていると、彼女は向き直り、しっかりと僕の顔に視線を置いた。

「そう思えるようになったのは、あなたのおかげよ」

正対して、シオリは言った。

「え？」

「この数ヶ月、あなたが全国大会でサッカーしている時から、私はずっとあなたの笑顔を見てきたわ。今までずっとクールだったあなたが、初めて子供みたいに感情むき出して笑って……」

「……」

そう言われると、ちょっと照れくさい。

彼女の音楽じゃないが、僕も最近、サッカーをやるのが心から楽しいと思えるようになった。サッカーをやっていると、アドレナリンが出て、自分がひどくハイになってしまうことがある。そんな時僕はどんな表情をしているのかよくわからない。ジュンイチ達には、「そんなお前のガキみたいな表情と、普段のギャップがファンを惹きつけているんだ」と言われるけれど。

「私、あなたの笑顔を見て、思ったの。やっぱりこうして笑うあなたが好きだって――あなたの笑顔が好きだって、この数ヶ月、何度も思った。それを通じて、ああ、私はこうやって誰かの笑顔を見るのが好きなんだなぁって、あなたの笑顔を見て、気付かされたの。

今まで頑張ってこられたのも、家族の笑顔を見るのが好きだったからなんだって」

「……」

彼女の言葉に、男として心動かされている自分に気付く。好きな女の子からこんなことを言ってもらえるなんて、男冥利に尽きるっていうのは、こんな気分のことだろうか。

だけど、それ以上に、彼女のその言葉が、とても暖かく、とても綺麗で、僕は少しだけ浮遊感を味わった。こうやって一生懸命で、とても切実な思いを、頑張って言葉にする彼女の言葉は、聞いていると何だか心地よく、何か大きな優しさに包み込まれるような安心感があった。

「ケースケくん」

シオリのその優しい声が、僕の名を呼んだ。

「私――高校に入学した頃、ずっと焦ってた。やりたいことも見つからなくて、中学も、確かに充実していたけれど、それは家族や友達に合わせていただけで、ちっとも自分の人生って感じがしなくて。高校で、自分を変えてみたい、と思って。自分でゼロから何か築き上げてみたいと思って、今までやっていたピアノやバイオリンをやめて、まったく知識のないフルートを始めてみたけれど……それでも、自分の本当にやりたいことが何なのか、わからなかった」

「……」

そうか――彼女にとってフルートは、僕とこういう関係になるずっと前、入学当時から、自分を変えるための鍵のようなものだったんだ。だからあんな、指先にマメができるほど、必死に練習していたのか。

「高校で初めてあなたと出会ってから、私はあなたをずっと追いかけていたように思う。あなたは勉強ができるだけの優等生じゃない、テスト以外でも、その頭の良さを表現できる、私にはない力を持った人だと思ったから。あなたも高校で、まったくの未経験からサッカーをはじめて。どんどん上手くなっていくのもずっと見ていた。

それを見て、私も頑張らなくちゃ、って、フルートの練習も頑張ることができた」

「……」

「そしてあなたが、大学では、誰かの笑顔のために頑張ってみたい、って思っているのを聞いて……上手く言えないけれど――私、あなたを大学でも、目標にして、追い続けてみたい――私が目標にする場所を、今のあなたを追い続けることで見出したいと思ったの。勿論、今のあなたを追うのは並大抵のことじゃないと思うけれど、そんなあなたに甘えてばかりの関係にはなりたくないし。あなたを追うことで、強くなりたいと思うから」

「――そうか」

去年の冬――サッカー部の勉強合宿の帰り道に、彼女とした話を思い出す。

その時の彼女は僕にとっては忌むべき存在だった。彼女の存在が自分の評価を低下させる一因だと、一方的に憎んでさえいた。そんな彼女が、自分にない行動力、応用力を持つ僕に憧憬の念を持っていて。

彼女は僕とやりとりをしたいと望んだ。僕の引き出しを探って、自分に吸収したい、それを僕に所望して、一生懸命に自分の気持ちを話した。

結局彼女は、その時の想いを今でも抱えている。彼女にとって、僕は恋人で、それ以前に大きな目標なのだ。向上心のある彼女は、今でも僕から何かを吸収しようとしている。恋人と同じ大学に行きたいとか、そういうふわふわした感情ではなく、もっと貪欲でアグレッシブな感情に突き動かされて、彼女は僕と同じ道を歩みたいと言うのだ。

「僕は君に本気で追いかけられたら、勝てる気がしないけどなぁ」

僕は彼女の顔を見て、くすっと笑う。

「君って、おとなしそうに見えてかなり頑固な性格だからな。そんな君に押しの一徹で来られたら、僕は東大でも君の後塵を拝すこと

になりそうだ」
「何言ってるの。それに、頑固で意地っ張りはお互い様でしょ」
「――確かに」
そう言って、僕とシオリは笑い合う。
「でも、君に本気で追いかけられたら、追い抜かれそうっていうのは嘘じゃないよ」
「え？」
「時に思いの強さは、才能とか、そんなものよりも強く作用することがある――集中力が戻ったことで、それを今実感しているからな。君のその追い込まれたときのド根性を知ってれば尚更そう思うさ」
「そうかな……」
「それも君が教えてくれたことだ。そして、僕以上にその強さがある君が、東大に落ちるなんてこと、僕は最初からこれっぽっちも考えてなかった。家族のためにランクを落とす必要なんてまったくない。君は東大に絶対受かる。主席合格だって夢じゃないと思うぞ」
「それは言い過ぎだって。模試で東大安全圏が出る人なんて、日本に何人もいないのよ」
「いやいや、いけるって。なんだったら、僕と勝負しようか？　僕と君、どっちかが主席で東大に合格したら、相手の言うことを何でもひとつ聞く、とかな」
「ええ？」
「少なくとも僕はこれだけ世間から騒がれると、東大主席合格じゃないと今までのがフロック扱いされちゃうから、どっちにしろ主席狙う出勉強しなくちゃいけないからな。死なばもろともってやつさ」
「もう――なんて人なの。東大受験をゲーム感覚でするなんて……」
シオリは呆れ顔だ。
「――でもいいわ。あなた一人主席狙いなんて可哀想だし、付き合ってみる。あなたに私の言うことを聞かせるのも一興だしね」
「ええ？」
「えへへ……」

その笑顔に空恐ろしいものを感じる。
しかし、僕の知らない間に、彼女にも随分変化があったんだな、と思う。
こんな冗談を僕の前で言うようになったのは、少しは僕と彼女が打ち解けた関係になったということなのかもしれない。彼女が家族のためではなく、自分のために大学に行こうと決めたことも、彼女の中では大きな一歩だ。
そうやって、色々なことが、シオリだけじゃない、ユータやジュンイチ、どんな人にも起きている。
人間、一面だけ見ていたのではわからないこともある。
シオリがこんな冗談を言うことも、今まで僕が見ていなかった彼女の一面だ。
そういうことが、少し面白いと思えるようになった。
世の中は辛く、つまらないもの、死を待つだけの存在だった僕が、世の中にはまだまだ面白いことが沢山あると思えるようになった。
これからは、もっと沢山の人に出会いたい。人間関係を捨て続けてきた僕だけれど、今なら以前よりは前に進めそうな気がする。
何十歩、何百歩とはいかないまでも、せめて少しだけでも――
そう思った時、自分に向けられている粘着性の視線に気付く。
僕は店の入口側――その視線の感じる先に目を向ける。
両脇を本棚に囲まれた狭いスペース、僕の5メートル程先、本棚の端に、5人の男女が立っていて、僕を見て、にやついている。
「よお、サクライ」
一番前にいた、鉤爪のようにごついシルバーのピアスをした、長身の体格のいい男が軽く手を上げた。ひどく気さくな感じもするが、実際は親しみなど微塵もこもっていない声。
「……」
自分の乏しい人間関係は、既に埃を被っている代物だが、そんな風化しかけた情報で、この顔に見覚えがないか検索をかける。
もっと沢山の人に出会いたい、と思った矢先の出来事だった。

それは、僕の記憶に間違いがなければ、出会いと言うよりは、再会だったけれど。

Leak

人生において、自分に大きな影響を与える人間なんていうのは、ほんの僅かだ。

歌の文句ではないが、人間が何億といるこの地球で、自分と他人が出会い、接点を持つ――それだけでも何百何千万分の1の確率の出来事――奇跡のような確率の出来事だ。1億人以上が住む日本でも、携帯電話のメモリーに登録する程度の間柄になる人間なんて、ほんの数百人、あるいは数十人だ。

そんな1億分の数百のふるいにかけられた人間の中で、自分の人生を左右するほどに強い影響力を残す人間なんていうのは、本当に一人いるかいないか――もしかしたら一人もそんな人に出会うことなく、人生を終えてしまうこともあるのではないだろうか。

少なくとも僕は、埼玉高校に入学し、シオリやユータ、ジュンイチに出会うまでは、そんな人に出会えなかった。

ただ、自分の人生を省みると、それはただ、他人を排除し続けてきた自分が、本当はそんな人が近くにいたのに、気付かずにすれ違ってしまったのではないだろうか、とも思う。

「……」

もしかしたら、今、僕の目の前にいる奴等も、本当は、過去にもっと上手くやっていれば、別の関係に発展していたのかもしれない。

なんていうことを一瞬考えたけれど、とりあえず現時点ではそんな甘い考えは捨てるべきだと、即感情をシフトする。

過ちか必然かはともかく、それだけ僕とこいつらの関係は最悪だった。僕はこいつらの名前ももう忘れたけれど、それだけは覚えている。

「……」

僕の横にいたシオリが、少しだけ僕に寄り添った。目の前にいる奴等の悪意を感じたのだろうか。

奴等は僕達の方に歩み寄ってくる。
「その娘、あんたの彼女？」
距離を2メートルにまで縮められながら、中にいた女に聞かれる。
これでよく学校に行けるな、というくらいの濃い化粧をしたセーラー服の女。
「見てよ、あのサクライが、こんな可愛い娘連れてるわ。うわー、生意気……」
女は嫌味たらしく吐き捨ててくる。
「……」
そしてそのまま女は、シオリに哀れみを込めた視線を送る。
「あなた、悪いこと言わないから、こいつはやめた方がいいよ」
「そうそう」
後ろの連中も、それに輪をかけて同意する。
「こいつ、気に入らない奴は女でも容赦なく暴力を振るう奴だから」
「あなたくらい可愛いなら、他にいい男はいっぱいいると思うけどなぁ」
「て言うか、もう既にこいつのＤＶ被害受けてるんじゃねぇの？」
「あはは！」
奴等は僕とシオリを嘲笑する。
「……」
その嘲笑を見て、自分の体がどくどくと、赤黒く流れる血に支配されていくのを感じ出した。
別に奴等に侮辱されたことなどはどうでもいい。ただ、それに彼女を巻き込んだ奴等の言動に、僕は久しぶりに激しい怒りを感じていた。もうあの頃とは違って歳を重ねた身で大人気ないかも知れないが、そんなことは糞喰らえだ。
「なあ、ケースケ」
そんな僕の激情を、何とも間の抜けた声が払った。
僕は顔を上げると、連中の背後から、両手に二冊の本を持ったジュンイチが歩いてくるのが見えた。

「この大学とこの大学って、難易度で言うとどっちが……」
僕への質問を、ジュンイチは途中で止めた。
僕に絡んできた連中は5人で、そのうち男は3人。3人とも、僕より体が大きいが、それでも180センチ72キロという、立派な体格のジュンイチを見て、威圧されたのか、本棚の脇に寄り、道を開けた。
ジュンイチはどんぐり眼で連中を一瞥する。
「ん？　知り合いか？」
ジュンイチは僕に訊いた。
「――ああ。小学校時代のな」
自分の声が想像以上に沈みきっていた。
そう、この連中は、もう小学校を卒業して6年会っていないが、僕の記憶に間違いがなければ、小学校時代のクラスメイトだ。
当時の僕は、親の機嫌をよくするためとはいえ、勉強の虫で、名門私立中学に合格するために、有無を言わせずに塾に通わされ、夢の中に数式が浮かぶほどに勉強していた。
周りの人間は僕に公式や法則しか教えてくれなかったし、偏差値以外の価値を見出してくれなかった。だから僕も、世界の尺度がそれだけしかなく、その尺度で測れないものをゴミのように排除し続けてきた。公立小学校の生活は、当時の僕にとっては、まさにそんなゴミのようなもの――退屈しのぎにもならない無駄なものばかりで、苦痛以外の何者でもなかった。
当然そこで共に生活する同世代とは一線を画していた。やがてそれが溝となり、その溝は歳を重ねる毎に拡大していった。
きっかけは些細なことだったと思うが、僕は小学校で異端視され、迫害が始まった。僕はそれに立ち向かい、結果、多くの痣を作り、血を流した。
正しいとか、そんなことよりも、目の前の人間に屈服するのが嫌だった。その意地を立て通すためには、ひとりで何でも出来る力が必要だった。孤独に負け、心が揺れないように。

それからの僕は、ずっと力を追い求め続けてきた。小学校を卒業してからも、ずっと――その思いが僕を縛り付け、目に映るものすべてを敵にし、壊してしまいたくなる程の憎悪にさいなまれる直前まで僕を暴走させた。ほんの数ヶ月前の話だ。

今目の前にいる奴等は、決して相容れる存在ではないが、ある意味で僕の小学校以降の人生にかなりの影響を与えた連中だった。

「へぇ……」

ジュンイチは、今度はいつも温和な目に、少しだけ冷たさを含ませた目で、もう一度連中を一瞥する。

「ジュンイチ、彼女とマイさんを連れて、先に店の外に出ていてくれ」

僕はジュンイチに頼む。

「ん？　別に構わないけど？」

「すまん、頼む」

そうジュンイチに告げてから、僕は隣にいるシオリの肩に手を置いた。

「……」

だけどシオリはそこを動こうとしない。

それどころか、僕の袖をつかんで、口を真一文字に結び、小さく首を横に振っていた。

「……」

きっと何か、危険な予感がしたのだろう。彼女は僕の感情の未成熟さと、僕がまだ自分で感情を上手くコントロールできないことを知っているからだろう。

「シオリさん、行こうぜ」

その状況を察して、ジュンイチがシオリに歩み寄る。

「でも……」

「大丈夫だって。今のケースケなら、無茶はしないさ」

「……」

シオリは5秒ほど、怪訝な表情を僕に向けていたが、結局、憮然

とした表情で純一の元へ行き、そのまま店の出口の方へ歩いていった。
「すぐに済むんだろ？」
ジュンイチは去り際に訊いた。
「ああ」
僕は返事を返す。
それを訊いてジュンイチは、何も言わずににっこりと頷いた。そしてしおりを追いかけるように、店の出口の方へ歩いていった。
本棚の間の狭い通路に、僕と過去の級友だけが残される。
「へっ、自分の過去を彼女に聞かれたくないから、慌てて彼女を追い返しやがった」
先頭にいた、ごついピアスの長身の男が言う。
「そりゃそうするしかないよなぁ」
後ろにいた男も僕ににじり寄ってくる。僕と同じくらいの背丈だが、腕ががっしりと太く、筋肉質の男。
「……」
僕は一度視線を目の前の本棚に戻し、手に持っていた東大の赤本をもう一度開いた。
だが、先頭に立っていた長身の男が、僕の持っていた本を一気に取り上げた。僕は男に視線を向ける。
「シカトすんなよ。数年振りに会ったっていうのによ」
長身の男は、表面上にこやかだが、シオリがいた時に比べて、どことなく殺気を増しているように聞こえた。口元を歪ませているだけで眼は全く笑っていない。
「……」
しかし、サッカーの全国クラスの選手には、こんな男の迫力など露払いにもならないような、すごいプレッシャーをかけてくる奴が沢山いた。そんな選手達とこの半年、殆ど休む間もなく対峙してきた僕が気圧される程の殺気じゃない。
僕は変わらず無視を決め込み、もう一冊ある東大文?の赤本を、

目の前の本棚から取り出そうとした。
　すると今度は本棚に伸ばした僕の手首を、後ろにいた筋肉質の男が掴んでいた。その筋肉質の男の隣にいた、もう一人の男――学ランを着た坊主頭の男も僕の前に来て、長身の男と3人横並びになり、本棚の間の道を塞いだ。
「ちょっとツラ貸せよ」
　体の小さな僕に、長身の男が威圧的に言った。
「数年振りに積もる話が色々あんだよ。ちょっとお前に聞いてほしくてよ」
　そう言って、筋肉質の男が僕の肩に手をかけてくる。僕の耳元に、男の顔が近づく。
「ねえ、いいだろ？　天才少年、サクライ・ケースケくん？」
　耳元で囁かれる。僕の視線の先にいる、3人の男達の連れの2人の女がそれを見て笑っている。この女達も、僕を痛めつけるのに積極的だった連中だ。
「……」
　積もる話か。恐らくそれは、耳に聞かせるのではなく、体に聞かせる話だろう。
「――もし、嫌だと言ったら？」
　僕は顔を上げて、肩を組まれている男以外の4人を一瞥する。
「あ？」
　坊主頭の男が額に血管を浮き上がらせる。
「お前の過去にやってきたこと、お前の本性を、ネットやマスコミにばら撒くぜ。お前の人気はがた落ちってわけだ」
　そのまま坊主頭はそう吐き捨てた。

Insignificant

「……」

それを聞いて僕は、最高だ、と思った。アドレナリンの出ていない状態の僕は、相変わらずの仏頂面振りだったけれど、それでも笑いの衝動をこらえるのがこんなに大変だとは思えないくらいに、僕は腹の底から笑いの衝動が湧き上がってきた。

その言葉を聞いて、僕の行動も決まった。僕は筋肉質の男の腕をするりと抜け、目の前の長身の男が持っていた東大の赤本を、すれ違い様ひったくるように僕の手に戻す。そこまでの行為を2秒で片付けた。あまりの行動の迅速ぶりに、連中は僕の足止めさえ出来なかった。

そして僕はそのまま東大の赤本と、センター試験問題集を持って、書店のレジへと歩を進める。

レジの前に客はおらず、僕はすぐにカウンターに二冊の本を置いた。

「いらっしゃいま――」

レジ係は大学生だろうか、黒縁眼鏡の地味な印象の女性だったが、僕の顔を確認するなり、社交辞令の挨拶が凍った。

僕は人差し指を立てて、それを口元に当てるジェスチャーで、女性の狼狽を制した。

「し、失礼しました」

そう言って店員は感情を持ち直し、本のバーコードの読み取りに入った。とは言っても、さすがに世間は僕の進路に注目している。黒縁眼鏡の奥の店員の瞳にも、僕がどの大学の赤本を買ったか、それをしっかり確かめる視線の動きが確かにあった。

お金を払い、店のロゴのプリントされたビニール袋に入った本を渡され、店員は「ありがとうございました」と言った。

そこで踵を返し、店の出口へと向かう。

しかし、僕が出口に近づくと、さっきの連中が5人揃って、僕の目の前の出口を塞いだ。

「……」

僕は5人を一瞥する。

「あんまり私達に逆らわない方がいいよ?」

女の一人が言った。

「そうそう。あんたの今の地位、私達がマスコミに今まであんたのこと喋らないであげたからあるようなものなんだから。本性は女でも平気で殴る男なんて知れたら、あなたの今の人気もおしまいなんじゃないかなぁ?」

もう一人の女が軽やかな口調で僕に言った。

「……」

――やれやれ。どうやら僕をなぶっているつもりらしいな。既に僕は窮鼠の立場ってわけか。

じゃあそろそろ、窮鼠は猫を噛むってことを教えてやろうか。別にそこまで追い詰められてもいないけれど。

「お前達、そもそも前提が間違ってるよ」

僕は顔を上げ、ようやく顔を笑みの形にほころばせた。それだけで随分楽になれた気がする。

「僕は別にアイドルでも芸能人でもない。確かにマスコミやファンに、アイドル風の持ち上げられ方をされてはいるが、僕自身はお前達が思っている程、今の自分のイメージや地位に未練なんかない。だから別に、今の自分のイメージが損なわれても、別に何の問題もないし、お前達がマスコミに僕のことを何話そうが、何の問題もない。よって、今ここでお前達を素通りしても、何の問題もないってわけだ。そのネタで、埼玉高校サッカー部が大会出場を自粛するって程の話でもないしな」

「……」

僕のことを芸能人かアイドルだと勘違いしている奴がいる。

僕自身は、今まで力にしか興味がなく、人前に出るにはあまりに

長い時間、他人に無関心で、思いやりを知らずに来てしまった人間だ。そんな自分が現時点で公の場に進んで立つべきではないと、自分なりのけじめのつもりで行動しているのだが、その際の発言があまりに謙虚すぎて、人気取りのデモンストレーションだと揶揄する人間がいる。

こいつらは過去の僕を知っているだけに、僕の今までの言動をポーズだと読み違えたのだろう。だから、僕の今の人気を覆す、「過去」という武器さえあれば、僕をいくらでも強請ることが出来ると考えたのだ。今まで謙虚な優等生キャラの僕が、女でも容赦なく殴り、他人を馬鹿にし続けた冷酷な男だったなどというのは、僕の初の醜聞だ。それがばら撒かれるだけでも、僕の築き上げてきたものに楔を打ち込めると信じていたのだろう。

だが、自分達の握っていた武器が、三段論法で理路整然と一笑に付されてしまい、決め手を失った連中が、さっきまでの威勢を一気にしぼませていくのがわかった。

もう一度腹の底に笑いの衝動が沸きあがってくるのを感じると、本当に自分は攻撃的な性格をしていると思う。奴等はさっきまで僕をなぶって楽しんでいたが、僕自身もそんな劣勢をひっくり返したり、攻撃に転じることが本当に好きなんだな、と思う。

サッカーなんかではそれは長所だろうけれど、日常でその性格は自分でも修正しなければいけないところだとは思う。そうしなければ、いつか僕も家族のように、一方的な暴力に夢中になってしまう時が来てしまうかもしれないから。

「ついでに言えば、お前らが色々喋って僕の評判を落としても、その程度じゃ僕の今の歩みは止められない。すぐにひっくり返せるだけの力はあるつもりだからな。それでも言いたきゃご自由にどうぞってところだな」

更に追い討ちをかけておく。

「……」

本当は奴らのシナリオでは、強請られた僕はもっと狼狽して、喋

らないでくれ、と哀願し、そのみっともない僕の姿を今頃笑っているはずだったのだろう。そして人気のないところに連れ込んで、僕に数発拳でも叩き込んで、サンドバックにでもして、僕をいい憂さ晴らしに利用する——そんなところだったと思う。

だけどここまで自分達のことを問題視されていないケースは、奴等の想定したシナリオになかったようだ。逆にこちらから、奴等の動揺が手に取るようにわかった。

「……」

僕は溜め息をつく。

「ま、お前達が今後どう出るかは好きにしろ」

僕はそう言い残して、立ち尽くす連中の横を通り過ぎて、店の外に出た。

足早にその場を立ち去ったのは、これ以上は弱いものいじめにしかならないと思ったからだ。そんなものに加担するのは、あの家族を見てきた僕はごめんだった。

「よお、ケースケ。予告通り、早かったな」

店の外に出ると、すぐ前にジュンイチ達が立っていた。一人漫画を立ち読みしていたユータも合流して、４人で僕を待っていたようだ。

「もう用は済んだのかよ？」

どうやらジュンイチから事情を聞いたらしい、ユータが僕に訊いた。

「別に僕は何の用事もなかったんだがな」

僕は答えた。

「しかしつまらんことで時間をとらせた。早くユータの家に行って、パーティーの準備を……」

「おい、待てよサクライ！」

僕の言葉を、背後からの怒声がかき消した。

僕は振り向くと、いきなり胸倉を掴まれ、体ごと上に引き上げられた。

「な？」
ユータの驚嘆の声がした。
「……」
胸倉を掴んでいたのは、さっきのグループの長身の男だった。右腕で僕の体を引き寄せ、近づいてみる男の眉間には、深いしわが刻まれ、こめかみに青筋が出来ていた。
「てめえ、その俺達を見下すような優越感いっぱいのツラ見てると、ヘドが出るんだよ！　自分だけが正しくて、周りの人間を常にバカにしている眼は、あの頃のままだぜ。世間がなんと言おうと、俺達は絶対にお前のことを認めたりしねぇ！」
顔を近づけて、怒鳴られる。
「……」
普通の高校生なら、自分より体も大きい、しかも集団で囲まれたら、この程度でビビるのだろう。
だが、僕の心はまるで朝凪のように何の変化もない。小学校時代にこいつらに集団で日常的にリンチされ、家族にも日常的におびえていた生活をしてきた僕は、自分で思っているよりも修羅場はくぐっているんだな、と、改めて思う。
「――確か小学校時代も、お前達に呆れる程言ったと思うが、敢えてもう一度、同じ言葉を繰り返そう」
僕は胸倉をつかまれたまま、長身の男の顔を見上げた。
「お前達が僕を気に入らないのなら、それでも構わないが、僕の邪魔をするなよ。お前達が黙っていれば、僕が確実にお前達との縁を切ってやるんだ。その時が来るまで、大人しくは出来ないか？　お前達に嫌がらせなんかされなくたって、僕がお前達の前から消えてやるから」
そう言ってから僕は、出来る限り爽やかな笑みを作って見せる。
「事実、小学校時代はそうなっただろう。僕が私立中学に進学して、お前達の目の前から消えてやった。それ以上、どうしろって言うんだ？　今だってお前達が『お前を見ていると虫唾が走るんだ。消え

ろ』くらい言えば、すぐにでも僕がお前達の前から消えてやったのに……」

「うるせえ！」

また怒鳴られる。

「そういう問題じゃねえんだ。気にいらねえんだよ、お前のその人を見下すような態度、目上の人間に媚びる腐った性格がよ！　お前の全てが気にいらねえんだ！」

「……」

この大きな書店は、敷地内に大きな駐車場がある。本屋だけじゃなく、レンタルショップもあるから、書店の入り口付近は人の往来もある。

そんな入り口前でこんな大声で怒鳴る男がいて、胸倉を掴まれている人間がいる。次第に人が僕達の周りに集まってくる。

「ねえ、あれってもしかして、サクライ・ケースケくんじゃない？」

「あ、あっちには、ヒラヤマくんとエンドウくんもいるわよ？」

そして、あっという間に僕達の招待に気が疲れ、僕達の周りにはどんどん人が集まってきてしまった。

やれやれ……

Fight

僕は自分の首許をがっちりと握り締めている男の右手に、自分の右手を当てた。

「この手を見る限り、どうやら今更僕と分かり合う気はないようだな」

僕は長身の男の目に視線をぶつける。

「俺達の怒りは、目の前のこいつの顔に一発お見舞いしないと収まらない――そんな顔だな」

「そうだ。わかってんじゃねぇか」

口を開いたのは、長身の男の後ろで僕の様子を見ていた筋肉質の男だ。

「お前がテレビや雑誌に出る度に、こっちはお前のことを思い出して、気分悪いんだよ。人を選んで媚を売る、てめえのそのスカしたツラ、もう二度と見たくもねえってのに」

「……」

――お前達、その文句は僕じゃなくてテレビ局やマスコミに言えよ。これでもサッカーの取材を除けば、自分から進んでメディアに顔出したことないんだから。

僕は自分の右手で、首許にかかっている長身の男の右手を掴んだ。

「散々好き勝手言われてるけど、僕だって小学校時代、お前達に相応のことはされた。火のついたマッチ体に押し付けられそうになったり、集団で痛めつけられた後、身包み剥がされて縄跳びで体を縛られ、冬空の神社の境内に放置されたりな」

その僕のカミングアウトを聞いて、周りを囲むギャラリーはにわかにざわめきだす。

「正直当時の僕とお前達は、喧嘩にもなっていなかった。お前達の数に物を言わせた暴力に、毎回のされた。でも、お前達は毎回僕をぶちのめしていても、それで一度でも僕を屈服させられたことがあ

ったか？」
「……」
「今も同じだ。ここで僕がお前達にボコボコにされても、僕には何の変化も起こらない。僕の足は止まらないし、お前達を畏怖することもないだろう」
それを聞いて、長身の男が、僕の首許を掴む手に力を込めたのがわかった。それは、こうして首許を掴む脅しをかけても、僕が全く気後れしていないこと、そして、一度振り上げてしまった拳をどう下ろしても、僕との関係が膠着するだろうということへの苛立ちがそうさせたのだと思われた。
「それに――後ろにいる二人のことを知っているか？」
だけど僕はそれには構わず、首許を掴まれたまま、後ろにいるユータとジュンイチを親指で指した。
「そのうちの一人は、昨日プロサッカー初先発で初ゴールを決めたんだ。だからこれから僕達は、そいつの幸先のいいプロ生活の門出を祝ってやろうと思っていたところでな。僕達にとっては、今日は結構めでたい日なんだよ。そんな日を、血で汚すのは忍びないし、折角の祝いの日に、しらけることはしたくないんだ」
僕がそう言った時、僕の背後からいくつかの拍手が起こった。
今僕達を取り囲んでいるギャラリーの中にも、テレビで昨日のユータのゴールを見ていた人もいるのだろう。ユータに向けての祝福の拍手だった。いや、どうもどうも、と、照れくさそうなユータの声も聞こえたからだ。
「どうやら無駄なようだぜ、ケースケ」
その拍手の中、横からジュンイチの声がした。首元をつかまれている僕は、ジュンイチの方を振り向くことも出来ないけれど。
「そいつら、明らかにお前に対して苛立ってるし、どうやらお前が口で説得しても聞き入れそうにない。何よりここで中途半端に拳を下ろさせても、そいつらがお前を嫌いだって事実は消えそうにない。ある程度この場で白黒つけないと、色々と禍根が残りそうだぜ」

「……」

そうだろうな。ジュンイチの言う通りだ。

僕の悪評をマスコミに話すとか、ネットに流すとか、こいつらがさっき言っていた程度の嫌がらせなら、別にされても問題はない。僕個人で完結できる。しかしこいつらの僕への憎悪は、そのうち僕の周りの人間にも迷惑をかけそうな危険性を秘めている。僕が現状マスコミなどから取り上げられることは避けられないし、その度にこいつらの僕への嫌悪感が増していくのだとしたら、そのうち埼玉高校サッカー部や、ユータ、ジュンイチ、シオリにも何かちょっかいを出してくるかもしれない。

ここである程度、白黒つけられる方法、か……

解決策の候補としては2つあるけれど……どっちを選ぶか。

「部外者の俺が口を挟んでいいなら、ひとつ提案がある」

またジュンイチの声がした。

「あ？」

「お前達はケースケをボコりたい、ケースケは血を流すことなく、なおかつ早く帰りたい。その両方の利害を最大限マッチさせつつ、白黒つけさせる方法がある」

「へえ、面白いじゃん、聞かせろよ」

後ろの坊主頭がジュンイチに冷笑をぶつけた。

「その前に、ケースケを離しな」

僕の背中越しに聞こえるジュンイチの声は、普段の間の抜けたムードメーカーのそれではない。鉄壁のボランチとして、相手チームの攻撃を体を呈して止める、サッカーをしている時の奴の迫力を僅かに感じる。

どうやらジュンイチも、こいつらに対して少々立腹気味のようだ。これからパーティーだというのに、こいつらのせいで水を差された怒りは僕だけではなく、ジュンイチも当然持っているのだ。

その迫力に気圧されたかのように、長身の男は僕の首元から手を離した。僕は一度男と距離をとるために、2、3歩後ずさった。そ

の僕のすぐ横にジュンイチが立つ。
「離したぜ。聞かせろや、そのいい方法ってやつをさ」
長身の男は、同じくらいの体格のジュンイチに、棘のある言い方で聞いた。
「なに、簡単なことさ。お前達は好き勝手にケースケに攻撃を仕掛けているだけでいい」
あっさりとジュンイチは言った。
「ケースケはその間、お前達に一切攻撃はしない。防御と回避だけだ」
「は？　何お前、仲間が一方的に攻撃されてるだけでいいって言うの？」
後ろの筋肉質の男が、ジュンイチを嘲笑した。
「ま、俺達とすりゃ好都合だし、反対する理由はないけどね」
「ただし、制限時間がある」
ジュンイチはその嘲笑をきっぱりと遮った。そして、右手を前に伸ばし、指を3本立てた。
「お前達に与えられた時間は3分だ。3分でケースケを仕留められればそれでよし。だが、3分でケースケを仕留められなかったら、お前達は今すぐ俺達の前から消えてもらう」
「……」
ジュンイチの奴、僕と全く同じことを考えていた。3分という制限時間まで一緒だ。それはきっと、こいつらの力量を見抜いている証拠。
そして、この方法を僕に選ばせるのは、やはりジュンイチも相当立腹しているということなのだろう。
「はぁ？　3分？　ボクシングで言う1ラウンドしかねぇじゃねぇか」
長身の男がクレームをつけた。
「いや、妥当な時間だろう」
そう口を開いたのは、ユータだった。ユータも1，2歩前に出て、

僕の斜め後ろに立つ。
「お前達は、3分も全力で攻撃したら、多少なりとも息が上がっているだろう。その頃ケースケはまだ余力十分だ。3分でお前達がケースケを仕留められなかったら、もう疲れ始めているお前達が今後ケースケに攻撃を当てられる可能性は限りなくゼロだ。わかる？3分以上はやっても無駄なんだよ。ボクシングみたいにインターバルがない喧嘩で、お前達がケースケを仕留めるなら、後先考えずにはじめから攻めまくるしかないんだ」
「……」
ユータもこいつらの実力を既に見切っている。理由としてもほぼ満点だ。
「ま、そういうことだな」
その案を提案したジュンイチが頷く。
「お前達が疲れた時点で、ケースケの勝利は確定なんだよ。お前達の実力は知らないが、少なくともお前達よりケースケが先にガス欠起こすなんて事はありえない。疲れ果てたお前達を仕留めるのなんて、ケースケにかかれば簡単なことだしな。お前達は3分以上続けたら、ケースケにボコられる以外の運命はないんだよ」
「……」
「だがケースケはさっきからそれを望んでいないだろう。お前達を殴ったって、今のケースケには何の益もないからな――つまり、3分経った時点で、お前達は目的を果たせないし、ケースケにとっても喧嘩が無意味になる。お前達は3分過ぎたら、ボコられなかっただけでもありがたいと思って、とっとと拳を下ろすしかないのさ」
実に理路整然とした説明だった。
そして、二人の説明は、3分後の連中の敗北が確定しているような――そんな断定的な説明だった。予言なんて曖昧なものではない。リアルな現実として、やる前から3分後の連中の敗北を突きつけた。
目の前の連中がかすかに狼狽するのがわかった。二人の説明は、恐らくこいつらにも、自身の3分後の敗北シーンを、瞼の裏に見せ

ただろう。
「どうだ、ケースケ？」
ジュンイチがこの案の賛否を聞いた。
「――まあ、現状こいつらを諦めさせつつ、早期決着をつけるなら、それしかないと僕も思っていたからな」
僕は連中の前に出て、上に羽織っていたジャケットを脱ぐ。一応右手の薬指にはめている指輪もはずす。シルバークレイなので、ちょっとの衝撃で砕けてしまう可能性があるからだ。
「持っていてくれ、それと、タイムキーパー頼む」
僕はジャケットをジュンイチに預けて、ジーンズに白の無地Tシャツ1枚という格好になる。
既にギャラリーは色めきだっている。メディアでは天才と謳われるサクライ・ケースケが、野試合の喧嘩をするのだから、いい見世物だろう。見世物になるのは僕の本意ではないが、3分我慢すればいいのだと、自分を納得させる。
「さて――とりあえずお互いの思いを尊重した解決策が出たんだ。僕もそうするのがお前達の心の健康のためにもいいと思うし、とりあえずかかってきたらどうだ？」
僕は右手を前に出し、指をくいくいと動かして、連中を催促する。
「勿論お前達が諦めて帰ってくれるなら、3分節約できるし、無意味に傷つかなくていい分、願ったり叶ったりなんだが……」
「ざけんな」
後ろにいた筋肉質の男が、いきり立った声を上げた。
「そんなみっともねえ真似が出来るか。俺はやるぜ」
戦闘の意思を伝え、男は僕の前に立ちはだかる。
「あれ？　一人でいいのか？」
「あ？」
「昔は集団で僕にかかってきていたからな。それに、多分タイマンじゃ僕に攻撃が当たらないと思うぞ」
「テメエ、どこまで人を馬鹿にすれば気が済むんだ……」

「別に。3分しかないなら、有効に使えっていう忠告だよ」
僕はにこっと微笑む。
「さて、お互いやる気になったところで、手っ取り早くはじめてもらおうか。俺も、自分が主賓のパーティーの時間を遅らせたくないしな」
ユータが苦笑混じりに言った。そう言ってから、自分の腕に着けているストップウォッチ機能付きのデジタル腕時計のタイマーをセットし始める。
「ああ、OKだ」
僕はつま先だけで軽くジャンプを繰り返しながら、リズムを取る。
「そっちは？」
ユータが筋肉質の男を見る。
「――やってやるよ」
不機嫌そうに、男は言った。
「おいおい、自分達で喧嘩売っておいて、テンション低いぞ」
ジュンイチが含み笑いを浮かべる。
「まあいいさ。お互い交戦の意思を確認した。じゃ、スタート」
ユータが自分のデジタル時計のボタンを押した。

Concentration

しかし、ユータの号令が出る数秒前から、筋肉質の男は僕に突っ込んでいた。一気に5メートル程あった間合いを詰められ、右の正拳突きが顔に向かって飛んできた。

僕はそれを、しゃがんでかわす。その僕の顔に、突進の勢いも利用しての膝蹴りが飛んでくる。

僕は曲げた膝のクッションを使って後ろに飛ぶ。

男は更に突進して、一気にまた間合いを詰めてくる。僕の顔に向かってまた右の拳が飛んでくるが、それを今度はスウェイバックでかわす。男は、その右拳の反動を生かしたまま、体を回転させ、左の裏拳を僕の頬に向かって入れようとした。

スウェイバックで腰が引けていた僕は、そのまま体を後ろに倒しながら後ろへ飛び、バック転で体勢を立て直して着地した。

筋肉質の男も裏拳で体制が崩れていたため、連続攻撃が途切れ、僕と男はまた5メートルの距離をとって仕切り直す。

苦虫を噛み潰したような顔の男。どうやらこの序盤で勝負を決めるつもりだったらしい。

「不意打ちのつもりだったか？」

僕は男に声をかける。

「疾きこと風の如く――まあ、戦術としての基本は出来ているな」

「解説してんじゃねえ！」

筋肉質の男は、猛ってまた僕に突進してくる。

見た限り、この男にはいささかの武術の心得があるようだ。攻撃も素人のそれではないし、手刀や掌底など、あまり素人が使わない型の攻撃もしてくる。

それから1分、男は僕に向かって、拳打、蹴撃、多彩な攻撃を駆使してラッシュを仕掛けたが、僕はそれをすべてかわし続けていた。

「くそっ！」

男の苛立ちを募らせた拳は、また僕の横で空を切った。
そこで足が止まる。
「はあ、はあ」
「もう息が上がっているじゃないか」
僕は構えもせず、完全に無防備で突っ立ったまま、男の消耗した姿に目を向けていた。
「――くそっ、ちょろちょろ動き回りやがって……」
「当たり前だろう。動かずに黙って攻撃喰らうほど、マゾヒストじゃない」
僕の至極もっともな理屈に、ギャラリーが苦笑を浮かべた。
「――あと2分」
ユータが時計を見て、時間を読み上げる。
筋肉質の男が、ユータ達の方を一瞥する。
「忠告しておくが、今のケースケには、全国のサッカー強豪校の屈強なディフェンダーが3人、4人がかりでマークするんだ。そしてケースケはそんな厳しいマークの中、この半年で50試合近くをこなしているが、得点に絡まなかった試合がひとつもない。そんなケースケをたった一人でぶっ飛ばそうなんて、出来るのはアリスター・オーフレイムくらいのもんだぜ」
ジュンイチの解説。
「さすがここ半年、練習で嫌って程ケースケに抜き去られているだけあって、忠告に熱が入っているな」
ユータがジュンイチを可哀想な目で見る。
「人をやられキャラみたいに言わないでくれますかねぇ！」
ジュンイチのそのおとぼけが、殺伐とした僕と男のファイトに、上手い具合に和みを入れる。ギャラリー達もその掛け合いに笑みを漏らす。
「怒るな。これでも俺はお前の守備力を認めてるんだ。だからこそ、こいつらが簡単にケースケにワンパンでも入れちまったら、お前の沽券に関わるだろう？　それは俺としても、お前を侮辱されたみた

いで面白くないのさ」
「……」
ユータの言っていることは、僕の意も得ていた。ジュンイチが僕を止められないのなら、僕は尚更こいつら一人を相手にやられるわけにはいかない。それは、友のこの半年の努力を一笑に付された傷を与えることになるからだ。
「ま、そういうことだ。今のケースケは、生半可な奴じゃ一人どころか、3人、5人がかりでも満足に止められる相手じゃない。ケースケを倒したいならそろそろ決断するんだな。恥も外聞も捨てて、一人相手に全員で取り囲むことを」
ユータが酷薄な声を作って言った。
「今更お前が卑怯だとか、ここにいる人達は誰も思わないさ。既にお前、不意打ちとかしてるわけだし」
「ふざけんな！　そんなみっともない真似できるか！」
ユータの挑発に怒り狂って、男はまた僕に突進してくる。
「……」
猛る目の前の男の、雑念ばかりの感情とは裏腹に、僕の脳は、静寂が、キーンと音を立てるほどに澄みきっていた。
サッカーの時は、一つのものに目を向ける余裕はほとんどない。それ故直感的な行動が多く、物事を理論的に考えることはほとんどないのだけれど、こうしてたった一人を相手にしていると、よくわかる。
相手の呼吸や筋肉、視線の動き、体勢がよく見える。その全ての情報から次の攻撃の可能性を割り出し、その全てに対応できるかわし方をすぐに見破り、対処できる。
サッカー雑誌などで最近取り立たされている、ドラゴンダイブ、ドラゴンスター、春風ドリブルに次ぐ第4の能力――天空から見下ろす空飛ぶ龍の目のごとき、視野の広さと先読み能力――『竜眼』。
それこそが、今の僕の奥義であると、実感できた。
おかげで目の前の男の攻撃は、決して遅くはないが、当たる気が

しない。心技体、全てがこの男の攻撃の全てを見切ってくれる。攻撃をよけるたびに、集中力が増していき、どんどん思考がクリアになっていく。

男が僕の顔面目掛けてワンツーパンチを繰り返し出し続ける。もはや大技狙いをやめて、小技で手数を増やす手に切り替えたらしい。

だけど僕は体をちょっと動かすだけで、そのパンチを紙一重でかわしていく。僕はいまだに攻撃を受けるどころか、手を使ってのガードさえしていない。

「あと1分」

ユータの秒読みが、男の手を止めた。

「……」

対峙する男は、5月末の涼しい夜だというのに、額に汗をかき、息切れが更に激しくなっていた。

「おい！　もう無理だ！　俺達も加勢する！」

さすがにその筋肉質の男を慮ってか、恥も外聞も捨て、後ろにいた長身の男、坊主頭の男も僕の前に出て、さっきまで攻撃を続けていた筋肉質の男を後列に下げた。

「賢い決断だが、決断するのが遅すぎたかもな」

ジュンイチが彼等の行動を批評した。

「……」

確かに一人なら、防御も必要なかったが、3人となるとそうもいかないだろう。

だけど今の僕は、それでも全く危機感を感じなかった。それどころか、追い込まれる度に力が滾ってくる感覚が、楽しいとさえ思えた。

半年前までの、鬱屈していた時の僕も、今とほとんど変わらない力があるはずだったけれど、こんな感覚を味わったことがなかった。

乱れきった心は、力押しに向いていない体格なのに、それに目を背け、力押しばかりに頼りきっていた。大丈夫、僕なら出来ると、自分の力や技を過信し、心技体が全てバラバラだった。そんな僕に

集中力が宿るはずもなく、いつも散漫とした状態のままで、力を出し切ることもなく、日々を消化していた。

それを思うと、自分にこんなに集中力があったのか、こんなにも素直に力を引き出すことが出来るのか、と、今の自分の力に自分でも驚嘆し、また、自分でさえ知らなかった自分の現状の力を認識できることが、楽しくて仕方なかった。

だってそれは、これからは自分のために生きようと決意を新たにした僕に教えてくれるからだ。

クズだと思っていた僕はまだ、自分でもまだ気付けない力や魅力があるんじゃないか。そんな『希望』を、僕に見せてくれるからだ。

3人になった敵は、僕が細身なのを見て、まずは動きを止めることを考え始める。簡単に言えば、僕を羽交い絞めにするなり、服を掴むなりすること。柔道で言う、組み合いの状態に持ち込むこと。

それを感じると、僕の足は、筋肉質の男一人を相手にしていた時よりも更に活発に動き始める。自分でその足からの感覚を噛み締めると、まるでダンスを踊っているようだと思った。ダンスなんて、ろくに踊ったこともないくせに。

「そのケースケのステップは、今全国のサッカーの強豪が、止めるために目の色変えてる代物だ。今のお前達に止められるかな？」

ユータの声がした。

きっとその言葉はもう、目の前の憔悴に駆られた奴等の耳には届いていないだろう。3人まとめて僕に突っ込んでくる。

思ったとおり連中は、まずは僕を掴みにかかってくる。さっきまでの打撃をやめて、今度は僕を掴みに手を伸ばしてくる。

僕はその手を、自分の手で何度も払いながら、体勢を低くし、猫のように3人の足元をすり抜けていく。一瞬たりとも動きを止めない僕の動きは、3人がかりでもほとんど触れることも、僕の後ろを取ることさえ出来ない。掴みに来る手は、ほとんど空を切り、たまに目の前に来た手は、僕の手に全て払いのけられた。

「あと30秒だ」

ユータのカウントダウンが残酷に時を刻む。
「おい、お前ら！　一方的に喧嘩を売っておいて、話にならないぞ！」
「3人がかりで何も出来ないのか！」
「サクライくんも迷惑だよ！　さっさと諦めなさいよ！」
さすがにこの頃になると、ギャラリーも奴等に罵声を浴びせ始める。
もはや顔を見るだけで、3人が往々に、頭の中で、くそっ、くそっ、と叫んでいるのが聞こえてくるようだった。それ故攻撃が直線的になり、視線も馬鹿正直で、攻撃が至極読みやすくなっている。
もはやなすすべもなく、3人がかりの連中は、でたらめな攻撃を繰り返すのみになっていた。既に足も止まっているし、もはや手を使う必要もなかった。脚だけで全ての攻撃をかわすことが出来た。
「あと10秒」
ユータのカウントダウンもいよいよ大詰めだ。
「9，8，7……」
連中の攻撃の際の叫びの中をすり抜けながら、僕はそのカウントダウンに耳を傾ける。
「3，2，1――ゼロだ」
そしてユータのカウントダウンが終わりを迎える。
「このっ！」
しかし、連中の僕への攻撃は止まない。頭に血が上りすぎて、声が聞こえないのか。
「おい、お前達、もう3分過ぎた、終わりだ」
ユータがもう一度大きな声で言うが、それでも止まらない。
「……」
ギャラリーのブーイングが大きくなっても、蛙の面に小便だ。
僕は奴等のパンチをよけ続けているが、その最中、新たな人の気配を感じた。
一瞬だけ横目で気配の方向をうかがうと、ユータとジュンイチが

あきれ半分の顔で、ゆっくりと僕達の方に歩いてくるのだった。
「がああっ！」
３人が同時に吼え、同時に僕に向かって右ストレートを繰り出してくる。
しかし、両端にいた筋肉質の男と、坊主頭の男の右腕は、肘を伸ばしかけたままでぴたりと止まった。横から近づいていたユータ、ジュンイチががっちりと二人の手首を掴んでそのパンチを止めたからだった。
そして、真ん中の長身の男のパンチは、僕が体を僅かに反らしながら、腕が伸びきる瞬間、右手で手首を掴んで、拳の動きを止めていた。
「終わりだって言っているだろう」
平和主義者のユータが珍しく低い声でそう呟き、３人を切れ味鋭い目で睨んだ。

Groin

僕に全くひるまずに向かってきた連中は、僕達が掴んだ手をほぼ同時に離すと、3人とも一斉に後ずさった。

ユータもジュンイチも、偉丈夫といえるほどの立派な体躯を持っている。こいつらは僕のことは、短身痩躯故に恐れていなかったが、この二人が僕の加勢に入ることは脅威に思っていたようだ。

「そう警戒するな。3分経った以上、俺達が無駄に手を下す必要もない」

ユータが両手を広げて交戦の意思がないことを改めて示した。

「言っちゃ悪いが、3分間お疲れさん、ってとこだな」

ジュンイチが歯をむき出して笑った。

「テメエ……初めからこうなることがわかって、俺達をけしかけやがったな」

長身の男はジュンイチのその言葉で全てを察したようだ。歯噛みをしながら呟いた。

「別にわかっていたのは俺じゃない。ケースケさ。」

ジュンイチが一歩前に出た。

「お前達、ケースケの言葉を聞いてなかったのか?」

ユータも一歩前に出る。

「言っていただろ? これから俺のことを祝おうって時に、血を流してそれに水を差したくない、って。なのにケースケはお前達と何が何でも交戦を回避しようとしていたか? 出来れば拳を下ろしてほしい、くらいにしか言わなかっただろ? それは何故か。ケースケはお前達相手なら、たとえやり合っても一滴も血を流さない自信があったからなのさ。お前達が相手じゃ、血を流さない自信がなければ、ケースケは全力で逃げるさ。こいつはそういう切り替えが早い方だ」

「……」

「そういうこと。俺はケースケがそう確信していることを悟って、お前達の望むやり方での解決法を提案したってわけだ」

ジュンイチがユータの解説を引き継ぐ。

「……」

僕もジュンイチも口には出さないが、ジュンイチがこのやり方での解決法を提案したのは、ジュンイチがこいつらに対してかなり腹を立てていたからだった。

僕はこのやり方の他に、もうひとつの解決法を用意していた。どちらもあまり気乗りしない解決法ではあるのだが、少なくともこの解決法はできればあまり実践したくなかった。ギャラリーの面前で、相手を肉体的には無傷だとしても、精神的にはボコボコにしてしまいかねないからだ。

だが、ジュンイチがこの解決法を提示した時、僕も悟った。僕達はサッカー部の手前、下手に手を出すと、対外試合自粛、下手すれば廃部の可能性がある（と言うか手を出していたらこいつらは間違いなく、それを口実に僕を『暴力高校生』と世間に吹聴するとともに、埼玉高校サッカー部廃部のために動き出したであろうと思われた）。だから無抵抗にならざるを得ないけれど、ただやられっぱなしというのもつまらないし、こんな奴等にお前が背を向けるのも気に入らない。だからせめてこいつらを、精神的にとことんボコボコにしちゃってくれ、と、ジュンイチは解決法の提示という方法で、僕に依頼したというわけだ。

僕自身も、しょっぱなに僕だけでなく、シオリまで侮辱したこいつらに怒りを覚えていたことはやぶさかでなかったし、ジュンイチまでこいつらに腹を立てているのであれば、こいつらは十分処罰の対象になり得ると思い、それを快諾した。

まあ、これは奴等には教えないけど。故意に僕がこいつらを辱めたと、わざわざ自らの悪意を告白することもない。

「それにしても、お前こいつらと数年ぶりの再会だったんだろ？だったらこいつらがもしかしたら、数年の間にすごく強くなってい

るかもしれなかったのに、どうして3人相手に無傷でいけるって確信を持てたんだ？　そこまでは俺も読めなかったんだが」

ユータが僕に聞く。

「それは、そこの奴が僕の胸倉を掴んだ時さ」

僕は目の前の長身の男を一瞥し、男の右手を指差した。

「お前、利き腕は右手だろ。そして、僕の胸倉を掴んだのも右手だ。それだけでお前の実力がわかったんだよ。それについて何の指摘もせず、余裕の傍観をしていた後ろの二人も、実力は推し量れたし、決死の覚悟もないことがわかった。だから余程のヘマをしなければ、無傷でいけると確信したのさ」

「――いや、それじゃ全然わかんないんだが」

「胸倉を掴むっていうのは、相手を制することで、一見有利そうに見えるけれど、実際は間合いが近すぎて、余程腕力がない限り、攻撃にも防御にも転じにくいんだ。おまけに片方の手を自ら塞いで、体勢的には両手が自由な相手より圧倒的不利。最悪の体勢だ。そして、その塞がれた手が利き腕だとしたら、最悪の二乗。胸倉を掴むなんていうのは、喧嘩を知らない奴が、弱い者を相手に威嚇するくらいにしか使えない、下策中の下策なんだよ。それをやる奴は、ただのハッタリ野郎か、喧嘩を知らずに粋がるチンピラのどちらかってことだ」

ギャラリーが、かすかにざわめく。頷く者さえいるのが横目で見えた。

「こっちは手を出さなかったけど、お前が僕の胸倉を掴んで饒舌に啖呵を切っていた時、お前の腹は片手が上がったことでがら空きだった。やろうと思えばあそこでお前の腹に膝蹴り入れて、お前を沈めることも出来たんだよ。片手が塞がったお前は、なまじ僕を掴んでいることで、防御も回避も無理だったはずだ。お前はあの時点で既に死に体だったんだよ。それに気付かなかった本人も、指摘できなかった後ろの二人も、ただのチンピラ確定ってわけだ」

その説明に、ギャラリーが拍手する。

「はは、相変わらず読みが冴えていること」
ジュンイチが僕の横で肩をすくめた。
僕はユータに預けていたジャケットを返してもらって、それを羽織り直し、シルバークレイの指輪を右手薬指にはめ直した。
「僕の言動がお前達を馬鹿にしている、と言っていたが、僕にもそれなりの根拠があって、相応の行動を取らせてもらったんだ。それが気に食わなかったのなら、素直に謝るよ」
僕は両手を挙げて掌を見せ、無抵抗のポーズをとる。実際は根拠があったからこそ、少しおちょくって見せたのだけれど。
「だが、約束だ。3分で僕を仕留められなかったお前達は、今すぐ僕達の前から消えてくれ」
僕はもう一度、連中を睨んだ。そしてその後、連中の後ろにいる連れの化粧の濃い女二人を見る。さっきから連れの男達の体たらくを見せ付けられ、その仲間であるこの女達も、こいつら同様精神的辱めを受けていた。
「女。お前達はこいつらよりはまだ頭冷えてるだろうから、こいつらを連れてとっととここから消えろ。僕達も急いでいるんだ。もう二度と追ってくるなよ」
僕がそう言うと、何故か一部のギャラリーが、きゃー、と声を上げた。
「さあ、行こう、随分時間を食った……」
そうして僕が踵を返して、皆とその場を去ろうとした時――
「待てよ！」
後ろから、大きな声で呼び止められ、僕はもう一度振り向き直す。
「このままじゃ終われねぇ。このまま終わってたまるかよ！」
さっき僕に、死に体を指摘された長身の男が怒気を露にして、先頭に立っている。
「……」
僕は頭を掻く。
「――あのさ、こっちはもう3分やっただけでも、もううんざりな

んだが……」
「うるせぇ！」
「――またそれか……聞く耳持たずだな」
僕はため息をつく。
「何を根拠にかは知らないが、お前達はケースケを甘く見すぎた」
後ろにいるユータも忠告に加わる。
「そうそう、ケースケはマジで強いんだ。２０人以上のヤンキー相手にたった一人で勝っちまったこともある」
ジュンイチも続く。
「はぁ？　そんなわかりやすい嘘、誰が信じるかよ」
しかしジュンイチの言葉は一笑に付される。
「ま、信じる信じないは、お前らの勝手だけどよ。ただケースケはマジで強いぜ。しかもケースケは変身するごとにパワーがはるかに増す。そしてその変身をケースケはあと2回残している。この意味がわかるか？」
「それは嘘だ」
僕は後ろのジュンイチを振り向かずに言う。
「えぇ？　お前、そういう設定があるんじゃ……」
「そんな宇宙人設定はない」
「じゃ、じゃあ鍵となる二つの特殊生命体を吸収すると、完全体になってよりパーフェクトな存在に……」
「人造人間設定もない」
僕とジュンイチの漫才に、ギャラリーも笑い出す。まるで連中が再び僕に喧嘩を売ることを嗤うように。
確かにヤンキー２０人相手に、こんな細身のチビがたった一人で勝ったとか、宇宙人や人造人間ってくらいとっぴな話だよな。
「ふざけんじゃねぇ！」
そんな和やかな空気を、長身の男の大喝がぶち壊す。
「……」
再び僕は長身の男を睨む。

そして、ゆっくりと、2、3歩前に出る。僕と男との距離は10メートルほどあったが、僕はゆっくりとその間合いを詰めていく。

「……」

僕のその不言の行動に、周囲が一気に静まり返る。長身の男も、ゆっくりと間合いを詰められながらも、自分の目をしっかり捉えている僕の視線に気後れしている色が見えた。

「……」

やがて意を決したように、男は血走った目を見開いて、僕に再度拳を繰り出してきた。

これも言わなかったけれど、さっきからこいつら、ダメージの目立たないボディじゃなくて、相手を壊す感覚を一番味わえる顔ばかりを狙いすぎだ。フェイントもお粗末だし、顔という直径20センチ前後の的――しかも攻撃がそこに集中していることがさっきから明らか。

こいつらは僕が手を下さなくても、初めから様々な要素で負けているのだ。

だけど、当然こいつらはそれを言っても納得しないだろうな――男の正拳突きが顔に目掛けて飛んでくると、僕は右にかすかに体を倒しながら、右足でアスファルトを蹴って、一足で男の間合いの更に撃ちに入り込み、同時に左手を伸ばして長身の男の顔を鷲掴みにしていた。僕は左手で男の体をぐんと後ろに押すと同時に、左足を男の足に後ろからかけて、思い切り前に跳ね上げた。

長身の男の体は一瞬中に浮き、そのまま仰向けにどさりと倒れる。あまりに一瞬の出来事に、受身を取ることもできなかったのだろう。背中を強くアスファルトに叩きつけられ、ぐふっと息を漏らす声が聞こえた。

しかしその時には、僕は男の顔面に向かって、左足を下ろしていた。

ダン！　と派手にアスファルトが音を立てる。

僕の靴は、男の大きなピアスのついた耳たぶ5センチのところを

掠めて下ろされていた。
「……」
僕はそのまま、寝そべった男の目を睨んでいた。男の体は硬直してしまい、瞳孔に今までには見せなかった類の反応を見せていた。
「何度も言わせるな。早く僕達の前から消えろ」
僕は静かにそうはき捨ててから、顔を上げ、後ろにいる男の仲間達に目を向けた。
「お前達も自惚れるなよ。3分手を出さなかったが、その3分の間に僕がお前達を仕留められるチャンスなんていくらでもあった。このとおり顔を踏み潰そうと思えばすぐできる――」
僕はそこまで言いかけると、言葉を止める。足元に殺気を感じたからだ。
それを感じたとき、僕の足元に倒れている長身の男は、体を軽く起こした体制で、自分の眼前にある僕の股間に向けて、まっすぐに拳を繰り出していた。
しかし、僕はその拳が触れる20センチ手前で、腰を引きながら、男の拳を右手で受け止めていた。
「その攻撃も見え見えだよ」
僕は視線を落とし、長身の男に笑いかけてみせる。
それと同時に、後ろのユータ、ジュンイチが、くくく、と笑い出した。
「アホ面で得意げに語って、目の前にある急所を無防備に見せて、お前に最後の良心が残っているか試したんだが、まさか本当に手を出してくるとはね」
僕がそう言うと、長身の男はその体勢のまま、今度は開いている左手で、僕に向かって拳を繰り出してきた。もう狙いもクソもないでたらめなパンチだったが、僕はそれをかわすため、後ろへ飛んだ。男は僕が離れてすぐに立ち上がる。
「数が少ない僕が生き残るためにやるならともかく、数の多い方が急所打ちとは、恥の上塗りだな」

僕がそう言うと、男は汚名返上を狙って、また臨戦態勢に入る。
「お前、相変わらずケースケの話を聞いてないね。お前がケースケの胸倉を掴んだ時、お前が既に死に体だったことを指摘したばかりの奴が、得意になってくっちゃべって、隙を作るわけないだろう」
ユータが言った。
「もうやめなって。急所打ちなんてしている時点でお前達、もう負けてるよ」
ジュンイチもうんざりした表情だ。
「うるせぇ！　何も知らない奴は黙ってろ！」
そんな二人の忠告を制したのは、長身の男の後ろにいる坊主頭の男だった。
「こいつは、嘘つきで猫かぶりで、自分以外の人間を見下した、最低の野郎なんだ！　こんな奴を絶対に俺達は認めないぞ」
坊主頭の男が僧籍を切ったことで、横にいる女二人もその勢いに乗るように口を開いた。
「ていうか、あんた達もこいつに騙されているんじゃないの？」
「そうそう、こいつは友達の振りをしているだけで、あんた達のこと、友達とは思っていないよ。都合のいい時に利用できればそれでいい、くらいの駒くらいにしか思ってないって」
「本当は内心、あんた達もバカにされてるのよ。それにも気付いてないわけ？

Past

「ふざけるな！　自分達が負けた腹いせにそんなこと！」
「往生際悪いんだよ！　約束どおり、とっとと消えろ！」
ギャラリーが連中の言動に、非難を浴びせる。
だけど、僕は。
「……」
何も言うことができなかった。
その言葉は、さっきの連中の無数に飛んでくる攻撃なんかより、はるかに正確に僕の急所を抉った。
それは、事実だからだ。
今は違うとはいえ、過去の僕は、まさに目の前の女達が言うような男そのものだった。
人を人とも思わず、心の底で人を見下し、慕ってくれる人にさえ、当たり障りない付き合いに終始した。僕を好きになってくれた女性を、自らの勝手な都合で大して意味もなく傷つけたこともある。
それどころか、一番近くにいた人を憎み、呪い、そんな自分を隠さんと、嘘をつき続けた。
それに対しては、何も言うことはできない――
「わっはっはっはっは！」
そうして歯噛みをしている時、ひとつの快活な笑い声が、日の沈みかけ、群青色に染まった空によく響いた。そのよく通る笑い声は、ギャラリーの怒声さえも止めてしまう。
呵呵大笑したのは、ユータだった。
「俺は、完全に一方的な押しかけでこいつについていっただけだったからなぁ……騙されるも何も、そう贅沢言えた義理でもないよ。野球をしていたら一年で甲子園に行ける実力があったこいつを、無理言ってサッカー部に入れちまったしな」
「……」

「お前達の言っていることは間違ってないよ」
ジュンイチも笑みを浮かべながら口を開く。
「そもそも俺もユータも、ケースケから友達なんて呼ばれたこと、今でもまだ一度もないし、多分俺達のことを、いつも勝手についてくる奴くらいにしか思ってなかったこともあったと思うぜ」
「な……」
あまりに二人があっさりと自分達の言うことを認めたものだから、女達はしばらく二の句に詰まらされた。
「――呆れた。じゃああんた達は友達だって思われてなくても、そいつについていくって言うの？　わけわかんない」
「そこまでわかってて、何であんた達はそんな奴を信じるのよ」
女達はユータ達を、愚か者を蔑むような目で見る。
「何故って言われてもなぁ」
ユータは苦笑いを浮かべる。
「こいつは今でこそ、日本の高校生の頂点に立つサッカー選手だが、2年前、何度俺やジュンに吹っ飛ばされて、体中擦り傷だらけにしたと思う？」
「……」
「今は少しマシになったが、2年前のケースケは、女並みの小さな体だった。そんな体で、俺みたいに体のでかい奴に何度もぶつかって、擦り傷やアザを体中にいくつも作ってた。その姿はこっちが気の毒になるくらいだったけど、こいつは毎日自分を痛めつける俺達を恨む言葉を一言も言わなかった。こいつはサッカーに対して、俺達の顔を立ててやっているだけで、思い入れもなかっただろうけど、それでもそこまでやってくれたんだ。そんなこいつを信じないのは、あまりに野暮ってもんだろ。それだけさ」
「……」
女達は絶句する。ユータの言うことはあまりに単純故に明快で、ケチのつけようも、ユータのお人好し加減を笑ってやれる余地もなかっただろう。

「――あんたは？」
女の一人は、ユータの言い分にケチをつけることを早々に諦め、ジュンイチにターゲットを変更する。
「俺？　俺は別にユータほど綺麗な理屈じゃないさ」
ジュンイチは肩をすくめて苦笑いを浮かべる。
「俺はケースケが、サッカード素人だった時からダブルボランチを組んできたけど、その時の印象はお前達と大して変わらなかったさ。人を人とも思わぬ尊大な態度で、先輩へのリスペクトも全くなしで、団体行動スキルは皆無。自分からろくに口を聞きやしねぇし、たまに口を開いたかと思えば憎まれ口ばかりで、何とも生意気なチビだと思ったよ」
酷い言われようだった。
「操縦も大変だった。ド素人だった頃のこいつは、味方がボールを取られそうになると、すぐにそっちに走って行っちまうし――おかげでフォーメーションがめちゃくちゃになって、何度も守備が崩壊してた。注意しても直りゃしねぇし」
「……」
「そんで、こいつは頭じゃわかっていても、困っている人がいたら駆けつけずにはいられない――そんなバカ野郎なんだって、しばらくして気付いたんだよ。そう思ったら、この不遜な天才坊やが、何とも憎めなくなってな」
そこまで言いかけて、ジュンイチは当時のことを思い出したのか、くすりと笑った。
「要は、俺はそんなこいつにハマっちまったんだよ。こいつの観察をする、世話を焼くのが俺のマイブームになっちまった。実際この面白素材のおかげで、俺の高校生活は実に面白いものになったし、赤点を何度もこいつに助けてもらったし――こいつがいたから今の俺の充実があるんだ。騙されていたって、お釣りがくるくらいさ」
「……」
「よかったら聞かせてやろうか？　聞いたらお前たちのケースケの

印象は、少しは変わると思うが」
「結構よ！」
ジュンイチの誘いを、女は激しい口調で断った。
「ああ、そう……」
その拒絶を聞いて、ジュンイチの口調が明らかに変わった。普段は飄々とふざけ半分の口調で喋るのに、声のトーンが急に静かになる。
それは目の前の連中も感じただろう。ジュンイチに睨まれ、連中は僅かに目が泳ぐ。
「確かにケースケは生意気な面もあるが、それを貫き通すために、どれだけ影で努力していると思う？　俺の知る限り、こいつは高校に入学してから、一日も休むことなく勉強にサッカーに一生懸命だった。サッカーだって、さっきユータが言った通り、本当に体を傷だらけにして、それでも弱音ひとつ吐かずにやっていたんだ。さっきお前達を翻弄したスピードとスタミナだって、この半年、毎日重りを付けて走りこんだ結果だ」
「……」
「それに比べてお前達は何だ。成功者への逆恨みもさることながら、何も知らないくせにケースケの努力までも、その汚い口で踏みにじりやがって。ケースケはさっきからお前達に対して、責め恨むような言葉を一言も言っていない。お前達に対しても情けをかけているのがわからないのか」
「……」
ジュンイチの語気は、静かだが、徐々に強くなっていく。威風堂々とした体格も手伝って、その迫力は完全に目の前の並の高校生を飲み込んでいる。ギャラリーさえ、ジュンイチの立派な語気に息を呑んだ。
「さっきからずっと気にいらねえんだよ。お前達」
ジュンイチは、きっと連中を睨んだ。
「俺達は私闘を禁ずる惣無事令を出された身だが、これ以上、俺の

ダチを侮辱するのなら、こっちにも考えがあるぞ」
「付き合うぜ」
ユータがジュンイチに歩み寄り、肩に手をかけた。
「俺もいい加減、お前達なんかにダチを侮辱されることに腹が立っていたところだからな」
「おい、ちょっと待て」
僕は思わず口を挟む。前にいるジュンイチとユータが僕の方を向いた。
「……」
こんなこと、初めてだ。この二人を前にして、声が出ない。
こんな僕を、こいつらは『ダチ』と呼んでくれた。僕自身はまだまともにこいつらを友達と呼べていないのに。
こいつらに何を言われても、僕を信じてくれた。そのことが今の僕の心を喜びで満たしていた。
だけど、僕はいまだにひねくれ者で——こういう時、どうやってこいつらに声をかけてやればいいか、どんな顔をすればいいか、そういうことが全然わからないのだ。
だけど——今確かに言えることは。
僕は2、3歩前に出る。そして、もう一度連中と正対した。
「僕自身も、お前達の言うことは間違っていないと思う」
まず僕はそれを告げた。
「僕は自分の力を過信して、他の連中はクズだと思っていた。力だけで何もかもまかり通ると思って、力を追い求め、お前達を力でねじ伏せようとした。お前達を、場合によっては女でも容赦なく殴ったりもした」
それを聞いてギャラリーはざわめく。巷でのイメージの言い僕が、チンピラの言うことを認め、女でも殴っていた過去を暴露したのだ。当然だろう。元々僕は女顔と言われ、風貌だけでは大人しい人間だと思われやすいし、そういうイメージからは遠いキャラクターに見えていたのだろう。

「だが、今の僕は当時の自分を愚か者としか思っていない。時間が経ってみて、少しはものがわかるようになった。相変わらず性格は偏屈でひねくれてはいるが、自分の大儀のために、プライドを少しくらい折ることも出来るようにはなった」

そういうと僕は靴を脱ぎ、靴下のままアスファルトに直に立ち、そのままそこに膝を折って跪いた。

ギャラリーがどよめく。

「どうも、すみませんでした」

僕はアスファルトに手を突いて、そのまま深く頭を下げた。

「……」

ギャラリーも、連中も絶句した。数学オリンピック金メダリスト、全国模試3期連続トップ、サッカー全国大会MVPと、今日本で一番優秀な高校生、サクライ・ケースケが土下座したのだから。

「……」

僕が考えていた、もう一つの解決法というのがこれ。

正直こちらもあまり気乗りはしなかったのだけれど、ユータとジュンイチの言葉を聞いて、気が変わった。

今の僕じゃ、二人に今の感謝を伝えられそうにないから。

だからせめて、見せたかったんだ。今の僕は、力で相手をねじ伏せることしか出来なかった過去の僕じゃない。ユータやジュンイチ、シオリが僕に多くのものを与えてくれたおかげで、やっとその力の呪縛から、抜け出ることが出来た。

僕は変わったんだ。変われたんだ、と。

「……」

僕は頭を下げているから、今周りがどんな反応をしているのかわからない。耳からも何も情報が得られない。

目の前の連中は、僕が頭を下げたのを見て、どんな顔をしているだろう。きっと僕が土下座するなんてこと、こいつらは絶対考えていなかったはずなんだ。きっとすごい顔をしているだろう。土下座をする憤りなどよりも、その顔を拝んでみたいという好奇心が勝っていた。頭を下げながらも、僕の顔は笑っていた。

「――で？　お前達はどうする？」

頭上でジュンイチの声がした。

「今のケースケなら、このまま頭を踏みつけられても怒らないだろう。この姿を写真に撮れば、証拠としてあることないこと色々吹聴できる。お前達の願ったりかなったりの展開だろう？　だがな、それをしたら今度は俺達が相手になろう。お前達なんかにこいつを汚されるのは許せないんでな。それを覚悟の上であれば好きにしな」

「……」

「どちらか選べ。俺達を相手にしてでもこいつを汚すか、俺達の前から消えるかだ」

「……」

沈黙。

「お前達は知らないだろうが、ケースケはこの半年で随分変わったんだよ」

今度はユータの声。

「お前達に邪魔されたくらいで、今のケースケがつぶれるなんて心配、俺達も最初からしてないが、さすがにお前達のケースケを汚す下劣さは見ていて不愉快だ。それにこうして地に這うケースケの頭を、早く上げさせてやりたいんだ。早く決めろ」

「……」

その二人の迫力に、周りは声を失う。

「――おい、行こうぜ」

やがて僕の前でか細い声がして、足音が聞こえだし、その音は、次第に僕の耳から遠ざかっていく。

「く、くくく……ははははははは」

その足音が聞こえなくなると、僕は顔を上げ、そのまま尻をつけてアスファルトに座り込み、空を見上げて大笑いした。

ギャラリー達はそんな僕を見て、呆気に取られている。ユータ達でさえ、半ば呆れ顔だ。

土下座なんて屈辱的な行為だが、今の僕の心には、穏やかな白波が、心の奥底に沈殿した砂をさらっていくような、そんな清涼感に満ち溢れていた。

さっきの連中に、昔の僕の残像を見たからだ。

他人に嫉妬し、憎み、その憂さ晴らし――愉悦欲しさのためだけに力を振りかざす。正しくない行い――暴力でも何でもいいから、相手を力でねじ伏せることしか考えられなかった、過去の自分を。

その結果僕は、力でねじ伏せることに固執しすぎて、柔軟性を失い、直線的、一本調子になった。同じ石に何度も躓き、思い通りの結果も得られなかった。そんな過去の自分の愚行を、工夫のない攻撃を繰り返していた連中に見ていた。

連中の攻撃は、過去の自分の行動そのものだった。かわす側に立ってみて、初めて分かった。自分の過去の行動も、いなすことはこんなにも容易かったのだと。

それを知ることで、改めて今の自分が、過去の自分に打ち勝ったような気がしたことが、何となく気持ちよかった。打ち勝っただけでなく、過去の自分を振り返り、反省をすることも出来るようになった自分の成長を感じて、最悪だった頃の自分も、そんなに無駄ではなかったなと思えてきたことで、すごく気持ちが楽になったような気がした。

「――ったく、相変わらずよくわからん奴だ」
横にいるユータが呆れ顔で言った。
「この半年で、男を上げまくった奴が、あっさり土下座したぜ」
「何だ、韓信の股くぐりってやつか？」
ジュンイチが腕組みをして聞いた。
「……」
秦の始皇帝崩御の後、中国では貴族の項羽、農民の劉邦の二人が覇権を争っていた。その劉邦の国、漢で大将軍を務めていたのが韓信だ。
この韓信、若い頃は怠け者として知られ、老婆に食べ物を恵んでもらって命をつなぐ有様だった。人は皆彼を見下していた。
そんな時韓信は町の青年に「この道を通りたければ、俺の股をくぐれ」と挑発されるが、彼は黙って青年の股をくぐった。周囲の人間は韓信のその姿を見て笑ったが、韓信は「そいつを殺しても何の意味もない。一時の恥で済むのなら」と冷静に状況を分析していた。
後に韓信は劉邦に仕えて項羽を倒し、漢の三傑と呼ばれる功臣の一人として名を残した後、昔自分に股をくぐらせた青年に礼を言い、臣下に取り立てたという。
「馬鹿。こっちが散々手を出さずに我慢していたのに、お前達が本格的に手を出しちゃったら、サッカー部は大会に出られなくなっちゃうだろ。そうなる前に先手を打っただけだよ」
「はは、そりゃ申し訳ない」
ユータは頭を掻いた。
その間に僕は立ち上がり、ジーンズを軽く手ではたいた。
「――何あれ、カッコ悪い……」
「うん、あんなのに土下座して……あれが本当に、天才って呼ばれてるの？」
耳元に、若い女の子の呟きが聞こえる。
僕は声のほうを振り向くと、ギャラリーの前列の方にいる女子高生の二人が、びくりと反応した。

僕は、二人ににこっと微笑む。
「そう――格好悪いんだ。まだまだ。もうちょっと格好良くなるまで待っててよ」
「あ、ああ……」
女子高生達は呆気に取られている。僕は二人に背を向ける。
「それよりくだらないことで随分時間を取った。早く行こう」
書店に来る頃はまだ夕日が出ていたのに、もう既に夕日が沈みかけていた。
「げっ、ていうかもう6時回ってるじゃん！」
ジュンイチが感嘆の声を上げた。

僕達がそんなことをしている間、シオリとマイは少しはなれたところに避難していた。道理で途中から姿が見えないと思ったが、ジュンイチが後ろで指示をしていたらしい。
ジュンイチがメールをマイに出して仔細を伝え、結局駅で僕達と合流した。
「ケースケくん」
僕の姿を見るなり、シオリは駆け寄ってくる。
「え？」
しかし、途中で足を止める。
「……」
僕はこの時、今日学校で女子に女装を施された時のカツラを被っていた。茶髪のロングヘアー。女子からは『モデル仕様』と言われていたスタイルだ。
シオリはジュンイチを見る。
「いや、こいつ地元だから、どうやら素顔じゃ目立ちすぎるみたいだから、軽く変装を、ね」
ジュンイチは苦笑いを浮かべる。どうやらおふざけの過ぎるジュンイチは、生真面目なシオリに真剣な顔をされると弱いらしい。

「しかし効果覿面だな。カツラ被っただけで、女と勘違いして、スムーズに駅まで来れたぜ」
ユータが僕の横顔を覗き込む。
「……」
学校の中だけならまだしも、まさか外でまで女の格好をさせられるなんて……
確かに、僕がまさかこんな格好をしているとは誰も思わないから、本当にカツラを被っただけで、誰にも気付かれることはないのだけれど、僕は非常にご機嫌斜めだった。
「それより大丈夫？　怪我はない？」
シオリは僕の胸に手を触れて、子犬みたいにおどおどした目で僕の体を見つめる。
「大丈夫、全然無傷だよ」
「言っただろ？　あんなの相手にそんなへまする程可愛い性格してないって」
ユータ、ジュンイチが苦笑する。
「……」
シオリはそれを聞いて、ほっと胸を撫で下ろす。
地元暮らしの僕とシオリはパスモを持っていないので、僕達は本川越駅で所沢行きの切符を買い、電車通学の残りの３人はパスモで改札を通り、電車に乗り込む。本川越駅には東武東上線が一線だけ通っている。ここからユータの住む所沢までは各駅停車で約２０分といったところだ。
電車は帰宅ラッシュで混み合っている。僕達は全員ドアの近くでつり革を握った。
「しかしあいつら、お前に、なめやがって、とか言っていたが、あいつらの方こそ、お前をなめてかかっていたと思うな」
電車が動き出すと、ジュンイチはそう口を開いた。
「ああ、ケースケの体の細さを見て、喧嘩は弱いと思った。集団で脅かせば何とかなる、と思ったんだろうな。向こうもはじめから俺

達が手を出せないことを知っていた。自分が絶対に傷つかないと知っていたからこその行動だったな」

ユータも同意する。

「その話はもういいだろう。彼女達に、不快な話をわざわざ聞かせたくない」

僕は早々にその話から撤退する意向を示した。

「別に蒸し返すわけじゃない。ただ、一言言わせてくれ」

ユータが横にいる僕を見た。

「お前程の力があって、今、あんな奴等になめられっぱなしでいるなよ。そろそろお前も何かしろよ」

「……」

「ま、俺としたら、その何かってのがサッカーであれば、万々歳なんだけどな」

「お前、結局そこにつなげたいだけかよ」

ジュンイチが突っ込んだ。

「……」

確かに、僕もそろそろ何かをしなければいけないような気もするんだ。

さっきのやり取り――こいつらは、こんな偏屈な僕にも、ちゃんと理解を示してくれ、信頼もしてくれる。

いつだって、僕を応援してくれる。

ひとりぼっちだった僕にも、今はこうして仲間が出来たんだ。

それに対して、僕はこいつらに、何かを返せているだろうか。

そんな思いは、今も僕の胸にくすぶっているんだ。

Supermarket

電車を降りると、僕達は駅の前で一度立ち止まった。
「ユータ、お前は一人で先に帰っていてくれ」
「え？」
「僕達は少し買い物をしてから帰るから」
そう言って、ユータを先に家に返したあと、僕とシオリ、ジュンイチとマイの二手に分かれて、買出しに出た。
今日のパーティーでは、僕が料理を作ることになっているから、僕とシオリは食材の買出し、ジュンイチとマイは、プロ初ゴールの記念品を買いに行ったのだ。
所沢には何度か来ているし、スーパーの場所も知っている。ここに初めて来るシオリを先導して、僕達はスーパーに向かう。
「……」
本来僕とシオリがこの時間、二人で駅前の商店街を歩くなんてことは、滅多にない。不本意ではあるけれど、やはりこのカツラのおかげでそれが可能になったわけだ。
なので本来なら喜ばしいことなのだが、僕はこのとき、背中にシオリの不機嫌なオーラをそこはかとなく感じていた。その証拠に、二人きりになっても話が弾んでいない。
「あのさ……怒ってる、わけ？」
僕は足を止めて、商店街の真ん中で、振り返った。
以前喧嘩（という生易しいレベルではなかったが）をした時は、彼女にビンタされたこともある。どうやらそういうことは基本的に大嫌いな性格のようだ。余程喧嘩のない、平和な家庭で生まれ育ったのだろう。それは僕との価値観の違いというやつかもしれない。
「――怒ってるよ」
シオリは僕を見た。柔和な顔つきの彼女では、表情に刺々しさが出ないので、どれほど怒っているのか、そもそも怒って睨んでいる

のか、よくわからなかった。
「悪かったよ。君はいつも僕の体を案じてくれるもんな。それなのにわざわざ喧嘩に乗るようなことをして……けど、大丈夫だって。あんなの相手に怪我するほど間抜けなことは……」
「そうじゃないよ」
僕の言葉を、シオリが遮った。
「え？」
「自分に怒ってるんだよ」
「……」
「エンドウくんに言われたの。君があいつらの側にいて、あいつらが君にまで何か侮辱するようなことを言ったら、あいつは多分キレてややこしいことになるだろうから、早いうちにあいつらの目の届かないところに行った方がいい、って」
「……」
なるほど、だからさっき途中から姿が見えなくなったわけだ。
ジュンイチも、僕があいつらにシオリを侮辱されたことに怒りを感じていたことを、見抜いていたのか。
確かにその読みは正しい。ユータ、ジュンイチだけじゃなく、シオリまであんな連中にこれ以上侮辱されたとあっては、さすがの僕も堪忍袋の緒が切れていただろう。シオリに険悪なものを見せないで済んだというより、そういう面でシオリが側にいないで本当によかったと思う。
「私、何だか悔しくなっちゃって。あなたが侮辱されているの見ても何も出来なくて……逆にあなたは私があの人達に侮辱されたから、したくもない喧嘩をやらせることになっちゃって。何だか申し訳ないような気がして……」
「……」
意外な答えだった。喧嘩で病院に担ぎ込まれたり、停学処分を受けたこともある僕が、喧嘩をしたがっていないように思われるなんて。

「男ってのは、好きな女の子は、必要以上にか弱く見えてしまうものだよ。だから、別にそういうことに申し訳ないと感じる必要はない。男はいざって時に女を守らなきゃいけないと言われているしね」
「男……」
シオリは呟く。
「ああ、それが男なんだよ」
「ふふ……何それ」
あまりに子供っぽい物言いに、シオリは笑った。
「そうそう、そうやって笑っている方がいい。笑顔が戻ったところで、今日は君にもサービスしちゃうからね」
そう言って再び歩き出す。目的地のスーパーはすぐそこだ。
夕食前の買い物には遅く、閉店間際のタイムセールにはまだ早く、そんな中途半端な時間のため、それ程混雑していない。カートにかごを乗せて、店内を散策する。
「君は何か、好きな食べ物とかあるの？」
「え？　うーん……強いて言うなら、ハンバーグ、かな」
「ハンバーグ？　子供っぽい食べ物が好きなんだな」
「だ、だっていきなり言われて、思いつかなくて……」
「はいはい。じゃあ挽き肉と玉葱は買わないとね」
「え？　ハンバーグ、作るの？　ヒラヤマくんのパーティーなのに」
「言っただろ？　今日は君にサービスするって。それにあいつら、肉だったら何でも大丈夫だよ」
「ひどいなぁ」
カートを転がして、挽き肉と玉葱を手に取る。さすがにハンバーグだけじゃ寂しいから、他にも色々な食材を手に取る。
「ホールトマトも、一応買っておくか」
僕はトマトの缶詰を手に取る。予算に限界もあるし、値段を見比べながら。
「何だか……こういうの、いいね」

そんな僕に、シオリが声をかける。
「何だか、新婚さんみたいで」
「え？」
「あ……」
僕の反応がいまいちだったのか、シオリの顔はみるみる紅潮する。
「な、何でもない。忘れて……」
「……」
そんなこと言われたって――一度言われたら、僕だって意識しちゃうじゃないか。
実は僕もさっきから、同じようなことを考えていたんだ。
僕の母親は、基本的に家事をしない人だったし、親父は親父で、不機嫌な時は母親の作った料理を、一口手をつけただけでゴミ箱に捨てるような人間で、それが母親の家事嫌いに更に拍車をかけた。
僕は小学校時代、週6回塾に通っていて、毎日帰宅は夜の9時を過ぎていて、それから取る食事は一人でスーパーの惣菜だったが、それさえ用意されていない時もあったから、自分で何かを作るしかなかった。孤食で育てば、嫌でも料理なんて身につく。
今までそんな料理しかしてこなかったから、こうして恋人と一緒にスーパーなんかに来て、夕食の食材を一緒に買い、誰かのために料理をすることに、嬉しさを感じていた。
世間じゃ臥龍なんて言われているが、本当は派手な表舞台よりも、そんな所帯じみた、地味な暮らしに憧れている奴なんだ。そして、そんな暮らしをこの娘と送れたら、どんなにいいだろうと、夢を見ている奴なんだ。
「これから一緒に食事を取れる機会なんて、いくらでもあるさ」
僕はカートを転がし始める。
「僕は大学に行ったら、学校近くに安い部屋を借りるつもりだ。もし腹が減ったら、いつでも来ればいい。ろくなものはないだろうけれど、飯くらいは一緒に食べられるぞ」
「……」

沈黙。

「じゃあ、私、あなたと同じ大学に行ったら、少し早く家を出て、あなたの家に行って、一緒に朝ご飯食べて、それから大学に一緒に行くこともできるね」

「……」

「あ――い、いや……わ、私、さっきからおかしなことばかり言っているわね。えへへ……」

照れ隠しをするように、シオリは笑う。

「……」

しかし、そこまで考えていなかったな。二人きりの朝食か……悪くないかも。ちょっと変な感じだけれど。

そんな生活を思い浮かべると、何とも幸せな気分になる。さすがにお互い、家に泊まるとは言えない未熟な二人だけれど、一緒に時間の一部を共有できる時間が取れるだけで、今は十分な気がした。

大学に行っても、きっと僕には大変なことが色々あるだろう。だけど、シオリとそうした生活が送れるのなら、きっと乗り越えられるだろう。

「あぁ、何だかそういうこと考えると、勉強にやる気が出てきたな。えへへ」

シオリは僕に向かって微笑んだ。

僕達はユータから遅れて30分後に、ユータの家に到着した。

ユータはプロと二足の草鞋となってからは、勉強をほとんどする必要がなくなったために、ここにくるのは実に3ヶ月ぶりくらいだった。その間、ジュンイチの家で僕はジュンイチの勉強を見ることが多かった。

「いらっしゃい。ケースケくん、久しぶりね」

玄関先で僕達4人を、ユータの母が出迎えた。後ろから着替えを終えたユータも付いてくる。

僕はこの時点でカツラを外して、正常の姿に戻っていた。ビニール袋を両手に提げて、肩には学校用の鞄を下げるという格好だった。
「ご無沙汰してます」
僕は会釈を返す。
「ふぅん」
僕に目を向けた後、ユータの母は、シオリとマイの顔を一瞥した。
「ケースケくんにこんな可愛い彼女が出来たのは、まあ当然だけれど、まさかジュンくんにもこんな可愛い彼女が出来るなんて、神も仏もないわねぇ……」
「おばさん！　何すかその言い方は！」
ジュンイチは不服そうだ。横のマイはくすくす笑った。
「オフクロはケースケファンなんだ。ちょっとケースケを美化する傾向があってな」
ユータが事情を知らないシオリとマイのために解説を入れる。
「すみません。今日はキッチンをお借りします」
「ああ、ごめんなさい。立ち話もなんだから、上がって」
ユータの母が人数分のスリッパを出してくれて、中へ通される。
「ケースケくん、私も手伝うわ。いくらなんでも人数分の料理を作るのに、一人じゃ大変でしょう？」
リビングに通された後、ユータの母がそう名乗り出た。
「あなたもよければ手伝ってくれる？」
「え？」
そしてその後、ユータの母はシオリにも声をかけた。
「あ、あの、でも私、料理はあまり……」
「そう？　見たところ、家事は全般得意そうだけれど」

Cooking

「へえ。ケースケくん、手際いいわねぇ。下手な主婦よりずっと腕は確かだわ」

ヒラヤマ家のキッチンは広い。輸入家具屋をしているだけあって、きっと家を建てた際に随分こだわったのだろう。食器洗浄機まであるし、コンロの火力も強い。

僕はトマトとモッツァレラのカプレーゼを作り、その上にバジルをちぎっていた。

「いや、僕よりも彼女の方が……」

それから僕はボウルに卵を割り、卵黄と卵白に分ける作業をしながら、隣にいるシオリの方を見る。

さっきから包丁がまな板を叩く軽快な音がキッチンに響いていた。その音はリズミカルで淀みなく、彼女の前で野菜がどんどん賽の目に刻まれていく。

「なんだぁ、料理できないって言ってたのに、包丁さばき、見事なものじゃない。ご謙遜なんて、憎い憎い」

ユータの母がシオリの背中を肘で小突いた。きゃっと声を上げて、シオリは一度手を止め、横にいる僕のほうを見る。

「全然料理できるじゃないか」

「あ、あの、でも私は……」

しかしシオリはこの包丁さばきを披露しても、まだ不安そうだ。

「あの、この野菜、言われたとおりに切ったんだけど……」

「ああ、それはミネストローネにしようと思って。任せてもいいかな？」

僕は泡立て器で卵白をメレンゲにする。

「え……」

「作り方知らないか？　このトマトの水煮と、豆と野菜を煮込んで……味付けは、出来るだろ？」

「……」

それからしばらく、僕達はおのおのの担当した料理と格闘した。

「で、できたよ」

折節、シオリは自分の担当したミネストローネが出来上がったと僕達に報告した。

鍋を開けると、そこには色とりどりの野菜が多数入った、見た目にもとても美味しそうなスープが湯気を立てていた。

「あら、いい出来じゃない。ちょっと味見を……」

ユータの母はおたまでスープをすくい、2、3度息を吹きかけてから、ゆっくりと口に運んだ。

「……」

さっきまで陽気なテンションだったユータの母の表情が淀む。腑に落ちないといった表情。

僕も怪訝に思い、シオリに失礼と断ってから、スプーンで一度スープをすくって口に運んでみた。

「……」

見た目は実に美味そうなのだが、味は何ともいえない微妙さだった。食えない程酷くはないが、食えない範囲でのまずさの究極を極めたような味というべきか。コンソメや塩など、味をパーツごとに感じるものの、それがちっともまとまっておらず、何とも不思議な味わいだった。

「――ごめんなさい。実は私、極度の味音痴で……味見をしても、まともな味付けにならなくて。昔からそうだったから、料理は今では妹の方が上手くて、家ではもっぱら、包丁と洗い物担当で……」

シオリはさっきから自信なさげだった心中を吐露した。

「……」

愁いを帯びる彼女の顔を見て思う。

彼女は、自分は勉強が出来るだけだと言っていた。そして、僕は勉強以外にも能力を発揮できる人だから、尊敬していると。

この料理ひとつとっても、彼女の悩みのひとつなのだろう。彼女

は勉強以外の自分の価値がほしいのだ。だけど、勉強以外こうして上手くやれない自分が嫌いなんだろう。

「大丈夫よこのくらい。修正が効くわ。それに少しくらいまずくても、ユータ達が全部食べてくれるわ。口の卑しい人種だから」

ユータの母がそう言ってシオリの前で舌を出して見せる。

「それに、ケースケくんだって、可愛い彼女の料理なら、何でも食べてくれるでしょ？」

ユータの母が僕の方を振り向いた。

「……」

可愛い彼女――人前でそう言われると、なんて言っていいのかわからない。僕は口ごもってしまう。

こうして照れてしまうから、彼女に本当の気持ちがいまいち伝わらない気がするんだよな……ひねくれた性格ってのは、なかなか直らないものだ。

「ケースケくんは食が細そうに見えるけれど、うちに来るといつも美味しそうにご飯を食べてくれるの。だから私もケースケくんが来ると、つい張り切っちゃってね。自分の作った料理を、美味しそうに食べてくれる人がいるって、作りがいがあるわよ。あなたも苦手だからって料理を遠ざけないで、そういうことをもっと知ってほしいな」

「……」

「ケースケくんは料理が出来ないくらいで人を嫌いになったりしないし、自信持っていいわよ。あなたはケースケくんに選ばれたんだから。ね？」

本人を目の前にして、ガールズトークのノリになる二人。何とも所在無いものだな。

「何ならケースケくんと一緒に料理をしてみたら？」

ユータの母がいきなりそう提案した。

「……」「……」

二人とも、何だか照れてしまって、しばらく言葉が出ない。

「じゃ、じゃあ、ハンバーグ、一緒に作ろうか」
埒が明かないので、僕が提案する。
「う、うん」
シオリもその言葉を待っていたように、僕の横に来る。
「まだ野菜あるけど、何入れようか。何か苦手な野菜はある？」
「ううん、平気」
「そうか。じゃあちょっと野菜を多めに入れて、量を増やすか。挽き肉は少し残して、ロールキャベツにしようと思うんだ。それも作り方、教えてあげるよ」
「え？　そんなのも作れるんだ。楽しみだなぁ」
「ケチャップを使わない本格派だよ。期待していいよ」
僕の説明を聞いて、シオリはにっこり微笑んだ。

約1時間かけて、リビングに料理が並ぶ。
普段勉強会で使うリビングの机には、ジュンイチ達がさっき買ってきた花が花瓶にいけられて、食卓を飾り、テーブルクロスも敷かれている。
折節ユータの父親も帰宅して、合わせて7人の食卓だ。
「うお、すげぇケーキだな！」
ジュンイチが僕の運んできた、大きなチョコレートケーキに驚嘆する。
「実はバレンタインに貰ったチョコが、食いきれないでいっぱいあったから、この場で沢山使っちゃったんだ。多分甘さが均一じゃないと思うけど」
４ヶ月前のバレンタインには、埼玉高校に僕宛のチョコがダンボール詰めになって届いた。正月に全国大会で準優勝し、怪我で休んでいた後、模試で初の全国1位を取った頃のことだ。
膨らむ限界まで生地にチョコレートを混ぜ、さらにその上からチョコを分厚くコーティングしたザッハトルテもどきだ。

「さあ、時間を食ったし、早く始めよう」
既に時計は7時半を回っていた。皆席に着く。
「では、まずは乾杯の準備だな」
そう言ってジュンイチは、横からシャンパンのグラスを取り出し、なみなみと各自のグラスに注いでいく。
「お、お酒？」
僕の隣にいるシオリは目を見開く。
「こいつは酒屋の息子だから。毎回勉強会には酒を持参でくるんだ」
「ケースケくんも、飲むの？」
「僕はあまり強くないけどね。嗜む程度だ」
「シオリさんとマイはどうする？　ジュースも持ってきたけど」
ジュンイチが聞く。こいつも女の子には優しいんだな。
「試しに飲んでみる」
シオリは言った。
「大学に行ったら、嫌でも飲むだろうし、試しに少しだけ……」
「私も貰おうかな。大学に行って、いきなり飲んで変な酒癖出たら嫌だし」
マイもそれに同意する。
ジュンイチは二人のグラスにも、シャンパンを注ぐ。
「じゃあ、乾杯の音頭を、主賓のユータくんから」
ジュンイチが上座のユータに、マイクのようにシャンパンの瓶の口を向けた。
「……」
ユータは頭をかく。どうやら言うことを考えてなかったようだ。
「ん？」
不意に僕はテーブルの下から、膝を誰かに小突かれた。
下を見ると、大きな手が何かを持って、僕の足元で手首を動かし、これを受け取るように促している。
僕はそれをこっそり手に取る。それはクラッカーだった。
僕はジュンイチの方を見ると、頭をかくユータの横で、ジュンイ

チが僕に一瞬だけ、にいっと笑って見せた。
やれやれ……18にもなって、子供じみたいたずらが好きな奴だ。
「えー、今日はこの度、俺のプロ初ゴールを祝ってくれるということで、本当にみんなには感謝してます」
そんなことは露知らず、ユータは乾杯前の挨拶をたどたどしく始める。
「俺がプロに行けたのも、高校での経験がすごく大きかったと思います。これからもっと精進して、ゴール量産して、新人王目指して、みんなの受験が終わる頃には、俺が盛大にご馳走してやれればいいと思います。えっと、それから……」
パン！　パン！
話の腰を折るタイミングで、僕とジュンイチが同時にクラッカーを鳴らした。ダブルボランチとして長年相棒を組んだ仲だ。アイコンタクトでタイミングは合わせられる。
「うわっ！」
ユータはクラッカーから発射された紙テープを髪の毛にもつれさせて、声を上げながら、腰を抜かした。
「カンパーイ！」
腰を抜かしたユータをよそに、ジュンイチがグラスを掲げて乾杯の音頭を横取りしてしまった。僕もそれに便乗すると、シオリ達もそのノリに押されて席を立ち、各々にグラスを合わせ始めた。
「おい！　俺が主賓じゃないのかよ！」
ユータは一人取り残され、少し怒ったような声を出した。リビングが笑い声に包まれる。
それを尻目に、僕は横にいるシオリともグラスを鳴らした。
「おめでとう」
僕は言った。
「あんなことしておいて、何がおめでとうなの？」
シオリは呆れ顔で言った。
「ん？　まあ何にせよ、みんなでこうしてやれる機会があるのはい

いことだろ」
――それからパーティーは和気藹々と進む。僕達の作った料理はどれも好評で、シオリの作ったミネストローネも修正を加えて、皆が美味いと言って飲んだ。
ジュンイチ達の買ってきたプレゼントの贈呈も済んだ。あいつらが買ってきたのは額縁だった。
「新人王でも得点王でもフェアプレー賞でもいいから、お前の初タイトルはこの額に入れてくれ」
そんなジュンイチの言葉で贈呈された額縁を、ユータは嬉しそうに抱えていた。
しかし、1時間もするとユータもジュンイチも出来上がりかけてしまった。まあ、女性がいてもセクハラをするような酔い方はしない奴等だから、問題はないと思うけれど。
「うーん……」
そして、僕の横にいるシオリも、頬を赤く染めて、そのつぶらな目をとろんとさせている。乾杯で飲んだシャンパングラス一杯しか飲んでいないのに。
「おい、大丈夫か？」
「大丈夫……シャンパンって、美味しいねぇ。もう一杯貰おうかな」
ろれつが若干回っていないが、たどたどしくも何とも楽しそうな口調で言った。
「ふぅ……私も、もう一杯くらいなら」
シオリの横にいるマイももう一杯シャンパンをほしがる。シオリより背も高くスレンダーでスタイル抜群のマイも、首まで赤く染まっていて、何だかちょっと色っぽい。
「わははは」「うひゃひゃひゃひゃ」
ユータとジュンイチは、既に酩酊してご機嫌になっているし。
「おい、そろそろペースを落とせ。酔いを醒まさないと、帰れなくなるぞ」
僕達は世間から注目される身だ。へべれけに酔って帰るところを

誰かに見られたら、大問題になってしまう。
まあ、それが心配だから、最近は僕たち3人が集まっても、酒を飲む機会がなかったのだから、久しぶりに思い切り酔わせてやりたいとも思うけれど……
「あ、じゃあ、もしよかったら、これ見てみない？」
ユータの母がそう提案して、テレビの横のラックから、一枚のＤＶＤを取り出した。
「何ですか、これ」
「半年前の、全国大会決勝戦のビデオよ」
「……」
「お、いいね、久しぶりにあの試合を振り返るのも」
「うん、あの試合、すごかったもんね」
皆はノリノリだが、僕自身はあまり見たくはない。
あの試合が、僕の商品価値を大きく跳ね上げたと、世間では認識されているが、僕にとってあの試合は、人生最大の汚点である。
とはいえ、一人反対して、せっかくの祝いの席を壊すのも気が引けたから、仕方なくその試合を見ることにするのだった。
ＤＶＤがプレーヤーに挿入される。

Braver

半年前の全国大会では、初出場の埼玉高校の下馬評は最低だった。３年生がおらず、スポーツ推薦もなく、進学校で練習時間も短い。県立なので設備もない。褒める要素が、中学時代からプロからも注目されていたユータしかないチームだと思われていた。そのユータが気まぐれで埼玉高校に行き、個人技で得点王を取ったことで、何とか県内を勝ち抜けた、ユータのワンマンチームという評価だった。

だが、蓋を開ければ１回戦で、優勝候補を４対０で葬り去ると、続く２回戦は、なんと８対０という野球のスコア並みの圧勝で勝ち抜け、あれよあれよと決勝まで進んだ。決勝までの５戦で、埼玉高校の失点はジュンイチの活躍もあって僅か２、得点は僕の７得点に、ユータの１３得点をはじめ、２６もあり、勝ち方がどれもド派手だったから、勝ち進むにつれてファンも増え、新聞にも取り上げられ、一気に人気チームにのし上がった。

ユータはこの時点で２位の僕と６点差を付けていたから、得点王を既に確定させていた。そんなアゲアゲの状態で、決勝戦、全国大会の常連で、現在３連覇中、今大会も大会前からのぶっちぎりの優勝候補、長崎県代表、三國高校と戦うこととなった。

「後半だけでいいや。前半は俺達、いいところなかったし。時間的にもな」

ユータがそう提案した。

確かにユータの言うとおり、決勝戦の前半の僕達のサッカーは、本当に酷かった。

決勝の日は雨で、ピッチコンディションは最悪。１月の雨は氷のように冷たく、僕達から容赦なく体温を奪っていった。

そして雨の日のサッカーは経験がものを言う。雨の試合の経験が少ない僕達は、百戦錬磨のサッカーエリートの揃う三國高校とは、その点で大きな差があった。慣れない滑りやすいグラウンドで、屈

強な相手のプレスを受け続け、埼玉高校の選手は濡れたピッチに何度も叩きつけられた。体温と体力を奪われていくことで、厭戦気分は蔓延し、士気の上がらないこと甚だしかった。

試合前から味方の士気は下がりっぱなしで、前半は僕もボランチに下がって防戦一方に回って試合を落ち着けるしかなかった。だが、個人能力の差が激しく、僕とジュンイチ以外の守備陣は、相手の攻撃の前に簡単に突き崩され、前半だけで2失点を喫してしまった。

ハーフタイムでのベンチの暗さも半端ではなかった。三国時代の英雄曹操が赤壁で惨敗しての敗走も、冬将軍のために飢えと寒さで多くの配下が倒れたとされているが、寒さはそれだけで大きく敗軍の士気を削ぐ。皆がストーブの前で濡れそぼったユニフォームを脱いで震えている有様だった。

――チャプター切り替えが終わり、ヒラヤマ家のリビングの大きな液晶テレビは雨でも超満員の国立競技場の歓声を伝える。

『さあ、今年の高校サッカー選手権決勝戦、埼玉高校は準決勝までの猛攻と鉄壁が影を潜め、王者三國に前半から2失点を許してしまいました』

『見たところ、もう埼玉高校の選手は戦意を喪失していました。高校生ですから、一度切れた糸をこのハーフタイムで戻すのは難しいでしょう』

解説陣も、この時点では、埼玉高校の惨敗を信じて疑っていなかったようだ。

「あ、俺達の入場か」

「ああ、こりゃ酷いぜ。みんな死んだような顔して。この顔じゃ、勝てるわけないよな」

ユータとジュンイチがテレビを見ながら苦笑する。

僕達のキックオフで後半開始のホイッスルが鳴った。

ユータ、僕、ジュンイチとつないで、ジュンイチがサイドにボールを展開したが、サイドハーフの選手は三國の選手に少し体をぶつけられただけで、味方はあっさりボールを取られてしまう。

僕はハーフタイム、士気を挙げるために檄を飛ばしていたのだが、どうやら何の意味もなかったようだ。埼玉高校は前半、三國の選手に何度も体を吹っ飛ばされ、水浸しのピッチに何度も叩きつけられ、ぼろ雑巾のような有様だった。既に、もう吹っ飛ばされたくないと腰が引けていて、僕達3人以外の味方はあっさりボールを取られてしまう。

『また早くも埼玉高校、ボールを取られた！　三國、笠にかかって全員でゴールに襲い掛かる！』

だが、解説が悲鳴を上げた頃には、既に三國の選手はドリブルボールをカットされていた。

『あっと、鋭いスライディングで１０番のサクライが、ゴール前でボールを奪い返した！　そしてすぐさまボールを拾って、カウンターをかける！』

画面の中の僕は、三國の選手をどんどんドリブルでかわしていく。2人、3人――

『は、速い速い！　サクライ、強引なまでの中央突破！　一騎駆け！　味方ゴール前から相手陣地、約６０メートルを、一人でボールを持ち運びます！　ああ！　これにはたまらず三國ディフェンス、ファールで止めてきました！　サクライをスライディングで倒し、ゴールから約２５メートルの距離で　フリーキックを与えてしまいました』

「いきなりドリブルのリズムが変わったな。ありゃ対処できねぇよ」

守備を得意とするジュンイチも呆れ顔だ。

この大会、僕はフリーキックだけで４得点を決めていて、「サクライに２５メートル以内でのフリーキックを与えたら、失点を覚悟しろ」と、相手チームを恐怖のどん底に突き落としていた。

僕の得意なキックは、鋭いカーブをかけて高い軌道から落とす、現在『ドラゴンダイブ』と言われる軌道のキックなのだが、画面の僕はボールにカーブを書けず、まるで弾丸のようにゴールに向かう、速い球筋のキックで、ゴールの最短距離にボールを叩き込んだ。

『ゴール！　開始まだ僅か2分で、埼玉高校、反撃の狼煙を上げる一発！　今大会、彗星の如く現れた小さなファンタジスタが、たった一人で強豪三國から豪快なゴールを上げました！』

歓声に沸く埼玉高校ゴール裏の応援団の嬉しそうな表情の後、テレビの画面には、周りを見渡して、何かを怒鳴っているような僕の表情が映される。

「はは、この時ケースケ、しっかりしろ！　って怒鳴ってたんだよな」

ユータが僕の表情を窺う。

「しかし、さすがにあれ見たら、気合も入ったよ」

その言葉の通り、この一発を機に試合の流れが変わり始めた。

表情の変わったジュンイチが、三國からボールをむしり取り、僕にパスを出す。

『また抜いた！　高校ナンバーワンの三國ディフェンス陣が、ボールに触れることも出来ない！　圧倒的なスピードと、強引な突破に、全て振り切られます！　あの小さな体で、屈強なディフェンスにプレスをかけられても、びくともしません！』

そのまま僕はドリブルで持ち込み、前方で前を向いているユータが手を上げているのを確認し、スルーパスを出す合図を眼で送る。僕が蹴り出すと同時にユータは相手ディフェンスの裏へ走り出し、ディフェンスを振り切りながら、僕の出したパスをそのままゴールへ流し込んだ。

『ゴール！　なんと埼玉高校、後半開始僅か5分で試合を振り出しに戻しました。今大会ゴールを量産した、ヒラヤマ、サクライのコンビ、この2人はさすがの三國も止められないか？』

「しかしこの試合のケースケは、本当にすごかったな」

テレビの画面に釘付けになりながら、ユータが言った。

「この大会が始まった時から、急にプレーのキレが格段に増したが、この後半はもう一段階ギアが上がった。すごい豹変振りだったぜ」

「……」

実は僕は、この試合に関して、覚えていることはほとんどない。
この全国大会の、ほんの数日前――僕の心はシオリによって救われた。心が自由になったことで、重かった体は一気に軽くなり、散漫だった脳の動きも活性化していた。
この大会中、僕は、今までの感覚が、そんな生まれ変わったような自分の体に追いついておらず、なかなか上手く自分をコントロールできずにいた。
だが、それでも僕はこの大会、勝つことにがむしゃらだったように思う。
入学した時からずっと、僕を信じてくれていたユータやジュンイチに、今まで全く目を向けていなかった分、待たせた分を何とかして返したいと思っていた。そのために優勝をして、僕達のこれからに、花を添えてやりたかったからだ。
この決勝戦の後半は、ビハインドを背負ったことでその思いが高まり、僕を１００％ゴールに集中させることとなった。最近僕の一番の能力といわれる『先読み』も、この試合で初めて使えるようになった。そして、最近精度が増していると言われる『先読み』だが、この試合の精度にはまるで及ばない。この半年、僕はこの試合の感覚を普段でも出せるように試行錯誤している。それくらいこの試合は、集中力が高まっていて、僕の限界以上の能力が発揮できた試合だった。
『またパスカットだ！　サクライ、三國の攻撃パターンを完全に読んでいた！　エンドウとワンツーパスをつなぎ、二人で三度ゴールに突進！　さあ、このまま逆転ゴールを決めるか？』
実況のボルテージが上がる。この時点で僕も、逆転を既に信じて疑っていなかった。
しかし、僕は後ろから屈強なディフェンダーにスライディングをかけられ、しかも足を蟹鋏にされ、倒された。僕の体は勢いが付いていた分、強くピッチに叩きつけられる。
「うわっ……」

あまりにひどいタックルに、ジュンイチが声を上げた。
『あーっ！　これは危険なプレーだ！　サクライの足を両足で取るスライディング！　サクライ、倒れたまま左足を押さえている！　大丈夫か？』
「こうして映像で見ると、ひでぇタックルだ」
「ああ、結局この試合、三國が勝つんだが、このタックルで完全に三國は悪者になっちまったな。優勝したのに、負けた俺達の方が騒がれる原因になっちまった」
ジュンイチの言葉通り、このプレーで三國のディフェンダーはレッドカードで退場となり、埼玉高校は数的有利に立ったのだが、このプレーで負った足の痛みで、僕のプレーが先程までのようなキレを生み出せなくなり、結果流れがどちらにも向かないこう着状態を生み出すこととなった。
担架で一旦ピッチの外に出された僕の足は、この時点で重度の捻挫と打撲を併発していて、医師からもプレー続行はまず無理と言われたが、僕は出場し続けた。埼玉高校に僕の代わりなどいない。僕を欠いたら、三國に一気に攻め立てられ、大差で負けることなど、誰が見ても明らかだった。
お互いに余裕がなくなったことで、それからの試合はノーガードのシュートの打ち合いとなった。
『三國高校は、3人がサクライにつきます。完全にサクライを潰す作戦です』
この時は、何とか足の怪我の痛みを悟られないように必死にやっていたが、こうして自分で改めて映像を見ると、足の引きずり方や、表情の余裕のなさがよくわかる。この様子じゃ、怪我に付け込んで僕を潰しに来るのは当然だ。
それからの試合は、僕が何度もボールを受けては、三國に潰され、何度もピッチに叩きつけられる光景の繰り返しだった。
『あ！　サクライ、足を蹴られてバランスを崩した！　しかしファールはない！　三國、ここからカウンターだ！』

僕が倒れた時、スタンドからブーイングが起こった。
三國の選手は全員で埼玉高校ゴールに攻めかかる。センターサークルを超えて、バイタルエリアに侵入し、そこからフォワードへスルーパスを送る。
『ああ！　しかしもう既にサクライが戻っている！　ペナルティエリア深いところでスルーパスを拾い、クリア！　スローインに逃れました！　サクライ、怪我をした足で味方の最深部まで戻っていました』
国立競技場の大歓声。
それから画面は、膝に手をついて、肩で息をする僕の映像に切り替わる。それから、ひょこひょこと足を引きずりながら、自軍のゴールポスト横にあるドリンクを取って、軽く口に流し込むと、ペットボトルをぽいと捨てていた。
「サクライ！　サクライ！」
『スタジアムが、割れんばかりのサクライコールに包まれます！』
実況がそう形容するとおり、テレビを通じても、地鳴りのように大きなコールだった。さっきまで観客のほとんどが三國の勝利を疑わず、ましてこの雨で観客も低調なテンションだったのに、一気に試合がもつれたことで、観客もヒートアップしている。
三國のスローインで再開された試合は、サイドからのクロスがゴールの後ろに飛んでいき、埼玉高校のゴールキックとなる。危機を脱した埼玉高校の選手は、小走りで前線へ走っていく。その中で一人、ひときわゆっくり前線へ走る僕が、またテレビカメラがアップで捉える。
『それにしても、なんという少年でしょう。大会前まで、サクライ・ケースケは、全く無名の選手でした。それが先程まで、敗戦濃厚だったチームの流れを、たった一人で引き戻すだけではなく、低調だったスタジアムの空気さえも、たった一人で変えてしまいました。その小さな体で、怪我をしてもなお勇敢に戦い、王者をあと一歩まで追い詰めています。その姿は、敗戦濃厚の大阪城に入り、たった

一人で圧倒的戦力の徳川家康をあと一歩まで追い詰めた、悲運の名将真田幸村のようです！』

Tie

しかしそれでも、確実に僕の限界は近づいていた。戦意を取り戻した他の仲間が、ジュンイチの指揮の下、何とか持ちこたえてはいたが、それでも個人の能力には差がありすぎる。僕達が同点に返せば、三國に勝ち越しゴールを再び決められるの繰り返しで、埼玉高校は、攻めても勝ち越しゴールを奪えぬまま、５－４のスコアのまま、後半４０分を回ろうとしていた。

『エンドウが後方から長いボールを入れる！　ヒラヤマ、ディフェンスの裏を取った！　キーパーと一対一になる！　足を伸ばす！　しかしキーパー飛び出して至近距離でボールをはじく――いや！　はじいたボールを猛然と突進してきたサクライが、ヒラヤマを飛び越えてそのままジャンピングボレー！　あぁ、三國キーパー何とか触った！ボールはクロスバーの上を越えていきます！』

シュートに全精力をつぎ込んでいた僕は、着地に失敗し、そのまうつ伏せに雨に濡れるピッチに倒れこんだ。

このシュートは本当に完璧なタイミングで蹴った。蹴った瞬間同点を確信したのに、まさかキーパーがあれに触るとは思わなかった。僕はうつぶせになったまま、拳でピッチを叩いた。この時は、本当にもう駄目だと思った。

そんな僕に、同じくこの死闘を戦い抜き、既にぼろ雑巾みたいなユニフォームを着たユータとジュンイチが駆け寄って、僕に手を貸してくれた。

「この時、ケースケが言ったんだよな。ジュンを使うぞ、って」

ユータが言った。

「この土壇場なら、間違いなく相手は得点王のお前を警戒して、複数でマークしてくるに決まっているからな」

「それを聞いたから、俺はマークをおびき寄せて、ジュンにフリーでシュートさせるお膳立てを整えたってわけだ」

そう言って、ユータはジュンイチの方を見る。
「こいつ、お前がコーナーに歩いていく後姿見て、相当気合入ってたぜ。こんな男冥利に尽きる場面で、自分を使うって言ってもらえてさ」
ユータのその言葉通り、画面の脇、ニアサイドにちらりと映るジュンイチの表情は、いつもの飄々とした感じが消えていた。
もうこの時間帯になると、相手はフォワードまで含めた11人全員をゴール前に下げて、最後のピンチをしのぐ構えだった。こちらもゴールキーパーまで相手ペナルティエリアに上げて、なんとしてもここで同点に追いつかなくてはならなかった。中でもユータは既に6人近くが取り囲んでおり、素直に身動きもさせてもらえない状態だった。ニアサイドにいるジュンイチには2人が着いている。
僕がコーナーにボールをセットした時、ファーサイドにいたユータは、大柄ながら動きも速い。その素早い動きで何とかマークをはずそうという動きを見せていた。ジュンイチを使う、と言っただけで、自分の役割がデコイであることを理解した証拠だ。
あとは、僕の左足が上手いところにボールを入れられるか、という問題だけだった。この時僕の左足は、もうアドレナリンでは誤魔化しきれないほどに痛んでいた。痛みで思考能力にジャミングがかかり、キックの精度も落ちていたし、軽量をカバーするために、腰の回転を使って打つ、強いキックのショックにさえ、足が耐えられない状態に来ていた。
それでも、ユータがカバーを外してくれる以上、速い弾道で蹴るしかない。僕は助走を取り、思い切り腰を捻って左足を振り抜いた。
助走している間にユータはファーサイドからニアサイドに走り、ディフェンスは一気にニアサイドに流れた。そうして薄くなったファーサイドに、ジュンイチが飛び込んでいた。
ジュンイチは思い切り飛んで、叩きつけるようにヘディングすると、ボールはキーパーの手の横をすり抜けて、ゴールネットを小さく揺らした。

その瞬間、国立競技場がひとつになった。大歓声が沸き起こる。
ユータ、ジュンイチが揃って抱き合い、そのまま狂喜したまま、ゴール裏の立て看板を飛び越えて、スタンドに向かって雄叫びを上げるシーンがテレビに映される。スタンドの埼玉高校応援団も狂喜乱舞で、飛び込んだ二人は最前列の応援団にもみくちゃにされる。
「いい顔してるぜ」
ユータが缶ビールをあおりながら、ジュンイチの方を見た。
「マイさんがこの顔見て、ジュンに惚れたっていうのもわかる気がするな」
この時僕は、キックに全精力を集中していたため、ボールを蹴った瞬間バランスを崩して倒れてしまって、ゴールが決まった瞬間を見ていない。今日初めてジュンイチのゴールを目にしたのだった。
マイは、えへへ、と、照れくさそうに笑う。ジュンイチも二人の馴れ初めを改めて蒸し返されて、何だか所在なさそうに、目をしばたたかせている。
「……」
マイはこの試合の後、埼玉高校の体育館で行われた、祝勝会――のつもりでＰＴＡやＯＢＯＧが用意したのだが、試合に負けたため、ちくしょう会になってしまった会の席で、僕達3人がたまっているところにやってきて、僕達がいる前でいきなりジュンイチに告白した。
このゴールを決め、観客席に飛び込んで狂喜する、マイ曰く『キラキラしたジュンくんの姿』に、一瞬で恋に落ちてしまったらしい。
「――くくく……」
僕は思わず、笑いを噛み殺した。
「サクライくん？」
マイが僕の顔を覗き込む。
「――ああ、すまない。君が告白してきた時の、ジュンイチの顔を思い出して……」
「ああ、あれか！　確かに――あれは傑作だったよなぁ。俺の携帯

に写真があるぜ。ほら」
　ユータはポケットから携帯を取り出してフリップを開けて、まず自分で写真を見た。
「ぷはははは！　この顔！」
「わ、忘れろよお前ら！」
　ジュンイチは照れくさそうに狼狽する。
　マイから「好きです。付き合ってください！」と告白された時のジュンイチは、まさに青天の霹靂に打たれたというやつで、顔の筋肉が蠕動したかのように、おかしな顔をしていた。激しく狼狽して返事も覚束ず、何とも女性に免疫のない、ヘタレた姿だった。
「でも、さしずめケースケのこのコーナーキックは、キューピットがマイさんに放った、ハートの矢ってところだな」
　ユータが言った。
「――僕は一人の男を幸せにしたが、一人の女性をとんでもなく不幸にしたかもしれないな」
「そんなことないよ」
　マイは言った。
「サクライくん、あの時、サクライくんが、私達のために歌ってくれた歌、私、多分一生忘れないわ。あの歌があったから、私は今もジュンくんとこうしていられているんだと思うから」
「……」
　マイから告白されたジュンイチを見て、その時も僕たちもジュンイチの顔を見て大笑いした。
　だけど、同時に僕は、それがすごくめでたいことのように思えた。僕達3人の中で、一番彼女を欲しがりながらも、三枚目キャラになっていたジュンイチに春が来たのだから。快楽主義者だが、心優しく、情に篤いこいつのよさに気付く女性が、やっと現れたのだから。
　僕とユータは、そのめでたい席に、何かを祝いたくて、まだ返事もしていないジュンイチを置いて、体育館のステージに上り、祝いの管弦代わりに、ギターを弾き、歌を歌った。

その壇上から、ジュンイチとマイが手をつないでいるのが見えて、僕は何だか嬉しかった。今まで他人に無関心で、他人を不幸にしか出来ないと思っていた自分が、初めて誰かを幸せな気持ちにさせることが出来た気がして。

ジュンイチとマイは、僕が初めて自分の力で笑顔にさせることができた人だ。口にするのは照れくさいから、一度も言えたことはないけれど……

僕はいつも願っている。この二人がいつまでも、仲睦まじくいてくれることを。

Borrow

ジュンイチの値千金ゴールからまもなく、ホイッスルが鳴り、試合は５－５のまま延長戦に突入する。

『サクライは、再び担架に乗せられ、ベンチに戻ります。後半４０分だけで、２ゴール２アシストと、鬼神の如き活躍を見せましたが、危険なタックルによって負った怪我と、４０分間絶えず続いた激しいプレスによって、彼の足は悪化の一途を辿っていることは、ここからでもわかります。サクライの顔からは、もう余裕が全く感じられません』

『しかし、この選手の代わりは埼玉高校にはいませんからね……技術だけでなく、彼の闘争心溢れたプレーは、技術的に三國に遠く及ばない埼玉高校の選手を鼓舞してきました。彼がいたから、他の選手も三國相手にここまで持ちこたえられたのです。彼が抜けることは、得点源、チャンスメーカーという以前に、精神的支柱が抜けるということです。そうなると埼玉高校は一気に崩れてしまうでしょうね』

「――なあ。もうこの先を見るのはやめないか？」

ピッチ外で担架から降ろされ、医者の問診を受ける僕の姿が映し出されるテレビを見ながら、僕は画面を指差した。

「ははは、さっきまで俺を辱めてたんだ。お前も少しは恥を掻けって」

ジュンイチが僕を揶揄する。

「……」

気が重いな。この先を見るのは……

「おじさん、おばさん」

僕はユータの両親の顔を、それぞれ一瞥する。

「実は今日は、お二人に込み入った話があるんです。もし宜しければ、お話を聞いて頂けると嬉しいのですが……」

実を言うと、今日のパーティーは、ユータを祝うことが主眼なのは勿論だが、僕自身がユータの両親にお願いがあったので、この家に来る口実として、会場をここにしたのだ。

そのお願いというのも、実に情けないことではあるが、事態は既に予断を許さない状況に来ている。

もう、背に腹は代えられない……

「なんだよぉケースケ、上手い逃げ口上作りやがって」

――ジュンイチがぶうぶう言いながらも、応接室に一人通された僕は、やっと一息ついていた。

僕は酒が飲めるのだが、あまり強くない。さっきから頭が少しふらふらしていたから、静かな場所に来て、少し脳に酸素が入ってきたような気がする。

だけど、あいつらと酒を飲んだことは何度かあるけれど、酒を飲むことが、楽しいと思ったことは、これが初めてかも知れない。以前の僕は、とめどない現実を自分で処理することに疲れて、何かを忘れてしまおうとするためだけに、酒を飲んでいたけれど、やっと楽しい酒の飲み方がわかってきたような気がする。

「酔っているのかい？」

応接室に案内してくれた、ユータの父に訊かれた。

「――少しだけ」

「はは、しかし君は酒はそれ程強くないが、乱れないからな。その点は安心だ」

折節、お茶を持ってきたユータの母が入ってきて、僕に急須で注いだ茶を差し出した。そして、僕と向かい合う形で、ソファーに座る。

「すみません。お時間を取らせてしまって」

「いいのよ。久しぶりにあなたと話したいと思ってたし、私達もあなたに頼みがあるから」

「……」

「でも、泣いているところを見られるのが、そんなに恥ずかしい？」
ユータの母が、僕を見て笑った。
「……」
ビデオの続き――延長戦、僕は痛み止めを打ってもらって強行出場したのだが、もう僕はボールを蹴るどころか、走ることさえ覚束ない程だった。試合中何度も削られたことで、蟹鋏タックルを受けた左足だけでなく、右足までが激しく痛んでいた。
そのせいで、僕は大雨のピッチでシュートチャンスに入った際に、雨で濡れたピッチで足を滑らせ、ボールを奪われてしまった。すぐにジュンイチがフォローに入ってくれたけれど、そのジュンイチも足を滑らせてしまい、埼玉高校は最後の防衛線を突破され、相手フォワードに単独速攻を決められてしまった。
ジュンイチが時間を稼いだ間に僕は起き上がり、相手フォワードの後を追った。もう僕の足以外に、守る術がなかった。
何とか僕はその選手に追いつき、その選手からのボール奪取に成功したのだが、痛んだ僕の両足は、その瞬間に止まってしまった。
ジュンイチの「後ろ！」という声が聞こえた直後、僕はすぐ後ろまで迫ってきていた、敵の選手に跳ね飛ばされ、ピッチに倒れていた。その選手はそのまま決勝ゴールを決めた。
延長戦はまだ5分ほど残っていたのだが、僕は最後に跳ね飛ばされた時に、痛んだ足を捻ってしまい、起き上がろうとしてももう起き上がれなかった。そのまま僕は担架で運ばれ、監督のイイジマも選手交代を審判に言い渡し、無念の途中交代となった。
担架で運ばれながら、僕はアドレナリンが無限放出状態だったこともあって、情緒不安定な程にみっともなく泣いてしまい、その様をテレビで全国に生放送されてしまったというわけだ。それが僕の人生最大の不覚だ。
「でも、あの涙もまたカッコいいのに。悲運のヒーローって感じで」
結果埼玉高校は負け、三國高校が全国4連覇を達成したわけだが、僕が怪我をしなければ、三國は負けていたという声が圧倒的で、誰

も4連覇を讃える事はなかった。埼玉高校は、僕達に今でも届くファンレター曰く「負け方がカッコよかった」ことで人気に火がついてしまい、今の無用の喧騒の基礎が作られてしまったというわけだ。

「まあいいわ。男の子は、泣くところを、人に見せたくないものだもんね」

そう言って、ユータの母は僕の顔を覗き込む。

「ところでケースケくん。君はもう、二度とサッカーをやる気はないのかね」

ユータの父が訊いた。

「ユータから聞いたが、先日君はユータと同じチームからの誘いを蹴ったそうだね。プロは小遣い稼ぎの場ではない。覚悟のない人間が立つべき場所ではない、と」

「はぁ……」

僕は生返事をする。ユータが両親にそのことを話すのは予想できていたけれど。

「君が世間の評価もどこ吹く風で、滅多に表舞台に顔を出さないので、『臥龍』と呼ばれるようになって久しいが、それも同じような義理立てのためかい？」

「……」

僕は一度言葉を咀嚼する。

「僕はまだ、現在の評価に見合うだけの力を持ち合わせていないと思っているので。若輩で、世間知らずですし、思慮も足りません。今のまま表舞台に出ても、自分でも気付かないような愚を演じて、醜態を晒すのがオチでしょうから」

「そんなことはないと思うけどなぁ」

ユータの母が首を傾げる。

「……」

ユータの父は、僕を一瞥してから目を閉じて、腕組みした。

「あ、ごめんなさいね。色々聞いてしまって。えっと、ケースケくんは、私達に話があるのよね」

ユータの母が、沈黙に耐えかねたように仕切り直した。
「……」
僕はこの期に及んで、この頼みを言うべきか言わざるべきか、迷っていた。
出来ることならば、人としての筋を通したいと思ってきた。だがもう、自分では何が正しくて、何が正しくないのかわからない。そうして日を重ねるごとに、僕の状況はどんどん悪くなっている。
もう、僕一人ではどうしようもない……
僕は座ったまま膝に手を突いて、深々と頭を下げた。
「お願いします！　僕にお金を貸してください！」
「え？」
「非常識なお願いであると理解しています。もし無理なら、これからおばさんの家具屋で働かせていただけないでしょうか。お金は必ず返します。返すのにどれだけかかるかわかりませんが、絶対に働いて返しますから」
これが僕の、ここ半年の最大の悩み。
今の僕は、食うのにも困る程に、お金がないのである。
半年前の全国大会で、僕は試合に負けたとはいえ、一躍時の人となってしまった。
それまで僕は、実家から程近いコンビニで毎日アルバイトをしていたのだが、それ以来、僕がそこで働いていることが口コミで広まってしまい、僕の働く時間はコンビニが連日大パニックになってしまった。僕の人気は、学校にも機動隊が出動したこともある程なのだから、夜にそんなパニックを起こしたら、近所迷惑での苦情も殺到するのは必定だった。結局僕はコンビニのアルバイトを辞めた。無収入になったこともさることながら、それまで賞味期限の切れたコンビニの弁当やパンなどを貰って食いつなぐ生活をしていた僕にとって、それはライフラインの断絶に等しかった。
その後もアルバイトを探したのだが、今の時期、僕を高校生時給で雇いたがる店などあるわけがない。数学オリンピックに出場した

のは、それで好成績を収めて、国からの学業支援金を貰うためだ。今はその、雀の涙ほど出る支援金と、今までの貯金を切り崩して生活している。

　高校を卒業すれば、大学の奨学金が下り、もう少し余裕が出来る。それまで何とかしのげればいいのだが、僕と家族の関係は今更言うまでもない。衣食の面倒もなく、げんざいもおかねをはらっていえにおいてもらっている身だ。大学受験にかかる費用も考えれば、どう計算しても、残り半年を凌ぎきることは不可能だった。

現在は昼はユータ宛に女子生徒が届ける弁当のお余りを頂戴し、夜は勉強を教える名目で、ジュンイチやエイジの家に行ってはご馳走になるという有様で、明日食うものにも困っていた。

　時代の寵児と世間でもてはやされ、おまけに学校一の美少女を恋人に持つ今の僕だが、生活水準は以前よりも大幅に下がっており、サクライ・ケースケ共和国は、国家総動員法を既に発令している程に困窮していた。

「け、ケースケくん、とりあえず、顔を上げて。ね？」
僕の耳に、当惑したユータの母の声が聞こえる。
そりゃそうだよな――高校生が赤の他人に「金を貸してくれ」だもんな――怒られないだけまだマシかな。
僕は顔を上げる。
「えっと――何て言えばいいか……」
ユータの父が、数秒目を泳がせる。
「あなたのご家族は、忙しいのか、サッカー部の父母会でも、半年前の準優勝パーティーでもお会いしたことがないのだけれど、そんなにあなたにお金を出してくれないの？　最近何度かテレビで拝見したけれど、あなたに理解を示した、優しそうな方達じゃない」
その間に、ユータの母が僕に聞いた。
「……」
虫唾が走るのを堪えながら、僕は無言を貫いた。下手なことを口走って、この人達に心配をかけたくない。この人達に心配をかけたら、いずれユータ達にもそれが飛び火する。
「――まあ、家庭の事を聞くのは野暮じゃないか。それはいいよ」
温和なユータの父が、妻をなだめる。
「しかし、新聞や雑誌で見たが、君の市場価値はどんどん上がっているんだろう？　ＣＭで君を起用したら、数億円の経済効果を生むとか何とか……君がちょっと顔を出すだけで、君は今、大金を手にすることが出来るのでは？」
「はい、恐らくそうでしょう。しかし僕は現在、自分が表舞台に立つ資格がないことで、多くの人の期待を裏切らざるを得ない状況です。そんな僕が、自分の利益のためだけに、のこのこ表舞台に出るのは、多くの人に対しての不義でしょう」
「……」

「といっても、こうしてお二人にお金を無心するのも、決して褒められた行為ではありませんが……」
僕の声は次第にトーンダウンする。
一体自分は何をしているのだろう――臥龍なんて言えば格好はいいが、実際はこの様だ。自分を食わせることも、人としての筋を通すことさえ叶いやしない。
「――もうひとつ、いいかい？」
ユータの父が、しばしの沈黙の後、僅かに前かがみに座り直す。
「ユータにお金を借りようとは思わなかったのかい？　あいつは正直プロ契約の際、相当の額の契約金を手にした。それは君も知っていただろう？　君が窮していれば、あいつは喜んで君にお金を貸しただろうと思うが」
「はい……正直それも考えました。ですが、それは出来ませんでした。僕は、あいつとずっと友達でいたいので……そう考えると、こんなことを言って、あいつに何て思われるかが、怖くて……」
「……」
沈黙。
「はは」
ユータの父が笑った。
「いい男だなぁ君は。斜に構えたように見えて、心はどこまでも一本気で透き通っている――君のように、悪いことの出来ない人間が、我が子の友達でいたいと言ってくれるだけでも、私にとっては値千金だよ」
「……」
意外な反応だった。もっと当惑されると思っていたのだが。
「しかし、君も損な性格だなぁ。そんなつまらないことで悩んでいたなんて」
そしてそのまま僕を一笑に付した。
「え……」
「こう言っては何だけれど、君は山野に雌伏なんて柄じゃない。そ

う言って自分を抑えつけてはいても、心の底は、もっと広い世界を見てみたいという好奇心と、自分の力を試したいという好奇が煮えたぎっていると見るね。ユータもそう思っているからこそ、君をしつこくプロへと勧誘しているようだが」

「……」

この半年、ろくに会えなかった僕のことが、どうしてここまでわかるのだろう。ユータがそれだけ僕のことを正確に捉えているのだろう。この二人の今の情報は、マスメディアが流すわずかな情報と、ユータからの話しかないのだから。

この数ヶ月、僕は臥龍の名の如く雌伏生活をしていたが、ユータたちがサッカー世代別代表の世界大会予選を勝ち抜いてからというもの、損な自分に迷いを抱いていたのも事実だ。

このまま予選と同じサッカーをしていたのでは、ユータ達は本戦で十中八九惨敗し、国中のサッカーファンから批判され、針の筵のような軽蔑の視線に晒される。友がそんな死地に赴こうとしているのに、僕は今の場所から立ち上がることさえ出来ない自分は、まさに懊悩の塊だった。

「ねえ、ケースケくん」

ユータの母が口を開く。

「大人と子供の違いって、何だかわかる?」

「……」

考えたこともない定義だ。僕は押し黙る。

「大人には、全ての行動に責任が付きまとうけれど、子供にはそれがないってこと」

「……」

「あなただってまだ子供なのよ。なのに一人で何でもかんでも背負いこみ過ぎ」

「……」

「初めてあなたに会った時から、あなたには子供らしさがこれっぽっちもなかった。無理して大人になろうとして、いつだって苦しそ

うだったけれど、それでも全て背負い込んで、他人に自分の中に一歩たりとも踏み込ませはしなかったわね」

「……」

それは仕方のないことだ。僕はそうしなければ、生きていけなかったから。

親に逆らったことで、僕の子供時代は終焉を迎え、僕はその時から、自分で自分を生かすしかなかった。僅かな甘えも許されず、誰も助けてくれなかった。

無理をして大人になろうとしていた——確かにそうかもしれないが、僕自身は無理をしているつもりはもうなかった。それが当然のことだと思っていたし、それ以外の価値観を知らなかった。

「私は正直、あなたを可哀想な人だと思って、ずっと見ていたと思う。あなたが新しい力をひとつ手にする度に、あなた自身がより孤独に、不幸せになっていくような……会う度に、表情の裏に隠した疲れが色濃くなっていくような、そんな気がして。とても青春を謳歌する高校生の若い顔じゃなかったわ。それでも、その時の私はあなたに言えなかった。あなたの目が、それを言うことを強く拒絶しているような気がしたから」

「……」

そうか——この人が昔から僕に優しかったのは、きっと、同情だったんだな。

家族に連日折檻され、怒りと憎しみだけで力を付けていく。そんな痩せ細った野良犬みたいな僕を見抜いていたんだ。

「そろそろ気を張ることをやめたら？　私はもう十分だと思う。たとえあなたがまだ人間として欠落した部分が会ったとしても、まだあなたは子供なんだから、そこまで気にすることはないと思うわ」

「……」

生返事ひとつ返せずに、僕は考え込んでいた。

言っていることは、昔よりは少しは理解できる。

でも——何故僕は、それが出来ないのだろう。辛いのがわかって

いても、迷っていても、そこから逃げ出すことが出来ないのだろう。
もう十分だと言われても、自分にはまだ、納得の出来ない部分が多過ぎる。
どうして……
「ケースケくん、これも、ずっと前から思っていたことなんだけど……」
その懊悩を、ユータの母の言葉が止めた。
「昔のあなたは、まるで十字架を背負った罪人みたいだって、よく思った。久しぶりに会って、その十字架が随分小さくなったように見えたけれど――でも、まだそれが消えてないように思えて。あなたの誰とも深く関わりを持たない孤独な生き方は、まるで罪を背負った人が世間から隔絶されて、一人ぼっちで贖罪を続けるような、そんな姿に見える時があった」
「……」
「今あなたが言った、筋を通すということも、私はあなたなりの、何かへの償いのように聞こえたわ。どう？　違う？」
「……」
償い――
そういえば、シオリにも同じことを言われたな。２ヶ月前、二人で夜桜を見に行った時に。
あなたは優しい。過去の悲しみ、そこから背中を押してあげた私達に恩を感じて、あなたは私達にどこまでも優しくなる――過去の悲しみが消えない限り、あなたはそうして、私達に恩を返そうとし続けると。
「私はあなたに何があったのか知らないし、言いたくないのなら無理には聞かないけれど、あなたはその誰もがうらやむほどの力を持ちながら、いつも心細そうだわ。自分のことを必要以上に否定して、卑下して、それを少しでも償おうとしているような――そんな風に見えるの」
「……」

それは過去の自分も言っていたことだ。他人をいたぶって、いい気分になりたがっている自分が嫌で、わけもわからず何かを償いたくて……

それが苦しくて、シオリにそれを吐露した。シオリはそんな僕を肯定してくれた。

「もう少し、自分を肯定してみたらどうだろうか」

ユータの父が言った。

「君ほど勤勉で一本気で、前途有望な少年が、そんなことで表舞台に出られないのは実に不憫だ。少しくらい間違いがあってもいいじゃないか。大人になれば嫌でも自分の責任と向き合わなくてはいけないんだ。今のうちに子供の特権を使っておかないと、後々辛いぞ」

「……」

「九品蓮台に至らんと思う欲心なければ、八萬地獄に落つべき罪もなし――子供のうちはそれでいいじゃないか。それで十分今は人としての筋を通したことになる。もっと気楽に考えてみてはどうかね。今の君に必要なのは、力を磨くことじゃなく、自分で自分を少し認めること、自信をつけることじゃないかね」

「……」

自分で自分を認めること――自信をつけること。

これまで、僕は沢山の人から存在を否定され続けてきた。家族や、今日会った小学校の頃の旧友もそうだ。誰も僕の存在を認めてくれなかった。僕自身もそう思っていた。自分のことをクズだと思っていた。それゆえに人としてのわれを捨て、退廃的、破滅的思考に生きてきた。

そんな僕に、シオリは初めて、生きていい、と言ってくれた。僕を肯定してくれた。

だけど、僕自身はいまだに、僕を肯定できないでいる。

人としての筋を通したいと強く思っていたのも事実だが、きっとそれは、自分に自信が持てないから。そうして罪を償うことで、少しでもましな人間になったと思い込もうとしていただけかも知れな

い。そうして自分と向き合うことから逃げていただけかもしれない。
「ケースケくん、それを踏まえた上で、私達の頼みを聞いてくれないだろうか」
ユータの父が、賓客を前にするように、背を正した。

Confidence（後書き）

九品蓮台に至らんと思う欲心なければ、八萬地獄に落つべき罪もなし…

戦国武将前田利益、通称前田慶次の生き様を示す「一夢庵風流記」に出てくる有名な一節の一部分。現代風に訳すと「天国に行こうとも思わないが、地獄に落ちるような罪も犯してないぜ」といったところでしょうか

Drunk

「ケースケくん、君の気持ちもわかるんだが――来月行われる、オランダでのサッカーの世界選手権に、君も出てくれないだろうか」
「……」
「今のままでは、日本は間違いなく負けるだろう。ユータもきっと戦犯になる。それはきっと、ユータを潰しかねない。あいつはいつか世界に出たいと言っているが、この大会で世界に自分の力をアピールすることは難しいだろう。むしろ評価を大きく落とす可能性が高い。君が入って何が変わるかは私にはわからないが――少なくとも私は、ユータの力を最大に引き出せることが出来るのは、君しかいないと信じている」
そう言うと、今度はユータの父が、ソファーの前のテーブルに三つ指立てて、僕に深々と頭を下げた。
「頼む。あいつに力を貸してやってくれないか」
「……」
「こう言ったら、気分を悪くするかもしれないけれど、あなたのためにも、いいと思う」
ユータの母が今度は口を開く。
「あれこれ悩んで解決法を模索するよりも、何も考えずに思い切り体を動かす方がいいって言う時もあると思うの。今のあなたはきっとそうなんじゃないかしら。今までおとなしくしていた分、派手に大暴れしてみるのもいいんじゃないかしら。大舞台で活躍すれば、自分に自信を持てるようになるかも知れないし。何よりお金がもらえるわ。勝ち進めば、多分大学で4年間勉強するくらいの学費は楽に稼げるんじゃないかしら」
「……」
僕は目を丸くした。
「――何て言うか、意外です。あれだけユータがプロになることに

反対していたのに」

そう、この両親は、ユータを大学に行かせたがっており、プロ志向のユータと意見が衝突していた。その長い戦いを旗で見ていた僕は、今の両親の反応が意外だった。

「確かに、高校に入る前のユータのままなら、今も反対していたわ」

ユータの母が言った。

「でも、高校であなたに出会って、あの子も変わったからね。好き勝手にサッカーをやるだけじゃなくて、チームのために何が出来るかとか、仲間の大切さとかが身に染みてわかったような気がするし、何より一人でやっているようだったサッカーが、今ではすごく楽しそうだもの。これならプロになって、サッカー漬けの人生になっても、続けていけそうな気がしたの。今まで付き合った女の子みたいに、簡単に投げ出して簡単にポイするような気持ちでプロにさせられなかったからね」

「……」

「はじめユータが埼玉高校に行くって言った時は、正直悪い冗談だと思ったけど、本当に私は、あなたが埼玉高校にいてくれて――おまけに甲子園球児レベルだった野球を捨てて、素人なのにサッカー部に入ってくれて、本当に感謝してるわ。ありがとうね」

今度は母が僕に頭を下げる。

「いえ、そんな」

「だから、もう一度だけ、力を貸して欲しいの。あなたなら、世界大会で、セカイのクラブチームの前で、あの子の力を引き出して、あの子を世界中に売り込むことが出来るでしょう？　あの子の長年の夢のために、あなたの力を貸して欲しいの。親バカかもしれないけれど、私達、あの子がプロになった以上、あの子の夢を応援したいの。この世界大会、あの子の夢にとって、これから大きなターニングポイントになる気がするの」

「……」

沈黙。

その時、コンコン、という音がした。
誰かがこの応接間のドアをノックしているようだ。
「ケースケくぅーん……」
鼻にかかる甘い感じの声――シオリの声だ。でも何だか様子がおかしい。
「ちょっと失礼します」
僕は席を立ち、二人の横を通り過ぎて、応接間のドアを開けた。
ドアを開けると、そこには目を潤ませながらも、ニコニコ顔のシオリがいた。
「うふふ……」
「どうしたんだ？」
「ケースケくーん」
いきなり腕に抱きつかれた。
「え……」
普段おとなしいシオリは、手を握ることさえ遠慮がちなのに、まさかこんな大胆な行動に出るなんて思わなかった。僕は当惑する。
折節、ユータ達が3人でこちらにやってくる。
「あ、いたいた、シオリさん」
ジュンイチが赤ら顔でふらふらしながら言った。
「お前達、シオリさんに飲ませたのか？」
「いや、薦めてはいないんだが、どうやらめちゃくちゃ弱い上に、じわじわ効いてくる体質みたいでな――気が付いたら、完全に出来上がっちゃって」
ユータが頭を掻く。
「シオリって、語り上戸みたいよ。さっきまでサクライくんの何が好きなのかとか、ずーっとおのろけを喋ってて、もうお腹一杯だわ」
マイが僕を見てニヤニヤした。
「な……」
「ケースケくん！」
腕にしがみつかれたまま、強い口調でシオリから名前を呼ばれた。

「私を置いて、もうどこにも行かないよね！」
怒っているような口調。
「は……」
上目遣いで、お互いの顔はもう２０センチも離れていないが、シオリの吐息はちっとも酒臭くない。だけど顔は首や耳まで真っ赤だ。
「ケースケくん……」
間近に迫った顔で、名前を呟かれる。
「……」
やばい、可愛い。
「酷いよ――よそでれでれしちゃってさ……」
そう呟くと、今度はぽろぽろと涙を流し、僕を睨んで泣き出した。
「な――ちょ、ちょっと」
傍で当惑する僕を見て、ユータ達は大いに溜飲を下げたような表情だ。これから僕のこの様を肴に飲み直そうという顔をしている。
「私だって、吹奏楽部の友達に、色々言われてるんだよ？　半年付き合ってて、キスもしてないとか……でも、触れるのだって、なんか怖いんだよ……気持ち、抑えられなくなりそうで、怖いんだよ……」
「……」
僕がしばらく呆然としていると。
いきなりシオリの足元が、がくりと崩れ落ちた。僕の腕からずり落ちるようにへたり込むシオリを、僕は腕を伸ばして背中に手を回して、抱きかかえるように支えた。
顔を見ると、シオリは赤い顔のまま、小さな寝息を立てながら、眠ってしまっていた。
「……」
「何か、すげぇ酔い方だな」
ジュンイチが言った。
「泣く、笑う、語る、絡む、寝る――全部出ちゃったぜ」
「だけど、どんなに酔ってても、ケースケくんのことばっかりなの

ね」
　マイが笑う。
「シオリがこんなに男の人を好きになるなんて……おとなしそうな顔して、心の中は情熱的なのかもね」
「……」
「しかし、幸せそうな寝顔だな。よっぽどお前の腕の中の居心地がいいのかな」
　ユータが言った。
「正直うらやましいぜ。そんな可愛い娘が、そこまでお前を想ってくれるなんてよ」
「……」
「さあさあ、あんた達は下がりなさい」
　ユータの母がユータ達をリビングへ追い返す。
「ケースケくん、とりあえず布団を用意するから、シオリさんを寝かせておいてあげましょう」
　――そう言われて、僕は別室でシオリを敷布団の上に寝かしつけ、掛け布団を掛けた。普段の勉強合宿でも、白河夜船になったユータとジュンイチを布団まで背負って運ぶのは僕の役目だから、割と慣れたものだ。
「うーん……」
　シオリは気持ちよさそうに眠っている。飲んだ量もそれほどじゃないと想うから、すぐに正気に戻るだろう。
　というか戻ってくれないと困る。シオリも今日はユータのプロ初ゴール記念のパーティーだと言って家を出ただろうし、まさか男の家に泊めるわけにいかないし。おまけに未成年の嫁入り前の娘をこんなに酔い潰したとあっては、もう彼女の親に合わせる顔がない。
「……」
　だけど、やっぱり彼女の寝顔は愛らしくて。
　僕は、彼女の赤くなった額――寝かしつけるときに少し乱れた彼女の前髪を、手を伸ばして少し直した。

「幸せそうね、あなたも」
布団を用意してくれたユータの母が僕を見て言った。この部屋は、今3人しかいない。
「久しぶりにあなたに会って、随分今までよりも表情や雰囲気が柔らかくなっていると思ったけれど、この娘の影響かしら」
「え？」
「ちょっと見ただけでも、すごくいい娘で、おまけにあなたを本当に好きなんだってわかるわ。同じ女だから。それに、あなたがこの娘に惹かれるのも、何だかわかる気がする。この娘の笑顔を見ていると、何だかほっとするもの。きっとこの娘の正直な笑顔が、あなたの心の奥にある棘を抜いてくれたのね」
「……」
本当に、そうだな。この娘のその笑顔に、何度救われたか。
「もしかして、今まで雌伏生活をしていたのは、この娘を置いていきたくなかったから――っていうのもあるのかしら」
「……」
どうだろうな。少なくとも数学オリンピック関係が落ち着くまで、丸1ヶ月彼女と会えなかった時は、さすがに心が痛んだ。帰ってきてから、マイに「シオリも無理している。あなたが有名になることで、私のことを置いていっちゃうんじゃないかって悩んでるよ」とも言われたし。
「そんなあなたに、ユータのことをお願いするのは酷かなぁ。でも、前向きに検討してくれない？　大会まであと1ヶ月で、そんなに時間はないけれど……お願い」
「ん……」
シオリが顔を上げる。
「起きたか？」
僕は顔だけ後ろを振り向く。

「え……え？」
シオリは今の状況を見て、当惑する。
「あ、暴れないで」
僕はシオリを制する。
今僕は、シオリを背負って、夜の誰もいない街を歩いている。既に電車で所沢駅から、僕の故郷、川越に戻って、今はシオリの家に向かって歩を進めている。勿論、来た時に付けていたカツラを被って。おまけに絶対に正体がばれないように、ユータの母に分厚い化粧まで施された。鞄はユータの家に置いて、明日ユータが学校に届けてくれるらしい。右手で僕はシオリのパンプスを持っている。
「う……」
「頭、痛いのか？　それとも気持ち悪い？」
「――うーん、平気……」
シオリは状況を察したようで、僕の背中に体を預け直す。
「ねえ、私――眠ってたんだよね……どのくらい寝てた？」
「一時間半くらいかな。今は夜の１０時半位だ」
「そう……」
シオリの息遣いが、すぐ後ろでで聞こえて、何だか艶かしい。さっきからしおりの胸のふくらみを、背中に感じているし。
「――私、酔ってたの？」
「――覚えてないのか？」
「……」
シオリは押し黙る。きっと今は、あらぬ自分の姿を想像して、酔った時と同じくらい、顔を真っ赤にしているだろう。
「君は大学に行っても、酒を飲まない方がいいな」
「――どんな酔い方してたの？　私……」
「別に普通だよ。深く眠っていただけ」
ユータ達にもきつく口止めしておいた。どうやらシオリも、酔って僕の家族のことを口にしたわけじゃなかったようだし、誰も心配しないでいいためには、これが一番いい。

「うぅ……」
何か硬いものが、僕の首にこつんと当たった。どうやら僕の背中に、自分の顔をうずめて顔を隠したようだ。
「――ごめんなさい」
くぐもった、彼女の声がした。
「いいよ別に。それより家族に酔ったところを見せないでくれ、じゃないと僕、君の親に殺されちゃう」
はは、と軽く笑うと、暗い道で目を引く、明るい自動販売機があった。
「何なら酔い覚ましに、お茶でも飲むか？　欲しいなら……」
そう言い掛けて、言葉が止まる。
シオリが僕の首に両手を掛けて、ぎゅっと力を込めてきたからだ。シオリの顔が、僕の肩に乗り、僕の頬が彼女の頬に触れ、彼女の髪のいい匂いがした。
「ごめん――家に着いたらすぐ離れるから……苦しいかもしれないけれど、しばらくこうしてて、いい？　何か、今日はあなたと離れがたくなっちゃって……」
「……」
それは僕も同じだ。こうして密着しているからかな。
「あんまりあなたに甘えないようにと思ってたんだけど――今日だけ……」
「――ああ、構わないよ」
そして、離れがたくなっているのは、もっと他のことも……
自分がこれからどうしたいか。何をすべきか。
当面の答えはもう出ている。
だけど、それは、こんなどうしようもない男をこれだけ好いてくれる、そして、僕の恩人でもある女の子と、また離れなくてはいけないことを意味している。
「……」
歩きながら、月を見上げる。

梅雨の迫る空の月は、どこか水っぽく、滲んだような光で僕達を照らす。
僕は酒を飲んでも、眠れない夜になりそうだ。
今夜一晩、じっくり考えてみよう――

Timid

シオリと別れ、家に帰ると、玄関の檻の中にいるリュートが僕を出迎えた。どうやらお腹が空いているらしい。僕はすぐに傍らのドッグフードを手に取り、台所で犬用ボトルの水を取り替えた。リュートはがつがつとドッグフードを食べ始める。

それから僕はシャワーを浴びて、ハーフパンツ一枚、上半身裸の肩にバスタオルをかけたまま、部屋のベッドに倒れこんだ。

しかし疲れた。部活で元々疲労していたところに、シオリを一時間近くおんぶして街を歩いていたからな。

「……」

今日は何だか色々なことがあった。まるで自分の過去を振り返る小旅行のようだった。

小学校の旧友と会った時は、自分が今、少しは自分の過去と向き合い、それを消化している気になっていた。

自分は半年前よりは、少しはましな人間になれたような気がしていたけれど……

――ヴィーンという音がして、僕のジャケットのポケットに入っている携帯電話が震えだした。僕は横になったまま、携帯電話のフリップを開け、耳に当てた。

「もしもし」

「もしもし？　マイだけど」

電話の主はマイだった。

あれから既に相当酔っていたジュンイチとユータは、シオリが寝てしまってからも、酒のペースを緩めず、とても外を歩かせられない程に泥酔してしまった。なのでジュンイチをユータの家に預けたまま、僕はシオリを背負いながら、所沢駅までマイを送っていったのだった。

「あれから大丈夫だった？　シオリ、ちゃんと目を覚ました？」

「ああ、何とかね。酔いも少しは醒めてたみたいだし、大丈夫だと思う」
「そっかぁ。私も今家に着いて、落ち着いたところ。でもよかった。シオリ、すごい酔い方だったもんね」
受話器越しに、マイの笑い声が聞こえる。
「今日はありがとう。サクライくんの料理、とっても美味しかったわ。駅まで送ってもらっちゃったし……」
「いや、こっちこそ」
「それに比べて、ジュンくんってお酒飲むとぐでんぐでんなのね。これからは気をつけないと」
「そう言うなよ。あいつだって今の自分の立場をわきまえてて、内輪以外では飲めなくなっちゃったんだ。たまには思う存分やらせてあげないと」
僕はジュンイチのフォローをする。ジュンイチも曲がりなりにも世代別サッカー日本代表だ。目立つ存在である以上、今までよりも多少は行動に規制があるのだ。
「あーあ、私もサクライくんみたいな、しっかりした、優しい彼氏にしておけばよかったかなぁ」
突然マイがそう言った。
「は？」
「ふふ、あなたが私と夜な夜なこうして電話してるって知ったら、シオリは怒っちゃうかな？　ヤキモチ焼いちゃうかな？」
「……」
何だこれは――誘惑のつもりか？
「ちょっと――黙らないでよ。冗談なんだから」
「――なんだ。ちょっとどきどきしたのに」
「嘘ばっかり」
「え？」
「あなただって、シオリにぞっこんなんでしょ？」
「……」

「それに、学校でみんな言ってるわ。あなたは浮気とか、絶対できないって。出来るほど人に対して器用じゃないし、嘘が下手だし、浮気できる融通も利かないほど頑固だし」

「……」

僕は一体、女子から何を言われているんだろう。

「シオリもね、それはわかってると思うの。あなたに大切に想われていることも、多分わかってる。でもね、それだけじゃ不安になっちゃうんだよ、女の子って」

「……」

「これはあなたには言わなかったけれど、女の子の間だと、あなたとシオリにほとんど進展がないの、みんな知ってるのよ。あなた達、目立つし、あなたは最近まで、ほとんど人と喋らなかったから、みんなあなたがどういう人か知りたいのね。シオリはいつもそういう娘達に色々言われているわけ。自分が恋愛下手だから、そういう周りからの声に右往左往しちゃうのよね」

「……」

そうか――酔っている時に、そんなことをいっていたから、どういうことか少し気になっていたけれど。

「前から思ってたんだけどさ。サクライくん、どうしてシオリに、何もしないの？」

「……」

女の子にこんなことを聞かれると、妙にいやらしい気がするのは何故だろう。

「――すまない。今まであまり深く考えてなかったから。今夜一晩、色々考えてみようと思うよ」

「そっか。まあ何かあったらいつでも電話してよ。私、あなた達に勉強も一杯教わってるし、色々よくしてもらってるし、何よりあなたは、私の恋のキューピットだから。今度はお姉さんが、あなた達の恋を応援してあげるわよ」

「――何だよ、お姉さん、って」

「ふふ、だって、あなたって思ったより子供っぽいんだもん。何か、手のかかる弟って感じで。シオリもあんな頭いいのに、ちっちゃくて、妹みたいだし」
「――頼りにしてるよ、おねえちゃん」
「な！　ちょっと、いきなりあなたがおねえちゃんとか言わないでよ！　なんか、あなたが言うと、妙にいやらしいわ」
「――自分から言ったんじゃないか」
そんなやり取りをして、電話を切る。
今まで深く考えずにいた。どうしてシオリに何もしないのか。
別にそういう関係がなくても、お互い不満が表面化しなかったし、それでいいのかと思っていたけれど……
「……」
――やっぱり、僕が自分を肯定できていないからだろうか。
ユータの両親に言われた。今の君に必要なことは、自分を肯定すること、自分に自信を持つことだと。
その言葉が、ずっと僕の心に残留していた。
僕だって、頭ではわかっている。彼女の全てを欲しても――彼女の中にもう一歩深く踏み込んでも、彼女はそれを拒まないだろう。
でも、そこに踏み込んでしまうのが、とても怖い――考えると、とても臆病になる。
今まで会う人会う人に、人格を否定され続けてきた僕が、誰かのぬくもりを欲しがることが許されるのか――そんな気持ちがふと沸き上がって、手をつなぐことさえ、ぎこちなくなる。シオリに嫌われないかと思うと、もう一歩奥へと足が踏み出せなくなる。
考えてみると、今の僕は、本当に臆病な人間だ。彼女だけじゃない、ユータやジュンイチに対してもそうだ。僕のこの臆病さが、僕の本当の気持ちを隠し続けている。
そんな僕は、自分をどう思っているだろう――
――考えてみると、僕は、僕自身を『信頼』はしているが、『信用』はこれっぽっちもしていない気がする。

自分の力はそれなりに自信があるし、自覚もある。だが、それだけだ。自分の力は信じていても、それを使う自分という人間のことは、信用していない。

シオリに救われる前の僕も、自分のことを否定し続けていた。散々に否定され続け、自分があの家族と同じく、どんどん薄汚い生き物になっていくように思えていた。

今考えると、この半年間の僕の行動は、ユータの母が言うように、何かへの償いだったのかも知れない。半年前の僕も、醜く捻じ曲がり、他人を際限なく傷つけてしまう僕を、わけもわからず、誰に対してもわからず、何かを償いたくて、罪悪感に潰されそうだった。

僕は結局、あの頃から何も変わっていない。雌伏をしているのも、自分に自信がないから。お金がなくても、利益行為を自分に禁じたのは、そんな自分の、世間へのせめてもの償いのつもり。

――そうか。人としての筋を通してきたと思ってきたが、結局僕は、あの頃とまったく変わっていなかったのか……

朝、目を覚ますと、まだ早朝の5時半。6月になり、もうこの時間でもほんのりと外は白んでいる。最近ではこの時間になると、勝手に目が覚める。

顔を洗い、中学時代から愛用している野球用のアンダーウェアにウインドブレーカーを羽織り、手足に各10キロの重りをつける。

玄関に下りると、リュートはもう目を覚ましていて、僕の足音を確認すると、早く檻から出してくれ、と僕に催促する。

「おはようリュート、今日も行こうか」

僕は檻から出したリュートを、リードをつけずに外に出す。

僕は毎日この時間にリュートと散歩している。ここから歩いてほど近いシオリの家の前を通りかかると、シオリがいつも待っていて、3人で朝の散歩をする。一目を避ける生活をしている僕にとっては、しおりと二人きりで町を歩ける数少ない時間だ。

シオリの家の前に着くと、ジャージ姿のシオリがいた。セミロングの髪を、後ろでひとつにまとめている。
「おはよう」
シオリは僕の姿を確認して、手を振る。
「よく起きられたな。まだ酒が残っているなら、まだ休んだ方がいいぞ」
「ううん、平気……」
シオリは小さくかぶりを振る。
そしてそのまま、いつもの散歩コースを歩き出した。
「……」
僕は歩きながら、改めて隣にいるシオリの横顔を窺う。
「ん？　どうしたの？」
シオリは顔を上げる。
「あ、いや」
僕はまたぎこちなく、目を逸らしてしまう。
やっぱり、シオリは可愛い。この娘の微笑みを、ずっと僕に向けさせたい。こうして幸せそうに微笑む彼女と、いつまでも添い遂げたい。
そんな風に思う女の子に、僕はどうして何もしないでいられたのだろう――
昨日、彼女に抱きしめられた時、狂おしい程に彼女と離れがたくなった。その気持ちが残る今思うと、僕は彼女をずっと前から強く欲していたはずなのに。
「ケースケくんこそ、何だか少し眠たそうね」
シオリは言った。
「あぁ……ちょっと考え事をしてて、なかなか寝付けなかったんだ」
昨日、僕はあるひとつの決断をした。
それは、今僕が何を捨ててでもやらなくてはいけないことであるのはわかっていた。
だけど……

目の前の彼女の微笑みが、僕のその決心をぐらつかせた。
それは、今も僕の気持ちがわからず不安がる彼女を、また置いていくということだったから。
「ねえ、ケースケくん……」
僕の思考を、シオリの寂しげに僕を呼ぶ声が止めた。
「昨日、私が何を言ったか、今はもうほとんど覚えていないんだけど……気にしないでいいから。忘れてしまって、いいから」
「……」
その言葉が、何だかとても寂しそうで、とてもよそよそしく聞こえたことが、何か物悲しかった。
自分の今までの態度が、彼女に大きく負担を掛けてしまったと実感できる一言だった。

僕達3人は、朝の公園に来ていた。
近くの公園は、芝が張られていて、花壇もある。広くて見晴らしもいい。リュートも狭い檻に入れられていた分、こういう場所で思いきり走らせてやりたいと思って、僕達は朝、よくここに来る。
「よし、リュート、ついてこい」
そう言って、僕は思い切り芝を蹴り、走り出す。リュートも全速力で僕を追う。シェットランドシープドッグのリュートは野生の本能か、僕をぴったりとマークしてくる。
僕も全速力で逃げるが、両手両足に重りがついているから、スピードもダウンするし、疲れも速い。2分の全力疾走で、足が止まると、リュートも僕の横で足を止めた。リュートもはあはあと息を切らしている。
「お疲れ様」
シオリはもう全てを理解していて、僕の持参していた犬用の皿に、近くの水道で水を汲み、リュートの前に差し出した。リュートはそれを美味しそうに飲み始める。
「ケースケくんも、はい」
そう言って、シオリは家から持ってきてくれた、麦茶のペットボトルを僕に差し出した。
僕は一言礼を言って受け取り、口に流し込む。
「歩く散歩だけだと、リュートくんも体力落ちちゃうもんね」
「ああ、本当は檻なんかに入れないで、もっとのびのび飼ってやりたいんだけど、家族がいる手前、そうもいかなくてな」
鍵つきの檻に入れておかないと、僕がいない間に家族がリュートを保健所に連れて行きかねない。僕以外の家族にはまるで懐かないリュートは、僕同様家の嫌われ者だから、僕がいないと世話さえしてもらえない。

「ねえ、ケースケくん、少し休んだら、花壇を見ていかない？　もうすぐ春も終わりだから、咲いているうちに、ちょっと回りたいの」
シオリの提案を、僕はすぐに受け入れた。
――レンガで仕切られた花壇には、春が終わりかけ、名残の花が最後の輝きを見せていた。
「パンジーもガーベラも、もうすぐ散っちゃうね」
シオリはガーベラの花壇の前にしゃがんで、オレンジ色のガーベラの花弁を触った。
僕はこの半年、シオリから花のことを色々と教わった。花を愛でる余裕もなかった生活をしていた僕にとって、シオリが楽しそうに花の話をするのを聞いているのは、何とも心の暖まる時間だった。
リュートがそんなシオリに寄り添うように、ガーベラに花を近付けると、犬の鼻に花に香りはきついのか、ざっと後ずさった。僕はその姿を傍で見て、笑ってしまった。
「本当に君は、花が好きなんだな」
「うん、花を見ると、何だか幸せな気持ちになるでしょう。だから色んな花が咲く春は好きなんだ。秋の花が一番好きなんだけどね」
シオリは本当に幸せそうに微笑む。今時花をあげても喜ばない女の人も増えているのに。基本的に古風な女性なんだろう。例えば……」
僕は横に目を向ける。視線の先には紫陽花がまだ緑色ながら、小さな花びらを付け始めていた。
「紫陽花かぁ……紫陽花って、土壌が酸性だと、青い花になるんだよね。私、紫陽花を見ると、酸性雨とかでこの先、赤い花の紫陽花が絶滅するんじゃないかって、不安になるわ」
「確かに。やっぱり色が一色に決まって欲しくないよな」
「うん――あ」
ふと、シオリが何かを見つけたようだ。
僕はシオリの視線の先を見る。

そこには、支柱に支えられて弦を巻く朝顔が、水色や紫色の花弁をつけて、あでやかに咲いていた。
「朝顔か。もうこの時期に咲いているんだな」
僕もシオリも、走りの朝顔の前に歩み寄り、近くでその花を見つめる。
「――有名な俳句があるよね、朝顔って」
「朝顔に、つるべ取られてもらい水――」
「そう、それ」
シオリは僕の横で頷いた。
「でも、わかる気がしない？　こうやって綺麗に咲いていると、取ってしまうのが、もったいなくて、とても人が手を出していいものには思えなくなってくる……」
「……」
その俳句を口ずさんだ僕は、その小さな花弁を目にして、ふっと思考の紐がひとつ解けた。
井戸に絡まってしまった朝顔を、取ってしまうのが可哀想だから、隣の井戸に水を貰いにいく――
それは、多分僕がシオリに抱いていた感情と同じだ。
「シオリさん」
僕は朝顔に目をやりながら、シオリの名を呼ぶ。
「君は昨日、酔っている時、僕に触れるのが怖いって言っていた」
「え？」
「それが君の本心なのかはわからないけれど――僕も、君に触れるのが怖かった。君を拒むような態度に見えたこともあったかもしれない。それで君を何度も不安にさせてしまったと思う」
「……」
僕は目の前の朝顔の花弁に手を伸ばす。
「僕は――今までずっと、君のことを欲しいと思っても、何も出来なかった。この朝顔みたいに、君の事を僕のこの手で摘んでしまうのが可哀想だと思って、何も出来なかったんだと思う」

「……」

「君は正直で、素直で、とてもいい娘だ。それこそ花のような女の子だ。それに比べて僕は、この通りとんでもなくひねくれた男だ。僕が君に深く踏み込むことで、ひねくれた僕の影響を、君に与えたくなかった。君を僕みたいなひねくれた奴にしてしまうようで、怖くて触れることが出来なかった。今の君が僕のせいで変わってしまうことが怖かったんだ」

「――そっか」

シオリが頷いた。

「すまない。いくら大口叩いても、今の僕はこの有様だ。臆病者で、君ひとり幸せに出来やしない……」

僕は拳を握り締めた。

「もう、いいよ」

シオリが僕のウインドブレーカーの袖をきゅっと掴んだ。

「お互い様だもの。あなた一人のせいじゃない」

「……」

「それに、私、わかってたから。あなたが過去に受けた傷が相当深いことも、今もそれに苦しんでいたことも。あなたが自分を信じられない気持ちも、無理もないと思う。こうして話してくれただけでも、私は十分だよ。だから――自分をあまり追い込まないで。ね？」

「……」

君がそれで十分と言っても、僕はそれじゃ満足できない。

僕はもっと君とつながりあいたい。僕の手で、君を誰よりも幸せな気持ちにしてあげたい。

こんな僕を肯定してくれた君に、何とかして報いたいんだ。

それには、このままじゃ駄目なんだ。

このままじゃ……

沈黙。

「――シオリさん」

再び僕が、シオリの名を呼ぶ。

「僕――ユータ達とサッカーしに行ってきて、いいかな？」
唐突に僕はシオリに気持ちを吐露した。
「変えてみたいんだ。こんな弱気で臆病な自分を」

「――それは、二人と一緒に、オランダに行くって、事だよね」
シオリはしばし沈黙した後、僕にゆっくりと確認した。
「――ああ」
「――そっか」
「……」
ふう、とシオリが息を吐く。
「そっか、やっとその決心がついたんだね」
シオリが僕の前で、にこっと笑った。
「――あまり驚いていないんだな。突然言ったのに」
僕は少し逡巡する。
「だって、私初めからわかっていたから。あなたはこうしてひとつの場所に、ずっと留まれる人じゃない。いつかは外に向かって走っていく人だって」
「――どうして、そう思うんだ？」
僕は彼女の真意が知りたくて、疑問をぶつけてみる。
「あなたと一緒にいる以上、そのくらいの覚悟はしているわ」
そう言って、彼女は僕に、いたずらっぽく微笑んで見せる。
「――だって、あなたは臥龍――龍の化身なんでしょ？」
シオリは首を少し傾げて見せる。
「世間じゃ単なるあなたの通り名だけれど――私はそれは、あなたの本来の性質だと思っているわ。龍って、普段は水の底でじっと息を潜めて、時が来るまでは、さざ波ひとつ立てないんでしょう？でも、風が起これば立ちまち空に向かってどこまでも昇っていくんだよね。だから――あなたもきっと、時が来れば、いつかはこの静かな生活を捨ててでも立ち上がるって、何となく思っていたの。私自身、今のあなたには、何となく、その時勢の風が吹いていると思うし――」

「……」
シオリは僕に、にこっと微笑みかけた。
「それに、今まであなたは色んなものに邪魔されて、天に昇ろうとしても、昇れなかったんだもの。だからきっと、あなたも今の風に、建前はどうであれ、心は躍っているんじゃないかって」
「……」
彼女はこんなにも、僕のことを想ってくれる。彼女の言葉一つ一つに、半年間、ずっと僕を見ていてくれたこと——僕自身さえも気付いていなかった、僕の心の奥底の動きまで、しっかりと見てくれていたのだとわかった。
「——君の言う、時勢の風というやつとはちょっと違うかもしれないが」
僕はしゃがんだまま、早朝の澄んだ空を見上げる。
「僕は、今まで自分が誰かを幸せに出来る自信がなかった。むしろ不幸にしか出来ないと思っていた。だから、自分から行動を起こさなければ、誰かを幸せには出来ないかもしれないけれど、不幸にもしない——そんな考え方を無意識にしていたんだと思う」
「……」
「だけど、このままじゃユータとジュンイチは、大舞台で惨敗して、帰ってきてから沢山の人間に、国の恥を晒したとか、陰口を叩かれるんだ。ユータは今後のサッカー人生に、大きな傷を残すだろう——今の自分がどうであれ、やっぱり見過ごしてはおけないんだ」
「……」
シオリは無言のまま、小さく頷いた。
「今の僕に何が出来るかわからないが、あいつらがそれを承知で死地に挑むというのなら、僕も一緒に死んでやろうと思う……一筋縄ではいかない大舞台だけれど、せめて一緒に汚名をかぶってやるくらいのことはしてやれる」
そう言って一度朝顔の前から立ち上がり、シオリと正対した。
「でも、もし僕がその大舞台で、あいつらの力になることができた

ら――僕はあいつらのことを、本当の友と呼べそうな気がするんだ。今まで友達らしいことを、何もしてこなかったから、そんなことを言うのはおこがましいような気がして、言えなかったんだが……そんな友達がいのない自分を清算して、あいつらと本当の友達になれた自分を少し、好きになれそうな気がするんだ」

「……」

「もし、そうなることができたら、僕は僕の存在を認められる気がする。君とも、今よりももっと上手く向き合うことが出来ると思うんだ。今はまだ、君の心にも触れることにためらうけれど――そんな過去の自分をゴミ箱に捨てて、新しい自分になれそうな気がするんだ」

なんて抽象的な考えだろう。もし僕があいつらの力になれたとして、そうなった時、自分のことを本当に好きになれるのか、根拠にも乏しい。

こんな曖昧な理由で表舞台に出ることが、今までの僕には何となく気が引けていたけれど――

今は違う。

僕は、ユータやジュンイチのことを、友と呼びたいから。

そして、彼女のことを……

「――うん」

シオリは僕に、にっこり微笑んだ。

「きっと、二人も喜ぶよ。周りが何と言っても、きっといつかはわかってくれるよ」

「……」

目の前で、僕の言葉に賛同してくれる彼女の微笑が、本心からなのか、気丈に振舞う演技なのか、僕にはまだわからなかった。

「あの――すんなり賛同を得られたのは、本当にありがたいんだが」

僕は出鼻をくじかれた形なので、首を傾げながら訊く。

「その――寂しく、ないか？　また君を置いて、好き勝手槍に外へ行く僕を、少しは責めてくれていいんだが」

僕は訊いた。こんな質問をするのは、少し恥ずかしかった。
「もし君が望むなら――僕はどうすればいい？」
「……」
シオリは何か考えをめぐらせるように、早朝の青空を仰いだ。
そしてそれから、僕の隣に歩み寄って、僕の目の前にある朝顔の花に、手を伸ばした。
「あなたは――この朝顔に、ちょっと似てるよね」
唐突にシオリが言った。
「え？」
「ほら、朝顔って、花だけを摘んでしまうと、花のよさが出ないじゃない。こうして弦を巻いて、この姿で咲いているのが綺麗なんだよ。だから、朝顔はどんなに綺麗に咲いても、花瓶に入れて、その美しさを、誰かが独り占めすることは出来ないの」
「……」
「あなたの名前の桜もそうだけど――朝顔は、誰のためでもない。人に尽くさず、自分が咲きたいから咲く花なのよ」
「……」
確かに。朝顔は花瓶や鉢植えに生けてしまうのでは、よさが出ない。のびのびと弦を伸ばせる場所に咲いてこそ、美しさを放つ。
誰かが独り占めできない。誰のためでもなく咲く花、か……
「私は――今まで誰かに邪魔されて、日陰に追いやられていたあなたは、今はそんな風に咲いてほしい。狭い花瓶に入らないで、誰のためでもなく、自分のために輝いた瞬間を生きてほしい。きっとそうして輝くことで、誰かのことを照らすことも、出来ると思うから――だから私のことは気にしないで、頑張ってきて」
「……」
「――なんて、ちょっとクサかったかな。えへへ……」
「……」
照れ笑いを浮かべる彼女を見て、僕は彼女の言葉をもう一度噛み締める。

誰のためでもなく輝くことで、誰かを照らすこともできる、か……

きっと、本人は気付いていないだろうけれど……

彼女が言う光とは、きっと目の前にいる彼女がいつも放つ光、そのものなのだろう。

君は、舗道の日陰で、皆に踏まれ続け、木枯らしに吹き付けられていた、雑草のように生きていた僕の光——太陽になってくれた。

君の光は、誰に向けられたものでもない。意識して作り上げたものでもない。罪人も聖者も動物も路傍の花にも、全てに分け隔てなく降り注ぐ、優しい光だった。

君の優しさが、沢山の人を引き寄せる。

僕も間違いなくその一人だった。

「朝顔のように、か……」

僕はもう一度、目の前の朝顔に目をやった。

昔は花を見てもなんとも思わなかったが、今は、花を見ると、心が和む。

これも、誰のためでもなく、懸命に咲く花が見せる、命の輝きのためだろうか。

僕も、光を放てるかな——

その光で、大切な人の心を、照らすことができるだろうか——

「君のたとえは面白いよ」

僕は笑ってしまう。

「そして、君は大人だね。そういう考え方ができるなんて、僕なんかより、ずっと人間ができてる」

「……」

僕のその言葉に、シオリはしばらく沈黙した。

「全然、そんなことないんだよ」

そしてシオリは、力ないため息を吐く。

「私、本当はすごくわがままだよ。独占欲も強いし——最近自分のそういう部分が見えるようになって、何かすごく嫌……些細なことで不安にもなるし、面倒な女だよ」

「……」

「あなたに、今は自分のために生きてほしい、って、頭ではそう思っているつもりなんだけれどね――でも、本心からそう思えているか、正直わからない……私、あなたにどうしてほしいのか、そういうのを求めすぎなのかな。自分では気持ちがごちゃごちゃして、何も形にできないくせに……」

「……」

初めてシオリが、自分の中のエゴを僕に見せてくれた気がする。

当然だ。まだ彼女だって小さな女の子で。才媛とはいえ、僕と同じくまだ子供だ。

それを、僕に心配をかけさせまいと、無理をさせてしまった。それは、僕が彼女の心配も消し去れる程、彼女を光で包み込むことができなかったからなのだろう。

「ケースケくん」

シオリが僕の名を呼んだ。

「私、この半年、あなたと一緒にいられた時間は、とても楽しかった。幸せだった……このささやかな幸せが、いつまでも続いてほしいと思っていた。でも――あなたがこれから行く場所で活躍したら、きっとあなたの周りは今よりももっと騒がしくなるね……」

「……」

「そうなっても、こうして二人で穏やかに過ごせる時間は、続くのかな……」

「当たり前だろ」

僕は少し強い語勢で、彼女の不安を否定した。

「僕もそれを望んでいるし……それに、帰ってきて、過去と決別できたら、君としたいこと、伝えたいことが沢山あるんだから」

「……」

僕は黙り込むシオリの両肩を、手で軽く掴んで、シオリと正対した。

「僕――行くからには、もっと男を上げて帰ってくる。その時には、

きっと僕達は、今よりもっと深くつながりあえると思うから、それを楽しみに、待っていてくれないか？　僕、頑張るから。君がこの先、僕のことで不安にならないように、ちゃんとした男になれるように、頑張ってくるから」

僕はなんとも青臭い言葉を吐き続ける。

昔の僕は、こんな曖昧なことを言うのが大嫌いだった。きっとこんなことを言えといわれたら、虫唾が走ってしまうような男だった。

だが、今なら少しは言える。僕のことで不安になる彼女に、少しでも僕を信じてもらいたいから。

するとシオリは、自分の肩に乗せられた僕の手に、自分の手を当てて、えへへ、と、照れくさそうに微笑んだ。

「そんな――一人で頑張らないで。私にも、頑張らせてよ」

「……」

僕はシオリの肩から、手をはずす。

「片方だけが頑張って関係を維持するのは、きっと本当のつながりじゃないんだよね。私も頑張らなきゃいけないのよ。不安なんかに負けてちゃいけないんだわ」

「……」

彼女は、いつだって僕との未来を考えてくれている。その道を、二人で歩こうとしてくれる。

今までは、どちらかがもう片方の歩幅に合わせようと無理をする、そんな二人三脚のような歩みだったけれど。

きっと僕達も、何も言わなくても、自然と歩調が合うような、そんな二人になれるだろうか。

いや、きっとなれるだろう。今の気持ちを忘れない、二人であれば。

「ごめんね、こんなわがままな女で」

「いや……いいよ。君の気持ちが聞けて、嬉しかった」

「えへへ……」

シオリは自分の心情を吐露したことが、今更恥ずかしくなったの

か、力なく笑った。
「ケースケくん。私、待ってるから。だから、ひとつだけ、約束して」
シオリは僕の前で、人差し指を立てた。
「お願い、どうか怪我だけは気をつけて。怪我をしないで、私のところへ帰ってきてね」
「……」
そう、それだよ。
君はいつだって、自分のことよりも、誰かのことを気遣える優しさを持っている。
自分が寂しくても、それでも他人の幸せを先に願う、そんな真っ直ぐな人。
僕も君のようであれたらと、何度も思った。
「ああ、約束するよ」
僕は君のようになりたい。
君のような光で、僕もユータ達を照らせるように。
この半年、君から学んだこの心のぬくもりで、あいつらのことを照らせるように。
僕はこの日、心を決めた。

だが、この決断は、これから僕に、めくるめく栄光と、今後の人生を大きく狂わせる程の、激しい憎悪を与える引き金となる。
あの忘れえぬ、僕の高校最後の夏が、始まろうとしていた――

Retirement

「へえ、正答率７３％か」
僕は答案を見て感嘆の声を上げる。
「夏前にこれなら、頑張り次第で、マイさんの志望校合格は固いな」
僕は机を挟んで斜め前にのマイに、自分の持っていた答案を返す。
「それに比べて……」
僕はマイの隣に座っている、悲壮感たっぷりのジュンイチの顔に目をやる。
「……」
頭を抱えるジュンイチ。
「ごめんなさい、エンドウくん。本番さながらに、採点を辛くしたから」
僕の隣のシオリが謝る。もはや空元気を出す気にもなれないらしい。
「国語は８割超えてるんだけど、やっぱり数学ね」
「まあお前にしては数学の正答率３２％は善戦した方だ。正直２割切るかもと思っていたからな」
僕はジュンイチの答案に目をやる。
「３科目の総合正答率は、５１％か……得意科目で少しは挽回できるだろうが、こりゃ頑張らんとな」
「ちぇっ、全く……余裕のコメントしやがって」
呆れ半分でジュンイチは肩をすくめた。
「シオリさんは正答率９６％、国語は満点。そしてお前は、古文の単語問題で一問間違えただけの、正答率９９％――東大主席も射程圏内」
「本当、同じテストやったとは思えないわ。二人と受験勉強していると、こっちは冬頃には自信喪失しそうだわ」
マイもため息をつく。

僕達は、先日ユータの家に行く前に、書店で買ったセンター試験の過去問を、放課後の教室で、本番さながらに時間を計って解いてみたのだった。時間がかかるから、今日は英語、数学、国語（現古漢）だけだけど。情を挟まぬよう、僕とマイ、シオリとジュンイチがそれぞれ答案を交換して、ついさっき答え合わせが終わったところだった。

サッカー部は、一面しかグラウンドがなく、本来ならもう引退しているはずの僕達3年生がいつも独占しているのでは、後輩がいつまでもレベルアップしない。なので3年生は、週2回はこうして練習を休んでいる。半年前まで受験勉強に特化した高校の名残で、いきなりは変わらなかったのだ。

「――しかし、お前がマイさんと同じ大学に行くためには、荒療治が必要かな……」

僕は腕組みして、ジュンイチの呆けた顔を見る。

「うー――な、何か怖いんですけど？」

「来月の期末テスト、数学が50点切ったら、お前は国立受験か現役合格のどちらかを諦めろ」

僕はジュンイチにそう宣告した。

「マジかよ、50点とか……俺、中間ですら28点で、この学校来て初めて赤点回避だったんだぜ？　その倍じゃねぇか」

「それくらい言わないと、根性出ないだろ」

「……」

「安心しろ、それまで僕がみっちり勉強を見てやるから。昼も夜もずっと。赤勉よりも更にハードに鍛えてやるから」

「マジで？　しかし、昼も夜もは無理だろ」

「――今にわかるさ」

僕はふっと笑う。

――折節、もう誰もいなくなった教室の外の廊下から、上履きで床を蹴る特有の音が、どんどん近づいていた。

その音の主は、僕達のいる3年E組の教室の引き戸をがらりと勢

いよく開けた。
　引き戸の先に、今まで下級生に混じってサッカー部の練習に参加していたユータが、息を弾ませて立っていた。短パンの尻の部分が、泥に汚れている。
「ユータ、どうした、血相変えて」
　ジュンイチがユータのただならぬ様子に気付いて、椅子から立ち上がる。
　しかしユータははじめから僕の顔以外見ておらず、一直線に僕の許に足を進める。
「ケースケ、お前、選ばれたんだよ」
「……」
「俺達の世代代表の、最終選考合宿のメンバーに！　俺とジュンと一緒に！」
　その言葉と同時に、いつもはシニカルなユータが、珍しく感情を爆発させた。
「マジで？」
　ジュンイチも驚いたように、目を丸くして、僕を見た。
「お前が辞退を表明してからも、何度もメンバー発表はあったけど、今までは一度も名前がなかった。だから、今回載ったのは、きっとお前が代表入りを承諾したからなのかと思って――飛んで来ちまった」
「……」
「お前――出る気になったのか？」
　この時の僕は、必死に笑いをこらえていた。
　だけど……
「――ふ、ふふ、ふふふふ……」
　僕が笑い出す前に、シオリが笑い出してしまっていた。
「シオリ？」
　前にいるマイが首を傾げる。
「――ごめんなさい……何か、こらえきれなくなっちゃって」

「……」

実は、僕はシオリにオランダに行くと告げたその日のうちに、ＪＦＡ（日本サッカー協会）に、今後の代表受託を伝えており、今回の選出が3日前に決定していたのだ。

だけど、メンバー発表を見て、二人を驚かせたいからと言って、ユータたちには言わなかった。シオリには、メンバーに入ったことは伝えたのだが、二人には黙っておくように口止めしておいたのだ。

「シオリさん――知ってたのか？」

ユータがふてくされたように訊く。

「う、うん――でも、二人の驚いた顔が何か想像以上で……」

シオリはまだ笑っている。

「――ま、そういうことだ」

僕は切り出すタイミングを、シオリのために完全に失ったが、強引に場をまとめた。

「何が出来るかわからんが、僕もお前達と一緒に行ってやる」

それから僕はジュンイチの方を見る。

「これからしばらく、お前とは寝食を共にする身だ。サッカーのついでに勉強も見てやれる――どうだ、一石二鳥だろ」

「マジかよ。代表のハードな練習の後に勉強までやらせる気かよ……」

ジュンイチは悪夢を嘆くように天を仰いだ。

「うおおおおおおおお！」

しかしそんなジュンイチを横目に、ユータは放課後の静かな後者中に響き渡るような、歓喜の雄叫びを上げた。

「そうか、そうか！　嬉しいぜ！　お前がいれば、負け戦だと思ってた大会も、なかなか面白くなりそうだぜ！」

――その日の夜、インターネットの大手掲示板サイトでは、僕の話題でもちきりになった。スポーツニュースは全てこの選考を報道

し、沢山の著名人のコメントが放送された。某プロバイダの検索キーワードランキングでは、僕は2ヶ月ぶりに1位に返り咲いた。

僕もメンバーを見たが、17歳の僕はメンバーで最年少。ほかに選ばれたメンバーは僕とジュンイチを除けば、全員がJ1J2問わず、何らかの形でのプロだった。

「予選にも出てないくせに、本戦だけ出る気かよ」

「結局あっという間に建前をひっくり返したな。自分を売り込む大舞台じゃなきゃ出ないつもりだったのさ」

「何でもいいじゃん。あの世代、どうせ勝ちあがれないんだし、サクライが入って何かが変わるなら大歓迎」

「連盟もヤキが回ったな。勝ちあがれないからって、ヤケクソ選考かよ」

そのほとんどが、今まで何もしてこなかった僕に対しての、否定的な意見ばかりだったけれど――

「――はい。はい、わかりました。明後日に大阪に現地集合ですね。わかりました。それでは」

僕は電話を切った。

その日の夜のうちに、僕はJFAからの、今後の日程や、代表における簡単なガイダンスを電話で受けた。

二日後に僕は、ユータ達と大阪へ飛び、そこで2週間の合宿に入る。今回選ばれた選手は24人、うち18名が本大会メンバーに登録される。合宿の間、紅白戦の他に、ナショナルチームを招いたエキシビジョンマッチを2試合行い、それで選考をするということらしい。

本大会は、32チームをA～Hの8グループ、各4チームに分かれて勝ち点を競う、ワールドカップと同じ形式だ。各グループの上位2チームが決勝トーナメントに進むことができる。日本はグループEで、フランス、チェコ、メキシコという強豪だらけの死のグループに組み込まれていた。今大会、日本が敗戦濃厚といわれている理由は、この3国と同一グループに入ってしまったという側面が大

きい。

だが、現状のところ僕は一番下っ端、本大会の心配などは微塵もしていなかった。

僕が一番気になったのは、日当や勝利給、ボーナスの説明だった。今回は本大会だから、勝ち残ればそれ相応のボーナスが出るらしい。日当も一日1万円以上出る。プロの選手からしたら、雀の涙程の給与だが、僕には十分過ぎる程である。

リアルな話をすれば、最終的に18人に残ることができたら、僕はその金で残りの高校生活を悠々自適に過ごせるし、その金で予備校の夏期講習、冬期講習に行ってもお釣りがくる。もしグループリーグを突破した日には、ボーナスで国立大学4年分の学費も賄えてしまうし、当面の一人暮らしの資金もできてしまう。

金目当てで代表になるわけではないけれど、その点には魅力を感じざるを得なかった。

「――さて、荷造りでもするかな」

僕は自分の部屋のベッドから立ち上がり、自宅の電話の子機をリビングに返しに行く。JFAからの電話は自宅の電話にかかってきたのだ。

部屋を出て、リビングの扉を開ける。

そこには、既に夕食を取り終わった親父、母親、祖母、妹が雁首揃えて、テレビもつけずにそこで待っていた。リビングに入ってきた僕の顔をうかがう。

僕は歯牙にもかけずに、子機をリビングの定位置に戻して、また部屋に戻ろうとする。

「待ちなさいよ」

しかし、踵を返した瞬間、僕は母親に呼び止められる。

僕は足を止める。

「あんた――日本代表に選ばれたんですってね」

「それが何か？」

シオリに救われた夜以来、僕は家族とはこの通りだ。もはや相手

にもしていない。自然と態度もつっけんどんになるが、まあ、もうその程度の関係ということ。

「あんた、親に許可もなしに、勝手に決めてるんじゃないわよ」

「あなた方の許可を得る理由がない」

僕は言った。

「ガキ、思い上がるなよ」

親父が酒に酔った目をぎらつかせた。

「お前がオランダなんかに行って、目も当てられねぇ惨敗したら、こっちまで大恥かくんだ。独りよがりで親に手間取らせんな。でけぇ口叩くんじゃねぇよ」

「……」

この時の僕は、何を思っていたのだろう。

代表の給与を聞いて、気持ちが大きくなっていたのか。それとも、こいつらとのやり取りに、永久にカタをつけてやろうと思ったのか。大舞台で戦う以上、退路を断つつもりで、自分を追い込んだのか。

わからない。だが、この言葉が、結局は全ての引き金であったのかもしれない。

「そうですか。じゃあ、僕の親であることをやめればいいんじゃないですか？」

「な？」

「いや、違うな――僕の親であることを、やめてくれませんか？だな。僕からも頼むよ」

Start

「あんた――何様のつもり！」
母親の金切り声。相変わらず不快な響きで、耳が痛い。
「――別にそんな反応することもないと思いますよ。元々高校まではこの家に置いてやるが、卒業したらすぐに出て行けと言っていたのはそっちで、こっちはそのつもりでバイトで金貯めてたわけだし――」
まあ、予定は少し狂ったけどね。
「僕と絶縁すると前から言っていたのはあなた方でしょう？　そっちとしても、予定が早まって、願ったり叶ったりだと思いますけれど」
「……」
頭の弱い母親は、押し黙ってしまう。
その間に僕は、手近にあったメモ用紙を2枚引っぺがし、親父と母親の前に置いた。
「取りあえずそれに、絶縁状を書いてください」
その言葉に、親父が激昂して立ち上がった。
「テメエ！　調子に乗るんじゃねぇぞ！」
僕ににじり寄り、僕の胸倉を掴んでくる。これだけの腕力があれば、敵の胸倉を掴む下策でも、相手を確実に制することができる分、有利にもなるかな。
「大体さっきから何だその口の聞き方は？　他人行儀を装いやがって」
「……」
僕は親父の顔を、暗鬱とした目で見つめた。
「その目をやめろ！」
「……」
「その目をやめろって言ってるんだよ！」

親父の鉄拳が、僕の顔を捉えた。
「やめておいた方がいいですよ」
僕の怜悧な言葉で、沸き立った親父は一瞬動きを止める。
「明日から僕は一層マスコミに追われる身です。明日は学校で記者会見もありますし。顔に傷をつけたら、あなた方の本性が疑われるでしょうよ」
「くっ……」
その言葉に、親父はこぶしの下ろし場所がわからないといったように、拳を振り上げたまま、体を怒りに痙攣させた。
「……」
僕はため息をつく。
「僕のことを、他人行儀と言いましたね。でもしょうがないでしょう」
僕は自分の胸倉にかかる親父のヤツデみたいな手に、自分の手を掛ける。
「息子の胸倉を当然の如く掴むこの状況を、家族と言えますか？　息子が大舞台に望むのに、活躍を祈らず、自分の恥を心配するさっきのあなた方の言動が、家族の言動ですか？」
「……」
「僕とあなた方の間に、家族らしい部分がどこにあります？　あなた方は僕をどれだけ知ってますか？　僕の趣味、特技、食べ物の好物、得意科目、サッカーでの僕のポジション、どれかひとつでも言えます？　今となっては僕の誕生日さえ覚えていないでしょう」
僕は親父の影から、座っている祖母や妹の顔も一瞥する。
「少なくとも僕はそうだ。あなた方のことを何も知らない。誕生日すら、もう忘れた。これから知ろうとも思いません。あなた方もそうでしょう。そういうのを、家族とは呼ばないでしょう」
「……」
「僕とあなた達は、もう家族じゃないんだよ」
「……」

沈黙。

その間に僕は、胸にかかる親父の手を振りほどいた。親父ももう、拳の所在がわからず、力が抜けていたので、脱出は容易だった。

「ひとつだけ宣言しておく」

僕は掴まれていた部分を手でさすりながら、言った。

「今後は流動的だが、もし僕が今回の大会で勝ち進んだら、その程度次第で、帰って来次第、即アパートを探すから」

もう僕は心を決めていた。

金目当てで今度の大会に出るわけではないけれど、もし自分に金が入ったら、すぐにでもこの家を出て行ってやる。

「だが生憎、未成年じゃ家は借りられないんでな。契約は全部僕がやるから、あなた方には契約書に同意のサインをしてもらう。それで僕は二度とこの家に帰らない。あなた方との関係も永久に終わりだ」

「……」

「遅かれ早かれあなた方と僕の関係は、そのうち完全に断絶するんだ。できれば素直にサインをしていただけるとありがたいな……」

「駄目よ！」

母親が急に立ち上がった。

「一人暮らしなんて絶対認めない！」

「そうよ、あんたはここにずっといるの」

「ケーちゃん、私を置いてどこかにいくのかい？」

母に続き、妹、祖母も反対する。

「絶対に許さん」

目の前の親父までも反対の意を表明した。

「お前を一人にして、万事無事に済むとは思えないんでな。一人にさせて、何か問題でも起こされたら困る」

「あのさ――この3年間、僕が生活面で何かトラブルを起こしたことがあったか？　あなた方に尻拭いをさせたことが一度でもあったか？」

「うるせぇ！」
僕の論破を、親父は得意の強引な手法でごまかした。
「とにかく認められんものは認められん！」
「……」
やれやれ、こいつら、この前まで僕を追い出したがっていたんじゃないのかよ。この半年、こいつらは僕がいることで、今までの比にならないほど、世間体を気にしなければならなくて、疲れきっているはずなのに。
僕を追い出して、知らぬ存ぜぬの生活になった方が、こいつらとしても気楽だと思うけれどね。今更世間体を守るメリットなんて、あるのかな……
「――まあいいや。現状は大会の結果で変動する、不確かな未来だし、取りあえず話だけで」
こうなるともう話は平行線を辿ることは目に見えていたので、僕は早々にその舞台から降りた。明日は記者会見もあるし、色々ごたごたする前に、合宿のための荷造りもしたい。
「取りあえず大会が終わったら、また話をするから」
僕はそう言い残して、踵を返す。
「待てよ」
親父がそんな僕を呼び止める。
「テメエ、俺達を馬鹿にするのもいい加減にしろよ。有名になった途端、こっちが手出しできねえと思って付け上がりやがって」
「……」
僕はその言葉を聞いて、笑ってしまった。どうやらこの半年の僕の構成は、自分のネームバリューが僕に自信を与えたからだと思っていたらしい。
「何がおかしい！」
僕の笑う様に、気分を害した親父は、僕を怒鳴りつける。
「勘違いするなよ。僕は今の世間の地位なんて、何とも思っちゃいない」

そう言ってから僕は家族の前で、初めてにっこりと笑った。
「ただ――僕がお前達に日陰に追いやられても、何度でも、何度でも日向に植え直してくれる――そんな人に、出会えたからさ」
それだけを言い残して、僕はリビングを後にした。

――後になって思えば、僕はこの時、話し合いを継続すべきだった。早々に降りるべきじゃなかった。徒労に終わっても、もっと追求すべきだったのだ。
もうこの時、全ては影で動いていたのだ。この時点でそれを潰すことができれば、その後の悲劇に繋がることもなかったのかも知れない。
何故――何故この時、気付くことができなかったのだろう。

翌日の埼玉高校では、僕、ユータ、ジュンイチの3人が、最終選考のメンバーに選ばれたことへの記者会見が、視聴覚室で行われた。
報道陣の数はものすごかった。全国大会で準優勝をした後、これからの進路を聞かれた時よりもすごい。おまけに校外に待ち構えるファンの数も過去最多を記録し、埼玉高校は、臨時雇いのガードマンを増員、更に再び機動隊まで導入して、混乱の鎮圧を図った。
何故ここまですごい騒ぎになってしまったかというと、この記者会見と並行して、ＪＦＡは僕の日本代表ユニフォームの初お披露目をしたからだった。この世代で一番人気のある、僕達3人の写真を撮影し、今後の応援キャンペーンの広告塔にしようというわけだ。
校外のファンも、待ち望んだ僕の日本代表ユニフォーム姿を見に来るため、または写真撮影して、それを無断で転売するため――目的はそんなところだった。
ユニフォームに着替えた僕が視聴覚室に入場すると、目がおかしくなりそうなほどのフラッシュを焚かれ、僕は目をしばたいた。

僕の合宿での背番号は２０だった。ユータが１１、ジュンイチが１９だった。

くしくもこの背番号は、高１の初めての大会で、３人が背負った背番号と同じだった。あの時１年生でベンチ入りを果たしたのは、僕達３人だけで、既に１年でレギュラーが確定していたユータは１１番、残りの僕とジュンイチは、先輩の顔を立てて、一番後ろの番号をつけた。初心者だった僕は、どん尻の２０番だ。

この大会で僕とジュンイチは、先発起用が一度もなかったが、スーパーサブとして大活躍した。その次の大会からは、ジュンイチは６番、僕は１０番を獲得した。いわばこの番号は、プロを相手にアマチュアが生き残りを目指す下克上に挑む僕とジュンイチにとって、ゲンのいい番号であった。

記者会見が始まる。３人いるものの、ほとんどの質問は、沈黙を破っての初選出と、話題に事欠かない僕に向けられた。

「何故今まで代表を辞退し続けていたサクライ選手が、今になって出場を決意したのでしょうか」

「それは私の私的な部分があまりにも大きいので、この場で具体的な理由を述べることはできません」

僕はこの時点で、自分の大義名分が万人に受け入れられないことを知っていた。

「ただ、今まで私は、サッカーでプロになるなんていうことは考えたこともありませんでしたし、今も沢山のチームからオファーをいただいてはいますが、まだ迷っています。そんな浮ついた心でプロや代表のピッチに立つことが、何となくファンの方々に対して後ろめたい気持ちでいました。ですから、心の整理がつくまでは、こんな自分が表舞台に立つべきではないと考え、代表を辞退してきました」

「それでは、今回の選出を受けるに当たって、もう心は定まったということでしょうか」

「どうでしょうか。正直今でもこのユニフォームを着て、国の威信

とかを賭けてサッカーをするという感覚はありません。多分私はそういう意識で戦うことはできないでしょう」

「……」

「ですが、この数ヶ月、色々考えたのですが、結局私にできることは、勝ちを目指してサッカーをやることと、サッカーを楽しむこと、この二つしかないんだという結論に至りました。それでもいいのなら、という条件付きで、今回選出させていただきました。まだ場違いな思いも拭えませんが、一生懸命頑張りますので、よろしくお願い致します」

「な、なるほど。では、大会の目標は？」

「目標ですか……そうですね。まずは大輪の花を咲かせられるように、頑張りますよ。真夏の朝顔のようにね」

そんな受け答えをして、記者会見は終了した。

教室にユニフォーム姿で戻ると、授業を中断して、学校のテレビでニュース生中継されていたテレビで会見を見ていたクラスメイトが、僕達のユニフォーム姿に沸き立った。

「わぁ、サクライくん、似合うじゃん」

「でも番号がなぁ、やっぱりサクライくんは１０番が似合うよ」

皆が僕達を取り囲む。

「しかし、お前にしては珍しい、失言連発の会見だったな」

ユータが心配そうに言った。

「この時期に、あんなお気楽な発言をしたら、きっと非難ごうごうだぞ」

「いいんだよ、別に」

僕は笑ってやる。

「それが狙いだからね」

「はぁ？」

「まあ、お前に考えがあるなら、いいさ。しかし最後の意気込み、ありゃなんだよ」

ジュンイチも苦笑いを浮かべた。
「咲き誇るにしても、真夏の朝顔って――どうせなら向日葵とか、景気のいい花を言えよ」
「いいんだよ、朝顔で」
僕は教室の隅で、遠慮がちにしているシオリを横目で窺った。シオリも呆れたような苦笑いを浮かべていた。
――ユータの予想通り、僕の記者会見での発言は、インターネットではすごぶる評判が悪かった。
だが、今はこれでいい。まずはここからだ。

Bullet－train

「ふあぁ――しかし、大阪に現地集合はないよなぁ」
ジュンイチは大欠伸をしながら、スーツのネクタイを緩める。
「そう言うな、北海道や九州から来る奴もいるんだ。大宮までは来るまでスムーズに行けたんだし、よかっただろ」
ユータは駅弁を頬張りながら言う。
「だけど、そういう連中は前日からもう大阪にいるんだろ？　俺達は学校あるから当日に現地入りだぜ。今日から練習もあるってのに」
今僕達3人は、新幹線で大阪に向かっている。3人ともスーツを着ての移動だ。ボックス席に座って、駅弁とお茶の朝食を摂っているところだ。
ユータの母が車を出して、僕達3人をそれぞれ拾ってくれて、新幹線の出る大宮駅まで送ってくれて、今はその車中。時間はまだ朝の7時半だった。
車に乗っている間、ユータの母は僕に何度もお礼を言っていた。ユータは何に対して礼を言っているのかわかっていないようだったけれど。
「ケースケ、背が伸びたから、そのスーツがぴったりになったな」
「そうそう、半年前そのスーツ着てた時は、だぼだぼで変だったけど、今そのスーツ姿なら、紳士服のＣＭに出られるぜ」
「……」
二人がそう声をかけてくれたが、僕は頬杖を突いて、窓の外を高速で流れる景色を見ていた。
「何だ、シオリさんのことでも考えてるのか」
ユータが言った。
「お前達、家近いんだろ？　朝、会ってきたのか？」
「――ああ」
僕はしぶしぶ返事をする。

「何か話せたか？」
「いや――といっても昨日は結構夜遅くまで電話してたし、リュートを彼女の家に預けるために、どたばたしてたから」
「夜遅くまで電話か。恋する二人のしばしの別れ――センチメンタルだねぇ」
ジュンイチは笑った。
「俺のところなんか、頑張って来い、だけだぜ？　大阪じゃ、電話しようと思えばいつでもできるし、ってよ」
「そりゃマイさんなりの激励だろ。寂しいとか言うのは、メンバーに残って、オランダに行くことが決まってからにしろ、ってな」
「やれやれ……俺はこの合宿、地獄なんだぜ。ケースケの数学地獄メニューもあるしな。少しは優しい言葉も欲しかったぜ」
ジュンイチは自分の運命を笑い飛ばして見せる。
「お前より、俺はケースケの方が心配だよ」
ユータはそんなジュンイチを尻目に、僕の顔を窺う。
「良くも悪くも、お前は世間から注目されちまってる。これで俺達が負けたら、お前が矢面に立たされる可能性はかなり高くなったしな」
「……」
「今までしつこく誘ってた俺が言うのもなんだが、お前の今の状況には、申し訳なく思うよ」
「……」
申し訳なく思われることもない。僕は元々、死地に赴くこいつらのことが見ていられなかったから、この大会の出場を決意したのだ。最初からこいつらに放たれる矢の盾になるくらいのつもりでここに来ている。
記者会見でわざとファンの怒りを買っておいたのもそのためだ。最悪の場合、悪者は僕ひとりでいい。
まあ、あの記者会見の発言には、もうひとつの目的があるんだけどね――

「しかし、お前とこうしてどこかへ遠出するのも初めてだよな」
ユータが言った。
「あぁ、そうか。お前、修学旅行もバックレてたもんな」
「……」
埼玉高校は、少し前まで受験勉強最優先の進学校で、3年間に1度のイベントは、大体1年生時に集中している。
修学旅行も1年生の秋にあったのだが、僕は学年で唯一不参加だった。文化祭や体育祭ならともかく、金の出て行くだけのイベントに興じるだけの余裕が、精神的にも金銭的にもなかったからだ。一人自宅待機となった僕は、コンビニのバイトに、日雇いの肉体労働のアルバイトをしていた。
「修学旅行の旅館で、結構お前のこと、話題になってたんだぜ。今だから言えるが、あの時クラスの女子から、お前と付き合うために、協力してって、頼まれたりもした」
「え？」
「そうそう、シオリさんの友達の娘でな。シオリさんも一緒に頼みに来たから、何となく俺達も情にほだされて協力したが、正直あの時点で結果は見えていた。案の定お前はその娘を振った」
「しかしシオリさん、あの時はお前と友達の恋の協力をする立場だったんだが、今じゃこうしてお前といるわけで――あの時はお前のこと、好きじゃなかったのかな」
「……」
そういえば、そんなことがあった気がする。修学旅行から皆が帰ってきた次の日当たりから、やたら皆で弁当を食べようとか、ユータ達が誘ってきていた気がする。
「ま、そんな過去を振り返っても仕方ないが――正直俺達は、お前のいない修学旅行が物足りなかったからな。今から18人に生き残るサバイバルレースがあって、その後に強大な敵と戦う、そんな戦場へ赴く車中で不謹慎かも知れんが、俺は何だか、お前と修学旅行に改めて行けるような気分で、何か嬉しいよ」

ユータが駅弁を脇に置いて、お茶を飲んだ。
「……」
本当に、僕は最初から、友達がいのない奴だったな。
自分のことを他人がどう思っているかなんて眼中になく、ただただ自分のためだけに生きていた。そのせいで他人の心を踏みにじっても、それに気付くことさえなかった。
この半年は、そんな自分の反省と後悔に満ち溢れていたと思う。そんな気持ちが、僕をいつまでもその場にとどめてしまった。こんな友達がいのない自分が、こいつらを友と呼んでいいのかと。
「――ああ、そうだ」
僕は自分の鞄から、二つの小さな、お年玉を入れるくらいの白い封筒を取り出して、二人に渡した。
「シオリさんが、二人に、って」
それを聞いて、二人はいそいそと袋を開けると、その中にはフェルトで作られた、必勝祈願のお守りと、赤、青、緑の三色で編みこまれたミサンガが入っていた。
「おぉ、可愛いな。このお守り、俺達の顔の刺繍が入ってるじゃん」
ユータはいたくお気に入りのようだ。
「このミサンガ、3色だろ。3人で力を合わせれば、きっとすごい力が出るからってさ」
「へえ、まるで毛利元就の三本の矢だな」
ジュンイチはそれを聞いて、スーツの袖をまくり、早速ミサンガを手首につける。
「お前も貰ったのか？」
ジュンイチはミサンガを巻きながら、ニヤニヤして僕に訊いてくる。
「――ああ」
僕はそう言って、スーツの袖をまくって、右手に結ばれたミサンガを見せてから、胸ポケットに入れておいたお守りを出した。
「ふーん――なんかお前のお守りだけ、妙に凝った作りのような…

…」

「うんうん、お前の顔の刺繍も、ちょっと美化が入っているような……」

「気のせいだろ」

僕は二人の詮索をかわす。

「しかし、健気だねぇ……あの娘、絶対にお前に早く帰ってきて欲しいと思っていただろうに、こうして勝ち進むことを祈るお守りなんか作っちゃって。いじらしいぜ」

ユータが自分のお守りを天井にかざしながら言う。

「一体どんな気持ちだったのかな。シオリさんがこのお守りを作ってた時は」

「……」

僕は、受験勉強の合間、一人夜遅くまで刺繍を編んでいたシオリの姿を想像する。

それを考えると、何だか少し胸の奥が苦しくなった。

この半年、彼女の笑顔に救われっぱなしだった。

才媛なのに、いつだって謙虚で、目の前のことに一生懸命で。

彼女の歩く道は、いつだって美しかった。歩みは遅いけれど、彼女の歩いた道は土がよく馴らされて、花が咲き誇っているようだと思った。

一本道を全力疾走してはいても、僕の通った道には草一本生えちゃいない。そんな自分の道を振り返ったら、すぐ隣を歩いていた、彼女の道の美しさが見えた。僕はその時、一瞬で彼女に憧れてしまった。

思いがけず、僕がこうして世間で騒がれて、有名になって、シオリには気苦労ばかりかけているけれど。

それは違うんだ。

相手を高嶺の花だと思っているのは、むしろ僕の方なんだよ――

そんな君の健気さ、一生懸命さが、時に胸に痛い。

君が眩し過ぎて、日陰にいた僕は、君の眩しさに、顔をろくに見

ることも出来ない。触れることも出来ない。
そんな思いが生じさせる誤解を背負ったまま、二人ボタンのかけ違いみたいなすれ違いをし続けてしまった。
「ユータ、ジュンイチ」
僕は二人の名を呼んだ。
「僕は、この大会、全力を尽くすよ」
そう言って、自分のミサンガの巻かれた右手で拳を握り、前に差し出した。
「この先、脱落することもあるかもしれないが、それでもこれから合流するチームに、爪痕くらいは残してみせる――全ては、明日につなげるために」
まだ、この二人を友と呼ぶには早すぎるけれど、これくらいなら言える。
もう過去を振り返ってばかりの今日は終わりだ。
これからの僕は、明日を生きようと思う。
今から僕の体も心も、全ては明日のため――
こいつらと繋ぐ友情、そして、彼女と紡ぐ愛情――
今まで先に進めなかった分を、一気に取り返してやる。
「乗ったぜ」
ジュンイチが僕の拳の上に、ミサンガを巻いた自分の右手を置いた。
「ふ」
ユータがその上に、更に拳を乗せる。
「これから挑むのは、負け戦だ。俺達でそれを、ひっくり返してやろうぜ」
ジュンイチの号令に、僕とジュンイチは、おう、と返事した。

新大阪駅に下りると、ユータははじめに指示されていたホテルまでの地図を取り出し、僕達を先導した。

ホテルに着き、フロントに問い合わせると、荷物を預けた後、大広間へ行くように指示をされた。

僕たちは大広間へ向かう。そこにはもう3人掛けの長机が8卓並べられていて、既に僕達以外の代表候補はそこに座っていた。監督、コーチがその前にあるステージに上り、他のスタッフは机の後ろで全員立ち見のようだ。どうやら学校がある僕達以外は皆前日から大阪入りしていたらしい。

「すいません、遅れました。ヒラヤマ、エンドウ、サクライ、ただいま到着っす」

先頭を歩くユータがそう言って、いそいそと僕達も中に混ざる。

その中を歩く僕は、この時、明らかに自分に向けられる視線が少なくないことに気付いていた。それもほとんどが好意的ではない、敵意のような視線だ。

「よし、これで全員揃ったな」

――監督の挨拶が数分あった以外は、ほとんどがあらかじめ電話で聞かされていた今後の予定の再確認で、初のミーティングは終了。時間にしたら20分程度のものだったと思う。

「じゃあ最後に、初選出選手の顔合わせと行くか。サクライ」

壇上の監督が僕を呼んだ。

「この合宿での代表初選出はお前だけだ。どうだ、何か挨拶でもするか」

「……」

きっと監督は、僕がこの代表最年少であることと、世間から騒がれ続けた男ということで、気を使ってそういう提案をしてくれたのだろう。

しかし、それを歓迎するムードではないことは、僕は肌では何となく感じ取っていた。

だけど……

僕は黙って席を立ち、壇上に立って、マイクを取った。

「サクライ・ケースケです。皆さん、初めまして。プロじゃないん

で、知らない人もいるかもしれませんが、ポジションはトップ下とボランチが主で、フォワードもできます。これから2週間、練習をご一緒させていただきますので、どうぞ宜しくお願い致します」

そんな挨拶で手短にまとめ、僕はぺこりと会釈する。

「……」

しかし、それに対して反応する選手は一人もいない。スタッフがおざなりに拍手をしてくれた後に、何となく手を叩いた人が数人いるだけだ。

壇上を降りながら、僕は確信した。どうやら完全に僕はこの代表でアウェー。全く歓迎されていない存在だということ。

「はぁ、スーツは疲れるぜ」

部屋に戻ると、ジュンイチは早速練習着に着替え始めた。

今は昼の11時、2時から近くの練習場で練習があるから、1時半にフロントに集合。それまでは自由時間だそうだ。

「……」

僕はジュンイチを尻目にツインベッドの片方を陣取り、そこに寝転がった。レースカーテン越しの窓から、大阪の摩天楼が見える。なかなかいい待遇だ。こんな部屋にあと2週間は滞在か。

少しすると、ジュンイチと同じく着替えを済ませたユータが僕達の部屋にやってきた。

「よぉ、よかったら食堂に昼飯用意されてるって言うから、ちょっと早いが軽く食べてこうぜ。遅くに食べると腹痛くなるし、食わないのもすぐバテるしな」

「そうだな。軽くなんかエネルギー入れとこうか。ケースケ」

ジュンイチに言われて、僕はベッドから体を起こす。

「何だまだスーツなのか。着替えろよ、待っててやるから」

ユータに言われて、僕も着替え始める。

「――しかし、やっぱりお前、先輩の誰にも歓迎されてなかったな」

ユータがワイシャツを脱いだ僕に語りかける。
「やっぱりお前のこの前の記者会見が尾を引いてるのかな？　あのお気楽発言が、気に障ったのか、それとも、女に人気のあるお前への妬みか……」
「その経緯に興味はないさ」
僕は上半身裸のまま言った。
「とりあえずあの反応ならいい。今のところ予定通りだ」
「はぁ？」
「さて、後はもう一段階あるかな……それで上手くいけばいいんだが」
「何言っているんだ、お前」
ジュンイチが僕の発言に首を傾げた時。
こんこん、と、僕達の部屋のドアをノックする音が聞こえた。
「あ、はーい」
ジュンイチがそれを出迎えに行くと、ロックを解除する、ガチャ、という音と同時に、沢山の人間が部屋の中になだれ込んでくる足音が聞こえた。
着替え中の僕の前に、１０人近い、同じ日本代表のウインドブレーカーを着た、若い男達が壁を作った。
「ようこそ、天才少年、サクライ・ケースケくん」
一番先頭にいる、リーダー格のような男が口を開いた。
僕は横のユータの方を見る。
「ディフェンダーのマスダさん。このチームのキャプテンだ」
ユータが説明した。

Ready

「……」

僕は手に持っていた練習着を一度ベッドに放り投げて、上半身裸のまま、やってきたチームメイトと対峙した。

「こんな格好なんで、できたら少し待っていていただきたいんですけど。それとも、緊急の連絡ですか？」

僕はとりあえず笑顔を作る。

「まあそうだな。こういうことは初日にはっきりさせておいた方がいいと思ってな」

先頭のマスダが僕を睨んだ。

「はっきり言おう。正直我々は、君をこのチームに歓迎していない」

「……」

いきなりヘビーな内容だった。

「君はこのチームに長いこと召集を受けていたのに、それを蹴り続けてきた。だが、この代表に入りたくて、今まで血眼で練習してきた人間が、どれだけいたと思う？　俺達も、ここに立つまでに、何人も落選した選手を見てきた。君の行為はそんな選手達に対する最大の侮辱だ」

「……」

「そんな君が今更この代表チームに来た。しかも君の記者会見での言葉――あれは何だ？　国の威信を賭ける自覚はない？　サッカーを楽しむ？　はっきり言って、そんな気楽な立場でここにいられたら迷惑だ。いいか、俺達はフランス、チェコ、メキシコって強豪チームに何とか勝たないと、国に帰れないんだぞ。君みたいに気楽な立場でサッカーをしてるんじゃないんだ！」

「……」

僕はため息をつく。

「なるほど、お話はちゃんと拝聴しました。で、それがこのチーム

の大体の総意というわけですね」
　僕は訊き返す。
「――くっくっく……」
「あ？」
「あはははははははは……」
　僕は思わず笑い出した。
「な、ケースケ！」
　ユータが焦り出す。空気を読めって、と顔が僕に語っていた。
「何がおかしいんだ！」
　マスダは激昂する。
「すみません――ですが、まさかこんなに早く、僕の予定通りにことが進むと思わなくて」
「……」
「でもよかった。皆さんの考えていることは、僕の想像通りですね。じゃあ、多分このチームの運命も、もう決まりでしょう」
　僕は微笑む。
「残念ですが、このチームは僕がいようといまいと、オランダで負けますよ。それもこっぴどくね」
「何だと！」
「ふざけんな！」
「新入りがえらそうに！」
　マスダの後ろにいる連中が、口々に文句を言う。
「まあまあ先輩方……」
「すいません、こいつ、空気は読まない主義なんで……」
　ユータとジュンイチが仲裁に入る。
「――運は天にあり！」
　僕はよく通る声でそう言う。
　その声に圧され、騒ぎは一瞬硬直した。
「鎧は胸にあり、手柄は足にあり――何時も敵を我が掌中に入れて合戦すべし。死なんと戦えば生き、生きんと戦えば必ず死するもの

なり。運は一定にあらず、時の次第と思うは間違いなり。武士ならば、我進むべき道はこれ他無しと、自らに運を定めるべし！」

「……」

その僕の語り口調に、部屋の全ての人間が硬直していた。

「これ、戦う人間の基本の心得ですよ」

僕はにこりと笑う。

「あなた方の言うことも一理あるでしょう。きっと多くのファンもあなた方と同じことを言っている。ファンにそう言われたら僕も何も言い返せません。でもね、これから戦いに出るあなた方が、ファンと同じことを言うのは間違いですよ。たとえ僕のしてきたことが、どんなに気に入らなくてもね」

「……」

「もうここまで来た以上、戦う者であれば、周りがどんなに気に入らない奴ばかりでも、頼りない奴ばかりでも、ただ突き進むのみ。このチームでやるって腹を決めるしかないでしょう。今更こうやって他人に文句を言っている暇などないはず」

「……」

「あなた方がチームを思っているのもわかる。だからこうして僕に文句を言いに来たんでしょう。でもね、それは裏を返せばこのチームは、僕が入ったくらいの少しの乱れで全体が崩れる脆いチームだってことを意味しているんですよ。このチームはそんなにヤワですか。僕なんかが一人入った程度で全て崩れるほど、弱いんですか。だから僕に文句なんか言いに来る――違いますか？」

「……」

沈黙。

僕が記者会見でわざとお気楽な発現をした理由は二つある。

ひとつは最悪日本が大会で惨敗しても、ファンの怒りをユータ達に向けさせないようにするため。

そしてもうひとつは、チームメイトがこうして文句を言いに来ることを想定していたためだ。

「あなた方の予選の試合、僕もテレビで見ていました。はっきり言って、このチームがバラバラだっていうのは、あなた方のサッカーが雄弁に語っていましたよ。自分だけが生き残りたい、その一身で、勝つためのプレーをせず、失敗を恐れて安全なパスばかりを出して、ちっともプレーが進んでいなかった。皆窮屈そうにサッカーをして、批判におびえたような顔をしていた。」

そう、このチームが弱い原因は、僕にもわかっていた。

このチームは、戦う意識が低すぎるのだ。戦えるチームになっていない。

このチームに蔓延しているのは、最終メンバーに生き残って、大きな大会に出たというキャリアが欲しいという保身のみで、周りの人間のミスや失敗を喜ぶような、そんなネガティブなチームに成り下がっていた。

勿論本人達はそんなつもりはなかっただろう。だからこうして僕に文句を言いたくなるような記者会見を演じて、このチームの主力をおびき出し、その行動を通して彼らの覚悟が如何に脆いかを説いてやろうと思ったのだ。

「……」

あと1ヶ月しかない準備期間で、こうして僕に文句を言いに来ることは、自分達の弱さの裏返しだという言葉は、彼らにとって屈辱だろう。だが、それが真っ向から否定できないことも確かだ。だから黙っている。

「そもそもそうやってチームメイトをいきなり批判するチームでサッカーなんかやってちゃ、楽しくないでしょう。こんなことばっかやってこの大事な最後の2週間過ぎちゃいました、じゃないでしょうに。もう時間もないんだし、そろそろ腹決めないと。それで駄目だったらしょうがないくらいの開き直りは必要だと思いますけど」

「偉そうに言うな！」

マスダが声を荒げる。

「お前は一体何なんだ！　今までこのチームに必要だと言われ続け

ても、何もしないで！　それで気まぐれだか何だか知らんが、来た早々いきなりチームに指図しやがって！　このチームで俺達は苦労して予選を勝ちあがったんだ！　それを何もしなかったお前にあれこれ言われる筋合いはねぇ！」

「……」

マスダの後ろにいるチームメイトも、ユータもジュンイチも、マスダのその言葉にまた気圧された。

僕はため息をつく。

「彼を知りて己を知らば、百戦して危うからず」

「あ？」

「そんなに言うなら、僕と勝負しませんか」

僕は不敵な笑みを作る。

「監督に掛け合ってみますよ。ちょっと今日の練習メニューを変更させてくれ、ってね」

そして2時、僕達代表候補メンバーはバスに乗り、近くの練習場に到着していた。

「あ、サクライだ！」

「わぁ、テレビで見るよりずっと可愛いー」

練習場には既に多くのファンが詰め掛けていた。グラウンドの周りを、３０００人近いファンが囲んでいる。

「うは、こんなに練習でファンが来たのは初めてだぜ」

ユータは目を丸くした。どうやら普段の代表では、ここまで人が集まらないようだ。

「何だかんだで、お前の注目度がでかいからな」

ジュンイチもグラウンドに入ると、肩をすくめた。

「……」

グラウンドに着くまで、僕は握手やらサインやらをねだられ続けた。この代表は特別強くなく、試合も低調なため注目度が低い。だ

から、一人ちやほやされる僕に、チームメイトの苦々しい視線が容赦なく向けられた。

ここに来る前、集合場所のホテルのフロントの時点で、僕はチームメイトと随分と揉めていた。新参者の僕が勝手に合宿のスケジュールを変え、勝負を挑むなんて、チームをばらばらにする気か、と、僕の部屋に来なかった連中までもこぞって僕に文句を言った。

とはいえ、監督の承認は取った。詳しいことは現地で説明すると言ってその場を収めた。

「えー、それじゃ今日のこれからやることを説明します」

僕はピッチの外のベンチで、前に立つ。

「これからやるのは、簡単に言えば試合です。フルコートで。僕の方は、ユータとジュンイチと、あと一人ゴールキーパーを貸してください。それで残りのメンバーが、僕達と戦う、ということです」

その説明を聞いて、選手達はかすかに色めき立つ。

「ちょっと待てよケースケ。試合ったって、こっちは4人しかいないぞ。あと7人は？」

ユータが当然の質問をした。

「あぁ、それはこれから集めるんだよ」

「は？」

僕はにっこり笑って、コーチ陣を見る。

「メガホンを貸してください」

そう頼んで、僕はコーチ達がピッチの遠い場所にいる選手に指示を出すための電動メガホンを貸してもらい、ボリュームを最大にした。そしてそのままピッチの中に入り、メガホンを口に当てた。

「えー、皆さんこんにちは。サクライ・ケースケです。今日はお忙しい中お集まりいただき、ありがとうございますー」

メガホンで、練習場の外にいるファンに向かって声を届ける。僕が声を出すと、四方から拍手や歓声が返ってくる。とりあえずグラウンド中に声が聞こえていることを確認。

「えー、ここで皆さんにご協力お願いしたいことがあります。これ

から僕は、ユータ、ジュンイチと一緒に、この日本代表チームと試合をすることになりました。ですが僕のチームはまだメンバーが足りません。そこで、もし僕達と一緒に試合をしてもいいという方がいれば、どうか名乗り出ていただけないでしょうか」

その提案を聞くと、サポーターも急に活気を増した。急にそこここが色めき立ち、出ようかどうか迷っている人間がちらほら出ているようだ。

「お、おい！」

ジュンイチが素っ頓狂な声を出した。

「俺達のチームの残りのメンバーってのは、サポーターかよ！」

僕はメガホンのスイッチを一度切る。

「ん？　そうだけど」

そう言ってからもう一度スイッチを入れ、サポーターに呼びかける。

「サッカー経験があって、２０分走れる自信がある人なら、誰でも大歓迎！　最大の重視ポイントは、僕と一緒に、この代表を倒そうって思える人！　僕達と一緒に戦ってもいい人、ぜひピッチの入り口に来てください」

僕の扇動に、サポーターは歓声を上げる。低調なこの代表で、珍しく面白いものが見れると喜んでいるのだ。

「けっ、バカバカしい」

代表の一人が言った。

「馬鹿にしたもんでもないですよ。サポーターだってサッカーが好きなんだ。中には結構な経験のある人もいるでしょうよ」

「お、おい、ケースケ」

ユータがまた困ったような顔で僕を呼ぶ。

「いくら俺達が２０歳までとは言っても、曲がりなりにもプロだぜ。力の差がどれだけあると思っているんだ」

「いいんだよ。それで」

――５分後、ピッチの中には２０名あまりのサポーターが入場し

てきた

「あらら、思ったよりいるけど、まあいいや。とりあえず、皆さんが僕達とチームを組む仲間ですね」

そう言って、僕は一人ひとりと握手を交わす。

経歴を訊くと、高校でバリバリサッカーをしていたり、大学のサークル程度だったり、フットサルを週４でやっていたりと、それぞれがバラバラだった。

その面子を見て、明らかに代表はやる気をなくしていたが、僕は彼等の方を振り返って、言った。

「うちのチームは多分９０分は走れない。だから、試合は２０分ハーフでやりましょう。１時間それぞれアップをして、１時間後に試合を始めましょう」

Ｒｅａｄｙ（後書き）

運は天にあり、鎧は胸にあり…

ケースケのこの言葉は、戦の天才上杉謙信が武士の心得として残した言葉とされています。ただ、原文とは若干変えてあります。少し長いのではしょらせていただきました。

余談ですが、戦国無双４とかでもこの言葉を使うキャラがいたりします。

Patchwork

スタジアムは異常な雰囲気に包まれた。
最初は盛り上がっていたサポーターも、僕達のチームと他のチームメイトが、ピッチのセンターサークルを挟んで別々に練習しているのを目の当たりにして、チームが完全崩壊したと囁く者も多かった。
僕達はまず集まってくれた２０人と集まって、まずピッチの真ん中に輪になって座った。
「ユータ、ジュンイチ、すまん。お前達の意向を無視して、僕に付き合わせて」
僕は先に二人に謝った。
「いいよ別に、お前に振り回されるなんていつものことだ」
ジュンイチは強烈に皮肉った。
「このチームが勝てるチームになってないってのは本当だ。何か変化を付けたいと俺も思っていたし、何もしないよりはいいさ」
ユータも言った。
「それに、今までもお前に乗って、勝負事で負けたのは、お前が怪我をした三國高校戦しかないからな。お前がそう言うからには、このメンツでも勝てるんだろう？」
それからユータはいたずらっぽく僕に笑いかける。
「ああ、勝てるよ」
僕はそれに確信を持った返事で返す。
「――さて、じゃあ集まってくれた皆さん。これから僕はあなた方を仲間だと認識します。だからこれからは、敬語をはしょらせてもらうけれど、気を悪くしないでくれ。逆に僕に対しても、普通にタメ口でいい」
僕はそう前置きしてから、集まってくれた選手を一瞥する。
「さて、ここで質問。相手は世代別とはいえ、日本代表――全員が

プロ。それに対して僕達は、プロはユータとキーパーの二人のみ――さて、僕達のチームが本当に勝てると思うかな？」

「……」

沈黙。

「正直に言ってくれていいよ。それもコミュニケーションのうちだし」

僕は緊張を和らげた。

「じゃ、じゃあ――正直、厳しいと思うんだけど」

参加者の一人が言った。まだタメ口がぎこちない。

「いくらこのチームが予選でボロボロだったとは言っても、プロだし……」

「……」

どうやら他の参加者の同じ意見のようだ。

「成程、確かにそうだろうな」

僕は頷いた。

「確かに、このチームで代表に勝つのは難しい。うん、そうだと思う」

「オイオイオイ」

ジュンイチが呆れ顔で言った。

「じゃあ、こう考えてみてくれ」

僕はそう言ってから、グラウンドを見渡した。

「皆もさっきまでこのグラウンドの外で、練習を見に来ていたわけだが――もし、代表がこんな寄せ集めみたいなチームと試合をして、それで代表が１－０とか、２－０とかで勝ったのを、観客席から見ていたら、皆はどうする？」

「……」

僕の問いに、一同は考えを巡らせる。

「――多分、ブーイングするでしょ。こんなチーム相手にそれしか点を取れないのか、こんなチーム相手にその程度じゃ、本戦の相手からは１点も取れないぞ！　ってね」

僕は時短のために答えを提示した。
「あ――確かに」
一同は頷く。
「あまり好きな考え方じゃないけれど、勝負には、引き分けや負けでも、勝ったも同然、といえる時がある。今回はそれだな。観客が相手にブーイングするくらいの試合をすれば僕達の勝ち――スコアは二の次ってわけだ」
「……」
集まった選手達が、互いに顔を見合わせる。
僕はその表情を見て、手応えを感じる。普通に考えれば、代表に勝つなんてことは、途方もないことのように思えるが、僕の話で彼らの中での勝利条件のハードルが大きく下がった。
戦う前に、相手の名前や肩書きに怯んでしまっては、初めから勝負にならない。まずはそんなイメージの払拭に成功した。
「とはいえ、僕個人としては、できることなら皆にも、スコアの面での勝利を目指して欲しい」
いいイメージが持てているうちに、僕は皆の新しいイメージの再構築に努めた。
「どうせ僕達は負けて元々の戦力なんだから、負けても誰も驚かない。試合を惹起した僕が一人叩かれるだけで、はじめから皆にリスクなんてない。だけど、もし僕達が勝っちゃったら、皆は一躍ヒーローだ。間違いなく明日の新聞の一面だね」
僕はにこりと笑う。この話を訊いて、集まった素人集団に、わずかながら表情の変化があることに、確信を持った。
「負けてもリスクがなく、勝った時の見返りがでかいなら、本気で勝ちを狙うのが妥当だろう？」
「……」
どんどん寄せ集め集団の表情が変わっていく。大それたことだろうが、自分達が代表を倒したら、というビジョンを描き始めている。
ここに集まった連中は、多かれ少なかれ、この代表のふがいなさ

を強く感じて、それを不満に思っている連中だ。
「ある程度は僕もフォローするし、逆に言えば、失点したら僕の責任にしちゃってもいい――どう、やる気出た？」
僕がそう聞くと、皆はそれでも大それたことだからと、少し躊躇したが、皆往々にいい顔で頷いてくれた。
「よし、じゃあ参加交渉が正式に成立したということで。はじめに円陣といきますか。皆、立ってください」
僕は立ち上がると、下げた両手を軽く上げる仕草で皆を立たせた。全員が肩を組み、前かがみになる。
「よし、じゃあまずこのチームで試合するに当たっての心構えを言うからな」

「えぇ？　作戦って、それだけ？」
練習が終わり、今は両軍、ベンチに戻って最後のミーティングをしていた。
「ああ、それだけだよ」
この一時間、僕はチームの練習を眺めながら先発を決め、そしてこの試合における作戦を今発表したところだった。
はっきり言って、僕達以外の参加者のレベルは、とても戦えないほど下手ではないが、取り立てて上手くない。高校サッカーで言えば県内ベスト１６クラスが数人いるだけで、残りは少年サッカーのコーチができる程度。埼玉高校の部員と同じくらいか、それより若干下ってところだ。
「元々戦術を煮詰める時間もなかったし、だからって拙い連携は死を招くからな」
「……」
そうは言っても、皆心配そうな面持ちだ。
「何だ、不安そうだな」
僕は首を傾げる。

「さっき円陣で言った心構えを皆思い出してくれ。チームのためとか、そんなことは言わないから、まずその心構えを見せることだけ考えろ。とりあえず試合の入りは、そのことだけを考えてくれ」
「よし、じゃあ両チーム、集合！」
僕が頼んだ、コーチの一人がセンターサークルで僕達を呼ぶ。
この試合、両チームとも監督はいない。代表の監督は、どちらのベンチにも座らず、ピッチの外でコーチ陣とこの試合を見守ってもらうことにした。
もうセンターサークル上では、主将のマスダはじめ、代表選手が憮然とした顔で集まって、僕達のことを見ていた。
僕達は急いでピッチに走る。名目上主将である僕がセンターサークルに行って、マスダとコイントスをすることとなった。
「いいや、ボールやるよ」
僕がサークルに入るなり、マスダは僕に言った。
「後半もボールやる。そのくらいのハンデやらないと、不公平だろ？」
「……」
その顔は、明らかに僕達を見下していた。まあ当然かもしれないが。
「……」
ま、いいけど。
僕はそれをありがたく承諾し、ボールを貰う。
僕達の布陣はユータのワントップに、僕がトップ下。ジュンイチがダブルボランチの左につけた、４‐５‐１だ。
僕とユータはキックオフのためにセンターサークルに入る。
「ユータ、お前には少し我慢を強いるが、その分次の試合、お前に見せ場を多く作ってやるからな」
笛が鳴る直前、僕は小声でユータに囁いた。
「へへ、そりゃありがたい」
ユータが軽く笑いながら横の僕にボールを蹴りだし、試合が始ま

った。

Pressure

キックオフと同時に、僕にはボランチが二人がかりでマークにつく。

よし、まずは予定通り。

ピッチを見渡す。

僕は後方にボールを貰いに走る。

キックオフ後、ジュンイチを経由して、ボールはまた僕に返る。

ボランチ二人が僕に激しいチェック。既にユータにもチェックがついている。

僕は右サイドハーフにボールを渡す。

「あ？」

僕をマークしていたボランチの一人の声が、僕の耳に届く。

サイドハーフは一度サイドバックにボールを預け、次にジュンイチの隣のボランチに横パス。そしてボランチの選手は再び僕にボールを預けた。

また後ろからチェックがつくが、僕はすぐにボランチにボールを戻す。

「おいおいサクライ、さっきまでの威勢はどうした！」

「横パスやバックパスばかりで、全然攻めてこないじゃねぇか！」

嘲笑交じりに相手からの野次が飛ぶ。

ボランチの選手はジュンイチにボールを預けてから、今度はジュンイチが右サイドハーフに振る。

しかし、痺れを切らした相手は、右の選手から強引にボールを掠め取った。元々技術にはかなりの差があるのだ。あっという間にボールを取られてしまう。

だが、もう僕はその前にジュンイチに指示を出していた。ジュンイチはもう既に右サイドにつめていて、相手の選手から再びボールを奪取する。

「カウンター来るぞ！　サクライとヒラヤマから目を離すな！」
ディフェンスラインにいる主将のマスダの声。
ジュンイチはすかさず相手バイタルエリアに侵入した僕にパスを出す。
だが、パスを受けた僕はもう一度パスを後ろのジュンイチに返してしまう。
「おいおい、いい加減にしろ！」
「どこまで消極的なんだよ！」
相手だけではなく、グラウンドを囲むサポーターさえ不満を露にし始める。
とにかく僕達のチームは、最初から自陣での短いボール回ししかしなかった。たまに前線の僕やユータにボールが回っても、すぐに後ろに返してしまう。
「……」
それでも、僕とユータの警戒の布陣、か。
それじゃあ。
ジュンイチが僕にボールを回す。
僕はセンターサークル付近でそれを受け、この試合初めて前を向く。
前には相変わらず、強面の二人が僕についている。ジュンイチと同じタイプ、マンマークで相手を潰す、番犬タイプか。
一度だけ右足でボールをまたぐフェイントをかけたが、隙はできない。
「俺達二人を抜くのは無理だぜ、代表をなめんなよ」
ボランチの一人が腰を落とした体勢で目をぎらつかせ、僕に吐き捨てた。
「――ふ」
そんな二人を尻目に、僕は小さな動きで大きくボールを右にフィードした。
中央を固めすぎて、若干スペースのある右サイドに、既にサイド

バックが走りこんでいた。選手は僕のピンポイントなパスをフリーで受ける。既にペナルティエリアから10メートルも離れていない、いい位置だ。

だが、それでもうちの選手はトラップの技術もない。僕のパスをトラップするのに少しもたついている間に、代表のサイドがすかさずサイドバックをチェックしてしまう。

「中に出せ！」

僕の声で、サイドバックは中にボールを出す。

そこには既に僕が走りこんでいた、僕はそれを受ける。

「サクライだ！　突破を狙ってくるぞ！」

既に眼前にいたマスダが、前線のユータをチェックしながら声を出す。

しかし僕はすぐさまサイドバックのすぐ後ろに来ていたサイドハーフにボールを返す。

「もう一度、中だ！」

そう僕がが指示すると、サイドハーフは今度は横にパスを出す。

サイドハーフの蹴ったボールはそのまま中央に転がっていたが、そこにはジュンイチではない、もう一人のボランチが走りこんでいた。

「打て！」

その指示通り、ボランチは思い切りシュートを放った。

しかし、サイドバックにボールが渡った辞典で、ユータへのクロスを警戒していた相手は、ペナルティエリア内を既にガチガチに固めていたので、もうシュートコースはなかった。ボールは相手選手の一人の体に当たって、そのままエンドラインを割り、コーナーキックを得た。

「はは、いいねぇ、ナイスシュート！」

僕はボランチの選手に向け、声を出す。

「見ろよ皆、うまくやれば皆だってシュートまでいけるだろ？　ガンガン打っていけ！　攻撃の意識は常に高く持てよ！」

僕は左コーナーに走りながら、自軍の選手に声をかける。
「コーナーはヒラヤマとエンドウをマークしろ！」
マスダの檄がまた聞こえた。よく通る声をしている。
既にペナルティエリア内にいるユータとジュンイチは、密集地帯でろくに身動きもできない状況だ。
僕は前もって指示していた通り、ショートコーナーにパスを出し、それを受けた左サイドバックがもう一度、ペナルティエリアから25メートルほどの距離からシュートを放った。しかし、シュートは枠を大きく外れてしまう。
「いいねぇいいねぇ。もうシュート2本も打てたじゃないか」
僕は戻りながら、手を叩いて一緒に戻る選手を褒めた。
しかし、僕のテンションとは裏腹に、サポーターもしらけきっていた。2本とも確かにシュートは打てているのだが、どちらのシュートも本職のシュートではないから威力もない。おまけに最終ラインをガチガチに固められていたから、得点も期待できないシュートだったからだ。
相手のゴールキックで試合再開。相手キーパーは大きくボールを前に蹴りだす。
ジュンイチと相手フォワードが空中で競り合い、こぼれ玉を相手の司令塔に拾われる。
パスの出所を探してから、司令塔はボールを前線に入れる。
「よし、囲め！」
僕の指示で、最終ラインの4人は前線でボールを受けたフォワードを4人がかりで囲んだ。左右のサイドバックも中央に来て、相手フォワードに体を入れにかかる。
「ハッ、バカが！」
相手フォワードは自分に4人もついたことで、がら空きになった右にボールを蹴り出した。そこには既に相手のサイドが走りこんでいる。
完全にフリーでサイドはボールを受けるが、既にこちらの右サイ

ドもチェックに行っている。腰を落として、体を入れにかかる。
相手サイドはさすがにプロ。裏を取ってこちらの選手を抜きにかかる。
だが、抜き去ったところには、僕が既に戻って足を出しており、相手は僕のタックルにボールを奪われる。僕は立ち上がってすぐにボールをクリアして、スローインに逃れる。
「す、すまん」
サイドの選手は簡単に抜かれたことを僕に謝った。
「気にすんな。数秒粘ってくれたおかげで、僕があそこまで戻れた。それさえしてくれれば、抜かれても僕とジュンイチが簡単には点を取らせないから」

その後の試合も、そんな調子で試合が進んだ。
相手の攻撃は早いが、それは全て僕とジュンイチのカバーでしのぎ、僕達がボールを持てば、のらりくらりと横パスばかりを繰り返し、たまにサイドに僕がボールを振って、そこから崩そうとする動きを少し見せるだけ。ユータと僕は、前半残り5分でシュートを1本も打っていなかった。
だが、ここからが違った。
「サイドは気にするな！　結局サクライとヒラヤマ以外は怖くないんだ！　そこをしっかり抑えろ！」
最後衛からマスダはそう指示を出しているが、相手はもうこの時点で、僕にしか見えない程の変化が起きはじめていた。
僕はもう一度、センターサークル付近の低い位置でボールを受ける。
相変わらずボランチが二人がかりで挟みにかかる。
僕はヒールで真後ろにいるジュンイチにパス。
「ユータ！」
パスを出すと共に、そう叫ぶと、ジュンイチはそのまま、最前線

のユータに大きくボールを蹴り出した。
ユータには試合開始時からマスダが徹底マークしている。
だが、今のユータは中学時代、前で好き勝手プレーするだけの選手じゃない。
ユータは長身を生かして、ボールを前に落とした。
そこには既にジュンイチではない方のボランチが走り込んで、ボールを拾っていた。元々僕をボランチ2人でマークしていたので、中央にはスペースがあった。もし僕がユータにポストプレーを指示したら、そこに走りこむよう、あらかじめ指示していたのだ。
「潰せ！」
マスダがそのまま、ボランチの選手に突進する。
しかし、ボランチの選手は軽くボールを左に振った。
そこには既に僕がディフェンスを背負って走りこんでいた。僕はそのまま左足を振りぬく。
しかし僕のシュートもバーを直撃してゴールにならない。
サイドバックが拾って相手はボールをサイドラインにクリアする。
サイドバックは素早くボールをピッチに出す。
「よし、僕に出せ！」
僕は大声でボールを呼ぶ。
サイドの選手が中央にボールを出した時には、僕はもうトップスピードに乗っていた。ボールを受けて、その加速で一気にディフェンス二人を相手にする。
僕はエラシコをかけて、一度相手のバランスを崩し、スピードを落とさないまま、ボランチの横をすり抜けた。
「くっ！」
僕を止めようにも、ボランチの選手は必要以上のチェックをかけられない。
僕はディフェンスラインの場所を一瞬確認してから、ユータに絶妙なタイミングでのスルーパスを出した。
キーパーが勇敢に突っ込み、ユータがボールに触る直前にボール

をはじいたが、ユータの後ろからは、僕のマークでボランチがつり出されて再びできたスペースに突っ込んでいたボランチが詰めていて、もう一度シュートを放った。
そのシュートは倒れているキーパーを越え、枠に飛んだが、マスダが体を投げ出してブロックした。
「あぁ、惜しい！」
ユータが声を出した。
すぐに自陣へ戻って守備陣形を整えに来るユータ。
「ケースケ、すまん、絶妙のパスだったのに」
ユータは戻りながら、近くを走る僕に言った。
「いいんだよ。外してくれた方がよかった」
僕は言った。
「は？」
「お前があれを入れていれば、僕達は最高でも１－０にしかならんが、これで相手に大差をつける可能性が出てきたよ」
「――わけのわからんことを言うな」
走りながらユータは首を傾げる。
だが、試合が終わった時、ユータはスコアを見て、大きく頷くこととなった。
結局僕達のチームは、３－０で相手を下してしまったのだった。

「何やってんだ代表！　こんなチームに負けやがって！」
「これで世界大会に出るのかよ！　辞退しろ！」
ピッチには、大阪という土地柄もあるのか、惨敗した代表への罵声が怒号となって、地面を揺らした。
屈辱に満ちた顔の代表とは裏腹に、僕達のチームは大喜びだった。
「はは！　本当に勝っちゃったよ！」
「俺なんか代表相手にゴール決めちゃったぜ！」
はしゃぐ僕達に、報道陣も詰め掛ける。このチームの記念撮影も

行った。この写真は間違いなく明日の新聞の一面を飾るだろう。
「ありがとうサクライさん！　本当に楽しかった」
「一生の思い出っすよ」
僕は参加してくれたチームメイトから、握手を求められた。その顔にはどれも充実感が漂っていて、何とも見ているだけで爽快な表情だった。
「ああ、僕達も楽しかったぜ」
僕はそのひとりひとりと握手を交わして、参加してくれたことに礼を言った。
「サクライくん、サイコー！」
「お前達、よくやったぞ！」
大部分が代表への罵声でかき消されてしまいながらも、確かにそうして僕達を賞賛する声も耳に聞こえた。
「サクライくん、ちょっといいかな？」
一通りの写真を撮った後、ユータ、ジュンイチと一緒にいた僕に、報道陣が駆け寄ってくる。
「奇跡の勝利の立役者ということで、ちょっと取材をしたいんだけど」
「あぁ、それはちょっと待ってください。先に要件を済ませておきたいので」
そう報道陣に言い残して、僕はピッチに走っていく。
ピッチでは、負けてまだ茫然自失とした選手達がまだ何人かそこに座り込んでいて。
ペナルティエリア内、つまり自分の仕事場である場所に、マスダもそうしていた。
僕はマスダに駆け寄って、足を止める。マスダは座り込んだまま、僕の顔を力なく見上げた。
「よく声を出してました」
僕はマスダに言う。
「だが、もう少し味方の事を見るべきでしたね」

Ｐｒｅｓｓｕｒｅ（後書き）

エラシコ…サッカーの必殺フェイント技のひとつ。元ブラジル代表、ロナウジーニョが有名な使い手。ボールが足とゴムで繋がっているように見える。この技術を生み出したのは、現テレビ朝日のサッカー解説者、セルジオ越後という説もある。

動画サイトなんかで見られるので、見たことない人は見てみてください。

Explanation（前書き）

この会はサッカーをあまり知らない人は、読んでいてよくわからない部分があるかもしれません。次回でもっとわかりやすく話をまとめるので、読みにくいと思った人は読まなくてもいいと思います。

Explanation

サポーターの怒りで、すごい騒ぎになってしまったグラウンドを後にする時、警備員は必死になってファンを抑えていて、僕達以外の選手は、息も絶え絶えにバスに乗り込んだという形だった。

「何か埼玉高校で似た光景を見たことあるな」

だが、この半年、練習試合でも千人はギャラリーが集まる埼玉高校にいる僕達は、その光景にも何かデジャブのようなものを感じるだけだった。自分達の感覚のズレに少し笑えた。

バスの中で、選手は誰一人声を出さなかった。今まで自分達が築いて来たもの――今までそれでいい結果が出ていたとは言いがたいが、それでも信じ続けてきたものを、一瞬ではるか格下の相手に壊されたのだから。

「監督」

僕はバスの中で、監督に声をかけた。

「ホテルに戻ったら、さっきの試合の反省会をさせてください」

――そう僕が頼んだことで、練習後のミーティングは、僕が先頭に立って、さっきの試合の反省会を行うこととなった。

ホテルの大部屋を借りて、僕はホワイトボードの前に立つ。ユータ、ジュンイチ、僕達のチームに加わったゴールキーパーの3人も前に出てくる。僕の横には、代表スタッフにあらかじめ頼んで録画してもらっていたビデオが置かれている。

長机に座ってそれを見ている選手達は、皆不満げな顔だ。それが自分のさっきのパフォーマンスについてなのか、監督に十分自分を売り込んだ僕達に対してなのか、それは表情だけではわからないけれど。

「さて――じゃあまず、僕があのチームで先に与えた指示の種明か

しをしましょうか」
　僕は差し棒を持ってホワイトボードの前に立ち、座っている選手達を一瞥する。
「……」
　だが、僕の言葉は暖簾に腕押し。完全に選手は全員ふぬけてしまって、完全に上の空だ。
「聞いてるのかっ！」
　僕は空気が震えるような大声で大喝した。選手の数人は、その声に一瞬目を見開く。
「あんた達は本戦でも試合に負けているからって、そんな顔でピッチに立つ気か！　そんな顔をまたサポーターに見せて、またさっきみたいにブーイング喰らいたいのか！　負けたからってふてくされている奴が、僕に代表がどうとか大口叩いたのか！」
「……」
　先程よりは少し耳を傾けるような態度にはなったものの、まだ目の前の連中からは、チームの新参者にして、最年少の僕への不満がありありと出ていた。
「色々思うところはあるでしょうが、ここであなた方の敗因をはっきりさせないと、このチームは前に進めない。だから少しでいいから聞いてください」
　そんなフォローも軽く入れつつ、僕はホワイトボードに張った、僕達の布陣を表すマグネットに指し棒を伸ばす。
「まず攻撃において、あのチームで僕が指示したことは、僕にこまめにボールを預けること。僕がボールを持った時、各ポジションごとにたまに合図を出すから、それが出たら指示通りに動いてくれ――それだけ」
　サッカーは瞬時の判断がものを言うスポーツだ。だからピンポイントで選手と意思の疎通を図るのは難しい。だが、ボールを持つと、大体の選手はボールを持った選手を見てくれる。そこでサインを出せば見落とす可能性が最小限となる。急造チームで意思の疎通を図

る一番有効な手だ。
「で、そのサインっていうのが――例えばサイドの選手には、僕が右足でボールを一度またぐフェイントをかけたら、一気に前線へ走れ、だった」
「――あ」
何人かはそう言った事で、ぴんと来たようだ。
「初めからあなた方は僕とユータを警戒して、中央を固めてくることは目に見えていた。だけど蓋を開けたら僕達はサイドを多く使ってきた。あなた方は予想の攻め方をしてもらえず、試合の入りに疑問を持ったはずだ。キックオフ後で、すぐには相手への対応を変えられないし、このままの守備でいいのか、と考え出した」
僕はそう言ってから、何人かの顔を指差した。
「やがて何人かの選手は、中央を固めて僕とユータの連携を遮断しようという作戦だったのに、若干サイドのケアもした方がいいんじゃないか、っていうことを考え出した。表情ですぐにわかりましたよ」
「……」
「僕はそれを感じ取って、攻め方を変えた。覚えてます？　ジュンイチが初めてユータに長いボールを放り込んだこと」
僕はあらかじめスタッフに頼んで撮ってもらっていたビデオの映像を、スクリーンに出す。
「ここでユータのポストプレーでのボールを、ボランチが受けて、僕にラストパスを出した。あなた方には無警戒のこのボランチが自分達のスペースを脅かしたことに脅威を感じた。この時完全にスペースに飛び出されて、僕に決定的なラストパスを出されましたからね。寄せ集めとはいえ、僕達以外の選手も油断は禁物、と思わせた」
とはいえ、あの時僕達のチームのボランチが前に出ていたのも、ユータに長いボールが放り込まれたら、僕を追い越して前に出ろ、とボランチに指示していたからだ。僕が相手ボランチをひきつけていたこともあるし、ユータの名を呼ぶことで合図も出したから、少しくらい足が遅くても、瞬時に動けば素人でもプロの隙も突ける、

というわけだ。

「……」

「あなた方はこのボールをクリアしてスローインに逃れた。だけどこのスローインから僕は早いドリブル突破を仕掛けた。今までスローペースの試合だったところに、いきなり速い攻めで崩されてしまった。おまけにユータへのスルーパスも使い始めたし、後詰の選手に決められそうになった。もうこの時点であなた方は、守備をどこに集中させればいいかわからなくなった。結果、あなた方は中央を固めることをやめ、真ん中もサイドもゾーンで守り、どっちつかずの守備になってしまった。結果それから後は守備が崩壊して、僕達に3失点も喫してしまったわけだ」

そう、あのプレー以降、もう相手選手は守備をどこに集中させればいいか、修正が不可能になっていた。スペースを誰がカバーするかの連携も稚拙で、僕はそんな相手選手の間に縦パスを通し続けた。僕のパスは面白いようにチャンスを演出し、それを受ける選手も皆のびのびとシュートを打った。

「そして、僕達寄せ集めが、あなた方を無失点に抑えられたカラクリだが――それは序盤のスローペースに持ち込んだパス回しにある」

「？」

後ろのコーチ陣が首を傾げる。敵の攻撃と、自分達のパス回しがどんな関係にあるのかまったく見えなかったからだろう。

「あなた方は、沢山のギャラリーが見ている前で、負けるわけにはいかないと考えていた。大量点を取って、でかい口を叩いた僕をやっつけてやろうと考えていた。そのために早めに先取点を取って、後の攻撃につなげたいと考える。だが試合は２０分ハーフで時間がない。僕達がだらだらパス回しをすることで、あなた方はイライラした。こちらとしてはこのパス回しは、あなた方をイラつかせる目的もあったけれど、それ以上の目的があったんです」

僕は差し棒で自分の掌を叩く。

「これはギャンブルに多く見られる傾向ですが、人間、大勝を狙う

時は、最小の労力で最大の効果を得ようと考える。そしてそこに一点集中で全てをつぎ込むものです。競馬で言う大穴一点買いとかね。あなた方もそうだった。できる限り点差を付けたいと考えていたから、僕達のチームの弱点と思われる場所に集中して攻めて来た」

その説明を聞いて、長机に座っている選手たちの表情が変わった。何かを言い当てられたような、そんなぎくりとしたような顔だ。

「で、あなた方が僕達のチームの弱点と見たのは、ここ」

僕はそう言って、ホワイトボードで僕達のチームの布陣を表すマグネットの一部分をなぞった。

「うちの守備の要、ジュンイチのいない僕達の右サイド――あなた方の左サイドです。そうでしょう？」

「……」

どうやら図星を突かれたようだ。

「あなた方は大勝を狙っている。だが僕達がだらだらパス回しをしていることで時間がなくなった。だからこの弱点と思わしき場所を余計に攻めたくなる。だけど僕は、ここを攻めたくなるように、わざとジュンイチを左に置いたんですよ。そうすればあなた方が攻めてくる場所がわかって、守りやすくなりますから」

そう、初めから全体を守るつもりならば、ジュンイチを中央に布陣させる。ジュンイチを左に置いたのは、どうぞ右を攻めてください、という印象を相手に与え、その右で相手を罠にかけるためだった。

「元々左はジュンイチがいるから問題ない。もし中央にボールが来たら、ディフェンダーは全員で中央を固めろ、と指示していたし、それであなた方は右にボールを回す。だけどその頃には僕がそこに戻っていて、もうパスコースを塞いでいる――あなた方の攻める場所がわかっている分、僕は最短距離で右サイドのケアに走れますしね。結果あなた方の攻撃も不発に終わった」

「……」

選手達は俯いてしまう。

自分達の考え、戦術、試合中の心の動きまで、僕に完全に見抜かれていたのだと痛感したようだ。

「おまけに、あなた方は僕達以外の選手はド素人だとなめてかかっていた。だから、守られてもいつでも抜けると考えていた。だからあなた方は絶対に遠目からシュートを打たない。僕達の守備陣を綺麗に抜いて、フリーでシュートを打とうとする。それができれば監督へのアピールにもなりますしね。だが、それが僕やジュンイチが後ろに戻る時間を余計に与えた。結果あなた方は攻撃でも画竜点睛を欠いた」

そう、相手が素人だとなめてかかるからこそ、相手はミドルシュートを打ってこない。決定的な場面などひとりでいくらでも作れると思って、無駄に突破を試みたせいで、相手の攻撃はスピードがなかった。

だから僕は寄せ集め集団に、守備の際には初めからボールは取らなくていい、ただ、抜かれないように体を入れ、相手の足を止めることに専念しろ、と、それだけ指示していた。彼等がよくやってくれて、時間を稼いでくれたおかげで僕達は守りきることができた。

「……」

ホテルの大広間は静寂に包まれる。

選手達は皆それぞれが、憤懣やるかたない思いを、奥歯を噛み締めて、じっと耐えているしかなかった。

「しかし、あなた方は、さっきの試合、あれで全力だったのか？」

その静寂の中、僕は問題を提起する。

「さっきの試合は２０分ハーフ――あなた方が普段やっている試合時間の半分もないのなら、もっと走れただろう。何故もっとボールを取りに走らなかった。なぜ僕達にプレスをかけてこなかった」

はっきり言って、相手が僕達のボールを無理やりにでも取りに来ていたら、僕達はひとたまりもなかった。プロがアマチュアの選手からボールを取られるのは当たり前で、それは戦術ではどうしようもできない。

「僕が立てた作戦を、僕が否定するのも変な話だが、僕達のチームには隙が沢山あった。元々戦力差が歴然なんだ。少しの工夫でもっといいサッカーができたはずだろう。なのに、初手から後手に回っちゃって……」

僕の説明した作戦は、勿論相手が何を考えているか想定し、その上で練った作戦だったが、相手がもっと執念を見せていれば、決して破れない代物ではなかった。

守備だって、もっと早くに各選手が自分の考えをほかの選手に伝える努力をしていれば、４０分で3点もとられはしなかっただろうし、攻撃もあれこれ考えずに、もっとボールを散らして攻めれば、僕達がいくらカバーしても、穴の全てを塞ぎきれなかっただろう。

「今日みたいなサッカーをもし本番でしたら、きっとすごく後悔するだろうね」

「……」

辛らつな言葉を浴びせ続けられ、選手達は押し黙ってしまう。
僕はため息をつく。
「このチームの予選の試合を見たが、どの試合も、一度チームに動揺が走ると、それがとめどなく広がって、そこから一気にチームが崩れるんだ。互いに声をかけない、それを止めることのできる選手もいない――だから今日も、僕達の攻めに疑心暗鬼を勝手に広げて、どっちつかずの守備になってしまっただろう」
「……」
「僕達のボールを積極的に奪いに来なかったのも、失敗してピンチを作ったら、自分の評価が下がってしまう、という自己保身からだ。このチームからはもう、自分が本戦メンバーに残ればいい、自分のレギュラーが安定していればいい――そんな自己保身に満ち溢れている。味方まで敵視しあうチームで、コミュニケーションも形だけ。自分が失敗しても、他の選手がカバーしてくれるという信頼がないから思い切ったプレーができない」
「……」
「このチームの最大の弱点がそのふたつだ。メンタルの弱さと、互いのコミュニケーション――信頼関係の構築不足。今日の試合はそれをあんた達に判らせるためにやった。どうだ、少しはそれを自覚できたか？」
そう言って、僕は壇上から選手達を一瞥する。
「……」
だが、選手達は相変わらずのむくれ顔だ。最年少の新参者にここまでボロクソ言われ、おまけにサポーターから殺意さえ感じるブーイングまで受けたのだ。自己保身に徹する彼等にその現実は厳しすぎた。
沈黙。
「――ま、長々偉そうなことを言ったけれど」
僕は壇上で、にこっとはにかんで見せる。
「別に今日の試合を全てだと思い込む必要はないよ」

いきなり空気を変える言葉に、選手達は疑問をはらんだ顔で、俯いた顔を上げる。
「あの試合は子供だましみたいなものだし、そもそも正規ルールじゃない。もしあのチームで９０分戦っていたら、まず僕達が大敗していただろうし」
そう、２０分ハーフの試合にしたのは、僕たち寄せ集め集団が９０分走る体力がないと判断したからというのもあるが、それ以上に、短い時間であれば、相手がこちらの目論見に気付く前に試合を終わらせることができるからだ。さすがに相手もプロだ。９０分戦っていれば、自分達が僕達の掌中で踊っていたことに気付くだろうし。
「別に僕だって、あんた達が弱いって言うつもりもないし、僕があんた達より優れていると言う気もない。まして僕なら今日率いたチームで世界と戦えるとか、そういうことを言いたいんじゃない」
「……」
「初めから僕も、僕ひとりで試合に勝てると思ってここに来たわけじゃないさ。今日は２０分ハーフだったから、僕も攻撃に守備にあそこまで走れたが、さすがにあのペースで９０分走るのは無理だ。ジュンイチだって１対１の守備ならすごいが、得点能力はさほど高くない。ユータは一人でもチャンスは作れるレベルにいるフォワードだが、それでも世界と戦うには、それだけで勝てるほど甘くないだろうし、ユータ一人で守備はできない」
「……」
「世界と戦うためには、僕が今日率いたチームじゃ駄目なんだ。あんた達じゃなくちゃ戦えない。これでも僕はあんた達の力を当てにしているんだ」
今まで慇懃無礼の極みだった男が下手に出たことに、選手達は各々表情に狼狽の気を見せた。
「忠告しておくが、この先本戦に自分さえ生き残ればそれでいい、と考えている奴は、オランダで間違いなく死ぬ。そして、チームが惨めな惨敗をすれば、自分だけが生き残る道はないと思った方がい

い。負ければ全員がサポーターからブーイングを受けるんだ。一人の例外もない」

「……」

「それが怖くて、サッカーのプレーでも足が竦んで動けなくなるのであれば、あんた達ももう、代表だとか、国の威信だとか、そんなものは全部捨てちゃえよ」

僕は提案した。

「僕は記者会見で、国の威信を賭けてサッカーをやる気はない、サッカーを楽しみ、その上で勝つことを考える、と、確かに言った。それがあんた達は気に入らなかったようだが、実際僕はまだサッカーをはじめて2年だし、まだ17だ。そんなでかい物を背負えるほど器用でも出来た人間でもない。あんた達だって、ここにいるのは最年長でも20歳そこらだろ？　そこまでの器量がなくて当然だ。無理してそんなものを背負う必要なんてないじゃないか。自分達が出来る最大限のことをやればいい。それで負けたらしょうがないさ。あんた達がオランダで死んだら、僕だって一緒に死んでやるからさ――それでいいじゃないか」

そう言って僕は、自分のポケットから一枚の半紙を取り出し、手近にあるマグネットでホワイトボードにそれを止めた。

その半紙には、細い毛筆で、先ほど僕が言った、戦う者の心得が記してあった。

『運は天にあり、鎧は胸にあり、手柄は足にあり
何時も敵を我が掌中に入れて合戦すべし
死なんと戦えば生き、生きんと戦えば必ず死するものなり
運は一定にあらず、時の次第と思うは間違いなり
武士ならば、我進む道はこれ他なしと、自らに運を定めるべし』

「死ぬは一定、だが、死んだとしても、志を残すことはできる。僕がこのチームに残したい志は、この言葉に集約されている。だから

僕はこの場を借りて、この言葉をもう一度あんた達に贈る。この言葉をあんた達が胸に留めて、このチームが強くなれば、僕がここにきた意味はある」

僕は自分の胸に手をやる。

「この中の何人かは、この合宿で確実に落ちる。その決定が下る最後の一秒まで、自分の志をこの場に刻み付ける努力をしろ。その上で、こいつになら自分の志を託してもいいと相手に信じさせろ。たとえ落ちても、本戦で試合に負けても、一片の悔いの残らない戦いに興じろ。それが真に戦う者の心意気というんじゃないのか。それを一度、あんた達に考えてもらいたい」

「ふあぁ――夕食、みんな暗かったよなあ」

ユータがベッドに寝転がって、腹が膨れた後の大欠伸をした。

「大丈夫かね。みんなお前の言葉が、ずっしり来ているみたいだけど」

ユータは体を軽く起こして、僕に問いかけた。

「まあ、あれで奮起できなかったら、このチームは初めから負けるべくして負けるチームだったんだろう」

僕は左手で、携帯のフリップを開け閉めしながら答えた。

「おいおい――じゃあオランダはどうなるんだよ」

「まあ、死屍累々、僕達もオランダで無残な死骸を晒すのみ、ってとこだな」

「はは――笑えねぇぜ」

ユータは肩を竦めた。

「俺はこの大会の後、オリンピックにも出て、世界に名を売るんだ。こんなところで足止めされる気はないぜ」

「……」

――わかっているよ、ユータ。

だが、お前のその夢を叶えるためには、どうしてもあの連中の力

が必要なんだ。
「だぁぁ、ちょっと静かにしてくれ！」
僕の隣にいるジュンイチが持っているシャープペンの芯が折れた。
「人が数学と格闘してるって時に、横で談笑してるなよ」
「悪い悪い」
ユータが苦笑いした。
僕達はミーティングの後、ホテルでビュッフェ形式の夕食を、チーム全体で取った。しかし夕食はまるでお通夜のように暗く、誰一人言葉を発することがなかった。試合に勝った僕達は早々に退散し、今はこうして僕達の部屋に3人でたまりながら、僕はここに来る前の約束どおり、ジュンイチの勉強を見てやっているというわけだ。
「ったく、飯食った後に勉強なんて、どんな催眠術より強力だぜ」
ジュンイチは欠伸を噛み殺す。
「しかし、お前があそこまでこのチームに説教かましてくれるとは思わなかったぜ」
「本当本当、今まで代表辞退していた奴が、やたらと気合が入っているじゃないか。どういう風の吹き回しだよ」
「……」
僕は元々、この二人をむざむざ敗戦の戦場に立たせたくないからここへ来た。本戦メンバーになるとか、そういうことは二の次、三の次だ。
このチームは負け癖がついている。手ごたえの感じられない練習に、日増しに高まるサポーターの批判など、様々な外的要素に潰されかけている。だからまずはそれを断ち切らなければならない。それをしなければ僕がいくら一人で奮戦しようと、１００％二人が無駄死にするからだ。
別にこの二人を守るのは、僕でなくてもいい。チームが勝ちを目指せるチームになれば、僕でなくても他のチームメイトが二人を守るだろう。だから、このチームの負の螺旋さえ断ち切っておけば、僕がこの合宿で落ちても、最低限の僕の目的は果たせる。

「さっき言った通りだ。僕はこの合宿でメンバーから外れてもいい。ただ、このままじゃ本番で負けるのは目に見えているからな。せめてそれを指摘することで、このチームに僕の爪痕を残したかったんだ」

「なるほど、じゃあ、もしあの人達が、お前の言葉を受け入れなかった場合は？」

ジュンイチが訊く。

「その時はその時――あとはもう意地のために戦うのみだな。死ぬ直前まで特攻かけて、生き様見せて、死んでやるさ」

「ふ――意地のためか。悪くねぇな、それも」

ジュンイチが肩をすぼめて笑った。

「ユータ、その時は俺とケースケで、お前が世界に名を売るために体張ってやるよ。お前の後ろは俺達が守ってやるから、お前はただひたすらゴールを狙え」

そう言ってから、ジュンイチは僕の方を見る。

「だろ？　ケースケ」

さすがジュンイチだ。もしそうなった時の、僕達がすべきことをよく心得ている。

「――ああ」

僕は胸を張って笑った。

「しかし、それでもやっぱり他のチームメイトの協力はほしいところだぜ」

ジュンイチは天を仰ぐ。

「確かにあの上杉謙信の名文句は、うちのチームに今必要なことばかりだと俺も思うよ。お前の言った言葉、俺もみんなに届いて欲しいと思う」

歴史好きのジュンイチが言った。

「何時も敵を我が掌中に入れて合戦すべし――なのに今日の試合、あの戦力差で初手から後手を踏んで負けてたしな。あれじゃ勝てるわけない。それに死ぬことを恐れて全く仕掛けないもんな、生に執

着する今のままじゃ、オランダで俺達は全員討ち死にだぜ」
「……」
そう言ってジュンイチはシャープペンを指でくるくると回した。
3人とも、こうなったらもう、運命を天に委ねるしかない、というように、部屋の天井を仰いだ。
僕はそのまま、自分の右手に握られている携帯電話を軽く手の中で弄んだ。
シオリと別れる直前、シオリはこの合宿中、僕に連絡は取らない、と言った。
彼女だけは、僕がこの合宿に参加した真の目的を知っている。
友のために、全力を尽くすことで、失った自分への自信を取り戻すため――
「あなたは世界の強豪と戦うんじゃない。自分自身と戦いに行くんだよね。なら私、今はあなたが自分と精一杯向き合って欲しい。その邪魔はしたくない」ということだった。
「……」
その時の僕は、彼女と離れるということに耐えることが、どういうことか、よくわからなかった。
やるべきことはわかっていた。今はそれに集中すべきなのだと思った。
そして、まず当初の目的は果たした。
だが、これが正しい行いだったか、自分に自信のない僕は、早くもよくわからなくなっている。
今の僕は、彼女の目にどう映るだろう。
そんなことを考えていた。
「……」
僕の心の真ん中に、いつも君がいる。
今になってそれを、強く感じた。
この半年の間、僕は君の大きな愛に包み込まれていたんだ。
こうして一人になると迷ってばかりの自分を知って、ふとそんな

ことを実感する。
間違った道を歩んでも、君がそれを止めてくれるからと、僕は安心して道を進むことができたんだ。
――ありがとう。
心の中で、そう呟く。
携帯を弄ぶ手を止める。
今は、君の声を欲する時じゃない。
これからは、一人でも正しい道を見つけなければならない。
そのために、一歩先へ踏み出す勇気を、自分の中に蓄えなければ。
自分を信じるための勇気を持たなければ。
いつか僕が、君を幸せに導けるように。
僕が照らす明かりで、君や友の足元を照らせるように。
――ドンドン、という音がした。
数時間前に聞いた音と同じ。部屋のノック音だ。
「はいはい」
この部屋の住人ではないユータがそれを出迎える。
「入るぞ」
そう言って、一人の男が入ってきた。
マスダだった。
「……」
ユータ、ジュンイチを尻目に、マスダは僕と正対する。
その眼は、先程に比べて僕への嫌悪感は消えている――ように思える。
「お前――お前はフェアじゃねぇよ」
しかしマスダは、いきなり僕にそんな言葉を投げつけた。
「チーム全体として、直さなくちゃいけないことが山積みなのは、みんなわかっている。だから今、みんな色々ない頭絞ってんだ」
「……」
「――言いたいことだけ言って、飯食ってさっさと部屋に帰るな。みんなに全部の責任押し付けるなんて、フェアじゃねぇよ。お前だ

って、チームの一員だろうが」
「……」
僕は横にいるユータとジュンイチを見る。
二人はマスダのその素直じゃない物言いに、笑いを堪えていた。
それを見て、僕もふっと肩の力が抜けた。
「そうだな。悪かったよ」
僕はマスダににこりと笑いかけた。
「さて、僕も食堂で皆とない頭絞りますか――」

その次の日から、日本代表の練習風景は一変した。
どんな練習でも声がよく出て、どこを見ても、選手同士が自分達の戦術について互いに真剣な議論を交わしていた。練習後も、消灯まで皆でサッカーのことを話し、次第にぎすぎすした空気が消え、果ては笑い声が絶えなくなった。
そして、合宿の中日に行われた、ウルグアイ代表との練習試合では、２－１、合宿最終日のセルビア戦では、４－０で日本は勝ち、チームの状態は大きく上向いていった。チームもようやく自分達のサッカーに手応えを感じられるようになり、大きく自信をつけた。
その2試合、ともに先発出場した僕は、1ゴール2アシストの成績を収め、マスコミから絶賛された。ユータ、ジュンイチの間に僕が入ることで、中央の連動性が増し、チームのまとまりがそこを中心に生まれ出したと、専門家は分析した。
そして僕は、合宿後に発表された本戦メンバーに、ユータ、ジュンイチと共に選ばれた。
しかも、本戦で僕は、エースナンバー１０を着けることとなり、同時にチーム最年少ながら、代表のキャプテンに命じられてしまったのだった。

Telephone

目の前でフラッシュを焚かれすぎて、もう僕の両目には、白い残像がいつまでも消えずに残っている。

「サクライ選手、サクライ選手がサポーターから選手を集めて、急造チームで代表チームを破った時から、この代表の雰囲気が変わったと、もっぱらの噂ですが、どのような意図であのような試合をしたのでしょうか」

「あの試合の後、選手同士でどのような話をしたのでしょうか」

「代表キャリアの浅い中、チーム最年少でのキャプテンということで、重圧はありますか？」

今僕は、代表監督、ＪＦＡ会長と共に、代表キャプテンとして記者会見に臨んでいる。

キャプテンなんて、昨日の夜に任命されたばかりなので、何を言えばいいのかなんて、ほとんど考えていない。

それなのに、僕には矢継ぎ早に次々と質問が飛んでくる。

無理もない。僕は代表合宿初日に、サポーターから集めた選手で代表を破るという離れ業をやってのけて以来、この代表の注目度と共に、世間の関心を集めた身だ。この記者会見に引っ張り出されたのも、サポーターが僕の声を聞きたいと、協会への会見の依頼が跡を絶たなかったからだというし。

「ではサクライさん、本戦メンバーのキャプテンとして、ずばり今大会の目標は？」

そんな質問が飛ぶ。

「――難しいですね」

これはサッカーでは非常に難しい質問だ。日本はアジア規模でのサッカー大会なら、過去に優勝の経験が何度かあるが、全世界レベルの大会では、どの世代を見ても、表彰台に上がったことがない。予選リーグ突破、ベスト１６、ベスト８――どれを言っても、帯に

短し、襷に長しな印象は否めない。
「まあ、どうせ予選リーグに出る３２チームのうち、１６チームはそこで消える戦いなんです。初めから生き残る前提でベスト１６とか、８とか言っていると、足もとが留守になりそうだし、そこまで勝ち進んだ時に、もっと上を目指す気にならなくなるんで――具体的にここまで勝ち残るっていう目標は立てていません。まずは世界の舞台で、日本人としての意地を見せることに専念しようと思います」
僕は目の前のカメラを一瞥する。
「逃げ口上を並べるつもりはありませんが、私はまだ若輩者です。この場で多くの方にリップサービスする余裕も、必ずいい結果を出すという確約も、この場ではできかねます。それは他の代表の選手も同じ――若輩故、器量なく、国などという大きなものは背負いかねます。私はキャプテンとして、まず仲間にそう諭し、代表の誇りを捨てさせました。そうしないと、皆、重圧で足が前に出なかったからです。ですから我々はもはや、国の威信を背負って立つ代表選手ではありません。ただの一介の戦士――日本風に言えば、侍です」
「……」
「侍たるもの、強豪に囲まれたグループ、すなわち死地に赴いては、ただひたすらに戦い、死ぬ時は屍を晒すのみ――その覚悟を持って、戦うのみです。それで出た結果がお気に召さなければ、大会後、全ての責を私が負いましょう。先の合宿で、このチームを墓石、そのように作り変えた責は私にありますので」
記者会見の後、僕は一人、背番号１０の代表ユニフォームに着替え、グラビアアイドルを撮影するような仰々しい撮影セットで、写真を何枚も撮られた。
あの合宿初日の代表撃破以来、サポーターの間では、僕は勝利を呼ぶ男扱いで、大会を勝ち抜くために期待を寄せられているらしい。

それ故、勝利を呼ぶ男の僕を用いた、縁起のいいＰＲポスターを作り、大々的に代表を盛り上げようと、協会が企画したのだそうだ。

僕自身は、自分の写真が全国に出回るなんて恥ずかしいので嫌だったのだが。

「はい、ＯＫでーす」

カメラマンから、予定された全ショットの撮影が終了したとの号令がかかり、ようやく開放された頃には、もう6月の長い夕暮れも、とっくに過ぎて、外は真っ暗になっていた。

撮影スタジオからタクシーに乗ってホテルに戻り、自分の部屋に戻る頃には、もう時計は9時を回っていた。

僕は今、一人東京にいる。

代表合宿最終日だった一昨日の夜、大阪の滞在先であるホテルの大広間で本戦メンバーが発表され、その夜のうちに、僕達は荷物をまとめ、一度各々の故郷なり、所属するクラブチームに戻るなりの家路に向かい、2日間の休みを与えられることとなった。そして、二日後に東京の羽田から、世界大会の舞台であるオランダに発つ。

しかし、キャプテンに任じられた僕は、その世間の注目度と相まって、協会に仕事のオファーが殺到してしまった。記者会見や協会の行うキャンペーンの協力など、出立前に仕事をこなして欲しいと依頼された。

よって僕は、大阪からユータ達と共に帰郷したが、僕一人だけ東京駅で途中下車し、出発までの2日を東京のホテルで一人過ごすこととなった。

記者会見用のスーツを脱いで、僕はベッドに倒れこんだ。2週間の合宿を終えて、すぐに東京にとんぼ返りし、この二日、休む間もなく仕事を与えられている。さすがの僕も体に疲れがたまっていた。

「……」

しかし――これでいい。

キャプテンになり、僕はこのチームの責任の大部分を負うように、サポーターに強く印象付けた。これで大会で無残に敗退しても、ユ

ータ、ジュンイチに対しての風当たりは最小限に抑えられる。僕の目的における最低限の根回しは完了したということだ。

あとは――精一杯戦うのみ。

世界の大舞台で、僕は友の思いにどれだけ応えられるだろう。

それを知りたかった。今まで友などというものを、路傍の石程度にしか見ていなかった僕が、どれだけ大切なもののために力を出せるか、試したかった。

今まで誰かを傷つけ、蔑み、陥れるためにのみ磨いた力を、大切な人のために使いたかった。その力で大切な人を守れたら、今までクズとして思えなかった自分のことを、少しだけ許せそうな――好きになれそうな気がしたんだ。

それができたら、僕は過去をゴミ箱へ叩き込む。ユータ達に引け目を感じていた自分を捨てて、ちゃんと二人に伝えるんだ。自分の気持ちを。

「……」

だが、本戦メンバーに選ばれ、キャプテン、エースという重責を負ったことで、僕の心も妙にざわついているのも事実だ。

今更緊張しているのだろうか――朴念仁のこの僕が？　はは、そんな感情を僕が持っていたのか。そんなことが、少し笑えた。

こんな気持ちも、この半年、知らず知らずのうちに学んだことなのかな――

――あ、そうだ。今日一日、携帯の電源を切りっぱなしだったんだ。

僕は起き上がって、スーツのポケットから携帯電話を取り出し、電源を入れて、まずセンター問い合わせをした。

すると、メールが3件受信される。ユータとジュンイチの帰郷報告らしきメールと――

もう一通は、代表の元キャプテン、マスダからだ。

「……」

僕はベッドに寝転がり、仰向けになってそのメールを開いてみた。

『お前の記者会見、さっきニュースで見た。
正直、お前にあの試合で負けた時から、言わなきゃと思っていたことがあるんだが、
戦いが始まる前に、もやもやは残したくないんで言っておく。
俺は正直お前に力を見せ付けられて悔しいが、
お前に教えられた、戦いの心意気を思い出したことで
今改めてサッカーをすることの喜びとか、楽しさを感じられるようになってきたと思う。
きっとそれはみんな同じで、だからお前をみんなキャプテンに命じたんだと思う。
悔しいが、その点については、どうもありがとう。

追伸――
試合に負けても、一人で責任を背負い込もうなんて思わないでいいぞ。
お前が死ぬ時は、チーム全員死ぬ時だって、もうみんな腹は決まっているからな
多分、ヒラヤマとエンドウもな』

「……」
ありがとう、マスダ。
最初お前が僕に文句を言いに来た時は、先が思いやられたが、今では僕にそう言ってくれるようになるとは。
マスダだって、今まで誇りをもってやってきたキャプテンを、新参者で年下の僕に譲るのは面白くないはずだ。なのに――
柄でもないが、ちょっと嬉しかった。
僕はマスダに、感謝のメールを打とうとした。
しかし、その矢先に持っている携帯がぶるぶると震えた。
僕は携帯の通話ボタンを押して、耳に当てる。

「――もしもし」
疲れのせいか、少しぶっきらぼうな声が出た。
「――もしもし？」
受話器の先から、鼻にかかるような、甘く優しい声がした。
「……」
それは、２週間振りに聞く声だった。
「シオリさんか？」
僕は寝転がりながら、目を開く。
「よかった、やっと通じた」
「ごめん、ちょっと色々仕事で、電源切ってたから」
「うん、わかってる」
「……」
ゆっくりと喋るシオリの喋り方を、噛み締めるように僕は聞いていた。
たった二週間声を聞いていないだけだけど、何だか彼女の、久しぶりで少し照れたような感じの声を聞くと、なんだか胸がじんわりと暖かくなるような、それでいて、きゅっと胸を締め付けられるような、そんな胸の疼きを感じた。
「代表決定、おめでとう」
「おめでとう、なのかな……」
僕は考えを反芻する。僕は初めから、自分がメンバーに残るとか、そう言うことをあまり考えずに合宿に参加したので、おめでとうと言われても、あまり実感が湧かなかった。
「明日、オランダに出発なんだってね。今日学校でエンドウくんから訊いた」
「ああ、久し振りなのに、また明日から、電話もできなくなっちゃうな……」
「ううん、しなくていいの」
「え？」
「……」

沈黙。
「その――今日は、おめでとうって、伝えたかっただけだから……」
「……」
「……」
また沈黙。
「わかった。お互い電話だけだと、辛いもんな」
「え？」
「これ以上声を聞いていると、会いたくなっちゃうもんな」
「……」
「今君も、そういう風に思って、電話を切りたがっているのなら、嬉しいよ」
「……」
「――なんて、柄でもないな」
バカップルの会話だ。僕は照れ笑いでかき消す。
「――会いに行くよ。全部終わったら」
「――うん、待ってる」
「ああ」
「……」
沈黙。
「じゃあ――切るね」
「あ、待って、最後に一言だけ」
沈んだ声の彼女を、僕の声が制した。
「僕――もっと男を上げて帰ってくるから。そしたら君に――伝えなきゃいけないことが沢山あるから。帰ったら、それを聞いて欲しい」
「……」
「あと、これから暑くなるけど、冷房使いすぎて、風邪をひくなよ」
「――うん、わかった」
「……」
お互い、しばらく沈黙した後、名残惜しさを断ち切るように、ど

ちらからともなく、電話を切った。
「……」
胸がかすかに波打っていた。
たった2週間、声を聞かなかっただけなのに。
疲れているはずの体が、ぽかぽかと暖かい。
その温もりが、何だか僕に、心の質量の変化を感じさせる。
一体、この2週間で、僕の心に何が起こったのだろう。
ただ2週間、会わなかっただけなのに――

――次の日、僕は羽田でユータやジュンイチ、代表スタッフと合流し、日本を後にした。
――この旅路が、この後の僕の栄光と転落の日々の始まりであることを知るよしもなく。

Ｔｅｌｅｐｈｏｎｅ（後書き）

一体最近何が起こったんでしょうか。特別なことはしていないのに、いきなり一日のアクセス数が通常の数倍に膨れ上がって、初めて一日２００００アクセスを達成してしまいました。

皆さんの応援に感謝する反面、とても驚いております。

Newspaper

「うお……」

僕はオランダに出発前、空港で自分の手持ちキャッシュをユーロに両替しに両替所に来ていた。

そして、まず日本円を下ろそうと、ＡＴＭで残高照会した時、思わず声が出た。

僕の口座には、既に見たこともないような預金額が記録されていた。２週間の代表合宿、その間の２試合のフル出場給、勝利給、全て含められた額が、既に僕の口座に振り込まれていた。事前に告知されていたとはいえ、その額は実際振り込まれているのを見ると、僕を大いに驚かせた。

３ヶ月前も、僕はデンマーク、コペンハーゲンで行われた数学オリンピックのために、ユーロ両替を行ったが、その際はアルバイトを辞めたばかりでお金に余裕がなく、他の出場者達と観光にも行けず、自分で買えるものは水しかないという有様だった。後のお金は全て滞在先のホテルスタッフへのチップで消え、シオリに土産のひとつも買ってやれなかった。

僕は思わずほくそ笑む。

中学を卒業してから、僕はこの３年間、金に困らなかったことがない。

俗物と言われるかもしれないが、そんな僕が、今ようやくこの悩みから解放されたのだ。

それが嬉しいという感情とは、ちょっと違うと思うけれど……

ただ、金があるということは、僕の人生の可能性が、ほんのちょっと広がるということだ。

天才、時代の寵児と言われても、僕はこの貧困のために、自分の可能性を狭めざるを得なかった。美味しいものも食べられず、誰かと遊ぶこともできない。

金を節約するために、食べて、机に向かい、そして寝る――
それだけで、人生という茫漠たる時間を潰した。
僕の人生とは、それだけの人生だったんだ。
そんな毎日を送っている時、敢えて考えないようにしていたけれど。
やっぱり僕も、もっと色々なことがしてみたい。美味しいものも食べてみたいし、色んな景色を見てみたい。今までは学べなかった、世界中の不思議なことも理解したいし、挑戦したいことだってある。
そしてそんな毎日を、大切な友達や、愛する人と共有することができたら……
もう、何も言うことはない。
このお金を見て、そんな毎日にまた一歩近付けたような気がした。
客観的に見れば、実に小さな一歩だろうと、自分でも思う。以前は誰も追いつけないところまで、全速力で駆け抜けてやろうとしていた僕が、こんな蠢動のような一歩を噛み締めるなんて、自分でもおかしいと思う。
だけど……
この、気持ちは――
「――あの、お客様？」
「え？」
両替窓口の女性に呼び止められ、僕は我に返る。
「す、すいません。えっと――ここにサインでしたね」
僕は両替のための簡単な書類に、持っていたボールペンを走らせ直す。
「――あの、お客様、あの、サクライ・ケースケさん、ですよね？」
書類に自分の名前を書いている時、目の前の女性が僕に話しかけた。
「これから大会なんですよね。頑張ってくださいね。私達も応援してますので」
「……」

そうだな、頑張らなくちゃいけない。
感慨に浸るのはまだ早い。
まだ僕は、あの二人を、ちゃんと『友』と呼べていないんだから
まだ僕は、あの娘に、自分の気持ちをちゃんと伝えていないんだから。
「おーいケースケ、両替は済んだか？」
折節、ユータとジュンイチが両替所に、僕を迎えに来た。

飛行機で約１８時間の旅路――僕はほとんど寝ていた。さすがに僕だけ休みがなかったため、疲れがピークだった。
首都アムステルダムに到着すると、僕達はバスでそこから程近いユトレヒトへ移動し、そこでキャンプを張ることとなった。
日本は既に梅雨入りし、少し動くだけで汗をじっとりとかくようになったが、それに比べるとオランダは幾分涼しい。オランダは緯度的には北海道よりも高い場所にあるから、真冬は氷点下がデフォルトの寒冷な国だ。オランダより更に高緯度の、北欧デンマークに行った時は、まだ2月だったから、一面が銀世界で、交通も停滞しており、スキーにすら行ったことのない僕にとって、生涯最高の寒さだった。雪に埋まった街を、僕は初めて見た。
「オランダかぁ。俺、この日のために、デジカメ買っちゃったぜ」
おそらく僕と同じくらいの給与が振り込まれているだろうジュンイチが、バスに乗ってから最新型のデジカメを構えて、窓の外の景色を撮っている。
「オランダって、結構日本と共通点あるのかな。江戸時代、鎖国中でも交易した国だし、蘭学なんてものが盛んだったって言うしな」
歴史好きのジュンイチは、大いにオランダを満喫しているようだった。
オランダは小さいながらも、世界的に見てもサッカーの盛んな国のひとつだ。これからこの国の至る所にあるスタジアムで、各大陸

の予選を勝ち抜いた32チームが予選リーグを戦う。
　ホテルは3人で一部屋の編成で、僕は勿論、ユータ、ジュンイチと同室となった。
「うーっ、一日移動だったからなぁ。俺は今日はゆっくりしたいぜ」
　部屋に着くと、ユータがネクタイを緩めながら、大きく伸びをした。
「しかし、バスで移動してる間、至る所にサッカー関連のポスターやらを見かけた。どうやら国中でこの大会を運営するだけあって、国民も盛り上がっているようだな」
　この大会は、20歳以下の選手のみで行われる、ワールドカップなどと比べると小規模な大会だが、世界中の強豪が集まるだけあって、ヨーロッパなどでは注目度が高いようだ。大会出場選手には、既にスペインやイングランドなどのビッグクラブでプレーしている若手も沢山いるし、世界中のクラブスカウトが、金の卵を発掘しにその目を光らせている。この大会は、勝敗よりも、そんな新星の品評会としての意義の方が大きいと思われる。
「……」
「ん？　ケースケ、何読んでるんだ？」
　ユータはベッドに腰掛ける僕の方を見る。
「あぁ、空港で買った英字新聞だよ」
　オランダは公用語がオランダ語なのは当然だが、このあたりの国はマルチリンガルがかなりいる。さすがの僕もオランダ語やフランス語は専門外だが、英語なら十分いける。
「僕達の記事も結構出てるぜ。読んでみろよ」
　そう言って僕は、ユータに英字新聞を渡す。
「こ、これは……」
　ユータは英字新聞の記事に目を通すと、目を見開いた。
「――読めねぇ」
「……」
「ですよねー」

ジュンイチが大笑いした。
「――お前、いつか世界でプレーする気なら、今のうちに語学は何かやっておけよ。中田は高校からもうイタリア語を勉強してたっていうぞ」
僕はユータから英字新聞を取り返す。
「で？　何が書いてあるんだよ」
ジュンイチが訊いた。
「そうだな、ヨーロッパ名物トトカルチョの倍率とか、各チームの監督のコメントとか、グループの勝ち上がり予想とか、色々だな」
サッカーを知らない人のために言っておくが、トトカルチョはイタリア語だ。カルチョはサッカーという意味で、ヨーロッパでは昔からサッカーによる賭け事が盛んだ。
「ま、詳しいことは後でミーティングで話すよ」

「……」
ミーティングの壇上で僕の話を聞いて、選手達は怒りを滲ませた。
僕の説明した英字新聞の記事内容はこうだ。
まず、今大会優勝予想の公式トトカルチョで、日本の倍率は、３２チーム中最悪の１２７１倍――大穴中の大穴になった。僕達と同じグループのフランスは、全体４位の７倍、チェコは１２位で２７倍、メキシコは１５位で５３倍だった。
これを反映するかのように、僕達のグループの勝ちあがり予想は、まずフランスが順当に一位通過、チェコとメキシコが熾烈な２位争いを行うとされており、日本の最下位はもはや言及さえされていなかった。日程の最後にチェコとメキシコの直接対決があり、この試合の勝者が勝ちあがることとなるだろうとしている。
初めから日本はグループの数に入っておらず、このグループは三つ巴の様相であると宣言されたようなものだ。
それを反映するように、３国の代表監督も、日本に対して屈辱的

な言葉を残している。僕達と緒戦で当たるメキシコは、「日本は予選の映像を見たが、脅威に感じるシーンはなかった。だが油断は禁物、勝っていい流れで大会に入っていきたい」という監督のコメントが載せられていた。非常に相手に敬意を払ったような物言いだが、つまるところ、日本は踏み台扱いである。

「――ちくしょう」

誰かが声を漏らした。

「お前達、この記事を見て何も思わないのか？」

先頭に立つ僕は、選手達を一瞥した。

「……」

選手達は首を傾げる。

「仕方ない、じゃあヒントをやろう」

僕はミーティング室にあるホワイトボードの前に立ち、マジックで『フランス』『チェコ』『メキシコ』『日本』と書いた。

「いいか、このグループで自他ともに認める、戦力の突出した国はフランスだ。フランスは多分このグループを全勝突破してもおかしくないと思う」

僕は一番上のフランスの横に『3勝』と書いた。

「次に、日本――新聞に書いてある通り、このグループは日本に勝てなければその時点でその国は終わりとまで書かれている。ということは、僕達はこうだ」

僕は一番下の日本の横に『3敗』と書いた。

「さて、問題はここ――最終戦でチェコとメキシコが当たるということは、それまでにこの2国はどちらも、日本、フランスと戦っている。そうなると、当然結果はこう」

僕はチェコとメキシコの横に、『1勝1敗』とそれぞれ書き足した。

『おそらく僕達以外の3国は、このグループにこういう青写真を描いているはずなんだ。で、この2国のどちらかが2位で通過できるか――結局それは最終戦頼りとなる。勿論ここで勝てたら万々歳だ

が、見る限りこの2国は実力が拮抗している。当然引き分けということも相手は想定している』

僕はチェコ、メキシコの横にそれぞれ書いてある1勝1敗の横に『1分け』とそれぞれ書き足した。

ホワイトボードに書かれた文字はこうなった。

フランス　3勝
チェコ　1勝1敗1分け
メキシコ　1勝1敗1分け
日本　3敗

「さて、これを見て、何かわかったか？」

僕はもう一度訊く。

「――この状況まで追い込まれたら、点数は得失点差で決まる」

そう答えたのは、後ろの方の席に座っていたマスダだった。

「その通り。言い換えれば、チェコとメキシコは日本戦で多く点を取ったチームが勝つ」

僕はマジックでマスダの顔を指す。

「つまり、この2国にとって、日本戦はただ勝てばいいという問題じゃない。大差を付ければ付けるほど、自分の勝ちあがる可能性が大幅にアップする。いわば日本戦は、最終戦、引き分けになった時の保険の意味を成している」

「……」

「僕達の試合、この2国はもう守備なんてことは考えていない。攻撃的な思考で臨まれると思う。特に緒戦のメキシコは、早々に保険をかけておきたいというのと、チェコにプレッシャーをかけたいという思惑から、その姿勢が顕著に出るだろう」

僕はにこりと笑った。

「思い出したくないだろうが、つい先日のお前達と同じことを考えているはず」

「ちっ」
誰かが舌打ちした。
僕が言う、つい先日、とは、当然代表合宿で僕が率いる寄せ集め軍団に惨敗した試合のことだ。
あの試合も、大勝しなければ見ているサポーターから批判を受けるということで、攻めを焦っていた代表は、それを僕に見抜かれ、僕の手の内で踊った。
「何時も敵を我が掌中に入れて合戦すべし――ここまで相手の思考、出方がわかっていれば、相手の嫌がる手はこちらも打ちやすい。それに、向こうはついこの間までやっていた僕達の代表合宿での出来事をほとんど知らないはず――相手を陥れるには、かなりいい材料が揃ってる」
「あぁ、なるほど！」
選手達は途端に頷きだした。
それを見て、僕は手に持っていた英字新聞を軽く叩いて見せる。
「ここまで馬鹿にされた以上、相手を手の内で転がして戦えたら、きっと痛快だぞ。どうだ、ちょっとはやる気出たか？」
僕はシニカルな笑みを作る。
「ああ、やってやろうぜ！」
マスダが立ち上がった。
「日本人の意地、見せてやろうぜ！」
マスダの声はよく通る。その声に鼓舞され、選手達は、おお、と声を出し、次々椅子から立ち上がった。
「よし、じゃあやる気が出たところで、監督も交えて作戦会議といこう」
僕は監督に壇上を譲り、自分の席に戻った。
「作戦といっても、じゃあまた緩いパス回しで、相手をイラつかせる作戦か？」
ジュンイチは訊いた。
「ワンパターンな戦術だが、それは効果があると思う。序盤の試合

の主導権も握れるし――弱点らしきところを作っておけば、まずかかるだろう。だが今回はそれだけじゃ足りないな――さすがに世界相手にそんなチャチな手は９０分は持たないし、どのチームも試合を選手だけで修正できるだけの力はある。どこかで奇襲をかけたいな――」

Leader

夕方の長いミーティングを終えて、一度小休止のため、部屋に帰る。ホテルに用意された食事を摂り、食事の後は一度部屋に帰ってそれぞれシャワーを浴びるなり、一時間の休憩。それから対戦相手のビデオを見て、戦術討論が残っていた。

夕方のミーティングでは、選手全員が勝つために真剣な議論を交わした。合宿途中の練習試合の時からそうなったが、このチームはようやく勝つために一枚岩になることができたようだ。

「あー、つっかれたぜぇ」

日本からの長時間移動のため、今日は練習はなかったのだが、ミーティングが長く続いたため、3人とも気だるい疲労を背負って部屋に戻り、手近のソファーやベッドに座った。

「誰かシャワー浴びたければ、浴びろよ」

僕が言った。さすがにオランダのホテルに大浴場はない。部屋の小さなユニットバスしかないのだった。

「いや、いいや」「俺もまだいい」

だが二人とも現時点ではシャワーを浴びなかった。どうせこの後少し休んだら、また対戦相手のビデオとにらめっこなのだ。なら少しでも体を休めておくことを選択したようだ。

「……」

沈黙。

「ひとつ訊いていいか？」

僕の座る椅子の目の前のベッドに座るユータが僕に話しかけてきた。

「ん？」

「もしかして、あの合宿でお前がサポーターを指揮してやった試合って、単に他のみんなの問題点を指摘するだけじゃなく、このグループリーグを想定してのことだったのか？　大勝しか狙わせない状

況を作り出して、本戦での相手の考えをトレースさせてやる目的で、あの試合をやったのか？」

「ああ、そうだよ」

僕は言った。

「彼を知りて、己を知らば百戦して危うからずとも言うし、まず相手が日本戦、どんな気持ちで臨むかを疑似体験させてやろうと思ってな。一度相手の気持ちに立つと、相手の嫌がることも色々想像がつくだろ？　おかげで今日のミーティング、みんな結構戦術の意見が出た。きっと予選、そこそこ皆いい試合すると思うぞ」

「――そこまで考えていたのかよ」

ユータは呆れ顔だ。

「マスダさんがお前にキャプテンを譲った理由もわかるぜ」

「……」

僕は嘆息した。

「――僕自身は、自分は人の上に立つ人間としては適さないと思っているけどな」

僕はユータにそんな返事を返す。

「人の上に立つ人間は、少しは夢想家である方がいい。下の人間に夢を見せることが、人の団結を生むからな。だが、それに比べると僕は思考や言葉が現実的過ぎる――基本的に僕は副将タイプだと思うぞ」

そう、僕を知る人間は、僕が一応頭がそれなりに切れることを知っている。

だから僕が未来の予測を立てたりすると、それが酷く現実的に聞こえてしまうようだ。僕の言葉は、人に夢を見せる力に欠けている。周りの人間を不安にさせるには十分の力があるのにも拘らず、だ。

本当は、そんな夢想家のリーダーの理想論を、現実的思考に立つナンバー2が支え、理想を形にするという形が、組織が成り立つ上での一番の理想であると僕は思う。そして、最も重要なのは、リーダーがが猜疑心の弱い人間であること、特にナンバー2の人間の野

心を疑わないことだ。その条件が揃えば、組織というのは大体が上手く成り立つと思う。

「ま、お前の尊敬する諸葛孔明も副将タイプだしな」

ユータの隣のベッドに座るジュンイチが言った。

「孔明か……」

僕はその名前を口にする。

卑しくも僕はその孔明の通り名『臥龍』を受け継いではいるけれど――

「僕は、歴史上の人物にたとえれば、石田三成に似ていると思うよ」

僕は言う。

「能力も高い、志もある。だが歯に衣着せぬ物言いが他人に好かれず、多くの人に嫌われ、誤解される――」

石田三成は関が原の西軍の総大将だ（実際の西軍の総大将は当時の実力者、毛利輝元だったのだが、戦場に毛利が参陣しなかったために、発起人の三成が総大将となった）。兵力では東軍の徳川家康以上の頭数を揃えていたものの、戦っているのは一部の武将のみで、他の武将には日和見を決め込まれてしまった。西軍には家康に内通している者も多く、最後は味方の裏切りで敗れた。

三成は、主君の豊臣秀吉が死に、後継者の豊臣秀頼が幼かったことで、豊臣家の未来を真に案じた人間だった。なので、秀吉が死んだ後、野心を露にする家康と対立したが、その志あっての行動が、多くの人に理解されなかった。理解されないまま、奸臣の烙印を押され、味方に裏切られ、関が原に散った。

「僕みたいな憎まれ役は次席の方がいい。無理に上に立とうとすると、周りが混乱する」

「――確かに。お前は三成に似ているかもしれないな。人付き合いも下手で、立ち回りの駆け引きも知らない。お前がリーダーに向いていないっていう自己分析も、ある程度同感だな」

ジュンイチは言った。

「だが――それがわかっていても、今回キャプテンを引き受けたの

は、何故だ？」

「……」

「現実派のお前が、味方を鼓舞しようと、周りに夢を見せようと、夢想家の振りなんて、キャラに似合わん無理までして」

――ジュンイチは気付いていたのか。僕がこの代表に参加した時から、少し自分を演じてでも、周りに希望を与えようとしたことを。

「優し過ぎるんだよ、お前」

僕が頭の中で答えを言語化する前に、ジュンイチが言った。

「お前の将来が不安だぜ、俺は。この大会の後、お前が何を思っても、お前の力に夢を抱く奴は必ず出てくる。その時お前はどういう立ち振る舞いをするのかね」

「……」

「お前はリーダーには向いていない。俺もそう思う。だがお前の言うような理由じゃない。お前は甘いから、他人に心配をかけないように、何でも自分ひとりで背負い込もうとしすぎ――今回みたいに短い期間ならまだしも、ずっとそんな立場にいるとしたら、いつか疲れて、潰れちまうぞ」

「……」

「かといって、お前を副将として使いたがる奴なんて、そうはいない。お前の力を引き出せる器量のある主なんて、そうそういるもんじゃないだろうし、むしろお前が下についたら、そいつはお前にその気がなくても、お前の野心に恐々として過ごさなくちゃいけないだろうからな。奸臣扱いされて、遠ざけられるのがオチだ。どちらの道を選んでも、お前の苦労は絶えないだろうな」

「……」

それは僕もわかっている。まだ僕には、足りないもの――知らないものが多過ぎるんだ。それがある限り、たとえ力があっても、この世界で何かを成し遂げるのは困難だ。世の中は、そうやって煩わしくできているのだ。

できればそれが何なのかわかるまで――自分がどの道を歩み、ど

うやってこの力を、僕の望む未来のために生かすのか、それがわかるまで、もう少し大人しくしていたかったところだが……

だが、今はそうも言っていられない。友の窮地だ。今の僕にも、何かできることがあるだろう。そのためには、多少の負担くらい厭わない。

「ま、何にしてもだ」

難しい話の流れに、しばらくついて来れなかったようだが、ユータが場を仕切り直した。

「お前が自分がリーダーに向いていないことを知ってまで、今こうして俺達と同じ戦場に立ってくれて、慣れないことまでしてでも、勝つために必死でやってくれている――俺は今はそれで十分だと思うよ」

そう言ってから、ユータは隣のジュンイチを見た。

「ジュンも結局はそうなんだろ」

「まあな」

ジュンイチもユータの単純な論に同意した。

「お前が何を思ってここに来たかは知らんが、お前が来てからこの代表で充実した日々を送れている。お前がいなかったら、今頃負け戦だとわかっていて戦場に行く、暗ーい気分だっただろうしな」

そうジュンイチが言うと、ユータとジュンイチが僕の方を向き直し、背を正して、同時に頭を下げた。

「ありがとう」

そう言った。

「……」

二人の下げられた頭を見て、僕はなんだか、出鼻をくじかれたような気持ちになった。

この二人はまだ知らないだろう。今の僕が、どれだけお前達に感謝しているか。

――この場で言ってしまおうか、僕も。

いや、まだだ。

まだ足りない。今まで僕がこいつらに受けてきた恩に比べたら、僕はまだそれの、数分の一も返していないから。

「――まだ僕に頭下げるなよ」

僕の口から、意地を張った声が漏れた。

「僕達の人生はまだ長い。若いうちから黒星発進はしたくないだろう」

僕がそう言うと、二人は顔を上げた。

「だから、勝つぞ。絶対に」

「――ああ、そうだな」

「よっしゃ！　勝って勝って勝ちまくって、世界に俺達3バカトリオの力、見せてやろうぜ！」

「ああ、ついでにそれでユータを世界のサッカークラブに売り込めりゃ、最高だな」

「ついでかよ」

そう決意を新たに、僕達は笑った。

――だけど、この時のジュンイチの言葉は、数年後――大人になった僕に、何度も突き刺さるんだ。

その時の僕は、もう……

――それから4日後、僕達はアムステルダムのスタジアムで行われた開会式から明けて一夜、滞在するユトレヒトのスタジアムで、グループ初戦、メキシコ戦を迎えていた。

ロッカールームで戦術を確認。そして、今は僕を先頭に、日本代表は選手入場口にスタンバイしている。僕の青い日本代表のユニフォーム、その右腕には白いキャプテンマークが巻かれている。

「Ｈｅｙ！　Ｙｏｕ’ｒｅ　ｐｒｅｔｔｙ　ｇｉｒｌ！　Ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ｄａｎｃｅ？」

隣にはメキシコ代表の選手達がいるけれども、どうやら僕が女に見えるらしい。そんな声を何度かかけられた。確かに僕は身長、体

重共に、女性でもおかしくない体格だ。外人が見れば、余計にそれが際立って見えるのかもしれない。

僕の目の前には、フラッシュの焚かれる満員のスタンドと、まだ誰にも踏み荒らされていない、綺麗な緑の芝生が広がっている。

けたたましい音楽と共に、選手入場口からでも、耳を劈く完成を合図に、僕達はピッチに入場する。

フラッシュが多過ぎて、スタンドまで距離があるのに、目がちかちかする。

「サクライー！」「サクライくーん！」「頼むぞー！」

わざわざオランダまで、この代表の試合を見に来ている日本人も多い。僕の名前を呼ぶ日本語が僕の耳にも届いた。この試合、僕の背番号１０の初お披露目だから、嫌でも目立つのか。

君が代を聴いて、イレブンの記念撮影を終えた後、僕はセンターサークルでコイントスを行う。コインは表を向いて、僕達にボールが与えられる。

それから僕達は自陣で円陣を組んだ。

「いいか！　もう勝つとかそんなことは二の次、相手の名前も忘れてしまえ。僕達はここに戦いに来たんだ！　戦って、戦って、負ける時は全員ここに屍をさらすのみ――だが、皆一人じゃない、死ぬ時も生き残る時も、全員一緒だ。苦しい時は周りを見ろ！　仲間の名を呼べ！　今この場で定めた、自らの運を信じろ！」

僕の言葉に、選手が、おお！　と大喝する。

「よし、行くぞ！」

僕の号令で、選手はピッチに散る。

僕もトップ下、自分のポジションに立つ。

そこでひとつ深呼吸。試合開始は午後６時――サマータイムが導入されているから、時計が少し進んでいる。空はまだ薄暮が残っているけれど、日はほとんど沈んでいて、スタジアムは照明に煌々と照らされている。６月下旬だというのに、空気は涼しいくらいに爽やかだった。

そして、僕は自分の右手首に巻かれている、3色のミサンガに目をやる。

「……」

サマータイム時のオランダの18時は、日本でいう夜中の1時だ。多分日本でもこの試合はテレビで放送されているだろうが――彼女はまだ起きているかな。

――きっと、彼女は起きているだろうな。明日学校があるだろうに、それでも試合終了までこの試合を見て、ほとんど寝ないまま、学校に行くんだ。

何故だか知らないけれど、僕はそう確信した。もしかしたら今この瞬間、彼女が誰かと浮気しているかもしれないとか、そういうことはこちらに来て、連絡が途切れても一度も考えたことはない。

僕はミサンガを巻いた右手を胸に当て、自分の心臓の鼓動を確かめながら、軽く空を仰いで、目を閉じた。

――きっと、この試合を君に見ていて欲しい、きっと見ているだろうなんてのは、僕の単なる願望。

君がこの試合を夜更かしして見ているか、もう眠ってしまったかはどちらでもいい。

ただ……

この試合が終わるまで、君のその花のような笑顔が、どうか色褪せぬように。

どうか、どうか――

それだけを数秒祈って、僕は目を開けた。

彼女の笑顔を守れるだけの力が欲しいと、僕は強く願った。

その3秒後に、ホイッスルが鳴る。

キックオフを受けたユータは、ボールをまず後方へ戻す。

それと同時にユータは、一直線に前に走り出した。

後方に下げられたボールをジュンイチが受ける。そしてそのままペナルティエリアのやや前方を狙って一気にロングボールを放り込んだ。

その頃にはユータはもう落下地点まで走りこんでいる。メキシコのディフェンダーを二人背負って、ユータは高くジャンプし、ボールを後方へを落とす。

そのこぼれ玉は、ユータと同じくキックオフと同時に前に走り出していた僕が、バイタルエリア、トップスピードに乗ったままトラップすると、ユータと一緒にジャンプしたディフェンダーが着地をしている間に、ドリブルで一気に抜き去った。

キーパーと一対一になる。キーパーは慌てて僕に突っ込んでくるが、僕はそこからキーパーの頭上を越えるループシュートをふわりと放った。

ボールはキーパーの頭上を越え、無人のゴールに転々と転がっていった。

まだ試合開始と同時の歓声も収まっていない中、スタンドは再び歓声に包まれる。試合開始から僅か8秒――電光石火の先制点だった。

「しゃあああああああ！」

僕も柄にもなく、大きく叫んだ。

ゴールを決め、僕は日本サポーターのいるスタンドに向け、笑顔で右手を突き上げた。サポーターが歓喜に沸く中、僕は駆け寄ってきたユータとジュンイチに後ろから抱きつかれ、ピッチに倒された。

「うおおお、ケースケェ！」

ジュンイチが僕の頭をくしゃくしゃにした。

いままで敗戦濃厚と思われた日本が、あっという間の攻撃で点をもぎ取った。

勿論この奇襲は、事前に示し合わせてのものだ。相手はこの試合、大量得点しか考えておらず、まだ守勢に回ることは考えていない。おまけに僕という、データ不足の選手がいる。どうしても僕に対しての守備は、序盤は探り探りになるはず――

だから、奇襲をかけるには、試合開始直後が最良だと思った。序盤で相手のゲームプランをぶち壊し、僕達が優位に立つには、この

試合開始直後のゴールを狙うのが、一番確率が高いと判断したのだ。
このゴールは、世界を驚かせるのにインパクト十分のゴールだった。
そしてこのゴールはオランダで、日本チームの快進撃の狼煙にもなるのだった。

Ｌｅａｄｅｒ（後書き）

ちなみに、このグループリーグの組み合わせを、フランス、チェコ、メキシコにしたのは、いわゆるサッカーの盛んな西欧、東欧、南米からそれぞれ１チームバランスよく選んだだけで、別にこれらの国を差別するわけではないので、ご了承ください。

結構この小説は、実在の地名や国名も出てきますが、それが人種などの差別だと思って書くことはありませんので、あらかじめご了承ください。

チームメイトも笑って僕を出迎えた。チーム一体の小さい僕はもみくちゃにされる。

「まだまだ！　これから相手は目の色変えて攻めに来るぞ！　気を抜くなよ！」

僕は自陣に戻りながら、声を出し、気持ちを切り替えさせる。

センターサークルでは、メキシコの選手が早く攻めたくて仕方がないという顔で、既にボールをセットしている。

審判が試合再開を指示すると、メキシコの選手は余裕を失った顔で、キックオフする。

やれやれ、まだ９０分もあるのに。一点取られて焦る時間でもないだろうに。

ま、それも計算していたんだけどね。この代表チームっていうのは、２０歳以下の選手しかいない。つまりそれだけチームに若さ、青臭さが出やすいんだ。まさか開始１０秒も経たないうちに、自分達が先手を取られるなんて思っていなかっただろうし、ましてそれが攻めたがっていたチームなら尚更だ。こういう大勝狙いのチームには、１点でも２点３点の重みとして感じられるものだ。

メキシコは、南米といっても身体能力で勝負するチームではない、スピードのある連携で勝負してくるチームだ。キックオフの後、すぐにサイドにボールを振って、僕達のサイドラインを抉ってくる。

「いらっしゃいませご主人様ぁ！」

しかしそのスピードに乗った攻めを、ジュンイチが苛烈なスライディングではじき返し、ボールはサイドラインを割った。

「へへっ」

「――何だよ今の変な声は」

近くに駆け寄った僕がジュンイチに手を貸し、体を起こさせる。

「へへ、いい機会だから、この際日本の文化をサッカーを通じて伝

えようと思って？」
「……」
お前みたいな日本人がいるから、日本文化に間違った解釈をする外人が減らないんだ。
だけど――
「ま、悪くないな」
僕は言った。
別にその日本文化が、という意味ではなく、常に高いテンションで試合をすることは、悪くはない。
スローインからメキシコの再攻撃が始まる。中央にボールを預け、そこから次の攻撃の展開を狙う。
「よし、来い！」
後ろのマスダが声を上げる。
足を目一杯伸ばして、マスダはペナルティエリア近くで相手の攻撃を跳ね返した。
こぼれ玉をジュンイチが拾う。
「ケースケ！」
ジュンイチがボールを前方の僕に預ける。もう一度こちらのカウンターだ。
相手はワンボランチ――僕を待ち構える。
「いらっしゃいませー！」
僕も声を上げていた。
序盤からアドバンテージを貰い、まずは日本の意地を世界に示した。
これからの頑張り次第で、僕達は世界中を驚かせることができるかもしれない。
さっきまで僕達を馬鹿にしていた奴等に、一泡吹かせることができるかもしれない。
そんな、負け戦をひっくり返すようなスリルが、僕のアドレナリンを活性化させていた。

今日は思い切りサッカーを楽しめそうだ。
ボランチの選手を、ルーレットをかけてかわす。春風ルーレットと呼ばれる僕の得意技だ。
日本は僕が加入するまでは、コミュニケーション不足からか、連携が伴わず、速い攻撃ができなかった。だが、ふたを開ければいきなりスピードを生かした攻撃をされ、相手は今まで研究してきたチームとは、別のチームを相手にしているような感覚に襲われている。ボランチも、こんな一瞬で抜かれるとは思っていなかったのだろう、ほとんど反応さえ出来なかった。
ディフェンダーも、体勢を立て直そうにも、ボランチが一秒たりとも僕の足を止めてくれなかったために、あたふたしている。研究していたチームでは、自分達がまさか開始早々ここまで守勢に回るとは思っていなかった証拠だ。
ユータに目で合図を送る。
僕はディフェンダーの間を通すように、グラウンダーのパスを出す。僕がボールを蹴ると同時にユータはオフサイドギリギリでディフェンスラインの裏へ抜け出し、完全にフリーでボールを受けられる体勢を作っていた。
しかし、相手ディフェンダーはユータに裏を取られたことで、もう一点を確信したのか、横をすり抜けるユータのユニフォームの裾を思い切り引っ張って、ユータを止めた。ユータはそのまま仰向けに倒される。
当然これはファールだ。おまけにディフェンダーにはイエローカードが出る。日本はゴール正面２２メートルという絶好の位置でのフリーキックを得る。
日本サポーターは、確実に一点入っていたという状況にも拘らず、大歓声だ。
「一点損したな」
僕はユータの許へ駆け寄り、ボールを貰う。
「だがサポーターは、それでも一点を確信しているようだぜ。お前

のフリーキックのな」

そう、埼玉高校での僕は、「サクライに25メートル以内のフリーキックを与えたら、一点を取られたも同じ」と評価されている。サッカー雑誌の統計では、角度を問わず、僕にゴール25メートル以内のフリーキックを与えたら、8割は得点が入るという記録が出たらしい。

僕はボールを置く。代表合宿で、僕は左利きという利点もあり、代表でも近距離でのフリーキッカーを任された。

壁は五枚、だが僕には関係ない。

僕のフリーキックは無回転で宙を舞い、野球のナックルボールのように不規則に揺れ、そのまま急降下して、キーパーにろくに反応させないまま、ゴールネットを揺らした。

オランダの夜空に、長い笛が響き渡る。

その瞬間、日本の選手達はそれぞれに喜びを爆発させた。

僕も、ユータ、ジュンイチと握手を交わした。

結局僕達は、4－1でメキシコを下し、僕は初戦でハットトリックを決めた。

惨敗確実の日本が強豪の一角に快勝したことで、このグループは波乱の幕開けとなった。

――日本はその余勢を駆って次戦のチェコにも3－0で勝利し、最終戦、フランス戦を待たずして、2勝同士のフランスと共に決勝進出をほぼ確実なものとした。

そして、最終戦――既にフランスも2勝していて、決勝リーグ進出は確実なものとしていたから、それに備え、主力を温存しての日本戦だったが、そのフランスにも僕達は3－1で勝利。結果グループ全勝の首位で予選リーグ突破を果たした。

いくら主力温存とはいえ、歴代の名選手を多く排出し、ワールドカップ優勝経験もある国の代表を破ったことは、日本中を大いに驚かせた。

というか、代表選手達も、自分達のその快進撃に、信じられないという面持ちをしながらも、日に日にサッカーをするのが楽しくて仕方がない、サッカーに飢えている環境というのが出来上がっていき、チームの士気も上向いていった。

予選リーグを突破した頃、ＪＦＡには、今までこの代表を酷評し続けていたサポーターから謝罪の手紙が殺到し、ネット上も謝罪文で溢れかえっているという噂を、報道陣から聞いた。

だが、日本の選手達はそれに浮かれることなく精進に励んだ。

そして、決勝トーナメント、僕達はベスト１６でコートジボワールを３－２で下し、ベスト８のイタリアも、１－１で何とかしのぎ、ＰＫ戦で運よく勝利を掴み、ベスト４へと駒を進めることができた。

ベスト４に残ったのは、開催国オランダとイングランド、アルゼンチン、そして日本という顔ぶれで、僕達はベスト４で開催国オランダと当たることとなった。

しかし、僕達は強豪オランダのパワーに押されてしまい、２－２まで粘って延長戦まで持ち込んだものの、最後は相手にゴールデンゴールを決められ、ベスト４で敗れた。僕達は数日後、同じくベスト４で破れたイングランドと、３位決定戦に進むこととなり、日本がこの大会でメダルが取れるかどうかは、最後のこの試合へと持ち越されることとなった。

「へぇぇ、ユータ、またオファー来たのかよ」

「ああ、昨日クラブのＧＭから電話があって。セビージャが今オフの練習に参加しないかって」

オランダ戦の惜敗から一夜明け、僕達はユトレヒトの郊外の練習場で、軽めの調整を行っている。怪我をしないようにという名目で、

ある程度自由な練習が許され、上半身裸のユータは同じく上半身裸のジュンイチに体を押され、ストレッチで疲労した体の筋を伸ばしていた。

大会前には注目度ゼロだった日本代表だが、今大会の快進撃を受けて、今は現地の人まで応援に駆けつけてくれている。ゴールを決めればハイテンションで喜び、プレーでは闘争心を露にする姿は「サムライジャパン」と称され、海外でも高い評価を受けた。

昨日の試合、オランダに後半３０分、３点目を決められ、３－１とされてから、日本は捨て身の攻勢に出、１点差にまで差を詰め、同点まであと一歩のところまでオランダを追い詰めた。さぞ現地の人から恨まれると思ったが、どうやらヨーロッパの自由な気風は、いい試合をしたチームには敬意を払ってくれるらしい。言葉はよくわからないが、さっきから好意的な応援の声が耳に届いていた。

「しかしすごいなぁ、これでオファー何件目だよ」

「――ま、上には上がいるけどな」

そう言ってユータは目の前で、上半身裸になってバットを素振りする僕の方を見た。

「ん？」

「昨日のうちにＰＳＶからもオファーがあったんだろ。アヤックスとフェイエノールトからも前に話があったから、オランダ３大ビッグクラブ制覇だな」

「……」

「お前、この大会中に、どれだけオファー来たんだよ」

ジュンイチが訊いた。

「――さあ、とりあえずこれだけかな」

僕は手近に置いておいた自分の鞄から、一冊の手帳を取り出して、ある一ページを開いて、二人に見せた。

「どれどれ――ブレーメン、ニューカッスル、フィオレンティーナ――げっ！　アトレティコマドリーや、リバプール――うおっ！　アーセナルまであるじゃねぇか！　チームも２０以上話が来ている

のかよ」

「大袈裟だな、話をしたいっていうだけで、契約に前向きかどうかは現時点でわからないんだ」

僕には代理人がいないため、大会終了まで、オファーの話は保留にさせてもらっている。所属チームもないため、基本入団交渉をするスカウトマンは合宿上のホテルに訪れる。ヨーロッパだけでなく、中東や南米のクラブからのオファーも数多くあったが、現時点では訪れたチーム名を記録しているだけで、どのチームとも移籍交渉の説明段階にも至っていない。

ユータはここまでの6試合で6得点を挙げ、大会得点王に1点差の2位タイに付けている。その得点能力と、恵まれた体格に似合わない素早い身のこなしが、世界の注目を浴び、海外クラブからのオファーも何件か届いたと、日本の所属クラブから連絡があったそうだ。

「ま、今回のケースケの大会の活躍じゃ、それだけオファー来てもしょうがないさ」

僕はここまで全試合に先発出場し、途中交代も2試合あったものの、5得点6アシストを記録しており、日本代表の攻撃の要である。同時に、パスカット数は参加選手中一番の成績を収め、守備の貢献も高かった。

この体で、フィジカルに難があるために、一対一の守備では時間稼ぎくらいしかできなかったけれど、持ち前の先読み技術でパスコースに先回りし、ボールをカットしたり、セカンドボールを拾いまくったりすることで、フィジカルの弱さをカバーして余りあるボール奪取率を見せていた。先読み技術を駆使してチームメイトに指示を出し、カウンターを食らっても瞬時に体勢を立て直す日本のディフェンスは、世界レベルで見れば体格には劣るが攻撃をよく持ちこたえており、そのせいで僕のキャプテンとしての評価もうなぎのぼりだった。

オランダの地でも、僕は「リトル・ウィザード」。小さな魔法使

いと称され、人気を博した。新聞では「日本のイニエスタ」なんて紹介も受けた。

「僕はどのクラブにも所属していないから、移籍金がかからないからな。オファーの数はその分集まりやすい。お前も移籍金がかからなければ、大会得点王争いに絡んでいるんだ。僕以上にオファーは来ているさ」

僕は言った。謙遜ではなく、ユータと僕ではオファーの条件で圧倒的な差があるのだ。移籍金がかからない僕は、格安で交渉ができる、いわばお買い得選手なのだから。

「はぁ、しかしお前、どうするんだよ」

ユータがストレッチをしながら訊いた。

「お前、その調子じゃ大会終わっても、サッカーはとてもやめられないぞ。もうオリンピック代表候補のリストにお前の名前も挙がっているだろうし、下手したらA代表召集も近々あるだろう」

「……」

「実は俺も昨日、うちの社長から電話で言われてさ、もう一度サクライくんを説得してくれないか、って。入団してくれたら、最高の環境を用意するから、ってさ。日本でも今その有様なんだ。日本に帰ったら、お前、どうするわけ？」

Ｗｉｚａｒｄ（後書き）

あとがきがものすごく多くなりますが、一応サッカーを知らない人のために…他に判らない用語があったら聞いてください。

ＰＳＶ、アヤックス、フェイエノールト…オランダリーグ、通称エールディヴィジの３強と言われる名門クラブ。

アトレティコマドリー…スペインリーグ、通称リーガエスパニョーラの強豪クラブ。日本ではＡマドリーと略される。スペインには超名門クラブ、レアルマドリーがあり、こちらはＲマドリーと略される。両者ともマドリードを本拠地としており、この２チームの試合はマドリードダービーと称される。

ブレーメン…ドイツリーグ、通称ブンデスリーガの有力クラブ。

ニューカッスル…イングランドリーグ、通称プレミアリーグの中堅クラブ。

フィオレンティーナ…イタリアリーグ、通称セリエＡの有力クラブ。

リバプール、アーセナル…チェルシー、マンチェスターユナイテッドと国内４強を形成するプレミアリーグの超名門クラブ。

イニエスタ…アンドレス・イニエスタ。スペインのＦＣバルセロナに所属する世界的サッカープレーヤー。小柄だが、攻守の能力に優れる。

リオネル・メッシ…２０１１年現在、世界最高峰と称されるバルセ

ロナ所属のサッカー選手。幼年時代、成長障害により、身長が伸びないと言われていたが、クラブがその治療費を出してまで入団させたという経歴のある小柄な選手。

バロンドール…ヨーロッパ年間最優秀選手に贈られる賞。

Ｒｅｌａｘ

今のところ僕は、大会ベストイレブン候補にいるわけだけれど、僕自身はこの大会で、自分が世界的プレーヤーになれたという自負はあまりない。それどころか、自分のサッカーの伸びしろはもうここまでだと思ったくらいだ。チームの士気に影響するから、まだ誰にも言っていないけれど。

グループリーグは相手の情報不足と、日本に対する慢心を突けば何とかなった。だけど決勝トーナメントに進んでからは、さすがの僕も世界の壁を痛感した。

ベスト１６のコートジボワール戦――アフリカ人特有の、並外れた身体能力は、僕の想像をはるかに超えていた。戦術や、動きは大体読み取れたものの、身体能力がすごすぎるせいで、先読みできてもそれを越える動きをされ、対応に四苦八苦した。ベスト８のイタリア戦は、イタリアの伝統的サッカー、カテナチオの前には、僕のパス、ドリブルでチャンスを作ることができなかった。そして昨日のオランダ戦は、長身で屈強な選手達のパワーに圧倒された。彼らの半分程度の体重しかない僕は、体を競らせてもほとんど意味を成さず、スピード勝負に持ち込もうと思っても、なかなか自由にさせてもらえなかった。

僕はユータのように、スポーツ向きの体ではない。サッカー選手として体格に恵まれていないと言われるリオネル・メッシよりも、更に２０キロ近く体重が少ないのだ。高校サッカーではそんな体でも何とかごまかせたが、このレベルとなると、もうごまかしきれなかった。

僕にオファーを出すクラブは、まだ僕が１７だから、体の成長の余地があるだろうと期待し、今からトレーナーをつけて、食事やトレーニングの英才教育を約束するクラブばかりだった。高校時代、大した指導者もいなかったというデータも集めたようで、指導者と体

格矯正に恵まれたら、将来バロンドールも狙えるポテンシャルがあると評価するクラブも多かった。

確かにそうなれれば嬉しいが、僕の体が今更大きくなる保障もない。そんな不確定な要素にかけるよりは、まだ頭脳の方が伸びしろがあるように思えた。

僕は構え直し、もう一度バットを振った。

「――さあ。正直今はよくわからない。日本に帰って、自分の生活がどう変わるかもわからないし、帰って少し落ち着いてから、じっくり考える」

とりあえずそう言ってお茶を濁す。報道陣にもよく言う建前だ。

そう言ってから、僕はバットを下げ、ピッチに杖のように突いて立った。

「ただ――やっぱサッカーってのはいいスポーツだと思うよ。将来、仕事になるか趣味になるか、他の関わり方になるかはわからないけれど、できればこの先もサッカーに関わる何かができたらいいなとは思う」

「へぇ……」

ジュンイチが含み笑いを浮かべた。

「その台詞、野球のバット持って言う台詞かよ」

「これは僕の調整法なんだよ」

「お前、3年間ずーっとバット振ってたもんな」

ユータが言う。

僕は、この華奢な体格のために、体の回転を使って蹴るボールに威力を与えてきた。体の回転――つまり腰を軸とした遠心力運動、それには体の軸、体幹を強く意識することが重要だ。

色々試行錯誤した結果、僕がそれを意識する一番の調整が、このバットの素振りだった。中学時代は打率6割を誇る好打者だった僕は、中学3年間、嫌というほどバットを振っていたし、打撃フォームは体の軸がしっかりしていた。バットも腰の回転で振るという原理は同じだし、実際にボールを蹴るよりも体の負担が少ない。威力

あるボールを蹴るために、野球経験者の僕が独自に取り入れた調整法だった。多分中学時代からバットを振っていた僕以外には意味のない調整法だ。

「それだけバット振ってりゃ、元々足と守備はすごいんだ。少しの調整で甲子園のスターどころかプロも狙えそうなもんだが――お前、もう野球に未練はないのか？」

ユータが訊いた。ユータは僕をサッカー部に一方的に勧誘したため、僕が無理して野球を捨てたのではないか、いまだに心配なようだ。

「ない」

僕はバットを構え直した。

「初めは色々迷ったし、サッカーに思い入れもなかった。成り行きでやっているだけだったが、それでも続けられたのは、サッカーが嫌いじゃなかったからなんだろう。今ではサッカーを楽しいと思ってやっているし、サッカーが好きだと思っている」

そうだ、今はサッカーが楽しい。

今まで、そう思ってサッカーをしたことはなかったけれど……

それに、サッカーを通じて、お前達と出会えた。サッカーを続けていたからこそ、今の僕がある。

僕は十分、サッカーをやってきた甲斐があった。プロになんてなれなくてもいい。それだけで十分だった。

「ユータ、ジュンイチ」

僕は二人に背を向けて、バットを構え直した。

「その――僕をサッカー部に誘ってくれたこと、今では感謝してるから。ありがとう……」

照れくさくて、声が尻込みしてしまう。

「あの――次の試合が終わったら、僕、お前達に伝えなきゃいけないことがあるんだ。聞いて貰っても、いいかな……」

情けない。ずっと前から、それを聞いて貰うためにやってきたというのに、今更そんなことを言うことが、柄でもないことに気付く

なんて。
「サクライくーん」
複数の人の声が、僕を呼ぶ。
僕は振り向くと、日本、オランダ、世界の報道陣が、僕の方へやってくる。
僕はバットを手近に置いて、自分の鞄からウインドブレーカーを引っ張り出す。
「あ、いいよそのままで、3人のリラックスムード、絵になるよね。写真撮ってもいい？」
報道陣の一人が、僕が服を着ることを制した。
「あ、どうぞどうぞ」
僕が答える前に、後ろのユータが答えた。
「ファンサービスファンサービス」
ジュンイチが僕に言う。
「……」
大事な話をしていたのに……
「サクライくん、キャプテンとして今大会、目覚しい活躍だよね。いくつかこの大会でのことと、昨日のオランダ戦、明後日のイングランド戦のことについて、インタビューしたいんだけど、30分くらい時間取れるかな」
「はぁ……別にいいですけど」
ここに報道陣が来るということは、代表スタッフの許可を取っているということだろう。ということは、むしろインタビューを受けろということだ。僕は一応、この代表の広告塔ということにもなっているし、キャプテンとしての責任もある。
「そう！　助かるよ。日本でも君の人気が更に過熱しているみたいでね。君のインタビュー、いやでも持ってこいって上がうるさいんだ」
「……」
この時僕は、日本に帰って、自分の生活がどんな風に変わるのか、

そんなことを考えていた。
でも――問題なのはそんなことじゃなかったんだ。
もう既にこの時、日本ではとんでもないことが起きていたんだ。
僕はまだ、それを知らなかった。

「――昨日のオランダ戦は確かに日本も粘りましたが、やはり選手の力に圧倒的な差がありました。世界の壁を痛感しましたね――すいません、予定ではもうちょっと走れるつもりだったんですが、どうやら僕も激しいプレスに体力を奪われていたみたいです。次のイングランド戦ですか……正直メダルがどうとか考える余裕はないです。イングランドなんて、皆サッカーをはじめた頃から、勝つことを夢見ているチームですし、今までの試合どおり、まずは意地を見せることに専念します」
「それじゃあ個人的な話を――この大会で、親友のヒラヤマ選手と、サクライ選手が世界的に評価されていますが――得にサクライ選手は、キャプテンとしての存在感や、戦術家としての評価も高まっていますが、その点について何かコメントを」
「僕のことは、まだ実感がないので、コメントできかねます。ただ、ヒラヤマくんは高校時代から海外でプレーしたいと言っていたので、喜ばしいことじゃないでしょうか。ただ、あいつが今海外に行ったら、言葉が通じなくて四苦八苦するでしょうけど」
――そんなインタビューを、練習場にある広間で行い、僕は練習場に一人戻る。
「どわ！　このノーコンめ！　ちゃんとストライク投げろよ」
練習場から楽しそうな声が聞こえる。
練習場を見ると、選手のほぼ全員が集まって、ピッチのそこかしこに散っている。
「何やってるんだ？」
僕は皆に駆け寄って訊く。

「あ、サクライ。ちょっとお前のバット気になっててな、ちょっとお遊びだ」
近くにいたマスダが教えてくれる。
よく見ると、確かにピッチの一番向こうにいる選手がバットを持って、目の前のピッチャーのボールを待っている。ボールはゴムボールだ。
「いやぁ、調整といっても、何かスカッとしたくてさ、ボールをかっ飛ばしたら、気持ちいいかなと思ってさ」
ジュンイチが言った。どうやら他の選手は球拾いのつもりらしい。
「しかし、みんな野球なんてほとんどやったことないからな。ストライクが入らねぇんだよ」
ユータは呆れ顔で笑う。
「……」
ピッチャーがボールを投げるが、確かにデッドボールを怖がって、外角にボールが外れる。
しかし――このチームも変わったな。僕が来た頃は、こうして皆で和気藹々としたムードなんてなかった。試合でも、試合以外でも、選手同士で同じことを共有することがなかった。チームがバラバラだったのに。
「――貸してみな。僕が投げてやるよ」
僕はピッチャーにボールを催促する。
「皆に打たせてやる。だけどあまり全力でバット振るなよ。こんなお遊びで怪我なんかしたら、洒落にならん」
僕が言うと、選手達が沸き立った。
僕は軽いゴムボールを、超低速で投げる。バッターの選手はそのボールにバットを出し、ボールは僕の頭上はるか高く、オランダの夏空に飛んでいく。
皆の笑い声。
――このチームは、本当にいいチームになった。
この調子なら大丈夫、次の試合、必ず勝って、世界に僕達の力を

見せてやる。
そして――この大会で、綺麗に咲き誇って、僕の光で、大切な人を照らしてやるんだ。
真夏の朝顔のように――

Ｒｅｌａｘ（後書き）

カテナチオ…イタリア語で、「ゴールに鍵をかける」という意味の戦術。フォワードまでが自陣に戻って全員でゴールを固め、ボールを奪えば素早いカウンターで攻めるという戦術。イタリア人が好む戦術で、プレーする選手は、ピッチを走りまくるので、相当なスタミナが必要。

Ｂｒｏｎｚｅ

首都アムステルダムのスタジアム――僕達は現地時間の１３時からのキックオフで、イングランドとの３位決定戦に臨んでいる。

日本はアジア規模での国際大会では、優勝経験があるが、世界規模の大会では、どの世代もいまだ表彰台に立ったことがない。それどころか、僕達がここで負け、４位に甘んじたとしても、国際大会の成績としては過去最高である。

だから、オランダ戦以来、ＪＦＡのお偉方まで現地滞在での視察をしている。別に今更そんなものでプレッシャーを感じはしないが、それだけ僕達は今、日本サッカーの誇りを賭けた試合に臨んでいるということ。

試合は両チームともスコアレスのまま、後半２０分にさしかかろうとしていた。

ボールをキープする僕は、前線のユータにパスを出したいが、後ろから二人のフォワードにプレスをかけられている。２人がかりなんて、よっぽど僕を警戒しているんだろう。背中から激しく押され、何とか倒れないようにするので精一杯だ。

――全く、デカブツがこんなチビ相手におたおたするもんじゃない。こっちはもう手品のタネも尽きているってのに。

だが、それでもまだましな方かな。どのチームもゴール前では激しいプレーを少し躊躇するきらいがある。僕は今大会、フリーキックで３得点を挙げているし、フリーキックを与えたくないという意識は、海外の選手にも浸透している。おかげでユータへの当たりも甘くなるってわけだ。

なあユータ――こんな僕でも、この大会、少しはお前の役に立てたのか？

僕は上がってきているサイドバックにボールを預ける。

サイドバックは僕のスルーパスを受けて、何とかサイドの深いと

ころまで侵入するが、相手の戻りが早く、ユータを狙って上げたクロスが中途半端になる。
長身のディフェンダーが頭でボールをペナルティエリアから掻き出す。ボールをバイタルエリアにいるボランチが受けて、カウンターの準備が始まる。
僕は今の味方陣形を見て、一瞬で相手の対応策を導く。
「中央を突破するぞ！　ジュンイチ！」
僕の指示と同時に、ボランチは前線に強いパスを送る。
ジュンイチは自陣のバイタルエリアに走って、パスを受けた相手の司令塔をチェックする。僕も指示を出しながら、自陣へ戻っていた。
ジュンイチは腰を落とし、相手の動きをじっと窺う。
日本の同世代相手では、鉄壁の守備を誇るジュンイチだけど、さすがにオランダやイタリアといった世界の強豪相手では、マンマークでは相手の強さに押し切られている。ジュンイチも日本では十分長身の類だが、世界レベルとなるとそうはいかない。
だが――それでもジュンイチは、味方が戻るだけの時間稼ぎだけはしっかりやってくれる。腰を落とし、同じ抜かれるにしても、簡単には抜かせない。自分のすべき最低限の仕事をよくわかっている。
ジュンイチ――お前はいつもそうだ。飄々として、面白いことが大好きな快楽主義者のくせに、いつも影で体張って、皆を支えてるんだよな。
ジュンイチが粘ってくれたおかげで、僕もジュンイチのフォローに回る。ボールを持つ司令塔を徹底的にマーク。体の軽さを補うために、ガツガツ当たりにいく。
司令塔がじれて無理に僕を抜きにかかったところに、ジュンイチが足を出している。ダブルボランチを組んでいた頃に徹底的に二人で練習した連携ディフェンス。一人が相手の体勢を崩し、追い詰めたところをもう一人が確実にボールを取る。
僕は前線に走り出す。

「よし、全軍突撃！　こっちもカウンターだ！」
僕の指示で日本の選手は一気に前線へと上がる。今度はこちらがカウンターを返す番だ。
ジュンイチも右サイドにボールを預け、自分も前線に上がる。
ディフェンスはすぐにサイドをケアする。しかしサイドの選手は、ジュンイチが走りこんできたのを見て、ワンツーパスでもう一度ジュンイチに預ける。ジュンイチはそのままディフェンスを振り切り、もう一度バイタルエリアに進入した。
既に僕とユータがペナルティエリア近くに侵入。右サイド付近を突き進むジュンイチから見てユータがニアサイド、僕がファーサイド、僕はシュートの打ちづらい、角度のある場所に侵入している。ディフェンダーは3人、うち2人がユータ、1人がユータを警戒しながら僕の方もケアしている。
ま、当然だな。ジャンプ力には自信あるけど、イングランドのディフェンダーと僕が空中戦やったら、勝てる気しないし。
ジュンイチがクロスを上げる。
ユータに馬鹿正直にクロスを上げても得点の香りがしないと思ったのか、ボールはユータの頭上を越え、僕の方へ飛んでくる。
しかし、遠目にいた僕の頭も優に飛び越えそうなほど、そのボールは高い軌道で飛んでいる。僕は落下点に走る。ディフェンダーも僅かに僕の動きに吊り出された。
ゴールの位置を一瞬確認、角度は狭いが、シュートを打てない程ではない。一か八か、狙ってみるか――
だが、ディフェンダーの二人が僕のシュートコースを塞ごうと動いたのを見て、気が変わった。
ジュンイチのクロスが大きく外れたのを見て、ディフェンダーは僕を追ってこない。僕はゴール１０メートルのところから、ヘディングでゴールを狙おうと体を反らしながらジャンプした――
――が、その動きはフェイク。
僕は反らした胸でボールを受け、ボールの勢いを殺すと、そのま

ま空中で左足を出し、とん、とインサイドで軽くボールを蹴った。
ただ当てただけのボールはふらふらと宙を舞い、僕の右後方へ飛んでいく。
しかしこの時、ディフェンダーは僕がヘディングをすると思って、シュートコースを塞ぐために左に吊り出され、キーパーも、打つと見せかけてのフェイクに、完全にバランスを崩していた。
それにイングランドのディフェンス陣が気付いた頃には、ユータが既にボールに背を向けて飛び上がり、オーバーヘッドキックでボールを捉えていた。
ボールはがら空きのゴール右隅に飛んでいき、ゴールネットを揺らした。
「おおっしゃぁ！」
クロスを蹴ったジュンイチ、パスを出した際に体勢を崩してピッチに倒れた僕、シュートを打って背中からピッチに倒れたユータが、ほとんど同時に歓喜の声を上げた。
このゴールは、後の日本サッカーの伝説となるゴールだった。ジュンイチのクロス、僕のフェイクからのラストパス、勢いを殺しきれなかったとはいえ、それを見事に決めたユータ――この3人の息が、見事に合っていたからこそできたゴールだった。
僕もゴールが決まった時、何だかとても嬉しかった。最後の最後でこのオランダの地で、僕達3人で大輪の花を咲かせられたような気がして。
――僕達はそれから残り時間、必死になってこの1点を守りきり、強豪イングランド相手に大金星を挙げ、日本サッカー史上初めての、国際大会の表彰台に上ることとなった。

オランダの午後の夏空に長いホイッスルが響き渡ると、スタンドの日本サポーターが歓喜の声を上げた。スタンドのブルーの部分が激しくうごめき、何だか、たまたま隣にいた知らない人とも抱き合

っているような、それくらい歓喜を露にしたサポーターの姿が印象的だった。

ユータは笑顔を爆発させ、駆け寄ったジュンイチと抱き合って喜んでいる。他の選手も皆各々に体で喜びを表現している。抱き合ったり、叫んだり、選手同士で握手をしたり――

僕はそんなピッチに仰向けに倒れこんでいた。

この一ヶ月の戦いが、これで全て終わったと思うと、一気に力が抜けた。いつもより１０分も長い試合、いつもより強い相手――そんな今までのホームとは違う環境で、何とか勝ち進まなければならなかった。

いつもよりも走り、いつもより激しく頭を回転させ続けた、そんな一ヶ月が、遂に終わった。この数試合、体の小さな僕にとっては激しい試合が続いたのも相まって、僕の体はもう疲弊しきっていた。

だが――心地いい疲労だった。

背中が揺れているように感じるサポーターの歓声、そして、耳に聞こえるチームメイトの喜びの声。

こうしてピッチのど真ん中に寝転がっていると、それを強く感じた。

「ははっ！　おい、ケースケ！」

僕の許に、ユータとジュンイチが駆け寄ってくる。

「キャプテンがこんなところで寝てるんじゃねぇよ。サポーターに挨拶に行くぞ」

二人に手を引かれて体を起こされ、僕はサポーターのいるスタンドへ、二人と共に走る。他の選手もそれについてくる。

「お前ら最高だ！　よくやったぞ！」

「感動をありがとう！」

サポーターは皆笑顔で僕達を迎えてくれた。ほんの数週間前までは批判の対象だったこの代表に、今ではこうして賛辞をかけてくれる。

それについて、もはや現金だとか、そんな感情は抱くはずもない。

終わりよければ全てよし――どの選手もそれを笑顔で受け止めていた。

「ほら、行って来い」

僕はユータとジュンイチに背中を押される。バランスを崩しながら、僕は前に出される。

「……」

行って来い、と言われても……一体僕は何をすればいいんだか。

そんなことを僕が考えていると。

スタンドにいるサポーターは、僕が前に出るのを見て、全員が席を立ち、スタンディングオベーションした。

「サクライー！　代表に来てくれてありがとう！」

「最高のキャプテンだった！」

サポーターから、僕への賛辞が飛ぶ。

「……」

僕はサポーターを一瞥する。

皆、充実感に満ちた笑顔を湛え、浮遊感さえ味わうような幸福の中にいる顔だ。

――僕は今まで、自分は誰かを幸せな気持ちになんてできやしないと思っていた。

だけど――この目の前の沢山の人達の笑顔が、今僕に向けられていた。

確かに、向けられていたんだ。

僕達の試合の後に行われた決勝戦、オランダ対アルゼンチンは、どちらも世界一を決めるに相応しい戦いぶりだったが、激戦を制したのは開催国のオランダだった。

だが僕達は、もう決勝戦どちらが勝つかなどということは興味の外にあり、試合が終わってユニフォームを着替え、決戦の汗を流すと、ただひたすらに喜びに興じた。

その後の閉会式で、僕達は一人一人、ＦＩＦＡの会長から銅メダルを授与され、更に僕には優秀選手賞も授与された。ユータはインググランド戦で１点を決めたものの、１点差でリードしていたアルゼンチンのフォワードも決勝でゴールを決めてしまい、得点王を逃してしまった。

――閉会式も終わり、ホテルに戻ると僕達は代表の監督、コーチ、スタッフ含めて祝勝会が開かれた。

オランダは１６歳から飲酒が認められる。チーム最年少の僕でも１７歳なので、酒まで振舞われた。

「いいのか、こんなおおっぴらに酒飲んじまって」

ユータは困惑した。

「明治時代に陸奥宗光が世界的に治外法権を撤廃させたから大丈夫だよ」

僕が言った。

監督が乾杯の音頭を取って、皆近くにいる人同士、グラスを鳴らし合った。選手は全員銅メダルを首に下げ、それを噛んでみたりすることで、自分達がメダルを手にした実感を得ようとしていた。

「いやぁ、サクライくん！　君のキャプテンとしての働きは大したものだったよ！　ありがとう！　今後の日本サッカーが楽しみだ！」

そのパーティーの中、僕はＪＦＡのお偉方から賞賛の言葉を浴びせられ、格段の接待を受けた。もう飲めないというのに酌をされ、少し食傷気味だ。お偉方と言っても、平たく言えば酔っ払ったオッサンなんだから。

だが、この日本サッカー史上最高の成績に、ＪＦＡは僕達各選手に、２０００万円のボーナスを出すことに決定したらしい。今までの日給に、勝利給、出場給を合わせると、僕にも数千万のお金が入ることになる。

その発表に、選手達は大いに沸いた。金のために皆サッカーをしていたわけではないが、今まで頑張ってきたことが多方面で認められ、よいことずくめだった。

一通り僕の周りが落ち着くと、僕はもう酔いが回っていたし、人に囲まれ過ぎて疲れてしまい、一人ホテルの中庭に出ていた。建物に囲まれた狭い中庭で、白い砂が敷き詰められ、小さな花壇のある中庭のベンチに腰掛ける。

「……」

ここに来てから、僕は沢山の人に褒められた気がする。あまり人から褒められたことのない僕は、こういう状況にいると、何だかくすぐったいというか、居心地がよくないとさえ思ってしまう。

それに今のところ、自分が人に褒められるようなことをしたという実感はあまりない。

まあ、そんなものなのかもしれない。勝てば官軍とも言うし、完全なる勧善懲悪なんてものは存在し得ないのだろう。この世に絶対的に正しい存在など、ないのだから。

結局、そうしてわからないながらも、自分が胸を張れるような生き方を自分なりに選択して、皆生きていくしかないのだろう。

きっと、今の状況を居心地悪く感じるのも、今まで自分がそうして、自分の生きる道を信じようとすることから逃げていたからなんだろう。誰も傷つけたくなくて、自分の周りの世界に影響を与えないように、息を潜めるような生き方をして——まだ僕は、他人に影響を与えるような行動を起こすことに慣れていないだけだ。本当にこういう雰囲気が嫌いというわけじゃない。

「おう、ケースケ」

声をかけられる。

声の方向を向くと、既に僅かに千鳥足を踏むユータとジュンイチがいた。

「どうした、日本史上初の表彰台の立役者が、何一人でチビチビやってるんだよ」

相変わらず酒を飲むと陽気さに拍車のかかるジュンイチが、笑顔で僕に言った。

「……」

3人とも、同じメダルを首に下げている。
「いやぁ、しかし今日のゴール、最高だったな！」
ジュンイチが痛快そうに笑った。
「ああ、俺達3人、見事に絡んで決めた、最高のゴールだった」
ユータもあのゴールに満足気だ。オーバーヘッドという難しいゴールだっただけに、それを決められたことがフォワードとして嬉しいのだろう。
「そしてそのゴールのおかげでメダルも獲れた。言うことなしだ」
「ああ、俺は長年の夢だった、海外でプレーする道も開けそうだし」
二人はメダルをそれぞれ相手にかざしながら、感慨深そうに微笑んでいる。
「……」
誰の笑顔を見るよりも、この二人の笑顔を見れたことが、柄でもないが、嬉しかった。
出会ってから3年という月日は、人生の中では微々たる時間かも知れないが、その3年間でこいつらに迷惑をかけたことは数知れず。だけど、少しはマシな奴になりたいと思って、僕はこいつらから逃げずに立ち向かった。
――今の僕は、少しはマシな人間になれただろうか……

「――ユータ、ジュンイチ」
そんな思いが、他人に対して弱気な僕に、俄然勢いをつけた。
「僕は、少しはお前達の役に立てたか？」
「は？」
ベンチに座る僕を、二人が見下ろす。
「――この代表召集を受けたのは、あのままじゃお前達が間違いなく死ぬと思って、それを何も出来ずに見ているのが、耐えられなかったんだ。だからせめて、死ぬ時は一緒に死んでやろうと思って、僕はここに来たんだ。初めから、僕はそれ以外のことは考えていなかった。お前達を、何とかして守りたかったんだ」
初めて僕は、この代表召集を受けた真意を二人に語った。
「僕は出会ってから今まで、お前達の数ある好意の全てを踏みにじり続けてきたからな――今となっては、申し訳ないと思っている。そんな踏みにじり続けた好意の分を、少しでも返したかったんだ……」
そこで一度言葉が途切れた。
「その――お前達を、友と呼べるように」
僕はしっかりと、二人の目を見て伝えた。照れくさい台詞だったが、それ以上に僕の意志を、何とかして二人に伝えたかった。
言ってみて改めて実感する。僕は心から、こいつらと本当の意味で、友達になりたいと欲していることを
「……」「……」
二人とも、僕の性格を誰よりも知っている。その僕が、まさかこんなことを言うとは思ってもいなかったのだろう。呆気に取られたような表情をしている。
沈黙。
「あ、あの――」

沈黙が走ると、途端僕は何を言っていいのかわからなくなる。こういう時の僕の語彙の貧弱さは本当に嫌になる。
「あのさ――僕――お前達のこと、友達って呼んで、いいかな……」
何だか、感情が噴出して、言葉が途切れ途切れになりながらも、それを伝えた。
「ずっとお前達の心を踏みにじり続けてきた、駄目な奴だったけれど――この大会で、その恩の全部を返せたとは言えないかも知れないけれど――これからは、お前達が困っていたら、何を置いてもすぐ駆けつけるから。だから――」
そこで言葉が途切れてしまう。
声が出なくなる。泣き出してしまいそうなほど、今が怖い。
誰かに否定されるかもしれないと言うことが、これほど怖いとは思わなかった――いや、その怖さを僕は知っていた。それを受けることが怖くて、僕は今まで、誰とも向き合わずに逃げ続けてきた。
僕は世界一の臆病者なんだ。
「ふ、ふふふふ……ぎゃはははは！」
途端、堰を切ったような笑い声が、中庭に響いた。
顔を上げると、ジュンイチが腹を抱えて大笑いしている。
「デ――デレが来た！　今までツン１００％だったケースケが、初めて俺達にデレた！　ぎゃはははは」
「……」
「し、しかし、固いって、ケースケ」
ジュンイチは笑いながら、僕の肩を叩いた。
「そんなの、言ってくれりゃいつだってこっちはウェルカムだったのによ」
「……」
「なあ、ユー……」
そう言って、ユータの方を振り返って、ジュンイチの言葉が止まった。
ユータがその場に呆然と立ち尽くし、ぼろぼろと大粒の涙をこぼ

し、溢れる涙を拭いもせずに、男泣きしていたからだ。
「ちょ、おま！　何泣いてんだよ！」
「だ、だってよ――」
サッカー以外では、いつも少し醒めた素振りのユータが、さすがに慌てだした。
「いきなりこんなこと、言われると思ってなくてよ――どれだけ聞きたかったか、その言葉……」
嗚咽に混じる途切れ途切れの声で、ユータは何とかその言葉を搾り出していた。
「……」
「ま、素直に嬉しいぜ。お前が俺達を、そういう風に思ってくれていたことはよ」
ジュンイチは、隣にいるユータの背中をさすりながら、僕に微笑みかけた。
「――ま、でも、今まで通り普通にしてればいいんだよ、お前も」
そう言って、ジュンイチは僕の肩に手を回して、僕の体を引き寄せた。ジュンイチを中心に、僕達3人は肩を組む。
「友達なんて、気が付いたらなっているもんだ。そんなもんでいいんだよ。ま、お前の今日の言葉で、俺達はより深い付き合いになった。それは喜ばしいことだと思うがな」
ジュンイチは僕に顔を近付けて、くしゃっと笑う。その笑顔は、半年前、埼玉高校が三國高校と戦い、後半ロスタイムで延長戦に持ち込む同点ゴールを決めた時と同じくらいのいい笑顔だったと思う。
「おいおい、ユータ、いい加減泣き止め。めでてぇ日じゃねぇか。俺達3人でゴールも決まって、ケースケの初デレも見られた。友情に花が咲いた日ってところだな」
「あ、ああ、すまん。もう大丈夫だよ」
ユータはごしごしと、腕で涙を拭った。
「……」
よかった――言えてよかった。

これで僕達は、また一歩先に進むことができる。
関係は劇的に変わったわけじゃないけれど、これでまたひとつ、深くこいつらと付き合えるようになった気がして、嬉しかった。
僕達はそのまま3人、ベンチに座って、中庭で夏の夜空を見ていた。オランダの空は、日本とは星の並びが全然違う。僕の知らない星座も沢山ある。だが、月だけは変わらず優しい光で、僕達を照らしていた。
「しかしケースケ、俺達を友達と認めてくれたのは嬉しいが、それよりも何か言ってやらなきゃいけない人が、お前にはいるんじゃないの？」
ジュンイチが言った。
「……」
僕は自分の右腕に、いまだに巻かれている、試合で若干泥の染み込んでしまったミサンガを見、着ている日本代表のウインドブレーカーのポケットから、試合中も、それ以外の時も、肌身離さず持っていた手作りのお守りを取り出した。
「そうか――もうすぐ会えるんだよな」
別に忘れていたわけじゃないけれど、改めて言われると、変に感慨深く感じた。
「……」
お守りを握り締めながら、僕は彼女のことを思った。
誰かの笑顔を見ることが、自分はこんなに好きだったなんて、今日初めて知った。
その感情に、何か、どこかで触れたことのあるような、そんな気がしていたのだけれど。
それはきっと、彼女が前に言ってくれていたことだ。
彼女は、僕の笑顔を好きだと言ってくれた。そして、僕の笑顔を見ていて、自分は誰かの笑顔を見ることが好きなのだと気付いたと言っていた。だから大学に行っても、音楽を続ける。私の音楽で、誰かを笑顔にすることができたら、嬉しいな、と。

――いつの間にか僕も、彼女の笑顔を見て、同じことを考えていたんだな、と思う。

彼女の笑顔が早く見たかった。美しいけれど、飾らず、慎ましく、ひっそりと素朴に笑う――彼女の好きな、竜胆の花のような、あの笑顔に、早く会いたいと思った。

「……」

そう思うと、途端胸が焦がれた。

この約1ヶ月、離れてみて、生活のふとした場面で、彼女のことを強く感じることがあった。

いるはずもない外国で、彼女の面影を探したり、彼女の言葉を思い出したり――

――もしかしたら僕は、今までより一層、彼女のことが好きになっているのかもしれない。

その気持ちを、早く会って確かめたかった。

離れてみて、色々気が付いたこともある。彼女と話したいことも、今なら沢山ある。

「ま、じゃあケースケが俺を友達と呼んでくれたことを記念して、俺から友達として、初のおせっかいを焼かせてもらうかな」

そう言ってユータは自分の財布を取り出して、何かを取り出し、僕の前に拳を突き出した。

怪訝な顔で僕が手のひらを開くと、ユータは拳を僕の掌に置いて、それを渡した。

「な！」

僕は思わず声を上げた。

ユータから手渡されたもの――それは、コンドームだった。

「はは、別に使えって言っているわけじゃないさ」

ユータが僕の反応に、初心な奴と笑った。

「ただ、久し振りに会って、感情が抑えきれないということもあるかも知れんと思ってな。これを持っていれば、それを抑えないでいい。彼女に自分の１００％の想いを伝えられるだろ？」

「……」

確かに――この一ヶ月あまりで、僕と彼女の関係も、僕の想いもきっと微妙に変化しているはずなんだ。正直、会ってみて、僕が彼女にどんな感情を抱くかは、まだ想像できない。

だけど、これを持っていれば、どうあれ、彼女に遠慮なくぶつかることができる、か――

「俺は出来ればそれをお前が使うところ、想像したくないけどな」

ジュンイチが言った。

「シオリさんがキズモノに……想像したくねぇなぁ」

「……」

おいおい、友達の恋を応援する気はないのかよ。

「ま、いずれにせよ、俺もマイさんに早く会いたいぜ――お互いしばらく長い夜になるな」

「……」

試合を控えていた時は、考える暇もなかったけれど、試合が全て終わったと思うと、途端にその瞬間が待ち遠しく思えて、どうしようもなくなった。

――早く、会いたい。

「お、こんなところにいた」

ふと中庭に、声が響いた。

声の方向を振り向くと、日本代表のスタッフがそこに立っていた。

「あ、ども」

ジュンイチが会釈をした。

「ああ、すまん、めでたい席に興を削いで」

スタッフはそう言って、僕の方に駆け寄ってくる。

「なあ、サクライ」

深刻そうな顔で、名を呼ばれる。

「お前、今のところプロチームの交渉は、全部保留していて、日本に帰ってじっくり考えるって、伝えているんだよな」

「はぁ――そうですけど」

というか、スタッフだって知っているはずなんだ。オランダの合宿中、このホテルにも僕に各チームのスカウトが来て、スタッフの人達にもその対応をさせてしまったり、会見の段取りをさせてしまったりしていたし。

「しかし――お前、日本では、何でも中東のチームに入団するって。新聞にも載っているし、クラブのホームページで正式発表もされているぞ」

「――は？」

寝耳に水とはこのことだった。

「そんなバカな。ケースケには代理人もいないし、契約をしてもいません。だって、オランダではずっと俺達と一緒に……」

ユータが言った。

「ああ、しかしこれは事実なんだ。今日本のマスコミは、お前にこの真相を聞きたくて、お前を探している。取り合えずお前達の部屋に戻ろう」

僕達はスタッフに促され、自分達の部屋に戻った。

「これを見てくれ、日本のスポーツ新聞、現地時間の最新版だ。日本からコピーを送ってもらったんだ」

そう言って、スタッフは僕に一枚のコピー用紙を渡した。代表のユニフォームを着て、シュートを放つ僕の写真の横に『サクライ、中東へ？』という大見出しが付けられている。

『現在オランダで開催されている、Ｕ－２１世界選手権に主将として出場し、アーセナルを初めとしたビッグクラブからもオファーが届いている天才ＭＦ、サクライ・ケースケ（１７）が、中東のクラブ、バスコ・ダ・ガマと正式契約を交わしたことが明らかになった。サクライは表向きではプロ選手への転向に迷いを示していたが、家族には元々プロへの強い希望を明かしており、代理人の両親が各クラブのオファーを総合して決めたという。契約金は最低でも５００万ユーロとされる』

「……」

――何だこれは。

僕の代理人が両親？　両親にプロ入り表明の意思を示していた？　何の冗談だ？

しかも――これじゃ今まで僕がプロ入りを拒んできたのは、契約金を吊り上げるためのデモンストレーションみたいじゃないか。

「ケースケ、どういうことだよ、これ」

「中東って――オイルマネーで金はあるけど、レベルは決して高くない。これが本当だとしたら、思い切り金目当ての入団だぞ」

「僕にもわからない――、一体どうなっているんだ？」

僕も頭が混乱していた。この記事だけでは、何もわからない。ただ、ひとつだけわかっていることは……

この記事が本当なら、真相は、僕の家族が知っている可能性が高いということだ。

「すみません。僕はここで代表と別行動を取らせてください」

僕はコピー用紙を折りたたむと、すぐに荷物をまとめ始めた。

「今すぐ日本に帰って、この真相を確かめないと」

Intrigue

それからの僕は、織田信長が本能寺に散った報を受けて、中国地方から京までの距離を一気に駆け抜けた、秀吉の中国大返し張りのスピードで行軍した。

荷物をまとめ、スタッフに頼んでアムステルダムから東京行きのチケットを手配してもらい、車も手配してもらった。ホテルの正門には日本のマスコミが既にごった返しているために、裏口から出発した。その車でユトレヒトからアムステルダムに移動、スキポール空港からその日の東京最終便で羽田に飛んだ。

ボーナスが入ったことで、僕はパソコンの繋がるビジネスクラスを予約、そこでパソコンを借り、僕がオランダに発ってから、日本で何が起こったのかを、調べ直した。酒を少し飲み、連日のハードな試合の続く大会が終わったばかりなのに、飛行機で一睡もできなかった。

調べると、今日本で僕は国民的英雄としてあがめられているらしく、その人気は社会現象にまでなり、経済効果も大きく見込まれるほどになっているという。僕の日本代表背番号１０のユニフォームは、メキシコを破った頃から完売していて、数十万件の予約待ちだとか。芸能人やアイドルにも僕のファンを公言する者も出始めたという。

その人気の中、突然のこの騒ぎ――日本のサイトの至る所で、金目当ての契約をしたと、僕をバッシングする声が集まっていて、僕を擁護するファン（文面を見る限り、おそらく女性）との言い争いで、荒れに荒れまくっていて、既に破裂してしまったサイトもある。大手掲示板は書き込み規制で半日前から全ての機能がストップしている。

その中で、僕が契約したという、バスコ・ダ・ガマ・というチーム――手帳を見ると、確かに僕にオファーを出しに、オランダに来

ている。僕の手帳にも載っていたチームだ。
そのチームのホームページにアクセス。アラビア語なのでさすがに僕でも読めない。パソコンの翻訳機能で何とか片言でも大本の内容を理解する。トップに確かに、サクライ・ケースケを獲得したとの情報がアップされている。背番号まで１０に決定している。
「……」
嫌な予感がした。何と言っても、家族の名前が出ていることが、僕の不安を大いに募らせた。
――ふと、もう一度日本のニュースサイトにアクセスすると、ユータの名前の見出しがアップされていた。僕はそれをクリックする。
「ケースケは事情を確かめるために、一人日本に帰りました。こちらも寝耳に水でケースケ本人にも事情がわからないみたいです。事情がわかればあいつはちゃんと皆さんに説明すると思うので、現時点であいつに問い詰めないでやってください」と、ユータがマスコミにコメントしてくれた記事が載っていた。
――ユータ、ありがとう。僕がそう言っても説得力がない。こう言って、全員が僕を静観するとは思えないが、気休めにはなる。
しかし僕は不安で、椅子に座っているだけなのに、息が苦しくなってくる。ビジネスクラスの豪華な機内食さえ手がつかず、僕はそのまま羽田に到着した。着いた頃には、現地時間の正午過ぎだった。
各種手続きを軽くスルーすると、僕は１ヶ月ぶりの日本に感慨に浸る暇もなく、空港を横断した。
空港には、早朝だというのに、既に沢山のマスコミや女性ファンが僕を待っていて、僕が登場するなり、黄色い声が起こり、沢山のフラッシュが浴びせられた。警備員が必死に女性ファンを抑える。まるで韓流スターの来日風景だった。
だが僕は、持ち前の俊足でそれを完全に振り切る。今の僕にはそんなものは目に見えていなかった。
未成年の僕はクレジットカードを持っていない。もう一度空港のＡＴＭでお金を下ろす。この時僕は既に３０００万近くの金を手に

してはいたが、そんなことはもうお構いなしだった。
この騒ぎでは、とても羽田から川越までは電車では帰れない。なので飛行機の中で、帰りはタクシーを使うと決めていた。県をまたぐため、とんでもない額の運賃になるだろうが、それでも仕方がない。高速道路を使って、全速力で川越に向かうように運転手にお願いした。
「川越？　お客さん、大丈夫？　見た感じ、まだ若そうだけど」
運転手の初老のおじさんは、どうやら僕のことを知らないらしい。
「じゃあ先払い――釣りはいりません」
僕は5万円を運転手に手渡しすると、運転手は喜んでタクシーを僕の望みどおりに飛ばしてくれた。
日本の夏は、オランダの夏よりもずっと蒸し暑くて不快だ。車内も埃臭いクーラーが最強にかかっている。
そんな冷たい風の中、ラジオのニュースがずっと僕のことを報道していた。もう既に僕が帰国したことさえ報道されている。
「しかし、映像を見る限り、サクライくんの顔には余裕が全くありませんでしたね。ヒラヤマくんの言うとおり、本当に事情を知らないんじゃないでしょうか」
「一体何が彼の間に起こったのでしょうか、今は彼の口から真実が語られるのを待つしかありませんね」
「……」
「いやはや、さっきからこのニュースばかりなんですよね」
運転手が僕に話しかけてきた。
「しかし、このサクライっていう選手はすごいんですね。まだ17だってのに、もう数億って値段がついてるんですから。庶民の私達は嫌になりますよ。この子のご両親は、さぞかし鼻が高いでしょうなぁ」
「……」

――川越に到着した頃には、もう時計は午後の3時を回っていた。
そして、家に着いた時、僕はその様子に目を覆った。
僕の家は、川越でも有名な芋菓子屋の老舗だが、その店が閉まっており、ガラスの引き戸には、こんな張り紙がしてあったからだ。
『当店はこの度、閉店することとなりました。長い間のご愛顧、ありがとうございました』
「……」
な、何だ、これ。
僕は急いで玄関に回る。どうやら車があるので、家族はまだここに住んでいるようだ。鍵を開けて、僕は玄関を開ける。
薄暗い玄関は、いつもは靴が雑然と脱ぎ散らかしてあるのに、整然としている。スカウトなどの客人が多数来たからという、学校の家庭訪問に備えて慌てて綺麗にしましたというような片付け方じゃない。もっと徹底した整理のしようだった。
ふと玄関先に、見慣れないものを見かける。冷蔵庫のような、小さなクーラーボックスのような。
僕はそれを開けると、沢山のワインが入っている。ワインセラーだった。
しかも中に入っているのは、グルメ漫画で名前を聞くような、高級そうなワインばかり。シャトーナントカとかいう名前のワインや、僕が生まれる前に仕込まれた年代のヴィンテージもの。
そしてそのワインセラーの周りには、紙で大仰に包まれた日本酒や焼酎が沢山置かれている。どれも酒に疎い僕でも名前を知っているような、プレミア酒ばかりだ。暗くて涼しい玄関を保管場所にしているようだ。
だが、そんなものはどうでもいい。僕は階段を上り、リビングのドアを開ける。
「……」
がらんと片付いた部屋で、両親、妹、祖母が雁首そろえて僕を睨んでいた。

僕はオランダで貰ったコピー用紙の新聞を前に突き出した。
「どういうことだ、これは」
疲れも手伝って、荒い声が出る。
だが、真剣な僕とは裏腹に、家族は雁首揃えて僕に薄ら笑いを浮かべるだけだった。
「答えろ！」
僕は怒鳴った。
「うるさいなぁ」
気だるそうに、母が口を開いた。
「どうもこうも、見ての通りの意味よ。私達はあんたの代理人として、プロと契約をしたの」
何の説明も、僕への謝罪すらなく、母はそう言った。
「あんたをチームに入れるためなら、数億払うってチームが沢山あったわよ。そんなの捨てたらもったいないじゃない」
「誰がそんなことをしろと頼んだ！」
僕は激昂する。
「お前達に何の権利があるんだ！」
「権利なら、ある」
口を開いたのは、親父だ。
「天才だか臥龍だかしらねぇが、お前が今まで食べさせ着せて、住む場所も与えてもらっていたのは、誰のおかげだ？　中学はバカ高い学費払って、私立の名門中学に通わせ、塾まで通わせてやった。だから全国模試1位があるんだろ？」
「……」
「しかもお前はこの家にまだ住んでいるんだ。住んでいるなら親に従うのが当然……」
「ふざけるな！」
僕は大声で親父の薄ら笑いの理屈をかき消した。
「住まわせてやっているだと？　僕は言ったよな？　僕は家を出るって。今すぐにでも出たかったのに、お前達が同意書にサインをし

てくれなかったから、家を出られなかっただけだ。今更……」
「だがそれでも、お前がこの家に住んでいるのは事実だ。お前はまだ、俺達の庇護下にあるんだ。違うか？」
親父は僕の理屈を一笑に付した。
「……」
僕は拳を握り締めた。
「――わけわかんねぇよ」
僕の口から声が漏れた。
「お前ら、何で僕を嫌っているのに、この家に引き止めるんだよ！わけわからねぇよ、何で僕を……」
言いかけて、はっと言葉が止まった。
玄関にあった、あの大量の高級酒。見慣れないワインセラー。
――まさか。
僕はリビングを出て、奥の母の部屋に向かう。
そして、クローゼットを開けた。
そこには、まるで銀座のブティックをそのまま移し変えたような、高そうな服がいっぱい入っていた。シャネル、ディオール、エルメス――ファッションに疎い僕でも知っているような高級ブランドの服やバッグが大量に入っている。どれも僕が見たことのない服だ。
「ちょっとあんた、勝手に！」
母親が追いかけてきて、僕の肩を掴む。
しかし僕はその腕を振り払うと、今度は妹の部屋に向かっていた。
妹の部屋には、一月前には持っていなかったはずのパソコンが２台もあり、母親と同じくクローゼットには、セシルマクビーやサマンサタバサなどのブランドバッグや大量にあり、服も高校生の小遣いではとても揃えられないほどに充実していた。
「勝手に入ってるんじゃねぇよ！」
妹が僕を追いかけてきて、僕に後ろから蹴りを入れた。
「……」
だが、もうこの時の僕には、そんな蹴りの痛みなどは、神経に届

いていなかった。
体がわなわなと震えるほどの怒りに苛まれた。
拳を血が出るほどに握り締め、切歯扼腕しても、とても抑えられそうにない程の大きな怒りだ。
僕はこの瞬間、全てを理解した。
家族は今までずっと僕をダシに、僕の客から、接待や裏金を受け取っていたんだ。

よく考えたら、わかることだ。浦和レッズは、僕の身近にいるユータを使って僕をチームに勧誘しようとした。そして最近、また僕を勧誘してくれと頼まれたと、ユータも言っていた。

それなら、他のチームが僕の身近な人――家族を切り崩そうとするなんて、容易に想像できるじゃないか。

何ですぐにそれに気付かなかった？　さすがにこいつらでも、そこまではしないだろうと思っていたからか？

僕を家から追い出せなかった理由もわかった。

接待や裏金を受ける条件は、僕の説得――なのに僕が自分達と別々に暮らしていたら、各チームから、本当に僕を説得しているのかが疑われる。一緒に住んでいれば、説得をしているかどうかなんてどうとでも言える。金品を受け取ってしまえば、あとはどうでもいいってわけだ。

あの時、僕の一人暮らしを拒んだ時点で、こうなることを想定していた？　いや、違う。きっとあの頃からもう、国内のチームスカウトから、今ほどではないが、金品を受け取っていたのだろう。そう考える方が妥当だ。じゃなければあの時、僕がオランダで恥をかいたら、なんてことを心配するわけがない。あの言葉は、自分の甘い汁の供給が、僕の恥――つまり商品価値の下落と共にストップすることを懸念してのもの。そして僕がオランダに渡り、蓋を開けたら予想外の大活躍。僕の価値の高騰と共に、賄賂の額をどんどん吊り上げたってわけか。

しかし――

ざっと見たものだけでも、これだけ貰ったら、きっと総額１０００万は下らないぞ。他にも貴金属があるかも――これに実際の現ナマも加わったら、家族は一体僕がオランダに行っている間に、いくら袖の下に入れたんだ？　僕の日本代表での、ボーナス含めた総額く

らい？　いや、多分もっと……
「……」
　呆然とした足取りでリビングに戻りながらも、僕は拳を握り締め、歯を食いしばっていた。
　これが――これが本当に、人間のすることか？　家族を使ってやることなのか！
「こ――この……この馬鹿共！」
　腹の底から怒りの声が漏れた。
「貴様等はやっていいことと悪いことの区別がつかないのか！」
　壁を握り拳で、バン、と叩く。もうこの怒りは何かにぶつけても収まりそうになかった。
「うるさいなぁ」
　しかし僕の怒りなど、蛙の面に小便といった表情で、妹が言った。
「別にいいじゃん、向こうが出すって言うからもらってるだけだし。それに私もアンタの客にお茶とか出したりさせられたし、これくらいはその見返りとして……」
　バシッ！
　その口を僕は、妹を平手打ちすることで塞いでいた。
「何すんのよ！」
「お前は自分のしたことが何なのか、わかっているのか！」
　怒鳴る妹に、僕は怒鳴り返した。
「お前――その金は僕を説得してくれることを期待してお前に払った金だ。だがお前は僕を説得する気などないんだろ？　それなのに説得をダシに金を受け取る――これは詐欺だ！　立派な犯罪だぞ！」
　そして、妹の後ろの家族にも目を向ける。
「お前等も同じ考えなのか……今まで散々僕をいたぶってたくせに、自分達より下に置けなくなって、憂さ晴らしの相手として使えなくなったら、僕を使っての利益は何でも吸い上げる。お前等には節操がないのか！　恥を知れ！　恥を！」
　許しを請うてほしかった。

自分達のしたことが、悪いことであったと、わかってほしかった。だけどその思いは、如何に甘いものであったかを、もうわかっている。

家族は皆、罪のありかをどこかに忘れたような顔をしている。

それが、僕の怒りを更に加速させた。

「ケーちゃん。私達はそんなつもりはないわよ」

祖母が笑みを浮かべる。

「私達だってケーちゃんを預けるのに一番いいチームを選んだ。一番あなたを高く買ってくれた――つまり、一番あなたを評価したチームと契約したのよ。結局人間、自分を一番評価してくれる人のところへ行くのが一番幸せなんだから。私達だって、あなたの幸せをちゃんと考えたわ」

「そういうことだ。それにそれだけ金が出たら、お前の一生は取り合えず安泰だろ？　なのにこの好機をお前は綺麗事で逃そうとしているようだったからな――親として、わが子が道を踏み外すのを放ってはおけない。だから親の権限で、子供を正しい方向へと導いただけだ」

「……」

屁理屈だ。だが、法廷論拠としては、十分通る言い分。

大金を得る契約が、子供の将来を考えてと言えば、筋は通る。親権というのはそれ程強い。

「――金を出せ」

「あ？」

「僕と契約したチームから貰った契約金をここに出せ！　今すぐに！」

もうこうなったら、そのお金を全額返して、この契約を遡って無効にしてもらうしかない――

「ああ、それは無理ね」

母親が言った。

「表の張り紙見なかったの？　私達、店を閉めてこの家を出て行く

のよ。もう引越しの準備も進んでいてね。東京の城南にある億ションを買って、一生遊んで暮らすの。その億ションの頭金でかなり使っちゃったからね」

「ふ――ふざけるなよお前！」

あまりのひどさに言葉も失いかけたが、さすがにこれを聞いて僕も黙ってはいられなかった。気がついたら僕は既に母親に詰め寄っていた。

「はい、アンタには、これとこれ」

しかし母親はおくびにもせず、僕に二通の封筒を取り出した。

それは、僕の契約した中東チームの案内書と、退学届と書かれた封筒だった。

「アンタ、埼玉高校を退学して、来月から中東に行くのよ。契約は2年契約で、その間の給料は、こちらの口座に引き落ちることになってるから、必要な分だけ私達がアンタに送金するわ」

「は？」

「その先はもう好きにしなさい。2年契約が終われればアンタも20歳だしね。私達もあなたの親権が切れるあと2年、好きにやらせてもらうし、それが過ぎたらアンタに干渉しないし。アンタの望みどおりでしょ？　アンタ、来月には私達と一緒に暮らさないでいいんだから」

「ちょっと待て！」

「何？　大丈夫よ、アンタの行くところ、アンタに最高級の歓待をしてくれるって言うし、身の振り方はクラブの人が何とかしてくれるわ」

「そういうことを言っているんじゃない！」

「ガキ、いい加減に静かにしろ」

騒ぎ立てる僕を、親父が煙草をふかしながら、迷惑そうに見つめた。

「少なくとも、お前に今までかけた元手ってのは、大変なものなんだよ。お前が今騒がれるまでの実力があるのは、俺達のおかげだな。

だったらお前は元々、俺達に恩を返す義務があるわけだ。なのに恩を忘れて、お前一人だけ美味しい思いを持ち逃げされたらかなわないからな」

「……」

こいつ、実の親が子供に言うとは思えないような言葉を吐く。その理屈はもはや、人身売買と同じだ。

本当の親は、子供の幸せを願うという。

だけど、こいつは逆だ。この家族は、僕だけが幸せになるのが許せないんだ。

こいつらは、いまだにこの不幸な家庭の中から抜け出せずにいる。心の安らぎも知らず、ただ金によってのみ運営される家庭。

その最下層にいた僕が、一人だけ幸せになるのが許せないんだ。

そして、未成年である限り、僕は完全にはこいつらからは自由になれない。

久々に、この家庭に吐き気がした。

「だったら、その分を返せばいいんだろ……」

僕はもう、こいつらとまともに会話をしたくなくて……こんな事を言うしかなかった。

「その分は必ず返す。何年かかるかわからないけれど、働いて……だから、もうこんなことはやめろ。人を騙して、お金を取るなんてことは、絶対に……」

「ふん、頼みごとか、よくわかってるじゃないか」

そう言うと、親父は僕の前ににじり寄って、酷薄な笑みを浮かべて、言った。

「だが、テメエみたいな生意気な犬っコロも、ようやく利用価値が出てきたんだ。一番高いところに買ってもらって、せいぜいこっちもいい思いさせてもらうぜ」

「貴様！」

僕はいきり立つ。しかし親父は、その姿を歯牙にもかけず、言った。

「テメエだって、今まで契約金吊り上げようとして、表に出なかったんだろ？　その手伝いをして、お前を高く売ってやろうとしてやってるんだ、何が悪い？」

そう言うと、母や妹、祖母も口を開く。

「アンタだって、何億も詰まれりゃサッカーやるでしょ」

「そうそう、アンタも高校、貧乏だったから、お金がほしいんでしょ？」

「もうこれ以上はいいわ。早くお金を稼いでちょうだい」

「お前等みたいな下衆と一緒にするな！」

家族の言葉に、僕の全てを汚された気がした。

僕が今まで、幸せになるために、この家庭で得られなかった『心』を取り戻そうと、積み重ねた、その幸せな時間。

つい一日前まで、友のために必死に戦い続けたあの時間。

それを、薄汚い私利私欲の戦術にまで価値を貶められた。

金だけで繋ぎとめられている家族と、同類扱いされた。

おまけにこいつが言っていることは、人身売買と何の代わりもない。高く売れれば、僕の意志も、売る相手の素性も関係ない、と言っているのと同じだった。

湯が沸くように沸騰した紅蓮の怒りが、このままでは家族への憎しみに変わりそうだった。

それを感じた時――

――ズクン。

僕の心臓が、強く脈打った。

「……」

僕は反射的に心臓を抑えた。

憎しみが――僕の心を支配して……

――あ、駄目だ。戻っちゃ……

潜在意識の警告で、僕は家族を放り出して、踵を返して部屋に入り、鍵をかけていた。

「はあ……はあ……はあ……」

部屋に戻って、僕はスーツのまま、ベッドに倒れこみ、荒い息で深呼吸を繰り返しながら、僕は心臓を抑えていた。
こんな気分、昔は当たり前のように味わっていたな……
昔の僕は、良くも悪くも、それを自分の心の内に押さえ込んでいた。
それが、たった一回こんな仕打ちを受けただけで、こんなに心が汚されるなんて……
その時。
真新しい僕の携帯電話が、スーツのポケットの中で鳴った。
「……」
僕はそれを手探るように取り出し、耳に当てた。
「もしもし……」
「あ、もしもし、私――シオリです」
鼻にかかるような、遠慮がちな彼女の声がした。
「――ああ」
「帰国したって聞いて、そろそろ帰ってきたのかなって、電話してみたんだけど……今、忙しいかな？」
「……」
「――もしもし？」
「……」
半月ぶりに聞く、彼女の声が、とても愛しくて……
弱った心が抱える、どす黒い気持ちを溶かしてしまう。
彼女の声が、僕の澱んだ気持ちに、いつだって明かりを灯す。
そうしたら、無性に心が痛くなって……
気がついたら、静かに涙を流していた。
受話器越しに、震えた息を漏らす。
「あの――泣いてる、の？」
「……」
「――ねえ、どうしたの？」
「――逢いたい」

「え？」

「――君に――逢いたい……」

Hug

「――私も逢いたいから、いいけど……」
「――ありがとう、今どこにいる？　僕がそこに向かうよ」
「えっと――河川敷。弟の野球の試合を見に来ているの。リュートくんも一緒」
「――わかった。すぐに行くよ」
それだけ伝えて、携帯電話を切る。
「……」
――何言ってるんだ、僕は。
状況は最悪、しかも逼迫しているのに、女の子と逢っている場合か？
現実逃避か？　現実逃避するために、彼女と逢うのか？　正気かよ、サクライ・ケースケ。
「はぁ――頭痛くなってきた……」
一ヶ月以上続いた、日本代表の拘束、世界の強豪とのタフな試合の連戦、おまけにその後不眠不休で、家族の醜行を聞かされ、僕の体には疲れが一気にまとめてのしかかってきたようだった。
自慢の思考も停止寸前まで鈍っている――
――でも、男が一度、女性の許に行くと言った以上、行かなきゃ。
僕はベッドから起き上がり、着ていたスーツのまま、家を出た。
――あ、しまった。急いで帰ってきたから、またシオリに土産を買って来れなかった。久し振りに会うっていうのに……
――なので河川敷に向かう途中にあった花屋に寄る。シオリの影響で、花についての造詣が増え始めた僕だけど、母親にカーネーション1本送ったことのない（て言うか買える小遣いすら貰えなかった）僕は、花屋なんて来るのは生まれて初めてだった。
金はあるから、今ならドラマみたいに大きな薔薇の花束なんかも買えるけど、あんなでかい花束を生ける花瓶なんて、どこの家にあ

るってんだ――だから、小さな向日葵を一輪、フィルムに包んでリボンをつけてもらった。何となく、シオリにはでかい花束よりも、こうして一輪の花を愛でる方が合っているような気がした。

その向日葵を左手に握り締め、僕は河川敷へと走った。7月で、天気は快晴の炎天下――ワイシャツを汗で濡らしながら。

河川敷は、僕の家から走って15分くらいの距離にある。川べりの土手に着くと、僕は土手の坂を舗装したコンクリートの階段を上る。土手の向こう側には河川敷が広がっていて、その向こうには川が流れている。

今日は日曜日だから、沢山の人が河川敷でスポーツをしている。サッカーやゲートボール、フリスビー……

その中で、僕は目当ての小学生の野球チームを探す。シオリは弟の野球チームの試合を見に来ていると言っていた。多分その近くにいるのだろうと思う。

そのチームと思われるチームはすぐに見つかった。学区内に野球チームなんて複数あるものじゃない。どうやら父兄チームと小学生チームで試合をしているようだ。力は父兄の方が上だろうが、どの父兄もこの暑さにもうバテバテで、ライトゴロでもアウトになりそうなくらい足が動いていない。だから結果的に小学生の方が若干押しているようだ。

僕はその試合をしているグラウンド周りを見る。遠くからでもシオリはリュートを連れているから、すぐにわかるはずだ。だが、それらしき姿は見えない。ファールグラウンドには、選手の母親らしき女性が何人か、大きな日傘の下にブルーシートを敷いて、その中で試合を見守っている。多分麦茶を作ったり、マネージャーのような仕事もこなすのだろう。

「……」

携帯で、メールを送ってみようかと思ったけれど、やめた。いくらなんでも僕が早く来過ぎだ。まさか電話して早々、会いたい、なんて言われるとは、彼女も思っていなかっただろうし、僕が急かす

こともない。

夏の河川敷の土手は、夏草が当たり一帯に伸びていて、ちょっと青臭い臭いがする。セミの鳴き声が、炎天下を更に暑いものに感じさせ、河川敷の向こうの川は、陽炎で若干ゆらゆらして見える。

僕もここまで走ってきたから、息も切れていたし、汗も掻いていた。オランダは夏でもそこそこ涼しかったから、その気候の差もあって、ひどく空気が湿って、自分の体にまとわり付くように感じた。

僕は夏草の生える土手に座り、そのまま仰向けに倒れこんだ。夏草の臭いが強く感じられ、その夏草が風にそよぐ音が耳に近くなる。視界の端に、眩しいばかりの太陽があって、蒼穹の空に大きな入道雲がうごめいている。

「……」

しかし――こんなことしている場合じゃないぞ本当に。どうすればいいんだ。

法律的な知識には自信がないが、僕達未成年者は、保護者――親権保有者の同意がなければ、法律行為が行えない。あの親を民事裁判にかけることも、僕一人の力ではできないわけだ。

それに、普通に考えて、目の前に数億の契約がぶら下がっていて、それに飛びつかない僕の方が世間的に見ればおかしいことは明らか。あの親に法定代理人の資格がないと証明できれば簡単だが、さっき親父達が言っていたように「子供の幸せのために、将来しばらく安泰なお金を手にすることが必要だと思った」と言えば、裁判官は、あの家族に法定代理人としての資格が『著しく』欠如しているとは認めてくれないだろう。親権停止なんて珍しいケース、余程『著しい』と認められない限り、受理されるわけがない。日本も韓国や中国程ではないが、儒教的考えがいまだ色濃いのだから。つい数年前まで尊属殺が重罪とされていた国だし。

それに実際、あの家族は世間体のためとはいえ、僕を小学校時代は塾に通わせ、私立中学に通わせた。家庭は崩壊していたとはいえ、小さい頃から僕のために尽くしたという外観が出来上がっているの

だ。それはかなり大きい。

僕は確かに長年家族から暴力も振るわれているが、それによる被害も小さい。せいぜい転んで捻挫するとか、それと同レベルの傷がせいぜいで、虐待の訴えとして成立する可能性は低い。被害妄想――子供の感情論として扱われ、法的効力はほとんどないだろう。

僕が親を認めないと言ったら、恩を仇で返した最低の人間と烙印を押されるのは僕だ。うかつに訴えを起こせば、僕はかなり高い確率で敗訴――サッカークラブとの契約を司法の監視の下、受理しなければいけなくなるかも知れない。

僕の報酬を不正に受け取っているというのも、多分証明は難しいだろう。多分あの口ぶりだと、僕の契約する中東のクラブが報酬を振り込む口座は、家族が作った僕名義の口座だろうし、親が子供の報酬を預かるのも「海外で自分で日本に税金を納めたりするのは面倒だから、代わりに私達がやってあげるため」とでも言えば理由として通る。財産処分の根拠としては弱い。

家族が各クラブから受け取っていた接待や裏金の存在を暴露するのも――そんなことしたら、日本中を巻き込む大スキャンダルだ。下手したらＪＦＡやＪリーグ全体に捜査のメスが入る。下手をしたらしばらくＪリーグは試合自粛、最悪の場合、リーグが消滅するかもしれない。

そしたらユータはどうなる？　あいつは世界で名を売ったが、それがまぐれと言われないように、Ｊリーグでこれから結果を出さなきゃいけない時だ。ユータがこれからって時にＪリーグが運営自粛されたら、あいつの将来が……

何より、それを暴露したところで、世間的に裁かれるのは金品を受け取った家族ではなく、渡したクラブの関係者だ。それでは意味がない。

――訴訟を起こすには、どの選択肢も不利だ。僕が未成年である以上、尊属である両親をはじめとした家族相手の不利は避けられない。

「……」

――しかし、まさか、家までもう売っているとは思わなかったな。もう僕の意志関係なしに、契約しなければ大変なことになる状況まで作り出されてる。億ションの頭金とか言っていたが、お金が全額手元にないのであれば、額が額だ。もう円満に契約を取り消すことなんてできないだろう。

億ションの契約を取り消して、頭金を返してもらう？　――駄目だ。あの家族のことだ、契約した億ションがどこで、契約する不動産会社がどこなのかを僕に知られるヘマはしないだろうし、あの様子だと数日のうちに引越しが完了しそうだ。それが終わってから契約を解除しても、支払いは残る。

頭金を返してもらえないんじゃ、契約したクラブとの契約金を全額返して、遡及的に契約を無効にしてもらうこともできない――だとしたら違約金は発生するだろうな。

いくらだ？　新聞じゃ僕に支払われた契約金は５００万ユーロとされていたが（というか僕はまだ正確な契約金の額を知らないってどういうことだ）、５００万ユーロって、日本円で言うと6億あまりだ。その違約金が、半分の3億だとして――

――どうやって返せばいいんだ。１７歳にして3億の負債者？　はは――ギャンブル漫画じゃないんだぞ。もはや恐ろしくて、そんな冗談のような状況に、笑うことさえできない。

家族が全部契約しました。僕は何も知りませんで開き直っても、多分駄目だろうな。ある程度僕の責任も追及されるだろう。完全に八方ふさがりだ。

「……」

――契約を受けるしかないのか。

まだ僕も１７だし、たった2年くらいどうということはない、２年くらい意に沿わない人生になっても、それでもまだ２０歳で、その頃僕はそれなりに金を手にしている。文句を言われる筋合いはない――

家族はきっとこういう気持ちで契約したのだろう。
実際そうだ。2年我慢するだけ――サッカーをするだけで、6億の金が入る。給料だって莫大にもらえる。
だけど――中東だぞ？　言語もわからないし、いきなり生活しろといわれても困る。
それに――中東に行くって事は、2年間をあの家族のためだけに費やすってことだ。あの連中が大金を手にし、一生遊んで暮らすための片棒を担ぐ――僕が中東に行っている間、あいつらは毎日遊んで暮らすのだ。僕がこの契約を受けるってことは、あの家族の残りの人生を、王族並みに絢爛豪華にすることを確定させることになる。
――理不尽すぎる。あんな奴等がいい思いをしている間、僕はこんな金目的の契約を結んだことで、世間から大悪党呼ばわりされているだろう。
何より――それには埼玉高校を退学しなければいけない。
ユータや、ジュンイチや――シオリとも、離れることになる……
「……」
――嫌だ。
折角やっと、気持ちを伝えられそうなのに。これからもっとあいつらとしたいこと、話したいことが沢山あるのに。
まだ、あいつらの優しさに、何も応えられていないのに……
「……」
僕は太陽の光を遮るように、腕で目を覆い、震えてしまう息を漏らした。そうしながら、ただとにかく、泣かないように、必死で堪えるしかなかった。
あいつらのことを考えると、胸が痛くて、どうしようもなかった。
その時――
ワン、ワン、という、犬の鳴き声が聞こえて、鳴き声が段々僕に近づいてくる。
僕はその声に体を起こす。
土手の向こうから、白と深い茶色の美しい毛並みの小さな犬が、

僕に向かって走ってくる。
リュートだった。
リュートは僕の前に止まると、僕の胸に鼻を摺り寄せ、甘えてくる。
「リュート……」
「すいませーん！」
すぐ後ろから、慌てたような女の子の声がする。
顔を上げると、白いワンピースに、縁の広い帽子を被った女の子が、パンプスの底を鳴らして走ってくる。
「はあ、はあ――すいません。急に走り出しちゃって……助かりまし……」
女の子は一礼して礼を言い、顔を上げると、言葉を止めた。
「ケースケ、くん……」
マツオカ・シオリだった。
「……」
夏風。
「え、えっと――ごめんね、待たせて。ちょっと汗掻いちゃって、あなたと会うの恥ずかしかったから、ちょっと汗の処理をしに、一度家に帰ってて。で、でも急にリュートくんが走っちゃって。また汗掻いちゃった……えへへ……」
妙にしどろもどろになって、彼女特有の照れ笑い。照れている時はいつもこうなんだよな――
「……」
でも――
何だかその笑顔を見ると、心が何か、暖かいもので撫でられたような、そんな、緊張の解けるような、安息感が心を満たした。
それを感じると、次の瞬間、悲しいような、苦しいような、そんな想いに襲われて――
僕は次の瞬間、立ち上がり様、問答無用で彼女の体を抱きしめていた。

「え……」

彼女の戸惑う声が、耳元で幽かに聞こえた。

何度か彼女を抱きしめたことはあったけれど、今回のそれは、今までの包む込むようなそれとは違う。

彼女の細い体を、潰してしまうんじゃないかというくらい、僕は彼女を、強く抱きしめていた。彼女の背中から、彼女の髪に触れて、髪を撫でる。彼女の髪に、こうして触れるのも、初めてのことだった。

「――ごめん」

僕の喉から、言葉が漏れた。その一言を絞り出すだけで精一杯だった。

真夏のうだるような炎天下の中でも、彼女のぬくもりは、別のものとして、確かに感じられる――

「ちょ、ちょっとケースケくん、まずいよ。あ、あなた日本じゃ今すごい人気なんだから、誰かに見られたら……」

「……」

「――その……落ち着いて？　わ、私はどこにも行かないよ？」

シオリは状況が整理できないような、戸惑ったような声で僕をなだめようとする。

でも、僕はどうしても今は、彼女を抱きしめる腕を解くことができなかった。

今は彼女の全てが欲しかった。体温、重さ、匂い――何か、彼女を感じられるものが、無性に欲しかった。狂おしい、という感情があるとすれば、今この時の感情だったのかもしれない。

「……」

――ああ、そうか。何でこんな時に、彼女に逢いたいと思ったのか――

家族から、何か自分の大切なものを全て汚されたような気がした時――僕は確かに感じた。自分の心が、半年前と同じ、再び真っ暗な闇の中に叩き落されるような感覚を。

僕は、その闇の中で、光を求めたんだ。植物が太陽に向かって茎を伸ばすように。

理屈じゃない。それを無意識のうちに選択した。どうしようもなく、彼女に逢いたかった。光を探していたんだ。

彼女がずっと、僕の光だったんだ。

――馬鹿だ僕は、今頃気付くなんて。

自分が思っている以上に、僕は彼女を好きだったんだ。ずっと前から、こんなにも。

Baseball

「ワン！」
突然リュートが一鳴きしたので、僕の思考は現実に戻された。
僕はシオリの背中に手を回したまま、体を離して、リュートの方を見る。
「ふふ――僕を忘れるな、って」
シオリが僕の腕の中で、くすっと笑った。
「あぁ――ごめんリュート、お前のことを忘れてたわけじゃないんだ」
僕はようやくシオリから手を離し、その場にしゃがんでリュートの頭を撫でた。リュートは気持ちよさそうに頭を揺らす。
「やっぱり、あなたに一番懐いてるのね、リュートくん」
僕の背中越しに、シオリの声がした。
「……」
沈黙。
しまった――いきなりこんな汗だくの体で、所構わず彼女に抱きつくなんて、そんなはずじゃなかったのに。
「あ、あのさ――」
そうだ、と思い直し、僕は立ち上がる。
「ごめん――急いで帰ってきたから、オランダで何も土産を買えなかったんだけど、せめてこれを」
そう言って、僕はさっき花屋で買った、一輪の向日葵の花を差し出す。つかみに僕がぶち壊した空気を、少しでもフォローしようと思った。
しかし僕はその花を見ると、目を丸くしてしまう。
向日葵の花は、僕がさっき彼女を抱きしめた時に、力を入れすぎたせいで、花が潰れてしまっていた。周りの花びらが、もう半分くらい落ちてしまっている。

「あ――」
僕の口から、間抜けな声が漏れた。
「ふふふ……」
だけどそんな僕を見て、シオリは可笑しそうに笑った。
「ありがとう、嬉しいな」
そして、笑いながら僕の手から、向日葵の花を受け取った。
「え――そんな、いいよ、またすぐに新しいのを買ってくるよ」
「ううん、いいの」
申し訳なさを抱える僕を見て、シオリはかぶりを振った。
「だって、まだこの花、十分綺麗だし――それに、初めてあなたから貰った花だもの。この花でいいの」
そう言ってシオリは、その花びらの取れてしまった向日葵を胸の前で大切そうに両手に抱いた。

――それから僕とシオリは、土手の夏草の上に座って、河川敷の少年野球を見るでもなく、夏風に当たっていた。シオリは僕の持ってきたタオルを敷いて、その上に座っている。僕の横ではリュートが夏草の上に寝転んでいる。
「……」
だが、お互い久し振りなので、ちょっとあがっている。
「きゃっ」
夏風が少し強く吹いて、シオリは自分の被っている帽子の縁を掴んで、飛ばされないように抑えた。
「……」
そんなシオリを、僕はずっと見ていて。
僕は少し、戸惑っていた。
何で僕はこの娘を前に、今まで何もせずにいられたのだろう――
そんな思いが、僕の胸を去来していたからだ。
彼女が、皆が認める美しい女の子だということは、ずっと前から

知っているつもりだった。外見だけじゃない、心はそれ以上に透き通っている。

だけど――

一ヶ月振りに見るシオリは、僕の目には、その美しさが、以前とは違って見えた。

今までは、彼女を如何に傷つけまいとして、触れることを恐れていた。花のような彼女を、こんなひねくれた僕の色に染めないようにと。

だけど今は違う。彼女に触れることに、まだ若干の戸惑いはあるものの、それ以上に彼女のことを、もっと欲しがってしまう自分がいて――

そんな自分の身勝手さを感じながらも、それでも気持ちが溢れてくる……

――上手く言えないけれど、全然綺麗な気持ちではない。

こんな気持ちを前にも味わった気がする。

確か、彼女とラブホテルで一夜を明かした時も、これと似た気分になった気がする。いやらしい気持ちや、快楽を求めてじゃなく、彼女のことを欲した時が。

でも――あの時の気持ちとは、似てるけど、また違う気がする。

あの時は、単に寂しさとか、不安を埋めたいとか、そういう、彼女を逃げ場所みたいに見る気持ちが強かった。彼女の優しさに、甘えていたのだと思う。

でも、今はそういうのではない。もっと、本質的に――

「その――久し振りだね」

そんな考えを巡らせている時、シオリが声をかけてきた。

「え？　あ、ああ――そうだな」

ちょっと変なことを考えていて、返事が妙にしどろもどろになる。

「ちょっと、日に焼けたね」

「そうかな――」

僕は、自分の腕を見る。僕の肌は、男としては白い方だけれど、

確かにちょっと日焼けしたかもしれない。
土手には夏草の陰にアザミが咲いていて、シオリの隣に座ると、シオリが塗った日焼け止めのひんやりした清涼な匂いが、夏草の香りに微かに混ざる。
「そうか――もう夏なんだよな。オランダの夏は涼しくて、あまりそう感じなかったよ」
河川敷の微かな情景に夏を感じ、日本のうだるような暑さもまた、今は少し風情があるように感じた。
僕は河川敷で試合をしている野球チームに目をやる。子供のバッターがボールを引っ掛け、ショートゴロに倒れ、子供は悔しそうにうなだれる。さっきから見ていると、この少年野球チームは、実力はたいしたことはなさそうだけれど、皆楽しそうに野球をやっている。
「あの中に、君の弟がいるんだね」
「そう」
「まさか――お父さんも？」
「ううん、お父さんは今日は仕事。ここにはいないわ」
「そうか――よかった」
僕はほっと胸を撫で下ろす。まさかこんな唐突に、彼女の父親に、僕と彼女が一緒にいる姿を見られたら、どうしたらいいか途方に暮れそうだ。
「しかし、弟の試合をわざわざ見に来るなんて。君は家族思いなんだな」
言いながら、僕は妹のことを思い出す。僕の妹は僕の名を騙って、ブランドバッグや服を集め、中学から高校にあがったばかりだというのに、あぶく銭のために人としての品性を失った。同じあぶく銭を稼ぐにも、援交でもしている奴の方が、自分の体を張っているだけまだあれよりはマシな気がする。そんな妹の姿を見たばかりだから、こうして兄弟の試合を見に来る兄弟像というものが、殊更僕には信じられなく思えた。

「ううん、普段はあまり、見に来ないの」
「え？」
「ただ――家族に言われちゃって。イングランド戦が終わって、あなたが帰ってくるって思ったら、何だか急に時間が長く感じられちゃって――ここ2日くらい、ずっと上の空だったから。だから弟に、家でいつまでも景気悪い顔するな、って怒られちゃって。外に連れ出されちゃったの」
シオリはえへへ、と、照れ笑いを浮かべた。
「あの試合、見てたのか？　日本じゃ深夜にやってたはずなのに」
「私、全試合見たよ。リアルタイムで」
「……」
「まあ、私だけじゃないけど。学校の人、大体みんなあなた達の試合を見ていて、試合の翌日はみんな眠そうで、1，2時限は授業にならなかったわ。私も初めて授業中寝ちゃって、怒られちゃった、えへへ」
「君が授業中寝たのか？　それはよっぽどだな」
いつも真面目なシオリが授業中寝るなんて、想像できなかった。
「しかしそれは、教師達が心配するだろうな。僕の影響がどうかとか」
「もう言われたわ」
「え？」
この通り、いつも真面目で素直で努力家のシオリは、一般生徒だけでなく、教師達からも絶大な人気があった。そんなシオリが、学校始まって以来の問題児とされる僕と付き合ったことが教師に知れた時は、教師達もひどく悲しんだという。今でもシオリは教師に、サクライに憧れたりしちゃ駄目だぞ、とか、よく釘を刺されるらしい。
「やれやれ――いまだに僕、教師に嫌われてるからな。最近はちゃんと、授業に出てるのに」
「もうそんな次元じゃないって」

隣にいるシオリがかぶりを振った。
「ケースケくん、今日本じゃあなたの噂で持ちきりなのよ。あなたが合宿で、日本代表チームをサポーターを率いてやっつけちゃったとか、メキシコ戦、開始8秒でゴールを決めて、ハットトリック決めちゃうとか。この一ヶ月、あなた、毎日テレビに出ていたわ」
「そうなのか？」
「うん、この一ヶ月のあなたのしてきたことも、テレビでかなり放送されていたわ。あなたが日本代表に喝を入れたんでしょ？　運は天にあり、鎧は胸にあり、って」
「……」
「何故日本代表が強くなったのか、みたいな特集番組を沢山やってたし、あなたがどうしてあの時ああいう行動をとったか、みたいな事は、大体みんな知っていると思うよ」
「……」
――想像以上にすごいことになっているようだな。今の日本は。
「どうだった？　世界大会に出てみて」
「うーん、やっぱりこの体だと、世界で一流になるのは無理だろうなって、改めて感じたかな。予選リーグ突破してからは、もう騙し騙しやってたけど、さすがに自分の力の弱さを痛感した」
「そっか」
シオリはただ、頷いた。
「ちゃんと、言えた？」
シオリは僕に、そう訊いた。
「ん？」
「ほら、言ってたじゃない。あの二人に、ちゃんと友達だって言うって」
「あぁ――うん。帰る直前に、言ってきた」
「二人は何て？」
「ジュンイチには爆笑された。ユータは号泣した」
「えぇ？」

シオリは首を傾げながら笑った。
「全く――どっちも馬鹿正直な反応だったよ」
「でも――言えて良かったね」
シオリは、自分のことのように感慨深そうにそう言った。
「……」
それはそうか。僕はこの大会で、自分を認められるように頑張ってくると大口叩いて彼女の許を去った。もし自分に自信が持てるようになったら、彼女にも伝えたいことがあるって、言ったもんな。
――どうする？　彼女にこの場で言ってしまうか？
「ん？　何だろう？」
考えを整理しようとしていると、シオリが声を上げた。
「誰か、こっちに来るよ」
僕はそう言ったシオリの視線の先を見る。
河川敷から土手を登って、一人のおじさんがこちらに向かってくる。怪訝な顔で僕達はそれを見ていたが、僕達の前に来ると、おじさんは被っていた野球帽を脱いで、僕に頭を下げた。
「あの――サクライ・ケースケさん、ですよね」
おじさんは僕に訊いてくる。
「――はぁ、そうですけど」
「やっぱり。こんなところでお目にかかれるとは光栄です」
改めておじさんは僕に頭を下げた。
「あの――もしよろしければサクライさん、私達のチームに入って、子供達と野球をしていただけませんか？　少しでいいんです。きっと子供達も思い出になると思いますので」
「え？」
「サクライさんは中学時代はかなりの野球少年とお聞きしてますし、代表でも選手同士でボールを打ったりしていたと、テレビで見ましたので、子供達も何か教わりたいと言ってまして」
そんなことまでテレビで報道されていたのか。
でも――確かに、さっきまでうじうじ悩んでいたし、悶々として

いるよりは、体を動かしたい気分だった。
「ええ、僕でよければ、喜んで」
「本当ですか？」
おじさんは後ろを振り返って、両手で丸を作る。それを見て、グラウンドにいる子供達、そしてベンチにいる奥さん達も声を上げて喜んだ。
「さ、どうぞどうぞ」
僕は立ち上がり、河川敷へ降りていく。シオリはリュートのリードを引いて、僕についてくる。
「見て見て、本当にサクライくんよ」
「あ、握手してくれませんか？」
ベンチに入ると、僕は奥様方にやたらモテた。握手をねだられたり、大変だったが、それを夫に諌められ、何とか解放された。
「お父さんチームのピンチヒッター、サクライ選手！」
僕を呼びに来たおじさんが、代打を告げると、守備についている子供達が、うおおお、と叫んだ。
僕はチームの黒いヘルメットとバットをおじさんに渡される。
「じゃあ――これ、預かっていてくれ」
僕はスーツのジャケットとネクタイを脱いで、ベンチに座るシオリに渡した。
「うん、頑張ってね」
シオリは両手で握り拳を作って、僕に言った。
「頑張れって言われても――それって大人気なくないか？」
僕はそう言いながら、バッターボックスに向かう。バッターボックスの一歩外でゆっくり素振りをし、体をほぐしながら、小学生用バットの軽さと長さを確かめる。
「すっげぇ、カッコいい！」
守備についている子供達の声。
ヘルメットを被り、左バッターボックスに入ると目の前のピッチャーは好奇の目を僕に向けながら、帽子を取り、宜しくお願いしま

す、と、深く頭を下げた。
ああ、この感覚、久し振りだな。バットを振り続けてはいたけれど、実戦の打席は3年振りだ。
思い切り振って、ゴロを打ったら、小学生には打球が速過ぎるかも知れないからな——子供が怪我しないように、できるだけフライを打たないと。
ピッチャーは嬉しそうに、僕に第一球を投げた。
低めにいい球が決まっていたけれど、振り子でバランスを取った僕は、そのボールを下から掬い上げた。
きぃん、と金属バットの快音響いて、打球はライトの頭上を越えていく。
わぁ、と、敵味方問わず声を上げる。
はぁ、まさかあんな飛んでくれるとは思わなかった。これで凡退したらすごくかっこ悪かったからと思うと、僕はファーストベースを回りながら、ほっとため息をついていた。

Ｂａｓｅｂａｌｌ（後書き）

今更なんですが、この作品もお気に入り登録が１００人を越えまして。たまに登録が減ることがあるので、様子を見ていたのですが、もう大丈夫かと思って。登録してくれた方々に、この場を借りてお礼を――ありがとうございます。

自分で掻いていて思うのですが、この作品の恋愛模様は、どちらかというと男性向けですよね…女性読者が読むと、ケースケの行動は、一人よがりすぎて共感があまり得られないかもしれません。作者もできることなら、女性読者がきゅんとするような恋愛模様を書きたいのですが…

さて、本編はこれから新キャラクターが登場します。

Sibling

「うおおお！　すげぇ！」
子供達が声を上げる。
僕がマウンドから、全力で投げたストレートの速さに。
僕は中学時代には、既に遠投は８０メートルを超えていたし、肩と守備には自信があった。今は背筋力もついたから、全力で投げれば１４０キロは出る。
とはいえ小学生相手にそんな球は投げない。一度本気で投げてみて、と子供達に言われて、デモンストレーションで投げただけ。キャッチャーが捕れなくても困るので、投げ込んだのも、ホームベース後ろにネットを立ててだ。
父兄チームはもう全員が炎天下にバテバテで、ピッチャーがいなかったので、僕がピッチャーをすることになった。
僕はさっきの球とは半分くらい――７０～８０キロくらいに球速を抑えて投げたが、その分コントロールに気をつけて投げた。小学生達は、打ちごろのスピードだが、微妙なところにボールが決まるので、凡打の山を築いていく。
「駄目だよ、ボールを打つ時、踏み込む足を外に開くから、バットの先っぽにしか当たらないんだ。内側に踏み出すくらいの気持ちで次踏み込んでみな」
凡打する度に僕は小学生一人一人に原因を解析し、身振り手振りを入れて指導をした。
チェンジになる度に、僕は奥様方から世話を焼かれた。写真も所望されたけれど、今僕はとてもややこしい立場だ。写真が流出すると、この人達も巻き込む大変なことになりかねないので断った。
僕が参加したのは４回表からだったけど、結局僕は自分のバットで決勝点を叩き出して、保護者チームを勝利に導いた。
試合が終わると僕は子供達に囲まれて、サインや握手をねだられ、

大変だった。
「あの、メダル持っていたら、見せてください！」
子供達の一人に言われる。
「あぁ――忘れてた。はい」
僕は自分のスーツのポケットに入っているメダルケースを取り出し、蓋を開け、皆に見せた。
「うおお、すっげぇ！」
「触ってもいいし、噛んでみてもいいよ」
「いいんですか？　やったぁ」
「俺も俺も！」
子供達は僕のメダルに群がる。
一度僕はベンチに戻り、シオリのところに戻る。
「お疲れ様」
シオリは僕に、麦茶の入ったコップを差し出す。
「さすがに疲れたな」
ちょっとはしゃぎ過ぎた。オランダでイングランド戦をこなしてから、日本にとんぼ返りして、一睡もしていないのに。
「いや、サクライさん、ありがとうございました。子供達もあんなに喜んで」
保護者達が僕の許にやってきて、揃って頭を下げた。
「いえ、僕も楽しませてもらいましたから」
僕も礼を言う。
さっきまで少し落ち込んでいた僕だが、子供達の笑顔に少し元気を貰い、今は気持ちが少し晴れやかだった。
誰かの笑顔を見るのが、僕は本当に好きになっているんだな、なんて、実感できることが、少し嬉しかった。ついさっきまで、自分の心が闇に突き落とされたようで、そんな気持ちを見失ってやしないか、少し自信がなくなっていたから。
保護者の方に、慇懃にお礼を言われた頃には、夏の夕日がオレンジ色に染まって、河川敷の向こうにかすかに見える川面をキラキラ

と照らしていた。多分夕方の5時くらいだろう。
「シオリ姉」
不意に、そう呼ぶ声が僕達の背後でした。
振り向くと、少し小柄だが、切れ長の目に薄い唇の、少し大人びた、ユニフォーム姿の美貌の少年が立っていた。少年は野球帽のひさしを上げる。
「シオリ姉、まさか本当にサクライさんと知り合いだったなんてな」
少年はそのままシオリに言った。
「ふふ、見直した？」
シオリは少年に、得意げになって胸を張る。
「――俺は別に、シオリ姉が嘘ついてたなんて、初めから思っちゃいないぜ。シズカ姉は少し疑ってたみたいだがな」
小学生だろうが、随分醒めた少年だ。と言っても、小学生なんて、こうして少しツッパリたい時なのかもしれないけれど。
「あ、紹介するね。私の弟なの」
シオリは僕の方を見て、少年の方に掌を開いて促した。
「はじめまして。マツオカ・シュンです。小6です。お会いできて光栄です」
そう言って、野球帽を取り、頭を下げた。綺麗な丸顔に、爽やかな短めの髪が、歳相応の幼さを醸し出した。
「ああ――サクライ・ケースケです。ご丁寧に、ありがとう」
僕はさっきまで一緒に野球をしていたというのに、今更ながら挨拶する。
僕が手を差し伸べると、瞬時は少し戸惑ったような表情を見せたが、しばらくして僕の手を握り返した。
「テレビで言ってた通り、相当バットを振ったんですね」
僕の手を握りながら、シュンは言った。
「手を握っただけでわかるのか？　すごいね」
「いえ」
さすがシオリの弟だ。聡明で飲み込みも早い。

「君は確か、セカンドを守っていたね」
「覚えてたんですか？」
「ま、僕も中学時代、主にセカンドだったからな」
「でも、すごいですね。あんな遅いボールで、４回からパーフェクトに抑えるなんて。僕もインハイのボール球に手を出して、サードフライに打ち取られちゃいました」
「はは、大人気なかったか？」
「いえ、勉強になりました」
どうやらシュンは僕に好印象を持ってくれたみたいだ。話し方は淡々としているが、話の端々に幼さを感じる。
そう思った時、僕の腹がグーッと鳴った。
「あ……」
「ケースケくん、おなか、空いてるの？」
シオリに訊かれる。
訊かれて少し考えていると、オランダでの3位祝勝パーティーで、食べ物を少しつまんで以来、機内食も手に付かなかったし、もう丸一日何も食べていない。思い出すと、急に空腹を感じ出す。
「あぁ――少しな」
僕は夕日を見上げる。
腹が減ったと言っても――これからどうしよう。
今日はとてもこのまま家に帰ろうという気にはなれなかった。
彼女を食事に誘うか？　せっかく久し振りに会えたのに、ちょっと予定が狂ってしまったし、二人きりでもうちょっといられたら……
「ねえ、ケースケくん」
そんなことを考えていると、シオリが僕に声をかけた。
「もしよかったら――今からうちに、ご飯、食べに来ない？」
「え？」
予想外の展開。
「ケースケくん、今はどこに行っても、人だかりができちゃうよ。疲れてるだろうし――それだったら、うちに来ない？　少しはゆっ

くり出来ると思うんだけど」
「どうかな――五月蝿いのがいるからな」
シュンが首を傾げる。
「でも、俺ももっとサクライさんと話したいし、是非来てくださいよ。俺達もシオリ姉に付き合って、あなたの試合、全部見てたんですよ。おかげでうちの家族、みんなサクライさんのファンになっちゃって」
「……」
「それに――シオリ姉もこの1ヶ月、あなたがいなくなってずっとうじうじしてましたし」
「シュン！」
シオリが怒ったような声を出すと、シュンは近くにあった自分のエナメルスポーツバッグを担ぎ上げた。
「じゃ、俺は一足早く帰りますんで。後から二人、ごゆっくり」
そう言って、足早に土手の方へ向かい、逃げてしまう。
「もう……」
その後姿を、苦々しげにシオリは見送っていた。
「面白い弟だな」
僕は言った。
「面白くなんてないよ――私をからかうのが、昔から好きなの」
シオリは膨れ面だ。
「……」
それでも、シオリが僕を待って、あまりにうじうじしているからと、外に連れ出してくれたのも、あの弟だ。
醒めたように見えて、実はシスコンかな。というより、割といい奴ってところかな。
「――折角だし、お呼ばれしようかな」
「え？」
「君の家に。君の妹さんにも、会ってみたいし」

「――なあ、やっぱこのスーツだと、失礼じゃないかな？　ちょっと泥付いてるし」
僕とシオリは、夕焼けに染まる街を、並んで歩く。リュートも一緒だ。
「ケーキとか、買っていった方がいいかな？」
情けないことだが、僕はシオリと共に、彼女の家に向かいながらも、今更ながら緊張していた。
「ふふ」
シオリはそんな僕を見て、可笑しそうに笑った。
「あの戦力差で、日本代表を世界3位にまで導いたキャプテンが、随分強張ってるね」
「そりゃそうさ――恋人の両親に会うなんて、経験ないからな」
僕は彼女にとっていい彼氏とは言いがたい。親の目から見れば、普通そう思っても無理はないと、自分でも思う。この半年の間に、二度も彼女を置いて好き勝手してきてしまったし、その上どちらも土産のひとつも買ってきていない有様だ。
兄弟ならともかく、親――しかもこんな器量のいい娘の親だ。どうしても、半端な男は玄関先で塩でも撒いて追い出すような人達を想像してしまう。
「僕が君の親なら、男が来たら、無理難題を言って追い出す気がするな。火山の火口の中にある指輪だとか、燕の子安貝だとかを持ってこいとか」
「大丈夫よ。うちの親、むしろ賑やか過ぎるくらいの人達だから」
「……」
そんなわけで、僕は手ぶらのまま、シオリの家の前に到着する。
僕はそれでもまだビビッていて、玄関前で一度立ち止まり、深呼吸をした。
「疑り深いなぁ」
シオリは呆れ顔だ。

「……」
て言うか、何で僕はシオリの家に来ることになってるんだ？
しかも、シオリが自分から家に誘うとか。女の子が自分から、自分の家に来て、なんて、そうそう言うものじゃない。シオリみたいな奥手な女の子なら尚更だ。
――まあ、そのおかげで、しばらく家に帰らなくてよくなったわけだけど。
シオリはどうやら鍵を持ってこなかったようだ。インターホンを鳴らす。
「はーい」
女の子の声がして、擦りガラスのドアの鍵が開く。
「お帰りーお姉ちゃ……」
そう中にいる女の子が言いながらドアを開けたが、少しドアが開いただけで、ぴたりとドアが止まる。
そこには、タンクトップにホットパンツという、イケイケな格好をした女の子がいて、じっと僕の顔を見ていた。
「え？　え？　ウソ！」
僕の顔を見て、途端女の子は狼狽して、次の瞬間、開きかけたドアをばたんと閉めてしまった。
「……」
「ちょ、ちょっとシーちゃん！　どうしたの？」
シオリが困ったような顔で、ドアをノックする。
「ま、待って！　うぅ――何でよぉ」
ドアの向こうから、女の子の泣きそうな声が聞こえる。擦りガラスの様子を見ると、ドアの前でへたり込んでいるようだ。
「何やってんだよ、シズカ姉」
ドアの向こうから、シュンの声がした。
シュンがドアに近づいてきたようで、ドアがまた開かれる。
「サクライさん、来てくれたんですね」
シュンは僕の姿を確認するなり、微笑んだ。

「すいません、姉が粗相しまして」
ドアを開くと、シュンの横に、さっきのイケイケな女の子がへそを出して、シュンの横に立っていた。シオリより背が少し高く、胸も少し大きい。足がすらりと長く、綺麗な女の子だった。
「えっと、紹介するね。私の妹」
シオリは、シュンの時と同じように女の子を紹介する。
「はじめまして。サクライ・ケースケです」
僕は挨拶するが、女の子は僕を見るともじもじして、目を俯けてしまう。
「はは、気にしないでください。こんな恥ずかしい格好でサクライさんの前に出たんで、照れてるだけですから」
シュンが隣の女の子を見ながら、呆れるように笑った。
「――シュン、アンタ何でサクライさんが家に来ること、言わないのよ！　知ってたんでしょ？」
それを聞いて、女の子はシュンに怒ったような、泣き出したいような声で問い詰める。
「シズカ姉は男前を見るといいカッコしたがるからな。初めから恥かいておいた方が、今後無理しないでいいと思って」
「この――」
「二人とも、喧嘩しないで」
シオリが玄関で、二人を諫める。
「ケースケくん、妹のシズカ。私はシーちゃんって呼んでるの」
シズカに代わって、シオリが改めて紹介した。
「何だ――よかった。初めドアが閉まった時は、来てはいけなかったのかと心配したよ」
「そ、そんなことないです！」
シズカは僕がそう言うと、思わず声を上げた。
「来てくれて、すごく嬉しいです。あの――こんな格好で、ごめんなさい。マツオカ・シズカです。中3です。よろしくお願いします」
「よろしくね」

僕は手を差し伸べる。シズカははじめ恥ずかしそうな顔をしていたけれど、やがて笑顔になって、僕の手を握り締めた。
「わぁ！　私、サクライさんと握手しちゃったぁ、すごーい！」
シズカは嬉しそうに僕に微笑む。
「あぁ――でも、こんなことならメイク落とさなければよかったぁ」
「……」
格好を気にしているようだけれど、スタイルがいいから、僕の方こそ目のやり場に困った。すっぴんを気にしているようだけれど、全然問題ない。
しかし――シオリの妹とは思えないくらい元気な娘だな。化粧とかの知識もシオリよりありそうだ。服の趣味や、性格嗜好もシオリと随分違いそうだ。
やれやれ――マツオカ家の人間は、ひと癖もふた癖もありそうだ。

Ｓｉｂｌｉｎｇ（後書き）

そんなわけで、新キャラクター、マツオカ家の人々、登場です。
３兄弟全員、「し」で始まる名前にしてしまったのは、正直嫌がらせです。作者は名前を考えるのが苦手で…本当はみんなカッコいい名前にしたいんですけどね。
ただ、キャラの名前を覚えやすいように、簡単な名前にした方がいいのかな、とも思ったり…
最近の子供の名前はすごいですからね。ああいうカッコいい名前を考えられる親のセンスに脱帽ですね。作者はとても真似できません。

「あ、さあさあサクライさん！　玄関で立ち話もなんですし、どうぞ、上がってください」
シズカはそう言って、スリッパを僕の足元に置いた。
「今更いい女ぶっても意味ないって」
隣にいるシュンが冷や水を浴びせる。
「う、うるさい！」
シズカはシュンの方を見て、むくれる。
「大体、サクライさんはシオリ姉の彼氏なんだ。色目使ったって――」
「私だって、はじめからお姉ちゃんの彼氏に色目使ってるわけじゃないわよ」
シズカは言った。
「ただ――将来、お兄ちゃんになるかもしれない人だから、今のうちにいい妹振りを見せないとと思って」
「な！」「え？」
僕とシオリが同時に声なき声を上げる。
「シ、シーちゃん！　なな――な、何言ってるの！」
シオリは顔を真っ赤にして、シズカに詰め寄る。
「え？　お姉ちゃん、そのつもりじゃないの？　この一ヶ月、サクライさんのことばかり考えて、携帯ずっとパカパカしてたくせに」
「わあああああ！」
まるで恥ずかしいワードをかき消すように、シオリは声を上げた。
「ケ、ケースケくん！　と、とにかく、上がって！」
そう言うと、シオリは僕の手を取って、僕を玄関に引っ張り上げる。
「お……」

僕は履いていたローファーを脱いで、急いでスリッパに足を滑り込ませる。
シオリは僕の手を引いて、玄関から伸びる廊下を先に歩く。
「キャー！　お姉ちゃん、大胆なんだからぁ」
後ろからシズカの声がした。
シオリは顔を真っ赤にして、近くの部屋のドアを開けて、僕をそこに入れ、分厚いドアを閉め、鍵をかけた。
部屋は八畳ほどの広さで、入り口から見て左手には棚があり、奥には本格的なステレオコンボがあり、レコードプレーヤーまである。部屋の真ん中にはソファーが鎮座していて、右には黒のアップライトピアノがあった。壁は概観と同じ木製で、木の香りの中に、芳香剤だろうか、それがかすかに香って、森林浴に来ているような、爽やかな香りがした。
「……」
「ご、ごめんなさい。うちの兄弟、みんなああで……」
「い、いや、それはいいんだけど」
僕も照れてしまって、上手くフォローが出来そうにない。
「そ、その――手が」
いきなりシオリが僕の手を取るなんて初めてで、僕は不覚にも少しどきどきしてしまっていた。
「え？　あ！」
シオリはばっと、僕の手を離した。
「うぅ……ごめんなさい……」
「い、いや、びっくりしただけだよ」
何をやってるんだ僕は。付き合ってるんだよ、僕達は。手を握るくらい、普通じゃないか。今までだって何度かやってるし、さっき僕は彼女をあんなに抱きしめたりもしたし。
――何でこう、彼女を意識してしまうんだ？　もう、彼女に対して、触れるのが申し訳ないとか、そういう気持ちは和らいでいるはずなのに。

「あ、あの、ここは私がいつも家で楽器の練習している部屋なの。この部屋は防音になってるから、きっと静かだよ」
「え？」
僕は思わず声を上げる。
「ん？」
「い、いや――何でもない……」
彼女の家。防音の密室。二人きり……
こ、これは……
何だか、そう考えると、シオリのワンピースから覗く体のラインが、妙に艶かしく見えてくる。
僕は、自分の財布の中に入っている、ユータから貰ったコンドームの存在を思い出す。
それを思い出すと、かあっと顔が熱くなった。
な――何考えてるんだ、僕は。望んでいたのは、そんなのじゃないはずだろう。
ちゃんとしっかり、好きだっていう気持ちを、自信を持って伝えたくて、その自信をつけるために、オランダで長い間頑張ってきたんじゃないか。目的がすり替わってるぞ。
「ケースケくん」
部屋の冷房のスイッチをつけながら、シオリは僕を見た。
「ソファーに、横になって」
「え？」
ちょ、ちょっと待ってくれ、それって……
「試合の後、急いで帰ってきて、疲れているんでしょう？　お母さんがパートから帰ってきて、夕食ができるまでまだ時間があるし、その間、少し寝たら？　ここなら静かに眠れると思うし」
「……」
――なんだ、そういうことか――って、何がっかりしてるんだ、僕。
「さ、来て」

僕をソファーに促すシオリ。
でも、僕がソファーに行く前に、なんとなく、入り口のすぐ目の前にある棚に目が行った。
棚の中には沢山のトロフィーやメダル、賞状が飾られている。棚の上には記念盾がいくつか置かれている。
よく見ると、それは全部、シオリ名義に送られたものだった。
そのひとつに目をやる。
全国中学ピアノコンクール、クラシック部門第3位?
その隣には、同じ大会のバイオリン部門で2位のトロフィーもある。
「すごいな、これ」
僕は思わず棚を覗き込む。
「君、フルートだけじゃなく、ピアノとバイオリンもできるって言ってたけど、こりゃできるなんてレベルじゃないよ」
「そんな――もう今じゃきっと大したことないよ。もうあまり練習してないし」
シオリは僕に褒められ、照れたように笑う。
「……」
前シオリが言っていた。音楽をやっていたのは、コンクールでいい成績を残すと家族が喜んでくれるから、何となく続けていたと。
この無数の賞状やトロフィーの山は、彼女が家族のために必死で努力してきたことの証明なのだ。そう思うと、なんだかいじらしいような、可哀想なような、そんな気分になる。
「それより――今はゆっくり休んでよ。そのために、連れてきたんだから」
「あ、ああ……」
僕は促されるままに、ソファーに横になる。
「冷房ついてるし、風邪ひかないように、タオルケット掛けるね」
シオリは僕の体に、タオルケットを掛ける。干したての太陽の匂いがした。

「じゃ、電気、消すから。夕飯できたら、起こしに来るね」
「あ、待ってよ」
僕は上半身を軽く起こして、シオリを引き止める。
「どうせなら、何か一曲弾いてくれよ」
「え？」
「なんか、眠くなるような曲をさ」
「えぇ……」
シオリは突然気色ばむ。
「あ、あの――それは、弾きながら、私に歌えって、こと？」
「え？　そこまでしてくれるなら、嬉しいな」
付き合って何ヶ月にもなるのに、僕達はまだ遊園地にもカラオケにも行ってないから、まだ僕はシオリの歌声を聴いたことがない。
「む、無理だよ、そんなのしたことないし――私、音痴だし」
「下手でも文句は言わないからさ。無理にとは言わないけど」
何だか彼女に久し振りに会ったからか、少し彼女を困らせたくなる。
いや――違うな。多分僕は少し舞い上がってるんだ。彼女と久し振りに会えて、眠ってしまうのが勿体無くて、せめて眠るまで、一緒にいたいと思っているんだろう。
「うぅ――わかった。でも、一曲だけだからね。それでちゃんと寝てね」
シオリが困った顔をしながら僕を見る。僕は目を閉じてタオルケットに包まった。言うことを聞きます、というジェスチャー。
僕が目を閉じると、部屋に沈黙が訪れた。しばらくして、瞼が感じていた光が消え、部屋の電気が消えたのだとわかる。どうやら譜面も見ないで弾くみたいだ。相当な腕前なんだな。
すーはーと、シオリの華奢な胸が息を吸い込む音がして、それからゆっくりとした、優しく静かなピアノの演奏が始まった。

この世で一番心地よい場所
それはあなたの胸の中
胸に耳当て　鼓動感じるの

Ｗｈａｔ　Ｉ　ｎｅｅｄ　ｎｏｗ　ｉｓ　ｙｏｕ
あなたのリズムで眠りそうになる
Ｙｏｕ　ｍａｄｅ　ｍｅ　ｗｈａｔ　Ｉ　ａｍ
このささやかな幸せが続くように…

あなたの愛をこの身に感じ　私も伝えるの
あなたの腕に抱かれ　あなたの匂いに包まれて

Ｗｈａｔ　Ｉ　ｎｅｅｄ　ｎｏｗ　ｉｓ　ｙｏｕ
これ以上の幸せなどないの
Ｙｏｕ　ｍａｄｅ　ｍｅ　ｗｈａｔ　Ｉ　ａｍ
私に不安などないの　あなたが側にいるから……

はじめは恥ずかしそうに震えた歌声が、歌う度に迷いを消していく。

彼女の声は、ビブラートだとかファルセットだとか、そんなことは問題ではなく、ただどこまでも優しかった。ささやかな幸せを噛み締めるような、そんな情の深い声で、それが僕をとても心地よくさせた。

――演奏が終わる。

ふう、という溜め息。

僕はこの時、寝たふりを決め込んでいた。

こんな歌を歌うなんて、彼女はきっと相当無理して頑張ってくれたのだと思う。そんな彼女に、何と言ってあげたらいいのか、まだ僕にはわからない。いや、多分彼女は今の僕に、自分の顔を見て欲

しくないんだろうと思った。だったらせめて、今の彼女を僕が見ていないことにしてあげるのが優しさだと思ったからだ。
「……」
しばらくして、僕が寝たと思ったのか、シオリは立ち上がって、足音を立てないように気をつけているのか、変に小さな足音で、僕の横を通り過ぎる気配を感じた。
かちゃ、という音の後、何か小さな声が聞こえた。
「シーちゃん？」
声を殺したシオリの声。
「サクライさん、寝ちゃったの？」
シオリよりちょっと高めのシズカの声。少し声が弾んでいる。
「うん、すごく疲れてたのよ。ちょっとそっとしといてあげて」
「どれどれ……」
足音が僕に近づいてくる。僕は目を開けたい衝動を耐えながら、寝たふりを続行した。
「わ、ほんとに寝てるぅ。寝顔もいいなぁ」
「何言ってるの、もう部屋を出ましょう」
シオリが妹を諫める声。
「お姉ちゃん、チャンスじゃない？　どうせならサクライさんに、チューしちゃえば？」
「え？」
シオリの驚いたような声と同時に、僕の心臓も大きく高鳴った、
「な、何言ってるの？」
「だってぇ、お姉ちゃんだって、もっとサクライさんとずっとくっついてたいんでしょ？　今ならサクライさんも寝てるしさ……やっちゃいなよ」
い、いや――ちょっと待ってくれ。僕にも心の準備が――で、でも今更起きたら、彼女はきっと恥ずかしくて泣いちゃうかもしれないし……
「ううん、そういうんじゃないんだよ」

気が気じゃない僕の脳裏に、彼女の声が爽やかに響いた。
「そういうの――この人にとっては、もっと精神的なことなんだよ。きっと」
「精神的？」
「うん――多分、そういうドサクサまぎれとかで、無理にしようっていうんじゃなくて――お互い、気持ちを綺麗にしてから、ってことなんだと思う。だから、いいの。今はこうして、側にいてくれるだけで、嬉しいもの」
「……」
「ふふ――お姉ちゃんも、恋する乙女ですねぇ」
「え？」
「ちょっと安心した。この一ヶ月、お姉ちゃん、元気なかったけど、久し振りに嬉しそうなんだもの」
「う――も、もういいでしょう？　彼、すごく疲れてるんだし、もう出ましょう」
「はぁーい」
僕の近くの人の気配が消え、ドアが閉まる音がした。
「……」
精神的なもの、か――
女の子って、そういうの、そういう風に考えるんだな。
もう付き合って半年以上――まだキスもしてないんだよな、僕達。
でも、本当に、自分でもよく我慢できたと思う。
自分に対しての引け目が消えたからか、今では彼女への想いが溢れてくる。一歩間違えると、彼女のことを壊してしまいそうなくらい、彼女の全てを独占したいと思う。
子供っぽくて、わがままで、重くて――こんな気持ち、彼女に知られたくないと思っても、どうしようもないくらい、彼女に焦がれてしまう。
そんな心の疼きに耐えながら、感じているんだ。僕の心の場所が、どこにあるのかを――

「……」

僕の心にも、泥も汚物もある。それが真実なのだろう。

だって、確かに心が疼くのだから。今までは、自分への引け目が、それから目を背けさせていただけ。

きっと――こんなどうしようもない気持ちと戦うことが、きっと愛と呼ぶのかなと、何となく僕は思った。

Ｌｕｌｌａｂｙ（後書き）

シオリが歌った曲は、絢香の「今夜も星に抱かれて」という曲です。シオリはケースケと、別に特別なことをしたいんじゃなくて、ただ側にいてくれればいい、そんなささやかなことで十分だと思っているので、この歌がぴったりなんじゃないかと思って、この歌を選んでみました。

「スカイ・クロラ」という映画の主題歌なんで、知っている人もいるかもしれませんが。

Bosom

ガタッ、という物音に、僕は目を開ける。
目を開けると、頭上に見える蛍光灯が眩しかった。僕は涙で滲む目を細め、体を起こす。
ボーっとした視界と頭のまま、僕は顔を上げると。
そこに、エプロンをつけた美人が立っていた。背はそれほど高くないが、細くてすらりとしていて、身長が高く見える。ちょっと違う気もするけれど、顔立ちはほとんどシオリに瓜二つだった。
「あ――起こしてしまいましたか？　すみません」
その美人が僕に声をかけてくる。
「……」
僕は状況を整理する。
「シオリさん――一気に大人っぽくなったな」
「えぇ？」
それを聞いて、美人はぷっと吹き出した。
その時、部屋の扉が開いて、誰か入ってくる。
それは、僕が知っている通りのシオリだった。
「あぁ、お母さん、ケースケくん、起きちゃったじゃない」
シオリはその美人に向かってしかめ面をする。
「お、お母さん？」
僕は寝ぼけていた頭が一気にそれで醒めた。
「す、すみません。寝ぼけていて、とんだ無礼を……」
僕は慌てて、シオリの母親に頭を下げる。
「ふふ、本当にシオリちゃんから聞いてた通りの人ですね」
しかしシオリの母親は、娘にそっくりな、無垢な笑顔を見せる。
「テレビで見た時は、すごく大人びて見えましたけど……」
「……」
どうやら相当疲れていたから、かなり深く眠っていたらしい。

この部屋は防音だから窓がない。壁にかかっている時計を見ると、もう6時半を過ぎていた。どうやら2時間ほど眠っていたらしい。

「あ――挨拶が遅れました。サクライ・ケースケです」

僕は立ち上がり、頭を下げる。

「はじめまして。マツオカ・アユミです。シオリちゃんの母です」

アユミはぺこりと頭を下げる。

「……」

しかし、実に若い。とても高3の娘がいるとは思えない。シオリやシズカと姉妹と言っても通りそうな、そんな子供っぽさもある。

「シオリちゃんから、サクライさんが今日うちに来るとメールが来て、慌てて仕事から帰ってきちゃいましたよ。ごめんなさい、前もってわかっていたら、もっと家、綺麗にしていたのに」

「いえ、十分ですよ。こちらこそ、突然お邪魔してしまって」

「お夕飯、そろそろ準備できますので、こちらへどうぞ」

僕はアユミに促され、リビングに通される。

リビングは広々としていて、六人掛けのテーブルに、システムキッチンがある。テーブルの横にはソファーがあり、大き目のテレビがある。外見通り、木目の家具が多く、何だか北欧のログハウスに来たみたいな、日本ではまだ珍しい家の造りだった。物は整頓されている。普段から整頓が行き届いているのだろう。この家からは、ほとんど痛みや老朽化を感じなかった。

キッチンでは、エプロンをつけたシズカが鍋をかき回していて、アユミもキッチンに入り、軽快に何かを包丁で切り始めた。シュンはテーブルの横のソファーに座って、テレビを見ている。

「お母さん、私も何かしようか？」

シオリもリビングに入ってきて、システムキッチンに目を向ける。

「いいわよ、もうほとんど終わってるし。サクライさんとテレビでも見てたら？」

アユミは気を利かせたつもりなのか、シオリに向かって笑いかけた。

「サクライさん、丁度今、サクライさん達のこと、ニュースで言ってますよ」
ソファーにいるシュンは、僕に声をかけた。
シュンに促され、僕はシュンの隣のソファーに座る。シオリはその後ろに立って、テレビの画面を見た。
「さて、今回世界第3位という快挙を成し遂げた、サッカーヤングジャパンですが、その影響で、これから子供達や女性などにもサッカーファンが増えていきそうです。そこで渋谷、新宿の女性５００人にアンケートをとりました、自分の好みのヤングジャパン選手は？」
どうやらニュース番組の企画もののようだ。画面がスタジオから、街頭でインタビューを受ける女の子の映像に切り替わる。
「エンドウ選手です。地味だけど、本当に体を張ってたし。サクライくんヒラヤマくんと本当に仲よさそうで、時々サクライくんの手を引っ張ってたところとか、すごくいいと思う」
「エンドウ選手。コメントとか聞いてると、明るい人だけど、サッカーしてる時は周りを生かすために地味な役回りを買っているところとか、超いい人って感じ」
「3位は37票、ボランチのエンドウ選手でした。その裏方に回るプレーと、人当たりのいいキャラが人気のようです。では、第2位は？」
「ヒラヤマ選手！　背が高くて超カッコいい！　体がヤバイ！」
「ヒラヤマ選手です。ゴール狙っている時の真剣な表情がカッコいい。自然体で飾らない感じが、サッカー大好き少年って感じでカワイイ」
「2位は81票、フォワードのヒラヤマ選手。惜しくも一点差で大会得点王はなりませんでしたが、そのゴールに貪欲な姿勢は、日本A代表にも近日選ばれる可能性もあります。大ブレイク必死です。さて、第1位は？」
「サクライ選手！　カワイイし、カッコいい！　サッカー超上手い

！」

「女の子みたいな綺麗な顔なのに、性格が男っぽくて、サッカーしてる時は闘志むき出しなところ。でも、ゴールが決まった時のあの笑顔にズッキュンやられました」

「超ドSっぽい顔して、仲間想いだから、そのギャップが！　キャプテンとして仲間を元気付けているプレーがすごくよかった」

「ドリブルで相手を抜くところとか、ダンス踊ってるみたい。フリーキックもすごく綺麗だし、サッカー詳しくないけど、見とれちゃう何かがありました」

「一位はぶっちぎりの３５５票で、キャプテンのサクライ・ケースケ選手！　チーム一の小柄な体ながら、その頭脳を駆使し、攻撃、守備に大活躍！　大会ベストイレブンにも選ばれた、日本の若き至宝！　ピッチ外の冷静な受け答えと、サッカーをしている時の熱いプレーのギャップに惹かれる女の子が多いようです。彼の時折見せる笑顔を見たくて、サッカーを見始めたという女性ファンも多いとのこと。サクライ選手はこれから埼玉高校で、高校最後の大会に出場予定。埼玉県予選は超満員になることが予想されます」

「ふふ、そのサクライさんが、今うちにいるなんて、何だか夢みたいだなぁ」

キッチンからそれを見ていたシズカが言った。シズカはさっき会った時とは違い、着替えてメイクも薄く施してあった。

「……」

どうやら僕の日常は、随分とすごい変化を遂げているようだな。このテレビを見て、それを実感する。あのイングランド戦から、日本では二日経っているのに、まだ興奮が収まっていないようだ。

「シオリちゃん、ちょっと料理をテーブルに運んでくれない？」

アユミはシオリをキッチンに呼んだ。シオリはキッチンに入り、皿を持って出てくる。

「さあさあ、ご飯ができましたよ。サクライさんもシュンちゃんも、テーブルに来てください」

さっきからいい匂いがリビングに漂っていて、丸一日食事を摂っていない僕の胃袋が悲鳴を上げた。

テーブルに着くと、一ヶ月オランダにいた僕にとっては、懐かしい料理が沢山並んだ。肉じゃが、アサリの酒蒸し、マグロと環八の刺身、サーモンのマリネに、豆腐の味噌汁。沢山の料理が並んだ。

「私、サクライさんのとなりー」

シズカはシオリと反対側の、僕の隣に座った。さっきは恥ずかしがって、あまり顔を見せてくれなかったが、中学生とは思えないほどフェロモンの漂う女の子だ。そのくせちょっと子供っぽくて、小悪魔風の女の子。男に可愛く見せる術は、シオリの分もこの娘が受け継いでいるようだ。

「ずりぃぞシズカ姉。俺もサクライさんの話、色々聞きたいのに」

「はいはい、あまりお客様を引っ張りまわしちゃ駄目よ」

アユミに兄弟喧嘩を仲裁される。

「あの――いいんですか？　その――旦那様がまだお帰りになってないのに」

恋人の父親を何と呼んでいいかわからず、僕の言葉は詰まった。

「お父さん、でいいと思いますよ。私も、お母さん、って呼んでもらっていいですか？」

アユミは僕に笑いかける。

「私、サクライさんに一度そう呼ばれてみたいんです」

「お母さん、いい歳してはしたないよ」

シズカが笑う。

「あら、サクライさんって、理想の息子ランキングで一位なのよ。そんな人に、お母さんって呼ばれるのって、素敵じゃない？」

「――ああ、この家はバカばっかりだ」

シュンが揶揄する。

「うちの人、今家に向かってるんです。お客さんが来るから、ケーキ買ってきて、ってメールしてありますから。お父さん、サクライさんがうちに来ていること、知りませんから、きっと帰ったらびっ

くりしますよ？」
アユミはそう言って、可笑しそうに笑った。

一ヶ月ぶりに食べる日本の料理はとても美味しかった。特にご飯が懐かしい。でも、料理自体の味も実に美味で、僕は客人だというのに、遠慮なしに箸が伸びた。
「サクライさん、この肉じゃが、私が作ったんですよ。食べてください」
シズカは僕にしきりに進めるから、僕は肉じゃがのジャガイモを口に含んだ。ちゃんと味が染みていて、とても美味しい。
「美味しい――こんな肉じゃがを上手く作れるなんて、すごいね」
「うわぁ！　サクライさんに褒められちゃった！」
シズカは派手な外見に似合わず、実に素直で明るくて、可愛い女の子だった。ちょっと甘え上手で、こんな娘が妹だったらと、ちょっと思った。
「ケースケくん、シーちゃんは料理がとっても上手なの。特に肉じゃがは、とっても上手なのよ」
シオリは嬉しそうに、家族の話をした。
「シオリちゃん、他のことはできるのに、料理だけは全然ダメだもんねぇ」
向かいに座るアユミが溜め息をついた。
そう言われて、僕はシオリの料理を思い出す。盛り付けはとても綺麗なのに、一口口に入れると、何とも言えない微妙な空気になる、あの独創的な味付け。
「お姉ちゃんの味オンチはすごいんですよ。ダシの素とコンソメスープを間違えて入れた味噌汁でも、平気で飲んじゃうんですから」
「え？　そんなに？」
「ああ、あったあった。あれはすごい味だったよな。なのにシオリ姉、ちょっと味違うね、ってだけで普通に飲んでたし」

「もう！　そんな昔の話、忘れてよ！」
シオリはむくれ面だ。それを見て、他の3人も笑い出す。
ちょっと意外な反応だった。温厚な性格のシオリが、こんなに感情を露にするなんて。
「でも、そんな味オンチじゃ、シオリちゃんは高級レストランに行っても意味ないわね」
そう言ってから、アユミは僕の方を見る。
「サクライさん、シオリちゃんはお金のかからない女なんで、長く付き合ってあげてくださいね」
そう言って、にこやかに微笑まれる。
「お、お母さん！　なに変なこと言ってるの？」
シオリは赤面して、いっぱいいっぱいになっている。
「確かに、シオリ姉はお金のかかんない女だよな」
シュンがそれに同意する。
「ホントホント、貧乏性だし、欲がないんだよねぇ」
シズカもシオリの横顔を、溜め息交じりに見つめる。
「……」
本当に仲のいい家族だった。いつも笑い声が絶えない。
シオリがこの家族のために、自分が無理をしてでも、笑顔でいて欲しいと願った理由も少しだけわかる気がする。
本当に自然に笑うんだ。シオリと同じ、いつもまっすぐで、裏表のない表情で。
その笑顔を見ているだけで、何だか幸せな、優しい気分になれる――僕がシオリの笑顔に見た空気と同じものを、この家族全員から感じた。
そんな笑い声が響く中、玄関の方から、がちゃ、という音が聞こえた。
「ただいまー」
男の優しそうな声がした。
「あ、オヤジ、帰ってきたみたいだ」

シュンが言った。

Ｂｏｓｏｍ（後書き）

作者がこの話を書き始めた頃は、イタリアのＡＣミランがものすごく強い時代でして。この物語はその時のミランの影響を結構受けています。

この話を書き始めた頃、まず主人公の相棒的なキャラを出したいと思って、それで思いついたのが、ダブルボランチっていうもので、そこから生み出されたキャラがジュンイチです。このダブルボランチっていうのは、このミランのダブルボランチをイメージしたので、ジュンイチのサッカーのプレースタイルは、自然とミランのガットゥーゾになりました。ジュンイチの憧れの選手もガットゥーゾになってますし。

ユータは一人前線に張って、絶対的なフォワードとして君臨している、絶対的な点取り屋というイメージで、当時ミランにいたシェフチェンコがモデルです。作者はフランスワールドカップあたりからサッカーを少し見始めたんですが、中でもフォワードのナンバーワンはロナウドとこのシェフチェンコだったんですよね。でもロナウドはユータのイメージじゃなかったので、シェフチェンコにしました。

その中でケースケは、当時作者が一番好きだったプレーヤーの、アルゼンチンのパブロ・アイマールを意識したんですが、いまや完全に別物…小柄なファンタジスタみたいのを書きたかったんですが。でも今思うとケースケも、ミランのダブルボランチの影響からか、ピルロのイメージも結構強く出ている気がします。フリーキックなんかも結構ピルロを意識してのものもありますし。それでもプレースタイルはちょっと違いますが、イメージとして一番近いのは、作

者の中ではピルロかもしれません。
ルックスのイメージはちょっと違いますが、ピルロのあの優男っぽい雰囲気はケースケも少し持っているかもしれません。
サッカーを知らない人、全くわからないあとがきですいません。

Father

僕は心の中で、来たな、と思った。
最大の難関、シオリの父親。
こんなできた女の子の父親だ。さぞかし心配が絶えないだろう。
そんな女の子が、こんな馬の骨にたぶらかされたと思われても、不思議はないと思う。
ずっと前から、会うとなれば、ゲンコツ一発くらいは覚悟しておこうと思っていた。
リビングの扉が開き、蒸し暑い熱帯夜に汗だくになったワイシャツを肌に張り付かせた男が入ってきた。
「あー、涼しいなぁ――」
部屋にほのかに効いている冷房に、ほっと一息ついているその男性は、家族を一瞥し、やがて僕の前で視線を止めた。
「な！」
感嘆の声を上げて、男は腰を抜かす。
「う、うわわ！　ホンモノ？」
持っていたビニール袋をどさりと落とし、フローリングにぺたんと座り込んでしまう。何ともコミカルな動きだった。
「あ――」
僕は、何と言えばいいか途方に暮れる。
「ほらお父さん、早く立ってください」
アユミがそんな男を叱咤する。
「ごめんなさいねサクライさん、恥ずかしいところを見せて」
そう言って、僕に会釈した。
「や、やっぱりホンモノなんだな！　本当に！」
男は立ち上がりながら、目をキラキラさせる。
「うおほほほほほほ！」
そして、声を上げた。

「うわぁ、うわぁ、恥ずかしいところ見られちゃったなぁ！」
「――はぁ」
全く予想外の反応だった。
「お父さん、サクライさんが引いてるよ？」
シズカが溜め息をつく。
「て言うかオヤジ、その袋……」
シュンが椅子に座ったまま、男が腰を抜かした時に落とした袋に目をやった。
「え？」
どうやらそれは、さっきアユミがメールして買わせたケーキが入っているようだった。
男は箱を拾い上げ、ビニールの中の無地の紙箱を開けると、中に入っていたケーキが崩れ、ショートケーキやティラミスがぐちゃぐちゃに混ざり合っていた。
「オヤジ……」
シュンが溜め息をつく。
「あ――あはははは……やっちゃったなぁ」
頭を掻きながら、照れくさそうに人懐っこそうな笑顔を浮かべる。
その照れ笑いは、どこかシオリのそれに似ていて、僕は初対面なのに、何となく懐かしさを感じた。
「も、もう一度買ってくるよ」
そう言って男はその照れ笑いを浮かべながら、リビングを出て行く。
「……」
玄関の扉が閉まる音がした。
「ごめんなさいねサクライさん、うちの人、いい人なんだけど、ちょっと抜けてて」
アユミが言う。
「あの人は、マツオカ・ゴロー。私の夫です。ごく普通のサラリーマンですけどね」

「……」
「どうしたんですか？　サクライさん」
僕の様子がおかしいと思ったのか、シズカが気を回した。
「いや――なんか、予想と違う反応だったな、と思って。普通女の子の父親って、僕みたいな存在を嫌うものだと思ってたから」
「うちのお父さん、サッカー見て、あなたのファンになっちゃったのよ」
シオリが言った。
「あなたのオランダの試合、うちで一番熱心に応援してたのよ」

ゴローは本当に、新しいケーキを買って、帰って来た。別にケーキなんていいのに。気を遣われ慣れていない僕は恐縮してしまう。
ゴローはすぐに部屋着に着替えて、食卓に着き、再び6人で美味しい料理を堪能した。
「しかし、シオリがこんないい人をつかまえるなんてなぁ」
ゴローは刺身を口に含みながら言う。
「本当ね。シオリちゃん、意外と面食いなんだから」
「隅に置けないよねぇ」
アユミとシズカもシオリの方を見る。
「うぅ……」
困ったような表情を浮かべるシオリ。
「ま、まったく……シオリも大きくなっちゃって……」
「ちょ、ちょっとお父さん、何泣いてるのよ！」
「オヤジ、そういうの見たら、サクライさん、重いって思っちゃうだろ」
父親が入っても、相変わらず賑やかな食卓だった。5人とも、表情や感情が馬鹿正直で、両親も子供っぽいせいか、親子の垣根も感じない。そこには一切の隠し事がないような、そんな気がした。
こんな、人を信じるのが難しい時代で、ここまで澄んだ心を持つ

人達というのも珍しい。この人達からは、現代人にありがちな、心の奥底の腐った臭いを全く感じなかった。

「う……」

「――サクライさん？」

隣のシズカが、僕の横顔を覗き込んだ。

僕の茶碗を持つ手が、静かに震えた。

僕の視界が滲み、僕の目からは涙が止め処なくこぼれた。

「あ、あれ――」

自分でも、何でこんな時に涙がこぼれるのか、わからなかった。

ただ――ずっとコンビニ弁当とか、冷や飯ばかりをひとりぼっちで食べてきた僕は、こんなにぬくもりに溢れた食事は生まれて初めてだった。

心の底が、ぽかぽかと暖かくなって、とても幸せな気持ちだったのに、何故涙がこぼれるのか……

「ど、どうしたんだい？　サクライくん」

「何か、お気に召さないことでも？」

ゴローとアユミが、心配そうな顔をする。

「い、いえ、何でもないんです」

僕は慌てて肉じゃがを箸に取って、そのまま左手に持つ茶碗のご飯を一気に口にかっ込んだ。

「う、美味いです。あったかいです」

何とかそう口にして、涙を誤魔化そうとした。

喉を通る暖かさが、僕の心を締め付ける。

――あぁ、これが幸せってやつなのかも知れないと、僕は思う。

幸せ過ぎると、胸が痛い程に締め付けられて、嬉しくて、涙が出る。

こんな、ささやかな場面で、この僕がそんな風に思えるなんて……

「……」

――ああ、そうか。

僕の人生は、ろくでもないことばかり、汚いものばかりだったけ

れど……

でも――だからこそ、こうして暖かなもの、幸せなことを、より確かに感じられるのかも知れない。

それで、僕のあの、腐ったような日々は、少しは報われるだろうか……

「あ、サクライさん」

そんな僕にシズカが声をかけた。

「食事の後、よかったら、花火やりませんか？」

食事の後、僕とシュンは二人で、マツオカ家の所有する駐車場に出ていた。僕の横にはリュートもいて、大人しく僕の横に座っている。

「そうか、もう7月なんだよな」

「ええ、もう七夕も終わってしまいました」

シュンは夜空を見上げる。

僕もようやく真っ暗になった夜空を見上げる。昼間ほどではないけれど、夜でもまだ蝉が鳴いている。一ヶ月前に見る空と、星ががらりと変わっている。ベガ、アルタイル、デネブ――夏の大三角が見えるようになっていた。

織姫星のベガ、彦星のアルタイルと比べると、デネブは日本ではメジャーさに欠けるが、デネブは太陽の数千倍のエネルギーを持つとんでもない星だ。地球からベガまでは２５光年、アルタイルは１８光年なのに、デネブは１８００光年（推定）も遠くにある。今見えているデネブの光は、聖徳太子が生きている頃や、ゲルマン民族が大移動している時――あるいはもっと昔。諸葛孔明が五丈原で生涯を閉じた頃、デネブが発した光かもしれない。そんな途方もない話を可能にしている星だ。

「全く――たかが家でやる花火で、わざわざ浴衣に着替えてこなくてもいいと思うんですけどね」

シズカの提案で、シオリとシズカは今、自分の部屋で浴衣に着替えており、僕達は先に外で待っているというわけだ。
「しかし――シオリさんとシズカちゃんの性格は随分対照的だね。シズカちゃんはシオリさんより、ずっとませてる」
「ですね。シズカ姉はああいう名前の癖に、やかましい女でして。特に恋バナが大好物なんですよ。男前に弱くて、あなたがサッカーをしている時、アンタもサクライさんみたいな男になりなさいよ、とか、散々言われました」
要は年頃の女の子ということ。
「あなたとのことも、シオリ姉から色々聞いてるようで、きっと、あなたに可愛いところを見てもらえるよう、助け舟を出してるんでしょう。シオリ姉はそういう、自分を可愛く見せるとか、一番苦手な分野ですから」
「なんだ、いい妹じゃないか」
僕は言った。
「シオリさんから聞いた。君は今日、僕を待ってしおれているシオリさんを、外に連れ出してくれたみたいだね。しけたツラしてるなら、外に出ろ、って。君も皮肉屋だが、言動にお姉さんへの想いが見え隠れしている」
「……」
「いい弟、妹だよ。君も、シズカちゃんも」
本当にそう言った。この子に僕の妹の話をしたら、きっと耳が腐るだろうな、と思いながら。
「……」
僕の言葉に、シュンは何か考えているようだった。
「――サクライさん」
だが、やがて意を決したように、僕の名を呼んだ、
「弟の俺が言うのも変ですが、シオリ姉は本当にすごいんです。小さい頃から俺やシズカ姉の世話を焼いてくれて――おまけに努力家で。今もそうです。今だってシオリ姉は、自分よりも、俺達家族の

ために……」
「……」
「俺はずっと、シオリ姉に甘えてばかりで――でも、俺もそれなりに大きくなって、そういうことにコンプレックスがあるんです。俺も男だし、せめてもっと、しおり姉に心配されない程度の男にはならなくちゃ、って」
そう言うと、シュンは僕に深々と頭を下げた。
「サクライさん、どうかこれから、俺に色々指導をしてくれませんか？」
「え？」
「俺――シズカ姉の言うことも間違ってないと思うんです。俺は男だから――もっと強くならなくちゃ、って。俺も、サクライさんみたいになりたいんです。だから……」
「……」
すごい、これってまるっきり、少年漫画の弟子入りシーンだ。
そして、シュンが僕に初めから興味を示していたのは、ずっとそれを僕に伝えたかったからだということも、わかった。
「――昔、僕に似たようなことを言った人がいたよ」
僕は笑った。シュンは顔を上げる。
「その人は、僕ともっとやりとりをしたい、だったけれどな」
シュンはそれだけでは意味がわからなかったのだろう。怪訝な顔で首を傾げた

Firework

「君と同じ頃、そう言って力を求めた男を、僕は一人知ってるよ」
僕は力なく笑った。
「君と同い年くらいの時に、その男は憎しみを抱いて、力を求めてひたすらに研鑽を積んだ。高校に上がる頃には、もう誰もその男に敵う者はいなくなっていた」
「……」
「だが、その男自身は力に取り付かれて、力をどのように使うかを考えなかった。だから力をつけても、無益な時間の繰り返しの中に生き、多くの時間を無駄にしためでたい男だよ」
「……」
「力なき正義は無力なり、正義なき力は暴力なり――少林寺拳法の格言らしいが、その男はまさにそれを地で行ったな。力があっても、思想がないから何も出来なかった。力だけが必要だと思って、視野を広げようとせず、自分の可能性を大きく狭めた。憎しみ以外、何もないつまらない男に成り果てたよ」
「――あの、それって……」
「少なくとも、その男はあるきっかけでそのことに気付き、多くの時間を無益に使った自分の人生を激しく後悔した」
シュンの言葉に僕は言葉を被せた。
「その男も今では少しはマシな人間になり、自分の大切なものが何なのか、自分のすべきことがようやく少しはわかるようになってきたがな」
そう言ってから、僕はシュンの目を覗き込む。
「君はまだ小学生だ。まだそんな力が欲しいと思う時じゃない。大事なのは、力がなくても、自分が何を望み、何をしたいか――そうやって、考えて、悩んで、自分の力のなさを知って、それでも立ち上がろうとすることが出来る自分を認めてやること――そうやって、

泣いたり、たまに笑ったりしながら生きていくことが、希望だってことに気付くことなんだよ」

「……」

「少なくとも君のお姉さんはそうだったと思う。君達家族を笑顔にしたいと先に思って、力がついたのはその後だ。初めから心が定まっていたから、いつも正直で、まっすぐでいられるんだよ」

「……」

何回りくどい説教をしているんだか、僕は。

でも、見ていられなかった。

この子が、僕と同じ過ちに身を投じることが。

「サクライさんは、今、その力を何に使おうとしているんですか？」

シュンが僕に訊いた。

「――そうだな……」

僕は夜空を見上げ、思いを反芻する。

「何男同士でたそがれてんのよ」

そんな僕達の背中から、女の子の声がした。

振り向くと、そこにはシオリとシズカが浴衣姿で立っていた。

「……」

シオリの浴衣は、白地に薄桃色が少し加えられ、そこに紫や桃色の朝顔がプリントされていた。普段下ろしているセミロングの髪をまとめ、頭の上で縛っている。彼女の細い体、細い首が露になって、何だか艶かしかった。

「どうですか？　お姉ちゃんの浴衣姿」

紺地に赤い椿の花という、大人っぽい柄の浴衣を着たシズカは、僕の目を覗き込む。

「……」

僕がシオリの方に目をやると、シオリは何だか恥ずかしそうに俯いた。

「すごく、似合ってると思う」

僕は言った。

「じゃあ、私は？」
シズカはまた僕に訊く。
「あぁ――シズカちゃんも、すごく似合ってるよ」
「――ダメですよサクライさん、お姉ちゃんの感想と同じじゃないですか。自分の恋人と、それ以外の女は、区別してあげなきゃダメです」
中学生に恋のダメ出しをされる僕って……
「シズカ姉、やるなら早くやろうぜ」
シュンはそんなやりとりをしている間に、バケツに水を汲んで、花火セットについているろうそくに火をつけて、アスファルトに蝋を垂らし、ろうそくをそこに立てた。
「――僕、花火って、見たことはあるけど、やるのは初めてだ」
ロウソクの灯を見ながら、僕はそう呟いた。
「そうなんですか？」
シズカが驚いた。そんな人がいるんだ、というような反応だった。
「昔はガッチガチのガリ勉野郎だったから、やる暇なくて」
それに、ぶっちゃけやろうにも、買えなかったし、一緒にやる人もいなかった。
始め、シズカとシオリが、オーソドックスな花火に火をつけた。
バーっと煙を上げ、光が飛び出す。
「ケースケくん、これで火をつけるの」
シオリは自分の花火を差し出す。僕は自分の花火を、シオリの花火で火をつける。僕の花火も、緑色に火を噴く。
出来れば、こういうのは子供の頃にやっておきたかったと思う。
今や日本一の頭脳を持つ高校生になってしまった僕は、花火の光の色の変わる化学現象も、ある程度理解しているし……化学反応をこうして芸術品にするなんて、これを考えた人は天才だな、とか、感動のポイントがずれていた。
だけど……周りの笑顔を見て、花火を振ったりしているのを見ていると。

何だか少し楽しくなってくる。
「ケースケくん、これに火をつけて」
シオリが僕に近付いてきて、僕に筒型花火を手渡す。
「この、導火線に火をつければいいんだよね」
シュン、シズカも見守る中、僕は立てかけた筒の導火線の横にしゃがみこみ、マッチを擦って、火をつけた。シューっ、という導火線の音。
「早く離れて！」
シオリが、今まで聞いたこともないような大きな声で、僕に叫んだ。
「え……」
僕がその意味を考えていた次の瞬間。
筒から星屑が飛び出したように、火花が噴水状に噴出した。
「うわぁ！　あちちち！」
発射口のすぐ横にいた僕は、その火花が出た瞬間、後ろにのけぞった。久し振りにびっくりした。
「あっはははははは！」「あはははは」
そんな僕の姿に、３兄弟は本当に可笑しそうに笑った。
「サクライさんって、天然ボケなんですね。テレビで見た時と大違い……」
筒型花火の閃光がおさまってから、シズカが言った。
「いいなぁ、私もこんな優しいお兄ちゃんが欲しかったなぁ」
「……」
そう言われて、今日の、実際の妹の事を思い出す。
こんないい娘でも、うちに住めばあの妹みたいに、僕の名前で私腹を肥やす俗物になってしまうのだろうか。
僕が、こんな兄弟と一緒にこの家に住めたら、人生はどう変わったんだろう。
――最後に４人で固まって、線香花火をした、
でも、線香花火って、夏の終わりとかにやるのが、本当は風情が

あるのだろう。火の玉が落ちるのと同じように、夏が静かに終わる……というのが。

夏の始まりには、あまり風情がないようにも思う。

だけど線香花火っていうのは、初めてやったけれど、見入ってしまうような魅力がある。炎なのに、電気みたいにバチバチいう様は、何だか童心に帰って楽しめる。そう思えた。

用意しておいたバケツは、花火でいっぱいだ。

「あ、私、花火を捨てる袋、持ってくるね」

そう言って、シオリは家に戻ろうとした。

「ううん、私、やるよ。お姉ちゃんとシュンは、戻ってて」

そう言ったのは、シズカだった。

「サクライさん、ちょっと手伝ってもらってもいいですか？」

「……」

二人きりになりたがっている。そう思った。それにしては、シオリの前でストレートすぎるけれど。

「あぁ、構わないよ」

そう言ってから、シオリの方を向く。

「すぐ戻るよ。待ってて」

まさか実の妹となら、二人きりでもセーフだと思うけれど、念のため……

「うん、わかった」

シオリはすぐに頷いて、家に戻った、シュンもそれについていく。

シズカはビニール袋を取ってくる。僕はバケツから花火を無造作につかみ、袋に入れていく。

「すみません、こんなことやらせちゃって」

「いや、花火片付けるなんてしたことなかったし、何事も経験ってとこだよ」

僕はそう答えた。

「で、君もお兄さんに、悩みの相談かな」

「――え？」

「鈍い僕でも、それくらいはね。シュンくんも、色々考えてるみたいだし」
「……」
僕は、駐車場の縁のアスファルトに寄りかかる。
シズカは僕の目を見るのが少し恥ずかしそうだ。彼女があの家で、一番僕を偶像視しているのが見て取れた。きっとテレビの中の人だった人と二人きりになれた感覚なのだろう。
「しかし、シズカちゃんはいい娘だね」
「え？」
「だって、お姉さんに色々気を遣って、後押ししてあげたり、会話を盛り上げてくれたり、ずっとシズカちゃんが頑張ってるの見て、お姉さん思いなんだな、って、思って」
「……そんな、全然です」
シズカはかぶりを振った、
「私、こんなだから、いつもしっかり者のお姉ちゃんに助けてもらってばかりなんです」
「……」
「うち、お父さんもお母さんも共働きなんで、普段家にいないことが多くて。私とシュンは小さい頃から、お姉ちゃんに色々面倒を見てもらってたんです。私もシュンも、お姉ちゃんに甘えてたから、こんな性格になっちゃったんですけど……でも、お姉ちゃんにはとても感謝しているんです」
「……」
あぁ、この3兄弟が、うちなんかと違って仲がいい理由がわかったような気がした。
3人とも、小さい頃から助け合って生きてきたからなんだ。
シオリも僕と同じ、頭の成長が早くて、両親から世話を焼かれずに育った子供だったんだろう。僕はその発育を、家族を止めるために使い、彼女は兄弟を助けるために使った。
長年それを続けて、僕には消えない傷が、彼女には消えない絆が

残ったということだ。
「だけど、最近になって、お姉ちゃんの事をよく考えるんです、お姉ちゃんは弱音も吐かないし、誰にも甘えたりしない。私達が当然に出来ていたことができなくて、辛かったんじゃないか、って」
「……」
そう、初めて僕達が結ばれた夜に、彼女はそのことで苦しんでいた。
大好きな家族のために、自分より優先して、家族の世話を焼いてきた彼女は、いつの間にか自我を失い、自分のために生きるということを考えられなくなっていた。
そのことで、苦しんでいた。
「サクライさん」
シズカが僕の目をしっかりと見る。
「きっと、お姉ちゃんが今、甘えたり、弱音を吐ける相手は、サクライさんだけなんだと思います。そして……私達家族は、お姉ちゃんが、世界中の誰よりも幸せになってほしいって、思っているんです」
「――うん」
「だから――サクライさん。お姉ちゃんのこと、甘えさせてあげてください。ずっと我慢していると思うから、なかなか難しいかもしれませんが……」
「……」
初対面の時は、派手な風貌に少し驚いたけれど、意外な一面を持つ娘だ。
やっぱり、この娘は最高の妹さんじゃないか。
こんなにも、姉の幸せを願っている。
そして……
僕がこれから、彼女にすべきことも、教えてくれた。
二人が結ばれた夜――あの時は、シオリが始めて僕に弱音を吐いてくれたのに、僕の苦しみの吐露に成り代わり、彼女の本当の痛み

に気付いてやれなかったのかもしれない。
何故、今までこうしなかったんだろう。
彼女の本当の痛みを、僕は気付けていなかったのかな……
自分のことで精一杯で。
――今ならできるか？　僕が、彼女のことを……
「今夜、お姉ちゃんとチューできる手伝い、しましょうか？」
「ふぇ？」
突然言われて僕の口から間抜けな声が漏れる。
「キャー！　サクライさん、心キレイー！　頬染めちゃって、カワイイー！」
シズカはそんな僕の反応に、ときめきの声を上げた。
「……」
なんか、この娘のことは、よくわからない……

花火から戻ってリビングに着くと、アユミがゴローと共に紅茶を飲んでいた。
「さ、みんなの分も入れるからね」
そう言ってアユミは、僕達４人にも紅茶の入ったティーカップを出した。
「ありがとうございます」
紅茶なんてもの、うちにはないからほとんど飲んだことがない。
本当はコーヒーの方が好きだけど、問題はない。
「さ、これ飲んだらあなた達は宿題をやりなさいね」
「えー？　お母さん、今日くらいいいじゃない。もっとサクライさんとお話したいよ」
シズカは不満げだ。
「お前達はもういいじゃないか。お父さんはまだほとんどサクライくんとお喋り出来てないんだぞ」
ゴローも不満げに言った。

「……」
「ね、あなた達、少しは私達にサクライさんを譲ってくれてもいいでしょ？」
アユミが言った。
「――それならさ、サクライさんに今日、うちに泊まっていってもらったら？」
シュンが言った。
「え？」
「おお！　そりゃいい。あのサクライさんを泊めたとあれば、明日会社で自慢できるぞ」
「賛成賛成！　たまにはいいこと言うじゃない、シュン」
「別に、俺もサクライさんともっと話したいから、それだけだよ」
「……」
嘘だろ、もうこんな歓迎されてるぜ、僕。
普通ここまで家族に愛されている娘、姉の男なんて、もっと邪険にされるものなんじゃないのか。て言うか年頃の娘がいるのに、高校生の男なんか、家に泊めるか普通。
でも……今夜はもう、ここ以外に行き場がないのも事実だ。ここを出たら、僕は今日のねぐらを探さなければならない。エイジなら多分僕を泊めてくれると思うけれど、それでも今日のねぐらが確定するのはありがたいことだ。
「本当に、いいんですか？」
「いいともいいとも！　もうみんな泊まってほしいようだしな」
ゴローの承諾が鶴の一声となって、僕は今日、この家に泊まることとなった。

「うーっ……」
僕は今、マツオカ家の風呂を借りている。
もう丸一日以上着ているスーツのワイシャツを洗濯しますから、

お風呂に入っちゃってください、とアユミに薦められ、僕は仕事で疲れているゴローを差し置いて、一番風呂を浴びてしまった。

オランダにいるときはほとんどシャワーだったし、こうして一人で湯船に浸かれるのは、何だか妙に贅沢に感じた。

だけど、やっぱり何だか恥ずかしい。この風呂場で、シオリが毎日体を洗うのだと考えると、何だか変な感じだ。僕が入ったこのお湯に、後でシオリも浸かると思うと、焦ってしまい、湯船に浸かる前に体を徹底的に洗った。

「……」

改めて一人になり、ほっとひと段落。

大会後の祝勝会も、とんぼ返りのおかげでちっともゆっくりできなかったが、ようやく自分の戦いが一段楽したことを実感して、一種の開放感があった。

とはいえ、僕は今、恋人の家に泊まるという、何だかできすぎた展開の話の上にいるわけで……

「……」

何となくの確信だけれど、もう僕は、彼女以外の女の子を好きになったりしない。彼女のことはもう、女としてしか見ることはできない。たとえ道が離れたとしても、もう友達なんて視点に戻ることはできない。改めて、そう思った。

彼女に、ちゃんと、「好きだ」、と伝えるために、僕はこの1ヶ月、戦い続けた。自分を肯定するために。

そして、ユータやジュンイチには、ちゃんと思いを伝えられた。そのまま、シオリにもちゃんと言えると思っていた。

でも――違う。

ここに来て、僕が伝えたいことが変わってしまった。

僕が彼女に伝えたいのは、「好きだ」じゃない。

「――愛してる……」

浴槽の中で、僕は小さくその言葉を呟いた。風呂場に声は小さく反響し、残響は緩やかに消えていく。

「……」

僕は、浴槽のお湯の中に、顔を沈めた。照れくさいような、罪悪感のような、何だか胸に詰まる何かを飲み込んだような思いに、支配されながら。

――この言葉を言えるか？　僕は、彼女に。

この家に来てから、家の至る所に、彼女の面影が見えた。

そして、それと同時に、目の前の彼女が、僕の前では決して見せない素顔の数々も。

それが僕には、とても嬉しくて、その後、たまらなく、悲しかった。

まだ僕は、この家の家族よりも、彼女を笑顔にはさせられていない。それがはっきりとわかったからだ。

そんな僕が、まだ「愛してる」なんて、口にしていいのか――

でも――そう思っても、彼女のことを、欲張りなほどに求める自分がいる。

彼女を誰にも渡したくないし、もっと触れたい。もっと話したいし、優しくだってしてやりたい。彼女が喜ぶこと、全部してあげたい。不安を抱える彼女のことを、包んであげたい。

そんな馬鹿げた――だけど切実な感情が、どうしようもなく、僕の胸を満たしにかかる。

たかが17歳のガキが、そんなことできるはずがないと、わかってはいても、心に溢れて来るんだ。

「愛してる」が。

「……」

僕の理性はものすごく強い。酒に酔っても、感情に理性がブレーキをかける。

だが、今の僕は、産まれて初めて、感情が理性を超えようとして

いる。
もう胸のうちで抑えておくには、この気持ちは大き過ぎて、どうしようもなかった。

「あら、お父さんのTシャツ、ぴったりですね」
風呂から上がってリビングに戻ると、キッチンの洗い物を片付けているアユミが、僕に声をかけた。リビングにはゴローもいて、夜のニュースを見ていた。
「おお、サクライくん、さっぱりしたかい？」
「はい――お風呂までご馳走になって、本当に……」
「ま、もしよろしければ、座ってください。お父さんが買ってきたケーキもありますし、私達もサクライさんとお話したいと思っていたんですよ」
アユミはにこりと笑う。
「……」
その笑い方は、娘のシオリとそっくりだ。顔立ちもとてもよく似ているから、何だかシオリの数年後を想像してしまう。
「お父さん、お父さんの分のケーキもありますからね」
「お、それじゃいただこうかな」
ゴローはテレビを消して、ソファーから立ち上がる。
好きなケーキを選んでいいと言われ、僕は取り合えず、一番甘くなさそうなティラミスを取った。ティラミスなんて食べたことないから、味は知らないけど、色的に一番甘くなさそうだと思った。
「……」
僕はこの時、どきどきしていた。
この胸に溢れるシオリへの想いを、この人達が知ったら、どう思うのだろう――そんなことを考えていたから。
「サクライさん、これ」
席に着いた僕に、アユミは何かを差し出した。

それは、オランダに出発前、シオリが僕達にくれた、手作りのお守りだった。ずっとスーツのポケットに入れていたし、洗濯をしてくれる時に落ちたのだろう。

「あ……」

僕はそれを受け取る。

「サクライさん、それ、ずっと持っていたんですね。泥だらけですもの」

「いえ……」

「テレビで見ていたから知っているんですよ。シオリちゃんの作ったミサンガも、ずっとつけていましたよね」

「……」

――シオリが作ったってこと、もうこの人達も知っているのか。

「シオリちゃん、あなたの試合をテレビで見ていて、ずっとキャーキャー言ってましたよ」

「え？」

それをアユミから聞いて、僕は本当に驚いた。あの大人しいシオリがそんな風に試合を見ているなんて、僕にはまだ想像できなかった。

「私達もあんなシオリちゃん、初めて見ましたよ。でも、それに輪をかけて、真夜中や早朝に騒いでいたのが、この人で……」

アユミはゴローの方を見る。

「いやぁ、だって、あんなわくわくする試合、滅多に見られるものじゃなかったからね。特に君のプレーはすごかったな。その小さな体で、闘志をむき出しにして、本当に若々しい、清々しいプレーだった。ゴールを決めた後、君と仲間の二人で喜び合う時の、君の笑顔も印象的だったな」

ゴローはまるで子供のように目をキラキラさせて話す。

「ごめんなさい、この人、ちょっと子供っぽくて――」

アユミが苦笑いを僕に見せる。

「でも、サクライさんの笑顔って、本当に素敵ですよね」

「え？」
「何というか――本当に幸せそうというか、今自分がここにいることを、一つ一つ噛み締めるように笑いますよね。なんだか、見ているこっちも幸せになるような」
「そうでしょうか」
自分では、まだ笑顔がぎこちないと思っているのだけれど。サッカーをしている時は、難しいことをあれこれ考えることができなくなるから、その分感情が高まりやすいのだけれど、普段の僕は、まだ感情の変化が、前よりはマシになったとはいえ、まだ乏しいような気がする。
だから、自分の笑顔を褒められるなんて時が来るなんて、思っても見なかった。
でも――考えてみると、半年前の僕は、今のこの姿を想像できていただろうか。自分に、自分の命を賭けてでも守りたいと思える親友がいて……
何より、この僕が、誰かをこんなにも愛することができるなんて……昔の僕は、愛だ恋だとほざくガキが本当に嫌いだったのに。
僕はティラミスにフォークを伸ばす。初めて食べたけど、やっぱり甘かった。
「だけど、サクライさんって、何だかテレビで見る時と印象が随分違いますね」
アユミが言った。
「テレビでも言われてましたけど――戦闘モードのあなたの激しさと、普段のあなたの物静かな感じ――そのギャップが、今沢山の人の心を掴んでいるんでしょうね」
「はぁ」
「インタビューでも、肝心なことはあまり喋ってないし――いうなれば、謎の多い少年だね、君は。女の子にもてる要素が君は揃いすぎてるなぁ。男前で、勉強もサッカーもできて、ギャップもあり――同じ男として、羨ましい限りだ」

ゴローもにっと笑った。
「ちょっとお父さん」
その言葉に、アユミはご立腹だ。
「わぁぁぁ、ご、ごめんなさい、悪気はないんだ。アユミさんは、最高の嫁です」
慌てて訂正するゴロー。
「――まあ、サクライさんが今、女の子にもてるっていうのは、事実ですけどね」
「……」
――これ、もしかして、娘の彼氏としてどうなのか、けん制されてる？
穏やかな空気だが、もしかして今、僕は死地にいるのか？
――だとしたら、ここで僕は、何かをこの二人に刻み込まなくちゃ。
シオリへの想いは嘘ではない。それを少しでも、わかってもらわなければ。
この人達に伝わらなければ、きっと、シオリにも伝わらない。
――勝負、かけるか……
「緊張してます？」
そうして自分を追い込んで、顔が少し強張っていたのか、アユミが僕に笑いかけた。
「そりゃ、彼女の両親なんて、君の年頃じゃ一番会いたくない人種のひとつだろうなぁ。同じ男として、気持ち、わかるよ」
ゴローが僕をフォローする。
「――でも、ちょっと今、ほっとしてます」
僕は顔を上げた。
「彼女から聞いていたとおり――この家は、とってもあったかくて、優しい人達ばかりで。さっきシズカちゃんとシュンくんとも話しましたが、二人とも本当にいい子だと思いました」
「そうかい？　そう言ってもらえると、私達も嬉しいよ」

ゴローは感慨深そうに頷く。
「――正直、僕は今まで、お二人には申し訳ないという気持ちでいっぱいでしたから」
僕は背を正した。
「え？」
「その――大切な娘さんと、その――付き合わせて頂いているのに、あまりいい彼氏とは言いがたいことばかりしていますから」
そう、数学オリンピックと、今回の大会、この半年で、僕は2度も彼女を置いて、好き勝手やりに遠くへ行ってしまっている。正月の高校選手権で負傷して、しばらくまともに歩けなかったこともあるし、この半年、一緒にいられた時間の方が少ないくらいだ。
会うとすれば、早朝、リュートの散歩ばかり。遊園地や買い物もろくに行ったことがない。おまけにマスコミに追われる僕は、彼女の存在をひた隠しにしている。誠意を疑われても仕方がなかった。
「本当に、お二人にはなんとお詫びしていいやら……」

Ｄｕｅｌ（後書き）

連載が遅れ気味で申し訳ないです。
この度、もう一度この作品を読み直して、誤字脱字を直して行こうと思い立ち、その修正をしていました。現在５０話ほどまで進んでいますが、もしよろしければ、少し時間を置いて、また読んでみて下さい。

しかし、我ながら誤字がかなりありますね…こんなのを読者の方に沢山読ませてしまい、申し訳ないです。そして、既に６００００００文字を越えるこの作品を読み直すことがこれほど大変とは…これを全部読んでくれた読者の方への感謝の念が湧いてきました。どうもありがとうございます。

なにぶん文字数が多いので、洗い直しても誤字を見落としていることもあるかもしれませんが、今後ともよろしくお願いいたします。

「ふふふ……」

二人の反応を待ち、緊張に強張っていた僕を、ゴローは笑った。

「サクライくんでも、そんな風に省みることがあるんだなぁ」

「え？」

「サッカーをしている時は、修羅さながらに戦うのに……」

「……」

「シオリちゃんの、男を見る眼は確かだってことですよ」

アユミがゴローを見て笑った。

「え？」

「私達、シオリちゃんからあなたのこと、色々聞いているんですよ。サッカーをしている時はあんなだけど、普段のあの人は、物静かで、優し過ぎるくらい優しくて、繊細な人だって言ってました。その意味が、今ちょっとわかった気がしますよ」

「……」

優しい――か。

あの夜――僕を救ってくれた夜も、同じことを言ってくれたな。

彼女はずっと、力に取りつかれた僕を見ても、僕の奥底にある優しさを信じてくれた。

だから――僕は彼女の前では、とことん優しくなってやろうと思ったんだ。それが、彼女が僕を信じてくれたことに対する返礼だと思って。僕が今、優しくなっているのだとすれば、それは全て彼女のおかげだ。

「――あの、怒らないんですか？」

僕は首を傾げた。

「僕が言うのも変ですが、あんなできた娘さんじゃ、きっと色々お二人は気苦労が絶えないかと思っていたんですが」

「何だい？　会うなり僕が君をぶん殴って「出て行け！」とか言わ

れると思った？」
　ゴローは笑った。
「ははは、じゃあ5年後くらいに僕と君でファイトしようか。君がシオリを嫁に貰いたかったら、僕を倒して連れて行くんだね」
「バカなこと言わないの」
　アユミは言った。
「それに――シオリちゃんがお嫁に行くなんてことになったら、あなた、絶対泣くくせに」
「え――う、うわぁ……そう思ったら、なんか急に凹んできた……シオリも彼氏とか家に連れてくるんだよなぁ……もうすぐシオリ、お嫁に行っちゃうんだよなぁ」
　か細い声でぶつぶつと呟きながら、本当に落ち込みだした。
「ごめんなさいサクライさん、この人極端だから」
「……」
「でも――サクライさん。単刀直入に言えば、私達はあなたとシオリの関係に、口を出す気はないんで、安心してください」
　アユミは言った。
「シオリは、小さい頃からとてもいい子でした。頭もよかったので、私達はシズカやシュンにばかり世話を焼いてしまって、あの子の事を、あまりかまっていなかったのかもしれません。それでもあの子は優しいから、自分が寂しかったり、甘えたかったりする素振りを、全然見せませんでした。私達は、小さい頃からあの子ばかりに無理をさせてしまったんです」
　アユミのその口調は、まるで長年押し殺した感情を懺悔するかのように聞こえた。その切々とした語りが、僕の脳裏に小さい頃のシオリをイメージさせる。
学校ではその優しい人柄から、沢山の女友達がいて、吹奏楽部で部長も勤めるシオリだったけれど、それでもシオリは小さな頃から、ずっとひとりぼっちだったんだ。ひとりぼっちでも、笑顔でい続けたんだ。家族のために

「でも、今年に入って、あの子は初めて、自分の意志で何かをする、ということが多くなってきたんです。最近も、よく言うんです。私は、強くなりたい。大学に行って、自分がこれから何をしたいかを探したいって。あなたのサッカーをテレビで見ている時も、よく言ってるんですよ。ケースケくんも目の前の事を必死でやってるんだから、私も頑張らなくちゃ、って」

「……」

「あの子は、サクライさんと出会って、自分の意味とちゃんと向き合えるようになったんだと思います。それが私達はとても嬉しくて……」

「……」

「あの子がそうやって、自分のことを考えられるようになったのは、サクライさんのおかげなんです。私達はずっとあなたに直接、そのことでお礼を言いたいと思っていたんです」

「そんな……」

僕は恐縮してしまう。まさかシオリの両親からお礼を言われる展開なんて、全く想定の範囲外だったからだ。

「……」

沈黙。

「――まあ、その、何だ」

ゴローが何とも恥ずかしそうに気色ばむ。

「その――サクライくんから見て、シオリはどうかな？」

「え？」

「その――親の贔屓目かもしれないが、シオリはいい娘だと思う。お母さんに似て、器量も気立てもいいと思うのだが……今や君は、アイドルや女優とも付き合えるほどだからなぁ……やっぱりそういう人達に比べたら、シオリは見劣りしてしまわないかな」

「……」

「お、重いかもしれないが、やっと最近のシオリが、自分らしい表情を見せてくれるようになったことは、僕達としても喜ばしいこと

だからな。その――できれば君が、もっとシオリと一緒にいてくれたら、僕達も嬉しいんだが……君を我が娘一人に独占させるのは、さすがに親の贅沢だろうか……」

ゴローもいっぱいいっぱいになる。どうやらゴローも僕と対峙して、緊張していたみたいだ。

――ああ、そうか。きっとこの人達は、どんどん名を上げ、自分達とは別世界の人間になっていくような僕を見て、僕が遠くへいってしまうんじゃないかっていう、シオリの押し殺している不安に気付いたんだ。ほんの数ヶ月前、僕もマイに言われたからな――

初めからこの人達は、僕の本音を聞きたかったんだ。今の僕が、別の女に浮気でもしたら、シオリが激しく傷つくのがわかっているから。

「あの――シオリさんも、お二人も、多分勘違いしてるんですよ」

僕はいきなり体が緊張しだす。この返答で、何だか僕とシオリの今後が決まってしまいそうな気がして。

だけど――それと同時に、僕の心には、もうスロットルを全開に引き絞ったように、勢いがついていたことも事実だ。長い間懸念だったシオリの両親が、僕とシオリの交際に好意的だったことと、さっきから僕の心に渦巻く、シオリへの止められない想いが、いやがうえにも僕の心を急かした。

「僕の方が、シオリさんにべた惚れなんですよ」

だから僕は、その勢いに任せて、とんでもないことを彼女の親に口走るのだった。

「出来ればずっと一緒にいたいし、それに一生守っていきたいって……」

そして、僕はそこまで口走って、ようやく自分の口走ったアホな言葉が、自分を死地に追い込んだことに気付くのだった。

「……」

照れくさくて顔を背けてしまうが、必死にそれに耐え、顔を上げると、ゴローもアユミも呆然と僕を見つめている。

――ヤバイ、これ、本人に言うつもりで、言ってしまった――まだ高校生の親に聞かせるには、僕の気持ちはヘビー過ぎるだろ。いくら交際に好意的とはいえ、高校生としての節度は守らないと

体中が変な汗を掻く。

だけど――対人関係に慣れていない僕は、こうしてテンパってしまうと、妙に捨て鉢な気分になって、死地に特攻するような行動――平たく言うと暴走してしまって、話を余計にややこしくしてしまう傾向があるわけで――

「あ、あの――でも、僕、今日、この家に来て、まだまだ皆さんには敵わないなぁ、って、実感したんです。この家に来て、今まで見たこともないような、シオリさんの明るい表情をいっぱい見ましたから。まだ僕は、シオリさんのそんな表情を引き出す力はありません。皆さんに比べたら、まだまだ全然、力不足ですけど……」

――ああ、ヤバイ……完全に僕、パニックに陥ってるぞ。沈黙に耐えられなかったのも手伝って、勝手に言葉が口から出てくる。嫌な汗がまた体から噴出してくる。

「で、でも、シオリさんを心の底から笑顔にできる男になれるように、努力を惜しむ気はないんで――もしそれを、お二人が認めていいと思える日が来るまで、何年でも待つんで、その時は――」

そう言った時、僕は勝手にテーブルに手を突いて、深く頭を下げ、叫んでいた。

「シオリさんを僕にください！」

うわあああああああああ！　何を言ってるんだ僕は！

頭を下げたまま、顔を上げられなかった。さすがに二人もドン引きだろう。リビングは、耳鳴りがするほどの深い沈黙に包まれていた。

それは、ほんの５秒ほどの沈黙だったが、僕には１０年分にも感じられるほどの、長い時間だった。

その沈黙を破ったのは、僕達の声ではなく、部屋の外から聞こえてくる、どたどたという、階段を駆け下りる音だった。その音の主

は、すごい勢いでリビングのドアを開けた。
僕は音の方向を、頭を下げたままちらりと見ると、ドアを開けたまま、シズカが立っていた。
「何々？　今の何？　今、すごい言葉が聞こえたけど？」
シズカは目をキラキラさせている。さすが恋バナが好きな、年頃の女の子。
「あ――そ、その、あのね」
アユミのおどおどした声が聞こえる。
その声に、僕はようやく顔を上げる。
「……」
よく見ると、ゴローもアユミも、思いっきり照れている。頬を染めて、もじもじして、僕の顔を見られないという感じ。
「ほらほら、お姉ちゃん、何してるのよ」
そう言って、シズカはリビングのドアを開けたまま、もと来た廊下、階段の方を見て、誰かに話しかけた。
「サクライさんにあんなこと言われて、返答は？」
「え？」
シオリもあれを聞いていたのか？　――って、当たり前か。あんな大声で叫んじゃったんだし。
しかし、僕の背中に再び嫌な汗が伝う。その不安に耐え切れずに、僕はゴローとアユミを放り出して席を立ち、シズカの隣へと歩を進め、廊下を覗いた。
「あ……」
僕の見る階段の先――１０段ほど上の２階の廊下に、白地に小さな花柄がプリントされたパジャマに身を包んだシオリが、僕を見下ろしていた。廊下のそれほど明るくない照明の中でも、シオリの顔は真っ赤で、何だか泣いてしまいそうなくらい、目が潤んでいるのが伺えた。
「……」
僕とシオリは、そのまましばらく沈黙した。

「あ、あの――」
シオリの声が震えていた。
「あ――」
かく言う僕も情けないことに、声が震えている。
しかし、シオリはそんな僕を見ているのが、これ以上耐えられなかったのか、苦笑いを浮かべながら、2階の廊下に走り去ってしまった。
「あ、ちょ、ちょっと待って」
僕はわけもわからず追いかけようとする。
しかし、僕はあまりに慌てていて、階段を駆け上がろうとした時、足の指を思い切り階段の段差の角にぶつけてしまうのだった。
「……っ」
その痛さに、息が漏れる。
僕の足が止まったと同時に、2階から、がちゃ、ばたんと言う音が聞こえた。
「……」
あぁぁぁぁ、何やってるんだ僕。しかも階段の角に足をぶつけるとか、めちゃくちゃかっこ悪いじゃないか。
「キャー！」
突然リビングから奇声が聞こえた。
今度は何だ……
「聞きました？　聞きました？　お父さん！」
リビングに戻ると、奇声を上げたのはアユミだったらしい。テンションが最高潮になって、ゴローの肩を激しくゆすっていた。
「サクライさん、あんな無防備な表情で、シオリさんを僕にください！　って！　ドキドキしちゃった！」
「あ、ああ、そうだな……」
そんな女子高生のノリになっているアユミに激しく体をゆすられながら、ゴローは呆然とした表情を浮かべていた。
「は、はは――め、めでたいことなのはわかっているんだが、さ、

サクライくんが僕の息子になるなんて……は、ははは……」
「……」
その様子を呆然と見ていた僕は、隣にいたシズカの小さな笑い声に目を向けた。
「ふふふ――サクライさん、顔真っ赤……」
「え？」
僕は自分の頬に手をやる。顔が火照って熱い。
「ふふふ――サクライさんって、年上なのにちょっと可愛い」
またくすっと笑う。
「お姉ちゃん、きっと今、照れてて顔を見せられないだけだと思いますから、安心していいと思います。お母さん達も、サクライさんのこと大好きですし、サクライさんの試合見て、この人が将来私達の息子になるのね、とか妄想してましたし、大丈夫ですよ」
「……」
――本当か？
「あーあ、でも、お姉ちゃんにちょっとジェラシー感じちゃうなぁ」
シズカは溜め息をついた。
「あのサクライさんに、顔真っ赤にさせて、あんなこと言ってもらえるなんて。案などストレートな告白、女の憧れですもん」
「……」
僕の告白に狂喜乱舞するアユミ、呆然とするゴロー、微笑ましく見つめるシズカ。
そんな三者三様の反応を、しばらく僕はアホみたいに見つめていた。

その時。

僕の着ている短パンのポケットに入っている携帯電話がぶるぶると震えた。

その音に皆が気付き、三者三様の反応が止まる。

「すみません」

僕はそう断ってからフリップを開けて、通話ボタンを押した。

「もしもし――はい、ご苦労様です。はい――そうですか、はい――はい、わかりました。明日の夕方ですね。はい、失礼します」

電話に出て、1分程の会話で電話を切る。

「どなたですか？」

シズカが訊いた。

「ん？　ＪＦＡだよ。日本サッカー協会」

僕は携帯をふたつに閉じる。

「どうやら僕以外の代表メンバーが、今さっきオランダを発ったらしい。だから明日の夕方、都内で帰国会見をやるから、キャプテンとして何か言うことを考えておけ、って連絡」

電話の主はＪＦＡの事務担当だった。随分と声が弾んでいた。どうやら今大会で、日本サッカーこれにありと、ＪＦＡはＦＩＦＡに相当アピールできたようだ。日本は近いうち、ワールドカップを一国開催したいと目論んでいるから、それにぐっと近づいたし、よいことずくめというわけだ。僕達の帰国も、凱旋と言っていいということ。

「あ……」

それを聞いて、シズカの顔色が変わった。

「そういえばサクライさん、日本代表のキャプテンだったんですよね」

「……」

「すみません。だってサクライさん、ここに来てからボケ倒しなんですもん。あのサッカーしているサクライさんとは大違いで……」
「……」
まあ、そんな反応をされるのが当然か。実際の僕って、メディアが報道しているより、ずっとダサい奴だからな。
「あ――そ、それじゃ、静かな場所を用意しましょうか。考え事をするのにいいでしょう」
アユミが先程からの流れを仕切り直した。
「2階のテラスに上がってみたらどうです？　静かだし、夜風が気持ちいいですよ」

そう言われ僕は、2階のテラスに一人上がった。テラスは6条ほどの広さで、木造の足場には、チェスのポーンの頭を水平に切ったような形のテーブルと、背もたれのない椅子が2つある。シオリを家に送る際、よく見えていた場所だ。手すりには風鈴がひとつぶら下がっていて、ちりりんという涼やかな音が、風が吹くたび夜風に響く。
「……」
この時の僕は、ちょっと落ち込んでいた。
溜め息。
――まさか、よりによって「シオリさんを僕にください」はなかったよなぁ……
気持ちが高ぶりすぎて、つい勢いで口走ってしまった。
勿論いい加減な気持ちではないけれど、まだ定職もない人間がそれは、ちょっと非常識というか――地に足がついていないガキの言い分だよな。
――おっと、それよりも。
明日の夕方の会見か――そこで間違いなく、僕の今後の去就は質問されるだろうな。

さて、どうするかな……

今の僕が分かっていることが、ひとつだけある。

それは自分がこの先どんな対応をとろうとも、易々と中東に渡るという選択肢を取ることはありえないということだ。

あの家族は、僕がいくら激高しても、自分が悪いことをしているという自覚が全くなかった。それがない以上、あいつらが今の自分達の行為を省み、反省することはない。反省がしない奴は、改心もしない。

この時点で、僕はあの家族と和解することは、今後一切ありえないということが決定した。もはや僕はあの家族に一片の信用も置いていなかった。まさかここまでの暴挙には出るまいと、豆粒ほどの譲歩の欠片を残してはいたが、今ではその自分の愚かしさを呪うのみだった。

母親は、僕が中東にいるのは2年間、それが終われば僕は２０歳になっており、親権が切れるから、もうそれ以上は僕に干渉しないと言ったが、そんな口約束、信用できるはずもない。あぶく銭なんて、１０万だろうが数億だろうが、馬鹿は数年で使い切ってしまう。都内の億ションをかりて、一生遊んで暮らすなんて言っていたが、親の人生は、日本人の平均寿命を考えれば、あと３０年はあるのだ。とてもあの金の亡者共が、一生遊んで暮らせるほど、計画的に金を使うとは思えなかった。

金に窮すれば、あの手この手を使ってあいつらはまた、２０歳を過ぎた僕の前に現れるだろう。ああいう手合いとは、口約束なんて屁とも思ってはいないのだ。

それに――なんであんなクズのために、僕がそんなところへ行かなくてはならないんだ。

せっかく親友に、心からの気持ちを伝えられたのに。

僕が今、とても素晴らしい女性を愛し始めたというのに。

その理不尽さを考えるだけで、心がざわざわした。

「……」

家族から、あの暴挙を聞かされた時、僕は確かに感じたんだ。
自分の心の奥底に、封じ込めたはずの、深い闇を。
シオリやユータたちの優しさに包まれ、僕はがらんどうで出来た心をゆっくりと満たし、修復していった。
それは、まだ完了してはいない。今だって、僕はまだ、まともな人間になれたとは言いがたい。ひどく情緒不安定で、感情に流されやすい。自分の力に、感情の成熟度が追いついていないのだ。
それは、つまり――
その時、ガラガラ、と、テラスの後ろの引き戸が開く音がした。
僕は振り向くと、アユミが立っていた。
「ここ、風は気持ちいいんですが、夏は蚊が出ちゃって――蚊取り線香、焚きますね」
「……」
アユミはテラスの隅に蚊取り線香を置き、チャッカマンで火をつけた。線香の独特の香りが広がる。
「あと、アイスミルクティー。よかったら、どうぞ」
カランと氷がグラスに触れる音がして、ミルクティーの入ったグラスを僕の前のテーブルに置く。
「……」
だが、僕はこの時、針の筵というか、再び夏の夜の生ぬるい風の中、背中に嫌な汗を掻いていた。
あの世紀のアホな告白をしてしまった直後だけに。
「ふふ、後悔してるんですか？」
アユミがそんな僕の心を見抜いたように訊いた。
「え？」
「シオリさんを僕にください、って、言ったこと」
「……」
「ふふ、また赤くなった。サクライさんって、何だか可愛いなぁ」
「か、からかわないでください」
虚勢を張るが、僕は顔を上げられなくなる。

「……」
もう10時になるっていうのに、蝉の声がする。
「あの――シオリさんは？」
僕は訊いた。
「あぁ――どうやら恥ずかしくて、部屋に閉じこもってしまったみたいです。うち、シオリちゃんとシズカちゃんは二人で一部屋なんですけど、シズカちゃんは部屋に入れないからって、今、テレビを見てて」
「……」
「お父さんも、ああ見えて娘離れできない人なんで、まだボーっとしてます」
そう言って、アユミはくすくす笑い出す。
「……」
そりゃそうだ。笑われて当然――いや、怒られないだけまだマシかな。
認めたくないものだな。自分自身の、若さ故の過ちというものを。
「でも、私は嬉しかったな」
アユミは言った。
「え？」
「人間、ああいう時に、素の人格が出るんだと思うんですよ。サクライさん、「シオリさんを僕にください！」の前、何て言ったか、覚えてます？」
「え……」
僕は記憶を反芻する。しかしあまりに切羽詰っていたから、何を言ったか、はっきりと覚えていない。
「ちゃんと私達のこと、認めて、気遣って、まだまだ自分は力不足だって、正直に言ってくれたんですよ」
アユミが解答を示した。
「自分の力不足を言い訳にしないで、ちゃんとそのことを私達に謝ってくれた。私達にとって、シオリちゃんが大切な家族であること

も考慮しているからこそ、サクライさんもしっかりそれに向き合ってくれた。そして、私達が認めるまで待つって、自分への厳しさも持ってる」

「……」

「それだけで、あぁ、シオリちゃんは本当にいい人から、こんなに愛されたんだなぁ、って、感激しちゃいましたよ」

「……」

アイスティーのグラスを両手で握り締める。ひんやり冷たい。

「あの――怒らないんですか？　力も定職もない男が、あんなこと言って」

「高校生じゃ、それが普通ですよ。たとえサクライさんが、どんな力を持っていてもね」

「……」

「それに、もしシオリちゃんを貰う気があるなら、私達もサクライさんと家族になるんですよ？　そうなる気があるなら、もっと甘えてもいいんですよ。私達に。それが家族ってものじゃないですか？」

「……」

沈黙。

そこで、また僕の携帯が、ブーッと振動した。今度は着信ではなく、メールだ。だからすぐにバイブが収まる。

僕は短パンから携帯を取り出し、メールを確認する。

「はっ」

それを見た時、僕の口から息が漏れ、心臓が一度大きく高鳴った。

「どうしたんですか？」

アユミがそんな僕の様子に気付いたのか、訊いた。

「あ、いえ、何でも」

僕は携帯を閉じる。

「……」

また沈黙。風鈴がまたちりりんと鳴る。

「サクライさん」

アユミが口を開いた。
「シオリちゃんのこと、宜しくお願いしますね」
「え……」
「あなたが側にいるだけで、シオリちゃんは笑いますから。それだけで、シオリちゃんは幸せだと思います。今まで一緒にいられなかった分、これからは、あのこと一緒にいてあげてくれると、私も嬉しいです」
「……」
そのアユミの言葉に、僕の思考は一気に光を得、ひとつの答えに達する。
――そうか。初めから僕の取るべき道はひとつだったじゃないか。何でこんな簡単なことに。
僕はテーブルに置いた携帯に目をやる。
さっきのメールは、シオリからだった。
その内容は――
『みんなが寝静まった頃、あなたをはじめに通した部屋で待っています』

Ｓｅｃｒｅｔ－ｍｅｅｔｉｎｇ

その後、僕はシュンの部屋に通され、布団を用意された。シュンは部屋に用意されたベッドで寝、僕は布団で寝た。

シュンの部屋は６畳ほどの小さな部屋だが、よく整頓されていた。シュンの几帳面さが現れているように、物が少ない。

どうやらシオリとシズカは８畳の部屋を二人で使っているらしく、二段ベッドで寝ているらしい。おかげでシュンは、弟の癖に一人で一部屋を使うなんて贅沢だと、いつもシズカに文句を言われているらしかった。

電気を消してからも、シュンは僕と話をしたがった。自分のしている野球のこと、勉強のこと、来年中学に上がるために、しなくてはいけないこと――何かを僕から盗み出そうと、熱心に話をしていた。おとなしそうに見えて、なかなかに激情家だった。

だが、それでも小学生だ。１１時半頃になると、急に口数が減り、そのまま眠ってしまった。シュンもこの炎天下、野球の試合をしていたんだし、疲れていたのだろう。

僕は沈黙の流れるくらい部屋で、携帯電話で時間を確認しながら、この家から一切の物音が消えるのを待った。

そして、１２時半を回った頃、僕は静かにシュンの部屋を出た。

足音を立てず、電気も点けずに、携帯の明かりで足元を照らしながら、僕は階段を下り、彼女が待つ部屋――僕が最初、シオリに招かれ、眠っていた部屋に辿り着く。

ドアが分厚いから、ノックをしようか迷った。だから、シュンの部屋で既に打っていた『もう部屋の前にいる。開けてもいいかな？』というメールを送信。すると２０秒で返信が来る。もう携帯はバイブも切っており、完全にサイレントだった。

僕は出来る限り物音を立てないようにドアを開けると、部屋の中は明るかった。

中に入ると、さっき見たのと同じパジャマに身を包んだシオリが、夕方、僕の眠っていたソファーに座っていた。
「――こんばんは」
小さな声で、シオリは言う。
「――ああ」
僕は静かにドアを閉める。
「……」
沈黙。
あのアホな告白を、シオリも聞いていたから、まずは予想通り。
「あ、あのさ」
なので、声を少し殺しながら、僕は話しかける。最初に話す内容も既に決めてある。
「この部屋、防音なんだよな。普通に話しても、大丈夫だよね」
「う、うん、大丈夫」
この質問なら、シオリも答えざるを得ない。
「ただ、あまり大きな音は出せないけど」
「そうか」
「――うん」
シオリはこっくりと頷く。
「――座って」
シオリは二人掛けのソファーの、自分の隣を僕に促す。僕はそこに座る。
ソファーの前のテーブルには、水滴の沢山付いた、淡い茶色の液体の入ったグラスが置いてあった。
「ごめんなさい、ミルクティーを入れたんだけど、氷、融けちゃったね。淹れ直そうか？」
「いや、大丈夫だよ」
僕は言う。
「……」
深夜、防音の密室、二人きり……

隣に座ると、シオリがそのせいか、緊張しているのが、手に取るように分かった。
「ごめんなさい、疲れてるのに、こんな夜中に」
「いいさ、どうせ時差ボケだし、昨日までこの時間はまだ夕方だからな」
僕は何とかシオリをリラックスさせようと、笑顔を作って見せる。いまだに意識して笑顔を作ろうとすると、顔がぎこちなく歪むんだけど。
「しかし、君が僕を呼び出すなんて、初めてだな」
僕は笑った。
「僕、少しどきどきしたよ」
「本当？」
シオリは僕の方を振り向く。
「……」
同じソファーに隣り合って座っているので、顔が近い上に、上目遣いで見つめられる。
僕は何だか照れてしまう――
「ご、ごめんなさい」
シオリも照れてしまったらしく、僕から軽く視線を逸らす。
「――で、でも、ちょっと二人きりで、話したくて」
「……」
そういわれて、不覚にも少し胸がきゅんとした自分に隠れて自嘲した。
一体僕はいつからこんなめでたい思考になったんだろう。僕は自分に呆れてしまう。
「今日はごめんなさい。うちの家族、あんなで騒がしいでしょう？」
「いや、楽しかったよ。料理も美味しかったし、皆優しいし」
勿論お世辞ではない。
「すぐに話を大袈裟にしちゃう人達だから」
「でも、いい家族だと思うよ。僕は」

僕はシオリの顔を見て言う。
「――でも、あなたから見たら、大抵の家族はいい家族に見えるんじゃない？」
「あ――せ、説得力なかったか？」
「ううん」
シオリは頭を振る。
「理想的な家族だと、私も思うわ。この家族に生まれて幸せだと、私も思う」
そう言ってから、少しだけシオリは顔を俯けた。
「だから、私はあなたの苦しみを、ちゃんとは理解できないのかも知れないね」
「……」
何だ？　何かシオリの様子がおかしい……
――当然か、あれを聞いてしばらく部屋に閉じこもってしまっていたわけだし、精神状態に少しの異常があっても仕方がない。
「で、でも、随分よくしてもらっちゃったよな」
僕は話を変えようと、起点を作る。
「飯をご馳走になって、風呂まで貰って、しかも君の家に泊まることになるとは」
「その方がよかったでしょう？」
僕の言葉を、シオリの凛とした口調が止めた。
「え？」
明らかに纏う空気の変わったシオリに、僕は少し逡巡する。
「……」
シオリは僕の目に、強い視線を向ける。それは、僕がその視線から目を逸らすことは許さない、嘘をつくことは許さない、と言っているかのような目だった。
「――あなた、初め電話した時、様子がおかしかったもの。普通じゃなかった」
「……」

「ずっと、今日様子が変だったから、今はあなたを一人にさせられないと思ったの。だから私、この家に呼んだの」
「……」
僕の頚椎が、びりびりと痺れるように緊張が走る。
「――家族と何か、あったのね」
断定的な口調で、シオリは僕を問い詰める。
「……」
視線を逸らせないまま、僕は唾を飲み込む。
しまった――たまに来るんだ。こういう時のシオリは本当に強いんだ。僕はそのシオリに、一度も勝てたことがない。
「やっぱりプロ契約が、関係しているの？」
黙りこくる僕に、シオリはさらに追い討ちをかけてくる。
「どういうことなの？　中東って――しかも、家族があなたの代理人をしていたって……」
「――そこまで知っているのか」
「……」
沈黙。
「――ばか」
そう声がした。
シオリは僕をじっと睨んでいる。何だか少し、泣きそうな顔にも見える――その言葉を言い慣れていないせいか、言っても全然迫力がなかったけれど、確かに言われた。『ばか』と。
「何で黙ってるの？　辛いなら初めから言ってよ。黙っていないでよ」
「……」
「あなたのことなら、辛いことだって、私には全部大事だよ」
「……」
もうこれまでだと思った。
「――ごめん」
僕は自然とそう口に出していた。

「あまりに酷いことで、君を傷つけるのが嫌だったんだ。久し振りに会えたんだし、ずっと楽しい気持ちでいたかったから」
「……」
「――話すよ。全然楽しい話じゃないけど……」

――僕は全部話した。家族のしてきた愚行や、現状、全て。僕一人の力では、未成年故に、あの家族に法的制裁を加えることも出来ないことも。
「――これで、全部」
話すだけで気分が悪くなった。初めて他人に話してみて、想像以上に胸糞の悪い話だということを、改めて実感した。
しかも、それを聞かせるのがシオリだと言うのが、僕をこの上なく苦痛に苛んだ。
「……」
そのシオリは、さっきから相槌ひとつ打たずに僕の話を聞いていた。
「……」
僕は話している間、シオリの事を見ることができなかった。動揺するだろうシオリの顔を見るのが耐えられないと思って。
沈黙。
その時。
「――シオリさん？」
僕はその異変に気付いた。
シオリの体が、がたがたと小さく震えていた。
「シオ……」
横顔を窺って、僕の声は止まる。
シオリが泣いていたからだ。泣き虫な彼女が、顔を俯けて、口を真一文字にして拳を握り締め、その小さな握り拳に、大粒の涙が落ちていく。

「――酷い」
か細い声で、シオリが言った。
「――それが――それが親の――家族のすることなの！」
そして、そのまま激した声を上げる。
「……」
真夜中で、家族が起きてしまうとか、そんなことはもうどうでもいい。
ただ、シオリがここまで怒りを露にした声を出すのは初めてで、僕はその声に気圧された。
「――泣くなよ」
僕はシオリの顔に触れ、指で涙を拭う。
「――何で君が泣くんだよ」
「――だって……」
シオリは目を真っ赤にして、悲しそうな目で僕を見つめた。
「……」
僕はシオリの頭に手を伸ばし、髪を撫でた。
「泣き止んでくれ。君の泣き顔、見るの辛いから」
「――ごめんなさい」
シオリは顔を俯ける。
その間、思慮にふけっているようにも見えたのだけれど――
「――ねえ、ケースケくん」
やがて、力のない声で、僕の名を呼んだ。
「――あのＭＤを使って、世間を味方につけたら」
「――え？」
「ほら、私に預けている、あのＭＤ」
「……」
――そうか、それがあったか。
僕はシオリと結ばれてすぐに、一枚のＭＤを預けている。
それは、僕が家族から心を切り裂かれるような罵倒を浴びせられ、殴られ蹴られ、暴力を振るわれる音声の入ったＭＤだ。

――そうか――それがあれば、家族の息の根を完全に止められるだろう。

でも……

「いや、いいんだ」

僕はかぶりを振った。

「あれは、この状況では使わない」

「どうして？　だって、このままじゃ――」
「確かにあれを使えば、１００％勝てる」
僕はシオリの顔を見ずに、話し始めた。
「だが、あれをばら撒くことは、僕があの家族に宣戦布告したことになる」
「……」
「話を聞くだけでも分かっただろう。あいつらには罪の意識なんてこれっぽっちもない。だから反省もしない。だからあいつらを本気で止めるとしたら、本当に息の根を止めるまでやるしかない――宣戦布告したら、僕はあいつらの息の根を止めるまで、徹底的にあいつらを殲滅しなくちゃならない――そんな戦いの渦に、身を投じることになる」
「……」
「それに、多分家族は自分の利のために抗うだろう。ゴキブリみたいに生命力があって、そのくせ汚い奴等だ。悪あがきして、戦いが長期化することは目に見えている。宣戦布告して、待っているのは、終わらない泥仕合だ――勝っても僕が得るものは何もない――不毛に争って、疲れきって、消耗して、次第に僕はあいつらに殺したいほどの憎しみを抱くかもしれない。そうなったら、また僕は以前に逆戻りだ。あの家族と、憎しみのみで戦うようになったら、僕はこの半年積み上げてきたものを、自分の手で壊してしまう――君やユータ達がこの半年、教えてくれたことを、否定することになってしまう」
「……」
「――そんなの、出来ないよ」
僕はシオリの横顔を窺う。
「……」

沈黙。
「ふふ……」
僕の口から、力ない笑みが漏れた。
「――君に――逢いたかった」
僕は呟いた。
「家族から、帰国早々その話を聞かされた時――僕の心は酷く掻き乱れた。自分の心が、前のように、闇に染まっていく感覚を感じた。そんな時――君にすごく逢いたくなった。君の笑顔を見たいと思った」
「……」
「情けない限りだが――その時、僕は自信がなかったんだ。自分ひとりで、家族から再び伸ばされた闇に、一人で逃げ切れるか」
そう、僕は不安だった。闇に掴まりたくないと、抗って――
気が付いたら、彼女の許に、走っていた。彼女という、光に向かって。
「でも、君に逢いたいと思って、逢えた時、気付いたんだ。僕がずっと前から、君のことばかり考えていたんだってこと――大阪での代表合宿でも、オランダにいた時でも、僕の心の真ん中に、いつも君がいたんだ。君の言葉に何度も奮い立ったし、君の声が聞きたい、笑顔が見たいと思った。僕は、ずっと前から、君の光に照らされていたんだ」
「……」
沈黙。
――違う。今言っていることは、似ているけれど違う。僕の心に溢れる気持ちじゃない。
「――ねえ、ケースケくん」
その空気を察したのか、シオリは急にもじもじする。
「あ、あの――」
さっきの強気な彼女は鳴りを潜め、普段の謙虚なシオリに戻っていた。

つまり、それは――彼女の不得手な分野、恋愛に関すること。
「あ、あの――さっき、お父さんやお母さんに言ってた、あれ……」
もう僕と目を合わせてくれなかった。目を合わせられないのか。
「その――本気、だったの？」
「……」
その言葉を聞いた時、僕は自分の情けなさに少し笑えた。
もしかしたら――彼女はずっとその返答を待っていたのかもしれないじゃないか。それを女の子から催促させるなんて、僕は本当に甲斐性なしだ。
「――やっぱり、女の子にそういうことを言わせるのは、ずるいよな」
そう呟いてから、僕は彼女の両肩に手を置いて、彼女に僕の方を向かせた。
「あ……」
彼女の頬が赤く染まる。
「逸らさないで」
僕は声で彼女を制する。
「大事なことだから、ちゃんと、目を見て言いたいんだ。だから、聞いて」
そう言ってから、僕は高鳴る鼓動を沈めるように、ひとつ深呼吸して、言った。
「前からも、今も、これからも、僕は、君が――マツオカ・シオリがめちゃくちゃ好きだ。君を、愛してるんだ」
言った。
「だから――もし君が望んでくれるなら、ずっと僕の側にいてくれ」
既に感情はいっぱいいっぱいだけど、さっきシオリの両親に告白した、捨て鉢な気分というのではなくて、頭が妙にクリアになっていた。
でも――言ってから、急に恥ずかしさが襲ってきて、僕の緊張した顔が、一気に緩んでしまう。

「は――はは、言えた。やっと言えた」
僕の喉から、引きつった笑いが漏れる。
考えてみれば、僕はずっと前から、彼女にこの気持ちを伝えたかったんだ。そのためにオランダくんだりまで行って、過去の経歴から、弱気になってしまう自分と戦ってきた。そこまでしてようやく辿り着いた現状に、今更感慨深いものがやってきて、熱い塊を飲み込んだような熱さが胸を満たした。
ああ――痛みに鈍い僕だから、気付かなかったけれど、僕もそれを言えなかったこと、心の底では、辛いと思っていたんだ。
そんなことに気付けたことも、何となく嬉しかった。自分がまた少し、まともな人間になれたような気がして。
「ごめん――君に言う前に、家族に言っちゃって。順番が変になっちゃったから、しまらないな……」
「……」
照れ笑いを浮かべても、シオリは反応しない。ゴローと同じく、呆然としている。
だけど――
そうして、呆然と僕を見つめるシオリの目から、またどんどん涙が溢れてくる。
「お、おい――」
僕は狼狽する。
「ご、ごめんなさい……嬉しくて」
「……」
本当に、涙腺の枯れない女の子だな。
でも――そういうところも好きだ。
笑ったり、泣いたり、悲しんだり、そんな感情が欠落してしまった僕にとって、そうやって正直に表情に出てしまう君のその正直さが、とても好きだと思ったから。
「……」
僕は座ったまま、シオリの肩に手を回して、シオリの頭を僕の肩

に引き寄せた。そしてそのまま、シオリの頭を撫でる。
「――シオリ」
普段、さんを付けていたけれど、僕はシオリを呼び捨てにした。
「僕はもう、家族を潰すまで、喧嘩とか、そういうことをしたいんじゃないんだ。そんなことで過去と同じ過ちを繰り返したくない。それなら、君とのこれからの時間を大事にしたいんだ。言ってただろ？　君は僕が合宿にいく前、大会が終わっても、こんなささやかな時間が続くといいね、って。君が今も僕と過ごす、ささやかな幸せを望んでくれるなら、僕はそれを全力で築き、守るよ」
「……」
「僕も、君とのささやかな幸せを積み重ねながら、この先自分が生きていく道を見出したい。この力で、誰かを守り、救える道をもう家族への恨みや憎しみなんて、どうでもいい。君がいれば、僕はそれを捨てられる」
そう、それが僕が、この一日、シオリの家族と過ごして出した答え。
僕はシオリを愛しているし、今日一日、シオリの家族が、どれだけシオリを愛しているかを知り、それを託された。
そして、シオリが望んでいるのは、家族を叩き潰した上に来る平穏なんかじゃない。今までどおり、ささやかな時間の積み重ねでよかったのだと、さっき、アユミとの話で気付かされた。
それで全てわかった。僕がすべきこと、僕が守るべきものは、シオリや、ユータ達と、今までどおり、ささやかだけど、幸せな時間なのだと。
「シオリ――これからは、ずっと君の側にいるから」
「……」
沈黙。
腕に抱くシオリの頭が、少し僕の肩に体重をかけ、僕に体ごと寄りかかるのがわかった。
「――だけど」

シオリは呟いた。
「私は――それだけで十分幸せだけど――でも、あなたを少しでも、自由にしてあげたいよ」
シオリは僕の肩に身を預けながら、言った。
「――あ、あの、ケースケくん」
そして、おずおずと口を開く。
「わ、笑わないで、聞いてくれる？」
「え？」
「き――嫌わないでね」
「どうしたんだよ。大丈夫だよ。言ってみて」
「……」
僕の腕から、シオリの緊張が伝わってくる。
「ケ、ケースケくんって、誕生日、１０月だよね」
「え？　――うん、１０月３１日だけど」
「そっか――」
シオリは沈黙する。
「あ、あのさ、ケースケくん」
深呼吸の音がした。
「も、もしよかったらなんだけど――ケースケくんが１８歳になったら――わ、私と、結婚しない？」
「……」
――え？
「……」
シオリの体が硬直するのが手に伝わる。
それと同様に、僕も喉の奥まで硬直して、声が出ない。
「あ、あの――な、何か言ってくれないと、私……」
「あ、ああ、ごめん」
僕は腕を離して、もう一度座り直し、シオリの顔を窺う。
シオリの顔は、真赤で、全く余裕を失った表情をしていた。
「びっくりして――で、でも……」

「だ、だってケースケくん、結婚すれば、１８歳でも未成年じゃなくなるから――身成年じゃなくなれば、もっとやりたいことを自由にやりやすくなるでしょ？　だ、だから……」

「……」

――確かに。法律上、僕は１８歳になれば結婚できる。女の子は１６歳で結婚できるから、シオリはもう条件をクリアしている。

結婚する利点は、僕に未成年の肩書きが消えることだ。そうすれば、僕は単独で法律行為も行えるようになるし、両親に握られている親権も消える。今まで以上に、僕は家族から自由になれるし、法律上、家族が僕を縛ることはほとんど出来なくなる。

「――だ、ダメかな……」

シオリは、真面目ゆえに、自分の提案があまりに突飛だと、自分で分かっているんだろう。自信なさげに俯いている。

「い、いや、とっても嬉しいよ。だけど――いいのか？　結婚なんて、そんなことでやっちゃって」

そう、それではまるで僕の都合に合わせて、彼女が籍に入るということじゃないか。それではあまりに彼女に申し訳ない。

「私は、構わないよ」

だけど、シオリは迷いなく、そう答えた。

「私も――結婚するなら、あなたしかいないと思っていたから。ずっと前から」

「……」

誰だって、そう思って結婚するんだ。そう言って一時の感情に任せて結婚する奴が、結婚後に互いの不満に耐え切れずに離婚してしまうものだ。

「お母さん達も言ってたでしょ？　私、お金のかからない女だし――贅沢は言わないよ。私も働くし、二人で暮らすなら、問題ないよ。だから……」

そう思っても、僕だって、もう、そういうことをする相手は、シオリしかいないと思っている。一生側にいたいし、両親に、シオリ

を僕にくれ、とも言った。僕だって、シオリとの未来を望んでいた。それはつまり、そういうことではないのか。

だけど――

「あのさ――とっても嬉しいんだけど、まだ無理だよ」

僕は言った。

「未成年の婚姻には、保護者の同意がいるんだ。君の親は説得の余地があるかもしれないけれど、僕の両親が同意することはありえない……だから僕が18になっても、結婚できる条件が揃わない」

「……」

「それに――僕は君のご両親に誓ったんだ。まだ僕は、君をご家族のように笑顔にさせることは出来ていないけれど、いつかそうなれるように、努力を重ねていく、って。だから、そうなれないうちには、君にマツオカの姓を捨てさせるわけにいかないよ。僕が男として、君を幸せにできるまではさ」

「――そっか――そうだよね」

シオリは俯いた。

「ごめんなさい。私、考えなしに――」

「いや、いいんだ。嬉しかったよ。その気持ちだけでさ」

「――い、今頃恥ずかしくなっちゃった。えへへ」

シオリの照れ笑いが出る。

「ごめんなさい――あ、あなたに、まさかあんなこと、言ってもらえるなんて、思ってなくて――わ、私、嬉しくて。ちょっと舞い上がっているって言うか――欲が出たのかな」

「え？」

「――あなたを、独占したい、って」

「……」

「あ、あはは――あなたは、朝顔みたいに、誰のためでもなく、自分のために咲いて欲しいなんて、言ってたのにね、私……」

「いいんじゃない、欲張っても」

照れ笑いを浮かべるシオリに、僕が声をかける。

「え……」
シオリが息を漏らした頃。
僕はもう一度、シオリの体を右手できつく抱き寄せ、左手で、シオリの頬に触れた。
「僕も――好きだって言えて――この気持ちに気付いて、少し欲が出てきちゃったから。おあいこってことで」
そう言って、僕はそのままシオリの体を引き寄せ、自分の唇を、シオリの唇に合わせていた。
その瞬間、シオリの体がびくっと反応し、唇が震えたのが分かった。
でも、抑え切れなかった。ずっと、シオリに触れたくて仕方なかったから。僕達が、初めて欲を現すなら、まずは僕からやらなくちゃと思ったんだ。
「ん……」
どうやら本当に、男とキスをしたこともないようだ。息を止めているのがわかる。鼻息を僕に当てないように、鼻の息まで止めている。
でも――シオリのその小さい唇は、柔らかくて、温かくて、今まで以上に、シオリの存在を近くに感じた。
その次の瞬間、僕の体も一瞬震えた。
シオリの唇に触れたその興奮と、強烈な感激――幸せすぎて、震えるなんてことがあるのだということを、僕は初めて知った。
同時に、少し怖くなる。愛する人と、こうなれたことが、幸せすぎて、離れることを心底怖いと思った。
でも――その震えるような歓喜と恐怖が、僕の想いをよりクリアにした。
シオリ――僕は君を愛している。
離れることは出来そうにない。出来ればこの幸せが、死ぬまで続くように……
その想いに呼応するように、僕の体をシオリの腕が包み込み、そ

っと僕の体を抱き寄せた。
その時分かった。シオリも、僕と同様に、僕のことをこんなにも求めてくれていたのだと。
口に出さなくても分かる。ニュースを見た時から、本当はずっと僕が中東なんかに行ってしまうんじゃないかと不安を抱えていて――そんなところに行かないで、と、強く思っていたのだと、分かった。
こんなにも、二人の気持ちがふたつに重なっていることを実感できたキスはなかった。僕の生涯の中で、このキスほどに真剣で切実な思いに駆られたキスはなかった。

――これが僕とシオリの、初めてのキスだった。
僕達はこの時、二人が世界から取り残されていてもいいと思う程の幸福感の中で、キスをした。
しかし――
次に僕とシオリが唇を合わせるのは、このキスから7年も後のことになる。
それが、氷のように冷たく、悲しい想いに満ち溢れたキスになることを。
僕達はまだ、何も知らなかったんだ。

Negotiation

その次の日の夕方、僕は都内の高級ホテルのレセプションルームでユータ、ジュンイチをはじめとした代表メンバーと合流し、記者会見に臨んだ。

「まずは監督、出国当時は惨敗必至として、サポーターからもブーイングを浴びせ続けられる、厳しい戦いでしたが、結果は3位という、日本サッカー史上最高の結果となりましたが、そのことについて……」

まず質問は、当然席の中央に座る監督に向く。

基本的にはこの手の会見は、監督が質問の8割を受け持つものだ。だが、今回は別だ。

監督にはじめ質問が飛ぶのは、いわば年長者を立てる建前。はじめからマスコミが、会見で多く話を聞きたい相手は、僕だ。

それだけこのチームの戦術が、僕の得意な『竜眼』こと先読み能力を土台として、臨機応変に変わっていたことを、サッカーファンは皆わかっているというわけか。

「サクライ選手、質問よろしいでしょうか」

ほら来た。

無数のフラッシュ、沢山のテレビカメラがこちらに向く。時間はちょうど夕方のニュースを各局がやっているころだ。もしかしたらこの会見はニュースを通じて生放送されているかもしれない。迂闊なことは喋れないな。

「今大会、予選には出場せず、本戦から出場し、国際試合のキャリアもない中で、いきなりキャプテンとなって、チームメイトを鼓舞する姿は、日本国民、皆感動さえ覚えましたが、何か心がけたことはあったのでしょうか？」

まあ、この時点での質問は、こんな感じのぬるい質問に決まっている。あくまでチームでの戦いについてのことを主眼に開かれた会

見なのだから、あまり一人の選手の個人的なことにはあまり踏み込めない。

「うーん、とはいえ、別に私一人の力で勝ったというわけでもないですから。このチームは出国前には色々言われてましたが、元々これだけの戦果を上げる力やポテンシャルはあったんでしょう。それを引き出すための、選手同士のコミュニケーションや意見交換を密に行った――他のチームとしたことは変わらないんじゃないですかね」

「なるほど、では次の質問です。今大会、やはり緒戦のメキシコ戦での、サクライ選手のハットトリックが、日本を大いに勢いづかせた要因だと思うのですが、どうでしょう」

「いや、あれは――試合前の選手入場口で、メキシコの選手に女と間違われまして。一緒にダンスでもどう？　って言われたのに少々腹が立って――じゃあ踊らせてやるぜ、僕の掌の中でな、って気分になったんで……」

そんな僕の発言に、選手もマスコミも笑いに包まれる。

大会が終わり、最終結果も出ている以上、適当に耳障りのいい言葉を並べる。結果が出た後の会見なんて、自分の発言に責任はほとんど付きまとわないんだから、楽なものだ。

約1時間半の会見は、終始和やかなムードで進み、終了した。どうやら僕達の戦いの反響をこの場が現しているように思えた。

選手達もホクホク顔だ。何人かは僕やユータ同様、海外クラブからのオファーや、練習参加の話もあったらしいし、この大会が自分の名を売り込む大きなきっかけとなったのだから。それをジャンプ台に出来るかはまだわからないけれど。

「では、記者会見はこれにて終了とさせていただきます」

ＪＦＡのスタッフである司会が、そんな和やかな空気のまま、会見を打ち切った。フラッシュが無数に焚かれる中、僕達は席を立つ。

その時だった。

「サクライくーん」

突然、席の最前列にいた僕に、マスコミが殺到し、僕は一斉に取り囲まれた。

――やっぱりな。

「サクライ選手、中東チームへの移籍というのは本当なのでしょうか？」

「今までプロ入りを表明していなかったのに、いつからプロに転向しようと思ったのですか？」

「アーセナルをはじめとした、オファーのあったほかのチームを蹴ってまで、中東を選んだ理由はなんでしょうか？」

矢継ぎ早に質問が飛び、マスコミは他社のジャーナリストにお互いもみくちゃにされながらも、僕にマイクを伸ばしてくる。

「……」

やれやれ、まるで芸能人にでもなったような騒ぎだ。基本的に目立つことは好きじゃないんだけどね。

ユータとジュンイチが、足を止めてその様子を見ている。もう二人には、家族のことはうまく伏せながら、事情は話してあるんだ。

「まだ回答できる段階じゃありませんけど、交渉はします。その結果は後日はっきりすると思いますよ」

本当はこの場ですぐに否定したかったのだが、それは出来なかった。否定をした場合、この会見の様子はすぐにメディアを通じて日本中に流れてしまう。つまり、僕の家族も僕が中東に行かないつもりで行動していることがばれてしまう。そうするとあの家族のことだ。僕を妨害してくるかもしれなかったから、僕はきわめて隠密裏に行動をするしかなかった。

会見の後、僕達は会見先のホテルで、ＪＦＡ会長をはじめとした、日本サッカー界のお偉方の計らいで、祝賀会が行われ、僕達はそれに参加した。

だが、僕はこの場でＪＦＡ会長と接触し、今後の交渉に協力して

欲しいと頼んだ。当然、日本の至宝を、若干１７歳で中東に売り渡すような真似は、日本サッカー界にとっても損失だから、ＪＦＡは僕に協力的だった。ＪＦＡとしては、僕に日本に残って日本サッカーの人気を底上げしてもらうか、ヨーロッパの強豪クラブで活躍して、今後の日本選手のヨーロッパ移籍の太いパイプを作ってもらいたいと願っているのだから。ＪＦＡにとっても、僕がこの時点で中東に行くことは、デメリット以外の何者でもないのだ。

協力を得られたことで、まず僕は、ＪＦＡの名義で、僕を獲得したチーム、バスコ・ダ・ガマにその日のうちに連絡を入れ、明日すぐに交渉を行いたいと、僕の意志を伝えた。

そして翌日、僕はバスコ・ダ・ガマのスカウト担当と、ＪＦＡスタッフの同席の下、都内ホテルで交渉に臨んだ。

交渉に来たのは、中東の、肌の浅黒い中東人で、イスラム教徒なのか、スーツではなく、白いローブのような服を着ていた。当然日本語が喋れないようなので、通訳がつく。

勿論僕も弁護士を連れている。ＪＦＡの顧問弁護士、国際法にも詳しい敏腕な弁護士らしい。

「ではまず、そちらがサクライ選手との入団交渉が完了したと言うに足る、契約書類を拝見させてください」

弁護士はまずそう提案する。

当然向こうはそれを交渉理由としてここに来ている。当然僕にそれを見せるつもりだったのだろうし、すぐにそれを差し出した。

「……」

僕は弁護士と一緒にそれに目を通す。契約書は日本語なので、内容も理解できる。

契約書に目を通すと、ちらほらとボールペンか万年筆かでの直筆の部分がある。家で見ているから知っている。これは親父の字だ。

オヤジ達の言うとおり、契約は２年、契約金は、報道よりもさらに多い６００万ユーロ。ご丁寧なことに、この契約を途中破棄した場合、契約金を全額返金、しかも３００万ユーロの違約金が付くと

まで書いてある。
　ふざけやがって。僕がこの契約を断ったら、ただでは済まない用件を作り出して、無理やりにでも契約させようとしてやがる。おまけに契約書には、親父の名前の下に、僕の名前が書かれており、親父の方は名前の横に既に拇印、僕の名前の横には、僕の実印が既に押されている。オランダにいっている間、自分の部屋の、鍵付きの引き出しの中に保管しておいたのに、どうやら鍵をぶち壊して、実印を持ち出したようだ。
「あの、この印鑑と、僕名義のサインは、誰が？」
　弁護士の邪魔はしたくないが、僕は訊いた。
「ああ、それはお父様とお母様が。サクライさんは、元々ご両親には、プロであれば、行くチームはどこでも構わない、僕は忙しいから、いい条件のところがあれば、契約しちゃっていいよ、と、言い残しているとのことで」
「……」
　そんな人生の大事を、親とはいえ、自分で判断せずに決めると思うか普通。なめてるのか。
「なるほど――でも、これではっきりしましたね」
　弁護士は、視線を契約書からはずした。
「あなた方はオランダで、サクライ選手に交渉を持ちかけている。その時サクライ選手は言っています。今は大会中で、明確な答えは出来かねる、大会が終わったら、熟考の後、返事をする、と。そう言ったことは、オランダでサクライ選手と一緒にいた、日本代表スタッフも確認、証言を得ています」
　その通り、僕自身は覚えてはいないが、僕の手帳には、オファーを出してきたチームがひとつ残らず記されていた。このチームも、あまりに多く集まったオファーに記憶が曖昧になっているだけで、僕とオランダで接触している。そして、僕は全チームに向けて、弁護士が言ったように、現在は契約の話は出来かねる、と、宣言している。

「つまり本人には契約を現時点で行う意志がないことを明確にここで表している。確かにサクライ選手は未青年で、制限行為能力者です。その代理人は親権所有者、すなわち両親であり、両親がサクライさんの代理人をしていた、ということは、確かに説明が付きます。ですが、この場合の契約には、いくら実印が押されているとはいえ、本人が押し、自署したものでない以上、サクライ選手が追認したという証拠にはありません。まだサクライ選手は代理人の代理行為に対する追認拒否権を持っていますし、そもそもサクライ選手の契約に対する意思表示と、両親に伝えた、契約してもいいよ、という意志には明らかに錯誤が見られます。よってこの契約は、サクライ選手とご両親の間、そしてそのご両親と、契約者様の間に、意志の錯誤があったこともあり、サクライさんが追認拒絶すれば、契約は取り消し、無効となります」

「……」

民法９５条の錯誤の要件は４つ――意思表示の存在、意思と表示の不一致、表意者がその不一致を知らない、法律行為の要素部分に錯誤があること。これさえ揃えば、錯誤があって行った法律行為は無効となる。

僕はオランダで、しっかりと大会中は契約を行わない、と宣言している。だが、両親が何らかの形で勘違いし、僕の契約を両親に一任すると勘違いし、僕はそれを知らなかった。それに僕は、表向きで家族に契約を一任したと告げた意思表示はないし、僕に落ち度がない。

つまりこの契約は、僕の意思表示が、両親の意思表示と一致していないこと、また、大会中は契約をしないと言っていた僕と、それを聞いているはずなのに、契約をいった中東チームの間で２つの錯誤がある。よってこの契約は無効となる。

――まあ、実際は錯誤ではなく、僕の家族が金を得るために、中東チームを騙した詐欺の要件なのだが。だがその要件で揉めると、中東チームは激怒して、僕の家族と衝突することが目に見えている。

錯誤という形で、中東チームにも過失があったんだ、という形を取って、契約を無効にするのが、一番波風の立たない方法だった。そう思って、僕は弁護士にあらかじめ、そんな感じで中東チームに過失があることを証明してくれ、と頼んでおいた。

弁護士の説得もあり、初めは中東チームもごねていたものの、元々の契約段階で、自分達が明らかに本人を無視した契約行為をしていたという自覚もあったのだろう。早々に折れてくれた。

「し、しかし、もうこちらは先方に、小切手で６００万ユーロを払っているんですよ。これに対して全額払い戻せるんですか？」

中東チームの通訳が、弁護士に聞いた。

そう、それは問題だ。契約は取り消されるということは、遡及効――つまり、初めからなかったも同然という状態に戻すことだ。そのためには、僕も中東チームに、お金を返さなくてはいけない。

だが、僕は現状、家族が隠匿しているその多額の契約金のありかが分からない。その上あの家族は、億ションの頭金か何かを払うために、もう契約金の一部に手をつけてしまっている。僕は未成年者である異常、億ションの契約――つまり不動産契約を一人では取り消せないし、今から僕一人で、６００万ユーロを全額回収するのは不可能だった。

だから――

「そのことなんですが、僕を訴えてくれませんか？」

僕は自ら申し出る。

「え？」

その言葉に、中東チームの顧問も目を丸くした。

「残念ながら今の僕は、そちらから受け取ったお金のありかを知らないのです。僕がそれを回収して、今から皆さんに返すことはできません。なので、裁判所に債権回収の強制執行命令を出させてください。勿論、それまでの費用は僕が出します」

そう、契約が無効となった以上、僕には契約金の返還義務――中東チームには、債権回収の権利が出来る。つまり僕は、借金を背負

い、それを返済していく義務を負ったのと同じ状態になる。
だが、現状僕には弁済能力がない。なので僕を訴えることで、裁判所に債権回収の強制執行を僕に通達させる。
そうすれば、未成年の僕に弁済能力がない以上、その効力が、制限行為能力者である僕の後見人――すなわち両親に及ぶ。
さすがにあの家族も、裁判所の強制執行の前では、億ションの契約だろうが何だろうが、金を隠匿してはいられないだろう。まだ契約してからそれほど日も経っていないし、一生遊んで暮らすといっている以上、現金はまだ多く手元に残っているはずだし、きっとすぐに返せる。
「――残念ながら、僕がお金を返すには、裁判所の力で口座を差し押さえてもらうしかないんです。お金のありかが分からないので。ですからお願いします。お手間をかけますが、どうか僕を訴えてください」
これが僕の選択した道だった。
中東チームにも過失があることを認めさせた上での契約無効と、裁判所の強制執行を起こさせるために、家族ではなく僕を訴えてもらう。
これが現状、最も波風立てずに僕の身を守る方法だと、僕は判断した。こうすれば、とりあえずは家族の詐欺行為が世間にもれるリスクは最小限に抑えられる。僕がこの先も望む、平穏な暮らしに戻るには、多少の身を切っても、これが最良と判断したのだった。
そして僕は、交渉の後、中東チームに、今大会の３位入賞ボーナス２０００万円をまず支払い、僕の無理を聞いてもらえるよう、精一杯の誠意を見せた。さすがに未成年の僕が、そこまでして、それ以上無理強いをすることができないと判断した中東チームは、僕の言うことに従うことを約束してくれた。
「しかし――本当によかったのかい？　まだ仕事についていない君

とすれば、２０００万は大金だろう？　あんな簡単に手放してよかったのかい？」

交渉の後、僕はＪＦＡの会長から慰労された。

契約は無効になったとはいえ、僕は相当に身を切った。それに対する同情だった。

「今回、僕の言葉足らずで、あのチームにも手間と損害を負わせましたからね。穴埋めにはならないかもしれませんけど」

それに、どうせ僕を訴えてもらう以上、不必要にお金を持っていても、いずれは差し押さえられてしまうし。

「しかし、裁判所の強制執行がかかっても、全額回収できなかったら、君はその不足分をどう補うつもりなのかね」

ＪＦＡの会長が僕に訊いた。当然の質問だ。いくら裁判所が、家族から強制徴収をかけても、使ってしまった分は元に戻すのは難しい。どうしても多少は返還しきれない部分が出来てしまうかもしれない。それは僕も想定していた。

「さぁ――そうなったら大学に行きながら、Ｊリーグの強化指定選手になるなり、今の人気を利用して、テレビで出演料を稼ぐなりして、何とか返しますよ」

僕は自分の未来を自嘲した。

「それより、この交渉については、絶対マスコミにはオフレコにしてくださいね。この話は、波風立てずに終わらせたいので

いずれにせよ、僕はその後しばらく、中東チームの裁判所への訴えが受理されるのをひたすら待つことになる。

その間、僕にはまた、次の戦いが始まろうとしていた。

高校サッカー、夏の全国大会である。

僕達は今年の正月で高校サッカーを引退するはずが、結局今も高校サッカーに席を置いている。来年の正月まで、席を置けるが、それでは僕達の引退を待っていた２年生に申し訳が立たないため、夏

で高校サッカーを引退することを決めていた。
これが、僕、ユータ、ジュンイチが揃って出場する、高校サッカー最後の大会だった。そのため、なんとしても全国優勝を果たし、僕達の名前を高校サッカー史に残したかった。
僕は裁判所による執行の時を待ちながら、その新たなる戦いに、目を向けていた。

Ｂｒａｎｄ－ｎｅｗ

「ああ、いいぜ。しばらくここ使えよ」
エイジが言った。
「すまん、無理言って」
「何ならうちに来てもいいのに。俺がアパートを探す間にさ」
「いや、お前も色々忙しいんだろう。これ以上、世話を焼かせることは出来ないよ」
僕は契約が終わってすぐ川越に戻り、ミツハシ・エイジと会っていた。
僕はエイジに頼んで、エイジ達のグループが日々たむろしていた、あの廃倉庫をしばらく寝床に貸して欲しい、と頼んだ。エイジはそれを承諾してくれた。
「しかしここ、照明とか、電気もあるし、小山の中には水道もあるんだな」
「その代わりクーラーはない。この時期この倉庫で寝るとしたら、相当寝苦しいぞ。ベッドもないし、寝るとしたらソファーだしな」
「冬よりマシだ」
「ま、それは考えようだな。出来る限り早くアパート探してやるよ」
エイジは、僕よりふたつ年上の２０歳だ。だから自分でアパートが借りられる。実際エイジは今アパートを借りて、一人暮らししているし。
僕はエイジに頼んで、もう一部屋、エイジの名義で部屋を借りて欲しい、と頼んだ。勿論家賃をはじめとした諸費用は僕が払う。ボーナスの２０００万は失ったが、僕にはまだ日本代表で１ヶ月以上活動したことと、勝利給、キャプテンとしての仕事分の給料が残っている。国立大学４年間の学費を払いながら、４年間生活できるくらいのお金は十分残っていた。
とりあえず、僕はもうあの家に帰る気はなかった。それに、裁判

所の強制徴収命令が出る日までは、出来る限り家族と顔を合わせたくない。それさえ出てしまえば、あの家族も完全に無力化、鎮静化するだろうけれど、それまでは、僕とあの家族は顔を合わせれば、必ず憎しみの火種が生まれるだろう。

そんなのはもう沢山だった。オランダから帰り、これから夏の大会もある。過密日程で体の疲れもピークだったし、少しでも今は心身ともに、ストレスから解放されたかった。

「悪いな、無理言って」

「別にいいさ。お前の才能を考えたら、ワンルームアパート踏み倒して、こっちに金の迷惑をかけるとは考えにくいし。お前、金に関してはしっかりしてるもんな」

「でも、万一のこともある。せめてアパートの違約金を払えるくらいの金、お前に渡しておこうか」

「はは、そんなのいいから、今日みんな集めて、パーッとやらないか？　ヒラヤマ達も呼んで、お前達の帰国祝いと、祝勝祝いをさ」

「……」

「本当にすげぇよお前ら。俺達はそれに比べりゃちっぽけだけどよ。できたらお前たちと一緒に喜び合いたいんだよ」

――そんなエイジの希望もあって、僕達は夜、再びこの廃倉庫に集まった。

「マイさん、久し振り」

「サクライくん！　久し振り！」

既にユータ、ジュンイチ、マイ、シオリも僕の連絡を受けて、集まっている。シオリはリュートも連れてきてくれた。

「ジュンイチ、お前達は無理に来なくてよかったんだぞ。マイさんと二人きりで水入らずでやっててもよかったのに」

「いいんだよ、サクライくん」

マイが言った。

「私達は、結構オランダに行っている間も、メールとかで連絡取り合ってたし、なんか私も久し振りにみんなといたかったしね」
「……」
「それより、サクライくんこそ、いいの？　大会中、シオリと一度も連絡を取ってなかったんでしょ？」
「て言うか、昨日お前達会ったのかよ」
ジュンイチが訊いた。
「ああ、彼女の家に泊めてもらった」
「は？」「へ？」「え？」
ユータ、ジュンイチ、マイが僕の発言に大きなリアクションを取った。
「ど、どういうこと？」
「ほほう、詳しく聞きたいな」
「何だよケースケ、やりゃできるじゃねぇか」
僕は3人から問い詰められる。
「ケースケ」「ケースケ」
廃倉庫の中には、既にエイジ達の仲間も集まっていて、僕達は子供達に囲まれる。
「ああ、すぐ行くよ」
「おい、ちょっと待てよケースケ！　説明しろって」
シオリの家に泊まった、発言にフラストレーションを残すユータ達を置いて、僕は子供達の手に引かれるまま、倉庫へと入っていく。
「まあいいじゃないか、久し振りに日本に帰って、話すことも、話す時間もたっぷりあるんだ」
倉庫から出てきたエイジが僕に助け舟を出してくれた。
「さ、今日はケースケのおごりだ。とりあえず騒ごうぜ」
そう言って、エイジは僕達を倉庫の中に通す。もう倉庫の中には、エイジの仲間達が勢ぞろいしていて、僕達が中に入ると、拍手が起こった。廃倉庫の高い天井に、音が反響する。
「ケースケ！　試合見てたぞ、すげぇかっこよかった」

「ヒラヤマくんもエンドウくんも、お疲れ様」
僕達を中心に人の輪が出来、ねぎらいの言葉をかけられる。
「ところでケースケ、そういえばお前、中東に行くとか、マスコミが騒いでいたが、その話はどうなったんだよ」
宴の途中で、エイジが僕に訊いた。
「……」
「そうだよ、中東なんて、もったいないじゃないか」
「ケースケ、もっと僕達と一緒にいようよ」
エイジのグループの子供達が、心配そうに僕を見つめる。
「俺達の中には、結構心配してる声も多いんだ。お前のファンが多いからな」
エイジがグループとしての声を代弁する。
「そうそう、今日交渉やってきたんだろ？　どうだったか、俺達にも聞かせろよ」
ユータが言った。
「……」
今ここで、契約がどうなっているかを話すのは、得策ではないけれど。
でも、こいつらなら、まあいいか。
「とりあえず今日の交渉で、色々と契約内容に不備があったんで、法的に認められないそうだ。契約はとりあえず取り消しになったよ」
僕が言うと、倉庫内に、明るい声が響いた。
「何だ、よかった。あのサッカーは、中東でやるのはまだもったいないもんね」
「そうそう、やるならカンプノウでバルサをやっつけるとか、それくらいのサッカーして欲しいもんね」
エイジの仲間達が、互いにほっとしたような顔で言う。
僕はそれを見てから、ユータ達の方を見る。ユータ達もとりあえずはほっとしたような顔をする。シオリだけは事情を知っているだけに、僕に微笑を向けていたが。

「よかったじゃねぇか。一時はどうなるかと思ったぜ」
ジュンイチが言った。
「あとは、僕の家に振り込まれたって言う契約金を返すだけだ。それはちょっと手間取りそうだけど、少なくとも、僕はまだ日本にいるよ。これから夏の大会もあるし、お前達ともうちょっとこうして騒いだりもしたいしな」
そう、それが僕の願いだった。
仲間がいて、恋人がいて――それ以外、何もいらない。
僕はもう、そんなささやかな幸せさえあれば、十分だった。

――次の日、約４０日ぶりに埼玉高校に登校した僕達は、校門前で早速生徒達に囲まれ、手洗い歓迎を受けた。
サッカー部の後輩達がいっせいにやってきて、僕達はされるがままに担ぎ上げられ、胴上げまでされた。校舎には、僕達3人の名前の入った横断幕や垂れ幕が掲げられており、学校中で僕達の帰国を歓迎していた。
「いやはや、すげぇな」
ユータは恥ずかしそうに頭を掻いた。
――その後、全校集会での報告会があった。ジュンイチの撮ったデジカメ写真をスライドで写しながら、オランダでの色々な体験を語り、好評を得た。
「いやぁ、これから１０日間、空き教室使って、俺の撮った写真を展示してくれって、要望があってさ」
ジュンイチの写真は代表選手のオフショットも多く入っていて、生徒達から展示依頼が殺到する騒ぎまで起こった。
「ジュンは世界を回るジャーナリスト希望だもんな、その第一歩ってところか？」
ユータが言った。
「そうかもな。いずれ世界を回りながら、コラムとか書きたいし、

自分で撮った写真とかと一緒に載せられたら、きっと楽しいかもな。大学は行ったら、カメラの勉強も、少ししてみるかな」

ジュンイチは自分の撮った写真が好評だったことで、またひとつ、大学に入ってやりたいことが見つかったようだった。

――そしてその5日後。

エイジが探してくれたアパートに、僕はようやく入居。

川越は、ワンルーム相場が6万円以上と、かなり家賃が高いが、エイジのアパートのように、少し郊外に出ると、4万円以下の物件ばかりになる。

僕はリュートを連れて入居するので、多少の家賃は覚悟していた。最悪の場合、大家に内緒でリュートを連れ込もうと考えていたが、ペットOKで、バス、トイレ別で家賃4万2千円という物件をエイジが見つけてきてくれた。さすがに一人暮らしをしているだけあって、物件選びには一日の長があったようだ。

場所は、埼玉高校まで自転車で20分、駅まで30分という不便さだが、それでも僕にとっては天国だった。

入居日には、ユータの母が車を回してくれて、皿や食器など、使っていないものを少し譲ってもらった。ユータやジュンイチ、シオリやマイも引越しの手伝いに来てくれた。といっても、僕自身の荷物はほとんどなかった。荷物は30分で運び終えてしまい、皆で引越しそばを食べた時間の方が長かったくらいだけれど。

結局僕達はその日も遅くまで語り合い、10時過ぎまで、話が続いた。

皆が帰って、僕はリュートとワンルームに二人取り残されると、リュートの頭を撫で、ベッドとテーブル、テレビしかないまっさらな部屋のフローリングに大の字に寝転がった。

「……」

この部屋に住むのは、半年程度。大学に行けば、僕は東京に住む

つもりだから、短い間のねぐらになることはわかっていた。
だけど――それでも感慨深いものがあった。理想とは少し違ったけれど、ようやく念願の一人暮らしを迎えることが出来たのだから。
もう家族と関わることも、ほとんどなくなる。これからは自分のことは、自分でやって生きていく。ずっと僕の理想としていた生活が始まろうとしている。
それが出来ることが、嬉しいような、不安なような、二律背反した感情が、どうしても僕を高ぶらせた。
その日はなかなか寝付けなかった。

Ｂｒａｎｄ－ｎｅｗ（後書き）

バルサ…スペインのプロサッカーリーグ、リーガエスパニョーラの超名門クラブ、ＦＣバルセロナの略称。２０１１年現在、世界一強いサッカーチームとされる。１００年以上の歴史を持つ。ちなみに、漫画「キャプテン翼」の主人公の翼くんは現在このバルセロナに所属しており、公式入団セレモニーまで行われている。

レギュラーのほとんど全員が母国スペイン人という特徴を持ち、２０１０年のワールドカップのスペイン代表のレギュラーは、ほとんどこのバルセロナのレギュラー選手と同じだった。普段からクラブで連携の呼吸を分かっているため、最近のスペイン代表がめちゃくちゃ強い最大の要因でもある。

カンプノウ…ＦＣバルセロナのホームスタジアム。カンプノウで行われる、バルセロナと、そのライバル、レアルマドリーの試合チケットは、世界中のサッカーファンが憧れるプレミアチケットである。

「え？　じゃあ結局、ボーナスの２０００万、全部返上しちゃったの？」

シオリは僕を見ながら、その大きな目をぱちくりさせる。

「――ああ、契約自体は取り消しの方向で話が進んでいる。これから僕は訴えられて、近いうち、裁判所から債務の強制徴収命令が出される。それで僕の家族の持っている金も、全部回収されて終わりだ」

僕は屋上の手すりに寄りかかる。

「――そっか。じゃあ、あの時の説明は本当だったんだね」

シオリはほっと胸を撫で下ろす。

僕とシオリは、今、埼玉高校の屋上に来ている。まだ時計は7時半を少し過ぎたくらい。

今回の大会の好成績から、僕の人気は今、日本中を駆け巡っている。僕はもう、表ではシオリとまともに外を歩くことも出来なくなってしまった。今ではもう、リュートの散歩にさえ、２人では行けない。こうして屋上という、見晴らしのいい場所でしか、２人でいることがかなわなくなってしまった。

僕はシオリだけには、本当の事情を打ち明けた。ユータ達は家族のことを知らないから、お金を返せば契約は終了、という言葉の意味が正確には捉えきれていない。それを補填した事情は、シオリにしか話せない。

「でも――いいの？　話を聞いている限りだと、多分ご両親は貰った契約金のいくらかは、もう確実に使い込んでいるでしょう？　間違いなく全額は集まらないんじゃない？」

「そうかもね……でも、あいつらにあぶく銭を持たせておくよりはいい」

「……」

屋上に、少し強い風が吹く。シオリの髪が風で少し揺れた。
僕は踵を返してシオリに背を向けて、屋上の手すりの向こうに広がる街並みを眺めた。
「――これからどうするの？　お金を返しきれなかった場合は」
「ん？　そうだな。ＪＦＡに聞いたら、今僕には仕事の依頼が殺到しているらしいんだ。ＣＭとか、広告とか、テレビ出演とか。ＪＦＡが依頼されるのは、日本代表のユニフォームを着た僕の肖像権が絡む仕事だけだから、それ以外の仕事も合わせると、僕はどうやら金を稼ぐには、今事欠かない状態みたいだ。そういう仕事をやりながら、地道に返すのもいいし、Ｊリーグの強化指定選手になって、2、3年サッカーをやって、その報酬で返すのもいいと思ってる。その間、体が大きくなるように、プロのトレーニングも受けてみて、もし体が大きくなったら、1，2年、ヨーロッパのクラブに挑戦するのも悪くないかもしれないと思ってる」
家族は、この金で一生遊んで暮らすと言っていたし、まだそれほど派手な使い方はしていないだろうから、今の段階であれば、それで十分お金が返せると僕は見ていた。下手に違約金などを取られて契約を破棄するより、その方が被害が少ないと読んでいた。
「それか、もしかしたら、大学に行ったら、僕はホストをやってるかもしれないな」
「ホ、ホスト？」
僕の背中に、シオリの素っ頓狂な声が響く。
「実は埼玉高校に届いた僕のファンレターに、ホストクラブの勧誘があってさ。プロに行かずに大学に行く気なら、学生アルバイトでいいからうちで働かないか、って。君なら年間億単位の金も狙えるってさ」
「ふふふ……あはは……」
しかし、僕の背中に、シオリの笑い声がとめどなく浴びせられる。
僕は後ろを振り向くと、シオリは本当におかしそうに笑っている。
「どうしたの？」

「ご、ごめんなさい――で、でも、あなたがホストなんてやるの想像したら、おかしくなっちゃって……」
「……」
「――あなた、お世辞とか、女の子にサービスするとか、女の子にへりくだった態度を取ったりするの、絶対無理だもの。絶対あなたはホストには向いてないよ」
「……」
僕だって初めから、ホストになる気なんてない。女の子の前でへりくだった態度を取ると虫唾が走ってしまう、自分のプライドの高さを自覚しているからだ。シオリのことだから、それでも本気にすると思って言ったのに、この反応だ。きっと同じことをジュンイチに言ったら、もう抱腹絶倒して笑い転げられただろうな。
「――だな」
僕は溜め息をつく。
「でも――いずれにしても、気の長い話だね。お金を返すなんて」
「嫌か？　この先数年間、貧乏になることが確定している男といるのは」
僕は訊いてみるが、シオリはふふ、と笑った。
「うちの家族が言ってたでしょ？　私はお金のかからない女だって」
「……」
シオリは僕の隣に歩み寄り、僕の横に立って、屋上からの景色を眺める。
「いいよ。私も、今はこうして、あなたや、皆と過ごせる時間があれば、それで十分だわ」
「――そうか」
僕は空を見上げた。入道雲が、空の風を遮っているみたいに、でんと居座っている。
「……」
沈黙。
「あの、ケースケくん」

シオリが風に揺れる前髪を、軽く手で直しながら、僕の横顔を覗き込んだ。
「あの――私がお礼を言うことじゃないけれど、どうも、ありがとうね」
「ん？」
「ほら、うちで言ってくれたでしょ？　家族と戦って、また前みたいにぼろぼろになるまで戦い続けるよりも、私やエンドウくん達と、もっと一緒にいたい、そんな未来を大事にしたい、って。私それを聞いて、すごく嬉しかったの」
「あぁ……」
僕は記憶を反芻する。
「僕にとっては今それが、一番の贅沢だからな」
「……」
それを聞いて、シオリは、手すりに置いてある僕の手の上に、自分の手を重ねて、きゅっと軽く握った。
「……」
僕はふう、と息をつく。
「――本当は、君を離したくないんだよ」
僕は口を開く。
「でも――もうしばらくは、ずっとは君の側にいてあげられないんだ」
「うん、わかってる」
シオリはすぐに頷いた。
「これから、高校最後のサッカーの大会――エンドウくん達とサッカーが出来る最後の機会だもんね。そこで最高の結果を出して、一生忘れない絆を作りたい。だから今は、私に甘えたくない――でしょ？」
「――ああ」
僕は返事をしながら、少し驚き、そして少し嬉しかった。やっぱりシオリは僕のことを、ちゃんと見ているのだと思ったから。

「でもさ、それが終わったら、僕が高校ですべきことはとりあえず終わる。それから先は、受験もあるけれど、その中で君ともっと一緒にいれたらいいな、と思うよ。夏祭り行ったり、買い物したり、遊園地に行ったり、美味しいものを食べに行ったり、一緒に勉強したり、予備校行ったり――」

「……」

「――すまん、随分待たせて、帰ってきたばかりなのに、勝手な物言いだな。甘えたくはないと思っていても、実際は君の寛容さに甘えてるんだよな」

「――でも、仕方ないよ。今しかできないことだもの。私は、あなたが私を必要としてくれる限り、どこにも行かないし……一緒にいようと思えば、いつでもいられるもの」

「……」

その言葉が、僕を切なくさせる。

私と結婚しない？　と、前にシオリは僕に言った。少しでも、僕の力になりたいと思って、自分の身を僕に捧げようとした。

それに比べて、僕はそれに応えられるほどのことを、まだ彼女に出来ていないから。

「シオリ」

その思いが、僕を駆り立てる。

「そろそろこうしてこそこそ付き合うのも、やめにしないか？」

「え？」

「彼女がいますって、おおっぴらに公表してもいいか、ってこと」

「……」

「今までそれを言わなかったのは、それによって君や、君の家族の生活に大きな影響を与えるのが忍びなかったからだからな。でも、君のご両親に、交際の許可ももらえたし――もう我慢することもないのかな、って。勿論、君や君の家族にも、少なからず影響のあることだから、家族とも相談した方がいい。すぐ答えることはないけど、もしそれができたら、君ともっと外を出歩きやすくなるしね」

「……」
それを聞いて、シオリは思案にふけるように、屋上から見える空に広がる入道雲を見上げた。
「――なんか、ケースケくん、変わったね」
「え？」
「なんか、私に対しての接し方が……なんか、強引というか、甘いというか――」
「……」
「なんか、私、今のあなたと一緒にいると、変にどきどきしちゃうな……」
「ん？」
「あ、ううん！　何でもない！　何でもないの！　えへへ……」
彼女はあわててかぶりを振り、照れ笑いを浮かべた。
「……」
そんな、彼女の恥らう顔が可愛くて。
僕はそんな彼女の顎に手を当てて、くいっと顔を上げさせた。
「きゃっ」
シオリはまだ照れが収まっていないから、びっくりしたような表情で、目をぱちくりさせる。
「強引な僕は、嫌か？」
僕はシオリの目をじっと見る。
「……」
シオリの顔は、みるみる真っ赤になっていく。既に耳まで赤い。
早朝の屋上で、誰かが来る可能性が低いとはいえ、学校だし、まさかこんな空気になると思っていなかったんだろう。
「――ううん――嫌じゃ、ないけど……」
シオリは僕の視線を受け止めきれず、目を泳がせて、照れの向け場を探していたけれど、精一杯の声を絞り出して、そう言った。
「――大会が終わったら、覚悟しておいた方がいいかもよ」
僕はシオリの顔に、自分の顔を少し近付けて、わざとらしいほど

にこっこりと笑った。
「僕、まだ君の事に関しては、今の気持ちを制御できる自信、ないから」
そう言って、僕はシオリの顎から手を離す。
「――なんてね。あまり会えなくて、スキンシップが足りないと思って、少し君をどきどきさせようと思ったんだけど――どうだった？」
そう、今日はここまででいい。大会が終わるまで、きっとお互いの気持ちを整理する時間は少し必要なんだ。
シオリの家出した、初めてのキス以来、僕とシオリの関係は、随分変わってしまったから。
「……」
シオリはそんな僕の言葉を聞いて、目の奥に感情の坩堝が出来ていった。怒っているようにも、恥ずかしがっているようにも見えるけど、そのどれも違う気がする。何かを一生懸命考えているようで、何も考えていない、何も考えられないのかもしれない。そんな感じ。
そんなシオリは、僕から目を逸らしながら、まだ真っ赤な顔のまま、あわてて自分の前髪を手にやり、髪を直す仕草をした。額に少し汗を掻いたのか、細い前髪が何本か、シオリの小さな額に張り付いている。
「怒るなよ」
僕は苦笑いした。
「――怒ってないよ」
シオリは僕に話しかけられ、もう顔を合わせるのを諦めてしまったのか、僕に背を向け、もう一度、屋上からの景色――夏の広大な空を手すり越しに眺めた。
「……」
沈黙。
「――何だか、受験生にあるまじき発言かもしれないけれど」
シオリはそんな景色を見上げながら、遠い目をした。

「今年の夏は、何だか色んなことがいっぱいありそうな気がする」
「――だな」
僕はシオリの背中に微笑みかけた。
「きっと楽しいことでいっぱいさ」

僕、ユータ、ジュンイチの3人は、帰国してから5日間は、サッカー部の練習に合流せずに、休みを貰っていた。オランダで過密日程を戦い、これから夏の炎天下の下、埼玉県予選から、全国までの長い道のりがある。とにかく今は体を休めろという指示があったというのもあるけれど。

実際その5日間、僕はともかく、ユータ達を待っていたのは、1ヶ月学校に出てこなかった分の、盛りだくさんの補習であった。僕達は5月の終わりに休学届けを出したため、中間テストを受けていない。だから今から中間テストを受けるの。補習はそのための猶予とチャンスを学校が与えてくれたというわけ。

僕は志願により、補習前に、中間テストを受けさせてもらい、平均点98点オーバーを叩き出したため、補習は参加せず、ゆっくりと体を休めることに専念できた。勿論その傍若無人な僕の行いに、僕を嫌う教師達はすごい顔をして僕を睨んでいたが。

そしてその5日間、僕の部屋にはユータ、ジュンイチが入り浸り、初めて僕の部屋で赤点対策勉強会が開かれた。
「おええ……サッカーやってる方がずっと楽だぜ」
ユータはやっとテストから解放されたと思っていただけに、勉強がひどく苦痛のようだった。
「文句言うな。お前はもう試験は俺達とは違うんだからな」
ジュンイチの言うとおり、埼玉高校3年生で唯一就職コースのユータの試験は、学年唯一の特別製になることが決まっている。いわゆる高1でやるような、高校カリキュラムの基礎中の基礎ができていればそれでいい、ということになっている。

だからユータはともかく、ジュンイチは大変そうだ。大阪の合宿からの約1ヵ月半、僕に毎晩数学を見てもらっていたとはいえ、それ以外の勉強はほとんどしていない。ただでさえ試験は受験生仕様になって、難易度も上がっており、範囲も膨大になっているし。

「しかし、ジュンイチ、お前、随分頑張るんだな」

僕はワンルームの、狭く薄暗いキッチンで、湯を沸かしたポットを手に取り、3人分のインスタントコーヒーを入れながら、言った。

「ん？　だってよ、このテストでせめて数学50は取らないと、国立受かるなんて夢の夢だしよ」

「……」

いや、マイの目指す東京外語大だと、50でも話にならないけれど、それは黙っておく。こいつにとって数学で50点を超えるというのは、サッカーで全国大会に出場するのと同じくらい途方もないことなのだ。

僕は3人が勉強するには小さすぎるテーブルに、コーヒーのマグカップを置く。

「――て言うか、今日も泊まっていくのか？」

僕は窓際の壁に寄りかかって座る。隣では、リュートがうつぶせになって僕達の様子を見ている。僕は自分のマグカップに口をつける。インスタントコーヒーだが、眠気覚ましに思い切り濃く入れたから、苦くて美味い。

「自分で言うのも何だが、この面白味もない部屋に、よく入り浸れるな」

僕の部屋は、テーブルとテレビ、学校の教科書や参考書類、それと好きな小説が何冊かが入った小さな本棚と、ベッドしかない。元々僕は貧乏暮らしが長かったし、家には寝に帰るだけだったから、家でやる暇つぶしを何も持っていない。

おまけに僕の部屋のベッドは、僕の身長に合わせてのものだから、身長180センチを超えている二人が寝るには足がはみ出してしまう。布団も同様に小さいし、お世辞にも泊まり心地のいい部屋とは

言えない。昨日も2人はタオルケットに包まって、フローリングで雑魚寝だったし。

「――確かに、何の面白味もないな」

ジュンイチは部屋を見回して、笑った。

「エロ本の一冊もないんだな。漫画である、表紙のすげ替えとか、机の引き出しの二重底とかも警戒したが、一冊も見当たらなかったぜ」

「……」

「ま、少しは大目に見ろよ」

ユータはマグカップのコーヒーに口をつける。砂糖もミルクも入った、甘いコーヒーだ。

「お前、地元の癖に、3年間一度も自分の家に俺達を招待してくれなかったんだしさ。お前ときたら、いつもバイトがあるから呼べない、だったもんな」

「……」

「それにお前、シオリさんを部屋に呼びたくても、パパラッチされるのが怖くて呼べないんだろ？　だから悶々としているんじゃないかと思って、それを慰めるために俺達がお前の寂しさを紛らわせてやろうと思って」

ジュンイチが悪意に満ちた微笑を見せる。

「ま、ここに入り浸るのは、俺達なりの愛だな」

「……」

こんな汚い愛の形を僕は初めて知った。

だが――僕は自分のベッドを見る。

何かの歌の歌詞ではないが、寝返りを打つ度に軋む音のするような、華奢なパイプベッドだ。こんなベッドでＡＶ撮影をしたら、きっとベッドの軋む音が五月蝿くてたまらないだろうと思う。

でも――ここ数日、帰国してからの僕は、確かにこの部屋に帰ると一人悶々としていたのも確かだ。

公然と言うのもどうかと思うが、率直に所憚らずに平たく具体的

に言ってしまえば、僕はあれ以来、シオリを抱きたくて仕方がないのだった。

Ｓｕｍｍｅｒ（後書き）

さて、第２部も終盤に差し掛かろうとしています。
この物語は次の第３部で終了しますが、第２部が終わったら、そのまますぐ第３部に行ってしまった方がいいでしょうか。それとも、別キャラのアナザーストーリーをやった方がいいでしょうか？
ただでさえテンポの悪い作品なので、これ以上間延びさせるのもどうかと思いつつ、ストーリーの補填をした方がいいのかとも思い…
一応用意できるアナザーストーリーは、埼玉高校入学後すぐの、シオリ目線でのケースケへの恋を膨らませていくストーリーと、ジュンイチ目線の、埼玉高校入学後からの３バカトリオの歩みについての話なんですけど…どちらか読みたい話があったら、教えてください。別になくてもいいなら、第２部終了後、第３部にすぐ移りますので。

Believe

喜怒哀楽なんて言葉があるけれど、昔の僕は、人間の心情なんていうのは、そんな4種類で大別できるものかと思っていた。

実際そうだった。僕の感情のほとんどは、怒りや憎しみ――喜怒哀楽の「怒」の感情ばかりで、そんな簡単な感情以外は識別できなかった。

でも、シオリに出会ってから、僕の感情はどんどん複雑になっていく。

シオリと出会って、僕はこの半年で、色々なことを教えられた。それは勿論楽しいことだけではない。苦しいこともあったけれど、その苦しみも、今まで感じていた苦しみとは別の種類のものだった。自分が決して知ることのなかった喜びや悲しみ、楽しみが、彼女との暮らしの中に溢れていた。

まるで誕生日ケーキのろうそくに、一つ一つ火を灯すように、真っ暗だった僕の心に、少しずつ、小さな光が灯っていった。それは時には優しさや勇気となって、僕を奮い立たせてくれた。

そして今は、こうして僕は、彼女を抱いてしまいたいなんて、考えている。

何故そんなことを思うのか、僕にもまだわからない。

別に彼女の恥らう姿だとか、彼女の裸が見たいとか、そういうのともちょっと違うし、僕自身の体の事情というのも、ちょっと違う気がする。まあ、それが全くないとは言えないかも知れない。とにかくその感情がどこから湧いてくるのかは、僕には定義できない。最近僕の感情はどんどん成熟度を増してはいても、まだわからないことが沢山ある。

「――あ……」

一体この気持ちが何なのか、僕は目の前にいる二人に、それとなく聞いてみようとした。

「ん？」
ユータが僕を見る。
「――あ、いや、何でもない」
僕は持っているマグカップに口をつける。
「ふふふ……」
だが、そんな僕を見て、ユータは含み笑いを浮かべる。
「――何だよ、気持ち悪いな」
苦いコーヒーを一息に飲み込んで、僕は溜め息をつく。
「いや、あのケースケが、恋をしてるんだなぁ、と思って」
「は？」
「最近お前、シオリさんの前での顔つきが変わってきたからな。男っぽくなったというか……何というか、男の本能が女を求めてる、そんな顔だな」
「……」
「シオリさんを抱きたいって、顔に書いてあるぜ、最近のお前」
「な……」
僕の顔が紅潮する。
「ははは、ウブな奴だ。ちょっとカマかけただけで赤くなって」
ユータはそんな僕を見て、いきおい破顔する。
「……」
男としてどうかと思うが、基本僕は女性に対して免疫がない。ＡＫＢ４８のヘビーローテーションのＰＶですら卑猥に見えてしまうほどだ。
だから女性を抱くなんて行為は、僕には最も不向きな行為だと思う。それでなくても僕は2年前、何となく付き合っていた彼女を抱いた時、彼女の覚悟を受け止めきれなかった経験がある。彼女を愛する自信が付いたとはいえ、同じ失敗をしたくないと思うと、その一線に関しては、今でも僕は臆病さを隠し持っている。
「――なあ、女の子と、その――そういう関係になるのって、どういうことなんだろう」

僕は顔を上げる。
「は？」
ジュンイチが目を見開く。
「いや――上手く定義付けできなくて」
彼女と抱き合ったり、キスをしたり――特に初めてキスを交わしてから、愛する人と肌が重なり合うことは、決して無意味ではないのだということは、僕も何となく分かりはじめていた。
きっと――彼女を抱きたいと思う気持ちは、その延長線上のものではあると思う。だけど、それはきっと、抱き合ったり、キスをしたりというのとは、また違うことのようにも思える。
初めて女の子を抱いた時、僕はその女の子が、親にも見せないような姿を僕だけに晒してくれたことが、とても印象的だった。その娘の最も美しいところと、最も醜いところが全て詰まったような――そんな姿に、ただただ衝撃を受けた。
シオリも、あの大好きな家族へも見せないような姿を、僕だけに晒すのだろうか――だとすれば、きっとその意味は、そう小さくはないのかも知れない。いずれにせよ、そう思うだけで、まだその場面に相対しておらず、経験の少ない僕には、まだ想像の範囲を出なかった。
「――大体そんなもんじゃねぇの？」
ジュンイチが言った。
「みんなそんな定義とか、深く考えずによろしくやってるんだよ。その最たる標本がここにいらっしゃるじゃねぇか」
ジュンイチはそう言って、ユータを見る。
「――まあそう言うなよ」
ユータは苦笑いを浮かべる。
「しかしお前達はいいねぇ。まだ女の子の体には、男の夢と神秘が詰まっている」
苦笑いを浮かべたまま、ユータは僕とジュンイチをそれぞれ一瞥した。

「――何じゃそりゃ」
ジュンイチが首を傾げる。
「ジュン、お前はもう、マイさんと済ませたんだろ」
ユータはそんなジュンイチに訊いた。
「……」
ジュンイチは、初め少し言い渋っていた。
「――ああ、まあ、な」
だけど、しばらくして、恥ずかしそうに認めた。
「――いつの間に」
「ふふふ、ここ数日、帰国してすぐだろ。何となく様子見て分かったんだよね」
さすがに百戦錬磨のユータだ。こういうことにかけての洞察力は、僕はとてもかなわない。
「この3人の中じゃ、お前が一番女に対する興味を持っていたからな。どうだった？　気持ちよかったか？」
何ともストレートな訊き方だった。
「そりゃ、気持ちよかったさ。まあ」
ジュンイチは今度はすぐ認めた。
「あぁ……やっぱりか」
ユータは溜め息をついた。
「童貞をこじらせた男の悪しき典型かな」
「何だよ！」
馬鹿にされたようなジュンイチを尻目に、ユータは僕を見る。
「快楽はぬくもりの副産物――そう考えた方がいい」
そうユータは僕に告げた。
「……」
押し黙る僕に、ユータはにっこり微笑んだ。
「ま、これからのお前に送る、俺なりの忠告だな」
「……」
「残念ながら俺も、どうやらジュンも、その逆のことをしすぎてき

たみたいだからな。お前はその境地に辿り着いてくれよ。多分シオリさんもそう望んでるはずだぜ」

「……」

快楽は、ぬくもりの副産物、か――

ユータも、それを求めて、高校で沢山の女の子と浮名を流したのかもしれない。そんな境地に二人で辿り着けるような、そんな女の子を、ずっと捜して。

でも――男はいつも、その前にある快楽に心奪われて、本当に大切なぬくもりを、脇に追いやってしまうのだろう。

僕は――どうなのかな。シオリとそうなれたら、きっと僕も快楽に目が行ってしまうのだろうか。

「ま、１０代のセックスなんて、いわゆる若さゆえの過ちって奴だよ。子供が出来る出来ないに関わらずな。快楽に心奪われてしまって、大事なことを見落とす。やりたいって本能がみんな多かれ少なかれあるからな、その本能が、邪魔をするんだな、色々と」

ユータは達観したように語った。

「本能が邪魔をするから、その時までにいっぱい悩んでおいて、それでベッドに入った方がいいんだ。そうやって、自分に自制をかけておいた方がいいのさ」

「――お前は、いつもそうしてたのか？」

僕はユータに訊く。

「まさか。俺の初体験は中学だったし、何も知らないで時を過ごしたことを、今じゃ後悔してる。それゆえに分かったことだな」

「……」

「俺も中学時代、本当に好きな娘がいた。もう3年も会えてないけどな。それを引きずってたのかな。その娘みたいな娘にもう一度出会いたくて、ふらふらしてしまった。結局、俺はそうして、そういう崇高な愛とはかけ離れた場所に行ってしまったってわけだ」

「いわゆる懺悔だな」

ジュンイチは言った。

「そうだな。せめてお前達には同じ過ちは踏ませるまい、っていうところだ」
「……」
ユータの言葉に、考えるところがあったのだろう、僕とジュンイチは、しばらく思案に耽った。
「しかし、なんか変な感じだぜ」
そんな僕を見て、ユータは寂しそうな笑みを浮かべた。
「あの人を人とも思わなかったケースケが、こんなに女の子のために、一途な目が出来るようになって、今じゃ俺達3人の中で、一番真実の愛ってやつに近づいているのかなぁ、と思うとさ」
「……」
「ああ、そりゃわかるな」
ジュンイチも頷いた。
「今まで人間関係があまりに稚拙で、俺達がお前の世話を焼いているつもりだったが、今じゃお前の人との向き合い方が、俺達には想像も付かない境地にいるのかもしれないな、と思うと、何だか嬉しいやら寂しいやら、って感じだ」
「……」
「見た感じ、お前はもう、生涯シオリさん以外愛せない、って心境に辿り着いているみたいだからな。そんな心境に、俺もたどり着いてみたいもんだぜ」
少し羨ましそうに、ユータが言った。
「……」
「ま、その境地に辿り着いた奴に、俺達の快楽主観のセックスの定義なんかしても意味ないよ。だからよ、シオリさんのことに関して、敢えて一言言うんならよ。お前のその気持ちを信じろってことだな」
「……」
「お前のその気持ちは、世界中の誰に出しても恥ずかしくない愛の形であると、俺は思うぜ。だから、その心のままに、突き進めよ。そして、同じように、そうして想い続けるシオリさんのことも信じ

てやりな。多分、今のお前達は、それだけで十分だと思うぜ」

「……」

信じる――か。

そう言えば、僕がシオリに恋に落ちたのも、彼女の言葉を信じたからだった。

彼女の、稚拙だけど、一生懸命に言葉を搾り出して、自分の気持ちを人に伝えようとする姿に心打たれて……

何も信じられないような世界に生きてきた僕も、彼女の言葉だけは信じられる気がしたんだ。

そんな彼女が、僕の喜びも、悲しみさえも、共に寄り添ってくれると言ってくれた。

――あれは、いつのことだったっけ……

――そうだ。彼女と桜を見に行った時、彼女の一番好きな花の、花言葉――

竜胆の花だ。

「……」

ああ、そうか。何故僕が彼女を抱きたいと思ったのか、少し、分かった気がした。

僕も、あの時のシオリと同じ――彼女の喜びも、悲しみも、全部ひっくるめて、寄り添ってあげたいと、強く思ったからだ。

そうして二人、強く、深く寄り添って、これからも生きていく――そんな二人になりたくて――憧れて。

一度でもいいから、そうして強く、お互い寄り添ってみたかったんだ。

あの言葉をくれたシオリから、随分遅れたけれど、やっと僕も、あの時のシオリの気持ちに追いついたんだ。

今思うと、初めからシオリは僕よりずっと大人だったんだな、と思う。

それに比べて、まだ僕は子供で、感情も稚拙だけれど――それでも、この気持ちを信じていれば、そんな稚拙なものを埋めて、二人

繋がりあうことができるだろうか。
「まあ、今はまだ、その話は保留だ」
僕はかぶりを振った。
「お前達とサッカーをやる機会は、もう残り少ないんだ。次の大会、頑張りたいしな」

Ｂｅｌｉｅｖｅ（後書き）

ちなみにケースケが、ＡＫＢ４８のヘビーローテーションのＰＶを卑猥と感じたのは、作者が初めあれを見た時の感想です。だっていきなり下着姿になってたし…最近のアイドルは攻めてるなぁと、感心した作品です。
作者はＡＫＢというと、この曲しか知らないんですが。

Lottery

「お、おい。見ろよ。サクライ・ケースケだぜ」
「あぁ……俺、一回戦で埼玉高校だけは、マジで勘弁して欲しいぜ」
「バカ、埼玉高校は第一シードだよ。出るのは2回戦だって」
「出来れば埼玉高校とは反対のブロックに行きたいなぁ。できれば4回戦以内に当たる場所は引かないでくれよ」
「それってどのくらいの確率だよ？　参加校は１７０校だから、シードも考えると、約8分の1だぜ？　リアルに引きそうな確率じゃねぇかよ」
「俺だって嫌だよ！　フルメンバーで来られたら、ウイイレよりもひどい試合になるぞ」
僕の耳に、そんなそれぞれの内輪の声が届く。
僕は今、イイジマと共に、さいたま市で開かれる夏の高校サッカー県予選の組み合わせ抽選会場に来ている。どうやら普段は市民会館として使われているらしい。大きなホールだった。
今までは主将を務めていたユータが来ていたから、僕がこの抽選会場に来るのは初めてのことだ。別に会場は、部員であれば、主将以外でも入れるから、大所帯で来ているチームもある。そういうチームが僕を見て、そうやって囁き合っているのだった。
何故埼玉高校は僕だけかって？　期末試験で赤点を取らないように、僕以外の連中は今、補習を受けているからだよ。
皆が制服で来る中、埼玉高校は制服がないので、私服というだけでもかなり目立つのに、他校の埼玉高校への警戒心は、そんな目立つ格好などお構いなしに注目を集めていた。
受付でリボン、校名札、到着番号札を貰い、僕とイイジマはリボンを胸に安全ピンで留める。会場の受付を済ませているだけで、もう僕達は注目の的だ。
「いやぁ、いいもんだな。これだけ周りから注目される立場ってい

うのは」
　僕の隣にいるイイジマは、何ともご満悦そうな顔だ。僕は逆に居心地が悪いくらいだけれど。
　今夏の高校サッカー全国大会において、埼玉高校は、過去最高の優勝候補筆頭と噂されていた。勿論県予選などは、ぶっちぎりで突破するだろうと見られている。
　ここ半年、僕達トリオの出た試合は、５０戦以上無敗を誇っており、Ｕ－２０日本代表の最終メンバーが３人いる。おまけにその３人を主力とした代表は、世界第３位という成績を残している。
　これで優勝できない方がおかしい、と思うのが自然だ。今の埼玉高校は、高校レベルなら敵なしだともてはやされ、現在出場校でダントツ一番の高評価を受けていた。
「サクライくん！」
　ホールに入る前に、僕は報道陣に囲まれる。
「ずばり、今大会の目標は、優勝ですよね？」
「帰国してあまり日が経っていませんが、今のコンディションは？」
　ホールの入り口前での報道陣の取材攻勢に、既に会場入りしている高校の関係者は、嫌でもそれを目にする。
　この報道陣も、埼玉高校の予選突破を誰も疑っていないんだ。
　結局僕が取材から解放されたのは、大きなホールに、「振り向くな君は美しい」が流れ、ステージの緞帳が上がり始めた頃だった。
「これより、全国高校サッカー選手権、夏季県予選大会、組み合わせ抽選会を行います」
　何とも長い名目を、司会が流暢に宣言する。
「ではまず、第一シードの抽選を行います。埼玉高校の主将は、校名札、到着番号札を持って、ご登壇ください」
　――おいおい、いきなりだな……
　埼玉県は、神奈川、千葉、大阪、愛知と並ぶ、参加校の多さを誇る。約１７０校が参加するため、１回戦からの参加校が優勝するためには、８試合をこなさなければならない。当然ステージに並べら

れた対戦表も、とんでもなく巨大なものになっている。
そんな巨大な対戦表の前、一人僕が壇上に登ると、ステージの下は、まるで誰もいないかのように静まり返る。
――そこまで固唾を呑んで見守る場面かな。まだ対戦表はまっさらなんだし、どこだって一緒じゃないか。
「埼玉高校、１番」
僕達埼玉高校は、組み合わせ表の一番端に校名札を貼られた。
ステージから降り、自分の席に戻る僕にも、注目の視線が浴びせられる。
「えー、普段はこれから、第２シードの抽選に移るのですが、その前に皆さんに、お知らせがあります」
僕が席に戻った頃、司会が壇上で会場を一瞥しながら言った。
「埼玉高校は、現在高校サッカー連盟に、観戦希望の電話が殺到しています。なので、その要望に少しでも応えるため、埼玉高校の出場する予定の試合は、２回戦からでも、ＮＡＣＫ５スタジアム、駒場スタジアム、埼玉スタジアムのいずれかで行います。どのスタジアムになるかは、試合前に追って連絡いたしますので、どうぞご了承ください」
その発表に、会場中がざわめく。
「はは――マジかよ」
イイジマも、その事態の大きさに、思わず笑みがこぼれた。
司会が言った３つのスタジアムは、どれも埼玉にあるサッカースタジアムの中で、最高級の集客力と設備の整ったスタジアムだ。Ｊリーグの試合も行われるし、中でも埼玉スタジアムは、２００２年の日韓ワールドカップで準決勝の舞台にもなった、国立競技場に順ずる評価を持つ巨大なスタジアムだ。普通県予選の準決勝以降か、全国大会の試合でもなければ、とてもピッチに立つことはできない場所だ。
そんなスタジアムで、初戦から試合が出来るなんて、この上ない贅沢――この上ない特別待遇だ。

確かに、県予選初戦クラスのスタジアムでは、集客はよくて2千人といったところ。それが、約2万人弱を集客できるスタジアムを気前よく開放するということは、それだけ高校サッカー連盟の電話が連日鳴りっぱなしだったということ。

つまりそれは、僕達の人気と評価が、並大抵のものではないということを意味していた。

「お、おい、いきなり埼スタで試合できるんだってよ」

「バカ、だからって埼玉高校をそんなところで相手にしてどうすんだ！　沢山の人の前で、フルボッコにやられる。余計惨めな思いをするだけじゃねぇか。完全アウェーだぞ」

「そうそう、それにそんな観客の前で、サクライやヒラヤマに怪我でもさせてみろ。マジで殺されっぞ」

「それでも埼スタで試合できるなんて、思い出になるじゃんよ」

その発表は、会場中の他校を動揺させるのに十分な効果があったようだ。僕の席の周りの高校が、またにわかにざわめき始める。

「……」

別に僕はもう、対戦相手はどこでもよかった。ここにいるチームの8割以上はデータがない。残りの2割のほとんどはシードに割り振られ、僕達とは離れているし、当面はどこが来てもあまり変わらない。

だから、早々に抽選を終えた僕は、残り１７０校の抽選を、まるで森林の木々を見比べるような、漠然とした視点で見ていた。

僕達の抽選番号は１番。つまり、２～２０番は、早い段階で僕達と当たる番号。２～９番は、最も危険な番号と、他校は認識した。

シードが終わると、残りの抽選は、到着番号ごとに１０校ずつ壇上に登り、くじを引く形式になったが、２～２０番を引いた高校には、会場にいる他校の選手がその主将に拍手をし、拍手の中に、沢山のため息が溢れた。２～９番なんて引いた日には、ほとんどの高校が、その高校の主将にスタンディングオベーションした。とにかくそんな異様な雰囲気だった。

「ははは」

イイジマは、そうしてどこまでも僕達にへりくだる会場の他校を見て、早くも溜飲を下げている。

「……」

中国の三国時代、蜀の軍神関羽は、三国の要地荊州にて、魏の名将曹仁と、呉の名将呂蒙の二人と相対していた。そんな中呂蒙は病気を偽って、荊州攻めを、当時無名の、後の呉の大都督陸遜に任せた。陸遜は関羽の武勇を恐れ、必要以上にへりくだった態度を取ったことで、関羽は油断し、呉に対する警戒を解き、魏への侵攻に専念し始めた。呂蒙と陸遜はがら空きとなった関羽の背後を突いて荊州を奪い、関羽を打ち取った。

そんな故事を、イイジマの嬉しそうな表情を見て、ふと思い出す。完全に相手をなめて、油断した表情というのは、こんな顔だろう。きっと関羽も陸遜の使者と相対した時、こんな顔をしていたと思う。

「……」

だが――それは僕も同じ。

はっきり言って僕も、この予選で僕達埼玉高校が負けるなんてことはありえないと思っていた。もはや高校レベルで、ユータを止められるディフェンダーは存在しないし、ジュンイチを突破できる攻撃陣もそうはいないだろう。それに僕の先読みと運動量、パスが加わる。これで負けたら僕は無能だ。

正直負ける心配などは、微塵もしていない。

だが……

これだけ僕達と当たるのを嫌がるチームがいる。きっと僕達と当たることで、既に戦意を喪失するチームもあるかもしれない。

そういうチームにどう戦うか。攻撃の手を緩めず大差で勝っても、相手にとって惨い試合になるし、かと言って途中で手を抜いても、高校生らしくないと批判を受けるだろう。観客が沢山いるなら尚更だ。僕達3人が出ない手もあるが、あからさまに主力を温存するのでは、相手に対しての礼を欠く。

織田信長は、初戦の相手を皆殺しにすることで、残りの相手を戦わずして降伏させたという。結局それが無駄な殺しをしないで済む最良の方法であると考えたからだ。兵法も古来より、戦わずして、無駄な血や出費をせずに勝つことが理想だと伝えてきている。

僕も出来れば、力の差が開きすぎている相手を鞭打つような試合はしたくない。相手が僕達の力に恐れをなして棄権してくれればいいが、スポーツとなるとそうはいかない。学生スポーツでは棄権などありえないし、試合が始まったら最後、手を抜くことも許されない。

イイジマは笑っているが、この予選は、ある程度の実力者が揃う全国大会より、もっと厳しい戦いだ。

きっと――惨い戦いになる。そんな気がした。

Ｌｏｔｔｅｒｙ（後書き）

この作品を以前別サイトに載せた頃は、高校生がヨーロッパのビッグクラブに移籍するなんてことは夢物語だと思われていました。

ですが南アフリカのワールドカップが終わってから、日本人はどんどん海外進出するし、長友選手はインテルなんてビッグクラブに移籍するし、宮市選手は高校生で、この作品にもチラッと名前のでたフェイエノールトでバンバン試合に出ているし、劇的に日本サッカーが進化してますよね。

だからこの作品、高校生のケースケもいきなりヨーロッパのビッグクラブに移籍なんて、以前なら、夢物語、ありえないというような話だったのが、それが夢とは言いきれない時代になってきていますし。

この話が掲載されるのが、２年前と今では、ケースケをすごいと思える度合いもちょっと違ったかもしれませんね。

抽選会が終わると、僕は埼玉高校に戻り、そのままサッカー部の練習に合流した。

帰国して初めて、僕はサッカー部の全体練習に合流する。その噂を知ってか知らずか、今日も埼玉高校のサッカーグラウンドの前は、沢山のファンが警備員に押しとどめられていた。

学校に帰ると、皆はもうアップを終えてしまった頃――僕は部室で一人着替え、皆より３０分遅れて練習に合流した。

僕がグラウンドに姿を表すだけで、ファンは大騒ぎだ。これじゃよっぽど大きな声を出さないと、グラウンドで出す声はかき消されてしまう。

「集合だ！」

イイジマが号令をかけ、皆はベンチへと集まる。

既にユータ、ジュンイチも練習に参加している。二人とも取り合えず今日、中間テスト分のテストを受けた。すぐ１週間後に期末テストがあるのだけれど。

「皆、久し振りだな」

僕はチームメイトに挨拶する。帰国して、練習には参加していないものの、顔見せくらいはしていたのだけれど、今日から練習参加ということで、改めて挨拶する。

「ケースケ、初戦の相手はどこだ？」

ジュンイチが興味津々そうだ。後輩達も、首を伸ばす。

「――ああ、初戦は加須高校か、朝霞学院の勝者とだ。去年の冬、決勝で当たった武栄高校とは反対のブロックだ」

おぉ、という反応。

「それと、僕達の試合は全試合、ＮＡＣＫ５スタジアム、駒場スタジアム、埼玉スタジアムのどれかで行われることになった。どうやら観戦希望が多くて、収容しきれない可能性があるからだと」

「マジかよ！」
ジュンイチが声を上げる。他の部員、特に一年生は、高校サッカーの初陣だ。初戦からそんな豪華な設備での試合に、目を輝かせる。
「それだけ僕達に、沢山の人の期待と注目が集まっているというわけだ」
円の中央にいる僕は、顔を上げる。
「こういう手前味噌な物言いは好きじゃないが、このチームは強いよ。はっきり言って、全国制覇に最も近いチームだろう。だが、それは学生のクラブ活動としては、大した意味は持たないと、僕は思う」
僕は後輩の方に目を向ける。
「こうしてお前達と会うのも一ヶ月以上ぶりだが、お前達は僕を今、どう思っている？　肝心な時に長い間部活を空けて、戻ってきて早々キャプテン面されて、気に入らないか？　世界大会でベストイレブンになった僕や、得点王になったユータがいれば、このチームは普通に勝てるなんて思っていないか？」
「……」
「そう思う奴がチームにいる中、僕やユータが無双して勝ち得た全国制覇は、お前達に何をもたらす？」
そう、それが僕はずっと引っかかっているんだ。
このチームは、春にユータがプロとなり、プロと普通の高校生の混成軍となった。世間の注目も高く、沢山のギャラリーが連日詰め掛け、プロと高校生が比べられてしまう環境にあった。他の部員は、惨めな思いを抱える者もいたはずだ。
その風潮を、今回の世界大会での成績は一気に加速させたはずだ。沢山のギャラリーが集まっても、注目されているのは僕達3人だけで、あとはおまけのような扱いを受けるのでは、後輩達のモチベーションが上がらないのも無理はなかった。
「僕達がオランダでやってきた大会は、勝つことが最優先の試合だった。だけどこの大会は違う。負けてもお前達の人生に、少しでも

プラスになるものを得られる方が、全国制覇よりもずっと価値がある。勿論勝つこともそれなりに大事なことだけど、僕達3年生は取り合えずこの大会で引退だ。後輩のお前達に、何か今後の伸びしろとなるものを残したいと思ってる。お前達は初戦からでかいスタジアムに沢山のギャラリーが詰め掛けても、自分のことは誰も見てないから、少しくらい手を抜いても、僕達がフォローしてくれると思ってしまうかもしれないが、僕達チームメイトはそれを皆見てるぞ。自分のプレーに何も意味がないなんて考えるなよ」

「……」

そう言ってから、僕はにこりと笑って、神妙な顔で黙り込む後輩の緊張を和らげた。

「ま、砕けた言い方すれば、お前達、少しはノッてくれ、ってこと。僕もこれに気付いたのは、今年の正月だから、偉そうなこと言えないけどさ、でかい舞台で、仲間がいて、思い切り走って、最高の結果出せたら、すごく楽しいんだ。だから、もし全国制覇を目指すんであれば、お前達にもそういうの、味わって欲しい。それに僕は帰国から少しは調整やってきたからいいけど、ユータとジュンイチはずっと勉強漬けで、期末試験も苦戦するだろうし、大会開幕あたりは明らかに調整不足だ。大会が4回戦くらい進むまで、僕達3人は疲れも考慮されて、全試合フル出場はしないと思う。だからお前達の力が必要な時は必ず来る。これでも僕、皆に期待してるんだぜ。それに応えてくれるなら、バンバン皆にいいパス出しちゃうぜ。どうだ？　この大会、お前達も頑張ってくれるか？」

「はい！」

後輩達は引き締まった顔で返事をした。

「よし、じゃあ気持ちも改まったところで、練習再開しますか！」

そして一週間後、埼玉県予選がスタート。

初戦はＮＡＣＫ５スタジアムに、１万５千人が詰めかけた。これ

はＪリーグの公式戦並みか、それ以上の観客数だ。ほぼ全員が僕達のサポーターだった。

すごい……ユータはともかく、僕とジュンイチは、高校の試合以外でサッカーを見れる機会がないからな。

初戦はユータ、ジュンイチがベンチスタート。埼玉高校は、しばらく僕達３人のうち、一人か二人はベンチに置いて試合を始める。万一選手が怪我した時のこともあるし、交代枠をいくつか残すためだ。

僕はこの予選、基本的にユータを消耗させないようにと考えていた。ユータには、このチームの他に、浦和レッズでの試合もある。オランダの大会で、世界の強豪相手に得点王争いしたユータを、プロの監督は早速自分のチームで使ってみたいと考えるはずだ。ユータはそのチャンスを生かせば、プロでのレギュラーをぐっと近づけることになる。今はそれに専念させてやるために、下手に試合に出すよりも、きっちり調整して、ベストコンディションにして、プロの試合に臨ませてやりたかった。

「お前は予選は出なくてもいい。出ても、沢山集まってくれた観客のためのファンサービスと、相手への礼儀だな。後半残り１５分くらいでいい。それでもちゃんと予選は突破してやる。お前の夏を終わらせたりしないから、僕を信じろ」

ユータ自身はプロの試合も高校最後の試合も、どちらも出たいとはじめ言っていたけれど、そう言って言いくるめたら、納得してくれた。どうやらユータは本当に僕を信頼してくれているみたいだ。それが改めて嬉しかった。

グラウンドの脇で、一人リフティングでボールの感触を確かめる僕。オランダの大会の時のボールは、ジャブラニのような特別製だったから、感触とか、フリーキックの曲がり具合も相当違うのだ。この一週間、そのボールの感触の違いを元に戻すのにちょっと苦しんだ。しばらくはフリーキックの精度が落ちているかもしれない。

「サクライくーん！」「こっち向いてー！」「勝ってねー！」

女の子の声援がさっきからずっと僕に飛んでいる。遠くからでもカメラの音が聞こえる。

さっきから観客の一部は、僕が動けばそれに合わせてスタンドを移動している。ゴルフじゃあるまいし、サッカーでこんな現象が起こるなんて。

はぁ……いっそ言ってしまいたいな。僕には大好きな彼女がいる、って。

僕はユニフォームの短パンから、お守りを取り出す。オランダの大会の時のままでいいと僕は言ったんだけど、もう泥だらけだからって、シオリが新しいフェルトのお守りと、ミサンガを作ってくれた。

それを握り締めながら、僕は埼玉高校のゴール裏――生徒が集まる観客席に目をやる。

僕のいるベンチから、４～５０メートルほど距離があるけれど、シオリ達は吹奏楽部で応援に来ているから、最前列だ。楽器も持っているし、よく目立つ。

観客席でフルートを華奢な手に持って、吹奏学部の顧問の女教師、タカヤマ先生の指示で音を出しながら、チューニングをしている。

フルートから口を離すと、僕が見ているのに気が付いたのか、シオリは僕に小さく手を振った。

「……」

一週間前、後輩達に、サッカーの楽しさを味わって欲しい、と言ったのは、部員を奮い立たせる建前じゃない。僕の本音だ。

サッカー初めて2年、全く志なくサッカーをやってきた僕が、周りにいる仲間、本気で守りたいと思うものの存在に力をもらえるようになって、本当にサッカーが楽しくなった。もっと早く気付いていれば、と思う。無益な2年間よりも、今年の正月からの半年は、ずっと密度の濃い時間だった。

この大会も、そうなればいい……

予選の埼玉高校は、初戦から相手を１３－０というスコアで破ると、それ以降も異次元の強さを発揮した。

僕とジュンイチは日替わりで先発メンバーから外れたけれど、それに他の部員も奮起した。ジュンイチがチームを盛り上げてくれたのも大きい。あいつの気さくさは、代表とか、そういうものを忘れさせてくれる効果がある。

僕達は当然の如く決勝まで進み、去年の冬、僕達と全国大会行きの切符を賭けて戦った武栄高校を、フルメンバー先発で８－１で下した。

埼玉高校は、終わってみれば７試合で５４得点という驚異的なスコアで勝ち進み、僕はその中で１７ゴールを決め、当然の如く埼玉県予選の過去最高記録での大会得点王を手にした。準決勝以前はほとんど出場機会のなかったユータも、何だかんだできっちり１０得点していた。だが、今までチーム得点の８割を僕とユータで叩き出していたのに、今大会は、半分の２７ゴールを、他の部員が決めてくれた。僕は自分の得点王よりも、その方が嬉しかった。

――「じゃあ、カンパーイ！」

そして全国大会出場を決めた夜、僕達は部内の簡単な祝賀会に参加した後、エイジ達の根城であるあの廃倉庫に集まって、夜遅くまで騒ぎ続けた。

この予選の期間、ユータは埼玉高校の試合にほとんど出ていないが、その間に浦和レッズの試合が３試合（公式戦２試合、ナビスコカップ１試合）あった。その中でユータは３戦３ゴールと結果も残し、監督からも今後は先発起用すると、直々に言われたそうだ。

エイジ達も、今続けているボランティア活動も、色んな媒体に宣伝されて、今では数百人規模の団体になっているらしい。来月８月に、エイジ達の仲間の数人が、リーダーのエイジに続こうと、高卒認定試験を受けるし、皆それぞれ頑張っている。

だから、今日は色々なお祝いと、色々な壮行を兼ねた、雑多な会

だったけれど、皆はそれでも大笑いした。名目なんてどうでもよくて、今の僕達の周りには、めでたいことがどんどん続いている。

「俺達マジ強ぇー！」

ジュンイチの雄叫びに、皆の笑いが廃倉庫に響く。

「……」

僕はそれを脇で眺めながら、とても幸せな気分に浸っていた。オランダから帰って、僕は勉強もあるユータとジュンイチの負担を減らそうと、炎天下の中、ほとんど全試合フル出場だったけれど、その疲れも吹っ飛びそうだった。

そこで僕の携帯が鳴った。中は騒がしいから、僕は倉庫の外へ一度出て、受話器を耳に当てる。

「はい――あ、そうですか。わざわざありがとうございます。はい」

僕は要件を聞いて、電話を切る。

「誰から？」

後ろから声をかけられる。振り向くと、シオリが倉庫の外に出て、待っていた。シオリの白い肌も、連日サッカー部の応援に来ていたから、日焼け止めを塗ってはいるのだろうけれど、腕とかは日に焼けて黒くなっている。

どうやら宴の途中で抜けた僕を見て、心配になったのか、追いかけてきたらしい。

「ん？　弁護士だよ」

「弁護士？」

「ああ、今日、ようやく裁判所が、僕に対しての債務強制徴収命令を受理したらしい。その報告」

「――そっか」

シオリは空を見上げる。

「これであなたの悩みが、ひとつ片付くんだね」

そう、この命令が受理され、執行されれば、あの家族の隠し持つ金は没収される。中東へ行くこともなくなるし、改めて僕はまっさらな状態に戻ることが出来るわけだ。

別に僕もいくらかお金を返すことに鳴るだろうし、完全にまっさらというわけにはいかないけれど、何だか肩の荷がひとつ下りたようだった。そのお金さえ返してしまえば、僕はもう、あの家族からも完全に自由だ。そう思うと、何だかほっとする。

「――幸せだね」

ふと、シオリは言った。

「え？」

「こうして、皆で集まって、誰かの喜びを、皆で分け合って――すごく、満ち足りた気持ちになる」

「ああ」

「ずっと――ずっとこうして、皆でいられたらいいね」

「……」

沈黙。

「なーに二人でいちゃついてんだよ！」

いきなり僕はジュンイチに後ろからヘッドロックをかけられる。

「ケースケ、お前、何か一曲やってくれよ！　景気づけにさ」

ユータも倉庫の外に出てきて、言う。

「――ああ、いいよ」

そう言って、僕は廃倉庫に置いてあるエレキギターを持って、アンプに繋ぎ、倉庫の一番奥で、ギターをかき鳴らす。

「みんな、ケースケが歌うぞ！　みんなも歌え！　騒げぇ！」

エイジが皆を盛り上げる。

飲み込んで吐き出すだけの　単純作業繰り返す
自動販売機みたいに　この街にボーっと突っ立って
そこにあることで誰かが、特別喜ぶでもない
でも僕が放つ明かりで　君の足元を照らしてみせるよ
きっと……きっと……

誰が指図するでもなく　僕らはどこへでも行ける

そうどんな世界の果てへも　気ままに旅して廻って
暗闇に包まれた時　何度も言い聞かせてみる
今僕が放つ明かりで　君の足元を照らすよ
何にも縛られちゃいない　だけど僕ら繋がっている
どんな世界の果てへも　この確かな想いを連れて

シオリも、ユータも、ジュンイチも、マイも、エイジも、その外の皆も笑っている。
皆、幸せになれる。
そんな気がした。
僕は――皆を照らす光になれたのかな。
シオリが僕を照らしてくれたように。
まだまだ僕は、力が足りないけれど、こいつらの足元を照らす光になりたい。
それを強く願いながら、僕は連日の試合で声を出しすぎて、少ししゃがれ気味の声を張り上げ、歌を歌った。

もう7月の半ばを過ぎ、明後日には終業式を迎えようとしていた。
もうこの時、僕の足元は、照らされるどころか、既に暗闇に向かって崩れかけていたんだ。
終業式の日――その日が、僕とシオリの、長い別れの日となるなんて……

Ｌｉｇｈｔ（後書き）

作者は一応東京六大学出身なんですが、現日ハムの斉藤祐樹投手が早稲田に進学して、１年生の時に斉藤投手が登板する試合に神宮球場に行ったんですが、その時は本当にスタンドの一部の観客が、斉藤投手がブルペンに移動したり、外野でキャッチボールしたりする時にスタンドのファンがぞろぞろ移動してたんですよね。だからケースケの動きに合わせて、観客も動くというのは、その時のことを参考にしました。

作中に出てくる歌詞はＭｒ．ｃｈｉｌｄｒｅｎの「Ｗｏｒｌｄ'ｓ　ｅｎｄ」という曲です。アルバム収録曲で、シングルじゃないんで、あまりメジャーじゃないのか？一応ＰＶがあるんですけど。一応、ケースケはそこらにある自動販売機のように、誰かを特別喜ばせる存在じゃなかった、無価値とも思える自分だったけれど、誰かのことを照らす光になりたい、っていう気持ちに辿り着いたということで、その心情に一番近しいと思うこの曲をチョイスしてみました。

さて、ここで皆さんに警告です。この後数話すると、恐らくものすごく残酷な描写が出てしまうかもしれませんので、ご注意ください。その時の話は前もって前書きで警告を出しますが…

Ｌａｓｔ－ｄａｙ

終業式の日――その日は埼玉高校では、期末テストの結果が返ってくる日だ。そこで赤点がひとつもなかった生徒はそのまま夏休み、赤点があれば明日から補習――そんな明暗がくっきり分かれる日でもある。

「お、今回は同点か」

今日は朝一番から、国立文系クラスの成績発表が、進路指導室前の掲示板に張り出されている。僕は登校して、下駄箱で待ち合わせていたシオリと掲示板を見に行くと、僕はシオリと同点で学年トップを堅守していた。

「お、じゃないよ。私、今回はあなたのお尻に火を点けようと、勝つつもりでやったのに」

帰国してからというもの、中間テスト分の補習を受けずに実力テストを受け、東大合格クラスの点数を叩き出して以来、僕は体に残る疲れも手伝って、非情に怠惰な学校生活を過ごしていた。シオリはどうやらそんな僕に天誅を下すべく、僕を負かせてやろうと考えていたようだった。

「あれだけサッカーやってて、勉強も少しは遅れたはずなのに……」

「そうでもないさ。オランダでちゃんと勉強はしてたよ。あいつらに付き合ってさ」

そう言って僕達は教室に戻る。

「わはははは！」

なんとも景気のいい笑い声が、廊下からも聞こえていた。

「あ、ケースケ！　見ろよこれ！」

ジュンイチが僕に駆け寄り、手に持っていたＡ４の用紙を僕に見せてきた。

それは数学のテストで、性格同様大雑把に書かれたジュンイチの名前の横には、赤ペンで６８と書かれていた。

「へぇ……」
僕は自分の机に鞄を置く。
「どうだ？　お前の突きつけた最低ノルマの５０点を大幅更新だぜ！」
ジュンイチは自分がこんな点数を取れたことが、まだ信じられないようだったが、とにかく嬉しそうだ。
「――ま、これくらいやってもらわないとな。オランダで一ヶ月みっちりお前を特訓した意味がない」
「何だよぉケースケ、俺が数学で７０点近く取るなんて奇跡だぜ？　冷たいなぁ」
「くっつくなよ、暑苦しい」
県立高校の教室にはクーラーがない。まだ朝の8時を回ったばかりだというのに、既に教室は不快指数７０を越えるほどに蒸し暑い。窓が全開に開け放ってはいても、風は生温くて気持ち悪い。
「ま、いずれにせよ、俺もジュンも高校入って初の赤点ゼロだ」
ユータが感慨深そうに言った。
「高校3年目で初かよ……初めて普通に夏休みを迎えるってことか」
赤点なんて取ると、その分休みが減る。何でこいつら、そんな非効率なことをずっとやり続けてこれたのだろう。
「で？　サクライくんとシオリは、今回は仲良く同点首位だったのよね」
マイが僕達を見て、仲睦まじいのを祝福するように微笑む。
「だけどサクライくんって、すごいわね。オランダから帰って、すぐ日本の大会に出て、疲れてただろうに……」
「ケースケは、勉強もサッカーもすごいが、それ以上に、コンディションでの好不調の波が小さいんだよな。いつも平均以上のパフォーマンスが出来る――俺も見習いたいもんだぜ」
ユータが言う。アスリートからすれば、好不調の波が少ないというのは、地味な部分だが究極奥義だろう。その意味を知っている故の言葉だ。

「まあいいや。取り合えず無事皆、夏休みを迎えられるということで、俺からひとつ、提案があるんだ」
そう言ってユータは、自分の鞄から雑誌を取り出し、「ジャーン！」という自我擬音と共に、雑誌のページを開いて、僕達に見せた。
その雑誌のグラビアには、青い空、白い雲、きらめく砂浜に水平線、眩しい太陽、ビキニ姿のおねーちゃん――海の写真が掲載されていた。
「俺達の大会が終わったらさ、ここにいる5人で海に行かないか？」
ユータが提案する。
「埼玉だと海がないから、一泊くらい泊まりでさ」
「いいねぇ」
ジュンイチはすぐ賛同する。
「お前達も受験生なのは分かるけど、夏に少しくらい外に出る時間くらいあるだろ？」
ユータはそう言いながら、僕の方を見る。
そんなことを言っているけれど、ユータがわざわざこんなことを提案したのは、きっと僕のためだろう。
シオリを抱きたくて仕方がないという僕の心を見抜いているから、これを機に、シオリを抱いてしまえ、ということ。恋愛に対してヘタレの僕に、センタリングを上げてくれたんだ。
「そうだな――お金が出来たから、そういうのも悪くないかな」
そう言ってから、僕はシオリの方を見る。
「――君は、どうかな？」
「――お金ができたら、行きたいな、ケースケくんと」
「ヒューヒュー」
ジュンイチが高い声を出す。しかしそれ、今時の高校生のリアクションか？
「はは、今ケースケ、シオリさんのギリギリチョップな水着姿に思いを馳せただろ？」
ユータがにやけながら僕を見る。

「な？」「え？」
僕とシオリ、同時に声が出る。
「わぁ、やっぱりサクライくんも、シオリの水着姿、見たいんだ。ワンピとビキニ、どっちが好きなの？」
マイまで僕をからかいに来て、僕は途端に恥ずかしくなる。
シオリの水着姿――体細くて小さいけど、シオリも出るところはそれなりに出てるからな……多分Cカップくらいあるのかな。
シオリって、夏でも肌を露出した服をあまり着ないからな……ビキニなんか着たら、どんな感じなんだろう……
「わ、私ビキニとか、無理だよ。幼児体型だし、体小さいし……」
シオリも真っ赤になって、頭を振る。
「えぇ、でもケースケはきっとシオリさんの水着姿、見たいと思うぜ」
ユータの笑みが更にいやらしさを増す。
「な？　ケースケ？」
そしてその笑みを浮かべたまま、僕を見る。その横ではジュンイチが、僕が何と言うのか、期待するような好奇の視線を送っている。
「――そりゃ、見たいよ……」
僕はもう、正直に白状した。変に否定して、シオリのスタイルまで否定するようなことはしたくなかった。
「そりゃ見たいさ、シオリの水着姿……」
「わはははは！」
羞恥的なことを言わされる僕を見て、ジュンイチは大笑いする。
――この野郎。
「じゃ、決まりだな。シオリさんもマイさんも、とっておきの水着を用意してくるといい。二人とも魅力的だから、ナンパもたくさんされちゃうかも知れないけど、そこは二人のナイト様がお守りするってさ」
ユータは女の子だけに見せる、物腰柔らかい笑顔を見せる。
「言っておくが、４人とも俺を差し置いて、夏期講習代わりの勉強

会にしちゃだめだぜ。遊ぶ時はきっちり遊ばないと、冬場持たないからな」

「……」

こうしてユータが念を押すということは、やっぱり、夜は二人きりの時間を過ごせ、ということなのだ。

しかし、どうしよう。夜の海を散歩して、花火でもして――僕は彼女の手を引いて、旅館の二人部屋へ。そこに行くと、二人分の布団がぴったりくっついて敷いてあって。

部屋で二人きり――僕もシオリもそんなに話は上手い方じゃないし、お喋りで引き延ばせる時間は、多分1時間が限界。ふと沈黙がやってきたら……

でも、そこから先、距離を縮めるには、どうしたらいいんだろう――そうだ、電気を消そう。電気を消せば……でも、その先は？

そんなことを考えている時間は、僕の人生の中で、とても幸せな時間の一部だったと思う。

空っぽの心を持った僕が、もうすぐシオリのぬくもりを、一番近いところで感じることが出来るまでのところまで来ている。

誕生日ケーキのろうそくに、一つ一つ火を灯すような小さな幸せが、ようやく形になろうとする時が、もう手の届く位置にまで来ている。

そう。そのはずだったのに……

突然勢いよく扉が開いて、教室にいる誰もが、雑談を中断し、その音の方に目を向けた。

担任のスズキが、のっそりと教室に入ってきた。

まだ朝のＨＲまでには十分以上ある。いつだって時間より早く来たことのない、このさえない男が、何故？

怒られたり、没収されたりすることはないけれど、とりあえず皆、社交辞令として、持ってきていた、校則違反の携帯電話などを、机に押し込んだ。スズキは、戸口に立って、きょろきょろと教室内を見回していたが、僕と目が合うと、ニワトリみたいに動かしていた

首の動きを止めた。
「サクライ――」
担任のスズキの青ざめた顔が、いつにも増して、鮮明に写っている。
「さっきご両親が、退学届を学校へ・・・・・・」

Atrocity

「は？　ケースケが退学？」
ジュンイチは首を傾げた。
「ありえないでしょ。全国大会直前だってのに」
ユータもスズキのつまらない冗談だと信じて疑わない顔だ。
「……」
「――ケースケ？」
だが、黙りこくる僕を見て、二人は少し空気に違和感を感じたようだ。
「家族はまだ、学校に？」
僕はスズキに訊いた。
「あ、ああ――今校長室にいる」
「そうですか。じゃあ、無視して構いませんよ」
僕は一笑に付した。
「え……」
「僕に退学の意志はないし、もう学費も今年分全額納めてるし」
「いや、しかしちょっとお前の家族、尋常じゃない雰囲気だぞ。それだけで済む話じゃ……」
スズキはそれだけ言い終わると、ひっ、と息を漏らした。小柄で小太りの体が、後ろから来た、ニコチンで染色したようなどす黒い肌の大男が、ヤツデみたいな大きな手でスズキの体をドアから押しのけて入ってくる。怯える子羊のようなスズキは、まるで世紀末救世主でも待つかのような目で僕を見た。
男――親父はくたびれたポロシャツ姿で入ってくる。自営業とは言え、せめてスーツくらい着てこいよ、と思う。親父の後ろから、化粧を施した、小奇麗な格好の母親も入ってくる。中学時代、ブルジョワな学校に通っていたため、恥を掻かないようにブランドで固めることを覚えている分、幾分マシな格好だ。しかし、その服も僕

の虎の威を駆って、サッカークラブから寄贈（ていうか詐取）されたものだと思うと吐き気がする。

「……」

顔を合わせるのは、多分２０日ぶりくらいだろうか。帰国した翌日から、僕はもうこいつらとは会っていない。２０日前にみた時は、なんとも左団扇で景気のいい顔をしていたが、それに比べると、幾分憔悴した表情だ。どうにも穏やかな物腰を装ってはいるが、目にはぎらぎらした殺気が篭っている。

教室のクラスメイトも、しんと静まり返る。見ず知らずの大男が教室に乱入したら、そりゃ皆黙るだろうけれど、きっとそれだけじゃない。早くも皆、この二人の持つ異常な雰囲気に気付いたのだ。

「――何のつもりだ」

まず僕は、様子を見る。しかしこの答えに大した意味はない。こいつらがバカ面で答えている間に、どう対処するかを考える時間稼ぎ。

そう訊くと、まず母親がその化粧で飾った顔をにっこりと綻ばせた。

「さあ、ケーちゃん、もうお友達とお別れは済んだでしょう？　言ったじゃない。来月には埼玉高校を退学して、中東に行くって」

「……」

「ま、ケースケ、お前の気持ちも分かるよ？　全国大会直前の退学――きっとチームメイトや後輩に顔が立たないだろうと思って、俺達が矢面にたって誤ってやろうと思ってな」

親父も強面の顔に笑顔を作る。

「――その気持ちの悪い喋り方をやめろ」

僕は二人をきっと睨んだ。

「お前達が僕を名前で呼んだことなんて、もう１０年以上ないだろう」

それを言った時、ユータ、ジュンイチ、マイ――クラスにいたほとんどの級友が僕の顔を見た。

僕の家族は、僕が有名になりだしてから、しばしばテレビで僕のことを語り、仲睦まじい家族だと印象付けていた。顔くらいは知っている級友もいるだろう。それが、一度も僕を名前で呼んだことがない？

「それに、中東との契約は取り消された。つい最近、分かりやすい形でお前達にも通知されただろう。今や僕が退学する理由は何もない」

僕の言う通知とは、裁判所の債務徴収の強制執行のことだ。２日前の夜に受理され、僕にも弁護士から通知が届いた。もうこいつらにも通知は行き渡っているはず。裁判所がもう動いているなら、もうこいつらの口座は凍結されているはずだ。

「――何で分からないかなぁ」

親父が呆れたような顔で首を振った。

「お前の幸せを考えれば、今はサッカーをしているのが一番幸せなのに」

「……」

「別に中東じゃなくてもいいんだよ。オファーは山のようにあるんだし、とにかくお前はサッカーをやってくれれば」

なんともフレンドリーな口調だ。

だが、こいつら、まだ僕にサッカーをやらせることを諦めてないのか？

だとしても、お前達が学校に乗り込んで、校長室に退学届けを突き出すまでならまだ分かる。だが、こうして教室まで来たのでは、自分達の状況が悪くなる。自分達が僕にしてきたことがばれるかもしれないのに、どういうつもりだ？

――まずい、これは……

「――おい、ケースケ」

冷や汗を掻く僕の背中に、ジュンイチが声をかける。

「まさか、お前の中東との契約って……」

「……」

まずい――勘付かれた。ジュンイチは人間観察に長けている。こいつらの優しげな言葉の裏の悪意に気が付いたのか。

「な、何だよ、どうしたんだよ、ジュン」

狼狽するようなユータの声。

そのユータの声に、僕はただならぬ気配を感じ、ジュンイチの方を振り向いた。

そして、見た。

いつも優しく陽気そうなジュンイチのどんぐり眼が、烈火の如く怒りを孕んでいるのを。眉間に皺を寄せ、血管が浮き出るように顔の筋肉を蠕動させている。

「――あの中東の契約は、このオッサン達が、ケースケを売り飛ばそうとしたってことだよ。金のために」

ジュンイチの怒気を孕んだ声。初めて聞いた。

クラス中にざわざわと動揺が走る。

「……」

――ばれた。

ユータとジュンイチに、全部ばれた。

そして、それがばれてしまえば――今までの僕の不審な行動の全てにつじつまが合ってしまう。

部活をやりながら、バイト三昧の日々。学校では期限の切れたコンビニ弁当しか食べなかった。高校3年間、地元にあるのに一度も二人を家に連れていかなかった。ずっと僕が、何か得体の知れないものに苦しめられていた。

その不審な行動が全て、一本の線に繋がる……

「おいおい、人聞き悪いこと言うなよ」

親父がそんな怒りに燃えるジュンイチに、脂で黄色く染まった歯をむき出して笑った。

「そんな証拠、どこにもないだろうが。坊主、あまり人聞きの悪いことを言うと、名誉毀損になるぞ」

「だが、そうじゃない証拠もないだろう?」

ジュンイチはそれでも噛み付く。
「俺の考えでは、あんた達がケースケの代理人として、中東と契約したってのも疑わしいんだ。オランダで中東のチームと契約されているのを見て、驚いているケースケの姿を見ているだけにな」
「――うるせぇガキだ」
「！」
まずい、親父の口調が変わった。
「血迷ったか、お前！」
僕は大声で、話の主導権を握った。
「こんなところまで来て、状況が読めないのか！」
これを言った時点で、僕がこいつらから何かされていたことを自白したに等しいけれど、こいつらにとっても、僕にしてきたことがばれるのはマイナスのはずだ。これでビビッて帰ってくれればいいんだけれど。
「アンタこそ、状況見なさいよ！」
後ろにいた母親が怒鳴った。
「裁判所にお金の徴収までさせて！　もう全額返せるわけないじゃないの！　アンタがサッカーをやらなきゃ、私達もアンタも借金背負うのよ！　なのにサッカーをやらないなんて、バカじゃないの！」
「……」
本性を現しやがった。
というか、もう隠す余裕もないってことか。
「分かってるさ、だから返しきれない分は僕が働いて返すよ。あんた達は中東から貰った金を最大限返してくれればいいんだ。それなら文句ないだろう」
「ダメだな」
親父が言った。
「もう家も売っちまった。商売もできねぇ。裁判所に金を取られたら、もう俺達は路頭に迷うんだ。テメエには嫌でもサッカーをやってもらうしかねぇんだ」

「……」

しまった――裁判所の命令なら、こいつらも逆らいようがない。これ以上裁判所や警察にマークされないように、息を潜めると思っていたけれど……

こいつらはもうイカれてる。金に目がくらんで、もう常識や良心さえも吹っ飛んでしまっている。

裁判所に財産を没収されて、懲りるどころか、借金を負って、追い詰められた結果、人生に捨て鉢になり、人としての道を踏み外したんだ。

こいつらの目的は、再び莫大な金を手に入れるために、僕を脅してでもどこかのサッカーチームと契約させることだ。

一生遊んで暮らすという青写真が現実のものとなった矢先に、お金を全て没収された上、老後も覚束無くなるほどの借金を背負うこととなった。一度夢を見てしまった以上、もうお金を返して、質素な生活などには戻れない。だからもうなりふり構わず、大金を得るために、手段を選ばなくなった。

僕がこいつらの言うことを聞かなければ、死なばもろとも――僕を殺して、自分達も死ぬ。僕一人だけが幸せになど、断じて許さない。そう考えたんだ。

――腐っている。金のために、ここまで人間としての感情を見失うなんて。

「さあ、もう分かったろう。帰るぞ。これからお前は他のプロチームと契約してもらうからな」

そう言って、親父は教室にずかずか入り込み、僕の方へ歩を進めてきた。そして僕の右手を大きな手で掴もうとした。

だが――

その親父の丸太のような腕を、一人の男が先に掴み、動きを止めた。

ジュンイチだった。

親父の動きが硬直する。
「――ふざけんな」
僕の横で、静かだが、鬼気迫るジュンイチの舌鋒の声が響く。
「どけよ、兄ちゃん」
親父はジュンイチを血走った目で睨む。もう口調と同じく、目も、先程までの穏やかな雰囲気は微塵もない。
「ふざけるなよテメエ！　テメエらは息子を何だと思ってやがる！」
ジュンイチが怒鳴って、親父の手を振り捨て、僕の盾になるように、僕の前に立つ。
学校市のお調子者で知られるジュンイチがこんなに怒るなんて、クラスメイトも面食らっている。普段優しい奴が本気で怒ることほど怖いものはない。
「ふん、人聞き悪いこと言うなよ」
しかし親父はそんなジュンイチの怒りを一笑の下に捨てる。
「現にこうしてこいつは学校に元気に通っているだろうが。それは俺達が働いて、こいつに食べさせ着せてやっているからだろう？　こいつを育てるのに、俺達も相当な元手を払ってるんだぜ？　息子として、親孝行をするのは当然――」
「そのヤニ臭ぇ口を今すぐ止めろ」
親父のへらへらと狂的に笑っての言葉を、ジュンイチの静かな声がかき消した。
「毎日期限切れのコンビニ弁当食って、育ち盛りに体も大きくならなかった。部活帰りの疲れた体で、毎日夜遅くまでバイトして、それでも苦しみ続けていたこいつを見て、何も思わないのかよ！」
「……」
ジュンイチの声は、震えていた。僕が見るジュンイチの背中も、小さく震えている。泣いているんだと分かった。

「ジュンイチ……」
「やっとわかったよ――ケースケ」
「……」
「お前の苦しみも、お前を助ける方法も、やっとわかった……」
「……」
ジュンイチは、少し情緒不安定になっている。拳を握り締め、怒りをコントロールできない様子が、外からもわかった。
「――俺もわかったぜ」
そう言って、親父も僕を見る。
「ここ半年、お前が急に反抗的になったのは、こいつらのせいか。こいつらがお前にいらんことを吹き込んだせいだろ？」
「！」
「言ってたな、俺達がいくら日陰にお前を置いても、何度でも日向に植え直してくれるとか何とか……」
「――やめろ。こいつらは関係ない。こいつらに手を出したら……」
「ふん、ガキの友情ごっこはお呼びじゃねぇ。うちの家族の問題だ。そこをどけ」
僕に吐き捨ててから、親父はジュンイチにもう一度警告した。
「アンタ……本当にケースケの父親かよ！　息子から何でそこまで、何もかも奪うんだよ！」
すごむような、ジュンイチの声。
「俺が知っているサクライ・ケースケは……力があっても、あんたみたいにそれで人を支配しようなんてことは絶対にしねぇ。誰よりも優しくて、人の痛みを自分のことみたいに感じちまう馬鹿だけど……純粋で、真っ直ぐで……」
「ジュンイチ……」
「アンタが――アンタがケースケの父親であってたまるか！」
息を搾り出すようなジュンイチの叫びに、親父は酷薄な笑みで返す。
「フン、だったら何だ？　俺があいつの父親じゃないとでもいう気

か？」
「……！」
「残念だが、戸籍があるんでな……テメェの安い理屈なんざ、お呼びじゃねえんだ」
その言葉に、ジュンイチが拳を握り直したのがわかった。
「やめろ！　ジュンイチ！」
僕はそう叫んだ。
けど――
ジュンイチはもう、親父に突進していた。
罠だ。あいつは、いつだって挑発をして、相手に手を出させるんだ。
その瞬間、僕の目の前で……
親父は、ジュンイチの拳を、その太い腕で払いのけると、勢いのついたジュンイチの腹に、ショートアッパーを叩き込んだ。
どむっ、という鈍い音と共に、ジュンイチの息の漏れる声がした。
ジュンイチは親父にひざまづくように、膝を突き、何度も咳き込んだ。
「ジュン！」「ジュンくん！」
ユータとマイが同時に叫んだ。でも、それはジュンイチの耳には届かなかっただろう。ユータが叫ぶより一瞬早く、クラスの女子の何人かが悲鳴を上げていたからだ。
うずくまるジュンイチに、親父はもう一度、腹に蹴りを入れた。
ジュンイチはそのまま、仰向けに倒された。
内臓のどこかに当たったのか、ジュンイチは再び激しく咳き込んだ。そしてそのまま、とどめの言葉を吐き捨てた。
「正当防衛だ。身の危険を感じて、手が出ちまったんだよ。こうでもしないと、このガキ、俺を殴るまで、因縁つけてくるだろうからな」
「！」
反射的に、僕は猛然と前に走り出していた。

2、3歩の助走から、右足一本で前に飛び、空中で手近にあった机を踏み台にして左足で二段飛び――そしてうずくまるジュンイチを飛び超え、親父の顔面に、膝を繰り出し、必殺のシャイニング・ウィザードを御見舞いしようとした。

自分の繰り出す左足が、風を切る音を纏わせて、技の名の通り、闇を切り裂いた。

しかし、親父は僕の攻撃を読んでいたのか――

いや、予測していなければ出来ない反応の速さで、右腕を顔の前で出し、僕の脚を受け止めた。脚にじいん、と、衝撃が伝わった。完全に決まっていたら、間違いなく僕の脚は、こいつの頭蓋骨を割っていただろう。

そして――僕は、蹴りの勢いで、空中でバランスを崩した視界の端に、見た。

親父は、にいっと下卑た笑いを浮かべるのを。そして、体を後ろへ、すいと引き――右拳を握り締めるのを。

僕が着地するかしないかのところで、親父の大きな鉄拳が飛んできた。バランスを崩していたので、かわすことも到底出来なかった。

僕の薄い右頬に、親父の必殺の正拳がクリティカルヒットした。女子並みの軽量の上、バランスを崩していた僕の体は、そのまま後ろに吹っ飛び、教室の机の列に背中から突っ込んだ。後ろにあったいくつかの机や椅子が、僕に巻き込まれて、がたがたと派手な大音響を残して倒れた。机に入っていた、級友達の教科書や、携帯電話が、一緒にどさどさと落ちて、僕に降りかかった。

「ケースケくん！」「ケースケ！」

シオリとユータが僕に駆け寄ってくる。僕の体の上に崩れた机や椅子を、ユータがのけてくれた。シオリは僕の口元に手を伸ばす。血が出ているのだ。口の中を切ったらしい。舌に血の味が伝わった。クラス中が体をすくませ、僕の近くへ駆け寄った。

顔がずきずき痛んだ。吹っ飛んだ時に、どこか背中を打ったらしい。一発の鉄拳の激しいダメージが、どくどくという血の流れる音

を纏わせて、僕の全身を浸食していくように伝わった。
「みんな――この教室から出ろ！」
ユータがそう叫んだ。
「早くしろ！　こいつら、何するかわからねぇぞ！」
その言葉が、蜂の巣をつついたように……クラスメイトは我先にと、教室から逃げ出していた。悲鳴をあげる者もいた。
そして教室には、僕達5人と、親父だけが残った。
僕はユータに支えられ、半身だけ起こすと、親父は僕を見下ろして、余裕の笑みを浮かべた。
「ふん、親に向かって蹴りかかってくるとは……まだ立場がわかってないんだな、いい機会だ。お前が二度と勘違いしないように、この場でお前の希望を刈り取ってやろうか。ドブに落とせば雨も気にならねぇ。お前が俺達に従うだけの存在だって、もう一度体にすり込んで、心おきなく外国でサッカーできるようにしてやるよ」
「……！」
それは、あからさまの挑発だったことは間違いない。
しかし、今の僕はまったく冷静な判断を失っていた。この身に残る激痛に、殴られた拳が纏っていた、ヤニの臭い――そして、僕の眼前でまだうずくまっている、友――ジュンイチの姿。
こいつは友を――僕の大事な親友さえも傷つけた。
「貴様！　今ここで殺してやる！」
僕はいきり立って、そう叫んだ。
周りの4人が、その叫びにすくみ上がるのがわかった。しかし、もはや闇に染まってしまった僕の心は、怒りを既に解き放ってしまった。もう止められない。
「あ？　何だって？」
親父は、またも僕を挑発するように、訊き直した。僕が久々に挑発に乗ってしまったのを見て、もうこっちのものだ、と思ったのだろう。
「殺してやるから、そこを動くな！　八つ裂きにしてやる！」

そしてもう一度、攻撃を仕掛けようと、腰を上げかけると、後ろから、ぐいと体に圧力がかかり、僕の動きは止まった。
ユータだった。ユータは、僕の体をしっかりと羽交い絞めて、僕を制していた。
「やめろ！　ケースケ！」
目の前の親父は、羽交い絞めを受ける僕を見て、せせら笑ってジュンイチを見下した。
「お前ら、何か勘違いしてねぇか？　俺は自分からは手は出してねぇ。好きでお前らを相手にしてるんじゃねぇんだよ。要はお前が俺達の言うことを聞いて、サッカーをやってくれりゃいいんだよ。その交渉をしてるんだ。それさえ誓ってくれれば、俺達もすぐ帰るんだぜ？」
「……！」
僕は親父の足元でうずくまるジュンイチを見る。
「そんな――そんな勝手な理屈で、ジュンイチを殴ったのかよ！ふざけやがって！」
「やめろ、ケースケ！」
殴りかかろうと勇む体は、またユータの羽交い絞めに制される。
「離せユータ！　あいつ、ジュンイチを・・・・・ジュンイチを！」
荒い息のまま、僕の絞り出した言葉は、苦い敗北感と、屈辱で言葉が詰まった。僕のかつてない剣幕と眼光に、横のシオリが、僕に怯えるような目を向けていた。
するとユータは、強引に僕の体を引っ張り、そのまま押し倒した。僕は仰向けに倒され、ユータは僕の体の上で四つんばいになり、僕の両方の手首をしっかりと掴んでいた。
ふと、僕の頬に、何かが落ちた。そして、僕は見た。

ユータは泣いている。
僕の上で、しっかりと僕の目を見ているユータの表情は、僕が今まで見たことがないほど真剣で、その目からは、大粒の涙がボロボロとこぼれていた。
「やめろケースケ……もうこれ以上――あんな奴の犠牲になるな！」
ユータは声を振り絞って、叫んだ。僕は、ユータに気圧されたのか、抵抗が止まった。
「シオリさん」
ユータはそれを確認すると、顔を上げ、目の前にいるシオリの姿を見た。
「ケースケを頼む」
シオリはすぐ駆け寄った。ユータはゆっくりと僕の枷を解き、体を起こして、僕の体をシオリに預けた。シオリは、膝を折って僕の横に座り、僕の体を黙ってそっと抱きしめた。
彼女は僕の体にしがみついたまま、僕の目を強い眼差しで見つめながら、ふるふると首を横に振る仕草をし、僕を諌めようとしていた。
その間に、ユータはまだうずくまっているジュンイチの元に駆け寄り、手を伸ばした。
「立てるか？」
ユータはジュンイチの手を取る。
「――ああ」
ジュンイチは返事をする。しかし、あれだけ腹を強く殴られたんだ。しばらくは動けないだろう。
「マイさん、ジュンに付いていてやってくれ」
ユータはマイを呼び、教室の隅に行くように指示をした。マイは心配そうな顔で頷いてジュンイチに駆け寄った。
「……」
それからユータは、親父を睨みつけた。
すごい目だった。普段穏やかで、基本平和主義者のユータの目と

は思えないような目だった。
「貴様……」
「正当防衛だろうが？　弱いくせに向かってくるから怪我したんだ」
親父は笑みを浮かべて、ユータに吐き捨てた。
「帰れ！」
ガラスがビリビリ震えるような、初めて聞くユータの怒声。
「もう、二度とケースケに近付くな！」
「フン、いやだ、と言ったら？」
親父はユータの気迫を切り捨てる。
「――お前もさっき俺にかかってきたガキも、要領を得ねぇな。俺はうちのガキに、サッカーをやるよう交渉してるだけで、別にテメエらに用はねぇんだ」
「交渉？　ふざけるな！　あんたがやっているのは、暴力でケースケに無理やり言うことを聞かせているだけだ！」
ユータは激昂する。
「育ててもらってる親に反抗的なガキは、殴ってでもしつける。うちの教育の問題だ。何でもかんでも虐待なんて言葉で片付けんじゃねぇ。こいつが今まで学校を休むようなケガを、俺達は一度も負わせちゃいねぇ」
「クソが！　ケガの重い軽いの問題じゃねぇ！」
「……」
うちの家族は、こちらが怒れば怒るほどに、それを小馬鹿にして、相手を追い詰めるんだ。ユータもその術中にはまりかけていることを、僕は察知する。
ここままじゃ、ユータもジュンイチのように……
そう思考した時、親父はユータの横を通り過ぎて、僕の前に再び歩を進めた。
「さあ、帰るぞ。あんまり手間をかけさせ……」
そう僕に言いかけた親父の言葉が止まる。
親父の肩を、ユータが後ろから掴んで、親父の体を制していた。

親父は首だけを後ろに向ける。後ろには、鬼の形相をしたユータがいる。
「……」
硬直。
「で？　掴んだだけで終わりか？」
親父がせせら笑いながら、肩越しにユータに言った。
「……」
ユータは、唇を噛んでいた。
「――いたいなぁ。これ、俺に危害を加えるつもりで掴んでるの？　なら俺も、正当防衛の範囲で身を守らせてもらうがな」
「やめろ！」
僕はシオリに抱きとめられたまま、叫んでいた。
「こいつらは関係ない！　関係ない人間を、お前達の事情に巻き込むな！」
「やめて！　ケースケくん！」
立ち上がろうとする僕に、シオリはがっしりしがみついて、離してくれなかった。
この時、はじめて自分の目から、涙が溢れ出しているのに気がついた。
親友が僕をかばおうとして、傷ついているのをただ見ているだけ……
その悔しさが、僕の忘れていたはずの憎しみの炎と呼応し、涙を流させる。
その時だった。
親父は僕を見下ろして、せせら笑った。
「やっぱり……こいつらのせいか」
「……」
「半年前から急に調子付きやがって。そうか、こいつらがお前に何か吹き込んだのか」
そう言うと、肩をつかむユータの手を逆につかんで、ユータの方

を振り向いた。
　親父の睨みに、体は大きいのに、元々人を殴ったり出来ないお人好しのユータは、一気に腰が引ける。
「だが――ダチ一人守れないで、友情か……笑わせやがる」
そう言って、親父はユータを哄笑した。
「ユータ！」
　僕は叫んだけれど、もう間に合わなかった。ユータはもう、僕を守るために、平和主義者の自己を捨てて、拳を振り上げていた。
　しかし、親父ははじめから、それを待っていたのだ。
　拳が入る前に、親父は手近にあった学校の椅子を右腕で掴み、ゴルフスイングのように下段からユータの左足に、椅子を振り下ろした。
「ぐあああああああっ！」
　硬いものがぶつかり合うような、ごん、という音と共に、ユータの顔が苦痛に歪んだ。弁慶の泣き所を強く叩かれ、ユータは倒れこみ、足を押さえて悶絶する。もしかしたら、骨が折れたかもしれない。
「あーあ、お前、テレビで見たから知ってるぜ。将来有望なサッカー選手らしいな。可哀想に……うちのガキが、お前より自分のことを可愛がるばっかりに、お前はこうして足をケガするんだ」
親父は狂的に笑った。もうとても精神がまともとは思えない。金に窮したことで、もう全ての事象が崩壊したような、異常な笑いだった。
　あいつ……ユータにとって、足がこの先、どれだけ大事が知らないで！
「あ……あ……」
僕はユータが足を打たれ、その場にうずくまる姿を、呆然と見ているしかなかった。
「おいおい、俺を恨むのは筋違いだぜ。お前がさっさとサッカーをやるって決断してくれりゃ、こいつらはケガすることはなかったん

だ。こいつらを傷つけたのは俺じゃねぇ。我が身可愛さに、友情を踏みにじったテメエさ」

「話をすり替えてんじゃねぇ！」

涙声で僕は叫んだ。

ちくしょう……ちくしょう……

もう一度苦い敗北感が胸を侵しはじめ、僕は膝の上で拳を握り締めていた。

しかし、その握り拳に、シオリは軽く手を添えた。彼女の顔を見ると、シオリは、涙で潤んだ目を僕に向けて、ただ、首を横に振っていた。

「これ以上、友達が傷つくのは、嫌だろう？　嫌ならそろそろ、こっちにしたがってもらえないかねぇ」

親父の粘着質の声。

「それとも――お前の女も危険にさらす気か？」

その声に、僕の体はぞくりと震えた。

男は毒牙を彼女に向けた。僕達に歩み寄ってくる。

Collapse

親父が僕達の方へ歩を進めるのを見ながら、僕は久し振りに、心の底から恐怖した。

今、こいつは僕の一番大切な人に、毒牙を向けている――

その状況が、僕をこの上なく追い詰めていた。思考が全く働かず、頭がひどく痛くなった。平衡感覚がおかしくなったように視線がふらつき、吐き気がした。今この時、何が起こっているのかも、上手く整理できなかった。

そんな僕は自分の体で、男の目から、彼女を隠した。まるで動物が、生まれたばかりの我が子を守る姿のように。

その時。

僕を強く抱きしめるシオリの体が、ぶるぶると震えだした。

「……」

駄目だ――こいつらはどんな理由があっても、彼女を傷つける。そのシーンを見せつけて、僕を従わせようとする。

このままでは、ユータやジュンイチのように……

「離れて！」

僕は言いながら、腰を上げる。

僕が親父の足を止める間に、教室を出て、彼女を逃がそうと思った。それしかない――彼女をこんな理不尽なことで、傷つけるわけにはいかない。

だけど、シオリは離してくれない。また、頭をぶるぶると振って、腕に力をこめるのみだった。

「離せない……」

もう、彼女は涙で顔をくしゃくしゃにしても、語勢を弱めなかった。それくらい、彼女は必死に訴えていた。

「これを離したら、あなたはまた、昔に戻ってしまう……恨みや憎しみだけのあなたに――もう、あなたのあんな辛そうな姿――悲し

げな目を、見たくないの……」
「……」
「ケースケ……」「ケースケ……」
マイに支えられるジュンイチと、這うようにうずくまるユータが、僕の名を同時に呼ぶ。二人もシオリを守るべく、必死に立ち上がろうともがいているが、動けない。
もう皆、分かっているんだ。
シオリが傷つけられるのを間近で見たら、きっと僕の心が壊れてしまうことに。
「……」
僕は……僕が、大切な人を傷つけた。
僕が、こいつから、皆を守らなければ……
「フン、お前みたいな奴が、女はべらしてるのか。色気づきやがって」
親父は、僕達二人の前に迫ってきた。
「早く、離れて！」
もう一度僕はシオリに叫ぶように訴える。
これでは動けない。このままでは、シオリが……
こんな男の、僕への腹いせのために、傷つけられる。
そんな事をされたら……僕は……
だけど……
「お嬢ちゃん、そこをどきな。そのガキは連れ帰るからな」
親父の声がした。
「――分かった」
僕は、苦虫を噛み潰す思いで、声を絞り出した。
「あ？」
親父はそれを見て、足を止める。
「――お前達の、要求に従う。だから、もう……」
「け、ケースケ……」
ジュンイチが、腹を殴られ、上手く出ない声で、僕を止めようと声

を絞り出した。
「あはははは！　やっと決心したわね」
教室の隅で、僕達の様子を見ていた母親が高笑いした。
「ふふ、そうだよ。はじめからそう言ってくれれば、俺達もこうして学校に来たりしなかったんだ。よくできました」
親父も僕を従わせたことで、優越感たっぷりの笑みを浮かべた。
「……」
僕は歯を食いしばって、屈辱を堪えていた。さっき切った口元の傷から、血が溢れて、舌に苦い味を残した。
でも――もう、そうするしかない。
もう僕は、自分の甘さでユータとジュンイチ――二人の親友を傷つけてしまった。
この事態は、自分の甘さが招いたことだ。これ以上、こいつらを傷つけられるくらいなら、たった2年だ。耐えなければ……
「――させません」
しかし、そんな円満ムードの教室に、一陣の風が吹いた。
その声に顔を上げると、シオリが僕の前でひざを突いて据わりながら、両手を広げ、自分の体で僕を隠すように、家族の前に立ちはだかっていた。
「お嬢ちゃん、そこをどきな。やっとこのガキも、折れてくれたところだしな」
「……」
親父がにじり寄っても、シオリは威風堂々と構え、道を開けようとしない。
「あんたがしてるのは、日本サッカー界の損失だぜ？　アンタの独りよがりでこいつを狭い日本に置いていいのかい？　こいつがサッカーをすれば、こいつや俺達には金が入るし、アンタだっていい思いができるし、たくさんの人が喜ぶ。いいことずくめじゃねぇか」
もっともらしいことを言う。
「――そこに、彼の意志はどこにあるんですか？」

シオリは、へらへら笑う親父を、明鏡止水の目で見つめた。
「私はこの学校に入学してから――あなた達のことで苦しみ続ける彼を、ずっと見て来ました。そして、この半年、そのせいで壊れてしまった心を、手探りでも直そうとする、彼の一生懸命な姿も――それを、こんなことで邪魔させたくありません」
「……」
「これ以上、あなた達にケースケくんを傷つけさせたりしません」
「駄目だ！　もうそいつは説得には応じない！」
背中越しに、僕はそう叫ぶけれど、シオリは言葉を続ける。
「ケースケくんは、ずっと、苦しんできたんです……その彼を、もうこれ以上、傷つけないで……」
背中越しに聞こえるシオリの声は、凛とした、張り詰めた声だった。泣き虫で、大人しいシオリが、この状況で、こんなにしっかりと、言葉を発するなんて……
「へぇ……このガキのことがそんなに好きか？　確かにお嬢ちゃんみたいな娘が横にいたら、こいつも幸せだろうなぁ」
「やめろ！　彼女は関係ない！」
「でもな……」
そう言いかけると、親父はシオリの頬を、裏拳気味に叩いた。
僕の前で、シオリは頬を張られ、横にどさりと倒れた。
「シオリ！」
僕はそばに寄り、床に倒されたシオリの華奢な上半身を抱き上げた。
「う……」
うつろな目で、僕の方を見る。
左頬に、青い痣が浮かび上がり……口の中を切ったのか、口元から血が流れ出していた。
――ズクン。
その時、僕は、自分の心臓の音を確かに聞いた。
「あ……あ……あ……」

彼女を抱き上げる両腕が、怒りと悲しみに震えだす。
怒りを感じることは、何度もあった。でも、ここまで血液が沸騰しそうなほどに怒りを感じたのは、生まれて初めてだった。
ぼろぼろと、涙が溢れ出す。そして、体中の血管を締め付けるほど、歯をギリギリと噛み締めていた。
その時だった。
彼女を抱き上げ、まったく無防備だった僕の顔面に、親父の水平蹴りが横薙ぎに飛んできた。
鼻っ柱にヒットしたその蹴りで、僕の体は後ろへ吹っ飛び、一回転して僕は、うつぶせに倒された。
「へっ、俺はお前の幸せなんざ、これっぽっちも興味がねぇ。下手に幸せになって、付け上がるだけなら、ここでお前の幸せとやらを、壊してやるぜ」
「……」
だけど、僕にその親父の言葉は、もう届いていなかった。
うつぶせに倒された僕は――
「うっ！　ううううっ！　ああっ！　ああ！　ぐっ！」
そのまま拳を握り締め、地べたに何度も腕や頭を強く打ちつけていた。
多くの感情が止められずに、大切な人達が傷つけられていくシーンが、何度も頭にフラッシュバックする。
悔し涙が止まらない。
それを打ち消すように、頭や拳を床に打ち付けて、自分の無力さを呪っていた。
「ケースケくん……」
「ケースケ……」
僕が……僕がこいつらを止めておかなかったために、大切な人が傷ついた。
あの時、完全にこいつらの息の根を止めておけば……
それをしなかった僕の甘さが、皆を傷つけた。

僕の、せいで……

――ズクン。

この時、僕がこの半年、親友や恋人との時間で修復していった僕の心は、再び完全に壊れた。

その衝動的な行動を繰り返し、涙と、打ち付けた跡でぐしゃぐしゃになった顔を上げた時……

「……」

俺の目には、かつての――

いや、かつて以上の、殺気に満ちた光を取り戻していた。

Ｓａｄｉｓｔｉｃ（前書き）

警告！今回は若干残酷な描写が含まれています！ご注意ください！

「う……」

俺の目の前に倒れているシオリは、顔を強打されて、どうやら平衡感覚が少し狂っているようだ。意識はあるが、視線が覚束ない。時間が経てば治るだろうが。

俺はそんなシオリの体を両手で抱き上げ、教室の隅にいる、マイの横にゆっくりと寝かせた。

「さ――サクライくん」

怯えるようなマイの声。それが、この状況に対してなのか、今の俺を見ての反応なのか、もう分からない。

俺自身、もう自分の顔の筋肉が、どんな形に歪んでいるのかわからなかった。

「――シオリを頼む」

俺はマイの顔を見ずに、そう言い残した。

そして、ゆらりと立ち上がる。

「……」

「――何だよ、その眼は」

親父は俺の眼に、蔑みの視線で応えた。

「何度も言わせんな。俺を恨むのはお門違いだろうが。お前のダチ公がケンカ売ってきたんだ。俺は自衛権を行使しただけだぜ？」

「……」

「しかしテメエも、テメエのダチ公も、揃ってバカだぜ。はじめから大人の言うことに従っていりゃ、痛い目見ないで済んだのによ」

「――馬鹿だと……」

俺は拳を震わせる。

「こいつらは俺の大切な仲間――俺を救ってくれた、俺の初めての仲間――親友だったんだ。それをお前みたいなゴミが、よくも……」

俺の視界も、心も、全てが赤銅にでもなったように、怒りで熱く、

赤く染まっていく……

さっきまで感じていた、この状況に酔わされたような頭痛も、さっき親父に殴られた時から、口の中に感じていた血の味も、今は全く感じる事ができない。聞こえるのは、怒りの旋律のような、俺自身の心臓の音だけ――心の底は、どうしようもないほどに、静かだった。怒りや憎しみが限界を超えると、もう何も感じられなくなるのだということを、俺は初めて知った。

「俺は今まで、お前達を心の底では家族だと信じていたのかもしれない」

「あ？」

「本当は、お前達の息の根を止めておけばよかった。だが、俺は家族を叩きのめすのは寝覚めが悪いからと、情に流されて、それを躊躇したのかもしれない。人の心の中にある、愛や希望を信じ過ぎたのかもしれない」

「――けっ」

――そうだ。今分かった。俺はこいつらに情をかけたんだ。

恋人や親友が俺を導いてくれた世界は、全てが優しさに包まれ、世界は愛に満ちていると、俺に信じさせるものだった。

その中にいた俺は、こいつらにも少しは信じる余地があると、情けをかけたんだ。だから、息の根を止めるまでの殲滅戦を控えた。

「俺が馬鹿だったよ。その点については俺も同意だ。俺が今許せないのはお前達じゃねぇ。お前達に情けをかけた俺自身だ」

そうだ――何故俺はこんな奴に情けをかけたんだ。

俺がもっと上手くやっていれば、こいつらが傷つくこともなかった。こんな訳のわからないことに巻き込むこともなかった。

「だから――これ以上こいつらが傷つくことのないよう、ここでお前達の息の眼を止めてやる」

「けっ、やれるもんならやってみな。テメエに今の世間の評判を捨ててまで、ダチのために命賭ける覚悟があるのかよ。しかも俺を殺したって、テメエはブタ箱行きだ。それでも俺を殺せるってのか？」

「……」
どうやらこいつも、小学校時代の級友と同じ――俺が自分の地位を守るために、イメージダウンになるような行動は起こせないと思っているらしい。
「……」
失脚、逮捕、少年院――そんなのは今の俺には、ただの単語にしか感じない。
既に俺の腹は決まっている。
「――殺してやるよ。今すぐにな」
俺はそう予告して、親父に突進した。
親父はそれを見て、にいっと笑った。ここで僕をぶちのめして、自分の優位性を俺に思い知らせようとしたのだろう。
「オラ！」
突進する俺の顔面に、親父の大きな正拳突きが飛んでくる。
俺はそれをすいと横に体を流しながらかわした。そしてかわしながら、左手で跳んできた右拳の手首を掴んで腕を引き寄せると、俺はそのまま親父の腕に飛びついた。
俺は木の枝にぶら下がるテナガザルのように、両足を親父の腕にかけて逆さまにぶら下がり、正拳突きで伸びきった腕を、背筋力で思い切り逆方向に跳ね上げた。
骨は伸びきってしまえば、俺のような軽量非力でもすぐに極まる。
ぼぎっ、という大きな音がした。
「ぎゃあっ！」
親父は叫んだ。親父の右腕は、肘とは逆方向に折れ、変な方向にぶらぶらと曲がり、親父は痛みでそのまま膝を突いた。
しかし、骨の折れた音と共に、極め技を解除して、親父から離れた俺は、膝を突いた親父の顔に目掛けて、膝蹴りの体勢に入っていた。
体当たりをするように、思い切り前に飛ぶ。
ごきっ、という音を立てて、俺の左膝が、親父の鼻っ柱に深くめり込んだ。親父の鼻梁が砕け、膝蹴りの勢いで親父の体は後ろ向きに

倒れた。鼻から口から血がしぶき、ニコチンで染まっている歯も真っ赤になっていて、親父の浅黒い肌は、焼きすぎたトーストにイチゴジャムを塗りつけられたようになっていた。

「ここまではジュンイチの分だ」

親父が仰向けに倒された時、俺はすぐに手近にあった机を自分の方へ引き寄せ、四脚の机の足を両手で掴んでいた。

「そしてこれは、ユータの分だ」

俺は仰向けに倒れた親父の胸を踏みつけてそれを大上段に振り上げ、親父の右脛に向けて、机の角を、体の遠心力も使って思い切り振り下ろした。

「がああああっ！」

机自体の重さに、大上段から遠心力も使って振り下ろした机は、重力の法則に従って勢いを増し、親父の脛の骨を折るのには十分な威力があった。

だが、俺は親父の叫び声を聞いた時には、もう椅子を振り下ろし、左脛にも同様の一撃を加え、それから何度も、机を同じように振り下ろした。

「がっ！　あっ！　あああああっ……」

親父の両脛は、狂ったように振り下ろされた俺の机の連撃によって、粉々に砕かれた。親父は机が振り下ろされるその度に声を上げ、やがて体を痙攣させながら、ぐったりと倒れた。

「……」

元々俺は、小学校時代から、級友との軋轢があった。体の小さな俺は、有効な攻撃手段を持たず、いつも多勢の同級生にサンドバッグにされた。

その頃から俺は、関節技（サブミッション）をかじっていた。軽量の俺でも大ダメージを相手に与えられる唯一の方法として、そこに行き着き、研究していた。

だが、本気でこれを使う気はなかった。もし俺が同級生のいじめで殺されるかも知れない――そんなギリギリの命の取り合いに巻き込

まれたら、相手の腕の一本くらい折ってやろうと思って覚えた技だ。いざとなれば、腕の骨をへし折るくらいの力があるというだけで、普段どんなにやられていても、精神的には優位になる。その程度の気持ちで覚えた技で、一生使うことはないと思っていたけれど……俺は辺りを見回した。既に俺が親父に殴られ体を吹っ飛ばされたあたりから、教室は机や椅子がそこかしこで倒れていて、収拾の付かない状態になっていた。その中で、俺は手近に転がっていた、クラスメイトの飲みかけのお茶のペットボトルを拝借して、プルタブを開け、倒れている親父の顔にお茶をかけ、血を洗い流させた。

「……」

親父の顔は、既に両足と、右腕の骨を折られたことによる激痛によるものか、恐怖によるものかは分からないが、瞳孔が開ききっていた。息遣いは既に荒く、余裕のなくなった顔で、俺の顔を見上げている。

「いい顔だ」

俺は、既に鼻が左側に曲がり、頬骨の陥没した親父の醜い顔を見下ろして、笑った。

「両足の骨が折れたお前はもう、この教室から逃げられない――さて、これから俺がそんなお前に、何をするか分かるか？」

俺は嘲笑を浮かべたまま、訊いた。

「！」

親父もすぐにその答えに辿り着いたようだ。

「うあぁっ！」

親父は倒れたまま、腹筋で上半身だけを起こし。まだ無事な左手で、俺に向かって殴りつけてきた。

親父の拳は、俺の右頬にヒットする。

「……」

ちっとも痛くない。利き腕じゃない上に、倒れながらのパンチは、体重が全然乗っていない。

――いや、そんな物理法則じゃない。親父の腕力があれば、全体

重が乗ってなくても、パンチは痛いだろう。俺がそれを感じられないだけ。

「――ククククク……」

俺はそのパンチを食らって、腹の底から可笑しくなってきた。もはや笑いの衝動を抑えることが出来ずに、外に漏れてくる。

「まだテメエの立場が分かってないようだな。ええ？　おい！」

俺はそれを見て、親父の肥えた腹を、思い切り踏みつけた。ボクシングでいうストマックブローの要領で、胃袋に衝撃が来るような場所を狙った。親父もさすがに胃袋を打たれて、仰向けのまま、激しく咳き込んだ。口の中に残っていた血が、その咳と共に、小さな飛沫となって、上に飛び、僕の顔にも数滴血しぶきを飛ばした。

「抵抗しなければ、痛い目を見ないで済む――確かお前、さっきそう言ったな」

俺はそう言いながら、倒れている親父の前で、体を前かがみにして、顔を近付ける。

「だが、俺は違う。俺は抵抗しようがするまいが、お前を殺すぜ。そして、俺はお前の今の一撃で更に機嫌を損ねた――楽に殺してもらえるなんて思うなよ。お前も――他の家族も」

そう言って、俺は顔を上げる。

「ひっ！」

俺の視線の先には、さっきまで俺が友人を傷つけられるのを目の前で見るというショーを見て、うすら笑っていた母親がいた。

「ひいいっ！」

母親はそんな俺の視線に恐怖したのか、急いで踵を返して、教室の引き戸に手をかけ、脱兎の如く逃げ出そうとした。

だけどその時には。

「逃げんの？　旦那見捨てて？」

もう俺は一足飛びで間合いを詰めて、母親の肩に後ろから手をかけて、ぐいと後ろに引っ張っていた。母親は後ろへと後ずさり、倒れている親父に躓いてしりもちをついた。

そしてその頃には、俺は再び母親との間合いを詰めていた。
「や、やめ……」
母親は何か最後に口走ったが、俺はしりもちを突いた母親の右こめかみにつま先で蹴りを入れていた。母親の頭は衝撃に揺れる。
蹴りを食らった母親の眼はうつろになり、俺の顔を見上げるのも困難なように、覚束無い視線をそこここに向けていた。こめかみは人体急所のひとつで、強打すれば平衡感覚が失われる。脳が揺れて、今母親はコーヒーカップに数時間乗った後のような酩酊状態に陥っている。しばらくは身動きが取れない。
「気絶しないように手加減して蹴った。この豚を片付けたら、次はお前も同じ目にあうんだ。よく見ておけ」
そう母親に言い残してから、俺は倒れている親父の方へ再び目を向ける。
「もうお前達は逃げることも、抵抗も出来ない。出来ることは、残った五感で、激痛と恐怖を味わうことだけだ。力がなくて、何も出来なかったガキの頃の俺と、同じ恐怖を体に刻み付けられて死ね」
ハハハハハ、と笑い声が漏れる。
「ヤベェ――楽しくなってきたぜ。お前達をこれからたっぷり弄(なぶ)れると思うとよぉ」
――そう、そうだ。これが俺の本当の本質。
愛や友情よりも、俺はこうした暴力に心躍る、どうしようもないほど攻撃的な人間なんだ。
今までは、自分で自分に何だかんだと理由をつけて、誤魔化していただけで、俺はずっと前から、家族をこうして一方的に痛めつけることを望んでいたんだ。
体がかっかと興奮してくる。
俺は親父の体に馬乗りになって、肩の上に両足を乗せ、ガードも出来ない状態にして、何度も親父を殴りつけた。
親父の頬骨が砕ける感触、既に親父は花から口から血を流している。俺が拳を振り下ろす度に、朱肉の付いた印鑑みたいに、何度も

親父の顔に血のスタンプが押され、親父の顔を覆うイチゴジャムは、顔を覆い尽くし、どんどん顔から零れ落ちていった。

「ハハハハハ！　どうだ！　痛ぇか！　痛ぇだろォッ！」

俺は拳を下ろす度に、親父の顔が壊れていく様に夢中になっていた。狂ったような笑いを止めることもできず、ただ親父を殴り続けた。

Ｈｅｌｌ（前書き）

前回に続き、残酷描写ありです。

Hell

俺は拳を下ろす度に、親父の顔が壊れていく様に夢中になっていた。狂ったような笑いを止めることもできず、ただ親父を殴り続けた。

親父の顔は、どんどん腫れ上がり、頬骨も陥没した。俺の拳に感じる感触が変わった頃、俺は親父の顔を殴るのをやめた。

「……」

親父の顔はもう、瞼まで腫れ上がって、流れる血が目に入って、目もほとんど開いていなかった。もう体には全く力が入っておらず、ぐったりとしている。

「――おい、まさかこれで終わりじゃねぇだろうな」

俺は親父の胸倉を掴んで、上半身を起こして、顔を自分に引き寄せる。

「言っておくが、気絶したら俺が手を止めると思ったら、大間違いだぜ。無理にでも目を覚まさせて、また激痛を味あわせてやるからな」

そう言って俺は、さっき親父の顔にかけたペットボトルのお茶を、再び頭からかける。

「う……」

親父の顔から血がお茶と共に流れていき、かすかに親父も反応を示す。

「目が覚めたか？」

俺はにいっと笑って、親父に顔を近付ける。

「そうだよな、お楽しみはこれからだぜ。これからたっぷりお前に死の恐怖を味あわせてやるんだからな」

「た、たしゅ……」

その言葉を聞いた親父の口から、かすれた声が漏れる。

「あ？」

「た、たしゅ、け……」
「……」
親父の声は、もはや涙で震えていて、口を切っているからか、何を言っているかもよくわからなかった。
でも、何となくそのおかしな発音でも、言いたいことの意味を察した。
「助けて」だ。
「……」
俺は体の底がぞくぞくと震えた。
あの親父が――いつも俺を叩き潰して狂的に笑ってた親父が、俺に命乞いしてやがる。
――最高だ。
「助けて、か――お前も一応は反省したんだな……」
俺は親父の胸倉を掴んだ手を離し、立ち上がる。
「――まあいい。お前は十分過ぎるほどの傷を負った。このへんで許してやろう――これからは、もう悪いことなど考えないことだ……」
俺はそう言って、ふうと息をつく――
「――なんてな」
俺はそのまま、上半身だけ起こした親父の顎を目掛けて、トーキックを放った。フリーキックを蹴る時のような、体の回転で遠心力をつけての強烈なつま先が、親父の顎に当たり、そのまま親父の下の前歯を数本折った。親父の体は蹴りを食らった衝撃で、もう一度床に強く叩き付けられた。
「オガアアアア！　アッ！　ヲアアアッ！」
顎の骨が砕かれたせいで、もうその叫び声も、人間のものとは思えない、知性のない野獣のようなものになった。親父の口からは、まるでマグマのように血があふれ出し、閉じられなくなった口から、まるで山肌を伝うように流れ落ちてくる。
そして俺は倒れた親父の口元を、そのまま足で踏み潰した。

「オガッ！」
親父の体がびくびくと痙攣する。俺はそれを見て、何度も何度も親父の顎を踏みつけながら、大笑いした。
「アハハハハハ！　助けるわけねぇだろうが！　テメエに待つのはもはや激痛と死だけだ。まだテメエの命が助かると思ってんのか？　クソ野郎が！」
言いながら俺は、思い切り親父の顎を踵で踏みつけた。親父はもう、体をぴくぴくと痙攣させ、叫び声さえ出なくなった。
俺は親父の前にしゃがみこむ。
「顎の骨が完全に折れたなぁ。それじゃ舌噛んで自殺することも出来ないな。可哀想に……もうお前、激痛から逃れる術はないぜ、ハハハハハ！」
俺は心の底から笑った。親父のより確実なものとなった死――そこから来る、絶望と恐怖と無力感に満ちた表情に。
何でもっと早くこうしなかったのだろうと思う。こんな最高の気分になれるなら、もっと早くこうしていればよかったと後悔するほどだ。
「もう喋れないだろうが、これからは叫び声以外、喋ることも許さないぜ。今更謝罪や命乞いは聞かない。言ったらその顎が更に細かく砕けるだけだ」
「……」
親父はそれを聞いて、失禁した。
「あーあー、お前、漏らしちゃったか……何だ？　もう走馬灯で子供の頃に戻っちゃったってか？　まだまだその段階は早いぜ、おい！」
俺は親父の目を覚まそうと、拳を振り上げる。
だけど、俺の拳は、肘を後ろから抑えられて、ぴくりとも動かなくなる。
俺は肘を抑えられたまま、後ろを見る――
「け、ケースケ……もう、やめろ……」

そこには、腹を抑えて息を切らすジュンイチが、痛みに耐える表情で立っていた。
「こ、これ以上やったら、殺しちまうぞ……」
ジュンイチは俺の肘を掴む手に力を込める。
「そのつもりでやってるんだよ」
俺はジュンイチに言った。
「こいつを生かしておいたら、またお前達を傷つけに来る。俺を強請るためにな。だからここで息の根を止めるんだ。もう二度とお前達を傷つけないように」
俺はそう言って、ジュンイチの手を振りほどいた。ジュンイチの手は、腹を殴られた痛みで、全く抑えが効いていなかった。
「駄目！」
そうして親父を再度殴ろうとした矢先、今度は後ろから、体を抑えつけられた……
――いや、抑えつけられたのではない。抱きしめられたのだ。
「……」
俺はもう一度後ろを向くと、シオリが僕の体を抱きしめていた。
「ケースケくん……お願い……いつものあなたに戻って……」
シオリは俺の顔を見上げて、泣きながら、哀願するようにそう言った。
だけど――
俺の眼は、彼女の涙とは、別のものに釘付けになる。
シオリの頬は、親父に殴られた跡がくっきりと現れ、大きな痣となって、彼女の白い肌に残っていた。
「……」
その傷を見た俺は、何だか気が狂いそうだった。女の子の顔に、こんな傷をつけて――しかもそれが、自分が世界で一番大好きな女の子で――
その混乱した感情が、すぐに更なる怒りへと染められていく――
もはや全てが破綻していた。

俺は力任せにシオリの腕を振り払うと、ぐったりと倒れている親父の体を、胸倉を掴んでもう一度引き上げた。
俺は親父の傍らに膝をつくと、右手で親父の髪の毛をつかみ、顔を引っ張り上げた。
そして、左手を握り締めて、後ろへ引いた。
そして、その暴力の衝動に、腹の底からの愉悦が涌いた。
俺は拳を、親父の顔へ向けて振り下ろしていた。
その時だった。
「やめて！」
そう声がしたと思うと、俺と親父の間の空間に、誰かが入り込んだ。
もう拳を止められずに、俺は振り下ろす拳で、割り込んできた者の顔を、殴り飛ばしていた。
その者の体が、後ろに向けて倒れた。
その時、僕ははっと我に帰った。
そして、次の瞬間。
壊れた心が、バラバラになるような――地獄で何万年かかって得るような拷問を、この一瞬で味わったような気がした。
僕の目の前でうずくまるのは――マツオカ・シオリだった。
このままでは僕が親父を殺してしまうと――もう話を聞く耳も持たないと知って、わざと僕に殴られた……
こうでもしなければ、僕が止まらないとわかっていて、僕を止めるために、わざと殴られた。
僕は……そのおかげで我に帰った。
だけど……
僕は――自分の全てを賭けて守ると誓った女を――自分が、この世で唯一愛する女を、殴ったんだ。
僕は……

「シオリ！」

もう両親なんて、僕の眼中から消えていた。もう、嗜好も掻き乱れていたが、僕は脱兎の如く、倒れたシオリに駆け寄った。

「シオリさん」

僕に殴られたのを見て、教室にいたユータ、ジュンイチ、マイも、心配そうな声を出す。

さっきまで皆の声が全然聞こえなかったけれど、今はちゃんと聞こえる。もう僕は、さっきまでの殺意に満ちた心が、我に返っていた。

僕は彼女の前に跪いて、彼女の体を抱き起こした。

「！」

僕に精神的ダメージを与える目的の親父の裏拳なんかよりも、はるかに大きなダメージだったはずだ。僕の殺意の篭もった一撃を食らって、シオリは右の頬を大きく腫らしていた。左頬に出来ている、親父の裏拳で受けた傷の青痣など問題ではない。シオリの可憐な顔を変形させているその大きな瘤は、何か悪性の腫瘍のようだった。鼻孔からは鼻血が溢れ、シオリの鼻から下は真っ赤に染まり、衝撃で体が震えていた。

彼女の美しい顔を、こんな……

「ぐっ……うう……」

僕が――僕が付けたんだ。この傷を。

彼女のその、大きな傷と、歪んだ顔を見て、僕の心はもう賽の目に切り刻まれるような痛みを感じ、息苦しさまで感じた。親父に彼女が殴られそうになった時に感じた頭痛と吐き気が、その時の数倍の酷さで襲ってきて、もう自分が正気を保てているのか、倒れているのかも分からなくなった。

彼女の頬に、僕の涙が落ちる。

そして彼女は、ふっと目を開ける。

「ケースケ、くん……」
うつろで、弱々しい目をして……それでも、僕の姿を確認すると、ふっと微笑んだ。
「よかった……正気に戻ってくれて」
「え……」
「目が――いつものあなたに、戻ってるから……」
シオリはふっと、僕を安心させようとしたのか、顔に傷が出来て、痛いだろうに、精一杯笑顔を作って、えへへ……と、力なく声を出した。
そして、その笑い声が、消え行くように力を失って……シオリの体はがくりと全ての力を消失させた。首が後ろ向きにがくりと倒れ、シオリは痛みに気を失った。
「……！」
その時、僕は気付いた。
シオリを抱き上げる自分の腕も、自分の服も、露出している肌も、もう家族の血でドス黒く染まっていた。シオリの着ている白い服、白い肌が、僕の腕に付く血を吸って、純白は血に汚れた。
僕は――彼女を血に染めた。
何も守ることが出来なかった。
僕の浴びた返り血は――僕の大事な人を汚した。
僕が闇に捕まったせいで、生涯愛し抜くと誓った女性を、こんな……
「う……うわあああああああああっ！」
僕はその場で絶叫した。
怖い、とか、申し訳ない、とか、その絶叫は言葉では形容できない。精神の崩壊する音だ。自分の信じ続けたものの崩壊する音を、僕は自分の口から発したのだ。
気がつくと、僕の足は自然と走り出し、教室を飛び出していた。
学校を出て、そのまま自転車に飛び乗り、全速力でこぎ始めた。
風のように走り、僕は自分のアパートに戻っていた。
中に入り、鍵をかけ、カーテンを閉め、真っ暗になった部屋に、僕

は座り込む。
「……」
体が――とりわけ左腕が、疼くように震えた。
彼女を殴った、あの嫌な感触が、僕の左腕に、纏わり付いている。
色んな光景がフラッシュバックした。ジュンイチ、ユータ、シオリが親父に殴られる瞬間、自分が我を忘れる怒りに取り付かれた瞬間、親父を血だるまにする過程。
そして――シオリを殴ったあの瞬間と、シオリの最後の笑顔が……
それが一気に僕の脳に襲い掛かってくる。
「う……」
――頭が酷く痛かった。眩暈を起こしているのか、視界もふらふらする。
「……」
くぅん、という声。
横を見ると、部屋で僕を待っていたリュートが、僕に鼻を摺り寄せてきた。今の僕は、自分から漂う血生臭い臭いを、自分の鼻でも感じていたが、それでもリュートは僕に近づいてくる。
――逃げなきゃ。
僕はその時、そう思った。
逃げる対象は？　警察？　マスコミ？　それとも他の何か？　それも分からなかった。
今の自分は、何かから逃れようとしていることは確かだったけれど、少年院や、マスコミのバッシングというのとは、少し違った気がしていた。警察に自首することも、一瞬頭をよぎったが、心がそれよりも、今は逃げることを望んだ。自分の存在を許容してくれる場が、警察にないということを予感したからだろうか。
思考がまともに働かない今では、よくわからなかった。
僕は服を脱ぎ、血のついた服を部屋に放り出すと、シャワーで返り血を洗い流した。それから僕はタンスをひっくり返すように、服や通帳やカードを無造作にスポーツバックに詰め込んだ。

何故そうしたのかはわからない。ただ、考えるより先に、今の居場所を探そうとした。そして、ここは僕のいる場所じゃない、ということを感じた。とにかく逃げたい、という思いだけが、僕の体を突き動かしていた。

玄関を出る時、一度鞄を置いて、靴を履く。

そこで、玄関の前にリュートが立ちふさがる。

「……」

僕は硬直する。リュートはじっと僕の方を見ている。その漆黒の瞳には、何か強い意志が秘められているようで、弱っている僕を一瞬金縛りにさせるに十分な力があった。こいつは賢い犬だから、今の僕の異常さを感じ取ったのだろう。

僕は一瞬迷った。

「お前も来るか？」

僕は一度部屋に戻り、部屋の隅に置いてある餌と飯皿を荷物に追加して、外に出る。

ちょっときついけど、自転車の籠に、リュートを入れる。後ろに自分の荷物を、縄でしっかりくくりつけて、僕は出発した。

見慣れた町をひた走る。観光地で、蟻のように群がる観光客をかわして、5分もすると、めっきり人通りも少なくなり、僕の乗る自転車は、最高速になる。

このまま世界の果てまでも逃げたかった。

そう思いながら、この逃げ道の先に、僕が何を見ているのかも分からなかった。何も分からないまま、僕はただ、自転車をこぎ続けた。

水も飲まず、一度も立ち止まらずに、僕は自転車をこいでいたが、やがて僕の足は、まったく動かなくなった。既に夜中になっていた。

足をつくと、こんにゃくのようになっていた足は、膝から崩れ落ち、自転車ごと横倒しになった。自転車の前カゴにいたリュートは、倒れ際に飛び出して脱出した。

「……」

人気のない道路に倒れた僕は、立ち止まってようやく、耳に、ざぁ……という音が届き始めた。鼻には、生暖かさの中に、少し生臭いような、潮のような臭い。

顔を上げると、今まで走ってきた道路の先は、左側に大きくカーブしていて、カーブの突き当りの先は、テトラポットが沢山積まれていて――

その先には、大きな砂浜が見えていた。その先には、もう暗くて何も見えないが、空に浮かぶ月がゆらゆらと一点に反射して見える。大きな海が広がっているようだった。

僕は、もう踏ん張りが全く聞かなくなった足で、自転車を押しながら、テトラポットを登り、砂浜に歩を進めた。

砂浜は明るく、近くの街路灯に、オレンジ色に照らされていた。

僕は海岸に、生まれて初めて来たが、初めて見た夜の海は、世界を暗黒に染めたような不気味さが漂っていた。自分の心の色も、きっと、こんななのだろうな、と思った。

近くにあった海の家の隣に、自販機があった。今頃足が痛くなり始めたが、僕は、産卵するために、陸に上がった海亀のように、這うようにしてそこへ向かい、ポカリスウェットを買った。

荷物を置いた場所に腰を下ろした。砂浜の砂は、まるで、僕が取り逃がした幸せのように、さらさらと、僕の指の間をすり抜けていく。

ポカリスウェットは、疲れきった体に染み渡って、美味かった。体の渇きが癒されると、泥濘のように重たい眠気がまぶたを圧した。僕は、その場にぐったりと倒れこんで、空を見上げた。

もう僕は、一歩も動けなかった。

空には、川越では見ることの出来なかった、無数の星が、真珠をばら撒いたように散らばっていた。磯の香りのするこの辺りの空気は、川越よりもスモッグに侵されていないようで、僕は知っている星座を探そうとした。

北斗七星のある大熊座、北斗七星の七つ目の星の、延長線にある北極星、それを軸に回る小熊座。乙女座の一等星、スピカが、青白い光を放ち、僕の真上にあった。

突然、僕の頬を舐めるものがあった。リュートが、物欲しそうな顔をして、僕の目を覗き込んでいた。僕は、上半身を起こして、リュートの頭を撫でる。

「そうか、お腹が減ったよな」

鞄から、飯皿とドッグフードを取り出して、片方のくぼみに並々と注いだ。水を探そうと思ったが、ここらでもう水道を探す気にはなれなかった。自分のポカリスウェットの半分を、もう片方のくぼみに注いでやる。

リュートは、よほど空腹を覚えていたらしく、あっという間にそれを平らげてしまった。それを見ているうちに、どんどん睡魔が脳を蝕んできた。リュートも、僕に寄り添うように、そこにしゃがみこみ、目を閉じていた。

まるで、フランダースの犬の最終回のようだった。唯一違うとすれば、天使が迎えに来ないことだろう。でも、今はどうでもよかった。この疲れに身を任せて、眠りたかった。

潮騒が、二人を、揺りかごのように包み込んでいた。

Wake

「ちょっと！　お父さん！　男の子が倒れてる！」
若い女の声が、脳の奥深くまで、届いた気がした。
僕は目を覚ます。
ゆっくりと目を開けると、体が芯まで冷えているのがわかった。潮風のせいだ。体温が落ち込んでいて、生暖かい七月の風の中、寒気まで覚えた。
体も、ひどい筋肉痛が苛んでいたが、ゆっくりと、上半身だけ起こした。髪の毛から体から、細かな砂がサラサラと落ちた。
細い脛が現れた、七部丈のジーンズと、赤いＴシャツ、ウインドブレーカーのような羽織を着た、２４歳ほどの女性が立っていた。
頭を振って、状況を識別しようとする。
「……」
そうだ――僕は昨日、親父を半殺しにした挙句、この世で唯一愛する人まで殴ってしまった。気がついたら、とにかく何かから逃げたくて……
正直その相手は警察でも、家族でも、知人でもなかった。ただ、僕の頭の中に流れ込んでくる、多くのフラッシュバック――悪夢のようなイメージからだと思う。不思議と、自分が何かに捕まるとか、有名人だった僕へのマスコミの反応というのは、この時点ではまるで恐れはなかった。
自転車で、こんなところまで来てしまった。埼玉には海がないし、かなり遠くまで来たのだと思う。
しかし、そこまで自転車をこいで、疲れきっていなかったら、きっと昨日は眠れなかったのではないかと思う。
目を覚まして、早くも僕が、人を殴ったシーンが、頭に蘇ってきた。
「大丈夫？」

女は、僕がまだ寝起きで視線がおぼつかないため、混乱しているように見えたのだろう、心配そうな声をかける。倒れている男に声をかけるなんて、なかなか出来ることじゃないと思う。まだ、僕の体が見た限り清潔だったからかもしれない。犬も連れていたし。

そうだ、リュートは・・・・・・

僕は女の顔を見てから、おぼつかない視線を辺りに向けて、リュートを探した。

やがて、リュートが辺りにいないことを悟り、その女に訊いてみる。

「あの・・・・・この辺に、犬がいませんでしたか？　シェットランドシープドッグなんですけど」

初対面の人間に対する会話のキャッチボールの滑り出しとしては、いきなり大暴投のように思われたが、女は別に気にした様子もなく、答えた。

「君が起きる前にはもう、起きてたよ。朝、君の隣で、ずっと吼えていたから、私達目が覚めて、外に出てみたら、君が倒れていたの。はじめは、もう死んじゃったのかと思ったけど・・・・・・」

何てことだ。隣であいつが吼えていたのに、まったく目が覚めなかったなんて・・・・・・

一応のこと、荷物の中の、財布やら、通帳やらを確認したが、ちゃんと残っていた。どうやら僕は、リュートに守られながら、潮騒の揺りかごで、安眠できていたらしい。滅多なことでは騒ぐ奴ではないのだけれど、リュートは僕の体を察して、ＳＯＳを出してくれたのだろう。

「その子はうちにいるわ。うちは、あそこにある海の家なの」

女が指差した方を振り向くと、昨日僕が、ポカリスウェットを買った自販機の隣の海の家だった。

二階建てで、二階にテラスがあり、プラスチック製の白テーブルに椅子が置かれている。屋根から甲子園球場のそれのように、濃緑のツタが下りていて、簡素な白地の家に、明るい緑が映えていた。

件名は、昨日は暗くて見えなかったが、今はよく見えた。白地に黄色のペンキで縁取られた、漫画のふきだしのようなスペースに、マリンブルーのペンキで、Ｇｒｅａｔ　ｏｃｅａｎｓ　ｒｏａｄと書かれていた。三段に書かれたその横文字の両脇には、ヤシの木の絵が、老人の背骨のように、内側に曲がって描かれていた。

「そうですか。ご親切に、ありがとうございます。飼い主として、礼を言います」

座ったままで失礼だったが、僕は、女に頭を下げた。

体を起こすと、厭味なほど僕の体は、その運動に拒絶反応を示し出した。こんなこと、正月の三國高校との試合以来だ。昨日で全ての体力を使い果たしてしまったのだろう。

体にこびりついた砂を払っていると、海の家から、パジャマ姿の、ガニ股の中年が走って来た。どうやら、この女の父親らしい。やせぎすな印象に、狐色の肌は、年齢を感じさせない若々しさがあった。イイジマに雰囲気が似ている。明らかにスポーツマン風な男。

「おお、生きとったか。びっくりしたぞ。ドザエモンかと思ったからなぁ」

僕は二人に促されて、海の家に案内されると、入り口の前、二段しかない階段の下で、リュートはまだ、小学校に上がったばかりのような大きさの少年に撫でられていた。

僕を確認すると、すぐに駆け寄ってきて、僕に飛びついてきた。僕は座ってそれを待ち受け、抱きしめてやった。リュートは僕の頬を舐めた。

「む～」

さっきまでリュートにじゃれていた少年は、リュートがあっさり僕の方に来てしまったことに、ちょっと不愉快そうな顔をした。

「あらあら、飼い主によく懐いているのね」

「ええ・・・・・」

僕は荷物を肩にかける。リュートにえさをやりながら、これからどうするか、少し考えなくては……

「ちょっと待って」
女性が僕を呼びとめ、僕は顔を上げる。
「体、砂まみれだし、シャワーくらい貸すわよ？　よければ、朝ごはんも、どう？」
「え？　いいんですか？」
「ええ。タケルも、そのワンちゃんと遊んでもらえたし……そのお礼」
こんなことになって、もらえるものはもらっておいた方がいい。
勿論僕は承諾した。
しかし、見ず知らずの人の家に上がる以上、身分を証明できるものを提示できればよかったのだが、あいにく僕は、そんなものを何も持っていなかった。
女性は僕に、まずシャワーを貸してくれた。体が潮風で冷えきっていたので、ありがたかった。シャワーから上がると、僕は自分の鞄から、新しいTシャツと短パンを出して、食卓の席に向かった。
畳の部屋に、ちゃぶ台があって、そこに胡坐をかいての食卓だった。そこには、さっきの中年の男と、リュートにじゃれていた、5歳を少し過ぎたくらいの男の子がいた。
「オレ、タケル。お前は？」
少年が僕の隣に座って、そう訊いて来た。
「こら、タケル。お客さんにお前なんて、失礼だろう」
上座に座る男が、新聞を読みながら、少年を叱った。
「なぁ、あのイヌの名前は？」
少年はお構いなしに質問を続ける。
「あぁ、あいつはリュート。それで、僕は……」
言いかけて、言葉を止める。
どうやらまだこの家族は、僕の正体に気付いていないようだ。そりゃそうだろう。まさか連日テレビを騒がしている僕が、朝に大荷物を枕に、砂浜で寝ているなんて、誰も思わないだろう。
騙すのは気が引けるけれど……偽名を使っておいた方が、後々安

心だ。
「えっと、ユーイチ」
「ユーイチ？」
少年は首を傾げる。なんてことはない、男の名前を考えていた、ユータとジュンイチの名前を合体させただけだ。
「ユーイチ！　ユーイチ！」
それでも少年は、僕の名前をしきりに連呼していた。どうやら、僕に懐いてくれたようだ。
見た感じ、新聞を読んでいる男と、あの女性は、夫婦というよりは、親子のようだ。ということは、この少年は父親がいないのかもしれない。
だからかな。僕のような男に、とても懐いてくれる。

「ユーイチくんは、何であんなところに？」

ご飯、味噌汁、納豆、生卵、海苔、卵焼きに鯵の干物――朝食なので、簡素な食事だったけれど、心が弱っていたので、喉に通りやすい食事で助かった。

しかし、僕の事を本当に知らないんだな。もう僕の名前が、ユーイチ、で通っているし。

「ええ――少し頭を冷やしたいことがあって。家出と言うか……旅と言うか」

語れば語るほど陳腐な話だから、かなり話をはしょってそう説明した。

それにしても、今後はこの偽名を、他の人にも使うのだから、ユーイチ、という呼称に慣れなければならない。名前の反応が遅れると、怪しまれてしまう。

それ以上、3人とも何も聞かなかった。

タケルには「イエデなんかしたら、ママがシンパイするぞ」と言われたけれど。

「……」

僕はこの時、あまりに純粋すぎることは、とても痛いものだと知った。

――朝食が終わると、僕の横にいたタケルは、すぐに走り出し、表で待つリュートの許へ駆けていった。僕は一宿一飯のお礼に、洗いものくらいはすると女性に直訴した。

「あらそう？　お店の準備もあるし、助かるわ」

小学校からやっていたから、家事全般は得意だ。洗いものの後、流し台をピカピカに磨くまでサービスした。

それを終えて、僕は表に出てみる。

朝8時の海岸には、まだ人もまばら――地元のサーファーとか、

海岸を散歩する主婦のグループみたいな人しか人がいなかった。堤防の上には沢山の小学生の姿があった。自転車に乗る中高生の姿も見える。僕は反射的に、海の家の陰に体を隠した。

女性が、さっきから海の家の開店準備を始めていた。世間は、海開きが始まったばかりだった。海の家の奥の厨房で、キャベツを次々とざく切りにしているのが見えた。おそらく、焼きそばか何かに入れるのだろう。

海の家の中には、ディスプレイに多くのサーフボードが立てかけられており、きらめく波間で華麗な技を決めているサーファーの写真が多数飾られていた。

男はウェットスーツを着て、ボンベを乗せた船で、海のポイントを所々潜って、何かメモを取っている。恐らく、波の高さなどをチェックしているのだろう。どうやらこの海の家は、サーフィンやスキューバなんかの世話もしているようだ。

家の前の砂浜では、おもちゃ屋で売っている子供用のグローブをはめたタケルが、リュートに向けて、赤いゴムボールを投げていた。

リュートは賢いから、タケルの投げたボールにすぐ走り出し、それをくわえると、タケルの許へ戻ってきていた。いう事を聞いてくれたので、タケルは嬉しそうだ。

「ユーイチ！　見て見て！」

タケルは僕を呼んで、もう一度同じ事をやって見せた。リュートも、タケルにもう懐いたのか、ちゃんと言う事を聞く。

「ごめん、そいつも朝ごはんの時間なんだ。ちょっといいかな？」

そう言うと、リュートはまた、僕の方へやってくる。

僕は手持ちの荷物に入れてきた、二つくぼみのある飯皿に、持参のドッグフードと、洗いものの時に汲ませてもらった、コップ一杯の水を注ぎ込んだ。

「ホント、紐もついてないのに、よくついてくるわね」

タケルの様子をずっと見ていた女性が、僕の横に寄ってくる。

「ユーイチ！」

タケルに呼ばれて、声の方向を向く。
タケルはさっきまで持っていたゴムボールを、僕に投げつけてきた。僕は右手でそれを受けた。
「キャッチボール、やってよ！」
「……」
キャッチボールか……でも、せっかくこの家族に、飯までご馳走になっちゃったんだ。
一芸くらい披露しても、いいかな。せめて、何か楽しませないと。
僕は立ち上がり、ボールをひょいと中に上げると、足でそれを受け止め、ゴムボールでリフティングをした。
「すげぇ！」
タケルが驚くほど、僕のリフティングは、ボールが足に吸い付くような上手さだった。足の入れ替えや、ヒールキックなど、技術を披露してのリフティング。ゴムボールなんで、コントロールには慣れないけれど……
僕はボールを蹴って、タケルに返す。
ボールは基本通り、胸に返るが、タケルはボールをグローブでたどたどしくキャッチする。
僕は両手を開いて、もう一度ボールを呼んだ。
タケルは豪快なモーションで、ボールを投げる。
僕はそのボールを胸で受け、足でボールを落ち着けてから、もう一度ボールを蹴って返す。
「へぇぇ、上手いもんだ」
しとどに濡れたウエットスーツのまま、海から上がってきた男が、こっちに歩を進めながら、言った。
「ホント、ユーイチくん、サッカーでもしていたの？」
女性が訊いた。
「……」
この人達は、本当に僕の事を知らないのだろうか。それとも、僕の事を知っているけど、まさか本物だと気付いていないのか。

「それ、どうやるの？　おしえて！」
タケルはそれを見ると、すぐに僕に引っ付いてきた。好奇心旺盛な子だ。
僕がこのくらいの年の頃は、一体どんな子供だっただろう。もう塾で、高度な勉強をしていたかもしれない。いずれにしても、あまり記憶がない。
「ねえ、お父さん。彼に、頼んでみない？」
「あぁ、俺も同じ事を考えてた」
僕がしばらく、タケルにリフティングのやり方を教えていると、男が僕に話しかけてきた。
「ユーイチくん。よかったら数日、この海の家で働いてみないか？」
「え？」
「俺はナオキ。こっちはミチル。二人でこの海の家を経営しながら、ダイビングやサーフィンの指導もやってる。それにライフセーバーの真似事もな。ちょっと先月まで、サーフィンの大会のために、フロリダに行っていて、この前帰ってきたばかりなんだ。この海の家のアルバイトもまだ見つかっていなくてな……」
「……」
そうか、先日まで海外にいたのでは、ここ半年で騒がれ始めた僕を知らなくても、無理はない……か。
「働くのが無理でも、数日タケルと遊んでやってくれないか？　どうやら君と、その犬の事を気に入ってしまったみたいだし……」
これからあてのない僕にとって、決して悪い話じゃない。
だけど――僕は顔が知れ渡り過ぎている。今のままでは表に出て仕事をすることは出来ない。
「ユーイチ」
タケルが、僕の短パンの裾を引っ張った。
「オレともっと、あそんで！」
「……」
タケルのその純真な瞳を見て、自分が意外に子供が好きだと気付

いたのと同時に、誘いを断る理由が心の中で、溶かされていった。
「――あの」
僕は顔を上げる。
「ハサミを、貸してもらってもいいですか？」
「……」
僕の言葉に、ミチルは首を傾げながらも、家からハサミを持ってきた。
「失礼」
僕はそう断って、ハサミを受け取ると、自分の長い髪をざっくりと切った。砂浜に、僕の髪の毛が落ちて、風にさらわれていく。
「ユーイチくん」
ミチルが声をかけた。
別に長い髪にポリシーがあったわけじゃない。貧乏だった頃、美容院なんかで髪を切る金もなくて、伸ばし放題になっていた時の名残だ。普段髪を切るのが面倒くさかっただけで、そのせいで結果女性に間違われたりもしたけれど。
やがて、髪を1センチほどに切り揃え、僕は顔を上げた。
「あまり、目立つ場所では働けませんが、厨房とか雑用なら喜んで働きます。どうか、よろしくお願いします」
この言葉をきっかけに、僕は海の家　ｇｒｅａｔ　ｏｃｅａｎｓ　ｒｏａｄの居候兼アルバイトをすることになった。

Ｓｕｎｓｅｔ

――後で訊いた話だが、ここは千葉の、とある海岸らしい。ということは、僕は埼玉から一日で、約１５０～２００キロの距離を自転車で走破したことになる。えらく遠くまで来たものだ。

海の家のバイトは、朝８時から仕込みをはじめ、５時まで働いて日給は８０００円。しかも部屋を一つ貸してもらうし、食事つきときている。僕は浪費家ではないし、悪くないどころか、今の生活では考えられない、最高の待遇だった。

海の家　Ｇｒｅａｔ　Ｏｃｅａｎｓ　Ｒｏａｄ　は、主人のナオキと、その娘ミチルとの共同経営だった。ナオキは、サーフィンをする片手間に、この海の家を始めたと言っていた。昔はプロだったらしいが、今ではアマチュアの大会にも多く出場し、そのために海外に行くことも多いらしい。この海で若者にサーフィンを教えながら、夏季は海の家と、ダイビングやサーフィンの指導のダブル経営で、生計を立てているらしい。

僕はそこに夏の間世話になることになった。勿論、これからの行く道を決める、僅かな猶予期間に過ぎない。ここでいつまでも寄生しているわけにもいくまい。それだけはわかっていた。

いずれ僕の正体がばれることも、わかっている。存在を抹消でもしない限り、それをごまかすことは不可能だ。

とにかく今は、誰にも騒がれずに、自分がどうするか考える時間が欲しい。

それさえ分かれば、この人達の前からもすぐに消えようと考えていた。

娘のミチルには５歳になる息子がいた。それがタケルだった。父親のことは深くは訊かなかった。状況を見ればバツイチであること

は明らかだし、僕はデバガメ根性が元々薄い。
しかし、目のない男がいるものだな、と思った。僕と同じくらいの背丈に、すらりとした、女優のような線の細さ、別に派手好きとも、金遣いの荒い、高飛車な女とも見えない。家事もこなす、快活な、素晴しい女性だと思うけど。
いくら年上で子持ちのバツイチだとしても、きっとユータと並んだら、モデルみたいに背の高いカップルとして、街中の人が振り向くカップルになれそうだ。

僕はサッカーでも、勉強でも『一騎当千』の男だ。
厨房でも、それは例外ではなかった。
海の家、Ｇｒｅａｔ　ｏｃｅａｎｓ　ｒｏａｄでは、ナオキはスキューバとサーフィンのレッスンを申し込んでいる。１日各２回の計４回、９０分のレクチャーで、飛び入り参加も可、ほとんどそれに付きっきりだ。
ミチルは家の中の、およそ５０の席と、砂浜で食べたいという客の料理を厨房で担当している。そして毎年、アルバイトは、その注文を聞く役だったらしいが……
「僕に厨房をやらせてください。絶対につぶれませんから」
人目につきたくない僕は、それをミチルに頼んでいた。
「そう？　でも、厨房は一番大変よ？　一人で満員でもさばかないといけないんだから」
ミチルは心配したが、僕は厨房に入り、中をチェックした。
海の家の厨房は、大鍋に常に熱湯の煮えたぎる、うどん、蕎麦などの茹で場に、とうもろこしやフランクフルトを焼くガスコンロ、作り置きしてあるカレーやもつ煮込み、おでんなどが用意されていて、うだるように熱かった。カキ氷や、ビールなどは外の人間が出してくれるらしい。とにかくこれを回せばいいわけだ。
僕がそれを一通りチェックしている間に、海の家は開店となった。

海開き間もないということと、夏休み突入はじめということで、海水浴場は多くの客が押し寄せた。

それでも、僕にかかれば、海の家の厨房を一人で回すことなど、造作もなかった。

焼きもろこしやフランクフルトは火が通るまで時間がかかるから、離れていても、商品が焦げることはない。うどんや蕎麦も、麺が茹で上がるタイマーをかけているし、そのタイムラグを完璧に計算しながら、作り置きの商品を作ればいい。

サッカーでも、集中力と、相手の動きの読み、計算によって、日本屈指のプレーヤーまで上り詰めた僕は、その時間差の計算も間違えず、既に最速の行動が頭の中で構築されていった。故にこの海の家の収容人数程度では、いくら客が入っても、潰れることはなかった。

ミチルとの連携も上々だし、僕の仕事ぶりに、ミチルは驚きっぱなしだった。むしろ料理の提供スピードが速すぎて、ミチルの方が運びきれないくらいだった。

クソ熱い厨房で、地獄のような状態だったけれど、僕にとっては心地いいほどだった。何もしていなければ、これからの自分や、昨日のフラッシュバックに苦しんでいただろう。こうして何かをひたすらやることで、何も考えずに済む状態が、今の自分にはとてもありがたかった。

それでも、営業終了の5時になる頃には、僕は精根尽き果てていたけれど……

死屍累々な状態の厨房を、朝からの筋肉痛がぶり返した体で、閉店作業の掃除を始めた。

やがて掃除も終わり、僕はミチルに呼ばれ、店の外へ出た。

「お疲れ様。ユーイチくん、すごかったわ。あなたの料理のスピードが速かったから、回転がよくて、売り上げはここ5年で今日がトップよ」

「はぁ……」

確かに海の家は、回転率が全てだ。客単価が低いから、多くの客をさばかなければならない。勿論薄利だから、人件費も裂いて。

そういう意味じゃ、日給が８０００円のバイトが一人で厨房を仕切れたなら、上出来だろう。

「一緒に外で、かき氷でも食べない？」

そうミチルに言われ、僕は海の家から、海岸に出てみた。

「……」

目の前には、人気の少なくなったビーチの向こう……暗くなりかけた水平線に、沈みかけの夕日が、海をオレンジ色に、空を群青色に染めるサンセットの光景が広がっていた。

それは、言葉を失うほど美しくて……しばらくそれを見つめていた。

「はい」

ミチルは僕の横で、レモンのシロップのかかったかき氷を差し出した。

僕がそれを受け取ると、ミチルはにこっと笑って、海の家の外に出された、パラソルの下の椅子に座った。僕は店の前の砂浜に直接座り、かき氷を口に入れた。一日地獄の釜みたいに暑い厨房にいて、喉がからからだったので、美味かった。僕は海にも、夏祭りにも縁がなかったから、かき氷を食べるのも、生まれて初めてかもしれなかった。

体をクールダウンさせながら、その静かに迫る美しさを、ずっと眺めていた。

浜辺の熱い砂に、頬を撫でる心地よい風。打ち寄せる波の音――オレンジと群青のコントラストに、僕はずっと見惚れていたんだ。

「ユーイチくんは、海を見るのは初めて？」

隣でブルーハワイのかき氷を食べるミチルが訊いた。

「――僕の生まれた街には、海がないので……」

呟くように、そう言った。

「――そっか」

「……」
「あなた、女の子からもてるでしょう」
「え？」
僕はミチルの方を向く。年上の女性が僕をまじまじと近くで見ているのを見て、僕は少し恥ずかしくなった。
「何となく、分かるわ。あなた、女の子を引き寄せる何かを感じるもの」
「そうでしょうか」
「で？　彼女とかはいるの？」
「……」
僕はかぶりを振った。
「――いました」
僕は答えた。
「過去形なの？」
ミチルは首を傾げた。
「……」
「――ごめんなさい、他人の恋を詮索するなんて、おばちゃんだよね」
ミチルは黙り込む僕を見て、恐縮する。
「いえ」
折節、そのオレンジいるの海をバックに、ウエットスーツにサーフボードを担ぐナオキが帰ってきた。ナオキの横には、ちょこちょこと、タケルが走ってついてきている。
「あ、ユーイチ！」
ナオキは僕の許へ走ってきて、僕の手に持つかき氷を見た。
「――食べる？　僕の食べかけだけど……」
そう言って、プラスチックのスプーンでかき氷をすくって、タケルの口元に差し出した。
タケルは針の先のエサに食いつく魚みたいに、スプーンに食いついた。すると、すぐに頭がキーンとしたのか、顔をしかめた。

「……」

何だか、家族に苦しんだ僕に、このタケルの懐きっぷりは、少し愛しい。その上にほだされて、僕はここにいるようなものだから。

僕はかき氷の入った発泡スチロールの器をタケルに渡した。タケルはそれを食べて、ご機嫌になっている。

「ユーイチくん」

後ろから、ナオキがやってきて、僕の横に座った。

「いやぁ、下手なバイト3人雇うより、よっぽど助かったよ。こりゃ、日給も上げなくちゃならんなぁ」

「いえ、こちらこそ、表に出たくないから、勝手なお願いばかりで……」

「もしよければ、夏の間、ずっとここにいたらどうだ?」

「え?」

「タケルも懐いているし、我々も君という人間が、好きになってしまったからな。あてができるまで、ずっとここにいればいい」

――その言葉をきっかけに、僕はしばらくここに留まることとなった。

それから一週間、僕は毎日、早朝はナオキにサーフィンを教えてもらいながら、海の波のポイントを船で回り、昼は海の家で働き、夜は街灯に照らされた砂浜で、タケルとサッカーをしたり、4人でビーチバレーをしたり、本当の家族のように過ごした。

タケルは僕にべったりで、お母さんそっちのけで、寝る時は僕と同じ布団で寝た。僕はミチルに頼んで、原価をほとんど変えずに、カレーやもつ煮込みなどの味付けを改良させてもらった。その美味しさに、ミチルは太鼓判を押してくれ、それ以降、この海の家のカレーやもつ煮込みは飛ぶように売れ、利益も過去最高を更新し続けた。僕の働きぶりに、ナオキもミチルもご満悦で、僕はすっかり二人にも気に入られた。

それはとても穏やかな時間で……これからも、こんな時間が続けばいいと、おもうような……そんな日々だった。

しかし、勿論それは、しばらくのことに過ぎなかった。僕にはもはや、安住の地はなかった。

Fake

僕がこの海の家に来て、1週間が過ぎた。
埼玉高校から逃げ出してから、携帯も置いてきてしまったから、誰とも連絡を取っていない。それどころか、新聞もニュースもまったく見ない1週間だった。
この家の人達も、あまり新聞やニュースを見ない人達みたいだ。ナオキは肉体労働で毎日疲れていて、仕事が終わるとビールを数本飲んで、すぐ眠ってしまうし、ミチルもタケルの面倒を見ている。情報で一番重視しているのは、海に住む者の生活を左右する天気予報で、それ以外の情報は生活にあまり必要ないようだ。

「――はっ！」
僕はうなされ、飛び起きる。
「……」
呼吸が荒く、汗を掻いていた。
今日の仕事が終わって、厨房で掻いた汗をシャワーで流して、部屋に戻って、畳に寝転がっていたら、いつの間にか、眠ってしまったらしい。
――また。また、あの夢を……
ここに来てから、僕は毎夜、同じ夢にうなされている。
埼玉高校の教室で、友や恋人が親父に次々に殴られ――僕はその親父を血だるまにした挙句、恋人を殴ってしまう。
あのシーンが、毎夜夢になって蘇ってくるのだった。
「……」
そして、その夢を見た後は、決まって左腕に、あの感触も蘇る。
あの時――世界で一番好きな女性を殴ってしまった、あの嫌な感触を。
「くっ……」

僕は頭を抱える。
この夢を見る度に、僕は何だか、気が狂いそうになる。
ようやく手中に収めかけた、生きる意味も、ささやかな幸せも――指の隙間から零れ落ちた。
誰かを幸せにできたら――その対象が、自分の大切な人であれたら。
そう思っていたはずなのに、こんな――何も出来ずに、それを踏み潰されて。
なす術もなくて……
この状況が、自分で招いたことだということも分かっている。自分の考えが、他人への責任転嫁であることも自覚している。
でも――それでも。
――僕は、あの家族を絶対に許せない。
今の僕の心は、どれだけ時間が経とうと、何をしようと、消えることのない怒りの炎が燃え上がっている。
金欲しさ――そんな理不尽な理由で、友や恋人を傷つけ、僕の幸せまでも壊して。
それで――僕は全てを失って。
――そんなの、認められない。
あんまりじゃないか。僕は、ささやかな幸せさえあれば、それでよかった。それほど多くを望んだわけでもないのに、それさえも許されないなんて。
こんな理不尽に、全てを奪われるなんて。
法の裁きを受けようと、僕がすること、しなければいけないこと。
それは、あの家族を潰すことだ。
この夢にうなされる度に、体の疼きが僕をそこへと促す。
家族だからと……卒業すれば縁が切れると、くだらない情で放置していた僕の甘さが、大切な人を傷つけた。
だから――せめて償いたい。
僕の家庭が招いたことを、僕の手で贖罪させて、傷ついた友や恋人

の敵討ちをしてやりたかった。
もう自分の力を有効に使いたいとか、幸せになりたいとか、そんな思いは当になくなっている。
僕は――力が欲しい……
もっと圧倒的な力が。家族に、死よりも辛い罰を与えられるだけの、力が――
「ユーイチくん」
和室の襖越しに、ミチルの声がした。
「夕飯と、スイカを切ったんだけど、一緒に食べない？」
「……」
僕は部屋を出、ビーチサンダルを履いて、砂浜に出た。
海は夜の散歩をする人がまばらにいて……
ナオキとタケルが、同じランニングに短パンという格好で、海の家の会談に腰掛けて、麦茶を飲んでいた。
「すみません。僕までご馳走になってしまって……」
僕は恐縮した。
それは、素性を隠している後ろめたさと、そこまでして、結果的にかくまってもらっている、この家族への良心の呵責がそうさせたんだと思う。
そして――いつか僕は、後ろ足をかけるように、この家族の前から姿を消すだろう。
なんて自分勝手な考えだろう。
「ユーイチ、スイカきらいか？」
タケルは腰掛ける僕の隣に来て、そう言った。
「……いや、好きだよ」
僕はタケルに笑いかけ、頭を撫でた。怒りの炎を隠す、偽の笑顔を向けて……
「さぁ、今日はカレーだ。こうやって表で食べると美味い。ユーイチくんも食え」
ナオキにそう促され、僕は皿に山盛りのカレーを渡された。

「ごめんなさいね。夕飯は毎日この時期は、店の残り物になっちゃって……」

ミチルが言った。確かにここ3日の食事は、僕が一日厨房で格闘して出た残り物だ。このカレーも、焼き残りのフランクフルトが刻まれて入っているし。

「このカレーのレシピ、すごいわね。材料費を抑えてるのに、私のよりもずっと美味しいし……この分だと、カレーの売り上げは、今年は期待できるわ。ユーイチくんのおかげね」

「……」

具はほとんどないけれど、昔作ったカレーのレシピを参考に、一晩煮たカレーを披露した。他にも焼きそばやモツ煮込みなども、僕が一手間加えたことで、味が好評なんだそうだ。

「ユーイチくん、一体君は何者なんだい？」

隣のナオキがカレーを口に含みながら訊いた。

「え？」

「素性は話したくないなら無理には訊かないが……気になってな。君の能力は、並のものじゃない。君のような才気溢れる人が、何故あんな、犬と一緒に家出なんか……」

「……」

そう、今までが詮索されなさ過ぎ、これは当然の疑問だ。

だけど、僕は今の立場を、なんて説明すればいいんだ……

「お父さん、いいじゃない。ユーイチくんが何者でも」

ミチルは当惑する僕に気付いたのか、助け舟を出した。

「ねぇ、ユーイチくん。私達3人とも、あなたが来てから、とっても楽しい気分なの。売り上げもいいし、あなたがタケルと遊んでくれたり、色んな特技を見せてくれたりで……何だか、前から家族だったみたいに居心地がいいの」

「……」

「だから、ユーイチくんはいつか出て行くとは思うけれど……もしよければ、来年の夏もここに来て、いつでも遊びに……」

ミチルがそう言いかけた時、夜の砂浜に、女性の悲鳴が聞こえた。
「何だ？」
ナオキが立ち上がる。僕も、カレーの皿を階段に置き、立ち上がった。
僕達は砂浜を見渡す。
すると、視界の右端で、浴衣を着た女性二人が、おそらく酔っ払いだろう、アロハシャツのボタンを全開に開けた、色黒の男3人に絡まれていた。
「まったく、ああいうのがいるから、海水浴客のマナーが……」
だが、ナオキがそう言いかけた瞬間。
突然、男のうちの一人が、女性の頬に腕を振った。女性はそれを食らって、砂浜に倒れた。
「！」
――ズクン。
それを見た瞬間、あの光景が頭の中に鮮烈に蘇った。
僕の愛する人が、暴力に傷つけられていく瞬間が……その時の彼女の腫れた顔が。
そして、それが休息に僕の心を、怒りで染め上げていくのを。
「やめろ！」
僕はそう怒号を上げ、男達の許へ駆け出していた。ミチルが僕を呼びとめたけれど、その声はもう、僕の耳に届いていなかった。
男達も、僕の声に気付いたらしく、僕の方へ目を向ける。
僕は3メートルの距離を取って、立ち止まる。
「やめろ！　女性に対して手を上げるなんて……」
「何だこいつ？」
一番前にいた、毛先が金髪の長髪男が一笑した。
「こんなヒョロヒョロで、正義の味方気取りかよ？　しかもまだガキじゃねぇか」
「あーぁ、せっかくこの娘達と話してたのに、邪魔しやがって……」
隣の、コーンロウ気味に髪をがっちり固めた男がそれに続く。

だが、一番後ろにいた、少し気の弱そうな、童顔の色黒の男は、僕の顔をしげしげと窺っていた。

「お、おい！　そいつ……サクライ・ケースケじゃねぇか？」

そして、背を向ける二人の仲間達に向けて、そう言った。

「え？」

そう言われ、前に出ていた二人も、しげしげと僕の顔を見る。

「あぁ！　そうだ！　髪が短くなってたから気付かなかったけれど、あんた、サクライじゃん！」

長髪の男が笑顔を見せる。すると、まだ横にいた二人の女性も、僕の顔を見始めた。

「……」

しまった――勢いに任せて出て行ってしまって……正体がバレた。

「アンタ、オヤジ殴って逃げてるって、本当かよ？　何でこんな所にいるんだよ？」

「サクライさんもヒラヤマさんも、高校サッカーに出てないし……何があったの？」

さっきまでのナンパによるムードは一転し、男女とも、僕への質問コーナーへと空気が変わっていた。

「……」

なんて軽挙な行動を取ったんだ……女性が殴られているのを見ていられなくて、飛び出してしまうなんて……

だけど、このままでは僕が、この海にいることがばれてしまう。

その前に、何とかしなくては……

「コラ！　君達！」

そんな中で、野太い男の声がした。

僕達が建つ、砂浜と道路を分かつ堤防代から、一人のスーツ姿の男が降りてきた。背が高く筋肉質で、髪は額がせり上がっていて、短く刈り込んでいた。猿のような赤ら顔だ。

「県警の者です」

赤ら顔の男は、手帳を前に差し出した。

「君達……先ほど悲鳴が聞こえましたが、女性に何かいたずらを？」
口調こそ穏やかだが、その声には迫力が内包されていた。ベテランの刑事といった、威圧的な話し方だった。
「い、いえ、別に……」
男3人は、いきなり語勢を弱め、すごすごとそこから退散してしまった。
「夜道を女性二人で歩くのは危ない。早く帰りなさい」
そう言って、まだ起き上がれない女性の片割れに手を貸し、立ち上がらせると、早々に二人を追い返した。女性二人は、最後まで僕のほうを何度も窺っていたが、警官が睨みを効かせていたので、素直に立ち去った。
「ユーイチくん」
背中越しに声がした。ナオキ、ミチル、タケルの3人が、入れ違いに僕を追いかけてきたのだった。
「大丈夫？　怪我はなかった？」
ミチルがそう声をかけるが、僕はもう、ミチルの声が耳に入っていない。
僕の目の前の、この赤ら顔の男が、僕の目を、射るように凝視していたからだ。
僕の正体にも気付いているようだ……親父を殴ったことで、僕に逮捕状が出たか？
「さて……あなたがサクライ、ケースケさんですね」
赤ら顔の男が、僕にそう訊いた。
――警官に虚偽は、ただ状況を不利にするだけだ。僕は素直に認めた。
「え？　サクライ・ケースケ……」
ナオキが繰り返した。僕の名前を、ユーイチだと思っていたため、驚きを隠せないような声で。それでもナオキが、僕の事を知っているかどうかは疑わしかったけれど。
「この度、サクライ・ケースケくんの失踪届が、埼玉県警から発布

され、伺った次第です」
失踪届――僕の家族がそんなもの出すわけないから、出したのは、校長もいるし、やはり学校か？
「相変わらずだったな、ケースケ」
堤防の影から、懐かしい声がした。僕は声の方向を向く。
影から、ひょっこりと大柄の男が二人、姿を現す。
茶髪のツンツン頭に、人懐っこい笑みを浮かべた男――エンドウ・ジュンイチと、ボサボサ頭に、松葉杖をついた男――ヒラヤマ・ユータがそこに立っていた。
「ったく、女の子が殴られているのを見て、隠れているのに飛び出してくるなんて、お前が本当に頭いいのか疑わしくなるぜ」
ユータが言った。

Ｆａｋｅ（後書き）

多分１９５話くらい（あと7～8話）で第2部は終了です。それ以降はアナザーストーリーをやるか、第3部にそのまま突入するかはまだ未定です。

僕はユータの脇に抱えられている松葉杖に目が行く。
「……」
あの時、ユータは親父に椅子で、脛を思い切り叩かれた。その時の怪我のせいだ。
そういえばさっき、ユータ『も』大会に出ていなかった、と、女性が言っていた。今の時期、埼玉高校が勝ち進んでいれば、二人がこんな所に来るはずはないから、埼玉高校は、もう全国大会で敗退した、ということか。
そんな考えを巡らせている時――
いきなりジュンイチが僕に飛び着いて、体を強く抱きしめた。体が大きくなっても、まだジュンイチより全然小さい僕は、簡単に砂浜に倒れこんだ。
「ははは、何だ、この頭は！」
ジュンイチは、僕の短く切り揃えた髪をぐしゃぐしゃと撫でた。。倒れたまま見る海岸の夜空は、天の川までもがとても綺麗に見えた。
「ジュンイチ……」
「ちぇ、俺も脚がこうじゃなかったら、感動の再会シーンとしゃれこみたかったぜ」
ユータの呆れるような声。
「――何でここが」
言いかけた時、空を仰ぐ僕の視界に、ぬっと人の頭が入ってきた。タケルだった。
「ユーイチ、このヒトたち、だれだ?」
タケルが僕を見下ろしたまま、どんぐり眼をくりくりさせ、首を傾げた。
ジュンイチは、その声に顔を上げ、僕から離れ、立ち上がった。

僕も半身を起こす。
「アンタたち、こいつはユーイチだぞ！　ケースケなんてやつじゃないぞ！」
「タケル……」
後ろにいたミチルが、困った顔をして、タケルの小さい体を抱き上げた。
「――ユーイチ……？」
ユータはその名前を、怪訝な表情で繰り返す。そして3秒後、ぷっと吹き出した。自分達の名前を合体させただけだと気付いたんだろう。
「ユーイチくん」
ナオキが僕を呼んだ。
「君は、一体……」
「……」
もうこれまでだと思った。これ以上、この家族にも嘘はつき通せない。
正直に白状しよう、と、意を決しかけたその時。
堤防の影から、また3人のスーツの男性が降りてきた。
一人は埼玉高校の校長。もう一人は日本サッカー協会の会長。そしてもう一人、一人だけ若い彼は、先日オランダに行った時も世話になった、日本サッカーU-20代表の監督だった。
「……」
僕はその3人の顔を確認し、ひとまずナオキ達に本当の事を話すという思考が分断されて、この来客の思惑を想像し始めていた。

「それでは、私はこれで・・・・・」
考えているうちに、赤ら顔の警官は踵を返し、堤防の向こうへと歩を進めた。
「あ、あの！」
僕は去って行く刑事の背中へ呼びかけた。赤ら顔の刑事は、振り

向いて、ニコと笑った。
「わかってます。しばらくあなたの行方に関してはマスコミへの発表は控えるように、先日決まりましたので。これ以上、パニックの場を増やすのもあれですしね」
そう言って、彼は踵を返した。僕も、それを訊いてとりあえずほっと息をついた。これ以上、というフレーズに、少し引っかかった部分はあったが。
それだけでも、僕を逮捕しに来たのが、警察の目的ではなかったことがはっきりしたので、とりあえずほっとした。
来た客の残りは5人——5人ともそれぞれ、僕に用事があるので同行したのだろう。
「……」
とりあえず、僕はこの人達の話を聞くしかない。だから今、僕から話すことが、何も思い浮かばなかった。
「あ、あの……」
沈黙を破ったのは、ミチルだった。今になって、僕の名前をどう呼んでいいかわからず、呼び方を躊躇したのがわかった。
「良ければ話はうちで……とにかく、中へどうぞ」

ナオキもミチルも、客人を見て何かを感じたのか、海の家に通し、テーブルに上げた椅子を下げ、僕達にアイスコーヒーを出した。
「ケースケ、このひとたち、だれだ？」
タケルはこの一週間、僕が見せたことのない、真剣な顔をしているのを見て、不思議に思ったのかもしれない。僕はタケルの頭を撫で、大丈夫だよ、と言った。
「3人もよかったら、同席してください」
3人ともはじめは、緊張して辞退していたが、僕の過去をまったく訊かずに受け入れてくれた、この人達には、僕と一緒に話を訊いてほしかった。

スーツ姿の3人と僕が向かい合って座り、ユータ、ジュンイチと、ナオキ達がそれを横で見守った。

U-20の監督は、精悍な顔つきをし、肌は浅黒く、優しそうな顔には若々しさが体に溢れていた。イイジマに年齢が近いし、感じが似ている。

もう一人は、体も小さく、歳もかなり召していたが、常に微笑をたたえていて、菩薩のようなお爺ちゃんだった。この人とは、オランダでメダルをもらった時に、激励かいなんかで顔を合わせたことがある。直接の面識は浅いけれど……

話をはじめる前に、僕は少しだけ時間をもらい、ナオキ達3人に、僕の本名と素性を説明し、今まで偽名まで使って騙していた事を謝罪した。

「……」

そうは言われても、あまりの超展開だ。子供のタケルは勿論、ナオキとミチルも、その状況を把握できていないようだった。

「彼のことは、我々の話を聞いているうちに、わかってくると思います。彼も同席を望んでいますし、よければそのまま、我々の話を聞いてください」

そう取り持ったのは、埼玉高校の校長だった。

3人とも、それに怪訝な表情をしていたが、何も聴かないよりは、すっきりしたい気持ちの方が強かったのだろう。ユータ達の隣に座り直し、背筋を正した。

「この度、全国大会に出場できなかったことは、君にとっては無念だったろうね」

優しそうな、サッカー協会会長のお爺ちゃんが、包み込むような笑顔で、僕をねぎらう。

「全国大会、埼玉高校は初戦で3－0で負けた。君とヒラヤマくんが出場していないのでは、他の部員も精神的支えがなかったようだな。エンドウくんも頑張っていたが」

そう言って、会長はジュンイチの方を見る。ジュンイチは苦笑いを

浮かべていた。
「全て僕の不遜の至りです」
僕はそう前置きする。
「そんなことはない」
校長が遮る。
「君は一時期おかしかった時期もあったが、今となればその理由はわかる。家庭のことで色々ストレスがあったのだろう。家庭のことでは相談はしにくかったとは思うが、力になれずに本当に申し訳なかったと思っている」
校長は、手をついて頭を下げた。土下座のスタイルだ。一時は暴走して、校長室でたらふく怒られた僕が、随分と株を上げたものだ。
話さなかったのは、失礼だけど、期待していなかったからだ。県内一の進学校の教師――県立の教師なんて、公務員に過ぎない。恐らく、親と離れて地方の大学を目指せ、くらいのことしか言ってくれないことはわかっていた。僕のレベルで考えれば、京大、阪大あたり。
「あの後、父君は病院へ運ばれた。私も退学届を渡された時、君の両親を見たが――「あのガキの言い分なんか問題じゃねぇ、さっさとこれを受理しやがれ」と、一方的に聞くに耐えない罵声を二人で浴びせてきてね。幸いクラスメイト全員、君が暴走する父親を止めるためには、ああするしかなかっただろうと弁護した。我々も校長室でも、君の両親の異常さを感じていたから、我々もそれを証言した。君の正当防衛だということは、警察も認めた。実際、ヒラヤマくん達も怪我を負っていたからな」
「……」
正当防衛か――それで止まれてよかった。あのまま止まれなかったら、僕はきっとあの場で親父を殴り殺していたかもしれない。それほどあの時の僕は、怒りに支配されていた。
そして、それを止めてくれたのは……
「私もイイジマ先生と、担任のスズキ先生の3人で、エンドウくん

から聞いた、君の今住んでいるアパートに行ったんだが、君が家を飛び出した痕跡が残っていたのでね。最悪の事態も考えて、学校が失踪届を出したんだ。その話を、イイジマ先生がヒラヤマくん達に伝えてね。ぜひ会いたいということで、ここについてきたんだ。大会が終わるまで、ここに来るのは待ってもらっていたんだ」

そう言われて、ユータとジュンイチの顔を見ると、ニコニコ笑って僕の目を覗き込んでいた。

「でも、よく見つかりましたね。こんなところ……」

話を聞いていたナオキが口を挟んだ。

「目撃情報が全国各地であったそうですが、自転車で千葉方面に向かっているのを見た、という情報が多かったそうです。そこから先は、目撃情報が途絶えましたが、この海岸の近くに、彼の使っていた自転車が止められていたから、この辺を重点的に操作したそうです」

ジュンイチがそう説明した。

校長は、これから大事な話をはじめるんだろう。アイスコーヒーに口を付けて、舌を湿らせてから、話しはじめた。

「話の前に、これを見たまえ。多分君は見ていないだろう」

そう言うと、校長は、持ってきた鞄から、2冊の雑誌を取り出し、あるページを開いて、僕の方へ向けた。

右の雑誌には、俯き加減の僕のモノクロ写真が添えられ、大きな見出しで『ファンタジスタ、サクライ・ケースケ。天才が隠し続けた家族との確執と、心の闇』という記事が掲載されていた。

『先日の高校サッカー大会で、全国のサッカーファンを失望させた事件が起こった。先月日本サッカーU‐２０代表を史上初の表彰台に導いた、埼玉県代表埼玉高校の、天才ミッドフィルダー、サクライ・ケースケ（１７）が、退学という形で、夏の全国高校サッカー大会のピッチから姿を消していた。埼玉高校は初戦で姿を消した。そして、その数日後、恐ろしい事実が発覚。何と彼は、両親から幼少時から虐待を受けており、先日彼の周りを騒がせた、中東チームへの移籍話も、両親の金欲しさに、彼には無断で行われた契約であったことが分かった。平成の臥龍と呼ばれ、時代の寵児として、この半年、走り続けてきた少年、サクライ・ケースケ。彼の微笑みの裏には、一体どんな事情があったのだろうか――』

その後には、僕の知っている人のコメントが多数載せられていた。僕が高校時代働いていたコンビニの店長は「彼はいつも賞味期限の切れた食べ物を欲しがった。アルバイトは毎日のようにしていたが、お金を使っているところを見たことがなく、賞味期限の切れた弁当を、いつも大事そうに食べていた」とコメントし、ユータの母親は「世界大会に出る前、有名になって、バイトができなくなって、お金がないから、お金を貸してくれ、と言われた。その時、何か変だと思ったけれど、まさかあんないい子がどうして愛されなかったのか分からない」とコメントしている。

中東チームとの交渉の際、僕に同席した弁護士は「彼はオランダから帰国した際に、中東チームにお金を返して契約を無効にしようとしたが、両親の懐に入ったお金の所在を知らず、取り戻す術がなかった。だから自分を訴えてもらい、その後見人である両親のお金を

裁判所に徴収してもらうことで、お金を返し、契約を無効にしようとしていた。事実、裁判所が彼の家族の口座を差し押さえると、そこには5億を超える大金が入っていたのに対して、彼の口座には、オランダの大会で得た、ＪＦＡからのボーナス分しか口座になく、大会に出るまでは、高校生がバイトで溜めたという感じの、雀の涙ほどの金しかなかった。その上彼は、日本代表が3位に入ったことでＪＦＡから出た、２０００万の特別ボーナスを、迷惑をかけた分として、中東チームに寄贈してしまった。彼は金目的でサッカーをしたわけではない。中東との契約も、金欲しさにしたことではない。むしろ彼は全力で、その契約を上手くたたもうと必死だった」と述べている。

家族が僕の名前で贈賄をもらっていたことも書いてある。なんとその額は、警察が家宅捜索に踏み切ってから僅か3日で、総額で５０００万を超えるということだ。まだ日も浅いから、正確な額ではないだろうけれど。

そして、左の雑誌は、違う雑誌の、別の記事だ。さっきの雑誌の2日後の出版物だ。

今度の記事は、『サクライ・ケースケ宅にこだまする、ファンの悲痛な怒りの叫び！』という記事が掲載されていた。

見覚えのある、僕の実家のある路地に入った所に、１０００人近くの人間が、道を埋め尽くしていた。プラカードを持ったり、手を上げて、何か叫んでいるみたいだった。爆竹か発煙筒か――モノクロではよくわからなかったが、何かに火が点いて、煙を吐いているようにみえる。一部の人は日本代表の背番号１０のユニフォームを着ている。高校生が先頭に立ち、後ろには中年層も大勢いた。東南アジアのどこかで、政権交代を叫ぶデモ集団の写真みたいだった。

『天才高校生、サクライ・ケースケ（１７）の虐待疑惑は、数々押収された証拠の数々により、否定できないものとなっている。これを見たサクライファンの怒りは収まりそうにない。彼が失踪してから、熱狂的なファンの、フーリガン化した抗議が、今でもサクライ

宅を包括している。先日、当誌の『息子にしたい有名人』ランキングで、芸能人、アイドルを押し退け、ダントツトップに躍り出た彼。品行方正、頭脳明晰、眉目秀麗の彼を、何故そのような虐待の的にしてしまったのだろう、と、同じ親として、サクライくんの家族を批判する、４、５０代の主婦の声に加え、同年代の学生ファンの怨嗟の声が、日本列島にこだましている。この騒動はいつまで続くか、そして、彼の今の心中は……当誌は全力を挙げて、失踪した彼の居所を追跡している――』

「これは……」

僕は雑誌を手に取った。

「こっちは大変だったんだぜ」

ジュンイチが僕の横顔を覗いた。僕は雑誌から顔を上げた。

「俺もユータも含めて、埼玉高校の生徒も沢山マスコミの質問受けてさ、お前のことで知っていることがあれば、訊かせてくれって。みんなお前は悪くないって言った。お前のオヤジ殿は無差別に人を傷つけていたから、これ以上被害者が出ないように、お前は俺達のために、オヤジさんを止めてくれた、って、俺達も言った。おかげで今警察は、お前が親父さんを半殺しにしたのは、被害者を増やさないためにしたことだとして、事件性は低いって判断してる。お前の校内の人気が随分追い風になって、正当防衛が成立し立ってわけだ」

ユータが付け加える。

「オヤジさんはあの後、学校、教室の不法侵入と、暴行、脅迫で、病院でおねんねしてる時に逮捕状が出た。意識が戻った本人はいまだに正当防衛だと訴えて、被害者は俺、加害者はお前だと騒いでいるが、誰も相手にしちゃいない。今は川越の警察の拘置所の中だ。顔と骨は酷いもんだが、あつかましい心はピンピンしてる」

「……」

「学校はお前のことに関する抗議の電話が鳴りっぱなしだ。夏休みなのに、学校の先生はみんなその対応に追われてる。でも多分、お

前の家はもっと酷いぜ。お前の家の住所と電話番号とか、家族の写真とか、ネットにばら撒かれてるし、掲示板は大炎上だ。どうやら今は電話線を抜いたらしいが、お前の家族、オヤジさん以外も、もう犯罪者並みの扱いだぜ？」

「いや、多分家族全員、何らかの法的措置が下るだろう。どうやら家族全員、君の名を使っての献金、贈賄を受けていたようだからね。今は家宅捜索が続いていて、調査の段階だが、それの結果次第では、贈賄罪に問われるだろう」

校長が言った。

「・・・・・・」

気が付くと、まなじりから、開いている雑誌に、ぽろぽろと涙がこぼれ出した。僕は、こんな沢山の人に、涙を見せるのが恥ずかしくて、すぐに腕で涙を拭った。

「すまん、無神経だったな。大丈夫か？」

ジュンイチが僕の背中に手を伸ばす。

「ああ、平気だ」

何故涙が流れたのだろう。僕の味方をしてくれる人の行為が嬉しかったからか、それとも、長年苦しめられたが、一応家族だった人達の凋落への寂寥感か、はたまた歓喜か……今の僕にはまだよくわからなかった。

僕は雑誌を置いて、向かい合う中年男性達の方を向いた。

「それで、僕を尋ねてきた理由は？」

その質問に代表して、校長が僕に伏した。もう退学して、校長と生徒の関係ではないのだけれど、急にこういう関係を見せ付けられると、何だか戸惑う。反射的に僕は頭を下げた。学生気分がまだ抜けないらしい。

「かいつまんで話そう。君も恐らくそうだろうが、ここにいる者達全員、君の高校退学には納得していない。君は親を恨んでいよう。ここで自分を捨てた親を見返すために、一花咲かせるのが男ではないかと思う。私情に首を突っ込み、それを煽るようだが、悪趣味と

言わないでくれ」
「・・・・・・」
「これを見てわかるとおり、成績もよく、性格至って謙虚にして直
胆、一時期おかしかった時期もあったが、それも君を取り巻く環境
のせいだと考えれば、合点もいく。それを除けば、3年になってか
らの君の生活態度は、授業にも参加しているし、何の問題もない。
むしろ賞賛に値すると思う。我が校はじまって以来の天才だ、君は」
それだけ言うと、校長は目の前に開かれている雑誌をとんとんと
指差した。
「それを認めての結果がこれだ。みんな、君の味方なんだ。みんな
が君の無念を代弁する動きは、社会現象化さえしている。家族との
喧嘩は、勝負はついた。君の勝ちだ。もう無理に意地を張ることは
ない。君の帰りを待つ人が、これだけいるんだ」
「そうそう」
ユータは口を挟んだ。
「ケースケは、女子高生にとっては王子様、おばさんやおばあちゃ
んには、理想の孝行息子とくる。戻ってこないのは、罪ってもんさ」
「――買いかぶり過ぎだ」
「いや、それは違う」
校長は僕の謙遜を、一瞬で切って捨てた。
「私は君を見て、教育というものを、改めて考え直したよ。教育と
は、君のような、才もあり、向上心もあり、将来を必ず切り開く人
間には、無償にそれを受けさせる権利があるのだと――」
いつもは無駄話の多すぎる校長が、随分大きく出たな、と思う間
もなく、校長は続ける。
「そこで私は、教育委員会に奏上したんだ。君の成績と、部活動の
成績を見れば、上の人間も、重い腰をすぐに上げてくれたよ。こん
な社会現象になったことだしな」
「……」
綺麗なことを言っているが、要するに、教育委員会のおっさん達

は、見殺しにしたら、自分達にもバツが回ることを危惧したのだろう。

さっきユータが、学校にも抗議の電話が鳴りっぱなし、と言っていた。それはおそらく、学校が何故僕の家族の横暴に気付いてやれなかったのか、偏差値ばかり気にして、生徒をちゃんと見ていたのか、という内容の抗議なのだろう。

それならいずれ教育委員会にも、「どうして気付いてあげられなかったんだ」という類の苦情は間違いなく来ることくらいは、容易に想像がつく。最近信用が失墜気味の教育制度において、ここらで世論に媚びておいて、点数を稼ぎたい時期なのだろう。

「君は県の特別奨学生として、卒業までの約半年、学費無料で埼玉高校に戻れる。君はまだ本籍では、退学ではなく長期休学の形を取っているから、戻ろうとすれば、明日にでも戻れるんだ。その上大学の受験費用も全額工面するし、大学に入っても、僅かだが、君に県が、返済無料の奨学金を渡そう、と言っている。つまり、お金の負担は、親と縁を切ったままでも、大学に通うほどであれば、なんとかなることになったんだ」

「・・・・・・」

つまり、世論は親を半殺しにした僕に対して、悪感情は抱いておらず、同情的な声が多いということで――

僕は今すぐにでも、高校に戻ることが出来、その上、大学卒業までの費用を、県が側面からバックアップしてくれるということか・・・・・退学届が受理されていないのなら、僕の今の貯金も合わせて、その奨学金で、高校、大学に通うのは、容易いことだ。

校長の用件は、それで終わったようだ。今度は、Ｕ‐２０の監督が、話しはじめた。

「まあ、こんな状況になって、今更学校には、戻りにくいかもしれない。もし学校にもう戻れないと言うなら、今度は代表として、頑張ってみないか？　我々は勿論歓迎する。次の試合ももうすぐはじまる。君が承諾すれば、すぐに私は君を代表に召集する」

「・・・・・・」
今度は会長の方が口を開く。
「先日の大会に出場できなかった、リベンジマッチのチャンスだろう。それに、君との入団交渉のアポイントを求める電話が、ＪＦＡに殺到している。その中には、何とあのバルサもあるんだ。君が承諾すれば、すぐにプロのリーグに入れるぞ。日本、いや、世界が君を待っているんだ」
「・・・・・・」
「君の才能を放棄し、虐げた家族に、世界に飛翔する、君の姿を見せ付けて、復讐してやるのも、また一つの男の生き甲斐だろう？」
さすが年の功。会長は若い僕の心理をよく見抜いている。それは、少なからず僕をぐらつかせた。
だけど、結論は、もう出ているじゃないか・・・・・・
「それは」
僕は前に手をつき、深く頭を下げた。
「申し訳ありませんが、どちらもお断りします」

皆は声には出さなかったが、理解に苦しむといった顔をした。
「ケースケ……」
ユータが僕をなだめるような声を出した。
「ケースケくん。意地を張るな」
ナオキが、僕を説得しようとした。
「君はこんなことで、足を止めていい男じゃない」
「……」
僕は顔を上げると、目の前のアイスコーヒーを口に含んで、ひとつ咳払いをして、それに答えた。
「お話を拝聴して来ましたが、僕もその通りだと思います。僕はこのまま終わるわけにはいかない――あの家族の手の届かないところまで上り詰めた僕の姿を見せ付けて、家族に復讐しなければならない――僕自身、今でもあいつらのしてきたことに、腸煮えくり返ってますから」
「なら、どうして・・・・・」
校長が苦い顔をする。
「きっと、皆さんの申し出を受けて、サッカーの代表に返り咲いたり、学業の道に戻る道を選べば、数年、あるいは数ヶ月で、簡単にあの家族を見返すことは出来るでしょう。しかし、皆さんの申し出を受けて、満天下にカムバックしたとしても、僕のこれからやることは、どれだけ立派な大義名分を立てても、結局は憎悪に満ちた復讐に過ぎません。そんなもののために、表舞台に戻って名声を得ても、そんなものは次第に崩れ去ります。僕にも既に大義はないのですから」
「……」
「この雑誌に載るように、心から僕を応援してくれる人がいるのは、嬉しいことですが、今の僕には、この人達の気持ちに報いるものは、

もうありません。今僕にあるのは、どす黒い復讐心のみ……今はまだ僕を哀れんではくれますが、僕が次第に、復讐の炎に焼き尽くされる姿を見れば、皆は僕を邪視し、今のように、皆さんの心をつなぎ得ることは出来なくなります。そうなれば結局復讐にも名分は立たず、それどころか、僕の人生に、更に泥を塗る結果となり、今、僕を応援してくれる、多くの人の気持ちまで汚してしまうことになるでしょう。僕は今、乱れきった胸中の中にいても、これ以上、皆さんを傷つけ、悪人のレッテルを貼られることを恐れます」

「……」

誰もが黙ってしまった。

そう――僕はもう、家族への憎しみ以外の感情が、全てぼやけてしまっている。

もう、サッカーをしても、もう、笑うことは出来ない。

それに、きっともう、これからの僕の行動全てが、家族への復讐の影に染められる。

こんなに憎しみにとらわれている自分が間違っていることは、過去に過ちを犯し続けてきた僕自身が、一番よくわかっている。

――僕は、今、明らかに間違っているんだ。人として。

それは分かっている。分かっているのに……

どうしても、この憎しみを、抑えることが出来ない。

忘れようとしても、目を閉じると、友が殴られたシーンが蘇って、心が紅蓮の炎に苛まれる。

話を聞いた限りでは、あの家族は、僕が手を下さなくても、僕を現状支持してくれる人や警察、法が裁きを下し、勝手に滅びるだろう。

でも――僕はそれだけじゃもう収まらない。

「僕は、自分のこの手であの家族に裁きを下す。法が許さなくても、世間が後ろ指指しても関係ない。絶対に、あいつらを許さない……」

自分の今の感情を、僕は初めて口にする。

それだけで、僕の胸は、ざわざわと蠢き、苦しくなる。自分の声に棘が纏うのもはっきりと感じるし、気が付けば、自分の拳を強く握

り締めていた。
もう、体中が、あの塵芥（ゴミ）共に罰を与えたくて、仕方ないと疼くんだ。
そんなものに、もう誰も巻き込めない。巻き込むわけにはいかない。
それをしてしまったら、僕も結局、自分の都合だけで周りの人間を無差別に傷つけ続けた、あの家族と同類になってしまうから。
「それに……」
僕は脇にいる、ユータ、ジュンイチを見た。
「僕が勉強でも、サッカーでも、結果を出せたのは、ここにいるヒラヤマくんやエンドウくんや――色々な人の支えがあってのことで。それに気がつかなかった頃は、僕はどこにでもいる人間に過ぎなかった。家族にいいようにされてた頃は、集中力を欠いて、心身共に散漫で、サッカーもちょっと技術のある程度の一ボランチに過ぎなかった。勉強もちょっと出来るってだけの一生徒に過ぎなかった。世界の名選手達が、私的な恨みのために、サッカーをあそこまで芸術的レベルに高めることが出来るでしょうか？　考えてみれば、当たり前なのに――あの頃の僕は、そんなこともわからなかった」
「ケースケ……」
ジュンイチが、しみじみ僕の名を呼んだ。
「そして、今の僕は、再びそれを見失いかけています。だから、今の僕は、もう臥龍と呼ばれた力は、もうないでしょう。今のままでは、表舞台で成功して、華やかな姿を家族に見せつけることもかなわないでしょう」
「怒りや憎しみで、道を踏み外すのか？　冷静な君が、怒りで道を見失うか？」
校長が強い語勢で言った。
「間違っているのはわかっている。だが、あの家族と同じ血が流れているという気持ちの悪さが、僕をどうしようもなく拘束する……生まれてきて、自分の血を嫌悪しないことなどなかった。そして、今僕は、それが無性に憎くてたまらない。だから――終わらせてやるんだ。僕の、この手で……」

「……」

「正義とか、倫理じゃない。それが出来ないなら、僕は僕を許せない……僕の甘さで、大切な人まで傷つけたのに、こんな誰かに後押しされただけの裁きで終わりになんて、僕には出来ない」

既に、そこにいる誰もが、色を失っていた。いつもは冷静で、穏やかな顔色をした僕が、これだけの決意で復讐戦に望もうとしているとは、想像できなかったのだろう。

「それに、このままおめおめと、皆さんの申し出に甘えてしまって、皆さんの援助の下で、復讐を成就しても、あの家族は大して堪えないでしょう。このどん底から、自力で這い上がって、復讐を成就してこそ、本当の男の本懐であると、僕は信じますが……」

僕は、ここで自分でも気付かぬうちに、自らの邪心を吐露した。僕はこの時から、家族をより激しい痛みに苛むことを考えていたのだ。

そこにいる誰もが、僕の隠された憎悪を垣間見て、ぞっとしただろう。言葉は柔らかだが、僕の、邪心を纏った、復讐への決意を訊いて、皆はもう、何も答えなかった。

そう、目の前にいる男は、メディアやテレビを通じて見た、サクライ・ケースケじゃない。いまやただの復讐鬼なんだ。

そこにいる誰もが、僕の言に反論の余地を失っていたので、しばらくの間、誰も口を開かず――自然と解散になった。

この時、臥龍、サクライ・ケースケは死んだのだった。

時代の寵児だとか、そんな不慣れなお芝居はもう終わりだ。今から僕は、一介の人間に戻る……

Faith

随分長い時間が経ったようだったが、話していたのは、ほんの一時間にも満たなかった。僕は、ユータ、ジュンイチと共に、3人の後姿を見送った。二人はナオキに頼み込んで、ここに一晩泊まるらしい。ナオキ達も、二人が僕と積もる話もあるだろうということを察して、すぐにそれを承諾した。

僕は溜息をついて、海の方を向いた。夜の海に満月が反射して、星が美しかった。

でも僕の今の気持ちは、春に愛する人と一緒に桜を見た時の気持ちとは、明らかに違っている。憎悪を消化しきれない。前はこうして友や恋人と一緒にいるだけで、それで十分だったのに。

「ケースケ、本当にいいのかよ」

隣にいるユータが訊いた。

「今は自分のすること、すべきことを考えるよ。大学に行こうと思えば、試験を受ければ大学には行けるし。サッカーだって、ナマらせなければまだいつでも出来る。今は気持ちの整理をしたいんだ」

「……」

「心配するな。やりたいことを探すって事に関しては、退学しても何も変わってないから。金銭援助がなくても、今なら貯金で大学4年くらい通うのは、いつでも出来るんだ。やろうと思えばできるそれを、今はやる気が起きない、もっと考えてみたいってことだけ」

僕は精一杯強がって見せたが、先程の僕の決意を聞いたばかりの二人だ。二人とも、ばっちりこっちの思いを見透かしているような目をしていた。

自分でも発した言葉が酷く萎えていることがわかった。考えると疲れるし、怖くなってくる。僕の言う、すること、とは、詭弁を並べても、回り道をしても、復讐には変わりないのだ。

しかも、サッカーも勉強も奪われた今、僕はどうすればいいのか……

行動にも規制がかかるし、身動きも取り辛い。この日本に、もう僕の居場所はどこにもない。

僕達3人は、しばらく海を見つめていた。もう砂浜には誰もいなかった。波の音だけが、僕達の心に響いていた。

「ユータ」

僕は夜空に浮かぶ月見つめたまま、言った。

「お前、あの時、僕に言ってくれたよな。もうこれ以上、あんな奴の犠牲になるな、って」

「ああ――」

ユータはしみじみ返事をした。どうも感傷的になっているらしい。

「随分昔の話みたいだな。あれからまだ10日も経っていないのに」

「でも、僕は結局あいつらから抜け出せなかったよ」

目の前で、夏の終わりを悲しむように、大きな音を立てて、波が寄せては返して行く。僕にはそれが慟哭に聴こえた。自分の目に、うっすら涙が溢れ出したからだろう。聴こえた潮騒が、僕は何故か悲しい響きを、僕の耳に残した。

「馬鹿だよな、僕は。理屈じゃわかっているのに・・・・・」

きっと――僕もこの潮騒と同じなのだろう。寄せては返し、寄せては返し――それでも結局、さらった砂を取り逃してしまう。僕もこの潮騒のように、手繰り寄せた幸せを、取り逃がしてしまったんだ。いつかは手繰り寄せられそうに見えた幸せは、決して一所におさまらない……

「アニメのフィギュアみたいなもんだな」

海を見つめたまま、ユータが言った。

「は？」

僕はユータの目を覗き込む。

「ほら、あれって一部の人には、ものすごいプレミアがつくんだろ？　俺にはその価値はわからないけどな。他にもそんなものは色々あるだろ。昔の駄菓子のおまけとか、某アニメの消しゴムとか、ヴィンテージのジーパンとか、大リーグのホームランボールとか。他

の奴から見たら、ゴミ同然でも、そいつにとっては大事なものってやつが。ケースケの気持ちだって、他人から見ては無価値でも、お前にとっては大事なことだってだけの話だ。対象がフィギュアか、お前自身の心の問題かって差だけさ」

「――もしかして、価値観の違い、ってことを言いたいのか？」

「まあ、そうとも言うかな……」

ユータは鼻をかいた。

「そうだな、ユータの言うとおりだ」

ジュンイチが口を開く。

「三国志でも同じだろ？　玄徳は、漢王朝を復興させるために戦った。玄徳の敵の曹操は、漢を滅亡に追いやった。昔から玄徳が正義とされることが多いけど、実際にはどちらがいいか悪いかなんてことは、一言に言えるものじゃないだろ？　三国志の読者には玄徳派もいれば、曹操派もいる。お前の気持ちも一般常識と両天秤にはかけられない」

「……」

「更に孔明について言えば、当時弱小だった玄徳についたんだから。頭がいいってことが、イコール多数派に付くってことじゃないだろ。あの孔明だってそうなんだぜ？　ケースケがその道を選んだのも、必然の中の偶然ってやつだろ。俺はそう考えるよ」

「――そうなのかな」

何でだろう。僕はいつもこいつに慰められている。こいつが、僕にとってかけがえのない奴だってことに気がついたのは、つい最近のことだったのに。化石的な表現だが――何だかずっと前からこいつのことを知っていたような気がする――この良き友のことを。

「俺は難しいことは言えないけどさ……」

ユータが、ボサボサの髪の毛を掻きながら、松葉杖をついて、海の方へ二、三歩前に出て、僕らに背を向けた。

「お前は今日、ムチャクチャでかいものを背負ってしまった。だけど、その中には、俺やジュンや、今もお前の家を囲んでるファンの

思いも背負ったことも忘れるな。お前の家族への思いも並々ならんものだってことはわかるが、その人達の想いに報いることも、決して軽くはないぞ」

「……」

「それを見失うなよ。出来れば、どんなやり方でも、ケースケはもう一度這い上がって、俺達の前に姿を現すだろうって、俺は信じてるぜ」

夕日を見つめながらそう言うと、ユータは体だけ向き直り、８０年代アイドルのスマイルで、松葉杖の先を僕に向けながら、言った。

「何せお前は、俺が生まれて初めて惚れた、男、だからな」

「――何だよそれ」

「俺の好きになった男は、この運命も変えられる奴だって信じてるってことさ」

「……」

「俺はお前を信じている。たとえお前が道を踏み外して落ちぶれても、最後の最後までお前を信じぬくぞ。だからよ、頑張ってみろや」

僕はユータに、松葉杖を持っていない方の手で、腹を軽く小突かれた。

「――ありがとう」

自分でも予想外に、優しい声が出た。

「まあまあ、今は俺達の再会を楽しもうぜ。時間はたっぷりある」

――その後、夜の海で僕達３人は、思いきりはしゃいで、浜辺で遅くまで語り合った。二人が調達した酒を、夏の月と、空に広がる満天の星――天の川を肴にしこたま飲みながら、僕達は、今の状況さえ忘れて、笑い合っていた。

あの悪夢の時間の直前――僕達は夏の大会後の、海への一泊旅行を計画していた。それがまさかこんな形になってしまうとは、思ってもみなかったけれど……

「あー……酔った」
堤防に並んで座って、僕達は、夜の海を眺めていた。水平線の向こう――もうどこからが空なのか海なのか、真っ暗でよくわからなかったけれど、その暗闇の大スクリーンの真ん中で、空にあるはずの満月が、海に反射しているのが見えた。
「相変わらず、僕は酒が弱いな――一度もお前らに勝てない」
僕はぶるぶる頭を振った。
だけど二人は僕の両脇で押し黙っていた。随分としおれて元気がない様子だった。
「おい、どうしたんだよ。いつもは酔っ払うとケタケタ笑ってるくせに、今日は」
僕は立ち上がって、二人の顔色を伺った。
「実を言うとさ」
しばらくして、ユータが持っていたビールの缶を、脇に置いた。
「俺達、ここへは、お前にぶっ飛ばされるの覚悟でここに来たんだよ」
ユータはそう言ってから、ジュンイチに目配せをした。するとジュンイチは、ああ、と、頷いた。
「――何で僕がお前らを？」
意味がわからなかった。呆気に取られた僕を、ユータがバツの悪そうに見ている。
「俺達が、お前の弱点になった。そして、お前の苦しみに気付いてやれなかったからさ」
「……」
ジュンイチが口を開く。
「お前が止めたのに、俺達はお前のオヤジに手を出した。返り討ちにあうこと、お前はわかっていたんだな。お前は俺達に傷ついてほしくないと思ってた。なのに俺達が不用意に飛び出して、お前のオヤジ殿に倒されたことで、お前、壊れちまったんじゃないかと思ってな」

「……」

「お前、家族に虐待されていた時は、きっと、生きるために従うしかなくて――あの家では最下層だったんだろ？　それが急に、お前がこうして満天下に飛翔しちまったから、お前等家族は面白くなかったんだろうな。おまえ自身にいくら攻撃しても、何も答えなくなってしまって……だから、俺達に目を付けたんだ。お前の家族は、お前の幸せよりも、お前をもう一度最下層に引き摺り下ろそうとしたんだろう。そうじゃないと、家で自分達が居場所を失うから……」

「……」

すっかり酔いが覚めた頭に、あの家族の顔が浮かび上がった。何一つ人間らしさを教えてくれなかった母親、わがまま放題の祖母、僕をいつまでも蔑んでいた妹、そして、あのクソ親父の顔。

僕の幸せを、これっぽっちも望んでくれず、家族で一人だけ幸せにありつこうとするなら、その幸せを壊してやろうと考えるような人間だった。

「そして、それを突き止めた。お前を変えたのは、お前の周りにいる人間だった。そして、あのクソ親父殿は、お前を攻める事を止め、そこを攻めにかかった」

「……」

「今まで弱点を作らないよう、力を求め続けて、完璧に武装していたお前が、作ってしまった唯一の弱点が、俺達になってしまったわけだ・・・・・俺達があいつに殴られなければ、お前はあそこで冷静さを失わなかったはずだ。もっといい対処が出来たはずだ」

「・・・・・」

ジュンイチが言う。

「俺が言うのもなんだが・・・・・俺達はお前を、一時は救うことが出来たかも知れん。だが、同時にお前の最大の弱点になってしまった。俺があの親父に一発くらわされた時、ぶっちぎれたお前見てわかったよ。お前が今まで自分を追い詰めていたのがさ」

「……」

「諸刃の剣ってやつだな……俺達は。ダチなのに、お前の苦しみに、ちゃんと気付いてやれなかった。挙句お前を追い詰めてしまった」

「違う」

僕はいきり立った。そして、二人とちゃんと向かい合い、言った。

「例え諸刃の剣でも、その剣がなければ、僕はずっとあのままだったんだ。お前達が、僕に勇気をくれたんだ。わかったことも沢山ある。それは何にも変えがたいものだった。むしろ感謝してるくらいだ。お前達がいなければ、あそこからこうやって逃げ出す勇気も出なかった。お前達も、半年前、怪我して僕が病院に運ばれた時、僕に言ってくれたじゃないか。友達が傷ついて、放っておけるか、って。それと同じさ。僕だって、お前達が傷ついたら、黙っていられないさ」

「……」「……」

「ユータ。さっきお前が言ってくれたけれど、僕もお前らに惚れこんでる――誇りに思うよ。ありがとう。お前らに出会えて、本当に良かった」

僕は、軽く微笑んで見せ、そして、手を伸ばした。

「初めに会った時は、お前達が手を差し伸べてくれたよな――今度は僕がやるよ。これまでも、そしてこれからも、僕はお前達を、最高の親友だと思っている。これからの僕は、自分でもどうなるかはわからないが、それでもお前達が僕を信じてくれるなら、俺はこれからも、お前達が僕を友と呼ぶに恥じない男になる――その志は、絶対忘れないから……だから、僕を信じてくれないか？」

「……」

僅かな沈黙。しばらくしてからジュンイチが噴出した。

「照れるからやめてくれよ。ケースケにそういうことされるなんて、むずがゆいぜ」

と言いながら、ジュンイチは僕の手を握り、固く握手した。

ジュンイチの目には、薄く涙が光っていた。僕の手を強く握る手は、まるで自分の心の温度まで伝えるかのように、熱かった。

そして、ユータの方へと手を向けたが、ユータはバツが悪そうな顔をして、それでもほんの軽く手を握って、言った。
「へへ、そんな恥ずかしい台詞、よく言えるぜ。さすがケースケだな」
ユータが
「だが、それがケースケなんだな。バカな奴だが、それ以上に純粋な奴だ。純粋だからこそ、バカな奴で、損得勘定では動けない、まっすぐ過ぎる男なんだよな」
「……」
ゆっくりと手を離し、そして今度は、しっかりと僕の目を見据えて、言った。
「でもよ、あの娘のことは、どうするつもりだよ」

「……」

その話題に触れられた時、僕の胸に、ちくりと痛みが走る。

あの娘――この１週間、何度忘れようと試みたことか。そう試みる度に、左腕に残る感触が蘇っては、その感触が体全体を締め付けてきた。

「ケースケ」

ジュンイチが僕を呼んだ。

「お前なら、不思議に思ったはずだ。どうして警察が、お前があそこまでオヤジ殿を痛めつけたのに、それがここまで正当防衛として認めたかを」

「……」

「それ、全部シオリさんのお陰だぜ」

「え？」

僕は顔を上げると、ユータが僕を見た。

「彼女は俺達に、一枚のＭＤを託したんだ。中身を俺達も聞いたが、それはお前が家族に順繰りに罵倒された後、暴れ回る家族にメチャクチャにされるリアル音声だった」

「……」

あれを――シオリは、あれをリークしたのか。

「正直鳥肌立ったぜ。あの音声聞く限りじゃ、ありゃ人を殴ることに躊躇ない人間の言動だ。お前があの家族に日常的に暴力を振るわれているってのが、すぐわかったよ」

「俺達はそれを聞いた後、シオリさんに頼まれたんだ。このＭＤを、二人で警察、マスコミにありったけリークしてくれって。私が、ケースケくんが今まで二人に話さなかった過去を、私の知る限り、全て教えるから、それを自分達だけが知っていたように、記者会見で話して欲しい、って。無名の女の子の自分が言うよりも、あなた達

二人の方が、世間が耳を傾けるし、信用性が増すから、って。その通りになったよ。あのＭＤを俺達がリークしたことで、お前は世間を一気に味方につけた。大きな追い風が吹いた」

「……」

「俺達は記者会見を開いた。記者会見で喋ることの内容は、シオリさんがほとんど全部考えてくれた。シオリさんの考え通りに記者会見は進んで、情報操作が成功した。お前が今まで家族からひどい仕打ちを受けてきて、お前の行動はやむをえない行為だったと、世間も警察も認めるように仕組んだんだ」

「彼女が……」

「全く、すげぇ女の子だよ。たった一人で世間の情報を意のままに操って、お前の身を守りやがった」

ジュンイチがビールに口をつけた。

「しかし――あの娘にお前が惹かれた理由がその時わかったぜ。お前、あの娘には、何でも話していたんだな。家族のことで苦しむお前の心の棘を、あの娘は抜くことが出来たんだ。どんな魔法を使ったのかは知らないがな」

「……」

魔法、か……

確かに、あれは魔法だったのかも知れない。『肯定』という名の魔法を、彼女は僕にかけてくれた。

その魔法を、彼女はずっと、僕にかけ続けてくれた。だから僕は、どこまでも天に向かって突き進むことが出来た。

なのに……

あの一瞬、親父が彼女を殴ったことで、その魔法が解けてしまった。

その魔法は、今も僕の心を一瞬で埋め尽くした、闇に食われたままだ。

あんなに、彼女のことが大好きだったのに――

どうして、あの時、あの家族の伸ばす闇の触手に捕まったんだろ

う……

僕達3人の間に、潮騒の音が空しくこだまする。

「――彼女は、元気か？」

僕は二人に問い質していた。

「彼女は今、どうしている？」

僕の口調は激しくなる。

彼女の美しい顔に、大きな傷をつけてしまったのは、僕だ。彼女が今も息災であるかは、ずっと心残りだった。

「――わからん」

ジュンイチが言った。

「え……」

「あの日以来、俺達もシオリさんには会っていない。家族の話じゃ、部屋に閉じこもって、家族ともろくに会話もしていないらしい。聞いた話では、食事もろくに取れていない有様のようでな。俺達に指示を出したのも、シオリさんの家族を介しての手紙でだ。あれから俺達も、マイと3人で、シオリさんの家に、よく見舞いに行っていたからな」

「そんな……じゃあ、顔の傷は？」

僕はまくし立てるような口調で訊く。

「何とも言えないそうだ。あれから家族も、彼女の顔を見ていないらしいからな」

「そんな……」

でも、それはそうだ。あんな傷をつけて、年頃の娘が、外なんて歩きたくもないだろう。傷を見せる度に、彼女は、世界で一番大切な家族に、心配をかけることになる。

――ちくしょう。

あの娘は、あんなに綺麗なんだ。笑った時の顔は、本当に可愛いんだ。

僕の付けた傷のせいで、彼女は二度と、笑えなくなるかもしれない。あの笑顔を取り戻すことが、出来なくなるかもしれない……

僕は、女の子に、そんな傷を……

「なぁ、ケースケ」

落ち込む僕に、ユータが声をかける。

「女心に疎いお前でも、わかっていることだと思うが、一応言っておく。あの時、シオリさんがお前に殴られなかったら、お前はあのまま両親を、間違いなく殺していた。シオリさんは、お前を止めるためには、正気に戻させるだけのショックを与えるしかないと思った。だからお前が、オヤジ殿を殴るために振り上げた、殺意のこもったパンチの中に飛び込んだんだ。彼女は、身を挺して、お前を殺人者の汚名から守ったんだ」

「……」

「何故そこまでしたと思う？　お前の足をこんなことで止めさせないためさ。お前はこの先、多くの人を救う――こんなところで死なせられない。シオリさんは最後まで、お前の語っていた志こそが信実だと信じた。そして、それをお前なら出来ると信じた。あの娘は最後まで、お前の志を諦めなかったんだ」

「……」

「ほら」

ユータが僕に何かを投げてきた。僕はそれを両手でキャッチする。

それは、空色の便箋だった。こんなものが風の抵抗も受けずにまっすぐ飛んできたのが少し意外だったけれど、触ってみると、何か硬い四角形のものが入っている。

「シオリさんから預かってきた。お前宛だそうだ。恐らく中身はMDだろう」

そう言われて、僕は封筒を見る。金色のシールで封がしてあり、それが開けられた痕跡はない。ユータ達も中身は分からないようだ。

表には、住所もない――まあ確かに、今の僕は住所不定だけれど――僕の名だけが書かれていた。楷書のお手本のような、丁寧な字で。僕の名前なんかを、心を込めて書いたのだろう。そんな律儀さが伝わるような、彼女らしい字だった。

「・・・・・・」
「見るのは、酔いが覚めてからの方がいいんじゃないか？」
「ああ・・・・・・」
僕は傍らにあった、ビールの缶を見た。
「酔いなんて、もう覚めちゃったけどな。でもそうする。ちゃんと身を正してから、読むことにするよ」

その後飲み直したが、やがて二人はペースを上げ過ぎたのか、僕との再会に、気が緩んでいたのか、大会直後で疲れていたのか、張り詰めた糸が切れたのか、へべれけに酔っ払ってしまった。僕はナオキとミチルにも手伝ってもらって、二人を和室の布団に運んだ。
既に時間は１１時を過ぎていた。既にミチルはタケルを寝かしつけていたようで、二人を寝室に運び終えると、途端海の家の中は静かになった。
「ねえ、ちょっと居間に来てくれる？」
２人を２階の部屋に運び終えて、３人で一息ついたところに、ミチルが神妙な顔で、僕に命じた。既にナオキは居間に降りていっていた。僕も怪訝な思いを抱えながら、初めに朝食をご馳走になった、ちゃぶ台をはさんで、向かい合って座った。
「酔ってるのかい？　酔ってるなら、話は明日の朝にするが」
「いえ……酔ってはいません」
酔いはすっかり覚めきっていた。
ミチルが僕に麦茶を入れてくれた。僕はすぐに口をつけた。やはり味では同じ麦が原料でも、僕はビールよりこちらの方が性に合う。コップを置くと、すぐに手を組んでちゃぶ台に置いていたナオキが口を開いた。
「ケースケくん、と、呼んでいいのかな？」
ナオキが首をかしげた。
「――はい」

僕も遠慮がちに答える。
「……」
そこでしばし沈黙。
「今日ほど驚いた日はない。ケースケくんが、これほどすごい男だったとは」
ナオキが口を開く。
「……」
「私達もさっきまで、あなたの事を、ネットで調べてみていたの。私達、少し前まで海外にいたから知らなかったの……すごいのね、あなた。サッカーでは既に数億の値が付いている選手で、勉強は全国の高校生の頂点だなんて」
ミチルも驚きを含んだような声で言う。
「すいません……いつかは僕の素性を話そうと思っていたのですが……」
「話したくなかった気持ちはわかるよ。警察とか、色々と事情もあったのだろうし。それに、話の場に、我々も立ち合わせてくれたしね。嬉しかったよ」
ナオキは僕の目を、優しい目で見つめていた。それを見て僕は、何だかリラックスして、肩の力を抜いた。
「それに、確かに君は我々に素性を隠していたのは事実だが、だからといって君が誠意なき人間だとは思わない。この一週間、君は実によく働いてくれていたし、君のお陰でこの海の家は大助かりどころか、利益を大きく伸ばした。タケルも君に懐いていた。子供は悪い人間には懐かないものだ」
「――ありがとうございます」
僕は深々と頭を下げた、この二人が、嘘をついていた僕を温かく受け入れたことが、素直に嬉しくて、自然と頭が下がった。
「しかし――君はこれからどうするつもりだい？」
ナオキが単刀直入に訊いた。
「まあ、私は君の保護者じゃないが……」

保護者――僕の保護者は、僕を『保護』してはくれなかった。そういう意味では、血のつながりはなくとも、ナオキやミチルの方が、よっぽど『保護者』だった。

「すいません。本当はよくわかってないんです」

僕も率直に言った。

「ただもうすぐここも、僕の家みたいにマスコミやファンが押し寄せるかもしれません。その前になんとかしなきゃ、とは思っていますが……なにぶん今起きていることが、頭の中で整理しきれなくて。まさか地元であんな騒ぎになっていることも知りませんでしたから」

「まあ、そうだろうな」

ナオキが頷いた。

「……」

沈黙。

「それでね、ケースケくん」

今度はミチルが、口を開いた。

「さっきの話を聞いて、私、お父さんと考えたんだけど……」

そこまで言って、言い渋るような仕草を見せた。

「でも、私達の勝手な意見だから、聞き流してくれてもいいからね？」

そう前置きした。僕は頷いた。

「私達思ったんだけど――ケースケくん。君はここにいない方がいいと思うの」

Ｎｅｖｅｒ－ｇｉｖｅ－ｕｐ（後書き）

さて、第2部がもうすぐ終わるのですが、いまだに第2部が終わってからのことを決めていないという…
そのまま第3部突入か、それともアナザーストーリーを挟むか…するとすれば、ジュンイチとシオリ、どちらにするか…作者はいまだに悩む今日この頃なわけでして。

なんか最近また読者数が増えてくれたようなので、もう一度告知しておきます。第2部終了後、すぐに第3部に行って欲しいか、それとも、別キャラ目線での話を書いて欲しいか。何か意見をあれば、感想などに是非どうぞ。
シオリのストーリーは、埼玉高校入学から、ケースケ達との出会い、そして、ケースケとの出会いで少しずつ恋をしていくシオリの心情のストーリーで、ジュンイチのストーリーは、サッカー全国大会決勝戦前夜、ジュンイチがケースケ、ユータとの出会いを回想する話です。
別になくてもいいというのならば、すぐに第3部に行きますので…

「……」

「あ、別に、出て行けってことを言っているんじゃなくてね……」

ミチルは僕の目を見て、かぶりを振ったが、また続けた。

「あなたはもう、正体がばれた以上、ここにいても何もならないわ。この海に、あなたが欲しいものは、何もないもの。それに、もうあなたをここで働かせるにも、きっともうすぐ出来なくなってしまう」

「……」

その通りだ。今の僕は海の家の仕事をするにも、誰かにかばわれながらでしか仕事が出来ない。もう僕は、一人ではろくに身動きも出来なくなってしまった。

僕の捨て身の攻撃は、明らかに効いた。校長が見せてくれた雑誌に載っていた、僕の家の前で、フーリガン化しているファン――マスコミやネットの中では、木根をかじるプレーリードッグみたいに、あの家族を根底からぶち壊す総攻撃が、もうはじまっているようだ。

きっと妹は高校にも通えなくなったはずだ。祖母は今頃発狂しているかもしれない。母は間違いなく買い物にも行けなくなった。親父に至っては、生徒の前でユータ達を傷つけている。逮捕どころか、間違いなく懲役だろう。

だけど僕もそのリスクは背負った。これだけ大々的にマスコミに騒がれては、僕のクソみたいな家庭環境は、全てばれてしまった。大学に行っても、就職試験では、それはかなりのマイナス点となるだろう――いや、そんなことはまだいい。まるで壇ノ浦の平家みたいに、盛者必衰の縮図となった僕を、誰もが容赦なく嘲笑、冷笑するだろう。一時は世界を掴みかけた男が、ただの中卒になるんだ。

一体、それが何を意味をするのか。

考えれば、不安は尽きなかった。

そんな僕に、ナオキは、柔らかな声で、言った。

「ケースケくん。世界に夢を託してみないか？」
「――世界？」
いきなり発せられた、漠然とした言葉に、僕は思わず聞き返した。
「ほとぼりがさめるまでと言っては失礼だが、今の君は、もう日本で穏やかに暮らすのは難しいだろう。それなら世界に出て、自分について見直す旅というのも、決して君にとって、無駄にはならないと思う。少なくともこの海にいるよりはいい。残念だが、君はもう、私やミチルなんかでは及びも付かないほどの力を持っている――君がここにいたいのなら、それでも止めはしないが、君の力になることはできない」
「……」
「君の力を持ってすれば、必ずうまくいく。俺も現役時代は、アメリカやオーストラリアに、波を求めて放浪したもんさ。サッカーでも、勉強でもない、自分の可能性を探しに行くんだ」
「……」
世界……世界を旅する……
今まで考えたこともなかった。
「日本を出て、君を応援する人、君を批判する人、色んなことから逃げるなんて思わなくていい。今からの脱出だ。家族や周りの人間に、メチャクチャにされ続けてきた、君の今の人生からの脱出だ。そう思えばいい」
「……」
そうか。執着には、離こそが大事と言う。
どちらにしても、今の僕は、強い執着――あの家族に、僕の手で裁きを下す――そんな復讐心に取り付かれている。
一度日本を出て、頭を冷やしてみるのもいいかも知れない――どうせこの国では、何をしても、もう僕は過去の栄光と、家族の汚名が纏わりつくのは必至だ。なら、全てリセットするためには、日本を出て、誰も僕を知らない土地に行くしかない。
何より――そうすれば、僕は、僕の私的な復讐に、誰も巻き込ま

ず、誰にも迷惑をかけずに済む――このままでは、ナオキもミチルもタケルも、僕と共に野次馬から無用なことを言われてしまうだろうし、ユータもジュンイチも、僕をかばうことで、周りから色々と言われずに済む。

きっと――僕がこの国から――皆の前から消えるのが、きっと一番いいんだ。

そう思う。

そう思い込もうとする。

だけど……

僕の短パンのポケットに触れる固い感触が、それを惑わせる……

「すみません、ＭＤプレーヤーと、パソコンを一晩、借りてもいいですか？」

僕は背を正して、二人に頼んでいた。

「今夜一晩、考えてみます」

『事件後、ＳＮＳのサクライ・ケースケのコミュニティ参加者が急増、１２万人を突破』

『サクライ・ケースケの無罪主張の署名、６８万人分が埼玉県警に提出、日本各地で署名活動を行うサクライのファンと、交通整理の警官が衝突』

『各界著名人、サクライ・ケースケの行動に、悲嘆の声』

『リーガエスパニョーラ、バルセロナＦＣが、サクライに１０億、レアル・マドリーが８億でＪＦＡにオファー』

『インターネット検索ワードランキング、１週間連続サクライ・ケースケ１位』

『緊急アンケート、サクライの行動、９３％が賛同、サクライの両親、刑罰を下すべきが９９％。サクライはサッカーをやるべきに７割の票が集まる』――

深夜、電気を消したリビングで、僕は一人、パソコンの液晶画面を覗き込みながら、自分の名前を検索してのニュース、掲示板に目を走らせていた。

『親を殺しかけるなんて、最悪。サクライは罪を償うべき。逃げたのがまた卑怯』

『サクライくんの苦しみも知らない奴が、わかったようなことを言わないで！』

『ま、失踪したのは大きなマイナスだよね』

『本人が出てこないことには何も分からない』

『あんないい子が、どうして親に愛してもらえなかったんだろう』

『サクライ・ケースケという偶像の正体は、何だったんだろう』

掲示板も、僕の話題でどこも荒れている。

「……」

駄目だ――これでは僕は身動きが取れない。

この騒がれ方では、僕がのこのこ戻っていっても、僕の行動は、他者には変に穿った見られ方をされてしまうだろう。悲劇のヒーローごっこだとか、同情票を買っているだとか、そんなつまらない周りの喧騒に、僕の行動は歪められていくだろう。家族の影、自分のした行動、過去がフィルターとなって、行動の評価も歪められる。

僕がいくら優秀な結果を残しても、それでは得られる成果は少ないだろう。僕は動けば動くほど、誤解を呼び、それを増徴させ、世間と僕はやがて大きく乖離するだろう。

その時、今は僕に味方している世間が、今度は僕の敵となる……

そもそも僕は、そんな周囲の反応を窺っての復讐などしたくはない。でも、日本にいる限りは、そうして周りの反応を窺うことでし

か、もう僕の居場所は出来ないだろう。そうしたって、僕の居場所などがあるのかも疑わしい。

「……」

何をやるにしても、日本に残って行動を起こしても、その成果は薄い――その未来が、何となく想像できる。

今戻れば、このアンケートどおりの結果なら、僕は顔も知らないファンに、可哀想、とか言われるのだ。僕は別にそんなことを言ってほしいわけじゃない。

「……」

僕は海の家の外に一人出て、砂浜に大の字に寝転がった。もう時計は深夜1時を過ぎていて、当然砂浜は誰もいない。ユータ達と酒を飲んでいた頃より、少し風が出てきたみたいだ。波の音が、さっきよりも大きく感じられる気がする。

僕の短くなった髪が、風で揺れる。ざーっという音と共に、体の周りの砂が流れていき、まるで砂浜を綺麗に洗い清めるようだった。

「……」

僕は自分の短パンのポケットから、ユータが渡してくれた、何か固いものの入った封筒を取り出し、それを夜空にかざすようにして、見上げた。

「……」

昔読んだ本に、こんな話があった。

友達と遊んでいる時、村はずれのつり橋から落ちた主人公は、川下で一本の錆びた剣を見つける。石に刺さったその剣を抜いて、村に帰ると、村に巨大な魔物が出現した。主人公はその錆びた剣で、魔物を倒すと、村長の家に呼び出される。

そこで主人公は、その剣の正体を知る。その錆びた剣は、昔の大戦で使われた聖剣だったのだ。

それを主人公が抜いたことで、封印が解け、村に魔物が出てしまったのだと、村人は主人公を責め立てた。主人公は村を追い出され、そこから主人公の冒険が始まる――

その主人公が手にした運命が聖剣だとしたら、僕の手にした運命は、聖剣か魔剣か――今の僕にはわからない。

だけどこれが運命であることはどうやら誤解のない事実らしい。確かに僕は、顔が売れ過ぎてしまって、もうここで働くことは困難だろう。警察が僕の居場所を知っているんだ。そのうち――いや、3日も経たないうちに、マスコミがこの海の家の存在を暴くだろう。この海は大混乱になるのは、目に見えている。

その前に、自分の身の振り方を考えなくては・・・・・・

その点を考えてみると、外国に行くのが、やはり最上だろうか――どうせやることも決まっていないんだし、だからってここに留まっているわけにもいかないのだから。別のところに移り住んだとて、こうしてまたばれては逃げ、ばれては逃げの繰り返しだ。

――嘘だ。

そう思っているなら、この空色の手紙を握り締める、この右手にこもる力は、一体何なんだ。

どんなに自分を納得させようとしても、どうやら僕は、まだ助けを求めているらしい。今まで考えないようにしていたけれど――彼女の存在はすごく大きくて、僕はまた、あの夜のように、彼女に救いを求めている――そう実感した。

僕は封を開けると、やはりそこには1枚のMDが入っている。

僕はミチルから借りた、古びたMDウォークマンにそのMDを入れる。

「……」

――多分この中には、シオリの声が録音されているはずだ。

シオリは、僕に何を言いたいのだろう。

僕に殴られたことの恨み言かもしれない。あの時、親父を殺してしまうほどに暴れ狂った僕を咎める声かもしれない。もしくは、警察に自首して、罪を償えといわれるかもしれない。

――それを考えると、少し、怖くなる。

何しろ僕は、彼女を殴ってしまった男なのだから。

それまでは、僕はシオリを愛していたし、シオリも多分、僕を愛してくれていたと思う。

――でも、今は？

――考えていても仕方がない。僕は彼女の言葉を聞かないと、先には進めない。

心の準備を整えるのに、５分もかけて、僕はＭＤの再生ボタンを押した。

Letter

『――あ……』

潮騒の中、少し遠慮がちな、息を漏らすような声で、その音声は始まった。

『――元気でいますか？』

はっきりと、シオリの声がした。

『久し振り――だね。と言っても、テープじゃ、私が一方的に喋るだけだけど……』

ゆっくりと、だけど綺麗な、柔らかいアクセントで喋る。一週間ぶりに聞く、シオリのその声の響きは、何かとても心地よく聞こえる。

でも――その声の後、ＭＤの音声は途切れてしまう。

『……』

その沈黙が、何秒続いただろう――

沈黙が途切れるのを待つ時間は、僕にとっては、とても辛い時間に思えた。

さっきまでは、彼女に何と言われるかの方が不安だったのに、今は違う。

この沈黙で、彼女が今、必死に僕に送る言葉を捜していること、そして、彼女が今感じている不安の大きさ、今、彼女が感じている孤独が、何も言わずとも、僕に全て伝わってきたからだ。

このテープに声を吹き込む間――シオリが僕のために無理をしているのが、手に取るように伝わってくる。

その沈黙は、多分２０秒にも満たなかったと思うけれど、僕には数十分、数時間のようにも感じられた。

『えっと――まずは、私、あなたに謝らないといけないね……』

沈黙が明けると、シオリはそう言った。

『――ごめんなさい。私、あなたの許可なしに、あなたから預かっ

たMDを、世間にばら撒いたから』
「……」
『このことで、あなたの予定していた将来が、違った方向に進んでしまったのなら――本当に、ごめんなさい』
「……」
――そんなこと、何で君が謝るんだよ……
僕は君に、もっと酷いことをしたんだ。男として、最低のことをしたんだ。
それに――君がとった行動は、僕にとっては最善のものだった。君が対応してくれたから、今では世間は僕の味方をしてくれる。それがなかったら、僕は少年院に入れられていても、文句を言えなかった。
あの時――君が親父の前に割り込んでくれなかったら、僕は親父を惨殺していた。僕はあの時から、ずっと君に守られっぱなしだったんだ。
『えへへ――な、何だか、おかしいな』
久し振りに聞く、彼女の照れ笑い。
『話したいことが、いっぱいあるはずなのに……自分の口下手が、嫌になっちゃうな……』
「……」
声を聞いているだけで、分かる。
彼女の、今までと変わらない、控えめな笑い声が聞こえるけれど。
彼女はもう、泣いている。
心の中で、ずっと、ずっと――
『……』
沈黙。
『――戻ってきて』
「……」
『きっとあなたは今、自分を責めていると思う。私を、殴っちゃったこと、ずっと――あなたは、そういう人――本当は、優しい人だ

から。その優しさが強過ぎて、あの時はああいう形になっちゃったけれど』

「……」

『でも、あの時、あなたがご両親に従うと言っても、私があなたのご両親に逆らったのは、勝手にしたことだし――私が話をややこしくして、あなたを困らせちゃったからね。だから――あなただけが気に病まないで。おあいこにしようよ。ね』

哀願するような、すがるような、シオリの口調。

『多分――こんなことになって、あなたも戻りづらいのは分かるわ。でも――あなたはひとりぼっちじゃないから。エンドウくんも、ヒラヤマくんも、マイも、あなたの味方をしてくれる。それに、私も――あなたが今、とても辛くて、立ち上がれないくらいの痛みを抱えていたら、私、頑張って、あなたを支えるわ。泣きたくなったら、あなたが泣き止むまで、ずっとあなたを抱きしめるから』

「……」

『私、約束したもの。あなたの悲しみ、苦しみに、いつまでも寄り添う、って――』

聞き覚えのあるフレーズ。

それは――彼女の好きな花の……

『約束したじゃない。秋になったら、二人で、竜胆の花を見に行こう、って。私は、今でもあなたとそうしたいと、思っているから……だって、私は……』

「――くっ！」

たまらなくなって、僕はＭＤウォークマンの停止ボタンを押していた。

もう、聞いていられなかった。

彼女の優しい言葉が、僕の心に百万の拳打を与える。

左手には、彼女を殴ったあの感触が、蘇ってきていた。

「……」

いちいち出てこないでいい。思い出させなくたって、もう彼女と

会う気はない。
もう僕は、彼女を殴った家族への怒りに、心が染められている。
今までは、歩く歩幅こそ違っていても、僕とシオリの目指すところは同じだった。
でも――もう違う。
側にいても、今の僕は、彼女を傷つけることしかできない。
いても、もう二人の描く未来が違うから、次第に二人、離れていくだけ。
それに、僕は彼女を殴ったことは、そんな簡単には割り切れない。
一緒にいれば、僕はきっと、そのことをいつも思い出して、彼女に後ろめたさを抱えながら、付き合っていくことになる。
そんな自分の気持ちに気付かせまいと、僕は嘘と詭弁で彼女に本当の自分を偽って、それでも彼女は、僕のために尽くして、無益な日々を送らせて、それで、僕を守れなかった、助けてやれなかったと気付いた時、彼女はもう十分ボロボロになっているのに、また更に傷つくだろう。
戻っても、お互いがお互いを傷つけ合って、ボロボロになって、修復不可能になるまで壊れるのみ――
――もう、僕では彼女を幸せに出来ない。
君がこの半年で教えてくれたこと――全てがもう、怒りの炎の前に、焼き尽くされてしまったから。
僕達はもう、一緒にいてはいけないのだと、この時、はっきりとわかった。
僕が彼女の前から消えれば、彼女の悲しみは、時が経てばいずれ消える。
そして、僕よりももっと、彼女を幸せに出来る男がきっと現れる。
彼女を幸せに出来るのは、今の僕じゃない……
――その晩、僕は手紙を書いた。泣きながら手紙を書いた。一睡もせずに、僕は目を赤くしながら、僕は慙愧の念に耐えながら、手は止まることなく彼女に手紙を書き続けた。

自分が今、彼女に綴る手紙に、なんて酷いことを書いてしまっているのか。自分が書いている、その辛辣な言葉は、彼女に届く前に僕の心に返り、心を抉り続けた。どうやったら彼女が、僕のことを早く忘れようと思うほどに傷ついてくれるか。今も僕を、優しい人だと信じてくれている彼女の気持ちを、どうすればより効果的に踏みにじれるか――そんな彼女が傷つく言葉を故意に捜しては、それを書き、その度に僕の心は、悲しみや怒りに苛まれ、目に涙を溢れさせた。

――こんなのってないだろう。

今も、こんなに君のことを好きだけど――そんな人に、傷ついて欲しいと願わなくちゃいけないなんて。

本当は、もっと言いたいことは沢山ある。この半年、君が僕を肯定してくれたおかげで、僕の凍てついた心に、初めて春の息吹が訪れた。

せめて――今までありがとう、と、伝えたかった。でも出来なかった。優しい言葉をかけてしまえば、きっとシオリは、僕を忘れられなくなるから。

だから、手紙には一筋の憐憫の情もなく、冷たい言葉だけが並んでいく――

だけど、祈りをこめるから。

君がこの先、誰よりも幸せになれるように。

君を幸せにしてくれる、もっといい誰かと出会えるように。

今の僕は、祈ってやることしか、出来ないけれど……

僕は一生、この怒りの炎の中でもがき続けて――その中で死んでも構わないから。

どうか、君だけは、幸せになるように……

どうか。どうか……

Farewell

朝になり、手紙を書き終えても、隣にいたユータとジュンイチは、昨日の酒が残っていたのか、まだ大いびきを掻いて、眠っていた。僕は一睡も出来ずに夜を過ごした。はじめは布団の上で、寝返りを打ってを繰り返していたが、段々面倒になって、彼女のくれた手紙を何度も何度も読み返して、彼女を想っているうちに、空が白んできた。

「ユーイチ！　おきろおきろ！」

部屋の障子が開いて、子供の高くて元気な声がした。タケルだった。タケルは目を腫らしていた僕を見て、僕が起きているのを確認して僕にダイブしてきた。寝不足と疲労で、そのダイブは少し体にこたえたが、僕は口元に、人差し指を立てて、タケルに見せた。

「こいつら、無理に起こさないでやってくれ。昨日、かなり飲んだから」

「わかった。こいつら、ユーイチのトモダチだもんな」

「そういうこと」

僕は、徹夜で泣き通してボロボロの顔のまま、なんとか笑顔の形に顔を歪めた。タケルも、まだ生え変わっていない、隙間だらけの前歯をむき出して、笑った。

タケルは、まだ僕を、ユーイチと呼んだ。幼いタケルには、僕が偽名を使った理由も、僕の本当の名前ということも、まだよくわからないのだろう。

だから、タケルはまだ昨日と同じ、僕に懐いてくれている。この１週間、本当の兄弟のように過ごした。一緒に遊び、一緒の布団で寝、いつも一緒だった。

まだ泥酔する二人を残したまま、僕はタケルと一緒に、朝食の用意された、一階の居間へと降りて行った。

「タケルくん」

僕は階段を降りる途中で立ち止まり、タケルに声をかける。僕の前にいたタケルも足を止めて、上の段にいた僕を見上げた。
「タケルくんの将来の夢って、何？」
ふと僕が聞くと、タケルは階下で、子供達の間ではやりの、戦隊ヒーローの決めポーズを取りながら、快活に言った。
「ママをオレがまもるんだ！　オレにはパパがいないから、パパのかわりに、オレがママをまもらなきゃいけないんだ！」
「……」
こんな小さな子が、父親のいない自分の運命を呪いもせずに、母親を守ろうと、いたいけな決意を、既に胸に秘めている。
それに比べて、僕は、両親に対して、既に際限ない怒りの炎を燃え上がらせている。
間違いだということは、既にわかっているのに……親友や、愛する人のいる、あの幸せな世界に、僕はもう、戻れない。この怒りの炎で、自分はおろか、そんな大切な人や、居場所を、全て焼き尽くしてしまいそうな気がして。
彼女に誓ったのに……この幸せな時間を、僕は守ると。
僕は結局、あんな奴等から、何も守ることは出来なかった。僕は結局、友人までもあのクソ野郎に蹂躙されることを許した上、愛する人を、あんなに泣かせてしまった。
「そうか――タケルくんが、ミチルさんを……じゃあ誰もミチルさんのこと、傷つけたり出来ないね」
へへっと、タケルは腕白に笑った。

僕はその後、海の家の開店準備を手伝い、奥で洗い物やら、料理の手伝いやら、人目につかない場所での仕事を言い渡された。結局、二日酔いのジュンイチ達が起きたのは昼過ぎで、結局海の家を閉めた後の夕食まで一緒にいた。
僕はミチルの手伝いをして、今日の夕食である焼きそば（海の家

の残り物）を六人分用意して、ちゃぶ台に置いた。僕の隣には最近いつもタケルが座っている。

「いただきます」

皆が今日の売れ残りの焼きそばをすすりだした。

「あの、この場を借りて、発表することがあるのですが」

僕は箸を置いた。

「僕、明日、日本を出ようと思います」

「……」

そこにいる誰もが呆然とした。タケルさえもそうだった。

「――マジかよ」

ユータが呟いた。

「――そうか」

やがてナオキが頷いた。

「そう決断したのか」

「いやだっ！」

タケルが、僕の膝元について、僕の体にしがみついた。

「ユーイチがいなくなるなんて、オレはいやだぞっ！」

「・・・・・」

恐らくタケルは、僕に父親のような――兄貴のようなものを感じていたのかもしれない。いくら強がっても、まだ子供――心には、どこかで誰かに甘えたいという気持ちがあったに違いない。

僕は、短く揃えたタケルの頭を撫で、涙ぐむ少年の目を見て、言った。

「僕がここにいると、タケルくんもこれから大変なことになるんだ。怖いおじさん達が、ここにもうすぐ来ちゃうんだ。だから僕は、その前に逃げなきゃいけない」

それでもタケルは強がるように、言った。

「そんなヤツ、オレがやっつけてやるさ！　オレもケースケのトモダチだぞっ」

タケルが意気込むと、僕は首を振って、タケルの頭を撫でた。

「タケルくんが守るのは、僕じゃない。ママだろ？　パパがいないから、ママを守るんだろ？」
「・・・・・・」
タケルは黙ってしまう。
僕は、右手の小指を、タケルの前に差し出した。
「きっといつか戻ってくる。だから、それまで、タケルくんはママを守るんだ。タケルくんは強いから、約束できるだろ？」
「・・・・・・」
タケルは、歯を食いしばって、泣くのを堪えているようだった。
母親の前で、泣き顔を見せたくないのだろう。
やがてタケルは、黙って僕の小指をつないだ。
「ゆーびきーりげーんまん・・・・・・」
昔教わった歌を口ずさみながら、思っていた。
僕にも、こうして交わした約束があった。これから来る秋に、愛する人の好きな花を、一緒に見に行くと。
それはまだ実現されていない。僕はそれを破ったのだ。そんな僕が、約束を交わしている。無責任な奴だ。僕って奴は。軽々しく、『約束』なんて口にして。
約束を破られた彼女は、まだ待ち合わせ場所で、僕を待っているのだろうか・・・・・・
僕はもう、そこには行けない。早くおうちへおかえり――
そう思って、あの手紙を書いたけれど・・・・・・
「でも、日本を出るったって、どこに行くんだよ」
ジュンイチが僕に訊いた。
「取り合えず、中国に行こうと思っている。臥龍と呼ばれた身として、孔明の墓に行きたくてな。北京から成都まで、取り合えず旅をして、武侯祠でお参りをしたら、そのまま西へ向かって旅をしようと思う」
三国時代、諸葛孔明の主君、劉備が建国した蜀の国は、中国の西側の益州地方を支配した。その首都成都には、武侯祠という、孔明

の霊廟がある。
まず僕は、そこを目指して旅をすることにした。それまでに、僕の心に今も残る、怒りの炎が風化していればそれもよし、まだ何も見えていなければ、もうしばらく旅をするもよし、と考えていた。
「多分、数年は帰ってこないと思う。お前達とも、お別れだな」
この日、平成の臥龍、サクライ・ケースケは死んだ。
人々の記憶に残らないように、跡形もなく、人々の前から消えることを決断したのだった。

第二部最終章　Departure

成田空港には、ユータ、ジュンイチ、そして、駆けつけてくれた、ジュンイチの彼女、ナカガワ・マイが、僕を送りに来ていた。
今日、僕は朝、警察に連絡して、事情聴取を受けた。事件で見聞きしたこと全て、僕は取調室で説明をした。警察も世間の動きを汲んでか、僕に同情したのかはわからないが、僕を拘束すべきだと言う者はいなかったので、割と淡々と事情聴取は進んだ。
その間にユータ達に、航空券の手続きをしてもらい、次の日の早朝の北京行きの便を用意してもらった。ナオキが車を出してくれ、海の家から程近い成田空港まで送ってくれた。
この1週間、働いた分の給料を、僕はナオキ達から受け取らなかった。嘘をついてまで転がり込み、余計な心配をかけてしまった上に、また新しいバイトを探させなくてはいけなくなったのだから。。
勿論、僕は周りに気がつかれないように、ユータの買ってくれた黒の野球帽を深くかぶり、ダテ眼鏡をかけていた。ユータ、ジュンイチも、サングラスに野球帽という変装をしていたが。万一の確率を出来るだけ低くするため、人の少ない夜中の出発を選んだ。まだ、ニュースでは、未明、と呼ばれる時間だった。わざわざそんな時間に、3人は見送りに来てくれたのだ。まるで国外逃亡である。
マイは泣いていた。ジュンイチを通しての短い付き合いだけれど、それなりの友情は芽生えていた。それにあの瞬間の目撃者の一人だったのだから、相当のショックだったに違いない。
「泣かないで」
「だって・・・・・これじゃサクライくんがあんまり・・・・・・」
声を殺して泣く彼女の手を取って、野球帽のひさしを少し上げて、彼女の目を見た。
「君にはジュンイチがいる。友人として、あいつのことは保証する。

君はあいつを信じてやってくれ。あいつの側にいてやってくれ。そうすれば君は絶対幸せになれる。絶対ね」

それを訊いて、彼女がしっかりと頷くのを見て、そのジュンイチの方を向いた。

「――マルコ・ポーロも、旅をする時は、そんな格好をしていたのかな」

ジュンイチは僕の姿を見て、言った。僕の背中には、寝袋を縛りつけた、大きなリュックサック。肩には大きなスポーツバック。大袈裟な修学旅行みたいだ。ユータとジュンイチが、買い物に行けない僕の代わりに、必要そうなものを考えて、全て揃えてくれたものだ。

「さあ――きっと馬か船に乗っていたんじゃないか、マルコ・ポーロは」

「まったく、孔明の次が、マルコ・ポーロかぁ？　せわしない奴だな」

と、呆れるように言いつつ、ジュンイチは、僕に手を差し伸べた。僕は手を握り返した。

「エイジさんから、伝言だ」

ジュンイチは僕の目を覗き込む。

「ケースケのクソバカヤロウ、ってさ」

「……」

エイジ――奴にも随分と世話になった。あいつがせっかく借りてくれたアパートを、1ヶ月も済まないうちに解約しなくちゃならないとはな。

「ジュンイチ、これ、エイジに渡してくれ」

僕はジュンイチに一枚の封筒を託した。

「僕の住んでいたアパートの解約金だ。余ったら、お前が大学に行くための足しにしてくれ、と伝えてくれ」

僕がそう言うと、ジュンイチは頷いた。

「俺、大学行くの、やめることにしたよ」

「え？」
僕が訊くと、ジュンイチは僕の方をしっかりと見た。
「元々俺は、歴史が好きで、世界を回る仕事をしたいと思っていたけれど、これから一人で世界で生きて行くお前を見て、俺の見たい世界は、そんな甘っちょろいものじゃないような気がしてな。だから、大学受験とか、そういうのじゃなく、俺ももっと実戦的なやり方で力を付けられる、厳しい環境に身を置いてみたいと思ってな」
「――何だよ、実戦的で、厳しい環境って」
「それはまだ言えない。でも、お前が帰ってくることには、それが形になっているように、俺も頑張るよ」
それだけ言うと、ジュンイチの言葉が、一瞬詰まった。
「これ――俺からの選別だ」
そう言って、ジュンイチは僕に、一枚の封筒を差し出した。
「じゃあ――頑張れよ」
「――ああ」
そして、最後にユータ。
「よく考えたら、お前の方が僕より、彼女のことがわかるのかもしれない。お前も忙しいだろうが、出来れば、お前が、彼女を支えてやって欲しい。頼む」
先のジュンイチと同じように、握手を交わした。
「ああ――しかし、さっき渡された手紙、お前、何を書いたんだ？　シオリさんにほとんど何も説明ないまま、手紙一枚残して海外に行っちまうんじゃ、相当ひどい内容なんだろう」
「・・・・・」
「まあいい。それは何とかやってみるよ。ただどこまで出来るかわからないから、期待はするなよ」
ユータは心許なそうに言った。
「すまない。でも、彼女には幸せになってほしいんだ」
「お前が戻れば、あの娘はすぐ元気にも、幸せにもなると思うけどな」

「いや」
僕は否定した。
「ここに残れば、彼女もマスコミに追われて、辛い思いをする。彼女は、僕に一番深く関わった女の子なんだから、きっと彼女の平穏も奪われる。それに――このどん底な気持ちのままで、僕が彼女を守る自信もないから」
そう言うと、僕は自分の荷物から、さっきジュンイチに渡した封筒の数倍はあるような、大きな銀行の封筒を取り出した。
「これも一緒に、彼女の家族に渡してくれ」
「な、何だよ、これ。どう見ても札束が入っているよな？」
「５００万ある」
「な！」「え？」「は？」
３人が目を丸くした。
「彼女の顔――もしかしたら、深い痕が残っているかも知れない。だから、せめてこの金で、いい整形外科に見てもらって、痕を消してもらってくれ。もしお金が余ったら、僕からの慰謝料ってことで、収めてもらってくれ」
「……」
３人とも、それを聞いて黙ってしまう。
――そう、もし僕のせいで、彼女の顔に傷跡が残ったら――彼女は僕を忘れることは出来ないだろう。それに、今後彼女には、女として、男から愛される権利がある。せめて顔の痕だけは消して、元の優しい笑顔をたたえる彼女に戻って欲しい。今の僕には、それくらいしかできないから。
「ちょっと待て」
ユータは狼狽した。
「お前、これをやるということは、お前はもう手元に、ほとんど金がないってことだろう？」
「――ああ」
ユータの言うとおり、僕はオランダでの３位ボーナスも既に返上し、

手元には、大学の受験費用と、大学４年分の学費と、僅かな生活費しか残していなかった。そのほぼ9割を、今回の後始末に使ってしまい、もう僕は、万一に備えた帰りの飛行機代と、２ヶ月貧乏旅行が出来るというほどの金しか持っていなかった。

だが、それでいいと思う。下手に金を持って、ホテルを泊まり歩く生活をしていたら、多分僕はそのうち、生きていくことがどうでもよいと考えてしまうと思うから。貧乏になり、生きることに必死になることで、生き方にこだわることができる。それが僕を強くしてくれると考えた。今まで貧乏だった時も、そうだった。金がないから、生きることに必死にはなれた。

それに、金がない方が都合がいい。僕は自分の過ちで、愛する人を傷つけてしまった。そんな自分が今でも許せなかった。今は自分を痛めつけてやりたかった。それでしか、自分への怒りから逃れる術が見つからなかった。

今なら分かる。あの時、僕が学校から逃げ出して、当てもなく自転車で逃げたのも。僕は自分の罪の意識――とりわけ彼女を殴ったことへの後ろめたさから逃れたかったのだと。そしてそれは、今も変わっていない。

空港内にアナウンスが流れた。僕の乗る予定の中国行き飛行機の搭乗時間が迫っていた。

「もうこれで、さよならかもしれないけれど・・・・・・行ってくるよ」

「まだ間に合うぞ？　引き返すなら今のうちだぞ」

ジュンイチは最後に訊いた。僕は少し躊躇した。

「・・・・・・」

唇を噛んだ。

ここに残ってどうする？　何もできやしないぞ。かえって皆に迷惑をかける可能性が高い。躊躇してる場合じゃないぞ。しっかりしろ、ここで覚悟しないと、これから何も出来やしないぞ。

「いや。大丈夫だ」

それだけ言った。自分の今出来る、一番精気に満ちた声で。
「そうか――」
「大丈夫」
僕は言った。
「お前達が教えてくれた、人の温もりの暖かさを忘れない限りは・・・・・多分、きっと・・・・・・」
多分、きっと――曖昧な言葉だ。悲しいけれど、今の僕はそれすらも忘れてしまいそうで。こうやって言い聞かせていないと、怒りの焔に、全てが焼き尽くされてしまいそうで。
今の僕は、怒りに満ち溢れてはいたけれど、少し揺れていた。
ユータ達は、僕を信じてくれた。だから僕は、この旅を通じて、そんなこいつらの思いに報いることが出来る強さを見に付け、今後の生き方で、それをこいつらに示してやらなければならない。それがこいつらへの、最低限の礼儀だと考えていた。
だから、こいつらがずっと僕に教えてくれていた、人の暖かさは、たとえ怒りに心が苛まれても、忘れてはいけないことであると、僕は思っていた。
でも、今の僕は、自信がない。今の僕が、今までの僕のように、人の気持ちにどれだけ応えられるか……
「さようなら」
もう搭乗時間が迫っている。それだけ言って、僕は踵を返して、搭乗口に向かった。
「ケースケ！」
ユータが叫んだ。僕の足が止まった。そして振り向いた。
ああクソ、今まで隠密裏に運んできた計画が台無しだ。まあ、海外線の厳しいチェックの時点で、僕の行く道は、じきにばれてしまったのだろうけれど。
「これでさよならなんて、嫌だからな！　絶対戻って来いよ！」
「・・・・・・」
完全にばれてしまった。僕も、ユータ達の正体も。空港内が静ま

り返った。そして、僕に向けられる視線――ゲートに遮られてはいるが、最前列の三人の後ろには、人ごみが出来始めていた。

観念して、僕は帽子と眼鏡を取った。ユータとジュンイチも、変装を取って、僕と対峙した。

「戻ってこないなら、俺、どこにいても、お前の耳に入るような、すごいプレーヤーになるから！　絶対だ！　お前のことも俺は背負って、頑張るから！」

「・・・・・・」

叫ぶユータに、ジュンイチが割り込んだ。

「俺もやるぞ！　ケースケ！　自分のすべきこと、きっと見つけてみせる！　帰ってきたら、お前に見せて、自慢するからよ！　お前も絶対見つけて帰って来い！」

「――ああ。ありがとう。きっと戻ってくる！」

僕は大きく手を振った。そして、踵を返した。もう、振り返らなかった。

「サクライー負けんなよー」

野次馬の応援も背負って、僕の国外逃亡は、一気に戦場へ赴く兵士の出征に変わった。

荷物を預け、搭乗した指定席は、窓側の席だった。まだ外は暗かった。僕はもう一度野球帽を深くかぶって目元を隠し、そのまま仮眠をとることにした。まだ到着まで４時間はある。

やがて、フライトの瞬間、浮かび上がる瞬間だけ、大きく体に圧力がかかったと思うと、すぐにそれは静かになった。

しかし、眠れなかった。眠れないので、僕はジュンイチに貰った封筒の中身を開けてみた。

そこには、数枚の写真が入っていた。全部、僕達の写真だ。

そう言えば、ジュンイチの奴、オランダに行ってからというもの、いろんな景色や場面をよく写真に撮っていたっけ。

その中の写真のひとつ。半年前――埼玉高校の体育館で行った、あの準優勝の祝勝会――もとい、ちくしょう会。この時、ジュンイ

チがマイに告白されて――あの時のジュンイチの顔ったら。ふふふ……

そして、体育館のステージ上で、準優勝盾を中央に置いて、僕達トリオがしゃがんで微笑んでいる。そして――僕とジュンイチの方には手が添えられていた。ジュンイチの彼女と、マツオカ・シオリが中腰になって、？サインを出して、微笑んでいる。

「・・・・・・」

しばらくそれを見ていたが、やめた。僕は寝直すことにした。この写真を見ていると、考えることが嫌になる。自分の失ったものの存在が、頭の中に顕在化してくるからだ。

――しばらくして、僕は、眩しい光で目を覚ました。

目を開けて、窓の外に出ると――雲海が眩しく光っている。雲海から日が昇っている。

「・・・・・・」

まっさらな世界だ。肉親に汚されたこの半生は、今日で終わった。これからは、僕がこの世界を、僕自身で彩って行くんだ。そして、僕は大人になるのだろう。

――中国北京の空港で、僕は荷物と――他の客の荷物の中でも、一際目立つ荷物――失礼。もといリュートと再会した。空港を出ると、夏真っ盛りの中国の、灼熱の太陽が『僕達』を出迎えた。

空港内の土産屋で、ガイドブックを買った。その地図を見て、僕は頭をひねった。

北京から、蜀の都、成都まで、歩いてどれだけかかるだろう。一瞬それを考えた。どうせ金がないのだから、バスや車など使えない。歩いていくしかないくせに。

そうだ。この道を僕は歩いていく。

今の僕に出来ることは、歩き続けることだけだから――

「リュート、行こう」

僕は隣にいるリュートに声をかけた。そして二人、歩き出す。

そして、僕はひたすら西へ――リュートと二人、北京の雑踏に消

えて行ったのだった。

第二部　完

第二部あとがき&二部制作秘話

どうも、ひとりぼっちのキミにの作者、ターンAです。

さて、皆さんのおかげで無事に第二部が完結することが出来ました。
どうもありがとうございます。

というのが、作者の勝手な都合なんですが、それに付き合わされた読者の皆さんは、どんな気分なんでしょうか。前にこの第二部を連載した時は、「途中から読むのに拒絶反応が起こった」と言われるくらいだったので、読むのが辛かった人もいるのでしょうか。実際ケースケが学校で父親を殴ったシーンあたりで、お気に入り登録を外す人が続出しましたし、やっぱり読むのが辛い人が多かったのか……このサイトって、この話のような暗い話が少ないみたいですしね。

そんな、サイトのニーズに応えていないような気になりながら書いている作者は、結構ドキドキでした。

本当はこの話、第1部で完結でもよかったと思うのですが、それだと、ただケースケの負の螺旋が途切れただけで、まだ家族と一緒に過ごしているし、まだ根本的解決になっていないなぁ、ということで、続きを書いたのですが、それがただでさえ長い話をより長く、カオスにしてしまったという……ハッピーエンドを望む人のために、第1部で終わりにしてもよかったのかもしれませんね。

以前この話を書いた時は、第２部は第１部よりも２０話くらい短くなったんですが、今回は２部の方が長くなりました。第２部はかなり大幅に内容を変えて、ケースケの栄光の階段を駆け上るシーンと、ケースケの欠落した感情が、ゆっくりとですが確実に充実していく様を書きたかったので。正直もうくっついてしまった恋愛っていうのは、あまり書くことがなくて、つまらなくないか不安になってはいたんですけれど。

さて、本編について。

第２部は、とにかくケースケがシオリによって救われてから、少しずつ人間らしい感情を取り戻しながら成長して、心の傷を癒していくのですが、いわばそれは、つぎはぎで壊れた部分をくっつけたような状態で、まだケースケの心に定着していなかった。そんな脆いところを、粉々に壊されてしまう――というのが大まかなストーリーですが。

正直ケースケとシオリの恋愛が、万人がうらやむものであったかは、よくわかりません。作者はもっと二人の恋愛を上手く書いてあげたかったのですが、どうも恋愛経験が浅いので……

男性主観の話なので、もし現実にケースケのように、彼女のため、という名目で、あれだけ彼女をほっぽっていたら、女の子は嫌なものかもしれません。ケースケは作中では、女性に圧倒的に人気があ

ることになっていますが、女性読者にはケースケはいい男に映ったでしょうか……作者は個人的に気になるところです。

話の中の世間は、ケースケの行動に、大多数の人たちが支持の姿勢を見せましたが、ケースケが絶対的に正しい人間だったかというのは、作者にもよくわかりません。第二部のケースケの行動が、正しいか、愚かかという判断は、読者の方一人一人違うと思います。こちらもケースケが絶対的に正しいと読者様に思い込ませて物語を進めたいわけではないので、その辺は読者様の価値観でこの話を楽しんでください。

ただ、作者個人としては、第一部のあとがきにも書きましたが、ケースケは「いい奴」ではあったとは思っています。本人にその自覚はありませんが、それ故に苦しみ、そしてそれを見て見ぬ振りも出来ずにああなってしまったと思っています。

それと、ケースケは自分の感情を押し殺して、長いこと生きてきて、シオリ達のおかげでそれを少しずつ自分で感じられるようになって来たという段階だったので、まだ感情のコントロールの仕方が稚拙だったんですよね。だからこそ、激情に流されやすく、暴走もしやすい、と。決してケースケが馬鹿だから、というだけではなく、感情の制御の仕方を学ぶには、まだ半年では短すぎたという感じです。

いずれにせよ、ケースケは高校3年生にして、幼稚園児並みの心の発育しかしてない割に、力だけは図抜けている、きわめてアンバランスな人間で、第2部での、仲間達との暮らしは、それを通じてケ

ースケの心のバランスを是正していく期間だったと思っています。

他にも疑問符が残ったことがあれば、感想なりで何でもお聞かせください。作者自身も、この話が長過ぎて、読者様がどこが気になっているか、よく把握できていないので……

さて、ここで第3部の予告。

第3部がこの物語の最終章です。この第3部で、サクライ・ケースケという人間の人生がどんな様相を迎えるかが決まります。

第3部は、ケースケが日本を出てから7年後、ケースケも25歳になっています。新ヒロインも登場します。個人的に新ヒロインは、以前話を書いた時は、ケースケの次に作者のお気に入りになった女の子です。感想を見ると、シオリとケースケをお似合いと見てくれる方が多かったようなので、この新ヒロインが受け入れられるかはまだ不安ですが……

といっても、まだこの話を、ハッピーエンドにするかバッドエンドにするかは、今回はまだよくわかりません。作者はこの通りケースケくらいひねくれた人間なので、ハッピーエンドって、安易なのか、と勘繰ってしまうような人間でして。バッドエンドの方が、こういう話の場合、味があるのか、とか。だからこそ、あんな幸せだった

ケースケの幸せをぶっ壊すなんてことをしてしまったわけなのですが。

なので、またまた申し訳ないのですが、第3部をハッピーエンドにするかバッドエンドにするかは、またしても今後の読者様の感想などを踏まえて決めたいと思います。読者サービスじゃないですけど、出来る限りニーズに応えたいと思うので。皆さんの感想が、ケースケの運命を変えるかもしれません。

そんなこんなで、ひとりぼっちのキミに、第2部完結です。

第3部は今までに輪をかけて長い話で、テイストも学園ものではなくなるので、少し風味も今までと違いますが（というか、今までが学園ものだったかも疑わしいですが）これからも読んでいただけるのであれば、応援よろしくお願いいたします。

この作品に関して思うところがあれば、気軽に作者に聞いてください。

Another story ～ 2－1（前書き）

このアナザーストーリーは、本編の補足程度の内容なので、これを読まなくても、第3部で困ることはないと思います。本編の印象に影響を残したくない人、第2部からの流れで第3部を読みたい人は、読む読まないは個人の判断にお任せいたします。

Another story ～ 2－1

3月――

梅の花が散りはじめ、まるでそれを合図にしたように、桜の蕾が膨らみ始める。

そんな、梅の花が舞う中、私は人混みの後ろ、背伸びをして、右手に受験票を握り締め、目の前の掲示板に目をやった。

「あ、あった」

私の受験番号、１３４１番は、貼り出されたばかりの紙に、確かに書かれていた。

と思っても、1を7と見間違えてないか――2つも1があったので、そんな間違いがないとも限らない。私は二桁に達する程、受験票と掲示板を交互に見直すのだった。そんな自分の気の弱さに自嘲しながら。

そしてやっと、自分の番号だと確認して、ほっと一安心。

入学書類を受け取って、校舎の横でお母さんにメールを打った。

携帯電話を閉じて、私はまだ人ごみの引かない掲示板の向こうにある、伝統を感じる古めかしい校舎に目をやる。

「来月から、私もここに通うのね」

教室に戻ると、クラスメイトは私立専願でもう進路の決まっているクラスメイトが数人いるだけだった。みんな自習中だ。

「あ、一番乗り！　どうだった？」

クラスの女子が私に駆け寄ってくる。

「うん、受かってたよ」

私はあの後、受験票と引き換えに貰った入学書類を見せる。

「わぁ！　さすが！　埼玉高校にあっさり合格かぁ」

「今年学年一人だけなんでしょ？　埼玉高校」

みんな私を祝福してくれる。
今日は埼玉県の県立高校が一斉に合格発表を行っている。私の中学校から、埼玉高校は最寄りの県立高校だ。だから私は一番乗り。
――職員室でも、私は教師達から祝福され、私の名前の上には、一際大きい薔薇が付けられた。
「まぁ、2年の時から模試で12回連続安全圏を出していたから、心配はしてなかったが」
「うちから4年ぶりに埼玉高校合格者が出たか……全く我が校の誇りだよ」
教師達は口々にそう言った。
「……」
12回連続安全圏とは言え、あそこまで合格発表を見直した私は、どこまで自分に自信がないんだろうと、改めて思う。
まあ、仕方ないよね。単願だったし、落ちたら高校浪人だったもの。
もう一度教室に戻ると、クラスメイトは全員帰ってきていて、それぞれの結果に沸き立っていた。
「受験もやっと終わった……進路も決まって、あとは卒業式だけかぁ」
女子達はみんな私の机の前に集まる。
「せっかくだし、女子だけで進路報告会兼ねて、打ち上げやろうよ」
「あ、行く行く！　久し振りにカラオケ行きたい！」
私の周りで、みんなは解放感からテンションを上げている。
私も声をかけられる。
「あ、ごめん。今日は家族が待ってるから」
「そっかぁ……相変わらず家族想いだなぁ」
「て言うか、歌を歌う場は苦手だもんね」
「そうそう。ピアノとバイオリンは、全国入賞もしている腕なのに、歌は苦手なんだよね」
「あ……別にカラオケが嫌だってわけで、今日行かないんじゃない

よ」
「わかってるよ。家族想いだってこと、みんな知っているもの」
「……」
「家族とゆっくりしてきなよ。受験中はずっと頑張ってたんだし」
「ごめんね。卒業式の後は付き合うから」
私は軽く頭を下げる。

「ただい……」
私が家のドアを開け、敷居をくぐりかけた時。
パン、パン、と、大きな破裂音が鳴り響き、私の心臓が口から飛び出そうになる。
「きゃっ」
「お姉ちゃん、埼玉高校合格、おめでとー！」
微かにたなびく煙と火薬の臭いの中、玄関先で片膝をついて、お母さんのアユミと妹のシズカ、弟のシュンが、口の開いたクラッカーを構えていた。
「……」
満面の笑みを浮かべる3人とは対照的に、私は呆気にとられていた。
「――あれ？　はずしちゃった？」
「だからシオリ姉には、サプライズより直球の方がいいって言ったんだよ。まったくシズカ姉は……」
首を傾げるシズカに、シュンがため息をつく。
私は肩や頭にかかる、クラッカーの紙テープに手をやる。
「シオリちゃん、本当によくやったわね」
だけど、それより早く、お母さんが私の頭に手をやって、紙テープの上から私の頭を撫でた。
「ち、ちょっとお母さん……」
私は恥ずかしくて、視線が勝手に下に下がってしまう。そんな私

を、シズカとシュンは、何とも幸せそうに見つめていた。
「さぁ、長い間気を張って疲れたでしょ？　今日はパートを早く切り上げてもらったから、一日かけて美味しいもの作るからね。シオリちゃんは部屋で休んでて」
「さぁさぁ、鞄持ちますよ、お姉ちゃん」
そう言ってシズカは、私の手に持つ鞄を手に取り、私の背を押して、二階にある私達の部屋に上がらせるのだった。
私はシズカと8畳一間の部屋を共同で使っている。シズカが小学校に上がってから、6年使っている二段ベッド。机はシズカ用の机がひとつ。部屋の自由を妹に譲った私は、勉強はリビングか、防音加工の施された部屋を主に使っている。
部屋はほとんどシズカの趣味で飾り付けられている。私自身はあまりものを置かないけれど、シズカはクレーンゲームで取ったぬいぐるみや、姿見など、色々なものを部屋に置き、とてもファンシーな部屋になっていた。
「もう……12回連続安全圏だったのに、大袈裟だって」
私はクローゼットから部屋着を取り出して、制服を脱ぎ、着替え始める。
「それでもお姉ちゃん、毎日遅くまで頑張ってたじゃない」
シズカは下のベッドに腰掛けて、そう言う。
「しかも、秋までは中学最後のコンクールに向けて、練習ばかりしてたし、終わったら休む間もなく勉強だったし」
「……」
私は中学で、テニス部に所属していたけれど、小学校からピアノとバイオリンを習っていた。秋まではレッスン漬けで、両方とも全国で入賞を果たした。受験に向けて活動をはじめたのは、他の同級生よりも後だった。
「でも、高校に入ったら、本当にピアノもバイオリンもやめちゃうの？」
シズカは聞く。

「うん……ピアノもバイオリンも一人でやってたし。テニス部も、レッスンで休まなきゃいけない時もあったから、シングルス専門になっちゃったし。高校は部活に入って、みんなでひとつのものを作ることに、ちょっと憧れてたんだ」
「そっか。まぁ頑張り屋のお姉ちゃんなら、高校で楽器を変えても、人並み以上はできそうだけどね」
「……」
「それにしても、お姉ちゃんも高校生かぁ」
シズカはニコニコ顔だ。
「お姉ちゃんも、高校に入ったら、ステキなカレシなんかできちゃうのかなー」
「え？」
私はピンで髪を止め直しながら、シズカを見ると、シズカは私から引ったくった鞄を漁って、一通の封の開いた手紙を出した。
「ちょ……シーちゃん」
「マツオカ・シオリさん。突然こんなお手紙を差し上げてごめんなさい。明日の放課後、体育館裏に来てください――あはっ、やっぱりまたあった！」
シズカはその手紙を読んで、はしゃいで見せる。小６のシズカはおませ盛りで、こういう恋の話が大好きだった。
「まぁ、お姉ちゃんのことだし、結果は聞くまでもないけど――やっぱり卒業が近づくと、ダメでも言いたいって人が殺到するんだねぇ」
「……」
今シズカが持っている手紙は、今日学校に行ったら、私の机の引き出しに入っていたものだ。トイレの中で見て、私は気が重くなった。
「私、男子とあまり話したことないんだけどなぁ。何でそんな私を、好きなんて言えるんだろう」
「普通お姉ちゃんくらいスーパーガールだと、男の子も自分とは釣

り合わないと思いそうだけどね」
「……」
「成績3年間トップ、テニスでも埼玉県の強化指定選手候補、ピアノとバイオリンは全国入賞！　それでも男が気後れしないで告って来るのは、やっぱりお姉ちゃんのその優しい性格かな」
「……」
「公立中学じゃ、お姉ちゃんの心を動かす男の子はいなかったかもしれないけど、埼玉高校にはいるかも知れないよ？」
「うーん……私は、恋とかよくわからないよ」
私は――まだ、本当の恋を知らない。
誰かに対して、抑えようのない感情を抱いたことは、まだない。
「でも、いつかはお姉ちゃんだって、恋をするでしょ」
「……」
「どんな人なんだろうなぁ、お姉ちゃんが恋に落ちちゃうような人って。ジャニーズみたいなイケメンだったら、私にも会わせてね」
小学生の妹に、恋を説かれることに、複雑な感情を抱くけれど……
私をこうして慕ってくれる妹は可愛い。
私は今、それだけで十分だった。恋なんかしなくても、十分幸せだった。
この家族といる時間が、私は好きだから。

「埼玉高校合格、おめでとー」
お父さんが帰ってきて、私は下のリビングに呼ばれる。
部屋には垂れ幕や輪飾りで彩られ、私の座る椅子の後ろには、恐らくシュンが毛筆で書いた、上手とは言えないけれど、豪快な字で、シオリ姉ちゃんおめでとう、と書かれていた。
「カンパーイ！」
お父さんお母さんはビール、私達はジュースで乾杯した。
私の家はいつも家族のお祝い事は賑やかだ。笑い声が絶えること

はなく、話はいつまでも尽きない。
お母さんの手作りケーキや、ご馳走を沢山食べると、お腹も満ちて、とても幸せな気持ちになる。
１０時過ぎまで家族水入らずで過ごして、シズカとシュンは部屋に戻っていく。
「シオリちゃん、いいのよ。今日の主役だし、進路も決まって疲れたでしょう」
「いいよ。何かやらせきりだと、落ち着かなくて……」
私はお母さんの横で、洗い物にとりかかる。
普段お母さんは、パートで家にいない時間が長い。だから私は長女として、小さな頃から家事をして来た。もう習慣だ。
それが落ち着くと、お母さんがミルクティーを入れてくれた。私はそれを飲んで、一息つく。お父さんはリビングでニュースを見ていたけれど、それを消してお母さんの隣に座る。
「しかし、本当によかったのか？」
お父さんが聞いた。
「埼玉高校は確かにいい高校だが、シオリの頭なら、東京の私立にもっといいカリキュラムの高校に入れたのに」
「いいよ。うちは下に二人いるし、二人とも私が小さい時から、ずっと働いてくれてるんだから、あまり二人に金銭的負担はかけたくないから」
「……」
「それに私、贅沢とか、着飾るとかに疎いから、都内のお嬢様とかと打ち解ける自信ないもの」
そうして照れ笑いする私を見て、お父さんは涙ぐみ、お母さんはそれを慰める。
「いやだなぁお父さん、歳を取ると涙脆くなっちゃって」
「まったく――シオリちゃんは小さい頃からシズカとシュンの面倒を見てくれて、今までわがままひとつ言わなかったよね」
お母さんはそんな私を見て、心配そうに言う。

「でも、シオリちゃんだって私達の子供なんだから、たまには私達にわがままを言ってもいいのよ」

「……」

そんなことを言われても、小さい頃からこれが当たり前から。

でも、私はこうして仲のいい家族がみんな大好きだから、これでいいと思う。

どんなに友達が祝ってくれても、私にはこの家族のちょっと騒がしいくらいのお祝いが、一番ほっとする――

だから、私はこうして、家族が喜んでくれたら、それでいいと思う。

私にとって、今大切にしたいものは、この家族なんだから――

「大丈夫だよ。やりたいことを十分やらせてもらっているし、お小遣いもこれ以上いらないし、欲しいものなんて、何もないよ」

家族のことを思って、そんな言葉が口に出る。

だけど――

私はもう、ずっと前から感じている。

学校でも、家でも、常に満ち足りた、穏やかな生活の中でも、心の奥底でバリウムのように沈殿する、かすかな違和感を。

家族のためという気持ちも、今の生活に不満はないという気持ちも、嘘はないけれど。

今の生活は、何かが違う気がする。

私の欲しいもの、私の望むものが何なのか、見えているのに、何も見えていないようで。

具体的に、それが何を指すのかわからないことに、私は少し焦っていて、同時に、こんな満ち足りた生活の中でも不満を覚えている自分の内面が、ひどく利己的で我が侭で、醜いもののように感じられて。

もう終わってしまう中学校生活を振り返ると、私はそんな、誰にも言えない自分の内面の嫌な部分を消し去りたくて、必死で目の前のことに打ち込もうと努めていただけなのかもしれないと思う。

でも――それでも私の心に長く残っている、この違和感は消えることはなかった。

私はこの時、迷っていた。

高校で私は、何をすればいいのだろう。

今のままでは、中学時代の繰り返しだから。

私はこれから、どうやって生きて、何とどうやって向き合っていけばいいのだろう……

そんな考えを巡らせている中、我が家の固定電話のベルが部屋に鳴り響いた。　お母さんが電話を取る。こんな時間に誰だろうと思いながら、私はそれを見ている。

受話器に耳を当てるお母さんの声は、殆ど相槌だったけれど、次第にその声が張りを帯びてきているように聞こえる。

「シオリちゃん。埼玉高校から電話よ」

しばらく話して、お母さんは私に受話器を差し出した。

「もしもし、お電話代わりました」

「あ、もしもし。私県立埼玉高校の職員のものですが――この度の入試で、マツオカさんが満点のトップで合格したので、来年度の入学式の新入生挨拶をお願いしたいのですが――」

この報告の後、再び家族が集まり、二次会が遅くまで続いたことは、言うまでもなかった。

Another story ～ 2－1（後書き）

連載が長期止まって申し訳ありません。作者のＰＣの調子が悪く、修理に出していたもので…第２部終了というところで止まって、作者がまだ書くことが決まってないんじゃないか、と心配された読者さんもいるのでしょうか。とにかくこれからは暇を見てゆるゆる更新していきます。

見ての通り、これからしばらく本編はお休みして、感想を見る限り、人気のあるキャラのような、マツオカ・シオリのアナザーストーリーをお送りしたいと思います。第３部では、しばらく出番がないので…

前回のユータ編よりも、話数が多くなると思いますが、ご了承ください。しかしこの話を読んで、読者の方のシオリのイメージはどう変わるのやら…

Another story ～ 2－2

白い光の中に　山並みは萌えて――

中学の卒業式、会場である体育館で、同級生と肩を並べてそんな歌を私も心ここにあらずの状態ながら、歌っていた。

卒業式が終わり、卒業生退場の号令とともに、私は列に従って、レッドカーペットを歩く。

父兄席では、お父さんがビデオテープを回しながら、歯を食いしばっているのが見える。ファインダーをのぞいているから目は見えないけれど、きっと泣いているんだろう。隣に座るお母さんも、何だかお父さんのその親バカ振りが恥ずかしそうだ。

「……」

とは言っても、正直私はこの時、あまり卒業式という、中学最後の行事に浸りきれていなかった。

この後の事を考えると、気分が凄く重かった。

卒業式が終わり、担任の先生から、一人ひとり祝辞を頂いて、私達は校庭に出ると、下級生達が卒業生を見送るために、外に出ていた。

「マツオカ先輩、３年間お疲れ様でした！」

「埼玉高校に行った先輩なんて、私達の誇りです。高校でも頑張ってください！」

所属していた女子テニス部の後輩を始め、私は中学で成績が３年間トップだったため、学校行事の色々な場所に借り出されていたから、割と後輩の間で人気があった。私の着ているブレザーは、ボタンを全部後輩に取られてしまい、他にも何か思い出の品をと言って、鞄の中にあった色々なもの、付けていたヘアピンまで取られてしま

った。そんなもの、何年も残っているとは思えないけれど、私の事をいつまでも忘れないでいてくれるなら、きっと幸せなことなのだと思う。

それから私は、クラスのみんなと卒業証書を持ったまま、カラオケでの打ち上げに参加した。

とは言っても、私は小さい頃から音楽をやってはいたものの、人前で歌を歌うのは苦手なので、ウーロン茶を飲みながら、ずっとみんなの歌を聴いてばかりだったけれど。

昨日まで、みんな同じ制服を着ていたのに、今日はそれぞれ違う制服――これからみんなが進学する高校の制服を着ているのが、何だか印象的だった。私の進む埼玉高校だけ、私服登校が認められ、制服がなかったから、一人だけ中学の制服を着ているせいかもしれないけれど――

「……」

適当な頃合を見計らって、私はカラオケの部屋を出る。

すると廊下には、一人の男の子が私を待っていた。

「ありがとう、ごめんね、呼び出したりして」

男の子は、手を広げて私に挨拶する。歯を見せて笑顔を作って、私の事を一瞥した。

「……」

この男の子は、私のクラスメイト。昨日、私の机に手紙を入れていて、この時間に私を呼び出していた。

バスケ部のキャプテンで、成績はそれほどでもなかったけれど、背が高くて、女の子から人気がある男の子だった。でも、私はほとんど話したことがない。

「――あの、話って？」

皆を待たせているので、変に長引いて怪しまれたくない。私は単刀直入に用件を伺おうとした。

「あ、うん、その……」

男の子は、はにかみながら少しもじもじする所作を見せて、やが

て意を決したように、私に言った。
「マツオカ・シオリさん。俺と、付き合ってくれませんか？」
「……」
そういう用件なのは、わかっていた。別に聞く必要もなかったのだけれど。
でも、わかっていても、気が重い。
実を言うと、私に卒業式前に手紙を送ってきたのは、この人だけではないのだ。既に１０人以上が、この人の後に、私に所定の場所に来てくれという内容の手紙を送ってきている。
私が卒業式の間、ずっと気もそぞろだったのは、そのせいだ。
「――どうして、私なの？」
私は訊いてみる。
「ど、どうしてって、そりゃ……」
いきなりそんな事を訊かれては、相手も戸惑うだろう。男の子は、言葉を咀嚼する間を置く。
「マツオカさんって、物腰が柔らかくって、女っぽくて――クラスでも親切で、公平で、努力家で、だけど華奢でちっちゃい女の子で――心の底から守ってあげたいって思ったんだ。最近の女って、ガサツなのが多いから、マツオカさんみたいな、守ってあげたいって女の子、他にいないからさ」
「……」
守ってあげたい――
よく男子から、たまに女子からも、私はそういう事を言われることがある。
でも――
守るって、何から？
戦争も飢餓もない、テロはあるかもしれないけれど、それほど目立ったテロ組織が日本で暗躍しているわけでもない。強いて言うなら天災だけれど、少なくともこの日本で、私はいったい、何から守ってあげたいと思われるのだろう。

――いや、きっとそんな対象がなくても「守ってあげたい」という言葉を聞くと、女の子というのは嬉しくなってしまう――そんな定番の口説き文句というだけなのかもしれない。

きっと、他の女の子なら、この人にそういう事を言われたら、嬉しかったり、何らかの心の変化をきたすものなのだろう。

でも、私は……

「――ごめんなさい。私、まだそういう、付き合うとか、そういうこと、よくわからないの」

私は頭を下げる。

そう、私にはまだ、わからないのだ。誰かを好きになること、恋愛――

この3年間、私は自分で言うのも変だが、男子にもてた。

それを見て、周りの女子からも、色々とやっかみも受けた。付き合ってみるのも、人生勉強のうち、とも、説得もされた。

それでも、私はまだ、一度も男性とお付き合いしたことがなかった。

「私、今はまだ、もう少し、自分の気持ちと向き合ってみたいの。高校って新しい環境で、自分がやっていけるか、不安もあるし、自分がこの先、何をしなくちゃいけないのか、何がしたいのか――自分のこれからと、向き合ってみたいの。だから……」

私が恋愛に足が向かない理由は、いくつかあるが、これがそのひとつ。

私は中学生活の間、自分の出来る事を精一杯やってきたつもりだったのだけれど、実際のところ、まだ自分の確固たる居場所を築けてはいない気がしていた。

県立では日本一の進学成績を誇る埼玉高校に、主席で合格できたとは言っても、それでもまだ私は、自分がそこまでの器の人間にはなれていない気がする。

だって、私には、まだまだわからないこと、できないことが沢山あるから。今だって、これから自分が何をしたいのかさえ、よくわ

からない、その程度の人間なのだ。
そんな私が、他人の気持ちを慮る恋愛に興じるという気持ちには、まだなれなかった。
「そんなの、付き合ってから、二人で考えていけばいいよ」
私のその返事に、男の子は食い下がる。
「マツオカさん、1年の時から、そういう理由で告った男に断ってるんでしょ？　それが今も続いてるって事は、一人ではもう解決しないって事なんじゃないの？」
「……」
私は押し黙ってしまう。
そう、私はこの数年、告白して来た男子への返事を、いつもそんな理由で断わってしまっている。
さすがにもうそれは、みんな知っている。もうこの理由だけで、いつまでも逃げられるものではない。
だから、3年生になってから、こうした男子の告白を断わることは、一層困難になっていった。誰も私の断わる理由を、簡単には納得してくれなくなったからだ。
告白を上手に断わるのが、いい女の嗜みだと、何かの本で読んだ気がするけれど、そんないい女の嗜みなど、恋愛偏差値最低の私が持ち合わせているはずもなく……
「だったらさ、俺も力になるから、一緒に自分と向き合うってのの、やってみない？　俺もマツオカさんが悩んでいるなら、力になってやりたいしさ」
男の子はそう言って、私に一歩にじり寄る。
「……」
その時、私は男の子が私に近づいてきたことで、心臓が一度、大きな音で高鳴った。背中に一筋の汗をかいてしまう。
「あ――ご、ごめんなさい。私――やっぱり……」
私は、その男の子の食い下がりに怯んでしまい、数歩後ずさってしまう。

だけど男の子は、後ずさる私の腕を取ってきた。
「ごめん、もうちょっと話をさせてよ。俺、本気なんだよ」
「い、痛い……」
私は、男の子に掴まれた右腕が、強い力で握られるので、腕に鈍痛を感じて、顔をしかめてしまう。
「あ……」
私の声に、男の子は咄嗟に手を離す。
「……」
私の心臓は、アレグロで脈を刻んでいる。呼吸も苦しくなる。
「ご、ごめん！　俺、そんなつもりじゃ……」
男の子は血相を変えて、私に謝罪する。
「……」
それはわかっている。この男の子は、故意に私を傷つけたわけじゃない。
だけど……
私はそのまま、男の子の前で踵を返して、走り去ってしまった。
カラオケボックスを出た私は、そのまま自分の家まで走っていた。
「あ、おかえりー、お姉ちゃん」
時計は夕方の5時を回っていて、まだ両親は、父母会で仲良くなった父兄と一緒のようで、帰っていなかったけれど、シズカが家に帰っていて、夕食の準備をしていた。カレーかシチューを作っているのか、野菜を煮込んでいる匂いがする。
私はそのまま部屋に入り、そのままドアに寄りかかり、ずるずるとその場に座り込んでしまった。
「……」
頭でわかっていても、どうしようもないことがある。
これは私の女友達や、家族はある程度知っていることなのだけれど、私は男子と二人きりになったり、触れられたりすることに慣れていない。
というより、それは私にとって、恐怖に感じられる事象だった。

実は今までも、こうして告白を断わったことで、こうして男子から詰め寄られることは何度もあった。

今回のように、しつこく食い下がられて、なかなか帰してくれなかったりすることもあれば、告白を断わると、態度が豹変して、私を散々に罵倒する男性もいた。

そして、最もひどかった時は、告白を断わってからも、ずっと私に手紙を送ってきたり、帰り道に尾行をされたり、そんなストーカーまがいの行為が続いた時だった。

その時は、家の中でまで、その人にみられているような、そんな影を感じることがあった。とは言っても、犯罪だとわかっているからか、盗聴だとか、いたずら電話だとかの行為に踏み切ることはなかったので、家族にも相談することができなかった。心配をかけられないから、友達にも誰も言えなかった。

中学の間、私は男子からの視線を何処からともなく感じては、自分の被害妄想なのかという気持ちも否定できずに、疑心暗鬼を増大させていった。そしてそれが同時に、男子への恐怖をどんどん増大させていってしまった。誰にも相談できないから、私はいつも夜遅く、防音になっている家の音楽部屋で一人泣いた。

だから、私に告白してくる男子がいることは、私にとっては、苦痛、迷惑以外の何物でもなかった。

この恐怖感のせいで、上手く男子とも向き合うことが出来ないから、上手に告白を断わろうとか、そういう余裕もない。結果、私はいつも告白を上手く断われずに、男子に食い下がられたり、余計に怒らせて、罵倒されたりしてしまう。

本当は、私は共学の埼玉高校ではなく、近くの県立女子高に通いたかった。でも学校の先生が「埼玉高校に入れるのは名誉なこと。内の学年であそこに入れるのはお前しかいない。埼玉高校以外、お前には願書を書いてやらない」と言われてしまい、埼玉高校しか受けさせてもらえなかったのだ。両親も、ただでさえ私を私立に通わせられない分、これ以上高校のランクを落とさせたら申し訳ないと、

埼玉高校行きを望んでいたので、断わりきれず、私は埼玉高校を受験したのだった。

私だって、このままではいけないことはわかっている。

でも――男の人とこの先も上手くやっていける自信がない。

そんな私が埼玉高校に入って、大丈夫なんだろうか……

「新たな花が萌え出ずる、今日のよき日に――うん、いいんじゃないですかね。これで」

「ありがとうございます」

私は目の前にいる初老の男性から、私が提出した用紙を返してもらう。

中学を卒業し、高校入学の準備を進める3月の末日――私は一人、一足早く埼玉高校にやってきていた。

入学試験を主席でパスした私は、入学式で新入生代表の挨拶を務めることが内定していた。今日はその段取りの説明と、私が考えた挨拶の内容を、校長先生はじめ、各教師の面々に検閲してもらうために登校した。

まだ顔も名前も一致しない先生たちからも、太鼓判を押される。どうやら埼玉高校は、日本一の県立進学校だけに、入学式には県知事や文科省の人間まで来賓席に顔を出し、注目度が高いらしい。あまり変な挨拶をさせられないということらしく、チェックが厳しいようだ。恐らく壇上に上る私のことも、色々チェックされているのだろうと思われた。髪の色や、化粧の具合とか。

「しかし、さすが３０００人以上受験したうちの入試で主席を勝ち取った人だ。聡明で、おまけに素直で」

校長先生が、私の作った挨拶の草案に満足し、私に賛辞を送る。

「そんな……」

私は恐縮してしまう。これでも図書館で、色々な用語辞典を引っ張り出して、考えたのだ。一夜漬けの知識を披露したようで、何だ

か恥ずかしい。
「まったく、助かりましたよ。あなたが二つ返事でこの件をＯＫしてくれて」
「いえ」
「それに比べて……」
「え？」
「ああ、いえ、こっちのことです」
校長先生の、最後見せた苦虫を噛み潰したような顔に、私は違和感を覚える。
私は生来目立つこと、人前に出ることは、あまり得意ではない。だから出来れば今回の挨拶も断わってしまいたい。顔も知らない同級生の前で挨拶なんて、声が震えてしまいそうだ。
小さい頃からそうで、それを克服するために、お母さんは私にピアノとバイオリンを習わせた。お陰で昔よりはましになったけれど、それでも人前に出るのはいつも緊張する。
今回断れなかったのは、中学の先生に、埼玉高校の首席なんて、名誉なことだからと盛り上がられてしまい、埼玉高校に承諾の電話をしてしまったからだった。
「教師一同、あなたには大いに期待していますよ。頑張って入学後も、首席を維持してくださいね」
教頭先生は、不自然な程に私を持ち上げるのだった。
「……」
本当は私は、入試トップなんて取りたくなかった。
目立つことは好きではないのに、成績がよかったから、中学では他の人から表に出る仕事を多く任されていたからだった。
私に無理がかかるのに比例して、同級生も教師も、私を優等生、学生の鑑と評価した。
そんな中学生活が、少し息苦しくて、私は埼玉高校に来たのに――

Another story ～ 2－2（後書き）

そういえば、シオリのパーソナルデータを本編であまり紹介していなかったので、見た目をイメージしやすいように紹介。

身長１５４センチ、体重３８キロ。スリーサイズは…必要か？とりあえず胸は際立って大きいわけではないですが、人並みにはあります。

得意科目は国語、現代文で、苦手科目は特にないですが、あえて言えば化学。極度の味音痴で、あまり食に執着はないものの、甘いものは好き。

服装はあまりこだわりがないけれど、肌をあまり露出する服は苦手で、白や青系の服が好きで、ビビッドな色の服はほとんど着ません。中学時代、スカートは膝小僧より上に上げなかった典型的優等生ファッション。化粧はほとんど興味がないですが、中学の友達に勧められ、なんとなくの薄い化粧をしています。メイク時間は１０分かけていません。髪はセミロングの黒髪です。

作者の中の風貌のイメージでは、「機動新世紀ガンダムX」に出てくるティファ・アディールをモデルにしてます。性格は作者オリジナルですけどね。要するに、ちょっとロリっぽい女の子って感じです。多分この作品、打ち切りとか言われて知らない人も多いと思うんですが…画像ＵＲＬを歯ってもいいんですが、それはここでは禁止されているかもしれないので、自重。声は…作者はあまり考えてませんでしたが、どんなイメージですかね。

ちなみにケースケは「新世紀エヴァンゲリオン」の渚カヲルを黒髪にした感じっていうのが、作者の中での風貌のイメージなんですけど…ただ声は、女性声優が男性キャラを演じるような、そんな感じ

の声って感じでイメージしているんですが。幽遊白書の蔵馬を演じた時の緒方恵美さんとか。それだと顔はカヲル、声はシンジになっちゃいますが。

そこのところは読者様とはイメージが違うかもしれませんね。まあ、その辺のイメージはそれぞれにお任せします。

Another story ～ 2－3

「こうしてみると、楽器って色々あるんだねぇ」
私の後ろをついてくるシズカが、感嘆の息を漏らす。
埼玉高校に入学する少し前、私はシズカと一緒に、楽器店に来ていた。
私は高校では、新しい楽器に挑戦しようと考えていた。でも、まだその楽器を何にするか決めていなかったので、実際の楽器を下見してみようと考えたからだった。
「お姉ちゃん、今度はみんなで演奏するような楽器をやりたいんだっけ」
シズカは私に声をかける。
そう、私は昔から、誰かと一つの音楽を作ることに、強い憧れがあったのだ。
今までやっていたピアノもバイオリンも、私が習ってきたのは、コンクールに出るための、独奏用の演奏で、まだ私は、誰かと一緒に楽器を演奏するという経験が、数えるほどしかなかった。
中学では、楽器を弾くのにも体力がいるから、体力もつけたいと思い、部活はテニス部に入ったのだけれど、その練習中、いつも校庭には吹奏楽部の練習の音が響いていて。クラスメイトも自分の楽器をケースに入れて、手に持って、誇らしげに演奏する姿が凄く楽しそうに見えたのだった。
それに、私は小さな頃に、家族に何か習い事をしてみたら、と勧められ、何となく選んだピアノとバイオリンを、何となく続けてしまっていた。勿論その二つの楽器には愛着もあるし、嫌いでもなかったけれど、何だか惰性的に続けていたような気もしていて、ピアノやバイオリンを弾いているのが、自分の意志なのか、よくわからなくなることが多くなっていた。だから高校入学を機に、大幅に環境を変え、もう一度自分をゼロから築き上げてみようと思ったのだ

った。
「ん」
私は、ひとつの楽器の前で立ち止まる。後ろのシズカも立ち止まって、それを見た。
私の前には、ムスタングのエレキギターが立てかけてあった。どうやら、アニメのキャラクターが持っていたモデルで、最近売れているらしい。値札の横に、そんな紹介が書いてある。
「ああ、今ガールズバンドとか、流行ってるもんね。吹奏楽だけじゃなく、こういうのも、一応みんなでやる楽器だよね」
シズカが言った。
「……」
そうか、楽器と言っても、色々あるもんね。
「よければ、手に持ってみますか？」
その様子を見ていた店員が、私に声をかけてきた。私は物は試しだと思い、ムスタングを持たせてもらうことにした。
「う……」
スリングで肩に吊っているとはいえ、私には相当重い。楽器の重量が５００グラム程度のバイオリンを考えれば、ムスタングは４キロ近くある。テニス部で鍛えた体力でも、これは長時間持っているのはかなりキツイ。
「うーん、ないな」
しかも、頑張って持っている姿を、シズカに一蹴されてしまう。
「お姉ちゃんみたいな華奢な女の子が、バリバリギター弾けたらかっこいいけど――何かなぁ……顔が大人しめだからか、ギターってイメージじゃないなぁ」
「……」
そう言われて、私はがっくりしてしまう。
「それにお姉ちゃん、ロックとかには染まれない気がするよ。今までクラシック一辺倒だったんだから」
「……」

秘かに、こんなギターを派手に弾きこなすことに憧れていたのに……

でも――確かに。軽音楽部といえば、当然歌わなくてはならない。私がボーカルをやらなければいいのだけれど、それなら初めから、歌う必要のない音楽をやる方が、私には合っているのかもしれない。

そう思った私は、今度は金管、木管楽器のブースへと移動する。

しかし、クラリネット、コントラバス、オーボエ、ホルン、ピッコロ――楽器が沢山あって、若干優柔不断気味の私は、目移りしてしまう。

「――あ」

しかしその中で、私の目を捉えた、ひとつの楽器があった。

白銀の、すらりとした細身のフォルム――まるで一輪の花のようにたおやかな印象を私に与えた楽器。

それが、フルートだった。

私は、その洋銀のフルートの美しさに、まず目を奪われた。

私にとって、フルートは他の管楽器と比べれば、親近感の沸く楽器であった。ピアノやバイオリンとデュエットをする機会の多い楽器だし、その音を耳にする機会も比較的多かった楽器だった。

私は店員に頼んで、フルートを手に持たせてもらった。

それは、バイオリンとほぼ同じくらいの重さで、私には最もしっくり手につく重量だった。まだ吹いてもいなかったけれど、さっきのムスタングよりも、何だか少し手に馴染む感じがする。

「フルートかぁ、いいんじゃない？」

今度はシズカも私の姿を見て、ＯＫサインを出した。

「色んな楽器と合わせられるから、他の人と演奏する楽しさを味わうのにはいい楽器だと思う。お姉ちゃんの手に合ってると思うし――きっと上手く吹けたら、楽しいんじゃないかな？」

シズカの意見と、私の考えが、ぴったり一致した。

埼玉高校の入学式は、もう桜も峠を過ぎて、名残の桜が最後の輝きを見せる頃、快晴の中、行なわれた。

「新たな花が萌えいづる、このよき日、埼玉高校の一員となることの出来、大変嬉しく――」

私は入学式、新入生代表として、壇上に登り、校長先生の前で式辞を述べている。

背中には、私とこれから同級生になる生徒達や、その父兄、来賓の視線を強く感じる。そのせいか、身体は肩が強張って、ガチガチだった。それでも、佇まいが少しおかしくても、私は何とか式辞をどもらずに言えるか、声が裏返らないかの方に神経を注ぐだけで精一杯だった。

当然もう同級生達は、私が代表に選ばれた理由を何となくわかっているだろうから、既にもう私は最初のターゲットにされているのだろう。ここに入る人達は、埼玉や、他県の各中学のエースだった人達ばかりだ。故にみんなプライドが高く、自分が同級生の後塵を拝したりすることが我慢ならない人も多いと思う。そういう人達にとって、私は次の定期テストでの指標になる。マークもされてしまうだろう。

入学早々、同級生に、「この人が学年トップ」と思われるのは、大きなプレッシャーだ。3年後の卒業式で、「ああ、入学式の時は、確かあの娘が挨拶やってたっけ。今じゃ全然大したことないのに」と言われてしまうことにもなりかねない。今こうして、学年の代表南下していることが、後日大きな人生の汚点にもなりかねないと思うと、私の高校生活は、いきなり前途多難だった。

私がトップを取ったのなんて、きっとたまたまなのに……

――「ねえねえマツオカさん、マツオカさん、学年代表って、いつ決まったの？」

「やっぱりああいうのって、入試トップの人がやるものなの？」

入学式が終わり、教室に戻ると、まだ見知らぬ同級生に声をかけようと、互いに機を窺い、沈黙が流れていた教室は、一足早く名前

を覚えられた私を中心に、女子の輪ができ始めていた。
　自分で言うのもなんだけれど、私はこれまで学校生活で、友達作りに苦労した経験がない。私自身は特別社交的でも、積極的な性格でもないのだけれど、成績がよかったから、名前を覚えてもらうのには、あまり苦労しないし、勉強を教える役を買って出ていれば、自然と周りの人とも会話が出来るようになる。
　新入生代表を買って出て、唯一得したことといえば、クラスの女子に、早くに名前を覚えられ、声をかけてもらえたことだ。とりあえず私のクラスは、私を中心に、他の女子同士も話が広がっていき、次第にみんな、新しい環境で友達が出来るか緊張していた顔が、どんどんほぐれていった。
　まあ、明日には新入生同士の親交を深めるオリエンテーション旅行があるのだけれど、その前にこうして他の女子と話が出来て、よかったと思う。

「――マツオカさん」
「えっ？」
　誰かに呼び止められて、私は顔を上げる。
　旅館の大部屋――目の前には沢山の、同い年の女の子が、パジャマを着て、畳の上に敷かれた布団の上に座っている。
「……」
　私は埼玉高校に入学して、今はその次の日からのオリエンテーション旅行に参加している。
　バスで揺られて千葉の南端の旅館に到着し、夕食を食べて、お風呂に入ってからは、クラスの女子全員が一部屋に集まって、いわゆるガールズトークの真っ最中といったところ。
　私は入学式で新入生挨拶をしたことで、クラスの中心人物のような扱いになっている。あまりそういうのは好きじゃないけれど、みんなが打ち解けるまでは、それでもいいかと思っている。

「ねぇ、マツオカさんは、クラスで気になる男の子、いた？」
「え？　うーん……」
私は当惑する。その話題は、男子が苦手な私には、どう答えればいいのか、よくわからなかったからだ。
「みんなはどうなの？」
困った挙げ句、私は逆質問で様子をうかがう。
「うーん……まぁ今、二人以外はハズレだって意見で一致したところ」
「二人って――エンドウくんと、ヒラヤマくん？」
「そうそう。他の連中はダメね。みんな勉強の虫って感じでさ」
「……」
この旅行に行くバスの中、クラスには目を引く男子が二人いた。
エンドウ・ジュンイチくんは、いかにも人の良さそうな笑顔を浮かべ、今日のバスの中でも、率先してクラスメイトに話しかける人のいないうちのクラスで、一人気を吐き、私達が打ち解けるチャンスを作ってくれた。私はあまり男子と話すのは得意じゃないけれど、そんな私でも話しやすそうだと思う程、とても感じのいい人だったと思う。
ヒラヤマ・ユータくんは、すらっと背が高くて、服の下からでも鍛えた体が推し量れるような、進学校には珍しいスポーツマンタイプの男の子だ。顔立ちも整っていて、雑誌に出ているモデルみたいだった。ちょっとクールで、いかにも女の子にもてそうな感じ。
「でも二人とも、残念ながらアホっぽいわね」
「私はそれでいいけどなぁ。それより浮気っぽいのは勘弁だなぁ」
「ヒラヤマくんは何か、プレイボーイそうだなぁ。この学校、真面目な娘が多そうだけど、やっぱり人気出ちゃうかなぁ」
みんなはそうして、自分の好みを議論し合う。
「……」
恋愛の話に疎い私は、そうして好みの男の子のタイプを話し合うクラスメイトの姿を、じっと見つめていた。

やっぱりみんな、高校生になって、中学生とは一味違う、大人の恋愛に憧れている娘が多いらしい。こんなに早いうちから、クラスのカッコいい男子とかをチェックしているのかと、私は感心していた。

でも……

心のどこかで、私も知ってみたいとは思う。

誰かを好きになる――家族や親戚とも違う、誰かに好意を寄せるというのは、いったいどんな気持ちになるのだろう。

みんながここまで、手にしてみたいと望む恋愛というのは、そんなに素敵なものなのだろうか――

こういう話を聞いていると、自分も、友達のそんな気持ちを知りたくなる。自分が恋愛をしたがっているか、それさえもわからないくせに。

こういう時、自分は勉強がちょっとできるって程度の価値しかない人間だと、思ってしまう――

勉強ができても、私はまだ、何も知らないんだ。自分のことも、何も……

オリエンテーション旅行では、クラスの女子と色々な事を話すことが出来た。中学のことや部活のこと、進路のこと、住んでいる場所や考えていること、どれも中学の時よりもはるかに多様で、高校という場所がどういう場所なのかが、何となくわかった気がした。

そして、1泊のオリエンテーション旅行が終わると、男子はともかく、女子の間には、高校で初対面ということから来る緊張はほとんど解け、みんな気軽に声をかけられるようになっていた。

もう人間関係も固まりかけ、いよいよ授業や部活動が始まり、校内の慌しさが増すだろうと、誰もが思っていた。

だけど。

「えー、朝礼を始める前に。このクラスは一人、諸事情で先日の旅

行に不参加の生徒が一人いてな。それを紹介しようと思う」
　オリエンテーション旅行の翌日の朝のＨＲ、授業開始初日の朝、担任のスズキ先生が、そう言った。
　このタイミングで新しいクラスメイトなんて、実質転校生と同じだった。クラスメイトたちはざわめき出す。
「君、入りなさい」
　そうスズキ先生が号令すると、教室の引き戸が開く。
　そうして入ってきたのは、とても見目麗しい人だった。身長は私と同じくらいで、まるで女性のような顔立ち。歌舞伎の女形のように、歩く所作が綺麗で、気品さえ漂う雰囲気を纏っていた。着ているジャケットから覗く鎖骨のラインや、腕の血管の浮き具合、筋の立ち方を見て、男性だとわかったが、それが見えなければ、女性と言われても疑わなかったと思う。
「サクライ・ケースケだ」
　高めの声を、わざと低く聞こえさせるような発音の声は、静かだけれど、よく教室に通った。

Another story ～ 2－4

「ねえねえ！　何あの子！　メチャクチャ可愛いんだけど！」
「ヒラヤマくんとエンドウくんみたいなタイプに加えて、ジャニーズ系も来たね！」
「うーん……私はないな。ちょっと背が低すぎ……」
その日クラスの女子達は、新しく加わったクラスメイト、サクライ・ケースケくんの噂で持ちきりだった。
顔の造りだけで言えば、ヒラヤマくんに負けず劣らず整っているサクライくんだったが、その身長が災いして、評価は賛否両論だった。１年後には１６５センチ、２年後の彼は、１７２センチまで身長が伸びるが、入学当時は１５８センチ、体重は４２キロと、私と大して変わらない体格しかなかったため、見た目は完全に女の子だった。
「男の娘好きとか、ショタコンとか、マニアには受けそうだけど……」
そのため、彼は最初、女子達には割と酷いことを言われていた。
――２年後、時代の寵児となる彼の秘密が世間に暴露された時、両親はどちらも、特にお父さんはプロレスラーのような巨漢だったのに、彼がここまで体が小さかったのは、成長期に満足な栄養が摂れなかったための成長障害があったのではないかという可能性を示唆した医師がいたが、それ程に彼の体は華奢だった。
「ねえ、マツオカさんは、サクライくん、どう？」
私にも話を振られる。入試トップだということがばれてから、私はクラスの女子の間では、割と発言力があるみたいだ。
「うーん――綺麗な人、だね」
私は少し言葉を考えて、そう言ったら、あまりに大真面目に言ったからか、周りの女子に大笑いされた。
「……」

多分、私が思ったとおりの意味では、きっと周りに伝わっていなかったと思う。

彼を見て、最初に思ったのは、みんなと同じ、彼の性別がどちらかということだったけれど……

それがわかってから、改めて印象に残ったのは、漠然とした言い方をすれば、彼の周りに流れる清潔感だった。

と言っても、何故私がそう思ったのかは、この時、自分でもよくわからなかった。彼の髪の毛は、長さこそ揃えられているものの、整髪の跡は皆無だったし、色も生まれた時から一度も手を加えていないだろう黒髪。眉も全く手が入ってなかったし、服装も、意識して小奇麗こざっぱりにコーディネートされているわけではない。

だけど、彼からは何とも言えない清潔感が、全身から漂っていた。静謐で、厳かな印象さえ与えるけれど、それが演出めいた仰々しさもなく、菫のような小さな花の香りのように、ほのかに薫るのだ。

中学時代、男子を畏怖の対象とさえ見ていた私は、失礼だが同世代の男子を、粗野で下品なことを好むと思っていた（実際セクハラまがいのことを、中学では何度も言われたりもした）。だけど、彼のその佇まいは、今まで私が考えていた男子の印象とは、少し違った。男子を見て、花の美しさを連想したことも、初めてのことだった。

だけどその時の私は、そのことをあまり深く気に留めていなかった。

その印象よりも、やはり彼のあまりに女性的な風貌が、強く頭に焼き付いていたからだ。私が抱いた印象も、彼をちゃんと男性と認識してのものだったのか、当時の私には、まだ区別がつかなかった。

感情が拙く、幼かったのだ。

――そんな本人は、周りなどどこ吹く風で、机に突っ伏して、動かなかった。顔は腕に隠れて見えない。どうやら眠っているようだった。

授業が始まる。

さすがに埼玉高校に入ってきた人間は、元の頭がいい上に、入学前から高校の勉強範囲をある程度予習していたのだろう。先生もそう思っているからこそ、細かい説明を省いて、どんどん授業を先に進める。

中学とは全然違う。中学では偏差値７０の人も、偏差値３０の人と同じ内容を勉強する。だけど高校は、周りのレベルの差がほぼ拮抗している。それを強く感じた。

私も入学前に、高校範囲の予習は多少していた。中学の先生に、埼玉高校のレベルに慣れる時間を作るために、ある程度の予習はしておけと勧められていたからだ。

でも、正直授業のスピードは早いけど、思ったほどじゃない。私立ならもっとすごいのだろうけど、県立ならやっぱりこれくらいのようだ。これなら中学の時と同じくらいの勉強法で、何とかなりそうな気がする……

――先生も今年の新入生のレベルを探りながら授業をしている。講義をしながら、注意深く教室の様子を窺っている。

「……」

だけど、先生の視線がさっきから、それとは別の感情を以って、ある一点をうろうろしていることは、既にクラスにいる全員が気付いていた。

その一点とは、勿論、授業開始時の一礼の時でさえ、机に突っ伏したまま微動だにせず、今もその時の体勢のままでいる、サクライくんの机だ。

いまだにサクライくんの机には、教科書一冊、シャープペン一本出ていない。見た限り、授業を受ける意思は皆無だった。

埼玉高校には、先生と衝突したことのない優等生ばかりが通っている。だからクラスメイトは、そんな彼の様子に、いつ先生が怒りだすか、気が気ではなかった。正直私もその一人だった。

まあ、一人だけこの時、楽しんでいる人はいたのだけれど――

「――ちっ」

1間目の古典の先生は、何も言わなかったけれど、2限の英語の先生は、授業を10分して、全く態度を変えない彼を見て舌打ちした。

先生は、彼の机につかつかと詰め寄る。私を含めて、クラスメイトに緊張が走る。

「おいお前！」

先生は怒鳴りながら、彼のジャケットの袖の後ろを掴んで、引き上げるようにして、彼の上半身を力ずくで起こさせた。

「ん……？」

重力によってだらりとしていた彼の体は、目が覚めたことでゆっくりと上がる。2時間振りに露になった彼の顔は、予期せぬところで目覚めさせられ、空ろな目をしていた。2時間と言えば、レム睡眠が終わってノンレム睡眠に切り替わった頃だから、きっと目覚めが悪いのだろう。

「初授業から堂々と昼寝とは、いい度胸だな」

教師の怒気を孕んだ声。

「……」

しかし彼はそんな怒気など感じていないように、寝起きの目をしょぼしょぼさせていた。何だかその仕草は、私に何故か猫を連想させた。

「――別に高校は、義務教育じゃないでしょう」

そして彼は、気だるそうな声で言った。

「今の僕は、授業が受けられる権利があるだけで、受けなきゃいけない義務はない――自分の持つ権利を、自己の裁量で行使しているだけですが……」

「ふざけるなよ」

先生がもう一度彼を怒鳴った。

「他の奴等の勉強の邪魔だ。やる気のある奴が迷惑するだろうが」

「――鼾、掻いてました？」
彼は訊いた。実際は鼾どころか、寝息ひとつ、寝返りを打つ際の衣擦れひとつ聞こえなかった。
「そういう問題じゃねぇ。やる気ない奴が教室にいるだけで邪魔なんだよ」
「……」
その先生の言葉を受けて、彼は眠そうな目で、先生の目を見た。
「たかがクラスメイト一人が寝てる程度で集中が乱れる程度の奴は、今勉強しようがしまいが、すぐ潰れますよ。僕が寝てようが寝てまいが、結果は同じです」
「……」
その言葉に、先生は押し黙ってしまう。
くくく、という、声を殺した笑い声が、私の耳にかすかに届く――エンドウくんのものだった。
自己の正当化であることは間違いないけれど、筋は通っている。一山いくらの偏差値の高校ならまだしも、東大合格者数県立日本一のをこの埼玉高校なら、教室で一人寝ている人間がいる程度で「集中できない」と言っている人間は、東大や早慶、旧帝大の厳しい試験に太刀打ちできるわけがない。仮に合格したとしても、勉強で目覚しい成果を残すのは無理だ。
センター試験など、１０００人近い人間がひとつの部屋で試験を受ける会場も珍しくない。その１０００人が一斉に鳴らす鉛筆の音や、紙の揺れる音でも迷惑と言っているのと、教室でクラスメイトが寝ているから、集中できないと言っているのは、レベルが一緒だ。彼の理論は、上位大学を目指す生徒の多い埼玉高校では正論となる。
「……」
その毅然とした論破に、完全に先生は面目を潰されてしまった。
「……」
その彼の最後の論破が、私達クラスメイトの心に、重く残留した――

その程度で音を上げる奴は、所詮その程度……
――厳しくて、残酷で、人を人とも見ていないような意見。
それを言ったのは、私達と同じ歳の男の子なんだ。
「ちょ、ちょっと待て！」
再び先生が口を開く。
「お前、そんなことを言うなら、自分はこの授業を聞かなくても、内容が理解できる自信があるんだな？」
「……」
「教科書２４ページ、問７の文を訳してみろ！」
先生がそう言ったので、私はすぐにそのページを開いてみる。
「……」
――相当難しい英文だ。私もわからない単語もいくつかある。どう見てもこれは初授業で解かせる問題じゃない。完全に先生が彼をやりくるめたくて出した無茶振りだった。
「――すまん、ちょっと教科書見せてくれ」
サクライくんは、隣に座る男子にそう言った。
「教科書、全部家に置いてきてるんで」
彼はそう言った。それに先生はまた怒ったが、本人は何食わぬ顔で、隣の男子から教科書を一度借りて、それを手に取った。
「何々……自動販売機は、使う。電力を沢山。しかし、あるのだろうか、必要が、日本で、電力、これだけのを、使うのは、常に」
片言のような英訳だった。
「はぁ？　何だそりゃ？」
それを聞いて、先生は鼻で笑った。
「出来もしないくせに、偉そうな口を聞くな！」
先生はもう一度サクライくんを怒鳴りつけた。
だけど。
「サンキュ」
そう言って彼は教科書を隣に返すと、またさっきと同じ体勢で机に突っ伏し、夢の世界に旅立ってしまった。

「あぁ、全く肝が冷えたわ」
「サクライくん、可愛い顔して結構やるわね」
「そう？　でも口の割に、英訳、ひどかったじゃない」
「うん、口だけ男なのかな。顔はいいけど、ちょっとがっかり……」
――昼休み、私はクラスの女子と机を並べてお弁当を食べながら、今日の授業のことを話していた。といっても、やっぱりみんな授業より、サクライくんと先生達のバトルの方が気になっていたようだけど。
サクライくんは、あの片言の英訳のせいで、クラスメイトの評価を更に落としていた。大きなことを言って、実力はたいしたことがない奴という評価は、噂に乗ってどんどんクラスに広がって言った。
「……」
みんな、気付いていないの？
あの難しい英文を、彼は片言でもノータイムで訳した。あれだけ訳せば、意味は「自動販売機は電力を沢山消費する。しかし日本はこれだけの電力を自動販売機に使う必要があるのだろうか」という意味にはすぐ辿り着ける。
あれは大学受験用の英文の読み方だ。
大学受験を考えると、英文を完全な日本語に訳す必要性というのは、実はほとんどない。これは上位大学ほどその傾向が顕著になる。慶応や上智といった私立大学は、９０分程度の試験時間で、１０００単語以上の英文を４つ５つ、普通に読ませる。そうなるともはや英文を読み返す時間さえない。ましてやそれらを全て完璧に訳していたら、それだけで試験が終わってしまう。英文を完璧に訳せ、なんてことを癖にしてしまうと、大学受験の英語はかえって点に結びつかなくなるものだ。
彼はそれをわかっているから、英文を単語、熟語レベルに細切れにして、日本語と同じように一つ一つ訳していった。それなら英文

を全部読んでからでなくても訳せる。ノータイムで英文の意味を読み取る最も効率のいい方法だ。これなら英文を読み返さなくても、ちゃんと意味は取れる。

それを、中学から上がったばかりの彼が、鮮やかにやってのけた。相当実戦で鍛えていなかったら、できない。私もまだああいう訳し方は出来ない。

――確かに彼は、あの先生のやる英語の授業を受ける必要はない。厳しいことを言うだけのことはあると、私は驚嘆していた。もしかしたら彼はもう、上位大学の英語の試験問題をクリアできるだけの力があるのかもしれない。

クラスメイトは、まだそれに気が付いていなかったけれど……

もしかしたら、私の方が彼を過大評価しているの？　とも思えてくる。

この時の私は、彼の本当の実力を、まだ理解できていなかった。

Another story ～ 2－5

部活の仮入部期間がスタートすると、私はその初日から。吹奏楽部が活動する音楽室の門を叩いた。

当時の埼玉高校は、部活動は運動系、文科系問わず、部活は2年生で引退させられる。勿論3年生になっても部活に顔を出す人もいたけれど、基本的にあまり部活動は盛んではない。そもそも部活に入らない人も多く、部活所属率は全校生徒の半分程度だった。

何でも埼玉高校は、長年、東大合格者の8割が帰宅部だったらしく、部活に所属する人ほど、成績が下位に行きやすく、現役受験に失敗する例が多いらしい。特に練習がきついとされる野球部とサッカー部は、部員の現役合格率が3割を切っているという。

だから、吹奏楽部も、残っているのは2年生だけで、12人ほどしか所属していなかった。仮入部に参加した1年生は、私を含めて15人くらいで、中には私と同じ、1年E組のクラスメイトもいた。

「サガラ・アオイです。中学ではホルンをやっていました。よろしくお願いします」

「タカハシ・ミズキです。アルトサックスとクラリネットが出来ます」

私と同じクラスの二人が、まず先輩達の前で自己紹介する。

アオイは真面目そうで、少し大人しい印象があったけれど、肌の色が白く、スノードロップのような可憐さのある女の子だった。ミズキは快活で、見た目も大人っぽく、派手な印象だけれど、アルトサックスを持った姿が、とてもかっこいい、向日葵のように明るい女の子だった。

「はい、じゃあ次はマツオカさん、挨拶どうぞ」

仮入部届けを見て、顧問のタカヤマ先生が、私の名を呼ぶ。何だかまだ大学生と言われても信じてしまいそうなほど、若い女の先生で、いつも優しそうな笑顔を浮かべているのが印象的だった。

私は先輩や、同級生の前に立って、会釈をする。
「マツオカ・シオリです。中学ではピアノとバイオリンをしていたんですが、仲間とひとつの音楽を作り上げることに憧れて、吹奏楽部を希望しています。まだ何も弾けませんが、頑張ります。よろしくお願いします」
再び会釈をすると先輩達からも拍手が起こった。
――その後は、先輩達の練習を1時間ほど見学していくよう、タカヤマ先生から指示をされた。明日からは楽器を持ってくれば、自由練習に早くも参加させてくれるらしい。
先輩達は、私達に演奏も聴かせてくれた。エアロスミスの「Ｄｏｎ'ｔ　ｗａｎｔ　ｔｏ　ｍｉｓｓ　ａ　ｔｈｉｎｇ」を演奏する先輩達は、さすがに12人では、吹奏楽と言うには少しサウンドの力が不足しているように感じたけれど、どの先輩も本当に楽しそうに演奏をしているのが印象的だった。
私はずっと、モーツァルトとか、ショパンとか、クラシックを中心に音楽を続けてきたのだけれど、吹奏楽部は、こういう音楽もやれるのか、と、少しわくわくした。
私の腕じゃまだ、先輩達との演奏には混ざれないけれど、早く、こうして先輩達の演奏に混ぜてもらえるようにならなくちゃ、と、強く思った。
――「マツオカさん」
部活見学が終わって、音楽室を出た時、私はサガラ・アオイから声をかけられた。二人で校舎の階段を降りながら、話をした。アオイは少し引っ込み思案気味の女の子だったから、まだクラスでもちゃんと話をしたことはなかった。
「マツオカさんも吹奏楽部だったんだ。何だか嬉しいな」
「え？」
「私、マツオカさんとずっと話してみたかったの。入試でトップを取るくらい頭いいのに、優しそうで、綺麗で――きっかけが出来て、よかったな」

「そんな……」
「もしよければ、これから仲良くしてくれないかな？」
「うん、私でよければ、こちらこそ、よろしくお願いします」
私はアオイに微笑みかけた。
長年染み付いた、優等生の顔で。
――これじゃ、中学の時と、変わらないじゃない。
私とこうして友達になってくれる人は、大抵が、私の成績がいいからとか、そういう理由で寄ってくる。だから私は友達作りで苦労したことがない代わりに、自分から本気で友達になりたいと思った人に出会ったことも、友達作りで努力したことも、まだなかった。
そうして、何の苦労もせずに得た友達は、時に、私にはとても遠くに感じられて――
何だか、本当の意味で、私と友達になってくれる人は、一人もいないんじゃないかって。自分の成績が落ちてしまえば、みんな私から離れてしまうんじゃないかって。
そんな不安がいつも頭から離れなかった。
だから高校では、そんな自分を変え、自分のほしいもの、やりたいことを探そうと意気込んでいたのに、入学早々、私が動く前に、先生や友達によって、中学の時と大して変わらない環境――私を優等生と褒め称える先生達に、成績によって築いた地位によってできた友達という構図が出来上がってしまった。
――こういう時に、実感する。
いくら成績がよくても、私には、何かを変えるだけの力が圧倒的に不足している。現状維持に努めるのが精一杯で、自分の殻に閉じこもりがちで……
毎日に流されながら、生きているのだと。

次の日、学校に登校してきた私は、教室の一点に、人だかりが出来ていることに気付く。

「さあさあ張った張った！　大儲けのチャンスだぜ！　千円賭ければ１万円に、１万賭ければ１０万になるってこった」
なんとも景気のいい語り口調だった。
「あ、マツオカさん、おはよう」
私が登校したのを見て、アオイが私の隣にやってきた。私は鞄を自分の机に置く。
「どうしたの？　随分教室が賑やかだけど」
「エンドウくんが、賭けを持ち出したのよ」
「賭け？」
私が首を傾げていると、隣に、タカハシ・ミズキもやってくる。
「なんでもサッカー部の顧問って、中学で野球をやってた人がサッカーに転向するのが嫌いみたいで、そういう人に、まずグラウンド１００周させて、サッカーの厳しさを教えるとか何とか言ってる、ウザい熱血野郎なんですって。毎年何人か倒れる人出してるらしいんだけど、それにうちのクラスのサクライくんを挑戦させようとしたのよ。彼、昨日野球部の仮入部に参加したらしいし」
「……」
「で、エンドウくんとヒラヤマくんがサクライくんにけしかけたら、彼、報酬があるならやる、って言ってね。それで急遽賭けを開いて、サクライくんに払う報酬を集めてるってわけ」
「……」
「俺、失敗に２０００円賭けるぜ」
既にクラスメイトの何人かは、エンドウくんにお金を払っている。エンドウくんの横にいるヒラヤマくんが、それをノートに記録し、一人一人自署でサインさせている。
「でも、大丈夫なの？」
私はアオイに訊いた。
「だって今まで、一人も成功者、出てないんでしょ？　あのグラウンド１００周って、多分３０キロ以上あるし……賭けなんかしたら、みんな失敗に賭けるに決まってるよ。それでもし、サクライくんが

失敗したら……」

「サクライくんもそう言ってた。そんなことして、僕が失敗したら、相当な自腹を切ることになるぞ、って」

アオイが言った。

「でも、エンドウくんはそれでもいい、って。お前が失敗する気がしないし、高校生活を楽しくするために、自分を危険にさらすのも悪くないって」

「……」

「あの3人、顔はそこそこいいけど、残念なイケメンだったのね」

ミズキが言った。

「大した考えもなくバカ騒ぎが好きで、とにかく注目を浴びたいんでしょ。典型的なガキね」

ミズキの評価は辛辣だった。

確かに中学時代、そういう男子はいた。女の子にもてたかったり、人気者になりたいからと、意味不明の行動をとるんだ。変に突っ張ってみたり、空元気を振りまいてみたり。そういう行動に出た人の末路は、大抵が自滅だ。やがてクラスの脇に葬られてしまう。

教室で常に寝るサクライくんや、こうして馬鹿騒ぎをするエンドウくん、ヒラヤマくんの行動は、そういう時の男子を髣髴とさせる。

多分女子達はみんな、中学のときに何人かいた、そういう自滅した男子と同じ空気を、あの3人から感じ取っていたと思う。

けれど――

オリエンテーション旅行で、クラスメイトに自己紹介を促したエンドウくんは、決して自分がクラスで目立とうと思って、率先して動いたわけではなかったと思う。

ヒラヤマくんだって、見た目からしてすごく目立つ人だ。こんなことをしなくたって、友達なんてすぐできるだろう。目立つために自ら動く理由が見当たらない。

そして、サクライくんは――

私が昨日の授業を見る限りでは、サクライくんは、相当頭のいい

人に見えた。そしてプライドが高い人だ。
そんな人が、グラウンド１００周なんて、初めから無理な条件の挑戦を、勝算もなしに受けて、わざわざ恥をかくようなこと、するだろうか……
それに――あの眠りの深さは、授業中に惰眠を貪るなんていう怠惰な印象を、あまり感じなかったように思う。
――私にはまだわからない。
でも、ひとつだけ思うことは。
私が昨日の授業から、何かを感じ取ったように、あの二人も、サクライくんから何かを感じ取ったのだろうか、ということ。

――エンドウくん、ヒラヤマくんの扇動によって、その賭けは昼休みになる頃には、学校中に知れ渡っていた。
ヒラヤマくんは自作ののぼりを持ち、エンドウくんは自作の看板を胸と背中に取り付けたサンドウィッチマンになって、校舎中を練り歩いた。二人とも背が高くて、ヒラヤマくんは顔もいい分、校内ですごく目立っていた。
昼休み、一通り学校を回って帰ってきた二人は、ようやく購買で買ってきたコロッケパンと焼きそばパンの昼食にありついていた。
「ねえねえ、どうだった？　成果は」
さすがにクラスでも目を引く二人のその行動に、クラスメイトも興味深々で、パンにかぶりつく二人にすぐ人だかりが出来る。
「ま、ぼちぼちかな」
ヒラヤマくんは自分が持っているノートを開いて見せている。
「本当にお金集めてるんだ」
「でも、集まれば集まるほど、リスクが大きいのに……」
「しかも当の本人は、今日も一日中寝てたし」
私はクラスの女子数人と机を合わせてお弁当を食べながら、その様子を窺っていた。

その後、サクライくんの方を見る。
ようやく4限までの長い睡眠を終えたサクライくんは、自分の鞄からコンビニ弁当を取り出して、それを一人で食べていた。食べ盛りの男子がコンビニ弁当ひとつでは、すぐお腹が減ってしまうだろうけれど、それを本当に噛み締めるようにして、ゆっくりと食べていた。
「あ、ねえねえ」
そんな私に、なんとも親しげに声をかけてくる人がいた。
自作ののぼりを持った、ヒラヤマくんだった。エンドウくんもそれについてくる。
「みんなも一口賭けてみないか？　オッズはどっちも10倍だぜ」
女子と初めて話すのに、全然気後れのないヒラヤマくん。どうやら相当女の子慣れしているみたいだ。
「半日学校歩いて、どれだけの人が賭けたの？」
一緒にお弁当を食べている女子の一人が訊いた。
「ん？　もう200人近く賭けて、賭け金も10万超えてるんだぜ。参考までに言えば、成功に賭けたのはそのうちのたった3人だけどな」
エンドウくんが言う。普通にしていれば長身でかっこいいのに、体と背中に看板を貼り付けていて、何だか残念な人に見えてしまう。
「す、すごいね。そんなに……」
女子の一人が言った。
「へへ、一日学校回ったからな。教師が来たら全力で逃げて、大変だったぜ」
エンドウくんが可笑しそうに笑う。
「……」
楽しそうだな……
二人を見ていると、本当にそう思う。もしかしたら、すごい借金をするかもしれないのに。
まだ出会って日も浅いのに、こうして学校中を巻き込むようなこ

とが出来るなんて。
それに比べて、私は……
「みんな現金だよなぁ。簡単に儲かると思ってるからなぁ」
「そりゃそうでしょ」
ミズキが言う。
「私も失敗に２０００円賭けるわ」
そう言って、ミズキが自分のルイヴィトンの財布（本物！　１５歳が持っていいの？）から千円札を2枚取り出して、前に差し出した。
「お！　毎度あり！　じゃあここにサインを」
ヒラヤマくんがそう言って、持っていたノートをミズキの前に差し出し、ペンを差し出す。
「マツオカさんも、賭けてみないか？」
エンドウくんが私に声をかけた。埼玉高校で、男子に声をかけられたのは、これが初めてだった。
「え？　わ、私？」
「頼むよ。入試トップのマツオカさんが賭けたら、そのデータを元に、他の女子も賭けてくれるかも知れないだろ？」
エンドウくんが自分の胸――看板の前で手を合わせた。首を少し傾げた姿が、大柄なのに、どこかユーモラスだった。
「……」
この二人は、サクライくんに何かを感じたのだろうか。
私も、サクライくんはどこか、捨てて置けないような雰囲気があるように思えてならない。
「――ねえ、どうして二人は、こういうことをしようと思ったの？」
私は二人に訊いてみた。こんなこと、余程サクライくんを信用していなければできない。その理由が知りたかった。
「ん？　ああ。俺達、サッカー部に入部する予定なんだけどさ、あいつをサッカー部に勧誘したいんだよ」
エンドウくんが言った。

「要はね、あいつと友達になりたいわけ。でもあいつ、あの通り手厳しそうだろ？　だからちょっと大掛かりなステージを作って、あいつに最後一発かましてやろうって考えてて」
エンドウくんは、いたずらっぽく笑う。
「……」
――至極単純明快な答えだった。
友達になりたいから。
方法はどうであれ、二人の顔には一片の嘘も誇張も見られなかった。
そして、それは……
「――私、成功に5千円、賭けるよ」
「え？」
エンドウくん、ヒラヤマくんが目を点にする。
「ちょ、ちょっとマツオカさん……」
アオイが私を心配そうに見る。
「は、はは……失敗したなぁ。マツオカさんくらい頭いいなら、絶対賭けるなら失敗だと思ってたのに」
エンドウくんが引きつった笑いを浮かべた。
「……」
何で私は、大枚5千円なんか賭けたのか。
きっとそれは、一言で言えば、気まぐれ。
――いや、違うかもしれない。
ひょっとしたら私は、こうして自分の身を危険に晒しても、彼と友達になりたいという二人のことが羨ましくて、応援してあげたくなったのかもしれない。この二人の行動の先に何があるのか、結末を見たかったのかもしれない。
それは、今の私には、足が竦んでできないことだから。

Another story ～ 2－6

吹奏楽部の仮入部二日目は、変に先輩達が色めきだって、窓の外をうかがっていた。
「あ、あれがもしかして、挑戦者なの？」
「カワイイ……女の子じゃないの？」
「でもあれじゃ、もう失敗は目に見えてるわね。ふふ、臨時収入ゲットぉー」
私も音楽室の窓から、外を見下ろす。
そこからは校舎の外、２面ある埼玉高校のグラウンドが見えていて、校門を出た、二つのグラウンドの間にある細い道には、沢山の人だかりができていた。その中心でエンドウくん、ヒラヤマくんが人の対応に追われている。どうやらサクライくんのその華奢な姿を見て、飛び込みで賭け金を払う人が増えているようだ。
そして、グラウンドの中では、サッカー部が練習している片隅で、サッカー部顧問のイイジマ先生の長い言葉を聞き終えたサクライくんが、体を捻ったり、関節を回したりして、マラソンの準備をしているところだった。
「あの――先輩達も賭けたんですか？」
私は窓の方を見ている先輩に訊いてみる。
「そりゃ賭けるわよ。だって自分の財布の重さが１０倍になるって目に見えてるもの」
「賭けを宣伝してる二人もイケメンだったしね」
先輩達は口々にそう言った。
「……」
「ほらほら、あなた達も練習練習」
折節、そんな先輩達の服を掴んで、顧問のタカヤマ先生が、窓から先輩達を引き剥がすべく引っ張っていってしまう。
「えー？　先生今日はあれが気になるよぉ」

「私達のお財布の命運がかかってるんだからぁ」
先輩達は、そんなことを言って、練習も上の空だった。
「ほらほら、新入生の前で、先輩がそんなじゃダメ」
タカヤマ先生がそう言って、とりあえず先輩達も、私達も、自主練習を開始した。
私も真新しいフルートを箱から出したが、私はまだ木管楽器は素人で、腹式呼吸、ブレスの練習からだった。フルートはリードがないので、唇の動きと、ブレスの腕が楽器の音色にダイレクトに反映されてしまう楽器だ。タカヤマ先生は、初心者の私にも優しく指導をしてくれた。そのおかげで、ピアノやバイオリンの練習では経験したことのない練習でも、割と壁を感じずに、練習に入り込むことができた。
隣でホルンを吹くアオイも、メトロノームを使っての自主連に励んでおり、ミズキに至っては、タカヤマ先生から腕を見込まれて、早くも今年のコンクールの課題曲の譜面を渡されていた。
そうして2時間、私はフルートに悪戦苦闘しながらも、何とか早くフルートを吹けるように、地道な基礎練習を繰り返していた。
だけど。
「８０周突破！」
窓からそんな大きな声が聞こえると、その後から、うおおお、と、尋常ではない数の声が上がった。
一体何事と思って、音楽室でも、タカヤマ先生や部員の何人かは、席を立って外の様子を窺った。
「ちょっと！　あの子、まだ走ってるわよ？」
先輩の一人が言った。
「え？　そんな？　じゃあ今の声って、もう８０周も走ったって事？」
「まずいじゃない？　成功しちゃったら、お金が……」
先輩達は、にわかに色めき立つ。
「……」

私もその先輩の様子から、好奇心に駆られ、もう一度窓を覗き込んだ。既にアオイとミズキは、窓の下を見ている。

保険の先生が、彼の安全を配慮して差し出した水を、サクライくんは走りながら頭から被って、体を冷却させていた。そして少しだけ口に含むと、サクライくんは水の入ったペットボトルをぽいと投げ捨てているところだった。エンドウくんとヒラヤマくんのいる横に立ててある、周回を数えるバスケットボールの得点板は、既に83とカウントされていた。

サクライくんは上半身に着ていたTシャツを脱いでいた。ここからは遠くてよくわからないが、とても大きなグラウンドを80周もしたとは思えないほど、足取りもまだしっかりしているし、スピードも速い。これなら100周クリアも、時間の問題のように思える。

「――やられた」

私の横にいたミズキが呟いた。失敗に賭けていたミズキは、もう自分の敗北を悟ったようだった。

「すごい――サクライくん」

アオイも素直にそう呟いていた。

「あぁー、やめて、やめてよぉ」

先輩達は、とらぬ狸の皮算用までしていた自分の臨時収入が、こんな馬鹿なことでの出費へと変わってしまうことの脱力感から、もう楽器に手がついていなかった。悲痛な声と表情で、サクライくんが1周、また1周と周回を重ねるのを、ただ黙って見ているしかなかった。

そして、サクライくんが100周をクリアした時、窓の外、そして音楽室からも大きなため息が漏れた。きっとこれだけのため息が、学校中で起こることは、埼玉高校の歴史で後にも先にもなかったと思う。

窓の外を窺うと、エンドウくんとヒラヤマくんは腰を抜かしている。それはそうだろう、何せ数百万の借金と紙一重の勝負をしたのだから。

そしてサクライくんは、サッカー部のグラウンドに倒れ、今保健室の先生が体調をチェックしている。すぐに上半身を起こしたから、どうやら大丈夫そうだ。

「……」

倒れているサクライくんは、ここからではよく見えなかったけれど……

見た限り、どんな時でも表情を崩さなかった彼でも、倒れてしまうほどに辛かったのだろう。グラウンド１００周は。

でも、何故そこまでして……

何故ここまでできる人が、授業中は、あんな怠惰を装うのだろう……

――次の日、学校に登校してくる私は、グラウンドにできる人だかりを見た。人があまりに集まっていて、体の小さな私では、様子を窺うことができない。

諦めて、私は昇降口で下駄箱を履き替えて、３階にある自分の教室への階段を登った。

教室に着いて、鞄を机に置くと、既に教室にいたほぼ全員が、窓の外から外を窺っていた。

「あ、マツオカさん、おはよう」

アオイが私の姿を見つけ、私の方へやってくる。

「あ、マツオカさん、昨日のサクライくん、見た？」

それを見て、他の女子も私の方へ集まってくる。

「う、うん。音楽室からだけど」

私はいきなりその話題を振られて、当惑する。

「そういえば、今日、学校に来る時も、すごい人だかりができてたけど――何かあったの？」

「あぁ、窓の外を見ればわかるよ」

そう言われたので、私はアオイと一緒に、窓の方へ行ってみる。

窓の外では、当時はまだ芝の張られていない埼玉高校の赤土のグラウンドにしゃがみこんで、黙々と何か作業をしている3人の人影があった。

「あの3人、学校であんな大々的に賭けなんかやったものだから、ああして罰として草むしりさせられてるんですって。反省文も沢山書かされるらしいわよ」

女子の一人が説明してくれた。

「……」

――そうか。あの人だかりは、この優等生だらけの埼玉高校で、こんな罰を下され、晒し者にされている3人を見物していたのか。

あの3人は、昨日のことで全校生徒に顔と名前を売った。昨日のヒーローが、今日はこんな罰を科せられているというのは、何かひとつの教訓めいたものがあるように思えた。

「あはは！　まあ学校中からお金巻き上げたんだし、これくらいはしてもらわないとねぇ」

「……」

教室の窓からは、昨日の音楽室よりかは、3人の表情もよく見える。

サクライくんは筋肉痛なのか、体が相当に重そうだ。それをエンドウくんがからかい、ヒラヤマくんもそれに便乗している。

ああしてあの3人が一緒にいるということが、昨日エンドウくんが言っていた、当初の目的は達成されたのだろう。サクライくんをサッカー部に勧誘することに、成功したのだろうか。

「なんか楽しそうね。サクライくんって、寝てない時は割とノリがいいじゃない」

「――3バカね」

それを見ていたミズキが言った。

「え？」

「ああ！　いいねそれ！　あの3人にピッタリじゃない？」

「埼玉高校の3バカトリオね」

これ以来、彼ら3人は、一まとめにされる時、埼玉高校の3バカトリオと呼ばれるようになった。

「でも、サクライくん、脱いだ時、ホントすごかったなぁ」

「そうそう私も見た！　お腹が割れてて、肩から肩甲骨あたりの筋肉のつき方が、程よい感じでね！　ガリガリかと思ったら、程よく筋肉あったのは、結構見直したなぁ」

「あぁ、あの筋肉で、身長がもうちょっとあったら……」

クラスの女子は現金なもので、大人しめで女性っぽいイメージのサクライくんが、あんな体を張った雄姿を見せたことで、たった一日で、昨日までの低評価を覆してしまったのだった。

次の日、私は音楽室に早朝からやって来ていた。学校が開門する朝の6時から、職員室で音楽室の鍵を借りて。

入学前から、私はフルートの練習を毎日朝にやろうという目標を立てていた。初心者である以上、人一倍練習して、早く部活に溶け込みたいし、今は何かと真剣に向き合ってみたいと思っていたから。だけど家ではまだ家族が寝ているし、音を立てるわけにもいかないから。

朝練はないと聞いていたので、音楽室には誰もいない。これなら初心者の私の下手な演奏が、場を乱すこともない。

私は入学前に買った、フルート初心者のための本を参照しながら、私は音を鳴らす。

だけどまだ私は、腹式呼吸も未熟で、タンギングも下手だったので、音も安定しないし、ブレスもタイミングが合わない。

「うーん……指は少しは動くようになったのに……」

私は息をつく。

「やっぱり失敗だったかなぁ……いきなり楽器を変えるより、ずっと同じ楽器を練習していた方がよかったかなぁ」

そんな愚痴が口をついてしまう。

気分転換に、外の空気を吸おうと思い、窓を開けてみる。あまりに下手だから、演奏中は窓を閉めていたんだけど……

「――あ」

窓を開けて、外を見ると、窓から見えるサッカー部のグラウンドには、一人の小さな男の子がいた。黙々とグラウンドを走っている。

「サクライくん？」

その小柄な体と、一度見た走り方のフォームとスピードで、私は彼と認識する。

一昨日あれだけ走っていたのに、もう今日走っている。普段ぐうぐう眠っている怠惰な印象からは想像できない程の体力だった。

「……」

そういえばあの一昨日のマラソンは、野球をしていた人がサッカーに乗り越えた人に命じられるものだったらしい。

もしかしてサクライくんも、サッカー初心者だから、私と同じ、ああして一人練習を？

そこでガチャ、と音楽室の扉が開き、私はその音にびくっと反応する。

「あら、マツオカさん」

そこには吹奏楽部顧問のタカヤマ先生が立っていた。

「びっくりした？　こんな朝早くから、人が入ってくるとは思わなかったでしょ」

私がびくっとするリアクションを見て、先生は笑いながら言った。

「す、すいません。朝から五月蝿くして……」

「ううん。大丈夫よ」

先生は軽く手を上げる。

「それよりも……うちの学校で朝から練習する人、初めてよ。少し嬉しいなぁ」

「そうなんですか？」

「うん。うちは勉強に支障が出るから、部活で朝練を強制することはできないの。吹奏楽部と言えば、朝練しなきゃいけないと思うん

だけどね……」
「……」
そうか。熱心な顧問としては、何とも歯がゆいだろうな……
「しかしマツオカさん、入試満点で、職員室でもう噂だったけれど、努力家でもあるのね。他の先生から人気なのも頷けるわ」
タカヤマ先生が頷いた。
「いえ、そんな……私だけじゃないですよ」
私は言いながら、窓の外を窺う。
私が窓の外をじっと見ていたのを見て、先生も窓の外を窺う。
「あぁ――もう一人の天才少年くんね」
「え？」
私は首を傾げる。
「……」
先生は口許に手を当てて、少し考え込む。
「――あなたには、話しておいた方がいいかもね。理不尽に教師の都合に巻き込んでいるわけだし」
そう言って、先生は私の方を見る。
「あなた、入試トップだから、入学式で学年代表の挨拶をしたっていうのは、聞いているでしょ」
「え？　はい、それは入学式前に説明がありましたから」
「実はね、あなたは入試満点だったんだけど、満点合格はもう一人いたのよ。それがあの子」
そう言って、先生は窓の外を指差す。

「……」
「あれ？　あまり驚いていないのね」
先生は私の反応が薄いことに、首を傾げた。
「いえ、何となくそんな気がしていたので」
私はそう言ったが、自分でもその事実を聞いて、あまり驚いていないことが少し意外だった。周りの人間は、みんなサクライくんを評価していなかったから、私が単に買いかぶっているだけなのか、わからなくなる時もあったのに……
「初め入学式の新入生挨拶も、あなたと彼の二人でやってもらう予定だったのよ。それで先にあの子の家に電話したんだけどね、彼、そんなものに興味はありません。次席の人に全てお任せします、って言って、こっちの話を聞こうともせずに、即ガッチャーン、ってわけ」
「……」
「それが結構問題になってね。うちは文科省のお偉方や県知事も入学式に来るから。それをあなたが一人で上手くやってくれたおかげで、この学校の面目も保たれたの。そのおかげであなた、入学の時から先生達の評価は高くてね。その分彼の評価は、入学前から最悪なの。おまけにあの子、入学式もオリエンテーションもサボるし、授業中は居眠りしているしで、真面目なあなたとは対照的でしょ？
今じゃ埼玉高校始まって以来の問題児扱いよ」
「……」
「職員室も最近、あの子のことでギスギスしててねぇ。何とかあの生意気な坊やに一泡吹かせたいって。その為に、マツオカさんに今年の学年トップを取ってほしくて、仕方ないのよ。彼を倒せるのはあなたしかいないって、勝手に期待されちゃってるのよね」
「……」

「――まあ、あなたからしたら、本当にバカバカしい話よね。先生達の都合で、勝手に期待されても困るわよね」

先生は、私を労うように、私に微笑みかけた。

「だけど、あなたはこの3年間、あの子と色々と比較されることは、今後間違いないでしょうね」

「……」

この埼玉高校は、全国でも有数の進学校――つまりここは、偏差値教育というヒエラルキーの頂点に近い場所にある。

当然そんなところに来るのは、中学での競争に勝ってきた、各地域のエース達ばかりだ。偏差値という価値観の中で、競い、蹴落とし、蹴落とされ――そんな事を繰り返して、ここまで登り詰めてきたのだ。

多分、私もそうなのだろうと思う。

でも――私はこれまで、誰かと競い、争ってきたという実感は全くない。

私はただ――最低限の勉強をして、家族を心配させないようにと思っていただけ。そしてそれが昂じて、家族を安心させるために、なるべく優秀な成績を修めようと思っていただけ。

他人の事を見ながら勉強したことはないし、そういう動機付けで勉強をするやり方は、若干優柔不断な私には向いていない。

だから別に、サクライくんと争いたくはないし、争う理由もない。

なのに――何でみんな、そんな私に、そんな多くの事を望むのだろう。

「あの――サクライくんって、そんなに凄い人なんですか？」

でも、私はとりあえず訊いてみる。今後比較される相手がどんな相手なのかは、私としても知っておきたい。それを知って、自分がどういう対応に出るか考えようと思ったからだ。

「そうね。うちに来る生徒としては、経歴が変わっているけれど、とにかく凄いわよ」

先生は頷いた。

「何と言っても、彼、慶徳で3年間主席を取って、学費の優遇などの恩恵を手放さなかったらしいからね」
「え？　慶徳って……」
「女子のマツオカさんでもわかる？　開成、灘に並ぶ日本の男子私立校の御三家のひとつよ。国立の筑駒と合わせて、毎年東大合格者の約５００人――約7割が、この４校だけで独占されてるの」
「……」
それは、つまり偏差値教育のヒエラルキーの中で、紛うことなき頂点だ。
そんなところでトップを取っていたサクライくんは――現時点で日本一頭のいい１５歳の一人ってこと？
「普通中高一貫の慶徳の中等部から、成績上位者が他校にわざわざ進学した例はないみたいだけどね。彼も慶徳を出る時に、相当慰留されたそうよ。学費を免除するとまで言われたらしいけど、わざわざカリキュラムや設備の劣る県立のうちに来たのよ。変わってるわよね」
「……」
「だけど、そんな子がうちに来たことで、はじめは先生達も大喜びだったんだけどね。あまりに彼の態度が悪いんで、先生の一人が慶徳に電話して、本当にあの子が成績トップだったのか問い合わせたのよ。そしたら、どうなったと思う？」
先生は、話を引っ張った。私は当然首をふるふると横に振った。
「あいつはおたくの3年分のカリキュラムなんて、中学で終わってる。今東大を受けても、理？（医学部）以外なら5割以上の確率で合格できるくらいの力がある。県立の教師ごときに心配される筋合いもない。それでも文句があるなら、あいつをうちに返してくれって、けんもほろろな上に、伝統ある埼玉高校を、散々にバカにされちゃったわけ。だからサクライくんを倒すことは、うちをバカにした慶徳をやっつけることにもなるわけ。先生達の目の色が変わっているのは、そういうところも関係しているのね」

「――何か、凄い学校ですね」
「本当ね。成績さえよければ生徒の倫理観や道徳観なんて、どうでもいいみたい。だからあの子みたいな子供が出来上がったのかしらね」
「……」
倫理観や道徳観か……
それを言うと、私はむしろそれに縛られすぎな気があるかもしれない。
いつだってそう。ステレオタイプで、理性的で……本当の自分はどんな人間なのか忘れてしまう程に、自分の事を表に出せない。
「マツオカさん」
窓の外のサクライくんを見下ろす私に、先生が声をかけた。
「とりあえずマツオカさんは、自分のペースでやればいいわよ。周りの声ばかり気にしていたら、疲れちゃうでしょ？　せめて吹奏学部では、私はあなたを一人の生徒として扱うから。疲れたら、部活に来て、みんなと音楽を楽しんでみたら？　そういうガス抜きの場も、せめて作らないとね」
「――はい、ありがとうございます」
この時のタカヤマ先生の言葉が嬉しくて、私は吹奏楽部に正式に入部することになった。

6時から7時15分までは音楽室でフルートを練習し、それから8時20分までは、図書室に移動して、今日の授業の予習をする――それを3年間続けようというのが、私の高校生活の目標だった。
この学校は、あまりの難易度から、地元である川越市の生徒がほとんどいないから、早い時間に登校する生徒はほとんどいない。そのおかげで静謐な朝の図書室で勉強を終えた私は、8時30分の朝のホームルームを待つ教室に向かった。
「参った参った。昨日一日レポート3000文字の反省文を書かさ

れちまってさぁ」

教室では、クラスメイトに囲まれるエンドウくんとヒラヤマくんが、昨日先生達から下された罰について語っていた。あの破天荒なオッズを成功させたことで、二人はもう既に、クラスの人気者だった。

「しかしケースケは、ずっとしんどそうだったな。筋肉痛で、しゃがむだけで痛いって」

「ああ、でもあいつ、レポート３０００文字を、たった３０分で書き終えて、俺達の事を待たずにさっさと帰っちゃったんだぜ。酷いよなぁ」

私は自分の席から、そんな二人の事を眺めた後に、サクライくんの机を見た。

相も変わらず、サクライくんは机に突っ伏して、もう眠っていた。

――そしてそのまま、朝のホームルームも終わってしまい、一時限目の数学？の授業も始まってしまった。

「……」

二次関数の説明とノートに取りながら、私はその間、何度かサクライくんの姿を窺った。

まるで置物のように動かず、寝息ひとつ立てずに眠っている。

「……」

この人が、全国トップスリーに入る中等部の３年間主席――

確かに頭がいい人には間違いないのだろうけれど、そんな風には全然見えなかった。

でも――どうしてだろう。

中学の時も、授業でいつも寝ている人というのは見ていたけれど。

彼の寝相からは、その時に感じた、惰眠を貪るという感じの怠惰な印象が全く感じられない。

あまりに寝相がいいからか、それとも、あまりに堂々と眠っている故の清清しさからか、それは上手く形容できないのだけれど――

だけど……

数学の先生は、ついにそのサクライくんの授業態度に痺れを切らし、サクライくんの机に近づいて、問答無用で彼の机の足を蹴った。ガタァンという大きな音がして、机が吹っ飛ぶと、それに突っ伏していたサクライくんの身体も一緒に吹っ飛び、椅子から転げ落ちた。

教室に緊張感が走る。

「――痛て……」

サクライくんは、教室の床に座り込むようにしながら言った。

「サクライ、いい加減にしろよお前。俺の授業がそんなに嫌か」

数学の教師も、怒気を孕んだ声で、彼を見下ろした。

「……」

サクライくんは、頭を掻きながらゆっくりと立ち上がり、顔を上げる。

眠そうな目を細めている彼の目は、異様な雰囲気を含んでいるように見える。

「――分からない人だな」

そして、溜息をつく。

「別に先生の教え方が悪いから寝てるわけじゃないんですよ。内容が僕にとって無意味だから聞いてないだけです。この授業内容じゃ、フィールズ賞受賞者が授業してくれても寝ますよ」

「何だと？」

「実際他の授業も寝てるわけだし、あなたの教え方だけ差別化して寝てるわけじゃないことくらい、分かってくれませんか」

「貴様！」

「……」

はじめは先生の剣幕に気圧されたが、何だか一方的に怒鳴りつけるだけの先生より、冷たい目で淡々と話すサクライくんの方が、ずっと迫力があって見えた。

「そうか、あくまでそういう態度を取るのか。なら出て行け！　他の生徒の邪魔だ！」

出た、先生の決まり文句。

中学の時も、そう言って生徒の優位に立とうとする先生がいたな。
そして生徒はそう言われて、教室をまず出て行かないんだ。
だけど。
「え？　いいんですか？」
サクライくんは目を見開いた。
「そりゃよかった。さすがに机で寝てると身体痛かったんで……疲れも取れないし」
そう言って、自分の机を立たせると、すぐに自分の鞄を持って、先生に一礼した。
「ついでに他の教師にも言っておいてくださいよ。テストは受けに来ますから、どうぞお構いなく、って」
「お、おい、ケースケ……」
ヒラヤマくんが、彼を止めようとしたが、彼はそんな声を歯牙にもかけない素振りで、踵を返し、教室の出口に向かった。
「お前、これだけで済むと思うなよ」
教室の引き戸に手をかけたサクライくんの背中に、先生が怒鳴りつけた。サクライくんも足を止める。
「お前を停学や退学にすることも簡単なんだぞ、こっちは！」
出た、教師の決まり文句その2。反抗的な生徒には、内申や停学、退学を以って脅迫するやり方。
でも。
「――ご自由にどうぞ」
まるで先生の言葉を、肩にたかる蝿のようにその一言で払い飛ばした彼は、そのまま教室を出て行ってしまった。
「……」
廊下に響く彼の足音がかすかに聞こえ、やがて聞こえなくなるまで、教室には沈黙が流れた。
――「何あれ。ああしてツッパってたら、カッコいいって勘違いしてるのかな？」
「サクライくん、本当に退学しちゃうのかな？　うちの学校じゃ珍

しいイケメンの一人なのに」
「まさか。あの授業だけでしょ？　戻ってくるって、さすがに退学はないでしょ」
休み時間の教室は、彼の噂で持ちきりだった。
しかし、彼はそれから本当に、一度も教室に戻ってくることはなかった。
次の日も、また次の日も――彼は朝のホームルームで出席を取ってもらうと、すぐに教室を出て行ってしまい、授業には全く参加しなかった。
――そんなある日。
授業中に、明らかにおかしなピアノの音色が響き渡った。この学校は、1、2年生が週1回1時間だけ、音楽の授業があるのだけれど、その授業で取り扱う曲としては、明らかにおかしな選曲。私も聴いたことのない曲だった。
「――何だ、このピアノの曲は」
その時授業をしていた物理の先生が、首を傾げた。
「――これ、時の傷痕じゃん」
エンドウくんが言った。
「ゲーム音楽だよ。こんな曲、授業で弾いてるんじゃないな」
「じゃあ、誰が……」
教室が一斉に同じ人を思い浮かべた。
「――サクライくん？」
「へぇ、上手いじゃん、あいつ」
「あいつ！」
物理の先生は苦虫を噛み潰した。
「……」
そのピアノの音色は、コンクールだったらまず最低評価を取ることは確実だった。譜面を無視するようなめちゃくちゃな弾き方だった。
でも、所々にアドリブでのアレンジが加えられていて、弾いてい

る本人が、どんな曲を弾きたいか、という意志が伝わってくるような、そんな演奏だった。まるでジャズのピアノのようにテンポがよく、即興でリズムを繋ぎ合わせる軽快さがあった。

私の中学時代までやっていたピアノは、如何に譜面通りに弾くか、というものだったから、こういうピアノの音色は、聴いていてあまり綺麗には聞こえなかったけれど……

でも、クラスのみんなの表情を見ると、その演奏を聴いていると、楽しそうな雰囲気に浸った顔になった人が多い。

そんな、心がわくわくするような演奏だったことは事実だ。私もその演奏に、心が沸き立っていた。

――それ以来、教室にはたまに、音楽室からそんなピアノやギターの音色が響き渡った。サクライくんは相変わらず授業には出なかったけれど、週1である美術の授業と、体育だけは参加していた。

既に学業での成功を諦め、美術や音楽といった、風流を楽しむ彼は、次第に「世捨て人」と揶揄されるようになっていった。確かにそんな彼の雰囲気は、俗世を離れ、文化の大成に勤しむ風流人の雰囲気があった。

しかしその一ヵ月後、そうして彼を揶揄していた生徒達の表情は、一気に青ざめることになる。

5月に行なわれた中間テストで、サクライくんはトップの私とわずか1点差の2位を取ったのだから。

Another story ～ 2－7（後書き）

連載が遅れて申し訳ないです。

「時の傷痕」は、ゲーム「クロノクロス」のＯＰです。ｙｏｕｔｕｂｅなどで視聴できますので、聴きたい方はぜひどうぞ。

Another story ～ 2－8

「わぁ、やっぱトップはシオリかぁ。さすが」
「でも、2位が1点差でサクライくんか――3位とすごい差がついてるし。シオリに唯一ついていってるじゃない」
「頭よかったんだ。あの人」
この頃になると、クラスメイト達とも打ち解けはじめ、みんなが私を名前で呼ぶようになっていた。
私達は掲示板に貼り出されている成績発表を見に行ってから、教室に戻った。
「あぁーあ！　赤点……きっついなぁ……しかも4つも……」
「幸先のいい高校デビューだな」
サクライくんは教室のベランダに出て、ハサミ一本でヒラヤマくんの髪を切っていた。器用なもので、サクライくんは美容師顔負けのハサミ裁きで、ヒラヤマくんのボサボサ頭を整えていく。
この頃のサクライくんは、サッカー部の練習で、毎日のようにヒラヤマくん達から身体を吹っ飛ばされていて、体中に痣や擦り傷を作っていた。女子の間では、彼の白い肌につく傷が痛々しいと、ヒラヤマくん達に漏らす娘もいた。
「しかし器用なもんだ。それで千円じゃおつりがくるぜ」
それを見ていたエンドウくんが言う。
「金を払えばお前も切ってやるよ」
「マジ？　散髪代はオフクロから3千円出るからな。2千円浮くぜ」
「今から2千円浮いても、赤点取ったら、小遣いダウンは決定的だな」
「何で俺が赤点取ったの知ってるんだよ！」
「お前、直前まで帰納法も漸化式もできなかったんだ。わかるさ」
「――落とした教科までお見通しかよ」
まるでテストの成績など、気にもかけないようなその素振り。

彼は入学して2ヶ月、二人以外の人とろくに接点を持たない。クラスメイトと会話もせず、そもそもクラスメイトや先生の名前さえ覚えているかもわからない。

でも、3人が揃っている姿は、本当に目を引く。特別絶え間なく話をしているわけでもないけれど、本当に居心地が良さそうだ。女にはわからない、男の世界という感じで、日に日にそんな3人を眺める女子達は増えていった。

「やっぱあの3人っていいなぁ。確かに3人ともイケメンだけど、何か絵になるのよね」

「3バカだと思ってたけど、サクライくんは頭いいのかぁ」

「ただの怠け者じゃなかったのか。こりゃサクライくんの見方を変えなくちゃいけないなぁ」

「……」

「シオリちゃん、埼玉高校でも学年トップかぁ」

家に帰り、夕食の席で、お母さんはご機嫌な素振りで私に言った。そのお祝いで、今夜のうちの食卓は、ちょっぴり豪華に彩られた。

「……」

それに対し、お父さんは複雑そうな面立ちだった。

「俺の娘なのに、何でこんなにできるんだ……シオリが東大に入ったりするのが現実味を帯びてきて、怖くなってきた……」

「父さん。飛躍しすぎだって」

まだ小学三年生のシュンがお父さんをなだめる。

「でも、私中学に入って、改めてお姉ちゃんのすごさがわかったわ」

シズカが口を開く。

「テストで2位と大差をつけて、ダントツトップが当たり前。私も今回トップ10には入ったけど、先生からは、お姉ちゃんはもっとすごかったって、それればかり……もう、嫌になっちゃう」

そう言って、ふくれ面を私に見せる。

「で？　高校でも2位と大差をつけたの？」
シュンが聞いた。
「ううん。たった1点差。ギリギリ……」
「へえぇ。やっぱり埼玉高校には、シオリちゃんも苦戦する人がいるのね」
お母さんは声を上げる。
「……」
私は食後のケーキを食べながら、自分の今の感情を整理しようとした。
「ごちそうさま」
私は早めにケーキを食べ終わると、部屋に戻り、二段ベッドの上のベッドに、どさりと倒れ込んだ。
「……」
眼前にすぐ迫る、白の天井を見て、私は考えていた。
テストでトップを取って、私は今日一日、教室や廊下ですれ違う先生達から例外なく、お褒めの言葉をもらった。サクライくんをテストで倒したことで、先生達も大いに溜飲を下げたようだ。逆に他の級友は「授業に出ていないような奴に負けて、お前達、恥ずかしくないのか！」と、先生達に沢山叱咤激励されていたけれど。
でも――
――点数の問題じゃない。
元々授業では「ここ、テストに出るぞ」というところを教えてくれる。それを知っているだけでも、私の方が有利だったのだ。それに対して、サクライくんはテストの範囲さえ分かっていなかったのだ。数学や英語ならともかく、暗記科目では絶対的に不利だったはずだ。
問題は、サクライくんが今まで悪評ばかりだった外野を、自分の力ひとつで、一瞬で黙らせてしまったことだ。
昨日まで、彼は学校で軽蔑の対象だったのに、それを自分ひとりの力で、軽蔑の視線を驚嘆のそれに変えてしまった。
私はそこに、サクライくんと私の力の差を感じた。

同じくらいの成績でも、サクライくんの力には、私にはない激しさ、力強さがある。テストでは1点だけ勝ったけれど、私には、サクライくんのように、劣勢を一気に押し返す程の力はない。それは自分が一番よくわかっていた。

結局私は、毎日勉強していても、現状維持にしかその力を用いることはできないんだ。

高校に入ったら、私も、中学の時は見えなかった、本当の自分を知りたいと思っていたのに、高校に入って2ヶ月、結局私はあまり変わっていない。私は自分で、劇的に自分や環境を変える力に乏しいのだと、改めて思い知っただけだ。

「……」

思いを巡らせていると、部屋の扉が開く音がして、妹のシズカが入ってきた。

「珍しい。お姉ちゃんが夕食食べてすぐ、ごろごろしてるなんて」

そう言われて私は体を起こし、ベッドの上から下を窺ったけれど、シズカの姿は見えない。多分下のベッドに腰を下ろしているのだろう。

「テストでこんなに差を詰められたことなかったから、焦ってるの？　今日のお姉ちゃん、元気ないじゃない」

私の足元から、シズカの声。

「ううん、そんなんじゃないよ」

私は否定しながら、少し反省した。せっかく学年トップを祝ってくれたのに、そんな家族を尻目に上の空だった自分に。

「で？　お姉ちゃんに1点差の人って、男？　女？」

急にシズカの声が弾みはじめる。

「え？　男子だけど……」

「やっぱり！　で？　その人ってどんな人？　暗そうなガリ勉？　それともカッコいい？」

「……」

私はそう聞かれ、サクライくんの姿形を思い浮かべてみる。

あまり教室にいないから、ディティールまでは思い出せなかったけれど――

エンドウくん達と並ぶと、親子くらいの身長差で、体も華奢で、顔立ちも幼い。女の子だと言われても疑わないような、甘くて儚げな印象さえ醸す。

でも――何だろう。彼の周りを覆う空気は。そんな外観とは真逆の、冷たさと激しさが共存した、氷雨のように冷たく張り詰めた空気で。

誰も彼に近づくことは出来ない。

あの人は――

「どうかな――よく分からない」

私はお茶を濁すように答えた。

「えぇ？　分からないって……お姉ちゃんって本当にそういうところ、お堅いなぁ」

「……」

シズカにせっつかれながら、私は今日の彼の仕草を思い出していた。あれだけみんなから馬鹿にされていた事を、彼も知っていただろうに、あのテストの結果で、それを誰かに誇るでもなく、当然とでもいうような顔で――

それを見て、私ははっきりとわかった。

先生達や、彼と比較される私が勝手に気にしすぎていただけで、彼は最初から私や先生達のことなんて見ていなかったんだ。

今までの事だって、先生に喧嘩を売る気なんて、本当になかったんだ。全て自分のため――そのためだけに行動していただけ。

でも、それは、凄く残酷なことだ。

エンドウくん、ヒラヤマくんと一緒にいる彼は、絵になると、クラスのみんなは言った。

でも――私には、そうして3人が一緒にいる姿は、まるで二つの絵画を繋ぎ合わせたような、まるで別の世界のものをくっつけただけのような、そんな人工的な感じに見える。

彼は、いつも一緒にいるあの二人のことすら、路傍の石程度にしか見ていない。一緒にいるのに、本当は一緒にいない。

二人の前では、それなりに話に付き合ってあげているけれど、一度だって彼はにこりともしない。声も仕草もただただ静かで、まるで動物を観察する科学者のような、静かな目であの二人を見ていた。

私はそんな彼の目が、正直恐ろしかった。

あの人は怖い人――あんな目をする人と、出来れば関わりたくない、とさえ思った。

次の日、私は目覚ましより早く、雨の音で目が覚めた。

外はあまり激しくはないけれど、粒の大きい雨がしとしとと降っていた。

梅雨特有の長雨――あぁ、中間テストが終わって、もう6月なんだ。学校は私服だから衣替えもないし、あまり実感なかったけれど――

まだ時計は5時55分。

私は入学以来、今でも週何回かは、早朝に学校に行って、フルートの練習をしている。7時半を過ぎると一般生徒が登校してくる。まだ今の音色を誰かに聴かせる自信がなくて、7時半からは図書室に行って、授業の予習をやるのが習慣になっていた。

私は昨日のうちに、お母さんが用意してくれたサンドイッチを軽く食べて、傘を差して学校へ登校する。

外に出てわかる、じめっとして、生暖かい空気。あぁ、嫌な季節だなぁと思う。

私の家は、埼玉高校から歩いて15分。普段は自転車で登校するのだけれど、今日は雨だから、歩いて学校に行くことにする。埼玉高校に入学してから、歩いて登校するのは初めてだった。中学はテニスをしていたけれど、今は運動をしていないから、毎日歩いて登校しようかなとも考える。でも15分のウォーキングじゃ脂肪は燃

えないよね……とも思う。

学校の門をくぐると、次の門の間には、左手にはハンドボールとテニスグラウンド、そして右手にはサッカーグラウンドがある。

私は雨の中、足を止めて、水浸しになっている赤土のサッカーグラウンドをしばらく見つめる。

「……」

さすがにこの雨だと、サッカーはしていないか――昨日のあんな目を見た翌日だったから、私はほっとする。

この学校は基本的、朝練を義務化してはいないけれど、私がいつも朝練習をしていると、いつもこのサッカーグラウンドを走っている人がいる。

それがサクライくんだった。

サッカー部で彼は、唯一の初心者らしい。サッカー部の監督にして、体育教師のイイジマ先生の顔を立てて、体育の授業はちゃんと出ているサクライくんは、やはりレギュラーを狙っているのだろうか。

最近はグラウンドを走った後、２０メートル程の短距離ダッシュを沢山行なっている。どうやら彼は今、足を磨いているらしい。

普段はあんなに冷たい目をした人が、どうしてあんなにストイックなまでに自分を高め続けるのだろう、と私が思うほど、サクライくんの練習量は、早朝からかなりハードだった。

何故そこまで頑張るのか、その理由はわからないけれど――

フルート初心者の私は、そんなサクライくんの頑張りに引っ張られて、この早朝練習を今でも続けられたのだと思う。ジャンルは違うけれど、タカヤマ先生から彼の話を聞いて以来、何となくだけど、彼より先に脱落したくないと思えた。変な意地が私の中で生まれて、気がついたら私はもう2ヶ月も、毎日フルートの朝練習をするようになっていた。

音楽室に入ると、ビニールに包んでおいたフルートのケースから、３つに分解されたフルートを取り出し、それを組み立てた。

私は、それなりに上達が早いらしい。部活でもタカヤマ先生が、フルートが上達したと誉めてくれるようになって、徐々にこの吹奏楽部で、私の居場所ができ、部内で友達もできはじめ、部活や学校、このフルートという楽器も楽しいと思えるようになってきた。

相変わらず、私はこの繊細なフォルムの楽器で、時に調子外れの音を出してしまうけれど――

「――ふぅ。今日はこれくらいかな……」

私は息をつく。時計が7時を回ったのを確認して、フルートをまた箱にしまう。

これから私は、図書室で勉強だ。家でも勉強はするけれど、朝にこうして楽器を練習してから勉強すると、頭がすっきりして、効率がいいのだ。私の部屋は妹と共同だし、早朝の学校は一人になれて、勉強に集中できる。

そうしていつものように、図書室の扉を開くと――

「――あ」

私は思わず声が出てしまう。

私の視線の先。背の高い本棚に両端を囲まれ、その間に並ぶ8個の、8人掛けの机のひとつに、一人の男の子が座っていた。

シャープペンを片手に、開いていた参考書に目を落としていたけれど、私の声に、その顔を上げる。

「……」

女性的で、甘い雰囲気。優しそうだけど、その奥には感情の起伏がほとんどない、まるで朝凪のように静かな瞳。

そこにいたのは、サクライくんだった。

これが私とサクライくんの、ファーストコンタクトだった。

Another story ～ 2－9

わっ！　わっ！　まさかサクライくんがここにいるなんて、思ってなかったのに！

ただでさえ男の人が少し苦手な私の心臓は、彼の姿を捉えた瞬間、どっくんと鳴った。

「あ……」

サクライくんと、目が合ってしまう。昨日、遠目に見て、恐ろしささえ感じたあの目が、私を見ている。

「……」

沈黙。

図書室の窓に、梅雨の長雨がぱらぱらと音を立てる。

「ご、ごめんなさい」

私は沈黙に焦れて、ついそんな言葉が出てしまう。

「勉強の邪魔しちゃったかな……」

な、何言ってるんだろう。すぐに立ち去ればいいじゃない。で、でも、このまますぐ出て行ったら、まるで逃げ出したみたいで失礼だし……

「――別に」

おどおどする私に、サクライくんは頬杖を突いて私を見ている。

淡々とそう述べる彼は、私とは対照的に、実に落ち着いていた。

「――ん？」

そしておもむろに、サクライくんは私を見て、首を傾げた。

その目は、私が今持っている、フルートの箱に向けられる。

「ああ、もしかして君か？　いつも学校に朝来ると、下手な尺八の音が聴こえてたんだが」

「しゃ――尺八？」

「いつもこのくらいの時間に聴こえなくなるんだ」

「しゃ――尺八じゃないよ。フルートだよっ」

私は若干ムキになって否定した。いくらなんでもフルートを尺八と間違われるなんて……

「冗談だよ」

彼はニコリともせず、参考書に視線を落としたまま言った。

「……」

女性のような風貌の割に、実に口が悪い人だ。おまけに無愛想。どこまでが本気で、どこまでがジョークなのかよくわからない。

でも――なんだろう、昨日遠目に見た時のような、そんなに冷たい印象を受けない。

一人称が、僕、だからだろうか。落ち着いた印象だけれど、どこか子供っぽい面があって。

「ごめんなさい。聴き苦しいものを聞かせちゃって……私、まだ下手で、みんなの邪魔をしたくないから、こうして朝に、一人で練習しているんだけど……」

気がつくと、私はまたペラペラと、自分の身の上を語り始めていた。彼の冗談に出鼻をくじかれ、しどろもどろになってしまった私は、彼の不思議な空気につられて、つい口が軽くなってしまった。

「……」

サクライくんは頬杖を突きながら、目の前の参考書に目を落とし、左手でページをめくった。

「別に。君、高校で楽器を変えたんだろうし」

そして私の顔を見ずに、そう呟いた。

「え？」

「少なくとも以前やっていた楽器は金管や木管じゃない。僕の読みだと、前の楽器はピアノなんだが」

「な――何でわかるの？」

私はあまりに正確に私の事を言い当てられて、面食らう。

「君のフルートの音色は、メロディラインは取れているのに、音が乱れている。間延びしたり、音が掠れたり……つまり、指先はちゃんと動いているのに、音を出す技術がまだ拙いってことだ」

「……」
「指先の技術と演奏技術の上達度が釣り合わない。それはつまり、君が今まで呼吸を使わず、指先で弾く楽器をしていたからだろう。楽器経験がまったくないんじゃ、指は自由に動かない。ある程度指を動かす鍛錬をしていた――つまり、別の楽器をしていたってこと。呼吸を使わずに、指先で弾く楽器で、女の子に一番ポピュラーな楽器はピアノだからな。そう読んだだけ」
「……」
――すごい。ほとんど情報もなく、窓から聴こえていた楽器の音だけで、そこまでわかるなんて。
「指先の上達度の早さを見る限り、前の楽器ではかなりのプレイヤーだったんだろ。なのに楽器を変えるなんて、物好きだな」
「……」
そうして彼は、自嘲を顔に浮かべる。
「失礼。不要な干渉だな。お互い名前も知らないのに」
そう言って、サクライくんは自分の参考書に視線を落とす。
干渉を避けるためか、それ以上はもう何も言わなかった。
サクライくんが座るのは、8人掛けの机の角で、窓に背を向ける形だ。
「……」
この人、私のこと、知らないのかな……さっき「名前を知らない」と言ったし、何か話し方が、クラスメイトだってことを知らないような喋り方だ。
自己紹介、すべきなのかな……クラスメイトなんだし。
「あ、あの」
私は全く余裕がなくなったまま、彼に呼びかけた。彼は顔を上げる。
「わ、私――マツオカ・シオリです。サクライくんと、同じクラスの……」
「マツオカ？」
私の自己紹介を聞いて、彼の目がわずかに動く。

「――そうか、君がマツオカか」
「え？」
「君、中間テストで僕に勝っていたんだってな。どんな娘かと思っていたが、まさか同じクラスとはな」
「ああ……」
何で私の名前に反応したのか、少しびっくりしたけれど――そういうことか。
「なかなかやるね」
彼は私の目を見て、言った。
その目を見てわかる。好意的な言葉だけれど、これは明らかな社交辞令。自分があのテストで負けるのは、少し意外だったけれど、自分の高校生活は問題なく、順調に進んでいると、自己完結している。
先生達が、彼を叩きのめそうと躍起になっていたことも、まったく眼に入っていない。完全に自分と周りの雑音を切り離したような目だ。
私のフルートの音だけで、私のことを推理した、広い視野を持つのに、今の彼の目は、何も見ていない――目の前にいる私のことさえ、まったく眼中にないんだ。
彼はそれだけ言うと、もう特に私と話すことはないということなのか、再び参考書に目を落とし、右手でシャープペンを握り直した。
彼は基本左利きだが、字を書く時と、箸を持つのは右らしい。
「あ、あの、私もここ、座っていいかな？」
私は彼の席の対角線上、一番離れた席を指差す。
「ああ」
彼が顔も上げないまま、上の空のような声でそう言うと、私は自分の参考書を鞄から取り出し、席に着いた。
「……」
彼が勉強しているところを見るのは、入学以来、初めてだった。
この時私は、一体彼が何の勉強をしているのか、ということに、俄

然興味がわいていた。
さっき、一度も接点のなかった私のフルートの音色だけで、私の事を見破った彼の頭の回転に、驚嘆していたからだ。さすがに慶徳で３年間主席を守るだけの事はあると思った。
そんな人の勉強法というのがどんなものなのか、日本最高峰の中学のひとつ、慶徳仕込みの勉強法――日本一の１５歳にまで登り詰めた彼の勉強法を、見てみたくなったのだった。
私は自分の勉強道具を引っ張り出しながら、サクライくんを無意識に観察していた。
「……」
参考書に目を落とす彼の目は、普段教室にいる時とはまるで違う。視線に一点の淀みもなく、ぴぃんと音が聞こえるような程の、張り詰めた集中の中にいるのがわかった。
右手でペンを持ち、左手で手元を見ずに、すごい速さで電卓を打ち続けている。激しい手の動きに反し、電卓の音はほとんどしないシルキータッチ。
「……」
そんな姿を見て、私はこの人を初めて見た時に感じた、あの何とも言えない清潔感を思い出していた。あの時と違い、彼の肌はサッカーの練習の激しさから、痣や擦り傷が無数にあって、瘡蓋が無防備に外に晒されているけれど、それでも彼からほのかに匂い立つ、花の香りのように清新な空気を、変わらずに感じる。
あぁ――この人から、こんな清潔感を感じたのか、少しわかった気がする。
この人は、目がすごく綺麗なんだ。
普段、誰かといる時は、とても冷たい、誰かを寄せ付けないような目をしているから、上手く気付けなかったけれど……
こうして何かひとつのことに集中している彼の目は、どこまでもまっすぐで、実直で、意思に淀みがなくて。見ているこちらも背筋を伸ばしてしまうような、そんな雰囲気に溢れている。

昨日は怖いと思っていた目に、思わず見とれてしまう。
そんなこの人は、一体何を勉強しているのだろう。
ふと私は、サクライくんの手元に置かれている参考書の表紙に目をやる。
「……」
そこに置かれていたのは、公認会計士の参考書だった。
「……」
「どうした？」
ふと、私はサクライくんに声をかけられる。
「ふえっ？」
私は彼の所作をまじまじ観察してしまって、気もそぞろだった時に声をかけられ、変な声が出てしまった。
「電卓が五月蝿いか？　だったら配慮するが」
彼の目は、まだ澄んだ光を湛えたまま、私の目を捉える。
「あ、ううん。そんなことはないけど……」
私は思わず目を背け、慌ててかぶりを振る。
ど、どうしよう、私、不自然に見てたかな？　サクライくんのこと……
「――そう」
そう言って、彼は再び参考書に目を落とす。
「……」
あぁ――何やってるの、私。さっきから一人で焦って、彼のこと、勝手に色々先入観だけで見てしまって。
「さ、サクライくんは、公認会計士になりたいの？」
私は再び湧き上がる焦りをごまかそうと、世間話をする体を装った。彼が私に無理に干渉をしなかったのに、こうして私がずけずけ聞くのは実に失礼だと承知していたけれど、焦りで思わず声が出てしまった。ちょっと自己嫌悪する。
「……」
しかしサクライくんは、その失礼にも顔色を変えず、電卓から手

を離す。
「別になりたくはないよ」
サクライくんは座ったまま体を伸ばし、首を回しながら言う。
「え？」
私は首を傾げる。まさかそんな返答をされるとは思っていなかった。
「国家公務員一種試験か、公認会計士試験に在学中に合格すると、学費免除になる大学が多いからな。たまたまこの図書館に参考書があったんで、試しにどんなもんか、やってみようと思って」
「……」
「まぁ、大学受験と並行してやる、片手間の暇潰しだ」
「……」
その二つが、文系の国家試験で、司法試験と並ぶ最難関試験だということを、まるで懸念材料に入れていないような言い方だ。
だが、その言葉には、自信が満ち溢れている。
この人は、ちゃんと法則性がある数式や、暗記程度のことであれば、自分に解けないものはないと思っている。
改めて思い返せば、彼の行動は、その全てから、彼の絶対の自信を感じた。授業に出なくても、テストでいい点を取れる自信。サッカー部のマラソンをした時だって、絶対の自信を持っていたから、ああしてひたむきに走っていた。
この人は、とんでもない自信家だと思った。
だけどそれが、少しもナルシスト振りや、嫌味な感じを私に与えない。
それはきっと、彼のそのまっすぐな目の奥に見える、少し沈んだ光のせいだろう。
その、まだ15歳の高校生には似つかわないその沈んだ光は、彼が今まで歩いてきた道が、如何に過酷だったかを物語っている。決して妄信や、根拠のない自信ではない。ちゃんと苛酷な環境を乗り切って培った、自分でしっかりと鍛え上げた自信であるということ

を、その目が物語っていたから。
教室で寝ているばかりの彼は、周りを欺いているだけ――これが本当の、彼の姿なのだ。
当時の私は、その、苛酷な環境、というのを、慶徳中学のことだと思っていた。日本最高峰の秀才達にもまれながらも首席を維持した経験が、彼の今の自信を構築しているのだと、思い違いをしていたのだけれど……
「……」
――違う。
私はこの人の比較の対象になるには、あまりに役不足だ。私とこの人は、周りが言うほど実力が拮抗してなんかいない。
それは成績だけじゃない。考え方も、生き方も、五感の鋭さも、全部、違いすぎる。
私自身、彼と私が比較されているという話を訊いて、彼と私は、どこか少しは似通った存在のような気になっていた。そんな部分を探そうと、つい彼のことを目で追ってしまっていたけれど……
私と彼が、まったく遠くかけ離れた存在であることが、この時、はっきりとわかった。
彼は今まで、相当の苦労を重ねてきたのだろう。それに耐えて、耐え抜いて、それが今の彼をしっかり構築している。
それに比べて私は、ただ家族や先生に言われたことを、惰性的にやり続けていただけ――その中で、私の中に息づいているものなんて、ほんの微々たるものでしかない。
そして、今も彼は、しっかりと前を向いて、すごい速さで前を進んでいる。ただ佇んでいるだけの私や、周りで騒ぎ立てる先生やクラスメイトなど、目もくれず――
そんな違いを目の当たりにして、私は何だか呆然としてしまう。
自分のしてきたこと、自分が高校に来て、何かを変えたいと思っている意志が、彼の前では如何に薄弱なものかを思い知らされて。
だとしたら、私はこれから、どうしたら――

――がたん、という音がして、私は我に返る。
サクライくんが椅子から立ち上がって、椅子を机の中に押し込んだ音だった。
私はふと時計を見ると、もう8時15分を回っていた。朝のホームルームが教室で始まる時間だ。
「あ、あ……」
私はどうやら30分近く、そうして呆けていたらしい。慌てて荷物をまとめている間に、サクライくんは一人黙って教室を出て行ってしまった。勿論、クラスメイトとはいえ、私を待つ義理などないのだから、それはいいのだけれど……
あぁ――何をやってたんだろ、私……一人空回りとはこのことだ。サクライくんからしたら、思いきり変な女だったじゃない。挙動不審で……
そんな自己嫌悪を重ねながら、私はホームルーム開始10分前に、教室に入った。
教室に入ると、サクライくんの机の周りに、人だかりができていた。みんな教科書や参考書を持っている。
しかし、それが一気に散り散りになり、彼の周りには、すぐに誰もいなくなると、彼はまた、教室ではお決まりのポーズで昼寝に入った。
「あ、おはよう、シオリ」
タカハシ・ミズキが私の机の方にやってくる。
「どうしたの？　人だかりができてたけど」
「ああ、みんなサクライくんに勉強を教えてもらおうと思って、声をかけに行ったのよ。まさかテストで彼があんないい点取るとは思わなかったし、みんな彼の実力が気になってるからね」
「――その割には、すぐにみんないなくなっちゃったけど」
私は首を傾げる。
「ねえ」
そんな私を見て、ミズキはさっきサクライくんの側に行った女子

に声をかける。
「サクライくんに、勉強教えてもらえなかったの？」
ミズキが訊いた。
「うん、有料なら教えるけど、タダじゃ教えない、って」
その女子は言った。
「そうそう、僕はタダ働きは大嫌いなんだ、って。でも、勉強をクラスメイトにお金払って教わるほど、みんなお金持ってないし」
気がつくと、私の周りには、どんどん女子が集まってくる。
「やっぱり勉強は、マツオカさんが教えてよ」
「うん、やっぱりそっちの方がよさそうだと思って、サクライくんに訊くの、みんなやめたの」
「……」
「ま、そう悪く言わないでやってくれよ」
私達の背後でそんな声がした。
見るとヒラヤマくんとエンドウくんが、私達の後ろに立っていた。
「あいつも悪気はないし、悪い奴じゃないんだ。失礼だったとは思うが、あんま怒らんでやってくれ」
「でも、確かに感じ悪いわね。頭いいのか何だか知らないけど、クラスメイトからお金を取らなきゃ動いてくれないなんて」
そんな二人に、ミズキは辛辣に言った。
「はは、その点にゃ返す言葉もねぇ」
エンドウくんが苦笑した。
「でも、二人は随分サクライくんの肩持つのね」
女子のひとりが言った。
「二人はいつもサクライくんと一緒にいるけど、サクライくんってどんな人なの？」
別の女子が、二人にそう質問した。
「ああ、もうじき文化祭だろ？　そうすりゃ、あいつもみんなと関わる機会もあるだろうしさ、それで見極めてみたら？」
エンドウくんはそう言った。

「実際付き合ってみれば、あいつ、割といい奴だからさ」
エンドウくんの言うとおり、私達は6月にある文化祭で、サクライくんのことを深く知ることとなり、私はそれを知ることで、今後の高校生活のあり方を決断する事になるのだった。

Another story ～ 2－10

埼玉高校は、受験に専念させるため、部活動の活動は活発ではない。
学校行事も、受験に大事な夏本番を回避するため、一学期に集中している。修学旅行も一年生で行く、受験前の最後のバカンスと呼ばれる。
サクライくんと初めて図書室で話してから間もなく――10日後に迫った行事のひとつ、文化祭について、クラスで話し合いが行われた。
「クラスの出し物を決めます。意見がある人は、どんどん言って」
教卓の前で文化祭実行委員が取り仕切り、私達はLHRでクラスの出し物を決める話し合いをしていた。サクライくんも、眠そうにしていたが、参加している。どうやらエンドウくん達に、話し合いに参加するよう言われたらしい。
「ちなみに一年生は、食べ物の模擬店しかできない。先輩達に優先的にやりたいことをやらせてやるためにな」
「マジかよ！　俺はメイド喫茶をやりたかったのに」
「いや、食い物なら女子にメイドになって売ってもらえばいけるぜ」
「ちょっと！　男子だけで勝手に決めないでよ！」
「まったく、スケベ心が見え見えなのよ。そんなの絶対嫌よ」
そんなこんなで、初めは話が全くまとまらなかった。
こんな時、いつもみんなをまとめる人が、入学以来、うちのクラスには一人いる。
「エンドウくんは、何か意見はある？」
実行委員はエンドウくんに助け船を求める。
サクライくんや、ヒラヤマくんと比べて、エンドウくんは人目を引きはしないが、入学してすぐのオリエンテーション以来、クラスをまとめる役として、一目置かれていた。人当たりもいいので、ク

ラスで話したことのない人は、もう一人もいないほどだ。
「要は、客を集めりゃいいんだろ？」
エンドウくんはそのどんぐり眼で、一度教室を見回す。
「なら簡単な方法がある。ケースケに女装させて表に立たせておけば、それだけで話題に……」
「エンドウくん」
そう言いかけたエンドウくんの言葉を、サクライくんの、静かだがよく通る声が遮った。
「短い付き合いでしたね」
「絶交宣言？！」
エンドウくんは立ち上がり、すっとんきょうな声を上げ、頬杖をついているサクライくんの机を見た。
「でもよ、いい考えだと思うぜ。お前のその女顔は、自慢してもいいレベルだしな。みんなだって、ケースケの女装には興味あるだろ？」
「見たい見たい！」
「サクライくん、女装したら絶対似合うもん！」
クラスメイト――特に女子が沸き立つ。
「……」
サクライくんは呆れたように目を閉じる。
「な？　それでお前、メイド服でも着て、萌え萌えジャンケンとか言ってみろ。それこそ金になるぜ」
クラスメイトを味方につけ、エンドウくんはサクライくんにそう言う。
「へぇ……その、『萌え萌えジャンケン』とやらは、一体どうやるんだ？」
しかしサクライくんは、頬杖を突いたまま、そう聞いた。
「え？」
「僕は時勢に疎いんだ……リクエストにお答えするにも、それがどんなものか、知らずには協力もできないだろ」

そう言うサクライくんは、酷薄な笑顔を微かに浮かべていた。
「……」
そのフリに対し、明らかに対応に困ったエンドウくんだったけれど――
「――萌え萌えジャンケン、ジャンケンぴょん！」
もはやヤケクソになったエンドウくんは、とてもオーバーな、キャピキャピした声と仕草を作ってそれをやってのけた。
「……」
「――ぷっ……くくく……」
端的に言えば、その行動は、完全にスベッた。最初に吹き出したのはヒラヤマくんで、それが連鎖して、クラス中が失笑に包まれた。
私も少し笑ってしまった。
「いやぁ……あはは……」
当のエンドウくんは、照れ笑いを浮かべながら、もじもじと所在に困っていたけれど……
そのエンドウくんに助け船を出せるサクライくんは、頬杖を突いたまま、一言も発せず、エンドウくんを哀れむような、軽蔑するような、まるで爬虫類のそれのような、冷たい視線を送るのみだった。
「あはは……」
エンドウくんは頭を掻きながら、サクライくんの次の反応を待つ。
「……」
だけどサクライくんは反応しない。
「言って！　何か言ってぇ！」
やがてエンドウくんは、そのサクライくんの無慈悲に、声を上げて助け船を懇願するのだった。
その反応に、クラス中が大笑いに包まれた。
「エンドウ」
その笑いの中、サクライくんが口を開く。クラスは次のサクライくんの発言に注目する。
「可哀想に……」

サクライくんはそれだけ言った。顔色を変えないまま、本当に哀れむような、色っぽい程優しい声で。
「そんなクソみたいなコメントいらんわ！」
エンドウくんのいきり立つ声に、またクラス中は爆笑に包まれる。
「何か言えって言うから言ってやったのに……我が儘だな」
サクライくんは不満そうに言う。
「まったく、お前のさっきの目、俺をゲシュタルト崩壊に追い込むつもりかよ」
エンドウくんはぶうぶう言っている。
「しかし、お前もたまにはクラスに協力しろよ」
そんなサクライくんの一方的な展開を、ヒラヤマくんの一言が中断させた。
「頑張って利益を出せば、お前にも分け前は出るんだ。頑張ってみて損はないだろ」
「――珍しくまともなことを……」
サクライくんは苦い顔をする。
「それにうちの学校は、あまりに受験優先じゃ学校行事が盛り上がらないからって、行事の優秀団体、または個人に特典があるんだぜ。そうだったよな？」
ヒラヤマくんはそう言って、前にいる実行委員に聞く。
「あぁ。後夜祭で優秀団体と、文化祭に貢献した個人の表彰があって。利益率の一番高かった団体には、ディズニーランドのワンデーパスか、焼き肉食べ放題券のどちらかが全員分配られるんだ。貢献度の高い個人には、商品券とかも出たりする」
「へぇ……」
それを聞いて、サクライくんの感情のスイッチが入ったように、目の色が変わった。
「どうだ？　やる気出たか？」
ヒラヤマくんは言った。
「さあ……どうかな」

サクライくんの眠そうな目が、知性を帯びはじめたように思える。
「単純な奴……」
エンドウくんは肩をすくめながら、苦笑いする。
「――あの、サクライくんは、何か案はある？」
それを見て、教卓にいる実行委員の女子が、彼におずおずと訊いた。
「……」
サクライくんは腕組みをして、しばらく目を閉じて、数秒考えてから、目を開けた。
「野郎が女の子に作ってほしい料理って、一体何だ？」
サクライくんはクラスメイトに聞く。サクライくんからクラスメイトに話しかけたのは、これが初めてだったかもしれない。
「前に雑誌で見たけど、一番人気はオムライスらしいぜ」
ヒラヤマくんは頭を抱えた。
「あぁ、ケチャップで絵を描いたりとか？　端から見たらアホだが、好き同士なら楽しいんだろうな」
エンドウくんも意見を補足する。
「オムライスか……いけそうだな」
サクライくんはそれを聞いて、腕組みをしながら頷く。
「オムライスなら、ナンパ目的で来た、女日照りの男にも、来年受験するための下見に来た親子にも対応できる。原価を抑えて、ある程度本格的っぽく見せる細工も比較的簡単だし。確実に儲けが出るだろうな」
「……」
サクライくんがそう言うと、妙に説得力がある。今までろくな案が出ていなかったクラスは、そのサクライくんのプレゼンに、心動かされていた。
「サクライくん、オムライス作れるの？」
クラスの一人が彼に聞いた。
「待て。これは女子が作るところがミソなんだよ。僕がオムライス

作っても意味がないんだ」
「そうだよなぁ」
エンドウくんは頷く。
「マツオカさんがオムライス作って、運んで、ケチャップで絵とか目の前で書いてくれちゃった日にゃあ……全校生徒が千円払っても食べに来るぜ」
そう言って、エンドウくんは私を見て、ニコニコ顔になる。
「えっ？」
いきなり話をふられて、私は不意を突かれる。
「ジュン、お前みたいなもてないバカな男を、ケースケは引っかけようとしてるんだぜ」
ヒラヤマくんはニコニコ笑う。
「わ、悪かったな！　もてない男丸出しで！」
エンドウくんは見事にピエロだ。またクラスから笑い声が漏れる。
「まあ少なくとも、ケースケの言うターゲットへの効果は証明されたな。俺も男として、気持ちは理解できるしな」
そのヒラヤマくんの発言が決め手となって、私達一年E組の文化祭の出し物は、オムライスに決まったのだった。

そしてその日の放課後、私達一年E組は、調理室に集まっていた。
「何で僕が……」
サクライくんはエンドウくんの説得で、渋々オムライスの講師役になったのだった。私達の前に、エプロンまでつけさせられて立っている。
「原価を抑えて本格的っぽく見えるオムライスってのがどんなのか、お前しか女子に仕込める奴がいないだろ」
隣にいるヒラヤマくんが言った。
「……」
「お前の腕にディズニーランドがかかってるんだぜ」

サクライくんは複雑そうな表情だ。
それでもクラスの女子は、ほぼ全員が、強制でもないこの調理実習に参加した。
ヒラヤマくんが「将来彼氏ができた時、使える技術をタダで教えてもらえるぜ」と、私達にメリットがあるように扇動したのもあるだろうけれど。
入学以来、謎を孕んだままのサクライくんの、新たな手並みに興味があったのだろう。
私がここにいる理由は、勿論後者だった。
学校の調理室の作業台には、さっきエンドウくんが放課後ひとっ走りして買ってきたオムライスの材料がある。
「本格的って言うとよ、ほら、チキンライスの上に、卵乗っけて、切れ目入れると卵がトロッとなるのあるじゃん。ああいうの、お前作れるんだろ？」
ヒラヤマくんが言った。
「作れなくもないけど――あれ、卵を多めに使うから、儲け出すならお勧めしないな」
「でも、あれが文化祭で出たら話題になるぜ。女子もあれ作れるようになれば、今後彼氏ができた時に自慢できるし、あれ作れるなら教えてくれよ」
「……」
女子も、作れるならあんなオムライスを作れるようになりたいと思っている娘が多いから、女子の過半数がヒラヤマくんに同意した。
ヒラヤマくんは顔立ちが端正で、女の子には優しいから、女の子を先導するのが上手だ。
「――まあいい。じゃあ、まず実演するから、とりあえず見ていろ」
そんな大多数の意見に、サクライくんも折れた。
そう言って彼は、レンジで温めるタイプのご飯に、玉葱のみじん切りを加え、ケチャップと和えたチキンライスもどきを作った。玉葱をみじん切りにする包丁捌きも、ご飯にケチャップを和えて炒める

時の、フライパンの振り方も、実に手際よかった。
「で、このオムライスのミソはこれ」
そう言って、サクライくんは片手で卵を3つボウルに割り、卵を溶き始めた。
「わぁ！　サクライくんって、片手で卵割れるんだ」
女子の一人が声を上げた。
サクライくんは随分とケチったバターを溶かしたフライパンの上に卵を流し込んだ。
柄の根をとんとんと叩き、綺麗に卵を楕円形に整形すると、お皿によそられた、まだ湯気を立てるチキンライスの上に乗せた。
サクライくんが包丁で、卵に切れ目を入れると、卵は両方に向かって裂け、とろりとした卵がチキンライスに覆い被さった。
「おぉ！」
「わぁ！」
卵がとろけた瞬間、それを見ていたクラスメイトは、歓喜の声を上げた。
「食べてみな」
サクライくんはお皿をみんなの前に差し出す。
「美味っ！」
「美味しい！」
みんなが声を上げる中、私もサクライくんのオムライスに、匙を伸ばしていた。
みんなの言う通り、サクライくんのオムライスは本当に美味しかった。味音痴の私だけれど、お洒落な洋食店で、千円くらいかけて食べるオムライスと遜色ないように思えた。ライスは玉葱しか具がないし、バターもケチっているし、原価が最低限に抑えられているのに。
「この卵を作るのは、慣れればそれほど難しくない。練習すりゃ誰でも作れる」
そう言うと、サクライくんはコンロに置いてあるフライパンを持

って、私達女子の前に差し出した。
「――これをやる気があるなら、誰か試しに卵だけ作ってみな」
「……」
そう言われて、女子達は顔を見比べる。
あれだけ見事な手並みの後に、自分達がやったら、恥を掻くに決まっている。見ている人も多いし、プレッシャー以外の何物でもないのだ。
「い、いきなり作れって」
女子の一人が戸惑いの声を上げた。
「だから手並みを見せたんだ。こんなのは自分で作ってコツを掴まなきゃ、できるようにならん。僕も君達の腕前を知らないし、それ見てアドバイスしてやるから」
「……」
誰もやりたがらないのを見て、サクライくんは呆れるようにため息をついた。
「あ、あの、じゃあ私、やってみる」
私はおずおずと手を上げる。
「ん？　そうか。じゃあ、これ」
サクライくんはコンロの上に持っているフライパンを置いて、私に前に立つよう促した。
「……」
何で私はこの時、恥を掻くとわかっていて、手を上げたのか。
きっと私は、ため息をついたサクライくんの目が、こう語っているように見えたからだ。
「勉強ばかりできても、何もできない奴等だな」と。
その最たる人物は、多分私だ。学年トップの成績をとっていても、私は何もできない。
そう思うと、何だか無性に体を動かしたくなったのだ。自分とサクライくんの違いを、ちゃんと確認したくなったのだ。
「まだフライパンがあるし、他にも誰か、作ってみろよ」

サクライくんがそう言った。
「あ、じゃあ、シオリがやるなら、私も……」
そう言って、私にだけ恥を掻かせるまいと、同じ吹奏楽部のサガラ・アオイが立候補してくれた。
私とアオイは、みんなに見られて緊張の中、オムレツを作る。サクライくんはそれを腕組みしてじっと見ていた。
そして、とりあえず作ってみたのだが、私のオムレツは卵が固まってしまって、卵に切れ目を入れても、トロリとならなかった。
「火を止めても、フライパンは熱いから、余熱で火が通っちまう。ちょっと生っぽいくらいで火を止めて、あとは余熱くらいの気持ちでやらないと、こうして火が通り過ぎちまう」
私のオムレツを見て、そう言った後、サクライくんはアオイの卵を見る。アオイの卵は、もはやオムレツにすらなっておらず、卵が上手くまとまらない上に、箸を動かしすぎて、完全に炒り卵になっていた。
「卵の混ぜ方だな。ちゃんと白身と黄身が混ざってないから、卵が上手く固まらなかったんだ。箸はボウルの縁に沿ってじゃなく、縦に動かしてかき混ぜるんだ」
そう言って、サクライくんはボウルを持って、アオイに実演で教えていた。
彼の教え方は的確な上に丁寧で、酷い出来の物を作っても、それを責めるような言い方は一言もせず、改善のために細かいところまでアドバイスをくれた。
私とアオイにそうして親切丁寧にアドバイスをするのを見て、他の女子達も、安心してサクライくんにアドバイスをもらいに行った。

Another story ～ 2－11

「――はい、じゃあ来賓の招待に関しての説明を終わります。明日の文化祭、絶対成功させましょう」

教壇で説明を終えた文化祭実行委員の締めの一言で、場は解散になる。

手帳と筆記用具を手に持ち、私は教室を出る。

文化祭前日――既に授業は昨日の午前中で一時中断し、昨日の午後から全校生徒総出で校内の飾り付けが急ピッチで進んでいる。廊下にも沢山の人が出ていて、各教室の入り口を飾りつけたり、資材を運んだり、それぞれ慌しく動いている。

私は1年E組の教室に戻ると、うちのクラスでも、明日の準備のために、クラスメイトが教室の飾り付けをしていた。普段は殺風景なこの教室は、テーブル代わりに並べられた机に、各家庭から持ち出されたテーブルクロスが敷かれ、花瓶には白い百合の花が生けられ、壁もなるべく白を基調に飾り付けをしていて、上品な感じになっていた。

「あ、シオリ、お帰り」

アオイをはじめ、クラスの女子が私を出迎える。

「大変だね。成績優秀者は結構仕事に駆り出されて」

埼玉高校にも、ちゃんと文化祭実行委員がクラスから各2名選出されてはいるが、この学校は県内ではかなり有名な高校だから、文化祭の規模もそれなりに大きく、毎年2日間の来場者数は2万人に迫る。この時期に文化祭をやる高校自体が珍しいし、いわば走りの文化祭を楽しみに来る若者が主な来場者だけど、マスコミなどの取材も来るし世間でも割と注目されているイベントなのだ。

そんなイベントを、クラス各2名の実行委員だけではとても管理しきれないので、各学年の成績優秀者トップ10あたりは、ほぼ強制的に文化祭実行委員と同等に働かされる。

私は来賓の案内と、迷子などのトラブル対応の係を掛け持ちしている。さっきまで空き教室で、来賓案内について、時間ごとの交代のシフトなどの発表があったので、そちらに一時参加していたのだった。

「ううん、みんなにクラスのこと、任せちゃってごめん」

私はクラスを見回す。

「随分綺麗になったねぇ」

「えへへ。オムライスの黄色なら、白が合うんじゃないかって意見を参考に、飾り付けてみたんだ」

私達の教室は、教室の黒板の周りを、机を沢山並べて厨房代わりにしている。机を重ねていることで、死角を作り、その死角での作業も出来るようにしてある。オムライスを作る女子の影で、男子が見えないところで玉葱を切ったり、卵を割ったり、そういう面倒な作業をやらせるためだ。来場者の座るフロアは机の間隔を空けて、広々とした空間を取って、ちょっと贅沢な食事気分を味わえるように配慮してある。

しかしこの客席ではあまり沢山のお客をさばけないので、私達はテイクアウトも行うことにした。オムライスの他に、オムそばも作り、儲けを伸ばすことにしたのだった。

そこで、教室の引き戸ががらりと開いて、二人の男子が入ってくる。

「わぁ、似合う似合う！」

女子達は声を上げる。

女子の視線の先には、ワイシャツの下に黒のロングジャケットという執事ファッションを取り入れた、フォーマルな格好をしたエンドウくんとヒラヤマくんがいた。

「全く――女子におかしな格好をさせなかったのに、俺達が変な格好をさせられる羽目になるとはな」

エンドウくんが肩をすくめる。

「俺はこの服を調達した女子が空恐ろしく感じるよ」

ヒラヤマくんは、首を傾げる。
二人はうちのクラス――学年でも有数の長身とスタイルの良さだ。だから黒のフォーマルな格好はよく似合う。
二人はこの執事風の格好で、お客様に紅茶やコーヒーを入れる役になったのだった。コーヒーは豆を轢き、紅茶はちゃんと葉から入れる。
オムライスは、若い男子や家族連れなどは客層に入っているが、若い女の子は、あまり面白味がないということで、このクラスでも目を引く美少年の二人がこの格好で客引きをするようにと、女子の間で決まったのだった。
「今日は一夜漬けで、お茶の入れ方を覚えないとな」
ヒラヤマくんは言う。2人ともお茶なんて入れた経験がないのだ。
「あ、そうだ」
女子のひとりが言った。
「これ、サクライくんが置いていって。もう話をつけてあるから、誰かここに行って、材料を取りに行ってくれ、って」
そう言って、一枚の紙切れに書かれた地図を差し上げる。
「へえ、サクライくん、そんなことまでしてくれたんだ」
女子のひとりが言う。
「誰か、ここに行って、買い出ししてこないと」
「あ、じゃあ、私行くよ」
私は立候補する。
「え？　シオリはただでさえ部活でクラスにあまり出られないんだから、そんな簡単な仕事しないでいいのに……ここでみんなに指示出してよ」
「でも――私地元だから、多分迷わないで行けると思うし」
埼玉高校は、全国有数の進学校だ。県立ながら、半数が他県から登校し、県内の生徒も、地元川越に住んでいる人はほとんどいない。
私はそんな埼玉高校でも珍しい、地元出身者なのだった。
「でも、買い物なら荷物も多いでしょ？　誰か力のある男子と一緒

に行った方が……」
クラスメイトの女子がそう言うと、男子達の目の色が変わる。
「あ、じゃあ俺、マツオカさんと行くよ」
「俺も俺も！」
「……」
数秒で、私の前にクラス中の男子が殺到するのだった。
「まあ待て待て」
一人の男子の声で、その喧騒は中断する。
口を開いたのは、その様子を静観していたヒラヤマくんだった。
「ジュン、お前が行けよ」
そう言って、エンドウくんを見る。
「どうやらクラスでお前が一番安全そうだし、力もある。荷物持ちとしては、悪くないと思うけどな」

――そんな流れで、私は今、エンドウくんと二人で学校を出て、校門外の坂を登っていた。
「しかし、この格好で外に出させることないと思わないか？」
エンドウくんはいまだに女子に着させられた、執事風の黒ジャケットを着ていた。
「もう6月だってんだよ……生地黒いから、結構暑いんだよ、これ」
エンドウくんは袖を振りながら、私に服を見せる。
「でも、この格好している以上、マツオカさんにもちゃんと御奉仕しないとね」
「え？　い、いいよ、別に……」
「えぇ？　お、お嬢様ぁ、置いてかないでくださいよぉ」
エンドウくんは、ふざけて涙声を作る。
「――どう？　ダメ執事バージョンなんだけど。ダメ執事って、母性本能くすぐる？」
それからエンドウくんは、にこっと私に微笑みかける。

私はふふっと笑う。

他の女子曰く、エンドウくんは「友達と彼女だったら、絶対友達を優先するタイプ」「男とバカやってる方が楽しいって感じのガキ」ということで、黙っていればカッコいいのに、ヒラヤマくんのように評価が高くなかったけれど、私の中では彼の評価はすごく高かった。はじめはサクライくんよりも高かったように思う。

エンドウくんはいつもニコニコしていて、声のアクセントもいつも柔らかで、男子が苦手な私でも、強張らずにリラックスできてしまう。

逆に私は、ヒラヤマくんのようなプレイボーイ風の男子が、はじめはちょっと苦手だったけれど、ヒラヤマくんがエンドウくんを私の付き添いにあてがってくれたことに感謝したかった。彼以外の男子だったら、私は緊張して、一緒に歩くことも苦痛だったように思う。

「しかし、前から思ってたんだけどさ……」

歩きながら、エンドウくんが言う。

「マツオカさんって、もしかして、男子が苦手？」

「え？」

「いや、マツオカさん、可愛いのに、あまり男慣れしてないなぁ、って感じる時があってさ。才色兼備で、中学あたりからもててただろうに」

「……」

――ど、どう言えばいいんだろう、こんな時。

せっかく買出しで、重いものを持ってくれようとついてきてくれた男子の前で、私は男子が苦手です、なんて、実に失礼だ。エンドウくんは指名されて、好意でついてきてくれたっていうのに。

「――別に気にすることないぜ？　人には嗜好がそれぞれあるしな」

エンドウくんは、そう考えている私を察したのか、そうフォローを入れてくれた。

「……」

何となくこの人といると、安心感がある。私は自分が男子が苦手

だということを、正直に話した。
「ふぅん」
エンドウくんはそれにちゃんと相槌を打って訊いてくれた。賑やかな人だけど、人の話はちゃんと訊く一面も持っていて、何だかとっても話しやすい。
「――ごめんなさい。エンドウくんもこんな話訊いたら、私と一緒にいるの、気を使って疲れちゃうでしょ」
「いや、最近はそういうのも立派な病気だよ。ＰＴＳＤなんてのもあるし、スポーツにはイップスなんてのもある。そういうのは特殊なセラピーが必要だし、素人の俺がとやかく言う問題じゃない」
「……」
エンドウくんは優しい。そう言ってもらえることで、私は少し、気持ちが軽くなった。
「じゃあ、俺といるのも緊張するか――」
「う、ううん、エンドウくんなら、あまり緊張しないから……」
「――それも男として、ちょっと悲しいが」
エンドウくんは私の言葉に、複雑そうな顔をする。
「あ……」
私はとっさに、失礼なことを言ったと思って、その発言を何とかフォローしようと思う。
「でもいいんじゃない？　それって俺を男と意識してないってことだろうし」
だけどエンドウくんはその前に、私ににこっと笑った。
「なんなら、こうして二人で歩いてるの、犬の散歩かなんかだと思い込んでみるとかどう？」
「え？」
そう言ってエンドウくんは、私の方を向いて、ひょうきんな声を作った。
「わんわん！　私はあなた様の犬ですワン！　何なりとご命令を！」
「……」

それが、何だかとっても可笑しくって。
「ふふふ……あはははは……」
私は思わず笑ってしまった。お腹が痛くて、息が苦しくなるくらいに。
「――あら、まさかこんなにウケるとは思わなかった」
エンドウくんも、私が立ち止まって、お腹を押さえて笑うのを見て、少し意外そうな顔をした。
そして、私の笑いが収まるまで、しばらく待っていてくれて、それからまた歩き出した。
「ふふっ――エンドウくんって変な人ね」
私は思わず笑ってしまう。
「私、一緒に行くのがエンドウくんでよかったな。私、まだあまりクラスの男子とは接点ないから」
「そりゃよかった」
あまり男子と積極的に関わらない私でも、エンドウくんは話しやすい。
「ま、身の程はわきまえてるからな」
「え？」
「俺みたいな一般市民（パンピー）がマツオカさんと付き合うなんて大それたことしたら、学校中の反感を買うってわかってるからさ」
「そんな――」
中学の時からいつも思う。誰も私の本当の姿を知らないと。
泣き虫で背も低く、胸も小さく、風貌が子供っぽいし、料理に不向きな味音痴ぶり。おまけに今の私は吹奏楽部で皆の足を引っ張る初心者で、とてもカッコ悪い人間だと思う。
私がもてはやされる理由なんて……
赤信号に差し掛かり、私達は足を止める。
「これは単純に俺の純粋な興味として聞くけど――マツオカさんは恋愛とか興味ないの？」
エンドウくんが隣で私の目をのぞきこむ。

「……」
恋愛――
「――正直、よくわからないの」
私は言う。
「まだ私、自分のことで精一杯だから……誰かとより、今は自分と向き合いたいかなと思ってて」
皆私のことを、完璧だなんて持ち上げるけれど、最近私は、時々泣き出したくなるような気持ちになることがある。
私はまだ、高校に来てから何一つ何かを成し遂げていない。
中学の時から私は何も変わっていない。環境が変わっても、人といる中での私のポジションも、何も変わらない。
それで家族が喜んでくれるし、兄弟が私を誇りに思ってくれることは嬉しいけれど……
それだけでいいのだろうか。そう思っていても、何も変えることのできない自分。
そんな私が、恋愛なんて、まだ考えることも出来ない。
「時は待ってはくれない」
エンドウくんが言う。
「マツオカさんがそう思っていても、この文化祭が終われば、マツオカさんに言い寄る男は増えるだろうね。だって、ミスコンに出るんだろ？」
「……」
私自身は目立つことはあまり好きではないので、出たくはないのだけれど、クラスや吹奏楽部の同級生に推薦されてしまい、文化祭の目玉企画、ミス埼玉高校に出場することになってしまったのだった。
「男子のうちじゃ、マツオカさんがミス埼玉高校になるのは確定的だってもっぱらの噂だ。残念ながらその流れは止められないな」
「……」
「文化祭が終わるまでに、恋愛について、それなりの答えを出して

おいた方がいいと思うよ」
エンドウくんがそう言うと、信号が青に変わる。
「それは――私への忠告？」
私は信号が青になっても歩き出さず、隣のエンドウくんの横顔を伺った。
「ま、そんなとこ」
エンドウくんは手を横断歩道にやって私を促す。執事として、私の後についていくということらしい。私が横断歩道を渡ると、エンドウくんも後ろをついてくる。
「ユータもそう思っているから、文化祭前にフライングする奴と君を一緒に行かせたら、かわいそうだと思って、俺を今日君にあてがったんだろうからな」
「――ヒラヤマくんが？」
「ああ。だから、この忠告をするのは俺の役目かなってとこ」
「……」
この買出しをきっかけに、私はエンドウくんとは、今後も色々と話が出来る相手として、友達ともいえない距離感だったかもしれないけれど、色々話が出来る相手として認識したのだと思う。

Another story ～ 2－11（後書き）

どうやら最近、歌詞の無断転載が禁止されたようで…

この作品、結構それを使ってしまっているからなぁ…今後どうするか思案中…

「でも、エンドウくんだって、サッカー部でも何か出し物をやるんでしょう？　クラスと掛け持ちで、すごく忙しいんじゃ……」
「うんにゃ、うちは招待試合だけだワン。もうレギュラー確定のユータは今も練習だが、他の1年なんて気楽なもんだワン。マツオカさんこそ、吹奏学部の出し物もあるんだから、大変だよなワン」
「ふふっ――その語尾――もう大丈夫なのに……」
「はは、何かはまっちゃったんだワン」
そんな話をエンドウくんとしながら、学校から10分も歩くと、このあたりの商店街に出る。江戸時代の古い町並みの残る、観光客も集まる場所で、川越でも人通りの多い場所だ。私も小さな頃からこの商店街には、お母さんと一緒に買い物に来たことがある。我が家からも歩いて10分程度の場所にある、便利な商店街だ。
まず地図に指定された店で一番近いのは、もうすぐ見えてくるようだった。
「しかし、やけに正確な地図だワン。細かい目印までちゃんと書いてあるし。あいつ、地元出身なのか？」
私の持つ地図を覗き込みながら、エンドウくんが言った。
「え？　エンドウくん、サクライくんといつも一緒なのに、そういうこと知らないの？」
「ああ、あいつ、自分のことはまったく喋らんのだワン。地元がどこなのか、兄弟はいるのか、中学はどこだったのか、何一つ知らないんだワン、俺もユータも」
「……」
――そうなんだ。じゃあ、サクライくんが慶徳中学から来たことを知っているのは、先生以外では、学校では私だけ？
でも、二人には話していると思ったのに……もしかして私、彼が隠していることを知ってしまったのかな。

「しかし、あいつ、ようやく重い腰を上げやがったからなぁ。相変わらず必要以外の時は、人と喋ろうとしないが」
「……」
この文化祭の準備を通じて、私達1年E組は、校内でも屈指のまとまりを見せていて、それに伴って、クラスメイト同士の交流も格段に増えていった。もし文化祭で優秀団体に選ばれたら、みんなでディズニーランドに行こうと計画しているほど、仲のいいクラスとなった。
その中心にいたのは、間違いなく、サクライくん、エンドウくん、ヒラヤマくんの3人だった。
特にサクライくんは、教室のインテリアや、儲けを出すための工夫、料理のレシピ開発など、知恵を出してくれるだけでなく、その作業のほとんど全てを一人で受け持ってしまった。女子がオムライスを作れるように、放課後指導もしてくれて、それに啓発された女子が、彼の手並みをもう一度参考にしようと、彼に再度オムライスを作ってくれるよう頼みに行くまでになり、日を重ねるごとに、我がクラスの士気は上がっていった。
相変わらず彼は愛想がなかったけれど、今ではクラスの誰もが彼の行動力や思考を認めていた。女子にオムライスの作り方を指導する際も、要点だけを喋るだけで、にこやかな雰囲気はまったくなかったけれど、教え方が丁寧で、何度でも教えてくれ、どんなに酷いものを作っても、一言もその娘を責めたり笑ったりしない態度が好感を持たれ、無愛想な彼に指導を求める女子は次第に増えていった。
「マツオカさんも、随分頑張ってたな。あのケースケ直伝の卵、クラスで真っ先にマスターしたんだろ」
私もあれ以来、家で沢山卵を買って、練習をした。弟のシュンをはじめとした家族は、味音痴の私が厨房に立っているだけで悲鳴を上げ、毎日食卓に、私の失敗した卵焼きが並ぶことに、うんざりした表情を見せていたけれど。
「……」

沢山卵を焼いて、その度に失敗して――
その度に、サクライくんの手つきを思い出して、また作って、また上手くいかなくて。
「で、でもサクライくん、どうしてあんなにクラスに協力的になってくれたのかな」
ああ――私、またサクライくんのこと、思い出してる。
あの人のことを考えると、自分がますますわからなくなって、こんがらがっちゃう――変に焦ってしまったり、勘ぐってしまったり、乱れちゃう……
あの人を見ていると、自分が一体何をやっているのか、わからなくなっちゃう……
「そんなにディズニーランド、行きたいのかな？」
私はそんな気持ちをごまかそうとしたけれど、口をついたのは、サクライくんに関する疑問だった。完全にドツボだ。
「ふふふ……」
それを聞くと、エンドウくんは私を見て、不敵に笑った。
「文化祭が終わればわかるよ、何であいつが文化祭にやる気になったか、ね」
「……」
「――あ、ここみたい」
私は地図と、現在いる自分の位置を見比べる。
そこには、商店街と名のつく場所には、必ず一軒はありそうな、ひなびた造りの洋食屋さんがあった。現在午後４時、夕食時のための仕込みのためか、入り口のドアノブには「ＣＬＯＳＥＤ」と書かれた吊るし看板が吊るされていた。店の中からは、デミグラスソースだろうか、洋食屋さんのいい匂いが漏れている。
「洋食屋？」
「買出しをするにはおかしな場所だが、とりあえず入ってみよう。違ってたら違ってたでいいし」
こういう時、物怖じしないエンドウくんが、看板がかかっている

ドアノブに手をかけて、扉を開けた。
店内の、２０席ほどのホールにはまだ電気がついていないが、夏至が近づいている６月の４時はまだ明るい。店にある窓から自然光が入って、十分見通しが効く程度には明るかった。
私達が入ってくる物音に、店の裏から小太りのおばさんが一人出てきた。場末の飲食店のおかみさんといった具合の、人当たりのいい感じの印象。
「突然失礼します。僕達、埼玉高校の者です。サクライ・ケースケくんの言付けで、ここに来るように指示されたのですが」
エンドウくんも、第一印象をよくする術は心得ているし、有名校、埼玉高校の印象を悪くするわけにもいかない。笑顔を浮かべながら、敬語で元気に挨拶した。
「ああ、ケーちゃんの。お話は伺ってますよ。ちょっと座って待っていてくださいな」
そう言って私とエンドウくんは、店の入り口から一番手前の宅に座らされる。おばさんは私達二人にお客同様に水を出すと、一度裏に下がっていってしまった。
「……」
ケーちゃん――あのサクライくんを、そうやって呼べる人がいるのか。ちょっと意外……
「おお、君達がケーちゃんのクラスメイトか」
よく通る声がして、ガラガラと台車を引く音がする。
厨房の裏から、年季の入ったコック服に、コック帽を被った、がっちりした中年男性が出てくる。男性の引く台車には、大きな段ボールが３箱乗っている。
「ケーちゃんから頼まれた卵、注文しておいたよ」
おじさんはダンボールをとんとんと叩いた。どうやら本当にここで間違いないようだ。
「あ、じゃあ御手数ですが、領収書を……」
私がそう言うと、おじさんはそれもサクライくんから訊いている

らしく、すぐに私達に領収書を差し出した。
「――え？」
そこに書かれている金額は、スーパーで同じ数卵を買った時の、半額以下の値段しか書かれていなかった。６００個はある卵が、二束三文だ。
「こんなに安く？」
「ははは、ケーちゃんに、大量発注の分、まけてくれってせがまれちゃってね。だからその値段。うちもうちで使う分の卵が安く買えたから、その値段でいいよ」
おじさんは言った。
「……」
文化祭は、各団体の利益から、経費を引いた額が一番多かったクラスが優秀団体に選ばれる。領収書を全部提出しなければいけないから、経費を抑えることが、最優秀団体に選ばれる近道だった。
――確かに、この値段なら利益は十分出る。卵は意外と高いから、本当にあんな贅沢に卵を使って利益なんて出るのか懐疑的な人もいたけれど、これなら完売すれば、優秀団体はほぼ間違いない。
「あ、よかったらちょっと待っていてくれないか」
そう言っておじさんは、後ろに引っ込んでいってしまう。
「ごめんなさいね。引き止めてしまって。これ、高校生には足りないかもしれないけど、待っている間、つまんでてください」
さっきのおばさんが入れ違いに出てきて、私達にサービスで、ハッシュポテトを出してくれた。
厨房から、ジューッと、何かを焼く音が聞こえてくる。
「しかし、何て言うか、意外です」
ハッシュポテトに手を伸ばしながら、エンドウくんは言った。
「あいつを、ケーちゃんなんて呼ぶ人がいるなんて」
「……」
エンドウくんも、それに違和感を感じていたんだ。
「ケーちゃんはこの商店街の生まれでね。観光客の間でも有名な、

芋菓子屋の老舗の息子なの。だから小さな頃から知っているわ」
おばさんが私達の座るテーブルの横に、トレイを持ったまま立って、言った。
「……」
サクライくんが、私の家からそう遠く離れていない、この商店街の生まれ？
しかも――この辺で観光客に有名なお菓子屋さんなんて、連想されるのは一軒しかない。私でも知っているお店だ。
「小さな頃から頭がよくて、しっかりした子で、お金持ちの家に住んでいるのに、働くのが好きな子でね。小さな頃から料理を教えて欲しいって、うちに来て、中学の時は、忙しい時は店を手伝ってくれてね。今も、この商店街にあるコンビニで、自分の学費を出すためって、毎日夜中の2時くらいまで特別に働いているのよ。本当に親想いのいい子よ」
「……」
2年後、この人達は彼の家族に今まで騙されていたことを知り、激昂するのだけれど。
――そうか。あの人が学校でいつも寝ている理由がわかった。
夜中の2時までアルバイトをしていて、私はいつも彼が、朝の6時には学校のサッカー部のグラウンドに来て、一人練習しているのを、入学以来、ずっと見てきた。
学校で寝ている分、彼はそれ以外の時間、いつも忙しかったんだ。
「――ケーちゃんは、埼玉高校で、上手くやってる？」
考え込む私とエンドウくんに、おばさんが訊いた。
「あの子、小さな頃からしっかりし過ぎているから、同世代の子が子供過ぎるのか、あまり学校が好きじゃないみたいでね。小学校の時には、かなり酷いいじめも受けていたみたい。それでも全然辛そうな素振りを外には出さないんだけどね」
「……」
「私が言うのもなんだけど――ケーちゃんはいい子よ。ちょっと他

人に対して、不器用で、誤解をされてしまうだけなの。だから、あなた達さえよければ、これからもケーちゃんと仲良くしてあげてね」

「――はい」

私とエンドウくんは、ほぼ同時に返事をした。

「はい、お待たせ」

折節、厨房からさっきのおじさんが出てくる。

「ケーちゃん、随分頑張ってるみたいだからな。これ、ケーちゃんの差し入れに持っていってやってくれませんか」

そう言って、私に紙でできた箱を差し出した。厚紙を通じて、中のものの熱が掌に伝わる。どうやらこのおじさんは、さっきからこれを作っていたようだ。

「ケーちゃんに伝えてくださいよ。文化祭が終わったら、奢るから、飯を食べにおいでって」

それから商店街の八百屋で玉葱を、アウトドアショップで携帯コンロのボンベをそれぞれ買いに行った。

どの店も、サクライくんが先に話をつけてくれていたので、品物は格安で手に入った。そして、私達がサクライくんのお使いで来たと言うと、どの店の主人も私達を歓迎してくれた。差し入れまでもらってしまった。

「意外だったなぁ、あいつ、地元じゃ割と有名人で、大人から人気あるんだな。学校の教師には総スカン食らってるってのに」

エンドウくんは、卵のダンボールの乗った台車を慎重に引きながら、隣で玉葱とボンベのダンボールの乗った台車を引く私に言った。

「……」

部活もやりながら、学費を出すために、自分でアルバイトか――身の回りのことを、何でも一人でやっているんだな。あの人は。

そして、自分の行動の責任も、ちゃんと自覚している。授業をサボっているのも、成績が下がれば、人一倍嘲笑される――自分の行

動を人一倍省みて、その上で自分の生き方を、自分で決めている。
もしかしたら、慶徳を出て、学費の安い県立に来たのは、それが原因かも――普通慶徳なんて名門校に一度入ったら、それを蹴って別の学校に来るなんて、私が楽器を変えることの比ではないほど勇気のいることだ。彼が今、埼玉高校にいることだって、まだ中学生の彼が自分で決めたことだ。自分でアルバイトをして、学費を出すことも、踏まえた上で。
だとしたら、私は一体何なんだろう。
自分探しなんて言って、家族に新しい楽器を買ってもらって、私の勝手な思い込みで、家族に浪費ばかりさせて。
本当に家族のことを思うなら――本当に自分がやりたいことなら、私もサクライくんみたいに、自分で働いて、そのお金で自分のやりたいことをやればいいのに。
――甘えてるな。私。彼と比べたら、私の思いは、覚悟もなく、行動も伴ってない。何も出来ない子供が、ただ粋がってみたくて、駄々をこねているのと、変わらないじゃない……
――学校に続く一本道に差し掛かると、視界の先に、とても大きな木造の建造物が見えてくる。
縦１０メートル、横６メートルはある巨大なそれは、右側８分の１程を除いては、絵が施されていた。女神や悪魔、天使や動物――そんなものか夕日に照らされた雲海でもみくちゃに入り交じる、まるでルネサンス時代の名画のような、壮大で、少し恐ろしい絵。
「毎日登校しながら見てるけど、あれすごいよな」
横のエンドウくんは、台車を押しながら言う。
学校の校門の後ろに、その巨大な建造物はある。文化祭の準備のためか、校門周りの人の出入りは激しい。
そしてその建造物の右上の方――
所々に作られている足場にしゃがみ、左手でパレットを持ってアクリル絵の具を調合する、小柄な人影があった。
「おい、ケースケ！」

エンドウくんはその人影を見上げ、大声で彼を呼ぶ。
その人影は、絵筆を持ったまま、足場からひょっこり顔を出す。
所々絵の具の跳ねた黒のTシャツに、茶色のチノパンを履いたサクライくんがそこにいた。

Another story ～ 2－12（後書き）

一応補足なんですけど、シオリは料理がまったく出来ないわけじゃないんです。味音痴で味付けがまったく出来ないだけで、味をつける必要のない卵を焼いたりとか、そういうことは普通に出来るんです。盛り付けとかを綺麗に見せるセンスはあるんですが、自分で料理を作ると、味が微妙になるだけで…

Another story ～ 2－13

サクライくんが絵筆を入れるこの巨大建造物は、文化祭用に作っている入場門だ。

埼玉高校には二つ校門があって、外側の門は、毎年吹奏楽部が絵を施す出展作品のひとつとなっている。そしてもうひとつは、デザインを生徒の一般公募によって決める。

今年の第二の門は、サクライくんのデザインに決まったのだけれど、サクライくんはそれだけでなく、門の枠組みまで全面プロデュースした。わずかな人員を借りて枠組みを作ると、サクライくんは半月の間、一人で門に絵を施している。普通複数の人間が絵筆を入れるのに、一人でこの巨大な門に絵筆を入れるのは、埼玉高校の歴史上、サクライくんしかいないらしく、この門の大きさも、過去最高の規模だそうだ。

「お前の行ってたところで買い物してきたワン」

エンドウくんが、足場の上にいるサクライくんを見上げて言った。

それを訊くと、サクライくんはパレットを足場に置いて、足場を作る鉄パイプを伝って下に下りてくる。

「――何だ、そのワンダーな語尾と格好は」

サクライくんは、エンドウくんの語尾に合わせてそう言った。

Ｗｏｎｄｅｒ――英語で、不思議な、という意味もある。語尾にかけただけじゃなく、ちゃんと意味も通るように計算して言ったのかな、と、私は思う。

「はは、マツオカさんが、男と二人っきりで緊張すると思って、緊張感のない喋り方をしてるわけ」

「……」

そう言って、サクライくんはエンドウくんの横にいる、私を一瞥する。

「珍しい組み合わせだな。女子に荷物運びさせるなんて、随分うち

のクラスの男子は気が効かないんだな」
「あ、ち、違うの。私、地元だから、迷わないように道案内してただけで……」
「――そうか。お疲れ」
サクライくんは言った。凛と響く声で、静かに。
そう言って、サクライくんは巨大な入場門の横――日陰に置いてある自分の鞄から、ペットボトルを取り出して、中に入っている水を口に含んだ。
「……」
相変わらず、愛想がない――
でも、文化祭の準備が始まってから、その愛想のなさの印象は変わった。
彼は優しい。憎まれ口を聞いても、彼は困っている人に対しては、無条件で手を差し伸べている。
最近、それがちょっと分かってきたような気がする。
「あ、あの」
それでも、私はいつもサクライくんの前に来ると、何だか焦ってしまって――
「こ、これ、洋食屋さんのおじさんが、サクライくんに差し入れって」
そう言って、私は彼に、さっき洋食屋でもらった大きな紙箱を差し出した。まだ表面は温かい。
サクライくんはそれを受け取って、箱の蓋を開けると、そこには分厚いハンバーグを食パンで挟んだハンバーグサンドが、みっしりと詰まっていた。箱を開けたと同時に、いい匂いが香った。
「うほ、美味そうだなぁ！」
エンドウくんが箱の中を覗き込んで、歓喜の声を上げる。
「――こんなに食えないっての」
サクライくんは呟く。確かに箱の中のサンドイッチは、食パン一斤分はありそうなボリュームだった。

「多分二人の分も作ってくれたんだろう。よかったら、少し食っていけよ」

そう言って、私とエンドウくんは、サクライくんと一緒に、巨大入場門に背中を預けて座り、そのサンドイッチを3人で食べている。

出来立てのハンバーグと自家製の食パンのサンドイッチは、これ以上ないというほど美味しくて。

「うおっ、これ、美味っ！」

さっきからエンドウくんは、次々に手を伸ばしてサンドイッチを頬張っている。スポーツをしている若い男の子って感じだ。

「……」

それに対してサクライくんは、静かにゆっくりと、もぐもぐ口を動かして、常に一定のペースでサンドイッチを食べていた。口に頬張るようにではなく、何だか、食べ物に敬意を払うような、そんな感じ。

実に対照的な食べ方だったけれど、二人とも、食べ方を見ると、本当に美味しそうに物を食べる人だな、と思う。サクライくんも、心なしかいつもより表情が緩んでいるように思う。

「しっかし――これ、すげぇ絵だな。まだ完成してないみたいだけど」

エンドウくんはサンドイッチを口に含みながら、背中を預けている入場門を見上げる。

もう時計は5時を回っていて、その絵は夕日に照らされて、絵の中のオレンジ色を更に映えたものにしている。

このサクライくんの作った巨大入場門は、もうその手前にある美術部の作ったもう一つの入場門を完全におまけにしてしまうほどに、壮大な出来栄えだった。この絵が完成するにつれて、今年の埼玉高校はすごいらしいと、学校の近所の住人の噂がどんどん広がり、果ては地元のローカルテレビや新聞の地方欄からもネタにされるほど

だった。
　夕焼けの雲海の中、太陽に向かって手を伸ばしている、女神のような女性を一番上に、そこから教会のキリスト像のような、髭を生やした筋肉質の男性や、鋭い目に、鋭い角を生やした、悪魔のような風貌の獣、みすぼらしい格好をした、奴隷のような人間や、牛や馬、羊といった、様々な動物が、その下にごちゃごちゃになって書かれていた。
　それは、先頭の女神がこの世に祝福を与えているようにも見えるし、神の裁きを与えているようにも見える。神々と悪魔が、この世の全てを飲み込んで戦っているようにも見えるし、天地が崩壊し、全ての森羅万象が、地獄に落ちていく時の、もがく有様のようにも見える。
　神々しいようにも、禍々しいようにも見える。実に不思議な絵だった。受け取り方ひとつで、表情を変える興味深い絵として、まだ未完成ながら、校内の生徒や、外から見る人の興味を抱かせずにはいられなかった。
「これ、どんなテーマで書いてるわけ？」
　エンドウくんはそれを訊いた。
「さあな」
　しかしサクライくんは、つっけんどんにそう言った。
「――さあなって、お前……」
「そういうの、想像で補完しながら見た方が、見る方は楽しいだろ」
「――先入観を持たずに見た方が、想像力を働かせて、絵が見れるって？」
「ま、そんなとこ」
「……」
　二人の会話を、横で訊きながら、私も想像力を働かせる――
「おーい、サクライくーん」
　しかし、私の思考を遮るように、彼を呼ぶ声がした。
　校舎の方から、恐らく先輩だろう男子生徒２人、女子生徒１人が

こちらへやってくる。サクライくんは持っていたサンドイッチの残りを一気に口に押し込み、立ち上がる。

「君の作った音響装置のテストについて、大道具係が……」

「模擬店で電気を優先的に使いたいという団体が、一団体に割り振られた以上の電気を使いたいと……」

「来賓を招くのに、他に準備することは……」

先輩達は、矢継ぎ早に用件を言う。

「ああ、あの音響装置は――」

それにサクライくんは実に手際よく、要領よく仕事を指示していく。

「もう少ししたら僕も顔出しますから、それまで今言った方法を試してみてください」

どうやら仕事の問題がひとまず解決したようだ。先輩達は彼にお礼を言って、校舎の方へ戻っていく。

「忙しそうだな、ケースケ」

彼の背中に、エンドウくんが声をかけた。サクライくんは振り返る。

成績優秀者は文化祭実行委員に混ざって、仕事に駆り出される。私も二つの仕事を受け持っているけれど、サクライくんもその例外ではない。

その中でも、サクライくんの仕事ぶりは、校内で話題になっていた。類稀なるリーダーシップを持っていて、行動力もある。困っている人を、何も言わなくても気付いてくれて、サポートしてくれる。一年生なのに、もう今年の文化祭の実行委員の中枢的存在になっていて、先輩からも頼りにされている。一騎当千の働きをすると言われていた。

その合間にクラスの出し物にも、時間を見つけては参加してくれて、私達女子にオムレツの作り方を指導もしてくれて、その合間にこの巨大な絵を描いていた。この1週間、彼は授業をサボってこの絵を描き続けていた。

「疲れてるんじゃないのか?」

エンドウくんが訊いた。
確かにここ数日、サクライくんの姿はほとんどクラスで見ることはなくなっていたけれど、こうして見ると、無表情な彼の顔にも、疲労の色が濃くなっているように見える。
「――別に」
サクライくんは体をほぐすように背筋を伸ばした。
「そうか？　お前、連日色んな部署で働き詰めだって、噂になってるぜ。鉄人ケースケも、さすがに疲れてるだろ」
「……」
サクライくんは何も言わずに、しゃがまずに全屈して、紙箱からハンバーグサンドを一切れ手に取った。
「――さて、腹も膨れたし、そろそろ再開するかな」
私達に背を向けたままそう言う。もう話すことはないという意思表示。
「……」
私の隣にいるエンドウくんが、呆れたような顔で溜め息をついた。
「ケースケ、お前も今日泊まりか？」
エンドウくんが聞いた。
「いや、バイトがあるから一度帰る。それを終えたら戻って、朝までにこの絵を仕上げる」
「こんな日までバイトかよ……」
「……」
アルバイトというと、あの商店街にあるコンビニだろうか。
そう考えていると、エンドウくんが最後のサンドイッチを手にとって、立ち上がる。
「じゃあマツオカさん、俺達も教室に戻ろうか」
そう言われた。
「あ――うん」
私は思考を中断し、立ち上がる。
その頃にはサクライくんは、もう梯子を上って、狭い足場に立ち、

門の前で絵の具の調合を始めていた。
「ケースケ、頑張れよ！」
それを見上げてエンドウくんは声をかける。サクライくんは絵筆を持つ右手を上げ、2、3度回す仕草を見せた。
私とエンドウくんは、門の前に置きっ放しだった台車を引いて、教室へと向かう。
「……」
成績優秀者ということで、私も文化祭実行委員の末席に加えられてはいたが、本当に私の仕事はその末端を担っているに過ぎない。はっきり言って、私の仕事はただの労働力の貸与に過ぎない。誰かの指示のとおりに動くだけ。
そのせいか、同じクラスのサクライくんが、いまや実行委員の中で一番頼りにされている存在になっているのは、この半月余り、嫌でも目に付いていて。
私も彼も、文化祭実行委員に駆り出された経緯は同じで、スタートラインは一緒だったはずなのに——この半月、私は会社の同期がどんどん出世していくのを、ただ見ているだけの平社員のような惨めな気分を、彼を通じて味合わされていた。
でも、私はこの文化祭を通じて、次第にサクライくんに憧憬の念さえ抱くようになっていた。
彼は勉強ができるだけじゃない。自分が勉強して得た知識を、行動で形にすることが出来る。はじまりがゼロの状態からでも、自分の力と行動ひとつで、自分の居場所を作り、周りの信頼も得る。そんな彼の行動の結果を、ずっと見ていたから。
そんな強さが、私も欲しかった。サクライくんがこの文化祭で働いているのをいつも遠目で見ながら、あれは多分、私が理想としているもの——私のなりたい理想の自分のイメージに、すごく近いように思えた。
生真面目で、大人しく、引っ込み思案でステレオタイプ——そんな型にはまりがちな私にとって、彼の生き方は、いつも激しさを含

んでいて……
すごく、彼が羨ましかった。
すごく、彼に憧れた。
その度に、自分の今の、何も出来ていない状態が、惨めさとなって私に返って来る――
「――やれやれ、あいつ、洋食屋のおばさんが言ったとおり、働くのが好きってのは本当らしいな」
歩きながら、私の横にいるエンドウくんが言った。
「え？」
「あいつ、サッカー部の仕事をしたくないから、ああして別の仕事を沢山受け持ってるんだよ。あいつ、部内じゃ唯一素人だから、文化祭、部に参加してたら、先輩のためにジュース買いに行かされたり、得点盤めくったり、そんなつまんない仕事を任せられるに決まってるからな。それよりかは、あんな疲れるまで働いてる方がましってことみたいだ」
「……」
「暇なのより、忙しい方が好きってのは、本当みたいだ。その忙しさに、青春のせの字も含まれてないってのは、１５の身空で悲しい限りだがな」
「……」
忙しいのが好き、か――
というより、彼はきっと、自分の力を無益なことに使うことが嫌いなんだろう。慶徳でもうこの高校で教える範囲の勉強は終わっている。だから、彼にとって、もうこの高校の授業は無益。だからサボる――
彼にとって、時間は貴重なものだということも、最近ようやく少し分かりかけてきた。
――そういえば。
「ねえ、エンドウくんから見て、サクライくんって、サッカー上手いの？」

私は校舎に向かいながら、エンドウくんに訊いていた。
「え？」
「あ――べ、別に深い意味はないの。私、朝、サクライくんがいつも一人でグラウンドで練習しているの見てたから。あれだけ練習してて、今の腕前はどうなのかな、って。私、サッカーは詳しくないから、素朴な疑問で……」
私は男子のことを、こうして訊いたことがないから、途中で少ししどろもどろになってしまう……
「ふふ」
それを訊くと、エンドウくんは私を見て、にっこり笑った。
「それが気になるなら、マツオカさん、サッカーを勉強してみたらどう？」
「え？」
「ケースケはともかく、俺とユータは、ケースケの成長次第で、マジで全国狙ってるから。そしたら吹奏楽部のマツオカさんも、応援に来るだろ？　その時サッカーを知ってたら、きっと知らないで来るよりも楽しいよ」
「……」
私はこの言葉をきっかけに、文化祭の後にサッカーを勉強し、次第に興味を持つようになる。

Another story ～ 2－14

「ああ、俺、あとは教室に運んどくよ。マツオカさんは吹奏楽部の練習があるんだろ？」
　校舎に入ると、下駄箱でエンドウくんが台車を止めて、そう言った。
「階段上らなきゃ教室まで運べないから、台車はもう使えないしね。女の子はしんどいだろ」
「え――そんな、悪いよ。一人じゃ何往復もするようでしょ？」
「大丈夫だよ。これでも鍛えてるし、マツオカさんが重いもの持ったら、俺がついていった意味ないじゃないか」
「……」
　そう言って、エンドウくんは台車のストッパーをかけて、まず玉葱のダンボールを抱え持った。
「あ、あの。今日は色々、ありがとう」
　私はエンドウくんにお礼を言う。この短い時間で、私はエンドウくんに色々助けてもらったから。
「私、エンドウくんだったから、男の人と一緒でも、こうして普通にいられたんだと思う」
「大袈裟だな。別に何もしてないのに」
　エンドウくんは私の言葉に、くすっと笑った。それから、よいしょ、という掛け声を出して、ダンボールを持って立ち上がる。
「ま、無理に男と関われ、って言うんじゃないさ。男が苦手なら、それもしゃあないと思うし。これからマツオカさんも、ミスコンに出たら、男の勝手なところ、いっぱい見て、男がますます嫌いになるかもしれないし、それはそれで仕方ないことだと思うよ」
　立ち上がりながら、エンドウくんはダンボールの影から、顔をひょこっと出して、私を見て、そして、人懐っこい笑みを見せる。
「でもさ、避けるよりも、仲良くなれた方が、きっと楽しいよね」

「……」

エンドウくんは優しい。

こんなに優しくしてくれるのに……私はまだ、その優しさに応える術を知らない。

エンドウくんだけじゃない。みんな、私の周りにいる人は、みんな、私に……

「――どうして、私にそんなによくしてくれるの？」

私はエンドウくんに訊いた。

「え？　うーん……」

いきなりそんなことを言われ、エンドウくんは段ボールを抱えたまま、数秒考えた。

「だってマツオカさん、いつだって一生懸命っていうか、頑張ってるじゃん。そういうの見てると、何か力になりたいって思うじゃん。多分クラスの奴、みんなそうだよ」

「……」

吹奏学部は文化祭では、初日に体育館を借りて、1時間半のコンサートをする。

私もフルートでパートを作ってもらったのだけれど、まだソロパートなんてもらえる腕はない。この時の吹奏学部では、先輩にフルートを吹く人がいたので、私はもっぱらその先輩に合いの手を入れるようについていくだけだった。

私はそのまま音楽室にいき、吹奏楽部の、文化祭前、最後の音合わせに参加していた。

「よし、じゃあ今日の練習はここまで！」

顧問のタカヤマ先生がそう言う頃には、もう夜の8時で、外は真っ暗だった。

「今日はみんな、早く帰って、お風呂に長く浸かって、指をほぐして、たっぷり睡眠を摂って、明日本番を迎えてね」

先生のそんな締めの言葉の後、ずっと練習をしていた人は、3時頃からやっていたので、音楽室には、ふぅ、と溜息がいくつも起こった。

「あー、疲れたぁ」

ミズキが持っていたアルトサックスを、ぐったりと下ろす。

「ミズキ、ソロパートもらって、練習ずっとしてたもんね」

アオイがそんなミズキの横で、愛用のホルンをケースにしまう。

「そう？　アオイこそ文化祭に向けて、気合が入っていたじゃない」

ミズキはアオイの顔を覗き込む。

「え？」

「はじめは炒り卵しか作れなかったミズキが、あのトロトロオムライス、シオリの次に作れるようになったじゃない」

「……」

そう、文化祭に入って、私と同じくらい大人しいアオイは、私とほぼ同時に、サクライくん直伝のオムライスをマスターした。クラスの中でも積極的に文化祭の準備に取り組んでいて、他の女子の指導までするほどになっていた。

「どうしたの？　もしかして、好きな男でも文化祭に来るとか」

「ひぇ？」

ミズキのその言葉に、突飛な声を上げるアオイ。

「あー、怪しいなぁ」

ミズキは妹をからかうように、アオイの肩に手を回して、アオイのふくふくした頬を、指でつんつんする。

「こら、吐けよぉ。彼氏がいるんじゃないだろうなぁ」

「い、いないよ。私……」

アオイは困ったような表情で、私の方を見る。でも、私もその手の話題じゃ、助け舟は出せないんだけどな……

――そんな二人と私は校舎を出る。クラスでも吹奏楽部でも、基本的に私は二人と一緒にいることが多くなった。

「ミズキは、彼氏が来るの？」

昇降口の下駄箱の靴を取りながら、私はミズキに訊いた。
「誘ってないわよ。今の彼氏、社会人だし。学校行事に精を出すところなんて、見られたくないし」
「え？」「え？」
私とアオイは同時に声を出す。
「すごいな……そんな年上の人と付き合えるなんて。さすがミズキ」
アオイは感心したように言った。確かにミズキは一見モデルみたいに背が高くて、かっこよくて、美人で——恋愛経験が豊富なのも無理はない。
「出会いなんてその辺にごろごろしてるわよ。男なんて、女の体を上手く使えば、年上だろうと割と簡単だし」
「か、体……」
すごいことを言う。それが大人の女というやつなのか……
でも、確かに年上の彼氏に、学校行事を頑張る姿なんて、子供っぽくて、相手には見せたくないかもしれない。実際、ミズキはあのオムライスを作れるようにはならなかったし……
「でも、いいのかな、私達、帰っちゃって」
今日は文化祭前日——中には泊まりで準備をする団体も多い。うちのクラスも、一部のクラスメイトは泊り込みで、教室の最後の飾り付けをやると言っていた。
「うちはただ、学校に泊まってみたいってだけでしょ。ここ、シャワーもお風呂も古くて汚いし、私は嫌だな」
ミズキは言った。
「……」
自転車置き場に向かって歩いていると、途中で見える校門——あのサクライくんの巨大入場門が見えてくる。ライトアップされて、絵の中の夕焼けの雲海のオレンジ色が、周りを華やかな明るい色に彩っていた。
「しかし、すごい絵ね」
ミズキが校門の前で足を止める。私とアオイも足を止めた。

絵は、夕方に見たときよりも筆が進んでいたけれど、まだ、ほんのわずか、書ききれていない部分がある。

私は上を見上げて、サクライくんの姿を探した。どの足場の上にも、姿は見えない。

そう言えば、今日はバイトにいってから、戻って全部書き上げるって言っていたな――もうバイトに行ったのか。

「あの人、何かよくわかんない人だけど、すごい人であることは確かみたいね」

ずっとサクライくんの評価を低く見積もっていたミズキも、この絵にはほとほと脱帽のようだ。それだけこの絵のインパクトはすさまじく、校内で学年問わず、サクライくんの名を轟かせると同時に、世間に埼玉高校の文化祭を宣伝する、格好の広告塔となっていた。

「うん……すごいよね。サクライくん……」

私の隣にいたアオイは、何だか沈んだ声で頷いた。

「……？」

――何か、アオイの様子がおかしい？

でも、その小さな疑問を口に出す前に、私は自転車置き場で二人と別れた。地元の私は駅を使用しないため、必然的に二人とは向かう方向が違うのだ。

自転車を5分も漕ぐと、夕方行ったあの商店街が見えてくる――

「……」

いつもなら遠回りだから通らないのだけれど、今日の私はその商店街に向けてハンドルを切った。

もう8時を過ぎていれば、飲食店を除いてほとんどシャッターが降りている、人通りも少ない。このあたりは観光地だから、5時を過ぎればもうほとんど人が通らなくなるのだ。

さっき行った洋食屋さんは、今はＯＰＥＮの札がかかっている。さっきと変わらずデミグラスソースのいい匂い。

その洋食屋さんを通り過ぎて、私は少し進んだところで、自転車を止める。

私の目の前に、コンビニの立て看板が目に入ってくる――
「……」
この商店街にあるコンビニは、あそこだけ――
――ということは、あそこでサクライくんが働いているんだ。今……
「……」
――そう思った瞬間、私は自己嫌悪に陥る。
「――これじゃストーカーだよ……」
私は5秒立ち止まって、自転車でもと来た道を引き返した。

「あ、シオリちゃん、お帰り。ご飯できてるわよ」
家に帰り、リビングに行くと、お母さんが私のためにご飯を作って待っていてくれた。お父さんとシュンはリビングのテレビでプロ野球を見ていて、シズカはキッチンで洗い物をしていた。
私は夕方、サクライくんからサンドイッチをもらったので、正直あまりお腹がすいていなかった。それでも、せっかく残してもらっていたものなので、食べられるものだけ食べる。
「いよいよ明日ね。シオリちゃん、フルートをはじめて初めてのコンサート」
「私も明日、お姉ちゃんの文化祭、行くから。楽しみだなぁ。お姉ちゃんの作るオムライス」
お母さんとシズカは、ご飯を食べる私に微笑みかける。
「とりあえずこれでうちの食卓から卵が消えるな」
シュンはソファーから私にそう言った。この一週間、私が家で練習しては失敗したオムレツを、うちの家族は毎日のように、胃袋に処分してくれたのだ。
「俺も行くけど、正直もう卵はしばらく食いたくねぇ」
「でも、あの失敗した卵、全部シオリちゃんがお小遣いで買ったんだから。奥ゆかしいじゃないの」

お母さんが言った。

夕食を食べ終わり、自分の使った食器を洗い、お風呂に入って、私はパジャマに着替える。時計は１０時を少し過ぎた頃。

明日から２日間、忙しくなりそうなので、早く寝たいところだけれど、夕食を食べたばかりだから、すぐには眠れそうにない。

だから何となく、勉強をする。

「……」

だけど――やっぱり、集中できない。

私、今、どうかしているな、と思う。

タカヤマ先生が言っていた、「今後あなたと彼はずっと比較され続けるだろう」という言葉を、私は意識しすぎているのだろうか。

何だか自分があの人に比べて、酷く甘やかされているような気がした……

エンドウくんは私のことを、いつも一生懸命、なんて、言ってくれたけれど……

全然、私は何も頑張れてないんだよ……

この文化祭の間、自分はほとんど何もしていないのに、周りは私に世話を焼いてくれる。

私がこうしている間に、あの人は今働いていて、それが終われば休む間もなく学校に行って、一睡もせずにあの絵を描くのだ。

私がこうして休んでいる間に、何だかあの人に差をつけられているような、そんな気がして……

そう思うと、私は一体、何をやっているんだろう、と思う。

だからかもしれない。あの人が、私にはないものを持っているように見えるのは。

そんな思いが何なのか確かめたくて、つい私は、帰り道に通らなくてもいい、夕方に立ち寄った商店街に足を向けてしまい、洋食屋のマスターから聞いた、あの人が毎日のように働いているというコ

ンビニをのぞいてしまいそうになった。自分がストーカーみたいで、情けなくなって、途中で引き返してしまったけれど……

あの人は、頑張っている。私にはなくて、あの人にはある「頑張る」というものが何なのか、彼に会えば分かるような気がして……

「はぁ。もうやめ！　寝よう……」

モヤモヤして、何も手につかないので、私は観念して、ベッドに潜り込んだ。

だけど――

午前3時、私は1人、夜の街を自転車で走っている。

梅雨が近付いていて、夜はじっとりと湿った空気を帯びていて、空は曇天。月も見えない、真っ暗な夜だ。

結局私はあれからも眠れず、布団の中で何度も寝返りを打っていたのだけれど、観念してこうして起きてしまった。

そして自転車で、埼玉高校に向かっていた。人どころか、車にさえすれ違わない。それくらい静かな夜。

自転車の先、あの門の絵が見えてくると、私は直前で自転車を止めた。

そして、自転車を降りて、その巨大な門を見上げてしまう。

「……」

無性に今夜は、この絵をしばらく見て、考えてみたくなった。

この半月、私は彼が早朝からこの絵を描いているのを、音楽室でフルートの練習をしながら、ずっと見ていた。

彼がこの絵を書く姿からは、いつだって「まだこんなものじゃない」という叫び声が、ずっと聞こえているような――そんな気分にさせられた。

それ以来、彼の姿を見ると、いつも「まだこんなものじゃない」という声が聞こえるような気がするようになった。サッカーの練習をしていた時だって、ずっとその声が私の中で聞こえていたんだとい

うことも分かった。がむしゃらで、実直で、自分の力を真に高めようとする強い意思を含んだ、そんな凛とした声が、私の頭に響くようになっていた。

そんな叫びをぶつけるようにして、この絵はどんどん出来上がっていって。

そうして出来上がった絵は、あの物静かなサクライくんが書いたとは思えない程、躍動と迫力に満ち溢れていた。誰の目にも強烈な印象を残し、心を動かす。

「……」

この絵と、この絵を描く彼を見て、私はいつも思う。

私も、この絵を書く彼のように、ただ迷いなく前を向いて――今までの、ただの優等生で、平坦な印象しか与えない自分を変えたかった。

この絵のように、いつだって躍動して、充実した日々を送りたかった。

そのはずなのに……

私はまだ、一歩も前に足を出していない。

頑張ろう、と、自分に言い聞かせても、頑張れてない――

私だって、サクライくんのように、まっすぐな生き方をしたかった。大人しく人の言うことを聞くだけじゃない。自分の意思で、自分の人生を動かしてみたかったのに……

「――マツオカ？」

後ろから突然呼ばれ、私はびっくりして振り返る。

後ろを見ると、絵の具の飛んだ黒いトレーナーと、夕方見た時も穿いていたチノパン姿のサクライくんが、自転車にまたがって、不思議そうな顔をしていた。

「……」

声をかけられた時、心臓がすごい音で鳴った。

まさかこの人と鉢合わせるとは思ってなかった――

って、この人がここにいることは分かっていたのに。

私、本当どうかしてるな……

Another story ～ 2－15

「何してるんだよ。こんな時間に」
サクライくんの静かな声は、この夜空に不思議な響きを余韻に残す。
「あ――あの……」
ど、どうしよう――これじゃ思いっきり不審者だ。何とか説明を……
――で、でも、どうやって？
今の私の感情は、思いっきり個人の感傷だ。そんなものを彼に訊かせても、呆れられるか引かれるだけだろう。
「……」
沈黙。
「――何にせよ、感心しないな。こんな時間に女が一人、出歩くものじゃない」
そう言うと、サクライくんは自転車から降りて、門の隣でストッパーをかけた。
「送ってやることも出来ないが、不審者に捕まったり、補導される前に早く帰れ」
そして、自分の自転車のかごに乗っている、スーパーのビニール袋を持って、私の顔を見ずに言った。
「……」
「それか、この時期は４時になればもう外が明るくなる。あと３０分くらいだろうから、それまで校内でも回って、時間を潰すんだな」
「……」
サクライくんは、いつもこうだ。優しいのだか、冷たいのだか、よく分からない物言いをする。
それだけ伝えると、もう自分の言うことはないということなのか、私には目もくれず、自分の作った校門に背を預けて座って、持って

いるビニール袋から、コンビニ弁当を取り出した。
「――え？」
そんなサクライくんを見ていた私は、ふと首を傾げる。
サクライくんの持っているビニール袋には、コンビニのおにぎりやパンが、みっしりと入っていて、とても一人前とは思えない量だった。
「――そんなに、食べるの？」
私は彼に訊いていた。
「悪いがひとつもやれんぞ」
彼は割り箸を割りながら言う。
「いや、そういう意味じゃ……」
「全部賞味期限が切れてるからな」
「え？」
「賞味期限の切れたものを、人に勧めるのは失礼だろう」
「……」
それだけ言って、彼は黙々とコンビニ弁当を食べ始める。
「……」
まるでそれが当たり前のように食べている。彼は毎日のようにアルバイトをしていると、洋食屋さんが言っていたけれど、もしかして毎日こんなものを食べているのだろうか。
「ふあ……」
サクライくんが、ひとつ欠伸を噛み殺した。しょぼしょぼした目で、コンビニ弁当にまた箸を伸ばす。
「……」
私は一度校舎の中に走り、食堂近くにある自動販売機で、冷たい缶コーヒーをひとつ買って、もう一度彼のいる校門に走る。
「あ、あの」
まだコンビニ弁当を、ゆっくり食べている彼に、私は缶コーヒーを差し出す。
「ん？　くれるの？」

サクライくんは澄んだ瞳を丸くする。
「う、うん。差し入れ……今日、徹夜みたいだから」
「――サンキュ」
そう言って、彼は私から缶コーヒーを受け取ると、小さく一口飲んだ。
ほう、と、小さく息をつくサクライくんの顔は、その女性的な容姿も手伝ってか、何だかとても幼く思えた。
「あ、あの、私、少しこの絵、見ててもいいかな……」
私はそんな彼を見て、思わずそう口にしていた。コーヒーを飲んだ彼から、少し私への警戒心が消えたような気がしたので、とっさに声が出てしまったという感じ。
「ん？　――別に構わないけど」
「あ、ありがとう」
私は何故かお礼を言ってしまう。

コンビニ弁当を食べ終わると、彼は学校の水飲み場で、金バケツに水をたっぷり汲んできた。絵筆を洗うためのものみたいだ。
片手でバケツを持ちながら、もう片方の手をかけて、バケツをガチャガチャ言わせながら、足場を登っていく。
足場の上には、彼がバイトに行く前に使っていたパレットと、様々な太さの絵筆がそのまま置いてある。絵の右下の方――角を生やした、黒くて恐ろしい、鹿のような、悪魔のような形相の生き物が、少し書きかけになっている。彼はアクリル絵の具を調合すると、無造作にべたりと絵筆で木目に絵の具を塗りたくった。
「……」
彼の隣で、私も足場に登って、絵を初めて至近距離で見る。
こんなに無造作に、いきなり塗っちゃっていいの？　とも思ったけれど、こうして近くで見ると、どの箇所も雑に塗られた場所は少しもなく、むしろそうして迷いなく塗られた背景のオレンジ色は、

明るい色がさらに際立っているように思えた。
それを感じてから、もう一度彼の絵筆の走りに目を奪われる。
もう、私のことなんて目に入っていないという感じに、彼の絵筆は一心不乱に動いている。少しの乱れもなく、リズムを刻むように軽快に。その姿を見ていると、まるでモーツァルトやベートーベンの独奏曲を聴くような高揚感に包まれる。
「……」
彼を見ていると、何をやっても絵になるなぁ、と感心してしまう。オムライスを作るのも、勉強しているのも、文化祭の仕事をしている時も。初心者のサッカーや、授業中に暇つぶしに弾いているピアノやギターでさえ、彼の仕事には、自分はこうしたいんだ、っていう意思を明確に感じる。
だからだろうか、彼の動きや佇まいには、いつだって自信に溢れていて、迷いがなくて……
――私のフルートも、こんな軽快な感じが出たらいいのに。そう思って練習しても、まだ音が泥臭くて、重くて、おしゃれな感じじゃないんだよね……一度音が崩れると、めちゃくちゃに音が乱れてしまうし。
「――すごいね。サクライくんは」
私は思わず呟く。
「――ん？」
彼は絵筆を走らせながら、こちらを見ず、反応だけ示す。
「だって、自分の考えを、いつも形に出来るから」
私は指で、絵の木目をなぞった。
「自分の考え？」
サクライくんはその言葉を反芻する。
「じゃあ君には、この絵に僕のどんな意思を見る？」
彼にそう質問される。
「……」
目の前の絵は、女神を先頭に、多くの人や動物、悪魔などが空に

浮かんで入り混じる絵――背景は黄金色に照らされる雲海で、下に行けば行くほど、その光が弱まり、暗い空が広がっている――

「――底知れぬ、深い怒り、かな」

私は小さく呟いた。その回答に自信がなかったからだ。

「……」

だけど、私の隣にいるサクライくんは、その言葉に、ぴくりと反応する。

「――何故、そう見る？」

彼の言葉のアクセントが、少し鋭くなったような気がする。そして彼は、今まで私の方を一度も見なかったのに、私の目を真剣なまなざしで捉えた。

「え――あ、あの、こ、これ、何か、女神様が、人間や、その中に混ざる悪魔や、全ての生き物に罰を与えているような――地面が崩れて、地獄へ全てのものが落ちて、落ちていく生き物達が、空に向かって助けを求めるように手を伸ばしているような、そんな気がして」

彼のわずかな変化を何となく察知した私は、彼のその曇りのない目に気圧され、少し狼狽しながら、そう言った。

「……」

「そ、それに私、あなたがいつも朝早くから絵を描いているの、音楽室から見てて……あ……」

――ど、どうしよう、ずっと見てたこと、つい口が滑って……

――恥ずかしい……

「――それで？」

しかしサクライくんは、そんな私のことなど構わずに、私の言葉に耳を傾けようとする。というか、そういうことを聞いても心を動かす人じゃなかったのかな。

「あ――さ、サクライくんがこの絵を書いている時って、いつも何か、自分はこんなものじゃない、って、声が聞こえるような、そんな気がして――何か、自分への怒りや憤りをぶつけているような…

…」
「……」
私の要領を得ない言葉に、サクライくんは絵筆を持った手を口元に寄せ、何か考えを巡らせていた。
「――ふふ……」
そして、かすかに酷薄な笑いを浮かべた。
「面白いことを言うんだな」
そしてそんな笑みを浮かべたまま、彼は私を一瞥した。
「自分への怒りや憤り、か……」
「え？」
「確かにそうかもな、って、改めて思っただけ」
「……」
その力ない笑みが、一体どうして彼からこぼれたのか、私にはまだ分からなかった。
彼は、この絵の女神のように、何か裁きを与えたい人がいるのだろうか――神のような絶対的な力を、欲しているのだろうか……
「でも、そんな絵を、君は何故、見たいと言ったんだ？」
私の言葉に興味を持ったのか、普段無口なサクライくんが、初めて私に質問をした。
「文化祭、クラスで君とも少し話したが、虫も殺さぬ女の子の印象の君が、そんな怒りのこもった絵を見たい、と言った君の真意が解せないな」
「……」
虫も殺さぬ女の子、か……
「――きっと、私は、この絵の激しさに、惹かれたんだと思う」
「え？」
――それから私は、彼の前で、みっともない話を一人、話し続けた。
中学時代からのこと。自分では何も成していないのに、周りからちやほやされてしまい、甘やかされてしまう、そんな自分を変えよう

と、高校では頑張ろうと息巻いていたこと。でも、高校に入っても、何も自分では変えることができなかったこと……

そして、そんな中、この文化祭を通じて、自分の能力でどんどん道を切り開いていくサクライくんに、憧憬の念を持ったことも、正直に話した。

「――随分持ち上げられたな」

それを聞いてサクライくんは、絵筆を走らせながら、自嘲を浮かべていた。

「君は僕にテストで勝ったんだ。そんなに僕に謙ることはないと思うが」

「ううん、私はただ、テストでいい点を取っただけ――実際の私は、机上の空論を振り回すだけの、何も出来ない人間だよ。みんな私を学年トップだなんていうけど、純然たる力って意味では、サクライくんの方がずっと上だと思う……」

「力、ねぇ……」

その単語に、彼はまた酷薄な自嘲を浮かべた。

この時の私は、本当に彼に対して無神経だったんだ。彼がその力のなさ故に、この時ももがいていたことを知らずに、そんなことを軽々に口にして。

だけど――そんな時でも彼は私に対して、辛そうな素振りや八つ当たりをする気配さえ、まるで見せなかった。

それどころか――

「話をずっと拝聴していたが――マツオカ、君は一体、自分をどう評価している？　自分をどの程度に定めれば、満足する？」

「え……」

彼は変わらず、一定のリズムで、絵筆を走らせる。

「僕は中学まで、野球をやっていた。僕は人生ってのは、野球の打席に少し似ていると思っている。つまり、人生も１０割打者なんてのはありえない。３割４割、その程度人生の局面でしっかり打ち返せれば上々じゃないのか。それに、ホームランでいいのか、ヒット

でいいのか、チームプレーに徹するのか、そういう打席の考え方もある。それなのにマツオカ、君の話を訊いていると、君は何だか、１０割打者を本気で狙っているような言い分に聞こえるんだが」

「……」

サクライくんの言葉で、私は的確に急所を抉られる。

そうだ――まさにそのとおり。私は本当に、野球で言う１０割打者を狙っていた、地に足のついていない考え方をしていた。

「実際の野球でも、何でも打ち返さなくちゃ、と思って、ストライクゾーンを広げてしまって、闇雲にボールに手を出して、フォームを崩す奴がいる――君も今、何とか自分を変えたいと息巻いて、肩の力が入って、打席でバットを闇雲に振って空振りしたり、いい球が来ても、見送っちゃったりしているんじゃないのか？」

「あ――そんな感じかも……」

私は思わず納得する。

人生は、野球の打席のようなもの――か。確かに、そう考えると、私、本当に馬鹿なことをしていたのかもしれない。自分にはまだ弱点が沢山あるって知っていながら、何でもかんでも打ち返さなくっちゃって、肩に力が入ってしまって……

サクライくんと私が比較されているから、って話を聞いて、私は彼を勝手に意識して、私も彼みたいにならなきゃって、自分のペースを乱して……

「……」

沈黙。

「――マツオカ」

自分の今までの愚行を省みている際に、サクライくんに声をかけられる。

「イチローって、分かるか？」

サクライくんは絵を書きながら、私にそう訊いて来る。

「――野球の？」

「そう、野球の」

サクライくんが頷いた。
「女の子でも、イチローが世界的なバッターだってのは知っているだろ？　正確に言えば、メジャーリーグのタイ記録である１０シーズン連続２００本安打を記録している。２００４年には、２６２本もヒットを打って、１シーズンの最多安打記録を作っているんだ。だが、年間２００安打なんて、イチローにとってはもはやノルマみたいに思われているが、簡単な記録じゃない。イチローだって、年によっては本当にギリギリ達成っていう時もあるんだ」
「……」
「そこで、僕からひとつ、マツオカにクイズを出そう」
「え？」
「イチローは、何故毎年２００本もヒットを打てたんだと思う？」
「……」
私は、いきなり振られたその質問を、もう一度頭で整理する。
イチローが、何故すごいか、という抽象的な質問じゃない。何故それだけヒットを打てたか――単純に数字の問題だ。この数字を達成できた要素を挙げろということであれば、きっと具体的な回答が可能なはず。
「――イチローが、すごい野球が上手いから、ってこと、じゃないよね」
私はクイズを台無しにする、あまりに簡潔な回答を披露した。
「それは前提条件」
サクライくんは言った。
「確かにイチローの技術ってのが一番の要素だけど、１０年連続で年間２００本もヒットを打つのにもうひとつ重要なことがあるんだよ。これは野球を知らなくても、単純な数字の問題で、分かることだから、考えてみな」
「……」
どうしてこんなことを訊くのだろうか。
でも、きっとサクライくんのことだから、何か意味のあることに

違いない。
「――ヒントは？」
しかし私は野球にはあまり詳しくないため、ヒントを所望する。
「ヒントか――」
そう言われ、サクライくんは、何をヒントに出すか、しばらく考える。
「イチローってバッターは、ヒットが多い分、三振と四球が他の選手と比べてかなり少ないんだ。それがヒント」
「え？　それだけ？」
「そう、それだけ。もうこの時点で答えを言ったのも同然くらいの大ヒントだ」
「……」

Another story ～ 2－16

私の家では、最近小学3年生になった弟のシュンが、小学校の野球チームに入ったことで、家でプロ野球を見たりすることが多くなった。私も夕食の後、見たことがあるので、当時の私は、サッカーよりも野球の方が何となくの知識があった。

とは言っても、そんな高度なことは分からない――でも、すぐに分からない、と投げ出すような人、サクライくんは嫌いそうだし……

ヒントを参考に、まずは自分だけで考えを巡らせてみる。サクライくんは絵の続きを描きながら、それを待っていた。

「えっと――三振が少ない、ってことは……ボールをバットに当てるのが上手い、ってことだよね」

私は自信なく呟いた。

「その通り」

だけどサクライくんは、その回答に、絵を描きながら頷いた。

「じゃあ、その、当てるのが上手い、ってことは、どういうことだ？」

次の質問が飛んでくる。

「……」

――これなら、中学でテニスをやっていた私なら、分かるかもしれない。

「えっと――目がいい？」

「その通り」

サクライくんは言った。

「当てるのが上手い人は、動体視力がいい――それはつまり選球眼がいいってことだ。ということは、普通なら三振が少ない打者っていうのは、四球が多いはずなんだ。イチローのバットコントロールなら、くさい球をカットしてファールにも出来るんだから、尚更だ。だが、イチローは四球が少ない――さて、このデータから導き出さ

れる答えは？」
　再び次の問い。
「……」
　四球を選べる実力のある打者が、どうして四球が少ないか……
　――あ、そうか、四球だけじゃなく、イチローは三振も少ない、ってことは……
「イチローは、ツーストライクかスリーボールになる頃には、大体もう打っちゃってるから？」
「ご名答」
　サクライくんは、初めて絵を描きながら、私の顔を見た。
「さすがに学年トップだな。野球に詳しくなくても、理論の構成力がある」
「そんな……」
　サクライくんに褒められると、ちょっと照れる……
　数日前、クラスでオムライスの練習をした時に、私が作れるようになったオムライスを食べた時も、サクライくんは褒めてくれた。『美味いな』の一言だけだったけれど、普段無骨な人が、ほんのわずかでも優しい言葉をくれると嬉しいものだ。
「つまりそういうことだ。イチローは相当な早打ち選手なんだ。野球を知らない人から見れば、イチローはフォームもカッコいいし、落ち着いて綺麗にヒットを打つから、静の印象があるだろうけど、実際のイチローは、ストライクが来たら殆ど何でも振りに来る、悪い言い方をすれば、ダボハゼみたいな動きすぎの選手だ。だから三振か四球かってカウントになる前に、打席が終わっちまう」
「そうなんだ。私もイチローって、もっと腰をすえてじっくり打つ選手かと思っていたな」
　確かに、ちょっと意外だった。
「でも、何でそんなに早く打つんだろう……」
　私は沸き上がる疑問を呟いた。
「それが２００本安打の肝なんだよ」

サクライくんは再び絵筆を走らせる。
「年間２００本ヒットを打つのに、一番重要な要素は何だと思う？」
再び質問をされる。
「……」
再び考える私。
「うーん……技術、っていうのは、その前提だよね……てことは、何だろう……」
「簡単なことさ。ヒットを打てるチャンスの回数が如何に多いか、だよ。言い換えれば、打席が一回でも多く回ること」
「あ……そうか」
あまりに単純な話に、私は一瞬がっくりする。
「３回に１度打てれば一流って言われるプロ野球で、年間２００本ヒット打つには、そのレベルにいるイチローでも単純計算で６００打席いることになる。だから２００本年間に打つ選手は、大体が１試合で一番打席が回りやすい一番打者だ。イチローも一番打者だし」
「……」
「だが、これはあまり知られていないんだが、イチローはメジャーに行ってから、怪我で離脱したシーズンを除いては、全てのシーズンで最多打数を記録している」
「え？　全部？」
「そう、全部だ」
サクライくんは私の顔を見ずに頷いた。
「これは偶然の数字じゃない。イチローが一番打者でも、他のチームにも一番打者はいるんだから、イチローだけ打席が特別多く回るわけじゃないからな。なのにそういう打者を押しのけて、毎年最多打数を記録する……その答えが、さっき君が解いた、イチローの早打ちの秘密さ」
「――あ」
私の中で、さっきまでの流れが一本につながる。
「イチローは、四球を捨ててでも、打席を増やすために、早打ちを

している――」
「そういうことだ」
「……」
じっくりボールを見ていれば、四球で歩けたかもしれない。だけど、その分打席――ヒットを打つチャンスが一つ減る。イチローの早打ちは、自分が定めた２００本安打っていうノルマ達成のために、意図的に打席を増やすための手段……
「イチローはノースリーからでもバットを振るし、四球は、自分が打てるボールがこなかったら、仕方なくもらう、って感覚でいる。それでイチローの打席は、年間５０以上は確実に増える。もしイチローが全部の打席、じっくりボールを見るような打者なら、四球も増えていただろうから、その分打数も減る――１０年も連続して２００本安打は打てなかっただろうな。毎年最多打数を記録するってことは、それだけイチローが２００本安打にこだわっている証拠さ」
「……」
「イチローは確かにすごい打者だけど、１０年連続２００本安打は、技術だけじゃ出来ない。技術プラス、イチローがその記録達成の目的に徹しきったから出来た芸当さ」
サクライくんがそうまとめた。
「……」
才能や、技術だけで目的を達成できるほど、甘くはない――あのイチローでさえ、目的のために自分からチャンスを増やそうと頑張っている。
今までそういうことを考えたことはなかった。
それを自分に置き換えてみると――私は今まで、そういう強い意思を持って、何か行動が出来ていただろうか。
「普通一番打者は、どんな形でも塁に出るのが仕事だが、恐らくイチローは、打席に入ったら、もうヒットを打つことしか考えてない。じゃなかったら、イチローの記録した数字は出ない。めちゃくちゃ打ち気に走っていて、それが目的のためだって自信があるから、迷

いなくバットが出る。その自信が技術と合わさって、ヒットが出るのさ」

「……」

目的のためだという自信……

「マツオカ」

不意にサクライくんが、私を読んだ。

「君の話を聞いていて、思ったんだが、君の考え方って、いわゆる野球で言う、ツースリーに追い込まれたバッターの心境と、ちょっと似てるんだよな」

「ツースリー……」

「ああ、普通ツーストライクまで追い込まれたら、バッターは次の球、ちょっとくさいコースでも、ストライクゾーンに来たら何でも振らなきゃ、って、自分の狙うコースを広く取る。来た球を何でも打ち返さなきゃ、っていう、今の君の心境に似てないか？」

「――そうかも」

「だが、追い込まれたバッターが、スリーボールまで粘ってツースリーまで来たとする。こうなるとバッターは、どうしたって四球がもらえるかも、って期待するんだ。そうすると並のバッターは、バットを振るって意識が半減して、大いに迷う。待ってピッチャーがボールを投げてくれれば、自分は塁に出られるからな。それをちょっとでも期待したバッターは、まずバットが振れない。ヒットが打てない。いい球が来ても金縛りにあって見逃しちまうんだ」

「……」

サクライくんの言葉が、自分のことを言われているようで、胸が少し痛い。

私もそうだ。高校にはいって、自分のことや周りのこと、色々なことに悩み、迷った。その結果、うじうじと悩んでばかりで、肝心なときに金縛り――何も出来ない状態が続いた。バットが振れなかった。

「――でも、イチローならその場面でも、バットが振れる……」

私はサクライくんの次に言いたいことを推察する。
「その通りだ。イチローは一球一球、何時でも打つ意識を忘れない。だからバットが思い切り振れる。ツースリーどころか、ノースリーでも。バットは思い切りよく振れないと、ボールは前に飛んでくれないからな。ヒットを打つ上で、迷いなくバットを振るってのは、一番重要なんだよ。イチローは多分、そういう迷いに縛られたくないから、はじめから四球を欲しがらないんだろうな」
「――改めて、イチローってすごいバッターだって、分かった気がするわ」
「だろう？　もちろんここまで打つ気満々だと、普通それが力みになって、ボール球とかに手を出しやすくなるはずなんだけどな。イチローがそうならないのは、もうイチローは、そうして打つ気満々の精神状態が正常になるように、精神コントロールを完璧にやっているからなんだろうな。イチローは技術も凄いけど、打席の中での精神コントロールが、それに輪をかけて凄いと僕は思う」
「……」
とても面白い話だと思った。迷いを抱える私にとって、そういう一流の人間の取り組む姿勢というのを、こうして詳細に訊けるというのは、実にためになる。
「マツオカも、今の打法を続けるのであれば、まずは迷わずバットを振ることだ。それで、自分からもヒットを打つチャンスを掴みにいくことだな。それが難しいなら、今の打法を変えた方がいい。何でも打つなんて、そうそう出来るものじゃないし、狙い球をもうちょっと限定するのもいいんじゃないか？」
「狙い球……」
私はその言葉を反芻する。
「ああ、少なくとも今の君は、まだ自分の打席でのあり方がまだ出来上がっていない。別に君がイチローみたいに早打ちになる必要もないし、まだ１５なんだ。全打席ヒットを打つ必要もないだろう。今は自分の打法を作ることに専念した方がいいと思うが」

「自分の……」
——それは、自分のあり方。今自分が何をしたいか、今後どうしたいか……
「——あの」
私は絵筆を走らせるサクライくんに、おずおずと声をかける。
「ありがとう——話を訊いてくれて。アドバイスまでもらっちゃって」
「——別に、コーヒーの礼だ」
サクライくんは、自分の傍らに置かれている、私がさっき差し入れた缶コーヒーに一瞬目を落とす。
「僕は物乞いじゃない。金は払えないが、せめてその分の対価は払うのが、僕の主義だからな」
「……」
「１２０円分くらいのアドバイスにはなったか？」
サクライくんは絵筆をパレットに置き、私の方を見た。
「……」
その絵を見て、私ははっとする。
彼の目——徹夜で疲れているだろうに、目の奥で、種火が灯っている。まるで、この地球が出来上がってすぐ——遠い昔、この星が激しく燃えていた時代の名残を残すような、遠い、だけど激しい炎が。
この文化祭の間——彼の行動の隙間に感じていた、その激しさの正体を、この迷いや淀みのない、激しい目の光に見る。
「——あの、迷惑ついでに、もうひとつ訊いていいかな？」
私は無礼を承知で、サクライくんにもう一度問いただしていた。
「サクライくんは——イチローを目指してるの？」
私はそう訊いた。彼の目を見て、彼も思い返せば、バットを迷いなく振ることを常に心がけているような、まっすぐな行動をいつだってとっていたと思えたから。
「おいおい、世界最高峰のバッターと、ただの中学上がりのガキが、

同列に語られちゃイチローに失礼だぜ」
だけどサクライくんは、それを否定した。
「だが、僕にとっての理想がイチローだってのは間違いない。僕も相手任せで塁に出してもらうより、自分の力で道を切り開きたいからな。今はそれに近づけるように、とにかく自分なりに打数を増やして経験地を上げながら、常にバットを振る意識を自分に植え付けようと訓練してるってだけさ」
「……」
打数を増やす――それもその人の打席の考え方のひとつ、か。
この人も、まだまだ自分の打法を構築している最中なんだ。自分のあり方を構築したいと思っていた私と同じ――ただ、その貪欲さが、私とは比べ物にならないだけ。
――そうしているうちに、サクライくんがさっきまで筆を入れていた、黒い角を生やした悪魔が完成していた。サクライくんは最後の一塗りを入れると、絵筆を水の張ったバケツに突っ込んで、ふう、と息をついて、立ち上がった。
「日が出てきたな」
そう言って、私の横で、東の空を見た。私もその声に、顔を上げる。
地上5メートルほどの高さの足場から見る東の空――民家の屋根の間から、少しオレンジがかった朝日が頭だけ少し顔を出し、東の空の低い部分だけを、淡く輝かせていた。その傍らには、金星が輝いていて、まるで真珠のようにはっきりと見えた。
「……」
こんな高いところから見る朝日はまた格別のものがあって、初日の出とはまた違う感動があった。
同時に、今までうじうじと悩んでいた自分の懊悩に、隙間からこの朝日のような、淡い光を少し当ててもらえたように私は思い、そこで思い切り、胸に息を吸い込むと、ふっと心が少し軽く、自由になれたような気がした。

「――さあ、眠くなる長話は終わりだ」
私が朝日を眺めている間に、サクライくんはまた足場にしゃがみこんで、パレットで新しい色を調合し始めた。
「長い話を訊いて、おねむにもなっただろうし、もう不審者も出ないだろう。早く帰ってもう一眠りするんだな」
そう私につっけんどんに言った。
「……」
もう缶コーヒー１２０円分の説教は終わったということなのだろう。私も早く帰って、家族が起き出す前にベッドに戻っていないと、心配をかけてしまう。
足場から、学校の正門の脇に立っている時計を見ると、午前４時を回ったところだ。やはり夏至の近い時期の日の出は早い。
「――あの、ありがとう。サクライくん」
「……」
「本当に、ありがとう……」
私はちゃんと気持ちを伝えたくて、二度もお礼を言ってしまう。
「気をつけて帰れ」
サクライくんは、それでもつっけんどんに、私を見ないまま、それだけ言うだけだった。
「――うん。絵、頑張ってね」
私もそれだけ言って、足場を下り、校門の脇に止めてあった自分の自転車に乗り、家路へと漕ぎ始めた。
「――ふふ」
――自転車を漕ぎながら、私はちょっぴり眠かったけれど、それ以上にこの短い時間の余韻に浸っていた。
――ちょっと眠いけれど、家に帰っても、何だか眠れそうにない。サクライくんがさっき教えてくれた、自分の打法の構築――自分が何を思い、何を望むか、さっきの話を忘れないうちに、しっかり考えてみたいと思ったからだ。
そう思うと、私は早朝４時の、誰もいない道を自転車で、全速力

で疾走していた。

Another story ～ 2－16（後書き）

この回は野球に興味ない人、イチローをよく知らない人には分かりづらい話ですいません。イチローの打撃考察も、作者の独断と偏見なのですいません。一応データ的には間違ってないはずなんですけど。

ちなみに作者は以前イチローの話で、盗塁についての心得を聞いた時に、感銘を受けたことがあります。盗塁をするにあたって、イチローはリードをあまり取らないっていうのが成功の秘訣なんだとか。リードを長く取れば、次の塁の距離が縮まって一見有利だけど、けん制で戻る方にも神経を集中しなきゃいけない。そうするとどうしてもスタートが遅れやすくなるから、確実に戻れる距離のリードで、スタートを素早く切れる方が，無理にリードを取るより盗塁が成功するって考えを語ってて。

イチローっていう人は、本当にひとつのことに徹しきっているんだなぁ、と感心したことがあります。盗塁も、塁に戻ることを考えていたら、成功しないっていうのは、イチローのすべての行動に通づるものがあると思ったのですよ。

Another story ～ 2－17

「シオリ、またご指名だよー」
私はホール担当の女の子から、手書きの伝票を受け取る。私の前には既に5枚の伝票が並んでいて、私は菜ばしで、ひたすらフライパンの卵をかき混ぜている。
文化祭、1年E組の出し物であるオムライス屋「イエロークラウド」は大盛況で、開門からずっと20分以上待ちの長蛇の列を作った。
お客さんの中には、勝手にオムライスを作る女の子を指名する人もいて、その指名が何故か私に集中したのだった。
「むー……」
ケチャップライスは他の女の子が作ってくれているし、卵も他の娘がかき混ぜてくれているから、私はただオムレツを作るだけだけど、もう既に私は今日だけで、オムレツを100食以上作っている。ガスコンロの火は熱いし、腕は鉛みたいに重い。私は誰にも聞こえないように、苦悶の声を上げた。
「シオリ、大丈夫？」
隣のガスコンロで同じくフライパンと格闘するアオイが、私を慮った。クラスでも、サクライくん直伝の卵を焼けるようになったのは、私やアオイなど、女子の半分程度にしかならなかったから、卵を焼ける人は、時間ごとに交代交代で何とか持ちこたえていた。
「でも、凄い盛況だよね」
「うん、これ、原価もかかってないし、最優秀団体、もうもらったも同然じゃない？」
「ホント、シオリがいるだけで、バカな男、入れ食い状態だし」
クラスのみんなも、もう既にうちのクラスが最優秀団体に間違いないと確信していた。文化祭初日に、本格的なオムライスという評判が校内にあっという間に広がり、当初の二日分の材料を1日で使

ってしまったほどの盛況振りだったのだから。
「――はい、出来上がり」
私は型で盛ったケチャップライスの上に、自作のオムレツを乗せて、ホールの娘に渡した。ホールの女の子が客席の、４人組の他校の男子高校生にそれを出すと、そのお客様は本当に嬉しそうにはしゃいでいた。
「――でも、シオリと同じくらい、売り上げに貢献してるのは、やっぱりあれだよね……」
そう言ったアオイが、教室を一瞥する。
「――いらっしゃいませ、お嬢様」
「紅茶はハーブティー、アールグレイ、ダージリン、ミルクティー、それぞれホット、アイス両方ご用意できますが」
「……」
アオイの視線の先には、執事服を着て、女性相手に甲斐甲斐しく接客をするヒラヤマくんとエンドウくん――
そして――
ヒラヒラフリフリの可愛い女物の服を着て、化粧まで施された、見た目も見目麗しくなった、サクライくんの姿があった。
「こっち向いてー！」
「一緒に写真撮ってー！」
当初オムライスは、どちらかといえば男性向けの商品ということだったのだけれど、二人の執事服と、学校一クールなサクライくんの女装は、学校中の女子の話題を掻っ攫い、全校の女子をうちのクラスに殺到させた。さっきから３人とも、お客様と何枚も写真を撮っている。
サクライくんも、当初は女装を嫌がっていたのだけれど、クラスの売上金の３割を貰うという条件で、女装を承諾した。そうなると、普段クールなサクライくんは、女子の玩具になることは必定で、サクライくんはヒラヤマくんとエンドウくんに、椅子に括り付けられ、散々沸き立つ女子にあられもないことをやらされ、嫌がっているの

に化粧まで施されたのだった。
「――まあ、あの女装は、可愛すぎるわよね……」
「実際の女の子より可愛いっていうのは、どうなの？」
キッチンの陰で、クラスの女子が噂するほど、サクライくんの女装の完成度は高く――というより、言わなければ男だとは分からないほどのできばえだった。
「サガラさん、オムライス、もう2丁、お願い」
エンドウくんが注文を聞いて、キッチンに伝えに戻ってくる。
「――オムライス、3丁」
そしてその後、接客をしてきたサクライくんもキッチンの方へやってくる。
「何だ何だ、ホタル姫、テンション低いじゃないか」
エンドウくんは、不機嫌そうなサクライくんを見て、面白そうにからかう。サクライくんの名前は、漢字で書くと「蛍介」なので、エンドウくんが「ホタル姫」と呼んで以来、クラスの女子も、お客様の前では、ホタルちゃんと呼ぶようになっていた。
「せっかくの美人が台無しだぜ、ホタル姫」
「五月蝿い」
サクライくんの不機嫌そうな声が漏れる。
「金を貰う以上、いい加減な仕事はしないってのが、お前のポリシーじゃなかったか？」
「……」
サクライくんが沈黙している折、教室にまた新しいお客様が入ってくる。
「いらっしゃいませ！」
サクライくんは、さっきの不機嫌な顔とは打って変わって、女の子のような可愛い声を作って、満面の営業スマイルでお客様を出迎えに行くのだった。
「お！　君可愛いねぇ。文化祭終わったら、俺達と遊びに行かない？」

しかし、そんな可愛いサクライくんは、男性客にナンパされたりしている。
「ちょ！　ちょっと！　サクライくんがナンパされてる！」
女子達も何故か色めき立つ。どうやらうちは、そういう恋愛が好きな女子が多いようだった。
「くくく……」
普段のサクライくんではまず見られないだろう、その可愛らしい素振りに、エンドウくんはご満悦で、笑いを噛み締めている。
「――オムライス、２丁」
そして再びキッチンにオーダーを伝えに来たサクライくんは、普段の彼に戻っていた。
「ははは、よかったじゃないか。可愛いって褒めてもらえて」
エンドウくんはサクライくんをからかった。
「ま、お前のその女装なら、男が惚れても不思議はない。俺もドキドキしそうだからな」
「……」
サクライくんはそんなエンドウくんを、空ろに睨んでいた。
――だけど。
サクライくんはおもむろに、エンドウくんの執事服のネクタイを掴んで、エンドウくんの体を軽く自分に引き寄せる。
「――嬉しい――ずっと好きだったお前に、そんなこと、言ってもらえて……」
吐息のような、甘く優しい声で、サクライくんはエンドウくんに軽く擦り寄る。
「え……」
エンドウくんは、一気に体を硬直させる――
「いいぜ――僕、お前となら……気持ちいいこと、いっぱいしてやるぜ……」
「お、おい……」
サクライくんの妙な色気に、エンドウくんも戸惑い始める。

既にお客さんも、そんな二人を、興奮した面持ちで見ている。
サクライくんの指が、エンドウくんの頬を艶かしくなぞり、顎に届くと、サクライくんは潤んだ目で、エンドウくんの目をじっと見つめる。
「――浮気なんかしたら、嫌なんだから……だから……お前が誰かのものになるくらいなら、ここで……」
そう涙声でつぶやくと、サクライくんは、ゆっくりとエンドウくんの唇に向けて、自分の顔を引き寄せて……
「や、やめ……」
エンドウくんの声が震える。
「……」
私の心臓も早鐘で鳴ってしまう。目を背けたいのに、何故か目を離せない……持っている菜ばしがぶるぶる震えてしまう……
「あ、サクライくーん」
しかし、そのナイスタイミングで、文化祭実行委員の先輩が、サクライくんを呼びに教室に入ってくる。
「……ん？」
サクライくんはエンドウくんのネクタイから手を離して、そちらを振り向く。
「――あれ？」
その先輩達は、もうちょっとその続きを見たかったのに、水を差したことで、お客様全員から睨まれているのだった。
「――すぐ行きます。ちょっと外で待っていてください」
サクライくんがそう言うと、先輩達はその教室の異様な雰囲気を察して、そそくさと教室を出て行った。
「――邪魔が入っちまったな」
先輩を見送ると、再びサクライくんは、エンドウくんの方に目を向ける。
「はあ……はあ……」
エンドウくんは憔悴しきっている。

「次、僕の女装をからかったら、女装した僕の姿しか愛せなくなるように開発するぞ」
サクライくんは、普段の静かな口調に戻って、エンドウくんを指差した。
「や、もうやめてくれ」
エンドウくんはもう、本気でぶるぶる震えていた。
「安心しろ、ローションくらいは使ってやるから」
「やめんか！」
「ま、続きは文化祭が終わってから……」
そう言って、サクライくんは教室の出口に向かい、教室を出る前に、一度エンドウくんの方を振り向く。
「今夜は寝かさないぞっ」
サクライくんは、本当の女の子のような可愛い弾んだ声で、満面の笑みを残して、教室を出て行くのだった。
「キャー！」
サクライくんが出て行くと、教室はクラスメイトもお客様も入り混じって、悲鳴を上げたのだった。
「さ、最後のサクライくん、超可愛かったんだけど！」
「わ、私、二人が本当にキスとかするのかと……」
キッチン内もお祭り騒ぎだ。
「……」
「し、シオリ！　フライパン！」
隣にいるアオイが私に向かって叫ぶ。
「え……」
私はフライパンに目を落とすと、私がさっきまで作っていたオムレツは、二人に見入っている間に焦げてしまい、焦げ臭い臭いを撒き散らして、煙を吹き始めていた。
「……」
――どうかしてるよ、私。あんなのに、ドキドキしちゃうなんて……

でも――サクライくんって、やっぱり何だか不思議な人。
何だか、いつだって目で追っちゃうんだよね。私とは違って、破天荒で。
「ははは、ジュン、危ういところだったなぁ」
ヒラヤマくんがやってきて、エンドウくんの肩をバンバン叩く。
「マツオカさんも、卵焦がすくらい随分ご執心だったようだけど。ひょっとして、ああいうの、趣味？」
「え？　わ、私は……」
私は被りを振る。
「あ、あのさ、サクライくんが言ってた、僕しか愛せないように、開発してやる、って……どういう意味なの？」
私は話をごまかすように、それをクラスメイトに訊いていた。
「……」
それを訊いた時、明らかに教室の空気が凍った。
「――知らなくていい。マツオカさんは生涯知らなくていい」
ヒラヤマくんがしみじみそう言った。

Another story ～ 2－18

「お姉ちゃん」
２日目の午後に、シズカとシュンがうちの教室にやってくると、教室のクラスメイトが二人に集まった。
「へぇ、マツオカさんの妹なんだ。やっぱ可愛いなぁ」
「弟くんはイケメンだねぇ。ジャニーズ系？」
「えへへ、ありがとうございます」
そう言うと、シズカは私の方にやってきて、私に耳打ちする。
「ねえねえ！　お姉ちゃんのクラス、あんなイケメンがいるんだ！　しかも二人も！」
シズカは教室に入って来た時から、執事服姿のエンドウくんとヒラヤマくんに目が行っていた。
「まったく……シーちゃん、恥ずかしいなぁ」
さすがに二人に、私の妹がそう言っていたなんて訊かれたら、いらぬ誤解を招きそうだ。私はシーちゃんに、きつく口止めする。
「そういえば、お姉ちゃんのクラスに、女の子より可愛い男の人が、女装して接客してるって、ここに来る前。話題になってたけど、その人はいないの？」
シズカはクラスを見渡した。
「ああ――その人は文化祭運営で今は出張っちゃってるの」
「なんだぁ、残念。見てみたかったなぁ」
まさかその人が、２年後私の彼氏になって、我が家に来るなんて、私もシズカもまだ想像していなかったな……
その時、教室の黒板の上に設置されている旧式のスピーカーから、ピンポンパンポンと音が鳴る。
『本日、これより１時間後の１６時より、体育館にて、ミス埼玉高校コンテストが行われます。参加者の方は、２０分前に体育館に集合してください』

「あ、もうそんな時間か――シオリ、出番ね」
教室にいたミズキが私を見る。
「うちのクラスの代表だから、精一杯おめかししないと！　シオリ、来て！」
「え……」
私は女子に手を引かれて、教室の、暗幕で遮った場所に連れて行かれる。そこでは接客に出ない男子が、ひたすら玉葱をみじん切りにしたり、女子がすぐにオムライスを作れるような、材料の仕込をしていた。
私はそこで、女子からメイクを施され、サクライくんが着ていたような、フリフリのドレスを着せられ、髪を思い切り纏め上げられ、大盛りにされ、バレッタやチョーカーなど、アクセサリーをつけさせられた。
クラスの女子は，あまり着飾らない私をプロデュースすることがずっと楽しみだったようで、メイクも数人がかりで念入りに施してくれた。
「うお……」
暗幕から出てきた私を見て、女慣れしているヒラヤマくんさえ、息を呑んだ。
「シオリ、カワイイ……お姫様みたい」
「うん――これで優勝できなくちゃ、嘘だわ」
「――あんまり、じろじろ見ないで。恥ずかしいから……」
私は既に赤面してしまう。これから沢山の人の前に、この格好で出なければいけないというのに……小さい頃から、ピアノやバイオリンのコンサートでも、ドレスのような服を着て発表会に出ることはあったのだけれど、この服は胸元が開いていて、肌の露出も多くて……
「で、ミスコンは自己紹介の後、何か特技を披露したりもするんでしょ？　シオリ、何するの？」
「あ……一応、バイオリンを持ってきたんだけど」

私は自分の荷物の横に置いてある、バイオリンケースを手に取った。
「へえ！　シオリ、バイオリン弾けるんだ！」
「楽しみだなぁ。絶対みんなで見に行くからね」
「……」
見に来られると、恥ずかしいから、来なくていいとも言えず、私はバイオリンケースを持って、ドレス姿を隠すため、上に薄手のカーディガンを羽織って、一人教室を出た。
「はぁ……」
溜息が出る。
ミスコンに推薦で出場が決まった時、私は自分の意思でもないのに、その時から家でバイオリンの練習をしていた。自分が望むべき舞台でもないのに、そのために練習をするという自分の行動の矛盾に自嘲を浮かべながら。
私は何をやっているのかな、と思う。
そう思うと、一昨日の朝、サクライくんに言われた言葉を思い出す。
「今の自分が不満なら、狙い球を変えてみるなりしたらどうだ？」
その言葉を貰って以来、私は今も自分の人生の打席のあり方を模索している。
だけどまだ、その答えは出ていない――
「マツオカさん」
そんな懊悩を抱える私は、後ろから男の人に声をかけられる。
振り向くとそこには、執事服を着た、ヒラヤマくんとエンドウくんが立っていた。
「体育館まで、その格好で一人で行ったら、男に声をかけられかねないから、よければ俺達がエスコートするけど」
ヒラヤマくんが言った。
「お姫様のナイトを務める柄じゃないけど、弾除けくらいは頑張っちゃうぜ」

エンドウくんが私の緊張をほぐすように、歯をむき出して笑った。
「――ありがとう」
実はこの格好で一人、文化祭の人通りの多い廊下を歩くのは、ちょっと嫌だったのだ。男子が苦手な私でも、そんな気を遣ってくれた二人には感謝したかった。
私はヒラヤマくんに前を、エンドウくんに横を守ってもらう形で、壁に沿って歩いた。
「あ、あの、ヒラヤマくん。エンドウくんから訊いたんだけど、昨日はありがとう――」
私はヒラヤマくんとちゃんと話すのは、これが初めてだったけれど、昨日、私が買い出しに行く際に、男性が苦手な私を気遣って、エンドウくんをつけてくれたヒラヤマくんの機転に感謝を述べた。
「いいさ、俺としても、つまらん男と君を行かせるのは面白くないしな」
ヒラヤマくんは、気障な台詞をさらりと言った。
「……」
クラスでヒラヤマくんを初めて見た時は、背が高くて、クールで大人っぽい人だという印象を持った。だけど、エンドウくんといつも一緒にいるヒラヤマくんは、何だか子供のように無邪気で、二人でいつもサクライくんをからかったり、馬鹿な話をしたりしていて、どんどんそのイメージが崩れていった。
とはいっても、ヒラヤマくんはそんな時、とても楽しそうに笑っているのが、私の目にはとても印象的で――多分他の女子もそうなのだと思う。だからこの二人とサクライくんの3人で馬鹿なことをやっている姿を「3バカトリオ」なんて名づけて、それを遠くから眺めているのだ。
「で、どう？　心の準備は出来た？」
横にいるエンドウくんが、私に訊いた。
「このミスコン終わったら、後夜祭でダンスがあるだろ。きっとマツオカさんには、申し込む相手が殺到だぜ」

「……」
「その後も、告白殺到――かな？」
「……」
階段を下りながら、私は視線を落とす。
そう。このままじゃ、ずっとこのままだ。ずっと流され続けて――
「――何だか、二人が羨ましい」
私はそう呟いた。
「エンドウくんもヒラヤマくんも、いつも楽しそうだね」
私は二人の顔を一瞥した。
「楽しいぜぇ」
エンドウくんが弾んだ声で言った。
「こうして馬鹿が出来るのも、モラトリアムの特権だし、高校で、ユータっていう、一緒に馬鹿が出来る同志も見つけたし、ケースケって面白素材も見つけたら、馬鹿はやらにゃ損だぜ。人生を楽しむコツは、どれだけ馬鹿なことを考えられるかだからな」
「……」
人生を楽しむコツ、か……
「マツオカさんも、たまには羽目を外してみたら？　新しい世界が見えるかもよ？」
「……」
下駄箱で靴を履き替え、体育館に移動するため、一度校舎を出ると、サクライくんの造った入場門が目に入った。
完成した絵はとても見事な出来栄えで、初日から今でも、その門の前での記念撮影が跡を絶っていない。今も来場者は、記念撮影のために、カメラを構えながら、いいポイントを探している人がちらほら見受けられる。校舎の窓からあの門を撮影する人も、この二日間、何人も見た。
あの調子じゃ、文化祭に最も貢献した個人賞の受賞も、サクライくんで決まりだろうな――

ミスコンの舞台裏には、同学年、先輩、みんな綺麗な人ばかりは、私はステージの袖裏で、呆然と立ち尽くすばかりだった。

開場が始まると、昨日ここで吹奏楽部がコンサートをしたけれど、その3倍以上のお客さんが一気に体育館を埋め尽くした。

ピアノやバイオリンのコンサートなら、緊張の沈め方もある程度心得ているのだけれど、こういう場では、その緊張の沈め方がまるで役に立たない……こんな肌を露出した服で、人前に立つなんて……

「……」

――サクライくんなら、こんな状況でも、経験値を上げるため、って、平然となれるのかな。イチロー並みの強いメンタルコントロールを持つ彼だ。彼なら……

――って、何でサクライくんのことが、頭に浮かぶの？　自分でも意外――私、今相当テンパってるのかな。

そういえばサクライくん、文化祭のほぼ全ての行事の担当なんだよね。もしかしたら、この中にサクライくんもいるのかな……

私は緞帳の裏から、周りをきょろきょろ窺ったけれど、サクライくんの姿は見えない。

それを確認して、何だか少しだけ緊張が解けた。

――何で？　自分でも分からない。

「それではエントリーナンバー6番、1年E組、マツオカ・シオリさんです」

司会に呼ばれ、私は半ば押し出されるように、ステージの横から、真ん中に向けて歩き出す。

その時、耳を劈くような歓声が、体育館中から湧き上がった。

「マツオカさーん！」「ウォー！」

野太い男子の声が、体育館中に反響する。司会をはじめ、文化祭実行委員は、それを必死になだめた。

そんな異様な雰囲気の中、私はそのステージ上で、バイオリンを手に取り『ニュー・シネマ・パラダイス』を演奏した。時間的にも

丁度いい長さの曲だし、私自身も大好きな曲だから、私が選曲した。
私はもう、この曲は譜面を見なくても弾けるから、なるべく目を閉じていた。普段のコンクールとはまた違って、視線が刺すように私に集まる――そんな視線を見たら、とても私は楽器を弾けなかったから。
大好きな曲なのに、そんなことを考えていたから、あっという間に演奏は終わってしまった。万雷の拍手がそれでも私に向けられる。
「……」
――違う。何もかもが、何か違う。
拍手を受けながら、私はさっきもらったエンドウくんの言葉を思い出していた。
あの人は、いつだって楽しそうだ。
それに対して、私はどうだろう。好きな曲さえも、窮屈に演奏して……
――ミスコンは、私が2位の20倍以上の票数を獲得して、優勝した。私はティアラを贈呈され、頭にそれを被らされ、沢山の祝福を受けながら、まるで私が、着せ替え人形になってしまったかのような錯覚に陥っていた。
「――サクライくん」
誰にも聞こえないように、私はステージの上で、彼の名を呟いた。

「マツオカさん、後夜祭、俺と踊ってくれない？」
「いや、俺と！」
ミスコンが終わると、文化祭は終幕を迎え、後夜祭の準備が、埼玉高校が国から借りている、河川敷のグラウンドで行われていた。キャンプファイアーの木の枠組みが中央を固め、沢山のライトが運び出されている。
私はミスコンが終わってから、一度教室に戻ると、クラスのみんながクラッカーを鳴らして私を祝福してくれた。教室の端にいたエ

ンドウくんは、私に向かって、ただ一人苦笑いを浮かべていたけれど。

それから私は、仲のいいアオイ、ミズキ達と一緒に、後夜祭に参加するため河川敷に降りようとしたのだけれど、教室を一歩出ると、もう既に廊下には、私に早く声をかけようと待っていた男子達が30人近く出待ちしていて、教室を出るなり私に殺到した。

「……うぅ」

エンドウくんに忠告されていたけれど、ここまで凄いことになるとは、私の想像の斜め上を行っていた。

「あ、あの、ちょっと待ってください！　みんな先にグラウンドに行ってください！」

そう言って私は一人、逃げるようにその場を立ち去ってしまった。

その足で私は職員室へと走り、そこで吹奏楽部顧問のタカヤマ先生を探した。

「あ、先生」

私は先生の姿を見つける。

「あら、マツオカさん。ミスコン優勝者がどうしたの？　後夜祭に参加しないの？」

もう既に先生も、私がミスコンで優勝したことを知っていた。

「先生。音楽準備室の鍵を、少し貸してくれませんか？」

「え？」

先生は一瞬首を傾げたけれど、すぐに私の気持ちを察したようだった。

「あぁ――マツオカさん、そういうこと、全然ダメだもんねぇ。男子から逃げて、静かなところでしばらく一人になりたいのね」

先生が私の真意を察してくれて、私はほっとした。音楽準備室なら鍵もあるし、多分誰も来ない。

「でも――準備室は今、先客が一人いるわよ。それでもいい？」

「先客？」

「マツオカさんも知っている子よ。多分今なら、いてもいなくても

大丈夫だと思うけどね」

そう言ってタカヤマ先生は、音楽準備室までついてきてくれて、私のために、鍵を開けてくれた。

音楽準備室は、譜面台や、音楽の授業で使う資料などでごちゃごちゃした、１０条ほどの小さな部屋だった。吹奏楽部の部員も、たまにここに荷物を置いているので、私には割と馴染みの深い場所だ。

その音楽準備室の入り口から見て奥――窓際にひとつある椅子に座って腕組みをしている人影を見つける。

「あ――」

それはサクライくんだった。教室で着ていた、女性の扮装を脱いで、カットソーにジーパンという身軽な格好になって、椅子に深く腰掛け、目を閉じている――

――どうやら眠っているみたいだ。

「３時頃から、もう仕事がないから、誰にも邪魔されない場所を貸してくれ、って、私のところに来たのよ。この子、授業サボって音楽室にピアノとか弾きに来るし、私と結構仲がいいのよ」

「……」

３時――と言うことは、４時にミスコンが始まった頃から、彼はずっとここで寝ていたということか。

授業でいつも寝ているとはいえ、いつもは机に突っ伏しているから、寝顔は見えなかった。彼の寝顔を見るのは、これが初めてのことだった。

「――よっぽど疲れていたのね。たまに様子を見にきていたんだけど、ずっとあのまま、寝息ひとつ立てずに、死んだように寝てるわ」

「……」

「だけど、文化祭で彼、頑張ってたからね。ここ最近、ずっと徹夜だったみたいだし、私もそれ見てたから、静かなここを貸してあげたの。まったく、文化祭で働いてた時や、こうして寝ている彼を見ていると、この子が我が校始まって以来の問題児とは思えないわよね」

「……」

よくこんな時、どんな邪悪な人でも、寝顔だけは無垢だとか、そんなことを言うけれど。

私は知っている。彼の心は少しも汚れてはいないのだ。学校一の問題児だとか、周りが彼を陳腐な言葉で汚しているだけ――

そんな彼の寝姿は、いぎたない箇所は一箇所も見当たらない。疲れ果てて眠る姿は、傷ついた野良猫が、傷が癒えるまで、じっと物陰で息を潜めているような……冬の間、池に住む魚がじっと動かずに、春を待ち続けるような――そんな印象を私に与えた。まるで生きるための本能が、体を癒すことを欲しているような……そんな切実さに溢れているように見えた。眠っている時でさえも、彼の命の鳴動が聞こえてくるような、野生の獣のような雰囲気があった。

――それを見て、私ははっと気づく。

彼の持つ所作の美しさ――食べ物を食べる時も、その若い体がエネルギーを欲しがっていて、その一片たりとも無駄にしないように、時間をかけて、ゆっくりと体に取り込んでいた。そして、その寝姿も……

彼の中には、長年の自己の努力で磨き上げられた、洗練美と、こうして日々を精一杯、命が燃えるように激しく生き続ける、野生美が共存している。それが、彼の佇まいの、えも言えぬ美しさを作り出している――薔薇の優美さ、繊細さ、儚さと、野の花の力強さ、清々しさ、激しさを両方持ち合わせている。

昏々と眠る彼の寝顔を見て、分かった。私が彼に見ていた、美しさの理由が……

彼の中には、いつも四季折々の美しい花が咲いている。

私はずっと前から、彼の中に咲く花を見ていたんだ。

その美しさこそ、私がいつも持ちたかった、理想の美しさだった。

ミスコンでもてはやされるような、うわべだけのものじゃない。

花屋に並ぶ花の、たおやかさを持ちながらも、野に咲く蒲公英のような清々しさ、強さを持って、瑞々しく、萌えるように咲く一輪の

花のように……

「――先生」

私はその時、タカヤマ先生に、一昨日彼から訊いた、彼の言葉を話していた。

Another story ～ 2－18（後書き）

私事なんですが、この小説をもっと色んな人に読んでもらいたいと重い、ランキングに登録してみることにしました。各話の下部にそれ用のチェックがあるので、それをワンクリックするだけでいいみたいです
もしこの話を気に入ってくれた人がいたら、クリックしてやってくださいませ。

Another story ～ 2－19

「――へえ、イチローの打撃理論ね。なかなか面白い話をするのね、彼」

私が先生と話している間に、窓から見える河川敷のグラウンドには、生徒が集まり始め、夏至の近づく夏の長日も落ち始めていた。

「……」

私達が小声で話していても、サクライくんはちっとも起きる気配がない。疲れきった体を癒すために、まるで体のスイッチを全消灯したように、昏々と眠っている。

「この子、学校ではとんでもない問題児扱いされてるけど、話してみるとそんなに悪い子じゃないのよね。そう言うと、若い人は幻想を抱くね、なんて、他の先生には言われちゃうんだけど」

タカヤマ先生は自嘲する。

「私、マツオカさんに、今後彼とあなたは比べられるなんて言ってしまったけれど――マツオカさん自身は、もうサクライくんとそういう競い合いをする気はないみたいね」

「――はい。私はまだ、そういう段階にいませんし。それどころか、私、サクライくんを尊敬してるんです。私にはないものをいっぱい持っていて、」

「ふふ――それ、他の先生が聞いたら間違いなく、考え直せ、って言われるわよ」

「……」

「でも、ふぅーん……」

それを訊くと、先生の綺麗な顔に、小悪魔風の笑みが浮かんだ。

「引っ込み思案のマツオカさんが、そこまで手放しで男子を褒めるなんてねぇ」

「え？」

「ひょっとして、マツオカさん、もうサクライくんのこと、好きに

なっちゃった？」
「ふえっ！？」
私は自分でもびっくりするくらい、変な声が出てしまう。
「そんな驚くことじゃないわよ。マツオカさんくらいの年齢なら、男の子を好きになることなんて、自然なことだもの」
「ち、違います！」
私は思わず否定してしまう。
「えー……ホントに？　ムキになるところが、また怪しいなぁ」
先生の邪推する目。
「……」
――あれ？　よく考えたら、私はサクライくんのことを、どう思っているんだろう……
「あ、あの――確かに、頭がよくて、スポーツが出来て、憧れますけど、別に好きとか、嫌いとかじゃなくて……」
私は、先生の発した「好き」という言葉に、完全に思考を分断されてしまい、しどろもどろのまま、声が出てしまう――
でも、これは本当の気持ちだ。私は、サクライくんのことを、好きとか嫌いとかじゃなくて……
「……」
――あ、そうか。
自分の気持ちと改めて向き合ってみて、ようやく私はひとつの答えに達した。
自分が今、心から望むこと。自分が今、狙いたいもの……
それは、きっと……
「わぁー、マツオカさん、赤くなっちゃって、可愛いー！」
そんな私を見て、先生は歓喜の声を上げる。
「ん……」
しかしその折、私達の脇で眠っていたサクライくんがぴくりと反応する。どうやら先生の歓喜の声で、起きてしまったようだ。
「あら？　ごめんなさい、起こしちゃった？」

先生は彼の方を見る。
「う……そりゃ、あんなでかい声聞けば……」
サクライくんは、眠そうな目をしょぼしょぼさせている。縁側で寝ていた猫みたいで、普段の鋭さがなく、何だか可愛らしい。本人に言ったら怒られそうだけど。
そしてそのまま、私の姿を確認する。
「あれ――何で君が――しかもその変な格好……」
私はまだミスコンに出たままの格好でいる。頭のティアラまでまだついたままだ。
「はぁ……サクライくん、あなた、デリカシーってものがないの？」
先生がそれを訊いて、ため息をついた。
「女の子が綺麗におめかししてるの見て、変な格好はないでしょう」
「……」
サクライくんはまだ目をしょぼしょぼさせている。
「――悪かったな」
サクライくんは素直に自分の非を認め、私にそう言った。
「え？　あ、ああ……」
まさか謝られると思っていなくて、私はびっくりして、返事が出来なかった。
「マツオカさん、今年のミスコンで優勝したのよ。それで男子の誘いが殺到しちゃって、落ち着くまでここに隠れてるの」
先生が私がおめかししている事情を説明した。
「え……ミスコンに出たのか」
「――呆れた……同じクラスなのに、知らなかったの？」
「――ああいうイベント、あんまり興味ないですし」
「こら、そのイベントで優勝した人を前に、そういうこと言わない」
先生がサクライくんを叱った。どうやらサクライくんは、タカヤマ先生のような頭ごなしではない注意をする人には少し弱いみたいだ。それとも、女性にちょっと甘いのかな。
サクライくんの目の焦点が、次第にしっかりしてくると、彼は窓

から外の様子を窺った。そろそろ外のざわめきも、音楽準備室まで聞こえるほどに、後夜祭に向けて、人が集まり始めたようだ。

「サクライくんも、文化祭の個人部門で表彰されることは確実だし、マツオカさんはミスコン制覇――それに、あなた達のクラスのオムライス、本格的だって、相当お客さんを動員したみたいだし、今年の文化祭の賞は、あなた達が総なめかもね」

後夜祭に集まる様子を3人で窓から眺めながら、先生が言った。

窓を見ていると、まだ点火されていないキャンプファイアーの木組みの近くで、クラスメイトと楽しそうに談笑するエンドウくんの姿が見えた。その横では、まだ執事服をしているヒラヤマくんが、沢山の女子に囲まれて、記念撮影をしている。

「……」

私はこの高校に入って、沢山の仲間が出来たように思う。

だけど、サクライくんにとってのエンドウくん達のような、あそこまで息の合った友達というのは、まだいなかった。

エンドウくんの話を聞いていると、憎まれ口を叩きながらも、サクライくんのことが本当に好きで、心から信頼しているのが伝わってきた。そんなエンドウくんの、猜疑心のないまっすぐな目も、私の心を捉えた。

「二人は後夜祭、どうするの？」

先生は私達の顔を見比べる。

「――バイトがあるんで、帰ります」

サクライくんはつっけんどんに言った。

「バイト？　まったく、学校では問題児なのに、外では勤勉なのね」

先生がサクライくんを揶揄した。

「……」

――そっか。サクライくんは、帰っちゃうんだ。多分クラスで打ち上げとかあるのに……うちの一番の功労者のサクライくんが来ないんじゃ、みんながっかりするだろうな。

「そうそうサクライくん、一昨日マツオカさんに、色々アドバイス

をしたんだってね。今マツオカさんから聞いてたの」
先生が再びサクライくんに声をかける。
「――え？　ああ――あれか。別にアドバイスというよりは、与太話をしただけですよ」
サクライくんにとっては、ほんのコーヒー１２０円分程度の話だったのだ。
「そう？　でもマツオカさんは、その言葉に凄く感銘を受けたみたいよ。自分のことを見つめ直す、いいきっかけになったって」
「――そうか」
「……」
――この時、私はサクライくんの横顔を見ながら、自分の思いを再確認する。
――でも、その気持ちをどう言葉にしていいか、分からない……口にすると、酷く抽象的で、曖昧なものになってしまう。
しかも、とても恥ずかしい一言だ。
それを口にするのは、とても恥ずかしい……
「――何を狙い球にするか、決まったのか？」
だけど、そんな私の気持ちを知らないサクライくんは、私の方に、寝起きの目を向ける。
「……」
口ごもる私は、少し前にエンドウくんに言われた言葉を思い出していた。
「馬鹿が出来るのは、モラトリアムの特権だぜ。マツオカさんもたまには馬鹿をやってみたら？　新しい世界が見えるかもよ」
「……」
私はこの言葉に、背中を押されたのか、自分を何とか肯定しようと必死だったのか、分からないけれど……
俄然、この言葉を言った先の世界を、見てみたくなったんだ。
「――決めたよ。狙い球」
私の声は軽く震えた。口に出した私にだけ分かる程度に。

「――そうか」
彼はそう返事しただけだった。私と大して親しくもないのだから、私の狙い球が何なのかまでは、訊く理由もないのだ。
「あ、あの、それで――わ、私、サクライくんから許可が欲しいの」
本当はサクライくんが、私の狙い球を訊いてくれることを期待したのだけれど、訊いてくれなかったので、自分から言ってしまうことにした。
「許可？」
まだサクライくんは、私が何を言うのか、想像も出来ていないだろう。その言葉に、首を傾げる。
「――うん、だって、私が決めた狙い球は――あなただから」
「は？」
それを訊いて、サクライくんは、初めて僅かに動揺を示した。
「――こ、これから私は、あなたを見極めたい！　だ、だから、私は、狙いをあなたに定めたの！」
う――うわぁ――言っちゃった。
で、でも、これが私の、今、本当に望んだ道だ。
サクライくんのことを、好きとか嫌いとか、そんなことは分からないし、今はどうでもいいんだ。
ただ――この人の佇まい――纏う空気の美しさに、私は憧れた。この人の奥底に、とても美しく咲く花を見たんだ。
そんな花を咲かせるサクライくんの清新な空気に、私も乗ってみたい――乗せて欲しい。その空気に乗れれば、鳥のように自由に、空も飛べそうな、そんな気がするから。
そして、いつかは私も、サクライくんのように、心に綺麗な花を咲かせることが出来たら――
他力本願と言われるかも知れないけれど、今の私は、これが精一杯。
それでも私は、この人の中に流れる、洗練美と野生美のもっと奥にある物を知りたい……

きっと私の目指す道は、それを知った先に、見えてくるのではないかと。

そう、思ったから。

「……」

サクライくんは、無言でぽかーんとして、私のことを見ていた。

どういうふうにリアクションを取っていいのか、分からないという感じ。

「……」

あぁ――私、なんてことを言ってしまったんだろう。自分がこんなにおかしなことを言うなんて――間違いなく私の人生で一番はじけた発言だ。今のは。

サクライくんが何も言ってくれないので、私は何だかその沈黙に、泣いてしまいそうになる……

「あっはははははは！」

そんな二人の微妙な空気を、タカヤマ先生の大笑いが払った。

「ま、まさかマツオカさんがそんなことを言うなんてね――お、おっかしい！」

おなかをよじらすように笑う先生。

「……」

改めて、私の言ったことって、そんなにおかしかったかな、と思う……

――そうだよね。自分でもわけわからないもの。

「――そ、それに輪をかけて、あのサクライくんが呆気に取られてるってのがまた面白いわ。あははは！」

そう言って先生は、また笑い始める。

「……」

呆然と立ち尽くす私。

「――なあ」

次第に不安になってくる私を、サクライくんが椅子に座ったまま、じっと見た。

「今のって――宣戦布告？」
サクライくんは、邪気のまったくない、透き通った目を向ける。
「え？」
「いや、僕を見極めるってことは、いずれは僕とタイマン張る気なのかな、って」
「……」
そ、そうか……誰かを狙い球にするってことは、その人をターゲットにするってことだもんね。自分くらいの相手なら、いつでも倒せるくらいになる、ってニュアンスに聞こえても、おかしくないか……
どうしよう――サクライくんに、誤解されてしまった？　私、一方的に喧嘩を売ったみたいになった？
「もう、サクライくんって、本当に他人の気持ちに疎いのね」
そうして二の句に困る私に、先生が助け舟を出してくれた。
「要するに、マツオカさんは、あなたと友達になりたい、ってことよ。もっとあなたの話も聞きたいし、それを通じて自分のことも知っていきたい、ってことでしょ」
「……」
先生のその言葉は、確かに私の思いをほぼ正確に捉えていた。
「サクライくんにとっても、マツオカさんと距離が近くなることは、決して悪いことじゃないと思うわよ。うちの高校じゃ、成績面ではこの娘以外、あなたの相手にならないだろうし。それにあなたも、マツオカさんからは、色々学ぶことがあると思うわよ」
「え……」
サクライくんが私から学ぶこと？　――そんなもの、本当にあるのだろうか。
「……」
サクライくんは、頭を掻きながら、少し思案に耽っていた。
「あの――気分、悪くしたかな？」
私はその沈黙に焦れて、サクライくんにそう訊いていた。ダメな

らダメと、早々に止めを刺してほしかったのだ。
「――いや、ちょっとデジャブがな」
サクライくんはそう呟いた。
「君の言葉に呆気に取られた時、エンドウとヒラヤマが、僕とつるもうって言ってきた時のことを思い出したんだ。あの時も僕はこうしておかしなことで一発かまされて、呆気に取られちまって――」
何だか悔しそうにそう言った。
「ふふ、まさかマツオカさんが、あなたにそんなことを言うとは思わなかった？」
先生がサクライくんに訊いた。
「……」
サクライくんは、沈黙を以って答えた。
一他人を寄せ付けないサクライくんと、あの二人はどうやってつるめるようになったのか、この頃の私は、この3人がどうしてつるむようになったか、そのきっかけをまだ知らなかった。
「マツオカ」
サクライくんが、椅子に座ったまま、私を呼んだ。
「君はもっと思慮深い打席の立ち方をすると思ってたよ。でも――とんだ悪球打ちだな」
「え？」
「僕を狙い球に定めるとか――顔面デッドボールコースを狙う奴があるか？」
サクライくんは、呆れるように少し笑った。
「で、でも、そういうのも、悪くないかな、って。そういうボールに対応できれば、この先どんなことにも動じずにいられそうだし」
私は即そう返した。この時の私は、馬鹿な事を言ったテンションの余韻で、妙にハイになっていた。
「……」
もう一度私に、サクライくんの呆れ顔が向けられる。
「あははは！　マツオカさん、よかったじゃない。サクライくん

も、好きにしたらいい、って」
先生がそんなサクライくんを見て、そう言った。
「え？」「え？」
私とサクライくん、同時に怪訝な声を漏らす。強引に流れで私の望みをサクライくんに承諾させるつもり？
「ふふ――何なら、お互いのことを知るために、二人で後夜祭、踊ってきたらどう？」
「は？」「え！」
再び私達は、先生の面白半分の突飛な提案に、声を漏らす。
「いいじゃない。文化祭の最高殊勲者と、ミスコン優勝者なら、周りも納得な組み合わせだし。男子が苦手なマツオカさんも、尊敬しているサクライくんなら幾分他のお誘いよりは、抵抗が少ないんじゃない？　マツオカさんも顔が立つし」
「……」
さ、サクライくんと、私が？　――た、確かに、文化祭の最高殊勲者のサクライくんなら、他の人の誘いを断る体裁もつくろえるけど……
私の心臓は、フォルテシモで鳴り始める。
「――何で僕がそんな」
「女の子に恥を掻かせる気？」
サクライくんの憮然とした態度に、先生が楔を放つ。
「マツオカさんがこのまま一人で戻ったら、マツオカさんはダンスを踊るにしろ踊らないにしろ、すごく困ることになるのよ。そしたらマツオカさんは、この文化祭に、嫌な思い出が残っちゃうじゃない」
「……」
「それとも、天才少年サクライ・ケースケくんは、女の子のエスコートも出来ないのかな？」
それは、タカヤマ先生の、面白半分の嫌がらせだったに違いないけれど……

サクライくんは、数秒思案した後に、椅子から立ち上がって、私の前に立った。

「……」

しばらく沈黙が流れた間、私の心臓の音は、フォルテシモが、フォルテシシシモくらいになって、私の耳にまでその音が聞こえていた。

「――その、僕と踊るか？」

だけど、サクライくんも私とは視線を合わせずに、照れ臭そうに頭を掻きながら、憮然とした表情でそう言った。

「――いや、こういう時は、僕が、踊ってくださいって言うべきなのか――よく分からん……」

困惑するサクライくんを見て、私の脇で先生は、本当におかしそうに笑っていた。

後夜祭の行われる河川敷のグラウンドでは、既にキャンプファイアーが点火されており、校舎の明かりもグラウンドを照らしていた。

「文化祭最優秀個人賞は、１年Ｅ組、サクライ・ケースケくんです。サクライくんには副賞として、３万円分の図書券が贈呈されます」

私達がグラウンドに下りたのは、文化祭実行委員長が壇上で、優秀団体の発表を行っている頃だった。

「お、ケースケ！」

サクライくんの姿を見つけ、エンドウくんが人ごみの中、走ってくる。

「クラスも最優秀団体取って、クラス全員にディズニーのチケット、ゲットしたぜ」

エンドウくんからそう報告を受ける。確かにうちのクラスメイトが、後夜祭の場で、どこもすごく盛り上がっているのがちらほら見えた。

「――って」

不意にエンドウくんの目が、サクライくんの後ろについてきていた私に向けられる。
「何でお前、マツオカさんはべらしてんだよ」
「あぁ――僕にもよく分からないが、成り行きで踊ることに」
「はぁ？」
エンドウくんの大きな声が、後夜祭に参加した全員の目を惹いた。
「何だよそれ。どうしてそうなった」
「――だから僕にも分からないって」
「……」
サクライくんは、何だか恥ずかしそうに、エンドウくんから眼を背ける。
「……」
――サクライくんでも、こうして狼狽すること、あるんだ。
私は、そんなサクライくんの、初めて見る姿を見れただけでも、あの時、自分の今の思いがどんなに馬鹿げたものでも、口にしてよかったと思えた。
これから私の前に、沢山の見たことのない何かが、たくさん待っているような、そんな楽しい予感に溢れているような、そんな気がして。
こんなに、明日が待ち遠しいと思えるのは、初めてだった。
ダンスの時間になると、私は何だか、周りからの多くの嫌な視線を沢山浴びているのを感じた。
「あ、あの、ダンスって私、やったことないんだけど……」
「――安心しろ。僕もだ」
私達の間にも、ぎこちない空気が流れる。
「――とりあえず、手をとるんじゃないのか？」
そう言ったサクライくんが、私の前に左手を差し出す。
「……」
また心臓の鼓動が、強く、速くなり始める。
ど、どうしよう。私の手、フルートの練習のし過ぎで、指にタコ

とかできてるんだよね……で、でも、サクライくんを待たせるわけにはいかないし。

「――し、失礼します……」

私は、サクライくんの手に、ぎこちなく自分の手をかぶせた。

「あ！」「あ！」

その瞬間、方々から声が上がる。私とサクライくんは、その声が上がると同時に周りを見回すが、周りの人間は、私達からみんな視線をそらした。

「……」

その声に一瞬びっくりした私だったけれど、彼の手を握った感触に、また驚く。

彼の手は、その女性らしい風貌からは想像も出来ないほどに、節くれだった手をしていた。マメができて、そのマメが潰れ、その上にまた新しいマメができる、その繰り返しを幾度となく経てきたような、ごつごつした手だった。私は男の人の手を握ったのは、これが初めてだったけれど、それでも彼の手は、普通の男性の手ではないということを瞬時に察知した。

でも――私はそんなサクライくんの手に触れたことで、心臓が痛いほど胸を鳴らして――サクライくんの顔をしばらく見ることができなかった。

同時に、彼は初めから何でもできる人間などではない。人の見えないところで、人一倍努力をしているから、こうして心の中に、綺麗な空気が流れているのだと、私は感心した。こんな手をしている人を追いかけることは、決して間違いではないと、その手が私に確信させてくれた。

音楽が始まると、サクライくんは見様見真似ながらでも、私をリードしてくれて、私の体を支えるように、ステップを踏んでくれた。

私はそんな、半ば夢のような状況に、ただただ流されるように、ぐるぐるとその場を回っていた。

「――お互い、色気のない手をしてるな」

回りながら、サクライくんは私にそう言った。
「え？」
私はその声に顔を上げると、目の前には、もう２０センチもない距離にサクライくんがいて。
「あ……」
私は顔が急に火照ってくる。
「こ――こんな手、握るの、嫌だった？」
私はそう呟く。
「――よく分からない」
「え？」
「元々ダンスなんて、踊る気なかったし」
「……」
私達は、初めは何となくのステップに身を預けながら、次第に二人の呼吸が合ってきたように思えた。
「サクライくんの手も――もっとつやつやした手を想像してた」
私は、次第にその呼吸に慣れてきたことも手伝って、自分の今の気持ちに正直過ぎるほどになってしまって。
「でも――サクライくんがこういう手をしているから、私はあなたに憧れたんだと思う。こういう手をしている人の方が素敵だと、私は思う……」
そんなことを口走ってしまうのだった。
この時の私は、本当にどうかしていたとしか思えない。
文化祭が終わって、私は一人家で、この時のことで、とめどなく自己嫌悪に陥りもしたけれど。
でも――それでも明日からの私とサクライくんの距離は、少し縮まっているような予感がしたことが、ちょっとだけ嬉しかった。
でも――それは私の大いなる独りよがり。勘違いに過ぎないと、これから思い知らされてしまうのだけれど……

文化祭が終わり、後片付けも住んで、初の日曜日、私達1年E組のクラスメイトは、全員池袋駅の有楽町線の改札前に集合していた。

我がクラスが文化祭最優秀団体に選ばれ、全員にディズニーランドのワンデーパスが配られたことで、クラス全員でディズニーランドにこれから繰り出そうというのだった。有楽町線で終点の新木場まで行き、そこから舞浜行きに乗り換えるのが、埼玉人のディズニーランドへの行き方だった。

オムライス作りを通じて交流を深めた我がクラスは、エンドウくんの声かけも手伝って、クラスメイト全員が一緒にディズニーランドに行くことに決めたのだった。私も参加した。

「よし、じゃあこれで全員かな。行こうか」

エンドウくんが改札前で辺りを見回して、言った。

「え、ちょっと待って。サクライくんが来てないよ」

クラスメイトの誰かが言った。

「ああ、あいつは来ないよ」

それを訊いたヒラヤマくんが、文化祭で出来た彼女との談笑を一度切り上げて、言った。

「え？」

私も含め、クラスメイトが声を漏らす。

サクライくんは後夜祭、私と少し踊ると、エンドウくんの、その後の打ち上げの誘いも断って、帰ってしまった。それはいいとしても、ディズニーのチケットを貰った以上、勿体無いから来るだろうと思ったのに……

「あいつ、貰ったチケット、翌日には金券ショップに売っちまったって言ってたからな。あいつが文化祭頑張ってたのは、何もディズニーに行きたかったからじゃない。そのチケットを換金して、金にするためさ。じゃなきゃ、あんなに働かないよ、あいつは」

「……」

クラスメイトは全員沈黙する。

「うちのクラスの売り上げも随分持ってったし、あいつ文化祭で、

２０万以上荒稼ぎしたんじゃねぇの？　文化祭を自己の儲けのためにやるなんて、とんだ守銭奴高校生がいたもんだぜ」

エンドウくんが彼を揶揄した。

「……」

文化祭が終われば、ケースケがどうして頑張っているのかが分かる――そうエンドウくんは言っていた。その通りになった。

初めからサクライくんは、文化祭なんかに、何の思い入れもなかったんだ。

ただ単に、自分が儲けられるから、働いていただけなんだ。

きっと、私と踊った記憶も、もう心の中から消えているだろう。

――何だか、私はたまらなく、悲しい気持ちに浸りながら、駅の改札にたたずんでいた。

Another story ～ 2－20（後書き）

ここでアナザーストーリー、最終回でもいいんですが、もうちょっと続けさせてください。

第3部を待っている方、すみません…

Another story ～ 2－21

文化祭が終わり、6月も半ばになると、関東地方に梅雨前線が到来する。湿った風が、日本一暑い都道府県とされる埼玉県の日差しと相まって、べとつくように体に生ぬるくまとわりつく。学校ではみんなが半袖のTシャツ1枚で登校するようになったけれど、それでも県立の教室にはクーラーがない。みんな汗をだらだら流し、ルーズリーフが汗で腕に貼り付いたりしながらも、授業を受けていた。教室は常に制汗剤の匂いがどこかで香っていて、分かっていて入学したはずなのに、クーラーのない教室と、クーラーのある職員室で涼をとる先生達への文句がどこかしらで起こっていた。

そして、二日に一度は雨が降るようになり、運動部はあまり外で活動できなくなった。

文化祭以降も私の生活は変わらず、朝6時に学校に来て、毎日フルートの練習に明け暮れていた。

7月には吹奏学部に入って初の、パート選考会もある。私はそれに向けて、少しでもフルートの音の精度を上げようと、照準をそこに絞っての練習を繰り返していた。

でも、今日は朝から雨が降っていて――私はフルートを吹きながら、さっきから何度もちらちらと、窓の方を見ている。

そして、7時になると、私はフルートを片付けて、図書室へ向かう。

「……」

図書室の入り口の前に来ると、私は自分の着ているスカートのすそを手で払い、何となく前髪に手をやって、前髪を直してから、一度すーはーと深呼吸する。

大丈夫なんだよ、だって、文化祭前からも、習慣でやっていたこ

となんだもの。自然にだよ、自然に。
そう自分に一度言い聞かせてから、私は図書室の引き戸を開ける。
「……」
図書室に入って一番手前の窓際――図書室にいる時、いつもその人が座る席に、今日も彼が座っていた。
「おはよう、サクライくん」
「押忍」
サクライくんは私が開けた引き戸の音を聞くと、机の上に開いていた用語集から目を上げて、私に会釈してくれた。
いつもサクライくん、ここに座っているんだもの、だから私もいつもの席で――平気だよね。うん、自然に――
私はサクライくんの向かいの席に、自分の荷物を置く。
「最近雨が多いから、よく会うよね」
「ああ――目障りか？」
「そ、そんなことないよ。私、サクライくんに色々勉強訊いちゃってるし」
梅雨に入ると、雨が増え、私とサクライくんは、よくこうして図書室で一緒の時を過ごすことが多くなった。私がフルートの練習を終えてからだから、一緒にいる時間は、一日長くてもせいぜい1時間くらいだけれど。
「――サクライくん、今日ももう眠そうだね」
「――ああ」
サクライくんは、今日も目をしょぼしょぼさせている。
この時間のサクライくんは、いつだって目がとろんとしていて、言葉のアクセントもふわふわしている。そんな彼は、少女のような幼い顔立ちも手伝って、年齢以上に幼い、小さな男の子のように見える。だから、男子が苦手な私でも、あまり気後れすることなく彼と一緒にいることができる。
暗記物は、一度集中してやったら、その後間を空けずに、一気に寝てしまうのが、頭に残るコツということで、彼はこの時間、歴史

や英単語など、暗記物の勉強をやっていることが多い。でも、それ以外にも、彼はここで一人、文庫本を読んだり、新聞を読んだりして、時間を潰していることもある。

「しかし君も、頑張るんだな」

サクライくんが、窓の外を振り返る。相変わらず外はすごい雨で、さっきから雨粒が、図書室の窓を叩いている。

「いつも毎日、フルートの音が聴こえているが、」

「私も、今は自分の打数を自分で増やすことにしたの」

私は自分の鞄から、今日の午前中に授業のある、英語Ｒの教科書を出しながら言う。

「夏の大会に出られれば、自分の課題とか見つけるチャンスだと思うし、今は結果よりも、そういう経験値を上げる作業を頑張ろうって思ったの」

「……」

サクライくんは呆れ顔だ。

「それは――僕の真似か？」

サクライくんは、文化祭で私が言ったことを、覚えているようだった。

「……」

私は一度、言葉を咀嚼する。

「どうかな――でも、多分、今、こうしている時間が私が嫌いじゃないってことだけは、確かだと思う――だから、ここにいるし、頑張れているんだと思う」

「――そうか」

サクライくんはそれを訊いて、ふっと息をついた。

「――君のこと、ヒラヤマやエンドウは随分持ち上げてるのを色々訊いたけど――そういうイメージを持って君といると、何だか調子が狂う……」

「え？」

「――こういうこと、女子に言うのも何だけど、変わってるよな、

君って」
「え？」
私は思わずその言葉に声を上げる。
「――そんなこと、初めて言われたな」
「は？」
「ちょっと、嬉しい。えへへ……」
「……」
自分が変わっているなんて、初めて言われた。
優等生、品行方正、優秀――そんなことは、沢山の人に言われてきた。その評価が１５年、１ミリどころか、１ナノすら変えられなかった私にとって、そういうふうに言ってもらえたことは、何だか自分が少しだけ、前に進めたような気がして、ちょっと嬉しかった。
「はぁ……」
サクライくんは、そんな私を見て、溜め息をついた。
「この学校来て、妙に変な奴ばかりに懐かれるな、僕……」
学校はじまって以来の問題児である彼が、自分の運命を呪うように憮然としている。
そんなやり取りをすると、私達はもうどちらとも言わずに、自分の持ってきたものに、目を落とし始めた。
私達はこうして顔を合わせた時、一言も話をしない時もあれば、今やっている授業のことをサクライくんに話したり、もしくは学校生活とはまったく関係のない、とりとめのない議論をすることもあった。自分の人生論や、友達とするには少し重かったり、固すぎたりする議論でも、サクライくんとなら出来た。
いつだって、雨の音がＢＧＭで、私達以外誰もいない図書室は雨粒の音に包まれて、何となく、この時間は時間がゆっくり流れているようで、何も話していなくても、何だか居心地がよかった。
文化祭の前までは、朝起きてから見る天気予報を、今では前日の夜のうちに確認する癖がついた。
天気予報で、明日の朝が雨だという予報を見ると、胸がざわざわ

したし、４日くらい晴れの日が続くと、そろそろ雨が降らないかな、なんて、そんなことを考えるようになった。

自分でも最初分からなかった。話しやすさも、男子が少し苦手な私に気を遣ってくれるという面でも、サクライくんよりエンドウくんの方が、ずっと上だ。私自身、きっと男子に惹かれるとしたら、エンドウくんのような、優しい人だと思っていたのに、今私はこうして、そんなエンドウくんとは正反対の性格をした、サクライくんとこうしている。

でも――彼は私を特別扱いしない。普通の同級生くらいにしか、私を見ない。だから私も、彼の前だと、男子が少し苦手というのを差し引いてでも、肩の力が程よく抜ける。いまだに、図書室に入る時はちょっと緊張してしまうけれど――

――私は授業に備えて、今日の英語Ｒの授業で取り扱われる長文に目を通しつつ、構文をつけながら、分からない単語にチェックを入れておく。

少なくとも、私は慶徳で3年間主席を守った彼を、様々なハンデはあるとはいえ、一度破っている。そのことで、他のクラスメイトよりは、彼の認識を得られていることが、段々分かってきた。文化祭であれだけクラスのために働いている彼だったけど、いまだにクラスメイトの名前は殆ど覚えていなかったし。

彼が私の突飛な発言に、何も言わなかったのも、私が一度彼に勝っているからだということも、私は何となく分かっていた。これが箸にも棒にもかからないような人だったら、冷たくあしらわれて終わっていただろうから。

そう思うと、私は彼に話されないようにと、勉強も頑張れた。今まではそういう目標もなく、漠然と日課のようにやっていただけの勉強だけど、今はすごくいい刺激の中で勉強が出来るので、私の勉強効率も格段に上がっていた。

「ん……？」

不意に、どうしても構文が取れず、上手く訳せない英文にぶつか

る。単語の意味は何となく分かるのだけれど、それが上手く文章につなげられない。

「……」

サクライくんに――訊いてみようかな。でも、迷惑かな。自分の勉強しているのに……

不意に気になって、私は教科書から顔を上げて、サクライくんの方を見る。

「……」

今まで起きていたサクライくんは、頬杖をついて眠ってしまっていた。今日はずっと疲れていたみたいだし、普段よりも、目がとろんとしていたし。

「……」

こういうことを言うと、少し誤解されそうだけれど――

彼の寝顔を見るのが好きだった。

疲れた彼が、体を休めることだけに専念するこの時――

普段物腰柔らかい、洗練美を示す彼が、それとは真逆の彼になるから。野生の花のように、生命力に溢れている。そんな風に見えてならないから。

しっかりと生きているから、寝て、起きて、勉強もして、部活もして、食べて――そういう当たり前の命の営みが、彼を通じて見ると、とても綺麗なものに見えた。

そんな姿を体現したような、彼の落ち着いた寝顔を見るのが好きだった。

――でも。

この時の私は、本当にどうしようもない子供だったんだ。

彼がどうしてこんなに死んだように眠るほどに疲れきっているのか、そんなこと、想像も出来なかったどころか、考えもしなかった。

何も知らないで、それで彼のことを、美しい、なんて、傍観者気取りで……

――本当に最低で。

そんな子供の私は、これから彼がそうしてボロボロになっていく姿を、ずっと見ていくことになるのだ。それで私の少女時代は、完全に終わってしまった。

Another story ～ 2－21（後書き）

今さらですけど、女性の心理というのは難しいですね。作者の想像の範囲で書くと、どうも上手く表現できなくて。作者自身、それほど感受性の強い人間ではありませんし。

もっとそういう心理を細かく表現できる掻き方をしたいんですが、なかなか上手くいかないです。どうやったら文章って上手くなるんでしょうか。

と言うか、作者に乙女心をご教授してくれる人がいたら、この話ももっとレベルアップしそうな気もしながら、今この話を書いてます……

Another story ～ 2－22

朝のＬＨＲの予鈴が鳴ると、サクライくんも起きて、私達は教室へと移動する。授業をサボるサクライくんも、一応朝の出席にだけは、いつも顔を出している。

私は彼と教室に向かう時、彼の横顔を見ながら、文化祭、一緒に踊った時――キャンプファイアーのオレンジ色の炎に照らされていた時の、彼の横顔を思い出す。

あれ以来、私は彼と文化祭の時の話をしたことはない。音楽室での、あの私の突飛な発言についても、何も触れてこない。

もしかしたら、もう既に彼は忘れているのかもしれないとも思う。打ち上げやディズニーランドに来なかったことを見ても、彼にとってもう文化祭は、もう通り過ぎた過去になっている。あんなに苦心して絵を施したあの入場門も、片付けの日に、彼が自分の手で、何の感慨もなく取り壊していたし。

「……」

あの炎に照らされたあなたは、一体何を考えていたのだろう。

今、こうして私といることを、あなたはどう思っているのだろう。

それが知りたくて、私はつい彼の横顔を見て、そんな気持ちが少しは零れ落ちてこないかということを期待してしまっていた。

彼は語らない。何も語らないから。

私のことも、自分のことも、何も――

「おはよう、シオリ」

私の席の前で、アオイとミズキが待っていた。

「今日もサクライくんとデート？」

ミズキは、含み笑いを浮かべながら私を見る。

「で、デートだなんて、そんな……」

「……」

ミズキの横で、アオイも私のことを、何だか邪推したような表情

で見ている。
　文化祭で、私は、サクライくんと一緒に踊って以来、沢山の人に、同じことを言われ続けている。
「マツオカさん、サクライくんと付き合ってるの？」と。
「わ、私は――ずっと前と同じだよ。サクライくんだって、ずっと晴れた日は外で朝連してるもん。別に待ち合わせとか、してるわけじゃ……」
　これは嘘ではない。サクライくんは外が晴れていれば、あの図書室には来ない。
「ふぅーん、その割にはシオリ、顔、赤くなってるけど？」
　ミズキは机に頬杖を突きながら、私に小悪魔風の笑いを浮かべる。
「え？　うぅ……」
　私は困ってしまう。男子を避けていた私は、こうして自分の行動が、相手への好意に誤解されたという経験がなかった。だからこういう時、私はどんなことを言えば誤解が解けるのか、まだよく分からないのだ。
　サクライくんのことは尊敬もしているけれど、彼とどういう関係を築きたいかということは、まだ私はまったく想像できなかった。私にとって男子というのはまだ未知の領域で、中でも彼のことは、ほぼ全てが謎に包まれている、彼とそういう関係になりたいかなんてことは、まだ考えられなかった。まだ私は、彼についていくだけでも精一杯だったから。
「でも、言うなら早く言っちゃいなよ。そうすれば、楽になれるよ」
「……」
　確かにそうだろう。ミズキの言うとおりだ。
　ただ、その、楽になれる、の意味が、私とミズキでは、ちょっと違うと思うけれど……
　文化祭のミスコン優勝以来、私にはエンドウくんの予告通り、告白が殺到している。文化祭が終わって、もうすぐ１０日になるけれど、もう既に私は、２０人近くの男子に告白されている。当然、サ

クライくんやエンドウくんなど、特定の男子となら、少しはコミュニケーションを取れるようにはなったものの、まだ総じて男子に対して苦手意識のある、恋愛音痴の私は、その告白を全て断ってしまった。

ミズキの言う「楽になれる」というのは、サクライくんへの好意を胸に抱えていて、苦しいだろうから、吐き出してしまえ、という意味だけど、私にとっての「楽になれる」は、サクライくんと付き合ってしまえば、そうして告白を断るという、後味の悪い思いをこれ以上しなくて済む、という意味だった。

「さ、サクライくん」

ふと、クラスの片隅で、彼を呼ぶ声がした。その声に、教室にいたクラスメイトが、一斉にその方向を見る。

見ると、サクライくんの席の前に、我がクラスのクラス委員長の女子が立っている。サクライくんの脇にはエンドウくん、ヒラヤマくんもいる。

「ああ、この前授業で言われたこと、言うのね」

ミズキが小声で私とアオイに囁いた。

「さ、サクライくん。あの、たまには授業に出てくれないかな？」

委員長は彼にそうお願いする。

「――何故？」

サクライくんは、また寝ようと思ったのに、変なのにつかまったな、と言うような、少し面倒臭そうな面持ちで、そう訊いた。

「な、何故って――私達、サクライくんが授業出ないから、先生達に怒られてるのよ」

これは本当だ。サクライくんが授業にいないのを確認すると、機嫌を悪くする先生は多い。要は先生方は、自分達の授業を聞いていても、私達がサクライくんに勝てないことに業を煮やしているのだ。

「あんな怠け者に負けて、恥ずかしくないのか？」なんて怒られ方を授業でされる生徒も多い。

そして遂に先生の一人に、クラス委員が捕まって、お前達もサク

ライを説得しろ、と言われてしまったのだ。教師の言葉に聞く耳持たない彼も、クラスメイトなら早々邪険にはしないと、文化祭での彼を見て思ったのだろう。

「――あのさ、君、何で僕にそんなことを言うの？」

サクライくんは怪訝な表情だ。

「え？　だ、だって私、クラス委員長だから」

「あぁ――そうなの。わざわざご苦労だね」

「……」

サクライくん、あの娘がクラス委員長だって、知らないんだ。

文化祭であれだけクラスに協力的だった彼も、金の切れ目が縁の切れ目の言葉通り、今ではすっかり元に戻っていた。先生達も委員長に対して、酷なことを言う、と、クラスのみんなが委員長に同情していた。この注目度の高さも、そのためだ。

「別に好きで授業をサボっているわけじゃないよ、僕は」

サクライくんはそれを確認してから、机に頬杖を突いたまま、前に立つ委員長を見上げていた。

「授業に出るメリットがあるなら、喜んで参加するさ。何だったら、そのメリットを、僕に説いてみてよ。拝聴するから」

「……」

そのサクライくんの提案に、委員長はしばらく黙ってしまう。

「あ、あの、授業出ないと、いくら成績がよくても、推薦で不利になるし――」

やがて委員長は、サクライくんの全く動じない様子に気圧されながらも、何とかそのデメリットを口にした。

「推薦？　何それ」

しかしサクライくんはその委員長の精一杯の一言を、ばっさり切り捨てた。

「教師に媚売らなきゃ大学にも入れないほど、他力本願の人生送ってないから」

「……」

委員長は言葉を失ってしまう。今にも泣きそうな顔だ。
サクライくんの後ろにいるヒラヤマくんは呆れ顔だ。エンドウくんは肩をすくめている。
「……」
サクライくんはそれを見て、溜め息をつく。
「――分かったよ。だからそんな顔しないでくれ」
彼も血も涙もないというわけではないから、泣きそうな顔をする女子を放っておけず、声をかけた。
「……」
――たまに優しいんだよね。サクライくんって……
「じゃあさ、教師どもに伝えてよ」
サクライくんは委員長の顔を見た。
「もし僕が成績で3位に落ちたら、毎回授業に出るって」
「3位？」
後ろにいたヒラヤマくんが首を傾げた。
「随分お前にしちゃ控えめな数字だな。次のテスト、主席取れなかったら、くらい言うのかと思ったけれど」
私もヒラヤマくんと同じことを思った。
「ああ――だって、マツオカがいるし」
サクライくんは、しれっとそう言った。
「え？」
唐突に彼の口から私の名前が出たことに、私は面食らう。さっきまでサクライくんの様子を見ていたクラスメイトが、一気に私の方を見る。
「は？」
エンドウくんが、疑問符を投げかける。
「マツオカに現時点で負けたら、まあしゃあないと思う――それくらいの努力をしてる娘だしな。だが、他の奴に負けたら、さすがにショックだ。そうなったらやばいと思って、真面目に授業に出て、基礎からやり直すさ」

「……」

教室が、その発言に沈黙に包まれる。

現時点で、私とサクライくんは、付き合っていると思っている人が多い。その矢先で、彼が私に対してそんな発言したら……

――と言うか、私自身も混乱の坩堝に飲み込まれていた。心臓を打ち抜かれたように、一瞬の衝撃が、胸を駆け抜けた。

この感情が、驚嘆なのか、喚起なのかも分からない。彼が、私を認めてくれた？　ちょっとは私、特別扱いされてる？　そのことが、私にどんな心の作用を与えているか、ちゃんと言語化は出来なかったけれど……

私は俯いて、自分の顔を隠す……

誰にも今の顔を見られたくなかった。心臓の鼓動が耳にまで聞こえて、表情を作る余裕もない。と言うか、きっと今、私の顔は真っ赤だろうから……

「ねえ、サクライくん」

不意にクラスメイトの誰かの声がした。

「ん？」

サクライくんの声。

「――この際、はっきりさせておいて欲しいのよ。あなた達、目立つんだし、変な噂で右往左往したくないから」

そう前置きをしたクラスメイトは、凛とした語勢でこう訊いた。

「あなたとシオリって、もう、付き合っているの？」

「！」

その言葉に、私の心臓は、一度ずきりと痛んだ。

ど、どうしてそんなこと訊くのよ――私ならともかく、サクライくんに。

「そうだぜ。そろそろはっきりしろよ」

「ミスコン優勝者のマツオカさんなんだぜ。お前がその直後に何でマツオカさんとそんなに仲良くなったのか、説明してくれ」

クラスメイトも、みんなそのことについて気になっていたので、

この気に訊いてやれと、勢いづいて彼に追及する。数が集まると、人間というのは一気に強気になれるものなのだ。

「――はぁ」

サクライくんのため息に、再び教室中が静まり返る。

「お前達、本当に県下一の進学校の生徒かよ。ガキ臭い議論吹っかけやがって。高校に来てまでこんなこと教室でおおっぴらに訊かれると思わなかった」

彼の普段どおりの静かな口調が、刃を帯びている。

その時、教室の引き戸が開く音がする。

「はい、ＨＲはじめるぞ」

担任のスズキ先生の声だ。ちょっと頼りない、いつもの間の抜けた声。

「みんな席に……」

あまり生徒の人望を得られていないスズキ先生が、みんなを席に促しても、クラスメイトは全員微動だにしなかった。サクライくんの次の言葉を待っているのだ。スズキ先生も、教室の異様な雰囲気に、言葉を失ってしまった。

「……」

沈黙。

それを払ったのは、サクライくんのため息だった。

「別に何でもないよ。お前達が彼女に言い寄ろうが、僕は何も干渉しない。別に僕の女ってわけじゃないし」

「……」

「ただ――彼女の努力を認めているだけ」

私はその言葉に顔を上げる。

顔を上げた頃には、サクライくんはもう自分の席を立っていて、スズキ先生にすれ違い様、「出席簿つけといてください」とだけ言い残して、教室を出て行ってしまった。

「……」

クラス中が沈黙に包まれた。

「う……」

私はそのサクライくんの言葉をどう受け止めていいかわからなかった。突き落とされたのか、上げてもらえたのか、それさえも分からなかった。

ただ――この時私は、酷く気分が悪かった。

さっきから心臓の鼓動が収まらなくて……感情が上手く制御できなくて。体を巡る血の流れが速過ぎて、吐き気がして、偏頭痛さえ起こってきた。

「――シオリ？」

アオイがそんな私の、真っ青になった顔色に気づいた。

「シオリ、顔色悪いし、汗もすごいし……保健室行こう？」

Another story ～ 2－23

それから私は、アオイに付き添われて、保健室へと向かった。
クラスを出る時、私に向けられる視線が痛かった。
それはそうだ。私はクラスメイトの前で、サクライくんに振られたのだ。
それがまだ、何を意味するのか、私はまだ、分からなかった。頭が酷く痛くて、考えることが出来なかった。
「――夏バテかしらね。微熱もあるし……早退する？」
どんよりした気持ちのまま、私は保健室の先生に、早退を勧められた。
「いえ、家族が心配しますし、少し休めば大丈夫です」
「――じゃあ、ベッドで横になっていなさい。水分も補給して、ね」
そう言われた私は、アオイに体を支えられて、保健室の白いシーツのかかったパイプベッドに、体を横たえた。
保健室の先生は、一度職員室に行くと言って、保健室を出て行った。保健室は、私とアオイの二人だけが残された。
アオイは職員室にある給水機から、水を紙コップに汲んで、私に持ってきてくれた。冷たい水を飲むと、何だか少し気持ちよかった。
「もう大丈夫だから。アオイ、あなたは授業に出て」
私はベッドに体を横たえたまま、ベッドの脇のパイプ椅子に座るアオイに言った。
「ううん、先生が帰ってくるまで、いるよ」
アオイは椅子に座ったまま、かぶりを振った。
「……」
沈黙。
――いや、アオイは優しい娘だから、きっと私を心配――してるのかな。もしくは、同情？
「――ねえ、シオリ」

アオイは少しもじもじしながら、私の目を窺う。
「ん？」
私はアオイと視線を合わせる。
「あ、あの……」
アオイは私と目が合って、少し困ったような顔をする。
「……」
「――サクライくんのこと？」
私は先に訊いてしまう。
「え？」
「――ごめん。私、そういうのであまり駆け引きとか、出来ないから。多分アオイもそうでしょ？　だからさ、気を遣われたり、遠慮されたりするよりは――ね」
私もアオイも、両方とも引っ込み思案の地味な性格だ。だからきっと、はじめから相手の腹の探り合いをしていたのでは、埒が開かないし、疑心暗鬼を招くだけだ。
「――ごめん」
アオイは俯いた。
「いいよ別に」
私はベッドに横たわったまま、ふっと笑顔を見せる。
「本当に、サクライくんとは何でもないんだよ。調子が悪くなったのは、視線を浴びることに、心の準備が出来てなかっただけ」
それから私はアオイに、文化祭で彼と踊ることになった経緯を話した。勿論大まかな場所ははしょって。
「――そんなわけで、サクライくんは、音楽準備室にたまたま居合わせたところを、タカヤマ先生に言われて、私が他の男子からの誘いを断って、揉め事が起こらないように、仕方なく付き合ってくれたのよ。はじめは嫌がってたわ」
私はサクライくんが、私の体裁を守るために、助けてくれたという形で説明をした。といっても、これは事実だ。彼はタカヤマ先生に誘導されたとは言え、基本的には私を助けてくれた。

「――そうなんだ」
アオイはそれを聞いて、ほんの一瞬だけど、顔の筋肉が弛緩したように、目を閉じた。
「……」
沈黙。
「――ねえ、今度は私が、アオイに訊いていい？」
私はベッドに横になったまま、首だけをアオイの方へ向ける。
「私――こういうことに疎いから、間違っていたら間違っていたでいいんだけど」
そう前置きをしてから、私はしばらくアオイの様子を窺った。アオイは何も言わなかったけれど、アオイの心の動きが多少穏やかになるのを確認してから、訊いた。
「アオイって――もしかして、サクライくんのこと……」
そう私が言いかけた時。
保健室の引き戸が、とんとんと、誰かにノックされる。私からは入り口は、ベッドの周りを覆っているカーテンで見えない。アオイもその音に、カーテンを少し開けて、引き戸の方を窺った。
引き戸を引く、がらりという音。
「あ！」
アオイはその音の方を見てから、感嘆の声を上げた。
「さ、サクライくん……」
「え？」
アオイのその声に、私の心臓も、鷲掴みにされたように一度収縮した。
「ああ、やっぱりここか」
カーテン越しに、本当にサクライくんの声が聞こえる。
「あ、あ」
アオイからは彼の姿が見えるようだ。アオイも狼狽している。
「いいよ。カーテンの中には入らないから。僕の用もすぐ済む」
そうカーテンの外から声がした。

「君も別にはずさなくていいから。ええと……ごめん、名前、何だっけ」
サクライくんはアオイの名前を忘れているようだった。
「――あ――あの、その……」
みるみるアオイの顔が紅潮していく。声が震えている。
「ん？」
サクライくんの怪訝そうな声。
「――あ、わ、私、出て行くよ。二人の話、邪魔しちゃ、悪いし……」
「え……」
私達の返事も聞かないままに、アオイはまるで逃げるように、保健室を出て行ってしまう。
「……」
サクライくんの息を吐く音が聞こえる。きっと、気付いていないんだろうな、アオイが逃げた理由。
本人の口から聞きそびれてしまったけれど――やっぱり、今の反応を見て、確信する。
アオイは、サクライくんに恋しちゃってるんだ。
文化祭の準備が始まった頃から、アオイはどこか様子がおかしくなった。妙にそわそわして、必死に何かに打ち込んだりして。
その傾向は、サクライくんの前や、サクライくんの話題の時に、特に顕著だった。恋愛音痴の私ですら気付くくらいなのだから、多分ミズキも薄々感づいていると思う。
「……」
――そうか。アオイも……
「し、心配しないで。アオイ、大人しい子だから、あなたと一緒にいるの、緊張しちゃったみたい」
私はアオイのフォローを入れつつ、サクライくんにそれとなくアオイの名を教えた。きっと彼は忘れてしまうだろうけれど、好きな人が自分の名前を覚えていないのでは、アオイが可哀想だ。だから、

彼がアオイの名を覚える一縷の希望を乗せて、彼女の名を教えた。
「で、でも、どうして？」
とは言え私も、まさか彼がここに来るとは思わなかったから、いきなりのことに出鼻をくじかれ、多少の狼狽はしていた。まだこの時の私は、彼の行動パターンが、全然読めていなかった。
「最後教室で見た時、すごい顔色してたからな。もしかして、注目を浴びて、気分でも悪くなったかと思って、見舞いに来た」
思案にふける私に、気を取り直したサクライくんが、カーテン越しに言った。
「え？」
ちょっと意外だった。
自分の言動が他人に影響するかなんて、全然考えていないと思っていたのに――ちゃんと見ていてくれたんだ。もしかして、責任を感じてしまっているのかな。
「――悪かったな」
カーテン越しからサクライくんの声がした。
「勝手に君の名前出して、わけわからんことになって。ああでも言わないと、君がこの後、自由に恋愛とかする妨げになるだろうから――とりあえず誤解を解くことに専念したんだが、どうもこの手のことは苦手でな。上手いやり方じゃなかったと思う」
「そ、そんなこと、ないよ。あの状況じゃ、はっきり否定するしかなかったってこと、私だって、分かるし……」
私はカーテンの向こうへ声を届けながら、状況の整理に務めていた。
もしかして――それを言いに、わざわざ、ここへ来たの？
誤解された行動だって、タカヤマ先生の言葉で、私が本当に困っていると思い込んで、私に助け舟を出しただけのことなのに……
「それだけ言いに来た。じゃあ、しっかり養生しろ」
そう言って、彼の足音が聞こえ出す。
「あ――ま、待って」

私は思わず彼を呼び止めた。足音が聞こえなくなる。
「――ひとつ、質問したいんだけど」
私はカーテン越しに、彼に呼びかける。
「何？」
彼の許可が下りる。
「どうして、あんなことを言ったの？」
私は訊いてみた。
「あんなこと、とは？」
「あの――私の努力を認める、とか。私に負けたら仕方ないとか……」
そう、私は別に、彼との関係を、彼の口から「何でもない」と言われたことは、むしろ当然のことと受け止めている。
それよりも私を狼狽させたのは、その前の彼の発言の方だ。
「私――今までサクライくんに相当みっともない話をしてたし、面倒ばかりかけてたのに、そんなこと言ってもらえるとは思ってなくて」
「ああ……」
少しの間。
「別に深く考える必要はない。言葉通りの意味さ」
「……」
「朝、毎日聴こえるフルートの音、文化祭で手を取った時に感じた、あのマメの跡のある手――それを踏まえてのな」
言葉通りの意味――
言いたいことはその一言で、何となく分かる。サクライくんはお世辞とか言える人じゃないことは、この僅かな関わりの間でも分かる。
彼はいつだって、体のどこかにいつも懐刀を忍ばせているような、そんな自分の手の内をまだ全部見せていない、という雰囲気を持つ反面で、愚直なまでに馬鹿正直なのだ。言動に頓着がなく、そこには善悪も、差別も優遇もない。

あの言葉も、お世辞じゃないんだ。じゃあ、何でそんなこと……
「マツオカ」
思案にふける私に、サクライくんの声がした。
「僕との関係を誤解されて、君はこれからどうする？」
「え？」
「僕を見極める、とか言っていたが、それで誤解されてたら、君にとっちゃマイナスだろう。ミスコンに優勝して、男から引く手あまたって話だしな」
「そ、そんなことないよ。わ、私ミスコンには、推薦で出ただけで、別にそういうつもりで……」
サクライくんに誤解されてしまっている気がして、私はベッドの上で、少しムキになって否定する。
「それは失礼」
社交辞令のような、彼の謝罪の言葉。
「それでも、誤解されている以上、君は僕といづらい状況であることは確かだろう。で？　どうする？」
「……」
どうする、って言われても――
まだ私は、サクライくんのことを、何も知らないけれど。
何となく予感はしているんだ。私の進むべき道は、彼の美しい流れを掴んだ、その先に見えてくるものだと。
そのためにも、私はここで足を止めたくはない。
それに、私は……
「君がかまわないなら、これからも僕の近くにいろよ」
しれっとサクライくんはそう言った。
「へっ？」
――な、何、今の言葉……

「その方が僕としても都合がいい」
呆然としている私に、サクライくんの声が響いた。
「あの時、タカヤマが言っていた言葉、僕も考えてみたんだ。君と近くにいることは、決して僕にとっても悪い話じゃないって。はじめは方便だと思ったが、確かにそうだろうなとも、最近思えてきたからな」
「……」
「正直僕はこの学校に何も期待していなかったが、君みたいな頭の回転の速い努力家が、僕に挑んでくる状況ってのは、ちょっとは刺激的だ。君と近い関係にいるのは、僕にとってもモチベーションの意味でメリットがあるしな」
「……」
「今後は僕も誤解させない行動をとるし、誤解されたら君の名誉くらいは最低限弁護するから、君は好きに行動してくれ」
「――うん……」
私は何とか、返事を搾り出した。
「――そうか。まあ好きにしたらいいさ。僕も、全然知らない奴のことよりは、君のことを優先するしな。誤解を解くのは、僕が身軽になるためにも必要だ」
「……」
「――長居をしたな。僕はもう出て行くよ。ゆっくり休め」
そう言って、彼は私の言葉を訊かずに、引き戸を開けて、出て行ってしまった。
一人保健室に残される。横たわる私の眼前には、保健室の白い天井。
「……」
――そういうことか。あの言葉の意味は。

一人がっかりしてしまった私自身に、自嘲を浮かべる。
あの文化祭のダンス以来、私は彼に、少しは近い存在になれたのかと思っていた。
でも――全然違う。
あの人は、自分の力のため――自分にメリットのあることにしか興味がない。
この学校にも、クラスメイトにも、もちろん私にも、ひょっとしたら、エンドウくんやヒラヤマくんも……
私を引き止めたのが、モチベーションになるといったのも、きっと、念のため程度の認識しかない。はじめから彼は、一人で結果を出す気だ。私がいてもいなくても、あの人は前に進み続ける。歩みを止めない足取りに、何の変化もない。
今の私と彼の、大きな溝を、そこに感じる。
――胸が痛い。
どうして、こんな気持ちになるんだろう……
サクライくんが、カーテンの中に入ってこなくてよかった。きっと今の私は、酷い顔をしているだろうから。

「――はぁ？　あの子、そんなこと言ったの？」
保健室で2時間休んだ私は、3時限目には授業に復帰した。そして今は放課後――吹奏楽部の練習が終わって、私は準備室で、タカヤマ先生に捕まっていた。先生はどうやら、私とサクライくんのことを気にかけているらしい。
夕日の差し込む準備室――あの時と同じ場所。同じ時間。
私の話を訊くと、先生は呆れ顔を浮かべながら激した。
「はぁ――あの子、天然ジゴロというか――男子校にいたからか、女の子のこと、全然分かってないのね。女の子に、僕の近くにいろなんて、いくら他意がなくても、言っちゃダメだわ」
先生の溜め息。

「……」

彼は男子校出身だ。だからかな。彼の他人との接し方は、あまり性別の垣根を感じない。

それは、男子が苦手な私にとって、いいことも多いけれど……

それが、最近になって、悪いことのようにも感じ出す。

理由もよく分からない。何故私が、彼の言葉に、こんなに沈むのかも……

「あの、先生」

私は先生を呼んだ。

「あの時、先生、言いましたよね。サクライくんも、私から学ぶものがあるって」

「ああ、うん、言ったわね」

「あの――それって一体、何なんですか？　私自身はそれが全然分からないんですけど」

私はそれを訊いていた。

今の私達の関係は、実に片務的――私が彼から与えてもらうばかりで、私は彼に、何も与えられていない。もちろん彼もそれに期待してはいないのだろうけれど。

私だって、一緒にいることが許されるなら、少しくらいでもいい、私の存在が、彼の益になって欲しいと思う。

でも、私には、それが何なのか分からない。

「うーん」

先生は首を傾げた。

「マツオカさんも、サクライくんも、この学校でも稀に見る俊英だけど、二人のタイプって全く違うわよね。あなたは周りに合わせる『和』に長けているけれど、彼は絶対的な『個』よね。でも、どちらにも言えることは、二人ともそれが極端すぎるんじゃないか、ってことなのよね」

「極端？」

「そう。マツオカさんは周りに気を配りすぎるせいで、自分個人の

気持ちとかを表現するのが苦手でしょ？　そしてサクライくんの協調性のなさ、団体行動の出来なさは、言わずもがな……」

先生はふっと笑った。

「そんなマツオカさんが、サクライくんから学べることっていうのは、確かにあると思うの。まあ、他の先生方は、あなたと彼が親密になるのは、あまり快く思っていないけれど――あなた風に言えば、自分の気持ちを行動で表現する方法――かな？　確かにそれはあなたになくて、彼が持っているものだと思う。自己実現なんて、実際は自分で獲得しなくちゃいけないもので、彼はそのためには、力と覚悟が必要だってことを、よく知っているわ。学校での行動だって、自分の行動が失敗すれば、人一倍非難されることを承知の上で、それも覚悟してやっているからね。その点は、あなたも見習うところがあると思う」

「力と、覚悟……」

自己実現には、力と覚悟がいる。今の私には、その言葉の意味がよく分かる。

私は周りに気を遣いすぎて、自分の気持ちを押し通すのが苦手だ。最後は結局自分を押さえ込んでしまう。この学校で主席をとっても、それだけでは自分の生き方なんて見えてこない。

そんな私は、そのサクライくんの凛とした覚悟に驚嘆し、憧れたのだから。

「でも、マツオカさん」

タカヤマ先生が、私の目を覗き込む。

「あなたはサクライくんを尊敬しているみたいだけれど――サクライくんの生き方が全てじゃないってことは、あなたにもわかるでしょ？」

「……」

「あの子の生き方は、むしろ間違っているわ。このままだと、あの子はいつか確実にひとりぼっちになる。あの子自身、今の生活が、ちっとも楽しそうじゃないもの。あれだけの力を持ってて、ちっと

も幸せに今を生きてるって感じがしないでしょう？」
「あ……」
そう言われて、私は改めて彼を思う。
私は、彼が本当に笑っているところを、見たことがない。
自嘲とか、愛想笑いのような作り笑いならみたことがあるけれど、彼が本当に心から笑っている姿というのは、まだ見たことがない。
それどころか、彼の目が怒りや悲しみ以外の感情で満たされているところさえ、見たことがない。眠っている時でさえ、安らいでいる印象を抱くどころか、まるで野生動物が頭のどこかを緊張させて眠るような、そんな印象で。
「あの子、いつだってぶすっとしてるじゃない。だけど、あの子だって顔はいいんだし、もう少し目元が柔らかくなったら、きっとそれはすごくいいことだと思うのよ。あの子の力も、今は自分のためにしか使わないけれど、誰かのために使われることになれば、すごく素敵なことだと思うし」
「――そうですね。でもそれを本人に言ったら……」
「そうね。多分聞き入れないでしょうね。下手したら、怒るかもしれない」
「……」
私だって、サクライくんがそんな風になってくれたら、とても素敵だと思う。
でも――あの人は今、自分の人生に生きることに必死だ。それだけに、事情を何も知らない外野が、彼の人生に口を出す権利もない。それに大多数の人間が、彼よりも怠けているのだから、そんな人間の言葉などで、彼の人生を批判されたら、彼だって怒るのも当然だ。
「だからね、そうなってくれるには、本人が自分からそういうことに気づかないとダメなのよ。自分には、力以外にも目を向けなくちゃいけないものがある、ってね」
「力以外に、大切なもの……」
「そう。私は彼に、マツオカさんとの付き合いの中で、そういうこ

とを学んで欲しいのよね」
先生は私の目を覗き込む。
「え？」
「ふふ……」
先生は、戸惑う私に笑いかける。
「マツオカさん、自分じゃ気づいていないかもしれないけれど――あなたの笑顔って、とっても素敵よ。見ているこっちも幸せになるような、そんな風に笑うし。あなたが頑張っている姿を見ると、こっちも何だか頑張らなきゃ、っていう気持ちになるのよね。それは、あなたが今まで人と接してきた中で培われた才能だと思うの。表情がとっても素直だし、口下手だけど、相手に伝えようって頑張って言葉を紡いでくれる時とか、あなたの優しさを、ふっと感じるわ」
「……」
――似たようなことを、エンドウくんに言われたことがある。
私の頑張っている姿を見ると、周りもそんな気持ちにさせられる――本当にそうなのかな。だとすれば、嬉しいけれど……
「マツオカさんは美少女だけど、それだけの理由なら、ミスコン、あれだけぶっちぎりで優勝はしないと私は思うわ。あなたの表情のひとつひとつにこめられた優しさに、みんな票を入れたと思うのよ。ミスコン優勝は、それを裏付けた結果のひとつね」
「……」
「だから、マツオカさん。あなたと一緒にいたら、もしかしたらサクライくんも、少しは目元が柔らかくなるかもな、と思って、私は彼をあなたにけしかけたの」
「え？」
「見たところ、あの子は誰かにあまり優しくしてもらえたことがないみたいだしね。そんな彼に、あなたのその優しい微笑みを向けてあげていれば、そのうち彼も少しずつほぐれていくかもしれないから。私は彼に、マツオカさんを通じて、そういう気持ちを少し学んで欲しいのよね。私はマツオカさんには、そういう、人を優しい気

持ちにさせる才能があると思うから」
「……」
私にそんな力があるかは、正直私には、よく分からない。
でも、現時点でひとつだけ言えることは。
私は、彼に与えられるだけの存在ではいたくない、ということだけ。
タカヤマ先生の言うことは抽象的で、私が具体的に何をすればいいかという答えにはならなかったけれど。
私だって、彼が心から笑っているところを見てみたい。
そしてそれが私にとってのものであれば、とても嬉しい。
「――それにしてもマツオカさん」
そう再び私に呼びかけた先生の目は、私をからかう時の、あの小悪魔風の目になっていた。
「マツオカさん、サクライくんに、僕の近くにいろ、って言われた時、相当ドキドキしちゃったんじゃない？」
「へっ？」
そう言われて、私は図星を突かれて、目を見開いてしまう。
「――どうして、それを……」
私は思わず口走ってしまう。その2秒後に、自分が地雷を踏んだことに気づく。
「あ、あの、今のは……聞かなかったことに」
私の視線は重力に逆らえなくなり、自然に下がっていく。
「ふふ――どうやらマツオカさんも、サクライくんを通じて、色々と学ぶ感情があるみたいね」
「え？」
「ふふふ……」
先生は意味深な笑顔を浮かべる。
「ま、マツオカさんも、乙女ってことよね。いつだって、男を奮い立たせるのは、女だっていうし、マツオカさん自身も――ね」
「……」

「まあ、私からも彼に色々話してみるわよ、これからも今まで通り話すように、って」
「……」

――次の日になっても、私とサクライくんの関係は、今までと変わらず続いた。無視をしたり、遠ざけたりするようなことをサクライくんはするわけでもなく、かといって、距離が縮まったわけでもなく。教室では殆ど離せなかったけれど、早朝に雨が降っていれば、いつものように、顔を合わせて一緒に勉強が出来るくらいの距離感。
あのサクライくんの発現が効いて、私と彼が付き合っているとやっかまれることも激減した。
それは私としても喜ばしいことだけど。
今の私には、気になることがある。
アオイのこと――
アオイの気持ちを知りながら、私はこうして彼と一緒にいていいのだろうか。
でも、私自身、それを知っていても、どうしてあげればいいかも分からないし、サクライくんもアオイの気持ちに気づいていない。
だから結局、どうしてやることも出来なかったけれど――

この頃から、私とアオイ、そしてサクライくんの3人は、あの悲しみを背負うことが、既に確定していたのかもしれない。
アオイのことを分かっていても、何もできずに見ているだけ――いや、私は傷ついている人を見殺しにするどころか、もう十分傷ついている人に、もっと深い傷を、私は与えてしまった。
私には、誰かを優しい気持ちにさせる才能があるといわれたけれど。
私がこの時に限れば、私は自分のせいで、二人の大切な人を、本

当に深く傷つけてしまった。
アオイも、サクライくんも、私が……

Another story ～ 2－25

――7月に突入すると、埼玉高校ではすぐに体育祭が始まる。
体育祭では、私達1年E組は当然のようにトップを独走して、優勝した。2年後のサッカーU－20日本代表が3人も名を連ねるうちのクラスは、得点の高い徒競走とリレーを全制覇してしまったのだから、当然だ。
特にリレーの時のサクライくんとヒラヤマくんは圧巻だった。
クラブ対抗リレーでも、サッカー部は第一走者のエンドウくんが最初にトップに立ったものの、それ以降は陸上部や野球部に差をつけられて、トップとはかなりの差をつけられてしまった。
しかしそれをアンカー前走者のサクライくんは、一気に差を詰めて首位に立ち、アンカーのヒラヤマくんはそれをさらに突き放して、ぶっちぎりでゴールテープを切った。しかもそれをその後のクラス対抗リレーでも、20メートル以上の差をつけられていた1年E組を、二人で追いつくどころか、逆に20メートルの差をつけて、独走で1位をとってしまった。
二人の走りは、学校中の生徒の胸を熱くした。二人が走ったのは、各400メートル。時間にすれば1分にも満たない間のことだったけれど、その間に吹いた一陣の風は、7月の炎天下の暑さを吹き飛ばすほどに鮮烈だった。

そして体育祭が終わると、すぐに期末テストが始まる――

1学期期末テスト成績上位者（第1学年）

順位	氏名	クラス	平均点	所属部活
1位	マツオカ・シオリ	E	96.8	吹奏楽部
2位	サクライ・ケースケ	E	96.5	サッカー部

3位　サガラ・アオイ　　E　　86.7　　吹奏楽部――

期末テストの全日程が終了した翌日の朝、この結果が校内の進路指導室前の掲示板に貼り出された。

「マツオカ！　今回もよくやった！」

その日の私はすれ違う先生達に、例外なくそんな声をかけられた。クラスの友達よりも、先生達の讃辞の方が熱かった。

クラスでも、学年トップ3をわがクラスが独占したことが、クラスメイトの大きな話題となっていた。

「うーん、やっぱシオリとサクライくんは桁違いだわ。こりゃまた私達、教師達に怒られるんだろうな」

クラスの女子達が、私を囲んで、そんな愚痴をこぼす。

その私の隣で――

「アオイも、3位なんてすごいじゃない」

「ホントホント、いつの間にそんなに成績上げていたの？」

私の視線の先で、アオイがクラスメイトから、評価を改められていた。

「……」

アオイは真面目で、頭も決して悪くはない。むしろ学校でもいい方の部類で、中間テストでも、学年２０位以内にはしっかり名を連ねていた。

そして、この期末テストでの、大幅ジャンプアップ――

――これは、サクライくんを意識してのことだろうか。自分のことを覚えてもらうために。少しでも、彼に近付くために……

あの保健室の一件以来、私はアオイにサクライくんのことを訊いていない。私も誤解をされている身だし、自分からは彼の話題を出しづらい。

だけど体育祭で、サクライくんがリレーで他の選手をごぼう抜きしている時、大人しいアオイは他のクラスメイトと一緒にキャーキャー声を上げて彼を応援しながら、目をきらきらさせて、彼を見て

いた。
それを見てしまうと、もう訊くまでもないとさえ思ってしまうほどだ。アオイは本当に、彼に夢中だ。
――そうだ。サクライくんは。
「――あぁぁ……夏休み前の補習が決定だ……」
「俺は、再試でひとつでも落としたら、大会に出られないぜ」
「……」
サクライくんは教室の隅で、赤点を取って夏休み前の補習を受けるエンドウくんとヒラヤマくんを、呆れるような面持ちで見つめながら、何か思案に耽っているようだった。
その時の彼の目は、とても静かで、酷く退屈そうで……
――それはそうか。彼のいた中学は、赤点を取った怠け者に、再試なんて温情をかけたりしないで、そのまま退学にしてしまうようなところだ。彼の目には、再試なんてものが、とてもぬるいもののように思えるのかもしれない。

期末テストが終わると、私の所属する吹奏学部では、夏のコンクールに向けてのパート選考会を2週間後に控え、部員の練習にも熱が入り始めていた。
私はそこで苦戦を強いられていた。
部員全員での通し練習になると、いつも私はタカヤマ先生に音のダメ出しをされてしまう。
ソロで吹くのなら、私は練習の成果も出てきて、ようやく私のフルートも、音の乱れが少なくなり、譜面と随分近い演奏が可能になっていた。
なのに――どうしてもその通りに吹こうとすると、周りの音の邪魔をしてしまう。
――練習が終わり、私はミズキ、アオイの3人で、いつもの通り、下駄箱に降りてきていた。

「シオリ、ちょっと考えすぎじゃない？」
ミズキに言われた。
「もっと肩の力を抜けって先生にも言われてるし、私もそう思う」
「そうだよ。シオリはミスをしないようにって、緊張しすぎだと思う」
アオイにも同じことを言われる。
「……」
考えすぎか……
「ん？」
校舎の外に出ると、ミズキが首を傾げる。
その声に反応して、私とアオイが校舎の外を見る。
「あー、暑っちぃ、死ぬ……」
悲鳴にも似た声を上げながら、サッカー部の部員が、炎天下の中の練習を終え、部室へと帰っていくところだった。その中には、既に上半身のジャージを脱いで裸になっているエンドウくんとヒラヤマくんもいる。
私達の方へ向かってきた二人は、私達の姿を見るなり、足を止める。
「よお、うちのクラスのキレイどころの皆さん」
エンドウくんは特有の人懐っこい笑みで、右手を上げて挨拶する。
二人とも、随分絞られた体をしている。エンドウくんは頭から水を被ったようで、髪の毛がぬれている。でもまだ日が落ちていないし、すぐに乾いてしまうだろう。
「――部活に復帰できたの？　うちのクラスの赤点コンビは」
ミズキが笑みを浮かべる。
「うぐ……手厳しいな」
エンドウくんが苦虫を噛み潰したような顔をする。
「ケースケが俺の家で勉強合宿に付き合ってくれたから、なんとかな」
その横でヒラヤマくんが説明する。ヒラヤマくんは既に高校でも

トップクラスのサッカー選手だと聞いている。その体も、まるで彫刻のようだった。

「あ、あの、サクライくんは、一緒じゃないの？」

それを訊いたのは、アオイだった。

「ああ、あいつはもう帰った。今日もバイトだって。あいつは練習終わったら、真っ先に着替えて先輩待たずに帰っちまう」

「――そうなんだ」

アオイの少し残念そうな表情。

「……」

この炎天下の中でも、彼は休まずにバイトか……

――どうしてそこまでバイトばかりするんだろう。彼、入学後のあの大規模な賭けと、文化祭で、数十万をもう稼いでいるはずなのに。

「しかし、吹奏楽部の練習も、最近熱が入ってるみたいだな」

ヒラヤマくんが言った。

「最近サッカーやりながら、よく音が聴こえてくる」

「2週間後に大会に向けてのパート選考会だからね。みんな気合が入ってるのよ」

ミズキが言った。こういう時、男子に物怖じしないミズキは、話を進めるのに欠かせない。私と青いだけだと、男子の前では話が停滞してしまう。

「シオリはそれに今苦戦中だけどね」

「へえ、シオリさんも苦戦するものがあるのか」

エンドウくんが言った。サクライくんとの交流が増えたあたりから、私は二人と話す機会も何度かあって、次第に名前で呼ばれるようになった。

「でも――サッカー部も夏の大会があるんでしょ？　今はレギュラー決めの最中じゃないの？」

私は自分の話題を避けるために、自ら話を変えた。

「ああ、3日後に一応1年対上級生の紅白戦をやって、それが最終

選考らしい」
エンドウくんが言った。
「3人とも、選ばれそう？」
私は訊いた。文化祭、体育祭の活躍から、この3人はいまや学校中の注目を集めている3人だ。出来ることなら3人揃い踏みで選ばれて欲しい。
と言うよりも――私はサクライくんのサッカーの実力を知りたかったのだ。
私は入学以来、彼が早朝にサッカー部のグラウンドで、朝連に励んでいたことを知っている。いつだって短いダッシュと、ボールを壁に蹴って、止める訓練ばかりだったけれど。
正直彼はあの練習だけで、本当にレギュラーを狙っているのだろうかと思ってしまっていた。切り替えの早い彼のことだ。今年はベンチ入りを捨てて、基礎体力作りに専念するのではないか、当時サッカー素人の私には、分からなかったのだ。
「俺はもう確約済み。ジュンも選ばれるだろ。ケースケは、どうかね。チャンスがあるかも分からないが、個人的にはあって欲しいと思ってる」
ヒラヤマくんが言った。
「――やっぱり、すごいの？　サクライくんは」
アオイがヒラヤマくんに訊いた。
「どうかね――ただ、あいつは実戦経験はゼロだけど、センスと頭があるからな。あいつなら今の素人上がりの状態でも、結構面白いサッカーすると思うんだよな。正直他の部員の力はもう底が見えてるんだし……」
「……」
「少なくとも俺が監督なら使うけどね」

そして、3日後。

終業式が終わった直後のピッチで、埼玉高校サッカー部は、ベンチ入り選考の最終試験である紅白戦を行っていた。

私達のいる音楽室からは、その様子がよく見える。

既に校内でも、そのルックスと運動神経で、女子の人気者となっていたヒラヤマくんを見に、グラウンドの外には、炎天下なのにギャラリーさえいる。

「ねえねえ、サッカー部の試合、どうなってる？」

「まだ始まってないわよ。でも気になるなぁ。あの3人のサッカー、見てみたいよね」

もう既に吹奏楽部の先輩達も、サッカー部の試合が気になって仕方ないようだ。ヒラヤマくんもそうだけど、文化祭でのサクライくんの女装姿は、学校中の女子の心を掴んでしまったから。あの3人の破天荒さに、また今回も面白いことが起こりそうだと期待しているのだ。

だから、吹奏楽部も大会前で熱気が上がっているというのに、この日だけはどうも上手く集中できていなかった。

私もそうだった。私はサクライくんの出番があれば、見てみたかった。自分と同じ、初心者で、武器も少ない。その状態で、彼ならどう戦うのか、見てみたかったのだ。今、パート選考会に向けて苦しんでいる私は、サクライくんの姿にヒントを見出したかった。

「はぁ、今日はみんなダメダメね。いいわ、休憩取りましょう」

タカヤマ先生も、みんなの様子を見抜いて、特別に時間を作ってくれた。

先輩達もそう言われると、自分の楽器を置いて、窓の外に集まる。

私も先輩達に混ざって、窓の外を見ていた。

グラウンドでは、既に試合が始まっているところだった。長身のヒラヤマくんとエンドウくんは、ここからでもよくわかる。二人とも試合に出ている。

サクライくんは――まだ試合に出ていない。サイドラインの外で、体をストレッチで入念に伸ばしている小柄な人影が見える。あれが

サクライくんだ。
　きっと今、サクライくんは不機嫌だろうな。自分が出られない試合とか、あまり興味ないだろうし。
　試合は序盤、1年生チームの方が、先輩達を圧倒していた。当時既に１８０センチを越えている、Ｕ‐１５代表のヒラヤマくんは、高さ、スピード、パワー、全ての面で先輩達を圧倒していたし、中盤に控えるエンドウくんは、危険察知能力が高く、先輩達の攻撃をことごとく摘み取っている。周りに指示も出して、1年生チームの陣形は、殆ど乱れない。
　私もテニスをやっていたからわかるけれど、エンドウくんはまるで、優れたダブルスの後衛選手のような雰囲気だ。後衛がしっかりしていると、前衛が思い切りのいいプレーが出来る。このチームの中心は、間違いなくエンドウくんだ。地味で目立たない動きをしているけれど、彼のプレーが1年生チームのいいリズムを作り出している。
　だけど。
　もうヒラヤマくん自身を止めるのは無理と悟った上級生は、ヒラヤマくんのマークから、彼へのパスコースを塞ぐ作戦に切り替え始めた。この作戦が効を奏する。1年生チームはボール支配率は高いものの、攻めの手が止まってしまう。
　試合はこう着状態のまま、前半が終了。
「……」
　サッカーのことはよく分からないけれど。
　ひとつ分かったことはある。
　いくらヒラヤマくんが圧倒的な力を持っていても、それだけでは勝てないということだ。
　サッカーは一人の力だけで何とかなるものではない。もちろん下位の相手ならそれでもある程度の結果は出るけれど、もっと上を目指すなら、そうはいかない。それをこの前半のサッカーはよく現していたように思う。

エンドウくんは、このチームで全国を目指すと言っていたけれど、正直今のこのチームでは、全国に出場はかなり厳しいと思う。
多分前半プレーしてみて、それはあの二人も分かったことだと思う。
「あ、出てきた！」
先輩の一人が声を上げた。
後半試合開始時、ピッチにひときわ小柄な選手が登場。
「ようやく3人揃った！」
サクライくんだ。彼がこの二人に加わるだけで、やっぱり何かしてくれる期待感がある。
クラスで漫才みたいなことをやる時だって、二人より3人の方がキレが増しているしね。
「……」
――遂に出てきた。
走ることと、ボールを止めるだけの練習だけで、どこまで彼がやれるのか、お手並み拝見させてもらおう。

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　～　２－２５（後書き）

このアナザーストーリー、できれば最悪でも４０話までで終わらせたい…まさかこんな長い話になってしまうとは。作者の見積もりが甘くてすいません。

でも最近ものすごくアクセスが増えているので、とても嬉しいです。もうすぐ１０００ポイントを超えそうですし。

１０００ポイントを超えたら、キャラの人気投票が出来る場を作るかもしれないです。どうも作者の認識と、人気のあるキャラの認識が違うみたいなので、勉強のためにも…

Another story ～ 2－26

サクライくんはエンドウくんの横に着く。これは名前だけは知っている。「だぶるぼらんち」って言うんだよね。

キックオフ後、エンドウくんがセンターサークル付近でボールを受ける。

それからエンドウくんは、左サイドへドリブルをかけていく。

エンドウくんの動きに合わせて、相手のボランチもエンドウくんのマークへと流れる。

エンドウくんはそれを見計らって、踵でボールを後ろへと出した。

「え？」

あのキックは何？　ボールの勢いが弱すぎて、あそこには誰も……

その時。

一年生チームの後方から、すごい勢いで走ってきた小柄な人影がそのボールを受けると、相手が左に流れたことで、ほんの一瞬で来た中央のスペースを一気にすり抜け、そのまま一人でゴール前へ突進していった。

さっきまでヒラヤマくんのパスコースを塞ぐことに専念していた上級生のディフェンス陣は、その圧倒的な速さのドリブルにあわてて、後方へと下がってしまった。

しかしそれがいけなかった。ヒラヤマくんのパスコースを塞ぐことで、高く保たれていたディフェンスラインが下がってしまえば、ヒラヤマくんへのパスコースが出来てしまう（もちろん当時の私はそんなこと分かっていなかったけれど）。

サクライくんはそれを見計らって、ヒラヤマくんにボールを流した。

ヒラヤマくんはそれを受けると、上級生のディフェンス人は、サクライくんに気を取られていた分、能力に圧倒的な差があるヒラヤマくんを、ほとんどフリーの状態にしてしまっていた。ヒラヤマく

んは右足一閃、強烈なシュートをゴールネットに突き刺した。
ギャラリーが沸く。ヒラヤマくんは右手を上げて、隣にいるサクライくんの下へ駆け寄っていく。
「……」
それから上級生は、サクライくんにもマークを割くようになる。彼をスピードに乗せたら実に止めにくいと悟ってのことなのか、ボランチの選手が一人、ぴったりとマークにつくようになっていた。
サイドの選手が、中盤のサクライくんにボールを出す。サクライくんの背中には、相手がぴったりと突いていて、ボールを受けても前を向かせてもらえない――
だけど。
サクライくんは、ボールを足の裏で勢いを殺したと思うと、次の瞬間には、もうディフェンスの横を抜けて、次の一歩で完全にディフェンスを置き去りにしてしまっていた。
「――え？」
何をやったんだろう、今の――あまりに一瞬のことで，よく分からなかった。何でサクライくんは、あんな一瞬で、ディフェンスをすり抜けられたの？
――今度ボールが回ったら、もう一度注意して見てみよう……
またサクライくんが、ディフェンスを背負ったまま、ボールを受け――
いや、サクライくんはボールを軽く止めると、それと同時に相手を抜き去っている。ボールを受けたと同時に、一瞬で前を向きながら、背中に背負った相手のディフェンスの横をするりとすり抜けていく――
「――あ」
私はそのプレーのからくりが分かった。
ボールを止める技術だ。
しっかりとボールを止め、自分へのパスの勢いを殺しながら、サクライくんは、次のプレーにつなぎやすいボールの止め方をしてい

るんだ。

背負うディフェンスの動きを見ながら、相手のまったく警戒していない方向を見破って、その方向へ動きやすいボールの止め方をする。

そして、一歩目で相手を置き去りにするのは、そのサクライくんの爆発的な加速力だ。一歩目の足の蹴り出しで、一気に加速する。相手の選手は加速で劣るから、一度裏をかかれたら、絶対に対応できない。

――ようやく分かってきた。サクライくんのあの朝の練習の意味が。

彼は自分の今の武器が、スピードとスタミナであることを理解している。それを最大限生かすために、このワンプレーを磨いたんだ。ボールを受けた瞬間に、一気に加速に移れる態勢を作るトラップ技術と、第一歩目で相手を置き去りに出来る爆発的な一歩目の加速力――

実際サクライくんはこの試合、その技術だけで何回もディフェンスの裏をすり抜けてドリブル突破に持ち込むシーンを見せた。そのドリブルで幾度となくチャンスを演出した。2年後、彼が世界的プレーヤーになったのも、このボールを止める技術に長けていたこともある程度影響している。

後半、1年生チームはサクライくんが入ってから、ぐっとチームの運動量が増えた。

上級生がボールを持つと、サクライくんはその俊足と運動量で、中盤のどこにいても、先輩達に張り付いた。彼自身の軽量と、ディフェンスの経験不足のせいもあって、自分ひとりでは、まだなかなかボールは取れなかったけれど、彼は相手の足を止めるだけは、最低限確実にやってのけていたから、彼の稼いだ時間でエンドウくん達はしっかりと陣形を立て直すことが出来ていた。

そして攻撃になると、サクライくんは相手に少しでもスペースがあれば、必ずそこに走りこんだ。エンドウくんもそれを見逃さずに

パスを出し、何度も上級生の喉元を抉りにかかった。
「わぁ……」
２年後、サクライくんのドリブルは、「春風ドリブル」と称され、舞を踊るような華麗さがサッカーファンを魅了したが、当時の彼のプレースタイルは、まだまだ大味で荒削りだった。２年後にはパス、ドリブル、シュート、全ての面で高い技術を持つオールラウンダーに成長する彼だけど、当時まだフリーキッカーでもない彼は、パスやシュートは基礎を一通り学んだ程度の精度しかなく、パスで相手を崩す技術は皆無と言ってよかった。ドリブルもタッチが荒く、加速してしまうと手がつけられなかったけれど、前をふさがれると、フェイントもかけられないから、抜くことも出来ず、よく止められることもあった。
けれど当時の彼の、嵐のような激しいドリブルは、それだけでチームを勢いづけた。私は春風ドリブルも好きだけど、当時の彼の、嵐のような激しいドリブルも好きだ。スピードに乗ると、がむしゃらに走る分、見ていて心が高揚する。
まだ荒削りだったけれど、サクライくんが走りこみ、エンドウくんがそこにパスを出す。そしてサクライくんからヒラヤマくんにボールが通る……そのワンプレーが、常に私をワクワクさせた。この３人が連動すると、必ず何かが起こるような期待は、この頃から２年後も変わらずにあった。
サクライくんが入ったことで、１年生チームは中盤にもう一本心棒が通って、チームの流れもさらによくなった。彼のドリブルを警戒したことで、上級生はヒラヤマくんのパスコースを塞ぐだけに専念することは難しくなり、ヒラヤマくんのチャンスは大幅に増えた。守備でもサクライくんがその俊足とスタミナで、広範囲をカバーしてくれるために、相手チームの攻撃のスピードが落ちて、エンドウくんがとても守りやすくなり、ボール支配率はさらに増した。
それがすぐに結果に現れる。１年生チームは後半４０分だけで、ヒラヤマくんが５得点を挙げて、上級生チームを完封――圧勝で試

合を決めてしまった。
「……」
前半のサッカーも悪くはなかった。でも、後半のサッカーは、それとは比べ物にならないくらい美しかった。
私も彼ら3人の、息のぴったり合ったプレーに、心が躍った。私はこの試合の観戦を機に、本格的にサッカーにのめりこんでいくことになる。
そして――
「あ……」

「そうよマツオカさん。今までよりもずっと音がよくなったじゃない」
私のフルートの音色は、あの試合の直後から、急によくなったと、先生に絶賛された。
私は、さっきの試合を見ていて、ヒントを得たのだ。
私のような初心者が、譜面どおり完璧に吹こうと気を張っては、緊張で音は出ないし、何よりも周りの楽器の音も聴こえない。
今までの私は、ずっと自分の演奏を如何にやりきるかに頭がいっぱいで、周りの楽器の音を聴こうということに、頭が回らなかった。小さな頃から独奏専門だった私は、今までずっと、全てソロパートのつもりで全小節吹いてしまっていたんだ。だから私の音だけは、ひとつの楽団の音の中に溶け込めず、おかしな演奏にしてしまっていたんだ。
それに気づいた私は、少しミスをしてもいいから、周りの楽器の音をしっかり聴いて、周りの仲間がどんな演奏をしたいのかに気を配ることにした。そうすることで、私のフルートの音色も、楽団の音の中に溶け合うことができたのだった。
「……」
――すごい、こんなに変わるんだ。

今までは、気づかなかった。この吹奏楽部の演奏にも、表情があって。こうしてみんなで作り上げる演奏は、もちろん譜面も大事だけれど、それ以上に、その楽団の表情や輪郭のようなものがあって、それを如何に際立たせるかが重要だということにも気付いた。ようやく私は、効してみんなで演奏する音楽の醍醐味に辿り着くことが出来た。

それを気付かせてくれたのは――少ない武器の中で、自分のできることを最大限やっていたサクライくんのプレーと、走りこむサクライくん、パスを出すエンドウくん、フィニッシュを決めるヒラヤマくんの、3人の美しい連動したプレーだ。自分が初心者でも、私もあの3人のように、この楽団の中に溶け込みたい。その方法は必ずあるはずと思って、自分だけ上手く吹こうという考えを捨てて、それに徹しきって一度吹いてみたら、私の世界も変わった。

「……」

――やっぱり、サクライくんはすごい。

この時から私は、自分が困った時に、サクライくんならこういう時、どんな行動をとるか、ということをまず考えてみる癖がついたんだと思う。自分を客観視することにもなるし、何よりそうすると、自分でも思ってもみないような新しい発見に出会えたり、結果がついてくることが多かったからだ。

その度に私は、サクライくんからもっと教えを請いたいと、希うようになっていた。

――練習が終わって、私がミズキ、アオイと下駄箱に降りてきた時、再び私達は、練習から引き上げるサッカー部の面々と鉢合わせた。

私達の姿を見つけるなり、エンドウくんたちがこちらに向かってくる。今日はサクライくんもいる。

「見てくれよ。俺、背番号貰っちゃったぜ」

そう言ってエンドウくんは、自分の手に持っていた、ハンカチ大の布切れを差し上げた。そこには１９と書かれている。大会のベンチ入りの証だ。

「ま、当然だな」

ヒラヤマくんも私達に、背番号１１を見せる。この番号はスタメンの数字だ。１年生にしてヒラヤマくんはスタメンに抜擢されたということ。

「あ、あの――サクライくんは？」

アオイがさっきまで黙っていたサクライくんに問いかけた。

「……」

サクライくんはしばらく黙っていたけれど、自分の短パンのポケットから、持っている布切れを取り出し、開いて見せた。

そこには、２０と書かれていた。これは高校サッカーでは、ベンチ入り最後の選手に与えられる番号だ。

「ははは、ま、番号はドンジリだけど、なんにせよ、１年から俺たち３人ベンチ入りしたぜ」

エンドウくんが両隣にいるヒラヤマくんとサクライくんの肩を掴んだ。

「――やめろ、暑苦しい」

サクライくんは憮然として、エンドウくんの手をすり抜けた。

「……」

相変わらず涼しい顔――嬉しくないのかな？

「あ、あの、おめでとう……」

私の横のアオイが、サクライくんを見て、祝辞を述べた。

「……」

それを訊いてサクライくんは、しばらく押し黙っていたけれど、やがて一言、サンキュ、と、小さく言った。

――それから２週間後の吹奏楽部のパート選考会。私は見事フル

ートの第一走者に選ばれ、なんとソロパートまで与えられることとなった。

家族に報告したら、すごく喜んでくれたけれど。

このことを、サクライくんにも伝えたかった。私をここまで導いてくれたのは、サクライくんから貰ったヒントのおかげだったから。お礼も言いたかった。

でも――その機会が来るのは、まだずっと先……

もう学校は夏休みだ。前みたいに二人きりで会って話が出来る機会があるのは、しばらくないのだ。

「……」

私は生まれて初めて、今年の夏休みがすごく長く感じそうだな、と予感した。

Another story ～ 2－27

コンクール当日、私達はさいたま市内の市民会館で、自分達の演奏順を待っていた。さっきまでステージで他校の演奏を聴いていたのだけれど、今はステージの裏に移って、楽器の最終チェックを各自行っている。

はっきり言って埼玉高校の吹奏学部は、全国大会を狙える段階にはいない。練習時間も、部員数も少ない。いわゆる、自分達の演奏を楽しむという段階にいるような部活だ。

今まで全国大会のコンクールを目指していた私からすれば、ステージの規模も小さい。

だけど……

今回、私は一年生にして、フルートのソロパートを与えられてしまった。

自分ひとりの演奏なら、結果がボロボロでも、自分だけの責任だ。でも今日は違う。私にとってはじめての、みんなでの演奏。

今まで経験した演奏会とは、また違ったプレッシャーだ。

ここからでも、ステージで演奏している他校の演奏が聴こえて来る。やっぱりみんな上手い。

「……」

――でも。

私は初心者だ。技術に対してのことは、残念だけど言い訳は出来ない。

ここでひるんでしまっては、演奏の時、指が動かない。

それよりも、与えられたチャンスは、自分で掴みにいくくらいの気持ちで――今の自分に、何が出来るのかを、しっかり考えて、ステージに立たなくちゃ……

――あれ？　これって、全部サクライくんが言っていた言葉だ。

そう思ったら、何だか少しおかしくなってしまって、一人笑って

しまう。
――彼は今、サッカー部の試合に帯同して、県予選の準決勝を戦っている頃だ。なんでもエンドウくんと一緒に、毎試合後半から途中出場して、かなりの活躍を見せているらしい。新聞の地方欄にも、無名の埼玉高校の1年生トリオとして、特集されていた。
決勝に勝ち進んだら、私達も応援に行く――
――その時、大会であがって何も出来ませんでしたって気持ちで、サッカーの試合を見たくない。彼の前で演奏したくない。
「あれ？　シオリ」
私の隣で、アルトサックスを持つミズキが、肘で私を小突いた。
「さっきまでガチガチの顔してたのに、随分リラックスできたみたいね」
「えへへ……」
私は照れ笑いが出る。自分のモチベーションが、すごくいい感じになってきた。
「シオリ、すごいな。私は中学の時から、コンクールのこの感じは苦手で……」
隣のアオイはホルンを持ちながら、引きつった笑いを浮かべていた。

そしてその3日後、私達は埼玉にあるプロサッカーチーム、浦和レッズの本拠地にして、高校サッカー埼玉県予選決勝の舞台、埼玉スタジアムに来ている。
埼玉高校サッカー部は、創設以来初めて、県予選決勝にコマを進めたのだった。この時点でヒラヤマくんは、もう既に県予選得点王を確定させていて、その活躍によるものが大きかったけれど。
埼玉スタジアムは、私のイメージするサッカー場というのは、一線を画するような広さで、私はまるでおのぼりさんのように、周りをきょろきょろ見回していた。公式のサッカー場にくるのは、これ

が初めてのことだ。まさかこの2年後、このスタジアムのＶＩＰ席に座れることになるなんて、まだ考えられなかった頃。

決勝の相手は武栄高校。埼玉県のサッカー界では伝統の強豪校らしい。私立のマンモス校で、吹奏楽部やチア部の規模も桁違いで、本格的な応援団もいる。全校生徒総動員の応援に加え、父兄やＯＢもいるだろうその応援団は、３０００人はいそうだ。

対する埼玉高校は、県立で応援団の遠征費用も出ない（というか、ここまで運動部が勝ち進むこと自体が前代未聞なので、予算の想定に入っていなかったのだろう）上に、3年生はもうこの時期、殆ど全員、予備校か学校の夏期講習会に参加して不在。まともな応援団も存在しないため、エール交換もできないという有様だ。来ているのは私達吹奏楽部と、チア部、そしてサッカー部の父兄と生徒がちらほら――それらを全て合わせても、２００人にも満たないだろう。最大６万人収容できる、国内トップクラスのビッグスタジアムだから、余計にその数の貧相さが目立つ。

「あ、シオリ、アオイ、ミズキ！」

でも、私達のクラスメイトの殆どがスタジアムに顔を出していて、夏休みの仲、みんなと再会できたのは嬉しかった。

「みんな、焼けたね」

「えへへ、彼氏と海に行ったから。シオリは相変わらず白いなぁ。羨ましい」

クラスメイトとは、約１ヶ月ぶりの再会だ。やっぱり１６歳の夏休みでは、少し会わないだけで印象が変わる娘もいっぱいいる。髪の色を、普段学校では出来ないほどに明るくしている娘もいる。一瞬、誰だか分からなくなった娘もいる。

「しかしミズキは不機嫌そうね」

「あー暑い……なんでこんなところで応援なんか……」

ミズキはこの炎天下の中、こんな遠くまで連れ出されたことで、不満を漏らしている。

「でも、全国大会に言ったら、私達、きっと毎試合応援に来るよう

だよね」
その様子を見ていたアオイが言った。
「この前エンドウくんが、全国に行ったら、全国大会応援のマネージャーをやるアイドルが学校に来るかも、って言ってた」
「あはは！　エンドウくんらしいね。そんな理由で頑張るなんて」
「……」
なんだかんだ言って、みんなあの3人のこと、気になっているんだろうな。
でも――悪くない。この学校は、高校生活を楽しむとしたら、この1年しかないんだから。
そんな1年を、あの3人と同じクラスで過ごせる私達は、すごく運がよかった。
そして、私はサクライくんと出会った。自分を変えたいと願う私に道を示してくれて、迷った時には背中を押してくれて……
私は、サクライくんに出会えて、本当によかった。
「あ、あそこにいるよ」
クラスメイトの一人が、オペラグラスを覗いて、3人を見つける。
その娘が見る方向に目を向けると、試合前の3人は、揃ってグラウンドの外――ベンチ横のアップスペースを走って、アップをしている。
「3人とも、頑張ってー！」
クラスメイトが近くに来た3人にエールを送ると、それが聞こえたエンドウくんは、私達にVサインを見せた。
――スターティングメンバー発表では、今まで通り3人のうち、スタメンはヒラヤマくんだけ――エンドウくんとサクライくんはベンチスタート。
試合開始のホイッスルが鳴ってから20分後、埼玉高校の応援席は、完全に武栄高校の応援に飲み込まれてしまう。
前半20分で埼玉高校は、あっという間に2点を決められてしまった。序盤から武栄高校は全員で傘にかかって埼玉高校ゴールを侵

略しにかかり、まだ県内でも中の下程度の力しかない埼玉高校の守備陣は、強豪校の怒涛の攻めに、なす術もなく飲み込まれた。

ゲームプランの崩れた埼玉高校は、前半２０分で早くも一枚目のカードを切り、エンドウくんを投入。相手に支配され続けている中盤の鎮火を彼が担ってくれたおかげで、ようやくゲームが落ち着き始める。

だけど、もう遅かった。エンドウくんが投入されてからは、武栄高校はフォワードを一人前線に残してはいたが、残りの１０人は完全に引いてしまった。当時の埼玉高校には、優れたドリブラーも、正確無比なパサーもいないし、セットプレーでヒラヤマくんの力を引き出せるフリーキッカーもいなかった。さすがのヒラヤマくんも、これだけ引いて守られたら完全に孤立してしまうし、ボールを持てば、一気に囲まれてしまう。

当時埼玉高校で、一番パスの上手いエンドウくんが、ボランチの位置からヒラヤマくんにロングボールを放り込み続け、何とかそれをヒラヤマくんが意地でねじ込んで、１点を返したけれど、元々地力が違う。そのまま２－１で試合終了のホイッスルが鳴る。スコアは１点差だけれど、そのスコア以上の大敗だった。

そして、サクライくんはこの試合、最後まで出番がないまま敗退した。

試合終了後、もう交代枠を使い切ってしまったため、アップをやめてベンチに戻っていたサクライくんが、ベンチに座って、その試合をじっと見ていたのが印象的だった。

がらんどうのような目――味方の敗戦にも、何の情緒も沸かない目が。

「あー悔しい！　何でジュンを先発で使わないんだ。何でケースケを投入しなかったんだよ」

試合が終わった後、私達は久しぶりのクラスメイトの再会を兼ね

て、埼玉高校の県予選準優勝の慰労会をカラオケで開いていた。
普段クールなヒラヤマくんも、サッカーのことになると黙ってはいられないようで、はじめから随分とエキサイトしていた。さっきまでB，zをエンドウくんと二人でやけくそになって熱唱してみても、今日の試合のストレスが発散できないようだった。
「ユータ、それ以上は監督批判になるぜ。いい加減やめとけ」
エンドウくんがそんなヒラヤマくんを諫めた。
「でも、今日の試合は完全にうちのベンチワークを読まれていたな」
「だろ？　相手は完全に、お前とケースケが出る前に、勝負を決めにかかってたぜ？　失礼だが、うちの先輩達がたいしたことねぇの、はじめから相手の監督に見破られてやがった」
ヒラヤマくんが苦々しく言った。
私も同感だ。今日の試合に限っては、完全に采配負けだ。
学生スポーツのような一発勝負では、大体前半はどのチームも試合の入り方に気を配って、はじめから早いペースの打ち合いはしない。だからどちらも勝負をかけるのは後半――そこで足の速いサクライくんを投入して、中盤で相手を走らせ、疲れさせ、隙を作りやすくさせる。相手が疲れてくれれば、技術に乏しいサクライくんの速さが生きる。そしてヒラヤマくんが後半に点を取り、その点をエンドウくんを中心に守りきる――それが埼玉高校の必勝パターンだったはずだ。
しかし、相手が前半に試合の入りを大事になんて考えず、序盤からいきなり攻め立てられてしまうと、この磐石の試合運びはザルの計略に一変する。
「ま、しゃあねぇさ。お前と違って俺達は無名なうえに1年だし、決勝までに先発で使おうって信頼を監督から得られなかった俺達も悪い」
「でも、今日サクライくんの出番がなかったのは、どうしてなの？」
クラスメイトの一人が聞いた。
「ああ――多分監督が、こんな大事な場面で初心者入れて、あいつ

のヘマで負けたら自分の采配ミスになるからな。使うのに躊躇しちまったんだろ。ユータのゴールで1点差になっちまったし、その場面で余計初心者は入れにくいよ」

エンドウくんが説明した。

「ま、気持ちは分からんでもないが、もううちの先輩の身体能力のレベルじゃ、相手は安心して守ってたからな。イチバチでもいいから、あいつを投入して欲しかったぜ」

エンドウくんはため息をつく。

「――おっと、どうも負け試合の後だと愚痴っぽくなっていかんね。しかしこの大会、手ごたえはあった。ケースケがまさかこの短い期間であんなにサッカーが上手くなるとは思わなかったし。あいつがこれからパスとかの技術を身につけたら、マジでお前とケースケのホットラインが現実になりそうだし。全国だって夢じゃねぇぜ」

湿っぽくなるのを嫌って、エンドウくんは明るい話題を提起した。

「――で、そのもう一人のキーパーソンは、そんな二人の期待をよそに、今日もこうしてみんなの再会と、敗戦に浸ることもなく、バイトに出かけた……ってわけね」

ミズキがウーロン茶を手にしながら、言った。

「……」

もう一人のキーパーソン――サクライくんは、試合が終わるとまた今日も一人でさっさと帰ってしまった。クラスメイトの多くは、サクライくんとの再会も楽しみにしていたのに、みんな残念そうな顔をしていた。

敗退が決まった瞬間のサクライくんの目には、悔しさも無念さもなく、ただただ無風の水面のように静かな視線を向けているのみだった。サッカーの情熱など皆無。試合に出なかったのも、バイト前の休憩程度の認識しかないような……

「サクライくんって、ホント、打ち上げとかに顔出さないよね。ディズニーにも来なかったし。そんなに毎日働いてるのかしら」

クラスメイトの一人が疑問を提示した。さすがにみんな、彼の行

動の不可解さに疑問を抱いているようだった。
「どうかなぁ」
ミズキが首を傾げた。
「実は内緒で付き合ってる彼女がいて、その娘に会ってるとか。バイトして、その女の子に貢いでるとかね」
「え？」
アオイのびっくりする声。
「だって不自然っていうか――異常でしょ。あんなにバイトばかりしてるなんて。絶対彼女とのデートか何かにお金使ってるでしょ」
「……」
そ、そうか――今まで考えたことなかったけれど、サクライくんが学校外に恋人がいる可能性だって、あるんだよね……
みんなは知らないけど、彼のいた中学は国内有数の私立進学校だ。都内のお坊ちゃんばかりが集まる学校だし、その中で3年間主席、その上あれだけスポーツ万能で、顔立ちも女の子より綺麗なら、他校の女子が放っておかないだろう。もしかしたら、私立のお嬢様と、合コンとかも経験済みかも……都内の高校生って、そういうの進んでそうだし。
「……」
どうしよう――サクライくんに彼女とかいたら。
どんな女(ひと)だろう――あのサクライくんが、心を開く女の子って。
「そりゃないと思うよ」
ヒラヤマくんが言った。
「あいつのバイト先のコンビニ、俺達練習後によく行くもん。マジであいつ、働いてるよ」
「え？　コンビニで働いてるんだ。サクライくん」
「ああ、文化祭の時に知ったんだけどな」
エンドウくんが言った。
「あいつ、バイト先では割と人気者みたいだぜ。近所のじいちゃんばあちゃんにも慕われてたし」

「へえ、私も今度行ってみたいな」
クラスメイトの誰かが言った。
「しかし、あいつすげぇよ。サッカー部の練習もきついのに、自分で組んだ練習メニューもやってるし、その上バイトして、勉強もやってるんだろうし。初心者だったサッカーも、たった４ヶ月であそこまで上手くなって」
「あいつのスタミナは底なしだな。体は小さいけど、超人だよ、あいつは」
ヒラヤマくんとエンドウくんが、彼をそう評した。
「……」
この時、もうエンドウくんも、ヒラヤマくんも、他のクラスメイトも、もちろん私も――サクライくんのことを、不可能など何もない超人だと、信じて疑っていなかった。誰ももう彼を、ただの１５歳の少年だと見る人間はいなかった。
だけど――そんなことはないのだ。
高校に入ってからの彼が、自分の力だけで生きていくということに必死で、心が揺れないように、がむしゃらに生きていたことを、まだ私達は誰も知らなかった。
そして、そんな生活の中で、彼が日に日に疲弊していっていることに、まだ誰も気がついていなかった。
その疲労が、もう既に彼を押しつぶす寸前にまで来ていたのに……しかも、この時の私が、ミズキの言った一言を、妙に意識してしまっていた。
サクライくんに、彼女がいるのか――
彼のことも考えずに、そんなことが頭の中にずっと渦巻いていたのだ。
私は本当に、どうしようもない愚か者だったんだ。

Another story ～ 2－28

2学期の始業式――

少し身長も伸びて、肌も焼けたサクライくんは、４０日ぶりに教室で会うと、１学期の頃よりも、ずっと逞しくなったように見えた。

私が教室に入ると、彼はもう教室にいて……

自分の机に一人腰掛けて、何か真剣そうな面持ちで、便箋のようなものに目を通していた。

「あ……」

不意に顔を上げたサクライくんと目が合う。

「……」

そのサクライくんの無防備な視線を受けて、私の胸が小さく疼いた。

「お、おはよう。サクライくん」

それをごまかそうと、何とか私は挨拶を喉から搾り出した。

「――久し振りだな」

サクライくんは、私にそう言いながら、持っていた便箋を四つに折りたたんだ。

「……」

彼を目の前にすると、私はいつも戸惑う。

ぶっきらぼうで、何を考えているかよく分からなくて、無愛想で――中学時代、男子が何を考えているのか分からないと思っていた私にとって、サクライくんみたいな人は、自分の苦手な分野に入る人だと思っていた。

なのに、男子が苦手だった私が、こうして会話をしている――

だけど、彼と話をすると、胸が疼く……

――私、まだサクライくんの前だと、緊張しているのかな。男子と話しているわけだし。もう話せるようになって日も経つのに、慣れるどころか、日に日に私、彼の前での緊張が酷くなっているよう

な……

2学期になっても私は、毎日学校に朝6時に来ては、フルートの練習をして、朝7時からは授業の予習をする生活を続けていた。

そして、始業式から1週間ほど経った日のこと――

私は朝5時に、部屋の窓を打ち付ける窓の音で目が覚めてしまう。

朝起きて、窓を開けると、かなり強い雨が、まだ薄暗い早朝の街を包み込んでいた。

「……」

昨日の天気予報でも、今日が雨だと言っていたから、分かっていたことだけど、いざこうして雨の降る街を目の当たりにすると、私の胸はざわざわする。

図書室で、今日、会えるかな……2学期も、学校に来るかな……会えたら、嬉しいな……

教室にいると、彼は殆ど教室にいないから、2学期には言ってからは、まだ始業式での挨拶以来、会話を交わしていなかった。

連絡先を訊ければ、こんな悩みも少しは収まるというのは分かっているのだけれど、私はまだ、男子の連絡先を訊いたことがない。

どういうタイミングで訊けばいいのか分からなくて、いまだに私は、彼の連絡先を知らなかった。

2学期も、晴れた日は彼は毎日グラウンドで朝連をしている。何でも3年生が引退して、彼はヒラヤマくんの推薦で、新チームのプレースキッカーに選ばれたらしい。最近では朝連にヒラヤマくんも参加しだして、彼の蹴ったボールをヒラヤマくんがシュートする練習をよく繰り返している。

――ヒラヤマくんがいるんじゃ、図書室には来ないかな……

そう思いながらも、私は家で、コーンフレークと、昨日剥いて、ラップに包んで冷蔵庫の野菜室に入れてあった林檎の朝食を摂って、家を出る。

――音楽室で、今日もフルートの練習を終えて、1学期と同じ、いつもの時間に図書室に下りていく。

階段を下りて、図書室に向かいながら、私は何度も深呼吸を繰り返した。自然に自然に――1学期も同じだったんだから、と、自分に言い聞かせて。

そして、図書室の扉の前に到着。

私は、もう一度深呼吸をして、湿気を帯びた自分の髪を少し直してから、図書室の引き戸に手をかける――

その時。

「さ、サクライくん！　私と付き合ってくれませんか？」

そんな声が、おもむろに引き戸の向こうから聞こえてきた。

私は、わっ、わっ、と言う声を必死に飲み込みつつ、ばっと引き戸から手を離した。

な、何？　何なの？

私はその場から立ち去ろうとも考えたけど、あまりの唐突な出来事に、動けなくなってしまう。学校は早朝で静かだし、ちょっとでも物音を立てたら、私がここにいることに気付かれてしまうかもしれないし……

「――先輩」

よく通る声を、わざと低くして喋るような、落ち着いた独特の声――サクライくんの声が聞こえる。

「僕にそんな冗談言いに来てる前に、受験勉強を頑張る方が利口ですよ」

「じょ、冗談……」

「大学入れば新歓コンパで男もちやほやしてくれるし、彼氏が欲しいならその時の方が選り好みできるじゃないですか。わざわざこんな時期に新しい彼氏を作ろうなんて、非効率なことするのは時間の無駄でしょう。彼氏が欲しいなら、浪人しないように受験勉強頑張る方がいいですよ」

「……」

取り付く島もない。実に丁寧で物腰柔らかいけれど、彼はもう、完全に言葉で相手の女性を拒絶している。目の前にいるのに、きっともうその目には映っていない。

「――すいません。出来れば朝は静かに過ごしたいんです。疲れているんで――用が済んだのなら、もう……」

そうサクライくんの声が聞こえたと思うと。

いきなり図書室の引き戸が開いて、一人の女性が飛び出してきて、そのまま私のいる方向とは反対側の方へと、脱兎の如く、駆けていってしまう。あまりの勢いで、きっと私の姿は目に入らなかっただろう。

一瞬横顔が見えたけれど、すごく綺麗な先輩だった。子供体系の私より、ずっと背が高くて、顔のパーツもくっきりしていて……そんな先輩は、目から大粒の涙をこぼしていた。

「……」

図書室の、開きっぱなしの引き戸。

――そうか。そうだよね。入学当時から、あれだけ学校に名を売ったんだもの。元々顔立ちは綺麗なんだし、彼が学校でもて始めるのは、当たり前か……

私はもう、あまりの気まずさに、そこから立ち去ろうとも思ったけれど……

私の心にも、さっき彼が言った言葉の余韻が残っていた。あの相手を気遣うような言葉の裏にあった、誰も寄せ付けないような、強い拒絶……

彼からそんな、強い拒絶の意志を感じたのは、初めてで。

今、彼がどんな顔をしているかが、妙に気になった。

私はそっと、引き戸の外から、ひょこっと顔だけを出して、中を覗き込んだ。

そして、1学期と変わらない場所に、彼の姿を捉える。

頬杖を突いて、何か本のようなものに目を落としている。

「……」

その姿は、彼の言葉どおり、何だか酷く疲れているように見えた。
1学期の衣、この時間の彼は、目がとろんとしていて、眠たそうな顔をしていることが多かったのだけれど、それとは違う――もっと体の奥からの疲労が、体に重くのしかかっているような。
座っている彼の姿に、そんな印象を覚える。
「ん？」
私の気配を感じて、彼は顔を上げる。
「あ……」
私は、今の自分の状況をどう説明していいか分からず、体が固まる。
「――聞いてたのか」
サクライくんはそんな私を見て、深いため息を吐いた。
「ご、ごめんなさい……き、聞くつもりはなかったんだけど……」
「――いいさ。別に」
うろたえる私を気遣ってか、それとも面倒臭いからか、私の謝罪を彼はあっさりと受け流した。
「……」
私はそのまま、図書室の入り口に立ち尽くす。
彼のさっきの言葉の裏に隠された、あの強い拒絶。
それが私にも向けられたらと思うと――
――怖い。近付けない……
何でこんなに足が竦むのかも分からないけれど……
「――どうした？」
だけどサクライくんは、そうして足の竦む私を見て、怪訝な表情を向ける。
「……」
もう見つかってしまった以上、ここで踵を返すのも不自然だと思って、私は図書室の中に入り、引き戸を閉めて、彼の前の席に荷物を置いて、座った。1学期の頃と、全く変わらない二人の距離。
「……」

彼は優しい。私がうろたえているときは、いつだってそれに触れないで、気持ちが綺麗になるまで、待っていてくれる。

さっき聞こえた言葉だって、私の思い違いかもしれない。彼の言葉に感じた拒絶も、私が勝手にそう思い込んだだけかもしれないと一瞬思う。

でも――

よく考えると、彼はエンドウくんたちといる時だって、そうなんだ。ある程度のところまでなら、自分の領域に二人を踏み込ませてはいるけれど、それ以上のところに二人が踏み込むのを、決して許してはいない。

彼のその一途な目は、近くにいるのに、私達のことを見てはいない。もっと何か、ずっと遠くにある、何かを見ている。

その時、夏休みに訊いたミズキの言葉を思い出す。

あなたの心には、もう既に大切な人がいて――その人以外は、自分の心の中に入れてくれないの？

聞きたい――彼の心にあるものを、少しでもいいから……

「あ、あの……」

私は意を決して、サクライくんに声をかけた。

「あ、あの――さ、サクライくんって、彼女とか、いるの？」

「はい？」

サクライくんはそんな私の質問に、首を傾げた。

「――あ、ううん。実はあのサッカー部の決勝の後、クラスのみんなで集まって。どうしてサクライくんって、打ち上げとかいつも参加しないで、アルバイトばかりしているんだろうって話になって。そしたら、彼女とのデート資金のためじゃないかって、話になって……」

「……」

その時サクライくんは、ふっと一瞬だけ笑みをこぼした。

私はその笑みに、ひとつの違和感を覚える……

「そんなのいないよ」

それからサクライくんは、つっけんどんにそう答えた。
「あ――そ、そうなんだ！　えへへ……」
私は思わず引きつった笑いが出てしまう。
――そうか……彼女はいないんだ。
――あれ？　何で私、ほっとしているんだろう……
「――マツオカは？」
しかしほっとしている私に、彼の質問が飛ぶ。
「え？」
「――だって、ミスコン優勝者だし。もう何人か男をとっかえひっかえしたのかなって」
「そ、そんなこと、してないよ！」
私はとっさに立ち上がって、大きな声が出てしまう。
「――どうした？」
彼は突然の私のリアクションに、呆気に取られている。
「あ……」
私は立ち上がったまま、体が固まる。
――何やってるのよ、私……なんで彼の前だと、こう上手くいかないの？
でも……
彼はまだ、私の恋愛の妨げにならないように、私と距離を置いてくれるつもりで、こういうことを訊くのかな……
そういう気遣い、嬉しいんだけれど、何か嫌だったんだもん……
「ご、ごめんなさい」
「いや、いいけど」
二人の間に、ぎこちない空気が流れる。
「……」
――この人、本当に彼女がいないみたいだ。
私に対しての言葉も、彼女がいないと言った時も、まるで自分は恋愛というものに関わる必要がないと、はじめから二つの事象を全く関係のないものとして切り離しているかのようなものの言い方だ

った。私が男とどういう付き合い方をしようと、自分には関係のないことだと切り離している。

まるで、自分が誰かから愛されるなんて思っていないし、愛される必要すらも感じていない。そんな感じだ。

――彼の中で、恋愛って、どんな定義づけになるのだろう。

私もまだ、恋愛なんてものの定義かが自分の中で出来ていないけれど、いつか訊いてみたい。彼なら恋愛を、どういう風なものの見方で捉えるのか……

――何故、今聞いてしまわなかったかって？

それは、私が彼に、彼氏がいるかを訊いた時、明らかに彼の周りに流れる空気が変わったからだ。

正確に言えば、その後、一瞬だけ彼が小さな笑みをこぼした時から……

――後から思えば当然だ。彼は本当に、自分が生きるために、爪に火を灯すような思いで、疲れた体に鞭打って働いて貯めたお金を、そんなあぶく銭のためだなんて思われていたなんて、あまりに彼に対して失礼なことだ。彼の心中を察すれば、あまりに子供な私達に対して、腸が煮えくり返る思いだっただろう。

私はこの頃、幾度となくこうして、彼を無神経に傷つけていたのが分からなかったのだ。

それでも、この頃の彼は、体にのしかかる疲労に加えて、その胸を憤怒の炎で満たしながらも、そんな素振りを私達に少しも見せることがなかった。

それに……

――彼は始業式の約3週間後の全校集会で、また全校に名前を売ることになる。

夏休みの課題である読書感想文や、絵画、英語論文が、全て全国レベルの評価を受け、英語論文は、アメリカの国連主催の弁論大会の参加も打診されているというほどだという。

「サクライ・ケースケ！　壇上へ！　サクライ！　くそ、またあいつはサボりか」

しかし彼はその全校集会をサボっていたために、壇上で表彰を受けることはなかったのだけれど。それどころか、アメリカでの弁論大会の話もあっさり断ってしまい、学校のメンツを丸潰れにしたらしい。

これだけ優秀な成績を収めて、彼のパフォーマンスは2学期も換わらず健在で、彼を心配することなど、何もないのだとみんな思っていた。

でも――彼の快進撃もここまで。

あの事件を機に、彼は大きく自己のバランスを崩し、その胸に秘める美しい流れを、どんどん澱ませていくことになるのだった。

Another story ～ 2－29

１０月に入ると、残暑も徐々に落ち着き、風が少しずつ冷気を帯びてくる。学校の登校に、長袖の服を着てくる生徒が日に日に増えていく。

もうこの時期になると、５時台は日も出ておらず、真っ暗だ。さすがに６時に学校に行って、毎日学校に行くのが辛くなってくる。

でも、私はふかふかの布団の誘惑にも負けずに、今日も朝食を摂って、元気に朝６時の登校の路についていた。

この時期の早朝には、自転車を漕ぐのにそろそろ手袋とコートが必要だ。ふう――埼玉高校に入学した頃は、毎日私服で登校なんて、いいねってみんなから羨ましがられたけれど、あまり服を沢山持っていない私は、毎日の服にも困っている。

でも、運動部の人はもっと大変だろうなぁ。普段の私服に加えて練習着もあるし……

自転車で埼玉高校前の緩やかな長い坂道を下り降り、校門に入る。

「――あれ？」

一つ目の校門をくぐると、二つ目との校門の間には一本道――そして、その一本道の左右には、それぞれグラウンドがあり、私が今走る方から見て右手がサッカー部のグラウンドだ。

私がこの時間、学校に来ると、雨の降っていない日は大体もうサクライくんは、一人グラウンドを走っているのに、今日は姿が見えない。

――寝坊かな……

駐輪場に自転車を置いて、昇降口から音楽室へと上り、フルートを箱から出して組み立て、譜面台を準備。

それからまた窓の外からグラウンドを見ても、サクライくんは姿を現さない。

「……」

私が入学からの半年、ふかふかの布団の誘惑にも負けずに、毎日朝連を続けられた原動力は、間違いなく彼だった。一人だったら、誰も見ていないからと、甘えが出ていたかもしれない。でも彼からは私のフルートの音が聴こえる。彼にはごまかしが効かないから。

私は入学以来、ずっと彼の甘えを許さない姿勢に引っ張られて、ここまで頑張ってこれた。

その彼が、今日が練習に来ない……

1時間経って、私が図書室に場所を移しても、彼はまだグラウンドに姿を現さない。

私が知る中では、初めてのことだ。でも、彼も疲れてるし、こんなこともあるよね。

そう思っていた。

ところが。

図書室での予習を終え、8時30分、朝のHRの時間になっても、彼の机は空席のまま――学校にも姿を現さなかった。

さすがに心配になる――風邪でもひいたのかな、と。

いつも彼と一緒にいるエンドウくん、ヒラヤマくんも、彼のいない机を見て、首を傾げている。

そしてとうとう、サクライくんが不在のまま、担任のスズキ先生が来てしまう。この時点で彼の欠席か遅刻はもう確定だ。

――しかし、私はいつもはのんびりとした、小太りのスズキ先生の面持ちが、今日は酷く沈んでいるように見えることに、少し違和感を感じた。

その気付くか気付かないかという程度の違和感を感じ出した時、教壇に立ったスズキ先生は口を開いた。

「えー、今日は出席の前に、みんなに言っておかなければならないことがある」

普段は機械的に出席を取る先生が、私達を一瞥する。

「昨日の放課後、サクライが上級生3人と喧嘩をして、3日間の停学処分を受けた」

「え？」
クラスの方々で、声が上がる。教室がざわめく。
「静かに」
先生が私達を諫める。
「……」
――どういうこと？　サクライくんが喧嘩なんて――いつも物腰柔らかくて、落ち着いているあの人が、本当にそんなことを……
私はその報を聞いて、胸がざわざわした。
それから私はアオイの方を見る。アオイはもう顔から血の気が引いてしまっていた。
「先生、それで、ケースケは？」
真っ先にそれを訊いたのは、ヒラヤマくんだった。
「ああ――サクライの体は、特別大きな怪我はなかった。病院に行って、簡単な治療だけで済んだ」
それを訊いて、私の視線の先にいるアオイが、ふう、と息をつくのが見えた。私も安堵した。
「ただ、問題なのは上級生の方でな……」
しかし、先生はそんな私達の安堵に楔を放った。
「サクライは、その上級生3人を、相当こっぴどくやってしまってな――上級生は3人とも即病院送りで、全治2週間以上の大怪我を負った。一人は骨にヒビが入るまでやられていてな」
「えぇ？」
再び教室がどよめく。
それはそうだ。あの小柄なサクライくんが、複数の上級生と喧嘩をしたと聞けば、誰だって大怪我するのはサクライくんだと何となく思ってしまう。私もそうだった。それが全く逆で、大怪我をしたのは上級生の方だというのだから、話は随分違ってくる。
「あいつ――何やってんだか」
エンドウくんにいたっては、それを訊いて笑みまでこぼしている。いつも予想の斜め上を行く彼の行動にご満悦のようだ。

「まあ、喧嘩の理由は、上級生がサクライの生意気さ加減に腹を立てたということで、サクライをシメてやろうと呼び出してのものだったらしいから、上級生の方に非があったと認められて、上級生の方も1週間の停学処分を下した」
「ちょっと待ってくださいよ」
エンドウくんが立ち上がる。
「それじゃケースケは正当防衛で、悪くないじゃないですか。あいつまで停学処分を受ける必要はないでしょう」
確かにその通りだった。
「とは言っても、実際サクライは上級生にかなりの重傷を負わせた。それにサクライの運動神経なら、逃げようと思えば十分逃げられただろうと判断されてな」
スズキ先生はそう説明する。
「……」
そんなのはこじつけだ。先生達はみんな彼を嫌っているのだし、彼に自分達の手で罰を与えられると思って、わざわざ無意味に彼に停学処分を下したのだろう。本当は退学にしたかったのだろうけれど、そうするには、彼に非がなさ過ぎて、そこまでは踏み込めなかった。この停学はいわば、教師達の彼への報復だと、私はすぐに察した。
「とにかくだ、みんなにも心に留めておいてほしい。サクライはあの通りクソ生意気な奴だ。その上少しイカレた精神の持ち主だ。みんなもやりたい放題のあいつを気に入らないと思うこともあるかもしれないが、決してあいつに喧嘩を売るような真似だけはするな。今回だって下手をすれば上級生はもっとすごい怪我をしていたかもしれないし、次奴に喧嘩を売った奴は、一生に関わる怪我をするかもしれない。いいか、絶対にあいつに刺激を与えるような行動は慎むように。あいつは自分を傷つけようとする奴は、躊躇なく攻撃するからな」
そんな厳重注意をされた。

まるで、全てサクライくんが悪いような言い方だ。きっとサクライくんが大怪我をしたら、先生はここまでは言わなかっただろう。

でも――

上級生と喧嘩して、相手に大怪我を負わせた彼は、その時一体どんな気持ちだったのだろう……

確かに彼には不良っぽいところはあるけれど、暴力で物事を解決する人間には見えなかったのに……

それから3日間は、何事もなく過ぎた。

いつも彼と一緒にいるエンドウくんとヒラヤマくんは、その3日間、つまらなさそうに、窓の外ばかりを見て、アンニュイな空気を醸し出していた。

「元気ないね」

女子の一人が二人に聞いた。

「ああ、あいつって娯楽がないと、高校生活は退屈だな」

二人はそんなことを言っていた。

「……」

もうサクライくんは、あの二人の生活の一部にさえなりえているんだなぁ、と感心する。

「でも、サクライくん、あの体なのに、喧嘩も強いんだ」

「ホント、あんな女の子みたいな顔して」

クラスでは、彼が上級生を一人で叩きのめしたことで、彼を怖がるどころか、そのギャップに感嘆の声を上げるクラスメイトが多かった。

その中で、アオイは一人、彼の停学が明ける日を、指折り数えて待つ乙女のような表情になっていて、何ともいじらしかった。

でも、私も――

私もこの3日間は、どうも朝、フルートの練習をしていても、上の空で、指が上手く動いてくれないし、来ないことは分かっている

のに、音楽室からサッカー部のグラウンドを何度も見下ろしていた。
――なんと言うのか。彼がいないと、朝学校に来ることに、張り合いがないと言うか、胸にぽっかりとした穴が開いたような気分というのか……
停学になった彼は、家で今、何をしているんだろう。怪我自体はたいしたことはないとはいえ、それでも傷を負ったんだろうし、家でゆっくり体を休めているのだろうか……

そして、3日後に彼が登校してきた。
私達はその姿に言葉を失った。
彼の顔には、いまだにガーゼが何箇所も貼られていて、痣も出来、彼の女の子よりも綺麗な顔立ちは、酷い腫れがまだ引いていなかった。頭には包帯が巻かれている。そして彼の両の拳には、相手を殴りすぎたためか、バンテージが巻かれている。
教室の引き戸を開けて、彼がその姿で入ってきた時、教室はしんと静まり返った。
「……」
私も、彼のその姿を見て、絶句した。
彼のその傷ついた姿もそうだけれど――
それ以上に、そんな彼の纏う空気の凄絶さに。
普段学校では、感情のスイッチを切っているかのように、静かな空気を纏っていた彼が、まるで刺すような殺気を全身から垂れ流していた。
そして、その彼の目が……
彼の目に常に灯っていた、静かにチロチロと燃える炎が完全に消えており、ブラックホールのような漆黒の目には、どこまでも虚無が広がっていた。そんな目は鋭さばかりが増していて、上級生を容赦なく叩きのめして、病院送りにしたことが本当なのだと物語っていた。

「……」

知らない人が、そこにいるようだった。

私が憧れた、彼の纏う美しい空気は微塵もない……彼の周りの空気は、この時完全に澱みきっていた。まるで夢遊病者のような足取りで、体を引きずるように席についた。

「は――ははははは……」

その異常さに気付いているだろうけれど、あまりに教室の空気が重かったので、エンドウくんとヒラヤマくんが、彼に近付いていった。

「はは、ケースケ。久し振りだなぁ。随分男前振りが上がったじゃねぇか」

「上級生を3人ものしたんだって？　どうやったか、話を聞かせてくれよ」

何ともにこやかな、普段通りのノリで二人は声をかける。

けれど――

「――話しかけるな」

普段よりも、ずっと静かで、だけれど力強い彼の声が教室に響いた。

「……」

その声だけで、彼が今、正常な精神状態ではないということがわかった。まるで極限状態から帰ってきたばかりのように、彼の声は疲労に満ち溢れていて、体の傷以上に、彼の心身が酷く傷ついているのが分かった。

それから4日間――サクライくんは学校に来ると、前までと同じように、自分の机に鞄を置いて、HRの出席にだけ参加すると、すぐに教室を出て行き、誰にも口を開くことはなかった。

朝の僅かな時間だけ見かける彼の眼には、普段の光が戻らず、足取りも重く、疲労だけが彼の周りを支配していて、誰の声にも反応し

なかった。
　そんな、別人のようになってしまった彼に対して、私は何もできない。何も声をかけることが出来ない。
　そして、その日の朝――
突然、私達の教室に3人の男子生徒がやってきた。
3人とも顔はサクライくんよりもずっと酷く腫れており、一人は腕を吊っていて、青痣だらけの体をしていた。
　3人はためらいなく教室にずかずか入り込み、まだ包帯の取れないサクライくんの座る席を囲んだ。
教室ではみんな、その様子に背筋を凍らせていた。私もそうだ。誰も先生を呼ぼうにも、体が動かなかった。その時のサクライくんの発する嫌な空気が、全員の足を竦ませた。これからこの教室が、地獄絵図と化すような気がして……
「けっ、運のいい野郎だ。俺らに罪を擦り付けて、早々出てきやがって」
「だがな、今度はこうはいかねぇぞ」
「痛い目に合いたくなかったら、二度と粋がるんじゃねぇぞ」
　3人は口々に彼にそう言った。
「……」
　それを聞いたサクライくんはゆっくり立ち上がり、一人の目を見て言った。
「なんだ。まだ俺とやる気なのか」
　久し振りに聞く彼の声。暗く沈んだ声。その中に、明らかに怒りの色を滲ませた、震えるような声。
それに『俺』って……？
「お前達は3人がかりで、俺に負けたんだ。あの一敗で、俺との力の差がわからないようじゃ、何度やっても結果は同じだ」
「なんだと！」
　一人が彼の胸倉を掴む。しかし彼は相手の手首を掴んで逆方向にひねり上げる。その手は高く掲げられる。

「痛い痛い痛い！」
腕を締め上げられる先輩は声を上げる。
このやろう、と、あとの2人が言うと同時に、彼はその手を離した。3人は一歩下がり、僕と3メートルの距離を空けて正対する。
「ひとつ言っておいてやる。俺はこの学校の停学や退学なんて、なんとも思っていない。俺にとって高校は、大学受験資格さえ取れれば何でもよくて、ここを辞めても大検を受けて大学に行けばいいだけの話だからな。その意味がわかるか？　お前等を今以上に痛めつけることにも、俺は何の感情も抱かないってことだ」
そう言って、彼は一歩前に進む。3人は後ずさる。
「俺を恐がっているな。そんな程度の覚悟で、俺に喧嘩を売るんじゃねぇ！」
怒鳴るなり、自分の机を蹴り飛ばす。クラスメイトの女子の悲鳴。派手な音が残響する。
「失せろ」
「――」
3人はすごすごと教室を出て行った。
「……」
教室の空気が凍りついた。彼は自分の蹴り飛ばした机を引き上げようと、机に手をかけた。
そんな彼の姿を、私はずっと見つめながら。
思った。もう彼は、この学校を辞める気なのだと。
そして――最初から彼は、そうして大検を受けて、今すぐにでも大学に行きたいんだと。高校生活など、自分にとっては無意味どころか、自分の時間を無駄に浪費させる、憎むべき時間で――
そんな時間に出会ったエンドウくんやヒラヤマくん。そして私も――彼の中ではいつ何時、明日忘れろと言われれば、即忘れてしまう程度の人間でしかないことを、はっきりと思い知った。
私達にとって、かけがえのない時間をくれた彼にとって、私達など、いてもいなくてもどちらでもいい――どうでもいい存在だったのだ。

「……」
私の目から、一筋の涙が伝った。
彼のその言葉――そして、今のその、がらんどうのような目が、あまりに悲しくて。
そんな彼を、心から、引き止めなくちゃ、と思った。これで会えなくなるのは嫌だと、強く思った。
でも、私の足は動かない……
その時だった。
「ケースケ……」
不意にエンドウくんが彼に近付き、後ろから彼の肩に手を乗せた。
そして、サクライくんが振り向きかけた次の瞬間、エンドウくんは思い切り、彼の頬に右拳を叩き込んだ。サクライくんの軽量の体は、その一撃に机や椅子を巻き込みながら吹っ飛んだ。
「きゃっ」
そのすさまじい一撃に、教室で小さな悲鳴が上がった。
体にのしかかる机や椅子をどけながら、彼が上半身だけ起き上がった時――
「――おい」
彼はその動きを止め、怪訝な表情をエンドウくんに向けた。
エンドウくんが、泣いていたからだ。
溢れる涙をぬぐいもせずに、口を真一文字につぐんで。
やがてジュンイチは拳をおろし、僕の目と正対する。
「ケースケ。そんな悲しいこと、言うなよ……」
消えるような、哀願するような、震えたような声だった。
「確かに、お前みたいな天才にとっては、俺みたいな凡人といたって退屈だろう。この学校にだって、何の価値もないのかもしれない……だけど……俺はお前の、そんなひねくれてるけど一直線なところが好きなんだ。功利主義者みたいな顔して、困った奴をほっとけないような、不器用なお人好し加減が好きなんだ。俺やユータのおふざけに、涼しい顔してぶっ飛んだボケをかますお前の独特の間が

好きなんだ。冷静にパスを出すくせに、うちのチームが弱いから、押し込まれているポジションのカバーに、いつも走っていく、お前の素人丸出しのサッカーが好きなんだ。お前がいる、この高校生活が好きなんだ」

「……」

「俺はこの学校に入って、お前と出会えて、いつもユータとお前と3人でつるんでバカやって、すげぇ楽しかったよ。俺は、お前やユータのこと、親友だと思ってる。だから頼むから、そんな時間を無駄だなんて言わないでくれよ」

「……」

その彼の言葉を聞いて、彼はずっと怪訝な表情を浮かべていた。けれど、彼の目からは、先ほどまでの誰も寄せ付けないような刺々しさが消えて、その目に普段の優しさを少し取り戻していった。

彼がその拳を受けて、エンドウくんの涙を見て――どんな心境の変化があったかは分からない。

だけど……

彼は立ち上がると、自分の吐いているジーパンのすそを手で軽く払い、腕で口元を拭って、そのままエンドウくんの横を通り過ぎた。

そして、教室の引き戸を開けて、足を止めて、一言だけ言い残した。

「――悪かったな、ジュンイチ」

先ほどとは打って変わって、やわらかな響きの声だけを残して、彼はそのまま教室を出て行った。

その日、彼はもう二度と教室には戻らなかったけれど、次の日からは、ちゃんと朝のサッカーの自主練習にも復帰し、教室にも顔を出すようになった。あの刺々しいオーラも随分和らいでいた。

そして、この時から彼は、エンドウくんとヒラヤマくんを苗字でなく、名前で呼ぶようになった。

彼があの時、どんな心境の変化を起こしたのかは、私には分からない。きっとそれは、男の人同士の世界の話で、きっと女には理解

できないところなのだろう。
でも――今までは、別の絵画をつなぎ合わせたように、別の世界に立っていたような3人の姿が、この時から少しずつ、ひとつの絵として溶け合っているように見え始めたのが、すごく印象的で……
私と彼の一緒にいる姿は、周りの人の目には、まだこうは映らないだろうなということを思い知らされたのが、少し、悲しかった。
はじめて男の人をうらやましいと思った。こういう時、私も男なら、言葉じゃなく、別の何かで通じ合える何かをもてるのに、女である私は、彼と言葉を交わすことしか出来ないから。

でも――この事件をきっかけに、彼のたたずまいに、少しずつ疲労の陰りが見え始めたことは言うまでもない。
停学によって、今まで張り詰めていた糸が切れてしまったのか、それとも別の何かが原因かは分からないけれど。
これ以降の彼は、1年以上もの間、迷走を続けるのだった。

Another story ～ 2－30

１０月も終わりを迎え、中間テストが終わると、１年生は修学旅行を迎える。
行き先は定番の京都。県立高校なので、妥当な線だと思う。
私立に行けば、海外に行けたのになぁ、なんて、みんなは文句も言っていたけれど、さすがに修学旅行となると、テスト後の解放感も手伝って、みんな日に日にテンションが高まっていった。
私自身は、京都には何の不満もない。紅葉のシーズンに突入しているし、京都の庭園や寺社を回って、そんな景観を見ることが楽しみだった。
特に行ってみたい場所も決まっている。詩仙堂だ。ガイドブックの写真を見て、この庭園の美しさが本当に気に入った。京都の庭園では珍しく、庭園に降りて間近で散策が出来るらしいし、この美しい庭園を歩いてみたいと思ったのだ。
ＬＨＲの時間に、私達のクラスでも、修学旅行のグループ決めが行われた。３人以上のグループでの団体行動ということになる。
私は当然、アオイ、ミズキと組んだ。
でも、文化祭以来、うちのクラスはみんな仲がいい。特に女子同士は、文化祭でオムライスを協力して作った時の団結もあって、つながりが特に強かった。だから修学旅行も、グループはあるものの、殆どクラスの女子全員で同じところを回ろうと話が上がった。
「シオリ、私達も一緒に回っていい？」
「うん、みんなで回る方が楽しそうだしね」
私もそれに賛同した。私は割とクラスの女子の中では中心人物扱いだったのだ。自分では柄でもないと思っていたけれど。
「ねえ、じゃあついでに、あの３人も誘ってみない？」
女子のひとりが言った。
「あの３人って――あの３バカトリオのこと？」

ミズキが訊いた。
「そうそう。あの3人は多分一緒のグループだろうし。あの3人が一緒なら、多分他校のナンパが来ても、追い払ってくれるだろうし、楽しい旅行になりそうじゃない？　それにエンドウくん、歴史だけはすごいし、色々お寺とか回りながら、面白い話が聞けそうだし」
「――なるほど。ま、いい虫除けにもなるし、いいかもね」
ミズキがその言葉に納得を示した。
「……」
え？　ちょっと待って。それって……
修学旅行の間、私、サクライくんと一緒ってこと？
――嬉しい。
「シオリ、アオイ。それでもいい？」
「えっ？」
私とアオイ、それぞれ同時に、しゃっくりのような声が出る。
「あの3人と一緒でも、大丈夫かってこと」
ミズキが訊き直す。
「ああ――うん。そうだね。楽しい旅行になりそうだし」
「私も、大丈夫……」
私もアオイもそれを承諾した。
それを訊いて、私達字は女子全員で、教室の隅にいるエンドウくん達の元へと向かった。
エンドウくんとヒラヤマくんは困った表情をしている。そして、サクライくんは教室不在だ。グループなんて二人に任せて、自分はサボりだろうか。
女子の一人が代表して、二人に経緯を説明し、勧誘した。
「ナンパが来たら、守ってくれる。そんなボディーガード込みで、一緒にどう？」
「うーん」
ヒラヤマくんが困った顔をする。
「俺も女の子と一緒に回れるのは嬉しいんだけど、こっちもひとつ

条件出していい？」
　ヒラヤマくんは両手を合わせて、首を横に傾げる、ちょっと甘える感じのお願いのポーズを見せた。
「どこかのグループに、俺とジュンを入れてくれよ」
「え？」
　みんな首を傾げた。
「どうして？　ヒラヤマくん達3人で、もうグループできてるんでしょ？」
「いや、それが、ケースケは修学旅行に不参加でな」
　エンドウくんが苦笑いをしながら言った。
「え？」
「俺達もその3人でのグループで、男3人まったり京都旅行って思ってたのが、当てが外れてな。2人じゃグループ組めねぇし、かといって他の男子のところに入れてもらうのも、俺達みたいな濃いのがいたら、他のグループの観光の妨げになりそうで、気が引けて困ってたところなんだよ」
「……」
「だから、むしろ俺達からお願いするかな。雑用くらいならするんで、グループに名前貸してくれよ」
　エンドウくんもヒラヤマくんと並んでお願いのポーズをした。
「……」

――「え？　サクライくん、修学旅行に来ないの？」
「そうそう、打ち上げとかサボってても、修学旅行には来ると思ってたけど、まさか修学旅行まで行かないなんてね」
　私は今、アオイやミズキ、そして他クラスの吹奏楽部の同級生と、音楽室でお弁当を食べていた。音楽室にはタカヤマ先生もいる。
　他クラスにももう彼の名前は知れ渡っているし、あの風貌と、夏休みのサッカー部での活躍から、2学期になって彼のファンはどん

どん増えているのだ。
「……」
どうして彼は修学旅行に来ないんだろう。
お弁当にお箸を伸ばしながら、私は彼のその決断の意味に考えを巡らせていた。
でも――みんなは知らないけれど、彼の中学は超名門の私立だ。慶徳なんて、中学の頃から修学旅行は海外なんだろうし、そんなのを経験したら、国内の修学旅行なんて、しみったれてて行く価値もないということなのだろうか。
「あー、でも、サクライくんが修学旅行を欠席するのは、入学当時から決まっていたのよ」
それを聞いていたタカヤマ先生が、自分のお弁当を食べながら、言った。
「彼、合格通知が来てすぐ、学校に電話かけてきてね。入学金は払うから、修学旅行やオリエンテーション、遠足の分の学費は全額返せ、って言ってきたのよ」
「え？」
「はじめから行く気のない旅行代まで学費に組み込むな。欠席の意志をはじめから示しているのに金を取るのは詐欺だろう、とまで言ったのよ。要望どおり、その分の学費を返したんだけどね。これから入る学校の教師にそこまで言ったのよ。中学をまだ卒業してない男の子が。度胸があるというか、生意気というか」
「……」
確かに彼のことを、守銭奴なんて揶揄する人は多い。
でも――そこまで……
何でそこまでして、彼は自分のお金を使うのを嫌がるのだろう。
それを本人に聞く機会もないまま、修学旅行に沸き立つ私達を、隣家の騒音のように聞き流す彼の無機質な佇まいに見送られ、私達は修学旅行の旅路についた。

修学旅行――京都へ向かう新幹線の車中、私達はここ数日の解放感を爆発させるようにはしゃいでいた。

受験に専念させるために、1年生時に学校イベントが集中している埼玉高校では、修学旅行は通称、最後のバカンスと呼ばれる行事だ。これが終わると、同級生はこぞって予備校に通って、受験に備え始めることからそう呼ばれているらしい。進学校とはいえ、県立なのでそれ程充実した学習施設のない埼玉高校で、県立東大合格者数日本一を維持しているのは、みんながそうして1年生から予備校に通うためといっても過言ではなかった。

みんなそれが分かっているから、せめてこの修学旅行で思い出を作ろうと強く願っているのだった。

京都駅に着くと、京都駅からクラスごとにバスに乗って、宿泊先の旅館に到着。旅館で昼食を摂ると、学年全体で清水寺と八坂神社を観光。

その後は5時まで自由観光の時間だったので、私達は八坂神社から高台院、青蓮院を回った後、二条城へ移動し、二条城を観光した後、金閣寺へ移動、天候に恵まれ、池に映る逆さ金閣までも目にすることが出来た。その後学問の神様、菅原道真を祀る北野天満宮で学業成就のお参りをした。私はここで学業のお守りを買った。そこで時間が迫って、旅館へと帰ってきた。

「高台院ってのは豊臣秀吉の正室、北の政所、通称おねね様のことだな。ルイスフロイスはこの人を、日本の女王だって紹介してるんだ。でも秀吉の前では名古屋弁丸出しで話す、普通のおばちゃんって感じだったらしい」

「菅原道真は悲劇の人とされて神格化されてるけど、実際は妾もいたし、女遊びもしてる。そして意外と武芸に達者だったんだよ」

寺社を回るたびに、エンドウくんが歴史のトリビアを語ってくれて、それが面白かった。エンドウくんと回ると、寺社を回ることで、自分の知識も広がるので、一緒に回ることで、非常に実り多い観光

ができた。
　他校の修学旅行生のナンパに声をかけられもしたけれど、その時はヒラヤマくんが他校の男子の前に立ちふさがった。さすがに身長１８５センチにして、鍛えられた体を持つヒラヤマくんが立ちはだかれば、並みの男子は引き下がってしまう。なので私達は、安心して観光をすることも出来た。
紅葉も美しく、私達は何度も写真を撮った。紅葉のシーズンで、他の観光客も多く、団体で寺社を回る私達にとっては少し窮屈だったのが少しマイナスだったけれど、全体的に見れば、すごく有意義な時間を過ごせたと思う。
　紅葉の季節を回ると、今度は春――桜の季節の京都にも思いを馳せる。北野天満宮は紅葉も素晴らしかったけれど、梅の季節は白と赤の花が咲き乱れ、とても美しいらしい。その時期に、ここにまた来たいと思った。
「紅葉っていうと、嵐山あたりはすごくいいって聞くけど、そこまで行くと、色んなところを回る時間がなくなっちゃうんだよなぁ」
　エンドウくん達は本当は３人で叡山鉄道に乗って鞍馬まで行き、鞍馬寺から貴船神社まで足を伸ばそうと思っていたようだ。どうやら源義経がエンドウくんのお気に入りらしい。
　旅館に帰ると、クラスごとにお風呂に入り、それから大広間で夕食の時間となった。
「ねえねえシオリ、聞いた？」
　夕食、茶碗蒸しに匙を伸ばす私は、近くの女子に声をかけられる。
「女子のお風呂、覗いた男子が出たみたいよ」
「え？」
「ま、すぐ逃げられちゃったらしいから、誰がやったかまでは分からなかったらしいけどね」
「でも、うちの学年でそんなことやるのって、うちのクラスの男子くらいじゃないの？　エンドウくんとヒラヤマくんにのせられてさ」
「あはは、だねぇ。エンドウくんは、覗きではない、男のロマンの

探求行為だ！　みたいなこと言ったんだろうねぇ」
「……」
「覗きのお目当ては、ミスコン優勝者のシオリの裸かな？」
ミズキが言った。
「えっ？」
私は当惑する。
「ふふふ――シオリ、お風呂で見たけど、着やせするタイプだったわね。結構胸、あったじゃない」
「そ、そんな……」
「男子がさっき、湯上りのシオリをいやらしい目で見てたし」
「――もう、ミズキ、許してよぉ」

修学旅行の部屋はクラスごとに男女各2部屋、計4部屋に分かれる。
私達は夕食を済ませると、部屋に戻って、やっとひと段落をつけたところだった。東京駅に朝8時半現地集合の上に、新幹線で移動して即観光では、さすがに疲れた。
「でも、あの二人が本当に覗きを扇動したとしたら、この場にいたら、サクライくんも参加したのかな？」
不意に部屋で彼の名前が出る。もう時計は9時を回っていて、私達は部屋に布団を敷き終わった。布団の上にそれぞれ座って、今はみんなで話をしているところだ。
「さ、サクライくんはそんなことしないよ」
アオイが否定する。
「どうかなぁ。あの人固そうだけど、意外とノリで行動する人だからねぇ」
「ああ、分かる分かる。だからあの人も、成績いいのに3バカトリオなのよね」
「……」

サクライくんが女子風呂を覗くか……あまり想像したい絵面ではない。

でも――あの人って、ちっとも笑ったりしないけれど、あの賑やかなエンドウくんのボケにボケをかぶせたり、的確なツッコミを入れたりして、クラスメイトをよく笑わせている。

本当は、すごく明るくて、快活な人なのかもしれない。

私は彼のこと、何も知らない……

「でも、旅行であの3人と仲良くなれるチャンスだと思ったのに、サクライくんがいないと何か寂しいよね」

「私、彼氏にサクライくん直伝のオムライス作ったら、かなり株が上がっちゃったからね」

「何でもできるもんねぇあの人。それに女の子には優しいし――もっと話してみたいなぁ」

女子は口々に彼のことを口にする。

彼自身は修学旅行に来ていないのに。一緒にいなくても、こんなに話題になるなんて。

「ふふふ……」

ふと、私の横のミズキが、不遜な笑いを浮かべる。

「じゃ、オトコの話題が出たところで、修学旅行恒例のアレでもしますか」

笑みを浮かべたまま、ミズキは周りのクラスメイトを一瞥した。

「アレって？」

私は訊く。

「決まってるでしょ？　コイバナよ。コイバナ」

「コイバナ……」

「ふふふ」

ミズキは笑みを浮かべながら、その視線をアオイに定めた。

「特に私、アオイのコイバナ、聞きたいのよね」

「え？」

アオイは明らかに、腫れ物に触られたような反応を一瞬示した。

「アオイ。あんた、サクライくんのこと、好きなんでしょ」
ミズキがズバリ訊いた。
「いや。あの……」
「とぼけてもダメよ？　もうバレバレだからね」
やっぱり、ミズキももう気付いていたんだ。それはそうか。私でも分かるくらいだもん。
「……」
ミズキにそう追求されたら、もう自分では逃げ場がない。アオイはそう悟ったのか、一度つばを飲み込んでから、膝の上の手を握り拳にして、声を絞り出した。
「――うん。私、サクライくんのことが好き……大好き」

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　～　２－３０（後書き）

読者の皆さんに、作者からお願いがあります。

作者の活動報告、タイトル「人気投票」にて、この作品のキャラクター人気投票ができるＵＲＬがあります。

９月１０日までの短い間の投票期間ですが、この作品がどう捉えられているか作者も頭に入れつつ、今後も執筆をしたいので、協力していただけると嬉しいです。

勝手なお願いながら、お手すきの時間に投票よろしくお願いいたします。出来たら投票理由のコメントも添えていただけると嬉しいです。興味がない方はスルーしてください。

Another story ～ 2－31（前書き）

9月5日～10日の間、キャラクター人気投票実施中。詳しくは作者の活動報告、タイトル「人気投票」をご覧ください。

読者様の協力をお待ちしております。

Another story ～ 2－31

大好き――

普段大人しいアオイの口にしたその名詞は、私の耳にとても力強く残留した。

「やっぱりねぇ」

クラスの女子も、アオイの恋心に気付いていたらしい。みんな各々に頷く。

「アオイとか、シオリみたいな真面目な娘はやっぱ、サクライくんみたいな不良っぽい男の子を好きになるものなんだよね」

「……」

2学期になって、うちの学年の女子の人気は、完全にヒラヤマくんとサクライくんが二分している状態となった。

その中で、割と明るくて活発な女の子は、クールでちょっとおバカなヒラヤマくんを、真面目で大人しい女の子は、不良っぽいサクライくんのファンである率が高いと言われていた。

「確かにサクライくんはすごいし、顔も綺麗だとは思うけれど、私は恋愛対象としては見れないけどなぁ。ヒール履かない私より背が低いし」

ミズキは言った。

「アオイはサクライくんのどこが好きなの？」

ミズキはアオイの方を見る。

「……」

まるで恥部を見られているかのように、アオイの顔は真っ赤だ。

「――あの人の、目かな……」

だけど、アオイはもう、自分ひとりでその気持ちを抱え込んでいるのが苦しかったのか、自分の恋を語り始めた。

「文化祭の時に、私、はじめてオムレツを作った時、もうオムレツにさえならなくて、炒り卵になっちゃって。こんなの作ったら、絶

対笑われるか呆れられるかされると思って、すごく恥ずかしかったのね。でも、サクライくんは、普通に顔色を変えずにアドバイスをして、丁寧に教えてくれて――その時、ああ、サクライくんって、優しいな、って、思って……」

そのシーンを私は覚えている。初めて彼が文化祭のために、クラスの女子の前でオムライスを実演で作ってくれた時――その後、見様見真似でいいから作れと言われ、最初に前に出たのが私とアオイだった。

「それから私、サクライくんのことが気になって、気がつくとずっと彼を目で追っちゃって……」

「――それで、好きになっちゃった、と」

クラスの女子の一人が、俯き気味のアオイの顔を覗き込んだ。アオイは小さく頷いた。

「うん、見ているうちに、あの人の目に、すごく惹かれていっちゃって」

「目？」

ミズキが首を傾げる。

「――うん。サクライくんの目って、すごく綺麗なんだよね。情熱的だけど、少し沈んだ光があって――だけど一途で、濁りがなくて……同世代の男の子って、みんな目が少し濁って見えるのに、あの人だけは、何か違う気がするんだよ」

「目、ねぇ。それはアオイが、サクライくんに恋をしてるから、綺麗に見えてしまっているんじゃないの？」

ミズキはいまいち理解に苦しんでいるようだ。

「……」

でも、私はアオイの言っていること、ちょっと分かる気がする。

彼の目には、彼の今までの人生で培った、静かで深い知識の泉が湧いていて、だけどその知性の奥に、まるで生まれたての子供のような純粋さ、無邪気さが残っている。だから、他人を容姿や頭の良し悪しなどで差別したりしない。

「しかし、アオイ、サクライくんのこと語ってる時、恋する乙女の顔になってるなぁ。可愛い」
クラスメイトの一人が言った。
「アオイ、もしかして、ファーストラブ？」
「――うん。幼稚園とか、仲のいい男の子みたいなのもいたけれど、こんなにはっきり、男の人を意識したのは、初めてだと思う」
「キャー！」
クラスメイトが揃って声を上げる。
「……」
初恋――
私はまだ、それを知らないはずなのに。
でも――アオイの言った言葉は、私の中で、共感できる箇所が多かった。
だとしたら……
私も、サクライくんに今、恋しちゃってるのかな……
そんな考えが、頭をよぎった。
「……」
でも――もしそうだとしたら、すごく怖い……
彼に私の胸の奥に秘めた気持ちを知られるのが。それを知られたら、きっと、彼は……
異性のことを、大好き、と言うのは、家族や友達に言うのとは、全然違う。とても勇気のいることなんだと、私は思った。
だけど、目の前にいるアオイは、みんなの前で見世物にされる、小動物のようにおどおどしていたけれど。
その姿が、私には何故か、とても眩しいもののように思えた。
アオイはおどおどはしているけれど、サクライくんを好きだというところには寸分のブレもない。
それが、私には、とてもすごいことのように思えた。
今の私には、とても言えないから……
「初恋かぁ」

ミズキがまるで、自分の遠い過去を顧みるように、しみじみ口にした。
「しかし、相手があのサクライくんか……初恋の相手としては、あの人はかなりハードル高いと思うけどね」
「――うん」
アオイが力なく返事した。
「あの人をずっと見ているとさ、それを嫌でも思い知るから、すごく辛いの。私、あの人に自分のこと、少しは覚えてもらおうと思って、テストとかも頑張ってみたんだけど――全然ダメ。あの人は学年3位なんて、もう眼中にないんだって、思い知って……」
「……」
そう言って、アオイは私の方を見た。
「――サクライくんは、やっぱりシオリくらいでないと、見てくれないんだ、って、不安で……でもあの人を見るたびに、気持ちがどんどん大きくなっちゃって……」
そう言いながら、アオイの声は少し震えていた。
「……」
サクライくんのことを、こんなにも健気に思い、頑張ってきたアオイの言葉を聞きながら、私の胸がざわざわした。とても曖昧だけど、何だか胸焼けのような、嫌な気持ち……
「健気だなぁ、アオイ」
「うん、何だかアオイのこと、何か応援したくなっちゃったなぁ」
周りの女子が口々に言い始めた。
「……」
そのアオイの健気な想いが、私の心を打ったのも事実だった。
そして、同時に、思った。
私の想いは、恋心としてはまだ口に出せない。その勇気も、私にはまだない。だけどアオイはこうしてしっかりと想いを口にした。
その恐怖から逃げなかった。
――私は、遠慮すべきだな。

「アオイ」
私はアオイの顔を覗き込んだ。
「私――恋愛に疎いから、何が出来るかわからないけれど、アオイのこと、応援するよ」
私はそう口に出していた。
「え？」
アオイは目を見開いた。
「大丈夫だよ。サクライくん、割と優しいから。話しかけても別に大丈夫だと思うよ」
――何言ってるんだろう、私。変にそわそわして。しかも自分はまだいまだに彼に話しかけるのも緊張しているっていうのに。
だけど、私はこの時、アオイのその想いを、本当にすごいと思ったんだ。
彼への想いを曖昧なままにし続けている私より、口にしたアオイの方が、サクライくんの側にいるべきなんだと思った。アオイの誠実さに比べると、私が身を引いてでも、アオイを彼に近づけてやりたいと、そう思った。
でも――何でこんなに胸が苦しいのだろう……
「アオイ、よかったじゃない。サクライくんのことよく知ってるシオリが協力してくれたら、サクライくんと話すことくらいはやりやすそうじゃない」
クラスの女子は、私の協力宣言を聞いて、アオイの肩を叩いた。
「……」
そんなことない――私だって、彼のことは、何も知らない。
みんな私と彼が、学年トップを二人で争っているからって、私のことを特別みたいに見ているけれど。
特別扱いなんて、一度もされたことはない。
だから……
「――でも、正直言って、私だけじゃそういうの、力不足だと思う」
私は自分の考えを先に話した。

「やっぱり、彼を一番よく知っている人の話を聞いた方が、いいと思う」

――「わはははははは！」

私達の部屋に来たエンドウくんは、話を聞いて大笑いした。

「そうかぁ、サガラさんがケースケのことを。ひょっとしたらと思ったが、あの朴念仁にも、そこまで思ってくれる女の子ができるようになったか」

あれからメールで私達はエンドウくんとヒラヤマくんを私達の部屋に呼び、アオイの恋心を話した。

サクライくんのことに関してなら、この二人を頼るのが一番だ。普段はおちゃらけているけれど、真剣な時には、人一倍真剣になってくれる二人だ。二人ともフェミニストで、口も固いし。アオイも、二人になら話してもいいと承諾した。

「そうだなぁ。サガラさんがそんなにケースケのことを思ってくれているなら、俺は全然協力するぜ。あのデリカシーレス男も、恋をすれば少しはあの仏頂面もましになるだろうしな」

エンドウくんはアオイを安心させるように、笑顔を見せた。

「ユータ。お前も協力するよな」

エンドウくんは、隣にいるヒラヤマくんの方を見た。

「――ああ、するよ、協力」

それに対して、ヒラヤマくんの表情は、随分と落ち着いていた。

「アオイさん」

ヒラヤマくんはアオイの目を覗き込んだ。

「言っておくが、あの天然を落とすには、回りくどい手を使って、自分の好意に気付いてもらおうなんて、考えるなよ。どう転んだって、最後は君がメチャクチャどストレートな告白するしかないんだ。その点は覚悟決めるんだぞ」

「う、うん」

「協力はするが、最後にどう行動するかは君が決めるんだぞ。俺達は、君をケースケに近づけて、普通に二人で話せるくらいまでは、持っていってやるから。その先は、君が決めるんだぞ。もし怖くなったら、俺達に気兼ねすることない。いつでもやめていいから。その代わり、悩みがあれば、聞いてやるから、何でも話してくれよ」

彼は一言、それをアオイに強く念を押した。

――実は、この約1年後、私が彼に告白をした時も、ヒラヤマくんのこの言葉を少なからず参考にしたのだけれど、それはまた別の話。

次の日は一日自由行動での京都観光だ。

昨日は一日、京都駅から見て西側――金閣寺方面に集中したので、今日の私達は、京都の東側――銀閣寺方面の観光の予定を組んでいた。

私達はまず銀閣寺を拝観した後、紅葉の美しい哲学の道を歩きながら、南禅寺方面に向かい、南禅寺を経て平安神宮までを歩いて散策した。そしてその近くにある京都大学まで足を運んで、少し見学した。私達の学校からも、京大や阪大など、関東圏以外の旧帝大志望者がいるので、見てみたいというクラスメイトが何人かいたためだ。

「じゃあ、次はシオリの希望の詩仙堂ね」

それから私達は、北へと移動し、金福寺を散策した後、歩いて詩仙堂へと向かった。

「わぁ」

みんなその庭園の見事さに、声を上げた。

背の高い竹の梢から漏れる柔らかい光に包まれた、茅葺屋根の小さな庵、入り口の小さな門までの小道は、まるで森林の中にいるように涼しげで清々しく、畳の敷き詰められた庵の先――開け放たれた縁側には、白砂が敷き詰められて、紅葉と緑、そして秋の花が咲

き誇り、夢のように綺麗な庭園が広がっていた。かこん、と、鹿威しの音がそんな静謐な庭園に響き渡り、それがまた風流を演出していた。

案内の人が、庵の中で、抹茶とお茶菓子を勧めてくれたので、私はお金を払って、畳の上に正座し、抹茶をゆっくり飲みながら、この美しい庭園を眺めていた。

「……」

この景色を、サクライくんにも見せてあげたいと、ふと思った。景色を見ながら、私は彼のことを想った。

――どうしてだろう。最近の私は、美しいものを見た時、花鳥風月に触れた時、幸せな時、嬉しい時――彼の面影をふと思い出す。

そんな瞬間に、彼の奥底にある美しさを思い出させるから。

――でも。

もう私は今日から、アオイの恋を応援するんだ。

そう、決めたんだよね……

私は抹茶の入った茶碗を返すと、縁側に出ているサンダルを履いて、庭園に出てみる。すでに私達と一緒に来た女の子達は、もう庭園を各々散策している。白い砂の敷き詰められた庭園は、所々赤く染まった紅葉が落ちていて、その赤と白の自然なコントラストが美しかった。

「あ」

ふと、私の足元に、私の一番好きな花である竜胆が咲いていた。紅葉の赤と緑の中、薄紫色のこじんまりとしたアクセントは、竜胆の花の味わいをぐっと引き立てていた。

その竜胆の花を近くで見ようと、私はそこでしゃがんでみる。私の横には山茶花の木があって、赤い花が沢山咲いている。少しだけ花がもう落ちてしまっているのがまた秋らしくていい。私は落ちてしまった山茶花の花をひとつ拾って、掌に乗せ、それを眺めてみた。

「やっぱり絵になるなぁ」

ふと、私にそう声をかける男の人の声。私は声の方を振り向く。

「よぉ」
小さな段差を降りて、こちらにやってくるのは、ヒラヤマくんだった。
「シオリさんって、やっぱり花が似合うんだな」
ヒラヤマくんは私の横に来て、山茶花の木に目をやる。ここはみんながいる場所からは少し離れているから、今は実質二人きりで話せる場所だ。
「似合うかどうかは分からないけれど、花は好きよ」
私は言った。
この時の私は、まだヒラヤマくんにはエンドウくんのように、免疫がまだ出来ていなかった。ヒラヤマくんは入学以来、既に何人もの女性と付き合って、別れていると聞いていたから、そういうタイプの男子は、どうも男子がまだ苦手な私は、少し敬遠してしまっていた。
だから、私は次に、ヒラヤマくんと何を話せばいいのか、ちょっと困っていた。
だけど。
「しかし、そんなシオリさんも、可愛い顔に似合わず、残酷なことをするんだな」
唐突にヒラヤマくんは私にそう言った。
「え？」
私はしゃがんだまま、ヒラヤマくんの大柄な体を見上げる。
「アオイさんのことさ」
ヒラヤマくんは、私と目を合わせず、手を伸ばして、目の前の山茶花の花弁を指で撫でていた。
「君だってケースケと少しは一緒にいたんだ。もう気付いてただろ？」
「……」
「悪いけど、アオイさん、９９．９％の確率でケースケに振られるぞ」

ヒラヤマくんは、残酷な未来を口にした。

Another story ～ 2－31（後書き）

シオリのお気に入りスポット、詩仙堂は、作者のお勧め京都スポットでもあります。割とメジャーですけどね。作者としては京都通を気取るために、もっとマイナースポットを挙げたかったんですが。

京都に詳しくない人、京都に行ったら詩仙堂はお勧めです。

そのヒラヤマくんの言葉を訊いて、分かった。
私がずっとアオイに対して、痛みを抱えていた理由が。
アオイの想いを応援したいという私の気持ちは、嘘ではない。
だけど、私はもう、心のどこかで分かっていたんだ。アオイの想いが、決して彼に届くことはないことを。
「それって……別にアオイが悪いってことじゃないよね」
「ああ」
ヒラヤマくんは山茶花の木の向こうから、詩仙道の庭園をクラスメイトと散策しているアオイの方を窺っている。
「今のサクライくんには、誰が行っても無理……」
「だな。グラビアアイドル１０人がキワドイ水着着て、私達のこと、好きにしてください。て言うかメチャクチャにしてください、って迫ってもダメだろうな」
ヒラヤマくんのその例えは、女の私にはいまいちピンと来なかったけれど、言葉面から何となくすごい展開なのは伝わった。
言いたいことは分かる――サクライくんの心をものにするのは、それだけ難しいということ。
「――なんだ。分かってなかったのかと思ってた。シオリさんも分かってるんじゃないか」
ヒラヤマくんが息をついた。
「残念だけどよ、あいつには何人たりとも踏み込めない領域を持ってるんだよ。そして、そんなあいつが誰かの説得程度で、あいつが今見ているものから目を背けるとは思えない。誰にも邪魔できない何かを背負ってるんだよ。あいつは」
「……」
ヒラヤマくんのその、力ない呟きが、私の胸を疼かせる。
ずっと私が彼を見る視線の先――彼の纏う美しい空気の向こうに、

いつもおぼろげに見ていたもの――それをヒラヤマくんの言葉が、私の目に写してくれた。

彼は一緒にいる時、とても優しいけれど……

「――そっか。サクライくん、二人にもやっぱりそうなんだね。私くらいじゃまだ心を開いてくれてないの、分かってたけれど、二人にはそれなりに心を開いているのかと思った」

私は手に持つ山茶花の花に目を落とす。

「それが分かっているのに、ヒラヤマくんはどうして、アオイに協力する、って、言ったの？」

私は訊いた。

「――まあ、あの状況で、協力しないとは言いにくいかもしれないけれど……」

「協力はする気はあまりないよ」

ヒラヤマくんは言った。

「ジュンのバカ野郎は、ケースケに彼女が出来たらきっと面白いって思って、マジで協力する気みたいだけどな――俺がするのは、アオイさんを以下に傷つけずに、ケースケを諦めさせる協力さ」

「……」

「アオイさんが健気でいい娘だってのは、俺だって分かるからな。あまり傷つけたくはない――だからアオイさんをケースケに近付けて、ケースケの本当の姿を近くで見せてやる。そしたらアオイさんもいつか気付くだろう。ケースケに自分の気持ちが決して届くことはないって。それで告白をためらって、告白をしないまま、ケースケを諦めるのが、一番あの娘の痛みが軽くて済むだろうと思ってな」

「……」

その言葉を訊いて、私の脳裏に、サクライくんと一緒にいる、雨の日の学校の図書室が思い浮かんだ。

文化祭以降、彼と少しの間でも、二人きりでいられる時は、時間がゆっくりと流れて、なんとも幸せな気分になれた。

でも――いつからだろう。

一緒にいればいる程、彼の心が私にそれ以上の踏み込みを許さないのが、彼が何も言わなくても伝わってきて――それが心に痛みを与えるようになったのは。

その痛みを、これからアオイも味わうのだと思った。いや、アオイの今の想いを慮れば、その傷みは私の比ではないのかも知れない。

「――じゃあ、昨日ヒラヤマくんが、アオイにあれだけ告白しろって念を押したのは」

「そう、脅しだよ」

ヒラヤマくんが私の目を見る。

「アオイさんに、ケースケと結ばれるには、告白しかないって強迫観念を植え付けた。でも、アオイさんもこれからケースケと一緒にいられるようになったら、告白がどんどん怖くなるに決まってるんだ。そうなって、ケースケがいつか自分の想いに気付いてくれるなんて期待して、待ちに徹してズルズル行っちまったら、アオイさんは一層、自分の気持ちがケースケに届くことはないって、現実に打ちのめされちまう。アオイさんはケースケに費やした時間の分だけ傷つくことになる。だから、早いうちに無理だって悟らせるには、告白しかないって部分に念を押しておく方がいいのさ。その方が傷が浅い」

「……」

沈黙。

「――でも、それでアオイが、告白を諦められなかったら？」

私は訊いた。

「そうなったら、もう当事者の問題だな。ケースケの腕に期待するしかないだろ」

「……」

そうなったら、間違いなくアオイは傷つくだろう。アオイはまだ、サクライくんの本質を知らないのだ。文化祭前の私のように、ただ憧憬だけで彼を見ている。

「でも、ヒラヤマくんはそうさせないように動くのね。昨日もアオ

イに、悩みがあれば、何でも話してくれ、って言ってたし……」
「――まあ、な」
「――優しいね」
「俺はフェミニストだからな」
ちょっと意外だった。ヒラヤマくんはプレイボーイというイメージで、もう既に何人もの女性と付き合っては別れを繰り返している。女の子を振ることなんか、なんとも思っていないのかと思っていた。
「しかしシオリさん、そこまで分かっているなら、何でアオイさんに協力するなんて言ったんだよ」
今度はヒラヤマくんに私が質問された。
「……」
本当に――私のとった行動は、ヒラヤマくんからしたら、軽率そのものだろう。
私が彼の本質を、まだ十分捉えきれていないというのもある。
でも……
「アオイが、サクライくんのことを、大好き、って言ったのよ」
「ん？」
「あの大人しいアオイが、サクライくんのことをそんな風に、みんなの前で言ったの。それを見て、ああ、すごいな、って、思って。同時に、私はアオイがうらやましかったんだと思う」
「うらやましい？」
「私、恋愛とかを上手く捉えられていないけれど、そういう概念自体は信じているの。家族愛とか、そういう愛の形は信じているから、きっと、異性の間の愛の形も、存在するんだと思う――だから、アオイの今抱いている愛情を、否定したくなかったのかな。あの大人しいアオイが、あんなに勇気を振り絞れたんだから。誰かを好きになることが悪いわけじゃないんだから。確かに可能性は低いかもしれないけれど、サクライくんにも、それが伝わってくれたら、最高だと思う」
「――意外だな。シオリさんはケースケを好きなのかと思っていた

けれど」
「……」
文化祭で、私が彼に、あなたを見極めたい、と言った時――
あの時の私は、ただ現状にいっぱいいっぱいで、彼と付き合いたい、特別な関係になりたいなんて、そんな未来を1ミリだって想像できなかった。多分、今もそうなのだと思う。
そんな私の想いが、アオイの真剣な想いに、どうして割り込めるだろう……
「まあいいさ。俺だってアオイさんの想いがケースケに届けば、それはそれで最高だと思ってる。シオリさんと気持ちは一緒だよ」
ヒラヤマくんが言った。
そんな言葉を最後に、私達の京都での修学旅行は終わった。

この時の私は、アオイの想いの強さを知って、臆病になった。
私はこの時、自分の気持から目を背けようとした。
まだ私自身、そのことに気付いていなかったけれど……

修学旅行では、私はたくさんのお土産を買った。八つ橋や阿闍梨餅――家族や親戚、部活の先輩達の分も。
その中にひとつ――ひとつだけ食べ物ではない、小さなお守りがある。
幸福招来――私がお寺で買ったお守り。
サクライくんに渡そうと思って買ったお守りだった。
なんだかんだ言っても、私は彼にお世話になっているから。でも、食べ物はエンドウくん達があげるだろうから、あえて裏を狙った、というものなのだけれど。
でも――どうやって渡そう。
そんなことを、帰りの車中で考えていた。

アオイに協力すると言った以上、私は彼とこれ以上、二人きりになるのは避けるべきだ。かといって、人前で彼にお土産を渡す勇気もない。

どうしよう――

そんなことを考えているうちに、私達は学校に到着し、その場でみんな現地解散となってしまった。

「あ、シオリさん」

学校で解散になり、みんなが校門の方へと歩いていく人ごみの中、私はエンドウくんに呼び止められる。エンドウくんの後ろには、ヒラヤマくんもいる。

「つかぬ事をお伺いしますが、川越駅の近くで、今工事しているマンションに心当たり、ないかな？」

「え？」

「実はケースケの奴が、そこで今日働いているらしいんだよね。このまま帰るついでに、土産を渡しに行く、って、行っててさ。でも俺達、正確な場所知らないし、ケースケは携帯持ってないから、連絡できないし……」

「サクライくん、携帯持ってないの？」

私はその事実を初めて知った。

「必要ない、って。バイトしてて携帯持ってないなんて、日本中でいまどきあいつくらいのもんだと思うけどね」

「……」

――それはつまり、携帯にお金を払ってまで連絡を他人と取る気はない、ということか。

――でも。

私も丁度、彼へのお土産をどうしようかと思っていたところだった。

日を空ければ空けるほど、渡しづらくなるのがお土産というし――この誘いに乗って、一気に渡してしまおうと思った。

――地元民の私は、駅前のマンションの場所は、大体知っている。

駅前の一等地に高層マンションが出来ると、話題になっていた場所だ。
　駅から歩いて１０分、私達は重い荷物と、旅行で疲れた体を引きずって、その工事現場にやってきていた。
　もうマンションは、概観は殆ど竣工したといっていいほどの状態だったけれど、いまだにマンションの周りには、ヘルメットを被って作業着を着ている人が多くいた。鉄骨やら、そういうものがごちゃごちゃしている状態ではなく、今は内装工事の段階に入っているようだった。マンションの周りには、白い折りたたみ式の敷居が設けられている。
「ありがとう。どうやらここみたいだよ」
　ここまで道案内した私に、エンドウくんがお礼を言った。
「しかし、ここでケースケを見つけるのは大変かもな。どうする？」
　ヒラヤマくんが訊いた。
「誰かに訊けばいいだろ」
　エンドウくんがそう言った折節、そのマンションを囲う敷居の中に入っていく、作業着の男の人を見かける。
「すいませーん」
　エンドウくんは迷わずその男の人に声をかけた。見た目はヒラヤマくんと同じくらいの背丈だが、筋肉もがっしりしていて、特に腕は丸太のように太い、体重１００キロはありそうな大きな人だった。
「あの、ここで今、サクライって奴が働いていませんか？」
「サクライ――ああ、坊ちゃんか」
　大柄な男の人は、ひとつ頷く。
「じゃあ、親方のところに案内するから、坊ちゃんに用があるなら、親方に交渉してくれ」
　そう言って、その男の人は、私達に、一応決まりだからと、予備のヘルメットをくれて、私達も敷居の中に入れてくれた。
　工事現場の中に設けられた、プレハブのような休憩場の横にトラックが止まっていて、その横に、４０代くらいの日に焼けたたくま

しい中年の男性がいた。どうやらこの人が親方という人らしい。さっきの人がその人に口を聞いてくれた。大柄な男性はそれを伝えると、マンションの方へと行ってしまう。

「ほぉ、坊ちゃんのお友達か。それにしても二人とも、ガタイいいねぇ。うちで働いてほしいくらいだよ」

親方は私の横の二人をしげしげと見回した。

坊ちゃん――どうやらそれが彼のこの仕事場での愛称らしい。そして、この職場でも、随分と好かれているようだ。この反応を見れば、少しは分かる。

「もう少ししたら坊ちゃんも、一度ここに降りてくるだろうからね。それまで待っているといい」

親方はそう言った。

その親方の隣に止まっている大きなトラックは、荷台が解放されていて、そこには分厚いベニヤ板のようなものが沢山積まれている。

「あの、今は何の仕事をしているんですか？」

エンドウくんが世間話のように、親方に訊いた。

「ああ、マンションの壁に入れる断熱材を運んでいるんだよ」

「断熱材？」

「おお、そうだ。君、試しにこれ、持ってみないか？」

そう言って親方は、トラックの荷台に乗って、その中に入っているベニヤ板のようなものを1枚取り出して見せ、それをエンドウくんに差し出して見せた。

「うおっ！」

エンドウくんはそれを受け取ると、親方が手を離した瞬間に体をよろけさせた。

「重てぇ！」

大柄で、手を使わないサッカーとはいえ、スポーツをしているエンドウくんでさえ、そう言った。

「それ1枚で20キロあるんだ」

親方が言った。

「しかし断熱材ってのは厄介な代物でね。クレーンで吊って、高層の階に運ぼうとすると、重みや衝撃で割れてしまう、脆い出来のものなんだ。だから人間がいちいち階段を上って、手作業で中に運ぶんだよ」

「え？　じゃあこんな重いのを、手で運んで、しかも階段を上るのを、何度も？」

「ああ、それもそれ1枚じゃない。坊ちゃんはそれを3枚いっぺんに運ぶぞ」

「……」

その説明を聞いた折、さっきとは別の大柄な黒いTシャツを来た男の人がやってくる。その男の人も、丸太のような太い腕で、その断熱材を4枚一気に持ち、うおおっと掛け声一番、両手でそれを引き上げ、そのままマンションの方へ向かっていった。

「すげぇ。4枚も」

1枚持ったエンドウくんは、その光景に驚嘆していた。

「もちろん、ただ運ぶだけじゃダメだ。重みで階段に落として、断熱材を傷つけたり、割ってしまってもダメ。運びながら、途中で置いて休憩しながら運んでもダメ。パワーと迅速さ、スタミナがいる仕事なんだよ。誰でもできる仕事じゃない。その代わり時給はいいぞ。1時間3500円だ」

「……」

「お、来た。おーい、坊ちゃん！」

呆然と立ち尽くす私達の向こうに、親方が手を振る。

振り向くとそこには、白のTシャツにチノパンという格好で、ヘルメットを被ったサクライくんが、こちらに向かってきていた。

「――お前達」

私達の姿を確認して、サクライくんは呟いた。

「坊ちゃんの学校の友達らしいな。坊ちゃんに用があるらしいんでな。坊ちゃんももう仕事終わりだろう？」

親方が言った。

「――いえ、僕のフロアは、もう1往復ですかね」
それだけ言うと、サクライくんはトラックの横に置いてあるヤカンを手に取って、横にある湯飲みに、そのヤカンの氷水を注いで、それを一口飲んだ。
「ちょっと待ってろ」
サクライくんは私達にそれだけ言い残すと、トラックに乗り込んで、断熱材を3枚一気に持ち、それを引き上げ、トラックを降りて、そのまま私達の横を通り過ぎる。
歯を食いしばって、彼の細面な顔は、それでも辛いところを見せないように、平静を装うように――
「……」
私達は、そんなサクライくんの小柄な背中を、じっと見送るしかなかった。
「あいつは――この3日間、ずっとこの仕事を?」
ヒラヤマくんが呟いた。
「ああ、フルタイムでね」
親方は答えた。
「時給がいいから、この仕事、志望者も多いんだが、断熱材を持てなきゃ話にならない。だからまずテストをするんだが、坊ちゃんはあの通り小柄だろ? はじめは僕も、この子はダメだと思ったけれど、あの通りあの細腕で断熱材を持ったんだよ。あの体じゃ人一倍きつい仕事なのに、スピードとスタミナでパワー不足を補って、他の体の大きな仕事仲間よりも働いてる。全く、根性あるよ、坊ちゃんは」
親方が、もうマンションの中に消えたサクライくんの後ろ姿を見送りながら、そう言った。
「……」
こんな辛い仕事を、私達が修学旅行で浮かれている間、ずっと?
いや、きっとこの仕事の後、普段のコンビニのバイトも行っているだろう。もう彼の今の肉体は、疲労のピークのはずだ。

そして、さっき私達の横を通り過ぎた彼の姿――

そこには、学校で天才少年と謳われる彼の姿はどこにもない。

まるで、昔の権力者の古墳やピラミッドを作るために駆り出された、奴隷のように見えた。首枷をはめられ、ひたすら石を積む作業に明け暮れる――そんな古代の奴隷のような……

――何故？　何故あなたがそこまでして……

「あ、あの、ごめん。私、帰るね」

「え？」

私はそれだけ言い残すと、エンドウくんのひきとめる言葉も聞かずに、その工事現場を走り出ていってしまった。

――「お姉ちゃん、お帰りー」

家に帰ると、妹のシズカが私を出迎えてくれたけれど、私はそれを通り過ぎて、自分の部屋にこもり、荷物を置くと、電気も点けずに、自分のベッドに倒れこんだ。

右手には、彼に渡すはずだったお守りが握り締められている。

「……」

――とても渡せなかった。

奴隷のように働き続けているあの人に、さっきまで高校生活最後の休暇と羽を伸ばしていた私が、親に貰ったお小遣いで買ったお土産など、とても彼に渡せない……

そして、同時に彼のあの姿を見て、思った。

サクライくんはアオイを９９．９％の確率で振るだろうと、ヒラヤマくんは言った。

でも、それは間違いだと、はっきりと分かった。

９９．９％なんて、そんな希望が残された数字ではない。

――１００％だ。

私はさっきまで、アオイの想いの強さが、彼の心に届くことを、心のどこかで期待していた。彼は優しいところも在るし、きっと大

丈夫だと信じ込もうとしていた。
でも――そんなことはない。
どんな素晴らしい愛の言葉も、綺麗ごとも彼の心を癒せはしない。まるで苦行のように彼はこれからもああして生きる。ひとりぼっちで。それがはっきりと、彼の仕事姿を見て、突きつけられた。
「……っ」
私は部屋の窓から溢れる夜空のパノラマ、柔らかい秋の月明かりを見ながら、一人声を押し殺して泣いた。
涙は次々に溢れてくる。これからアオイが、私のせいで残酷な道を歩んでしまうことへの罪悪感と、私の目に焼きついた、さっきのサクライくんの、疲労で鉛のようになった体を引きずって働き続ける、奴隷のような姿が悲しくて、私はいつまでも泣き続けた。

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　～　２－３２（後書き）

なるべくこのアナザーストーリー第２回を４０話までで終わらせようと、最近１話ごとの文字数が多くなってしまい、申し訳ありません。

読者の方にとって、一話ごとに何文字くらいの文章だと読みやすいとかあるんでしょうかね。昔携帯で書いていた時は、作者の携帯スペックだと５０００文字が限界だったんですが、ＰＣだと何万文字も打てるわけで…

改行も少ないんで、読みやすい文章にしたいんですが、いかんせん文字が多くなってしまってすいません。

Another story ～ 2－33

修学旅行の翌日――1年生は授業、部活共に振り替え休日だ。
その日、私はアオイ、ミズキ、エンドウくん、ヒラヤマくん、他のクラスメイトの女子達と、川越のファミレスに集まっていた。エンドウくんの発案だった。クラスの女子も、この二人と休みに一緒に遊べるというのであれば、参加するに決まっている。
それに、アオイ自体にも割と人望があるのだ。学年3位の成績を維持しているアオイは、見た目も白い花のように可憐だし、女子から見ても可愛い女の子だ。優しくて人当たりもいいし。
「先に言っておくけど、あいつに色仕掛け（ハニー・トラップ）の類は通用しないな。きっと汚物を見るような冷ややかーな視線を浴びるのがオチだ。ま、アオイさんみたいな女の子が大胆に迫るのは、個人的には嫌いじゃないがな」
エンドウくんは言った。
私達は今、アオイの恋を成就させるための作戦会議を行っている。
「まずはあいつのバイト先に通ってみたらどうだ？　3日に1回くらいのペースで。場所教えるから」
ヒラヤマくんが案を出した。
「で、あいつに告白するとしたら、授業中、保健室に行く、って言うんだ。そしたら必然的に二人きりになれる状況が作れる。あいつは授業をサボってるからな」
「おぉ」
「で、あいつの学校での行動パターンは、音楽室でギターかピアノを弾いているか、屋上か学校の河川敷のグラウンドで昼寝しているか、図書室で勉強しているかのどれかだ。保健室に行かずにこの中のどこか――個人的には屋上が、一番人が来る可能性が少ないんでベストかな」
ヒラヤマくんは、あくまでもアオイに告白させようと、早くも告

白のやり方まで口にした。
「……」
でも、それは……
「シオリさん」
私はエンドウくんに呼び止められる。
「え？」
「シオリさんは、ケースケとたまに話すんだし、何かいい案ない？」
「……」
この時、私はまだ迷っていた。
アオイの恋を応援したいとも思うけれど、心では、この恋は実らないと思ってしまっている……
私も、ヒラヤマくんのように、アオイの恋を諦めさせるほうに徹するべきなのか。それとも、協力すると言った手前、最後までアオイの恋を成就させようと足掻いた方がいいのか……
「じゃ、じゃあ――お弁当とか。サクライくん、いつもお昼、コンビニのお弁当じゃない。だから、手作りのものを食べたら、きっと喜ぶかな、って」
私はその答えも出ないまま、何か言わなきゃと重い、案を呈した。
「おお、確かに。それいいじゃないか」
エンドウくんが頷いた。
「え？」
「あいつ、俺の家やユータの家に来ると、いつもオフクロの料理をがつがつ食ってるからさ。餌付け作戦はかなり有効だと思うぜ」
「あはは、天才少年が餌付けされてるんだ。ちょろいわねぇ」
クラスメイトはその事実に大笑いした。
「……」
あ、あれ？　恋愛音痴の私の意見は、否定されると思ったのに……
結局その私の案は採用されてしまった。アオイも料理はまだ自信はないけれど、頑張ると言った。どうやらあのオムライスを作れるようになって以来、料理の楽しさに目覚め、色々と練習していたら

しい。
「だけど、エンドウくん、ノリノリね」
ミズキが言った。
「何でそこまで協力してくれるの？　面白半分？」
さすがにミズキも、アオイの純愛をそんな茶化すような理由で介入して欲しくはないらしい。確認を取った。
「ん？　ああ……」
そう疑われても仕方ないと自覚しているのか、エンドウくんはそれを察するように頷いた。
「みんなだってこの半年のケースケを見てただろ？　あいつは勉強も運動もなんだって出来るし、背は低いが顔もいい。ようやく最近周りの評価も高まってきたけれど、本当ならもっと評価されるべき奴なんだと思うんだよ」
「……」
その通りだ。私もそう思う。彼も文化祭や体育祭、サッカー部での活躍で、ようやく学校でその才能を評価され始めはしていたが、私としても、今評価されるのが遅すぎたくらいだと思う。
「それを妨げているのが、あいつのあの唯我独尊な佇まいだな。シオリさんに比べたら、あいつは学校では完全に悪役キャラっぽく見られてるし。だけどよ、あいつは本当は、悪役を演じるには、ちょっと甘過ぎるんだよ。あいつはスーパーヒーローになるべき奴なんだと俺は思うからな。だから恋愛を通じて、誰かのために自分の力を使うってことを覚えた方がいいと思ってな」
「ふぅん」
その言い分に、ミズキも首を傾げながらも、納得したようだ。
「アオイの前でこう言うのもなんだけど、サクライくんって、そんなにいい人なの？　私にはまだ分からないけど」
ミズキは言った。
「ま、今のあいつを批判するのは、俺達としてもしゃあないと思うよ。心に愛がなければ、スーパーヒーローにはなれないからな。今

のケースケにはそれがない。だがあいつがもし、それを手に出来たら、きっともっとすごいことになりそうな気がするからな。俺としても、あいつの目がもっと優しくなった姿を見てみたいのよ。それが俺が、アオイさんに協力する理由さ」

エンドウくんはそう言った。

「……」

エンドウくんの言うことも、ヒラヤマくんの言い分と同様、私にはよく分かる。タカヤマ先生も、エンドウくんと似たことを言っていた。どちらも真実が含まれているし、どちらの言うことも間違いはない。

でも、あの人の真実は？

私達がこんなことをしている間、あの人はまた今日もどこかで汗を流しているのだろうか。

首枷をはめ、苦行のような暮らしの中に、身を投じているのだろうか。

何故そこまでして……

私が昨日、彼を見た時、感じた確信が、勘違いであって欲しいと私は切に願っていた。

――彼の真実を知りたい。

私の胸が、今、それを求めていた。

次の日、学校が通常登校になる日、私は今日から早速、朝練習に復帰していた。

学校に来る時、グラウンドを見たが、今日、グラウンドにサクライくんはいなかった。

――それはそうか。この3，4日、彼は休む間もなく働いて――しかもあんな重労働を。疲れきっているのだろう。

でも、駐輪場に自分の自転車を止めた時に、駐輪場に既に止まっている、年季の入った自転車を見つける。

――サクライくん、学校に来ているの？
だけど、今日の彼はもう、とても筋肉を動かせる状態ではないだろう。
じゃあ、どこに？
私はその自転車を見ると、殆ど無意識のうちに、足が音楽室ではなく、図書室に向かっていた。
でも、図書室に彼はいない……
「……」
私ははっと、昨日ヒラヤマくんが言っていたことを思い出す。
サクライくんが学校にいるとしたら、あとは……
私はそのまま図書室を出て、屋上へと続く階段を一人登っていた。
何をやっているんだろう、私、という自己批判をしながらも、どうしても今、彼に会いたかった。
本来は生徒立ち入り禁止の屋上。私はドアノブを回し、屋上へと出る。
もう11月に入った早朝の屋上は、日が少しだけ顔を出していて、その光がぼやけた光を作って、陰影の具合が美しかった。木枯らしが吹き始めて、少し肌寒い。
そして、入り口のプレハブの壁に寄りかかって、彼はいた。
ジーンズにピーコート、マフラーをして、口元を隠し、目を閉じて眠っている。
「……」
ぐったりとしている彼の姿は、はじめに私が彼の寝姿を見た時と同じ――まるで野生の獣が体を休めるために、息を潜めるように、静かだった。
でも――
私は大馬鹿者だ。彼がこうして死んだように眠るのは、それだけ彼が心身ともに疲れきっている過程を踏んだからじゃないか。
そんなものを、勉強をして、サッカーもして、バイトもして……その程度にしか考えていなくて。

あの停学以来、彼の疲労の色はますます濃くなるばかりだ。彼の空気は澱み始めて、目の中に宿る炎のような激しさは、少し棘を含むようになった。激しく燃え盛ってはいるのだけれど、それはただ、種火に油を注いで、無理に炎を大きくしようとしているだけで、燃え移るものがないから、炎が大きくなった一瞬を過ぎれば、今にも消えてしまいそうな……

「……」

彼の寝顔を見るのが好きだった。

でも、今は――とても痛い。

それでも、私は今でも、彼の寝顔から、目を背けられない。

その理由もわからなくて、ただ、胸が痛くて……

私は彼と話がしたかったのだけれど、これだけ疲れている彼を起こすのは忍びない。

けれど、ここは寒い。こんなところで寝ていては、彼が風邪をひいてしまうかもしれない。

私は自分の着ているダッフルコートを脱いで、彼の体にかけてあげようと思った。始業前にもう一度ここに来て、コートを取りに来ればいい。室内にいればもうコートはいらないんだから。

そう思った私は、コートを脱いで、彼にかけてあげようと、彼の横に跪いた。そして腕を伸ばし、彼の肩にコートを……

「――あ」

私はそこで、体が硬直する。

コートをかけようと、体を伸ばすと、彼の顔と私の顔が、３０センチほどの距離に近付く……

「……」

こうして近くで見ると、彼も天才と呼ばれていても、普通の男の子となんら変わりはない。それどころか、幼い顔立ちのせいで、他の男の子よりずっとあどけなく見える。

――不意に私の心に、寂しさが去来する。

この人がもし、アオイの告白を受けたら――きっと、この人の表

情は、タカヤマ先生やエンドウくんの言うように、変わってしまうのだろうか……

そう思うと、ふいに自分が取り残されたような気分になる。

「……」

私は彼の肩にコートをかけると、そのまま無意識のうちに、自分の手を彼の頬に向けて伸ばしていた――

「ん……」

しかし、私の指先が彼の頬に触れるか触れないかというところで、彼は目を覚ましかける。

「！」

私はその反応に、びっくりした声を何とか飲み込みつつ、ぱっと彼から離れる。

しょぼしょぼした目をゆっくりと開け、その目が私を捉える。

「ん？　マツオカ……」

そう呟いた後、サクライくんは自分の体にかかっている、私のコートを見る。

「ご、ごめんなさい。少し冷えるから、せめてコートをと思って」

私は何とか言い訳を搾り出す。彼に触れたのは故意だったのに、偶然触れてしまったっぽい言い回しで。

「――すまない」

そう言うと、彼は立ち上がって、私のコートを私に差し出した。

「しかし珍しいな。こんなところに君が来るなんて」

「あ、う……」

――言えない。ここにあなたがいるかもしれないと思って、なんて、言えない……

さっきから鼓動は早く、木枯らしが吹き始めているというのに、私は汗を掻いていた。

「しかしあのまま寝続けていたら、さすがに風邪をひくところだった。ありがとうな、起こしてくれて」

「え？」

彼の、ありがとうの言葉に、私の胸が一度どっくんと大きく鳴った。

でも、そう言って彼は私の横を通り過ぎ、屋上のプレハブの方へを歩を進めていく。

「どこへ？」

私は彼の背中が通り過ぎていくとき、また寂しさを覚え、彼の背中を呼び止める。

「ん……どこかで寝直しかな」

「……」

この時の私は本当に、変に焦っていた。

私は、アオイに協力すると一度言ってしまった。だからもう、こうして二人きりでサクライくんと会うことは、これからはアオイに対する裏切り行為だ。

だけど――せめてもう少しだけ、あなたのことを訊かせて欲しい。

もう少しだけ……

「あ、あの」

私は彼の背中をもう一度呼ぶ。彼が振り返る。

「あ、あの、もし迷惑じゃなかったら、少し――私と話をしてくれない？　コーヒー、奢るから」

「え？」

「あ、あの！　迷惑だったら、いいんだけど……」

「いや、迷惑じゃないけど」

サクライくんはまだ寝ぼけ眼なまま、一度軽く、まだ明るくなりきっていない空を見上げた。

「――どんな話が望みだ？　それ次第かな」

空を見上げながら、サクライくんは言った。

「――愛について」

私は言った。

「はい？」

サクライくんは、目を丸くした。

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　～　２－３３（後書き）

また減るかもしれませんが、ついにこの作品の評価が１０００ポイントを超えました！連載半月で１００００ポイントに行く作品もある中で、１０００ポイント行くのに１年半もかかった、歩みののろいこの作品ですが、これも読者様がこの長い話を読んでくださったからこそのものだと思っています。ありがとうございます。

人気投票も終了し、その投票に協力してくれた方々にも、重ね重ね感謝の意を申し上げます。

この長い話を読んでくれて、お気に入りに登録するという作業まで行くのが、すごく大変なことなのに、ようやくここまでこれました。読者様の感想も、何度も読み返しているので、感想をいただけるととても喜びます。更新のスピードも上がります。

これからも応援よろしくお願いいたします。

「訊く人間の選択を間違えていると思うが」
サクライくんは言った。
「そ、そうかな……」
私は彼のその言葉に尻込みする。その言葉を続けると、彼に拒絶の意を示されるんじゃないかと思って、ちょっと怖くなる……
「……」
沈黙。
「――何だ？　修学旅行で好きな男でも出来たか？」
「え？」
「そいつののろけでも訊いてほしい、とか、そういうのだったら勘弁してくれ。退屈だから」
「ち、違うの。そういう話じゃなくて……」
「ん？」
何とか言葉を搾り出す私を、サクライくんは屋上の鉄柵に寄りかかって待つ。
「は、恥ずかしいこと言ったっていうのは自覚しているんだ。でもすごく真剣なの。すごく……すごく真面目な話なの。私の言葉が稚拙だから、そうは訊いてもらえないかもしれないけれど……そんな話を聞かせられる人、私、あなたしかいなくて……」
彼は他人ののろけ話を聞くなんて、時間の無駄としか思っていないだろうから、何とか自分の気持ちが、そういう話をしたいのではないということを伝えるが、上手く気持ちがまとまらない。
はじめはアオイのために、彼の恋愛に対する考えを訊きたいと思った。それを訊いて私は、アオイに対して、エンドウくんのように、本気でアオイが彼と付き合えるように尽力するか、ヒラヤマくんのように、如何にアオイを傷つけずに彼を諦めさせるかに徹するか、決めようと思った。

でも――今となっては、よく分からない。
アオイのためと銘打っていても、本当は私が彼のことをもっと知りたいだけなのかもしれない。そんな気持ちが私のどこから沸いてくるのかも、私は分からないのだ。そんな気持ちを他人に上手く説明できるわけがないのだ。
「――君と話すなら、できれば僕もそういう話の方がいいな」
そんな私に、サクライくんが言った。
「え？」
「アホな話を出来る奴なんていくらでもいるけど、真面目な話が出来る奴ってのは貴重だ。僕もこの学校じゃ、君が一番そういう話がしやすい」
「……」
「いいよ。話を拝聴しよう。あまり僕の答えに期待しない方がいいと思うがな」

サクライくんは、木枯らしの吹く屋上は、女の子には寒かろうと移動を勧めてくれたが、私はここでいいと言った。確かにちょっと風は冷たいけれど、コートを着ていれば、それ程寒くはないし、さっき私もホットミルクティーを買ってきた。私はこの学校の屋上に上ったのは初めてだったし、この屋上から見える朝日が綺麗だったから、もうちょっとここにいたい気分だった。
サクライくんは私に背を向けて、柵に両腕を乗せ、少し前かがみになって、朝日の方に目を向けている。オレンジ色に照らされる街並み、彼と二人きり――そんな早朝の時間は、ずっとこうしていたいような気持ちになる反面、一度も振り向いてくれない彼が何を考えているのか全然分からなくて、この場から逃げ出したいような気持ちにさせられる……
それに、さっきの言葉――私が学校で一番真面目な話がしやすいっていうのは、ちょっとは特別に見られているって事なのかな……

「は、はい」
私は買ってきた缶コーヒーを彼に差し出す。
「ありがとう」
彼はそれを受け取ったが、まだプルタブを開けなかった。
「じゃあ、僕は君にこれをやろう」
そう言って彼は、小さく包装された袋をいくつか取り出した。
「八つ橋。ジュンイチの土産だけど、ひとりじゃ食いきれないから」
「あ、ありがとう」
彼から何かを貰うのは初めてだ。八つ橋は私も家のお土産で食べたばかりなのだけど、何だかちょっと嬉しい。受け取るとき、自然と彼の隣に来れたのも、またちょっと嬉しい……
――彼と一緒にいると、嬉しい。今でも私はそう感じる。
「そういえば、あいつらが土産を届けてくれた時、君もいたな。何で？」
サクライくんはそんな私の方を見ずに言った。
「え？　あぁ――み、道案内。あの二人、あなたに会いたがってたんだけど、駅前の工事現場としか、聞いてなくて、場所が分からなかったらしいから、地元の私に道を聞きに……」
「ふぅん」
あまり関心がなさそうに、彼は合いの手を打つ。
「僕はてっきり、あの二人のどちらかと君がくっついたのかと思ったよ。あの二人も君のファンらしいし」
「……」
――いつもこう。一緒にいられるのは嬉しいけれど、彼が私の事を何とも思っていないとすぐに気付かされる。
この人にとっては、私が誰と付き合おうと、関心ないんだよね……
――もうちょっとくらい、反応があってもいいじゃない……
そんな私を尻目に、彼は缶コーヒーを空けて、一口飲んだ。
「――でも、みんなサクライくんが修学旅行に来なくて、寂しいって言ってた」

修学旅行の話題が出たところで、私はひとつ考えを巡らせた。この話から、彼の様子をさりげなく探ってみようと思って。
「サクライくん、今女子の間ですごく人気あるのよ。多分修学旅行で、あなたに告白しようって考えてた娘、いたと思う」
言いながら、きっとアオイもそうだったのかな、と思う。
「――そう」
だけど、サクライくんの反応はそれだけだった。
「――それだけ？」
私は首を傾げる。
「それだけも何も――どう反応すればいいのか、分からないし」
「……」
やっぱりこの人、普通の同い年の男子とは、ちょっと違うみたいだ。普通の男の子――エンドウくんやヒラヤマくんだって、みんな多少は女の子にもてたいとか、そういう気持ちが見え隠れしているのに、彼にはそれがない。
彼にとって恋愛感情は、完全に対岸の火事のようなものなのだろうか。だとしたら、やっぱりヒラヤマくんの言うとおり、アオイの恋の運命は……
「――ねえ、サクライくん」
私は彼の目を覗き込む。
「もしあなたのことを、好きで好きでしょうがないっていう娘が、あなたに真剣に告白してきたら――あなたはどうする？」
私はアオイの名前を出さずに、その告白の結果に踏み込んだ、もうこれは、ストレートに、アオイの告白を受けるか受けないかという問いに等しかった。
「は？」
彼は首を傾げる。
「ごめん――呆れたりしないで。真剣な問いなの」
私は彼を諌める言葉を反射的に投げかける。
「答えるにも、その娘が好きで好きでしょうがないってのは、主観

的視点だろ？　それじゃ僕は判断のしようがない」
　しかし彼は冷静にそう言った。
「失礼だが、君だってミスコンで優勝してから、沢山の男に告白されたはずだ。その中には、君のことを好きで好きでしょうがない奴だっていたはずだ。でも今君には彼氏はいない……つまり相手が自分のことを好きかどうかなんていうのは、あまり自分にとっては影響のない要素ってことだ。君だってそれが分かってるんだろ」
「……」
　実に理路整然。しかも私の行動を例に挙げられて言われてしまっては、もう私は何も言えない。
「――そうだよね。ごめんなさい。変な質問して」
「別に謝らなくてもいいけど」
　彼は首が凝っているのか、首を左右に動かす仕草をした。
「――しかし、君も恋愛とか、その手の話は向いてないんだな」
　そうしながら彼は言った。
「え？」
「そういう話題の振り方が苦手そうだ。ミスコン優勝して、彼氏が出来ないのも合点がいった」
「……」
　間違ってはいない。正しい指摘だ。自分でも自覚はある。
　でも、彼にはこんなに簡単に私のことを見抜かれてしまうのが、ちょっと悔しい――私はあなたのことが分からなくて、こんなに……
　朝日に照らされる、彼の横顔を窺う。
「安心しろよ。僕もそういう話、苦手だから」
　彼は私にそう言った。
「だから君の話に文句をつける気もない」
「……」
　彼の言葉は、周りの空気を変える。
　言い方は実にぶっきらぼうで、気を遣う素振りなど何もない。自分の思ったことを言っているだけのようにも見えるけれど、話して

いる方は、彼に気遣われているように感じてしまう。
でも、まだ私は、こういう時、彼が本当に私をフォローしてくれたのか、それとも、そんなことをしても疲れるだけだからと放っておかれただけなのか、まだ分からないでいる。
あの文化祭で、彼を見極めるなんてことを言って、私は確かに彼の影響で、少しだけ変われた。前に進めた気がする。
でも、肝心の彼のことは、まだ何も分かってはいない。あの時と変わらず、憧れの対象ではあるから、彼のことをもっと知りたいとは思うけれど……
「じゃ、じゃあ、質問を変えてもいい？」
私は彼の顔を窺う。
「サクライくんに、恋愛を定義して欲しいの」
我ながら、バカなことを言っているなぁ、と思った。
「――ああ。そういう訊き方の方が、恋愛音痴の僕としてはわかりやすいな」
でも彼は、そんな私の言葉を好印象に捉えた。
「え？」
「大真面目にこんなものを語るとしたら、あなたに好きな人がいたらとか、そういう都合のいい仮定より、そういう固い言い回しの方がいいよ」
「……」
――やっぱりこの人、考え方がずれている。ずれているからこそ、こういう真面目な話がしやすいのかな。
沈黙。
「私ね、今まで恋愛ってものをちゃんと考えたこと、なかったの。ただ、そういう概念自体は前から信じてた。家族愛とか、兄弟愛とか、そういう愛の形は信じているから」
「家族愛ねぇ……」
その言葉を彼が反復した時、一瞬彼の纏う声――空気が変わった気がした。

「続けて」
彼は朝日に目を向けたまま、そう言った。私はその時感じた違和感は、自分の勘違いだったのかと思ってしまった。
「あ――でも、恋愛っていうのは、そういう愛の形とは違う、特別なもののように、最近思えてきて……」
「君も、恋をしたくなったのか？」
「――分からない。まだ私はそうなった時のことは、全然想像できないんだけれど……」
「……」
沈黙。
「――僕にとって愛なんてのは、宗教か流行歌の中の出来事だと思うけどな」
彼は言った。
「要するに、自分がひとりじゃない、って思い込むための幻想さ。宗教だって大体はそういう孤独からの解脱を謳ってるのが起こりだ。でも、実際はそうでもない。実際はひとりで生きている奴なんていっぱいいるよ。誰も愛さなくたって生きていける。日本の未婚率見てみろよ。人間は誰しも番（つがい）になる運命の人がいるなんて幻想だって、既にデータが証明してるよ。それでも赤い糸とか、そんなことを言っている奴は、その根拠が理屈になっていない。独りよがりのカルト宗教さ」
「……」
「別になくても死ぬわけじゃない。飯を食うとか、寝るとか、そういうものに比べたら、全然優先順位は低い。そんなものを人間の根源的なものと説くのは、僕にはカルトな行為にしか思えないな。残酷だけどね、誰かが愛だ恋だと言っている裏で、誰にも愛されていない奴っていうのは確実に存在している。愛だ恋だと言っている奴は、そういう人間の悲しみを考えもしないだろう。でもね、誰かを愛するってことは、他の誰かを愛さないってことだ。必ず人間全員が平等に得られるものではないんだよ。誰でもみんな愛されるため

に生まれたなんて言いながら、人は全員を平等に愛することは出来ない。そういう矛盾をはじめから持っているんだ。宗教ってのは、その本質を詭弁で隠してるんだよな」

「……」

彼のその言い方は、愛なんていう形而上学的な観念を全く信じていないどころか、憎んでいるかのような言い方にも聞こえた。

「――悪いな。もっとロマンチックな答えを期待したか？」

彼は訊いた。私は首を横に振った。

「――言っていることは、多少理解できるから」

「理解する必要なんてないぞ」

「え？」

「この世に絶対的な基準なんて存在しないからな。結局自分の人生経験の中で基準を作り出して、それを信じるってことが、真実っていうんだろうから。誰かの言うことを鵜呑みにする必要はない。納得できないならそれでいいと思う」

「……」

「――失礼。こういう解答じゃ、あまり君の参考にはならないかな」

彼は一度缶コーヒーを口に流し込む。

「愛を完全に否定するわけじゃないんだ。人を好きになるって行為自体を否定はしない。だけどね、必要以上に賛美しないってだけの話だよ」

「……」

沈黙。

「これは私見だから、話半分に聞いていいんだが――マツオカ、もし君がこれから誰かに、愛情なんて概念を抱くとしたら、その相手は寂しがり屋であることをお勧めするよ」

「寂しがり屋？」

「ああ。寂しがりの人間は、相手を強く必要とする――二人の関係を維持するために、努力をする。努力が出来る」

「……」

「僕は愛なんて概念をあまり前向きに信じてないが、あるとしたら人間が根源的に持つものじゃなく、長い時間をかけて育むものって考えの方が自然だと思っている。きっとそれにたどり着くには、そういう努力が不可欠なんだろう。きっと長い時間がかかるもので、その間に継続しようって努力はお互いがすべきことなんだろう。つまり、それにたどり着きたいのであれば、その努力が出来る人間を相手に選ぶのは、最低条件だろう」

「……」

私はそれを訊いて、彼の意図するところが少し見えた気がした。

「つまり、サクライくんの考えだと、寂しいって感情に鈍い人間は、愛って概念には近づけない、と？」

「ああ、寂しいって感情に鈍い人間は、そういう努力が出来ない。誰かを自分が頑張るための動機付けに出来ない。相手を心から必要と思えない。だから少しでも亀裂が生じたら、間違いなくその関係を持続させるよりは、ひとりになることを選ぶだろう。寂しいって感情の薄い人間とは、恋をすべきじゃないし、そういう人間はそもそも恋をしちゃいけない。継続する可能性が低い。寂しがり屋かどうかってのは、恋ってステージに立つ上の最低条件だと思う。それが浮気だとか、誰でもいいってベクトルに行かず、誰か一人だけを真に必要と出来る人間がベストだろうな」

「……」

沈黙。

「あなたは――あなたは自分を、後者と思っているのね」

私は訊いた。

「ん？」

「ごめん――なんか、そんな気がした」

「……」

彼の話ははじめは単純に、愛情という概念の完全否定のように思えた。

でも、話を訊いているうちに思った。これは自分の経験則で、自

分のことを話しているような――そんな気がした。
自分は誰かを愛することが出来ない――自分には寂しいという感情がないと、ざんげのように話しているように聞こえた。
「――どうかな。あまり考えたことないから」
そう言うと、彼は踵を返した。缶コーヒーを持って、残りを一気呷りながら、屋上のプレハブの方へと歩いていく。
「マツオカ」
私の方を振り返らずに、プレハブのドアの前で、彼は言った。
「少なくとも、自分が愛情を注いでいれば、必ず相手もそれに報いてくれるなんて、人間はそんな単純なものじゃない。自ら愛情を遠ざける者もいるし、必要としない人間もいる。そういう人間を君はちゃんと見極めて、幸せな恋をしろよ」
「……」
「とりあえず、僕に言えるのはそれだけだ。じゃあな」
そう言って、彼はもう、話すことは終わったと、屋上を出て行ってしまった。
「……」
屋上に取り残された私は、ひどく絶望的な気分を味わっていた。明言はされなかったけれど、アオイの恋が実る可能性は、完全に彼の口から否定されたように思えたからだ。
その時の私は、まだ自分が何故そう感じたのか、分かっていなかったけれど――彼が何となく、自分を恋愛から遠ざけているということは感じたから。
そんなサクライくんは、絶対にアオイの告白も受けはしないだろう……
私は改めて、そう確信を深めてしまった。

「あ、あの」
私の声が震える。
「よ、よかったら、お昼、私達も一緒にさせてもらっても、いいかな……」
私の目の前には、エンドウくん、ヒラヤマくん、そして、サクライくんがいる。昼休み、3人は机を合わせて各々昼食を取っていた。
「ああ、俺は構わないぜ。可愛い女の子と食う飯は美味いし」
「俺も。ケースケも勿論いいよな」
「――ああ」
怪訝な表情を浮かべながら、サクライくんは頷いた。
「よかった！　アオイ、ミズキ。大丈夫だって」
「う、うん……」
私の後ろにいたアオイは、恥ずかしそうに私の横に立った。
――よかった。ちゃんと言えた。
勿論私がお弁当を一緒に食べようと言うのは、事前にエンドウくん達と打ち合わせた流れだった。昼休み、教室に戻ってこないこともあるサクライくんが、今日は教室にいるのも、エンドウくんが彼に昼休み、ちゃんと教室にいるようにと言っていたから。
それでも私は、男の子に一緒にお弁当を食べようなんて言ったことなかったから、ずっと緊張していた。二人がＯＫしてくれるし、ある程度フォローも入れてくれることは分かっていたけれど、肝心のサクライくんが拒否するかもしれないと思うと、お弁当の袋を持つ手が震えた。3人とあまり面識がなく、クラスでも大人しい存在のアオイがいきなり言ったら不自然だから、最初は私が言う方が自然ということで、私が言う役になったのだけれど。
私達は席を合わせて、各々のお弁当を広げる。勿論サクライくんはアオイの隣だ。サクライくんは憮然とした表情をしていたけれど。

「ほらほら、狭いんだからもっと席を近づけろ」
エンドウくんがサクライくんの体を軽く押した。軽量のサクライくんはよろけて、後ろにいるアオイに倒れこむ。
「ふえっ……」
アオイの肩にサクライくんが飛び込んで、アオイが素っ頓狂な声を上げる。
「――何しやがる」
サクライくんはエンドウくんにそう言ってから、後ろにいるアオイの方を見た。
「悪いな。えっと――サガラ、だったよな。大丈夫か？」
「う、ううん、全然……」
アオイはもういっぱいいっぱいになっている。サクライくんの顔をまともに見られていない。でも、初めて彼に名前を呼んでもらえたから、俯いた顔は、何となく嬉しそうに見える。
「……」
――幸せそうだな、アオイ。
こんなアオイの姿を見て、あなたの想いはこの人には届かないなんて、誰がそんな野暮なことが言えるだろう……
それが分かっているのは、現時点では私とヒラヤマくんだけ。
アオイに合わせて、私達もみんなお弁当を持ってきていた。机を合わせると、みんな各々、お弁当を広げる。エンドウくんとヒラヤマくんは、もう2限終わりの休み時間でお弁当を食べてしまっていたから、山のような購買のパンと、パックの紅茶を机に並べていた。
サクライくんもお弁当を広げた。いつもの通りコンビニ弁当。今日は幕の内弁当みたいだ。
「また今日もコンビニ弁当かよ」
エンドウくんが言った。
「そう毎日だと、体に悪いぞ。しかもそれ、賞味期限切れてるんだろ？」
「今時のコンビニ弁当は美味いんだぞ。プロの料理人とコラボした

りしてるし……」
そして彼は割り箸を割りながら、凛とした表情でエンドウくんの目を覗き込む。
「おまけに賞味期限切れはタダだ」
「うわ！　いい顔ですごくセコいことを！」
エンドウくんは思いっきりドン引きした表情を作る。
「お前、何のためにガテンで高い給料のバイトしてるんだよ」
ヒラヤマくんも呆れ顔で彼に訊いた。もう彼が工事現場でも働いていたことは、この二人の口からクラスメイトは殆ど全員知っていた。
「あれはトレーニング」
彼は言った。
「僕の体重だと、腕立てやスクワットじゃもう筋肉は増えないからな。かと言ってジムに通う時間もないし、金貰いながら体鍛えるためにやってるんだよ」
「――どこのサングラスかけた仙人の修行だよ」
ヒラヤマくんは呆れた。
「そのうちお前、亀の甲羅とか背負ってバイトしたりするんじゃないだろうな」
「はは、ケースケならそのうちかめ○め波も撃てるかも知れんなぁ」
エンドウくんも合いの手を入れる。
「そんな技で相手をぶっ飛ばしても、すっきりしないだろ」
サクライくんは言った。
「気に入らない相手には、面に拳をぶち込まないと気が済まないタチなんだよ」
「――て言うかお前、かめ○め波をまず否定しろよ」
「……」
やっぱりこの二人にサクライくんが加わると、面白い。二人とも本当に彼のことが好きなんだな、と思う。修学旅行の時よりも、二人がずっと楽しそうな表情をしているのが印象的だった。

その反面、サクライくん自身は、確かに二人のおふざけに上手く合いの手をいれてはいたけれど――まるで子供をあやすように、適当な応対で、二人のおふざけをいなしているだけのようにも見えてしまうのは、私の考えすぎだろうか。

「あ、あの」

そんなサクライくんに、アオイが声をかけた。

「さ、サクライくん。よ、よかったらなんだけど――明日、サクライくんの分のお弁当も、作ってこようか？」

「え？」

サクライくんは目を丸くする。

「あ――あの、どうせ一人分も二人分も作る手間は変わらないし…男の子じゃ、それだけじゃ足りなくないかな、と思って……」

既にアオイの顔は真っ赤で、言葉も尻すぼみしている。緊張が伝わってくるような声の震え方。

「嬉しいけど――いいよ別に。僕は材料費を払えないし、みんなが思ってるほど、コンビニ弁当に不満はない――」

「そうか！　サガラさんが作ってくれるのか！　そいつはいいな」

サクライくんの言葉に、エンドウくんが言葉をかぶせた。サクライくんに無理にでもお弁当を受け取らせないと、アオイが傷つくと思って、ちょっと強引にでもフォローに入った。

実を言うと、事前の打ち合わせだと、サクライくんが食費の浮くお弁当を拒否するという展開は、あまり考えていなかったのだ。だからエンドウくんは、ここから打ち合わせにないアドリブで、彼にアオイのお弁当を受け取らせようとしているようだ。

「いいじゃないかケースケ。お前、スポーツ強豪校の寮なんかに入ったら、間違いなく毎食ドンブリ飯3杯食わされるぜ。運動センスは抜群なんだ。しっかり食って体がでかくなれば、ユータくらいの選手になることだって夢じゃねぇし。俺達としても、本気で全国大会を狙うからには、お前の成長に期待したいからな」

「……」

サクライくんは怪訝な表情をする。
「でも、僕は材料費が……」
彼には『人の好意』という概念がない。アオイは勿論無料でお弁当を渡すつもりなのに、彼は等価交換以外の価値観を理解できない。だからこんなことを言うのだろう。
「じゃあ、お前の十八番（おはこ）でその対価を払えばいいじゃないか」
ヒラヤマくんが言った。
「お前がアオイさんに勉強を教えるなりして、弁当の分を勤労で返せばいい。お前は芸達者なんだし、女の子の要望くらい、少しは応えられるだろう？」
「ああ……」
サクライくんも頷く。
「そういうのなら、得意分野だな」
「はは、それにお前だって、たまには手作りのものを食いたいだろう」
エンドウくんが言った。
「……」
彼は沈黙を以って答える。
「よし！　決まりだな。サガラさん、ケースケに腹いっぱい食わせてやってくれ。大盛りで頼むぜ」
強引な話の流れだけれど、一応話の筋は通った。やっぱりエンドウくんの機転はこういう時に実に頼りになる。
きっとエンドウくんも、いつもコンビニ弁当しか食べないサクライくんの体を心配しているんだろうな。口に出すのが照れくさくて、こういう形になっているだけなのかもしれない。
「でも、僕、基本的に自由な時間は早朝しかないぞ。弁当作らせる上に、わざわざそんな時間に学校に来させるなんて――」
「だ、大丈夫！」
彼の言葉をアオイの声が遮った。
「大丈夫。私――大丈夫だから」

念を押すように、その言葉を静かに連呼する。
「――そうか」
サクライくんは箸を置く。
「じゃあ――早朝の図書室で、勉強を見てやるよ。時間は君の来やすい時間でいいから」
「……」
え……
朝の、図書室……
――何だろう。彼がその場所を指定した時、心が一瞬、大きく揺れた。
嫌な感じ――何だろう、この気持ちは。
「しかしお前、ロハでは仕事を請けないが、ロハで施しも受けないんだな。お前がケチなのかいい奴なのか、分からなくなるぜ」
ヒラヤマくんが言った。

次の日の早朝、私はいつものように、音楽室でフルートの練習をしていた。
窓の外からサッカー部のグラウンドを覗き込むと、そこには誰もいない。
「……」
――どうしよう。
私は今日、何度も音楽室の時計を見ては、懊悩していた。
私は普段なら、この練習が終わったら、いつも図書室で今日の授業の予習をしている。
でも、今日はきっともう、図書室にはアオイとサクライくんがいて……
――アオイの気持ちを考えたら、私は今日、図書室に行くべきじゃないんだ。
でも、いつも私が練習の後、図書室に行って勉強していることを

彼は知っている。フルートの音も聴こえているだろうし、もう私が学校に来ていることは二人にばれている。なのに今日に限って私が図書室に行かなかったら、彼が不審がるかも知れないし……でも、アオイはできれば二人きりでいたいだろうし……

――て言うか、私、二人のこと、気にしすぎだな……

私には関係のないこととわかっているのに、どうしてこんなに気になってしまうのだろう。

「……」

――そして私は、情けないことに、一人、足音を消しながら、図書室へと足を向けている。

アオイの様子を見に行くだけ――ちょっと見たら、すぐ帰るんだから。

――って、私、サクライくんのことになると、こうしてこそこそしたことばかりしているな……自分がしていることが、ストーカーまがいの行動だと分かっているのに、その行動を自分で否定できない。

そんな自分に自己嫌悪しながら、図書室の前に行くと……

入り口の横の壁に寄りかかって、気配を消している、一人の大柄な人影があった。

トレーニングウェアを着たヒラヤマくんだった。

「あ……」

今、私は誰にも今の姿を見られたくないと思っていた。だから、まさか彼がここにいるとは思っていなくて、思わず喉の奥から声が出かかった。

でも、ヒラヤマくんが私を見て、人差し指を立てて、口の前に立てる仕草を見せたので、私は口をつぐんだ。

私が気配を消したのを確認して、ヒラヤマくんは親指で図書室のドアを指差した。

「……」

私はドアの横に立つ。そしてドアの隙間から、中を覗き込んだ。

「――この2√3をここに代入して、あとは判別式通りだ。それは分かるだろ？」

アオイがサクライくんの隣に座って、二人でひとつのノートを見ている。

肩が触れ合うくらいの距離まで彼と近付いて、アオイは戸惑いながらも、何だか嬉しそうで。頬が染まっているのが遠目からでも分かる。

「――訊いてるのか？」

サクライくんが、そんなアオイの様子をいぶかしむ。

「え？　あ……」

アオイは急にあたふたする。

「……」

でも、サクライくんはそんなアオイから、すぐに視線を撤退させる。

――全然気付いてないんだ。アオイが自分のことを好きだって。

私の横にいるヒラヤマくんが、両手を持ち上げ、お手上げのポーズをする。

「ご、ごめんなさい。ボーっとしてて……せっかく時間を割いてくれてるのに」

アオイの声。ここで彼に嫌われたら、という不安が伝わってくるようだった。

「別にいいよ。あの二人に比べたら、全然手がかからないから」

しかしサクライくんはいつもどおりの落ち着いた声で言った。

「……」

何だか、私と彼の様子を見ているようで、ちょっと痛々しい……

彼はいつもこうだ。私がいつも困っている時、焦っている時、いつだってそれを急かさない。落ち着いた声で、大丈夫だと言ってくれる。ちゃんと待っていてくれる。

はじめはそんな彼を、口調はぶっきらぼうだけれど、優しい人なんだと思った。男子といると圧迫感を感じていた私も、彼とならば、

居心地がよかった。
でも――今は、よく分からない。
彼の時折見せる優しさは、まるで子供をあやすようで。大人が子供のすることに、本気で怒らないように、彼も私達をそんな風に見ているんじゃないか。
彼は私達のことを完全に受け流しているだけで、それがああいう優しい態度に見えてしまうだけなんじゃないのか……
「――ふ」
ひとつため息をついて、ヒラヤマくんが足音を殺して、黙ってそこから立ち去った。
私は黙ったままいかれることに、何となく気持ちの悪さを感じて、彼を追いかけた。階段を下りたヒラヤマくんは、昇降口でトレーニングシューズを履いていた。
「あ、あの」
そこで私は、ヒラヤマくんに声をかけた。
「ああ……」
ヒラヤマくんは自分の下駄箱を閉める仕草のまま、私の方を見る。
「……」
沈黙。
「――ま、ここまでは予想通りの展開かな」
ヒラヤマくんが言った。
ヒラヤマくんは昇降口のスノコの上に腰を下ろして、トレーニングシューズの紐を結ぶため、私に背を向けた。
「あとは、アオイさんがあのケースケの態度を、優しいと取るか、無関心と取るか……それ次第かな」
そうヒラヤマくんが言った時、私はまるで、ヒラヤマくんに自分の図星を突かれたかのように、胸が痛んだ。
私だって今はもう、サクライくんのあの態度が、優しさじゃないように思えてならない。激しく疑心暗鬼している。
でも――それでも私は、まだ彼のことを、優しい人だと信じよう

としている。
彼が工事現場で、あれだけ歯を食いしばって働いて――疲れきって眠っている姿も見た。停学になった後の、あの荒んだ空気を纏った彼の姿も、彼がこの学校を今すぐ辞めてもいいと思っていることも、私は知っている。彼が見ているものの中に、他人のことは含まれていないのも、もう十分分かっている。
なのに――それでも彼にああして優しい素振りを見せられると、嬉しくなってしまう自分がいて……
――多分、アオイもそうだろう。彼のことを信じようとする。好意を抱いた相手を信じようとするのは当たり前のことだ。
だから、彼を冷たい人だと思えない……
「……」
「どちらにしても、この先は残酷だな」
ヒラヤマくんが紐を結びながら言う。
「シオリさんは、それを見たくないなら、もう下りてもいいぜ」
そう言うと、ヒラヤマくんは立ち上がった。
「……」
下りる……
できることなら私もそうしたい。今ではアオイの恋に協力すると言ったことを、少し後悔している。
でも……
「まず二人がくっつくことはない、と分かっていても、やっぱり、気になる」
そんな言葉が耳に入る。それは、本当に私の今の心情そのものだった。
私は顔を上げる。
「――そんな顔してたぜ。図書室覗いてた時」
ヒラヤマくんが振り向いて、私の方を見ていた。
「シオリさん、もしかして今、ジェラってるの？」
ヒラヤマくんが訊いた。

「……」

そう訊かれた私は、声が出ない……

そう訊かれて、私は自分の胸が痛むのに、自分の感情はそれを肯定できない。

私は、嫉妬しているのだろうか。

今までは、あの図書室で、彼と一緒にいるのは私だった。あの場所は、私と彼の二人しかいない空間だった。

それが、今日は彼とアオイが、あんな肩も触れそうなくらい、近くにいて……ダンスを踊って、手に触れたこともあるのに、私はあの距離に、今では近付くことができない……

それなのに……

「……」

ヒラヤマくんは、そうして立ち尽くす私に、声をかけずに出て行った。

「――すっげぇ美味い」

昼休み、アオイのお弁当を食べたサクライくんは、そう呟いた。

色とりどりの食材をちりばめ、見栄えも美しいアオイのお弁当は、誰が見てもおいしそうだったけれど、サクライくんはそれを、実に美味しそうに食べた。

あの細身のサクライくんが、一心不乱にお弁当を食べる姿は、彼をよく知るエンドウくんやヒラヤマくん以外のクラスメイトには、信じられないような光景に見えた。

「――しかし、女の子にこんな美味そうな弁当作ってもらいやがって。羨ましすぎるぜ」

エンドウくんが苦々しく言った。

「あー、俺も弁当を作ってくれるような彼女が欲しいぜ」

「お前だって、場所によっては、女の子にもてると思うけれどな」

ヒラヤマくんがエンドウくんにそんなフォローを入れた。

「え？　ガンダーラは実在するんですか？　どこにあるんですか？」

エンドウくんのそんなおふざけに、私達の周りは大笑いに包まれるけれど……

その中でサクライくんは、黙って一心不乱にアオイのお弁当を、美味しそうに食べていた。まるで何かに飢えているかのように。

そんな彼の姿を、アオイは幸せそうに見つめていて。

そんな二人の姿に、私は目を背けたいのに、目を背けられなくて。

改めて、私はアオイに嫉妬しているのかな、と懊悩する。

――こんな気持ちになる自分がすごく嫌だった。アオイは私の友達なのに。

こんな気持ちを抱いたことはないから、私は自分の今の感情に、名前をつけることが出来ない。

サクライくんとアオイがくっつくことはないと思っていても、やっぱり二人が一緒にいるのは気になる。

幸せそうなアオイを邪魔しようとは思わない。出来ればアオイに傷ついて欲しくないという気持ちは、今でも私は持っているつもりだ。

でも、アオイが傷つかずに済むということは……

そんな私の気持ちに答えが出ないまま、アオイがサクライくんに告白したのは、１１月も終わりに近付こうとしている、冬の始まりの日だった。

Another story ～ 2－36

その日は、少し肌寒い風が吹いていたけれど、気持ちのいい秋晴れだった。

私は結局、あの日以来、早朝に図書室に行くことが出来なかった。その間、何となく私は、朝、緑化委員が手を抜きがちの、学校の花壇の水やりをしてみたり、音楽室で一人ボーっとしていたり、教室で普段通り予習をしたりしていた。

「……」

そんな私は今日、6時からずっとフルートの練習をしている。

練習の甲斐あってか、私のフルートも、ようやく人に聴かせても恥ずかしくはないレベルにまでは達していた。今までは、校内の生徒に聞かれるのが恥ずかしくて、早めに練習を切り上げていたのだけれど。

そして教室に向かい、ミズキに声をかけられ、クラスの女子と少しおしゃべりをして、先生が来るのを待つ……

いつもと変わらない朝。

だけど――

「サガラ――サガラ？　何だ。遅刻か欠席か？」

朝のＨＲで出席を取る担任のスズキ先生のその声に、私は違和感を覚える。

「じゃあ次、サクライ――もいないのか？　珍しいな」

名前順だと、アオイの次はサクライくんだ。そのサクライくんもいない。彼は授業には顔を出さないが、朝の出席にだけは停学を除けば皆勤だったのに。

それ以上に、アオイだ。私も学校に携帯電話を持ってきてはいる（放課後まで電源は切っている）けれど、もし遅刻や欠席をするのであれば、連絡をひとつくらい私かミズキに入れるはずだ。

おまけに、サクライくんと一緒に不在なんて……

私はこの時点で、二人の間に何かあったのだと推察した。
――「ねえ、もしかして、アオイ、サクライくんに告白したんじゃないの？」
「どっちにしても、二人揃って教室来ないなんて、確実に何かあったのね」
「二人とも、まだ学校にいるのかしら」
ＨＲが終わって、１限がはじまるまでのわずかな時間で、クラスの女子は誰からともなく集まって、その話題で持ちきりになった。
アオイがサクライくんを好きで、そのために一部の女子がアオイに協力しているのは、もうクラスの女子は大体知っている。
「ヒラヤマくん、サクライくんのこと、何か訊いてる？」
女子の一人が、ヒラヤマくんに訊きに行った。横にはエンドウくんもいる。
「いや、何も」
「あいつ携帯持ってないんだって」
「……」
エンドウくんはともかく、ヒラヤマくんはどうやら自分のプランが最悪の展開に進んだ可能性があるからか、表情に苦々しさが僅かに現れていた。
「――私、メールしてみるよ」
私は自分の携帯電話の電源を入れて、アオイにメールを送った。
「少なくともケースケは、何があったにせよ、女絡みで学校を抜け出すようなめでたい思考の持ち主じゃない。多分学校のどこかにはいるんだろ。そのうち教室に来るさ」
エンドウくんがそう言った。
そう言った折節、１限目の先生が教室に来てしまったので、私達は結局、時間が過ぎるのを待つしかなくなった。
そして――
１限も終わりに差しかかろうとしている時、突然教室の後ろの引き戸が開いた。

みんなその音に、思わず振り向くと。
開かれた引き戸から、サクライくんが自分の鞄を持って、静かな足取りで、だけど堂々と教室に入ってきた。
「……」
ただでさえ目立つ存在なのに、今日は噂の渦中の人――そんな彼は、自分の鞄を自分の机に置くと、先生の方を見た。
「先生、僕は出席したと、担任に伝えてください」
何とも気だるそうに、彼はそう言った。
「おい、サクライ。それが出席したって言える人間の態度か？」
先生はその彼の一言を聞いて、彼に詰め寄った。
「テストでいい点取っているからって、何でも許されると思うなよ！」
「……」
詰め寄られたサクライくんは、教師の前で溜め息をつく。
「――今はあんたの相手をする気分じゃないんだ。黙ってくれ」
「貴様！　教師に向かってあんたとは何だ！」
その言葉に、先生は彼に掴みかかろうとする。
だけどその瞬間、そのピリピリした空気をぶち壊すような、呑気なチャイムの音が、教室に鳴り響いたことで、先生も手を止めた。
「……」
「くっ……」
さすがの先生も、休み時間を使ってまで教室に居座っては、分が悪いので、そそくさと自分の荷物をまとめて、教室を出て行ってしまった。
サクライくんはそれを確認すると、鞄を机に置いたまま、一人教室を出て行こうとする――
「ちょっと待った。ケースケ」
エンドウくんとヒラヤマくんがそんな彼の前に立ちふさがって、彼の足を止めた。
「……」

彼は立ち止まる。教室も静まり返って、その動向を見守る。
「お前、今日サガラさんに会わなかったのか？」
エンドウくんが訊いた。
「……」
彼は少しだけ、口をつぐんだ。
「――いや、会ったよ」
それから彼は答えた。
「……」
「じゃ、じゃあお前、はっきり聞くけどよ。もしかして――サガラさんに、告白とか、されたり――したか？」
「……」
彼は再び、僅かに口をつぐんだ。
「――ああ、された」
彼がそう答えた時、教室のクラスメイトは一言も言葉を発しなかったけれど、教室の中の空気は明らかに変わった。
アオイが彼に告白して――二人で朝のＨＲに不在。そして戻ってきた彼は一人。
それから導き出される答えなんて、ひとつしかない。
――サクライくんは、アオイを振ったのだ。アオイはそれがショックで――教室で彼と顔を合わせたくなくて、教室に姿を現さないのだ。
「は、はは……」
気まずい空気になって、エンドウくんは思わず笑ってしまう。
「じゃあ、アオイさんはどうした」
ヒラヤマくんが、そんなエンドウくんに代わって質問した。
「――今もいるとしたら、裏庭」
――裏庭……
それだけ言うと、彼は二人の横を通り過ぎて、教室を出て行った。
私はそれを訊くと、急いで教室を出て行った。
「あ……シオリ！」

ミズキもそれに続き、続いてクラスの女子も何人か教室を出て行く。

昇降口で靴を履き替えて、私は食堂を迂回し、体育館の裏にある中庭へと走った。

私が息を切らせて、裏庭へ着いた時。

そこに、アオイがいた。

体育館の陰に一人小さく座り込んで、膝を抱えて……

「アオイ……」

私がアオイの名を呼んだ時、ミズキ達もようやく私に追いついてきていて。

アオイも私の声に、顔を上げた。

アオイは普段から化粧の濃い方ではないけれど、ひどい顔になっていた。目は涙を拭いた跡だらけで、頬がこけたようにげっそりして、唇は紫色に変色しかけ、顔色は真っ青だった。晴れているとはいえ、まだ9時。しかも裏庭は体育館が日光を遮っている時間だ。こんなところに長時間こうしていたら、体が冷え切ってしまう。けれど、アオイのやつれ方は、それだけが原因ではないだろう。

私はアオイの横にしゃがみこんで、アオイの手を握る。アオイの白魚のような手は、サクライくんのためにここ毎日、お弁当を朝早くから作り続けていた。少しでも美味しくなるように努力したのか、指にはいくつか絆創膏が貼られていた。そんなアオイの手は、まるで氷のように冷たくなっていた。

「シオリ……」

震えるような、か細いアオイの声。

「こんなに冷えて……とにかく保健室に行こう？」

アオイは一人にして、と言ったけれど、さすがにこれだけ体が冷えていては、本当に体を壊してしまう。私はアオイの体を支えながら、保健室にアオイを連れて行った。他の女子も手伝ってくれて、

アオイを保健室のベッドに寝かせると、ようやくアオイも少しは落ち着いたようだった。
もう授業は始まっていたけれど、私達はもうそんなことは今はどうでもよかった。
「何があったのよ」
カーテンで仕切られたベッドの中、パイプ椅子に座ったミズキが訊いた。
「――私、サクライくんに、告白しちゃったの」
アオイはまるで自分の恥部を見られたかのように、布団で顔を隠しながら言った。
「……」
さすがにそれは、さっき彼から聞いたとは誰も言えない。
「告白なんて――するつもりじゃなかったのに。朝の図書室で、一緒にいると、サクライくん、すごく優しくて。何か、気持ち、抑えられなくて……」
「……」
その言葉――私はその気持ち、よく分かる。
「――で、サクライくん、なんて言ったの？」
他の女子が訊く。
「言いたくないのなら、無理に言わなくていいけど……」
「……」
アオイははじめ、言おうかどうか迷っているのか、それとも、自分が激しく傷ついた言葉を思い出したくないのか、少しだけ沈黙した。
けれど、今まで協力してくれていた私達への義理立てのつもりか、アオイは自分の心をズタズタにした、好きな人からの言葉を反芻した。
「時間の無駄だって」
「え？」
「君のお守りをして、僕に何の得がある？　君が僕と対等になれる

能力を一つでも持っているのか？　餓鬼の恋愛ごっこがやりたいなら、他を当たれ、って……」

「はぁ！」

その言葉に、ミズキは激した声を上げた。

「何それ？　ちょっと頭がいいからって！」

「酷すぎるよね……いくらなんでも」

「サクライくん、アオイの作ったお弁当だって食べてたのに」

「……」

他の女子も、彼への怒りを露にしている中で、私は一人、立ち尽くしていた。

――最悪だ。最悪の結果。

まず断られるだろうと分かっていたけれど、それでもこうして現実になると、心にずしりと何か、鉛を呑み込んだような鈍痛が走る。

でも――まさかサクライくんがそこまで言うなんて。

私も――多分、ヒラヤマくんも、彼を信じていた。あれだけ頭のいい人だ。きっと断るにしても、上手く立ち回ってくれると。

断るにしても、どうしてわざわざそんな言葉を選んだのか。もっとやり方があったはずだ。彼の頭なら……

「さあ、あなた達、そろそろ授業に戻りなさい」

保健室の先生に言われて、私達は保健室から出されてしまう。

それでも、ミズキ達の怒りは収まらなかった。

「さすがに我慢できないわ。ちょっとあいつに文句言ってやろう」

ミズキは言った。

「ピアノもギターも聴こえないから、きっと今、屋上ね」

「うん、そうだよ！　サクライくんに文句言ってやろう！」

他の女子も乗り気だ。

「ちょ、ちょっと……」

私は止めようとしたけれど、この怒りは私の仲裁で収まりそうもない。

でも、最悪の状況になったら、止めに入らなければと思い、私は

みんなの一番後ろについていき、屋上への階段を上った。
こんな修羅場のような空気に、私はいまだかつて遭遇したことがなかったので、心臓が張り裂けそうなくらいに緊張していた。
それでも、私がこの時屋上についていったのは、きっと彼の真意を知りたかったから。
彼は確かに、攻撃的な人間だけれど、拳の振り上げる場所くらいはわきまえている人間だと、私は思っている。故意に人を傷つけるところを見たことはまだなかったから。
きっと――アオイにそんな言葉をかけたのだって、理由があるはずなんだ。
ミズキが先頭に立って、屋上の扉を開け、外に出ると。
屋上の真ん中で、コートを着たサクライくんが、横になっていた。右腕を目尻に当てて、眼前の太陽から軽く目を隠している。風も弱い秋晴れで、太陽の光が注ぐ屋上は、アオイの座り込んでいた裏庭より、ずっと暖かい。
扉の開く音を聞いて、彼は上半身だけを起こして、私達の出てきたプレハブの方に目をやる。
「ちょっと、サクライくん」
ミズキ達がそんなサクライくんに詰め寄る。
「アオイをフッたんだってね。さっき、アオイから話を聞いた」
「……」
黙って彼は立ち上がる。少し俯き加減ではあるけれど、ちゃんと背を正した。ミズキよりも僅かに背の小さい体は、とても同い年には見えなかった。
「随分酷いことを言ったのね。時間の無駄だとか」
「――ああ」
彼は自分の口でそれを認めた。はっきりとした口調で。
「酷い、アオイのお弁当も食べてたのに」
他の女子も言った。
「そう言われるのが嫌だから、ロハでは受け取らなかったんだ。僕

だって彼女に勉強を教えていた」
「そういう問題じゃないよ！」
他の女子も彼を叱った。
「……」
彼は僅かにうなだれる。
「アオイはあなたのこと、本気で好きだったのよ。それが分からなかったの？　そんな女の子に、どうしてそんな酷いことを言ったのよ」
ミズキはサクライくんにきつい口調で言った。
「……」
サクライくんは答えない。
「あれだけ一緒にいて、アオイのこと、何とも思わなかったの？　申し訳ないとか、思わないの？」
「……」
沈黙。
「――最っ低」
ミズキは吐き捨てた。
「話にならないわ。こんな奴」
そう言って、ミズキは踵を返して、屋上を出て行ってしまう。他の女子もそれを見て、もうミズキが自分達の言いたいことを言ってしまったので、気が済んだのか、静かにすごすごと屋上を出て行った。
――屋上に、私とサクライくんだけが残される。
「……」
サクライくんは黙って、屋上の柵の方へと足を運ぶ。そこに腕を乗せて、前かがみに寄りかかって、外の景色に目を向けていた。
「……」
教室に鞄を置きに来る時から、私は今日の彼に何となくの違和感を感じていた。
確かにこの時間の彼は、いつも眠そうに目をとろんとさせていて、

怠惰な印象を受ける。今日もそうだ。彼の今の所作には、気だるさばかりが目に付く。

だけど、今日はいつもと少し様子が違う。肉体的というよりは、もっと深いところの疲れが出ているような……そんな気がした。いつもの彼なら、教師に絡まれたら真っ向から受けてたつのに、今日は、相手をしたい気分じゃないとも言ったし。

――そんな思いで見る彼の背中に、私は近づけない。声をかけられない。

そんな雰囲気が、彼の背中から溢れているのだ。彼に何か効きたいし、声をかけたいとも思うけれど、声が出なくて。

そのまま私は、1分ほどそこに立ち尽くしていた。

「――君は行かないのか？」

やがて、彼は後ろを振り向かずに、私に言った。

「……」

いつもの声。静かで、だけどよく響く。優しい響きの声。

「何もないなら、どこかへ行ってくれ」

「……」

その言葉を聞いて、私の頭は急に、ドラムロールのような音を立てて回りだす。

何か声をかけなきゃと、訳も分からず慌ててしまう。

「あ、あの！」

私は彼を呼び止める。

「コ――コーヒー、いる？」

私は何故か彼に、そう言っていた。何となく、私と彼が話をする時は、コーヒーを私が奢るのが、決まりみたいに私は思っていたのかもしれない。

Another story ～ 2－37

私の買ってきたコーヒーを、彼は一口あおった。彼は甘いものが苦手みたいだ。どちらかといえば、微糖とか、ブラックコーヒーを好む。そんなコーヒーで眠気を覚ましながら、夜遅くまでアルバイトや勉強をしてきた彼の姿が目に浮かぶ。

私も今日は、彼を真似して、今日は苦いコーヒーを買ってみた。一口飲むと、甘党の私には酷くこれが苦いもののように感じた。

「――そう言えば、君、ずっと図書室に来てなかったな」

彼は言った。

「だって――あなたとアオイが……」

私は思わずそこで口を止める。今、アオイの名前を出すのはまずいと思ったけれど、口に出てしまった。

「――そうか」

サクライくんは、柵の上にコーヒーを置いた。

「サガラ――どうしてた？」

サクライくんは私に背を向けて、また景色の方を見る。

「――泣いてたわ。裏庭で、一人。膝を抱えて」

「――そうか」

力ない彼の声。

「……」

沈黙。

「さっきのミズキ達の繰り返しになっちゃうけどさ――」

私はそんな彼の背中に声をかける。

「アオイは、あの娘なりに、あなたのこと、本当に好きだったのよ」

「知ってるよ」

彼は言った。

「え？」

「――と言っても、本当はもっと前に気付きべきだったのかな。気

付いたのは、ついさっきだ。今日の朝、図書室でサガラに告白された時に」

「……」

ちょっと意外な返答。

「もしかして――ちょっとは心、動いたの？　アオイの告白に」

私はその意外さを駆って、もうひとつ訊いてみた。

「――どうかな。感情の言語化は苦手だ」

彼は言った。

「だが、申し訳ないことをしたな。彼女には」

また彼の力ない呟き。

「……」

どうしたんだろう。やっぱり彼の様子がおかしい。

「――そう思うなら、何で断ったの？」

私はまた彼の背中に訊いた。

「て言うか――本当なの？　アオイに酷いことを言ったって」

「――ああ」

「何で？　分かってたんでしょ？　アオイの気持ちも、それを言えばアオイが傷つくってことも」

「……」

彼の溜め息をつく声。

「――だから言ったんだよ」

「え？」

「あの娘はいい娘だ。一緒にいて、それくらいのことは僕にも分かる。だからな」

「……」

「言っただろ？　恋は寂しがり屋とするべきだ、って」

彼は言った。

「残念だが、僕はサガラが、一度きりの高校生活を捨ててまで追いかけるべき相手じゃない。どうやら彼女は僕を見誤っていた。今の僕を形作るものの大部分は、サガラが知らなくていい――知る必要

のないものだ。だけど、告白してきた時のあの娘の眼は、僕にもっとロマンチックなものを見ていたからな……そんな眼に、実際の僕なんかを映させるのが忍びなくなってな」

「……」

「でも――少しやり方を間違えたかな。サガラがもう少し立ち直りやすい言葉を、もっと選べばよかったかもしれないな。可哀想なことをしたと思うよ」

その時、ふと彼がコーヒーの缶を手に取って、それを一口飲んだ時。

秋の陽光に朧に照らされた、彼の横顔が見えた。

そして私は、その彼の横顔に、息を呑んだ。

とても強い意志に満ちた、彼の静かな目は、何だか酷く悲しそうで。自分のためには仕方のないことだと言い聞かせていても、それでも心の痛みに声を上げてしまいそうな――それを必死に耐えているような、そんな目をしていた。

初めて見る、彼のそんな表情。

それを見て、私は初めて気付く。

「……」

――この人、今、すごく傷付いている。

この人だって、アオイを出来ることなら傷つけたくはなかったんだ。何とかしようと思ったけれど、どうしようも出来なかった。彼が嘘をついてアオイに合わせて関係を作ることは出来たかもしれない。でも、そんなことをしても、アオイの想いを踏みにじり、今よりずっと深い傷を与えることは分かっていたから。

だから、もう自分がどんな選択をしても、アオイを傷つけるしかないと悟った彼は、わざと辛らつな現実を突きつけて、アオイの想いに止めを刺した。その方が早くアオイは楽になれると思って。

そして、何も悪くないアオイに対して、そうすることしか出来なかった自分の無力さを、後悔し、憤り、怒りを覚えている……

屋上で一人彼は、そんな想いを噛み締めていたのだ。アオイのこ

とを、ちゃんと考えていたんだ。

「……」

今まで私は何を見てきたのだろう。

今まで私は、アオイが如何に傷付かないかばかり考えていて、彼が傷付くなんてことを、これっぽっちも考えられていなかった。

彼は頭がよくて、切り替えも早い。こういう時に、きっと上手くやってくれると思っていて。

だけどそんなのは誤魔化しだ。ただ自分が嫌なことを、詭弁を使って彼に押し付けていただけ。

この人だって一人の人間で、まだ私達と同じ、16歳の男の子なんだ。あまりに彼の能力が高すぎて、学校では誰も彼にそんな心配を向ける者はいないけれど……

彼にだって、出来ないことはあるし、そんなことで傷付く心があるんだ。

そして——そんな彼に傷を与えたのは、私だ。

アオイが彼に好意を寄せていると知った時から、私はその想いが彼に届かないということが分かっていた。

でも、言えなかった。アオイの想いを踏みにじりたくなかったし、それを言うことで、アオイとの関係が崩れるのも嫌だった。

でも、それを言わなかったから、サクライくんはアオイを傷つけたくもないのに、無闇に傷つけなくてはならなくなった。

彼だって、はじめからそうして人を傷つけたくないから、誰かを必要以上に近づけなかったのかもしれないじゃないか。今思えば、彼ははじめから、そういう警告を、私達に出していたじゃないか。

私さえもっと上手く立ち回っていたら——傷付いて悪者になる覚悟さえ持っていれば、彼は傷付かないで済んだ。どの道アオイが傷付かない方法なんてなかったのだ。だったら傷つけるのは私でよかった。私が私のみを守ったばかりに、代わりに傷付いたのは彼とアオイだ。彼の目に今宿る痛みや悲しみも、本来なら私が受けるべきだったんだ。

彼は本当の優しさを知っていた。優しい故に、自分が傷付くことも厭わず、アオイを救おうとした。私みたいに、詭弁を使ってアオイを励ましていたのは優しさなんかじゃない。私のしたことは、同じ傷付く人に、もっと深い傷を与えてしまっただけだ。

「――しかし、今思えば君も、ユータやジュンイチも、グルだったんだな」

そんな考えを巡らせている時、彼が私に背を向けて、屋上からの景色を見つめながら、私に声をかけた。

「だとしたら、申し訳ないことをしたな。労力を割いた割に、こんな結果になっちまって」

「……」

その声に、私の中の何かが、ぞくっと震えた。視界がじわりと滲んで、目の前の彼の背中がぼやけてくる。

――何故、私にそんなことを言うのだろう……

私は、あなたがアオイの告白を断ることが分かっていた。

なのにそれから眼を背けて、アオイに協力するなんて詭弁で自分を守って。

結果、あなたを傷つけた。私がもっと上手くやっていれば、あなたは傷付かずに済んだ。こんな後味の悪いことを、しないで済んだのに。

――責めてくれた方がよかった。今更だけど、せめて自分が負うはずだった痛みを、私も負わなければ、二人に申し訳が立たない。今、辛そうに一人で痛みを耐えているあなたの苦しみを、少しでも負ってあげたかった。

でも――痛みを分かち合うことも、あなたは私に許してはくれない。

それどころか、自分に痛みを与えた女のことを、あなたは……

――そんな気持ちがはじけて、私の目から涙が零れ落ちてくる。

涙は次々に溢れる。私は背を向ける彼が気付く前に、泣き止まなくちゃと、必死で嗚咽が漏れるのをこらえるけれど……

「お――おい……」
サクライくんが、そんな私に気付いて、私の方に近付いてくる。
だめ――だめ。来ないで。今の顔、あなたに見られたくない……
「いきなりどうした？　僕、君にも何かしたか？」
見に覚えがない彼は、それでも自分の非を疑う。
「ごめんなさい……何でもないの……だから……」
――優しくしないで。
私は、あなたに何もできない。あなたが苦しい時、その苦しみを和らげてあげることも出来ない。
あなたの胸の中に残る棘を、少しでも抜いてあげたいのに、あなたには届かない。
それを思い知らされるだけだから。
だからもう、これ以上私に、優しくしないで……
「――泣くなよ。君まで」
彼は言う。
「もう今日は、サガラの泣き顔を見て、気が滅入っているんだ。なのに、何で君まで……」
「――ごめん……ごめんね……」
私は何とかそんな言葉を搾り出すので精一杯だった。
こうして泣いていても、彼を困らせるだけなのに――分かっていても私は、今までの自分の行動の慙愧の念に耐えられなかった。
「――ほら。涙を拭け」
そう言って彼は、私に近付いて、自分のピーコートのポケットから、駅前で配っているようなポケットティッシュを取り出して、私に差し出した。
「ハンカチなんて気の効いたもの、持ってないからな」
彼はそう言った。
「……」
彼の声が、この学校に来て初めて、優しかった。
冷静で、時には非情な決断を迷い無く下せる人だと思っていたの

に……

私は彼からポケットティッシュを受け取って、自分の眦を拭った。

それを見たサクライくんは、ふっと息をついて、踵を返して、屋上のプレハブへと足を向けた。

「……」

その彼の背中は、一人にしてくれ、という拒絶を強烈に表していた。この非、彼は見たくもない女の子の泣き顔を、二人も見てしまった。何だかこの短い時間で、酷く疲れているようだった。

「ああ、そうだ」

屋上のドアノブに手をかけた時、彼は一度立ち止まり、私の方を見ずに言った。

「今言ったことは、誰にも言うなよ。サガラにも、他のクラスの連中にも」

それだけ言って、彼は屋上を出て行く。

屋上に、私一人が残される……

「……」

まだ教室では、2限目の真っ最中だろう。アオイは——まだ保健室だろうか。それとも——早退しただろうか。

私は屋上に、ぺたんと座り込む。

さっきのサクライくんの、悲しげな顔が、今も心の中に強く残留していて……

あの顔を見た時から、胸が苦しい。

触れられたわけでもないのに、胸が熱くて……照れたときにも少し似ているけれど、ちょっと違う……

「サクライくん……」

私は呟いた。

彼の今の心の中は、どうなっているのだろう。

元々連日の労働と自己研鑽の努力で、疲労困憊の中で、優しい彼が、こんなことをして……

——彼を見極めたいなんて言っていた私が、実は一番彼のことを

知らなかったんだ。
憧れの眼で見ていたばっかりに、私は彼のことを、本当の完璧な超人のように思っていて。
彼に任せれば何も心配要らない。彼に不可能はなく、どんなことでもやってくれると、勝手に思い込んでいた。
そんなことはないのに。彼だってまだ１６歳で。おまけに苦行のような毎日の中で、他人に心を配れる余裕なんて、無かったはずだ。
何でそれにもっと早く、気付かなかったんだろう……
――その折節。
屋上の入り口の扉が開いて、一人の生徒が屋上に姿を現した。
扉の音に私は振り向くと。
「ああ、やっぱりここか」
そこにはヒラヤマくんが立っていた。

「女子達が帰ってこないんで、ケースケに文句を言いに行ったのかと思って心配になってな。授業を抜け出して、様子を見に来たんだが――あれ？」

こちらに歩を向ける途中、彼は足を止めた。

さっきまで泣いていた私の目の周りの、涙を拭いた跡に気づいたのだ。

「……」

沈黙。

「はぁ……上手くいかないもんだな。淡い期待をしていたわけじゃないが、予想通りの展開だ」

ヒラヤマくんが言った。

「……」

「あいつ、変なところ優しいからなぁ。その癖言い訳しないし。自分が背負い込むことでしか、人に優しくできない奴だからな」

「……」

ヒラヤマくんのその言葉に、私は全てを理解した。

私もヒラヤマくんも、サクライくんがアオイの告白を断ることは分かっていたけれど。

私は彼が告白を断る理由を見誤った。

「サクライくんがどんな行動を取るか――全部予測していたのね」

私は顔を上げた。

「これでもシオリさんよりは、あのバカとの付き合いも少しは長いしね。あいつ、付き合ってみると、行動原理はシンプルだし、分かりやすいところ、あるんだよ」

「……」

私は彼の生活に、少しだってアオイや、他の人間の入り込む余地はないのだと思っていた。告白を断るのだって、彼自身に余裕が無

くて、自分のためにアオイを切り捨てるのだと思っていた。
でも――違った。彼はアオイのことをちゃんと考えていた。自分のことなんて二の次にして、彼はアオイを救おうとした。それがアオイに伝わるかは分からないけれど……ヒラヤマくんも彼がそんな行動を取るだろうと思っていた。私だけが、彼の行動を見誤っていた。
「で？　シオリさんは今回のことがあって、どうだ？　ケースケへの気持ちは変わったか？」
ヒラヤマくんは屋上の柵に背を預けて、両肘を柵の上に乗せた。
「え……」
私は泣き腫らした顔を上げる。
「だってシオリさん、ケースケのこと、好きなんだろ」
「！」
「あ、好きって言っても、恋愛感情だぜ。いいお友達とか、そういうの無しな」
それを言われて、私の胸が締め付けられるように痛んだ。
「ち、違うよ、わ、私はサクライくんのこと、すごいな、って思ってるだけで……」
「――なのにシオリさん、アオイさんの恋を応援するなんて、不可思議なことを言ってたからさ」
否定する私の言葉を歯牙にもかけずに、ヒラヤマくんはそのまま話し続ける。私の言葉はヒラヤマくんの言葉にかき消され、声が止まってしまう。
「シオリさんがアオイさんの恋に協力しようなんて言ってなければ、俺はアオイさんに、ケースケはやめておけって忠告してた。ジュンをやりたいようにさせてたのも、シオリさんに距離を縮めていくケースケとアオイさんを見せるためさ。だって、このままほっといたら、アオイさんのためにも、シオリさんのためにもならないからさ」
「……」
「シオリさん、随分二人のこと、気になってたみたいじゃないか。

朝の図書室を覗きに行ったり……」
「そ、それは……」
「はじめは協力するなんて言ったけど、最後の方、少し後悔したんじゃないか？　ケースケの側にいるアオイさんに、嫉妬したり……」
「わ、私は……」
私はその場から逃げ出したい衝動を振り払うように、かぶりを振る。
「じゃあ、ケースケのこと、嫌いか？」
「き、嫌いじゃない。嫌いじゃないよ」
「じゃあ、好き？」
「……」
そんなまさか――わ、私は男の子が苦手なんだ。そんな私が……
でも、ヒラヤマくんはこのまま私を逃がしてはくれない。
サクライくんのことを、私は……
「違うって否定できるほど、シオリさんはまだ自分の気持ちとちゃんと向き合っていないんじゃない？」
頭がごちゃごちゃになっている私に、ヒラヤマくんが落ち着いた声で言った。
「別にケースケが好きじゃないって結論付けるならそれでもいいさ。でもね、それをするなら、まずは真剣にケースケと向き合ってからだ。それをしてからでも結論を出すのは遅くはない。だけど、頑張ることもなく、勇気を出すこともなく選んだ道ってのは、必ず後悔につながっているんだ。実際今、シオリさんはアオイさんに、自分の気持ちを無視して、協力するなんて言って、後悔してるだろ」
「……」
沈黙。
「――なんてな」
ヒラヤマくんがふっと力なく笑った。
「今の言葉は、俺のセリフじゃないんだ。中学時代、俺の大好きだった女の子の受け売りだ」

「……」

ヒラヤマくんは空を見上げた。

「――少し、俺の話をしていいか？」

それからヒラヤマくんは、自分の中学時代のことを語り始めた。

勉強が苦手で、もう学校生活で何をしていいのかわからない。だから自分は得意のサッカー一本で生きていこうとしたけれど、両親がそれを認めてくれなくて――中学のサッカー部を引退して、いざとなればスポーツ推薦で高校には行けるという環境の中で、抜け殻のようになっていて、一歩も前に進めずにいたこと。

そんなある日、当時付き合っていた女の子から、勉強を捨てるのなら、まずはもうこれ以上できないってくらい、勉強と向き合ってから勉強を捨てろと言われた。彼はその言葉を信じて、県下一の進学校、埼玉高校を受験したこと。

「はっきり言って、埼玉高校を受けて、ケースケに出会えたのはタナボタだったけどさ。でも、その女の子に言われて、俺は勉強と向き合って、進路を自分で決めて、よかったと思ってる。俺、あの時自分がサッカー得意だからって、安易に進路を決めようとして、実際は色んなことから逃げてただけだったんだ。楽な道を選んで、苦しいことに目を背けて――きっとそんな気持ちで俺はサッカーの強豪校の寮なんかに入ってたら、ちょっと苦しかったらすぐ逃げ出していたかもしれない。だからさ、その女の子の言ってくれたことは、今も俺、ずっと胸に残ってるんだ」

そんな話をするヒラヤマくんの顔は、少し寂しそうだけれど、何だかとても晴れやかで……

そういう話に疎い私でも、その顔を見ればわかる。プレイボーイと言われるヒラヤマくんだけど、彼にそんな言葉をかけてくれたその女の子は、彼が今も心のどこかで想い続けている女（ひと）なのだと。

「ヒラヤマくんにとって、その娘って……」

「ああ――その話はとりあえずここまでだ」

ヒラヤマくんは苦笑いを浮かべる。

「シオリさんもさ、確かにきついとは思うよ。はっきり言って、今ケースケを好きだって認めてしまっても、今のあいつにその想いが届くことはないって、さっきアオイさんのことで実証された――それを目の前で見ちまったばかりだ。認めたって、辛くなるだけかもしれない。でもさ、それから目を背けても、何も変わらないけれど、それとしっかり向き合えたら、前に進めるかもしれないんだよ。俺達くらいの年代の心の痛みってのは、きっとそういうものなんだよ。良薬、口に苦し――だっけ？　苦い薬も飲まないと、心のもやもやってのは取れないようになってるんだよ」

「……」

私の胸は、どんどん苦しくなる。

サクライくんのことをどう思っているか――ただそれだけのことを考えるだけなのに。私の心は少しも前に踏み出せない。

好きとか嫌いとか――そんなの、分からない。たとえ好きでも、私は彼にどうしてあげればいいのか、私はどうしたいのか――相変わらず私はそんなことを1ミリだって想像できない。

好きだと認めたって、先のない想いで――だとしたら、諦めた方がと、私を促すのに。

どうしてそれを私自身が受け入れられないんだろう。

「……」

沈黙。

「――じゃあシオリさん、俺と付き合ってみるか？」

ふと、ヒラヤマくんが言った。

「え……」

「ケースケのこと、好きじゃないならさ。シオリさんとしても、ある種の経験にはなると思うぜ」

「ちょ、ちょっと待って！」

「俺のこと、嫌い？」

「き、嫌いじゃないけど……」

「俺は、シオリさんのこと、好きだぜ」

「……」

「可愛くて、優しくて。今もそうして、誰かのために泣いたり出来る、素直なところが、すごく好きだ。出来たらそんなシオリさんの力になってやりたい」

真剣なまなざしでそう言った彼の端正な顔が、私を捉える。

「……」

好き……

昔男子に告白された時は、その言葉は、私の心の側面を滑り落ちていくだけで、その気持ちを上手く理解できなかった。

なのに私、今、すごくどきどきしている。

――確かに、はじめはプレイボーイのヒラヤマくんのことがちょっと苦手だった。けれどアオイのことを通じて、この人が少なくとも、不誠実な人ではないことは分かった。エンドウくんとはまた違う意味で、信用できる人だということも分かる。

この人は背が高くて、運動も出来て、女子だったらこんな人と付き合えたら、きっと心が動かない人はいないのかもしれない。

それなのに……

ヒラヤマくんに好きだと言われた瞬間に、私の脳裏に、確かにあの人が。

はっきりとサクライくんの姿が浮かんだ。

考えがまとまらない私の前に、ヒラヤマくんが近付いて、私の前に立った。

「俺――シオリさんのこと、大事にするよ。泣かせるようなことは、絶対にしないから」

「……」

私は……

その時。

どこかから、ピアノの音色が聴こえ始めた。

私もヒラヤマくんもその音に気付いて、視界をきょろきょろと動かす。

そしてそうしてから、ようやくピアノの音色に耳を傾けられるようになって。

その音色の美しさに、心を奪われる。

少し悲しげで――素朴で。それでもどこか懐かしいような、胸の奥がじんわり温かくなるような、そんな憧憬と、優しさに満ち溢れた音色。

聴いたことのないメロディ。まるで路傍の影に忘れられたように咲く花に向けられたような……

――サクライくんのピアノだ。

きっと、アオイのことを思って、この曲を弾いているのだと、私はその時思った。

自分がアオイの隣を歩いてあげることは出来ないけれど、せめてアオイの未来に幸あらんことをと。

そんな願いが込められたような、優しい音色だった。

「……」

彼のピアノの音色を聴いて、私の胸は一度、とくんと高鳴る。

その音色の中に、私が最初に彼の中に見た、花の美しさがあったからだ。

きっと今、あなたの心は憤りで、酷く掻き乱れているに違いない。

それでなくてもあなたの今の心には、少しも余裕はなく、疲れきっているはず。

でも、そんな時でも彼はアオイのことを思っていた。ミズキ達に罵られても、言い訳ひとつせず、誰も見ていないところで、彼は誰よりも優しかった。

そんな、自分が辛い時でも、他人に優しく出来る彼が……

その時、とても愛しく思えた。

きっと彼は自分が優しいなんて自覚していない。誰かに自分をよく見せようとか、誰かに気に入られようとか、そんな思いは一切ない。このピアノだって、ただ何となく弾いているのかもしれない。

ただ、今のもやもやを吹き飛ばすための慰みに。

でも、そう思っていないからこそ、正直で、一途で――
花だって、誰かのために美しく咲こうなんて考えてはいない。彼の中に咲く花も、きっと同じ……
私は、そんな綺麗な花を持つあなたを見る度に、気持ちが上を向いた。
そんな気持ちを『愛しさ』と呼ぶのだろうか。まだ私には分からないけれど……
「あ、あの」
私はヒラヤマくんの目を見る。
「ごめんなさい――ヒラヤマくんのその想いに、今の私は、返事できない」
私は言った。
「好きとか、嫌いとか、分からない。でも――私、サクライくんのこと、すごく気になる。それだけは現時点で確かなこと――だと思う。だ、だから……」
「そうだな。それでいい」
告白を断る、いつもの後味の悪い展開を予想していた私だったけれど、ヒラヤマくんの声は、それに反してすごく爽やかだった。
「俺としても、本当に気に入った女の子とは、こんなドサクサ紛れで付き合えても、嬉しくないからな。時間がかかっても、ちゃんと答えを出してもらって、選んでもらった方が望ましい」
「……」
「て言うか、これでシオリさんが思わず、うん、って言ったらどうしようかと思ったぜ、はは」
「……」
――好きだなんて言ったのは、私にカマをかけるためか。
私に、サクライくんのことをちゃんと考えさせるために、芝居を打ったんだ。
「あ、でも、シオリさんのことを好きだってのは、本当だぜ。いつでもいいから、そのうち返事聞かせてくれよ。ケースケがダメだっ

た時のキープでもいいし、卒業まで待つのも一興だしな」
「う、うん」
「さて、とりあえず話も済んだところで、教室戻ろうぜ。もう授業終わっちまうけどさ」
そう言って、ヒラヤマくんは踵を返した。
「あ、あの、ヒラヤマくん」
私はそんな彼に声をかけた。
「あ、ありがとう。色々……」
私はそう言った。するとヒラヤマくんは、ふっと力ない笑みを浮かべた。
「――シオリさんってさ、昔俺が大好きだった女の子に、少し雰囲気が似てるんだよ。だからなんかサービスしたくなってさ」
「……」
「自分でも、昔の彼女に似てるからなんて、不純な動機でシオリさんに好きだって言ったと思うよ。でもさ、理由はどうあれ、それで好きになっちまったんだから、仕方ないよな」
「……」

この日、何となく私は、自分の彼への想いを、何となくだけど自覚した。
正直心が揺れた。自分の思いが彼への行為だとして、自分の想いが彼に伝わる可能性が限りなくゼロに近いのは、ついさっき証明されたばかりで。
アオイのこともある。友達が振られたばかりで、私がその隙を狙っているハイエナの如く、彼に接触など、許されることなのか。
でも――今度彼と二人きりになれたら、彼のことをもう少し、よく見てみよう……
恋愛に疎い私は、まだこの時、自分が思い切った行動に出る勇気がなかった。その程度のことでも、まだ精一杯だったのだ。

しかし、私がこの後、彼と二人きりになれるチャンスは、しばらく訪れなかった。

この日から1週間も経たずに、サクライくんに彼女が出来てしまったからだった

Another story ～ 2－39

彼に彼女が出来たことは、瞬く間にクラスどころか、学校中に知れ渡った。

学校の有名人のサクライくんの初の彼女である。話題にならないわけがない。

だけど、アオイのことがあってからすぐのことだっただけに、クラス中の女子はそんな彼の行動に陰口を叩いた。

だけどサクライくんはそのことに関しては、誰にも何も言わなかったし、何かを訊けるような雰囲気でもなかった。彼は元々必要以外の時は殆ど口を開かない人だったけれど、アオイとの一件以来、その無口さに拍車がかかりだした。エンドウくん達でさえ、彼女が出来た経緯をよく知らず、ただ、あの後別クラスの女子に告白されたのをOKしたということしか、聞いていないそうだ。

そのサクライくんの彼女になった女の子は、何とも大人しそうな、可愛らしい普通の女の子だった。いつもサクライくんの3歩後ろを、ヒヨコみたいにチョコチョコついていくという感じの女の子、何だか好感が持てる娘だった。

正直私も彼に彼女が出来たと聞いて、ものすごく驚いた。妄信かもしれないけれど、彼に限ってそんなことはないと思った。

その話が本当だと知って、私も彼がどんな付き合い方をするのか、野次馬根性が目覚めなかったといえば嘘になる。

でも――何だか見たくなかった。ようやく自分が、サクライくんへの気持ちと向き合おうとしていた矢先に、彼に彼女が出来てしまって……

私のイメージだと、そういう彼氏彼女というのは、できたての頃は例外なく、みんな幸せオーラに満ち溢れているものだと思っていた。私は彼の不幸を望んでいるわけではないけれど、その時は何故か、彼の幸せそうな顔を、見たくなかった。

でも――

当のサクライくんの生活は、今までと全く変わらなかった。

彼女と一緒に下校するところなどはたまに見たことがあるけれど、彼が彼女と手をつないでいるところすら、見たことがなかった。彼の食事は毎食賞味期限切れのコンビニ弁当に戻ったし、彼女と校内で会っても、彼の表情や仕草に特別な感情は一切見られなかった。

付き合って半月くらい経って、私はそのことに気がつく。

彼女と付き合って以来、彼は総長の図書室には来なくなった。彼女がいる身で、私――他の女の子と二人きりになるわけにはいかないということなのか分からないけれど、私はあの屋上以来、彼と話す機会はほとんどなくなった。

でも――教室で見る彼は、彼女が出来て浮かれている、幸せそうなオーラをまるで感じなかった。それどころか、眼の輝きが薄れて、疲れが増し、酷く注意力が散漫になっているように見えた。体は鉛のように重そうで、まるでその小さな体を引きずるように動いている姿が目に付いた。

それでも彼は優秀で、成績も抜群によかったし、サッカー部ではフリーキッカーも勤め上げ、ようやくそれが様になり始めていた。だから、彼自身の中に起こっている変化に、誰も気付くものはいなかったけれど……

――もしかしたら彼女を作ったのは、周りからなんだかんだと干渉されるのが煩わしかっただけなのかも知れない。

彼女の手も握らない、指一本触れたりしないのは、彼女に彼なりの義理を通しつつ、彼女が愛想を尽かすのを待っているようだった。それを全校生徒に見せ付けて、もう二度と自分と付き合おうという気にならないように、促しているようにも思えた。

きっとアオイも、今の彼と付き合っていたら、きっとこんな風に付き合われていたのだろうと、彼はそれをわざとクラスメイトに突きつけているようにも思えた。

彼はそれだけ疲れきっていたのだ。アオイの一件以来、彼はもう、

他人を利用してでも、自分への干渉を減らしたかった。身軽になろうとした。

日に日に精彩を欠いていく彼を見て、私は何となくそう思った。

そんな彼の沈んだ表情だけを残して、2学期が終了し、私はまたしばらくサクライくんとは会えなくなった。

そんな冬休みを、私は一人、悶々と過ごした。

――頭では、サクライくんとあの彼女は何も起こらないだろうとは思っていても、会えなくなって、様子を知る機会がなくなると、何も見えない分、何が起こっているのか、気になってしまう……冬休みはクリスマスとかお正月とか、イベントも多いし。

気がつくと私は、彼のことを考えていた。

クリスマスは、エンドウくんがクラスの彼氏彼女のいない人間だけで盛り上がろうと開いてくれた会に誘われ、私も参加した。ヒラヤマくんとミズキ、そしてサクライくんは不参加だった。

私はアオイと参加した。あれ以来、私とアオイの間には気まずい空気が流れてはいたけれど、同じ部活に所属しているし、お互い揉め事を好む性格でもないから、私が歩み寄れば、アオイはいつものように笑顔を返してくれるようにはなった。

その会の帰り道、一人だけ地元出身の私を、エンドウくんが家の近くまで送ってくれた。彼の家は川越の隣にある狭山市で、自転車で来ていたから、ついでだと言って。

「しかし、シオリさんに彼氏がいないなんて、世の中分からないものだなぁ」

エンドウくんはその帰り道、しみじみと言った。

私からしたら、エンドウくんみたいな人を選ばない女子の方がどうかしていると思った。何でこんな優しい人が、女子の人気はいまいちなのか。

「私も好きになるなら、エンドウくんみたいな正直な人がいいのにな」

思わず私は、今の悶々とした気持ちも手伝って、そんなことを口

走っていた。
「えぇ？　惚れてまうやろぉ」
　でもエンドウくんは、その私の言葉を冗談だと思ったらしく、おどけてそう言った。

　お正月は家族水入らずで過ごした。元旦を家で過ごして、初詣に行き、2日からは新幹線でお父さんの実家のある青森に行って、お祖父ちゃんお祖母ちゃんと過ごした。夏休みはお母さんの実家のある長野に行ったから、二人に会うのは1年ぶり。
　そして家に帰ってきたのが1月4日。この日から、3学期の始業式である1月8日までが、何だか異常に長かった。一日千秋と言うのか。眠れない日が続いた。
　そして、始業式の日が来ると、教室の前で、サクライくんとばったり鉢合わせた。
「……」
　変に胸がどきどきした。不自然に眼をそらしてしまい、彼に変に思われたのではないかと不安になった。
「――押忍」
　しかし、彼はそうぶっきらぼうに返事をしただけで、教室の引き戸を開けて、私を横目に教室に入っていってしまった。
「……」
　ただそれだけのこと。
　それだけのことなのに。
　びっくりするくらい、自分の気持ちが揺れ動く。
　他の人とすれ違っても、決して反応しない、私の心の中に、彼にだけ反応する回路があることに、私は気付く。
　恥ずかしくて、くすぐったくて、ちょっと息苦しくなるような。だけど、その回路が反応するたびに、何となく心が温かくなって、ふわっと体が軽くなるような、目の前がぱあっと明るくなるような、

そんな浮遊感、高揚感を覚える。
――やっぱり、彼は私にとって他の男子とは違う、ちょっと特別な存在みたいだ。
でも――それをおおっぴらに表に出すわけにはいかない。だって今の彼には、彼女がいるんだもの。
今の私は、その想いが表に出ないようにこらえるだけで精一杯だった。苦しいけれど、それでも彼に会えると嬉しくて、会えるたびに幸せな気持ちになった。二律背反した感情を何とかしたかったけれど、自分でもどうしようも出来ない。こんなに自分の中でコントロールできない感情は初めてだった。
でも――
３学期にはいっても、彼の様子のおかしさは全く改善されていなかった。始業式直後の実力テスト、数学、英語、現代文の３科目だったけれど、１位の私と２位のサクライくんで、たった３科目なのに１０点差がついた。
サッカー部の試合でも、彼はエンドウくんの制止も聞かずに闇雲にボールを追ってしまう、注意力を欠いたプレーが目立つようになった。
口数はただでさえ少ないのに、どんどん減っていき、顔色が悪い日さえ、そう珍しくなくなった。
それでも彼は、表情に辛そうな素振りを見せまいと、必死に鉛のようになった体を動かしていた。そんな体でも、彼は他の生徒よりずっと優秀な成績を収めていた。だからあまり他の人からは心配されてはいなかったけれど。
学年末テストでは、私と彼で、過去最大の３０点差がついた。さすがに心配だけど、彼の答案を見せてくれとは言えないし、タカヤマ先生に裏事情を聞いたところ、ケアレスミスや途中式での計算ミスなどでの、つまらない間違いが、最近の彼はすごく多いそうだ。それでも教師達は、今まで生意気放題だった彼の失墜に、大いに溜飲を下げているらしい。

結局私はそんな彼に、3学期の間、ろくに話をすることも出来なかった。おはようと、挨拶をすれば彼も返事をしてくれたし、何気ない会話をすることもあったけれど、結局二人きりで前のように話すチャンスは訪れなかった。

そして、そのまま終業式が終わり、卒業式が終わって、私の高校生活最初の1年は終わった。

春休みは、新しい大会と、入学式直後の演奏と、新入生歓迎のための演奏会の練習と、部活の活動がとても忙しくなり、私は毎日のように学校に通って、吹奏楽部の練習に明け暮れた。

その春休みのある日、風の噂で、サクライくんが今の彼女に振られたという話を聞いた。何でもその現場を見た人の話では、相当揉めていたらしく、彼女にサクライくんが頬をビンタされたらしかった。彼自身は無抵抗で、彼女に手を上げたり、怒鳴ったりしているわけではなかったらしいけれど。

彼のあの、手も握らず、彼女に何の興味も示さないような付き合い方は、今では多くの女子の不興を買っていた。だから、あれで彼女が怒らない方がおかしいと、みんなは言っていた。

でも、アオイは何だか、その話を聞いて、何だかずっと背負っていた肩の荷が下りたような、少しほっとしたような表情をしていた。サクライくんがあの時断ってくれたのは、今の自分にそんな付き合い方しか出来ないからだということに気付いたのか、それとも、その彼女が彼をビンタしてくれたことで、アオイの気も済んだのか、さすがに訊けないし、私には分からなかったけれど、私はもしそのどちらかであれば、その理由は前者であって欲しいと願った。

そして――

その話を聞いて、私は家に帰り、お風呂に一人静かに浸かっていると。

連日の吹奏楽部の猛練習のせいか、ちょっとうとうとしてしまって……

まどろむ私の脳裏に、彼の姿を見た。

私に向かって、にこっと微笑んでくれる、彼の顔。
私はそれを見て、ふと目が覚めた。
――そうか。もうサクライくん、彼女はいないんだ。
そうなったら、私と彼の関係は、次に学校が始まった時、どうなるんだろう……また少しは、前みたいに話せる機会が増えるのかな。
側に行きたい――自分の気持ち、ちゃんと知りたい。
でも……

2年生になると、クラスが大体文系クラス、理系クラスに分かれる。私は下に兄弟がいるし、学費が理系と比べて安い文系志望。自分自身も文系科目の方が若干得意だし。アオイとミズキはどちらも理系志望だったので、クラスが分かれた。
そして、クラス発表の時、掲示板に張り出されたクラスメイトの名前を見て、自分と同じ2年E組に、エンドウくん、ヒラヤマくん、そしてサクライくんの名前があったのを見て、私は顔がほころんだ。後で訊いた話だけれど、本当なら学校一教師の寵愛を受ける私と、学校一の教師からの嫌われ者の彼が同じクラスになるのは、教師達も快く思っていなかったらしいけれど、タカヤマ先生が、わざわざ口を訊いてくれて、私達を同じクラスにしてくれたらしかった。
あの3人と――特にサクライくんとまた1年同じクラスになれる。そう思っただけで、私はうきうきしながら、新しい教室への階段を上っていた。
そして、新しい教室に入ると。
相も変わらず、3人はとりあえず教壇の近くで立ちながらお喋りしていて。
サクライくんもそこにいた。また少し背が伸びてる。入学したての頃は私と同じくらいだったのに。
そう考えると、この1年、色んなことがあったなぁ。と思う。
そして、またそんな1年が、もう1年続く……

この1年は、どんな1年になるのかな……
「お、シオリさん。おひさ」
エンドウくんが私の姿を見て、手を振った。
「また同じクラスだね。また1年、よろしくね」
「また騒がしくなるかもしれないが、勘弁してくれ」
エンドウくん、ヒラヤマくんが私に微笑んで挨拶してくれた。
「う、うん、こちらこそ、よろしくお願いします」
私は二人に軽く会釈した。
それから私は、サクライくんの方を見る。
「さ、サクライくんも、また一年、よろし……」
そう私が言いかけた時。
彼は何も言わずに、私の横を通り過ぎていった。
まるで、私のことが見えていないような、空虚な目を向けて。
「……」
――え？
私は会釈をしかけた状態のまま、しばらく呆気に取られた。
アルバイトをずっとしているからか、どんなときでも、挨拶だけはいつでもしてくれていたのに。
でも――私の横を通り過ぎた時、何とも凍りつくような風が、私の横を吹き抜けたような気がした。
「……」
そんな私をエンドウくんとヒラヤマくんが、呆れるように見つめていた。
――この日から、私はサクライくんに、徹底的に無視された。

Another story ～ 2－39（後書き）

あと2～3話でアナザーストーリーは終わると思います。

40話でまとまらなかった…作者はページ制限のある漫画の原作者には絶対なれませんね。

それが終われば、感想での要望の多い、第3部がついにはじまります。もう第2部終了してから3ヶ月くらい経っていて、もう読者の皆さんは本編のストーリー忘れているかもしれませんけど。

Another story ～ 2－40

別に今までだって、私と彼の間に特別なものなどなかった。彼が私のことを、ただのクラスメイトとしか思っていなかったことも、ずっと前から知っている。

確かに私は定期テストで彼より少しだけいい点を取っていたりしてはいたけれど、それだって、彼にとってはそれほど大きな問題などではない。彼にとって、敵は周りの人間よりも、まず自分なのだ。それくらいのことは、私にもわかるようになっていた。

でも、今は、明らかに感じる――

彼からの拒絶を。

原因もわからぬまま、私は彼に無視されて――

あのアオイの一件――そして、ヒラヤマくんの言葉で、私はようやくサクライくんに対する自分の気持ちと、しっかり向き合ってみようと思っていたのに。

そう思った矢先に、彼には彼女ができてしまって。そしてその彼女と別れて、もう一度、と思った時に、こんなことになってしまって。

結局私は、そんな気持ちを確かめる術を失ったまま、一人その場に立ち尽くすしかなかった。気持ちがもやもやしたまま、半年前から一歩も進めず――きっと生殺しとは、こういう気持ちを言うのだろうな、と思う。

「――あ、あの二人の番みたい」

近くのクラスメイトの女子の声に、私は我に返る。

今は週1時間の体育の授業――私達は男女共に体力測定を行っている。私達女子は、グラウンドの砂地で立ち幅跳びをしているところで、私は列に並んで、自分の番を待っている。

そして、女子生徒の視線の先には。

グラウンドのトラックに設けられたスタートラインで、体をほぐ

している、二人の男子。
　ヒラヤマくんと、サクライくんだった。これから二人は、５０メートルのタイムを測定するのだ。
「あの二人、どんなタイム出すんだろ。陸上部より速いもんね」
「どっちが速いのかな」
「そりゃヒラヤマくんでしょ。ここまでスポーツテスト、前屈とハンドボール投げ以外は、全部ヒラヤマくんの勝ちらしいし」
「……」
　そんな二人のタイムに、学年中の注目が集まる。他の生徒はスポーツテストを自然と中断して、クラウチングスタートの構えを取った二人の方へ、視線を向けていた。
　グラウンドに、体育教師のホイッスルが響く。
　先手を取ったのはサクライくんだった。一歩の加速でまずヒラヤマくんの先を取る。
　でも、４０メートル地点からヒラヤマくんは加速し、ゴール前で間一髪、サクライくんを差し返した。
「ヒラヤマ、５秒８６！　サクライ、５秒９７！」
　ゴール地点の記録係が、大声でタイムを読み上げる。
「５秒８６だって！　ヒラヤマくん」
「すごいすごい！　さすがね、やっぱり」
　私の周りの女子は、ヒラヤマくんに賛辞を送る。
「でも、やっぱりヒラヤマくんの勝ちかぁ」
「サクライくんもすごいけど、やっぱりねぇ」
　それに対して、ゴールを駆け抜けて、膝を抱えて息を切らすサクライくんには、冷ややかな評価が飛び交う。
「あの人、絶対に一番にはなれないのよね。スポーツではヒラヤマくん、勉強ではシオリに勝てないようになってるのよね」
　誰かがそう口にした。
「……」
　でも、勝者になったヒラヤマくんは、その結果に一人、首を傾げ

ている。

元々サッカーでは、５０メートルの距離を一人で全力疾走するプレーなど、ほとんどない。それよりも、１０メートルのダッシュで相手選手の裏をどれだけ取れるか――その方がずっと重要なのだ。サッカーとは、１０～２０メートルのダッシュを幾度となく繰り返すスポーツなのだから。

スタートダッシュはサクライくんの方が速かったし、それだけを見れば、サッカーのプレーに生かせるスピードは、サクライくんの方が持っていたことになる。ヒラヤマくんも、その点において不満が残ったのだろう。

だけど、傍目から見れば、サクライくんはヒラヤマくんに負けたように見える……

２年生になってから、こういう場面がよく見られるようになった。サクライくんが、スポーツではヒラヤマくんに。勉強では私に負けたように見える――そんな場面が。

この頃になると、サクライくんは、勉強面だけでなく、身体能力でも、もっと大きな力を欲しがっているようで、その指標として、ヒラヤマくんと積極的に競おうとしているように見えた。

だけど、元々彼とヒラヤマくんでは、体格が違いすぎるのだ。彼の華奢な体躯では、今の運動神経でも十分すぎるほどなのに、スポーツ向きの体を持つヒラヤマくんに、敵うはずがない。彼はその度に、ヒラヤマくんに能力の差を見せ付けられていた。

そして、勉強でも――

定期テストや実力テストでも、彼は私を一度も追い抜けない。私と彼の点差は、広がるばかりだった。

彼がそうした日々を重ねるごとに、それに比例して、彼の校内での評価は、日増しに落ちていった。

そして、それに反比例して、私やヒラヤマくんの評価が上がって

いく――2年生になって、そんなメカニズムが出来上がっていった。

――でも、私自身はそうして変に持ち上げられるのは好きじゃないし、そもそも私自身は今までと何も変わっていないのだ。サクライくんが乗ったシーソーの反対側に乗っているだけで、私は自動的に持ち上げられただけ――そんな評価は、酷く穿ったもので、私に向けられる賛辞は、不自然なほどに持ち上げられるばかりで、逆にこっちが萎縮した。

それに、確かに私はサクライくんに、成績面では勝っているけれど、だからといって、彼に勝ったなんて思ったことは一度もない。

どう見ても、彼のコンディション不足は明らかだ。私はそんな彼に、ハンデをもらっているから勝てているようなもの……

むしろあれだけ疲れきっていて、顔色だって悪いのに、それでも他の生徒では、彼に何一つ敵わないのだ。あのコンディションでそこまでの結果を出せる彼の潜在能力の高さに、むしろ私は舌を巻いていた。

そして、そんな彼の能力や、意志の強さに感心すると同時に、心配だった。

ずっと前から、彼の体は酷く重そうで、体調だってよくなさそうだ。ちゃんとご飯を食べているのかもわからない。

そして、2年生になると、日を重ねるごとに、彼の目からは、私が去年彼に見ていた花のような美しさは薄れ、目が鋭さを増していき、彼の周りを淀んだ空気が包むようになっていった。

そして、2年生の文化祭。

サクライくんの不調から、評価を上げていた私は、去年の優勝者ということで、どうせなら3年連続ミスコン制覇を狙っちゃえ、という周りの女子の推薦で、ミスコンに今年も出場することになり、投票者の9割以上の得票を得て、ぶっちぎりで優勝した。

そしてミスコンの後、私は今年も後夜祭のダンスの誘いが殺到し

てしまい、また今年も吹奏楽部のタカヤマ先生に頼んで、音楽準備室に一時退避させて貰った。

「ご苦労様」

音楽準備室にあるコーヒーメーカーで、先生は私にコーヒーを淹れてくれた。私はコーヒーの入ったマグカップを受け取る。

「しかし、もうあれから1年たったのねぇ」

自分のマグカップに口をつけてから、先生は言った。

「マツオカさんがあの時、サクライくんに、あんなことを言うなんてねぇ」

「……」

先生に言われる前――砂糖とミルクの入ったコーヒー。口をつけた時、わずかに感じる苦味と、その香りの中で。

私も彼を想っていた。コーヒーの香りは、私に彼を思い出させる。

本当は、この準備室に今年も来たのだって、ここに今年もサクライくんが、去年のように眠っていてくれたら、どんなにいいだろうと思ったのだ。そうしたら、何だか今無視されていても、そのすべてが1年前に戻って、すべてやり直せるような、そんな気がして。

「――まだサクライくんに、無視されてるの？」

先生が訊いた。タカヤマ先生は埼玉高校で数少ない、若い女性教諭だ。音楽教師として、授業を受け持たない時間が多い分、女子生徒限定で、昼休みや放課後に、女子限定のカウンセリングを行っている。話す内容は、進路や人間関係、恋愛でも雑談でも、何でもいいため、先生に話を聞いてもらっている女子は多い。私も入学当時の得意な環境から、先生に色々と心配され、色々と話を聞いてもらっている。

私は頷いた。

「ふぅ……」

それを見て、先生はあきれながら、肩をすくめた。

「でも、この1年は、マツオカさんをすごく人間的に成長させたって言えるんじゃないかしら」

「え？」
「だって、すごく顔立ちがこの1年で変わったわよ。前までは、何だかいつもにこやかに笑っているだけだったのに、あなたの表情がどんどん豊かになっていったもの」
「……」
そう言われて、私はこの1年を反芻する。
「――多分、そうなんだと思います」
私は頷いた。
「この1年間、私はサクライくんを通じて、色んなことを考えました。自分のことも、いっぱい考えました。彼を通じて、私――今まで感じたことのない気持ちとか、自分の知らない自分とか、いっぱい見たりしました。そのほとんどが、何だか少し……何ていうか」
「いけないことをしているような？」
先生が、言葉に詰まる私に助け舟を出した。
私は頷く。
「マツオカさんの話を聞いていると、すごく幸せな家庭で育って、成績もいいし、努力家で、みんなにも好かれて――とても満ち足りた生活を送っていたんだって、わかるわ。だから、そういう環境の中では、ずっと前のマツオカさんみたいに、なんとなく笑って、周りに合わせるだけでよかったけれど……今は違うでしょう？」
「……」
「もどかしいとか、もっと欲しいとか、すごくわがままだったり、嫉妬深かったり――そういう自分のいやなところもいっぱい見たんじゃない？」
私は再び頷く。
「――最近、タカヤマ先生に昔言われたことを、色々思い出すんです」
「え？」
「サクライくんを通じて、私も色々と学ぶ気持ちがある……あの時はよくわからなかったんですけど、今になると、色々、ああ、そう

か、って思うことがあって、今は少し後悔しているくらいで」
「……」
沈黙。
「私――多分なんですけど、サクライくんに、その――こ、恋、してるんだと、思います」
私はこの時、初めて正直に他人に自分の気持ちを言った。
「おぉ」
先生は感嘆の声を上げた。
「本当は、もっと自分の気持ちを確かめたいんですけど――でも、今現在の気持ちを言うと、この1年、彼と一緒にいるうちに、何だかすごく楽しくて、自分でも気づかないうちに、もっと話がしたいとか、一緒にいたいとか、もっと、もっとって、そういう気持ちが強くなっていって――今は全然相手にされてませんけど、やっぱりそれでも、気持ちが消えなくて……」
「辛いけど――でも、会うと、やっぱり嬉しい？」
私は頷く。
「ふふふ……恋してますねぇ、マツオカさん」
先生は嬉しそうに頷く。
「……」
「あ……そうか。それを認めても、喜べる状況じゃないのよね」
「……」
――今になって思う。
あの時――もっと早く、自分の気持ちに気づけていたら。
この半年、次に会った時、彼のことを、もっとよく見てみようと思って、それっきり……
何でもっと、ずっと前から彼のことをよく見ておかなかったのだろう。
色んなこと――自分の足踏みした時間を、今、こんなに後悔するなんて……
自分の気持ちと向き合うこと――自分の初めての気持ちがいっぱ

い溢れてきて、それが怖くなって、気持ちに蓋をしたけれど、それでも蓋の隙間から気持ちがこぼれてきて。

自分でも、どうしようもなかった。

こういう時、どんなことをしてでも食い下がって、サクライくんを問い質せば楽になれることも、何となくわかっている。

でも――怖い。

彼が今、すごく弱っているのもわかるし、私がまとわりついて、余計な負担をかけたくない。アオイの事でも、私は彼を傷つけているんだし。

それに――無視をされる前、私は彼と、一体どうやって接していたのか。

こんな気持ちを抱えながら、私は彼の前で、どうやって接していられたのか。

もう、思い出せない……

時間が経ってしまって、私はもう、サクライくんと一緒にいる時、どんな風だったかを、思い出せなくて。

今、私がサクライくんのところに行ったら、私――どうなるかわからない。

自分をコントロールできる自信がない。

変な言動で、また彼を傷つけてしまうかもしれない。

そう思うと、私から、とても彼に声をかけられなくて……

「――まあ、まだ高校生活は全然時間あるからね」

先生は言った。

「ここで私が何か具体的なことを言っても、それはマツオカさんの本当の解決法にはならないからね。じっくり自分が今どうしたいか。まずはそこね。そうして思いついた行動を取る方が、誰かに言われてやる行動なんかより、ずっと価値があることだから」

「……」

「でも、それじゃ可哀想だから、ひとつヒントをあげようかな」

先生はにこっと笑った。

「もう一度、この1年、サクライくんから教わったことを、考え直してみること。きっと、その中に答えがあるはずよ」

「……」

――そんな言葉を最後に、私の高校2年の1学期は終わった。

Another story ～ 2－40（後書き）

半月更新しなくて申し訳ないです。
実はＰＣで仕事合間に書いていたのですが、ＰＣがウイルスにやられてしまい…修理に出していて。今も帰ってきていないので、漫画喫茶で書いてみました。
最近仕事が忙しいので、あまり書けなかったのですが。

Another story ～ 2－41

夏の全国サッカー大会、埼玉県予選決勝――

埼玉高校は、去年と同じ相手、武栄高校に成す術なく敗北した。

惨敗だった。私も吹奏楽部として、決勝戦、応援に来ていたけれど、埼玉高校のサッカーは冗長で、見ていて面白くないうえに、相手に動きを完全に見破られているようだった。

この頃の埼玉高校は、フォワードのヒラヤマくんに攻撃を任せて、他の１０人はエンドウくんを中心にして、徹底して守備――ボールを奪ったらすぐに前線のヒラヤマくんにボールを放り込むという単純明快な戦術一辺倒だったけれど、そのシンプルな戦術に対する息苦しさが、埼玉高校の布陣――正確に言えば、その布陣の主力を担う３人から伝わってくるようだった。

前線に残っていても、もう相手に攻撃の要だと認識されているから、ボールを持てば数人に囲まれ、周りにはパスを出す相手もいない。前線に孤立し、思うように動けないヒラヤマくん。

強豪に比べれば、身体能力、体力、全ての運動神経に劣る味方を統率しても、必ずどこかに隙は生じる。そんな守備陣を必死に統率しても、強豪校の波状攻撃の前には、簡単に崩されてしまうし、周りに気を配りすぎて、自分の守備さえ疎かになってしまっているエンドウくん。

そして――そんなザルのような守備陣のスペースを埋めるために、懸命に走り回って、ただ走るだけの選手に堕しているサクライくん。

この３人の現状の苛立ちが、決勝戦の８０分に満ち溢れていた。

そして試合終了のホイッスルが鳴った時。

歓喜の武栄高校の選手を尻目に、サクライくんは一人、ピッチに大の字に倒れこんでいた。

それはそうだ。１年後のサクライくんも、その運動量で、９０分で１５キロ近い距離を走っていたけれど、当時のサクライくんも、

それに負けず劣らずの距離を走っているのだ。人一倍小さな体で、激しく相手と当たり続けていたし、間違いなくチームで一番消耗していた選手だった。

だけど……

それ以上に、彼は後手に回っているチームの中で、時たま一人でも強引に前に出ていた。

そのプレー自体は、もう十分に一流だった。初心者だったはずなのに、もう彼は、ドリブル、パス、シュート、全てにおいて全国の強豪選手に引けをとらないレベルにあることは、私が見ても分かった。

だけど――今の彼には周りが見えていないし、集中力も低下している。肝心なところでプレーが雑になって、簡単にボールを奪われ、逆にピンチを招く場面も目立った。

能力はあるのに、それを生かせていない……それが彼の現状だった。

だけど、自分がどんなに疲れていても、決してそんな素振りを見せず、瞳にはいつも強い意志と、激しい炎の種火をいつも灯していたサクライくんが。

今はもう――一人では立ち上がれないというほどに、疲れきっているのが見て取れた。

去年の文化祭ーー一人で入場門に絵を施していた時から、彼の姿から聞こえていた、まだまだこんなものじゃない、という、彼の声も、もう聞こえない。

彼の今の姿からは、去年私が憧れ、追い求めた闘志や、意志の強さ、広い視野――それらが全て失われていた。疲れた体に鞭打って、体を動かしてはいるけれど、それはただ、燃え移るものがないのに、炎に油を注いで、無理に炎を燃やしているだけ――一時激しく燃えるけれど、一瞬で消えてしまう炎を、無理に作り出しているようで。

そんなサクライくんを、私は見るのが辛かった。

でも……

「え？私が部長？」
「いいじゃない。シオリ、フルート上手いし、何より努力家で、人望もあるし」
「そうそう、ミスコン2連覇中のシオリが部長なら、何かと吹奏楽部も校内の注目が集まるし、ひょっとしたらシオリの効果で部費だってもっと出るかもしれないし」
「……」
去年の冬で、埼玉高校の2年生のほとんどは、部活を引退する。それでも文化部は、勉強の合間に参加する上級生も割といるのだけれど、夏の大会が終わると、それまで自主的に残っていた先輩も、当然引退する。
受験勉強のため、ほとんど部に顔を出さなくなっても、部長の名は先輩が背負ってくれていたのだけれど、夏の大会が終わると、私達は新しい部長を選出しなければならなくなった。
吹奏学部は伝統的に、新しい部長は、次の代の人達で決めるという暗黙の決まりのようなものがあった。
そしてそれに、私が満場一致で選ばれてしまった。サッカー部の応援に行った数日後のことだった。

私の夏休みは、ほとんど吹奏楽部の練習と、学校で行われる補習で終わってしまった。
補習には、学年の生徒はほとんど全員参加したけれど、学校に別途でお金を払って行われる補習に、当然サクライくんは参加しなかった。
そして――
――「塾に？」
自宅での夕食の席で、私は箸を止めた。

「この前、学校の保護者懇談会で、先生に言われちゃってね。シオリちゃんの頭を考えたら、今みたいに何の学習施設を使わないのは実に勿体無いって。シオリちゃんがよければ、私達も、秋から塾に通わせてあげるけれど……」

お母さんが私にそう訊いた。

「――いいよ。私に使うお金、下の二人に使ってあげてよ」

「いや、でも、シオリはもう埼玉高校でもいつも成績トップだし、できることならもっと上の、シオリの望む勉強をさせてあげないと。これはシオリの将来にかかわる問題だと思ってな」

お父さんも言う。

「下の二人に、なんて親子の間で遠慮しなくていい。シオリだってまだまだ私達の大切な娘だ。娘の将来のためなら、少しぐらい学費がかさんだって、お父さんは仕事がんばれるさ」

「……」

――先生がうちの親にそんなことを勧めるなんて。きっと、サクライくんが今不調だから、今のうちに大きな差をつけろ、ってことなんだろうな。

でも、今でも私は彼から大きなハンデをもらっているのに、それで私が塾に行ったら、何だか少し、フェアじゃないような気がした。

それに――

私自身のやりたい勉強って、何だろう。

こういう時――自分のことなのに、自分のことを何も分かっていない。自分の気持ちを何も口にできない自分。

――私の嫌いな自分。

サクライくんに無視されてしまった頃から、私の生活は、完全に中学時代に逆戻りしてしまった。

自分自身に、まだ取り立てて自信の持てることがなく、それほど頑張っているわけでもないのに、周りが妙にちやほやしてくれて、私に何か、何も言わなくても、与えてくれようとする。私の行き方さえも、周りが私にいくつか提示してくれて、私自身はたいした意

思も持たずに、それを選ぶだけ……

本当は、部長なんて仕事も、ミスコンに出場するのも、目立つことが苦手な私はあまり乗り気ではなかった。だけど、周りに言われて、私はそれに、嫌と言えず、頷いてしまう。

中学時代の私もそうだった。私の生活は、完全に振り出しに戻ってしまっていた。

頑張りたい。でも、今、頑張れない……

――今思えば、サクライくんを見極めると宣言したあの日から、彼のことを追い続けて、彼の真似をして……

それはきっと、私にとってかけがえのない時間だったし、私も生まれて初めてできた目標に、一直線に向かうことができていた。前を向き続ける彼のひたむきな姿に負けたくない。彼にみっともないところは見せたくないと、私はいくらでも目の前のことに頑張ることができた。初心者だったはずのフルートだって、何とか自分のものにしたいと、自分の中の世界を広げる、開拓者精神、ハングリー精神を持つことができていた。

私はもっとそんな生活を送ってみたかった。もう少しで、私も何かが掴めそうな――自分を変えるきっかけのようなものを、掴めると思った。

でも――

サクライくんと過ごす日々が終わってから、随分日が経って。

私も、彼とそうして過ごした時間が、ひどく遠い日のことのような――というより、まるで私の中の夢の話だったように思えて。

私は、あの頃のひたむきだった自分――一生懸命だった自分を、思い出せない。

サクライくんも、今、懸命にもがいているのも分かる。

でも――私も今、苦しかった。

サクライくんがもがき苦しむ度に、私の周りの評価は上がっていって、みんながちやほやしてくれるほどに、私は自分自身のやりたいことを見失っていく……

そんな自分が嫌だけれど、自分で今、何をすればいいのか、分からなくなっていた。

分からないまま、むやみに時が過ぎた。

2学期に入ってからも、その傾向はさらに顕著になるばかりだった。多分この頃――2年生の2学期が、私もサクライくんも、多分エンドウくん達も、4人とも高校生活で一番苦しんでいた時期だったと思う。

結局私は塾に通い始め、吹奏学部の部長としての活動も、自分のできる限り頑張ってみることにした。

そうすれば、きっと何もしないよりは、何かが見えてくるだろうと思ったからだけれど……

そうじゃなかった。だってどちらにも、本当に私がやろうと思ったことは含まれていないから、私の欲しいものがあるわけがない。

それでも、私は他の人よりは頑張っているのだろうか。成績だけで言えば、私は他の生徒には負けることはなかった。

「シオリ、また1番かぁ」

「もううちの学校で、シオリに勝てる人、いないね」

2学期の中間テストの結果用紙をもらった、下校前のHR。私はクラスの女子に囲まれていた。

「……」

もう私は、こうして誰かにちやほやされても、狼狽するしかない。

今の私には、それに応えられるものが何もない。

いっそのこと、誰か私を追い抜いてくれなんて、思った。でも、私が手を抜いて誰かに抜かれても意味はないし、それは、1年前、サクライくんを追って、そのために頑張れていた、私の姿とは違う気がする。

楽になりたいのに、足を止められない――

――あなたも、そうなの？　サクライくん……

私はふと、教室にいるサクライくんの方に目を向けた。
彼の席の前にはちょうどエンドウくんがいる。きっと苦手の数学を落として、彼に愚痴を言いに行ったのだろうと思った。
そんな時、エンドウくんと私が目が合うと、サクライくんがふと、私の方を向いた。
「あ……」
私の喉から、ふと、声が漏れる。
それから、どきんと、胸が大きく高鳴った。
——久しぶりに彼と目が合う。
あ……あれ……こういう時、私、どんな顔をすればいいんだろう。か、感じよく、にこっと笑って、会釈とか……そんな感じかな。
——そんなことが頭をちらついていた時。
彼はついと、私から目を背けてしまった。
「……」
分かってはいたけれど、改めてやられると、挫けそうになる。
胸の奥が、苦しくなる。
でも。
こうしてあからさまに拒絶されることも辛いけれど。
あなたの目が、日に日に澱んでいくのが分かっていても、その原因を知らないし、何もしてあげられない事も、私にとって、とても辛かった。
——何でこうなってしまったんだろう。
あなたに無視され始めたことも、あなたの目が、そうして日に日に淀んでいくのも……
どう考えても、今のあなたの様子はおかしい。
それに——ずっと前から、解せないことがある。
去年のあなたなら、今の状況を冷静に分析して、何が駄目だったかを、瞬時に分析する——今のあなたは、力なら十分すぎるほどある。あなたに必要なのは、その力を発揮できるように、今は心と体を休めることの方が重要だと、すぐに分かるはず。

私の知るあなたなら、今の状況になる前に、それに気付いて、態勢を立て直そうとするはず――去年のあなたは、私を少し探っただけで、私の悩みを見抜き、的確なアドバイスをくれたのだから。

でも、今のあなたには、自分の今の問題が、目に映っていない。そんな余裕さえ、もうなくなっているのに、足を止めることはできず、自分を余計に泥沼に追い込んでしまっている。

なぜ、去年できたことまで、あなたはできなくなってしまっているのだろう。

そこまであなたの余裕を失わせる何かが、私や、エンドウくん達の知らないどこかで起きているのだとしたら。

――頼って欲しい。

きっとあなたは、そういうことに誰かを巻き込みたくなくて、そうして一人で痛みを抱え込んでいるのかもしれないけれど。

大切な人がそうして苦しんでいる時だからこそ、側にいてあげたいとより強く思える。

そんな気持ちに、気付いて欲しかった。

Another story ～ 2－42

――その日、家に帰ると、私は今回も成績学年トップをとったことで、家族にお祝いを受けた。

たまには家族で大騒ぎしたい、というシズカの希望で、今、私はカラオケボックスにいる。

お父さんが今、ポルノグラフィティを歌っていて、お母さんとシズカが合いの手を入れ、シュンはそれに呆れたような表情をしながらも、お父さんと一緒に歌っている。

「……」

そんな時にも、私は一人、今日、サクライくんに目を背けられた時のことばかりを考えていた。

考えたからって、今の私に何ができるというわけでもないのだけれど。

――それでも、考えてしまう……

自分でもこの感情が何なのか。なぜ彼のことだけが、こんなに気になるのか――多分、恋だと思うけれど、正確な答えにはまだ辿り着いていない。

この気持ちにしても、自分のことにしても、悶々と悩んでいるよりは、全てのことに蹴りをつけたかった。そう願っているのに、私はここに立ち尽くすしかない……

「おい、シオリ姉」

そんな時、私はシュンに声をかけられた。

「どうしたんだよ。シオリ姉がカラオケ苦手なのは分かってるけど、元気ないじゃん」

「……」

――私、そんな顔していたのかな。

「あ――お姉ちゃん、やっぱりカラオケは楽しくないかな。私ばかり楽しんじゃってたけど」

シズカもそれを見て、私に心配そうな顔を向ける。
「あ、ううん、大丈夫だよ。ちょっとテストが終わって、気が抜けてただけ……」
私はかぶりを振った。
「……」
家族が沈黙する。
「でもさ、俺もそろそろカラオケじゃなくて、別のところに行きたいんだけど」
シュンがその沈黙を破った。
「――そうだ、あそこ行こうぜ」

そう言って、シュンの提案で私達家族がやってきたのは、バッティングセンターだった。
「バットを思い切り振って、ボールを飛ばせば、きっとすっきりするぜ」
シュンは去年野球を始めてから、熱心にそれに打ち込んでいる。お父さんとたまにバッティングセンターに来ているようだった。
「へえ、私バッティングセンターって、来るの初めてなんだよね」
シズカが言った。そしてそれは私もそうだった。
しかし、これもいいかもしれない。中学時代まで、私はストレスとは無縁の生活を送っていたために、自分で溜め込んだストレスの解消の方法を知らなかった。こういうところで体を動かすのも、じっとしているよりはいいかもしれない。
お父さんに、バットの持ち方、振り方を教えてもらい、私は一番遅い、６０キロのマシンを選んで、そのゲージに入り、ゲージの中に備え付けてあったヘルメットをかぶり、ボックスに入って構えを取った。
「はじめはバットを短めに持って、脇を締めて」
そんなアドバイスを、後ろで見ているシュンがくれた。

お父さんが２００円を投入して、目の前のマシンが動き出す。
「……」
脇を締めて……
私は飛んできたボールをしっかり見て、言われたとおり脇を締めて、バットを振った。
カン、という音がして、ボールは放物線を描いて、マシンのはるか頭上を越えた当たりを飛ばす。
「おお！　ナイスバッティング！」
お父さんが声を出す。
「……」
当たった。
そして、ボールが当たって、前に飛んで行ってくれた時、何とも言えない気持ちよさ――爽快感があった。
「あ、すぐ次が来る！　次が来るよ！」
お母さんの声で、私は前を向く。
ボールが来て、私はもう一度脇を締めて、バットを振る。
今度はライナーで、マシンの前のネットに向けてボールが飛んでいった。
「――そう言えばお姉ちゃん、中学テニスの県大会プレーヤーだっけ。地味に運動神経も結構いいのよね」
シズカの呆れる声。
そんな声を尻目に、私は段々とコツを覚えていき、快音を連発させていく。
そしてマシンが停止すると、私はゲージから出た。
「あの――もう1回やっていいかな？　今度はもっと速い球で」
「おお、いいぞ。シオリもこれが気に入ったのか」
お父さんに勧められて、今度は試しに、１００キロのマシンに挑戦してみる。
「女の子で１００キロなんて打てたら、大したもんだぞ。シュンだって、そのマシンで今打ってるんだ」

お父さんが言った。
「気をつけて。怪我しないでね」
お母さんの声。
「……」
マシンからボールが飛んでくる。
――速い！
カシッ、と、小さな音がして、打球は私のすぐ脇のネットに当たる。
「は、速い……」
「そう言いながら、初見でしっかり当ててるんだもんな」
シュンの呆れる声。
「頑張れ！　もうちょっとで打てそうだよ！」
シズカの声。
「……」
だけど、その後、5球くらい続けて、私のバットは当てるのが精一杯でファールを連発する。
「……」
す、すごいな、男の人は。こんなボールを簡単に打つことができる人がいて、しかもこのマシンより、もっと速い１２０キロなんてマシンもあるんだよね。
きっと――サクライくんも、こんな球は、ガンガン打っちゃうんだろうな。
そんなことを考えた瞬間。
私は次に来たボールにバットを振るも、空を切った。ここに来て、私は初めてバットを空振りした。
「あれっ？」
ちゃんとボールが見えていた。そのはずなのに……
「……」
よし、次こそ……ちゃんと当てて見せる。
だけど、次のボールも、私のバットは空を切ってしまう。

「どうしたの？　お姉ちゃん」
シズカの声。
「……」
――いけない。サクライくんのことを考えた瞬間、バットにボールが当たらなくなるなんて。
――バン。
そんなことを考えているうちに、次のボールが来てしまい、私は金縛りにあったように、ボールを見逃してしまった。
「おいおい。バッティングセンターで見逃しは勿体無いぞ」
シュンから野次が飛ぶ。
「……」
――別に見逃そうと思って見逃したわけじゃないのに……
「――あ」
私はふと、昔の映像が頭を反芻した。
「迷いを打席に持ち込んだら、まずバットが振れない。ヒットが打てない……」
そんなことを思い出した。
次のボールが飛んでくる。
「ヒットが欲しいなら、まずは思い切ってバットを振る！」
カキン、と、１００キロマシンで初の快音が出る。
「おお！」
お母さんの感嘆の声。
「バットを振る！」
それ以降の私は、バットに空振りをすることも多かったけれど、当たったボールは全て快音を残して、前へと飛んでいった。ヒット製の当たりも何本か出た。
そして、マシンのアームが停止する。
「……」
思い切りバットを振り続けて、少し私は息が切れていた。
でも――

あの時――文化祭の日の早朝、もう1年くらい前になるけれど、私はあの時の彼の言葉を思い出していた。

迷いがあって打席に立ってもバットが振れない。だったら、狙い球を絞るなり、打法を変えるなりして、まずは迷いなくバットを振ること。空振りしてもいいから、迷いなくバットを振って、チャンスを掴みにいく姿勢を忘れずに……

去年も私は、周りからちやほやされる割に、中身の乏しい自分の現状を嘆き、悩んでいた。そんなときに、私に彼はこんな言葉をくれた。その言葉をもらって、私も勇気が出た。そうして、私も今は、自分の打ちたい球に、狙い球を絞って、そこに向けてバットを一点集中で振ろうと頑張ってきた。

「――そうか。そうだったんだ」

この時、私の中の、ずっと苦しんでいた懊悩の鎖が、少し解けた気がした。

「おいおい、シオリ姉、どうした？　空振り連発した後、急にバッティングがよくなったけど」

シュンが声をかけてくる。

「打撃のコツでも掴んだなら、俺に教えて……」

「みんな、ごめん！」

そんなシュンの言葉を私の声が遮った。

「私、今すぐ行かなくちゃいけないところができた！」

「え……」

そう言って、私はヘルメットとバットをシュンに渡して、一人走って、バッティングセンターを出て行っていた。

「はあ……はあ……はあ……」

夜の街を一人走りながら、強く思った。

あなたに――会いたい。

ずっと前から、会いたかった。話したいことも、沢山あった。

高校生活、何かを変えようともがいていた私を、あなた自身はそんな気はなかったかもしれないけど、いつだって背中を押してくれ

たのは、あなたで。
私にいつも勇気をくれたのも、あなた。
お礼の言葉も、いっぱい伝えたい。
それだけのこと。
だけど――
何でそれが、もっと早くできなかったの？
今までの私は、大きく迷っていた。
上手く言えないかもとか、彼に拒絶されたらとか、今私は無視されてるしとか、余計なこと考えて、自分のことなのに、迷ってばかりで。
サクライくんの側に行くチャンスなんていくらでもあったのに、迷っていたからそのチャンスでバットが振れなくて。
あなたが去年、私に言ってくれたことなのに、私、そのことを忘れて、元の自分に逆戻りしちゃってた。
でも――ちゃんと、思い出せた。
私の中で、あなたの言葉が今も生きていて。
私はあの時と、ちょっとだけ変わった。変わることができたんだよ。
あなたから、初めての気持ちをいっぱいもらって。
それが何なのか、自分でも分からないけれど。
確かめたいし、あなたに伝えたい。
ちょっとでもいいから、届いて欲しい……
今の状況とか、そういうの、どうでもいい……
今、私ができる限り、思い切り、バットを振ってみたい。
あなたに伝えたい、側にいたい、気持ちを確かめたい――動機はいっぱいあるけれど、そんなのは何でもいい。
あなたって狙い球に向けて、思い切り！
――２０分くらい走って、足を止める。
人気のなくなった、観光地の商店街。もう深夜１１時を回って、真っ暗になった商店街で、一際明るいその建物。

コンビニエンスストア。
「……」
呼吸を整えながら、私は気持ちを整理する。
勢いあまって、ここに来てしまったけれど……
今の勢いを、何とか殺したくなくて。
走ってきたのとは別に、まだ胸がどきどきする……
――でも。
そう言えば私、あの文化祭の後、雨の日の朝、図書室に行く前も、こうだったな。自然に行くよ、自然に、って、言い聞かせてだっけ。
そう考えたら、少しだけ、力が抜けて、程よい緊張に満ちた、いい感じの精神状態になってくる。
――そうそう、こんな感じだった。そう言えばいつだって、サクライくんと会う時は、少し緊張していたけれど、そうして強張る自分も、何だか嫌じゃなくて。
――多分、少しそんな自分が嬉しかったんだと、今なら少し分かる。
「――ようし……」
私は覚悟を決めて、コンビニの自動ドアの前に立った。
自動ドアが開く。
「いらっしゃいま……」
静かだけれど、よく通る声がしたけれど、声は途中で途切れる。
私の足も止まる。
「……」
手に何か、単語カードのようなものを持って、コンビニの制服、胸元からはネクタイが見える。そんな姿のサクライくんが、レジカウンターの中にいる。お客は誰もおらず、店員も彼一人だけ。
「――マツオカ」
やがて沈黙に焦れたように、彼が私の名を呼んだ。

ほぼ1年振りに彼に呼ばれた、私の名前。
苗字の呼び捨てなんて、実に他人行儀で親愛の欠片もないと思うのが普通だろうけれど、私は彼が、マツオカ、と呼んでくれることが嬉しかった。近くにいる友人には名前を呼び捨てにされるものの、大多数の人間には、同級生なのに、敬称をつけられてきた私にとって、マツオカ、って呼ばれたことは初めてだったから。
今でも私をそう呼ぶのは、サクライくんだけだ。それが何だか、特別めいたもののように思えて、ちょっと嬉しい。
「今年初めてかもしれないね。サクライくんが私の名前呼んだの」
名前を呼んでもらえて、無視されなくてよかった、と思った私は、とにかく笑顔を心がける。それと同時に、今まで私を避けてきた彼に、何となくカマをかけてみる。
「そう――だったっけ」
サクライくんはその問いかけに、後頭部を掻いた。
「というか、君以外の女子の名前も、最近呼んだ記憶がないな」
「……」
まさかそう言われるとは思わなかった。
でも――これって、それとなくフォローを入れてくれてるのかな。
私は割と勇気を出して、半年以上続いた無視について踏み込んだのに、そんな天然じみたリアクションで返されると、肩の力が抜けてしまった。
「あ、ありがと」
私は意味も分からず、そう呟いてしまった。
言ってから、何がありがとうなのよ、と、緊張すると変なことを口走る、自分のいつもの悪癖を責めたけれど、彼もあまりそれについては気にしていないようだった。疲れていて、あまり私のことを深く考えていないのか。

でも――よかった。とりあえず、いきなりただのお客として、赤の他人として接されるんじゃなくて。私のこと、覚えていないような反応されたらと思うと、怖かったから。

学校以外の場所なら、彼もこうして話してくれるのかな……

「……」

そんなことを考えながら、私は入り口に立ち尽くす。一度ここで立ち止まってしまい、お店の中に入るタイミングを逃してしまったのだ。どうやったらこれから自然にお店の中に入れるか、私の頭の中はぐるぐる回っていた。

で、でも、ちゃんと今日は、私のことを無視しないで、話をしてくれた。

このまま、何とか話をつながないと……

私は入り口に立ち尽くしたまま、何か、話をするきっかけを探した。すると、サクライくんの髪が少し濡れているのに気付いた。

「サクライくん、髪が少し濡れてるね」

とっさに私はそんな話を振った。声が裏返りそうだった。

「あぁ……ここに来る前に、シャワー浴びたから」

言われてから気付いたように、彼は自分の前髪をつまんだ。今でも後輩を中心に、彼の容姿には多くのファンがいるのに、自分の容姿や外見とかに、あまり興味がないんだよね。

「最近寒くなっているから、風邪をひかないようにね」

そんな些細な会話でも、相変わらずの彼の姿を垣間見れて、少しほっとする。私もそんな会話を交わしながら、自然に店の中に入れたし。

私の足は、自然に店の真ん中辺りにあるお菓子のコーナーに向く。私は味音痴だけれど、甘いものは好きだ。コンビニで買うとしたら、大体がお菓子だし。

というのもあるけれど、正直サクライくんのいるレジカウンターからじゃ、どこにいても私の姿が丸見えなんだよね……他にお客さんもいないし。それがちょっと恥ずかしくて、せめて棚に挟まれて

いる場所で、自分の姿を少しは隠したかったのだ。私、今緊張しているから、変な挙動とか出ちゃうかもしれないし。

「――サクライくん、バイトしているって私の友達から聞いていたけれど、ここだったのね」

私はそう口にする。本当は去年から知っていたのだけれど、私が彼に無視されていたから、問い詰めに来たのだと思われると、何だか空気が重くなりそうだったので、あくまで私は偶然ここに来た、という体を装うために。

でも、多分サクライくんはそんなこと、気にしてないんだよね…

…言ってから気付く。

「……」

やっぱり、1年まともに喋れていないというのは大きい。

それに、この1年で彼の様子は変わった。容姿も少し大人びたというのもあるけれど、何よりも彼の目が、日によって多寡があるものの、常に鋭い光を増している。

以前の彼のことも私はよく知らないけれど、一体彼は今、何を考え、どんな想いを抱えているのか――それを『知らない』のではなく『分からない』というのはかなり大きい。

「こんな夜遅くに、女の子一人でコンビニなのか？」

思案に耽る私に、彼が疑問をぶつけてきた。

それを聞いて私は、ふと店の奥の壁にかかっている時計を見る。

11時35分――確かに、そんな疑問ももっともな時間。

「塾の帰りなの。サクライくんみたいに、行かなくても出来るわけじゃないから」

私は咄嗟にそんな嘘をつく。私の持っている荷物は学校帰りのままだし、何とかそれで通じるかな、なんて思う。

しかし――私の人生で、こんなに咄嗟に嘘を考えなくてはいけない場面は、これが初めてで。私はそれ程口が上手い方じゃないし、変なことを言っているんじゃないか、びくびくしてしまう……

――それでも、今は何か喋っていないと。会話が途切れたまま、

出て行ってしまったら、もうそのまま、彼との細いつながりも、完全に断ち切られてしまいそうで。

不安に押しつぶされそうになる。

私は少し屈んで、彼の目から隠れる。

「今日のサッカーの試合、勝ててよかったね」

私は沈黙を恐れて、言った。

「見てたのか？」

「うん、音楽室からだと、テレビと同じアングルでよく見えるの。特等席なんだよ」

「そうか。君は吹奏楽部だったな」

「……」

ダメだ――彼の今の思いを少しでも探ろうと、頑張って喋っていても、彼の言葉に、彼の本心が見えない。喋れば喋る程、口下手な私は余計に不安になってしまう。

それでも――今まではほとんど返事もなかったのに、今日は私の言葉に反応を示してくれることは、素直に嬉しくて。

今、あなたは何を考えているんだろう……

私はお菓子の棚の陰から、ちらりとレジカウンターの彼の姿を窺った。

煙草の並ぶラックに寄りかかって、どこを見るでもなく、遠い目をしている彼は、仕事が暇で、思考が止まっているからか、学校で見る時の鋭さが和らいでいる。1年前より少しやつれたようだったけれど、その顔つきは、逆に彼のその凛とした佇まいを際立たせているようだった。

肌は男子の中では白っぽくて、清潔感がある。細身だけれど、コンビニの制服から覗く腕は、筋肉の筋と血管が浮き出ていて、体が程よい筋肉で覆われて、成長途中の男の子って感じ。今は僅かに髪の毛が濡れていて、それが愁いを帯びたような、疲労の残る表情と合わさって、何だかちょっと色っぽい……

「……」

――ふと、私の胸が、今までの緊張とは違う心臓の鼓動に支配される。

苦しいけれど、何だか胸の奥が高揚する……

懐かしい感覚。私の胸の奥には、彼にだけ反応する回路があって。

彼の前に行くと、胸の奥がざわざわして、苦しくなる――その感覚。

1年前の私も、この胸の切ない感じが何なのか、分からないながらも、胸に抱えていて。

それが何なのか、今度はちゃんと確かめてみようと思った矢先に、私は1年間も、その機を棒に振り続けてきたんだ。そしてその途中に、彼に避けられるようになって……

――そうだ。私はここに、何も取り留めない話に来たわけじゃないんだ。自分の気持ちとか、どうして彼は私を避けるのか、色々なことを確かめに来たんだ。

だったら、こんな回りくどい感じじゃ駄目――ヒラヤマくんも前、言っていた。サクライくんは天然だから、回りくどいやり方は通用しない。ストレートな方法じゃなきゃ駄目だって。

――覚悟、決めなきゃ。

「――こうやって普通に会話するの、久し振りだよね」

私は目の前にある、ムースタイプのポッキーを手に取ると、立ち上がって、そう声に出した。

核心を突く話題――さっきまでとは比べ物にならないほど、胸が高鳴っている。

「――ああ、そうだな」

サクライくんの落ち着いた声がした。

意外とあっさり認めた。

「本当、最後に話したのがいつだったか、思い出せないくらい……」

私の口から、今度は自然に声が漏れる。

そんな言葉が口をついたと同時に、私の脳裏に、これまでの高校生活が去来する。

ふと、自分の心に、寂しさが湧き上がった。

「……」

1年前、アオイが彼に告白しようとして、それを見ていた時も、同じことを思った。だけど私は、その時、その気持ちから目を背けようとした。

でも――今のこの気持ちは、目を背けようと思うと、背ける前よりもずっと強い気持ちになって、私の前にすぐ現れてくる……

寂しいなんて、人前で口にするには、子供っぽくて嫌だけれど――改めて彼の前に来て、自分がこの1年、ずっと彼と話せなくて、寂しいと思っていたのだと、私は改めて確信する。

いまだに男子が苦手な私が、こんなことを思うなんて……

――さっきまで、棚の陰に隠れようとした私だけれど、そう思ったら、今の恥ずかしさよりも、彼の近くに行きたいという思いが勝った。

私はムースポッキーを持って、レジへと向かう。

レジカウンターの前で、彼はバーコード読み取り機を、利き手に持っていた。私はカウンターにポッキーを置く。

「これ奢るよ」

不意に、彼の声が私のすぐ近くでした。

「え？」

私は顔を上げると、彼はポッキーのバーコードを読み取り、一度それをカウンターに置いた。

「テープでいいだろ」

そう言って、読み取ったバーコードの上に、コンビニのロゴがプリントされたセロテープを貼って、私の前に、手ずから差し出した。

「……」

私は、ありがとう、という言葉も出ないまま、そのポッキーを受け取る。

あまりに意外な反応だった。この1年、あまりに邪険にされてきた私に、そんなことを言うなんて、彼の意図が読めなかったから。

「そんな顔するなよ。いつもプリント届けてくれたりしてくれてるし、たまにはな」
彼はそう言った。
「……」
一年ぶりに、こんな近くで話す彼からは、この1年、ずっと学校で感じていた鋭さがなくなっていて、疲れてはいるものの、少し穏やかな表情をしていた。
そんな彼が、1年振りに私に少し優しくしてくれて――でも、嬉しいというよりは、戸惑いの気持ちの方が強い……
今、私はどんな顔をしているのか――私は再び、伏し目がちになってしまう。
「別に僕は君のことを嫌いなわけじゃないさ」
ずっと黙っている私に、彼はそう言った。
思わず私は、顔を上げた。
「その、僕は単に気分屋なだけでさ。あの、人と話すのも得意じゃないし……」
「……」
いつも学校ではクールなサクライくんが、当惑したように、私から目を背けて、頭を掻いている。
「とにかく、僕のことを気にするのは、時間の無駄ってこと」
やがて彼は、そんな自分に焦れたように、強制的に話をまとめた。
「……」
私はそれを見て、くすっと笑ってしまった。
不器用な人――全然1年前と変わってない。
ずっと思っていた。1年前よりも、ずっと纏う空気の澱んでしまったあなたは、何だか私が知っている人とは別人のように感じてしまうこともあったけれど。
綺麗な顔をしているのに、髪型とかに無頓着なところも、ぶっきらぼうだけれど、優しいところも、他のことは何でも出来るのに、他人と関わる時だけは、不器用なところも。

何だか、それが分かって安心する――

そして、彼のその優しさは、エンドウくんのような、気の効いた気配りとはまた違う嬉しさを、私の胸に満たしてくれる……

どうしてだろう……

――コンビニの中に流れる有線放送の中、沈黙する私達。

その中で、不意に私の耳に、何かを叩くような音が聞こえて、私は自動ドアの方を見る。

「あ、雨……」

「え？」

彼も店の外を見た。もう街路灯以外の明かりもないくらい商店街の中でも、僅かな光の中、落ちてくる水滴が目に見えるほどの大粒の雨が、いきなり降ってきていた。

「雨か……」

彼はそう呟く。

「……」

――しまった。今日は傘を持っていない。ここから家まで、走れば10分足らずの場所にあるけれど、この雨では帰る頃にはびしょ濡れだ。

この雨では、傘をここで買っていくしかない……

そんなことを考えていた時。

店の裏に一度入っていた彼は、売り物として並べるビニールが差のラックとは別に、右手に一本、袋に入っていない、使用済みのビニール傘を持っていた。

彼は左手で、傘を覆う埃を手で2、3度払って、私にそれを差し出した。

「持っていきな」

「え？　いいの？」

「ああ、裏にいっぱいあるんだ。このままあっても埃被って使えなくなるだけだ」

「でも、コンビニって傘も売るんでしょ？　タダであげたりなんか

したら、店長さんとかに怒られるんじゃ……」
「風邪をひくな、と僕に言ったのは、君だろ」
彼はそう言った。
「じゃあもし君が金を持っていなかったら、この雨の中、僕は持たせる傘があるのに、君を外に放り出すことになるだろ。その時僕は何て言って君を見送ればいい？」
「……」
「それに君に風邪をひかせて治療費を払うよりも、傘を奢った方が安いからな」
「……」
雨音。
「――すまない。こんな言い方しか出来なくて」
彼は私から目を背けて、目を覆うように額に手を当てた。
「……」
――いつもの、サクライくんだ。
何でもできる人なのに、何でも無難にこなすことは出来なくて。何でも知っているようで、みんなが当たり前に知っていることを知らない。不器用で、ぶっきらぼうで、負けず嫌いで、意地っ張りで、ちょっと照れ屋で、自分の外見に無頓着で。
そして、誰かが困っていれば、こうしていつだって、口は悪いけれど、黙って助けてくれる――
1年間、話すことの出来なかった間、随分彼は変わってしまったように思えた。今だって、体は鉛のように重くて、心身ともにボロボロだろうに。
そんな時でも、他人のことをいたわらずにはいられない――そういうことに、見て見ぬ振りの出来ない、正義感の強い人……
「――ありがとう」
私の口から、自然にその言葉が漏れる。
そして、その言葉と同時に、私の心は何か、温かいものに包まれたような安心感に包まれて。

今までの緊張が、一気にほどけてしまったのか、私の目から、涙が溢れ出した。

「――おい」

サクライくんが、かすかに気色ばんだ表情になる。

「ご、ごめんなさい……なんか、安心したら急に……えへへ」

苦笑いを浮かべても、涙がごまかせない。

でも――私は今、サクライくんに泣き顔を見られる恥ずかしさも気にならないくらい、今私の胸を満たす安堵感に包まれていて。

同時に、実感する。

ああ――私、この人のことが好き。

この人の優しさは、不器用だけど、まっすぐで、確かなぬくもりがあって。

そんな優しさをいつも心に抱いているあなたのことが、とても好き……

とても……

「――僕には君が分からないよ」

呆れるような顔をしたサクライくんが言った。

「――そんな泣き虫なのに、何で成績学年トップなんてタフなことができるのかってな」

そう言って、サクライくんは自分のポケットから、ポケットティッシュを取り出して、私に差し出した。

「ハンカチなんて気の効いたもの、持ってないからな」

彼は恥ずかしそうにそう言った。

「……」

そんな彼の表情を見ながら、私は色々な人の言葉を思い出していた。

「あの子の目元が柔らかくなったら、きっとすごく素敵なことだと思うのよね」

「俺もあいつの眼が優しくなったところを見てみたいのよ」

彼のことをよく知る人達は、口を揃えて言う。

そう言った人達の気持ちが、今の私にはよく分かる。
こんな優しい人に、今みたいな顔なんてして欲しくない。
一度でもいいから、心から笑った顔が見たい。
固まった普段の冷たい表情が、照れによって崩れて、むき出しの、
無垢なあなたの表情が現れて。そんな思いに、強く強く焦がれる。
だけど――
そうして笑った顔を――私一人が見られる時。
あなたの全てを独り占めできる時。
そんなものが欲しいなんて。
そんなこと言ったら、嫌われてしまわないかな。
それでも――欲しい。
あなたのぬくもりも、無垢な表情も、二人だけの時間も、全部。

Another story ～ 2－44（最終話）

――3年E組では、授業が今自習になっている。
今日は学校に報道陣が詰め掛けていて、それが事務の人間だけでは対応しきれないほどの数だから、やむなく教師達までその応対に駆り出されているのだ。幸い3年生は受験勉強があるし、自分のしたい勉強をさせておけば問題ないということで、3年生を受け持つ教師が優先してその対応へと向かっていた。
「……」
そしてそのまま3限に突入している。
ペンを片手に、私は今日何度、時計と、教室のドアを見つめただろう。
そんな折に、教室のドアが開く。
ワイシャツのネクタイを緩めた、フォーマルな格好のエンドウくんとヒラヤマくんが入ってくる。
「あ、記者会見終わったの？」
クラスメイトが自習を中断し、1ヶ月ぶりに帰ってきたエンドウくん達に集まる。
「ああ、そっちは終わったんだが……俺達はこれから1か月分の補習だ」
ネクタイを緩めながら、ヒラヤマくんはがっくり肩を落とす。
「みんな久し振りだなぁ」
エンドウくんがにこやかに笑う。
「サクライくんは？」
クラスメイトが訊く。
「ああ、あいつは補習免除になったから、いつもどおりのサボりだろう」
「色々疲れてるのさ、あいつも」
そう言いながら、二人は苦笑いを浮かべて……

一瞬ちらりと、教室の後ろの方へいる私に、二人同時に目配せを送る。

行ってやりなよ、と。

「……」

そんな目配せを貰ったとき、私は半日我慢していた心のタガが外れて、どうしようもなくなってしまった。

「シオリ、愛しの彼氏様に会えなくて、寂しいんじゃないのー？」

「二人とも訊いてよ。シオリったら、この1ヶ月、ずっと上の空だったんだから」

女子達がおかしそうに私をからかう。

「……」

――確かに、昨日までの私は、ずっと毎日を一日千秋の思いで過ごして、いつもボーっとしていた。

でも、今日は……

――折節、チャイムが鳴り、3時限目の休み時間になる。

私はペンを置くと、一人教室を出て、階段を昇り、屋上へと向かった。

屋上へと続く扉を開けて、夏の太陽の降り注ぐ外へと出ると。

屋上のプレハブの日陰で、ひとりの男の子が横になって眠っていた。

「……」

駆け寄ると、ワイシャツのネクタイを緩めて、裾をスーツのズボンから出して、小さな寝息を立てている。裾から少し、6つに割れた腹筋が出ていて、子供みたいにおなかを出している。

「……」

半年前に私はこの人――サクライ・ケースケくんと恋人同士になった。

それまで彼の目を濁らせていたものの正体が、彼の生まれながらに崩壊した家族と、それによって歪められた彼の出生にあることも知った。

彼はそれを半年前に吹っ切って、それから私達の新しい関係もスタートした。
今では彼は、私達にも少しずつリラックスした表情を見せるようになっていき。
あの野生の獣のような、刺すような雰囲気は消えて、今ではこの通り、気持ちよさそうな寝息を立てた寝顔すら見せるようになっていた。
「……」
私はそんな彼の横に膝を突いてみる。
この学校で、彼と知り合った頃もそうだったけれど。
私は彼の寝顔が好きだった。
勿論、一緒にいるなら起きていて、話が出来ればとも思うけれど。
何だか、今はこんな気持ちよさそうな寝息を立てられていると、邪魔したくない気分になるし。
今の彼の寝顔を見ていると、安心するのだ。
「まったく……」
呆れるような声が、私の口から漏れる。
昨日彼はオランダから帰ってきたばかり。サッカーのＵ－２０日本代表のキャプテンとして、世界大会に出場し、日本を世界大会初の表彰台へと導き、国中を感動と興奮に包み込んだ。今日本一世間を騒がせている人間といってもよかった。
それなのに、こうして寝ている姿は、全然そんな風には見えない。普通のどこにでもいる高校生のようで。
彼自身、あまり自分の名声には興味がないことを、私は知っている。オランダに行ったのだって、親友であるエンドウくん、ヒラヤマくんを助けたいがための一身だったことも。
そうして１ヶ月もの間戦い続けて、今は戦士の休息……
「ん……」
不意に彼がごろりと、私の方へと寝返りを打つ。
「あ……」

私の正面に、彼の顔が来て、私の目が彼の顔へと向く。
「……」
昨日の午後に帰国した彼は、昨日の夜、私の家に泊まりに来て。
そして昨日私達は、付き合って半年で、初めてのキスをした。
その時のことを思い出して、私はふと、彼のことを意識してしまう……
あの時、彼に少し強引に抱き寄せられて、唇を重ねた時――
初めてのことで、頭が真っ白になったけれど。
その次の瞬間、何だか私と彼が、今まで交わした言葉よりもずっと深く、お互いのことを知り合えたように思う。
彼はこの半年、家族によってボロボロにされてきた心を修復する作業の中で、自分で自分を肯定できずにいて。私はそんな彼のことを、１００％は理解で来ていなかった。自分が幸せな家庭で育っている以上、彼の背負った苦しみは、私には理解できるものではない。
今まではそんな二人の感覚の違いが、ボタンの掛け違え見たいに、少しずつずれていって、お互いがその隙間を埋める手が見つからないままになってしまったけれど。
キスをした時、この半年、彼が私のことをどういう風に想っていてくれたか、言葉にならないけれど、この半年、私との距離を埋めようと、遠く離れたオランダに行って、彼が一生懸命頑張ってきてくれたことを、強く感じた。
そして同時に、私も何だか、彼の背負ってきた苦しみや悲しみのありかがどこにあるのか、分かった気がした。
今までどうしても埋められなかった、二人のたった１８年間の人生の差――それが、拙いながらも、何だかお互いの魂の全てを分かち合えたような気がした。
――嬉しかった。彼があのキスで何を思ったのかも、手に取るように分かる。唇や、抱きしめられた腕から伝わる力や温度で、私と彼の思いが今、しっかりひとつに重なっているのだと、確信できた。
「……」

――もう一回、してみたい。
なんて、そんなこと思うのは、ちょっとエッチなことなのかな。
でも、私の目は、眠っている彼の唇に向けられてしまって。
「……」
改めて見ると、私、この唇と、キス――したんだよね。
一度したからといって、まだ私はキスというものがどんなものか、上手く定義できたわけではないから、何だか妙に不思議なもののように思えてくる。
そんな不思議な思いが昂じて。
私の指は、眠っている彼の唇を軽くなぞっていた……
「……」
だけど。
その時、サクライくんがうっすらと細目を開けて、私の方に目を向けた。
「あ……」
私はばっと手をどける。
「お、起こしちゃった？　えへへ……」
私は照れを隠すように、苦笑いする。
「……」
だけど……
目を開けた彼は、そのまま上へと手を伸ばして、寝転がったまま、指で私の頬を軽くつまんだ。
「え？」
「ふふふ……」
サクライくんはいたずらっぽく笑うと、そのままふにふにと、私の頬を、痛くない程度に軽く引っ張るのだった。
「……」
半年前、付き合い始めてから少しずつ、彼の心を縛っていた鎖がほどけていって。
今までの彼は、そんな生まれながらに自分を縛っていた鎖によっ

て、縛られ続けていた感情だったことを知る。
そんな鎖がほどけていってから、私は初めて、素のサクライ・ケースケという人間に触れた。
生まれてはじめて心を自由に解き放った彼は、当然ながら、まるで生まれたばかりの子供のように透明で、無垢で、目に映るものなら何にでも興味を示した。無邪気でよく笑い、子供みたいに落ち着きがなくて、いたずら好きで、子供っぽくて。
まるでスポンジみたいに、新しく見たものを吸収していくし、今まで磨き上げた力も、その自由な心を得た今では、まさに天衣無縫、国士無双の強さを発揮する。そんなとんでもない力を振るいながらも、彼はいつだって遊んでいるようにも見えた。もっともっと自分の力を試したいと、貪欲に挑戦を続ける遊びに夢中になっていて、まるで日が暮れるまではしゃぐ子供のように顔をきらきらさせて。
そんな彼に戸惑うこともあったけれど、そんな彼を見るのも楽しくて。
付き合うごとにどんどん表情豊かになって行く彼のことを見ていると、私も幸せな気持ちになっていくし、同時に彼のことを、もっと好きになってしまう……
「――なあ、シオリ」
私の頬をつまんだまま、寝転がる彼は、私の目を覗き込んでいた。
「僕、昔、君に言ったな。恋愛は、寂しがり屋がするものだって。所詮人は寂しいと感じるから、誰かと一緒にいたいと感じてしまう。恋愛なんてのは、そんな本質を妙に小奇麗に飾った詭弁なんだと思っていた」
「――うん」
「あれ、訂正させてくれ」
そう言うと、彼は私の頬をつまんでいた手を一度離して、その掌で、私の頬を包み込んだ。
「寂しいとか、そういう動機があるわけじゃなく、ただ一緒にいたい、って思える奴がいて――理由なんかなくても、逢いたい、側に

いたい、って思える気持ちが、多分、存在するんだな。君に逢えない間、そんなことをちょっと考えた」
「――うん」
「……」
沈黙。
「――だからさ、僕、多分これから、理由がなくても、君に逢いに行くこともあると思うけど――そこんとこ、よろしく」
「……」
沈黙。
「あぁ……違うな。ちょっと違うな」
彼は沈黙のあと、目を閉じて、ひとつ息をついた。
「だから君も、理由なんかなくていいから、逢いたい時はいつでも僕のところに来てくれ。呼んでくれたら、すぐに飛んでいくから」
「――はい」
私は微笑んだ。
固くて、全然ロマンチックな言い方じゃないけれど、彼は今、自分の今まで気づきもしなかった感情と必死に向き合って、それを上手く自分に定着させようと、ちゃんと自分と向き合っている。そんな彼の真摯さを感じる。
彼の言葉は嘘もなければ、今は一点の濁りもない。まじめすぎるくらいまじめで、だからこそ私も、彼の思いやりをしっかりと感じることが出来る。
「ふう……」
それを言い終わると、彼はまだ眠いのか、再び目を閉じる。
「――記者会見とかもあったし、疲れてるのね。もう一眠りする？」
「ああ――すまない。結局昨日、時差ボケであまり眠れなくてな……今、眠気がピークなんだ……」
「……」
実を言うと私も昨日はほとんど寝ていない。彼が私と同じ家の中で寝ていること、さっきキスをしたことが頭から離れなくて、意識

しすぎてあまり眠れなかった。
「――ねえ」
私は目をつぶる彼に声をかける。
「よかったら、膝枕してあげようか」
「は？」
その言葉に、彼は思わず寝ぼけ眼を見開いた。顔も高潮しだす。
「ふふふ……」
「――何だ。冗談か」
彼はぐったりと目を閉じ、天を仰ぐ。
私も彼が変わっていくのを見て、少し変わった。昔と比べて反応が馬鹿正直になった彼を見ていると、妙に少し困らせてしまいたくなったり、いたずらをしてみたくなる。
「はぁ……ちょっとがっかりだ。でも、学校でそんないちゃついてたら、問題ありだな」
「そうだね。下手したら二人で停学かも」
「――勘弁だな。君の家族にも顔が立たないし」
「ふふふ」
「さあて――じゃあ、変な気を起こさないうちに、また寝るか……」
そう言って、彼は再び静かに息をつき、3分もしないうちに、また再び気持ちよさそうに寝息を立て始めた。
「……」
――まあ、焦ることはないんだよね。
これからもっともっと深く彼とつながりあうチャンスなんて、いくらでもあるんだから。
私だって、初めての恋愛で、まだいっぱいいっぱいなんだし、彼だってまだまだ自分の気持ちと向き合っている最中だ。
私達のペースで、ゆっくりやっていけばいいか……
それに。
こうして彼の寝顔を見ているだけでも、何だか十分満ち足りたような気分になれるのだから。

私は今も、彼の寝顔を見るのが好きだった。

――彼と付き合って半年、初めてのキスをした直後の私は、とても満ち足りた気持ちの中にいた。

だけど、この2週間後、彼と私に悲劇が訪れて。

再会するのに、それから7年の時を費やしてしまったけれど……

Another story 完

A

Another story ～ 2－44（最終話）（後書き）

ようやくこの話も完結です。まさかこんなに長くかかるとは…無計画な作者ですみません。仕事が忙しくて、終盤は更新遅れまくりでしたし。

さて、次回からはようやく第3部に突入します。

第3部序章　4th－person

昨日、この街の夢を見た。
僕はまだ17だった。
この街で生き、この街で暮らし、この街でもがいていた。
そして、この街で僕は幸せと巡り会い。
この街で、その幸せを見失った。
あれから沢山の街を流れた。そのほとんどが、貧しい街だったけれど、どの街にもそれなりにいいところがあったように思う。特に僕が1年間過ごしたフランスと、2年間過ごしたイギリスの街並みは、自然を生かした魅力的な街作りをしていて、何度歩いても飽きることはなかった。
故郷なんて、住んでいる時は意識しなかった。
でも、思い返せば、僕はこの街で見たものを、どの街のものよりも、よく覚えている。
この街に降った雪も、この街に咲いた桜も、土手の川べりに咲いていた菜の花も――
ただ、その記憶が、今では僕の中にどういう理由を持って脳裏に刻まれているのか、それはもう、今の僕には分からないけれど。

黒のリムジンが、僕の故郷、埼玉・川越市を走る。
僕の生まれた商店街は、川越がまだ城下町だった頃の名残を残す古い街並みが残っていて、それが売りの観光地だ。電線も石畳の下――地中に埋めて、昔の景観をよく見せようと、自治体も協力している。
道路が狭くて、街路樹がなく、街並み自体が文化財に認定されているから、新しい建物を建てることが出来ない。
僕の生まれた街は、そんな殺風景で、自ら変わることを拒否した

街だ。
僕がそんな街を出てから、既に7年の時が過ぎていた。
リムジンの広々とした後部座席――マジックミラー越しから見える故郷は、何一つ変わっていない。僕がバイトしていたコンビニまで残っている。
そうだ、この街は、あの時と何も変わっていないんだ。ただひとつだけを除いて。
出立が慌しくて、この街と何もお別れをしていなかった。この街の人達は、僕をまだ覚えているだろうか――
――ふふふ……忘れるわけはないか。
だって、今の僕は……
「――あの」
窓の外を眺める僕に、声をかける女性。リムジンの向かいの席に座って、僕の様子をずっと窺っていた。
「本当に、行くんですか？　今から……」
「……」
僕は変わらず、窓の外を見続ける。これから向かう先のことに、もう僕の頭は飛んでいて、ここへ向かう1時間、ずっと黙りっぱなしだった。
「――すみません」
僕の気を損ねたと思ったのか、女性は僕に謝った。
「あ、いや、別に怒ったり、気が立っているわけでもないんで。謝らないでください」
僕はそんな女性の表情を見て、顔を上げ、笑顔を作って見せる。
「……」
それでも女性は僕に、心配そうな面持ちを向け続けたままだ。
「心配しないでも、大丈夫ですよ」
「いえ、別に行くなとは言いません。ただ……これを」
そう言って、彼女は僕に、グラスに入ったピンク色の液体を差し出した。リムジンだから、中には冷蔵庫もグラスも用意されている。

「何ですか？　これ」
そう訊きながら、グラスに口をつける。
「……」
とても甘い、ほのかに酸っぱい。
「フルーツジュースです」
「……」
「甘いもの取って、脳に糖分を入れた方がいいですよ」
「……」
「――お酒の方が、よかったですか？」
「ああ、いえ、ありがとうございます。わざわざこんな……」
相変わらず、気の効く女の子だ。彼女を雇ったのは僕じゃないが、なかなか優秀と言うべきか。
忠告痛み入る――
だけど、的外れだな。きっと彼女は、僕を鎮めようとやったことなのだろうが。
今の僕は、自分でもびっくりするくらい冷静なんだ。
もう僕の抱える感情は、そんなレベルをとっくに超えているんだ。
7年間、僕はこの感情を片時も忘れることはできなかった。いつの間にか自分の血となり肉となり――自分の日常のひとつとなってしまった。
一度だってそれを望んだわけでもないのに……

リムジンは、商店街を通り過ぎた。
川越市の境は、市街地と比べると、随分と田舎だ。その日陰臭いにおいのする田舎町の隅に、忘れられたように建つアパートがあった。その前にリムジンを止める。
まだ真新しい制服に、冴えた白の手袋をはめた運転手が降りて、僕の乗っている後部座席のドアを開けた。
「ご苦労さまです。10分もすれば終わりますから」

「はい！」
運転手の声は明朗だった。
「社長」
さっきまで僕の横にいた女性が声をかける。リムジンから、ジュラルミンケースを引っ張り出しているのだ。
だけどトランクに体を乗り出している彼女は、じたばたするばかりで、全然顔を出す気配がない。やがて諦めて、僕の方へやってきた。
「あれ……なんですか？　重過ぎ……」
既に息を切らしている彼女に代わって、僕は右手でトランクに入っているジュラルミンケースを受け取る。ケースはズシリと重い。
「そんな重いの、片手で……さすがスポーツマン」
女性は舌を巻く。
「――昔の話ですよ」
そう言い残して、僕はアパートの2階に上る。
アパートは2階建てで、昭和の半ばに造られたボロ家だ。アパートの脇に階段がついていて、各階3つずつドアが付いている。2階に上る階段は、青いペンキが既に剥げていて、赤錆だらけだ。
2階の一番奥のドア――表札はない。ドアの脇の郵便受けには、赤やら黒やら、ビビッドな封筒が大量に押し込まれている。
「……」
僕は、粗末な木製のドアをノックする。
「……」
返事がない。
今度は拳で、強くノックしてみる。
「……」
返事がない。
僕は、ちっと舌打ちすると……
目を閉じて、体の力を抜き、深く息を吸う……
そしてドアに対し背を向けると、右足のつま先を軸に体を回転さ

せ、その遠心力を使った後ろ回し蹴りをドアに叩き込んだ。
ドガン、と言う大きな音がして、僕の左足が木のドアを真っ二つにしたと同時に、錆びた蝶番が吹っ飛び、ドアノブのついた木の板が部屋の中にダイブしていた。
ドアの先は、ゴミ袋が雑然と積まれ、異臭を放っている。ゴミ袋の間を、ゴキブリが何匹も這いまわっている。あまりに不衛生なためか、どのゴキブリも餌に事欠かず、進化を遂げたかのように巨大だ。
そして、その奥、井草のほつれきった畳の和室……
そこに、まるで斬首を待つかのように、生気を失って座り込む一人の男がいた。

第3部序章　４ｔｈ－ｐｅｒｓｏｎ（後書き）

そんなわけで、最終章、第3部がスタートです。

ついでですが、ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ最終話でこの物語もついに１００万文字を突破してしまいました。読者の方々は、本編第2部の内容を覚えているのでしょうか？読み返すのも大変すぎる作品ですが、もう少しお付き合いいただけたら幸いです。

感想も随時お待ちしております。

Revenge

男の肌は荒れ、７年の歳月が流れてはいるが、年数以上の老け方をしていた。白髪混じりの髪はもつれ、顔中に皺が深く刻まれ、１００キロを超える体格はそのままだが、まるで猩々のように背中を丸め、酷く衰え小さく見えた。

「……」

俺は足下のゴミ袋を左足で蹴り上げる。宙を舞うゴミ袋は、男の横顔にヒットした。それでも男は、げっそりとうつろな視線を畳に落とすのみだ。

そのまま俺は土足でずかずか上がった。こんなゴキブリだらけの部屋じゃ、もはや靴を履いていようがいまいが、大した差はない。

３畳一間、トイレ共同、風呂なしのアパート。狭いキッチンと、薄い引き戸一枚隔てた部屋は、テレビもなく、黄ばんだ万年床と、小さなちゃぶ台が置かれているだけ。キッチンからはゴミが異臭を放っているし。まるで豚小屋だ。

引き戸を閉め、座布団のない、井草のほつれきった畳の上に腰を下ろした。ジュラルミンケースを脇に置き、男を適当に睨むと、男も俺と向かい合って座った。

「……」

男は俺を睨む。久し振りだな、などの社交辞令を端折っているが、俺もそんなことを言うつもりは毛頭なかった。菓子折りのひとつも用意していない。これは俺と男の血のつながりが、２５年の中で初めて一致させた行動だったと言うべきだった。

「気分はどうだ？」

俺は言った。

「こんなかび臭いアパートが、人生の終の住処になった気分は」

「……」

そう。あの失踪から後――

俺の生家の前には、毎日俺のファンが殺到し、怨嗟の声が絶えなかった。家の外に出ようものなら、そのまま俺のファンに袋叩きにされかねない有様だった。

俺の祖母は篭城生活中、そのあまりの過激な現実に狼狽し、そのままショックからの心不全で死んでしまった。

この男はユータなど、数人に暴行を加えたことで、俺に半殺しにされ、病院に運ばれた間に、逮捕状が出て、５年を刑務所で過ごした。勿論、商売どころではなくなり、１００年の歴史を重ねた老舗は、もろくも崩れた。

男が拘置所にいる間に、この男の女房の親族は娘を強引に引き取り離婚が成立。

その後も悪夢は続く。

この一家がいる限り、商店街に客が寄り付かなくなる、と考えた商店街が一致団結し、立ち退きを裁判所に嘆願したのだった。結果は僕を虐待していたことで、世論が味方し、商店街の勝訴となり、親父は家を追い出され、今ではこんなボロアパートに身を隠しているというわけだ。

俺の生まれた商店街は、何も変わっていない。そう。俺の生まれ育った家が、あの事件の後取り壊され、消滅した事を除いて。

この男は、マスコミの扇動による公開処刑により、いまや全てを失っている。郵便受けに入っている赤や黒の封筒は、金を返せなくなった故の督促状だ。当然俺を虐待していたなんてでかいニュースになれば、この男の顔は日本中に知れ渡っている。再就職の道など残されているはずがない。清掃員で何とか食いつなぎ、それ以外ではほとんど外にも出られない。今や肝臓を売る寸前の生活をしているわけだ。

男は落ちくぼんだ目で僕を睨むと、一見ご立派な啖呵を切った。

「用がないなら、とっとと失せろ」

「……」

７年ぶりに聞く親父の声。

「貴様、まだ自分が俺よりも優位にいると思っているのか？」
俺は冷ややかにとって返す。
「7年前、あれだけ俺にやられたのを、忘れたわけでもあるまい」
「……」
男の目に、恐怖の色が滲み始める。
「安心しろ。別にあの日の続きをやろうってわけでもない」
僕は、ジュラルミンケースをちゃぶ台に置き、ポケットから鍵を出し、鍵を開けると、中身がよく見えるようにケースを半転させ、上蓋を持ち上げた。
みっしりと札束が入っている。
「1億ある」
男が生唾を飲んだ。
「貴様、今金利合わせて月数十万の借金を背負っているらしいな。そのせいで俺のところにも、取立て屋が来ていてな。迷惑極まりない」
「……」
「だから――手切れ金だ。二度と俺の親を名乗らないでもらおうか。そう取り立て屋に伝えろ」
「……」
「額が不満なら、本社に来るなり、弁護士に頼むなり、お好きなように」
ジュラルミンケースの上蓋越しに、俺は男の顔を覗いた。あまりに非現実的な額に、胆を潰しているのか、何も答えない。何も反応しない。
しかし、何か反応しないと、じり貧だと思ったのだろう、男は思いつく限りの虚勢を張った。
「これっぽかしで手切れ金のつもりか？　俺をこれだけどん底に落としておいて……」
「そうか、じゃあもう一億」
間髪入れずにそう答え、俺はスーツのポケットから、あらかじめ

用意していた一億円の小切手を、ジュラルミンケースの横に叩きつけた。こんな馬鹿とのやり取りなんかに、時間をとっていられない、という具合に、いかにも気だるそうな仕草を作って。

まるで紙屑のように億単位の金を投げ捨てるように見えたのだろう。即座に一億を用意する俺の攻めに、男はまた押し黙ってしまった。手切れ金といえど、法外な額であることは間違いない。この男がいくら非常識でも、十分それは理解している。負け惜しみを言うにも、次の句が思い浮かばないのだ。

「5……」

「――ん」

「4……3……2……1……」

俺は時を刻む。

それが終わると、ゆっくりとちゃぶ台に置かれている小切手を引っ込め、スーツのポケットに入れ、ジュラルミンケースの蓋をこちら側へ向け、鍵をかけ直した。

「ま、待て」

男はそこでやっと、プライドを捨てたらしい。俺を呼び止める。

「……」

僕は立ち上がり、閉じられたジュラルミンケースを男の前に差し出す。

男の目は、もはや俗を通り越して愚だった。きっと7年前、俺の名で賄賂を受け取っていた時も、こんな顔をしていただろう。

男も立ち上がり、俺の持つジュラルミンケースに手を伸ばした。

その時。

俺は男の手がケースに触れる前に、ケースを持つ手を離していた。

重力により自由落下するケースは、そのまま男の両足の指に落ちた。ボキっという音がした。

「ぐあ……」

男はその場に膝を突いた。既にこの時、男の両足の指は全て粉砕していた。

「言っておくが、俺はこの中身をやるなんて、一言も言ってないぜ。手切れ金なんて払わなくても、世間的に誰もお前が俺の親だなんて、今や誰も信じないしな。金を払う意味がない。俺のところに、貴様の取り立て屋が来たのは本当だがな」

そう言うと、僕は革靴で男の顎を蹴り飛ばしていた。男の体はあっけなく吹っ飛び、仰向けに倒された。

「普通に考えたら、俺が貴様に金を払うはずないし、借金取りを黙らせるためなら、わざわざお前に金なんて渡しに来ないで、直接借金取りに金を渡す――そんなことも頭から吹っ飛ぶくらい、金に目がくらんでいたんだな。よっぽど金が欲しいと見える」

俺は親父の肋骨を踏みつける。

「まあ、金が欲しくて欲しくてたまらず、俺を売り飛ばそうとした男だ。貴様の好きな金はいくらでもくれてやろう」

そう言う頃には、俺は男の頭上で、ジュラルミンケースを手に持っていた。

「な……ちょっ、やめ……」

男がそう言う頃には、俺はまた、ケースを持つ手を離していた。

グシャ。

男の顔に、ジュラルミンケースがめり込む。

正確に言えば、この箱には一億分の札束の重量に加え、鉛の板を仕込み、重量を２０キロにまで増してある。両手を使っても、女性には持てないわけだ。

鼻の骨も折れ、歯も何本か折れ、顔の骨格が変わってしまっただろうけれど、ケースがずるりと顔から滑り落ちた時、男の顔は鼻血で真っ赤に染まっていた。

俺はその顔を、革靴で踏みつける。鼻の骨が折れているから、靴底にぐにゃぐにゃした感触が伝わる。

「――申し訳ない。ケースの重さに、二度も手が滑った」

俺は男を見下ろしたまま言う。

「だが、金の重さに潰される――金の大好きな貴様にとっては、至

福の時だろう？　金食い虫は、金の重さに潰されて死ぬのが似合いだ」

そう言うと俺は、親父の顔からケースをどける。持参した布でケースに付着した血を拭く。

そして俺は、親父の胸倉を掴んで、体を無理やり引き上げた。

「ひっ！　ひいいいいいっ」

「黙れ」

血まみれの顔で狼狽する親父を、俺は睨みつける。

「……」

ざまあねえや、と思う。

この7年――いや、あの事件のもっとずっと前から、この男を俺は、恨んで呪ってきた。

それが、今はこの様だ。いつの間にか俺とこいつの間には、天地以上の差が開いていて。

日本を出ている間、この男は全てを失っていて、もはやゴミ同然の命を持て余しているだけだった。

今ではこの男は、俺にとっては殴る価値さえない男になっていた。

そんなことも、頭では分かっていたはずだけれど――

「もうひとつ用件がある。ひとつ伝えたいことがあってな」

俺は胸倉を掴んだまま、言った。

「略式だが、辞令だ。貴様が契約している清掃会社――本日を以って、貴様を解雇する」

「な……」

「俺がその清掃会社を買収したんだ。はっきり言って、二束三文だったがな。貴様のいた会社の経営責任者は、俺になったんだ」

「そ、そんな……」

男は震えている。

そう、これは借金をして、貯金もない人間への死刑宣告に等しい。

懲役を5年も食らった上に、7年前の事件で、既にネットで日本中に顔が知られていて、再就職もままならない中、やっとの思いで見

つけた仕事を奪われたのだ。
「あまり変わりはなかろう？　働こうが働くまいが、貴様はもう一生借金を返せない。お前はもう犯罪を犯すか、取立て屋に生き血を啜られるかのどちらかの運命しかない。だから俺がその予定を早めてやった。それだけのことだ」
俺はそう言うと、親父の胸倉を話してぽいと突き放し、ケースを持って立ち上がる。
「7年前にも言ったはずだ。俺は貴様を楽には殺さない――これから全力を以って、貴様をどん底の底が抜けるくらい、お前を叩き潰してやるからな。お前のそのゴミ同然の命、せいぜい燃え尽きる最後まで苦しんで死ね」
「テメエ！」
怒り狂った親父だが、もう足の指が折れていて、俺を追いかけることもできない。
「ふざけやがって！　テメエ、覚えてろ！　いつかテメエ、ぶっ殺してやるぞ！　もう俺は怖いものなんてねぇんだ。テメエを殺すくらい、躊躇なくやってやる！」
俺の背中にそんな罵声を吐きかける。
「殺してやる――か」
俺は立ち止まり、親父を振り返る。
「その意気込み、大いに結構。では訊くが――貴様は俺を殺すとしたら、どうやって殺す？　闇討ちか？　毒でも盛るか？　それとも事故死に見せかけて、俺を車で轢き殺すか？　いずれにせよ、ろくなやり方ではないだろう」
「……」
「だが、俺は違う。俺は貴様を合法的なやり方で殺すことができる――殺すだけじゃない。いたぶることも、少しだけ慈悲を恵むことも、少し慈悲を与えた後、再び突き落とすのも、簡単に出来る……自由自在だ。貴様は俺を殺しても、ムショに逆戻りするだけだが、俺は貴様を殺すくらい、虫けらを潰すのと大差ないんだ」

俺は哄笑する。

「その意味が分かるか？　もう貴様は俺の掌で生かされているに過ぎないってことだ。貴様も生かすも殺すも、俺の御心次第――貴様はもう俺の気分次第でどうにでもなっちまうんだ。その立場を少しは自覚した方がいいぜ」

「……」

「しかし――俺は貴様を殺すこともできるが、救うことだって出来るんだぜ……どうする？　今貴様を救えるのは俺だけだぜ。それでも俺を殺すかい？」

「……」

親父は俺を見て、しばらく逡巡していたが。

「――す、すみませんでした……」

親父は折れた足の指もかばいもせずに、七重の膝を八重に折り、畳に頭をこすり付けた。

「し、7年前のことも、俺が悪かった――もう俺は、この通り、何一つ力はないんだ。だ、だから……」

「馬鹿か、お前は」

そうして憐憫の声を絞り出す親父に、俺は言い放った。

「人間の頼みであれば、俺も耳を傾けよう。だが、貴様は人間じゃない。人の品性を売った、虫けら以下だ。人間が、虫けらの命乞いに耳を貸すと思うか？」

「な……」

恥をしのんで土下座していた親父は、その声に顔を上げた。

「……」

だけど、顔を上げた親父は、怒りを含んだ顔がすぐに凍りつく。

俺が親父の顔を、それ以上の怒りをこめた目で睨みつけていたから、その迫力に気圧されたのだ。

「――7年前のことも、もう謝らなくていいよ。謝ったって、俺の大事なものは戻ってこないから」

俺は自分の拳を握り締めて、目の前の男をグチャグチャに殴り殺

したい殺意を堪えた。
「俺だけに危害を加えるならまだしも、貴様は俺の大事なものを全て傷つけた仇だ！　もうほとんど絞れるものもないが、これから貴様の僅かな血の一滴、骨の一本まで削ぎ落として、ダルマにしてからじっくり弄り殺してやる！　覚悟しておけ！」
そう言い残して、俺はそのまま、開け放しのドアを抜けて、部屋を出て行く。
うおおおお、と、親父の断末魔が、しばらく僕の背中に響いていた。泣きたくもなるだろう。最後の俺の言葉は、死刑宣告に等しいのだから。
「……」
リムジンの前では、さっきの女性と運転手が、手持ち無沙汰な様子で待っていた。
「……」
今の僕は、相当酷い顔をしているのだろうか。心配そうな面持ちで、女性は僕の姿を見ていた。
「――平気ですよ。怪我をするようなヘマはしませんから」
僕はそう言って、リムジンに乗り込んだ。
「運転手さん、次はここへお願いします」
僕は後部座席から、運転手に手書きのメモを渡した。それを確認すると、リムジンはゆっくりと発進した。

Panish

目的地に着くまで、一言も会話を交わさなかった。

地元の名士である、年老いた両親の下で、その女は隠遁生活を決め込んでいた。

８０を超え、年老いた両親――俺にとっての祖父母もいまだ健在だった。

俺は先程とは違い、ビジネスバッグだけを手に持ち、トモミと運転手に、先程と同じように待機させた。リムジンは祖父母の所有している駐車場に置くように指示した。

インターホンを鳴らして、出てきたのは、祖母だった。俺が高校に行ってからは、忙しくて会いに行く機会もなかったから、多分会うのは１０年以上振りだ。

そんな久し振りに再会する孫を追い返すわけにもいかないと、祖父母は俺をリビングにもてなしてくれた。リビングには、俺の母方の叔父や叔母もいた。

茶まで出してもらい、親族の仲立ちの下で、俺は女との対面の場に持ち込んだ。

女の顔は、青ざめていた。７年前、よほどマスコミにこっぴどい目に合わされたらしい。その恐怖が、僕との再会で、蘇ったのかもしれない。

この女は、贈賄と虐待の罪に問われたが、親族の庇い立てにより、「親族の観察が更正を促す」とされ、禁固１年で釈放された。

だが、この判決は軽すぎると世論は反発し、ブタ箱から出てきた直後から、表でこの女に石を投げ付けたりする者が続出した。

どうやら母親は、その時の恐怖によって、少し頭が錯乱しているようだ。既に４年前から精神科に通っていることは、予め調べがついていた。

「……」

沈黙を保ったまま、俺は目の前にいる女を睨みつけている。
おそらく雁首そろえて親族がいるということは、俺がこの女に何かしたら、警察を呼ぶつもりなのだろう。
「い、いやぁ、しかしケースケ。久し振りだよなぁ。大成功を収めてるじゃないか。背も伸びて、かっこよくなったし……」
叔父が場を和やかにしようと、俺に話しかけた。
「貴様は、俺が退学という窮地に陥っても、母として救いの手を差し伸べなかったのに、自身が窮地に立てば、親の下へ逃げ込むんだな」
だが俺は、そんな叔父の言葉など、はじめから相手にせず、目の前の女に言葉をぶつけた。
女は俯き、老いた祖父母は俺の言葉に含まれる紅蓮の怒りに、色を失った。
「親として、子に与えたものは何一つなく、自分は、親に取りすがるとは、調子のよろしいことだな。ええ?」
「いや、ケーちゃん。ちょっと待って」
老いた祖母が、僕に取りすがった。その目には、うっすらと涙の膜が見えた。
「ケーちゃんの気持ちはよくわかるけど、この子もマスコミに散々追われて、もう十分苦しんで、罪は償っているわ。お婆ちゃんの顔に免じて、ここは勘弁してやって……」
「そうはいきませんね。この女は、俺から大事なものを傷つけ、奪った」
僕は元々老人や子供に弱いが、今は聞く耳を持たない。
「この女を裁くこと、それが俺の償いなんですよ」
「ひ……」
俺の目に、祖母は怯えきった表情を見せる。
「しかし、甘く見られたものだな。俺の気持ちが分かる? 自らの金欲しさのために、親に外国に売り飛ばされそうになった子供の気持ちが、あなたに分かるのか? 生まれながらに訳も分からず、一

方的な暴力を受け続けてきた気持ちが？　母親に食事すら作ってもらえず、働いて食いつなぐしかなかった子供の気持ちが？　助けを求めようにも、あなた方は俺の家で起きていることは、自分には関係ないと、俺の家を遠ざけてきた。そんなあなた方が、俺の気持ちが分かるだと？」

「あ、あの、そ、それは……」

「この女が十分苦しんだとも言ったな。俺に言わせれば、この女に苦しみなんてない。あったかも知れないが、そんなもの、たかが知れている。現にこの女はここに逃げ込んでいるじゃないか。だがな、俺はこいつに殴られても蹴られても、食事を与えられなくても、どこにも逃げ場なんてなかった。逃げることさえ許されなかった。この女のように、何の罪を犯したわけでもないのにだ。

「う……」

「そもそもこの女の苦しみは、贖罪ですらないだろう。自分の罪に対する当然の報い――自業自得だ。そんな奴が、私は十分苦しんだと？　片腹痛いな」

「……」

俺の言葉の激しさに、もう言葉を返すこともできなくなったようだ。皆、沈黙する。

そして、僕は女の顔を覗き込む。

「予告しておいてやろう。これから貴様の人生に、いいことなんてひとつもないぜ。貴様がどんな些細なことでも、幸せを手にしようとしたら、俺はそれを全力でひとつ残らず刈り取ってやる。どこに逃げても無駄だ。地の果てまで追いかけてでも、貴様を見つけ出して、貴様から何もかも奪ってやる」

そう言ってから、俺はこの場にいる親族を一瞥する。

「貴様らも、口の利き方に注意しろよ。俺は無駄な殺生はしたくないが、この女に味方するなら、そいつは俺の敵だ。俺の敵に回るなら、一族郎党容赦はしない。叩き潰すからな」

まさか孫がこんな事を言うとは思わなかったのだろう。傍らにい

る老夫婦は、もう僕の怒りに飲まれていた。
「例えば――こんなこととかな」
そう言って、俺は自分の鞄から、数枚の書類を取り出し、リビングのテーブルに置いた。
「この家を含めて、この女と6親等以内にいる全ての人間の住んでいる家のある土地の権利書だ。もう既に、これらの土地の全てが俺の土地になるように、仮契約の段階まで済ませてある」
俺はそれを手に取り、ひらひらと親族に見せびらかすように動かした。
「俺がこれらの土地を買い占めたら、3日後には全ての家を取り壊すからな」
「な！」
叔母が悲鳴にも似た声を上げた。
「勿論こんなのは序の口だ。この女に味方するなら、その人間も、この女同様、干物になるまで全てを奪いつくす――仕事も、金も、食うものさえも。今の俺にはそれができるだけの力があるんだ。貴様ら一族、まとめて1年以内に消し飛ばすことも簡単なんだぜ」
「……」
「だが、俺も物の分別はあるつもりだ。この場でこの女をこの家から追い出し、貴様ら一族がこの女と、今後一切の連絡や、金品の譲渡を行わないというのなら、俺は貴様らに一切関知しない。明日も今まで通りの生活を保障してやる――さあ、どうする？」
「……」
まるで時間が凍りついたかのように、沈黙が流れた。
「――出て行ってくれ」
やがて祖父が、そう口を開いた。
「悪いがもう、私達ではお前を守りきれない。だから……」
祖父は涙を流していた。
「――俺達もだ。お前と兄妹の縁を切らせてもらう……」
自分の無力さを嘆くように、叔父も拳を握り締めて、女にそう言っ

た。
「――お利口さん。賢い判断だ」
俺はにこやかに笑って拍手をした。
「じゃあ、この権利書は、もう俺には必要ないですね」
そして俺は、その場でその権利書を二つに破って見せた。
「けど、もしこれで今後も裏でこの女とコンタクトを取っているのが確認されたら、それは俺への宣戦布告とみなしますよ。その時は、今度は告知無しで、俺はその人間に総攻撃を開始しますので、そのつもりで。他の親族にも伝えてください」
そう釘を刺してから、俺は女の方を向く。
「そういうわけだ。荷物をまとめて、この家から失せろ」
「……」
女は唇を震わせていたが、おもむろに立ち上がった。
明日からこの女は、住む場所も、味方も、金も、仕事も、何もない――発狂して、俺の胸倉を掴むかと思いきや、俺の椅子の右隣に立つと、膝を折り、崩れるように手をついて、深々と頭を下げた。
「申し訳ありませんでした……」
女の声は、涙声だった。
しかし……
その侘びの声が消えると同時に、俺は足蹴にするように、女の頭を何度も蹴りつけていた。
「馬鹿が……詫びひとつ入れて許せるほど、俺達は関係が上手くいってたか？」
そう言うと、俺は女の横腹に蹴りを入れた。女の体が少し痙攣した。
「まだ、他の人を巻き込むな、とか、言った方が気分がいいぜ。我が身可愛さに、心にもない台詞吐きやがって。メディアの前でだけ俺を自慢の息子とかほざいてた癖はまだ治らないようだな。ここでその腐った性格、叩き直してやろうか！」
俺はだんご虫のように這いつくばる母親に容赦なく蹴りを浴びせ

た。
「ケースケ、もうやめてくれ……」
祖父母が、俺の足元にしがみついて、闇魔に拝むように、僕に慈悲を求めた。
「さっき言いましたよ。この女をかばい立てするのであれば、あなた方も同じ目にあわせると」
「う……」
俺のその言葉を聞いて、祖父母は僕からぱっと離れた。
だが、そんな俺を祖父母と叔父夫婦は、恨めしそうな目で俺を見つめていた。
俺はため息をつく。
「――別にこっちも正しい事をしたとも思ってないから、いいですけどね。俺を恨むのであれば、それでもかまいませんよ。喧嘩を売りたければ、いつでも買いますから、あとはご自由に」
そう吐き捨てて、最後に這いつくばる女を見下ろす。
「ああ、そうそう。貴様の娘――俺の妹か。あいつとも、随分会っていないんだろう。娘がどうなったか、教えておいてやろう」
妹も、僕の名前を使って金品を騙し取っていたために、年少に入っていた。この家族は全員その場で引き離されたのだ。
「あいつは年少で手も、当然高校を退学になってたからな。現実逃避で麻薬に手を出しちまいやがって、今は再び塀の中だ。麻薬が抜けずに禁断症状で、いまだにムショで暴れてるらしいからな。出てもまた間違いなく麻薬に手を出すだろう。完全にラリっちまったようだな。あいつの人生も、貴様同様にもう終わっている」
「……」
女は答えない。
「興味がないか。他人を気遣う余裕がないのか――それとも、金欲しさに子供を海外に売り飛ばそうとした貴様だ。子供がどうなろうと、知ったことではないか？　まあ、俺も貴様が今何を考えているかなんてことに興味はないが――ここを出たら、貴様も麻薬をやっ

たらどうだ？　辛い現実を忘れられるかもしれないぞ。ムショに入れられて出てきたら、娘と一緒に麻薬中毒親子の親子漫才コンビでも、俺がプロデュースしてやろうか？」

また運転席で、女性と運転手の、僕を心配するような目。デジャブの感覚に襲われた。

僕はふっと鼻で息をつく。そしてそのまま車に乗り込んだ。

リムジンが発進する。

「ヨシザワさん」

隣にいる女性に声をかけた。

「すいませんが、今日のこの後の仕事は、全部キャンセルしておいてくれませんか」

「え？」

社長が目を丸くして、すぐに手帳に目をやる。

「今日はこの後、うちがメインスポンサーをつとめた映画監督の映画完成パーティーしか予定はありませんから、予定は断れますけど――どうしたんですか？　働き者の社長が」

「いや、失踪同然で姿を消したから、地元にちゃんとお別れをしようと思って。僕を川越で降ろしたら、二人とも会社に帰ってください。パーティーには、あいつを行かせればいい」

「えー……」

女性は不服そうな顔をする。

「仕事がいきなり休みになっても、つまんないですし――たまには社長と私、ご一緒してもいいでしょ？　私が社長の秘書になって１年も経つのに、まだ一緒にお酒も飲んだことないし……社長がたまには私のわがまま聞いてくれてもいいじゃないですかぁ」

「……」

痛い所を突かれて、僕は押し黙る。

そう、この娘と出会って一年。この娘には、僕は世話を焼いても

らってばかりだ。僕自身は彼女に何一つ応えていないというのに。
「あ、じゃあこうしましょう」
トモミが拳で掌を叩いた。昭和的な思い付きのリアクションだ。
「たまには頑張る秘書を労う慰安旅行ということで」
「――自分で言いますか？　そういうこと。しかも慰安旅行って、その金を僕に出せってことですか」
「へへへ」
「――いい性格してますね。まったく」
この豪放磊落な女性の名前は、ヨシザワ・トモミ。
本人も言っていたが、現在の僕のパートナー。去年から僕の秘書を務めている。
僕と同い年で、カトリック系の名門大学を卒業し、英語が堪能。歯に衣着せぬ物言いが玉に瑕だが、基本的に気配り上手で、仕事の飲み込みも早い。
僕の秘書採用試験は、往年のファンタジスタの雷名が手伝って、ちょっとしたアイドルオーディション並みに応募が集まった。その中でたった一人の秘書の座を勝ち取ったのだから、彼女の実力は、想像に難くないだろう。
といっても、僕自身はその採用には全く関わっていないんだけど。

Ｐａｎｉｓｈ（後書き）

第3部に入る際に、ちょっと真剣に悩んだのが、ケースケの一人称。これだけ過酷な運命にあったのに、いまだに一人称が「僕」なのは、少し甘ったれたような印象を作者は個人的に感じていまして。しかし、この作品で、一人称が「僕」なのは、ケースケしかいないわけで、この一人称も、ケースケの味のひとつだよなぁ、とも思ったり。それに、メインで「僕」を使っていると、「俺」を使った時の、ケースケの怒りの心情が分かりやすくなって、割とお手軽に感情表現できるので、「僕」を使った方がいいのかなぁ…と、ちょっと悩んでました。

まあとりあえず、今回はケースケの一人称は「僕」をメインにさせていただきます。

ちなみに、ケースケの一人称が「俺」になった時の残酷なケースケの状態を、作者は個人的には「俺様モード」と呼んでいます。かなり性格が豹変しますが、これは二重人格とかそういう類というよりは、怒りで感情が高ぶって、理性で抑えていたリミッターが外れた状態というか、ドラゴンボールのスーパーサイヤ人みたいな状態だと思ってください。性格も若干残酷で攻撃的になりますが、能力値が普段よりさらにパワーアップしている状態です。元々ケースケは激情家ですが、それを強い理性で押さえ込んでいるので。

超ドSな「俺様モード」のケースケと、普段のケースケ、どっちが人気あるのやら…

Consolation

僕とトモミは、リムジンで川越まで送ってもらうと、あとは自分達で歩くと言って下車し、運転手を見送った。

今の時間は午後の2時を回ったところ。9月の残暑も和らぎ、青空と、少しの雲が、少しくすんだコントラストを生み出して、雲ひとつない快晴よりも、古い街並みのよさを引き出している。

丁度昼食時を過ぎた頃で、トモミをさっきまで待たせていた分、彼女にお昼を食べさせていなかったので、僕はトモミと一緒に鰻屋にやってきた。海どころか湖もないくせに、川越は鰻が割と有名なのだ。勿論僕はこの街に住んでいた時、常に貧乏の極みだったので、こんなセレブなものを食べたことはなかったけれど。

「ふふふ……」

僕と向かい合って座るトモミは、鰻を食べながら、妙にニコニコしていた。

「――随分御機嫌ですね」

はしゃぐトモミを見て、僕はそう言った。――まあ、特上鰻重に肝吸いまでご丁寧に奢って、不機嫌な顔をされても困るけれど。

「だって、久し振りに平日に羽を伸ばせるんですもん。社長と一緒だと、なかなか休みが取れないし――」

「――でも、折角休みになったのに、僕と一緒にいたら、同じなんじゃ……」

僕がそう言うと、トモミはあからさまに渋い顔をした。

「あ、あの……それは……」

トモミは急にあたふたする。

「こんな辺鄙なところ、ヨシザワさんには退屈でしょう……両親共に金持ちで、海外旅行にも沢山行ったでしょうし」

トモミの父親は、メガバンクの重役、母親は都内でレストランを4店舗経営する女社長だ。小学校から大学までエスカレーター式の

お嬢様私立に16年通っているというのだから、彼女の小さい頃からの生活水準が窺える。

この川越だけじゃなく、埼玉県自体が、東京に住むだけの生活水準が維持できない人間が集まる場所だ。トモミの今までの人生とこの街は互いに全く関係ない場所にいるというのに。

「ど、どうせ家族と会って、気が滅入っているんでしょうから、一人でいるときっともっと気持ち沈みますよ。だ、だから、社長の気慰みに付き合ってあげようかと思って」

「……」

「そ、それに、私も暇が潰れますし。よいことずくめです」

トモミはぎこちなく微笑んでみせる。

「……」

そんな気慰みで、特上鰻重奢らされたのか。随分と高くついたな。

でも――確かにそうかも知れない。家族にあんなことをした後、パーティーなんかに出て、はしゃぐ気にも、特に親しくもない人と会いたい気分でもなかったけれど、何となく一人でいると、いらぬことを考えてしまいそうだ。

だったら、少しでも気心の知れている人が一緒にいるのは、少しは気が紛れるかもしれない。本当は、あいつがいてくれればよかったのだけれど……

「――そうですか。分かりましたよ。僕の勝手で女性を一人ここで放り出すのも何ですしね」

僕は呆れ半分にそう言った。

「――微妙に、分かってない……」

「え？」

急に沈みこんだ表情で呟いたトモミの言葉を、上手く聞き取れず、僕は訊き返す。

「何でもありませんっ」

トモミは僕からぷいと目を背ける。

「何怒ってるんですか。さっきまで機嫌よかったのに」

「怒ってません！」
「……」
いつもこんな調子だ。トモミは何だかよく分からないけれど、僕と一緒にいると、急に機嫌が悪くなる時がある。
仕事は優秀だし、気配りも出来る女性なのだけれど、そこが玉に瑕だ。
「社長、それに私のことは、名前で呼んでくださいって、何度も言ってるじゃないですか」
やれやれ――この娘といると、物思いに耽る暇もないな……

「……」
僕は市街地に戻り、僕の生家跡に来ていた。
僕の生まれ育った家は、居住区は完全に破壊されていたが、文化財に指定されているから、芋菓子屋だった店の方は完全な取り壊しは出来なかったようだ。店は中が空っぽになっていて、テナント募集中の札が貼られていた。
こうして7年もの間、この家は空き家のままらしい。それはそうだ。こんな観光客がごった返す一等地とは言え、買い手がつくわけがない。
商店街の人間は、この家を丸ごと壊したかっただろうと思う。7年前の僕が日本中にその名を轟かせ、商店街もその効果で、観光客を大幅に増やしただろうけれど、その矢先に、僕の家族のあの行動だ。それに僕も、暴力でそれに応えてしまった。この家を残しておくには、僕達一家の残した汚点は、あまりに重過ぎる。商店街にとっても、この家はもはや負の遺産でしかないのだ。
「社長が日本を出てからも、この街ではデモが続いて。日本中で、社長を保護しようって動きが起こって、警察と沢山の人が衝突して――毎日のようにニュースでやってましたよ」
店の前で立ち尽くす僕の隣で、トモミは言った。

「……」

あっけないものだと思う。

自分があれだけ、ここから出たいと思っていた家が、こんなにも簡単に壊されて。

だとしたら、そんなことで生まれた時から18年も苦しみ続けた僕は、一体何だったんだろうと思う。

今なら、あの時こうしていれば——そんなことがいくつも思い浮かぶ。

臥龍とか、天才とかいわれていた僕だけど、結局あの頃の僕は、何も知らない子供だったんだな、と、改めて思う。あの頃の僕にできないことが、結束した大衆の力ならできる。

きっと日本に残っていたら、僕もその大衆の言葉や行動に流されるしかなかったのだろうか。今となっては、よく分からないけれど……

「あれ？　ケーちゃん？」

ふと、僕達にかけられた声。

「やっぱり！」

僕は振り向くと、白髪の混じった頭の、小さな叔母さんが一人。見覚えのある顔——商店街でお世話になっていた、洋食屋の奥さんだ。

「ああ——ご無沙汰してます。おばさん」

僕は頭を下げる。

「ケーちゃんだって？」

「ケーちゃんが帰ってきたの？」

その声を聞きつけ、平日で観光客もまばらだった商店街に、とたんに人だかりが出来始めていく。人だかりを見て、それに興味を持った人間が次々集まってくる。

「す、すごいな……」

「本当。こんなことってあるんだ……」

隣にいるトモミも呆れ顔だ。

集まってきた人々は、ほとんどが見知った顔だ。商店街でコンビニのアルバイトなんかしていると、必然的に商店街に顔が利くようになるのだ。

「ケーちゃん、随分立派になって……まあ、ここ5年くらい、ケーちゃんがすごい活躍を見せていたのは知っていたけれど」

「どうも」

僕は頭を下げる。

「しかし――」

人だかりの中にいた老人が一人、神妙な面持ちでいう。

「すまなかったな。われわれは君に色々世話になりもしたのに、君の力に何もなってやれなくて」

「本当。よく考えたら、ああやってコンビニで毎日バイトしてるなんて、不自然よね。なのに……」

とたん商店街の面々も、神妙な顔をする。

「――いいですよ、それはもう。僕も口にしなかったんですし」

僕はその話題から離れようとする。

「ったく、ケーちゃんのあのバカ親ども、俺達のことも騙してやがった。ふざけやがって……あんな連中を信じていた自分に今でも腹が立つぜ！」

「本当ね。人当たりよかったから、まんまと騙されたわ。子供を海外に売り飛ばそうとするなんて、人間じゃないわよ、あの人達……」

「……」

商店街の人達にとって、僕の家族は皆を騙し続けてきた憎むべき存在だ。そんな人間をそれまで信じていただけに、皆の憤懣やるかたないのはよく分かる。

「しかしケーちゃん、君は我々にも、本当によくしてくれて……」

老人が言った。

「去年、帰国した君が、この商店街に1億円も寄付してくれて……」

「え？」

隣にいたトモミが首を傾げる。

「――いいですよ。僕達家族のために、この商店街も一時は客が離れて、皆さんも辛い思いをしたでしょうから。勿論、その当時のあおりで店を閉めてしまった人もいるでしょうから、その穴埋めにはならなかったかもしれませんけど……」

そう、この人達も7年前、僕の一家によってデモは起きて、商店街の治安は悪くなるし、メディアによってこの商店街が何度も取り上げられる度に、僕達一家の悪名によって、観光客がしばらく寄り付かなくなる事態に陥り、大きく損を被った人達なのだ。

「いや、でもケーちゃんはもう、立派な正義の味方じゃよ」

老人が言った。

「今のケーちゃんの仕事で、沢山の人が救われて、豊かになっている――あのことで、たった一人で海外に出て、ゼロから今の地位を築いたケーちゃんを、この街のみんなが応援している」

「そうだぜ、ケーちゃん！　ケーちゃんはあの家族とは違う。この街の誇りだ！」

「みんな、ケーちゃんを応援してるからね。頑張って！」

「……」

「ちょっと、見直しましたよ」
商店街を出て、静かな住宅地を歩きながら、トモミは僕に言った。
「人気あるんですね。社長って。地元の人に」
「どうですかね」
「でも、私知りませんでしたよ。社長が個人で商店街に寄付していたなんて」
トモミとは約2年の付き合いだ。僕が商店街に寄付をしたのは去年だから、トモミと仕事をしていた時期の出来事だった。
「私はともかく、メディアにもっと取り上げてもらえばよかったのに。社長が故郷に寄付をしたとなれば、社長のこと、もっと色んな人に知ってもらえるし、宣伝にもなるチャンスだったのに」
「――あの商店街のことは、僕個人の問題ですから。それを自分の売名のために都合よく利用するのは、主義に反します」
「……」
「自分の間違いを、都合のいい解釈で歪めるのは、僕には出来ませんよ」
「でも――自分の姓で苦しんだ人のことを、ちゃんと覚えていて、救おうとした」
トモミは言った。
「優しいんですね。社長って」
「……」
沈黙。僕のローファーと、シオリのヒールが鳴らす音が、二人の間を包む。
「商店街の人達も言ってたじゃないですか。社長のこと『正義の味方』だって。分かる人には分かってもらえてるんですよ。社長のこと」
「……」

「――本当、これで鈍感じゃなければもっといいのに……」
「え？」
「何でもないです」
――そんなやり取りをしながら、僕が次に向かったのは、埼玉高校だった。
平日だが、もう3時を過ぎている。この学校では部活動に入っていない生徒が過半数なので、下校する生徒とさっきから何度もすれ違った。
「へえ、制服じゃなくて、私服登校なんですか。いいなぁ」
「よくないですよ。服をあまり持ってない奴は、洗濯しないで何日も同じ服とかよく来てましたよ」
トモミと話しながら、僕が最初に向かったのは、サッカー部の部室だ。
部室には、僕が所属していた時と同じ南京錠がかかっている。高校時代、ほぼ毎日朝練をしていたから、この上を何度も開けていた。まだ番号を覚えている。
南京錠を開ける、薄い扉を開いた。
「何これー、すごい汚い……」
トモミはその部室の有様を見て、目を覆った。そこには、橋の下のボクシングジムか、アヘン窟もかくやと思わせるほどの腐海が広がっていたからだ。潰れたボールや割れたサポーター、その他諸々の道具が埃をかぶって山のように積まれ、暗い部屋は裸電球ひとつが照らすのみ。太陽の光が差さないから、中はじめっとして、汗臭い。
「懐かしいな。全然変わってない」
「ちょ、ちょっと社長、何見てるんですか！」
トモミは僕の手に取ったものを見て、声を上げた。
「ん？　ああ……」
僕の持っていたもの――それは、いわゆるひとつの、エッチな本というやつだった。

「この部室にも、こういう本の隠し場所がありましてね。後輩もここに隠しているのかと思って。どうやら埼玉高校の伝統は守られているみたいですね」
「何の伝統ですか！」
トモミはご立腹だ。
「――別に、お互い２５なんですし、今更こんな本で……」
「そうじゃなくって、女の前で――デリカシーの問題です！」
「……」
――でも、そうかもしれないな。この７年で僕も、随分と浮世離れが酷くなったし、確かに女性の前で配慮不足だったのかもしれない。僕は本をもとある場所に戻す。
そんなやり取りをかわし、一通り部室を物色した後、僕はグラウンドに回ってみた。
最近では、良くてベスト８止まりの埼玉高校は、僕達がいた頃と比べては、鈴なりになるファンもなく、活気は寒げだったが、あの時を基準にするのは、後輩に気の毒だ。
変わらずベンチに座る、肉体労働者のように日焼けをした男を見ると、邂逅の念に誘われた。
グラウンドの入り口である、車輪付の鉄柵を引いた。頬袋のある、ぎょろりとした目の男が、サイドラインに置いてあるベンチに座っている。すぐにその音に気が付いたらしく、何気なくこちらを向くと、驚いたような表情をして、がばと立ち上がった。
「おお！　サクライじゃないか！」
僕は側へ行き、イイジマに握手の手を差し伸べると、イイジマは痛いほどに、僕の手を握った。
「監督、老けましたね」
イイジマの髪には、白髪がちらほらうかがえた。
「いやぁ、７年ぶりだな……隣のとんでもない美人は彼女か？」
「いや、彼女は……」
僕は口ごもる。

しかし、確かにトモミは少し癇癪持ちで、おせっかいだけれど、黙っていれば美人だよな。イイジマの反応ももっともだ。

可愛いというよりは、美人。顔の全てのパーツに、切れがあって、だけど仕草が子供っぽい時が会って、そのギャップがなんともいえない彼女の魅力でもある。

イイジマはやっと僕の手を離すと、僕とトモミにベンチを一つ譲ってくれて、僕らの代と比べると、稚拙な後輩の実戦練習を見物しながら、世間話などを繰り返した。

後輩達は練習中も、ベンチにいる僕の方を窺っている。

「しかし、お前、勿体ないよな」

イイジマが言った。

「お前、もうサッカーやらないのか？」

「――残念ですが、する暇がありませんよ」

僕は言った。

「しかし、お前、３年前にイギリスで、すげえことをやってのけたもんな。ＪＦＡ（日本サッカー協会）もお前に何度もＡ代表のオファーを出したけれど、お前はずっと断り続けたって話だし」

「……」

「それだけじゃない。お前、あの頃も、日本に帰ってからも、全然メディア露出をしないんだな。日本のメディアがお前を追っても、何もお前は答えないから、随分日本のお前のファンはやきもきしてたぞ」

「……」

それは、常日頃からトモミに言われることでもある。たまには世間に自分の考えを知らせるツールを持った方がいい、と。ブログとか、ツイッターとか、そういうものを利用した方が、仕事もやりやすくなるから、と。

確かにその通りだ。僕の仕事上、そうしたほうが格段に仕事はやりやすくなるだろうことも、分かっている。

――けど、僕はそれをずっと前から拒否してきた。一度家族への

復讐のために生きると誓ってから、それを成し遂げるまで、人前で自分のことをぺらぺら話すつもりはなかった。それをしてしまえば、わざわざ僕が外国に出てまで、あの家族を裁こうとした意味がない。自分の考え自体が間違っていることなんて、とっくに承知している。そんなものをメディアに流そうという気には、どうしてもなれなかったのだ。

「――まあいい。いずれにせよ、お前はあのどん底から、たった一人、それも僅か7年でとんでもないところまで上り詰めたんだ。人生をやり直せたんだ。高校で出来なかった青春だって、きっとやり直せる。お前の人生もきっと、これからなんだ。それを忘れるなよ」

イイジマが言った。

「……」

随分丸くなったな、イイジマも。こんなことを言うなんて。

でも――青春か。

7年前、このグラウンドで友と走り回っていた頃は、確かにそんな時代だったのかもしれない。心からサッカーを好きだと思えていた。友と同じピッチに立つことが楽しみであり、誇りだった。

今は……

僕は立ち上がって、着ていた上着を脱いだ。怪訝そうな顔をしていたトモミに、黙って上着を手渡すと、僕はローファーのまま、ピッチ内に駆け込んだ。

下手なボール回しをしている後輩から、僕はボールをインターセプトした。後輩達は、僕の突然の行動に、一瞬足が止まったが、イイジマが指示を出した。

「そいつからボールを奪ってみろ！　何人でかかってもかまわん！」

その指示に、後輩は寄ってたかってかかってきたが、誰も僕を止めることが出来なかった。前を塞ぐディフェンダーを、ルーレットでかわし、最後のゴールキーパーを、エラシコで抜き去り、そのまま無人のゴールにボールを流し込んだ。

「はあ……はあ……」

僕は、もやもやした時、いつも動いてみる。それで気が晴れることは、滅多にないのだけれど、いつもそうするのだ。

今回も走ってみたけれど、当然気持ちは晴れなかった。

僕も変わってしまった。友と、ここでサッカーをしていた時――少し騒がしかったけれど、その時は、心穏やかで、夢中になって、風のようにここを駆けていたのに。

今は、同じことをしても、全然心に響かない。喪失感だけが残った。

僕はこの7年、僕の幸せを奪った奴への復讐と、大切な人を傷つけた自分の贖罪のために生きてきた。

イイジマは、僕の今が青春だと言ったけれど、そんなものはもう、何もない。

この先、何を目的に生きるんだ？　これからの僕は……

既に時刻は5時を回り、埼玉高校を出た僕達は、夕焼け空の中、市街地に向けて歩いていた。

あれから1時間、僕は後輩達を相手に、ひたすら走り続けた。後輩達は、異次元の動きをする僕に感化され、とても喜んでいたが、僕には疲労だけが残った。

「いい監督さんでしたね」

歩きながら、トモミは言った。

「――昔はあんなに丸くなかったんですよ。僕もあんなに丸くなっているとは思わなくて。ちょっと意外でした」

「それ、社長のせいかもしれませんよ」

「え？」

「さっき社長がサッカーしてる間、私、監督さんと話したんです。社長、あの監督さんに高校時代、ディフェンダー転向を言い渡されたらしいですね」

「あぁ……」

「監督さん、言ってましたよ。俺はサクライの才能を見抜けなかった。サクライがメディアの前で、その話をしていたら、俺は高校サッカー史上最悪の監督としてその名を残すところだった。俺の起用に不満もあっただろうに、あいつは有名になってからも、俺を責めるようなことは一言半句言わなかった。だから俺はいまだに高校サッカーの監督をすることができてる、って。そのことがあるから、生徒に対して威張り散らすのをやめたんじゃないんですか？」

「……」

僕はため息をつく。

「しかし社長って、高校時代、随分問題児だったみたいですね。授業のサボりは当たり前、先生達に従わず、先輩との乱闘で停学経験もあるとか」

「――余計なことを」

「でも、それはみんな、家族から酷い仕打ちを受けてきて、生きるために精一杯だったからだったんだって、もうどの先生も知ってるって。あの監督さん、あの頃から社長は俺達にそんなこと、一言も話さなかったし、一度だって俺達に助けを求めず、たった一人でそれを乗り越えちまった。はじめから俺達なんか相手にしてなかった。俺達はあいつに一度も勝てないまま、勝ち逃げされたって。可愛くない奴だって、言ってましたよ」

トモミが、ふふふ、と笑った。

「その気持ち、分かるなぁ。社長は常に勝ち逃げですもんね。一人で何でもやっちゃって、他人を頼ったり、甘えたりは全然してくれないし……」

「……」

甘える、か……

ふと、僕はその時、足を止める。

そこは、僕の住んでいた商店街の隣街――

彼女の住んでいた街だ。

「……」

僕は勝手に、ここに足が向いていたというのか？
彼女の家のある路地も見えている。
僕は一瞬躊躇する。
でも、この7年間、彼女とその家族が息災であるかはずっと気がかりだった。だから、少し遠くから様子を窺うくらいは……
そう自分を納得させてから、僕は彼女の家のある路地へと入った――
「あ、あれ？」
そこにあるものは、駐車場の奥に立った、可愛らしいログハウスではなかった。家はなくなり、砂利の敷き詰められていた駐車場は、アスファルトが敷き詰められ、そこには自販機などが置かれ、どこにでもある、無機質なコインパーキングに変わっていた。
僕はそれを見て、近所にある喫茶店に向かって、彼女の家のことを訊いてみた。
「もう5年位前から、あそこは駐車場だよ。あそこに住んでた人は、ずっと前に引っ越したよ」
「……」
僕は、もう一度その駐車場に戻り、辺りを見回してみた。
しばらくそうして、思った。
今日の精神状態では、再会しない方がよかったのかもしれない。
そんな資格はない、という、神の啓示なのかもしれない。
家族への復讐が完了すれば、もうここに長居する用はないはずなのに、仕事をサボってまで、僕が故郷へ戻って、過去を振り返り、ここに足を向けていたのは、きっと、無意識のうちに、彼女に会いたい、と思ったのだろう。ろくでもないことをやったばかりの僕の『居場所』になって欲しいと――そう願ったからだろう。
だけど、会えたとしても、7年ぶりの再会の上、最悪のサヨナラを一方的に告げた僕に、そんなこと許されるはずがなかった。
自分の身勝手さに、吐き気がした。

Freeze

呆然としたまま、僕はトモミを連れて、地元の旅館へとやってきた。僕の実家のあった場所から、徒歩5分の場所で、昔からある旅館だ。ここに住んでいる時は、まさか自分がここに泊まるなんて、考えたこともなかった。

「社長と相部屋なんて、ドキドキします……」

トモミは、この容貌でここまで生きてきたにも関わらず、まだ処女のようで、軽く頬を赤らめていた。

彼女はすごく綺麗だから、今までそれなりの恋愛経験があって、それなりに男性経験もあるだろう。彼女は、僕の女性経験の少なさを聞いたら、笑うだろうか。呆れるだろうか。

部屋に入る。二人とも特に荷物がない。旅館らしく、畳の部屋に木製のテーブル、湯飲みにティーパック、セロハンにひとつずつ包まれた饅頭が置かれている。

「ここは料理が有名な旅館だけど……地元の人が集まる居酒屋とかに行くのもいいかな」

時間はまだ5時過ぎ。まだ夕食には早い。

「せっかくだし、温泉にでも入ってきたらどうです？」

僕はトモミに言った。

「あ、はい。社長は？」

「僕は、ここで少し休んでいます」

「――一緒に行きませんか？　混浴じゃないんだし、入り口まで」

「――すいません。ちょっと今だけは、一人でいたいんです」

冷たい言葉を投げかけたが、今日の僕が、どんなことをしてきたのかを、彼女はさっきから見ていたので、すぐに理由を察したようだ。無理強いすることはなく、そのまま黙って、丁寧なお辞儀をして、部屋を出て行った。

「……」

沈黙が流れると、予想通り、僕の脳裏に、今日の出来事が、次々とフラッシュバックして来た。僕は今はもう何もかもどうでもよくなって、部屋の隅に寄りかかって座った。

何をやっているんだ僕は。トモミを一緒に旅館に誘うなんて。

彼女がいないからって、代わりにトモミに慰めてもらおうってつもりか。僕の気慰みに付き合ってくれるといった彼女の優しさに、都合のいい時だけすがろうっていうのか。

――そんなのはもう、高校生までにでおしまいだろう。大体、人に頼ったり甘えたりするのが苦手な僕が、そういうやり方で自己の安定を得ようとすると、ろくなことにならないことくらい、何度も経験しているじゃないか。トモミだって、そんなことになるのを望んではいないだろう。

「――トモミさん。ごめん」

僕はトモミに置手紙を一つ残して、一人旅館を出た。フロントにお金をちゃんと払ってあるから、トモミが困ることはないはずだ。

旅館を出てすぐに、僕は駅に向かう。

この時間は帰宅ラッシュで、電車は混み合っていた。

だけど、僕は追加料金を払って特急列車に乗って、満員電車を回避できる。

日本の特急列車に乗るのは初めてだ。確かに普通の電車よりも、ずっと快適だ。

だけど……

僕はお金を持っていても、別にそれで楽をしたいわけじゃない。美味いものを食べたいという思いもない。１００万ドルの夜景の見える部屋に住みたいとも思わないし、最高の酒を片手に、女を転がしていたいわけでもない。

７年間の目的を達成し、僕は残されたもので何をしたいのか。

快適な特急列車の、窓の外に流れる景色を眺めながら、僕はそれを考えていた。

都内の中心地にある３ＬＤＫのアパート、家賃は月２５０万円――ここが僕の家だ。

ひとつが寝室、ひとつが客間、もうひとつは僕の仕事部屋だ。仕事部屋には、特殊な工具がごちゃごちゃしている。

家に帰った頃には、もう外は真っ暗で、８時を回っていた。客間の扉を開けると、犬のリュートが座って待っていた。

僕が浮浪者だった頃、リュートだけはいつも側にいてくれた。二人で寝袋の上に毛布を被せ、冬の寒さを寄り添ってしのぎ、時には何日も食べさせてやることが出来ず、腐りかけた残飯まがいのものを食べさせることしかできない時も、こいつは僕を見限ることなく、いつも僕を支えてくれた。

こいつがいたから、僕はこいつに報いるため、何度も考えた自殺の妄想を振り捨てられた。こいつがいたから、僕は生命を燃やして頑張ることができた。

リュートは紛れもない、僕の相棒であり、友達であり、唯一の家族だった。僕が今、絶対に自らの力で守らなくてはいけない、唯一のものだった。

リュートは今年、１０歳になろうとしていた。もうかなりの老齢で、僕達は近いうちに、別れが訪れるだろう。

だから――こいつには、僕が死ぬまで、最高にいい思いをさせてやりたかった。こうしていい家に住み、美味いものを食べさせ、少しでも心配をかけずに、長生きをしてもらいたかった。それが出来るようになった自分を見せて、安心させたかった。

もしこいつが死んだら、僕はこんな家に住む理由がない。その時は、学生が住むような小さなアパートに引っ越そうかと考えている。

だけど、こいつが生きているうちは……

普段は会社にも連れて行く僕の相棒だったが、今日は家に置いてきた。きっと、僕個人の、醜い復讐の完結の瞬間を、こいつに見せ

たくなかったのだろう。
「ごめんな、今日は置いてっちゃって。ご飯食べよう」
僕はリュートに、餌を与える。海外から輸入している、栄養バランスの取れた缶詰タイプのドッグフードだった。
僕はここに帰る前にコンビニで買ったコンビニ弁当を、電子レンジにかける。
その間に、僕は客間の木製テーブルの上に置かれている花瓶を手に取る。
花瓶には、一輪の青紫色の花――竜胆の花が生けられている。
僕は流しで水を取り替え、テーブルに再び花瓶を置いた。
そこまですると、僕はどっと疲れて、客間の壁に寄りかかり、そのままズルズルと崩れるように座り込んだ。
電子レンジに入っているコンビニ弁当を出してくれと、催促の音が鳴っているけれど、なんだかもう、口をつける気にはならなかった。
代わりに、コンビニで弁当と一緒に買ってきた缶ビールを手にとって、一口あおった。
この部屋の客間の奥は、ガラス張りの大窓になっていて、そこからは東京の摩天楼が一望できる。
部屋の電気をつけることもなく、窓から差し込むその明かりだけで、僕は一人、ビールを飲んだ。部屋の中には、張り詰めたような静寂が包み込んでいる。
「……」
生まれた頃から、ずっと理不尽の只中にいた。家族がみんな無法者で、やりたい放題の人間達で、意味も分からず僕はそんな奴等に蹂躙され続けてきた。
だから――心のどこかで僕はずっと、正しくありたい、と思っていた。家族という無法を認めなかった分、自分は正しい存在――正義を成す存在でありたいと思った。『正義』という概念に、僕はずっと憧れていたんだ。

その無法者である人間が、僕の大切な人達を傷つけた。誕生日ケーキのろうそくを、ひとつひとつ灯していくような、ちっぽけだけど、暖かな幸せも、秋になったら、二人で竜胆の花を見に行こうといった約束も、そいつらにケーキごと踏み潰された。

あいつらは、やってはいけないことをした。だから、僕があいつを倒さなければと思った。そのためだけに7年間、生き続けてきた。この7年、そのための自己研鑽にのみ生きてきた。

だが――頭のどこかでは分かっていた。

僕は、あの家族を全力で潰すには、強大すぎるくらいの力を既に手に入れていて。

もうあんな連中、僕が人生の全てを賭けて潰す価値もないこと。

そして――今日、7年ぶりに両親に会って、改めて分かった。

あいつらは、もうとっくに死んでいた。もう全てを奪われ、淘汰され、明日への希望もなく、ただ虫けらのように生きているだけ。

そんな連中に、僕は更に痛みを与えようとした。強大すぎる力を以って。

僕のしたことは、弱いものいじめか、それとも死体弄りか――7年もかけてつけた力で、やっていることは、そんなことでしかない。

そうなることは、薄々僕自身、気づいていた。僕の今の力で個人に喧嘩を売ったら、もうそれは、単なる虐殺にしかならないと。既に死んでいるだろう相手なら、尚更だ。

でも、だからといって、復讐をやめることもできなかった。

復讐をやめたら、僕は何のために、日本を出たのか――無意味だとしても、家族に大切なものを生まれながらに奪われ続けてきたことをなかったことにできるのか。何より、僕の大切なものを傷つけられた怒りを、どうやって処理すればいいのか。

それがなくなってしまえば、僕が生きる意味を見失ってしまう――だから、復讐に生き続けた。

僕は自分のために、家族を傷つけた。たいした意味もなく。

それが『正義』か？　僕のしたことは、本当に正しかったのか？

「……」

7年前、あいつらのことを許せないと思った。あいつらを生かしておけないと思った。あいつらはいつだって僕の邪魔をする。僕の大切なものを傷つけてでも、僕を従わせようとする。だから、あいつらを駆除するのが一番いいと思った。

でも――何もよくならなかった。あいつらを殺したところで、僕の人生は明日も続く……

その明日を、僕はどうやって生きていけばいい？　明日も変わらず、僕の大切なものはもうないし、この7年、復讐のために生きた僕は、人生を清々しく、楽しく生きるなんて気持ちも、とうに忘れてしまった。

くぅん、と、鼻を鳴らして、リュートが僕の元へ擦り寄ってくる。どうやら僕が落ち込んでいるのを見抜いたようだ。

僕はリュートの頭を撫でた。そして、気分転換に、部屋に置いてあるラジオをつけてみた。

リスナーがファックスで曲をリクエストするコーナーをやっていて、僕が日本にいた頃のＪ－ＰＯＰが流れている。失恋した時に聴いた思い出の曲らしい。

「……」

僕はビールを再びあおると、自分の背広の内ポケットから、一枚の写真を取り出した。

7年前から肌身離さず持っていて、既に風雨にやられてくしゃくしゃで、色も少しあせていたけれど、そこには7年前の僕達が映っている。サッカーの全国大会決勝で負けて、準優勝に終わったものの、そこには満面の笑みを浮かべる僕と親友、そして愛する人の姿があった。

「……」

親友は、僕を信じると言ってくれた。

愛する人も、僕を守ってくれた。

こいつらがいなかったら、僕の人生も、もう終わっていた。こい

つらが僕を信じてくれたからこそ、今の僕はこうして今も生きている。

だから――僕はせめて、あいつらが僕を信じてくれたことに報いることのできる人間になりたかった。それは復讐と同じくらい――いや、それよりももっと僕にとって、大事なことだった。

そのために、僕は常に正しくありたかった。弱きを助け、悪しきを挫く――あいつらが、僕を助けてよかったと思えるような人間になりたかった。そう思えるようなことを成したかった。

そして、今日、僕の故郷の人間は、僕を『正義の味方』と言ってくれた。

だが――今の僕は、あいつらが信じるに足る人間になれているだろうか。

あいつらが、僕を誇りに思うような人間に、なれているだろうか……

「リュート。お前はどうして僕にずっとついてきたんだ？」

誰に言うでもなく、僕はそう呟いた。

「お前も、僕を信じてくれたのか？　今のお前には、僕はどう映るんだろう」

金もいらない。力もいらない。だがせめて、大切な人の思いに報いられる人間になりたい……

それなのに、今の僕はこの様だ。みんなもう、それぞれの場所で頑張っているっていうのに、僕一人だけ、7年前から一歩も前に進んじゃいない。

できることは、こうして酒をあおって、一気に眠ってしまうことだけ――

こうでもしないと、いつも夢を見るんだ。7年前、自分の世界で一番愛した女(ひと)を殴ってしまった時の夢を……

「――情けねえ」

ビールを飲みながら、俺の体は震えた。

相変わらず、下戸に近いくらい弱いのに、酒に頼って、嫌なこと

を忘れようとしている自分に。女に都合よく、自分を慰めてもらおうと、一瞬でも考えてしまった自分に、酷く腹が立った。

リュートはそんな俺を暖めるように、俺に寄り添った。

でも、いいんだ。もう。

少なくとも、仇は取った。もう、あいつらを理不尽に傷つける存在は、もういない。

あとは、あいつらが少しでも幸せになってくれればいい。

そのためなら、俺はこの手を血に染めても、一生この深い氷のような冷たい世界にいても構わない。

自分が正しいのか、自分がこの先、どう生きればいいのか、分からないけれど……

ただ、まだ志は捨てない。

あいつらに、胸を張れるような人間になれるその日まで。

それだけを、今は信じるしかないんだ。

俺の人生は、まだまだ続く。

7年前、愛する人がいた時の俺にも、今の俺にも、平等に明日はやってくる。

今日がどんなに最悪の日でも、最高の日でも、それだけは平等だから。

いつか、そんな明日――僕の未来に花が咲く時を、今は信じて、明日も生きていく……

Ｆｒｅｅｚｅ（後書き）

この回で、ケースケの部屋に、ラジオで流れていた曲は、奥華子さんの「やさしい花」という曲です。歌詞の無断転載が出来ないので、載せられませんが。

この曲の歌詞は、ケースケの今の気持ちをそのまま現しているような曲で、第３部のケースケのテーマソングともいえると思います。よろしければ、ぜひ聴いてみて下さい。

Breakfast

「起きてくださーい！」
女性の感高い声と共に、かかっていた布団を引っぺがされる。
「あ！　またワイシャツで寝てる！　型崩れしちゃいますよ」
「う……」
僕は寝ぼけた頭を抱えながら、上半身だけ体を起こした。
僕のベッドの前には、スーツの上からエプロンをつけた、秘書のヨシザワ・トモミがいた。
「――また来たんですか」
「そのワイシャツ、脱いでください。洗濯しますから」
「――いいですよ、一人暮らし長いですし、自分で出来ますから」
「ダメです。そんなこと言って、社長、いつだって洗濯物溜めちゃうんだから」
「……」
「そんな格好で寝てるってことは、お風呂入ってないんでしょう？　シャワー浴びて、顔洗って、髭も剃ってください」
「……」
僕はだらだらと起き上がる。時間は早朝の6時を少し過ぎたところ。
僕は数日前、トモミがクリーニングに出してくれたスーツ一式を持って、バスルームへ向かい、シャワーを浴び、髪を乾かしてから、髭を剃った。
スーツを身に纏って、リビングに戻ると、トモミはダイソンの掃除機で、リビングの掃除に取り掛かっていた。
「あ、ネクタイ曲がってますよ」
トモミは掃除機の電源を切って、僕の許へと寄ってくる。
「いいですよ、これくらい、自分で出来ますから」
僕はトモミから目を背けるようにして、左手でネクタイの結び目

を軽く直した。

「あの――トモミさん。僕はあなたを、確かに秘書として雇っていますけど、お手伝いさんとして雇っているわけじゃないんですよ？」

天地神明に誓ってもいいが、僕とトモミはそういう関係ではない。恋人というわけじゃないし、ましてこの部屋で同棲しているわけでもない。

だが、何故かトモミは僕の世話を焼きたがるのだ。こうしてたまに、僕の家に朝やってきて、僕の身の回りの世話を色々と焼いてくれる。

俗な言い方をすると、押しかけ女房というやつなのだろうか……僕だって、海外にいた頃からもうずっと一人暮らし――正確にはリュートもいたけれど、とにかく今までだって一人で何とかやってきた。別に一人でも問題はないと思うし、何より、僕は母親にだって世話を焼かれた記憶がない。こうして女性、しかも同い年の女性に世話を焼かれるのは、非常に気恥ずかしいのだ。

「――別に社長のためにやってるんじゃないですからね」

トモミはぷいと眼を背けた。

「見るに見かねてですよ。社長の生活があまりにだらしないから。冷蔵庫の中身は、水と、賞味期限がとっくに切れた調味料、それに少しのお酒だけ。キッチンのガスコンロまで埃被ってて、自炊の様子は皆無だし、言わないと食事だってろくに取らないし、たまに食べるものといえばコンビニ弁当か、牛丼か、カップラーメンばかり。洗濯物はたまり放題で、会社に皺の寄ったスーツで平気で来るし――こんないいマンションが泣いてますよ」

「……」

「それに、最近社長、顔色悪いし、変な咳もたまにしてるし……」

「……」

「私、社長の秘書ですから、そんな社長を放っておいて、体壊したりしたら、失業なんですから。私だけじゃなく、うちの会社、みんなが困るんですから。だから先手を打ってるんですよ。私の秘書と

しての仕事に、社長の管理をするって要綱も入ってますしね」
「……」
――その要綱を入れたのは、きっとあいつか。余計なことを……
僕は、自分の生活は、自分で何とかなっていると思っているのだけれど、トモミから見ると僕の生活は、だらしない独身男性の典型らしい。
「世話を焼かれたくなかったら、自己管理をもうちょっと頑張ってください」
「いや、でもそういうのって、僕なんかよりも、彼氏とかにすべきなんじゃ」
僕がそう言うと、トモミはきっと僕を睨んだ。
「もう！　社長のバカ！　何でそういうこと言うかなぁ！」
「……」
彼女には、いつも僕は「バカ」と言われて怒られている。そう言われた時の理由の大多数が、僕、そんなひどいことしたかな、という疑念が拭えないのだけれど。
――何なんだ、この娘。でも、２５歳で彼氏とか、そういう話って、女の人にはデリケートな話題なのかな。周りも結婚し始める年頃だろうし。
僕は起きた時から、自分についてきているリュートの方を見る。
「……」
でも、もしこの家に不審な人物が入ってきたら、リュートは真っ先に吼えるはずだ。リュートは賢いし、どんな人間にも、それなりに愛想よく振舞う犬だけれど、その半面で本当に誇り高く、滅多なことで人に心底懐きはしない。外国暮らしで、野宿することもあったから、リュートは人一倍、僕への危害に敏感で、すぐに知らせてくれるし、時には噛み付きにかかったりもする。
そんなリュートが、彼女に対して、吼えずに家に上げるってことは、リュートがトモミに親愛の情を少し見せている証拠だ。
ちょっと意外だった。こんなにリュートが懐いた人間を見るのは

7年振りだったから。
正直僕は、トモミの行動に辟易する時もあるものの、リュートがトモミを警戒していないのを見て、何となくトモミに好感を持っているのも事実だった。
実際僕は昨日、トモミを一人旅館に置いて、この部屋に逃げ帰ってしまったのだ。なのにそのことについては、まだ文句ひとつ言っていない。それどころか、僕がそんな行動を取った理由が、昨日の家族との出来事だったことも察して、こうして朝から僕の様子を見に来てくれたというわけだ。
しっかりしていないところは叱るけれど、理由を察しているところは、ちゃんとほっといてくれる。口では意地っ張りなことを言っているけれど、本当は優しくて、切符がよくて、とてもいい娘なのだろうと、僕はトモミをそう評価していた。
「全く、こんなダメな人のために働く私って、薄幸の少女って感じじゃありません？」
トモミは僕の方を振り向いて、僕を皮肉るように言った。
「――いや、思わないですね」
僕はかぶりを振る。
「薄幸の少女というよりは、薄幸の美少女って感じかな」
「え……」
僕がそう言うと、今まで強気に出ていたトモミが、とたん動揺したように気色ばむ仕草を見せた。
僕は立ち尽くすトモミを通り過ぎて、リビングの大窓に近付き、9月の早い日の出に照らされる、まだ静かな東京の摩天楼を見下ろした。
「正直、トモミさんみたいな綺麗な人が、色々世話を焼いてくれたりするのは、僕だって素直に嬉しいんですよ。お母さんがレストランのオーナーをやっているからか、トモミさんのご飯は美味しいし――」
確かに起きぬけにいきなり家にいるのはちょっとびっくりするけ

れども、それ以外のトモミの行動には、本当に感謝している。
自分もかなりのお嬢様育ちだというのに、家事全般をそつなくこなすどころか、料理は美味しいし、いわゆるお嬢様にありがちな、世間知らずで高慢な面が全然なく、むしろ庶民的で、慎ましやかでさえある。憎まれ口や皮肉もこぼすが、それも少し茶目っ気があって、完璧なお堅い女よりも魅力がある。今ではその憎まれ口も、むしろ感じがいいとさえ思ってしまう。
たまに彼女を見ていると、どうしようもない僕にナントカって歌のイントロが、脳裏に流れてくるような感覚に陥ることがある。彼女がいなければ、僕はもっと退廃的な生活をしていたに違いないのだから。
でも、今の僕は……
「……」
トモミがさっきまでよく喋っていたのに、急に喋らなくなったのが気になって、僕は視線を窓からトモミの方へ向けてみる。
「――トモミさん？」
「は、はいっ！　何でしょう？」
急にびっくりしたように、返事をするトモミ。返事の仕方も、なんだかぎこちない片言のようになった。
「――どうしたんですか？　急に大人しくなって」
「な、何でもないんです。えへへ……」
トモミは気色ばみながら、自分の髪に手をやった。
「……」
「あ、そ、そうだ。朝ごはん、簡単に作りますから、ちょっと待っててください」
トモミは何だかその空気に焦れて、僕から視線をはずすように、踵を返しかけた。
「いいですよ。今日は外で食べましょう。僕が奢りますから」
僕はトモミに声をかける。
「え？」

「トモミさんのご飯は美味しいけど、こんな朝早くからそんなに働かなくていいですよ。こっちも人を働かせてるのに、待っているのも心苦しいですから」

僕達は部屋を出ると、家から2分程度の場所にある一流シティホテルのモーニングビュッフェに来ていた。

僕は野菜サラダにフルーツ、クロワッサンにベーコン、そして熱々のコーヒーを取った。

僕はコーヒーをすすりながら、左手でノートパソコンを片手で操り、データに目を通す。左手一本で、めまぐるしくデータを切り替え、それを全て頭におさめる。

朝のこの作業は、僕の日課だ。これを怠ると、会社の一日の業務が立ち行かなくなる。今の仕事場は、僕の部屋から5分もしない場所にあるのだけれど、トモミが僕を6時台に起こしに来たのはそのためだ。別にトモミが来なくても、僕は7時には活動を開始している。勿論、こんなまともな朝食は取っていなかったと思うけれど。トモミもパンケーキを取ってきて、生クリームにイチゴジャムを混ぜて食べている。

「――仕事してる時は、カッコいいんだよね……」

ナイフでパンケーキを切り分ける手を止めて、トモミは呟いた。

「え？」

「あ――な、何でもないです」

トモミはかぶりを振った。その表情からは、さっきまでのちょっと不満そうな漢字が消えていて、なんだか少しご機嫌になったような表情になっていた。

なんだろう。朝食を奢ったから、機嫌がいいのかな。

しかし――いちいち反応が馬鹿正直な娘だ。嬉しい時はいつだって嬉しそうだし、怒っている時は、人一倍ぷりぷりしている。

そんな彼女を見ていると、不意に何だか懐かしい感覚が、胸に沸

き起こる。彼女を怒らせているのは僕なのだと自覚してはいるものの、何だか僕は彼女に対する申し訳なさよりも、そんな郷愁に胸を満たされて、しっかり彼女の感情にフォローを入れていないのも事実だ。

そんなことを言ったら、きっと彼女はまた怒るのだろうな……

僕自身も、この感情が何なのか、説明する術を持たないし、原因も知らないから、彼女に言うことはないと思うけれど。

ただひとつ、分かっていることは。

僕はこの娘のことが、嫌いではない。

Company

トモミは僕のことを『社長』と呼んでいるが、正確に言えば僕の今の肩書きは、社長ではない。

まあ、ほとんどその認識に差異はないのだけれど……

都内の一等地に立つ、２０階建てのビル――ここが僕の今の職場。

全員の業務開始時間まで、まだ３０分ほどある。今出勤してくる社員もいて、皆往々に僕に挨拶をしてくる。

「社長！　おはようございます」

「おはようございます、今日もお互い頑張りましょう」

「はい！」

僕とトモミ、そしてリュートの３人は、ビルのエントランスに６つあるエレベーターに乗って、パスを通す。エレベーターは最上階までノンストップで昇り続ける。

エレベータを出てすぐにある扉ひとつくぐると、真っ赤なじゅうたんにだだっ広い部屋が広がり、レッドカーペットのど真ん中に僕のデスクがある。デスクの後ろは紫外線カットの強化ガラス張りで、大東京をジオラマにした姿が一望できる。

扉を開けると、一人の大柄な男が、僕のデスクの斜め前にある自分のデスクで、煙草を吸って、待っていた。当然だがこの部屋には、秘書のトモミがこの部屋で電話を取って、エレベーターのロックを外すか、会社で僅か３人、あと、清掃業者と警備会社が各１枚ずつ持っている特殊なカードキーがないと、エレベーターがこの階まで昇ることはできない。

つまりこの男は、トモミがいなくても、このフロアに来ることの出来る人物。

「なんだ。今日は随分と早いな、エイジ」

僕が声をかけると、大柄な男は振り向く。スーツがピチピチなくらいの筋肉質で、にっと笑う顔がとても豪快で、トモミは朝から濃いものを見せられて、早くも食傷気味の表情をしている。
「ケー……じゃなかった、ＣＥＯ、おはようございます」
「――ケースケでいいよ。お前とは、長い付き合いだから」
「あんた、この部屋で煙草吸わないでよ」
トモミが僕の影から顔を出して言う。
「私も社長も吸わないんだし、あんたが吸わなければ、この部屋の空気はもっと綺麗なのに」
「人を汚物みたいに言うなよ」
男は煙草をもみ消す。
「仕方ないな。少数派が多数派に淘汰されるのは、民主主義の常識だ」
僕は男を見て、言った。
「だが、7年前は煙草を一日2箱余裕で吸っていたお前が、今では一日3本まで減らしたんだ。それ以上の努力をさせるのは、僕は忍びないがな」
「ケースケ、お前も1本でいいから煙草を吸ってくれよ。そうすりゃ俺もこの部屋で普通に煙草を吸えるし、その女も黙ってめでたしめでたしなんだからよ」
「……」
この部屋で頻繁に起こる論争――それがこの、喫煙問題だ。
といっても、煙草嫌いのトモミと、煙草を吸うこの男の意思の疎通が上手くいっていないだけで、僕はそのとばっちり――煙草は吸わないが、煙草に関して頓着のない僕を引き入れ、多数派に回ろうとするこの男と、それをさせるまいとするトモミの小競り合いなのだけれど。
「――エイジ、残念だけど、僕がお前の味方についても、お前は多数派にはなれない」
僕は言った。

「リュートは煙草を吸わないからな」
「……」
その理屈に、男は目を覆って、言葉を失う。
「あはは！　ざまあみろ！」
トモミはそんな男を見て、いたずらっぽく笑った。
「そんなのありかよ」
「リュートは下手な人間より上等な犬だ。一人としてカウントしてくれ」
僕のその言葉に、男はその大柄な体を竦ませる仕草を見せる。

この会社の名前は、グランローズマリー。
いずれ詳しいことを話す機会があると思うので、今は大まかな説明でお茶を濁させていただくけれど、僕は7年前、日本を出て中国・北京に渡り、そのまま西進、成都を経て、シルクロードに入り、そのまま西に向かって旅を続けた。
東南アジアや中東、イスラム圏の地域を抜け、僕はイスラエルに入国。そこで僕は、ダイヤモンド鉱山を所有する資産家に目をつけられ、家に招待され懇意となり、しばらくその資産家の許で世話になった時、僕の手先の器用さを見込まれ、宝石デザイナーをやらないか、と勧められる。
既に2年近く、旅に時間を費やしていたため、そろそろリュートも落ち着ける場所が必要だと思ったし、僕自身、そろそろ何か挑戦するものがあればいいと思っていた頃だった。
僕は２０歳の時にパリに渡り、宝石デザイン学校に入学。２年振りにパリの安アパートで、定住生活を送るようになる。
持ち前の器用さから、２年カリキュラムの学校で、僕は特例として僅か１年で宝石精製のほぼ全てを極めてしまい、その歳、フランスで最も権威ある宝石デザイナー賞を獲得。世界一の宝石デザイナーとして、その名はヨーロッパ中に知れ渡り、多くのファッション

ブランドからスカウトを受ける。

僕は2年カリキュラムのデザイン学校を退学し、イギリスへと渡る。フランスでは宝石デザイナーとして、そして他にも十分名を売ったので、新しいステージで、自分を売り込む必要があったからだ。ヨーロッパを拠点にしつつ、一番得意な英語を使える英語圏で今後勉強したかったからというのもある。

そして21歳で僕は、宝石デザイナーとして、イギリスのブランドチェーンに籍を置く一方で、イギリスの名門、オックスフォード大学に入学し、最先端の帝王学を学んだ。

そして、僕がイギリスに在住していた頃、イギリス王室皇太子のロイヤルマリッジが行われ、僕はその結婚式、披露宴の宝石部門の最高責任者に、若干22歳で抜擢された。これは、僕がイギリスでは、宝石デザイナーとしてではなく、もうひとつの分野で大きく名前を売っていたことが、抜擢の要因だと思われる。

僕のデザイン、製作したティアラは大好評を受け、世界中にこの披露宴の様子が衛星中継されたことも手伝い、世界中のセレブにまた大きく名前を売った。

宝石デザイナーとして一定の目処が立った僕は、ロイヤルマリッジの直後、在籍していたブランドのデザイナーを辞職し、個人で宝石ブランドを立ち上げた。それが、グランローズマリーである。

僕はオックスフォード大学を、2年で卒業。最終年に書いた経済論文は、その次の年のヨーロッパの経済危機を予見し、それを見事に的中させ、大きな話題を呼んだ。最終的に僕はこんな下賤の身でありながら、イギリス皇室に招かれ、在住僅か2年で大英帝国勲章まで授与され、騎士（ナイト）の称号を得、女王陛下に手を許されるまでに至った。

そして、23歳で僕はイギリスでの事後処理を終えて、5年振りに日本に帰国。オックスフォードで学んだ帝王学を生かすべく、自分のブランドチェーンと同名の新会社を立ち上げた。

新会社は現時点では、物の流通、販売を基幹とした事業を展開し

ていて、ざっくり言ってしまうと、デパート、スーパーマーケット、コンビニの3つの中間に位置する仕事と、現時点ではイメージしていただきたい。

ヨーロッパで基礎を築いた会社なので、僕のこの会社での肩書きは、最高経営責任者――CEOというやつだ。日本人はまだ、この呼び名を呼びづらいため、公の場では皆僕のことを「社長」と呼んでいるけれど、公の場で僕の官職を間違えなければ、その認識でかまわない、ということで、僕はその呼び名を社員に訂正させることのないまま、今に至る。

その時協力を仰いだのが、この、トモミと折り合いの悪い、天を突くような坊主頭の大男――ミツハシ・エイジだった。

以前は僕と生死の境を彷徨うまで殴りあった男だ。だけどそれ以来、僕に心酔してしまい、今までのヤンキーの道を捨て、大学にまで進学してしまった男。

日本から帰国すると、僕はまず彼に連絡を取った。高卒認定試験を取ったエイジは、その後かなりランクの高い大学に進学していた。僕より2歳歳上のエイジだったが、大学がそれなりに優秀でも、元不良という経歴が災いして、就職活動で辛酸を舐め、不遇の生活を送っていた。そんなエイジを、僕がこの会社を立ち上げる時の、創業メンバーとして誘った。エイジは勤め先を辞め、すぐに僕の下についた。

エイジにはヤンキー時代から、仲間達がいて、この会社は、僕とエイジとその仲間達、合わせて11人という規模でスタートした。まずはじめは、気心の知った連中で、事業の様子を見るためだ。

そして、会社で大規模な攻勢に出る準備を11人で整え終え、去年、大規模な採用試験を開始。トモミもこの試験で入ってきたのだ。

そして、その年に2000人を一気に採用した際、僕は精鋭の前で、旗印を掲げる。

石田三成の『大一大万大吉』、武田信玄の『風林火山』、新撰組の『誠』。

『大一大万大吉』は、僕が社員に対し行う誓いだ。
石田三成は関ヶ原では敗軍の将となった。だが斬首の前に、柿を薦められたが、体に悪いから断った。死ぬ寸前まで体をいたわり、最後まで人の上に立つ以上、部下のためにも諦めなかった。柿の逸話は、三成の敗軍の将が最後まで通す道を示した。
人の上に立つ者は、最後の最後まで諦めない――同時に、隊に所属する人間は、全ての人間のために力を貸してほしいという、僕の願いも込められている。
『風林火山』は、仕事の究極を目指す理念だ。攻め時守り時を見誤らず、常に最速の行動、相手の先を取るべし。この教えは、世界のどの局面でも最大の力を発揮すると考え、会社の理念とした。
ちなみに風林火山は、中国古代の兵法家孫子の教えで、正確には『風林火陰山雷』なのをご存知だろうか。知りがたきは陰の如く、動くことは雷の如くという教えもあるが、日本ではいまいち浸透していない。
『誠一文字』は、企業全員の結束を願う旗印だ。
僕が起業した時点でこの会社は、既に大量の金が流れ込んでいた。この会社に所属する以上、この金や権力を巡っての闘争を決して許さず、金や権力に目がくらんだ者は人道不覚として厳しく罰する。いわば警告の旗印である。
この３つの旗印は、会社の全てのフロアの壁に貼り付けられている。

「さあ、朝の挨拶は終わりだ。二人とも、仕事の準備を」
僕は自分のデスクの前で、大きく伸びをして、体をほぐした。

Ｒｏｂｉｎ－ｆｏｏｄ

前回の説明である程度察した人もいるかもしれないけれど、僕はいわゆる青年実業家という肩書きの他に、もうひとつの肩書きがある。

そう、天才宝石デザイナーという肩書きである。

グランローズマリーの社長室は、そのワンフロアを大きく３つの区画に分けている。

中央が今僕達３人のいるデスクルーム。ここでは一般業務を執り行う。簡単なシステムキッチンも会って、トモミはここでコーヒーを淹れてくれたりするし、料理をするのも可能だ。

入り口から見て左手に区画されているのは、客を招くための応接室だ。当然会社のトップが招く客の部屋なのだから、ここでは主に、大規模な商談や、契約のサイン、調印等が行われる場合が多い。必然的にここに来る客は、セレブか有名人になるため、間取りを広く取った、ゆったりとした空間を作っている。

そしてそれとは逆の、右側に区画されているのは、僕の作業室。ダイヤモンドカッターや研磨機など、宝石を加工するための特殊工具が置かれている、宝石デザイナーとしての僕の仕事部屋だ。一応僕の借りているマンションでも、簡単な作業を行える作業室はあるのだけれど、基本的に僕はここで宝石デザイナーとしての作業を行い、この会社にいる時は、ほとんどこの部屋にこもりきりだ。宝石精製用の工具の他にも、モニターが３つ設置されている。

僕は自分の左耳に、器具を取り付ける。これはいわゆるイヤホン型電話で、僕宛にかかってくる電話を、受話器を持たずして会話できる。回線はトモミのデスクにある電話とリンクしていて、トモミの操作でこのイヤホンにかかってきた電話を取り次ぐ。

作業室に３つ並んで設置されているモニターは、中央のそれが社長室、両脇がこの２０階建てのビルの各フロアに設置されているカ

メラにつながっていて、これもトモミの操作で画面を切り替えてもらう。映像を見なければ判断できない案件や、僕の見たいデータをこのモニターに回してもらうのだ。

エイジとトモミを残して、僕はリュートと共に、作業室に入る。

作業室には小さなロッカーがあって、そこにはジーパンと長袖Tシャツが入っている。作業中は、スーツ一式だと邪魔で動きにくいのでこの格好だ。会社にいる時は、スーツよりもこの格好でいる時間の方が圧倒的に長い。だから僕は別にスーツに対して頓着はないのだけれど、トモミにはよく、皺だらけのスーツばかり着て、と怒られている。

社長室にも、業務開始時間を告げる、何とも緩やかな音楽が流れる。

「さて、はじめるか……」

僕は昨日のうちに、密度や質量を既に測り終えているサファイアの原石を手に取った。

作業代の横のパソコンには、完成予定のCGが製作されていて、まずはこれを見て、精製のイメージを練る。

「社長」

折節、作業室の外から、トモミの声が聞こえてくる。向こうにこちらの音はほとんど聞こえないのだが、向こうからこちらの音はよく聞こえる壁の設計だから、部屋を隔てていても、声はよく聞こえる。

「１４階企画部から電話です」

「分かりました。繋いでください」

「社長、私、１４階企画部の……」

耳に入れている電話に、音声が流れてくる。

作業室のモニターに、電話相手の顔が映し出された。

「あぁ、企画書を見たが、もう一度赤紅商事に行って交渉のやり直しです。あの商品があの会社にどれだけの利益をもたらすか、ちゃんとデータを洗ってください。エイジ、赤紅商事の企画書をファイ

ルから出して、それを僕のいうとおりにするんだ、いいか……」
　僕は自分の作業をしながら、エイジに作業を指示する。指示を出し終えるとすぐにキャッチで別の電話が来る。僕はダイヤモンドカッターを操りながら、応対する。
「あぁ、その株は１１５００円を切ったら即５１％買い叩いてください。エイジ！　トモミさんのチェックするナスダックの額をお前もちゃんとチェックしていろ。企画書の手直しは終わったか？」
「う、あ、ちょっと待ってくれ。もう少し……」
「遅いぞ！　その作業ならあと1分は短縮できる」
「すまん！」
「トモミさん。日経平均は？」
「どうやら昨日のドル安が影響してるのか……上昇してますね。平均すると前日比１５円高です」
「わかりました。エイジ。終わったらメールを読み上げろ」
「あぁ、待ってくれ！　モニターに回すか？」
「今こっちも目が離せない段階だ。読めば頭に入るから、声に出して読め」
　このように、僕は毎日、宝石の精製をしながら、一般業務を担当している。
　エイジは僕のすべきデスクワークを、僕の指示でこなすのが日課。まだ僕の支持に追いつける処理速度はないけれど、これだけやってくれれば上出来だ。２年間こいつを鍛えたが、ようやく仕事が僕の思考を止めないようになって来た。
　トモミは株価や指数など、僕の記憶だけでは追いつけない、常に変動する数字や、僕の分単位で刻まれているスケジュール、一日の時計に常に目を配るキーパーをやっている。僕の耳についている電話の回線切り替えや、作業室のモニター切り替えも、トモミのパソコンが行い、僕に回している。その作業も早いと言えば早いけれど、一騎当千の僕のスピードには、まだ追いつけていない。
「エイジ！　添削しながら狙っている会社の株価をチェックしてい

ろ！　おそらく別の会社がこちらの狙いの株を狙っている。指定の額を切ったらアラームが鳴るようにセットをし、それが鳴れば取引チームに連絡する必要は無い、お前が買い取り手続きをしろ。あらかじめその旨を、取引チームに伝えておけよ」

「あ、ああ！　悪い！　まだ異常はない！　あったらすぐに言う！」

この通り、僕はモニターを見ることはあるけれど、それはめったにない。朝の時点で昨日一日、グランローズマリーの全業務がどう動いたか、頭に叩き込んである。こうして宝石加工をしながらも、指示を出せる器用さも兼ね備えている。

出来れば社員全員、自分で考えて仕事をしてほしいが、僕の最高決定が必要な業務が、まだ創業２年の若い会社では、どうしても多くなってしまう。まだこの会社の地盤はゆるいのだ。

そんな業務を終えて、仕事がいったん昼休みを迎える。

「社長、お疲れ様です」

トモミは作業場から出てくる僕に、アイスコーヒーを差し出した。僕はこの仕事を始めてから、コーヒーを非常に多飲するようになった。デスクワークだけの日があれば、一日１０杯は飲む。

とりあえず僕は一日のはじめに、こうした宝石作業とデスクワークを兼任している。両者に集中を払っているため、８時から１２時までの４時間で、肉体的にも精神的にも大きく消耗している。

一緒に作業室を出てきたリュートに、缶詰の餌と軽く温めたミルクを与えると、僕は自分のデスクに座った。

「……」

画面に映し出されている株価を示すグラフ。株式市場も昼休みに入ったため、グラフは一度中断されている。

「ケースケ、すまん。今日はお前の仕事に完全についていけなかった……」

エイジが僕の横で、頭を下げる。

「エイジ」

僕はアイスコーヒーをストローで飲みながら、左手でパソコンを

操作し、今日の仕事状況をチェックする。
「もう社員は数千人になった。そしてお前はその中の副社長だ。仕事が出来ない人間が副社長にいると、不満がを言う奴がいても当然だ。だからこうして毎日お前を鍛えているんだが……もうちょっと仕事を早く、全体的な視点で仕事を見渡せるようにならないとな」
「……」
「だが――進歩したじゃないか。今日の作業は今までで一番早かったぞ。特にキングストン証券の案件の処理は迅速でよかったぞ」
「あ、ああ」
僕からの賛辞を受け取って、エイジは少しかしこまった。
「よかったじゃない。社長に誉められて」
僕がもう一杯コーヒーを飲む事を知っているから、トモミは代わりのコーヒーを持ってきていたところだった。
「あ、そう言えば、今月の経済誌、読んだか？　今月もうちのこと、かなり紙面割かれていたぜ」
そう言って、エイジは自分のデスクの引き出しから、真新しい経済誌を出して、僕のデスクに置いた。トモミもそれを見て、僕のデスクに寄ってくる。

『義賊集団グランローズマリー、遂に売上高1兆円を突破
民衆の強い味方、グランローズマリーの快進撃が、今後も日本を席巻しそうな勢いだ。創業2年で、同社の売上高は1兆を突破した。グランローズマリーの最大の特徴は、世界一の宝石デザイナーでもある、CEO、サクライ・ケースケ氏（25）の、年間2兆円といわれる宝石デザイナーとしての売上げの大部分を、そのまま本社の事業に投入している点にある。海外セレブや貴族王族に宝石を売りさばいてお金を得、そのお金で事業を展開する、全く新しい経営スタイルを展開している。
同社は、食品、衣服、家具など、庶民のライフワークに携わる、ありとあらゆるショップの並ぶショッピングモール『ローズストリー

ト』を全国に展開しているが、この『ローズストリート』に並ぶ商品は、軒並みびっくりするほど安く、また質がいい。連日『ローズストリート』はお客がごった返し、中には車で2時間かけて通い詰めるお客もいるとか。夕方には商品がなくなり、早仕舞いしてしまう店も跡を絶たない。

また、この『ローズストリート』は、店を持ちたい人間にも大きく支持されている。普通デパートやショッピングセンター等で、販売スペースを設けた場合、そのテナントはデパートやショッピングセンターに、売り上げの数%を支払うことに鳴る。通常この場合、その相場は15~20%、安くても12%程度が限界とされているが、『ローズストリート』の場合、そのテナントは5~7%でテナントを借りることが出来る。つまり、通常のテナントを借りるより、1割ほど多く、店主が利益を得ることができるという仕組みだ。その分競争率は高く、審査も厳しいが、確実に儲けが出る『ローズストリート』にテナントを持ちたい優良店主は今もグランローズマリーと交渉しており、今後『ローズストリート』には、さらによい商品が安く買えるようになるかもしれない。

まさにグランローズマリーは、持たざるもの、弱きものへの『正義の味方』のような存在である。

『お金は金持ちから取り、貧乏人からは取らない。金持ちが持っていたお金を、多くの人に還元する』――グランローズマリーの経営理念が打ち出されて、もうすぐ2年。事実この2年で消費者の思考が変わり、お金の循環が国内で盛んになったことで、日本の契機は2年前と比べ物にならないほど改善され、消費が増えたことで、失業率も2年前から0.8%も改善、国民一人当たりのGDPも軒並み上昇している。

政治家の衆愚政治に絶望感が広がっている昨今、今日本は、この若干25歳の天才実業家の手によって、日進月歩で変革している。かつて『平成の臥龍』『時代の寵児』と呼ばれたまま、悲劇によって日本を去った、稀代の天才、サクライ・ケースケ氏。7年の時を経

て、彼は我々の救世主となって帰ってきた』

「今日もべた褒めですね。うちの会社のこと」

トモミが言った。

「……」

このグランローズマリーには、様々な売りがあるが、この会社が他の企業と一線を画す最大の特徴は、僕の宝石デザイナーとしての売り上げにある。

僕は独立した頃から、欲しい人間に合わせて、オーダーメイドでアクセサリーを作るという活動をしている。イギリス皇室の結婚式の直後から特設したサイトで、世界中の人間がそれを予約できるようにしているのだけど、その時から現在に至るまで、その予約は3年先まで埋まっている状態だ。

僕の宝石を買うのは、雑誌の通りハリウッドスターや世界的企業の社長、石油王や貴族皇族などで、惜しげもなく金を使える人間ばかりだ。

そうした世界中の金持ちから宝石を売って集めた金を、僕は会社に投入している。雑誌では「大部分」としか紹介されていないけれど、正確な数値をいえば、僕が投入しているお金は、僕の宝石デザイナーとしての売り上げの、９９．９％である。

それを常に投入しているのだから、当然この会社は創業2年で1兆円の売り上げを出しているのに対して、安心の無借金経営。

その上、そのお金を利用すれば、会社で取り扱う商品を、限界を超えて安くしても、十分利益が出る――と言うわけだ。

当然僕も、会社の運営資金になるのだから、宝石は最低でも億以上のものでなければ作らない。僕の作った宝石を、一般庶民が手にすることはほとんど出来ないけれど、はじめからそうして金持ち限定の商品にすることで、最も効率よく金を集められる――年間売り上げ1兆円なんてことも可能になるわけだ。

昨日、僕が自分の生まれ育った商店街の人達から『正義の味方』

といわれたのはこのため。
　生活必需品の全てを取り扱うこの会社は、それ程裕福でない人にとっては、貴重なライフラインなのだ。うちの会社の商品で、貧しい人の生活はより豊かになり、他のことに使えるお金も増える。そういう人達がお金を使うことで、お金が国内に循環し、景気がよくなり、消費が増え、失業率も改善する。ますます国は豊かになる。このシステムこそ、僕が宝石デザインを勉強した時に考えた、僕の長年の目標だった。
そして、それが現実のものになった今、僕は大衆の『正義の味方』になった。

Ｒｏｂｉｎ－ｆｏｏｄ（後書き）

この話では、イスラエルでダイヤモンド鉱山の持ち主にケースケが見込まれたということになっていますが、イスラエルで宝石ルートを手に入れ、日本で起業した宝石チェーンというのは、日本に実在します。名前は忘れましたが…

昔「ぷっすま」という番組で、その企業の社長の豪邸訪問をやっていて、それを見て、何となく作者の想像とミックスして、作ったのが、この第３部と、グランローズマリーという会社です。

Idol

「しかし、まさかたった2年で売り上げ1兆を越すなんて思わなかったよな。こんな雑誌に俺達が『正義の味方』なんて言われてよ」

エイジは嬉しそうに言った。

「俺達、じゃないわよ」

トモミがそんなエイジを一瞥した。

「そこに書かれているのは、うちの会社のことじゃないわよ。全部、社長一人のこと」

「……」

「この会社を2年で1兆円企業にしたのも、この会社が『義賊集団』なんて呼ばれるようにしたのも、全部社長一人がやったの。私達はそんな社長の指示に従って、駒になっただけ」

「……」

エイジは僕の方を見る。

「――確かにな」

それから僕に軽く頭を下げる仕草を見せる。

「全部ケースケのおかげだ。これまで一度だって、ケースケの経営が間違ったこと、ないもんな。ケースケがプロデュースするものは何だって売れたし――そんなこと，他の誰にもできないよな」

「……」

7年前、中国に渡った僕は、そのまま西へと進み、東南アジアや中東諸国を旅して回った。

その時見たのは、壮絶な人間の生の営みだった。

食べるものもなく、常に飢えている人間。文字を知らない人間。親元を離れて、ゴミ山で働く小さな子供、売春宿で日本人客の相手をしている少女。

性の知識なく妊娠した子供達は、医者にもかからず、まるで犬猫のように子供を産む。しかしその子供達も、不衛生や知識不足、栄

養不足が重なって、大部分が歩くこともないまま死んでしまう。独裁者に思想教育までされ、言論の自由もなく、独裁者の著書が学校の教科書になっている国なんてのもあった。

様々な問題を、国ごとに抱えていたけれど、どれも共通していることは、持たざる者が圧倒的に支配者層によって搾取されていることだった。抗う力もなく、そもそもそんな思想を持つ環境に置かれず、無知ゆえに劣悪な環境を恨みもせず享受するしかない。

その一方で、ろくでもない支配者は、その手に余るほどの金を持っていて、どんどん肥え太る。その金さえあれば、貧しい人たちがもっといい暮らしが出来、教養だって身につけることができるのに、金はそんな一部の人間の金庫で持ち腐れているか、政治家が無能な政策であぶく銭のように消費してしまうか、どちらかだった。

僕自身も、力がなく、未成年という立場から、馬鹿な連中に沢山のものを搾取され続ける半生だったから、旅をした国々の、そんな無力な人間の苦しみに、目を背けてはいられなかった。

そんな思いが胸の奥で、言葉に出来ない憤りとして胸を暖めていた頃に、イスラエルで宝石のデザインの話を聞いて、これだ、と思った。この石で、金持ちが持ち腐れさせている金を引き出させ、それを貧しい人間に分け与えるシステムを作ろうと思った。そうすれば、きっと僕自身、僕を信じて見送ってくれた、友への返盃になるのでは、と思った。

それから今に至る5年間——最初の3年は、そのための力を得ると同時に、自分の名前を世界中に売ることに全てを費やした。幸運もあって、3年でその作業が終了し、僕はすぐに次のステージ——この会社、グランローズマリーに登ることが出来た。

でも、まだまだこれから。

まだ僕には、やらなくてはいけないことが……

「——ゴホッ、ゴホッ」

僕は咳き込む。

「社長、またその咳してますね」

トモミは心配そうな面持ちで僕を見る。
まただ。最近たまに胸が苦しくなって、咳き込むことがある。
「一度病院に行った方がいいぜ、それ」
エイジも自分のデスクでコーヒーに口をつけながら言う。
「――大丈夫だよ。そんな大したことじゃないし」
僕は自分の椅子に座り直す。
「すみません、コーヒーおかわり貰っていいですか？」
僕は自分のコーヒーカップをトモミに差し出す。
トモミの淹れてくれるコーヒーは、とても美味しいから、飽きもせず、何度もおかわりを頼んでしまう。僕がコーヒーを沢山飲むのを知って、トモミが豆を自分で選んでくれたらしく、それを挽きたてで淹れてくれるのだ。淹れ方も相当研究したんだとか。
「社長、それを飲んだら、一度スーツに着替えてくださいね」
トモミが、コーヒーを注いだコーヒーカップを僕に差し出しながら、言った。
「13時に、芸能プロダクションの方が契約に来ますよ」
「あぁ――そうでしたね」

グランローズマリーも、これだけの企業になると、やはりアイドルや映画などのタイアップ作品を作る機会も多くなる。
今回は、現在一番人気のアイドルが出演するドラマとのタイアップ商品だ。そのテレビCMを作るために、アイドルの所属事務所との契約が、調印を残すのみとなっていた。
「じゃあ、この契約書にサインを」
「はい」
僕は応接室で、スーツ姿の男から書類を受け取り、ペンを走らせる。僕のソファーの隣には、副社長のエイジもいる。そして僕達のソファーの後ろに、トモミは立って待機している。僕の座るソファーのすぐ隣には、リュートがお座りの形で待っている。

「ふふ、でも、嬉しいなぁ。今好感度抜群の会社のＣＭに出られるなんて」
そのスーツの男の隣のソファーには、顔立ちの整った、笑顔がもう顔の皺まで染み付いているような少女がいた。
「しかし、ＣＭの契約の段階で、出演者にここまでご足労いただくとは、珍しいですね」
僕は言った。
スーツ姿の隣にいる少女は、この契約の後製作されるＣＭに出演するアイドル本人だ。彼女と、スーツの男――芸能プロダクションの重役の座るソファーの後ろには、彼女のマネージャーらしい、気弱そうな男が立っている。
「だって私、サクライ社長に会ってみたかったんですもの。私達の世代では、サクライ社長は憧れの存在ですから」
アイドルは僕に笑顔を投げかける。
「……」
僕は契約書に社員を押し、契約が成立する。
「じゃあ、これで。契約料の支払いは、撮影が始まったら……」
僕は書類を目の前の男に返す。
「いや、よかった。うちとしてもグランローズマリーさんと仕事ができるのは、大きなメリットがありますからね。これからもよろしくお願いします」
スーツ姿の男は、僕に握手を求めてきた。僕はその手を握り返す。
義賊集団、正義の味方ともてはやされるこの会社と一緒に仕事をするのは、相手方にとっても、自分の会社のイメージアップが大いに見込める。
そのため、この会社と仕事をしたいという会社は今、星の数ほどいる。
「でも、サクライ社長って、素敵ですね」
隣にいるアイドルが、僕の顔をしげしげと見つめる。
「昔よりも、何だか男っぽくなったけれど、なんか女性的な優しさ

が残ってて――物静かで、サッカーをしている時とは別人みたい。ギャップがあって、何か、すごく魅力的ですよね」

「そうでしょうか。ありがとうございます」

僕はアイドルに会釈を返す。

「サクライ社長、ちょうど今、お昼時ですし、よかったら一緒に、ランチ、行きませんか？　ＣＭも社長がどんなイメージのＣＭ作りたいか、聞いておきたいし」

「お、おい……」

後ろにいたマネージャーが当惑した表情を見せる。

「――大変ありがたいんですが、実は１４時から重役会議がありまして……」

そう言ってから、僕はエイジの方を見る。

「そうなんですよ。ちょっと今、色々仕事が立て込んでいる状態なので」

エイジもそう述べる。

「――そうですか」

アイドルは少しがっかりしたような面持ち。

「あ、じゃあもしよろしかったら、アドレス交換しませんか？　今度うちでやるホームパーティーにご招待しますよ。他のアイドルの娘も、いっぱい来ますよ」

話題を変えるように、アイドルは僕に微笑みかける。

後ろにいるマネージャーは、気が気ではない面持ちだ。そりゃそうだ。イメージが売りのアイドルが、こうして男のアドレスを聞くなんて、今後の仕事に影響しかねない。

「――すみません。今、僕の作る宝石は３年先まで予約が埋まってて。今はそれをさばくので、スケジュールがタイトで……だから、多分お招きに預かることは出来ないと思います。何度も誘ってもらって、その都度断るのもなんですし」

「……」

「――じゃあ、お見送りしますので、こちらへ」

そう言って、僕は席を立つと、3人をエレベーターの前まで見送る。トモミはエレベーターの操作と、会社の外まで見送るために、エレベーターに乗って、3人と一緒に降りていった。

僕はその間に、ネクタイを緩めて、自分のデスクの上にある、竜胆の花が一輪生けられた花瓶の水を取り替えた。リュートも僕のデスクの隣に来ていて、僕は頭を撫でてやる。

そこまですると、トモミが戻ってくる。

「ご苦労様です」

僕はトモミに会釈する。

「……」

しかしトモミはしげしげと、僕のことを窺っている。

「――しかし、相変わらず、取り付く島もないねぇ」

エイジが自分のデスクから、僕にそう言った。

「え？」

「あのアイドルの娘の誘いを断るなんてさ。今一番人気だってのに。あの娘と一緒に食事したいって男、今日本に山ほどいるのに、しかもその娘から誘ってくれたのに。もったいないことするなぁ」

「……」

「しかも、これから会議があるなんて嘘ついて――」

「……」

本当は、これから会議なんてない。さっき言ったことは、適当な方便。エイジもそれに口裏を合わせてくれただけ。

「アイドルが男と一緒に外を歩いたら、彼女の営業妨害になりかねないからな。後ろのマネージャーも心配そうにしてたし。だからだよ」

「いや、あのアイドルの娘はそれでもお前と知り合いたかったと思うね。多分あの娘、お前に惚れてたぜ」

「え？　そうなの？」

僕は首を傾げた。

「……」「……」

トモミとエイジは揃って僕に、呆れるような表情を向ける。
「――鈍感過ぎ」
トモミは呟いた。
「お前、いい女と知り合うチャンスが多いのになぁ」
「……」
世界的宝石デザイナーなんてやっていると、僕は必然的に女性と仕事をする機会が多くなる。モデルやアイドル、女優と会うこともそう珍しくないのだ。最近は宝石だけでなく、もっと安価な大衆向けのアクセサリーをプロデュースすることもある。
僕は天才実業家、天才宝石デザイナーという肩書きと共に、天才プロデューサーとしての名前も有名だ。僕がプロデュース、プロモートするものは、物でも人でも必ず売れる。僕の手腕に加えて、僕の過去のネームバリューがあれば、鬼に金棒。さっきのアイドルだって、僕にもっと売り込んで欲しいと思って、芸能プロダクションがうちの会社に話を持ち込んだのだろう。本当はトップアイドルを宣伝に使うと、宣伝費がかさむから、こういう仕事には自分からはほとんど手を出さないんだけれど。
「あぁ、しかし、そろそろ腹も減ったな」
エイジは自分の腹を、その大きな手でさすった。
「あのアイドルの娘には悪いが、昼飯行こうぜ」
エイジは自分のデスクを立った。
「いや、僕はいい。ちょっと今作ってる指輪、作業の途中だし、今日中に仕上げたいんで。二人で行って来いよ」
「またですか？　そう言って食事も取らずにいつも働いちゃうんだから」
トモミは少し怒ったような顔をする。
「会議のことは嘘ですけど、実際僕の宝石の予約が3年待ちだっていうのは本当ですしね」
「でも、社長は働き過ぎです。ここ1年、完全に休暇をとった日なんて、一日もないじゃないですか。せめて食事くらい、ちゃんと取

ったら……」
トモミが言いかけて、言葉を止める。
エイジがそう言うトモミの肩に手を置いて、トモミの言葉を制したからだ。
「お前も昼休み、今のうちに飯を食っとけ。行くぞ」
「……」
立ち上がって、スーツの袖をまくる僕を見ながら、トモミはしばらく黙っていたが、やがて立ち上がり、エイジと共に部屋を出て行った。
「……」
リュートと二人になって、社長室は静寂に包まれる。
「――さて。やるか」
僕は手の関節を回し、軽く伸びをすると、リュートと一緒に作業室に入って、自分の作業工具のはいっている鞄から、ヘラとヤスリを取り出し、席に着いた。
「ゴホッ、ゴホッ……」
咳が出たけれど、僕は気にせずヤスリを手に取る。
――遊んでいる暇なんてない。
僕はこれから、示さなければならないのだから。
友に報いるためにも、僕は友が信じてくれたことに足る人間にならなければならないのだから。
今の僕達は、遠く離れてしまっているけれど、それでも僕はあいつらを、今でも友だと思っているから。
アイドルなんかと遊んでいる暇はない。愛する人だって、僕をあまでして守ってくれたのに、それを忘れて、女遊びもないだろう……
この数年間、とにかくそんな自分になりたくて、せめてそれに報いる道を歩きたくて、必死にやってきたのだから。

Interview

今僕は、宝石デザイナーとして、大きな仕事に取り組んでいる。
王国であるベルギーの王子が、結婚式を行うこととなり、その結婚式で花嫁を飾るアクセサリーの製作を、僕一人で承っているのだ。
総製作費用は８０億。これが全てグランローズマリーに支払われる。その利益だけでなく、この結婚式は、日本ではそれ程話題にはなっていないけれど、ヨーロッパでは、割と大きなニュースとして取り上げられている。この結婚式で、成功を収めれば、今後他のＥＵ各国からも、グランローズマリーへの利益が望める。それらを合わせたら、１００億円以上の利益になる、大きな注文だった。

そのため僕は、一般業務の後、ここ3日間、毎日社長室にリュートと泊まりきりで作業していた。さすがにこれだけの値が張るものでは、一般業務の片手間では出来ない作業でもあるし、些細な失敗もしたくない。僕の会心の出来の作品を作る必要があったのだ。
「ゴホッ、ゴホッ……」
普段から、僕はそれ程睡眠時間は長い方ではないけれど、ここ3日間で、睡眠時間は3時間に満たない。おまけに寝ていたのは、応接室のソファーだ。さらに言えば、泊り込みに入る前も、先方からデザインのイメージを聞いてから、手書きのデッサンやＣＧでいくつか完成予想のイメージを作ったり、先方と綿密な打ち合わせのための資料を作成するために、相当の時間を要していた。
当然、８０億円分のアクセサリーを製作し終えた頃には、僕は極限状態にいた。相当緻密な作業が続いたし、肉体的疲労も勿論だが、精神的疲労の方が大きかった。今日の早朝にそれら一式を作り終え、そのまま休む間もなく一般業務に突入。ようやく今日の一般業務が一段落したところだった。

「――おい。大丈夫か？」
社長室のデスクでぐったりしている僕に、エイジが声をかけた。
「――ああ。一時間も休めば、まだ大丈夫だよ」
僕はトモミの淹れてくれたコーヒーに口をつける。
「一時間って……ここ数日、ちゃんと食事も摂ってなかったし、ちゃんと栄養つけて、しっかり休まないと。２日くらい、休んだって……」
トモミが心配そうに声をかける。
「――ありがたい申し出ですが、今の仕事を先に受けた分、他の予約が少し遅れてますから。そんなに休んでいられないんですよ」
「……」
「まあ、できることなら風呂に入りたいというのだけはやぶさかじゃないけれど」
自分の状態が悪い時は、大抵自分の体か部屋が汚れている。僕はそれ程几帳面な人間ではないけれど、これだけは長年の経験から、自分の状態が悪い時は、すぐに整頓しておくことにしている。
折節、社長室に電話のコール音が鳴り響く。トモミがその電話を取った。
「――はい。はい……それは社長が、広報に返答を後で送るので、それをそのまま発表してくれって。はい、はい……」
２分ほどの応対で、トモミは電話を切る。
「ふーっ、やっぱり今日も社長への取材の以来が広報に殺到しているみたいですね」
トモミが僕に言った。
「ま、そりゃそうだな。しかしマスコミってのは、懲りずに何度でも来るんだな」
エイジも言った。
今グランローズマリーは、日本で一番ホットな企業のひとつで、話題に事欠かない。
３年前、イギリス王室のロイヤルマリッジで、大成功を収めた僕

が、また王室の結婚式をプロデュースすることは、ファッション業界内では今年最大級のニュースだし、日本のみならず、世界中の業界人が僕に取材を求めてきている。

そして、もうふたつ――僕がこの1週間、仕事にこもりきりの間に、二つの大きな動きがあった。

ひとつは、スイスで行われる、世界経済フォーラムのヤング・グローバル・リーダーズに、僕が認定され、表彰を受けたのだ。略式ではあるけれど、称号の授与ももう済んでいる。

これは一言で言えば、グランローズマリーが、世界的企業として権威に認められたという一種の指標であり、僕が国を代表する経営者の一人に仲間入りしたということを意味している。起業して僅か2年での認定は、極めて異例のことで、アメリカの有名経済誌も、これを大きく特集していた。

そしてもうひとつは、グランローズマリーがマザーズに上場したこと。CEOが25歳での上場は、今まで26歳だった最年少記録の更新であり、こちらも最近経済誌が大きく取り上げている。

正直これは、上場の最年少記録更新という話題作りのためにやったことで、すぐに東証一部の上場を目指すつもりではあるのだけれど。

まあとにかく、これらの業績から、グランローズマリーは今、日本のリーディングカンパニーのひとつとして、多方面から大きく取り上げられているのだった。

「広報が連日対応に追われているみたいですよ。世界中から電話がかかってきっぱなしだって」

トモミは僕を見る。

「社長が表に出てくれたら、騒ぎも収まって、万事解決なのに」

「……」

「お前、何か外に自分の意見を言うツールを使えよ」

エイジも困ったような顔をする。

「お前、世間からすげぇ人気あるんだし、お前がもっと表舞台に出

れば、会社のいい宣伝になるぜ。会社の宣伝費も浮くし、これを利用しない手はないってのに」

エイジの言うとおり、僕は日本に帰ってから――というより、イギリスで名を上げ続けてきた時から、表舞台で何かを発言したことはほとんどない。

僕の周りは色々と騒がしい。僕の口から7年前の事件の真相を語ってほしいというジャーナリスト、創業僅か2年で1兆円企業に仕立て上げた手腕から、何か手記を書いてくれという出版業者、会社のCEO、デザイナーとしての僕を取材して、ドキュメント番組を作りたいというテレビ屋など、僕の声を聞きたがる人間は、毎日のようにとっかえひっかえ、グランローズマリーの広報担当に電話をかけ続けている。それから僕はずっと逃げ続けているのだ。

新商品を発表するとか、新しい施設の建設予定とか、会社内でも色々と記者会見をすることもあるのだけれど、僕はそのほとんどをエイジに任せてしまっている。

僕が唯一日常的に自分の活動報告をするのは、会社内のホームページの、僕専用ページで、僕の作ったアクセサリーを写真でアップロードするだけ――カタログ代わりに写真を載せるだけである。

「――昔から有言実行って苦手なんだよ。政治家だって、そういう器量もないのに、明確な返答を求められて、無理に具体的なことを言わされて、自分で自分の首を絞めるわけだしな。今の段階で喋れることなんて、ほとんどないし」

「別に中身のない会見でもいいんじゃないですか？　社長のファン、いっぱいいるんだし、生の声を沢山聞けるだけでも、嬉しいと思いますよ」

それからトモミはエイジを見た。

「まぁ、こんな強面の大男よりも、社長の方がメディア受けはいいですよねぇ」

そしてエイジを揶揄するように言った。

「社長、何か7年前より、男っぽいっていうか――色っぽくなった

し……」

よく聞き取れなかったけれど、トモミは何か呟いていた。

「悪かったな、強面で」

エイジは憮然とした。

「事実だけどよ」

しかし、そこはあっさりトモミの言うことを認めた。

「……」

トモミの淹れたコーヒーに、口をつける。

最近、胃が荒れていて、とてもじゃないが食べ物がほとんど喉を通りそうにない。自分の胃が食べ物を受け付けてくれる状態になっていないのがわかる。だからついつい、このコーヒーを何杯も飲んでしまう。

「でも……私はもっと、この社長の姿を、みんなに見てもらいたいです」

そんな消耗している僕を見て、トモミが言った。

「こんなに頑張ってる社長に対して、ひどいこと言う人、結構いるんですもん。社長の作った宝石は、全部別のデザイナーが作っていて、実際の社長はもうほとんど素人同然の腕しかないとか。社長のことを偽善者だって言って、毎日お金を贅沢に使って、アイドルとかを沢山はべらせて、豪遊しているとか……」

それを聞いて、エイジが頷いている。

「実際の社長は、こんな毎日働いてて、なのにお金なんて、仕事の割に、ほとんど貰ってないっていうのに……」

今日本では、納税額に基づく長者番付がなくなったから、僕の推定年収は世間ではほとんど知られていない。ただ、僕の年間でのアクセサリーの売り上げが1兆円以上の規模だといわれているだけに、僕の年収もすごいことになっていると思われているようだ。

だけど、実際の僕の給与は、宝石デザイナーとしての純利の、0.01%しか貰っていない。

売り上げが1兆を越しているといっても、宝石の原石は、もう地球

上で発掘できるのは、３０年前後でしかないと言われるし、金や銀は言わずと知れたレアメタルだ。そんな原料の値段を引いた純利は、当然1兆なんて額ではない。その０．０１％なのだから、はっきりいって僕の年収は数千万でしかない。

そして、このグランローズマリーＣＥＯとしての僕の給与は、月に僅か1万円だ。これは、僕に最悪何かあっても、リュートに最低限の食事を与えられる額ということで設定した。

でも、僕にとってはこれでも多すぎるくらいだった。リュートがまだ生きていて、今まで苦労をかけっぱなしだった年老いたリュートに、最後の最後までいい思いをしてやりたいという思いだけで貰っているだけ。ずっと貧乏暮らしに馴染んでいた僕は、風呂なしアパートにだって住めるし、贅沢をしようにも、特別したい贅沢もない。自分の時間なんていうものがほとんどなかったから、金をかける趣味もない。酒を少量飲むだけで、煙草も吸わないし、嗜好品もいらない。女もいないし、個人、法人共に借金もない――リュートがいなかったら、僕の生活は年収３００万でも十分すぎるほどだった。

「社長、私……すごく悔しいんです。社長、毎日こんなに働いてるのに、そんなことをいう人がいるのが。だから社長に、もっと表に出てもらって、そういう人達に、社長のこと、見せてやりたいんです」

「同感だな」

エイジも頷いた。

「俺らだけじゃなく、この会社の社員にも、お前の現状にやきもきしてる奴、いるはずだぜ。俺の才能はお前に遠く及ばないこと、社員はみんな分かってるんだし、社員だってお前の言葉を待ってるんだ。だからお前も、少しは自分の意見を伝えてくれよ」

「……」

僕は黙って、二人の言葉を拝聴していた。同時に、何も答えないことで、僕は二人の言葉を黙殺した。

「――はぁ」
やがてトモミはため息をついた。
「――何だか、この会社が大きくなるごとに、社長はどんどん不幸になっていくみたい……」
「……」
切なげな響きを残す、トモミのその小さな言葉が、脳裏に残留した。
この二人は、今の僕が何も知らない人間から悪評を叩かれるのが耐え難いようだ。
そんな近しい人の願いを聞き入れてやりたいという思いもないわけではないし、僕の過去の雷名を考えれば、僕が表舞台で何かを言うことは、会社の宣伝にもなるし、多くの人にプラスに働くことも分かっている。
でも、それでも僕は、表舞台に立つことは出来ないのだ。
だって、そんなことをしたら……

「うーん、これ、大阪でのキャンペーンだよな？　だったらこの広告、もっとビビッドな感じって言うか、季節がこれから秋だからって、シックに行く必要ないんじゃないか？　ちょっとこれだと、東京ではいいかもしれないけど、大阪じゃパンチが弱い気がするんだが……」

「そうでしょうか」

「僕もエイジに同感ですね。でもこのラフ画自体は結構僕は好きですね。今回のコンセプトにはちょっと弱いけど、この絵、残しておいてくださいよ。別の宣伝で使いましょうよ」

午後は、最近大阪でのショッピングモールでの、新たなキャンペーンのための仕事が追い込みにかかっている宣伝部に顔を出して、僕とエイジ、それと宣伝部でお互いに意見を出し合う。

ついてきていたリュートとトモミと一緒に、社長室に戻って、僕は時計を見ると、間もなく午後の４時になろうとしている時間だった。

「ゴホッ、ゴホッ」

「そう言えば、お前、今日これから、新作映画の試写会と、パーティーがあるんだっけ」

エイジに言われる。

「ああ――その前に、帝国グループの会長から呼び出されていてな……先にそっちに顔出してから、そのまま会場に直行するから。悪いが今日はこのまますぐ行っちまうぞ」

世界的宝石デザイナーの僕にとって、ハリウッドは重要なクライアントのひとつだ。僕の宝石の過去の顧客リストには、ハリウッド女優も沢山いるし、実際の映画で使われる、思い出の指輪とか、魔力を秘めた宝石だとか、キーアイテムのデザイン作成に携わったことも何度もある。

今日は、全米で話題になった映画が日本初上陸する上、映画の出演者や監督が来日して、映画に携わった関係者内での特別試写会兼ハリウッドスターの来日記念パーティーが行われることになっている。

パーティーは好きじゃないけれど、こういうパーティーに参加すると、宝石のオーダーメイドの依頼が舞い込んで、パーティー内で商談が始まるケースが多い。もう世界中に僕の名声は轟いているし、金持ちと直接会う機会というのは、僕の仕事にとって大事なことなのだ。

「で、明日は完成したアクセサリーを持って、お前は単身ベルギーに出張か」

「ああ、トモミさんもしばらくはお休みですね。といっても2日間だけだけど」

そして僕の仕事だと、海外に出向く機会というのも、そう珍しいことではない。月の最低3分の1は、僕は日本以外の国にいるか、機上の人になっている。

7年前に旅をしていた頃から、英語は完璧だし、ヨーロッパで生活していると、フランス語、ドイツ語の2つを話せると便利なので、フランスに渡った頃から両方勉強して習得済み。イタリア語、スペイン語、中国語も、商談で使えるレベルには至ってはいないものの、日常会話くらいなら十分いけるようには勉強している。おかげで商談相手が、ロシア語やポルトガル語しか話せない人でもない限り、基本僕に通訳はいらない。

基本的にトモミは僕の海外出張中が休暇になる。毎日僕に合わせて出社していると、あまりに休めないためだ。出先なら仕事もほとんど決まっているし、基本的に僕の出張のほとんどが、長く滞在しても二日だから、その間に秘書の仕事はない。今回のベルギーにも、一日で仕事を終えたら、その日の夜には現地を発つ、慌しい出張だ。

「しかし――ここ何日か立て込んでいて、ほとんど家に帰っていなかったからな――荷造りとか、何もチェックしてない」

「荷造りなら、もう私が済ませて、社長のお部屋に用意してありますよ。航空機の予約も、現地のホテルも、全部手配済みです」
トモミが言った。
「あ、そうですか。助かります」
特別何も指示していなかったのだけれど、僕のスケジュールから推察して、しっかりそういうことはやってくれている。やはりトモミは、少し言動に問題はあるけれど、仕事では割と優秀だ。
「でも、あの日本一の財閥、帝国グループの会長から呼び出しか――一体何なんだ？」
帝国グループは、工業や生命保険、不動産など、戦前から名を上げてきた、日本不動の大財閥グループだ。その会長と来れば、一言で言えば、日本一の金持ち――個人資産だけでも数兆、法人を合わせれば、数十兆円は持っているだろう。
「――さあな。僕、あの爺さんには、色々世話を焼かれてるしな。正直僕は苦手なんだけど」
僕はそう言っておく。実際は呼び出される理由なんて、大体想像がつく。
「――しかし、偉くなったものだな」
僕は呟いた。
「ん？」
「7年前、日本を出たときは、はっきり言って僕は全てを失ったし、旅先じゃ、誰からもろくに相手にされなかった僕が、今じゃ日本一の金持ちから直々に呼び出されるなんてな」
7年前、日本を出た時、僕は旅人と言えば聞こえはいいが、実際は乞食だった。その僕が、今では売り上げ1兆円を越す企業の社長になっている……
「はは、だが、お前には力がある。そんなお前が寝る間も惜しんで仕事して、作った会社だ。それでかくならなかったら、それはそれで嫌だろ？」
エイジが言った。

「……」

――実は僕は、ここ最近、自分の心が、『ある感覚』に強く支配されていることに、薄々気づき始めていた。

家族に引導を渡しに行ってから、間もなくだ。その感覚を少しずつ感じ始め、その頻度は日ごと多くなった。

この7年、ずっとあの家族のことを忘れたことはなかった。あいつらに自分の手で裁きを与えるために、僕は日本を出た。そのために必要なのは、力と大義だ。だから僕は、その二つを得るために、常に最良最善の行動を取るようにしてきた。結果的に僕は僅か7年で、売り上げ1兆円を越す企業を作り上げた。

だが――最近仕事をしていると、よく分からなくなるのだ。

何故僕はここにいるのか。何故僕がこんな仕事をしているのか。そもそもこの会社は、僕が作ったのか……

自分の中の記憶の一部が欠落して、ゲシュタルト崩壊を起こしているような――なんだか自分の中の時間軸がずれて、いきなり今この場所、この時間に飛ばされてきたような、そんな感覚を、僕は最近、いつも感じている。

――一体何なんだ。この感覚は。

「だけど社長」

トモミは言った。

「さすがにパーティーに、その格好で行くのはないんじゃないですか？」

呆れた面持ちで、トモミは僕の姿を一瞥する。

ここ3日、ほとんど不眠不休、家にも帰っていないから、元々薄いとは言え、髭も剃っていないし、風呂にも入っていない。おまけに僕が着ているのは、フランスにいた頃、１２０ユーロで揃えた、日本では就活生が着るような、ブランド名も不明の安いスーツだ。もう何年も着ていて、既に型崩れも起こしているけれど、僕は服装にあまり興味がないし、愛着もあるのでよく着ている。

「――帝国グループに行く前に、まずはお風呂と着替えですね」

僕は一度、会社から5分程度の場所にある家に、5日ぶりに戻って、シャワーを浴び、それから運転手が運転する車で、ブティックに向かっていた。

「別に貸衣装でもいいのに」

「でも、社長はこれからパーティー行く機会、沢山あるんだし、買っちゃった方が、手間が省けますよ」

車の後部座席で、トモミにそう指摘された。トモミとは反対側の僕の隣には、リュートもいる。

「しかし、社長って、本当に自分の服装に興味ないですよね。日本に帰ってから、ずっと働きづめですから、私服とか、一着も持ってないし、持っているのはスーツ数着だけですもんね。それも全部安いやつで」

「……」

「こう言うのも何ですけど、デザイナーとかから一番遠いキャラクターですよね、社長って」

「……」

自分でもそう思っている。僕は宝石だけじゃなく、服飾や色彩、メイクなど、宝石を引き立たせるように、人を着飾る術も一通り、ブランドに籍を置いていた時期に勉強しているけれど、自分にそれを応用したことは、一度もない。

元々貧乏育ちで、服だってほとんど自由に買えなかったし、ファッションに興味を持つ環境で育たなかった。昔からファッションにはあまり興味がないどころか、上っ面だけ着飾って、中身のない自分を隠すものという認識で、自分の求める『力』とは真逆のものとして、唾棄すべきものとして認識していたきらいがある。僕は外見の煌びやかさよりも、自分に降りかかる火の粉を払えるだけの中身の強さの方が、ずっと重要だったのだ。

――あれ……じゃあ僕、何故今、デザイナーなんてやっているのだ

ろう……

「――別に他人がいい格好しようってことを、否定する気はないですよ。僕に今仕事があるのだって、その仕事に需要があるからだと思ってますし」

言いかけて思う――何で僕は、自分の秘書に、こんな言い訳みたいなこと言ってるんだ？

「それは分かりますよ。だけどそれを社長が望んでいるかどうかは、別問題――ってことですよね」

トモミは言った。

「じゃあ、社長の望んでいるものって、何なのかな、って、思って」

「え？」

トモミの言葉に、僕はなんだか、自分の心臓を鷲掴みにされたように、胸に痛みが走った。

「なんだか社長って、自分のことに全く興味がないみたいで――特に最近は、そんな社長の表情に、陰りが見えることが多くなりましたから。なんだか心配で……」

「……」

――トモミも、もう見抜いていたのか。

そう、今の僕は、自分自身に対しては、あまり興味がない。

7年前、日本を出て、一人になってからというもの、僕は僕自身への興味を失った。自分の心の中を、あの家族への怒りが支配していて、それ以外のことを何も考えられなくなった。

ただ、力が欲しくて、そのためにはどんな手段を使うことも厭わなかった。自分を二の次に置いてでも、僕はそれだけに没頭し続けてきた。

「……」

――ああ、そうか。

僕にとって、グランローズマリーは、そんな時の僕がとった、手段の一つに過ぎなかったんだ。

ただ単に、力が欲しくて、そのための最善の方法――

それを持って、僕は家族への復讐を果たした。
でも、僕は家族を強く憎む半面で、あの家族を自分の生きる意味にしていたんだ。
復讐を終えて、僕にはそれがなくなり、あれだけ欲した力を得る手段であった、グランローズマリーと、この7年間、自分のことを全く顧みずに生きてきた自分だけが残った。
7年振りに怒りと憎しみから解放された僕は、7年振りに自分のことを振り返る時間ができた。
気がついたら、僕はでかい会社を作っていて、その会社のトップになっていた。
でも、7年振りに自分を省みた今の僕には、あの時何の力もなかった僕が、何故こんな仕事をしようと思ったのか、はっきりと思い出せない。
この7年間、僕はこんなにも、自分のことを見ていなかったのかと、愕然とした。
家族に裁きを下してからも、変わらず僕の生活は慌しい。寝ることも、食べることも後回しで、力をつけることだけが全ての生活――ここ数日働いてみて、以前の僕も、7年間、多分こうして毎日、自分を痛めつけるようにして、力を欲していたのだろうと思う。
以前はそれに耐えることが出来た。それに耐えるだけの怒りや憎しみが、僕を突き動かしていたからだ。
だが――今はよく分からない。
何故僕は働くのか、何故僕は生きるのか――家族への復讐を生きる意味にして、それ以上のことを何も考えていなかった僕は、今いる場所で、自分が何をすればいいのか、分からない。
――この虚無感のような思いを抱えながら、数日この仕事をしてみて、分かった。
僕は多分、今の仕事を愛していない。
トモミの言うとおり、僕には元々縁遠い世界――それでも、手段を選ばなかった頃の僕は、そんなことを気にしなかった。

でも――今の僕には、仕事だけじゃない。私生活――自分の人生に、何の興味も情熱も沸いてこない。

「ふふ……」

力ない笑みがこぼれてくる。

――皮肉なものだ。生まれた時からあれだけ恨み、呪い、憎んできた家族によって、僕は今日まで生かされてきたなんて。

今更そんなことに気付くなんて。

そして、そんな家族を失った今の僕は、この有様だ。自分自身には、何も残されておらず、自分の作った慌しい日々の流れにただ流される――そんな脆弱な人間に成り下がっている。

――だとしたら、僕はこの7年間、あの家族の掌の上で踊っていただけに過ぎなかったのか。

今となっては、よく分からない。

銀座の高級店で、僕はトモミにも見立てを手伝ってもらい、かっちりとしたタキシードに袖を通した。

「これでどうでしょうか。細身ですが、筋肉質のお体を綺麗に見せるつくりになっていますが」

「いいですね、これ、よく似合っていると思います。社長、これでどうでしょうか」

店員とトモミが見立ててくれたタキシードを試着室で一式全て身にまとうと、店員とトモミが僕に賛辞を向けた。

「……」

このタキシード1着だけで、数十万はする。そんな高級礼服に身を包んだ自分の姿を鏡で見ると、なんだか酷く自分が滑稽に思えた。

僕は一体何をやっているんだろうと、自分の姿を見て、ふと思う。

でも、大人になるっていうことは、きっとそういうことなんだろう。

誰だって、働かずに遊んで暮らしたいだろうけど、仕事をして、

下げたくもない頭を下げ、生きるためには、したくもないことも避けては通れない。

「……」

――そうか。僕ももう、いつの間にか25になっていたんだっけ。

何だか、こうして鏡で自分の姿を見るのも、久し振りな気がした。

Permissive

都内の一等地の邸宅――大きな門をくぐると、白砂を敷き詰めた、静謐な庭園が、左右に広がっている。国立競技場よりもでかいその庭園の真ん中を、僕を乗せたセダンがとろとろと走る。

玄関先には、この家の執事やメイドが揃って僕を出迎えていた。僕はセダンを降りる。運転手がドアを開けようとするが、そこまでやってもらいたい願望は、僕にはない。ドアくらい自分で開けられると考える人間なのだ。

リュートが僕についてくる。

「サクライ様、お待ちしておりました。会長がお待ちです」

執事長らしき、姿勢の正しい、上品な佇まいの初老の男性がやってきて、僕の持つ鞄を預かろうとする。

「いえ、自分で持ちますので。それよりこいつを連れて行くことは、問題ありませんか？」

僕はリュートに視線を落とす。

「え……しかし、会長はお二人でお話しをしたいと……」

「構わん」

そう声がした時、僕の視線の先の、玄関の自動ドアが開いた。

そこには杖を突く、もう８０歳を超えただろう一人の老人がいた。

僕を出迎えていた執事やメイドは、一斉にそちらを向き直し、深く頭を下げる。

「まだ２５で、この儂に会うというのに、犬を連れてこようとするとは、相変わらず肝の据わった若造だ」

「ザイゼン会長、ご無沙汰しております」

僕も頭を下げる。後ろで、既に車を降りているトモミも深く礼をした。

「サクライくん。いつもながら、仕事中に呼び出してすまんなぁ」

「いえ……あと、彼の同伴を許可していただいたついでに、私の秘

書と運転手にも、部屋を与え、話の間、休息させてやって欲しいのですが」

「ふふ、相変わらずずけずけと注文をしてくるな。無礼もそこまで行くと気持ちがいい」

「……」

僕はトモミの方を振り返る。

「トモミさんもお疲れでしょう。会長の厚意に甘えて、ゆっくり待っていてください。その間に、トモミさんもドレスを持ってきたでしょうから、着替えを」

――僕は炉端のある和室に通される。僕から見て右手の障子の向こうには、縁側を隔てて、模様をつけた白砂に石という、枯山水風の庭が広がっていて、その向こうには、緑の芝生に松や榎が立ち並び、手前の白の庭園とのコントラストを作り出していた。遠くから鹿威しの音がする。庭の外には、人工の池と石灯篭も見える。リュートは障子と庭の間の縁側で、畳を傷めないように、ちょこんと座っている。

僕は下座で正座して、２メートル先の会長と正対する。「しかし君が、珍しくまともな格好をしているじゃないか。初めて見たぞ」

会長は炉端で茶を立てながら、僕の格好を見て、そう言う。

僕はトモミの見立ててくれた、カフスや靴なども含めて総額５００万以上のスーツセットに身を包んでいる。さっきまでセットで２万もしないスーツを着ていたのだ。値段は一気に２５０倍に跳ね上がった。

「……」

自分が一個数千万、数億の宝石を売っているくせに、自分が５００万の服を着ていることに違和感がある。

なんとも滑稽な話だけれど……

今、僕の生活は、理由でいっぱいだ。仕事をするのだって、パー

ティーに出るために、こうして着たくもない服を着るのだってそう。
自分の意思よりも、周りからの理由の方が先に立つ。
慌しい日々の中で、そんな理由が僕の中に、どんどん降り積もり、飽和し、沈殿していく。
それが自分の中に、何か濁りや澱みのようなものとして感じられる――
多分、前々からそのことは僕自身、薄々感じていたんだと思う。
家族とのことにひとまず蹴りがついて、自分の内面の問題が顕在化した。
――まあ、それが人間の本来の姿なのだとも思うけれど……
「少し疲れた表情をしておるな」
茶杓で抹茶を掬いながら、爺さんは言った。
「新聞で読んだが、今君はベルギー王家の結婚式用のアクセサリーを作っているとか――どうやら徹夜続きだったようじゃな」
「ええ、今日それが完成して、明日ベルギーへ発ちます」
「ほほぅ、そうかそうか」
柄杓で炉端にかけられた茶釜の湯を、茶碗に注ぐ。
「できれば実物を見てみたかったがな」
「そう言われると思って、写真を何枚か持って来ました」
僕は自分の鞄から、さっき完成したばかりのティアラの写真を差し出す。
「ほぉ、しかし、これでいくらじゃ？」
「そのティアラだけで、３４億です。他の装飾品を含めると、総額８０億です」
「８０億？　何じゃ、王家といってもそんな程度か」
爺さんは鼻で笑った。
「……」
この爺さんも僕の精製したアクセサリーを２つ買ったことがある。
片方は５００億、もう片方も１００億を越す大口注文だった。
５００億の方は、孫娘の２０歳の誕生日記念に。そしてもうひと

つは、愛妾へのプレゼントだったらしいけれど。
「王家といっても、運営資金は税金ですから、会長みたいに自由になる金があるわけじゃないんでしょう。仕方ありませんよ」
僕はそうフォローしておく。
とは言え、いくらヨーロッパ全土でトップクラスの政治的行事とは言え、税金で宝石に８０億は、さすがに出し過ぎだと思う。勿論それはお客が決めることで、僕自身だってそれで金をもらう以上は、何も言いはしないけれど。
――でも、作る本人がそんなことを思うのは、変なのかな。
改めて考えると、僕は自分がこんな仕事をしているのに、自分の精製した宝石の価値が、よく分かっていない気がする。
勿論相場だとか、そういう数字としての価値は、ビジネスとして常にチェックしているのだけれど……
世の中の森羅万象の価値が全て数値化できないことを、僕はある程度理解しているつもりだし、本当に大切なものはむしろ、そうした数値化できない価値の方に多く含まれていることを、僕は7年前に学んだつもりだ。
そう考えると、僕の精製した宝石や装飾品は、そのお客にとって、唯一無二の存在になれているのだろうか。それだけの価値がある物なのか、分からなくなる。
勿論、大金を貰う以上、いい加減な仕事をするのは僕のプライドが許さないので、僕の造ったものは、どこに出しても恥ずかしくない、どこかの怪盗紳士に狙われても恥ずかしくない逸品だと思っているけれど……
――考えを巡らせていると、僕の前に、爺さんが立てた茶の入った茶碗を出される。
話をする際、この爺さんは大抵茶を淹れることから始める。日本一の金持ちが自らこうして茶を淹れるということは、僕はそれなりにこの爺さんに気に入られているということだ。
「いただきます」

実際は欲しくないけれど、僕は茶碗を手に取り、一口飲んだ。残念ながら僕は正式な茶道の礼儀など、全く心得ていないから、見様見真似の作法で飲む。

「しかし、君のところもようやく1兆円企業の仲間入りをしたそうじゃな。まことに祝着至極」

茶碗を置いた僕に、爺さんが言った。

「はぁ、どうも」

手を突いて、軽く頭を下げる。

「しかし、君の宝石の売り上げを会社に投入しているとは言え、たった2年で、売り上げ1兆なんて、そうそう出来ることじゃない。君の手腕には脱帽じゃな」

「はぁ」

「それに、君の会社を見る限り、あまり有能そうな人間はいないのだから、尚更じゃな」

「……」

「君が先日アップした、新入社員募集の動画を見せてもらった。どうやらまだ君は、正義の味方をやることにこだわっているようじゃな」

「……」

現在9月――いわゆる新卒を対象に就活シーズンが到来するために、グランローズマリーも新入社員を迎え入れる準備を進めている。この1年でかなり業績を上げ、市場も拡大したため、今年も５００人前後の新入社員を募る予定だ。

そしてこれは、僕が日本に帰国した年から、恒例としてやっていることなのだが、募集要項と合わせて、採用に関するメッセージを、僕が自らの口で説明し、それを動画にして、動画サイトにアップロードしているのだ。今年も先日、新しく取った動画をアップロードしたが、配信１０日で８０万ＰＶを突破していた。滅多にメディアに自分の姿、声を出さない僕と、グランローズマリーの注目度が高い証拠だ。

「はっきり言って僕の会社は、あまり一人の人間に金は出せない。だけど、今クソみたいな人生を変えたいと思っている奴――そんな奴等を待っている。僕達が目指しているのは、正義の味方だ。意味のない人生を送っている人間、うちの会社で世のため人のために働いてみろ。必ず世界が変わる。俺達で世界を変える――か。君の今年の動画の台詞じゃったか。君はわざわざ落ちこぼれを大量に採用して、優秀な人材を雇いたがらないんじゃな、相変わらず」

「……」

グランローズマリーには、東大、京大、早慶上智など、いわゆるエリート街道を走ってきた人間が、社内にほとんどいないという特徴がある。

働いているのは、二流大学の卒業生や、前に務めていた会社が倒産して失業してしまった、行き場のない人間、人生を一度ドロップアウトしてしまったり、経歴に多少の傷があって、この就活難の時代に職に就けない人間など、他社が敬遠するような人材が主だ。この会社を立ち上げた時、数千人の社員を統率するために、僅かにその部署のエキスパートを雇ったが、いずれも学歴などはなく、現場叩き上げでノウハウを培った人間だった。

「君がメディアに出ない代わりに、よく君のところの副社長が、マスコミなんかに取材を受けているが、あの大男、とても君ほどの男が右腕に据える器量があるようには思えんのじゃがな」

爺さんが口にしたのは、エイジのことだった。

「君の会社はもっと優秀な人材を雇うべきじゃないのかね。せめて君の近くにいる人間は、もっと優秀な人間で固めるべきじゃろう」

爺さんは僕の目を見据える。

「――確かに、会長の仰るとおりだと思います」

僕は背を正す。

「確かに、うちの副社長の実力は平凡です。あいつだけじゃない、うちの会社にいる人間のほとんど全てが、実力は十人並みでしょう。会長の帝国グループに比べれば、烏合の衆です」

僕はそれを認める。

「ですが、うちの副社長は、元不良だったのを、その時の仲間を引き連れて、ボランティアに明け暮れて、それまで自分を疎んでいた社会から、感謝をされるまでに至りました。会長も見たと思いますが、あいつはあの通り、見た目も怖いし、多くの人に避けられ続けたんです。でもあいつは自分の力で、そうした人達に歩み寄った――自分の力で這い上がったんです。僕はそんなあいつに、うちの会社の象徴になってもらいたいんです。それが僕があいつを副社長に据える理由ですよ」

そう、エイジは昔から、家庭環境が悪く、成績も悪く、その上腕っ節が強い暴れん坊で、風貌も威圧的で、他人から怖がられ、疎まれ続けた。エイジ自身も、そうした他人を避け、反骨に生きた。

エイジだけじゃない。姿形の見栄えが悪いとか、一度の自暴自棄の行動とか、一度の過ちや、生まれついての環境などで、チャンスに恵まれず、くすぶっている人間は沢山いる。

今の日本は、一度つまずいたら、その理由がどうあれ、大部分の人間は、二度と這い上がれない――そんな社会だ。勿論人間は全て平等じゃないのだから、それは当然かもしれないが、いくら努力をしても、欲しいもの、人並みの幸せにすら手が届かない人間は沢山いるのだ。

僕はそんな人間のやる気を買っている。その中でエイジは、あの風貌や過去の経歴があっても、ここまでになれたという生きた証になって欲しいと僕は願っていた。それは、何でも器用にこなせる僕では意味がない。あいつのように、決して優秀ではない人間が成してこそ、意味があるのだ。

「うちにはエリートはいません。ですが、うちに来た連中は、皆人生ラストチャンスくらいに思ってやってますよ。そういう人間は強いですよ。一流の奴らが集まって一流の結果出すなんて、そんなの当たり前じゃないですか。それなら僕は、そんな、一度はこの社会に不要のレッテル貼られた奴等が、社会を動かし、社会を変えるよ

うなシーンを見たいんですよ。そういう人間が這い上がって、世の中を動かす側に立ったら、きっとそいつらは、他の人に優しくできるでしょうし、きっといい世界になると思うんですよ」

僕はそう啖呵を切る。

「それに、はじめから経歴の立派な人間を雇って、他の奴を使えない、って言って切るのって、裏を返せば、うちの会社に人間を育てる実力がない、って言っているようなものだと思いますしね。はじめから優秀な人間を使うより、人を育てた方が面白いじゃないですか」

僕はにこりと笑って見せる。

「ふふ――若いくせに、この儂に意見するとは、相変わらず肝が座っておる」

爺さんは嬉しそうに笑う。

「しかし、だからこそ勿体ない――君が正義の味方の真似事や、人助けなどにうつつを抜かさずに、その才能を使っていれば、グランローズマリーは今頃、財閥のひとつも切り崩していたかも知れんのに……」

「……」

「何度も言うが、君の唯一の弱点は、その甘さじゃな。実業家をやるには、相手のことを考えすぎる。その甘さささえなくせば、君はさらにもっと高みへ行けただろうに……出来の悪い社員の面倒を見すぎて、君の才能が殺されておる。君が人助けなどをするよりも、君ほどの才能を殺すことのほうが、世の中にとっては罪だと思うんじゃがな」

出た。いつもの展開だ。

この爺さんはこうしていつも、僕の行動を叱る。実業家として、僕は甘すぎる。それではいつか足元を掬われてしまうぞ、と。

そして――

「得に君は、随分とサッカーに金を投資しているらしいな。確かに君は昔、サッカーの名選手だったらしいが、日本ではサッカーなん

て、スポンサーに赤字しか呼び込まないことくらい、君も分かっているだろう。昔やっていたからといって、義理立てする必要はないのではないかね」

「……」

グランローズマリーのもうひとつの大きな特徴。

それは、積極的にサッカーへの投資をしている点にある。

僕は3年前、イギリスにいた頃から、既に倒産寸前だったJリーグのクラブチームも買収していて、僕の地元、川越市にホーム移転させ、その年にJ2を制覇して、今シーズンは現在J1の首位に立っている。

僕の方針で、このクラブはサポーターの声によって運営される仕組みになっている。クラブの年間収支を毎月1円単位でサポーターに報告、毎試合後、匿名投票でそのゲームの殊勲者を投票してもらい、その投票数によって選手にボーナスが出るし、給与の変動もサポーターの声を反映して決められる。補強や人事も、ある程度サポーターとの意見を交換して、必要な選手のタイプなどを考慮して動くなど、実に風通しのいいチームであることと、一人ひとりがクラブ経営に密接に関われる、他にないチームであるため、倒産寸前から、一気にJリーグ1の人気クラブにまでのし上がり、黒字経営が続いている。

他にも僕は、チャリティーマッチの運営や、日本代表への用具の支援、子供達のサッカー教室の設営など、サッカーに関する業務も多く手がけている。

勿論日本でサッカーが儲かるコンテンツでないことくらい、僕も重々承知している。正直儲けはほとんど期待できないビジネスだ。この爺さんが僕にそれを咎める気持ちも分からなくもない。

だけど、僕はやはり、サッカーというスポーツに、今も関わっていきたいのだ。

7年前、サッカーというスポーツの素晴らしさを僕は知った。その時の思いを、まだ忘れてはいないのだから。

「耳が痛いですね……」
僕は苦笑いを浮かべて、丁寧に深々と、慇懃なお辞儀をした。
「会長のご厚意、痛み入ります。重々肝に銘じましょう」
僕の気持ちをこの爺さんに説明しても、きっと分かってもらえることはないだろうから、面倒なので僕は折れることにした。
「しかし会長、今日は私に、そのような注意をするために、私をここへお呼びになったのでしょうか」
僕は単調直入な話を求める。
「おお、そうだったな、すまんな」
爺さんはふうと息をつく。
「実は今日君が出席するパーティー、帝国グループも映画に携わっておるので、招待されておるのじゃが、儂も息子達も行けんのでな。なので今夜は、孫娘のレナをよこそうと思っておるんじゃ。そこで君に、レナのエスコートを頼みたいと思ってな」
「……」
そう言うと爺さんは、自分の手近にある呼び鈴を鳴らした。和室の襖の裏に待機していた使用人が、すぐにシズカに襖を開けて、現れる。
「これ、ちょっとレナを呼んできてくれるか」
それを聞いて使用人は、かしこまりました、と言って、襖を閉めた。
「……」
――やっぱり、そういう話か。僕はなんだか自分の体から、疲労がどっと出たような感覚に襲われる。
「――サクライくん、あれから少しは考えてくれたかの」
爺さんが僕の顔を覗き込む。
「儂はレナを君と結婚させてやりたいんじゃがなぁ」

Pillow

「――またその話ですか」
僕は逡巡する。
「君はレナが相手じゃ不服か？」
爺さんは僕ににじり寄る。
「一応大学のミスコンを制覇しているから、器量もそこそこじゃと思うし、何よりレナと結婚すれば、帝国グループの次期会長だって夢ではないんじゃぞ」
「……」
実は、僕がこの爺さんを苦手としている最大の原因がこれ。
この爺さんは、僕を自分の孫娘と結婚させたいと願っているらしいのだ。僕はその話題から逃れるために、ここ1年ほど、この爺さんから逃げ回り続けている。
これが普通の見合い相手とかなら、拒否するのは簡単なのだけれど、相手は日本一の財閥の会長と、その孫娘だ。下手に面目を潰すと、その瞬間、僕はこの爺さんを敵に回しかねない。まだグランローズマリーは、この超巨大財閥を相手に喧嘩をするには、資金力、人材力、全ての面で圧倒的に劣っている。
勿論、現時点でも、帝国グループが迂闊にうちに手出しができないような策を、僕は打ってはいるのだけれど、それでも帝国グループの面目を潰すことは、決してグランローズマリーにとってプラスではない。
僕はともかく、従業員には生活がかかっている――僕の下には、既に数千人の部下がいるのだ。僕もその部下達の生活を守らなければいけない。だから迂闊に断ることは出来ないのだけれど、だからと言って、そんなことを軽々に承諾することも出来ず、僕はズルズルと答えを先延ばしにしている。
「しかし、会長。お嬢様はまだ２で、来年3月に大学を卒業する

のですよ。そんな話はまだ早いというか、もう少し色々と見識を深めるなりしてからでも、そういう話は遅くないのではと思うのですが」

僕はそんな言葉でお茶を濁そうとする。

「いや、女はやはり、好きな男と結婚するのが何だかんだ言って一番じゃよ。しかも君はもてるんだし、悠長なことを言って、君に先約が出来てしまうのも、面白くないじゃろう？」

しかし爺さんはばっさりその意見を切り捨てた。

「……」

「レナは2年前、２０歳になった時、君の作ってくれたピアスやブローチが今でもお気に入りでな、それ以来、君のことを好きになっているようなんじゃ。儂も君の実力を買っている。君が帝国グループに来てくれたら、それは千軍万馬を得たも同じ――君だってレナと結婚すれば、いずれは帝国グループを君の力で動かすことができる。今の会社よりも、もっと大きな力が手に入る。儂にとっても、レナにとっても、君にとっても悪い話ではないじゃろう」

「……」

昔の僕ならば、帝国グループの力を得られることに対しては、魅力を感じただろう。

――いや、いくら昔の僕でも、その手段が結婚だったら、受けなかったか？　さすがにそれは少しは躊躇しただろうか。

「――すみません。別にレナお嬢様が不服とか、そういう話ではないのです。ただ、もう少し自由な男でいたいだけで」

「ふむぅ」

爺さんは首を傾げる。

「しかし、君ほどの才能があるなら、その遺伝子を後世に引き継ぐことは、もはや義務であると言ってもいい。そういうことは、少しは思うんじゃないかね」

「遺伝子？」

「そうじゃ。君は自分の子供に、興味はないのかね」

「……」

遺伝子か――その単語を聞いて、自分を形成する血肉や染色体の中に、あの家族と同じものが99・9％も入っているということを切実に思い知り、酷く気分が悪くなった。

僕には結婚願望というものが、昔からほとんど――いや、皆無と言ってもいい程にない。

生まれた時から、不幸の只中のような家庭で育った。存続するだけで、自分達どころか、周りの人間さえも際限なく不幸にするような家庭――正直家族に憧れどころか、血が繋がっている分、離れたくても離れられない、不条理の塊のような場所――それが家庭だった。憧れどころか、吐き気さえする。

それに、そんな家庭しか知らない僕が家庭なんて持ったら、同じような不幸を繰り返してしまいそうで……

怖い、というか、どうしたって、身構えてしまう。

「――よく分かりません。この7年間、あまりそういうことを考える暇、なかったので」

「そうかい？　しかし君だって、この2年で相当女を抱いたんじゃろう？」

爺さんが揶揄するように下品な笑みを浮かべた。

「君の寵愛さえあれば、一気に売れっ子になれる芸能人やモデルなんてごろごろいるじゃろうし、君がプロデュースすると言えば、どんな女も選り取り見取りじゃろう？　まだ若いんだから、そりゃ激しいじゃろうし、もう既に身ごもっている女も一人や二人いたっておかしくないじゃろう」

この爺さんは、そういう世界でもう数十年を生きているのだ。そうやって沢山の女を抱いてきたのだろう。

「――いえ、そういうのには、手を出していないので」

僕はかぶりを振る。

「何？　一度もか？」

今まで揶揄するような薄笑いを浮かべた爺さんの表情が、本気で

驚いたようなものに変化する。
「またまた、そういい子ぶることはない」
「いえ、本当にそういう関係になった女性はいないんです」
僕は念を押す。
「――確かに会長の言うとおり、何度か女の子からそういう話を持ちかけられたことはありますけれど……」
いわゆる『枕営業』というやつを、華やかな芸能人が裏で日常茶飯事にやっているのを、僕は日本に帰ってきて、初めて知った。
芸能人だけではなく、僕はこの2年で、3桁を優に超える程、女性からの床の誘いを受け、その都度断ってきた。モデルや、パトロンの欲しい水商売の女など――芸能プロダクションが、本人がその場にいないのに、所属している女の子を誰でも紹介しますと、斡旋さえ受けたこともあるし、出張で滞在したホテルの部屋に来て、いきなりアイドルが服を脱いだこともある。
「いやいや、しかし君、それじゃ性欲処理はどうしているんじゃ？」
「――元々、女っ気のない環境で育ったので、慣れているんですよ。最近は、ずっと働きづめで疲れてしまって、特に……」
「――はぁ、とてもまだ25の男の言葉とは思えんなぁ。まるで君の方がアイドルみたいじゃな」
爺さんの呆れ顔が、僕に向けられる。
「別にいいじゃないか。向こうが好きでこちらに話を持ちかけてくるなら。女の方は君の恩恵を受けられるし、君だって気持ちいい思いをいっぱいできる。いわばギブアンドテイクじゃよ。お金を対価に商売するのと同じことじゃ」
「……」
ギブアンドテイクか。そう言えば聞こえはいい。
でも、そんなこと、誰だって望んでやっているわけないだろう……
だが、それが正当化されるのが、今、僕がいる世界――
財界って世界だ。
「じゃあ、君があの秘書の娘を雇ったのも、別に夜伽をさせようっ

てつもりで雇ったのではないんじゃな」
爺さんが首をかしげながら言った。
「え？」
「君の秘書試験は相当な倍率だったようじゃからなぁ。儂はてっきり、あの秘書の娘は、体の相性で選んだのかと思っておったよ。君の秘書、かなりの美人じゃからなぁ」
「……」
――クソジジイ、と、僕は心の中で呟いた。
この世界にいる人間は、皆こうだ。金と権力があれば、人間でも飼い慣らし、何でも言うことを聞かせることが出来ると思っている。
僕はこの世界に来て2年、そんな権力者に完全に飼い慣らされた人間を沢山見てきた。権力者に、体を求められれば股を開き、酷い仕打ちをされてもニコニコして、人間としての品性まで売り飛ばした人間を。
僕も今ではその権力者の一人だ。そんな僕のところにも、そういう人間はどんどん集まってくる。
枕営業だって、そのひとつだ。
でも……
頼むからやめてくれ、と思う。
僕の恩恵を受けようと、体まで捧げようとする女性も、この爺さんのように、それを正当化する声も、耳を塞いでしまいたくなる。
僕はただ、大切な人と語った志に、少しでも近付きたいだけ。僕を信じてくれた人のためにも、何とか一人の男として、そいつらに報いたいだけ。そのために、今まで必死になってやってきたのだ。
それは少なくとも、枕営業をほいほい受けて、女をとっかえひっかえ、選り取り見取りに抱きまくることなんかではないはずだ。あいつらといた時間――僕は人が人として生きることの美しさを学んだ。だからこそ、そう信じている。
そういうことを一度してしまったら、僕はもう、二度とあいつらに合わせる顔がなくなってしまうような気がして……

別に純情を気取りたいわけじゃない。ただ、あいつらに恥じるようなことはしたくないだけ。

それなのに、そんな僕のことをお構い無しに、そうして僕に体を捧げようとする女性は跡を絶たなくて。

そんな女の子を見る度に――いや、この財界にいて、そんな場面に何度も出くわす度に、僕の中で何か大切なものが、日に日に濁っていくようで……

「お祖父様」

ふと、襖の外から女性の声がした。

「おお、レナか、入りなさい」

爺さんがそう言うと、襖が静かに開き、気品に満ちた、美しい一人の女性が入ってきた。

「まあ、サクライさん。お久し振りですわね」

その女性は僕の姿を見るなり、目を輝かせた。

「レナお嬢様、御機嫌麗しゅう……」

僕は正座したままの状態で向き直り、女性に慇懃に頭を下げた。

「レナ、どうやらサクライくんも、今夜のパーティー、君のエスコートを承諾してくれるようじゃぞ」

爺さんは言った。

――おいおい、僕はまだ承諾するなんて、何も言っていないぞ。だけど――僕がそれを拒否できる立場じゃないのだから、同じか……

「成り上がり者で、無作法な人間ですが、お嬢様に恥をかかせないように相努めます」

だが、やめるのなら今のうちだと念を押しておく。

「あら、サクライさん、今日はちゃんとした服をお召しなのですね」

レナはひれ伏す僕を見て、そう言った。

「でも、せっかくのパーティーなのですから、もっといい服をお召しになればいいのに」

「……」

僕が今着ているタキシードだって、一式１００万はする高級品だ。その格好を一笑に付すなんて、１００万程度の金、私にはお小遣い程度の価値しかないとでも言うのか。

親の権力を、自分の力だと思い込んで、思い上がりも甚だしい。この高飛車女と結婚なんて、考えただけで虫唾が走る。

確かに顔だってそれなりに整ってはいるけれど、何だかそれは、生まれついてのもの、自分が育てたものというよりは、生まれつき金によって惜しげもなく磨いてきたという感じで、僕より年下だというのに、あまり若々しさを感じない。人工的な印象さえ抱く。

でも、この女に対してそう思ってしまうのは、僕がもう、アイドルやモデルなど、美人をこの２年間、飽きるほど見てきたからだろうか。それとも、そんな女達に不自然なまでに媚を売られて、僕が一種の女性不振に陥っているからなのか。

この世界にいると、自分の概念や価値観が歪んで、そんなこともう分からなくなっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0474l/

ひとりぼっちのキミに

2011年12月6日16時10分発行